昭和十年一月一日印刷
昭和十年一月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社内
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

雜載

〔類聚國史〕百七職官　承和四年十一月丙辰、聽齋院司私養鷹二聯、

〔藤原清正集〕齋院の女從の其院の院司を男にてあるときくに

ちはやふる神もえりにきゆふだすきえめのほとかくはなれざらなん

〔長秋記〕長承二年九月五日丙辰、抑當齋院〇輔仁親王女怡子女別當、往年爲尼、著法衣之人也、故關白〇藤原忠實娘、字御料、母但馬守良綱娘、字但馬公、而件人常祗候、與齋王奉具、神殿内出入云々、此事言語道斷也、不被謝神者、其祟怱不止歟、如此人被責病、受菩薩戒額髮を剃などするは常事也、於件人稱尼多年、是人皆知事也、尤不便なりける事也者、

大治二年四月六日乙丑、今日依ㇾ可ㇾ有ㇾ准后幷齋院女〇鳥羽皇女恂子卜定、午時許參內、〇中略 忠宗可ㇾ爲ㇾ初齋院勅別當、

〔兵範記〕仁安三年八月廿七日丙辰、被ㇾ仰ㇾ勅別當、散位源時房、上卿被ㇾ仰ㇾ辨了、

〔玉海〕承安元年六月廿八日辛未、此日賀茂齋王〇鳥羽皇女頌子卜定也、〇中略 散位平朝臣時盛、可ㇾ爲ㇾ勅別當者、

用途供給

〔延喜式十三圖書〕紙筆墨充ㇾ諸司、〇中略

齋院司紙五十張、筆二管、〇中略

右月料紙筆具依ㇾ前件、本司預受、八月一日、依ㇾ例預充、其年料季料、亦准ㇾ例充之、

神祇官墨一廷、〇中略 齋院司二挺、〇中略

右年料墨具依ㇾ前件、正月總充、但月料八月一日依ㇾ例充之、

〔延喜式十八式部〕馬料〇中略

從五位官四貫　六位官二貫五百文　七位官二貫三百五十文　八位官二貫二百文〇中略

齋院司四人從五位官一人、六位官一人、七位官一人、八位官一人、

〔朝野群載四朝儀〕謹請齋院女房扇二枚事

右臨ㇾ彼期、可ㇾ令ㇾ調進ㇾ之狀、謹所ㇾ請如ㇾ件、

三月廿九日　左近少將有家請文

謹請扇二枚事

右齋院女房料者、重服者、其憚可ㇾ候歟如何、隨ㇾ重仰、可ㇾ進ㇾ止之狀、謹所ㇾ請如ㇾ件、

三月廿九日　內藏頭源某請文

〔類聚國史百七職官〕天長三年七月辛卯、攝津國垂水庄公田一町八段、賜ㇾ齋院司、

〔左經記〕長元四年七月十三日戊午、今朝齋院御消息云、宮主紀伊以丸、稱相撲人、被召籠左近府了、仍近來不行御祓、爲之如何云云、仰云、未知案內、抑件男、前年爲相撲人已了、何以相撲人爲宮主哉、頗不穩之事也、抑相尋追可令申事之由、頭之退出、

〔類聚符宣抄七〕左中辨藤原朝臣懷忠

左少辨藤原朝臣惟成傳宣、中納言藤原朝臣濟時宣、奉勅件人、宜爲賀茂齋院別當者、

天元五年四月五日　　左大史大春日朝臣良辰奉

〔類聚符宣抄七〕正二位行權大納言藤原朝臣行成（件宣旨、尋先例不見、只可行裁許事之由、以口宣可仰其人歟、）

權左中辨源朝臣口口傳宣、左大臣宣、奉勅件人、宜爲賀茂齋院別當者、

治安元年十月廿八日　　左大史小槻宿禰貞行奉

〔左經記〕長元四年八月十日乙酉、或人云、齋院（○村上皇女選子）遁世、今月之內可有云云、　九月廿一日丙寅、早旦參內、齋院御消息旨申關白殿、（○中略）次參齋院、（○中略）次申云、爲院別當已及多年、此時不致懃忠、期何時乎、仍明日出御之間欲參仕如何、仰云、夜中密行、他人不可知事也、有何事乎者、　十二月廿三日丙寅、藏人辨云、昨日以右少將定良、爲齋院別當之由有宣旨云云、

〔榮花物語三十一殿上の花見〕齋院に、つひにひめ宮（○後一條皇女馨子）さだまらせ給ぬれば、（○中略）左衞門督（○源師房）ときこゆるは、故中務宮の御子なり、東宮權大夫かけ給へる、齋院の別當になり給へり、長官には藏人辨經長、帥中納言ときこゆる道方の子也、

〔朝野群載四朝儀〕補齋院勅別當

從四位下行左近衞權少將兼備前介藤原朝臣實隆、可爲齋院別當、（師隆朝臣辭退替）

康和二年三月廿七日　　藏人中宮權大進藤原朝臣奉

〔中右記〕天仁元年十一月八日、今日齋院、（○白河皇女官子）卜定也、（○中略）以散位宗季朝臣、可爲勅別當之、

〔新勅撰和歌集神祇九〕庚申の夜、みかぐらのついでに、女房歌合し侍けるに、

祺子内親王家宣旨

ゆふしでゝいはふいつきの宮人は世々にかれせぬさかきをぞとる

〔中右記〕天承二年〇長承元年十一月廿五日壬午、今日院第一姫宮有齋院卜定事、〇中略能登守季兼齋院職事也、申內御使由、

齋院司創置

〔撰集秘記臨時二十七〕齋院

頭注　弘仁九年始置齋院司、十四年停、天長元年〇伊呂波字類抄作二年復舊亦置、

補任

〔西宮記臨時五〕延喜十七年四月五日、大納言藤原朝臣令奏齋院司除目、以右中將兼茂爲長官云々、

〔朝野群載四朝儀〕齋院司

從五位下行主税允播磨宿禰行貞

望主典

右可被兼任院主典之狀、所請如件、

康和五年二月二十七日　從四位下行長官藤原朝臣長兼

〔類聚符宣抄一〕應補賀茂齋院宮主卜部正七位上伊岐宿禰春友事

右得神祇官去月廿五日解偁、件宮主連光、久沈重病不仕之間、可差進代官之人、由被移送也、隨卽件春友爲一勞之上、才操堪其職、仍以今月一日、簡定言上、解文已了也、蒙裁下間、連光以今月廿一日其身死去、然則以件春友、可補任宮主職之狀言上如件者、中納言從三位兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣在衡宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

權右少辨　　右少使

天暦二年十月廿六日

〔類聚國史百七職官〕弘仁九年正月乙巳、始置齋院司宮主一員、長官一員、次官一員、判官一員、主典二員、

七月庚寅、定齋院史生二員、

○按ズルニ、本書正月トアルハ、五月ノ誤ナリ、五月ハ甲申朔ニシテ乙巳ハ二十二日ナリ、日本長暦等ニ、癸未朔トスルハ誤ナリ、又長官以下ハ、五月九日ニ置カレシコト、上條ノ格文ニテ明ナレバ、此日ハ宮主ノミヲ置カレシモノナルベシ、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略齋院司三人、

凡諸司使部者、○中略齋院司六人、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年二月癸卯、勅、齋院雜使四人、宜准二宮幷淳和院舍人等與之公驗、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補齋院司舍人遭喪之替事

右得彼司解偁、依太政官去承和五年二月廿二日符旨、充補舍人四人、而遭喪之徒、每年不絕、至于神事無人差使、凡司家之風、尤忌穢惡、重服之輩、何得出仕、仍移送遭喪之由、而式部省固稱無例、曾不補替、望請不待至考、隨闕被補、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

承和八年十二月廿二日

〔延喜式六齋院〕凡定齋王畢、○中略卽先臨川頭後潔乃入、○中略其前禊二日、辨官率院別當已下、幷陰陽寮及供奉諸司、到河邊、點定其地奏之、○中略院女別當已下

幷從車後、女別當已下藏人已上乘私車、采女女孺已下乘馬寮車、

〔後拾遺和歌集十九雜〕小辨、齋院にまゐり侍てほのかに見奉たるよしいひおこせて侍ける返事に、

六條齋院宣旨 源頼國女

ゆふしでやしげき木のまをもる月のおぼろげならで見えしかげかは

レリ、又家司職事等ノ職アリテ、齋王ノ家事ヲ分掌セシム、齋院ノ女官ハ、其長ヲ女別當ト爲シ、又內侍、宣旨、女藏人、采女、女孺等ノ數職アリ、

名稱

〔倭名類聚抄五職官〕齋院司以豆岐乃院乃官

〔伊呂波字類抄左職官〕齋院司

〔百寮訓要抄〕齋院司無唐名　賀茂の齋院御坐の時此官あるべし、たえたる事なればしるさず、

職員

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

定新置齋院司官位職員事

長官一人従五位下官　次官一員従六位上官

判官一員従七位上官　主典二員従八位下官

右被中納言兼左近衛大將従三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、奉勅、宜依件定、

弘仁九年五月九日〇又見令集解

〔官職秘抄下〕齋院司令外官

長官　任人如寮頭、〇齋宮寮頭　自次官轉任例、忠主、惟信、辨官兼任例、公村、經家、定成、

次官　五位任之、爲諸大夫職、近代强不然、

判官

主典　已上爲侍官、以本院請任之、三代任主典例、惟宗、義基、寬治、康和、天仁、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

新置齋院司宮主一員事准従八位下官

右被中納言兼左近衛大將従三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、奉勅、宜依件定、

弘仁九年五月廿二日〇又見令集解

中院右大臣(○雅定)

ありす河おなじながれはかはらねどみしや昔のかげぞわすれぬ

〔續詞花和歌集(神祇入)〕そのかみ齋院におなじく侍ける人のいまの齋院に侍るもとへ、みそぎの日いひつかはしける、　少將乳母

みそぎするかもの河なみ立かへりはやくみしよに袖はぬれきや

祭のつかひに侍ける時、神たちにて、齋院の女房につかはしける、　藤原實方朝臣

千早振いつきの宮のたびねにはあふひぞ草のまくら成ける

〔本朝麗藻(下懷舊)〕齋院相公忌日令修諷誦　儀同三司

相公去後幾光陰、毎憶才名涙不禁、(自少年時世稱有聲)翠羽簾前鸚鵡盞、(往年人々、參會齋院之日、相公簾中出盞、忽作佳句、)紅花帳下鳳凰琴、(傳聞侍公主之帳下、受琴箏之妙曲、)唯從神院忝嘗禮、未習佛門寂滅心、向使當初行一善、冥々中有相尋、

〔山家集(神祇)〕齋院おはしまさぬころにて、祭のかへさもなかりければ、紫野をとほるとて、

むらさきの色なき北の野べなれやかたまほりにてかけぬ葵は

圖齋院司

齋院司ハ、イツキノミヤノツカサト云フ、長官次官判官主典アリテ、齋院ノ事ヲ掌ル、又宮主アリ、齋院ノ忌火竈神祭、及ビ解除ノ事ヲ掌ル、嵯峨天皇ノ弘仁九年、始テ置ク所ナリ、後世齋院ニ、別當ヲ置キテ庶事ヲ總掌セシム、之ヲ勅別當ト稱ス、蓋シ勅命ヲ以テ補スルガ故ナルベシ、位齋院司長官ノ上ニアリ、醍醐天皇ノ延喜ノ制、別當一人ヲ置キ、圓融天皇ノ天元五年ニハ、左中辨藤原懷忠ヲ以テ別當ニ補セラル、爾後權大納言、左近衞權少將等ノ官人ヲ以テ此職ニ兼補セラレシガ、後世ニ至リテハ、多ク散位ヲ以テ之ニ充テラルヽコトヽナ

〔後拾遺和歌集雜十九〕後一條院おさなくおはしましける時、まつり御覽じけるに、いつきのわたり侍けるをり、入道前太政大臣〇藤原道長いだきたてまつり侍けるをみたてまつりて、のちに太政大臣のもとにつかはしける、

選子内親王

ひかりいづるあふひのかげをみてしかばとしへにけるもうれしかりけり

返し

入道前太政大臣

もろかづらふたばながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん

〔拾遺和歌集雜春十六〕齋院子日

ゑたがふ

一もとの松のちとせも久しきにいつきの宮ぞおもひやらるゝ

〔後拾遺和歌集夏三〕禖子内親王、かものいつきと聞えける時、女房にて侍けるを、年へて、後三條院御時、齋院に侍ける人のもとに、昔を思ひ出て、まつりの歸さの日、神館に遣しける、

皇后宮美作

きかばやなそのかみ山の郭公ありし昔のおなじこゑかと

〔新古今和歌集夏三〕齋院に侍ける時、神たちにて、

式子内親王

忘れめやあふひを草にひき結びかりねののべのつゆの曙

〔東野州抄〕賀茂祭の時のかり屋をつくり、葵にてかざりて置奉る也、此かりねの野べの事を忘れめやと遊したり、

〔象戲雜談〕一賀茂の祭の時は、齋院神館にて庭に筵を敷て、二葉の葵を枕にして寢給ふなり、忘めや葵を草にの歌は、不慮に面白き心を忘めやと讀り、

〔新古今和歌集哀傷八〕禖子内親王かくれ侍て後、悰子内親王かはりゐ侍ぬときゝて、まかりてみければ、何事もかはらぬやうに侍けるも、いとゞむかし思ひ出られて、女房に申侍ける、

啓例度々有也、太上天皇御幸例殊不見也、

〔本朝世紀〕仁平元年八月廿六日癸巳、今日大納言伊通卿、幷參議敎長卿宅、檢非違使行向、懸靭木於門上、責申凌辱齋宮參院召使之濫行下手人云々、（去四月比、少監物藤原仲賢、執行信濃國沙汰之間、凌礫齋院召使、去比又齋宮召使亂入敎長卿宅、雖殿大夫行康、訴申關白被召使云々、付外通卿被責仲盛、付敎長卿責召行縣云々、）

〔大鏡四右大臣師輔〕此御はら（○藤原師輔女安子）に（○中略）うみおきたてまつらせたまひしたびの十の宮（○村上皇女選子）こそは、今の齋院におはします、（○中略）御禊よりはじめ三箇日が作法出車などのめでたさは、おほかた御さまのいと優にらう〳〵しくおはしましたるぞ、今の關白殿（○藤原賴通）兵衞佐にて、御禊の御前せさせ給ひしに、いとをさなくおはしませば、れいは本院にかへらせ給ひて、人々にろくなど給はするを、これはかはらよりいでさせ給ひしかば、おもひがけぬ御事にて、さる御心まうけもなかりければ、御前にめしありて、御たいめんなどせさせ給ひて、たてまつり給へりける御こうちきをぞかづけたてまつらせ給ひける、入道殿（○藤原道長）きかせ給ひて、いとをかしくもし給へるかな、祿なからむも便なく、とりにやり給はんもほどへぬべければ、とりわきたるさまを見せ給ふなめり、えせものはおもひよらじかしとぞ申させ給ひける、この當帝（○後一條）や東宮（○後朱雀）などの、まだ宮たちにておはしまし〻時、まつり見せたてまつらせ給ひし御さじきのまへすぎさせ給ふほど、殿の御ひざに二所ながらすゑ奉らせ給ひて、此みやたちみたてまつらせ給へと申させ給へば、御こしのかたびらより、あかいろの御あふぎのつまをさしいで給へりけり、殿をはじめたてまつりて、なほ心ばせめでたくおはするゐんなりや、か〻るしるしを見せ給はずば、いかでかは見たてまつらせ給らんとも知らましとこそは、かむじたてまつらせ給ひけれ、（○中略）この事いとをかしうせさせ給へりと世人申しに、前帥殿（○藤原隆家）のみぞ、追從ふかきおいぎつねかな、あな愛敬など申給ひける、

王時、有如此見物事云々、遠尋吉例有此與歟、秉燭以前還御、

裏書、或人語云、長和三年、選子內親王有此見物云、被尋被例也云々、而件事無實說、故小野宮右府記云、件年齋王女房、立車於本院前、見物賀茂詣還也、全無齋王見物儀者、凡齋王無故不出本所、就中持齋之中、御見物條、人々頗不承歟、萬人不下馬過齋王之前、尤無禮也者、

大治四年十一月廿四日戊辰、今夕齋院(○鳥羽皇女恂子)御神樂、去辰日依雨延引也、依催參齋院、左衞門督實行卿、改小忌著位袍被參、左兵衞督左宰相中將大貳、先於東廊北座有擬餞事、上達部殿上人著此座、三獻汁物等事、諸大夫□□□□□□以下著南簀子敷座、(敷圓座於南階以東)□□□□間之東并南打出、(阿波守有賢所課)神殿南庭敷御神樂座、南屏北邊敷殿上人座、大略如內侍所御神樂、(東西對座、砌下候庭燎、)召人殿上人左中將宗能朝臣、(本拍子、庭火、和倉反、)右少將公敎朝臣、(末拍子、今度初取之、強無相違、庭火、)同公隆朝臣、左少將忠基朝臣、(笛)丹後守資賢、(庭火、季遠、)能登守季兼、(庭火、篳篥、)地下、(元輔、清仲、業兼、脫定、篳篥、清仲弟、和倉反、兵庫助忠基、和琴、)近衞舍人、(近方、忠方、助定、遠兼、公方、兼利、)人長兼信、人々著座、先一獻、取物了一獻、前張星合、歌其駒之後、殿上人取祿給之、月漸昇事了退出、當齋院初御神樂、

天承二年(○長承元年)十一月廿五日壬午、今日院第一姬宮、有齋院(○鳥羽皇女禧子)卜定事、　廿六日、大殿(○藤原忠實)給御消息云、昨日參院(○鳥羽)之次仰云、此一品宮、從幼少時常置傍憐戀、令立齋院在他所、朝夕戀思也、而時々行向欲見如何、予申云、件事不知慥事、雖申左右、早被問人々、隨申趣左右可候也、倩思先例、寛治□□以降、雖有齋院卜定事、本院不渡御、是本自被養也、所強不令憐愍給歟、此外郁芳門院齋宮時、母賢子中宮有行啓野宮、其例不宜也、仍不思得由申了、定被問歟、可用意者、予進返事云、宗忠も不思得、只又々尋吉例可候歟、　十二月五日辛卯、臨深更頭辨書狀云、可有御幸齋院、准據之例可量申者、則奉返事云、有御幸例、不慥覺悟、雖申左右、但寛平八年閏正月、有院御幸齋院之由見舊記、齋院ハ君子內親王、今上(○宇多)第三女、母女御橘義子也、行幸已有例、御幸何無哉、可准據例、大略如此、母后行

レバ、院ノ人共モ緩ム事无ク、打チ不解ズシテノミ有レバ、齋院許ノ所无シト皆云ヒケル、而ル間漸ク世モ末ニ成リ、宮ノ御年モ老ニ臨マセ給ヒニタレバ、今ハ殊ニ參ル人モ无シ、〇中略其後其ノ年十一月ニ忍テ齋院ヲ出サセ給テ、□□ト室町ト云ナル所ニ御マシテ、其ヨリ三井寺ノ慶祚阿闍梨ノ房ニ御マシテ御髮ヲ下シテ尼ニ成セ給ニケリ、其ノ後ハ道心ヲ發シテ、偏ニ彌陀ノ念佛ヲ唱ヘテ、終リ極テ貴クシテ失サセ給ヒニケリ、

〔後拾遺和歌集雜十九〕後一條院御時、賀茂行幸侍けるに、上東門院〇藤原彰子一條后御こしにのらせ給て、むらさき野よりかへらせ給ける、又のあしたきこえさせ給ける、　選子內親王〇齋院

御ゆきせしかもの川なみ歸るさにたちやよるとぞまち明しつる

〔榮花物語三十一殿上の花見〕ことしも十月〇長元六年に、齋院に行啓〇後一條皇女馨子母后威子あり、このたびは五六日ばかりおはします、十月廿よ日庚申なるに、上達部殿上人まゐり、あそびのかたの人も、ふみの道の人々も、めしあつめ、のこるなくまゐりて、歌よみあそびなどあり、げらうも、そのみちの人はまじりたり、〇下略

〔本朝續文粹十詩序〕後一條院御時、中宮〇藤原彰子一條后行啓齋院之間、當庚申夜有歌宴、月照殘菊應令幷序、

贈藤三品〇文略

〔中右記〕寛治六年六月廿七日己卯、今夕齋院有御神樂之事、是齋王〇白河皇女令子不例御也、仍先有奉幣本社、後有此御神樂也、殿上人召人等南庭敷座、其體如內侍所御神樂、諸大夫召人等、近衞官人等參仕、事了給祿、勸盃之儀如例、仍殿上人爲勤其役參仕、夜半許事了退出、　八年〇嘉保元年四月十四日甲申、依例有御賀茂詣、大殿〇藤原師實幷關白殿〇藤原師通共令參詣給、〇中略齋院於本院儲御棧敷、有御見物事、檜皮葺土間二面許、女房打出美麗無極、御棧敷北頭儲輕幄、爲侍人座、左少將忠敎朝臣馳參被候、土佐守有佐朝臣著布衣候、侍等濟々、御棧敷前敷白沙立翠松、風流冠絶古今、過者驚目、前駈等不下馬傳聞昔選子內親王爲齋

賜祿有差、是日親王授三品、從五位下藤原朝臣常房、巨勢朝臣識人從五位上、正六位上文室朝臣永年從五位下、從五位下交野女王、永原朝臣眞殿從五位上、无位坂本朝臣宮繼從五位下、

〔續日本後紀 十七 仁明〕承和十四年十月戊午、二品有智子內親王薨、遺言薄葬、辭不受葬使、內親王者、先太上天皇〈○嵯峨〉幸姬王氏所誕育也、頗涉史漢、兼善屬文、元爲賀茂齋院、弘仁十四年春二月、天皇幸齋院、花宴、俾文人賦春日山庄詩、各探勒韻、公主探得塘光行蒼、即瀝筆曰、寂々幽庄山樹裏、仙輿一降一池塘、棲林孤鳥識春澤、隱澗寒花見日光、泉聲近報初雷響、山色高晴暮雨行、從此更知恩顧渥、生涯何以答穹蒼、天皇歎之、授三品、于時年十七、是日天皇書懷賜公主曰、忝以文章著邦家、莫將榮樂負煙霞、卽今永抱幽貞意、無事終須遺歲華、尋賜召文人料封百戶、天長十年叙二品、性貞潔、居于嵯峨西庄、薨時春秋四十一、

〔文德實錄 九〕天安元年二月丙申、廢鴨齋內親王慧子、更立无品述子內親王爲齋內親王、遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社、告事由、其事秘者、世無知之也、

〔古今和歌集 十七 雜〕田村のみかど〈○文德〉の御時に、齋院に侍けるあきらけいこのみこを、はゝあやまち有といひて、齋院をかへられんとしけるを、其事やみにければよめる、

おほそらをてりゆく月し淸ければ雲かくせどもひかりけなくに　あま敬信

〔八代集抄 七 古今雜〕あきらけいこ　齋院慧子、母藤列子、從五位上是雄女、天安元年二月廢、其事秘世莫知云々、若者是又有此事歟、遂被廢畢、元慶五年正月六日薨、以述子爲齋院、

〔今昔物語 十九〕村上天皇御子大齋院出家語第十七

今昔大齋院ト申スハ、村上天皇ノ御子ニ御マス、圓融院天皇ハ御兄ニ御セバ、其ノ御時ニ齋院ニハ立セ給ル也、其ノ後齋院ニ御マス間、世ニ微妙ク可咲テノミ御マセバ、上達部殿上人不絶ズ參

をる人もなき故郷の花のみぞ昔の春を忘れざりける

〔小右記〕長和四年四月九日戊午、申剋許參齋院、於客殿定出車出馬事等、○中略左相國又奉未進勘文、齋院中多破壞、御前通垣十餘間、客殿艮角屛三間、萓屋幷南大路東鳥居等顚倒事、同令申左相府、又賀茂下御社破損解文、以定賴奉左府、　十日己未、右中辨定賴云、參左大臣殿、依御物忌、於門外令申案內、命云、賀茂下御社破損文可奏聞、但可令修理職木工寮修造也、造宮間難奉仕歟、雖然相計可仰下者、卽奏此由、如左大臣申也、齋院御前通垣客殿屛、幷萓相屋南大道東鳥居事、命云、通垣屛等事々不幾、可令院司修造、萓相舍鳥居等事無左右、　十八日丁卯、經賴朝臣來、傳相府報云、齋院門少作事、院可奉仕之事尤佳事也、至萓屋鳥居過祭料物、可修造如示送、禊祭日、萓屋所立平張可宜事也、

〔朝野群載九功勞〕造作院宮切宣旨

應令修理職早修造齋院內外院舍門廊築垣等破損事

右得彼職去月廿六日陳狀偁、今月十六日宣旨偁、左中辨藤原朝臣爲隆傳宣、大納言藤原朝臣家忠宣、奉勅宜仰彼職早令修造者、任宣旨狀、雖可勤仕、近代以降、公役繁多、職家多費之上、內裏御修理、來月十三日以前可造畢之由被仰下、誠抽隨分之節、雖勵合期之勤、依期日近々、兼恐懈怠之處、南方役敢難遁勤怠、依當時催試雖營土木、遂不終其勤者、爭脫後日之勘發哉、就中每年四月修理、爲恒例事、及大破之時、成功□□□□勤仕也、而今度大破之上、爲臨時役、旁以不堪勤仕、望請天裁、隨申狀欲被裁寛宥、同傳宣、奉勅宜仰彼職早令修造者、

保安三年八月九日　　左少史三善行仲奉

〔山槐記〕治承四年三月廿三日乙亥、今日參本院、前寢殿西對東南子午屋立柱許造營、是來月十二日初齋院可入御也、近年齋王久不御坐、仍舍屋皆悉顚倒無實也、

〔類聚國史三十一帝王十一〕弘仁十四年二月癸丑、幸无品有智子內親王山莊、○上略欣然賦詩、群臣獻詩者衆、

營繕

依無便宜不能傳申者、播磨國司未進、禊祭料米百五十石云々、仰可給催宣旨之由畢、　九日丙午、左中辨來云、前加賀守兼澄朝臣、申齋院三年一請絹事、今朝左府被命云、免譴催責者、子細不注、

〔左經記〕長元四年十二月廿一日甲子、頭辨消息云、神殿幷齋王御帳帷、前例如何、卽以此旨幷齋王先日御裝束等事、案內前院、（村上皇女選子）被仰云、神殿御帳帷白紋如例染、齋王帳帷朽木形紋如例、元日供御藥之間御生氣方唐衣、毎月朔日參殿料、裳唐衣無定、今只隨候也、又雖幼稚程、必著裳唐衣、年齡到著裳期之時任例著裳云々、乳母相副參神殿、乳母代齋王申御祈云々、御帳帷等事示頭辨、　廿三日丙寅、參殿被仰云、民部卿室家、去廿一日死去、仍卿蒙思之間、難奉宛齋院料、加御封歟、卿有障之時、輔宛封之例可令尋者、余申云、神殿御帳、於里第不可立之由有儀、若不立御帳者、元三日供御節供、幷朔日齋王參神殿云云、其儀如何、仰云、雖不立御帳、先敷神座等、可供御節供歟、又齋王令參入給、雖不立御帳、有何事哉、又申云、然者神座等、本院可敷歟、所司可敷也、又神殿戶幌可有哉、仰同所司可懸也者、卽以仰旨示行事辨經長、（權辨、依民部卿內方假不行之、替所奉行也、）御帳壁代等猶入所司可立云々、件事等依無所見臨時被量行也、〇中略　又同辨申殿云、中宮權大夫令奏云、明年禊祭料、納行事所可宛雜用之由可奏者、仰早可奏下者、

〔延喜式六齋院〕凡門衞陣屋本府造之、炬舍木工寮造之、

凡院裏官舍木工寮修理之日、院司臨監、若不滿十年令致破損者、司官五位已上奪位祿、六位已下奪季祿、

〔西宮記臨時五〕應和三年九月五日、齋院司申、不動神座修理神殿事、又令仰神座移齋王住所可加修理事、

〔玉葉和歌集雜十四〕賀茂のいつきのすみか作りかへられたる比、ふるき宮を見いるれば花さかりにみえ侍ければ、

女御上〇村徽子女王

凡雜色人男卌人、女卌一人、衣服料絹一百九十二匹三丈、(七十一匹夏料、百廿一匹三丈冬料、)調綿二百八十三屯、(冬料)六丈貲布卅三端五丈五尺、(女卌一人夏料、)布八十二端、(女卌一人冬料、)並請大藏省、

凡作手八人衣服料、調綿卌二屯、(冬料)布五十六端、(廿四端夏料、卅二端冬料、)客作兒二人衣服料、庸布六段、(三段夏料、四段冬料、)庸綿八屯、(冬料)並請大藏省、其食料黑米六斛、(請民部省、)鹽六升、(請大膳職、)

〔延喜式(三十三大膳)〕賀茂齋內親王月料

東鰒卌斤、堅魚廿九斤十兩、堅魚煎汁紫菜一斤十三兩、醬鹽末醬各一斗五升、海藻十斤十兩、

同院雜給料、鹽月別二斗二升六合、(小月二斗一升八合四勺七撮)

〔延喜式(三十五大炊)〕親王已下月料

賀茂齋內親王料、日米一斗、穀八合、同院雜色人料、米月廿二石六斗八升、(小月廿一石九斗二升四合)

〔延喜式(三十六主殿)〕賀茂齋院料油一斛一斗(正月元日節料六斗、四月御祓料五斗、)

賀茂齋內親王月料二斗一升(小月減二七合)

〔延喜式(四十造酒)〕賀茂齋內親王料

日酒八升、(請節料二斗)酢五合、

〔寬平御遺誡〕齋院者、種々雜物舊例雖具、其於用度不足十分之一、特加相勞(以下六字蠹損)不可忘之、大略仰菅原朝臣、(○道眞)季長朝臣、可令彼兩人檢、

〔貞信公記〕天慶八年三月十六日、在躬朝臣來云、齋院用度物在庫、在口有一物、爲之如何者、答云、可令奏大內、

〔小右記〕寬弘九年(○長和元年)四月七日甲辰、左中辨持來齋院奏狀并因幡國解文等、(前司則理)院奏令奏聞、

八日乙巳、左中辨來云、昨日齋院奏狀(御輿蓋綾)以頭辨令申左府、(依被候內)而以度々申請、三年一請物可宛用者、院司申云、三年一請物、有用之色、奉御輿并行具等、給料物所令修理也者、亦以此旨觸頭辨、頭辨云、

釜五口、(一口受五斗、一口受四斗、三口各受三斗、)酒海三合、(各受二斗、)下食盤十枚、臺盤七基、(八尺一基、四尺六基、)白銅箸四具、白銅七八柄、白銅杓二柄、瓺卅口、藥袋卅四枚、

右依前件、並隨損申官請換、下條三年一請之色同共請備、若遞替之日、併納齋王家、

時服料

絹卅匹、(夏廿匹、冬廿匹、)調布卅端、(夏廿端、冬廿端、)調綿二百屯、(夏百屯、冬百屯、)

右隨時申官請大藏省、

元日節料

白米廿斛、糯米四斛、大豆小豆各二斛、胡麻粟各一斛、(並請大炊寮、)油六斗、(請主殿寮、)鹽二斛、(請大膳職、)

右預前申官請受

多料鋪設(夏還用四月料、)

錦端疊二枚、(長各八尺、廣五尺、)兩面端疊八枚、絲端疊十枚、出雲筵二枚、(爲中幡料、)

右齋王座料、每年申官請受

絲端疊十枚、黃端疊十枚、

右人給料、與齋王座共受用

三年一請雜物

暈繝錦四尺四寸、(御机覆一條表料、)兩面六匹、(五丈一尺、供膳朱漆臺盤三前覆表料各一丈七尺、四丈二尺同赤漆韓櫃三合覆表料各一丈四尺、四匹各二丈七尺、納服韓櫃十合深淺覆各十具料、)絲絁三匹四丈五尺五寸、(二丈五尺五寸牀一脚覆表料、三匹二丈納服韓櫃十合綱廿條料、)緋絁六匹八尺、(五匹五丈取物十人裝衣料、別三丈五尺、一丈八尺大笠二蓋裏料、)赤紫帛三匹五丈二尺、(二匹斗帳夏帷二具綾表料、一匹五丈二尺冬帷二具同料、)深縹帛四匹三尺五寸、(四丈四尺夏壁代綾表料、一匹五丈二尺冬壁代同料、五丈二尺五寸夏幌五條紐表料、三丈五尺冬幌同料、)黃帛七匹、(五匹與長十人衣料、別三丈、二匹雜使女四人衣料、別三丈、)帛五匹、(輿長十人衣裏料、)

絹二百卌八匹一丈七尺九寸、(五丈一尺供膳臺盤三前覆裏料各一丈七尺、四丈二尺同赤漆韓櫃三具覆裏料各一丈四尺、五丈一尺供膳臺盤三前兩皮裏料各一丈七尺、)

王ヲ奉リ玉フマデ、凡皇女三十四代連綿アリテ、此後ハ絶テ其事廢シ玉ヘリ、

〔延喜式齋院六〕頓給料

絹五十四匹、錢卅貫文、白米十斛、黑米廿斛、

右齋王初定、依ㇾ件請受、

齋王定畢所ㇾ請雜物

膳器

銀飯鋺一合、銀箸三具、銀盞一合、銀匕二柄、銀箸臺二口、銀水鋺一口、銀唾壺一口、銀盤二口、白銅酒壺一合、白銅杓一柄、(加二白銅盤一)白銅風爐一具、白銅火爐一具、白木韓櫃三合、(加二帛井杪一)三尺朱漆臺盤三前、(加ㇾ臺)樽二口、

行具

輿一具、腰輿一具、(加二下簾一脚一)大翳二枚、(入二平文筥一加二雨皮一)小翳一枚、(入二平文筥一加二雨皮一)大笠二枚、(加二平文柄井志部一)銀捧壺二口、(加二平文柄一)銀平文筥二合、行障六枚、(大四枚、小二枚、)金裝車一具、斗帳二具、輕幄骨二具、蓋二條、(各方一丈四尺、)料、深紫淺紫黃帛各五丈六尺、緋帛一匹一丈二尺、同裏料緋帛四匹、紐五十六條料、緋帛一丈二尺六寸、綱三條料、緋帛[illegible]匹、中幡料布一端二丈、袋一口料、兩面五尺四寸、裏料絹五尺四寸、帷八條(四條各十幅、四條各八幅、)料、赤紫帛十二匹、裏料帛十二匹、紐卌六條料、紫帛四丈四尺、裏料帛四丈四尺、縫料緋絲一絇、絲四兩、斑幔九條(二條高各五尺、七條高各八尺、)料、緋帛十五匹一丈八尺、黃帛十五匹二丈四尺、縹帛十一匹三丈七尺五寸五分、縫料縹絲一絇八兩、黃絲一絇四兩、絲六兩、袋八口料紺布三端一丈四尺、裏料布三端、(並申ㇾ官、請二所司一、更進二内侍一、令二大藏省縫備一、)紺絁幕七條、(緋裏)同色幔五條、(縹裏)柱桁四具、(令二木工寮一)納ㇾ帳赤漆韓櫃十合、(大[illegible]書)几帳十基、(六基三尺、四基一尺五寸、)檜机一具、屛風六帖、(五尺二帖、四尺四帖、)沐槽一口、浴槽一口、

人給料

白河、二條四朝、前後二十七年號北小路齋院、

〔吉記〕治承四年四月五日丁亥、午後參殿下、○藤原基房付信清申四箇條雜事、

齋院不替奉幣物事、安和、長和、治暦、應德、無幣帛、天慶、仁安、有幣帛、仁安以前、近例不相尋、但隆職

申云、仁安任近年有幣帛云々、今度如何、仰云、可依應德之例歟、予重申云、神事有增無減歟、何樣可

候哉、仰云、左右難被定仰、院還御之時可申歟、此御猶不審也、重雖可申子細、依有其恐不申也、退出之後、早可申定之由、示付藏人少輔了、被奉爲藏人方行事之故也、

七日己丑、午剋參内、○中略今日齋院○高倉皇女範子不替給之由、可被告申賀茂社也、先是上卿新大納言實家

藤宰相定能參著仗座、上卿以官人召辨、予參上、被仰云、齋院不替給之由、可被告申賀茂社、日時令勘申

ヨ、仰行事史盛景、令陰陽寮勘申之、予取件勘文進上卿、次召例文硯、次令藤宰相書定之、次召大内記

業實、被仰宣命事、卽草進之、次召予賜日時并定文、可内覽者、退向參殿下、付信清覽之、于時内記持參

宣命、予使申雜事、御卽位并禊祭間事等也、次歸參内、返奉日時定文於上卿、次使藤宰相給宣命、相率

次官發遣、今度被獻幣帛、依天慶九年、并仁安三年例也、仁安外近例每度如此之由、隆職宿禰示之、神

事有增無減故歟、於寬治者無幣帛、是又依安和以後度々例也、○又見玉葉

〔山槐記〕治承四年四月六日戊子、今日奉幣賀茂社、不改齋王、來十二日入御紫野、院、當時御坐左近府、之由被申也、上卿新大納言

宗家、此人依祭事被奉行也、先例多伊勢同日被申歟、而皇居爲五條亭、上卿往返爲難叶之故云々、藏人方事、藏人宮内權少輔親經申沙汰云々、

廢絶

〔諸神記〕齋院

土御門院元久元年至禮子内親王、後鳥羽院皇女卜定以後斷絶、○又見二十二社註式

〔百寮訓要抄別註〕齋院司

抑當齋院ヲ立玉フ始ハ、嵯峨天皇弘仁九年、皇女有智子内親王ヲ以テ齋王トナシ玉フナリ、○中略

夫ヨリ代々、伊勢ノ齋宮ト等ク皇女ヲ奉ラセ玉ヘリ、土御門院元久元年、後鳥羽院皇女禮子内親

〔日本紀略花山八〕永觀二年九月五日壬子、於宜陽殿、奉幣帛於賀茂社、齋院選子内親王依舊不改之由、使參議公季卿、宮内大輔源朝臣公貞等也、

〔日本紀略一條九〕寛和二年八月八日甲辰、今日卜定伊勢齋王、○中略但賀茂齋院〈○選子〉不改、

〔日本紀略三條十二〕長和元年四月十九日丙辰、大外記敦頼、勘申伊勢齋王歸京、賀茂齋院〈○選子〉不改之例、

〔小右記〕寛弘九年〈○長和元年〉四月十九日丙辰、大外記敦頼朝臣來云、依召參内、頭辨傳仰云、齋院不奉替之事、前例被申賀茂之程、幷使何人乎者、令奏云、齋宮立給之時、同被申此事、若不然之時、初行幸建禮門之日、被載御幣宣命、近則天慶例、追祭期被申也、又以宰相爲使之由令奏聞了、　廿日丁巳、早朝資平自内罷出云、○中略昨夕召賀茂上下社禰宜、於陣外被傳仰云、齋王不奉替之事、須早令申給、而觸穢間、差使不可令申、然間御禊在明後日、且可祈申此由者、　廿四日辛酉、修理大夫示送云、按察納言、從内告送云、今日賀茂使宰相〈不替奉齋王宣命使也〉昨日觸仰、悉申故障不參、早可參入之事、依有天氣者而可參入齋院兩役間爲之如何、可隨案内者、余答云、左右只可被隨勅命、先勤彼役、從御社被參齋院有何事乎、至院事者、一人著行可無闕怠、今日依例奉幣不出河原、修諷誦於賀茂下御社神宮寺、執行祭事之間、可無事之祈也、○中略未刻許參齋院、而官祗候、見下仕走孺幷藏人所餝馬院童女馬如常、其後修理大夫通任參入云、今朝依召參内、爲不替齋王之宣命、作使去年十一月相嘗祭以前可被行之事也、參賀茂、從賀茂所參入、宣命事按察納言行之、

〔本朝世紀〕治暦四年十一月十六日乙酉、被立賀茂宣命使、齋院〈○後朱雀皇女正子〉不改之由、

康治元年三月一日甲午、權大納言藤實行卿參仗座、被立伊勢賀茂兩社奉幣使、依被告齋宮卜定幷齋院〈○白河皇女令子〉不替之由也、

〔賀茂齋院記〕怡子内親王

輔仁親王之女也、〈輔仁者、後三條院之皇子、號三宮、〉母大藏卿行宗之女、長承二年卜定、怡子之在齋院歷崇德、近衛、後

留任

〔皇帝紀抄 高倉〕齋院

式子內親王 如故(後白河皇女)嘉應元年七月廿六日、依病退下、

僐子內親王 (僐子或作偕子又稱禧子)二條院皇女、(中略)嘉應元年十月廿日卜定、一十同三年二月廿二日、依病退下、

頌子內親王 鳥羽院皇女、母左大臣實能公女、承安元年六月廿八日卜定、同八月十四日、依病退下、

〔山槐記〕元曆元年九月廿日丙午、後聞五辻前齋院、鳥羽院御女、(頌子)母美福門院女房春日局、件人號德大寺左府女、此齋院自卜定所依病退出人也、有御出家事、於御堂有此事、

〔百練抄 十二 順德〕建曆二年九月四日、賀茂齋內親王 ○後鳥羽皇女禮子 依御不例火急令退下給、

〔杜史抄 下〕齋院退出卜定事

天皇踐祚後、不可改齋王之由、被告申賀茂社、若有凶事并身病退出之時、被申其旨、其儀上卿著陣、召內記、令進宣命、內覽奏聞之後、召使給之、次第如他奉幣、

〔三代實錄 四十五 陽成〕元慶八年三月廿二日癸未、喚神祇官於左仗頭、卜定齋王、○中略 其賀茂齋者、皇女穆子、太上天皇 ○淸和 在祚、卜定、入初齋院、今依舊不變、 四月十一日辛丑、遣參議刑部卿正四位下兼行近江守忠貞王、向賀茂神社、告以不改齋王并爲內親王之狀、

〔日本紀略 一 醍醐〕寬平九年八月十七日庚申、奉遣使者於賀茂神社、令告不改齋內親王 ○宇多皇女君子 之由、

〔日本紀略 六 圓融〕天祿元年二月廿九日庚子、被告申齋院尊子內親王 ○冷泉皇女 不改由於賀茂社、

〔大鏡 四 右大臣師輔〕いつきの宮世に多くおはしませど、これは ○村上皇女選子 殊にうごきなく世に久しくたもちおはしますも、只この御一すぢのかくさかえ給ふべきとぞ見申、御門たび〲うせ給へど、この齋院はうごきなくおはします、それも賀茂の明神のうけたまへれば、かくうごきなくおはしますなり、○中略 五代まで打つゞきさかえさせ給ふらめる、

〔大鏡裏書〕一品選子內親王事 號大齋院、圓融、花山、一條、三條、後一條、已上五代齋院、

參會有議定、欲出宜御、欲不出重御、時間御氣色改、仍遂奉出、源大納言申、有御禊出給、此後破神殿云云、　四日乙卯、上皇自上殿御幸齋院御所、乃齋院女院皆渡京極殿給云々、仍著直衣參于京極殿、上皇爲還御養御車程也、殿上人庭中列、按察大納言、中納言中將、右衞門督、在中門廊、予進交公卿、漸時刻推遷間、御幸停止由云々、仍關白右大臣共退出給、予暫留候、右兵衞督召通顯宗憲、問御祈日次、令成勘文、明日云々、又可有泰山府君御祭、代厄御祭、招魂祭、七瀨御禊云々、　五日丙辰、大納言被談云、齋院退出給時、應召參仕、仰云、欲奉出時、頗御氣色宜者、早可奉出歟、予申云、前々出給後有其驗、而來出御前頗宜御者、倚暫可令相待御也、神慮不承定、又大事御歟、此間可有御禊之由申行處、禮部云、役人皆布衣也、仍不行、余云、如此事可依時儀歟、何強布衣人不預此役哉、上皇聞召有御解除、役人布衣、良久倚御心地重者、仍所被奉出也、　九日庚申、人々云、只今可有御幸云々、依女房召參御簾內、先奉見前齋院、〇統子　端正美麗、非所比及、次奉見一品宮、〇亮子　日來有御惱、無術御由有其聞、御腹張、其足腫、身有溫氣、御目已暗御也、事體雖甚憑少、忽不可有其恐歟、是又容顏勝齋院給、有慮外事、誠爲世遺恨歟、　廿日辛未、自女院告送云、依齋院御心地大事御坐、此曉上皇御幸、今間頗落居給、依此事上皇頗不請おびたゞしく申由也、御使馬助忠正有勘當氣云々、

〔續世繼六志賀の禊〕女宮は、一品宮とておはしましゝは、禧子の內親王とて、賀茂のいつきに立給へりし、御なやみにて程なく出給にき、長承二年十月十一日、御年十二にて隱させ給にき、いつきの程なくおりさせ給ふためしありとも、まだ本院にもつかせ給はで、かく出させ給ことは、いと淺間しき事とぞ聞え侍りし、廿七日薨奏とて此よし內裏に奏すれば、三日は廢朝とて、御殿のみすもおろされ、なにごともこゑたてゝそうすることなど侍らざりけり、

〔帝王編年記二十一二條〕齋院

怡子內親王如元、(後三條皇子輔仁女)平治元年閏五月十九日依病退出、

〔長秋記〕長承元年六月廿九日戊午、下人云、齋院、〇鳥羽皇女恂子、後改統子、統或作綜、依御惱可下給云々、仍以消息令申女院、〇鳥羽皇后璋子　又內、有實朝臣各返事云、極大事也、可奉出本院云云、相次後院婦字堀川公送消息云、只今齋院无術御坐、仍出本院、著御長官宿所、依所狹少、人々多不可祗候、只今得迎車可退出者、仍送車乃退出、相語云、自去十三日、隔日發給、此三四日不醒給、自昨日爲死一生成給、今日未時以後如亡、自鼻血流出給、仍新大納言右衞門督參仕、寄御車奉出長官曹司、其後頗如存時、有御語、入夜大僧正參入奉祈云云、又有御卜云、官寮共參云云、　二年八月廿八日庚戌、上皇〇鳥羽明旦可還御之由告送、日來鳥羽殿御也、〇中略事畢退出間、自女院有召、仍著布衣參、召簾前被仰云、齋院〇鳥羽皇女統子日來不例御坐、是年來宿痘也、其上自去比發病、未平癒給之間、件本御病更發、御腹ふくれ、御面足手なども腫て、凡飮食不通御坐云々、依是內々令卜處、陰陽師廣方、御病極重、令過九月御事尤可難云云、又宗明辭職可試給云々、又醫師重忠奉見云、年來御病、腹病事外大事の事、於今非所醫治之及、只可任御祈請者、此極恐思上、人々夢想皆以不快、爲之如何、齋院御夢、進燈人來打消旁無人、中心恐思云々、齋院累代爲則元夢、院廳舍可改替之由老人來示、仍欲改替處、又云、乍柱可替也者、是等皆惡夢也、爲之如何、上皇仰云、仰付社司等、七箇日殊令致祈請、尙無減氣者、早可奉下者、下官申云、如承者付旁尤有恐、如上皇仰、先有御祈可令隨形勢也、　廿九日辛亥、上皇自鳥羽殿還御於女院、召家業朝臣、齋院御事有御卜云云、治部卿參齋院、御事執申云々、　九月二日癸丑、齋院禧子、依病出一品御書所、盛重家渡御、大雨間或人云、上皇御幸一品御書所、依齋院御惱重御也云々、仍以使者少納言許遣尋、使歸云、一定出宮給、可令渡盛重宅堀川上手小路也者、又人云、女院只今可有御幸云々、仍師仲令參女院、女院又渡御云々、乘燭之程、參齋院御所、兩院同御坐、右兵衞督殿上人十餘人祗候、皆布衣也、良久與武衞談、多齋院御事也、退出給後、宜御坐、是顯證也云々、〇中略參女院御方、招出女子、散不審、齋院今間宜體御坐、雨院御中臥給也、但本病大事御、忽令平癒事有難歟云々、師仲云、今朝於治部卿、民部卿、源大納言按察、

可申左右云云、　廿二日丁卯、及晚參殿、仰今夜齋王可被退出之由依有云云、汝可參彼院之由、昨日有相示、倩思此事、頗無便歟、就中明日明後日、共重復日也、仍今夜中可奏事由歟、其間事、汝參彼院、無人沙汰歟者、仍不參入歸宅、有障之由令申院、其使歸云、亥剋以大僧正御車秘藏可令渡室町給云云、及深夜頭辨被示云、齋院今夜被退出之由、只今有聞食、實否如何、返報云、只今奉此參入欲令奏事由之間也、事々自可申者、即參內相逢頭辨云、賀茂齋王、日來有所勞之由、此兩三日依殊重、今夜寮退出、隨傳聞所令奏也者、辨奏此由、仰聞食由、次語云、今夜中仰右大臣、○藤原實資可令勘先例者、只今可詣右府也云云、余參殿、又申事由歸宅、　廿八日癸酉、傳聞今夜齋院御出家大僧正奉授戒云云、　十月十一日乙酉、參結政、先此左大辨以下參著入內云云、仍入內著仗座、左衞門督、兼被著外座、大內記孝親、令覽宣命、見了入筥給之、孝親取之、立北庭上、起座進弓場、奏了歸座、內記奉文上開見了、取副笏以筥給內記、內記取之退出、上卿起座、出自敷政門、參賀茂、草令奏先了云於侍從所、裹上下社幣立西垣下、次官中務少輔高階件幣被謝申齋院被退出之由云云、　十七日辛卯、有召參內、○中略次有召參朝干飯方、依仰參前齋院、令訪退出由給也奏御返事退出、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕天喜五年四月十五日辛酉、賀茂齋禖子內親王、依病不供奉祭、　六年○康平元年四月三日、賀茂齋王、依病退出矣、○又見續世繼

〔扶桑略記二十九後三條〕治曆五年○延久元年七月廿七日、賀茂齋王、○後朱雀皇女正子依病退出本院、

延久四年七月六日、賀茂齋內親王、○後三條皇女佳子依病退出本院、

〔本朝世紀〕康和元年六月廿日辛卯、賀茂齋內親王、令子○白河皇女依病退出本院、　八月十四日甲申、權大納言俊明參入、被立賀茂奉幣使、權中納言源俊實卿以下爲使、依齋王退出事也、

〔帝王編年記十九堀河〕齋院

禎子內親王內第四皇女、康和元年十月廿日卜定、嘉承二年七月十九日依病退出、

中納言傳關白御消息云、廿五日齋院親王可被辭遁之由先日有間被逃院物詣可宜之由令達案內、無左右趣、今夜俄可被出於院、驚奇無極、至今可任彼御情有遂者、今日旦日也、明日明々日有重復幷御衰日等忌、內々以大外記文義可令勘申前例、並可准據齋等宜出給口院之後、被問案內、一定之後、以頭辨可被仰下官、隨則可仰外記者、○中略　丑時許、頭辨來、持關白消息云、齋院親王今月可被密出云云、依關白命問遣彼院別當右大辨口有所申者、更不可來、只早參內可奏事由者、卽右大辨入奏、有實之由、仰云、可令勘申先例、又仰云、實資關白消息齋院定無守護之人歟、何樣可行哉、奏云、被仰檢非違使被守護宜歟、　廿三日戊辰、未明齋院無故出院之例、勘文進仰遣文義、暫之時持來勘文土代、只今參局、引合國史日記等可持來者、只是准據之例也、少時進勘文、賀茂齋內親王無故退出、幷薨卒時行例事、檢國史云、天長八年十二月壬申、替賀茂齋內親王、(中略)件勘文付頭辨、歸來傳關白御消息云、延喜例不相叶歟、天長例相叶歟、但天長例不被申事由歟、依彼例者、不可被申歟、若可被申歟、廿五日早旦、被申如何、將不可被申歟、有大事之間、惡候院御共、無便之事、然而不候御共、有下不可參給之氣色、爲之如何者、余答云、天長之例、雖不注被申之由、今般事非常、必可然申給、早晚者在御定、抑閏六月齋薨、八月有御占奉幣、

廿八日癸酉、前齋院今夜出家云々、

〔左經記〕長元四年八月十日乙酉、或人云、齋院○選子遁世今月之內可有云云、　九月廿日乙丑、及亥剋、齋院長官以康朝臣來向云、院御消息云、依年來本意、來廿五日許欲遁去、而關白聞給、此院女院御共、彼日可詣石清水等、若有如然之事、甚無便歟云々、仍縮彼日、明後日可遁世也、口令申承了之由、愚案是不可奉抑留、人事皆有其運歟、就中前日今年可吉云云、然有夢想之由有仰、神慮難知、何申左右乎、

廿一日丙寅、早旦參內、齋院御消息旨申關白殿、被仰云、前日甲斐前守範國朝臣侍語此事、仍可令過廿五日給云云、然以彼朝臣令申也、而明後日可令告給之由、有御消息者、雖不可妨申、但事甚卒爾也、猶女院歸給、來月朔比宜歟、以此趣可洩申者、參結政、而召使等遲參、仍不著座下立、觸史入內、史等引相從入內、次參齋院、申殿被仰之旨、仰云、須如殿仰、過院御物詣之後、可遂本意也、然而月來心地不例之由、近來甚以難堪、若及重病者、恐難遂本意歟、仍所急思也、有次可申此旨、然者參殿申此由、仰不

疾病辭職

悰子内親王堀河院皇女、保安四年八月廿日卜定、大治元年七月廿六日依母喪退出、

〔類聚國史 五神祇〕天長八年十二月壬申、替賀茂齋内親王、其辭曰、○中略内親王嵯峨皇女有智子、時年二十五、齡毛老、身乃安美毛有賈依氏令退出、○下略

〔三代實錄 二十八清和〕貞觀十八年五月廿三日己亥、賀茂齋儀子内親王、依病出紫野齋院、移居皇太后宮○仁明后順子染殿宮、

〔三代實錄 二十九清和〕貞觀十八年十月五日戊申、賀茂齋儀子内親王、稱病加劇、修狀請停齋、詞旨懇切、詔許之、遣參議正四位下行勘解由長官兼式部大輔近江守菅原朝臣是善、向社頭申謝事由、齋院司休官各歸家、

〔西宮記 五臨時〕元慶三年閏十月、齋院儀子内親王薨、因病辭職、出紫野院、後薨云云、

今按、齋院依病退例也、件内親王、貞觀元年爲齋王、卽天皇○清和同產姉也、同十八年依病辭職、出紫野、侍皇宮云云、可云退例、不云薨例、

延喜二年十月八日、自齋院使公節、陳煩病由、衆可遷宮否云云、差藏人公利勞問之、九日夜、仰左大臣、○藤原時平令定齋王移他家事、入夜公節來云、親王无氣力云云、此夜能出云云、十一日、左大臣奏齋院君子内親王以九日薨狀云云、十一月三日、齋王薨狀、可奉告賀茂狀、仰右大臣○菅原道眞令勘例、五日右大臣奏賀茂宣命、

〔日本紀略 十四後一條〕長元四年九月廿二日丁卯、夜賀茂齋院選子内親王、依有老病、私以退出、天長八年有此例之由、外記勘申之、○又見大鏡裏書、賀茂齋院記、

〔小右記〕長元四年九月廿一日丙寅、或云、齋院内親王、○村上皇女選子今月廿五日可被出院云云、關白○藤原賴通聞其告云、不可拘留之、女院○一條后彰子御物詣間、極可無便、來月八日尤佳者、被聞此由云云、關白城外程於大事何、　廿二日丁卯、三局史生大膳職主稅寮奏、皆左辨官史生宣旨二枚、召式部丞資信下、從

もとより、昨日は何事かなど侍けるかへり事につかはされ侍りける、

式子内親王（○後白河皇女）

みたらしや影たえはつるこゝちしてしがの浪路に袖ぞぬれこし

由天皇崩御解職

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年六月十六日己丑、無品高（○高一作亮）子内親王薨、（○中略）内親王者、（○中略）承和初下爲賀茂齋、仁明天皇崩後、停齋歸第焉、

〔日本紀略二朱雀〕延長八年九月廿九日己丑、未剋太上天皇（○醍醐）崩、天下諒陰、某日退賀茂齋院韶子内親王、

〔日本紀略十四後一條〕長元九年四月十七日乙丑、戌剋天皇落飾、崩于清涼殿、（○中略）賀茂齋院（○後一條皇女馨子）出本家、坐近隣人宅、（○又見榮花物語）

〔一代要記白河〕齋院

篤子内親王（延久五年三月十一日賀茂齋院、同七月退之、太上天皇（後三條）登霞、）

〔皇帝紀抄安德〕齋院

範子内親王（如故、治承五年正月十四日退下、依太上天皇（高倉）御事也、）

由母喪解職

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年四月卅日庚申、更衣從五位上藤原朝臣鮮子卒、（伊與介連永女）賀茂齋院恭子内親王之母也、　五月四日甲子、賀茂齋院恭子内親王依母喪出本院、遷座葛井宮、

〔日本紀略六圓融〕天延三年四月三日乙巳、前女御從三位藤原懷子薨、（年十四）皇太子幷齋院（○冷泉皇女尊子）母也、仍齋院退出東院、

〔帝王編年記十九堀河〕齋院

齋子女王（寛治三年四月十一日退出、依母喪也、）

〔帝王編年記二十崇德〕齋院

御。祓。也、而有所思命不被行其事、日來御惱、依如此之祟所奉致之由有御下并夢想告、爲之如何、令申
云、雖延引有如然祟者、早可令行御祓也者、

〔中右記〕寛治五年十月十五日庚午、今日後三條院四宮(〇篤子)御禊唐崎、是齋院退下之後、依未有此事
也、源大納言(本所別當)殿上人諸大夫十餘人許前駈、皆布衣云々、但御禊之間、陪膳權左中辨基綱朝臣、役
供中務少輔家隆許、於彼所衣冠者、陰陽師道言候之、出車二兩云々、不下御、則還御了、前駈料輕幄儲
饗饌云々、

〔續世繼(六志賀の浪)〕つぎの姫宮は、又前の齋院とて恂子の內親王と申、後には統子とあらためさせ
給ひたるとぞ聞えさせ給しは、大治元年七月廿三日に生させ給ひて、八月に親王の宣旨かうぶ
り給て、長承元年六月卅日いつき出させ給て、(〇中略)か。ら。さ。き。の。御。は。ら。へ。せさせ給し時、御をぢの
太政のおとゞのよみ給へる、

昨日までみたらし川にせしみそぎ志賀の浦波立ぞかへたる

と侍けるとなむ

〔千載和歌集(十六雜)〕上西門院(〇統子)かものいつきと申けるを、かはらせ給ひて、からさきにはらへし
給ける御ともにて、女房のもとにつかはしける、

八條前太政大臣

きのふまでみたらし川にせしみそぎしがの浦浪立ぞかはれる

〔中右記〕長承三年九月廿五日辛未、前齋院(〇禛子)唐崎御祓云々、御車、(上白庇御車、御車副八人、布衣、御車後有賢朝臣衣冠、檢非違使爲褻布衣、)女房出車三兩、(網代)前駈上達部新中納言、(伊通)別當顯頼、修理大夫家保、宰相中將公敎、(已上直衣)殿上人
前駈卅人(頭中將季成衣冠、餘布衣、)諸大夫十餘人、(布衣)陰陽師宗憲參勤於二條京極院、女院御見物、院御車後殿大
納言參、中宮權大夫、(直衣)殿上人五六人、(布衣〇又見長秋記)

〔千載和歌集(十六雜)〕かものいつきかはり給て後、からさきのはらへ侍ける又の日、雙林寺のみこの

僐子內親王（僐子或作偐子、又諱子、）二條院皇女、母博士中原師光朝臣女、嘉應元年十月廿日卜定、十一

頌子內親王（鳥羽院皇女、母左大臣實能公女、承安元年六月廿八日卜定、）

〔顯廣王記〕治承二年六月廿七日庚寅、齋院卜定、今上〇高倉第二皇女〇範子、母左兵衛督成範卿女、

〔皇帝紀抄土御門〕齋院

禮子內親王（上皇〈後鳥羽〉之女、母前大納言信清卿女、元久元年六月廿三日卜定、今日准三宮、）

皇孫女爲齋王

〔日本紀略淳和〕天長八年十二月壬申、賀茂齋內親王、齡老身安依天、令退出、留代實、時子女王〇仁明皇女、卜定之由被申賀茂社、并奉幣、

〔三代實錄四十一陽成〕元慶六年四月九日辛巳、卜定賀茂齋王、二世穆子女王卜食、一品行式部卿諱〇光孝天皇親王之女也、

〔日本紀略宇多〕寬平元年二月廿七日己丑、卜定賀茂齋王、故中務卿惟彥親王〇文德皇子女直子女王、〇皇胤紹運錄作眞子

三月六日、依齋院卜定、被告申賀茂社、

〔河海抄五賢木〕孫王爲齋院例、直子內親王、文德孫王中務卿惟彥親王女仁和五年〇寬平元年卜定、孫王例、此一度也、

齋子女王（小一條院〈三條皇子敦明〉第五女、承保元年十二月八日卜定、）

〔帝王編年記十九白河〕齋院

〔賀茂齋院記〕怡子內親王

輔仁親王之女也、（輔仁者後三條院之皇子、號三三宮、）母大藏卿行宗之女、長承二年卜定、

解職及喪

〔杜史抄下帝王〕齋院退出卜定事

天皇踐祚後、不可改齋王之由、被告申賀茂社、若有凶事并身病退出之時、被申其旨、其儀上卿著陣、召內記令進宣命、內覽奏聞之後、召使給之、次第如他奉幣、

〔左經記〕長元八年四月廿五日戊寅、午刻許參先齋院、〇選子女房云、去齋院給後、須任先例、於辛前可有

正子內親王後朱雀五女、天喜六年六月廿七日爲齋院、

〔賀茂齋院記〕佳子內親王

後三條院第六皇女也、母贈皇太后茂子、贈太政大臣能信之養女也、實中納言公成之女也、延久元年卜定、號富小路齋院、

篤子內親王

後三條院第七皇女也、母同佳子、或曰、女御基子、源基平之女、延久五年卜定、

〔一代要記堀河〕齋院

令子內親王白河院二女、承曆三年四月廿六日爲內親王、二品、寬治三年六月廿八日卜定、應德元年十一月十四日准三宮、號二條大宮、

〔本朝世紀〕康和元年十月廿日戊午、有齋院卜定事、禖子內親王、今上(堀河)同胞、太后被收養、今夜自枇杷第被渡清實大炊御門南京極西宅、

〔一代要記鳥羽〕齋院

官子內親王法皇(白河)五女、天仁元年十一月八日卜定、清和院齋院、

〔賀茂齋院記〕悰子內親王

堀川院第三皇女也、母神祇伯康資王之女也、保安四年卜定、號大宮齋院、

〔女院小傳〕上西門院統子、本名恂子、大治四、五、改之、二條准母、鳥羽第二女、母大納言公實卿女待賢門院、大治元、八、十七、爲內親王、年一、勅別當權中納言實行、同二、四、六、准三宮、二同日爲賀茂齋院、

〔中右記〕天承二年〇長承元年十一月廿五日壬午、今日院第一姬宮有齋院卜定事、〇中略齋院者、上皇〇鳥羽、第一姬宮、母待賢門院也、□□□一品有准后宣旨也、御名字禧子、訓キイ、式部大輔親光朝臣撰申、

〔賀茂齋院記〕式子內親王

後白河院之皇女也、母從三位成子、季成之女、平治元年卜定、號大炊御門齋院、

〔帝王編年記二十二高倉〕齋院

〔日本紀略（宇多）〕寛平五年三月十四日癸丑、卜君子内親王、爲賀茂齋王、今上第三皇女也、

〔日本紀略（醍醐一）〕延喜三年二月十九日庚寅、卜定賀茂齋院、恭子内親王（○醍醐皇女）卜食云々、　十五年七月十九日戊寅、卜定賀茂齋院、今上第二皇女宣子内親王卜食、　廿一年二月廿五日壬午、卜定賀茂齋王、今上第十三皇女韶子内親王卜食、（年四）

〔日本紀略（二朱雀）〕承平元年十二月廿五日戊寅、卜定伊勢賀茂齋王等、先帝（○醍醐）第七婉子内親王賀茂卜食、

〔日本紀略（五冷泉）〕安和元年七月一日壬午、有伊勢賀茂等齋王卜定事、（○中略）齋院尊子内親王、今上皇女也、

〔日本紀略（六圓融）〕天延二年十一月十三日丁亥、除目、選子内親王叙三品、　三年六月廿五日丙寅、卜定賀茂齋王、先朝（○村上）第十選子内親王也、以陸奧守貞盛二條萬里小路宅、爲潔齋所、

〔大鏡裏書〕一品選子内親王事

村上天皇第十皇女、母中宮安子、右大臣（師輔公）女、康保元年四月廿四日誕生、同八月廿一日爲親王、天延二年十一月十三日叙三品、同三年六月廿五日卜定賀茂齋王、（年十二）

〔日本紀略（十四後一條）〕長元四年十二月十六日己未、卜定賀茂齋王、第二馨子内親王卜食、去十三日遷座丹波守章任三條宅、

〔扶桑略記（二十八後朱雀）〕長元九年十一月廿八日、娟子女王爲齋院、

〔本朝世紀〕康和五年三月十二日辛卯、前齋院娟子内親王薨、内親王者、後朱雀院第二女、母陽明門院（○禎子）也、（○中略）長元九年十一月廿八日、卜定賀茂齋王、時年五也、十二月六日、勅爲内親王、

〔一代要記（後冷泉）〕齋院

禖子内親王（後朱雀院四女、寛徳三年三月廿四日爲齋院、）

皇女爲齋王

○按ズルニ、齋院ノ創置ハ、嵯峨天皇ノ弘仁元年ナルコト、上來引用スル諸書ニテ明ナリ、然ルニ帝王編年記ニ弘仁九年五月、以皇女有智子內親王始置賀茂齋院トアルハ、蓋シ齋院司創置ノ事ヨリ誤リシモノナラン、

〔中右記〕大治二年四月六日乙丑、今日依可有稚后幷齋院卜定、午時許參內、○中略

齋院次第

有智內親王 嵯峨第九女、作詩賦人也、弘仁九年、初置齋院司、自斯始、
淳和仁明 時子 仁明一女
同 高子 淳和八女
慧子 文德九女 不吉例
同 述子 文德三女
清和 儀子 文德一女
陽成 敦子 清和三女
光孝 穆子 光孝女
宇多 直子 中務卿惟彥女
醍醐 君子 宇多三女
朱雀村上 恭子 延喜三女
同 宣子 延喜二女
同 韶子 延喜十三女
朱雀 婉子 延喜七女
冷泉圓融 尊子 冷泉二女
圓融花山一條三條後一條 選子 村上九女
後一條 馨子 後一條二女 皇后宮、後三條院妻、
後朱雀 娟子 後朱雀二女
後冷泉 禖子 後朱雀四女
同後三條 正子 同五女
後三條 佳子 後三條三女
本院 篤子 同四女 中宮、堀川院妻、
同 齋子 堀川院□□
堀川院 令子 本院三女
同 禛子 同第四女
新院今上 官子 同□女
今上 悰子 皇后宮母后儀 新院初爲后
同 恂子 新院第二女、母女院、當時已上廿八人、此中後爲皇后三人、

○按ズルニ、此內直子女王ハ、文德帝ノ皇子惟彥親王ノ女ニシテ、孫王齋ナレドモ、姑ク此ニ併出ス

〔類聚國史五神祇〕天長十年三月癸丑、高子內親王○仁明皇女爲賀茂齋院、

〔文德實錄二〕嘉祥三年七月甲申、慧子內親王○文德皇女爲賀茂齋、

〔文德實錄九〕天安元年二月丙申、廢鴨齋內親王慧子、更立无品述子內親王○文德皇女爲齋內親王、

〔三代實錄三淸和〕貞觀元年十月五日丁亥、儀子內親王○文德皇女爲賀茂齋、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年二月十七日己未、○中略賀茂齋敦子內親王○淸和皇女並卜食、

〔賀茂皇大神宮記〕桓武天皇の御後は、御位を第一の御子ぞつぎ給ひける、これを大同の天皇と申けり、天下をしろしめす事、わづか四年にして、御くらゐをば御弟のみこ嵯峨の天皇にゆづり給ひて、先帝は奈良の故郷にすみ給ひけり、さてこそ平城天皇とは申なれ、○中略其頃先帝内侍のかみ○藤原薬子を御てうあいましく／＼て、なにごとも此人の申さる丶にぞうちまかせ給ける、これは宰相種繼のむすめなり、心さがしくたけ／＼しき、男子にもまさりたり、をりにふれて先帝へ奏し給ひけるは、いくほどなう御くらゐをさらせ給ふ事口をしさよ、玉體御つ丶がもましまさずして、いかでかくおぼし立けるぞとなげきかなしみ申給ければ、先帝くやしき事におぼしめして、御ゝらゐにかへりつかせ給はむとの御用意ども侍りけり、内侍のかみよろこびて、先帝くらゐにつかせ給はゞ、われは后にぞなるべしといさみをなし、せうとの兵衛のかみ藤原仲成といふ人を大將として、畿内の兵をめしあつめ、いくさをと丶のへられけるほどに、世の中さわぎののしりて、萬民たやすき心なかりけり、みかど此よしきこしめし、○中略賀茂皇大神へ勅使をたてられし御事也御祈ねがはくは官軍に神力をそへられ、天下ぶいに歸せしめ給へ、しからば皇女を奉りて、御宮づかへ申さすべしとぞ勅願ふかく仰られける、○中略かくて、世の中靜りしかば、御門御宿願はたし給はんために、有智内親王と申姫宮を齋王になし給ひて、弘仁○元年○四月○に、賀茂皇大神へ參らせ給ふ此れいをもて、代々のみかどの御代はじめには、皇女を賀茂の齋にそなへらる、

〔本朝月令四月〕中酉賀茂祭事
或記云、延暦十二年癸酉、北野山中天皇行幸、而諸臣却奉各去○各去二字、年中行事秘抄爲后一字也、于時遭大火給、祈申始奉鴨上下兩神大祭事、幸供奉諸司幷奉齋内親王、又說云、嵯峨天皇與平城天皇有隙不穩、于時嵯峨天皇祈禱有感、初奉齋王云云、○又見年中行事秘抄

齋院創置

仁壽三年四月廿三日依京畿七道疱瘡穢、賀茂祭停止、齋王（文德皇女慧子）亦不參、但使國司供奉祭事、亦有祈、使警固事不行、

同四年四月十九日、賀茂下社有死穢、仍勅使幷齋王不參、但警固如恒、

延喜九年三月廿二日御記云、高階朝臣申云、齋院供奉祭日日記進止如何、（輕服）仰外記令勘先例、外記春正申云、國史日記等无所見、案令式文、親王有服云云、然則齋王不可參祭也、又召神祇大少副藏人所問之、申云、齋宮不忌輕服、准之則可參祭、又令公卿等定申云云、准齋宮例參祭無妨云云、依公卿定可參祭事仰高階朝臣了、

同十五年四月十八日御記、齋院長官希世、申齋內親王（醍醐皇女恭子）自昨有月事、仰外記令檢先例無所見、召神祇大副安則問齋宮例、申云、於離宮有月事不參外宮、又於外宮有月事不參內宮、但所備幣物、宮主所司等持至河邊祓其由棄之、齋院事、非神祇官之所知也云云、仰希世齋院參社事、宜停止只於院令祓停止由、又所設幣物、依齋宮例院司宮主等相共於川邊令祓棄之、十九日己酉、祭如常云云、只齋王不參社頭云云、（○中略）未一剋出南殿拜賀茂大神、申齋王不參狀、兼祈平安、

承平七年四月一日、貞公御記云、賀茂齋內親王（○醍醐皇女婉子）遭兄弟喪、參祭否之由令公卿定申、民部卿令申云、今日公卿少數、須明日朝可令定申、三日、齋宮齋院著輕服否之由令問彼宮、宮不著者、齋院可參祭之事定了、（中務卿親王、去月廿九日頓滅、）

〔一代要記　嵯峨〕賀茂

有智內親王（帝第九女、弘仁元年卜定、母正五位下交野女王、從五位上山口王女也、齋院始也、是與平城有隙御祈也、）

〔賀茂齋院記〕（嵯峨天皇與平城天皇昆弟之情不睦、故爲祈願特設齋院、使皇女有智侍焉、）

有智子內親王　嵯峨天皇第八皇女也、母曰交野女王、是天皇之幸姬也、有智頗涉史漢、兼善屬文、天皇愛之、以爲賀茂齋院、（○中略、又見簾中抄、賢女抄、）

禁忌

而御坐里第之時、爲之如何、　廿日癸亥、夜部所聞之散飯幷御祈等事、案内前院、其報云々、雖里第皆奉御膳散飯、(只稱其料、可置可然所上云云、)又御封幷自諸司所渡之物、最前等皆奉此神、又毎月酉日被祭此神、其儀非事々、只御炊男充給分物、(一度料升云云)以酒肴祭云々、又於他所被行事佛事御祈、更不可忌、是例事也、但以祿祭料不可被宛、以御封物可被宛云々、參殿中此由、仰云、隨前院例可行、抑難良刀自御祭事雖不令入野宮給、自近來被祭之宜歟云々、又申云、頗給料、以院請奏可被渡也、仍尋奏案預範國朝臣了、廿八日吉日也、後日可奉請、奏侍次參齋院、申散飯幷御祈等事、

〔大日本史神祇八〕難良刀自神社、今不詳所在、賀茂齋院、在野宮所祀之神也、日奉朝夕饌、毎酉日使御炊男奉神酒、割賀茂封物充其費、

〔延喜式齋院六〕凡忌詞、死稱直、病稱息、泣稱鹽垂、血稱汗、宍稱菌、打稱撫、墓稱壤、

〔詞花和歌集雜十〕かものいつきときこえける時に、西にむかひてよめる、　選子内親王
おもへどもいむとていはぬ事なればそなたにむきて音をのみぞなく

〔大鏡四右大臣師輔〕佛經などのことは、むかしの齋宮齋院はいませ給ひけれど、この宮〇村上皇女選子にはよ、佛法さへあがめ申給ひて、朝ごとの御念誦か、せ給はず、ちかうはこの三條の今日の講には、さだまりて布施をこそおくらせ給ふめれ、いとさうより神人にならせ給ひて、いかでか、る事おぼしめしよりけんとおぼえ候は、賀茂のまつりの日、一條の大路にそこら集りたる人、さながら共に佛とならんとちかはせ給ひけんこそ、なほあさましく侍れ、

〔西宮記四月〕賀茂祭事
承和六年四月廿二日、依鴨祭廢務、勅使幷女使等騎馬、度紫宸殿前天覽了、參東宮御覽了、到内藏寮云云、將進發之間、自内裏使來仰云、有下血之穢、仍各々勅使、幷齋王〇仁明皇女高子忽停止、山城國司依例祭祀、(檢故實、内裏有穢、彼院不穢、齋王猶參入、而此度不檢記文、忽停止齋王、不可爲例、)

右宮主於院先供御禊、然後男女官臨河邊解除、但禊物饗料院司具備、

相嘗祭〈若七月以前定齋王者、當年祭之、八月以後者、待明年祭、〉

神座二前〈南面東上、下上兩社料、〉

五色帛各四尺、酒二斗、〈供神料、請所司、〉

裝束料

小忌宣旨采女各一人別絹一匹、綿三屯、貲布一丈五尺、采女代七人、絹三丈、貲布一丈五尺、〈並用卜食者、〉司人三人、貲布一丈五尺、

使院司一人〈卜食〉絹一匹、綿三屯、布一端、宮主絹一匹、綿一屯、舍人一人布一端、仕丁一人、庸布一段、

右每年十一月上卯日雞鳴、齋王潔齋遙拜、奉幣於神社、夕時設上件神座於齋殿、座別設齋王供承座、祭之、奉幣使廻後、院司幷宮主各給衣一領、明日夕給酒饌於院裏男女、賜祿各有差、勅使至社奉幣之後、於社前給兩社禰宜祝及忌子等祿、同四月祭禮、其用度料、絹廿匹、調綿二百屯、布三端預前申官請大藏省、

竈神祭料

五色帛各二尺、倭文二尺、木綿麻各一斤、鰒堅魚腊海藻雜海菜各一斤、鹽米酒各二升、坏四口、瓶一口、水戶一口、柏四把、匏一柄、

晦日解除料

庸布一丈四尺、鍬二口、安藝木綿十兩、麻八兩、米酒各二升、鰒堅魚海藻各一斤、稻二束、

右祭幷解除料、神祇官每月直移所司請取、令宮主祭祓、但六月十二月晦日中臣奉麻、事畢賜祿、〈中臣被一條、宮主衣一領、〉

〔左經記〕長元四年十二月十九日壬戌、參齋院、女房云、朝夕御膳散飯等、在野宮奉難良刀自之神云々、

右地從公家御所當亥方、從齋院御所當申方、共無御忌、仍以點定如件、

治承四年四月七日　陰陽師清科盛季〇以下署名略

陰陽寮

擇申齋院　御禊日時

今月十二日甲午

御出門　時未二點

御禊　時申二點

入御　時戌二點

治承四年四月七日　陰陽師清科盛季〇以下署名略

〔山槐記〕治承四年四月十二日甲午、今日初齋院、〇中略禊東河、入御紫野院、近年紫野舍屋皆无實、近日假造營寢殿、阿波還任功、自餘又成功等云云、上卿新大納言、宗家、卜定以後、雅賴、實家、實綱等卿、不參奉行、宰相右中將、實宗、卜定以後无宰相、今度御禊歟、辨藏人頭左中辨經房朝臣、卜定以後重方、兼光等、不參奉行、外記少外記中原貞親、史左大夫大江盛直等也、藏人方事、藏人宮內權少輔親經、藏人平時房等奉行之、

〔玉海〕治承四年四月十二日甲午、此日初齋院御禊也、〇中略今度御禊无六府之前驅、例也、自明年可有件等前驅、

〔延喜式齋院六〕忌火竈神祭

五色絁各一尺、倭文一尺、庸布一段、鍬二口、木綿麻各二斤、東鰒、堅魚、海藻各一斤、鹽一升、酒米各二升、坏二口、水戶一口、柏二把、匏一柄、

右神祇官直移所司請取、令宮主祭、

六月禊

可出禊祭兩日檳榔毛車六兩

太宰帥家　三條大納言家　花山院中納言家　平中納言家　平宰相家　新宰相中將家

車副各六人（可著冠）褐衣袴布帶等從院可受

治承四年四月七日

可出禊祭兩日童女騎馬四匹事

新中將朝臣　內藏頭朝臣　但馬頭朝臣　權右中辨朝臣

陪從各二人、口付各二人、　可副菅笠雨衣深沓

治承四年四月七日

次予書了、取定文二通、起座參進奉上卿、了復座、次二獻如初、次居汁物、（諸大夫役之）次立箸、次三獻、長官勸盃、諸大夫泰信取銚子、○中略次上卿召長官、被下定文二通、（先例或二獻以前被下歟）次令撤例文硯、此間及衛黑供掌燈、（次官判官等役之）次行事史持來御禊點地勘文、同日時勘文、祭日時勘文等、（各勘文二通持來、於點地勘文者、一通以史可付辨、是奏聞料也、一通可付本院司、啓御所料也、自餘勘文等令成二通之條、以陰陽寮忘失歟、仍撰取返史、）取之覽上卿、○中略奉幣日時、今度又取落、追又持來奉上卿、見了爲下長官被相尋之處退出了云云、仍賜予、件奉幣、先例或本院偏沙汰、行事官不尋知歟、次上卿退出、予謁前納言、奉幣日時賜年預資忠、自餘賜史盛景、但於點地勘文者、爲奏聞留了、件勘文事可用意之由仰在憲朝臣了、而相違若是老耄令然歟、

陰陽寮

點定齋院　御禊地事

鴨河西邊（小社以南、北邊大路以北、）

從公家御所東行六町　北行廿四町

從齋院御所東十四町　北行六町

〔吉記〕治承四年四月一日癸未、今日賀茂初齋院（○高倉皇女範子）禊東河、可入御紫野院定事、七日己丑、午刻參內（鎰口一人召具之、可向點地之所故也、○中略）、次退出向一條末（河合社以南、一條以北也）、依初齋院御禊點地也、著幄座（大藏立幄、主殿引幔）、掃部敷座、予著北第一間（南面）、陰陽頭賀茂在憲朝臣、助同宣憲朝臣、及允属陰陽師等著座（第二間以南、北上東面）、行事史盛景同著座（西面、在憲朝臣云、陰陽寮西面、行事官可爲東面、先先如此、然而閣便陰陽無左右者東面云云）、了拒捍使檢非違使大江經弘參候（衣冠）、（自行事所令相催之處、先例稱不參之由、以下知事觸知由、於事致如泥者也、可謂奇怪、山城國司等參、雜掌爲其代、近代之例也）、木工寮官人代、打丈尺四角立杭、陰陽寮立榊、史並史生盛康檢臨之（官掌稱依不參行事所、事可及懈怠之由依令申、不召具也、觸雜々御所爲川跡、當時雖無水、令禁忌有須之由、若雨降者無疑可爲河流、仍所領寄南令點也）、事了之後、予召仰經廣云、今日以後、檢治守護、不可令置汚穢物者、申云、先例定檢非違使之役也、申狀依奇怪加勘發了、次予參齋院（左近府）、木工山城檢非違使等不參著、衣冠騎馬者在車前、是左京職歟、不見度々記、尤不審也、行事官陰陽寮等相次參入、以侍廊爲其所、[illegible]居饌、盃酌有三獻云云、予著客殿、先是上卿新大納言被參候、

客殿裝束儀（予兼注差圖、給貴忠了）

殿上廊敷滿弘莚、南西二面懸翠簾、東第一間引軟障、其前敷高麗疊一枚、其上施龍鬢地鋪、其上敷東京錦茵、爲上卿座（南北行西面）、座前居饌（折敷高坏六本、兼居肴物）、其西間敷紫端疊一枚（東西行）、爲行事辨座（北面）、座前居机饗、以前甚兩間迫西妻戶敷紫帖一枚（南北行）、爲長官座（東西）、座前居机饗一前、次官幷史座、依所狹不敷之、長官實教朝臣著座、次一獻藏人大夫高階泰信持參盃、隼人正清定取瓶子、但上卿役藏人五位尤可勤歟、仍以泰信更令取瓶子、上卿被擬予、予起座賜盃（座如常、揖）、復座飮之、次置盃、史著座之時辨擬史、史留盃、而今日史依不儲座不著座、予尤可擬長官歟、然而管見不詳、仍不擬之、但先伺上卿氣色也、上卿被仰可持參例文硯之由、次次官藤原忠光持參例文（寬治例文也、予書出之、兼賜年預貴忠了、置柳筥、）置上卿前（五位次官兼隆不參、仍六位役也、天仁家記、次官役之、同中御門右府記、判官役之、兩記相違不審、不可然、上卿前次官役也、有其謂歟、仍如此、）判官持參紙筆（盛柳筥置予前）、次隨上卿與奪、予書定文、（先出車、次出馬、）

清（雜色一人、取松明前行、凡着當色雜色、侍可取松明歟、）次御輿、（無腰輿之例也）次藏人所陪從可供奉歟、而早以前行、雜色二人渡車、今度依爲初齋院、雜色四人、（□□□橘信保）乘二人、（大江隆守、藤景忠、）供奉也、存例先日雜色二人、乘四人、出納相催之、予下知如此也、次一車、次院司、次官、加判官等、次勅使典侍車、（有前駈、督別當典侍、清盛娘女子也、非渡祭之典侍、不具女房車例也、）次行列右馬允歟、黑暗之間、不見及、次女別當車、次宣旨車、（其內童女一兩也）次出車六兩、女房裝束上兩紅匂、（二兩、一兩紫匂、一兩萌黃匂、五車、）次馬寮車歟、其路出大膳職北門待賢門、宮城東大路北行、一條東行也、月出了歸畢、
可尋記事

一牛御覽事
殿下令獻一車牛給、出納仲政、（二騎也、一人闕也、禊祭行事五位出納也、）引肥牛、小舍人、著布袴引之云々、

一所陪從御覽事
其儀同祭日云々、雜色信保遲參云云、已上頭辨雅賴朝臣候簀子云々、

一扇使事
行事藏人賴保云々（一臈判官也）

一勅使典侍參北陣哉否事

一垣下殿上人事

一采女催獻河原禊幄哉事

一飾馬事

一三車瓶事
殿下令獻給云々

今日依爲凶會日、齋王不入御神殿云々、　廿八日庚午、齋院始入御神殿云々、明日依凶會日不入御、去廿二日、雖可入御本院、有犬死穢、今日入給云々、

今有是失歟云云、此事可尋、前例與侍御車次渡歟、次院女房車幷童女已上六兩、大納言能實、中納言顯雅、雅定、實能、參議長實、大貳經忠、此中雅定卿車下簾施紐、車副四人褐、牛飼裝束付花、有御感云云、女房裝束口花歟冬、袖薄色、上達部皆用和轡、是近來例也、土御門殿用鞍轡、是秘說也、事了還御三條殿、人々退出、

〔中右記〕長承四年(○保延元年)四月八日辛亥、雖不當神事、無御灌佛、是依初齋院年也、先例或被行、或被止、然而今年被止也、　十五日、初齋院(○後三條皇子輔仁親王女怡子)御禊、初入本院給也、前駈源大納言顯雅、中納言宗能、參議二人、實衡、(不參云云)四位四人、五位四人、襤色所衆所前駈御覽如常云云、頭辨候御前、

〔山槐記〕永曆二年(○應保元年)四月十六日戊午、今日初齋院(院(後白河)第三女(式子)母儀三品季子、高倉局是也、)禊東河、入御紫野院、(所謂一條以北本院也、)日也、(○中略)先行事左少辨俊經駕車、(不切物見歟、)牛童縹濃歟冬衣黃單、不出衣、辨侍雜色六人、(白張、不出衣、白衣、)有笠持、

次外記中原長盛、(去十三日任、駕車不切物見、牛童香上下白衣、)小舍人童淺黃雜色四人、

次史大江高重駕車、(已上同外記、但牛童香白襖綠衣也、又不相具小舍人童、)行事官駕車渡、晴不渡事、初齋院禊先例不同、或說今度公卿騎馬前行、彼以前駕車、似無便宜之故、用閑路云云、次御祓物一荷、(可列京職後歟、)次左右京職等、次五位前駈、(下﨟爲先、但行列太猥稱、一兩渡間擧松明、)丹波守隆行、(小舍人童二人、萌黃欵冬衣上紆、雜色六人著白張、)侍從有房、(小舍人童二人、朽葉萌木衣、無雜色、)左兵衛佐實淸、(小舍人童二人、二藍欵冬衣、隨身二人、著蠻繪、差鞭、無雜色、)治部權大輔國雅、(小舍人雜色四五人、著白張、)次四位右少將實宗朝臣、(隨身二人、著蠻繪、差鞭、)右少將基家朝臣、(隨身二人同前、白帳、雜色四五人有共、)刑部大輔賴輔朝臣、(小舍人童、雜色四五人許、)周防守隆輔朝臣、(小舍人童一人、雜色九人、)次參議左近中將俊通卿、(隨身四人、著蠻繪、負平胡籙、依爲左用鷲羽、皆取松明、二人在馬前、二人在馬副後、馬副不取松明、無雜色、)右兵衛督顯長卿、(隨身四人、著蠻繪、負平胡籙、依爲右用鷹羽、皆取松明前行、馬副二人取松明、在馬後、無雜色、)次權中納言實長卿、(馬副權之外、四人取松明、馬前後各二人也、無雜色、)權大納言光賴卿遲參、在御輿後、鑣外馬副皆取松明、二人在馬前、四人在後、雜色相具七八人、已上和鞍付杏葉、(鞦皆有總、無用楚鞦之人、)著靴、次次第使左馬助義憲、(隨身二人、差鞭、取松明前行、小舍人童一人、雜色不著當色、)次長官主殿頭高階爲

皆著束帶、大納言能實卿、參議宗輔卿、下官、不參齋院、仍著直衣、本自候此所、又内殿上人多參齋院、後參此所、左少將忠類、自内裏被奉齋院女房童女料扇使云々、參人云、御輿今輩申了云々、禊祭上卿權大納言宗忠卿、參議伊通卿也、但伊通卿今日前驅也、又内大臣雖被參齋院、不被參此所、兼日仰云、依無輕服、可無便宜云々、先具朱漆辛櫃一合、著襷持裙者相具渡、雖尋問無所答、若是齋院雜具歟、然者尙可候御後歟、

行事官先辨以下車渡、自鳥丸以西步行、左少辨實親、權少外記重實、史季俊渡、於高倉辻乘車云云、次左右京職、次宮主、先禊具櫃渡、次五位渡、美作守、職近衞中臣季重、（府者）小舍人四人、雜色當色、能登守季兼、職秦公正、（院御隨身）小舍人二人、雜色當色、右馬權頭能忠、雜色當色、因幡守通基、雜色當色、右中將重通、隨身同前、無雜色、○中略 前兵衞佐長輔、雜色當色、小舍人、右近少將公教、隨身著胡籙、雜色當色、職左將曹秦公種、（本院召次）左近番長政方、（院御隨身）已上作四位五位、皆連著靴付杏葉、尋常議用楚鞦、用連總揺之由、見士御記、而今度如此、非參議隨身口胡籙指鞭事、是兩說也、但普通儀用鞭歟、

次參議右兵衞督伊通、馬副四人、隨身四人著蒿慎羽箭、參議長實、馬副四人、職左近府生敦忠、右近府生秦兼知、（共院御隨身）雜色雖不著當色、十餘人扈從呵叱、（呵叱不然也）中納言左兵衞督實能、職左將曹敦利、（共院御隨身）馬副六人著紺胄褐、隨身著胡籙、大納言治部卿能俊、馬副八人、雜色不呵叱、（可然）已上杏葉唐鞍鞦也、於轡用和具、次第使馬助保信渡、著位袍付魚袋、（不可然歟）螺鈿劍、著靴、指泥障、次長官阿波守有賢朝臣、馬用銀面、無尾袋、（舊者歟）次漏刻渡、次左右近衞火長、次六府步陣、次齋王御輿、駕輿丁等、多由無名ト稱、前例字佐ト稱、又本院仰云、前々齋王乘車給、而今日用輿如何、（輿鈍色）新院御答、初度用輿歟、雜色二人、盛季男清則、職内府隨身公康所衆四人、皆有雜色、無取物、一車他院司不知名、鞦用皮、頭辨云、今朝行事上卿大納言宗忠卿稱、先例一車料被申請攝政家歟、攝政云、糸毛車牽鞦付杏葉所用也、而上卿有此命、彼有所見歟、仍所送也者、而今尙用彼鞦、二三渡了、典侍渡有前驅、頭辨云、前例今日無典侍前驅、

うけ給て、その殿うちどのにつかはし覺しいとなませ給、御禊にはやへ山ぶきをひかりかさねて、やへ〳〵のへだてには、あをきひとへをかさねつゝ、いくへこちたすかさねておしいだされたり、まことのはなのさきたるゆふばえとみえて、いみじくをかし、まつりの日はうらうへのいろなり、こきふたり、うすきふたり、やがておなじ色のうはぎかうきぬなりくれなゐのこきうすきむらさき山ぶきあをき蘇芳など、皆ふたりづゝなり、かへさにはむらごにて、はかまうはぎも裳からぎぬもうすものにて、もんにはかねをし、ぬひ物どもをし、心々にゑなどかきたれば、すゞしげになまめかしうをかし、上達部も殿〇藤原頼通内の大殿〇藤原教通をはじめ奉りておはしませば、いみじうめでたし、上達部殿上人のこるなし、日ごとにいみじきみものにてなんありける、

〔年中行事秘抄四月〕初齋院御禊年雖八日不當神事灌佛停止事

康和三年四月八日、灌佛如常、同十三日、初齋院、〇白河皇女禛子入御紫野、

〔長秋記〕大治四年四月十九日丁卯、齋院〇鳥羽皇女恂子三年祭了、入給于野宮之御禊也、早朝故源中納言娘典侍供奉御禊、自皇后宮被出立所借牛〇中仁和寺僧都、童治部卿童子丸也、日來雖被借、假內稱有障之由不借、然而及前事關云々、仍所借送也、但輕服人有勤仕前駈之例故也、又送展子入足、〇中略午刻參院、〇土御門殿諸卿依仰、皆著束帶參齋院云々、然而於下官〇源師時依爲假日數內不可參彼院之故、著直衣出門前、下人等告云、已出御、仍步行參一條大路南邊、立御車二兩、上西兩院〇白河、鳥羽同車、女院〇鳥羽后璋子別車、一條殿築垣下敷疊等、公卿侍臣祗候、自御車西、上達部殿上人少々候、東上也、自御車東皆侍臣、西上也、自大地北小屋等前切立竹、而隱門戶、又大路切立松、〇白河皇仰云、路中松早可取捨、供奉者乘馬自有驚、可無便者、仍仰召次等撤之、又當御眼路立檗車、仰云、彼車可追却、檢非違使資遠追從者、令追之、歸參申、供奉女官乘車、依輪落遲々云々、此後良久不渡給、廳官御隨身等、遲馳參一品御書所、問事具否、各歸參雖申具由、及未終不渡給、此間自齋院諸卿侍臣率參、中納言顯雅卿、實行卿、雅定卿、大貳經忠卿等也、

〔延喜式四十二左右京〕凡賀茂齋內親王祓除、及向齋院者、進屬史生各一人、率坊令二人兵士十人前駈、預營作道橋泥塗等、

〔延喜式六齋院〕大殿祭料與神祇式大殿祭同、

右將遷野宮、神祇官請料先祭、

〔文德實錄四〕仁壽二年四月乙卯、賀茂齋內親王、○文德皇女慧子 祓於河濱、是日始入紫野齋院、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年四月十二日丙辰、賀茂齋內親王、○文德皇女儀子 臨鴨水修祓、是日便入紫野齋院、勅大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定監祓事、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年四月十一日甲午、賀茂齋內親王、○淸和皇女敦子 臨於鴨水解祓、卽便入紫野院、公卿及所司供奉如常式、三年齋之後、去年可入野宮、緣穢而停、非緩也、

〔西宮記臨時五〕延喜五年四月十日、左大臣○藤原時平 令奏陰陽寮勘申齋院御禊日云々、定十八日、十七日、中納言藤原朝臣○有穗 令奏齋院御前參議有障不可奉仕、令勘先例、元慶無公卿御前、寬平納言一人、參議二人、或不如本數、令仰云、前例或有不滿數、雖不足何事之有也、十八日、恭子內親王、○醍醐皇女 禊鴨河入野宮、中納言源朝臣○貞恒 等、自宮內令藏人後胤奏、前日定御前時差次第使云々、此度事大於例禊、何無次第使、問例前少貳恒澤申云、寬平初齋院御禊、不差次第使、彼時例別召五位六位各二人階下、被仰供奉、恒澤其一人也云々、故令奏、兼召左馬助俊蔭、右馬允助光、仰可供奉次第使由云々、

〔日本紀略六醍醐〕貞元二年四月十六日丙午、賀茂齋院選子內親王、○村上皇女 從大膳職禊東河、入紫野院、今日凶會日也、中納言爲光爲前駈、

〔榮花物語三十一殿上の花見〕としかへりぬ、○長元六年 れいのごとさわがしくてすぎぬ、春ふかくなるまゝに、齋院○後一條皇女馨子 わたらせ給ふべきことしにて、心ことにおぼしめしいそがせ給、內にはゐどころつくも所にて、女房のもからきぬにゐがきつくり給などいみじくせさせ給、宮にはみやづかさ

それよりすぐに紫野の野の宮に入給ふ、野の宮の有樣、黑木の鳥居に榊たて、あらゆふ御しめ引て、神々しく心もすみわたる計なり、野の宮にて一年御きよまりありて、次のごしまた河原に御出有て、祓したまひて、それよりすぐに賀茂の神館に入らせ給ふなり、

〔延喜式齋院六〕凡齋王於初齋院三年齋畢、其年四月始將參神社、先擇吉日臨流祓禊、(供神料同初度禊、)其儀齋王乘輿、(輿者主殿官人率史生、前疏二日點候、)輿長十人、(黃衣、)駕輿丁卌人、(紺布衣、)衞府十二人、(左右近衞兵衞門部各二人、並著本府青摺衫、但門部便用院門衞、)左右火長各十人、京職幷山城國司祇承、同初度禊儀、駕馬女十六人、(乳母二人、藏人六人、女孺四人、小女四人、)走孺十人、裝物韓櫃盥器韓櫃各一合、供膳韓櫃三合、同器物二荷、衣服韓櫃二合、祿物韓櫃六合、擔夫卌六人、(今院司二人、左右衞士卌四人、)膳部六人、(紺商染布衣、)膳所舍人二人、荷領十人、(並退紅染布衣、)藏人所陪從六人、(在車前、)女別當已下並乘車、(事見初度禊條、)勅使大納言中納言各一人、參議二人、四位五位各四人、內侍一人、辨一人、外記史各一人、太政官史生一人、辨官史生二人、官掌一人、神祇、內藏、縫殿、陰陽、大藏、宮內、大膳、木工、大炊、主殿、掃部、造酒、主水、左右馬等官省職寮司供奉、禊事既畢、賜饌幷祿、(勅使已下五位已上內藏寮饗之、六位已下大膳職、)訖卽廻歸、便留野宮、更賜祿、

〔西宮記臨時五〕初齋院二度禊

入紫野院、(四月禊日任院司事、)

中納言二人、參議二人、(唐鞍式儀、著杏葉也、)四位四人、左右少將左右衞門佐各一人、(以上儀鞍唐尾、)馬寮助允所來六人

如例、院司供奉、

〔神祇官年中行事臨時〕一齋院卜定○中略

入御本院之時、一條御禊所課、中臣卜部勤之、

貲木事　本官史生用意

軒廊以下事、中臣一人、(本官儀卜部、告參、官通文、)

人料、自本院所下給之物、褐袴、葈布帶每物劣也、仍給私當色褐袴打衣冠細纓老懸也、著葈履、自本院遲□□兩度催來、御禊午下事也、依卯時以前其催頻也、□□□□車、相次團扇二枚、裹紫薄様、送藏人盛忠許、依前日召也、三十五枚扇、銀表骨面各四季繪、午刻師仲著束帶、不改白金今日如此、至先參齋院、女院乘車之間、女房達頗有執論氣、存申此事參院、乃兩上皇〇兩上皇恐誤御幸、供奉皆束帶、民部卿、按察使、新大納言、右衛門督、帥、左兵衛督、中宮權大夫、源中納言、左宰相中將、左京大夫、右兵衛督、右宰相中將、右大辨等云云、上皇於東面南門前橋程、自御車下御、宗成朝臣供御榻、清隆朝臣取御沓、民部卿傳取供御沓、女院入自北門給云々、齋院乘御車給後、兩院於二條東洞院有御見物、前大相國〇藤原忠實著直衣、二條殿門待候給、御幸後參御車後給云々、事了未還御于二條殿之先、諸卿殿上人皆悉參河原輕幄、出車外女房車網代一兩參河原雜役云云、御禊供奉人、左宰相中將宗能卿、隨身蠻繪、以褐指貫云々、可尋胡籙歟、左衛門佐代顯成、右衛門權佐宗光、左兵衛佐資賢、右兵衛佐顯長、院御隨身季忠爲隨身、蠻繪、皆指貫、非參議可然、左衛門尉貞信、右衛門尉季時、左兵衛尉行則、右兵衛尉行能、次第使馬助保信、以所具之馬醫師爲隨身令呵叱、源大納言不可然之由示給、勅別當顯能朝臣隨院右府生敦方勅使内侍大夫典侍絲毛車、副手振、獻出車人公卿源大納言、下官、中宮權大夫、右大辨、新宰相中將等云云、自内裏被獻女房扇使、右近少將忠基朝臣、事了齋王還著一品御書所、師仲送付了退出、垣下人々可尋注、

【山槐記】治承三年四月九日丁酉、今日初齋院、當今(高倉)内親王(範子)母右衛門督成範卿女、内女房、號小督殿、自冷泉室町西亭左少將有房妹典侍宅也、本卜定所、中御門南京極西、去月廿六日燒亡後、令渡此所給也、禊東河、令入左近府給、可有入御一本御書所之儀、而前齋宮去年□□御坐彼所、今年正月自野宮退出、被憚彼例云々、傳聞秉燭之後出御、別當時忠被候御車寄、上卿源中納言雅頼辨左中辨重方朝臣參入行事云云、

【百練抄】十一土御門元久二年四月廿八日、初齋院、〇後鳥羽皇女禮子入御諸司、

【賀茂皇大神宮記】齋院にて、一年御きよまりありて、次のとし又河原へ御出有て、はらへし給ひて、

車於南階、（先是女房乘出車、立南庭東頭也、）齋王乘御了、攝政殿下以下、（左大臣同車、）相引到二條大路富小路御見物、雲客飛花軒、次第扈從、攝政北政所御車立其西方、（檳榔毛、前駈十人布衣、）先是上皇有御見物、二條東洞院辻也、此御車（副八人、御車）北面立之、其西立輕幄、爲前駈上卿并侍臣座、前駈諸卿權中納言（宗）右衛門督（實行）皇后宮權大夫（公實）參議左中將（保實）已上直衣、藏人判官代已上殿上人卅人許、（衣冠）御隨身將曹府生番長（褐衣）舍人（布衣）左兵衛少尉平爲俊（布衣、帶弓箭胡籙、在御車之後、）蔗、先神寶宮主左右京職（左右相分）前駈（左大史[illegible]、右兵衛尉某、佐伯代相[illegible]、侍從源實隆、右衛門尉藤原成實、藏人佐源盛長、）參議右大辨、勅別當、左少將國信朝臣、藏人所雜色二人、同衆四人、（皆自藏人下、今日二[illegible]、藍也、往年雜色四人、同宗二人歟、可尋之、）馬助源邦家、（次第使、）同允久俊、（行列後、）御車、次典侍、（[illegible]、以下[illegible]出車、）齋院女別當、（同）宣旨、（糸毛歟、）次出車五兩、（女房廿人、裝束紅染打衣、蘇芳[illegible]重云々、蘇芳衣五、青單衣歟、）童女車一兩、攝政殿以下追參川原御所、有御禊、國信朝臣陪膳、家司通輔、俊忠役供、御禊了、給祿、次供御膳、事了入御大膳職、了於此所給前駈祿、已上官行事所沙汰也、

御河原之間、右少將顯雅朝臣、爲院御使參、御車中不審之由、國信朝臣取祿□女裝束、則歸參了、行事辨右中辨師頼也、今日前駈人々無取物也、先例皆有取物如何、今日内御物忘也、仍雜色所衆不御覽也、

天承二年（○長承元年）十一月廿五日壬午、今日院第一姫宮（[illegible]）有齋院卜定事、（○中略）其後齋王御禊、次神祇官指御所四角於賢木、官人等申云、皆從艮已角、予申云、齋宮之時始從巽、齋院始從乾角之由、故神祇少副兼俊所申也、是皆自本宮方事、此事尤可然也、今度用齋宮説如何、然而皆自艮已角何爲哉、依非上卿強又不沙汰也、次社司獻了給祿、出西門[illegible]了、（○中略）十二月八日甲午、初齋院初入神殿給云々、上卿治部卿、行事右中辨宗成、歸後見[illegible]頗能沙汰也、

〔長秋記〕長承二年四月十八日癸酉、今日齋院[illegible]東河祓、入諸司一品御曹所□□御所綾小路東洞院（[illegible]）上皇[illegible]女院[illegible]於此處云々、依日來催獻出車、昨日車副裝束六

〔續日本後紀仁明〕承和二年四月甲午、高子內親王禊于賀茂川、始入齋院、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年十月五日丁亥、卜定恬子內親王爲伊勢齋、儀子內親王爲賀茂齋、(○文德皇女)十二月廿五日丙午、伊勢齋恬子內親王於鴨水邊六條坊門末修禊、賀茂齋儀子內親王於同水邊待賢門末修禊、並入初齋院、

〔三代實錄陽成四十二〕元慶六年七月廿四日甲子、賀茂齋女王(○光孝皇女穆子)修禊鴨水、入初齋院、事猶有警陣例也、(○事以下七字類聚國史無)

〔日本紀略冷泉五〕安和元年十二月二日庚戌、定初齋宮初齋院御禊御前次第使等、廿七日乙亥、賀茂齋內親王(○冷泉皇女尊子)御禊、入左近衛府、

〔日本紀略圓融六〕貞元元年四月廿五日辛酉、賀茂祭、齋王(○村上皇女選子)未入本院、仍無供奉、九月廿二日乙酉、賀茂齋院入御大膳職、

〔年中行事秘抄四月〕初齋院御禊年雖八日不當神事灌佛停止事、經賴記云、長曆元年四月八日、雖不當神事、依賀茂齋院禊、无灌佛、同十三日丙辰、齋院(○後朱雀皇女娟子)入右近府、

〔中右記〕寬治四年四月九日甲辰、齋王(○白河皇女令子)初度御禊也、禊東河、入御大膳職也、御所近衛萬利小路、前越前守高實朝臣宅也、其道自近衛御門大路、經洞院東大路并二條、便以二條末爲御禊所也、午時攝政殿下、(著御衣冠、御榻、○藤原師實)左大臣、(衣冠○源俊房)內大臣、(著束帶陣也、今日始出仕、○藤原師通)先被治部卿俊明、(今日上卿)左衛門督、(家忠)左兵衛督、(俊實)左大辨、(匡房)三位侍從、(能實)已上束帶、及殿上人數次、手參會、未時自上皇(○白河)被奉御扇一隻、以右少將顯實朝臣爲使、頃自內被奉女房扇廿枚、童女扇四枚、(置御宮三枚、小舍人著衣冠捧之、)以藏人右少將俊忠爲勅使、(著御中門邊)以勅別當左少將國信朝臣召勅使、(先敷座於諸釘上、高麗端疊一枚、北上加西、院職司諸大夫二人役之、)勅使執扇一筥參著、扇筥置御簾前、其外二筥、殿上五位二人、(成宗、通輔、)執之置御簾下、左兵衛督取祿(女裝束一具)給勅使、勅使退座、於南庭二拜歸參、申一點、勅使宰相右大辨(通俊)以下前駈者皆參會、(件座餘四座、頃皆參著此座、有盃酌事之、而光陰漸傾、仍皆在便所云々、)仍寄御

斛、單功卅人、
白銅箸四具料、白銅大八兩、細布三尺、信濃布五尺、油二合、炭一斛、長功十二人、中功十四人、短功十六人、
白銅匕八柄料、白銅大九十六兩、鐵一廷半、細布五尺、信濃布七尺、油四合、炭八斗、長功六十四人、中功七十二人、短功八十人、
白銅杓二柄、臺盤七面、（八尺一面、四尺六面、）藥袋卅四枚、（已上人給料、但白銅杓已下料物單功見上、）
〔左經記〕長元四年十二月五日戊申、參前齋院、（○村上皇女選子）奉問初齋院間雜事、（是依內辨官仰也、）次以權辨（經任）申云、齋院式云、定齋王了、卽卜宮城便所、爲初齋院云々、內匠寮式云、斗帳二具、（一具漆塗、一具白木、）賀茂初齋院幷野宮裝束料云々、然者以諸司可謂初齋院也、仍件御帳等幷雜具、令入諸司給之日可奉渡歟、而前齋院卜定日、立件帳等（白木神殿料、漆塗齋王料、）之由有仰云々、爲之如何、殿（○藤原道長）仰云、誠有疑之事也、慥尋可申行也、又以此旨等可示右府（○藤原實資）幷民部卿（○藤原齊信）等間、有傳聞可被示予、（○藤原經賴）權辨參右府、余參內、以彼院仰旨令申內幷宮、又參殿、權辨云、右府被申云、如式已爲初齋院料之事分明也、而前齋院、已卜定日可立由有命云々、當時無見彼間事之人、兩端疑忽難決、又々被尋行歟云々、民部卿被申云、依式文被行、何難之有乎云々、余申云、前齋院卜定日、神殿等御帳、可立之由、仰之由、案同院式、於初齋院三年齋畢、其年四月參神社云々、就此文尋先例、婉子齋院、承平元年十二月廿五日卜定、同二年九月廿九日入右近衞府、三年四月十二日入野宮云々、然者以里第可謂初齋院、又定齋王了、卽卜宮城便所、爲初齋院云々、卽宗能可參歟、若者卜定齋王則可入諸司歟、然者內匠寮以御帳等可立、其諸司ハ立里第、又不可壞運諸司、仍所作之式歟、而擇日次之間、自然經廻里第如然之間不可神殿、仍早不入諸司之時、猶里第可立神殿御帳等歟云々
〔類聚國史五神祇〕天長八年十二月癸酉、爲前賀茂齋內親王（○嵯峨皇女有智子）相替、祓于鴨川、女（○仁明皇女時子）

羅筥一合、輕幄骨二具、（已上料物單功上）
榻机一具（長一尺五寸、廣一尺三寸、足高九寸、）料、波多板一枚、檜榑半村、阿膠十兩、炭二斗一升、切釘廿隻、漆一升二合、掃
墨三合、燒土三合、綿六兩、絹一尺、手作布一尺、單功九人、（木工六人、漆三人、）
膳櫃三合、（加二楫井楫、）罇一荷、銀飯椀一合、銀水碗一合、銀盞一合、銀盤二口、（以上料物單功並見上）
銀箸三具（各長八寸八分）料、銀小十二兩、和炭三斗、長功三人、中功四人半、短功六人、
銀匕二柄料、銀小十八兩、和炭二斗、油一合、長功四人、中功六人、短功八人、
銀箸臺二口料、銀小卌八兩、炭四斗、和炭一斛、油二合、鹽二升、長功八人、中功十人、短功十二人、
銀唾壺一口（口徑八寸五分）料、銀小七十八兩、炭二斗、和炭一石五斗、油一合五勺、鐵半廷、長功五人、中功六人、
短功七人、
白銅酒壺一合（受二斗）一料、白銅大廿斤、油五合、鐵三廷、炭卅斛、和炭一斛、信濃布一丈五尺、麻繩一丁、伊豫
砥一顆、長功五十人、中功五十五人、短功六十人、
白銅杓一柄（加盞）料、白銅大十兩、炭四斛、油一合、信濃布一丈、長功十人、中功十二人、短功十四人、
白銅風爐一具料、白銅大三斤、炭四斛、油一合五勺、信濃布七尺五寸、長功十人、中功十二人、短功十四
人、
白銅火爐一具料、白銅三斤、炭四斛、油一合五勺、信濃布七尺五寸、長功十人、中功十二人、短功十四人、
朱漆臺盤三面（各三尺、加甕、）料、漆九升、朱砂卅兩、掃墨三升、油五合、燒土五升、綿三屯、絹七尺、細布一丈二尺、
信濃布一丈二尺、調布一丈五尺、伊豫砥一顆、青砥二枚、阿膠十兩、炭一斛、單功廿五人、
酒海三合、（各受二斗）二合料、漆四升、朱砂十六兩、貲布一丈、絹布各四尺、綿一斤、油四合、炭一斛、一合料、漆二
升、掃墨七合、燒土八合、貲布五尺、絹布各一尺五寸、油一合、炭二斗五升、單功十三人、（朱漆八人、墨漆五人、）
下食盤十枚（各方一尺七寸）料、漆五升、朱砂十二兩、掃墨二升、燒土二升、油三合、貲布一丈、絹六尺、綿三屯、炭一

食(用院侍)供膳韓櫃三合、同雜器物二荷、衣服韓櫃二合、祿物韓櫃六合、(騎大舍、用衛士、)膳部六人、仕人二人、荷須
十人、藏人所陪從六人、院女別當已下並從車後、(女別當已下藏人已上乘私車、采女女孺以下乘馬從車、)勅使參議一人、院別當
一人、五位四人、六位四人、並前驅、左右近衞、左右兵衞各二人、左右門部各二人、左右火長各十人供
奉、左右京職官人率兵士已上迎候、山城國司率郡司候京極路、辨一人、史一人、史生二人、官掌一人
率供奉諸司、就祓所行事、齋王到幕、臨流而祓、神祇官中臣進麻、宮主讀祓詞、訖卽賜勅使已下祿幷
祿、(辨官錄見參付院別當、)卽既而廻歸入初齋院、卽卜定供膳井、立賢木、

井祭料

五色薄絁各四尺、絹一匹、絲一絇、倭文四尺、綿一屯、布一端、庸布二段、鍬二口、麻二斤、木綿大一斤、堅魚鰒
各四斤、腊四斤、海藻四斤、鹽五升、酒米各一斗、水戸一口坏八口、匏一柄、柏五把、

右神祇官申官請取、令宮主祭、

〔西宮記(臨時五)〕齋院二度祓〇中略
初入諸司、(定行事上卿辨、左右衞門陣護宮、)供奉參議一人、左右衞門、宮別當、四位一人、騎馬在車前、輿侍等供奉、向東
河解除、入諸司、

〔神祇官年中行事(臨時)〕一齋院卜定〇中略
見參官人十餘人、被入御諸司川御祓所課、中臣部〇部上恐脫卜字勤之、

〔延喜式(四十六左右衞門)〕凡伊勢齋內親王初齋之時、差門部二人、衞士一人、寫門衞、(門部直衞士宿火、)其賀茂齋院門
衞准此、但雖遷齋院猶充之、

〔延喜式(十七內匠)〕賀茂初齋院幷野宮裝束
斗帳二具、(白木一具、漆一具、)几帳十基、(三尺六基、四尺五寸四基、)屛風六帖、(五尺二帖、四尺四帖、)金裝車一具、小行障二枚、大翳二枚、(入平
文宮)大笠柄二枚、(平文加志部、)銀撑壺二口、(加平文柄幷志部、)平文宮二合、輿一具、腰輿一具、屛轍二枚、大行障四枚、小

初齋院入御

御門中納言曰、存二古儀一雖レ參二卜定所一、齋王未レ渡御一經二數刻一、仍退出了、近年依二其人無一齋宮齋院、爲二未曾有一例、而皇女連々誕生、共爲二齋王一、有二神感一歟、

〔仲資王記〕元久元年六月十三日、裏書云、初齋院卜定間、差文幷勘文狀、又史生請口覽口云々

一通宮主差文、神祇官差進、賀茂初齋院宮主事、龜卜生正六位上直宿禰是光、右依二官定一差進如レ件云々、同下少史長官加署、

一通參役官人座又同差進、賀茂初齋院卜定所參役官人事、則官三人、史生四人、官掌二人、官人代四人、鎰取廿人、右狀同前、祐三

一通請奏神祇官勘申、賀茂初齋院卜定由奉幣、鴨御祖賀茂別雷社幣帛事、鴨御祖社二前、賀茂別雷社二前、五色絁已下如レ例、右依二官宣一勘申如レ件、年月日、長官同下、少史同前也、幷使公卿云々、外記沙汰歟、

一通請奏問勘申、賀茂初齋院卜定所忩物事、五色絁已下、已上火災祭用途、又五色絁已下、已上靈神祭用途、又五色絁已下、已上御井祭用途、又五色絁已下、已上大殿祭用途、右狀同前、

廿三日甲寅、今日齋院卜定、外祖前權大納言信淸卿四條北朱雀西家、卽爲二卜定所一、〇中略今夜准后宣旨云々、

〔百練抄十一土御門〕元久元年六月廿三日、有二初齋院卜定事一、先被レ下二親王宣旨一、〇又見二明月記一

〔賀茂皇大神宮記〕凡齋王のさだまり給はんさては、まづト部のうらにあはせ給ひ、其より三年の間御精進にて神事あり、先河原へ御出有て、はらへし給ひて後齋院に入給ふ、是は內裏のうちのしかるべき御殿をてんして、齋の宮をすへ申させ給ふ故に齋院と申也、

〔延喜式六齋院〕凡定二齋王一畢、卽卜二宮城內便所一、爲二初齋院一、卽先臨二川頭一祓潔乃入、

祓物

五色絁各四尺、鹽二升、酒米各一斗、鰒堅魚海藻各三斤、匏一柄、䈂籠一腰、加レ柏、庸布二段、食薦二枚、黃蘗五斤、安藝木綿三兩、凡木綿麻各一斤、鍬二口、稻二束、夫二人、

右依二前件一申レ官請用、其前祓二日、辨官率二院別當已下幷陰陽寮及供奉諸司一、到二河邊一、點二定其地一奏レ之、至二于期日一齋王駕レ車趣向、走孺十人、車副十四人、手振十人、取物十人、裝物韓櫃盟器韓櫃各一合、擔夫

趣之由有御定、仍所參啓也、但內々舊齋院〈○善子〉可卜定哉否之由被問先例、仍其勘例、各可令見申歟之由雖令申、又以不可然由有仰、仍力不及候、余云、一切王子其人不御者、爭默止哉、然者以舊齋院被卜定之條、雖可然事、無先例之上、其運已盡了人也、今及沙汰之條非無神慮之恐歟、但是就職事之密語令答之詞也、專非可被奏聞、尙有恐事歟、光雅申云、可存此旨密事、此事仰詞之次第、頗以不審也云云、余內心案之、院御子〈○善仁王〉以被加元服之宮御坐、其御子息女宮兩人被坐云々、何其人々不被卜定哉、或人云、非親王之人子息、無爲齋宮齋院之例、若父宮被下親王之宣旨者、其又不可然云々、此條尤神慮難測事也、乍置可然之人、被行無先例事之條、非恐意之所及、人々皆雖存此旨、一切無其人之由被仰下之上、不能申出歟、末代之政只存小人之心歟、可哀可哀、又孫王卜定有先例也、

〔山槐記〕治承二年六月廿七日庚寅、頭權大夫〈光能〉奉院宣來臨、予著烏帽直衣謁之、有齋院卜定事、今上第二皇女、〈母左兵衞督成範卿女、內女房、號小督殿、兩歲、前治部卿光隆卿本養、日來坐彼卿七條坊門亭、〉二才、今夜渡卜定所、〈中御門南京極西前中宮權大夫、重衡宅〇中略〉後聞秉燭人々參陣、左大臣、藤大納言實國、中御門中納言、〈宗家〉左兵衞督、〈成範、齋王外祖父、〉右宰相中將〈實守〉等也、頭權大夫出陣、仰左大臣以範子可爲內親王、左府召藏人右少辨光雅仰之、次頭權大夫出陣、仰可令勘申卜定賀茂齋王日時之由、左府仰光雅令勘申之、仰外記令進筥、納勘文付頭權大夫奏聞、返給下辨、召外記令撤筥、頭權大夫又仰云、以範子內親王可爲賀茂齋王、宜令卜申、左府召外記令進硯、左府書齋王名令外記封之、左府書封字、召辨令敷神祇官座、令外記召神祇官、仰外記令進筥、入卜串賜官人令卜申、卜了返上之、官人退出彼座、左府令持外記就御所奏之、頭權大夫奏之、卜串留御所、返給空筥、卽於弓場殿仰云、從卜串以範子內親王可爲賀茂齋王、上卿權大納言藤原朝臣、辨左少辨光雅、史口口勅別當雅隆朝臣、左府復陣、令外記召中臣官人、以範子內親王定賀茂齋王、予任例可奉行之由被仰之、召寄口口又仰之、外記撤硯、左府退出、次頭權大夫仰上卿藤大納言卜定之由、賀茂奉幣幷大祓日時可令勘申者、藤大納言移著端座行此事云々、右少將有房朝臣爲勅使參卜定所云々、後日中

位召官一臣、左近名例臣恒例也、或說、他社事尚召中臣云々、普通之說、伊勢事不使位署召中臣、他社事召第一臣也、而今記齋院卜定度々召中臣也、但其時參入神官座次不載、依尚不審、問中臣政之違、召中臣例、自然中臣當第一之故歟、忽難得云々、今度付署逆例、召第一座者也、守一說之輩、定致疑難歟、則兼康經座後并末也未、參軾、余給名簿、先例或召籍入之給、長元九年天仁元年等例也、然而治暦五年齋宮卜定、故大殿以手給之、依彼例不召籍也、仍之申攝政之處、以手給之由覺悟云々、兼康取之復座、次第取下卜申了、封上書卜乙下合之由、其封下書之云々入筥蓋、兼康持參、余取之置前、返筥蓋了、次召外記、仰神祇官可起座之由、則闘之神祇官起退了、仍外記不能仰、則掃部寮出來撤座、次余以官人召外記、可持參筥之由仰之、則外記持參筥、余入卜形於件筥給外記、外記取之立小庭、次余起座、相具件外記進中門、於小庭井立北西頭等如恒付光雅奏之、頃之光雅歸來返給筥、卜形留御所也余云、先例或自御所直返給者也、或又有給上卿之度、光雅無所申、余取之給外記了、外記取之退下了、余又云、齋院卜定之由歸陣之後可被仰歟、然者待其仰可仰中臣幷辨等也、此次被仰、又先例歟如何、光雅云、同事也、此次令申、又先例也、然者只可令仰御云々、余歸陣以官人召外記、外記參小庭、余仰可召定隆之由、中臣也外記唯退下、小時定隆參軾、余仰云、以顯子內親王卜定賀茂齋院了、任例可令行者、定隆退了、次召辨經房來、余仰大略同仰中臣之詞、但仰可成官符之由也、經房微唯退下了、次光雅來、仰云、權大納言藤原朝臣、左少辨藤原朝臣、右大史中原衆倫等、行齋院事、散位平朝臣時盛可爲勅別當者、余揖之、光雅退了、次余以官人召經房、仰此旨了、長久五年嘉保三年卜定、兼日注進、被仰之、仍欲召官符之處、不快、依不可然也、次余召光雅、密々問之、於今者不可仰事歟、光雅云、不可、以本幣大祓日時齋院上卿可被觸下云々、先例或卜定日勘之、或齋院上卿勘之、仍密々所問也、次余起座參西所方逢女房、則參院、一切無人、尋出藏人一人、申入兩院、退出、心神殊惱也、卜定處中御門京極云々、　九月十二日癸未、申刻藏人右衞門權佐光雅爲法皇白河院御使來、則余著直衣相逢、光雅傳云、齋院兩度卜定、已不叶神慮、尤有其恐事也、而當時其人不御坐、何樣可被行哉、令計申者、余申云、已是朝家大事也、以愚慮輙不能定申上、加樣兩者、子細不分明、於其人不御坐之條、何樣可令申哉、本沙汰之趣之後可計申事歟、光雅云、此事被仰下之間、人々定被申此旨歟、聊存子細可答申之由、再三雖申事由、只先可申此

擇申賀茂齋内親王神殿入御日時

十一月十九日辛未　時戌二點

嘉應元年十月廿五日　漏刻博士安倍朝臣經明（以下署名略）

〔玉海〕嘉應三年（○承安元年）六月廿八日辛未、此日賀茂齋王卜定也、自今朝不逢僧尼服者并月水女不入家中、巳刻外記師友來、申上達部散狀、問參陣刻限、申刻可參之由答了、申終著束帶（如例蒔繪劍）參、内（閑院）先是於陣腋召左少辨經房（奉行辨也）問事具否、申云、神祇官陰陽寮以下諸司具了云々、次余（○藤原兼實）著陣奥座、次移著端座、以扇直沓、（此間六角宰相宗通著横切座）令官人置軾、次藏人右衞門權佐光雅來就軾、仰云、賀茂齋院卜定日時、仰陰陽寮令擇申（奥）、余揖之、光雅退歸、次余以官人召左少辨、則經房參軾、余仰云、賀茂齋院卜定日時勘申々々、經房微唯退了、頃之持來日時勘文、余披見之後、經房退了、（件日時、今月廿八日、時戌二點云々、）次余召官人、傳仰外記筥可持參之由、則六位外記持筥參上、余入勘文於件筥、以官人召光雅付之、（光雅申云、攝政殿依御物忌、不可持參、）少時奏聞了、歸來返給筥、余結申如恒、光雅仰云、依勘申行之、余微唯、卷文入筥、光雅退畢後、召經房下之、（余欲作入筥欲給之程、經房依氣色、更覺悟取出下之、先年又如此被懸之也、）經房結申之、余仰同職事、經房唯卷文退了、次召外記返給筥了、次光雅來軾、仰云、頤子内親王（○皇帝紀抄一代要記作頌子内親王、鳥羽皇女、按百練抄時年二十七、）可爲賀茂齋院哉之由令卜申（奥）、余揖之、光雅退下、次余以官人召經房、則參軾、余仰可敷社司官人座之由、經房退下、仰掃部寮令敷之、先敷筵、筵上敷疊、陣北砌也、（社外也、）次置水火如恒、次余召外記、仰神司官人可寄座之由、外記唯退下、則神祇權大副卜部兼康以下神官四人、參上著座、（自西方參也、神官人著座之後、持來硯筥一合、置座末、納卜具也、）次余以官人召外記、外記參候小庭、余仰硯紙可持參之由、外記唯退下、則持硯筥置余前、（入紙二枚、）次余摺墨取紙、先卷返禮紙置硯筥、（硯下方也、）次卷返紙取筆書之、（頤子内親王五字、紙端四寸許、上二寸許置之、不書年月日、）了如本卷之、更加禮紙置前、以官人召外記、外記參入、余給名簿、仰可封之由、又外記作候軾、插笏自懷中取出封紙、（不知何）以小刀封之、了參上、（外記退下了、）余取之、其上書封字、（封目上也、）取副名簿於笏、召云、神司ノ權大副ノ朝臣、（兼康讀音召之、）四

倩子內親王

右左大臣宣、奉勅、件親王定賀茂齋王畢、官宜承知、依宣行之、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣在判　御修理左宮城判官正五位下行左大史兼備前權介小槻宿禰在判

喜應元年十月廿日

太政官符中務省

倩子內親王

右太政官、今日下神祇官符偁、左大臣宣、奉勅、件親王定賀茂齋內親王畢、官宜承知、依宣行之者、省宜承知、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣在判　御修理左宮城判官正五位下行左大史兼備前權介小槻宿禰在判

嘉應元年十月廿日　○以下式部、民部、兵部、大藏、宮內五省符皆同、故略、

太政官符中務省

倩子內親王

右內親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣在判　御修理左宮城判官正五位下行左大史兼備前權介小槻宿禰在判

嘉應元年十月廿日　○以下式部、民部、大藏、宮內四省符皆同、故略、

廿五日丁未、下官參內、先是權大納言實房參著仗座、被行賀茂奉幣事、先有使定、修理大夫成賴卿執筆、即爲使、藏人秀才藤原基光草宣命、少內記定親淸書之、內覽奏聞了進發云々、次齋院卜定有大祓事、修理大夫奉幣使、了歸路於建禮門東廊東行云々、

作奉幣大祓、去廿日卜定夜、被勘下日時了、右少辨奉行、○中略

陰陽寮

嘉應元年十月廿日　連署同前

今齋王、二條先帝皇女、母當時大博士師元朝臣女、彼院御宇宦仕齋王、御年十一歲、卜定幷次第行事、准寬治三年令子太后、平治元年(先齋院式子)例可奉行由、被仰下左大臣了、

十月卜定例

貞觀元年十月五日丁亥、儀子內親王卜定、文德天皇皇女、淸和天皇初、

康和元年十月廿日戊午、禎子內親王卜定、白川院皇女、堀川院御宇、

平治元年十月廿五日乙亥、式子內親王卜定、上皇皇女、二條院初、

寅日卜定例

天延三年六月廿五日丙寅、卜定選子內親王、齋王間歷五代、最吉例也、

天仁元年十一月八日丙寅、是殊吉例也、

此外延喜三年、承平元年、長元九年、在其例、併吉例云々、

卜定所右近少將泰通朝臣、五條坊門高倉家、兼日借召、土左守雅賓加修理致掃除、此外卜定日、神祇官賀茂下上社司、幷行事官饗祿、及自今月至于明後年四月、御相料米每月四十石、油二斗等、募重任功勸進之、御簾御疊几帳帷所々雜具等、左馬允藤原良成、募靭負尉超越功勸進之、又有諸司勤事等、已上條々委細在別注文、

入夜齋王自大炊御門亭、行啓卜定所、出御之間有御反閇事、在憲朝臣奉仕之、上西門院庇御車、(御車副御牛飼同)權大納言公保卿被候御車寄役、帥納言左衞門督實國、三位中將實家等扈從、前驅十餘輩、(侍女院殿上衣冠)人、出車五兩、右中將賴定、實宗、左少將基家、光能、泰通朝臣等獻之、文官衞府侍等每車二人副之、(各衣冠)女房廿人、出白衣袖妻等、(蘇芳表着濃打)

太政官符

仰云、借子内親王奉定賀茂齋院由、令下知諸司、上卿仰云、使可下知者、下官退入於床子仰大夫了、又出仰云、以師家可爲勅別當、權大納言藤原朝臣、右少辨重方、右大史大江廣盛等、令行初齋院事、便被仰下官、下官於床子仰大夫史了、次左府退出、次權大納言實房以下猶在奥座、次下官仰權大納言云、齋院卜定由、令勘申奉幣幷大祓日時、次大納言移端座、召右少辨重方被仰日時事、重方於床子召仰右大史廣盛獻上卿、次召外記召入勘文、令重方内覽奏聞、即返給、仰云、依勘申行之、次右少辨申神祇官申幣料請奏云々、次被勘行事所始日時、依上宣辨召勘文覽上卿、即返給下史云々、依上宣文無内覽奏聞歟、次右少辨率史以下向大炊寮始行事所云々、依請了左府以下被率參卜定所了上卿辨追參彼所、先是左近權少將雅長朝臣爲卜定勅使參向本宮了、瀧口藤原宗貞爲公役進定卜定所了、

陰陽寮

擇申可被奉遣立齋内親王由御幣使於賀茂社日時

今月廿五日丁未　時午二點

嘉應元年十月廿日　　漏剋博士安倍朝臣經明〇以下署名略

陰陽寮

擇申可被行立賀茂齋内親王奉幣大祓日時

今月廿五日丁未　時午二點

嘉應元年十月廿日　　連署同前

陰陽寮

擇申可被始賀茂初齋院行事所日時

今月廿日壬寅　時酉二點

〔兵範記〕嘉應元年十月廿日壬寅、可有齋院卜定事、午刻許參□、申刻左大臣〇藤原經宗參著仗座、直稱著端座、權大納言以下同著、攝政參內、令候朝餉方給、次下官〇藤原信範奉仰出仗座、仰左大臣云、以無品僐子女王〇僐子或作偕子、又禧子、可爲內親王、左府稱唯、下官欲起座之間、左府目給、卽復座、宣云、仰詞下官如卽退去、於床子座、仰左大史隆職宿禰、卽令成承知官符等、次下官又出仰云、齋院卜定日時令勘申、又左府被仰下官、下官於床子召右大史大江廣盛仰之、廣盛仰陰陽寮令勘申、

陰陽寮

擇申可被卜定賀茂齋內親王日時

今月廿日壬寅　時酉二點

嘉應元年十月廿日　漏刻博士安倍朝臣經明〇以下署名略

卽持來、下官披見、獻上卿、退入、上卿召外記筥入之、次召下官被內覽奏聞、卽返給、仰云、依勘申行之、下、官於床子下大夫史仰詞如先、又仰上卿、左府申了、次下官又出仰云、以僐子內親王令卜定賀茂齋院、、下官退入、次上卿召外記被問中臣卜部候否、次召下官被仰云、中臣卜部座令敷、下官退入、令史仰掃部官人鋪設、次上卿召外記被仰中臣卜部可著座由、次神祇大副大中臣師親朝臣、權大副卜部兼康、大祐同兼員等參著、主殿設火、主水設水、大膳獻坏、次上卿召外記被召硯紙、少外記盛季持參、硯二枚入硯筥置上卿座前、次上卿摺墨染筆、卷紙一枚被書名字、僐子二字也、次以紙一枚被卷懸紙、堅置硯筥傍、召外記下給之令封、外記盛季插著細紙小刀於懷中、於膝突封之返上、上卿返入、上卿執筆加封字、次召師親朝臣下給封書、師親復座、傳給兼康朝臣、次兼貞下申了、次中臣師親朝臣盛板筥獻上卿、師親朝臣持筥復座、次上卿召外記被仰中臣卜部可罷出由、兩氏退入、次召下官被仰座可撤由、次上卿召外記被卜文筥、次上卿起座進中門被奏之、下官奏之、先內覽、卜文留御所、次返給筥、仰云、卜申奉定、次上卿歸著仗座、召神祇大副大中臣師親朝臣被仰云、齋院卜定了、任例奉行、、師親朝臣退入、次下官出

（詞如何、先神祇官候哉、外記申云、候了、其後仰云、召々、此定ニ可被候歟、）外記歸入後、神祇官官人四人、（大夫祐宗政、史兼職、龜卜長上兼長、中臣真兼、六位無官者、）右府召外記、少外記候小庭、召寄□□□□□外記、入紙二枚於硯筥、□□□□□右府命云、暫可候者、右府取紙、以一枚卷之、入硯下方、殘一枚云々、卷返（天）置座前、摺墨染筆、取紙端頗置（天）、藉子之二字許書（天）卷（天）、取入硯筥紙、卷懸紙給外記、仰可封由、外記次第封（天）進之、右府取之封日上、書付封字、了返給硯筥於外記、外記取之退歸、（治部卿密談云、不可有懸紙也、予康和天仁加懸紙如何、治部卿古人猶不可有懸紙之由記也、）右府被示人々多八下給中臣官人也、今夜中臣官人、稱有故障不參仕、（略）○（中）右府召良兼給御卜文、仰云、可卜申、（六位者加姓可召歟）歸座傳卜者兼長卜之、入筥蓋進上、右府取之、良兼取筥歸本座、召外記遣仰云、神祇官可罷出者、可仰外記、稱唯之後、又仰云、中臣官人暫可候陣邊、又筥可持參、外記稱唯、官人等退歸、諸司撤座、外記持參筥、入御卜串給外記、外記持筥立小庭、右府出、經軒廊西二間、被進弓場殿、（依一所大臣被用西二間也）此間治部卿密談云、早召外記筥、入御名書可給神祇官由、見故人記也、今度不然如何、予答云、北山抄云、如軒廊御卜體也、御卜之後、召外記筥、可奏之由見之如何、治部卿答云、所云北山抄經頼記、召外記筥、入御卜下給令卜者、仍所申之者、此事不知是非、右府進御所、付頭中將被奏、留御所、仰云、藉子內親王可爲賀茂參院者、返給筥外記、返給右府歸本座、召外記候小庭、仰云、中臣官人召々、□□□良兼出宣仁門參著軾、仰云、藉子內親王□□□□□參院歸入次以官人召辨、右中辨宗成參、仰詞如初、（康和元年、天仁二年、天治二年、作在本座、被奏、依宿老大官也、）但可作官符之由詞加也、（略）○（中）頭中將來仰云、大祓奉幣日時可勘申、右府召右中辨令勘、右中辨別持參勘文、（大祓奉幣各一通懸紙也）右府見了、召外記筥入勘文、就頭中將內覽奏聞了、召外記下給了、次可定申使歟、大外記申云、件所被定申、只下給日時之、次作座參軾可依之由所被仰下也、就中寬治例不被定使也、右中辨隨奉幣請奏、右府見了返給、（件奉幣明後日也、）大祓奉幣日時行事上卿或有被勘申時歟、

廿七日甲申、今日齋院卜定由有奉幣賀茂社、上卿治部卿、（能俊）右中辨宗成、行事使宰相中將宗能、先新源中納言雅兼行軒廊御卜、是伊勢事云々、其後奉幣已及秉燭之由、史俊式所來談也、

不見餘儀、神祇官參入、御殿祭、御禊、指賢木、給饗祿歟、賀茂上下社司等、參入庭中拜、給饗祿歟、今夜女房侍等付簡云々、

勅別當日來右衞門督實行卿、御後見阿波守有賢朝臣也、仍今夜之事、此二人所執行也、從新院(○鳥羽)態被催雜役人々云々、○中略

後日神祇少副兼俊來云、卜定之所次第、先大殿祭、次齋王御禊、(先御湯殿)次指御所四角於賢木、(齋院始日戊亥角、齋宮始日辰巳角、)次御井祭、次御炊女、次御竈神祭也、今度先御禊、次指賢木、次大殿祭頗違例也、是依右衞門督實行命所行也、不申左右隨上卿命也、

十一日庚午、有政、(齋院官符請印云々)侍從中納言、左宰相中將、右少辨宗成、少納言忠宗參勤云々、有大祓、依齋院卜定也、(左宰相中將勤之)又有奉幣、加茂齋院卜定也、上卿治部卿、使宰相師時云々、行事左少辨實親、齋院今日初入御神殿云々、上卿治部卿、左少辨參向云々、

天承二年(○長承元年)十一月廿五日壬午、今日院第一姬宮(○鳥羽皇女禧子)有齋院卜定事、早旦大殿(○藤原忠實)關白殿、(藤原忠通)共衣冠令參院(○鳥羽)給、○中略渡御卜定所給、綾小路北、東洞院西、尾張守顯盛新宅也、院唐御車、(御車副冠褐)出車檳榔毛十二兩、(女房各二人、車副布衣各二人、)新大納言實行卿以下上達部十餘人、(束帶騎馬泥障)内院女院殿上人濟々前驅、上皇立御車於二條東洞院御見物、(大略御内車、民部卿忠教卿一人扈從也、是依輕服日數中、不可被參卜定所之故也、)女院(○鳥羽后藤原璋子)御車又立其傍、從二條東行、自東洞院南行、辨未時許渡給了、見物連車、道路無陰云々、關白殿申時許參給、予(○藤原宗忠)相具左宰相中將參內、著仗座、右大臣著端座、唯今召辨被下日時之後、返給筥於外記間也、先可有齋院卜定、可勘日時之由、頭中將公教依仰下、召右中辨宗成令勘日時、入外記筥、付頭中將內覽奏聞、了被下辨云々、○中略已入夜秉燭、頭中將仰下云、禧子內親王(○禧子或作祥子)可令下賀茂齋院者、其後右府奉行萬事、右府召左中辨被仰下云、神祇官座令敷(與、)辨歸出、仰史令敷座於軒廊、(西第二間以東、居水火如軒廊御卜、)次召外記、少外記師長候小庭、右府仰下云、神祇官可候座由仰、(面此

召外記寫入勘文、付頭中將被覽返給、仰云、依勘申、則召左少辨、被下勘文結申、又召外記返給寫、（先々或可）（勘日時之由雖不被仰下、上卿被勘申、或又不勘日時、只問吉時也、）頭中將來仰、齋院卜定所司令候與、先々殊无此仰詞如何、但又有所見歟、右府召大外記被問申皆參之由、頭中將仰云、无品惀子內親王可令卜定賀茂齋王、右府召左少辨、仰可敷座之由、左少辨仰史令敷座於軒廊、（西二間以東）次召外記、仰可召神祇官由、（先可候哉否可仕問歟）外記歸出告之、神祇官官人少副卜部兼俊、權少副基行、大夫祐兼良以下六人參入著座、次召外記、少外記親盛參、仰下硯紙可持參之由、則入紙於硯筥持參、大臣自書惀子（二字）書了卷之、加懸紙給外記、外記自懷中取出小刀封之返上、大臣封之上書封字、返給硯筥、外記取之歸入、大臣召云基行、（雖下﨟召中臣也、可加朝臣字歟、雖五位、軒廊御卜時、加朝臣二字也、）基行參膝突、（此間小雨、仍經宜陽殿壇上、）下給御名文、仰云可卜、復本座、以下﨟令灼龜甲、封之下、卜丙合（止）書付、入筥蓋持參、大臣取之、基行取筥蓋持歸、大臣神祇官仰可罷出之由、（猶召外記可被仰下歟）又召外記筥入之、付頭中將被覽、殿下留御所、頭中將仰云、惀子內親王可爲賀茂齋院由可宣下者、大臣召神祇權大副基行、（入自宜仁門）參膝突、仰作旨畢、又召左少辨同下知其旨了、頭中將（○藤原忠宗、）來仰云、治部卿源朝臣、左少辨實親、左少史中原重兼、令行初齋院事、又忠宗可爲初齋院勅別當、（頭中將自仰下我事也、）召左少辨、仰件人々事了、又頭中將來云、奉幣大祓日時可勘申、召左少辨被勘、（康和之度、初齋院上卿令勘也、然而左大臣申被退出之故歟、近代皆有大祓也、）則持參勘文二通、召外記筥入之、被覽之後返給、被下外記、（共來十一日○中略）右大臣內大臣以下諸卿皆渡參齋院御所、（富小路堀川亭）此間及秉燭、神祇官同參入、人々在西渡殿廊、（南庭泥濘、先是此間不見如何、則交破了、不得心事也、）准后勅使左中將成通參、阿波守有賢朝臣相逢申事由、西廊上敷肉疊、有賢召勅使中將、參著座、諸大夫居肴物、（土高器二本、諸大夫役之、）一獻民部卿、二獻左衛門督、三獻右衛門督、藤大納言經實卿取祿給之、（女裝束）於中門二拜、了撤座、次又齋院之由、勅使右少將公教朝臣參云々、有賢朝臣又申事由、又如初敷座召云云、少將參著座、居肴物、一獻侍從中納言、二獻左兵衛督、三獻皇后宮權大夫、民部卿取祿給之、（女裝束）於中門二拜、而祿唐衣取落中門廊、人々見付、仍送勅使許、頗奇怪歟、此後右府內府被退出之、次下官出、

目之上被書封字歟、今夜无此事、如何可尋、次召少副大中臣輔清、入筥給之、仰可卜申之由、輔清歸座、傳被敢令卜、輔清第二者也、猶可召第一之人歟、如何、伊勢事時、多以兼下知、所召中臣官人也、但社之時、只可召第一之人歟、先例又如此歟、可尋知、卜了、注付卜食由於其上、入本筥輔清進上卿、上卿召外記、仰神祇官可罷出由、官人等退出、又令撤座、又召外記、令持筥、上卿進弓場殿、付頭奏聞、卜串留御所、返給筥、殿下令候御所給也、一日齋宮卜串留御所、今夜返給之、是共長和寬治之例云々、可尋知歟、上卿復本座、外記取空筥、出從宜仁門、了頭仰云、以官子内親王可為賀茂齋院、治部卿源朝臣、綱○基權右中辨為隆、左少史資忠等、可令行齋院事、後聞、殿下仰云、上卿辨許、從御所被仰下也、於史者不仰下、是上卿相且可召仕之故也、奉幣大祓日時令勘申者、又以散位宗季朝臣可為勅別當者、上卿召外記、仰可召輔清之由、輔清入從宣仁敷政門、參膝突、以官子内親王可為賀茂齋院之由被仰下、又召權中辨為隆、齋院上卿辨史勅別當等事、奉幣大祓日時事、被仰下了、日時勘文奉上卿、以辨奏聞、入外記筥、被下辨、次召外記、令撤硯筥等了、○中略今夜勅使、此四位少將宗能也、猶可遣五位歟、齋院御所、土左守盛業朝臣二條京極宅也、今夜齋院被渡云々、上卿辨神祇官人參彼亭、始次第事等、指實木、

九日乙卯、依齋院卜定、有奉幣賀茂云々、上卿治部卿、使左大辨云々、　十七日、有政、治部卿左大辨著行云々、是齋院内親王官府請印者、

大治二年四月六日乙丑、今日依可有准后并齋院卜定、午時許參内、○中略頭中將忠宗仰云、无品恂子内親王可准三品之由、令作勅書、與新院女院第二姫宮、去年誕生給也、大臣以官人召大外記師遠被問云、大外記中務候哉、申候之由、召大内記宗光、則參入、仰作旨、則草入筥持參、以頭中將被覽攝政殿、殿下(藤原忠通)着直衣、御坐上坊、去刻時不奏、只覽殿下也、則返給、仰云、令清書、與、召大内記返給、仰云、清書、大内記則持參清書、黃紙、又覽攝政殿、返給、召中務少輔師能下給、作入筥給之、其後民部卿忠教卿、左衛門督通季卿、右衛門督實行卿、進弓場、午後雨止、依庭濕、經御後、列立、北上西面、付頭中將奏慶由、拜舞了歸著仗座、民部卿立此列、是何故哉、侍從中納言實隆卿、左兵衛督實能卿二人、不立此列、如何、是皆本院○白河仰云々、甚不得心事也、御傍親尤可立也、依人數多、相分南北被著、頭中將仰云、可有齋院卜定、可勘申日時、右府召左少辨實親、仰件旨、日時勘文則持參、

の大貳の三位ときこゆるは、との〻うへ、たかつかさどの〻御めのとごなり、その人の子にたんばのかみのりたうといふ人のいへの、三でうなるにいでさせ給へり、さかきなどさすほど、たゞのことにはかはりて、をかしくみゆれど、うちにもみやにもおぼしめしいりて、御つかひひまもなくたてまつれり、御ありさまもゆかしういみじくおもひきこえさせ給へれば、てんじやう人かんだちめ、われも〳〵とまづまゐりて、のちになんうちにはまゐりける、かんだちめもてんじやう人も、まゐりたる人に、ゐん(○禪子)にやまゐりたりつると、はせ給に、さもさぶらはずと申はすさまじく、ま　りたりと申人にはたれにかあひたりつる、なにごとかおはしましけるなどとはせ給に、たれもいかでかはまづまゐらんとおもはざらん、さゐもんのかう(○源師房)ときこゆるは、こなかつかさみや(○具平親王)の御子なり、さうぐう權大夫かけ給へる、齋院の別當になり給へる、長官には藏人べんつねなが、帥中なごんときこゆるみちかたの子たり、六條左大臣(○重信)どの〻御むこなり、

〔中右記〕嘉承三年(○天仁元年)十一月八日甲寅、今日齋院卜定也、依有催酉時參仗座、(○中略)頭爲房仰下云、官子女王准一日齋宮例、先可爲内親王哉否事、人々可量申、(件女王上島(白河)御女、故輔綱朝臣外孫也、年來世不知之人也、)民部卿(○源俊明)以下一同申云、齋宮卜定之時、一日已定申了、准彼例被爲内親王可宜歟、是只同事也者、以頭奏聞件旨、仰云、以官子女王可爲内親王者、民部卿召權辨被仰下其由了、次仰下云、齋院可卜定由、令勘申日時、則召權辨令勘、以頭奏聞之後、被下辨了、件勘文入外記筥被奏、次頭爲房仰下云、官子内親王、可爲賀茂齋院之由可卜定者、上卿召權辨仰可令敷座之由、掃部官人敷座於軒廊、(主水司居水火了)召外記仰可召神祇官之由、外記奉仰之後、神祇官入從日花門著軒廊座、(第二間以東)權大副卜部兼宗、少副大中臣輔清、權少副卜部兼政、大夫祐伊岐致元以下八人也、又召外記仰可進紙筆之由、則持參硯筥置上卿前、(紙加入)上卿自書内親王名、(卷禮紙)召外記令進筥、入其筥下給外記令封、(外記乍居、膝突封之)入筥進之、上卿封

大庭引亘、余以下退出、余令撤祓物退出、參齋院及曉退出、傳聞以申剋、中宮權大夫、於左仗座被卜定齋王之由、被立告申賀茂之使、其儀先奏宣命草清書等、於仗座授使右兵衛督、爲宣命使給之、出從敷政門、於左衛門陣外、請幣向社云々、　廿六日己巳、參殿、次參內、〇中略次余有召參中宮、仰云、被定齋院之由、一日公家被申賀茂了云々、自宮又欲令新申此由如何、申關白可然者、擇吉日可詣者、令申奏了之由退出、

〔榮花物語三十一殿上の花見〕齋院につひにひめみや〇後一條皇女馨子さだまらせ給ぬれど、みかど〇後一條きさき〇威子おぼしさわがせ給ことかぎりなし、このごろはこと〳〵なくふたところの御中におはします、十月〇長元四年に御はかまきせたてまつらせ給、にようばうきくもみぢをゝりつくしたり、その日になりては、うへの御つぼねにてふたところ御なみだもとゞめさせ給はず、ゆゝしくなんみえける、日ぐらしふたところの御ふところにおはしまさせ給、御めのとはまさみちの丹波中將のむすめの、ごん中なごんのきみ、あふみの中なごん〇藤原惟輔のむすめ、中なごんのないしのすけ、ひやうゑのかう〇藤原公成のきたのかたになりたる、みやのないしなり、としごろ候けるじゞうのきみとて、かたちなどいとよくて、ないしなるぞさぶらひける、御くるまにたてまつるほど、じじうのないしにいだかれさせ給て、これはのらんとておろさせ給はざりければ、いかゞはせんとて、みや〇馨子の御かうの御ぞをぞ給はせて、いろゆるさせ給てのせさせ給、ほど〳〵につけてはさいはひありけりといはれけり、中なごんのすけたばの中將のきみのさぶらふべきにてありつるを、かゝれば中なごんのすけぞ御はかしなどとりてのり給、こと御めのとたちは、ひとつくるまにてぞまゐり給ひぬる、みつにはおはしませど、御ぐしながく、れいのむつばかりのこどもにておはします、このほどなかせ給て、えおりさせ給はぬこそちごにはにさせ給へりける、みやのないしは、ひやうゑのかう、むかへ給ひつゝ、さらにまゐらせ給はず、かくてうちの御めのさ

所爲件座、以机備饌、二獻了、（諸大夫計三獻了）給祿、（副大擬各一領、結單重各一領、史各二疋、絁神部、史生、官掌等疋絹、雜人調布、）史以上列南庭（西上北面）再拜退出、

次賀茂社司等參入、範國申事由、令著座、（以政所爲件座、給饗、知家事等勸盃役送去、）三獻了給祿、（兩立祝帖、各一疋、神人等調布、）一列庭再拜了退出、（下社司不參入云々、）次範國朝臣家司等相共、於政所成始近江國御封返抄云々、又撤本御座并邊敷等、供新御座等、（但下數長筵、女房料疊壁代屛風木帳等、本家所儲也、）又木工寮新作三間大炊屋、御炊男（炊男本家注兩三人、各宮主人）卜定之云々、清雜具炊御飯、（政所新調儲雜具渡之）進物所淸御膳具、調供御膳、（政所始自御器御臺至于雜具調具渡之）又宮主淸料物祭御井御竈庭火等、（本家宛料物、各進請文、）自今夜參入人々幷侍者等、不可昇長押上、但可候簀子云々、又女房自里第參入云曰不昇御在所長押上云々、經一宿之後可昇云々、又於御所屋不口頭、况於餘事乎、今夜不立神殿御帳幷御所御帳等、又不立神寶木、不供神座幷幌等、風聞於神祇官廳始初齋院行事云々、行事辨史著之、上卿不著云々、

十九日壬戌、參內、於殿上侍、右兵衛督被示云、去十六日頭辨奉勅、可令卜定今上一〇後條女二親王於賀茂齋王之由、仰中宮權大夫、大夫仰外記召神祇官、神祇官又自日華門著軒廊座、（所司兼敷座、儲卜具云々、）上卿召外記、令進紙筆、外記奉之、上卿書馨子字、令外記封之、即加封字、召大副大中臣兼興給之、兼興卜定了奉、（內合云々、）上卿召外記、令持卜文、（入黑筥了、）軒廊（神祇座末）階下等進弓場奏之、返給歸座、召兼興給卜文、兼興等退出云々、次召辨仰可令勘奉奉幣幷大祓日時之由、辨取勘文奉之、（廿二日乙丑、奉幣時午若申、大祓同日時云々、）披見令辨奏之、下給辨云々、案先例、上卿有召參御所、歸陣書親王等名字令卜定、神祇官奉卜文、退座之後、上卿進御所奉之、（卜文留御所云々、）奉仰歸座、召仰神祇官辨等云々、而經座末參御所、辨下給卜文之由頗不得意、又不被仰辨之旨如何、答不給官符、諸司難知齋王被卜定由歟、又傳聞、中宮權大夫在仗座、被定廿三日奉幣使被奏云々、（使右兵衛督源朝任、次官大監源朝臣重季、）

廿二日乙丑、參內、藏人辨相共、著建禮門大祓所、其儀先門前立五丈幄一字、（南北行）敷上辨座、（西面北上）其東立同幄一字、（南北行）敷外記史史生官掌召使等座、（北上西面）南方又立同幄一字、（東西行）敷諸司座、（東上北面）余以下座定、神祇官居祓物、余召神祇官仰云、去十六日以馨子內親王、奉卜定賀茂齋王之由可祓申者、神祇官唯著庭中座祓詞了以

〔北山抄六〕承平元年十二月廿五日、左大臣〈○藤原忠平〉仰外記召紙硯、自書内親王名、令外記密封、召祭主奧生給之、〈○中略〉令卜賀茂齋王、一度合也、參上奏畢、〈○中略〉以婉子内親王定賀茂齋王之由、又仰辨令給承知官符、〈諒闇間卜定例、在嘉祥三年、而承平例如之、○此年七月十九日宇多天皇崩〉

〔左經記〕長元四年十一月七日庚辰、有召參殿、〈○藤原頼通〉仰云、二宮〈○後一條皇女馨子〉御出并可奉卜定齋院之日等事、内々爲問卜定所喚也、可遣召陰陽助孝秀者、仰隆佐朝臣召之、孝秀參入、即召御前、被問件日々、申云、來月七日出御巽方家、十三日若十六日可被卜定歟云々、仰自内裏當巽之人家誰家哉、余申云、丹波守章任朝臣三條宅宜歟、仰云、甚吉事也、又仰云、大略以此由可示宮大夫、即詣大夫許申此旨、被申云、件日々并宅吉程也云々、　十二月十六日己未、早旦參殿、御共參女院、次參内、頃之殿令參入給、次中宮權大夫被參入、頭辨奉勅進陣、仰中宮權大夫云、二品馨子内親王、准三宮賜年官年爵、并本封外可賜千戸封者、大夫召外記、仰可召内記之由、内記孝親參入、仰宣旨趣、令作詔書、孝親草案奉之、令持内記進御所奏之、〈奏者先内覽云々〉次奏清書、賜中務、次召辨仰此旨、次召仰外記、率外戚上達部并彼宮別當等、參弓場殿被申慶歸陣、左衛門督〈○源師房〉左兵衛督〈○藤原公成〉余〈○源經頼〉參三條、頃之勅使頭中將〈○藤原隆國〉參入、甲斐前司範國申事由、〈内府(藤原教通)宿衣被候〉南廊敷座〈高麗端一枚茵〉召之、中將著座、〈令申下有准三宮宣旨由上〉次羞肴物、〈高坏二本〉金吾、武衛、僕、次第勸盃、次金吾取祿、〈女裝束〉授中將、中將下庭拜退出、頃之關白殿令參給、次卜定了、上達部多參入、次勅使右少將行經參入、令申事之由、敷座如初、使著申齋王卜定由、次武衛授祿、〈女裝束〉拜出、次神祇大副以下參入、範國申事由、頃之中臣三人取御祓物、〈二人高坏二本、本別居小土器四口納物、以紙裹各四、一人大麻、〉等、自東庭進簾下授女房、女房取之供御前、〈余自地進立座具、等、件女房示案内〉女房取大麻撫御體返中臣、中臣取之授宮主、〈宮主兼候東庭籐突、見西〉宮主〈齋院宮主、以本宮解中結政任之、今日不可申任、仍用代官、〉御祓了、神部四人付木綿取賢木、立御在所屋四角、〈始自巽、次第立之〉次立中門北南柱下、次立御門左右柱下、次立御井、〈余仰云、如式条所司立御井賢木、而於里第立之如何、神祇官云、前例如此者、仍重不答〉次中臣卜部各一人、奉仕大殿祭、〈於御在所屋巽角始之、次乾、次坤祭之、次御湯殿、但不入簾中、只於簾外祭之〉次有仰副以下史以上著座、〈以侍

恐美恐美毛申給止申、

〔類聚國史〕五神祇天長八年十二月壬申、替賀茂齋內親王、其辭曰、天皇我御命爾坐、掛畏皇大神爾申給波久、皇大神乃阿禮乎止賣爾內親王齡毛老天〇嵯峨皇女有智子、時年二十五、身乃安毛美有爾依氏、令退出留代爾、時子女王乎〇仁明皇女卜食定氏進狀乎、參議左大辨正四位下藤原朝臣愛發乎差使氏申給止波久申、幷奉幣、

〔賀茂齋院記〕時子內親王仁明天皇第九皇女也、母曰滋野繩子、貞主女也、天長八年十二月卜定、時爲女王、遣參議正四位下藤原愛發于賀茂神社告事由、

〔三代實錄〕三十陽成元慶元年二月十七日己未、卜定伊勢賀茂齋內親王、〇中略賀茂齋敦子內親王〇淸和皇女並卜食、廿四日丙寅、遣使於賀茂神社奉幣、告以定齋內親王、

〔三代實錄〕三十九陽成元慶五年四月廿日丁酉、賀茂祭、內藏權頭從五位上衆行讃岐介良岑朝臣晨直、奉承祝詞向社宣旨、其祝詞尾曰、辭別申久、前年爾進禮留齋王波、重喪爾遭留太爾依天退出志天女岐、今須波〇闕〇波〇天〇天〇乃〇後占〇定〇天〇進天、其間波皇我朝庭乎、平介久安介久幸賜比護賜倍止申賜止波久申、

〔三代實錄〕四十一陽成元慶六年四月七日己卯、是日卜定伊勢齋內親王、〇中略其賀茂齋者、諸內親王不卜食、故今日無定、九日辛巳、卜定賀茂齋王、二世穆子女王卜食、一品行式部卿諱光孝天皇親王之女也、五月十五日丙辰、遣使奉幣伊勢大神宮及賀茂神社、告以定齋內親王幷齋王也、〇中略參議正四位下行右衞門督藤原朝臣諸葛爲賀茂神社使、

〔小右記〕長和五年二月十九日甲午、故殿〇藤原實賴延長九年〇承平元年十二月廿五日御記云、殿下著陣、諸卿同著、召神祇官令卜定齋宮齋院、先召外記、召紙硯、書內親王名、令外記密封、召神祇大副奧生朝臣賜之、令下、先令卜伊勢齋王、二度不合、至于三度合也、令卜賀茂齋王、一度合也、殿下令持外記、參上令奏已了、召奧生朝臣被仰付雅子內親王定伊勢齋王、以婉子內親王定賀茂齋王之由、卜定作法、詳見件御記、仍所注付也、〇又見日本紀略

齋王卜定

〔和事始五神事〕賀茂齋院

嵯峨天皇の御時、皇女有智子内親王を以て、賀茂齋院に立賜ひしより始る（齋院の跡は、京都大徳寺の北、今宮の東に、大源庵と云禪寺あり是也、俗には常盤の住し所と云共、實は齋院の跡なり、）

〔雍州府志二神社〕齋院　古在大宮杜西南云、或言在雲林院村、又云、常盤古御所地齋院之舊址也、未知孰是、

〔雍州府志三神社〕齋院宮　在太秦東南、此處古賀茂齋院、而所勸請上賀茂神也、有御手洗河、是修祓處也、

〔延喜式六齋院〕凡天皇即位定賀茂大神齋王、仍簡内親王未嫁者卜之、（若無内親王者、依世次簡諸女王卜之、）卜食訖、遣勅使於彼家告示事由、神祇祐已上一人率僚下、隨勅使共向、卜部解除、神部以木綿著賢木立寢殿四面及内外門、（木綿賢木所司備之、解除料等本家儲之、）事畢賜祿、中臣忌部以下各有差、其後遣參議已上一人於下上兩社、奉幣告定齋王狀、（内藏寮備幣、卜部一人隨使、就川頭向社解除、）

〔西宮記臨時五〕初齋院二度禊（初卜定、不改替時又告、）○卜定下恐脱告字

〔北山抄六〕卜定齋王事

定賀茂齋王者、先大祓事、遣參議告兩社、（内藏寮備幣、卜部一人相從、就川頭向社解除、）

〔神祇官年中行事臨時〕一齋院卜定

大殿祭、中臣忌部參勤之、宮主見參官人十人計、史生皆參、已上差文付本院廳、

〔朝野群載十二内記〕賀茂齋王卜定

天皇我詔旨止良萬掛畏支賀茂皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申給止申久、某内親王波、前太上天皇乃、皇大神乃阿禮乎止女御杖代爾令侍之女内親王奈利、而天祚改留爾依天、舊例乃隨爾替爾某内親王乎卜定天進留、故是以某等乎差使天、禮代乃大幣遠令捧持天奉出天、此由遠令申給天、皇大神平久聞食止世

所在

〔六百番歌合〕賀茂祭　右　信定朝臣
むかしよりいつきの宮にふきそめてけふはすゞしき賀茂のかは風
左方申云、いつきの宮とは、齋宮をこそ申せ、齋院をばいつきの院とこそ申ならはしたれ、いかが、判云、○中略左方齋院とこそ申せと難申たる、歌にはいかゞ院とは申べき、齋宮齋院ともに內親王と申さば不及難歟、隨而實方朝臣歌にも、いつきの宮のたびねにはとよみてはべるめり、又雲林院にて世繼翁が物語にも、選子內親王ほめ申たる所に、いつきの宮おほくものし給へどもとこそ申ためれ、

〔袋草紙〕一齋宮はいせ也、齋院は賀茂也、歌連歌にする時は、いづれをもいつきの宮といふ也、

〔源氏物語十賢木〕さいゐんは、御ぶくにておりゐ給にしかば、あさがほのひめ君は、かはりにゐ給にき、かものいつきには、そわうのゐたまふれい、おほくもあらざりけれど、さるべき女みこやおはせざりけん、

〔朝野群載十二內記〕賀茂齋王卜定
某內親王諱、前太上天皇乃、皇大神乃阿禮乎止女御杖代仁令侍之女內親王奈利、下略○

〔本朝續文粹十詩序〕後一條院御時、中宮○藤原彰子一條后行啓齋院之間、當庚申夜有歌宴、月照殘菊應令、并序、
贈藤三品○忠峨
皇城之北、鴨水之西、泉石占勝、視聽擅俗、蓋是今上○後一條第二之皇女、齋內親王○馨子之神院矣、

〔山槐記〕永曆二年○應保元年四月十六日戊午、今日初齋院院(後白河)第三女(式子)母從三品季子高倉局是也禊東河、入御紫野院所謂一條以北本院也日也、

〔袖中抄十六〕ありす河
顯昭云、ありす川は、齋院のおはします、本院のかたはらに侍る小河也、

ヲ之ヲ奏ス、翊日齋王車ニ駕シ、列ヲ正シテ禊所ニ至リ、河流ニ臨ミテ禊事ヲ修ス、其後初齋院ニ入ルニ及ビ、又院內ヲ祓除シ、大殿祭及ビ御井祭等ノ事アリ、而シテ初齋院ノ地ハ歷世一ナラズ、後一條天皇ノ時ニハ右近衞府ヲ以テシ、其後左近衞府、大膳職等ヲ用キラレシ事アリ、既ニシテ初齋院ニ於テ潔齋スル事三年、其間月朔每ニ、齋王必ズ齋殿ニ參入シテ、賀茂大神ヲ遙拜シ給フ、

三年潔齋畢リテ後、四月上旬、吉日ヲ選ビテ、野宮ノ齋院ニ入ル、當日齋王、輿ニ乘リ禊所ニ向フ、勅使大中納言以下供奉スル者多ク、儀衞極メテ盛ナリ、禊事畢リテ後、始テ齋院ニ參入シ、亦大殿祭等ノ事アリ、禊事ハ仁明天皇ノ承和二年ニ、鴨河ニ於テ之ヲ行ヒシ以後、常ニ此河頭ニ於テスルヲ例トス、

是月賀茂祭アリ、齋王下上ノ兩社ニ參向シテ、始テ祭事ニ供奉ス、凡ソ此祭ニハ御禊アリ、警固アリ、路頭式アリ、還立ノ儀アリ、事ハ賀茂祭篇ニ詳ナリ、而シテ臨時祭ニハ、齋王ハ預リ給ハズ、此餘相嘗祭ノ如キハ、皆齋王ノ親ラ祭リ給フ所ナリ、

齋王ノ就職ノ年齡、或ハ二三歲ナルアリ、或ハ二十七八歲ナルアリ、其幼稚ナルモノトイヘドモ、尙ホ成人ノ衣服ヲ著シテ奉侍ス、若シ新嘗スルコトアレバ、乳母之ニ代ル、又齋王解職ニハ、先ヅ使ヲ遣シテ兩社ニ奉告セシムルコト、猶ホ卜定ノ儀ノ如シ、其後齋王本院ヲ出デ、近江國辛崎ニ到リテ禊事ヲ修シ、畢リテ後京ニ歸ル、後三條天皇ノ皇女篤子內親王ハ、退出ノ後十七年ヲ經テ、始テ禊事ヲ行ヒシガ如キ、是亦異例ト云フベキナリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 伊人事〕齋院（イツキ）

〔八雲御抄 三下異名〕齋院　いつきのみや 同齋宮　ありす河 御所也、本院名也、かものいつきともいへり、

〔藻鹽草 十五人倫〕齋院　いつきの宮　ありすがは 御所也、本院名也、　かものいつき

古事類苑

神祇部六十四

賀茂神社四

齋院

齋院司附

齋院ハイツキノミヤト云ヒ、又字音ニテ、サイキントモ云フ、皇女ノ賀茂大神ニ奉事スルモノヲ云フ、其院ハ山城國愛宕郡紫野ニ在ルヲ以テ、一ニ紫野院ト稱シ、有栖川ノ側ニ在ルヲ以テ有栖川トモ云フ、初メ嵯峨天皇ノ朝、平城上皇復祚ヲ圖リ給フニ由リ、天皇密ニ賀茂大神ニ御祈願アリテ、皇女ヲ以テ承事セシメント誓ヒ給ヒ、事平ギテ後、弘仁元年四月、皇女有智子内親王ヲシテ、恒ニ潔齋奉祀セシム、齋院置シ此ニ始マル、本朝月令、年中行事秘抄等ニ、桓武天皇延暦十二年、始テ齋王ヲ置キシトスルハ亦一説ナリ、爾後歴朝相承ケ、登極ノ初ニハ、必ズ皇女或ハ皇孫女ヲ遣シテ奉祀セシメタリシガ、後鳥羽天皇ノ皇女禮子内親王以後ハ、終ニ廢絶セリ、

天皇卽位ノ年、先ヅ内親王ノ未ダ嫁セザルモノヲ簡ビ、卜定シテ賀茂齋王ト爲ス、若シ内親王ナキ時ハ、更ニ女王ヲ簡ビテ之ヲトス、卜定既ニ畢レバ、卽チ使ヲ遣シテ命ヲ齋王ニ傳ヘシメ、又其由ヲ賀茂社ニ奉告ス、爾後退職ニ至ルマデ、齋王ノ居所ニハ、賢木ヲ樹テ、注連ヲ引キ、不淨及ビ佛事ヲ禁ズ、凡ソ齋王卜定ハ最モ不祥ヲ忌ムコトナルニ、文德天皇嘉祥三年、及ビ朱雀天皇ノ承平元年ニハ、之ヲ諒闇中ニ行ヒシガ如キ異例ト云フベシ、

次ニ宮城内ノ便所ヲトシテ、齋王ノ居所ト爲ス、之ヲ初齋院ト稱ス、所司預メ禊地ヲ點定シ

〔續古事談五諸道〕京極ノ大殿〇藤原師實ノ賀茂詣ニハ、院〇白河ノ御隨身近友敦季ヨリ始テ舞人シタルナカニ、下毛野敦時モ、フシニテ、ヒトリ舞人ニイレリケリ、東三條ノ南面ワタリニ、右府生敦重、ホチナシトイフアガリ馬ニ乘テ、フタヽビオチニケリ、下ノ社ニテ御馬ハスル時、敦重、御厩別當盛中ニツゲテ云ク、ホチナシノ御馬ツカウマツルニアタハズ、敦時ガ馬ニノリカヘムト申ケレバ、ユルサレヲ蒙テノリカヘテケリ、御馬アクル時、敦時ホチナシニ乘テアグル事キハマリナシ、ミル人ナホタヘガタシ、シカルヲ敦時ソバニテ左右ニオルコトスナ〇スナ一本作平地ニキタルガゴトシ、ミル人オドロキ感ゼズト云事ナシ、次日大將殿ヨリ祿給ケリ、

法性寺殿〇藤原忠通ノ賀茂詣ニ、舞人兼弘ハ、トリカケト云コエ馬ニアタリテツカフマツルニ、アタハズト申ケレバ、敦延ガ馬ニノリカフベキヨシ仰ラレケリ、敦延ナマジヒニノリテ、南庭ワタルニ、寢殿ノ西ノホドニテ、ハシリイデヽ、梅木ノシタヨリ、東ノ中門ノ廊ニムキテハシリケレバ、人々タチサワギケルニ、殿御笏ヲナラシ給ケレバ、廊ノキハニテトマリテ、ヤリ水ヨリ南サマニ行ニケリ、後ノ年、番長忠利此馬ニ乘テ、コヽカシコニテヒカレテ、ヒザヲツキテ、下ノ社ニテトマリニケリ、御馬ハスル時、琴持武通コレニ乘テ、散々ニアゲテハシラセタリケリ、忠利ガタメ面目ナキ事也、

上御社　案主　出納

饗　案主　出納

祿　案主　知家事　出納

筭　知家事　出納

件行事定後、差定畢各廻文進奉之後申上畢、但殿内修理掃除事、別沙汰、將又殿上御裝束行事沙汰歟、掃炭弘筵召諸國、小筵下知平田長川兩御庄事、年預若案主申行事歟、例文在政所也、

〔大鏡六 内大臣道隆〕御賀茂詣日は、社頭にて、三度の御かはらけ定まりてまゐらするわざなるを、その御時には、禰宜神主も心えて、大かはらけをぞまゐらせしに、三度はさらなる事にて、七八度などめして、上社にまゐり給ふ道にては、やがてのけざまにしりのかたを御まくらにて、不覺におほとのごもりぬ、一の大納言にては、この御堂〇藤原道長ぞおはしましゝかば、御らんずるに、夜に入ぬれば、御前の松のひかりにとほりて御すきかげのおはしまさぬは、あやしとおぼしめしけるに、まゐりつかせ給ひて、御車かきおろしたれど、えしらせ給はず、いかにと思へど、御前どもゝえおどろかしまをさで、只さぶらふなめるに、入道殿おりさせ給へるに、さてあるべきことならねば、轅のとながら、たかやかにやゝと御扇をならしなどせさせ給へど、おどろき給はねば、ゐよりて、表の御袴のすそをあらゝかにひかせ給ふをりぞおどろかせ給ひて、さて御用意はならはせ給へれば、御櫛かうがいかくし給へりけるとりいで、ゝつくろひなどして、おりさせ給ひけるに、跡さりげなくきよげにおはしましければ、さばかり酔なん人の、其夜はおきあがるべきかは、それぞこの殿の御上戸は、よくおはしましける、

〔古事談二 臣節〕中關白〇藤原道隆以酒宴爲事、賀茂詣之時、酔而寢車中、冠拔在傍、臨欲下車之期、入道〇藤原道長被驚申、驚而以扇妻搔鬢、猶如水鬢、〇下略

陪從　三ヶ國所課

下襲十四領（青朽葉、加二半臂一）　末濃袴十四腰（加二重袴一）

祿

大褂四重（辨少納言四位社司料）　白褂二十八領（外記史五位社司等料、外記史生六位之時、給二單衣重一歟、）　單重廿六領（舞人陪從料）　布百廿段（上下神人料、下六十人、上廿人、）　絹百匹（神殿主膳(一本無二主膳二字一)守膳部官掌召使御季持御隨身腰差料）　已上褂布絹等、置用殘召之定員召之時、有不定故也、

件裝束祿等、且依先例、且分注大少國々、任御定被充召之歟、但裝束國一兩命、夜必給御教書召請文、殘國之沙汰之後、放御教書成召下文下知之、臨期行事下家司給祿法請之、先日召社見參、

社頭饗（上御社）

上達部殿上人　內藏　舞人陪從　大膳　前駈六十前　穀倉　官掌召使御隨身　官厨家

有御神樂之時、下上有衝重、

口手

御前松四千把（所出御庄之召之、在長案、）　人夫百七十餘人（山城御庄散所野口御牧下知之、在長案、）　折松三百餘荷（攝津東西散所富家殿大夙仕）

已上例文在政所、任件旨成上御下文、下知之、掌燈行事褐冠請御倉町（行事出納請之）舞鵜飼等相具、付松可參役之由兼下知之、眞木嶋桂贄人等也、

行事

神寶　白妙御幣九捧　知家事　案主　出納二人

御裝束

殿上　案主　出納

社頭下御社　案主　出納

下
長櫃二合
横板四枚（長一丈二尺、弘一尺五寸、）　尻板二枚（長八尺五寸、弘二尺二寸、）　蓋板二枚（長八尺五寸、弘二尺五寸、）　鎰木榑二寸（各一丈一尺、弘五寸、厚二寸、）　小豆木八支（長二丈、厚二寸、（寸一本作分）弘三寸、）　大豆木二支（長五尺、弘五寸、厚○下恐有闕字）　竿木六支（大二支、長八尺五寸、弘五寸、厚三寸、小四支、長二尺五寸、弘三寸、）　枌二支（長一丈二尺、口徑二寸、）
外居二荷
杠枚四枚（長八尺五寸、弘一尺五寸、）　尻蓋板四枚（方四尺、）　鎰木榑二寸（長八尺五寸、弘五寸、厚二寸、）　足榑六寸（長六尺、弘四寸、厚三寸、）
枌二支　已上檜物御庄採進之、兼日下知下文了、於京作調之、
藁沓　依行事仰、下知檢非違使畢、
仕丁
退紅十領　律料六丈、白布五段、　袒袴十腰　烏帽子八頭　行事家司勤之
冠二　御倉町請之
布帶二筋　菉歷巾二匹
今月召作物所、著始神寶畢、次日神寶御幣料色々雜物注文、行事下家司召副道々、支度申上、奉行人隨仰請下納殿材木副長案、成上卿下文、下知檜物御庄畢、自餘雜事任例下知之申行之、但金銀无納殿之由、奉行人勸進之、抑近年月內有御定同之、神寶營造无程間、疎荒无雙、雖蒙勸賞、日數依不幾、陳不美之由、
裝束
舞人　三ヶ國所課
靑摺十領（加赤紐、）　下襲十領（二藍、加半臂、）　靑摺袴十腰（加下袴、）　有御神樂之時、加召人長料之、

玉一　錦蓋三流（在金物三品）　御幣串六本（在平文金物）　御鉾三本（在錦比禮鈴）　作物注文任追支度下行

金六兩　銀六兩　白鑞十二斤八兩　金薄五拾枚　銀薄七百枚　白織物一丈二尺（錦）　青地唐錦一丈五尺　赤地錦一丈五尺　紫小文綾一丈五尺（錦蓋）　青地小紋綾一丈二尺（御鏡緒料）　赤革三枚（劍三腰緒料）　鷲羽卅四枚（箭十隻料）　村濃糸三隻（桂卷料）　生糸二兩二分（玉貫箭後料）　鮫皮三枚　麻一斤（桂）

朱沙十兩（御弓塗料）　上品紙六帖（油單料）　荏油二升（雨皮料）　細美布二段（長櫃御阿禮櫃敷布）　四丈絹一切（白青赤黃各一丈）　造花二十四支（夏十二支、冬十二支歟）　神寶用途料、納殿沙汰式、見下薄銀直准下之、又鮫皮荏油、奉行人被沙汰之、革召諸國之、

漆五升　御倉町　大島御庄下　御倉町沙汰、被成渡下文、

鐵百五十廷　御劒鉾料　出雲國召之、奉行下家司申成召下文、下知之、御藏鐵納時被下之、

銅十五斤　御鏡三面料　召採銅所、

篦廿筋　金漆一升　已上藏人所被申請之、行事遣消息於納殿藏人許、

米卅二石（如檜物細工食料二石充）　件米年預沙汰、但无物之時、奉行人致沙汰歟、

追支度

金物方五百七十五匹（如元永元年六十一、又充、）　百五十匹（錦蓋三流料）　九拾匹（御鉾三柄料）　卅六匹（箭十二隻料）　十五匹（御弓三張料）　二匹（線柱一基料）　十二匹（御幣串六本料）　七拾二匹（錦蓋上玉箇三十六枚、如元永九年、）　六匹（同幡額十二料）　六匹（鈴三口料）直　九匹（錦蓋鏡面料）　百卅三匹（色々吹玉五千六百七十六口料、錦蓋三流幡額、如元永二年四月定、）

玉蓋百九十三匹

十二匹（箭筈十二料）　卅六匹（錦蓋四角鐸卷吹玉直）　卅六匹（同用玉卅六石料）　廿四匹（同四角居玉十二丸料）　十五匹（鉾比禮柄輪瑠）

（鐫蓋三口料）　二匹（線柱居玉十九直）　十八匹（幡額居玉廿六口）　四十八匹（鐸卷項（項一本作須）加利玉廿四丸作）　卅匹（朱砂直）　八十五匹（金銀薄直）　卅六匹（九文（九一本作丸）六丈直）　十二匹（銅（銅一本作鋼）薄糸金等直）　七匹（金銀薄百枚直各五十枚）　前件雜物等以之准

雜載

右方(追從)、　檢非違使右衞門尉源資經　雜色百五十人　菅笠深沓(右相雙、笠沓左、)雜色持之　陪從十二人(獻一)
笛一(行上萬爲先○中略)　琴持二人(一行上萬爲先)　左番長秦久重、同秦行方、　大納言宗輔卿、前駈六人、(二行下萬爲先○中略)　雜
色八十人、　中納言公能卿、(右衞門督)　無前駈、車後隨身四人、(壺袴、白襖袴、相雙、)雜色百人、　權中納言兼長卿、(右大
將)　居飼十三人、(相雙)　右九人、左四人、舍人十三人、(相雙)　右九人、左四人(纈上下款冬花白口口上括襴)隨身十三人、(○中
略)　前駈六人、雜色六十人、　權中納言師長卿、(左中將)　前駈六人、(二行下萬爲先○中略)　雜色八十人、　權中納言忠
雅卿、(左兵衞督別當)　無前駈、(○中略)　雜色百五十人、　參議資信卿、(左大將)　雜色九十人、　右京大夫長輔卿、(三位)　雜
色百人、　參議朝隆朝臣、(右大將)　雜色百二十人、
自二條西行、至西洞院北行、至一條東行、至京極北行至下社、祝殿立、楊(東西五許丈、東西立之、鳥居南立之、雲繝、)此間
御前分居、知去年、(○下略)

〔年中行事抄 四月〕中申日執柄賀茂詣事
宇治贈大相國(○藤原賴長)長者之時、以穢中遂參社、人不知由緒、

〔續古事談 五諸道〕宇治左大臣(○藤原賴長)ノ賀茂詣ニ、六ノアシゲトイフクセモノヲ、ウツシ馬ニヒカレ
タリケルニ、近衞貞弘トイフモノ乘テ、一度モタマラズナガシテ、カチニテワタリニケリ、一條京
極ニテ、ワタリシ馬ニ乘テ、下ノ社ヘマキリタリケリ、後日ニ召テ纏頭タビケル、人アヤシミケレ
バ、ヨク乘タリトニハアラズ、心タカクノラムト思ヨリ纏頭ナリトナム給ヒケル、

〔執政所抄 下四月〕御賀茂詣事(中申日)
御賀茂詣定事、恒例大事也、被始神寶、上達部殿上人家司職事、被參仕之、

神寶事
金銀幣六枚、(各三枚)　納平文置口宮三合、(在折立、)　錦一尺御鏡三面、(付緒入錦)　納平文置口宮三合、(同折立、)　野
劒三腰、(在赤平文緒)　赤漆御弓三張　箭十二隻(比木目六、雁俣六、在鏑、)　麻筒一口、(在平文臺一口)　線柱一本(在平文瑠璃居)

〔永昌記〕嘉承二年四月十六日壬申、今日御賀茂詣也、(○藤原師通)關白以後兩度延引、今始參御也、

〔玉海〕元暦二年(○文治元年)四月十九日壬申、雨下、此日攝政(○藤原基通)欲參賀茂、而依甚雨延引、來廿二日可參詣者也、今日覽神寶、賜舞人陪從裝束了云々、

停止

〔中右記〕大治二年四月十三日、關白家無賀茂詣給、已及八年、爲神事頗不便歟、

〔玉海〕文治二年四月十三日庚申、此日遣陰陽師在宣并職事一人於川原、無賀茂詣由有由祓事、年來不奉幣、仍今日又不改也、又降庭著衣冠遙拜、爲謝恐之由也、

內覽賀茂詣

〔台記別記〕久壽二年四月三日己卯、辰刻出宇治、午刻向東三條、依賀茂詣定也、　十八日甲午、巳刻許見禪閤(○藤原忠實)所借給馬卅餘匹、余(○左大臣藤原賴長)內廐馬十餘匹、(與隨身等)箇中廐馬字六葦毛要逸、諸隨身不能騎之、左近衛府秦貞弘(余隨身)左番長下毛野敦佐、(府生者)請試騎之、(并隨身者、今日不參入、而敦佐先日舍人中此由、仍殊應召、)仍令騎之、俱騰勝他(除敦頼、敦頼先年騎件馬預賞禄、)不能奢御、先於南庭騎之、次牽出東門外、余出門見之、兩人皆落、擇定神馬二匹、舞人馬十匹、乘尻馬二匹、殘馬十四匹、大將移馬十三匹、箇中神馬舞人馬乘尻馬、自今日立家中令潔齋、自餘遣外廐、此外神馬一匹、同立家中以備病死、　廿日丙申、依日闌幣已下令渡口庭、(神寶行事經憲、在透廊邊、趁行列、先是給行列圖、)于時巳四刻許也、(○中略)

前播二人(相雙)　幣持二人(相雙)　神寶長櫃二合(相雙)　祓物外居和琴(相雙)　神馬二匹(一行)

出納二人(相雙)佐伯有行、藤井則次、　下家司二人(相雙騎馬)知家事中原盛信、案主左辨官史生中原國成、

(○中略)　舞人十人(一行騎馬、下﨟爲先、平文移無鏤鞦、)左近將曹秦兼弘、右近將曹中臣重近、左近府生秦兼文、右近府生下毛野敦則(已上新院御隨身○中略)　乘尻二人(一行騎馬、下﨟爲先、黑移、無鏤鞦、)右兵衞尉藤清業、同大中臣盛弘、　移馬居飼十四人(相雙)　移馬舍人十四人(相雙○中略)　隨身十四人(相雙騎馬、下﨟爲先、○中略)　前駈(先六位、次諸大夫、次地下君達、次殿上人、已上束帶、□□□□、四位五位各二行、下﨟爲先、○中略)　御前、少外記惟宗經弘(在右)　左大史師經(在左)　少納言成隆朝臣(在右)　左中辨雅敎朝臣(在左)　主人車(檳榔毛、蘇芳下簾、)余天斑牛緋末鞦、(連著)車副四人(白襴面襖上下、白襴一領、)牛童(濃蘇芳襖上下、萌木綾生單衣、持楊)

延引

〔小右記〕治安四年○萬壽元年四月十五日壬申、今日關白○藤原賴通參賀茂之御前、是外記所催依未役所悉歟、厩馬惡駑、仍右馬寮御馬令騎、口付馬部、先令給手作布二段、必不可給事也、歸來後可給、然而加詞先令給隨宜耳、厩馬二匹借人々、左四位少將良賴、右四位少將資房、衞黑少納言資高來云、終日雨脚不止、祗候上下裝束成損、以左右近官人為舞人陪從、追從上達部、大納言能信、中納言兼隆、實成、公信、道方、長家、朝經、參議經通、資平、通任、兼經、廣業、少納言相從、令給匹絹、四位少將與馬口付居飼祿、舍人三匹、居飼匹絹云云、

〔左經記〕萬壽四年四月廿一日丁卯、天陰降雨、關白殿○藤原賴通令詣賀茂給、舞人陪從隨府官人以下、去十四日依甚雨令留給也、余○源經賴供奉御前、但御祓了、令詣社頭給之間、依甚雨无御前、又於上社歌舞了、上官歌舞人賜祿有差、及秉燭歸洛、自今曉及歸御、雨脚滂沱、供奉上下皆如泥、御共上達部、大納言三人、中納言二人、宰相七人、三位中將、殿上人諸大夫六位、不可勝計之、

〔扶桑略記〕二十九後冷泉康平四年九月廿一日、關白○藤原賴通參詣賀茂社、殿上人侍臣勤仕舞人、中納言以下公卿前駈、不異行幸、希代之事歟、○又見三代要略十

〔十三代要略〕崇德二長承元年四月十九日、關白○藤原忠通賀茂詣也、十餘年久無此事、

〔中右記〕天承二年○長承元年四月十九日庚辰、有御賀茂詣、去保安二年以後、十二年間久絕也、就中當時殿○藤原忠通執柄之後、未有此事、今年始被行也、早旦殿下給御消息云云、最先賀茂詣必有神樂、永保長治有神樂、其座无饗、定文之面有饗由如何、日記饗不見也、又夏神樂无庭火歟如何、予進返事、去永保長治饗饌不見者不可候也、子息大臣殊不參也、仍予不參仕也、但去永保三年賀茂詣時、京極北政所依參給、入道左府、六條右府被參也、皆有御前、辨少納言外記史等立、此外絕不見也、

〔日本紀略〕後一條十三寬仁三年八月廿日甲辰、攝政內大臣○藤原賴通被參賀茂社、去四月依障不被參之故也、

也、不然者自稱有障歟、殿下不令承諾給、命旨已出、人々遍聞、天氣不快、不遂件事、取嗤於路人給也、爲仲云、二條殿御時、上達部不被皆參、時人謂乖先例、宇治殿聞食此由被仰云、賀茂詣日、上達部必皆不參來、故御堂(○藤原道長)御時、有不參人々、時光中納言ナド參御堂立所、出御之後立車見物、被仰云、彼平尹丸爲舞人裝束如何美也ヤト被戯仰(加之讀)、時光ハ美麗候ナドコソハ被戯仰ケレ、非子姪之人必不慮從先例也、我攝錄初度、故殿ノ差遣別使被仰云、關白物詣之日、無別障必可被來訪之由、被催仰之故、人々不辭退、何況一族之人乎、自爾以降爲流例也、非親昵人者、雖來不共何難之有哉云々、又子息大臣被參仕事、大入道殿御時內大臣(道隆)入道殿御時內大臣(宇治殿)宇治殿御攝關之間、久絕無件事、至康平四年又有件儀、內大臣(師實)又左右內府并北政所被參事、始自故大殿(○藤原師實)御時也、

〔日本紀略(六國史)〕天祿二年九月廿六日戊午、攝政右大臣(○藤原伊尹)參宿賀茂社、

〔師光年中行事(四月)〕中申日攝關家賀茂詣事(御度、撰日次)

天祿二年九月廿六日戊午、攝政右大臣(謙德公)賀茂詣也、是攝關賀茂詣始歟、

天延元年四月十三日丙申、關白內大臣(忠義公)賀茂詣也、

〔法成寺攝政記〕寬弘四年四月十八日甲申、參賀茂、有東遊神寶等、同道上達部、右衞門督、權中納言、尹中納言、源中納言、新中納言、勘解由長官、左大辨、修理大夫、左兵衞督、大藏卿、宰相中將、春宮權大夫、三位中將、源三位等也、東宮傅(○藤原道綱)被來、被示可同道由、依上臈座留了、還祿等賜上社、(○又見日本紀略)

〔左經記〕寬仁二年四月廿日、參大殿(○藤原道長)攝政殿(○藤原賴通)并可然上達部多被參候、頃之召覽所々厩幷所飼御馬等、被撰定祭日使之料、并御物詣舞人等料御馬、　廿一日甲申、大殿攝政殿相共令詣賀茂給、其次第先大殿、(神寶神馬二匹十列、各內舍人番長近衞之人諸、大夫殿上人、御車後使官人二人、)次攝政、(神寶神馬)舞人、(左右近將監以下府生以上)諸大夫史外記、(辨少納言、御車後使官人二人、)次上達部十人、(大納言一人、中納言六人、宰相四人、納言各有前駈、上達部各乘車、)於下御社祓所有御祓、次令參御社、有東遊并唐高麗舞音樂等云々、余(○源經賴)有憚不參社頭、及晚歸宅、(○又見小右記、日本紀略、)

攝政關白賀茂詣共、公卿幷子息大臣、御前辨少納言、御後檢非違使等令供奉、始於何世乎、此事不載指舊記、如何、江左大丞〔○齊光〕云、天慶以往、凡無父子共大臣之例、〔見九條殿記〕而貞信公〔○藤原忠平〕御時、小野宮殿〔○藤原實頼〕九條殿〔○藤原師輔〕兩相府被候御共、但彼時必四月御祭之間不被參詣也云々、源右相府〔○師房〕被仰云、大入道殿〔○藤原兼家〕御攝籙之間、子姪大臣大納言以下、一族之人多以在朝也、仍始自彼時歟、又御後號御武者五六人許、而近代以檢非違使被具歟、小野宮殿者、大臣之時、祭日早旦被參詣、還向之次、於一條大宮若堀川之邊立車見物、前駈纔十餘人歟、強不被好過差、以件前駈人々差遣祭渡、內侍前駈料也、其以前引率公卿被參事不聞歟、但子姪人々、各爲我志被參詣之時、同ハ御共ニトテ被參也云々、非定例、只各用意也云々、行成卿ナド、幼少之時、祭日被參於社頭、前駈廿餘人、僕從等著美服云云、大略各々被參詣歟、治部卿〔伊房〕云、宇治殿〔○藤原頼通〕少將ニテ御坐之時、堀川大臣〔顯光〕賀茂詣令前駈給云云、宇治殿攝籙之時、堀川大臣爲上卿有障定、內覽文遲來經數剋、語傍人云、爲我前駈之人也云々、又宇治殿仰云、一ノ人有障不參之時、二ノ人必被參詣ケリ、近代無務事也、又是當時前駈難參來上、可知二舞之故停止歟、治部卿〔伊房〕云、九條殿御遺誡云、爲我後人者、賀茂春日御祭日、必可參詣社頭也、但於春日者、路遠有煩、可參大原野也者、而參大原野已以斷絕也、件事極祕事、不載流布世間之遺誡、若件事在別御記歟、又故宇治殿御時、以殿上人爲舞人、令參詣賀茂給二ヶ度也、後一條院御時一度、後冷泉院御宇一度、件度內大臣以下、至中納言資平卿乘車、餘頼卿以下至非參議三位皆騎馬、件日儀式、異於例年、下御社馬場西邊、立檜皮葺舍一宇、爲御在所、有上達部饗事、先著祓殿、御禊之後著件御所、差使奉幣、不令參社內給、上御社祓儀同前歟、又上達部騎馬前駈、始于大入道殿御時也、小一條右大將〔○藤原濟時〕不知內議、被參會御出立所、假有可扈從之儀、被借馬是被謀也、雖腹立愁被供奉云々、二條殿〔○藤原教通〕御攝籙之間無件儀、賓主臨國、諸事皆決於聖意之故也、延久年中〔二三年間也〕而其後、任宇治殿御時例可行之由、殿下〔○藤原忠實〕所被仰也、先人被申云、先參御內裏、依御氣色可及被露

參詣例

前前行、出鳥居外乘車、經行幸大路到上社、進外鳥居立車、大將遲來以候、令殿上人獻沓、於轅外懸裾、御前前行、此間公卿少少來、不待總上社例也、入自鳥居、經祓殿幄東北、入西面北第一間、著輕幄座、北幔外御前分居、垂裾經中、如恒、自後著之、左大將追參著、於路車轅折、仍遲遲云云、豫石倉南、昇立神寶長櫃、（須雖北也、而度度例如此、）同來敷陰陽師座、神馬十列立石倉西、北上西面、次供手水、（自北進之、）陪膳以政朝臣、役供人人、左大將前驅、仍只同行一人也、其外親光泰家等役之、次供贖物、如下社、次幣取五人進立、次陰陽師著座、次祓獻大麻、（兼親朝臣、如下社、）引諸卿撤祓物等了、幣各參本社了、幣一人前行、神馬神寶舞人如恒、余懸裾入內鳥居、直著舞殿階下、御前分居、余垂裾、經其中、昇自南階、（地上脫沓、）直進、（簀子也、又左右無庇、）著座、（其座如下社、不外敘北面、）此間神馬神寶不見、東西相尋、直入社內了云云、僅尋出、昇立東北岸邊、神馬引立舞殿北庭西方、次諸大夫運置神寶、爲先錦蓋置了、御幣寄立机、（件机兼立之、）次宗賴朝臣取金銀幣、（各一串也、）昇自舞殿北面、（余前）獻之、余指笏取之、（宗賴拔笏退下、）兩段再拜、（如下社、祈請又同、）次神主一人出來、余給二串、神主取之參入、親國良久歸出、神主申還祝、次白木指葵桂持來、神主持來也、余取之懸冠、如下社、次給祝師祿、次給社司祿、次余著坤舍、（無路道、）昇東面階、經簀子、入自南面西第一間著座、（東面、）忠季朝臣取沓、次公卿著座、昇南階著之也、次廻御馬、廻公卿屋水屋也、次東遊、次敷神主座、次神宴、此間神司與葵桂於諸卿、次勸神酒、神主勸也、祝言蘇合、余并左大將每度沃酒殘了、他人三度了後沃之、次三獻、每度以政朝臣持來盃、轉盃無沃、然而依准據例、直不擬左大將、以持參盃傳之二獻下答、神宴之間可居湯漬菓子、而遲遲神宴已了、仍略之、起座向馬場屋、西面以北爲上、昇北馳南、如下社、兼隆稱落馬、責仰令騎也、然而不馳、尤尾籠也、次起座歸家、經紫野路也、於門外下車、御前前行、忠季獻沓、（大將已下公卿、光雅定長等來從、）入中門、昇自同廊南妻、著南面座、公卿同前、次召御前辨少納言給祿、（四位二人取之、）次給史祿、（外記不參、）官掌召使祿、於中門所司下家司給之、隨身歷指同前、余歸入了、

〔江談抄〕一（攝關家事）攝政關白賀茂詣共公卿并子息大臣事

机退下、(出幔門也)次余解劔置座邊、次揖起座著沓、(無揖)踏筵道、(先是自坤屋至于舞殿南面階下、掃部寮敷筵道也、)昇舞殿南階、(地上脫沓、不敷、)(隨身直之、)入中間直進北著拜座、(小筵上敷高麗半帖一枚北面之、候〇候一本作揖、)次宗頼朝臣取金銀幣(各二串)出幔門、經庭中入舞殿北第二間、進余前左顧進之、余指笏取幣、(定頼拔笏退下、降長押有揖、可尋之、於藏人歟、)起兩段再拜、(兩段之間、乍居小揖如例、)祈請所只心澄信起、誠是神明之玄應也、可悅可仰、了目神司等、(出中門外)禰宜且祝、自東西各昇第二間、來余座左右、先余以左手取金銀各一串給禰宜、(正禰宜資益、權禰宜季平也、)有降、次右手取金銀一串給祝、拔笏座各取之入中門內、了於寶前申祝歟不聞、次祝歸出自中門、於砌上申還祝、(其音太高)次社司持來葵桂、指白木、自余座右方持來、余取之、葵懸巾子、桂指綿纓也、次賜祝師等祿、五位諸大夫役之、入自幔門、經廊內出中門外給、先禰宜、次祝、他社司祿、歸坤屋之後可給、然而依初度例給之、長治天永例也、皆悉給了、余揖起座、右廻降南階著沓、經本道著坤舍帶劔、忠季朝臣來扶持之、即取沓去了、次公卿昇自南面著座、(奥端分著座、著北座之人、經末座著之、東上對座、)此間及秉燭、隨身立明、次廻御馬神馬十列、次廻之、三廻了舞殿也、此間陪從發歌笛、廻御馬、了有東遊、舞人等著舞殿、(可入東西間、而入中間、不可然、余仰此旨、)舞人先駿河舞、次求子如恒、了各退下、次勸神酒、權禰宜季平勸之、祝取瓺子昇座末、(昇降自北面西一間、)經座中就余座右方勸之、左右有酒小桶也、下有樣器尻居、置折敷也、先入酒祝定了、乍折敷勸之、如本置折敷、季平取之、經余座前進北長押端沃酒殘更歸勸也、如此三度、了更入酒勸權大納言以下、第三度沃酒殘也、人別如此勸之、次居汁粉熟計去素也、仍余已下下著更食之、(其味大醉)此間敷神樂座、次可始神樂、而人長改裝束之間遲遲、此間社司以葵桂與諸卿、其路同神酒、人別懸巾子如恒、良久人長參入各著座、神宴如常、居衝重、次有勸盃、此間徒然、神宴了、舞人已下起座了、次余已下拔箸起座、取合少少亂入追出了、無殊狼籍、不似先先云云、忠季獻之、同人令懸裾、余出南門、御前平伏門外左右、余不垂裾、經其中向馬場舍、公卿相從、陪從被隔雜人、余仰隨身追散、近令候、共公卿如例、余已下乍懸裾、昇階著長押上圓座、(余脫沓、不可然、)以北爲上、各懸尻也、次舞人自北上南、次自南馳北、次兩大納言(隆忠賴實)引出物馬、各隨身引之、松明如恒、次人人起座、次余於西面偷著沓降南階、御

法及一時、已及申斜、可謂未曾有、申四點、右大將車立權大納言南、(其間太遠如何)次左大將(○藤原兼經)於余車北邊、欲下車、而余暫仰之、次次車等如此中絶者、殆可移刻之故也、其後車少少、列右大將(○藤原賴實)南、又民部卿(○藤原經房)右衛門督(○藤原隆房)車、於堤邊欲下車、而見大將未降、各暫待歟、太以無謂、其後別當來、即下車見之、兩卿降可謂嗚呼、其後大將下車、各來車邊、其後猶程可待公卿、日已欲入、仍示合大將、且又欲下車、以隨身綱列立車等、人人下車之後、余下車、前駈季長朝臣取榻立踏板下、大將取沓、余出轅外懸裾於劒、(家親朝臣)此間上官平伏、隨余進前行、公卿等皆來集、陪從發歌笛、從其後、殿上人在其後、徐進行、陪從等打拍子、歌求子、經馬場埒北、斜東行、(其路刈芝敷砂)祓殿埒北幔門外埒御前分居平伏、余垂裾過其中、入自北面幔門、(如御前等候、候西幔門外、余招示令候北、北南也、)經埒北、入自東南北一門、(沓脫遂外、無揖、)著座、(揖如常、東面、)已次公卿自埒後直著座、先是河西岸石倉西敷陰陽師座、(敷也)石倉北昇立神寶長櫃、(東西妻)河東岸引立神馬舞人馬乘尻馬、(神馬在北、次舞、次乘尻、北上東面也、先假式中央立神馬、左右相分、以中爲上、乘尻二人立北、承安乘尻猶相分、余案之、社在北方、須北上、以中爲上、未知所據、先例共存、就道理如此、)次供御手水、陪膳以政朝臣、役送三人、國行仲資衆時、手水了撤之、(自北供之、)次幣取四人、(五位二人、本社六位二人、松尾川合等料自南進、)列立石倉南、(北上東面)次御贖物陪膳衆親朝臣(自南供之、役送親光、)次居諸卿祓物、(諸大夫役之)次陰陽頭賀茂宣憲朝臣、次修祓、微音不聞、然而解縄撫人形如常、祓了衆親持來大麻、余撫之、即引諸卿、歸來撤祓物、(役人如初)次諸大夫撤諸卿祓物、次松尾川合幣、并乘尻等參本社、乘尻於其所即騎馬、是例也、次幣已下前行、余起座著沓懸裾於劒、諸卿同之、餘同之、徐步行之間、神寶長櫃不見、余驚而尋之、猶在埒前、仰宗頼召下家司令昇之、又舞人等并馬先入社頭、更召返令立中之路西頭、女房車立之、(立榻置頭木)從車三兩、并中宮女房車五兩、同立連其南也、公卿從余後、陪從在其後、歌求子如例、殿上人在其後、渡瓦橋北行、入内鳥居、斜進入南門、御幣神馬先以入門、立舞殿前庭、(其路可經舞殿東、而經西失也、)神寶長櫃入鳥居直廻西昇、立諸大夫屋東幔西、神馬留南門外、御前平伏門外左右、余垂裾經其中、入門經坤屋東北、昇自北面東第一間、(不撤沓、臨身直之、)著座、(南面)解劒取笏、此間諸大夫等運神寶置高机上、(件机、本社掾立舞殿北庭、東西經西幔門也、置神寶次頗違亂如何、)次幣取以幣寄立

嘉應二年四月十六日丙申、今日可有賀茂詣也、○中略、經出雲路至下社、於一條高倉取松明、諸卿各參集之後下車、列立車事如先々、著祓戸幄、其儀如常、抑兼光、源亞相、以兼光申云、妊者夫參入社頭、若可憚哉、先例或憚、或不憚候歟、返事云、不可憚之、祓了先神寶神馬等、□□□社頭先著坤舍、解劒之後、著幣殿奉幣、兼光取金銀幣、令獻之、其儀又如恒、次歸著坤舍、次廻御馬、次東遊、此間社司勸神酒、先授葵桂於諸卿、各取之入冠巾子、又插桂、次著馬場舍、令走馬、次引出馬二匹、源亞相并予等各前駈一人出來取之、次參給上社、亞相予各自此所退去、

〔玉海〕承安三年四月廿二日甲申、此日關白○藤原基房賀茂詣也、○中略、申時令著下社給、祓儀如先々、殿下入西幔門、廻幔北自前令著給、自北幔門出、令參社頭給、依座狹公卿不著、恩著、陰陽頭在憲朝臣修御祓、資泰朝臣爲御手水陪膳、季長朝臣爲御禊陪膳、御奉幣儀如恒、但兼光取進金銀幣、入第一御幣、如例、祝資光獻葵桂、先令插桂、次令懸葵給、大貳卿後日云、先例令懸葵、次桂也、事了令著座給、人々候座之後、東遊、先廻御馬、舞人重近依所勞退出、御琴持牽其馬、舞間社司等獻神酒、禰宜祐季初從此役、殿下御酒只一度、欲退依人々咳氣、更終三度了、他事等例令出給、從任例唱也、遠步歌源納言資賢卿放和之、其聲叶時、其曲優美、上下皆稱有興、漸進馬場、欲止之剋、聊唱秘說云々、好方近久等止音側耳、是神伏歟、於馬場令馳御馬、了令參上社給、予依所勞、自此退出了、已上雅賴注送旨也、後聞季長自下社退出、仍資泰一人上社、兼雨陪膳云々、又一條大納言自河原邊退下、不參著下社云々、又三條大納言實房、申可參仕之由、不參、仍上皇御不請令恐懼云々、

建久四年四月廿日丙辰、此日攝籙之後、初度賀茂詣也、○中略、路頭逗留經二時、是前驅無指故、扣馬不從駕之所致云云、未曾有未曾有、其路自大炊御門西行、至于東洞院北行、至于土御門西行、至于西洞院北行、至于一條東行、至于京極北行、至于河原、到下社、堤內遣入車、件路當外鳥居南柱程也、更南折外鳥居南去一段、余頗西引入、東面立車、日記云、鳥居舍南邊云云、問當時鳥居南際無舍、原例云々、其南馬場舍、自件舍ハ北ニ解立也、外放牛立一榻置頸木、御隨身少納言、外記史分居車前左右、不經幾程、隆忠車立余車南、其後良久車不見、以人遣令見川原、一切不見云云、如

永久六年（元永元年）四月廿日壬申、殿下（藤原忠實）御賀茂詣也、（中略）其路經町尻二條西洞院一條大路等、著御于下御社、暫待上達部參來、一度下御從車、著御祓幄座、（上達部五人著此座）先供御手水、（惟信以下爲陪膳）御幣持四人、（五位二人、六位二人、）神馬十列御馬、（舞人乘）走馬二匹、（乘尻）神寶長櫃一合舁居、供御祓物、（殿下陪膳、性言朝臣）社中先於廊座解御劒、此間諸大夫依仰運置神寶於案上、（案二脚從本社置之）白妙御幣寄立案下了、殿下著御舞殿座、（母屋第二間儲御座）左中辨爲隆朝臣進金銀御幣、兩段再拜了、給禰宜祝等、此間社司等運入白妙御幣神寶等、舁入案、祝取葵歸去、祝師申祝了進葵桂、殿下令懸御冠給、諸大夫取祿給社司、殿下還著御于廊座、令帶劒給、人々同著劒、社司持參葵桂、内大臣殿以下取之懸冠、次社司等奉神酒、（三度飮之、先右壽言、忽居肴物、）此間廻御馬、（三度）陪從等一二歌、次東遊、舞人七人、（國重、行忠、武正、欲被入、不精進者、）舞人出御馬場屋、舞人上御馬馳了、未四點事了、參御上御社、内大臣殿、藤大納言、予、宰相中將（顯）從、著御祓幄、五位三人取御幣、次第如下御社、御祓了入社中、先著御舞殿座、（第二間儲御座、不解御劒、）諸大夫運置神寶御幣等案上、爲隆朝臣奉金銀御幣、御拜了、給社司一人、次第如初、給社司祿了、著御舍座、次舞人廻御馬、（三度）東遊、此間社司等進葵、殿下於此座令懸御冠、以下人々同之、社司進神酒、（三度）飮了、内藏寮羞饌、諸大夫役送、舞人給祿於舞人陪從等、御前上官等給祿了、秉燭以前事了、近代未見事也、

〔愚昧記〕仁安三年四月十三日甲辰、賀茂詣也、（藤原基房）早旦著直衣參殿、依招引也、左大辨同參會、即於寢殿東廂覽神寶、諸大夫等著衣冠役之、次給舞人陪從裝束、了各退出、午終著束帶、（例帶劒等）參殿下、先是公卿以下著座、一獻了舞人陪從等給插頭花、了起座於中門外、露肩進庭中、舞求子了渡西、次神寶舞人乘尻渡東、次出御、至下社、暫立榻待、著下﨟等之後、下車著祓殿、祓了參入社頭、博陸先著舞殿、解劒之後、著舞殿、左中□□□□獻金銀幣、殿下取之、兩段再拜、了分給禰宜祝等、次申返祝、了著給坤屋、次廻御馬、次東遊、次社司獻神酒、（有肴）此間敷神樂座、入夜事了、著馬場屋、令馳御馬、了參給上社、事如下社、曉更歸給六角亭、給御前祿、又御後檢非違使給馬、又隨身給祿、具注別記、

御手洗、陪膳高實朝臣、昇立神寶、神馬一匹、舞人等御馬引立、神馬立中央、左右舞人等相分、陰陽師道言朝臣著膝突、御幣等立南方、取幣四人、五位二人、六位二人、供御祓物如常、御祓了、神寶等持參社頭、殿下參社頭、先著假座、解御劒置於座、取御笏著給舞殿、先是敷廣筵二枚、其上有高麗端疊一枚、取金銀幣給、先是行家朝臣取之、奉之、此間社司候中門邊、御拜兩段再拜、小揖了、社司二人進候、金一捧、銀一捧、社司取之、金一捧、銀一捧、又給之、件幣四捧也、夾葵於木、出中門外候、庭中、祝詞了獻之、殿下取之、繞御冠巾加桂木、起座著本座、御馬等引廻三度、神馬引出中門、社司御酒獻之、此間舞人出如常、餛飩了、求子畢、殿下御坐馬場、走御馬如常、敷圓座、時限及申、乘御御車了、參上社頭、同下社、不解御劒著舞殿給云々、設饗饌、早々令催御馬廻間申請、依請吹調子、民部卿申云、有先例云々、事了著給馬場屋、日落西山、御馬走了、此間召敦末賜祿云々、召敦末可在疆頭之由、爲之如何、被問民部卿、社頭人還御之後可候歟、左右可隨御定、召敦末引切右袖予取之下給敦末云々、乘御御車了、於世尊寺邊秉燭、予參高陽院、殿下御座東又庇予候、大盤下御前候、中門廊南庇家司二人、取祿各被給了、史外記不見云々、可召御前違例也、予戌刻歸宅、御前賜祿如常、日暮之時、於上社頭給之云云、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年四月十四日甲申、依例有御賀茂詣、大殿〇藤原師實幷關白殿〇藤原師通共令參詣給、中略午終著御下社、先於河原輕幄有禊如例、入御社中、左大將殿有妊者、不令入社中給、先大殿令奉神寶御幣給如例、次新殿下又令奉神寶御幣給、後舞人廻御馬、東遊如例也、有障不入社中之間、後聞此由、未時許社頭事了、歸著馬場前屋、舞人馳御馬、次參御上御社、次第作法如下儀、申四點事了、舞人馳御馬、四匹、還御、但齋院〇令子於本院儲御棧敷、有御見物事、檜皮葺五間二面許、女房打出、美麗无極、御棧敷北頭儲輕幄、爲侍人座、左少將忠教朝臣馳參被候、土左守有佐朝臣著布衣候、侍等濟々、御棧敷前敷白沙立翠松、風流冠絕古今、過差驚目、前駈不下馬、傳聞昔選子內親王爲齋王時、有如此見物事云々、遠尋古例有此興歟、秉燭以前還御賀陽院、給祿於御前、辨少納言祿四位取、外記史祿五位取之、新殿下則還給二條亭、

移馬

〔經信卿記〕永保元年四月廿八日乙酉、殿下〇藤原師實出御、午初陪從鳴物等了、午剋著河原幄、有御祓事、祓了右大將被留了、次入御社頭、先於舞殿有御奉幣、此間上達部併御□頭以東外、給祿於社司等、次著中門內西廊、殿下西頭、次東上、對座、先居紛熟、殿上人著同門西腋舍、諸大夫著西舍、次廻御馬、三度、神□奉入、次有歌舞事、猶子時助、琴秋忠、時助一歌、二歌无人可歌、仍有御氣色、祐忠歌之、此間社司持來桂葵、又獻酒於殿下、如例、出御、上達部乘車如例、舞人上馬幷馳了、次御上社、先御祓、次入御於橋殿、有御幣事、畢、給祿於社司等、次著御饗座、殿上人給、諸大夫同前、社司獻桂葵、次廻御馬、歌舞如例、此間社司持參神酒羞膳、諸大夫役之、次歌舞了、給祿於舞人陪從等、出御、此間雨下炬火、御馬場馳御馬了、自是以後無御前上官、次歸御、於中御門邊炬火、予依日不暮、參殿邊退出了、

〔中右記〕寬治六年四月廿日壬申、關白殿下〇藤原師實有御賀茂詣、午時公卿參會東三條、後神寶舞人等渡南庭了、御出、東對、仍用東御門、經二條東洞院一條、御下社頭、先有御祓、設輕幄、參御社中、奉幣東遊事了、舞人走御馬、申一點參御上社、

公卿內大臣〇藤原師通　民部卿、經信　源大納言、師忠　中宮大夫、雅實　新大納言、家忠　中納言殿、治部卿、俊明　左衞門督、家　別當、俊忠、國任、中納言中將、能監六人、此中六位二人、二位宰相中將、經實　左大辨、匡房　皇太后宮權大夫、公實　右兵衞督、雅俊　三位侍從、能俊

御前藏人頭左中辨季仲朝臣、少納言成宗、大夫史祐俊、外記六位。　御車後加賀守爲房、檢非違使左兵衞尉平爲俊、　舞人近友、院隨身府生、敦末、已上將曹、信貞、同、武元、同、公俊、殿御隨身、敦久、同、敦重、近行、武忠、已上府生、院隨身、敦時、番長

番長敦時所騎用之御馬、雙觀无極、馬蹄蹴沖雲、其身無落地、萬人感歎、

〔後二條關白記〕寬治七年四月廿一日丁卯、著社頭、御車立鳥居南、懸榻、予以下源大納言連立車云々、置榻於轅中、藤大納言於鳥居北邊下云々、余〇藤原師通下車、立御車南邊、佇立芝上、殿下〇藤原師實下自御車、御了、著御祓幄了、件幄者設平張之中、立輕幄一字、設後方屏風五尺一帖、其前高麗端疊三枚敷之、供

殿上人座前召才男、頭辨中將兩人應召、次進上達部座邊再三舞、關白殿脫衣給重方、諸卿又被物、次給二宮祿、次歸御、

長元四年四月廿六日癸卯、卯刻參殿、上達部多以參入、及辰刻令出給、○中略同刻列下社、先御祓、神寶幣神馬、舞人各奉馬、競馬廿人同奉馬、次參社頭、先奉幣神寶等、次廻御馬、次歌舞、此間社司羞酒肴如例、巳刻事了、著馬場、先舞人十人走馬、從上馬走之、次左右競馬者上、先左、次右、次左右奉名奏、左右方人等、取件奏來馬場殿、左中將實基、右少將行經進向、取件奏奉殿人獻殿下云々、次召勅使等、修理權大夫實經、少納言經成、大監物重季等、進立西階北方、北面東上重季立少納言後、殿下仰事由、三人共唯、定經經成歸進向鼓所、重季渡馳道向標所、立鼓金杵等、次一番、左正親、勝右助延、二番、左武方、右公忠、持、三番、左時頼、右貞安、勝、四番、左武重、勝、右助武、五番、左爲弘、勝、右光武、六番、左公武、勝、右安行、七番、左近利、勝、右助友、八番、左久方、勝、右公安、九番、左延武、勝、右行武、十番、左弘近、勝、右爲正、左勝、仍龍王、次納蘇利、次到上社、作法如下儀、但東遊了、給舞人陪從等祿、四位白襖一重、五位同襖一重、六位一領、御前上官同給祿、及亥刻競馬并勝負樂舞了歸御、今日下社馬場舍、兼日仰木工修理職等被仰云々、又敷設裝束自殿被儲、上達部并所々饗、皆自殿被召仰可然之人々、又馬出幄各二字、一字尻料、一字馬料、并屛幔等、各方頭等新調立云々、自餘幄幔敷設、皆是諸司所儲云々、上社馬場屋、本自所立也、裝束、又本家所儲也、饗等是諸司任例所儲也、所々幄幔、同諸司儲之、馬等出幄等不立云々、

〔定家朝臣記〕康平五年五月二日戊申、有御賀茂詣事、○藤原賴通午刻令出立給、未刻著御下社、豫御坐河原齋王著給屋、東屋爲御所、其南立幄、敷假板敷、爲上卿座、殿上人座幄在腋、御所南立一其西、諸大夫幄在西、上官幄在諸大夫幄南、御所南北引幔、丈幄、敷御座、次捧金銀幣令拜給、備後守憲輔朝臣、神寶行事、并定家祿行事、家司職事諸大夫相加十餘人許、依仰參社頭、先安置御神寶如例、社司申返祝如例、次廻御馬、次東遊、此間社司參入御所、獻神酒如常、事了申刻著御上社、御坐車宿屋、上卿座同設此屋、殿上人諸大夫等幄東南、作法如下社、酉刻事了、馳御馬還御、

左將軍殿下○藤原教通令供奉給、御前左近府、少將俊明、將監長谷季頼、將監送生行成、爲御隨身、左馬寮、助職任、允紀定國、屬件光則、長上助任、史生滋圓、令歸給後、於御前給御前上官已下祿、御前如例、府、少將褂一領、已下疋絹、寮、助褂一領、已下疋絹、將監馬允已下各給

社頭式

示之、抑今日賀茂詣、萬人歎息、殆不異禽獸歟、可悲之、

〔百練抄後鳥羽十〕建久五年四月十七日戊申、申之時以後雨降、關白(○藤原兼實)賀茂詣也、大納言實宗卿已下扈從、息男若君(良輔)騎馬前驅、

〔江家次第二十〕賀茂詣

當日(○中略)主人(○中略)於東門外乘御車(○中略)次公卿以下相從如常、次到下御社一鳥居外、放御車牛、置轅於榻上(自餘公卿於榻中立)並東面北上列立、次公卿以下下車、次主人上車簾下御、御前辨少納言以下前行如恒、到祓殿著幄(件幄五間、以緂纈覆之、其中敷筵、其上敷高麗端帖、爲公卿座、北上東面、北西南各去幄丈許、引緋斑幔、但南幔北邊、敷紫端帖二枚、爲殿上人座、西上北面、)次供御手水、上臈家司役供、次居御祓物、次昇立神寶(櫃一長)於幄東二丈、次五位二人、六位二人、執白妙御幣列立於其南、次陰陽師著座、(神寶之北、敷半疊一枚、爲其座、)次舞人等引立御馬、(神馬一匹在其中央、走馬左右各五匹引立、)次御禊畢、(此間諸從發聲、)參御社頭、御幣神寶走馬在前、次公卿以下相從、陪從發物音相從、御前辨少納言以下留於樓門外、次主人先著御樓門西廊座、解劒、此間諸卿以下停立、次著御於舞殿、(南第二間、敷筵二枚、疊帖一枚、爲御座、)次立神寶案於舞殿北、諸大夫以下運置神寶、畢、上臈家司取金銀御幣各一捧、奉主人、主人取之兩段再拜、訖召社司給之、社司取之奉神殿、(神寶等同昇入之、)次社司申返祝、訖主人還著御於樓門西廊座、諸卿同著座、(東上北面、但中納言以下對座、)此間舞人引立走馬於舞殿東面、(神馬者立於御殿前)次廻御馬三度、畢神馬引入於御前方、次東遊、次社司進葵桂、此間社司供御酒三行、(公卿以下度別拍手、)此間賜神人祿、次羞膳、(所司居之、)訖廻御車於鳥居外屋、(往年乘之御車、近年有件屋、仍著件屋西座、)次舞人上御馬、畢、次第走之、訖次參御上社、一如下社儀、但御禊幄北上西面、舞殿北廊供御膳、主人橫座、公卿東西對座、殿上人在南廊、但主人不解御劒、次給神人祿、次還御、主人御於對廣廂、次賜御前祿、(於中門廊給之、)競馬廻御馬事、(入道殿御時有件事、)

〔左經記〕寬仁四年九月廿四日壬申、關白殿(○藤原賴通)詣賀茂、(舞人陪從近衞司人)辨少納言史外記召使官掌供奉如常、於下社歌舞之後、有神樂事、事了及申刻詣上社、歌舞神樂皆以如前、人長左近將監羙田重方、來

文獻之、如去年記、殿下見了給、予少々膝行參進給之、歸座次第見了返上、　四月十六日丙申、今日可有賀茂詣也、而雨脚如沃、延否之間依不審、早旦以消息達案內之處、御返事云、甚雨不可叶、仍可延引也、於定日者追可申、但午後天晴、雖今日猶可參詣者也、此間雖自所々雜色等多來、皆仰可候近邊之由、又前驅等取延否之案內、至午後仰可相待晴之由了、而及未剋雨脚猶不休、仍欲返遣雜色等之間、或者云、不可依雨脚之由有院〇後白河仰宣云々、仍神寶等已持參了、然間彙光示送云、依院宣今日猶可候、早可馳參歟、相次攝政御消息到來云、不可依甚雨之由有院仰勿論也、早可令光臨給也、只今答可參向之由了、卽仰可召遣前驅等之由、又撰定雜色等下品廿餘人、遣一條京極了、抽撰百十八人、相具經弘、遣土御門烏丸邊、自彼所可相具也、其中予雜色幷禮部雜色合十人許、自里亭在車共也、前驅等遲參之間、及申終剋參攝政亭、土御門東洞院、邦綱家也、車馬滿門前、又神寶先行之間无其隙、狼籍殊甚、此間神寶已渡、執柄已下座饗予敷、予參進之間、諸大夫一人、取圓座一枚敷座上、予此間立對弘廂敷之、後遣著座、次舞人渡、爲先上臈、此間雨休、仍用晴儀也、了公卿退下、自下臈、下立中門外、攝政下自南階、新三位重家獻沓、進中門下之間、御前參向、左右列先行、少納言大外記賴業、左少辨經房、[illegible]左大史隆職、於門外駕車、此間予歸昇中門廊、人々徘徊所々、殿下車頗遣延之後、予乘車至土御門辻之間、源亞相參會、前驅八人、六位二人、自土御門至西洞院北行、自一條更東折至京極、於一條室町法皇御見物、御棧敷邊之人々列居、

〔玉海〕元暦二年〇文治元年四月廿二日乙亥、此日攝政〇藤原基通賀茂詣也、依別院宣大將〇藤原兼實子良通相伴、不召具一員等、依事之體無爲、大將之人、初度必召具一員、後々不然也、上臈隨身番長萌木狩袴垂之、騎移馬、下臈五人朽葉狩袴垂之、幷壺胡籙也、是久安三年、雅定卿爲納言大將、第二度供奉例也、此外先例不見之故也、前驅六人、雜色百卅人、隨身在也、長成著沓垂袴云云、然而皆是上括垂裾平禮淺沓等也、異樣雜色等不平禮、又插尻也、牛童垂裾如雜色、車副垂之又故實也、他人皆垂之非也、舍人裝束蟲襖濃欵冬衣帷等也、不著單衣、牛童赤色欵冬衣、番長厚衣所騎之馬頗揚也、於院御棧敷前優美之由、後日見人

元永三年(○保安元年)四月十四日甲申、殿下(○藤原忠實)御賀茂詣也、(今日殿下御物忌也、去年夢御物忌、仍被破所云々、尋云々、)巳時許參東三條、東對令出立給、御裝束如常、按察大納言、右衞門督、別當被參、其外人々遲參、內府(○藤原忠通)於西廊方出立給也、午時許上下參集之後、殿下出御、御東對南庇座、舞人渡前庭、末後、兼近、(以上二人院候者)茂忠、行俊、公胤、(內府隨身)敦清、國重、(殿下御隨身)武正、(府生、已上)兼弘、(內府隨身)敦貞、(右大將隨身)人々下居廣庇、前播二人、御幣持仕丁二人、神寶長櫃二合、御祓物外居一荷、(御□持一人、□□布衣、)出納二人、(布衣、)下家司二人、神馬二匹、舞人十人騎馬渡之、(此中亂聲、雲和介、又兼弘乘葦毛馬、頗有逸興、人々感歎、)乘尻二人、(經元、眞貞、)渡南庭了、則出御、(頭中將進御沓、)東中門外御前祗候、右中辨雅兼、少納言宗兼、六位外記史、於東御門前乘給御車、(唐車、左中辨爲隆朝臣、檢非違使康季、候御車後、)內大臣、(御前右少辨師俊、少納言公章、外記史前駈、御車後檢非違使賴口、將曹以上隨身不召、舍人隨身貫蠻胡籙、)按察大納言、(經)右衞門督、(顯)予、別當、(忠教)侍從中納言、(實)左宰相中將、(信)右兵衞督、(實)左大辨、(長)經二條西洞院一條大路等、著御下御社祓殿、

〔長秋記〕長承二年四月廿三日戊申、關白(○藤原忠通)賀茂詣、舞人(○此間闕)御前權左中辨宗成朝臣、少納言忠成、大外記信俊、大夫史政重供奉、公卿大納言能俊、忠教、師賴、實行、顯雅、中納言賴長、實能、長實、忠宗、雅兼、參議宗能、顯賴、實光、師俊、三位經忠、家保云々、上皇(○鳥羽)立御車於二條東洞院御見物、諸卿乍乘車渡御前、師仲自下御社歸來云、源大納言(○能俊)自車下給間、雜色無一人、分散、仍自車下給、中務少輔師仲相具助成申、以各雜色令候、其御共無□人々冠巾懸葵、或懸一鑷、或少取分一葉□□少可懸、師仲依予葵懸三鑷、人々難之云々、前例若人於下御社懸三鑷、於上御社懸二鑷、凡五鑷故實、而不知案內難是歟、就鑷一葉懸者、祭日渡一條大路之時事也、兼仰下御社權禰宜惟風、爲師仲令儲小膳於社廊著之云々、

後聞、治部卿、按察使、自下御社還間有鬪爭事、治部卿雜色一人破頭、一人刃傷歟、按察前駈落冠、又被切紐云々、各申訴、指無裁許云々、

〔愚昧記〕嘉應二年三月廿六日、參攝政(○藤原基房)亭、賀茂詣定云々、今朝可參候由依有招引也、兼光書定

督、中納言中將、左兵衛督、二位宰相中將、右大辨、左大辨、皇太后宮權大夫、右兵衛督、三位侍從、右宰相中將、候御後、著社頭、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年四月十四日甲申、依例有御賀茂詣、大殿〇藤原師實幷關白殿〇藤原師通共令參詣給、〇中略路頭次第、先大殿御幣神寶神馬、次新殿下御幣神寶、次舞人等、次大殿御隨身、左右將監以下舍人以上騎馬前驅、諸大夫卅人、多是大殿家司職事云々地下君達五六輩、候大殿北面人々也殿上人十二人、頭中將宗通朝臣、左馬頭道良朝臣、右中辨師頼朝臣、大宮權亮道時朝臣、左中將國信朝臣、侍從宗忠朝臣、左少將有宗朝臣、右少將能俊朝臣、左少將忠教朝臣、藏人兵部大輔通輔、左少將有實、藏人玄蕃助藤宗佐等也、次大殿御車、唐車、驂御騎上官、前加賀守爲房朝臣、檢非違使大夫尉藤經仲、束帶平貞度、已上三人候御車後、次陪從等、次殿下御隨身、左右將監以下諸大夫、左衛門權佐右信在此列、儒者地下君達殿上人、濟々皆參歟、御前上官藏人頭左中辨季仲朝臣、少納言成宗、大外記定俊、大夫史祐俊、御車、檳榔毛讚岐守行家朝臣、檢非違使源光國、宮道式賢三人候御後、次公卿之車、民部卿、經藤大納言、中宮大夫、師右大將、雅權大納言、家治部卿、俊別當、俊藤中納言、基二位宰相中將、經右大辨、通左衛門督、家右衛門督、公左大將、忠左大辨、匡左宰相中將、保皇太后宮權大夫、公右兵衛督、雅三位侍從、能新宰相中將、仲出仕人皆參也、前帥中納言伊房卿有事不出仕、參議長方在太宰府、二人不參、

嘉保二年四月二日丁卯、今日殿下有御賀茂詣定云々、歸家、　十九日、兩殿下〇藤原師實、同師通、有御賀茂詣、予〇藤原宗忠依女房陪膳候內之間、晚頭前武衞長忠被參內、語云、午時許兩殿下御出、高陽院殿其路經洞院西大路一條、至下御社、次第如例、大殿唐車前駈殿上人諸大夫相分、但無御前上官、爲房候御後、關白殿檳榔毛御前上官、權右中辨重資、少納言成宗、大外記定俊、大夫史祐俊、供奉公卿大納言三人、帥源大納言、新大納言、中納言八人、民部卿、左衛門督、右衛門督、左大將、藤中納言、治部卿、別當、江中納言、參議三人、二位宰相中將、經左宰相中將、保新宰相中將、宗散三位一人、中宮權大夫、舞人、右近府將監敦末、將曹武光、近衞府生信貞、兼方、以上殿下御隨身、敦兼、忠久、以上大殿御隨身、武忠、敦時、以上殿下御隨身、番長公胤、以上大殿御隨身、申時許事了、參御上社云々、

張、次牽神馬二匹、次著褐衣者二人、騎走馬二匹、若松尾走馬歟、次左右近衞官人騎十列、（著青摺衣袴）御車後陪從官人等遊行相從、卿相左大將教通、具權隨身、隨身馬寮等、（近衞隨身等皆騎馬、攝政具權隨身、近衞隨身皆騎馬、左將軍効之歟、攝政權隨身、左將軍馬寮等相具、太違例、近代事歟、）次左衞門督賴宗有權隨身、皇太后宮權大夫經房、中宮權大夫能信、右衞門督實成、（无權隨身、兵衞督、三位中將等、又无權隨身、）二位宰相兼隆、左大辨道方、左兵衞督賴定、右兵衞督公信、修理大夫通任、右大辨朝經、左三位中將道雅、右三位中將兼經、侍從資平乘車相從、

〔左經記〕長元八年四月十六日己巳、午刻許參殿、（○藤原賴通）禊祭兩日供奉人々申馬、并御賀茂詣日時舞人乘馬等被撰定、總所率之御馬五十餘匹云々、（賀陽院白川桂御厩、并近江國所飼等馬也、）入夜退出、　十九日壬申、天陰、及午刻陰雲忽晴、風雨共止、自殿有御物詣尙可有、只今可參仰、仍忩參、未刻令多參會、（大納言三人、中納言四人、宰相七人、殿上人并諸大夫、）即出立給、其次第先御幣、次神寶、次祓物、（具出納、并家主知家事各三人、）次舞人、次御隨身、次召使官掌、次前駈四位以下、次御車、次陪從、（檢非違使二人、候御車後、）次上達部車、次第行連、申刻著下社、御祓了入社頭、余依丙穢不入社頭、頭之歸出、於馬場令馳御馬、次詣上社、余自此歸家

〔後二條關白記〕寬治七年四月廿一日丁卯、於東北中門下整集、而南庭西渡、上臈爲先、下毛野敦時、信貞、秦近貞、秦近行、秦公利、敦重、延末、武忠、敦久、番長厚時、同敦利、能度了、自西方東渡、仕丁二人持白木相比、（退紅白布袴、白布衣云々、）御幣、（相比、）次神寶二荷、次和琴、御祓物一荷、（上下料南方、□□和琴北、）小使二人束帶、（相比、）舞人罷渡、敦末、（黑、右府馬也、）信貞、（河原毛、予馬也、）延行、（栗毛、前下總守貢馬也、大宮少進、）公利、（栗毛、前陸奧守義家所貢也、）敦重、（葦毛、利實馬也、）近末、（葦毛、越中守淸實所貢於予也、）近末馬頻駭、而於流水橋下拋頸之程、乘頸直居鞍之間、傍馬漏落立、即罷乘之、萬人驚晔、敦重馬、揚艾如常、武忠（鹿毛、武藏貢馬也、）敦久、（黑、大嘗御馬也、）聊被烏許御馬云々、件御馬指事不侍、厚時、（栗毛也、）不纔揚三四度許也、申有小二君之由候其憚仍不揚云々、敦利、（黑、院御馬也、春日御幸三月十三日中納言所被仰也、）稱中揚云々、罷度了、路頭先下臈云々、殿下（○藤原師實）降臺南階給、於中門外候御前、乘御御車、（少納言成宗、外記雅仲、右中辨師賴、檢非違使爲時一人著笠如常、）予民部卿、但民部卿路頭之間下以伯云々、新大納言、中宮大夫源大納言、藤大納言、治部卿、左衞門督、右衞門

路上式

〔江家次第二十〕賀茂詣

當日〇中略刻限公卿以下參入、先是居公卿以下饌、或不居之、又寢殿出女房裝束、或又不出之、主人束帶、纈文帶、螺鈿金作劍、出著御座、經四子數入實自庇四戶著御、次公卿以下著座訖、次舞人十人入自東中門、經南庭西渡、上臈爲先、陪從不渡、次神寶以下東渡、其次第、先前掃二人、冠緌退紅布帶白袴、脛巾草鞋、白木杖、相比、次御幣四捧、二捧下社料、一捧上社料、一捧松尾料、人別持一捧、相比、其衞夫烏帽退紅襖白布帶、次神寶二荷、相比、次御祿物、御琴持、相比、次出納二人、布衣相比、次小使二人、束帶相比、次神馬二匹、一匹下社料、一匹上社料、鞍毛付鈴、尾付木綿、各有口付二人、冠緌褐衣白布帶、白布袴脛巾、次走馬十匹、舞人乘之、上臈爲上、但路頭下臈爲先、次乘尻二人、以外衞府充之、褐衣白布帶摺袴、次第渡了、次主人下自對南階、出自中門、御前少納言辨、帶劍外記史以下前行、於東門外乘御車、公卿以下各乘車相從、其行列次第、先御隨身十四人、常御隨身外召加將監二人、將曹二人、褐衣狩胡籙、其將監將曹府生著白布袴、番長以下、左著蘇芳布袴、右著黃朽葉布袴、次召使二人、次官掌二人、次前駈六位以上、四位以下、次殿上六位以上藏人頭以下、次外記史、史在左、次少納言辨、辨在左、各付辨少納言、侍官使部、外記使部各一人、次御車、宮車、御車副六人著布衣、檳用絲毛車、或時用遠著、次陪從、次檢非違使二人、若有大夫尉者、一人用其人、其裝束五位東帶如常、六位者布衣、著冠壺脛巾、垂纓狩胡籙、具火長隨身等、次公卿以下相從如常、

〔公事根源四月〕關白賀茂詣　中申日

主人は乘車にて、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣神寶唐櫃やうの物をかたげもたさしむ、琴持菅笠深沓といふ物をめしぐす、上達部軒をつらぬ、社頭にて神拜あり、葵桂を禰宜持てまゐれば、是を冠にかく、東遊求子駿河舞など有、

〔大鏡三太政大臣賴忠〕此おとゞいみじきことゞもしおき給へる人なり、かもまうでに、けびゐし、車のしりにぐする事、又馬のうへのずいじん、さうに四人つがひはじむる事も、この殿のしいで給へり、

〔小右記〕寬仁三年八月廿日甲辰、攝政〇藤原賴通從別納所參賀茂、依是不被參祭云々、宰相來云、今日爲候攝政御共、參彼殿者、被催小女、於染殿北邊見物、次第御幣、下宗司二人騎馬在左右、次納神寶長櫃二合、和琴一

兩三人未參云云、午刻余著東帶、去夜著也、今日更無煩、如常濃打半臂下襲、各折其紋、不縫也、文違也、單文也、今度誤半臂文、如例夏中臂縫也、失也、紅打引陪襲同折、端也、其外紅張單汗取等如件、浮文織物、浮線綾表袴、紅纐大口、蒔繪螺鈿水文銀樋劔、紫淡平緒、劔緒共千鳥ヲ摺具、又摺平緒也、出座、出自打出西造合間、經南簀子著西第一間端菅圓座、北面、次

公卿次第相分、著奥端座、

權大納言隆忠　右大將賴實　左大將良經　左衞門督通親　權中納言親信　民部卿經房　權中納言泰通　右衞門督隆房　別當兼光　源中納言通資　藤宰相雅長　左宰相中將實敎　大宮權大夫光雅　左大辨定長　新宰相中將成經　右宰相中將公繼　花山院三位中將忠經　新三位中將兼良　源宰相兼忠

成經已下依座狹不著座也、隱居二棟廊饗中歟、次殿上人著座、其人追可尋記、雖不見也、次余召宗賴朝臣、在殿上人座、卽來南簀子、余仰舞人陪從可召之由、卽退出、於中門廊西緣召也、卽復座、次舞人陪從良久不參、仍宗賴更起座催也、上﨟等頗遲參、隨見參且以著座、卽上﨟追參著、陪從又著座、其座在中門廊南第一二三間奥端、敷紫端疊、其中居饗、舞人自座末著東座、陪從昇西簀子南妻著西座、次前攝津守以政朝臣、居盃於折敷持來、職事兼資取瓶子、余取盃、以政取的、擬隆忠卿、次第巡流如例、盃傳殿上人座、瓶子五位、次舞人陪從座、國行東仲資西勸之、次五位取瓶子、次余已下下箸、汁物居之歟、次陪從發物音、次家司職事四位已下取插頭花、各插之、藏人所所司取之、居閑所、役人等取也、出障子上西妻戸、經各座後給也、次舞人陪從起座退下、次諸大夫敷菅圓座於寢殿簀子、先是舞人著座以前欲余訓令全令數也、數、次公卿自下﨟起座、透廊邊徘徊、次余起座著簀子圓座、階西間南面、次隆忠卿已下次第著座、南面、初不著座人々、此時皆著座、透渡殿二行敷菅圓座、依人多也、次舞人先上﨟渡南殿、自東渡西、其間甚中絕、不可必然事歟、次御幣已下自西渡東、其行列在別、舞人渡了、人々起座、降立中門外、不待乘尻如何、其後乘尻二人渡南庭也、次余起座降自南階、左大將取沓、大將不指笏、不懸裾、上﨟取之時如此也、又刷裾、次余出中門、對第一人小揖、順行過失也、御前辨少納言外記史官掌召使等在中門外、隨余進前行、先出門騎馬、次余乘車、大將褰簾、季長朝臣立榻、次公卿一々連車於大炊御門東洞院辻、令立行列也、

(餘如先、)次舞人等騎馬渡之、(左近將監下毛野敦末、府生播万信貞、下毛野近行、秦茲方、下毛野敦重、下毛野武忠、同敦久、秦行利、已上官人等、)次出御、

〔玉海〕承安三年四月廿二日甲申、此日關白(基房○藤原)賀茂詣也、其儀不審、仍示可注送之由於源納言許、仍大概注送之、其狀云、巳時參大宮亭、以寢殿南庇爲公卿裝束所如常、有打出、(牡丹)五條中納言、別當、中御門中納言、花山院中納言、予、左大辨、大貳等參集之後、殿下令出座給、人々家禮如常、即令敷隱座、自階間東邊以西敷之、人々退座、殿下令移著給南面、五條中納言已著圓座、(北面)源中納言宰相中將等參加、舞人爲先上萠東渡、神寶以下西渡如常、今日舞人馬舍人居飼等不被渡之、人々起座、殿下自南階令下給、人々到中門外北輚邊、无御揖、御車後左少辨兼光、御共檢非違使盛國、(大夫尉)路大宮三條、(今過院御棧敷給、室町東、三條北、)一條大納言西洞院邊被參會云々、午訖出門、

建久四年四月廿日丙辰、此日攝籙之後、初度賀茂詣也、(○藤原兼實、文治二年爲攝政、)年來之間、連々相障、于今未遂參詣、今年適無殊事、仍所參詣也、去朔日定雜事始神寶、同十五日始家裝束、今日早旦下家司二人、藏人所二人、參下上社行裝束事、(直講中原師重、大膳進國盛等參下社、東市正小槻公尚、文章生盛尚等參上社、)卯刻沐浴、密々外除、(觸途三ヶ日、毎日外除也、雖非先例爲觸除也、)同刻覽神寶、其儀二棟廊(尋常公卿座也)南面、上簾撤疊、先神寶行事仲資取菅圓座一枚敷西第一間、余著冠直衣、著件圓座、(東面)次家司職事運置神寶、先上萠二人敷小筵二枚、(南北妻有其間、)次置長櫃蓋二於筵上、次々第置神寶、(下社置西筵、上社置東筵、)皆置了、家司藏人頭右大辨宗頼朝臣參上、開幣宮蓋覽之、次開鏡宮蓋覽、(先下社、次上社同前、)次退候前廣庇、次家司職事次第撤、今度乍入神寶舁長櫃蓋撤也、小筵最末撤也、一人取重也、依余命也、次余歸入、即居寢殿公卿座東方、大將來居殿上人座、先是中門廊北三ヶ間、張綱懸舞人陪從裝束、依所狹、閉北妻戶、西折引綱所懸也、次召舞人陪從於切欄之所、(中門廊、西面簀子也、)次第給裝束、(家司職事役也、)遲參舞人分給廳頭、又給陪從裝束同前、(遲參人又同前、)舞人陪從布衣冠也、其中好方憲親、著五位袍、衣冠帶銀作劒也、次余歸入、先是木工權頭時盛朝臣參上、出打出、(其色唐蒲萄五領、紅單衣、紅打綾、朽葉表著、織物二藍唐衣、腰裳等也、寢殿西第一二間、并東面妻戶一間同出也、)巳刻公卿已下漸參集、大將著束帶來、(自去夜宿此亭也、帶銀蒔繪劒、紺地平緒、縹花欄、又著紅引打、)舞人

前三日神馬走馬令潔齋、前一日御裝束、(家司職事各一人行事)下母屋御簾、(以御厩綱結之)其內懸壁代、上對南廂南御簾、四間并四面妻戶間御簾、(但東孫庇御簾不上)鋪蒲廣筵、南孫廂間、鋪筵、(南廊不鋪筵)立四尺屛風六帖於廂北邊并東邊、西第一間(坤角)鋪菅圓座一枚、爲主人座、同間以東副御屛風敷筵、其上敷東京錦茵二枚、爲大臣座、其東敷圓座、爲納言以下座、(坤西上南面、其大納言圓座紫文白地錦、中納言靑文黃地錦、參議者高麗錦緣、)所々置鎭子、孫庇西第三間副南柱長押下、鋪紫端帖廿二枚、爲殿上侍臣座、南廊戶以北二間副東壁、鋪紫端帖二枚、爲家司座、藏人所障子西并東設諸大夫座、(裝束如常)當日早旦御湯殿、次御覽神寶、其儀對東第二渡殿柱曳綱、(付象形金物曳之)懸舞人陪從等裝束、西第一間敷菅圓座、爲主人御座、次出御、(御冠御衣)次家司以下、(衣冠)昇神寶、置於御前、覽畢令返納之、次給舞人陪從等裝束、次入御、

〔後二條關白記〕寬治七年四月廿一日丁卯、巳刻參高陽院、裝束東露口歟、其儀南庇四間敷蒲廣筵、懸母屋御簾、四間障子不出、放庇四間御簾卷之、東西妻戶御簾卷之、傍身屋御簾立四尺御屛風五帖、其前敷高麗端疊五枚、其上敷上鋪五枚、其上東京茵三枚、鋪紫錦端圓座五枚、置菅圓座一枚西第一間、(南端敷之)廣庇一間鋪廣筵於南檻下、鋪廣筵東戶前、不敷筵、西階緣上又筵无之、東露東又庇敷紫端疊三枚、庇御簾下之、自餘御裝束如常、有頃上達部等參會、暫間東庇及中門廊被候、時刻及午、殿下(○藤原師實)御出、仰事云人々此方、余(○藤原師通)以下起座著南座、(候奧座南方、不敷圓座云々、)上達部等著座了、此間殿下被仰下云々、左府生播磨信貞已爲下﨟、可能立一舞由所申也、(其次數末一舞也、次一舞式基也、爲馬使、其替所望可入也、)仰治部卿所仰下也、祭日使之例也、(○也下一本有大將隨身二字)雖无先例、爲仙院御隨身、別儀也、於東北中門下聚集、

〔中右記〕寬治八年(○嘉保元年)四月十四日甲申、依例有御賀茂詣、大殿(○藤原師實)并關白殿(○藤原師通)共令參詣給、(去寬仁元年例者)辰時許、人々參集賀陽院東對、(新御殿下小寢殿方也)自此曉、渡先寢殿中央間以東南庇上翠簾、儲公卿座、兩殿下出御簀子敷、公卿連座於南庭、有片舞之興、舞人等歌舞、次舞人自東渡西後、神寶御幣等自西渡東、(先御幣、持二人、神寶長櫃二合、又納御被具物一人、御馬二疋、出納二人、下家司二人相具、已上大殿神寶者、)一次新殿下神寶、(次第如先、但无神馬、并御幣持許、自)

攝關賀茂詣

攝政若クハ關白タル人ノ、毎年賀茂神社ニ參詣スルコトハ、師光年中行事、及ビ公事根源ニハ、圓融天皇ノ天祿二年九月廿六日戊午ニ、攝政藤原伊尹ガ、此擧アリシヲ以テ始ト爲シタレドモ、江談抄ニ載セタル藤原忠平ノ事ハ、伊尹ヨリ前ニ在リ、或ハ當時ハ未ダ恒例タラズ、伊尹ノ事ヨリ以後、恒例トナリシニテモアルベシ、而シテ此參詣ハ、初度ニハ日ヲ擇ベドモ、恒ニハ四月中申ヲ以テ定日トセリ、

當日私第ニ於テ、先ヅ身ヲ淸メ、神寶ヲ覽ル等ノ事アリテ、後ニ車ニ乘リテ本社ニ赴ク、子弟ノ大臣及ビ納言以下、少納言檢非違使、皆之ニ從ヒ、前驅後乘街衢ニ溢レ、儀衞ノ盛ナル事、行幸ト相比スルモノアリ、先ヅ下社ニ詣テ、次ニ上社ニ向フ、禊祓畢リテ、神寶幣帛ヲ獻ジ、馬ヲ走ラシ、樂ヲ奏シ、神宴ヲ開ク等ノ事ハ、下上ノ社同一ナリ、此事タル保安天承ノ間、一旦中絶シ、爾後漸次衰退セシガ、後鳥羽天皇ノ後ニ至リテ、終ニ廢絶セルモノヽ如シ、

攝關ノ外ニ、内覽ノ賀茂詣アリ、其式攝關ニ讓ラザルガ如シ、今此ニ附ス、

參詣定日

〔師元年中行事〕四月 中申日關白賀茂詣事

〔公事根源〕四月 關白賀茂詣　中申日

初度には日をえらびて此事有、天祿二年九月廿六日、攝政右大臣謙德公〇藤原伊尹賀茂詣の事有、是攝關の人の賀茂詣のはじめなるべきぞ、此事は必賀茂祭のまへの日ある事なり、

〔諸國圖會年中行事大成〕四月上 中酉賀茂葵祭〇中略古へ當月中申日、賀茂國祭、同日關白賀茂詣あり、今なし

私第式

〔江家次第〕二十 賀茂詣　四月朔之比有定

三條右大臣〇藤原定方

かくてのみのむべきものかちはやぶる賀茂の社のよろづよを見ん

〔拾遺和歌集十七雜秋〕右大臣恒佐家屛風に、臨時祭かきたる所に、

貫之

あし引の山ゐにすれるころもをば神につかふるしるしとぞおもふ

〔新古今和歌集十九神祇〕臨時祭をよめる

紀貫之

宮人のすれる衣にゆふだすきかけて心をたれによすらん

〔新勅撰和歌集九神祇〕賀茂臨時祭をよみ侍ける

法成寺入道前攝政太政大臣〇藤原道長

いかなればかざしの花は春ながらをみの衣に霜のおくらん

停止

饗饌

〔山槐記〕治承四年十二月七日乙酉、今日賀茂臨時祭也、去月依遷都事所延引也、予〈○藤原忠親〉不參內、藏人宮內權少輔親經奉行云々、

〔園太曆〕貞和四年十一月十三日丙午、依法皇〈○花園〉崩御穢、諸社祭延引宣下事、頭長顯朝臣奉事、〈○中略〉
去十一日、依太上法皇崩御穢氣廣及天下、今日諸祭、宜令停止、賀茂臨時祭、及月次祭、神今食等、穢限以後、擇吉日行之、
若如此可候歟、賀茂臨時之祭、幷來月月次神今食事モ、如此可被宣下歟ト存候、是ハ重事候歟、尤可被申談執柄候歟、
十二月廿五日丁亥、傳聞今日賀茂臨時祭也、依代始公卿使也、新宰相長顯朝臣勤之、今日御奏慶也、毛車爲祝著借之、仍遣畢、懸下簾遣之、是祝著之故、先懸下簾立之、乘用之期撤之云々、榻簾可遣黃金物內府庭座參料被借用了、仍不相具也、

〔日本紀略〕醍醐 延喜七年十月十七日辛酉、從三位宮道朝臣列子薨、帝之外祖母也、　十一月廿四日丁酉、停賀茂臨時祭、依列子事也、

〔日本紀略〕七圓融 天元三年十一月廿二日辛酉、賀茂臨時祭、奏宣命之間、從主殿寮人等候所、火焰忽起、〈○中略〉諸殿舍皆悉燒亡、　十二月五日甲戌、召陰陽寮、令占賀茂臨時祭可行否事、占云、被行不吉也、仍停止、　七日丙子、奉遣賀茂幣帛使、依臨時祭事也、〈○又見扶桑略記、濫觴抄、〉

〔左經記〕長元四年十一月廿四日丁酉、使左馬頭〈○源經賴〉於頭中將〈○源隆國〉宿廬儲舞人陪從等饌、及午刻御禊了、使以下給饌如常、申刻歌舞了向社頭、

〔續古事談〕二臣節 右大將通房、臨時祭ノ舞人セラレケルニ、宇治殿〈○藤原賴通〉ニテ、拍子合アリケルニ、人人參リアツマリテ、舞ノ師武方ニ纏頭セラレケリ、盃酌カサナリテ、人皆醉ニケリ、〈○下略〉

〔後撰和歌集〕雜十六 延喜御時、〈○醍醐〉賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりて、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事
外記日記云、寛平三年十一月廿四日庚午、休也、此日於鴨明神、有奉幣帛幷走馬之事、(○中略)
昌泰二年十一月十九日己酉、自内裏奉遣鴨使、是朱雀院太上天皇、(○宇多)恒例奉遣臨時使也、今上(○醍醐)相傳、始自今年被行也、

再興

〔公卿補任(光格)〕文化十一年十一月廿二日、賀茂臨時祭、(再興)使右兵衛督、(○飛鳥井雅光)舞人右權少將隆道朝臣、左權少將有言朝臣、侍從隆光、侍從公周、藏人兵庫權助源常顯、藏人左兵衛大尉大江俊常、陪從已下員數略如舊典、御禊庭座、(勸盃五獻、但略三獻、盃酌畢、)舞御覽等出御、幷被行還立御神樂、出御、傳奏甘露寺大納言、奉行定成朝臣、

延引

〔日本紀略(三村上)〕天暦元年十一月廿三日癸酉、賀茂臨時祭、依馬斃丙穢觸來内裏延引、　廿七日丁丑、賀茂臨時祭、式部大輔大江維時朝臣率舞人陪從等、參向社頭、
〔法成寺攝政記〕寛弘二年十二月六日庚辰、立臨時祭使、御禊後无歌音、召御前座如常、依庭濕、有南殿砌座、四五獻後、給夾頭花、使近江守知章、宣命有辭別、依穢延引由、事了退出、女房入夜出、
〔日本紀略(十三後一條)〕長和五年十二月十四日甲申、賀茂臨時祭、去月依大嘗會延引、參議賴定卿爲使、四位四人、五位四人、六位二人爲舞人、
〔中右記〕寛治三年十一月十九日、臨時祭延引、從一昨日依犬死穢也、　廿五日、臨時祭、内御物忌也、仍无御出、
延引例
〔年中行事秘抄(十一月)〕下酉日賀茂臨時祭事
寛治八年十一月廿三日賀茂臨時祭、依公家御藥(御疱瘡)延引、十二月六日癸酉、賀茂臨時祭也、依御藥延引、

存彼託宣、但件處陰陋、仍進男女分宛走馬十匹、次賜所騎鴨毛馬十匹、幷衣袴各一襲於舞人、令内藏寮穀倉院、幷後院儲辨所々酒饌、子三剋、時平朝臣還參曰、宇豆廣御幣平安奉畢、人々皆被酒而言曰、觀者如堵墻、車馬不能廻入之、後院辨備、最一賜別當書爲云々、○又見帝王編年記、一代要記、朝野群載、師遠年中行事、江談抄、歳中抄、皇年代略記、而扶桑略記、爲仁和四年十一月廿一日丙子、年中行事秘抄爲寛平元年十一月廿二日癸酉、如是院年代記、和漢合符爲三年、並誤、

〔大鏡 字多一〕寛平元年つちのとのとり十一月廿一日つちのとのとりの日、かもの臨時祭はじまる事、この御ときよりなり、つかひ右近衞中將時平きたのゝ御かたき、本院のおとゞの御事なり、○中略この御門いまだ位につかせ給はざりけるとき、十一月廿よ日の程に、かものみやしろのへんに、たかつかひあそびありきけるに、かものみやうじんたくせんし給ひけるやう、此へんに侍るおきなども也、はるはまつり多侍り、ふゆのいみじくつれ〴〵なるに、まつり給はらんと申たまへば、そのときにかものみやうじんのおほせらるゝとおぼえさせ給ひて、おのれはちからおよび候はず、おほやけに申させ給ふべき事にこそさぶらふなれど申させ給へば、ちからおよばせ給ひぬべきなればこそ申せ、いたくきやう〴〵なるふるまひなせさせ給ひそ、さ申やうありとて、ちかくなり侍るとて、かいけつやうにうせ給ひぬ、いかなる事にかと心えずおぼしめす程に、かく位につかせたまへりければ、りんじのまつりせさせたまへるぞかし、かもの明神のたくせんして、まつりせさせ給へと申させ給ふ日、とりの日にて侍ければ、やがて霜月のはてのとりの日、臨時の祭は侍るぞかし、あづまあそびのうたは、敏行の朝臣のよみけるぞかし、

ちはやぶるかものやしろのひめ小松よろづ世ふともいろはかはらじ、これは古今にいりて侍り、人みなしらせ給へる事なれども、いみじくよみ給へるぬしかな、いまにたえず、ひろごらせたまへる御すゑ、みかどゝ申すとも、いとかくやはおはします、位につかせ給ひて、二年といふにはじまれり、つかひ右近中將時平朝臣こそはし給ひけれ、○又見賀茂皇大神宮記、

起原

（不降雨、用晴儀）申刻許舞了退出、及子刻使等歸參、依降雨無御神樂、於弓場殿賜盃飯并祿、事了各退出、

〔吉續記〕文永四年十一月廿七日、雨下、今日賀茂臨時祭也、頭辨奉行、使中將公顯朝臣、南殿御裝束儀如常、垂母屋御簾、上庇御簾、第三間敷御拜座、御幣案立東中門內、（依雨儀也）使舞人參之後出御、（御位袍）頭中將褰御簾、御裾陪膳頭中將、役送光朝、御拜了入御、次撤御拜座、六位二人、昇殿上御倚子立之、次出御、頭中將召使、使舞人座、依雨儀敷中門廊砌下、（北上西面）陪膳座敷其末、閉中門、庭座之儀如常、公卿著殿上、予（○藤原定房）勤陪從勸盃云々、役人可尋記、二度了召頭辨勤之、頭辨予著壁下座、（奧座二行敷之、中門內也、頭辨著端、予在奧、舞人祗候時起座、）次使舞人渡北陣、有御見物、兩貫首近習殿上人祗候門下、　廿八日、有還立之儀、公卿（權中納言、中宮權大夫、花山院三位中將、著賛子、）頭中將伺天氣召使、爲晴之儀、庭座如常、侍從座敷之、而無著座之人、予勤使勸盃、（瓶子所來）爲一獻、所役殿上人（輔兼、仲兼、）只兩人也、

〔大鏡裏書〕賀茂臨時祭事

寬平（○宇多）御記云、寬平元年十月壬午、從一日雨少降、未登祚之時、鴨明神託人曰、自餘之神、一年得二度之祭、只予一度而已、其自弘仁始得齋女并百官供奉、不敢所怨、只極寂寞、然秋時欲得此幣帛、是所以囑汝也、掌侍答云、奉幣之事不難也、但君御德不堪其勢云々、仍去年調備馬十匹令馳、又習東舞、而選衞府官人之中堪歌曲者、爲陪從、內藏寮儲幣帛、依穢止、令藤原滋實與宮主於彼河邊祓祈、以昨日暮、同母妹卒、悲傷甚深、十一月廿一日己酉、辰二刻走馬并舞人等、奉向鴨社、以時平朝臣爲使、爰時平朝臣、於寢殿巽隅設御座、預掃部寮立高机於御座東方、是幣案也、內藏寮進捧幣三裹、置案上、松尾鴨社上下料也、內藏寮置解除物於御座前、而令宮主豐宗言曰、近衞開有死人穢、雖殊潔齋、而下人等若有觸犯者哉、今愼令祓申、而令時平朝臣捧幣、念願曰、朕微下時、託宣曰、他神明、皆一年得二度祭、我只一度而已、汝秋時當奉幣帛、答曰、身賤不任此事、又答宜曰、必當有可任此事之由、然則明神託宣、徵驗如此、即位之年、是諒闇也、次年卒然有穢、不能果行、今年僅得奉供、所願已足也、先拜松尾、次第拜之、心

雨儀

南北祭御下行(○中略)

一銀七百七拾八貫六百三拾五匁

是者賀茂下上社御下行米、合九百九拾八石貳斗五升、前同斷、

〔政事要略二十八〕清涼記下酉日賀茂臨時祭事(○中略)

雨儀

使宮主座、候仁壽殿西砌下、又立幣案其北、又預仰所司、立五丈幄於中庭、(東西妻也、爲立舞人也、)御禊訖、宮主等退出、宸儀入御之後、所司敷使舞人及垣下王卿座於仁壽殿西砌下、敷陪從南廊壁下、(○又見北山抄小野宮年中行事、)

〔世俗淺深秘抄下〕一臨時祭雨儀、藏人頭召使以下事、異晴時、使以下候弓場殿、若猶候瀧口方へ、以人仰可廻弓場方由也、於螺盃銅盞者同例、

〔小右記〕永觀二年十一月廿七日癸酉、臨時祭也、寅時供御湯殿、辰三點御禊、其儀如例、御禊可獲御裝束、即立御倚子、如常改御衣、著御麴塵、出御御座、先是所司敷庭中座、居衝重等、召使舞人陪從等、著座了、左右大臣(○源雅信、藤原兼家、)以下候座邊、次勸盃五六巡之後、賜重坏、了賜花勝、公卿侍臣共口執之、次行螺盃(下官(藤原實資)執之、左右丞相頭以相儀、仍所執也、)銅盞、(舞人螺盃、陪從銅盃、)畢諸司撤座、主上入御簾中、頃之出御、次召公卿、左右大臣以下候御前、(先是敷圓座、)公卿數多、仍敷圓座於長橋、參議著之、發歌笛聲、進立御前北邊、如常、舞人進舞駿河舞之間、小雨降、仍陪從立仁壽殿階隱、舞出了、雨脚止、如元陪從立本所、次求子、此間召衝重、令居公卿前、下官執盃、左大臣供御酒、御銚子左大將(朝光)執之、御肴物盤三位中將義懷執之、舞了、未二點被向口、此間降雪、

〔左經記〕萬壽二年十一月十九日丁酉、早旦參內、先御禊、次使(左頭中將顯基)幷舞人陪從等、於宿所聊進盃飯、次著御前座、(先使於殿上給宣命、)件座依降雨用雨儀、(上達部使舞人、仁壽殿西面中南上西面、陪從南廊中西上北面、)數巡之後賜插頭、次舞、(此間

用途

表袴十二領　掌侍兼子

合袴廿二腰　十腰經盛朝臣　十二腰親成

仁安三年十二月二日

定了御覽之後、下‐給藏人兵衛尉泰信‐

〔枕草子九〕見る物は　りんじのまつり、そらくもりてさむげなるに、雪すこしうちちりて、かざしの花あをずりなどにかゝりたる、えもいはずをかし、たちのさやのきはやかにくろうまだらにて、しろくひろう見えたるに、はんびのをのやうしたるやうにかゝりたる、ぢずりはかまの中より、こほりかとおどろくばかりなるうちめなど、すべていとめでたし、今すこしおほくわたらせまほしきに、使は必にくげなるもあるたびはめもとまらぬ、されど藤の花にかくされたるほどは、をかしう猶過ぬるかたを見おくらるゝに、べいじうのしなおくれたる、柳のしたがさねに、かざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いとたかくうちならして、賀茂の社のゆふだすきとうたひたるは、いとをかし、

〔吹塵錄皇室三十五追加〕御貢獻米并定例御下行〇中略

一米九百九拾八石貳斗五升

代銀百拾九貫七百九拾目

内米四百八拾石　勅使始庭上參勤

米貳百拾壹石七斗五升　下鳴一社御下行

米三百六石五斗　上賀茂同斷

是ハ賀茂下上社御下行前同斷

〔吹塵錄皇室三十五追加〕別御貢獻之分

仁平元、十一、廿五、或秘記曰、臨時祭舞人隆長、濃打衣、裏濃蘇芳掛二領、濃單衣、私儲之、

〔飾抄中〕尻鞘事

仁安二、十一、廿一、賀茂臨時祭、○中略舞人之時、故殿用竹豹尻鞘給也、

一番

馬臘

四品用之、舞人之時用之、著小忌之時或用之、臨時祭舞人等、依用之、馬臘有員、仍所役殿上人不用之故實云々、

鼻切沓或稱壁鼻

臨時之祭、○中略舞人試樂日、或用此沓也、○中略賀茂御幸試樂日、著火色下重用此沓、彼時予○源通方勤仕

五位舞人也、著例淺沓、

〔飾抄下〕移ウツシ○馬鞍

仁平元、十、廿三、臨時祭、舞人隆長、中將乘平文移御調之白差縄、

〔兵範記〕仁安三年十二月二日己丑、殿下○藤原基房申刻令參內給、○中略

賀茂臨時祭裝束

靑摺廿二領　十領輿侍忠子　十二領掌侍説子

下襲廿二領　蒲萄染十領輿侍綱子　柳色染十二領掌侍宏子

摺袴十腰　一腰中宮權大夫源朝臣○定房　一腰太皇太后宮大夫藤原朝臣○雅通　一腰權大納言藤原朝臣○實房　一腰中納言藤原朝臣○隆季　一腰左衛門督藤原朝臣○實國　一腰權中納言藤原朝臣○忠親　一腰權中納言藤原朝臣○兼雅　一腰參議平朝臣○親範　一腰參議藤原朝臣○家通　一腰右大辨藤原朝臣○實綱

使以下裝束

君みずや櫻山吹かざしきて神のめぐみにかゝる藤なみ

〔金葉和歌集九雜上〕藏人おりて、臨時の祭の陪從し侍りけるに、右中辨伊家がもとにつかはしける、

藤原惟信朝臣

やまぶきもおなじかざしの花なれど雲ゐのさくらなほぞ戀しき

〔政事要略二十八〕臨時祭裝束

天皇服位御服、把笏拜給御幣、但饗宴間、服白橡御服、其使四位裝束、除表衣袙等之外、皆以御衣、從殿上所給也、著魚袋淺履等、但衛府者、可著闕腋袍、舞人裝束青摺布袍、赤紐、(著左肩、小忌時著右肩之、)地摺袴、蒲萄染下襲、合袴、糸鞋、(除袙之外、自殿上所給、)牽御馬之時、以鞭插腰底、又陪從裝束、青摺布袍、赤紐、表袴合大口、淺履、除袙之外、從殿上所給、其舞人雖卷纓、不著緌、但陪從尚垂纓也、又舞人舞俑之間、其笏插腰底、(○又見西宮記)

〔世俗淺深秘抄上〕一主上臨時祭之時、著櫻下重、其時ハ可著同半臂也、而近代被用尋常半臂、僻事也、堀川院御時有沙汰、毎度著御櫻ノ半臂也、

〔餝抄下〕小忌(付赤紐)

仁安二、十一、廿一、賀茂臨時祭、(○中略)故殿(○源通親)著拜領小忌給也、但頸ヲ指改云々、

仁平元年十一、廿五、秘記曰、臨時祭舞人隆長、(少將)青摺私調之、當色頸紙、不合期故也、赤紐(有ニ蝙蝠)著左

摺袴(付下襲津賀利糸)

仁安二、十一、廿一、(○一本作四)賀茂臨時祭、(○中略)用公物、但三(○一本无三)乃下襲私用意、雖拜領下襲袴不著之、

近年令著狩袴云々、津賀利組私ニ儲之、(青白二筋)

仁平元、十一、廿五、或秘記曰、舞人隆長、(少將)摺袴、(當色津賀利組私儲之)濃袴(私儲之、當色袴依悪故也、)

打衣(付袙單衣)

仁安三、十一、廿一、賀茂臨時祭、殿記曰、私相儲紅打衣一領單等也、

上東門院姪、初勤舞人、仍上東門院〇一條后、藤原彰子於法成寺東門北御棧敷覽之、

〔兵範記〕仁安三年十二月二日己丑、殿下〇藤原基房申刻令參內給、次出御直廬、中將實守朝臣、令定中臨時祭事、其書樣、

賀茂臨時祭

使。　右近中將平朝臣〇盛宗

舞人。　知盛朝臣　伊保朝臣　賴實朝臣　泰通朝臣　季能　忠度　成定　家光　泰信　藤原盛仲

歌人。　俊光朝臣　國雅朝臣　賴定朝臣　經家朝臣　賴方　信綱　範光　賴經　在經　藤原有賴

笛　惟成

篳篥　橘仲俊

仁安三年十二月二日

〔仲資王記〕元久三年十一月廿日丁酉、裏書賀茂臨時祭也、使定季朝臣、侍從所勤仕舞人也、其儀裝束舊舞人可用給物歟、然而其體依異樣、靑摺已下今度猶調用之、諸大夫一人、侍三人、右衛門尉重康、左兵衛尉範隆、同尉藤滿良、藏人給十四人、雜色三人、各不禮小舍人童一人、二藍上下

〔嘉永明治年間錄〕三安政元年十一月二十日、賀茂下上兩社臨時祭、

十一月廿日乙酉、此日賀茂下上兩社臨時祭、勅使鷲尾右中將、舞人萬里小路侍從、裏松左兵衛佐、勸解由小路中務少輔、三條西侍從等ナリ、

〔續古今和歌集〕七神祇同〇賀茂臨時祭使つとめて侍ける時、としごろの舞人が陪從などしける事を思出て、神主重保にいひつかはしける、

藤原隆信朝臣

供奉職員

朝倉、次其駒、次人長立舞、退入之時、內藏官人賜腰差、絹疋、次給祿、使白業顯朝臣取之、舞人予取之、自後給之、次使已下退出、次宸儀入御、予候御簾、定光給御草鞋、次公卿退、小時退出、于時巳剋也、窮屈之外無他、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

藏人式云、下酉日賀茂臨時祭、前三十日、藏人頭於御前定使一人、幷舞人十人、陪從十二人、使用四位、舞人用五位帶劍者、若殿上人不足時、選諸司帶劍五位六位堪舞者補之、陪從選殿上並諸處堪歌者用之、及其裝束可調進之人々、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

外記日記云、寬平三年十一月廿四日庚午、休也、此日於鴨明神有奉幣帛幷走馬之事、勅使右兵衛督藤原朝臣高經、率遊男廿人參上下社、皆著青摺、歌舞如例、其遊男左右近少將、侍從、殿上藏人、衛府判官等奉仕、見之者車馬甚衆多也、○又見伊呂波字類抄、二十二社註式、諸社根元記、康富記、

〔榮花物語八初花〕臨時の祭になりぬ、殿の權中將○藤原道長子敎通いで給ふ、その日○寬弘五年十一月二十八日は、內○一條の御物忌なれば、殿も上達部も舞人の君達も、皆よゐにこもり給て、內わたりいまめかしげなる所々あり、殿のうへ○道長妻倫子もおはしませば、御乳母の命婦も、をかしき御遊にめもつかで、使の君をひとへにまほりたてまつりたり、かくて臨時の祭の日、藤宰相○行成の御隨身、ありしはこのふたを、この君の隨身にさしとらせていにけり、ありしはこのふたにかゞみいれて、沉の櫛、白かねの笄をいれて、使の君のびんかき給べき具とおぼしくてしたり、此はこのうちに、泥にてあし手をかきたるは、ありしかへしなるべし、

日影ぐさかゞやくほどやまがひけんますみの鏡くもらぬものを○又見紫式部日記、後拾遺和歌集、

〔左經記〕寬仁元年十一月廿日甲子、今日右中辨○藤原定家蒙仰、令削臨時祭日可書役雜色三人簡眞任、成任、定任、

二年十一月廿七日乙酉、參內、有賀茂臨時祭事、余○藤原經賴爲垣下、向下社、

〔日本紀略十四後一條〕長元八年十一月廿九日己酉、賀茂臨時祭、使中宮亮爲善朝臣、左少將通房○藤原賴通男、

言談之間、左宰相中將〈○藤原實家〉參會、令藏人時永取上在簀子之圓座、各居之、交談小時、使以下歸參、仍予〈○藤原實房〉幷實家卿著殿上座、此間頭權大夫光能朝臣來問今夜儀、粗示了、則又左頭中將定能、告出御之由、隨予相公共參著御前座、次內〈○內下恐脫藏字〉頭以下殿上人著座、次使以下著座、此間藤大納言權中納言等參著、御神樂之儀如例、人長賴文骨法不受體、容止頗別樣歟、仰召才男共之時、可召立公卿歟、而不召如何々々、只使以下也、左宰相中將實家、初著長橋代座、予令召著簀子敷座了、納言无人歟、可然之宰相一兩人候之時、召著此座、是故實也、入御以前公卿退下、予獨留候、入御之間平伏、其後退座了、

〔山槐記〕治承四年十二月七日乙酉、今日賀茂臨時祭也、〈○中略〉不可有還立御神樂由風聞、仍舞人陪從不歸參之間、猶有此事云々、使舞人經家、時實朝臣、陪從兩三參入、公卿、別當〈○平時忠〉平中納言〈○賴盛〉參入、公卿不勸盃、本拍子陪從經仲取之、今度始所取也、末拍子召人右將曹多好方取之、好方同歌庭火、希代之例也、辰刻許、御神樂始云々、近年公事有若亡、可悲、

〔勘仲記〕弘安七年十一月廿四日戊戌、曉更參內、臨時祭還立御神樂爲申沙汰也、堂上御裝束御倚子、幷公卿圓座等如晝、〈御座左供事燈〉右座中敷座、二行對座、〈西上〉本座〈南〉使加此座上、末座〈北〉舞人座後敷歌人座、其後敷近衞召人座〈炬屋南〉、敷人長座御階前、供庭燎、使已下至人長、內藏司居湯漬、〈主殿寮炭生火〉運明使舞人一兩行事等參入、予〈○藤原兼仲〉奏事由、小時出御、予參進褰御簾、定光參進御草鞋、著御倚子、藏人定光伺御氣色、召公卿花山院三位中將〈師藤〉著長橋、予參進於簀子、〈○中略〉召使已下出仙花門代戶、次使已下分著座、次勸盃、一獻使座業顯朝臣、〈瓶子所衆〉舞人座五位藏人經雄、〈瓶子同〉二三獻令略了、次人長參進、召仰諸司、〈主殿、掃部〉次使已下起座、次人長召笛、次篳篥、次和琴、次一歌、次二歌、次使已下次第居分、次人長申請可仰神宴之由、復座、次召人相分著座、次歌韓神之時人長立舞、次勸盃、本座予勸之、末座定光勸之、瓶子所衆、次人長進立召男共、先公卿、次使、次行事藏人、次歌人、次亂舞、次人長申請先張事復座、次歌、

家後可執本拍子歟、人長府生秦兼信、雞鳴以後事了、

〔中右記〕大治四年十一月廿九日癸酉、臨時祭也、〈○中略〉還立无御神樂、是嘉保三年冬、臨時祭例云々、依郁芳門院〈○白河皇女提子內親王〉御事也、被用彼年例云々、

○按ズルニ、此年七月七日、白河天皇崩御アリシヲ以テ、神樂ヲバ停メラレシナラン、

〔台記〕久安三年十一月廿五日乙酉、子刻參內、依還立也、先之使以下候前庭、新大納言〈伊通〉候簀子、余〈○藤原賴長〉加著、右中將教長卿參著長橋、伊通卿曰、近例納言以上候簀子、參議候長橋、〈出御臨時祭參御前□二□〉舊例人多、雖納言候長橋、人少雖參議候簀子、余卽命教長令候簀子、事了退出、

〔山槐記〕永曆元年十一月廿三日丁酉、亥刻歸參內、可有還立御神樂、御座如晝、不擬東庭、敷御神樂座、而間左少將通能雜色、於殿上口邊、傳主殿司云、美福門院〈○鳥羽后得子〉已令崩給云々、日來御重惱也、予付內侍申云、御神樂有無如何之、仰云、可申前關白、〈○藤原基實〉逐電參彼殿、尋職事不候、仍付近習侍申入、御返事云、可依先例、但所存不可候歟、卽又歸參申此旨、勅定云、不可有御神樂者、仍其由仰行事藏人了、退出、予始祗候所歸參也、但使舞人等祗候彼院、人々或自路頭、或陽明門邊馳參云々、於知足院邊各聞此事云々、亥刻許崩御云々、使舞人一人不候、仍祿不及沙汰也、

〔兵範記〕仁安三年十二月十六日癸卯、賀茂臨時祭、〈○中略〉亥時臨時祭還立、使以下參集瀧口戶方、公卿參著簀子座、先是東庭敷御神樂座、頭中將〈○藤原實家〉召使以下、次著座、次勸盃、初獻源大納言〈定房〉新中納言、〈邦綱、殿上五位二人取瓶子、〉二獻、參議家通、右大辨實綱、〈藏人二人取瓶子、〉三獻、右少將通能朝臣、藏人大進光雅、〈所衆取瓶子、〉御神樂次第如例、韓神之時有勸盃、左少將有房朝臣、藏人權佐經房、饒天事訖、使以下給祿退出、今度還立、下官〈○藤原信範〉不祗候、以傳說大略記之、

〔愚昧記〕治承元年十一月廿六日辛酉、臨時祭也、依有故障不參、但還立之時可參也、申刻許、參向殿〈○藤原基房〉亥刻許退去之後就寢、過夜半之後驚眠、攬髮著束帶參內、〈前駈仲信、又馬允親信在共、〉於淸涼殿弘廂、與中將

〔經信卿記〕永保元年十一月廿七日己酉、臨時祭也、○中略入夜内豎來云、可參内者、相扶所勞、可參仕之由令申了、次辨送消息云、早參入御氣色候者、亥刻參入、舞人陪從歸參、列立左衛門陣、予向使立所、下尻揖之、面使不下尻、尤奇怪事也、依入夜、更遷北殿上、參殿下、上達部殿上人少々祗候、有朗詠聲、予著奥座、依右大臣○藤原俊家被示、予勸盃、依所挾著否至小板敷、各及淵醉、雜藝无數、子刻被始神樂、曉更事訖、

〔中右記〕嘉承元年十一月廿一日、今日賀茂臨時祭也、○中略還立御神樂間、主上○堀河御于簾中也、

天仁元年十二月十六日辛卯、今夕无御神樂、依御物忌也、丑刻許、使以下歸參云々、

〔長秋記〕天永二年十二月八日、臨時祭、○中略還立舞人陪從、或入自仙華門代、或出自弓場殿東、非一同、見苦事也、一舞實能、著位階上臈之上、非先例、宗成後參加、居實能座、又顯親加居、又通季朝臣、著殿上人之上、前々御前座、雖頭隨位階著之歟、後聞季通顯親、依不渡大路勅勘、○又見中右記

〔中右記〕元永元年十一月廿五日癸酉、亥時許歸參内、殿下○藤原忠實内大臣殿○源雅實不令參給也、上臈多有障、不被參内、仍有別召、新大納言仲實被參加也、此外書人々參入、使以下歸參、北陣方出御、直衣依召大納言以下著御前座、殿上人任位階、著砌下座、北上頭中將依御氣色、召使以下、使以下著座、殿上人勸盃、三獻内竪官人勸盃人長人長右近府生象近進出、庭火前作法、御神樂取物了、又一獻、男共召、右兵衛督○藤原忠教使舞人實衡、重通、頭中將、陪從三四人、已及散樂前張、了内竪官人給祿、人長祿、殿上人取祿給、舞人以下、入御、人々退出、

保安元年十一月廿四日辛酉、賀茂臨時祭也、○中略使以下歸參、於弓場殿給祿、无御神樂云々、非御物忌、無御神樂、如何、但有故歟、

後聞弓場殿敷座居饗、三獻之後給祿、如春臨時祭○石清水後朝儀云々、

〔經信卿記〕大治二年十一月廿三日、臨時祭也、○中略還立神樂、被破御物忌、然而主上○崇徳御于簾中也、拍子本忠方、末家俊朝臣、

まに、よひのまにとうちあげ申たれば、けうありく〱おそしく〱と、とのばらの給はするに、君をしいのりおきつれば、とましたり、大との〇藤原兼家いみじうけうせさせ給て、おそしく〱とおほせらるれば、まだよふかくもおもほゆるかなと申たれば、いみじうけうじほめさせ給て、攝政どの、あこめの御ぞぬぎてたまはす、

〔法成寺攝政記〕寛弘三年十一月廿二日辛酉、臨時祭如常、〇中略爲見物還參候、御神樂舞人等歸來、儲食物、事了退去、

〔左經記〕寛仁元年十一月廿七日辛酉、今夜无御神樂、唯衆敢座殿上南廂西面、立大盤居饗、使等來著之後、盃酒兩三巡之後、各賜祿、殿上四位以下取之

長元四年十一月廿四日丁酉、及子刻、使等歸參、此間上達部於御宿廬飮食、又被儲使以下饌、丑刻有召、使以下著御前庭、御神樂如常、人長左近衞尾張安行、寅刻事了、使以下給祿、今日依御物忌、晝夜共御籠、以中垣東孫廂立御倚子、如常、又安行裝束、兼日有儀、著靑摺白裝狩袴白尻鞘、襪等、著草□内舍人參仕、人長之例、先日不催、仍相量被定仰云々、事了上下退出、

〔枕草子七〕なほ世にめでたきもの　賀茂のりんじのまつりは、かへりだちの御かぐらなどにこそなぐさめらるれ、庭火のけぶりのほそうのぼりたるに、かぐらの笛のおもしろうわなゝき、ほそう吹すましたるに、歌の聲もいとあはれにいみじくおもしろく、さむくさえ氷て、うちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるも、おぼえず、ざえのをのこどもめして、とびきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ、里なるときはたゞわたるを見るにあかねば、御やしろまで行て見る折もあり、おほきなる木のもとに車たてたれば、松のけぶりたなびきて、火のかげにはんひのを、きぬのつやも、ひるよりはこよなくまさりて見ゆる、はしの板をふみならしつゝ、こゑあはせてまふほどもいとをかしきに、水のながるゝおと、ふゑのこゑなどのあひたるは、まことに神もうれしとおぼしめすらんかし、

尹北、次常陸親王、及余北余使等奉仕御神樂、式部卿親王奏起座、召御厨子所也、左近將曹上毛野時見奉仕人長、至才男伊衡朝臣代之、召式部卿親王、雖然終不應、樂酣伊衡朝臣數進舞、使侍從庶明朝臣、舞人左少將源静、藤言行、左衛門佐藤原有正、左兵衛佐藤原朝頼、右馬助藤原有良、左衛門尉源俊、右衛門尉藤原正秀、左將監藤朝正、將監源俊、左兵衛尉橘實利、

天慶五年十一月九日、賀茂臨時祭、戌四剋使等從社還、余〇重明親王與右大將〇藤原實頼共勸坏、即依召候御前、餘卿隨進坏、同召令候、給酒肴如常、藤原清行彈琴、舞人堪歌者、并陪從依次試之、仰令分進本末方、琴取在座頭也、大忌時臣又依勅試一兩人、庭火試畢、以右近將監平安直爲本方琴取、即用殿上侍琴也、

天暦六年十二月十九日、臨時祭、〇中略子時還參、賜饗祿、無神宴云々、是依上皇〇朱雀心喪恐也、但依神事不關歌舞者、至社可發音、今在宮中擧樂、猶忌陣内、頗无所憚、

〔小右記〕永觀二年十一月廿七日癸酉、臨時祭也、〇中略亥二刻歸參、先是立幄一字於御前、子午妻四間也其座四行、南北相對如例、所司酒饌儲如常、著御直衣出御、右大將朝光、藤中納言顯光、三位中將義懷、參議伊陟、左兵衛督時光等候御前、頃之入御簾内、左將軍〇藤原朝光藤中納言、伊涉時光等不了事退出、御神樂如例、各召才男、三位中將應召、日外加之、事了頃、使以下賜祿、三位中將執祿、申時事了、侍從齋信時取、藏人左衛門尉宣教、御禊間不牽御馬、天氣不宜、仰云、今日間牽御馬男等、不可令候神樂座者、仍仰此由、不令候其座、又仰云、後日可召問者、曉更退出、

〔榮花物語〕三様々の悦五節もはてぬれば、りんじのまつり廿日あまりにせさせ給、試樂もをかしくてすぎにしを、まつりの日〇永延二年十一月のかへりあそび御前にてあるに、攝政どの〇藤原兼家をはじめたてまつりて、さべきとのばらてんじやう人、のこるなうさぶらひ給、このまひ人のなかに、六ゐ二人あるに、藏人のさゑもんのせう、うへの判官といふ源兼澄〇兼澄恐兼隆誤まひ人にてかはらけとりたるに、攝政どの御らんじて、まづいはひの和歌ひとつつかうまつるべしとおほせらる、ま

先張終、頭歌二朝倉曲一、歌人歌レ之、次歌二其駒一之時、人長立舞、此間藏司官人取レ祿差レ履、次侍臣賜二使已下祿一、使白掛一領、歌舞人白單衣各一領、次賜二召人祿一、(各絹一匹)内藏官人賜レ之、次使已下退出、次入御、次公卿已下退下、

〔夕拜備急至要抄 上十一月〕賀茂臨時祭、

還立御神樂外同二石淸水一、　御裝束(見二雲圖抄一)　本末座　庭燎　勸盃　出御時頭藏人可レ伺レ候、

〔年中行事秘抄 十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

御神樂事

有レ障若依レ雨无二御神樂一、於二弓場殿一給レ祿云々、今案用二五節後酉一、

〔公事根源 下十一月〕賀茂臨時祭　　下酉日

社頭の儀はて、使舞人歸參て、かへり立の儀有、孫廂に御障子をたつ、御引直衣に御草鞋をめす、額間より出御させたまふ、階の間のとほりの庭、南北二行に座をしきて、使舞人つくうしろに本末の神樂の所作人陪從近衞召人つく、出御有て、公卿めしあれば、簀子長階に候す、階の下に頭以下つきて、使舞人をめす、勸盃ありて、神樂あり、庭燎よりはじめて、朝倉其駒までうたふ、庭火にも、もろ歌あるべければ、人長さほふあり、御神樂はて、祿有、(○下略)

〔北山抄 二十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

延喜廿二、十一月廿一日、(○中略)亥刻神樂云々、給二御酒一、給二太子一(○朱雀)云々、或秘記云、此日季業、身依二輕服一不レ入二陪從一、而東宮入覲、爲二彼侍者一候矣、便有二勅命一、被レ召二闕庭火一、(今案、除服歟、但輕服人神樂間、依レ召參仕、非レ无二其例一、)

〔政事要略 二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

臨時祭無二御神樂一事(延長二年十一月廿七日、依二明日御前事一也、)

吏部記、延長三年十一月廿日、鴨臨時祭、(○中略)入レ夜使等還參、式部卿、彈正親王、下レ殿賜二使等酒一、(式部卿南、彈正

還立

朝臣給了、

〔日本紀略村上四〕天德四年十一月廿五日辛酉、賀茂臨時祭、宣命辭別、內裏火災、并天變物怪事被ㇾ載ㇾ之、

〔台記〕久安三年十一月廿五日乙酉、申刻參院、鳥羽○　卽參內、依二臨時祭一也、右中將經定卿過二陣頭一、相共著陣、余外　欲ㇾ奏二宣命一、內記曰、左將軍源雅定　被ㇾ奏了、仍著二殿上一、今案余服日數未ㇾ滿、除服　欲ㇾ奏二宣命一大失也、戌刻出御、余勸二盃一、取二插頭花一如ㇾ常、事了參二太后○崇德后藤原聖子　御在所一退出、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

藏人式云、○中略入夜使等歸參、音歌之聲不ㇾ休　卽御神樂事、掃部寮鋪二疊東庭一、爲二其座一、二行、南北對座、以ㇾ西爲ㇾ上、主殿寮庭燎、內藏寮辨二備酒饌一、所雜色等亦以坌送、殿上王卿侍臣遞勸二杯酌一、王卿勸杯之後、依ㇾ召候二御前一、其座如ㇾ晝、事畢賜ㇾ祿各有ㇾ差、使白褂一領、舞人陪從各白單細長、人長匹絹、召二內藏寮一、或賜二御衣一、王卿、○又見二本書所ㇾ引淸涼記、及北山抄一、

〔江家次第十一月〕賀茂臨時祭

神宴御裝束

御座幷王卿如ㇾ晝、侍臣座在二仁壽殿砌一、北上西面、藏人所座在二南廊壁下庭中一、去二御階一丈許、夾二御座間一、鋪二本末座一、本南末北、二行對座、用二黃端一、

使在二舞人座上一、本方　當二炬屋南一敷二人長座一、召人相分在二歌人後一、御階前主殿供二庭火一、立二金輪一燒薪、燒二件火一　官人膝突、御階北端、使已下人長已上座、內藏司居二湯漬一、有二衝重盆一、主殿置ㇾ炭生ㇾ火、出御、御直衣御插鞋、次公卿著座、

次侍臣所衆著座、次藏人頭傳召、次使已下分居、依二位階次第一　次人長著座、初獻、殿上四位二人相分勸盃、所衆取ㇾ杓、人長座、藏寮官人勸ㇾ之、准ㇾ可ㇾ知、或自二二獻一勸ㇾ之、二獻、同前、三獻、同前、無二四位一時五位役ㇾ之、次下ㇾ箸、次人長出召二仰諸司一、主殿掃部、

次令ㇾ立ㇾ座、次人長召二笛篳篥琴歌等一、笛本　篳篥末　和琴本　一歌本　二歌末　依ㇾ次居分畢、次笛篳篥相和、次使已下如二本分居一、次人長申二請可ㇾ勸二神樂一由一、次召人相分著座、各三人、節給ㇾ饌、生ㇾ火

次神樂、次歌二韓神一時、人長舞、次勸盃、同前　召人幷人長等、內藏官人勸ㇾ之、次人長申二請可ㇾ勸一、先張由、復座、次

人、官人退出、

次舞人牽₂廻御馬₁、（回₂舞殿₁、右馬部取₂片口₁、或隨身取ㇾ之、）三匝、畢引₂出南門外₁、直參進列₂舞殿坤庭₁、（東上北面、兩儀引₂立南門下₁、先一舞人引立、訖退ㇾ之後、二舞人引₂立之₁、次第牽立、畢參進、列₂立南門西廊內₁、東上北面、）此間陪從歌₂一二歌₁、（廻₂御馬₁畢止ㇾ歌、）次社人撤₂宣命座₁、次使參進立₂舞殿巽庭₁、（西面、兩儀立₂南門東廊內₁、加陪從上頭傾進立、）加陪從以下、次第進₂立使南₁、（卿退₂立西面₁、其末所作陪從又退列、又其列末人長退立、小舍人昇ㇾ擧在ㇾ前、）次舞人參₂進舞殿₁、駿河舞畢、下殿右袒、更昇₂舞求子₁、訖下殿、（爲ㇾ先₂下﨟₁、）次使退出、（加陪從已下相從、）至₂馬場西頭₁、（居₂胡床₁、）次舞人於₂南鳥居外₁騎馬至ㇾ南、（爲ㇾ先₂上﨟₁、）向ㇾ北馳走、（爲ㇾ先₂上﨟₁、雨儀搢ㇾ傘渡、）

次使以下入₂宿所₁、上下食事了、更催₂進發₁、先觸ㇾ使、又觸₂行事藏人₁、令ㇾ催₂舞人加陪從₁、又行事藏人仰₂出納₁、令ㇾ催₂所作陪從人長等₁、次御幣進發、參₂向上社₁、

○按ズルニ、本書上社ノ式ハ、下社ト大同小異ナルヲ以テ之ヲ略ス、

〔柱史抄上十一月〕下酉日賀茂臨時祭（其儀如₂石清水₁、）

宣命（用ㇾ[illegible]、紅紙、無₂內覽草奏等₁、）

天皇我詔旨止掛畏岐賀茂皇大神乃廣前仁恐美恐美毛申賜倍止申久、寬平御代與利奉出給布宇津乃御幣乎、官位姓名乎差使氐、令₂捧持₁氐、東遊走馬等乎調備天、奉出賜止波久、掛畏岐皇大神平久安久聞食氐、天皇朝廷乎寶位無ㇾ動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜天、天下國家乎平久安久守幸給倍止恐美恐美毛申給止波久申、

年十一月日

宇多天皇御時始₂有此事₁、

以上藤原孝範朝臣作也、宣命點如ㇾ元、○又見₂政事要略₁、

〔九條年中行事十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

御祓以前、上卿奏₂宣命₁、奏覽後召ㇾ使給ㇾ之、天慶二年十二月一日有₂件祭₁、而納言已上不ㇾ參、仍參議顯叢

歌人十餘人舁和琴、次列舞南殿、次馳御馬、藏司儲儀如例、垣下不來、自餘之儀如下社、入夜程歸參、有神宴事、歸參之時入建春門、左衞門陣設粥入盞、

〔園太曆〕延文元年十二月廿七日、被行賀茂臨時祭、藏人右少辨奉行、御宇已後初度也、○中略參社頭、先鴨社於南鳥居外下車、舞人一六行事少々參入、內藏寮案御幣、兼調著舞殿座、兩段再拜之後、讀宣命賜祝師云々、返祝後起座、舞人等廻御馬、東遊駿河舞等如例、次向上社、其儀同前、次歸參內、於弓場勸盃、一獻傳頭中將舞人、行知次賜祿、役人同前其後退出、于時申斜也、

〔溫故錄賀茂臨時祭〕社頭備忘○文化十一年再興式　下社儀

先至南鳥居外、舞人下馬、先是內藏官人史生等下馬次使以下各下馬、在鳥居外待社頭具御幣櫃、內藏官人史生衞士等候使、先拂在前、和琴、小舍人在傍、或隨行事藏人候其傍、舞人、御馬在前、馬部取口、已上在鳥居東方、北上西面重列、御幣櫃和琴在前列、使、加陪從、所作陪從、人長等、在鳥居西方、北上東面、加陪從聊退列、所作陪從人長等立後列、此間社傳奏參會、尋宮本具否事、具之後告可有參進旨於使、又觸行事藏人、令催立御幣以下、

次御幣以下、入鳥居參進、先前拂、次御幣、官人以下相從次和琴、次御馬、次舞人、先上臈次使、次加陪從、二行相並次所作陪從、二行相並次人長、御幣櫃入南門、舁居舞殿北庭中央、內藏官人史生衞士等、退候同東庭、北上西面、衞士在後列、前拂候衞士列末、舍丁留南門外、兩儀南門西廊內舁居之、官人已下候其傍、和琴留南門外、頗東方、西面前拂在前、兩儀南門外東廊軒下、舞人牽立御馬六匹於南門外、路之西頭、北上東面、使入南門後、更北面引立之、西上、兩儀馬部引立御馬、舞人列其前、使參進後、群立南門下及廊軒下等、爲弦兩者、御馬入馬繫、舞人直群立南門下及廊邊、次使入南門、於西廊舍、解劍洗手、主水司豫設廊舍邊、役之、兩儀廊舍下備之、加陪從以下、隨使入南門、列立舞殿巽庭、南門東廊前、西上北面、所作陪從聊退立、人長又退立、其列末、小舍人二人、舁琴在所作人前、兩儀同廊內、其列准晴、但人長聊東去立、此間內藏官人率史生衞士等參進、取出御幣、官人捧之安置中門左右案上、訖舁出御幣櫃於南門外、史生已下相從官人、留候使宜所、兼令進宣命於使、路留候同所、兩儀自西廊參進安御幣、

次使昇舞殿南階、先是內藏官人、於便宜所進宣命、著座、宮本儀設座讀宣命、兩段再拜如例此間禰宜取御幣物參進神殿、次禰宜還出、申奉納之由、次祝申返祝、拍手使應之、次祝昇舞殿授神祿、次使起座、入楼舍帶劍、先是於便所、預宣命於內藏官

今度停止條々

御禊之時物音　舞時北陣御覽　四五獻並傳盞儀　歸立御神樂

〔溫故錄賀茂臨時祭〕賀茂臨時祭次第（文化十一年十一月廿二日）

當日鷄鳴、行事藏人、懸舞人陪從裝束、（中略）次入御、（中略）次撤御幣并御座等、次諸卿著殿上、大臣召内記、令進宣命、（入筥、今度依爲再興、行草奏、）以職事奏聞、即返給、次大臣召使賜宣命、次大臣召内記返給空筥、此間奉仕庭座御裝束、孫廂南第三間敷二色綾毯代、立殿上御倚子、東庭敷黃端帖、爲使舞人座、（一行西面南上、舞人陪歟）（人絕席、）當火炬屋南敷人長座、（南面）當河竹東頭、敷綠端帖、爲垣下公卿座、（西上北面）南廊壁下、敷黃端帖、（二行）爲侍臣座、同廊南面、敷同帖、爲藏人所座、次藏寮居饌、（官人已下役之）今度豫居之、有下敷萬、次出御、（鞜座、御靴）藏人頭供御草鞋、次公卿著壁下座、藏人頭告御出之由、次藏人頭奉仰召使已下、次使已下著座、待召之間、於南廊戸外歌遊、次一獻、（中略）次舞人進出駿河舞、訖退竹臺東邊祖右、次求子、舞畢使已下退出、（爲先下萬）次入御、次公卿已下退出、次使率歌舞人、經北陣向社頭、垣下侍臣不向之、

〔枕草子九〕笛は　ひちりきは、いとむづかしう、秋の蟲をいはゞ、くつわむしなどにて、うたてけぢかく、きかまほしからず、ましてわろうふきたるはいとにくきに、りんじのまつりの日、いまだ御まへには出はてゞ、物のうしろにて、よこぶえをいみじう吹たてたる、あなおもしろときくほどに、なからばかりより、うちそへてふきのぼせたるほどこそ、たゞいみじううるはしきかみもたらん人も、みなたちあがりぬべき心ちぞする、やう／＼琴笛あはせてあゆみ出たるいみじうをかし、

社頭式

〔江家次第十一月十一〕賀茂臨時祭　社頭儀下

大藏立幄内藏寮儲饌、使已下著座、垣下侍臣相分勸盃、所衆取酌、垣下不向上社、及兩三巡、下箸畢居汁、湯漬如例、次使已下參社頭、次使讀宣命、有座、此間社司受幣物庭積等、次廻御馬三匝、次東遊、（使起座列、）

子駿河舞、如例破舞也、次入御、余褰簾、公卿平伏、次於北陣御覽使已下、如例、使雜色、白張薄色衣也、余此夜宿候、丑刻使以下歸參、有出御、（御引直衣、着御打衣、召御草鞋也、）參入公卿余（○藤原宗實）權大納言、左衞門督、右兵衞督等也、

〔園太暦〕延文元年十二月廿七日、被行賀茂臨時祭、藏人右少辨奉行、御宇（○後光嚴）之後初度也、爲使勤仕、子刻許督參、大辨勤仕雖有例、頗可謂不相應歟、然而依闕如、別勅及再三、仍所隨勅定也、行粧不及沙汰、任近例如形所出立也、

裝束色目如恒、（帶有文付魚袋）雜色四人、（不及當色、平禮上結、）侍一人、（下結帶劍）此外靑侍兩三來會、馬、馬副舍人等如例、丑一點人々參集、先有御禊、出御（頭辨候御履歟）頭辨獻御笏、陪膳頭中將、役送行知、舞人一再行事之外不用意馬云々、仍及違亂、假有沙汰、頭辨別申沙汰、馬一匹沙汰出歟、經時刻之後、御馬三匹引立、御禊儀如恒、（但陪膳不發物音、依神輿賢木事也、）事了入御、次按察大納言奏宣命、（大內記秀長參仕）賜使、（六位藏人藤原永季、出無名門召之、）兼綱入無名門、昇小板敷賜之、作法如恒、次使舞人等候瀧口、（記錄所南頭）頃之出御、（御裝束如恒）公卿按察使大納言、松殿中納言、萬里小路中納言、大宮三位中將等著壁下座、次頭中將出瀧口目行事、行事舞人富長進出、氣色之後向使目、其後加本列、次兼綱參進著座、其後舞人等相引次第著座、加陪從、重藤朝臣著座、其後中絕、無著座之人、奉行催促歟之處、長重朝臣以下、與重藤座列雜澁之由訴申云々、關白以頭辨再仰、兼再三令問答歟、旨趣不聞及、然而各無雌伏之儀歟、其間禁漏頻移、遙碧已曙、座薄砂冷、霜滿衣濕、每事難治、經時刻之後、重藤起座退、（後聞頭中辨召立云々）其後猶長重以下即不及著座、不審、頃之各著座、（人長今夜不參云々）一獻、（使座內藏頭敎言朝臣、陪從座行知、）二獻、（使座按察大納言、陪從座敎言朝臣、）按察大納言著垣下座、（五位殿上人賜衝重、）次箸下、次六位藏人（藤永秀）置插頭花臺、（銀盃銅臺紛失云々）次三獻、（使松殿中納言、陪從行知、）次所衆出納等、敷重盃圓座等、使座萬里小路中納言、舞人座三位中將、陪從座頭中將、次賜插頭花、（信兼賦之）按察大納言以下至五位殿上人秀長皆悉寄也、（但三位中將重盃以後早出云々）不足下臈一兩重役陪從花兼給之如何、其後自下臈次第退、（○中略）

有妊者不入社內、其代陪從迺御馬之例也、其由經家朝臣示之、範光爵之、非使非行事、構不可被知之由云々、中宮(高倉后平德子)○无打出、依東國逆亂歟、元三日同不可有打出云々、藤門(○平盛子)被命其旨云々、是依亂逆事云々、

〔玉海〕文治二年十一月卅日癸酉、此日賀茂臨時祭也、細雨雖間灑、不及濕衣、臨期不雨下、仍庭座用晴儀也、使內藏頭經家朝臣(高倉院御時一度勤仕、當今未役、)奉行職事左衛門權佐親雅、藏人兵衛尉業長等也、(即勤仕舞人)巳剋著直衣(前駈衣冠、隨身布衣、)參內、即親雅參入、申云、今日四位殿上人一切不參、就中於重盃者、多所用近衛將也、而隆保之外無領狀、各七八度雖加催、敢不承引、事已及闕如、爲之如何、余云、早馳參院可奏、於今者、私下知職事、奉旨一切不可叶、以別御定可被共責、爲自今以後、殊可有御沙汰之由、可奏旨同相含了、

建久二年十一月廿八日癸酉、此日賀茂臨時祭也、申刻著束帶參內、使以下舞人等一人未參、懈怠尤甚、仰長房令催之、參御所、御湯殿之間也、每事泥泥、尤不便、即催促女房等、召忠季信清等朝臣、召御髮御裝束等、此間頻以催促舞人、公卿等皆參入、使猶以不參、數度遣使者了云々、此間余仰長房令御幣幷使宮主等坐於西面、是堀川院東對例也、(元曆東面也、)日入之程使參入、即御禊如例、(舞人引御馬之間有論、仍暫依平數御座、)(不召御草鞋例也、)入御之後敷庭座、此間頭中將實明朝臣覽宣命、(上卿左大將也、)見了返給、次改御袍(青色)也、出御倚子、(今度召草鞋也、)余經御前簀子向鬼間方、次仰實明告出御之由於公卿、次左大將已下著壁下座、次實明進候年中行事障子下、隨余同經前庭召使已下、(經座之後、此人作法、定有存旨歟、)經本路歸入、次使以下參著、(于時秉燭以後也)次一獻、(內藏頭定輔朝臣、)次二獻、(左大將、著垣下座、居衡重、)次立螺盃銅盞幷插頭花臺等、次三獻、(藤中納言定能、不著垣下、)次重坏、左近少將雅親朝臣、宗國朝臣等也、陪從座藏人右衛門權佐長房、歸路之次進寄長橋下、次左大將已下次第賜插頭花、各復殿上座、(六位藏人插頭花、公卿取之也、)次入御、(未脫御草鞋、即可出御之故也、)次撤庭座幷簀子敷圓座、次出御、余著簀子圓座、次以宗頼朝臣召公卿、次左大將已下參著御前座、次殿上人著座、仰宗頼召使已下、次參上、求

人少辨實光、歌舞了渡北陣幷院（○白河）御所東御門前、經東洞院一條大路等也、抑平忠盛舞人、道施光花、爲事驚耳目、誠希代之勝事也、

大治二年十一月廿三日、臨時祭也、當御物忌、使修理大夫顯盛朝臣、未時事始、御禊了、庭座四獻、內大臣以下重盃、季成朝臣、公教云々、經親舞間、頭中將（○藤原忠宗）仰一舞、藏人少將教長、（止顯能仰一人）今日右衛門權佐顯能、被聽昇殿、依入舞人也、乍著舞人裝束、解劍昇殿付簡、女院（○鳥羽后藤原璋子）御于二間也、女房打出、公卿八人、

〔山槐記〕治承四年十二月七日乙酉、今日賀茂臨時祭也、（○中略）予（○藤原忠親）不參內、藏人宮內權少輔親經奉行云々、傳聞秉燭後御禊、（○中略）依雪中門敷庭座、（五條殿東中門也）依庭狹不悉著、使新宰相中將（通親、依代始用公卿、）舞人四位四人、（中務權大輔經家、左少將有房、左少將時實、右馬權頭基輔、）五位四人、（右少將實明、侍從隆保、中務少輔隆盛、左衛門佐公清、）六位二人、（藏人左衛門尉泰輔、非藏人左衛門尉在高、）陪從四位四人、（前皇后宮大進資泰、和泉守季長、前下總守高佐、攝津守以政、）五位二人、（散位信賢、散位俊宗、）參仕公卿、三條大納言、（實房）中御門大納言、（宗家）華山院中納言、（兼雅）別當、（時忠）平中納言、（賴盛）右大將、（良通）藤中納言、（成範）右衛門督、（實家）右兵衛督、（宗通）右宰相中將、（實守）三位中將、（賴實）藤宰相、（定能）依東國亂此門警固也、大理負平胡籙、其外右大將以下、衛府皆用壺胡籙云々、御禊陪膳右中將清通朝臣、（頭重衡朝臣不參、頭經房朝臣雖參入、依輕服日數內不勤之、）陪膳藏人宮內權少輔親經云々、藏人左少辨行隆、獻御笏、有無三獻無傳盃云々、右武衛被示送、必勸盃之時、可取加弓於盃哉否事、人々存旨樣々、或曰、朝覲行幸之時、頭中將勸盃不持弓、不可持歟、或又猶可持云々、或持弓勸重坏役左廻者也、予案之、猶可持弓歟、凡可持歸物之時者不取弓、置物歸之時者持之上、公卿放盃不揖、不持弓退歸、似无便歟、朝覲行幸、御前物役人勸盃人雖不持之、掌堂儀若可然歟、天慶三年御齋會內論義、祿人置弓、而弓場始所掌、持加弓於硯、簾中儀大爲取奏之時、取加杖於弓、御賀取獻物之時、又取加弓、庭中之儀猶取不可爲可、不可案事也、參否、今一人華山院中納言云々、於社頭、中務權大輔經家朝臣、陪膳範光鬪諍過法、相互放言、事趣者左少將有房朝臣依

經大炊御門京極、於近衞邊分散、過院北御門前、院於御所御見物、公卿於門前見之、舞人皆雜色裝束或有取物、口取過差美麗、顯國、能明二人、无雜色裝束、中將殿御馬鐙二人、近末敦利雜色八人、取物四人、紅梅唐綾裏打狩衣、袴紅梅紐物、小舍人童二人、御隨身四人、使宰相中將步行、欲渡御門前之處、有仰騎馬渡之、殿下鐵被御馬馬副八人、雜色十人、柳狩衣袴取物四人、菅笠風流、无中將殿於一條殿、分乘替御馬給也、仍攝政殿、右大將、權大納言、右衞門督、予、治部卿、參入彼殿、聊有御儲、御共人諸大夫泰仲朝臣以下廿人皆衣冠、侯院北邊、人人八人相加、中將殿乍御馬引廻南庭、爲御覽一條殿也、

元永元年十一月廿五日癸酉、賀茂臨時祭也、今朝御禊了、○中略主上○鳥羽出御、殿下御殿上頭辨○源顯通告之、內大臣、予、○藤原宗忠別當、○藤原忠敎藤宰相、宰相中將三人、○藤原實隆、同通季、同信通、右兵衞督、○藤原實行著壁下座、頭中將依召參御前、向北廊方召使以下、使忠宗朝臣、舞人實衡、盛家、重通、忠能、通基、顯保、公敎、季成、藏人顯兼行事右衞門尉邦忠、地下陪從時俊朝臣、家保朝臣以下著座、畢一獻內藏頭長實朝臣、藏人辨實光二獻內大臣、經忠朝臣三獻予、雅定朝臣置三獻許可有之由議定、仍予不著庭中座、歸著壁下座、件盃巡流、陪從發歌笛聲、藏人置螺盃銅盞、雜色所衆等置圓座、重盃實能朝臣、成通朝臣、實光、內大臣以下、及殿上人、給插頭花、使以下起座、入御撤座、重又出御、內大臣以下著御前座、殿上人著壁下座、頭中將依仰召使以下、發一二歌、進出竹臺北邊、頭中將仰一舞、重通一人也、止盛家、實衡本上臈也、舞了使以下渡北陣、密々御覽、使院○白河御馬幷府生敦利末利纜、又土佐守顯保、兵衞佐院近衞舍人二人爲纜、諸大夫纜二人、殊不見事歟、又渡院御所西御門前、御覽、申刻事了、近代未見事也、必口膳事也、　二年十一月十九日、賀茂臨時祭也、予○藤原宗忠不參仕、老者於臨時祭者、絕不參入事也、仍不見件儀、後聞未刻御禊始、殿下○藤原忠實內大臣、○藤原忠通藤大納言、○家忠右衞門督、○源顯通別當、○藤原忠敎新中納言、○源有仁宰相中將三人、○藤原實隆、同通季、同信通、右兵衞督、○藤原實行參仕、使家隆朝臣、舞人少納言忠能、兵衞佐忠隆、依爲位階上臈爲一舞、季成、公敎、公隆、新舞人顯賴、忠盛、馬頭、伯耆守、新舞人、藏人顯憲、國能、四位陪從家保、時俊朝臣、三獻重盛、實能、成通朝臣、藏

道時朝臣、舞人有賢、惟信（地下）宗輔、家俊、實隆、家政、藏人左近將監仲兼、行事左兵衛尉源家俊、（地下）陪從宗季朝臣、定實朝臣以下、初獻舞人宗忠、陪從時範、舞人二人、（成宗、隆長、候陣外、依宿也、）二獻以下新大納言、（家）次第及五獻、次重杯、（師隆、宗信朝臣、通輔、）次插頭花、（時範取之、舞人々々、）人々起座、公卿依召候簀子敷、關白新大納言、（宗）右衛門督、（公）左大將、（忠）左宰相中將、（保）三位侍從、（能）右宰相中將、（仲）左大將、（季）新宰相中將、（宗）殿上人候座、時範召之、庭中歌舞、次仰一舞、（宗輔、宗政、通輔、仰了、）舞了從西洞院騎馬、渡北陣方、主上（○堀河）密々御覽、兩殿下公卿殿上人、多以祗候、漸及酉刻、无御神樂、依御物忌也、居饗於弓場殿、勸盃給祿也、今日中門廊板敷未放也、仍中門東敷座、被用南脇戶出入、參議之座中門東庇也、晚頭退出、宣命有辭別、主上依御疱瘡、式日延引、幷今年御愼之由、大內記在良大納言付通輔被奏草幷清書、於殿上給使、

天仁元年十二月十六日辛卯、今日又御物忌也、臨時祭人々、多以參籠、未明給裝束於舞人以下、（陪從藏人、代始時如此、舞人直衣、）殿下（○藤原忠實）令候給者、早旦（○中略）南庭東西行敷舞人陪從座（○東上北面、中略）藏人頭實隆、依御氣色、於東中門召使以下、使宰相以下著庭中座、（舞人九人、左衛門尉不參、籠候陣外、）一獻、（藏人頭□□、內藏頭爲房、藏人辨顯隆、）二獻、（右大將長實朝臣、）大將著庭中座、居衡重、攝政殿加著庭中座給、（五位二人、爲隆、宗成、居衡重、）三獻、（權大納言經忠朝臣、經實）使宰相取杯起座、進殿下之後、取續杓、（後日民部卿、下可取續杓之由被難云々、但此事又何事之有哉、）殿下召舞人、上﨟顯國朝臣給盃、顯國指大將、大將又指舞人、信通巡流、陪從發歌笛聲、藏人插頭花置長橋、又置螺杯銅蓋、四獻、按察中納言宗通、長忠朝臣、使以下舞人等巡流如三獻、但按察中納言依垣下座席狹少、還著壁下座、五獻、（右衛門督能實、顯實朝臣、巡流、不及垣下座也、）次置圓座重杯、權中納言顯通、（宗通子）左兵衛督能俊、（藏人頭有成子）陪從座藏人頭實隆朝臣、（藏人頭子）攝政殿令取使插頭花給、右大將以下公卿殿上人次第取之、（藏人辨顯隆修奉）使以下起座、於中門外撤庭中座、了敷公卿座於簀子敷、（圓座）殿下先令候給、頭爲房召公卿、右大將以下候之、兩貫首（○藤原實隆、同爲房、）以下候壁下座、依殿下御氣色、頭爲房出中門、召使以下、（著否）陪從等發歌笛聲、（四位四人、俊賴、有賢、家俊、家保、）舞人參進列舞之、（舞頗略之、古實也、）事了退出、于時申刻也、攝政殿引率公卿、近々之間、步行令參院（○白河）御所給、（大炊御門萬里小路也、）爲臨時祭道、

酒云々、所司立幄庭中、內藏寮給酒饌、如常、次太子參上、自瀧口參上、候御座北間、王卿勸盃參上、候南階簀子、左衞門督藤原朝臣〇仲平候北簀子、爲大夫〇春宮也、

〇按ズルニ、螺盃及ビ銅盞ヲ以テ、舞人陪從ニ酒ヲ給フコトハ、既ニ延喜三年ノ祭ニ行ヒシ由、江次第抄ニ見ユ、附シテ參考ニ供ス、

〔政事要略〕二十八十一月下酉賀茂臨時祭事

吏部記、延長三年十一月廿日、鴨臨時祭、宮主供奉、御禊畢退、使起座、進捧西一幣之、上起拜、次捧第三幣、次第五幣御拜、畢使拜、畢使等退、第一廳內藏助賜之、王公未著座前勸之、有勅式部卿、彈正尹親王、侍從殿東欄、其間長階南座、酒巡至大納言、有勅令勸式部卿、舞了退向御社、〇下略、又見北山抄、日本紀略、

〔小右記〕長和三年十一月廿七日己酉、臨時祭、午刻許參內、左大臣〇藤原道長候殿上、未刻御禊、〇中略御禊後給座居突重、次出御、此間左大臣已下候軒廊、藏人頭朝經、應召奉勅、召使已下、次第著座、一獻頭辨朝經、二獻左大臣、三獻大納言道綱、次居汁物、次四獻予、〇藤原實資次大納言賴通、次重坏、其後左大臣已下、執插頭給使舞人等、參議通任執陪從插頭、次三位中將能信欲執插頭、左大臣云、上達部不候、陪從插頭如何、予答云、更不見事也、仍不令取之、近候不知前跡歟、入御後撤座掃除、敷圓座御前簀子并長橋、次出御御座、次以藏人頭朝經召諸卿、次第參上候御前、參議者候長橋、朝經蒙仰一舞、經親、經任、度御前、仰云、左大臣朝經仰行事藏人、不可然、可仰各舞人者、其口問予、不見前例、如左府命、一歌保命、二歌爲信、求子了間、漸及黃昏、若上達部見物已及秉燭、左大臣、中宮大夫道綱、予、源中納言俊賢、尹中納言時光、修理大夫通任、不見物、藏人式部丞雅康、仰可候御神樂之由、稱有所勞之由退出、實有方忌之故也、其由內々相承了、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年十二月六日癸酉、御物忌也、有賀茂臨時祭、〇中略早旦依例賜裝束於舞人陪從等、關白殿〔藤原師通〕令候給、〇中略次庭中敷座立御倚子、但无出御、大殿令候簾中給、藏人兵部大輔通輔召之、使

頭、依仰傳召（其路如初著履）　次使歌人等參進、於竹臺邊發歌笛、所雜色若采昇御琴、或此間被仰一舞、

次舞畢使已下退出　次入御　次公卿已下退下　次使率歌人舞人向社頭、

〔世俗淺深秘抄上〕一臨時祭庭座時、可然殿上人奉仕重杯役、昔者大飲之人勤之、近代華族輩勤仕之、五獻了程、藏人所雜色敷圓座使前第五舞前也、其役人入自仙華門、經舞人之後末陪從座上著圓座、（不脱沓）南面左足不直、置杯於圓座上、或置座邊地、次引寄下襲テ、取杯受酒、自座下受之、（東方也）杯ハ小土器也、尻居同總五獻也、仍加尻居テ、小土器十也、然而必不然、或七八或六七有之、然而不足時、於取處仰少由、但有七八許者、重不及仰、盛酒飲、又盛擬使、次第巡流、巡至南三人程、久受酒飲、又受テ擬使如初、如此三獻擬了、目瓶子取藏人所衆令退、次所遣土器ヲ推入圓座下、起サマ爾以右膝破之也、圓座下ヘ推入時、土器ヲタツブシ爾ナシテ推入也、右廻經本路退、以膝破時、故膝寄テ破、甚見苦敷事也、元來右膝圓座ノ端ヘ進出テ居也、推入時、膝下ヘ入也、以膝破ト不見樣爾可破也、是故實也、里亭儀、於西禮者、不可違大内、於東禮、可以左替右、於作法者不可違、膝突樣右廻等、東禮皆可違也、重杯七以上者、雖不滿十、不能召加、若有六者、必可召加、況於六以下勿論也、有七者三獻擬了後、爲破一也、一顛雖少非強難者也、

臨時祭庭座時、中間主上入御時、壁下公卿大臣以下皆可平伏、雖隔座、參議同平伏也、

臨時祭時、壁下座參議自後著之也、此事多自前著由人々執之、然而猶可自後著之、菩提院入道同申此旨也、

〔北山抄十二十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

延喜廿二（○二、一本作一）年十一月廿二（○二、一本作三）日、皇太子（○朱雀）參上、（自侍方參上、其座御座南同北面、用茵一枚）、御廚子所（○御廚子所、一本作內膳司）供御酒、又給太子（高杯四基）、七八巡後、舞人螺盃、陪從以銅盞例也、午四刻、於御前歌舞、王卿候南橋上、太子暫罷下弘徽殿、依召參上、（候御前御障子下、下御座）御廚子所供御膳（於御座、以御臺二臺供之）　次賜太子（高杯六基）　次供御

六巡後、使以下座前敷円座三枚、一枚使前、一枚舞人座中間、一枚陪従前敷之、勧重盃、召殿上高戸者為之、七八巡後、乍在座奏歌管、王卿侍臣各取挿頭花給之、次以螺盃銅盞賜一巡、使等起座、宸儀入御、内蔵官人○此間一本有蔵人二字所人撤饌、掃部寮撤座、主殿寮掃除、畢又出御、王卿依召参上、使率舞人陪従等奏歌舞、若試楽日不被定御一舞之時、此間令仰任次第奉仕者、更不仰之、訖退出参社頭、差遣垣下侍臣五六許人、或有仰遣王卿、又仰中務省差遣侍従、

〔江家次第十一〕賀茂臨時祭

雞鳴懸舞人陪従装束、○中略　次拝両段再拝　次使安幣退出　次入御　次撤御幣并御座等　次奉仕御装束　其儀南第三間敷二色綾毯代、立殿上御倚子、神楽時同之、次東庭鋪黄端帖、為使舞人座、一行西面南上、但舞人与歌人総座、當河竹東頭敷黄端帖、為垣下公卿座、西上北面、南廊壁下、敷黄端帖、為侍臣座、但公卿著之、　同廊南面敷同帖、為蔵人所座、　次蔵寮居饌官人已下役之　此間上卿奏宣命或出御後奏之　次賜使於小板敷賜之、御物忌時於障賜之、

次出御鋪座御靴、御草鞋、○次以下十字據一本補　次公卿著壁下座蔵人頭告御出由、可尋、　次蔵人頭奉仰、召使已下、其路経公卿後渡呉竹西、於北廊下告召成由、帰時経呉竹後、出自仁寿殿西砌南第二間、不著履、　次使已下著座　待召之間、於北廊戸外歌遊、入同戸著座、使著舞人上、　一献　使舞人内蔵頭若蔵人頭勧之、雑色取瓶子、歌人殿上五位勧之、所衆執瓶子、　二献　使公卿勧之、殿上五位執瓶子、　歌人殿上四位勧之、所衆取瓶子、　公卿著垣下座、勧事著之、下効之、　賜衝重、殿上五位六位役之　三献同前、公卿著垣下座、賜肴物同前、　次歌人発物声　次立挿頭華、結藁為台差之、蔵人取之立長橋馬道西妻、　次安螺坏銅盞　銅盞上重螺坏、蔵人徒手取之、安長橋馬道西妻、挿頭華在南、螺坏在北、　四献同前　五献同前　或公卿不著垣下座、近代不過五献、如式文者、可及七八巡献、　次賜重坏円座　雑色以下取之、舞人座前二枚、歌人座前一枚敷之、　次賜重坏　舞人殿上四位二人勧之、所衆取杓、　歌人殿上五位一人勧之、所衆取杓、　次賜挿頭華　五位蔵人賦之、公卿并侍臣取之、来座前賜之、　次使已下退出自下退出　次入御　次撤庭中座并饌等　次主殿掃除庭中、

次賜公卿円座、南第一二間簀子、并長橋敷之、可随公卿員数、参議在長橋、　次出御　次公卿著座　次侍臣著座壁下　次蔵人

二枚、爲使及宮主座、（相去六七許尺、宮主座在西、使座差東在東南、雨湿之時、候仁壽殿西下、）次内藏寮入自仙華門、立高机二脚、次捧持御幣、安置机上、（御幣六裹、東西各置三裹、以西爲上、）時剋出御、同寮奉御贖物、藏人自侍方傳取供之、次使及宮主、自仙華門參入著座、次舞人率御馬、自北廊東戸參入、御禊畢、陪從於北廊外發歌笛音、宮主退出、次御馬、次撤御贖物、次使起座、就机邊捧御幣而立、奉拜畢、使退出、卽撤御幣及机、次撤御座、次撤庭中座、次鋪二色綾毯代、立侍御倚子、（御室所如初、御神樂時若同、亦太子參入時、御御座南間鋪茵、爲其座、北面、）次掃部寮鋪黄端疊東庭、爲使舞人陪從座、（一行西面南上、但陪從座頗以絶席、）又使等座南邊鋪緑端疊、爲垣下王卿座、（北面西上、雨湿之時、仰大藏省木工寮、南北四間合立幄、使舞人座二行、西面南上、王卿座在使等座南、北面西上、陪從座在仁壽殿西砌下、西面南上、若雨雪不休、不撤件幄、爲歸參也、）内藏寮辨備酒饌、所雜色等盆送之、上卿參射場、可給宣命使之弓場邊、介奏宣命、御覽之後返給、出御之後、依召使率舞人陪從等、自北廊戸參入著座、（候召之間、戸外歌遊之、）殿上王卿勸盃著座、（陪從之座、侍臣勸盃、若殿上公卿多不參時、召非殿上公卿、候使及陪從座上、鋪所菅圓座、爲勸盃侍臣座、）御廚子所、供御酒等、（皇太子候時、同賜太子、御廚子所辨備高坏四本、）七八巡之後、王卿侍臣各取挿頭花賜之、次螺盃銅盞各賜一巡、（螺盃使舞人等料、銅盞陪從料、藏人奉仰、取件兩盞、授勸盃者、）使等起座、雜色等撤饌、掃部寮撤座、主殿寮掃除而後、殿上王卿依召參上候之、（敷所管圓座、南第一二間簀子爲其座、皇太子若候、王卿座南長椅、）使更率舞人陪從等、管絃歌遊參入、立呉竹頭、依例歌舞、事畢退出、參進社頭、穀倉院辨備酒饌於下社邊、賜使以下、爰差遣或仰中務省差遣侍從等、（○或以下十字恐侍者宜入）垣下侍臣五許人、（多少隨時、或有御遊公卿之、）同院亦儲酒肴於上社邊、

○按ズルニ、右ニ揭グル、政事要略ハ、祭式ヲ總括スルモノナレドモ、之ヲ割裂スル時ハ、恐クハ意義ノ通ゼザルモノアラン、依テ他項ニ屬スベキモノヲモ此ニ併載ス

〔北山抄 二 十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

御禊訖、上卿參射場邊、介奏宣命、返給召使給之、（或召陣座給之、近例多於小板敷給之、若遲引、著庭中座後、召公卿座給之、康保二年例也、）時刻出御、（先是藏人所人等、居使以下饌、）使率舞人陪從等參入著座、（御禊畢卽吹調子、候召之間、戸外歌遊、）殿上王卿勸盃著庭中座、（初内藏頭若藏人頭勸之、二巡以後、公卿所勸也、故實必盡獻巡、著座後給衝重、或只召加非殿上公卿、藏人式云、使及陪從座上、敷菅圓座、爲勸盃座云云、近例不設之、本座上置其所、）侍臣勸盃陪從座、五

殿上東戸、進候第二間簀子、(北面置毛付文於前、)仰藏人令引御馬、先左六疋引之、(近代員數不定也、)自瀧口引入、三匝之後、一御馬當御前之時、仰云乘リ、御馬乘小騎之、(忠經稱所勞之由、引立御馬於竹臺東、不騎、太奇怪事也、)三匝之後、仰云下リ、次引出畢、次右六匹、次第同前引出了、左廻出殿上毛付文、(○此間恐有脱字、)於行事藏人罷出畢、

〔玉海〕文治三年十一月廿二日己未、實教朝臣申云、臨時祭御馬御覽、今日可候也、今一日可候歟、主上(○後鳥羽)又出御南面、(未改裝束間也、)次毛付將忠季、持毛付參候南簀子、(西面被置毛付於前、)召男共、藏人參上、仰御馬可引之由、即左寮御馬五匹牽之、(御馬乘隨身各一人引之、但今一人不足之間、先引四匹、右御馬乘渡而可引歟之由藏人申之、余同云、右乘尻餘五人者被召渡、何事之有哉、爲滿員也、若無餘分者、當座召渡引右御馬之時又如何、只覽四匹了、更一人退下、可引今一匹御馬也、忠季同申、被召渡之條不打任之由也、)兩三匝引廻之後、忠季仰云、乘リ、(如引音仰之、)即各乘之、兩三匝打廻之後、又仰云、下リ、(如初、)次牽出御馬了、最末一人更引出一匹、即乘之、打廻之後引出了、(今度無引音仰之儀、)次右寮御馬五匹引候、(忠季召男共仰之如初、)漸及昏黑、仍余(○藤原兼實、)一匝之後、仰可令乘之由、忠季即仰之條騎之、一兩廻之後下了、(忠季同之如初、)次牽出御馬之間忠季又退下、次余退下直廬改著直衣、直退出了、

〔伏見院御記〕弘安十年十二月四日庚申、入夜臨時祭御馬御覽也、左右馬寮(各五疋、)進之、毛付佐資隆朝臣候簀子、播磨有次引之、(前關白番長云々、自西中門引入之、)秦頼廉(關白下臈、)佐伯弘勝(右大將下臈、)騎之、主殿寮階東西立明、垂清涼殿庇御簾、於其內見之、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

藏人式云、下酉日、賀茂臨時祭、前三十日、藏人頭於御前定使一人幷舞人十人、陪從十二人、(使用四位、舞人用五位帶劒者、若殿上人不足時、選諸司帶劒五位六位堪舞者補之、陪從選殿上幷諸處堪歌者用之、)及其裝束可調進之人々、(○中略)當日早朝賜使御衣、(蘇芳御下襲、綾表袴、袷袴也、)賜舞人陪從等裝束、(舞人竹文青摺袍、蒲萄染下襲、地摺袴、陪從樓攔文青摺袍、柳色下襲、白表袴、合大口、侍前賜之、但赤紐自所給之、又人長裝束、仰內藏寮令給之、)作物所進插頭花廿三枚、(藤花一枚使料、櫻花十枚舞人料、山吹花十二枚陪從料、先給料物令作之、)於是先下東廂御簾、掃部寮孫庇南第三間、鋪小筵二枚、其上供半疊、(北面、)當南階北端庭中、鋪葉薦、爲御幣机下敷、其南去一許丈鋪菅圓座

御馬御覽

猶遲參、此間三位中將二人參入坐殿上、予(○藤原定家)加其中、少時內大臣殿(○藤原道家)令參給、予(在奧)起出、無名門外、(依家禮也)昇小板敷、令著給了、予又還著、次家衡卿參入、加基嗣卿上、(家衡座、此中將被坐東二間、仍家衡卿在普通中納言座、)博陸(○近衛家實)加座上給、二人平伏、家衡卿下沓脫、家良卿動座歟、御座定家衡還著之後、又揖退下、(座次無常歟)次藤大納言、(師、奧、)新大納言、(具、端、)土御門中納言、(定、奧、)二位中納言、(忠、端、)左宰相中將、(頼、端、)各參著、使參入、御禊始云云、博陸立給了、出御訖又還給、(每度平伏)頭辨昇小板敷座、進御笏宮、(召藏人手長)經年中行事障子南、持參、還出返給、(藏人傳之)次供御贖物、役送賚頼、(經中門廊外戶往反)供了、還來時賚頼坐年中行事障子東、蒙博陸御目通也、持物時不坐、頭辨供御贖物了、到長橋取大麻持參返給、又如賚頼座、通元坐小板敷、宮主著座、使著座、(南北行立、其西立御幣、宮主向東、使座在其坤、)舞人中務經範、馬助爲永、(五舞云々、異樣也、)行事藏人淸定、引御馬云々、御禊經始、道撤御贖物、次給御笏返給了、博陸起座參給入御了、

〔伏見院御記〕弘安十年十二月五日辛酉、賀茂臨時祭也、早旦主殿寮供御湯、藏人奉仕御殿御裝束、其儀淸涼殿如常、御禊座東向設之、刻限著裝束、(黃櫨染)次出自額間、著御禊座、關白候御簾、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

藏人式云、下酉日賀茂臨時祭、(○中略)前四日、召左右馬寮十列御馬御覽焉、還其毛體美好十疋、點定彼日走馬、(左右馬寮隨點定馬數、一日各請所平文鞍、耕鐵手綱、)

〔小右記〕永觀二年十一月廿六日壬申、辰時參內、出御仁壽殿、覽左右十列、余(○藤原實資)持候御劍、還御之後、依仰注尻付、於毛付文下賜左右馬寮、左右各五疋、依仰參殿、(○藤原賴忠)晚景歸參、　廿七日癸酉、臨時祭也、

〔山槐記〕永曆元年十一月廿一日乙未、申剋參內、依賀茂臨時祭御馬御覽事也、頃之關白殿(直衣、○藤原基實)令參給、仰行事藏人以明、垂庇御簾、取大床子圓座、令敷第三間、爲御座、取除臈圓座、敷石灰壇、(二間南方)爲殿下御座、予(○藤原忠親)開御座定之由、取毛付文、(引寄右毛付紙、書左文、持參之、行事藏人以羽不存、仍只如形令書也、家官令持候、臨時藏人可被傳之、)出

是恒例也者、頗雖不穩事、以此由令奏、仰不當之事也、自今以後、不可然者、餘事如常、

〔玉海〕文治三年十一月廿四日辛酉、此日賀茂臨時祭也、巳刻著直衣參內、一府生未參、藏人業長（舞人行事）云、舞人陪從、只今賜裝束了自身一切不參、皆進所從云々、近。代。例。也。尤。奇。怪。々。々。實教朝臣可告下官參內之由、又使舞人等許可遣人、每事可催日之由仰了、御浴殿未終云々、尋女房之處、釜殿爲武士被陵礫不參入云々、無御浴者、不可有御拜、如此之事、藏人之役也、于今無沙汰、不能左右、召藏人仰含了、雖不及執柄之沙汰、近日之事、每事如此、何爲々々、午刻向直廬、解脫休息、于時實教朝臣參上云々、公卿猶未參、未刻內府二位中將相具參入、來直廬、此間人々少々參入、仍余著束帶、伴兩息參御所、御總角了、欲召御裝束之間也、（經家朝臣奉仕御總角、源中納言相共奉仕御裝束、）實教朝臣參上、余（○藤原兼實）問內記云、儲哉否、答云、不存、宣命可奏之由云々、勿論也、仍仰可尋儲之由、小時實教持來宣命、見了返給、多御禊以後所奏也、頭中將伏申不存旨、仰可用意之由之處、忽仰上卿令奏、頗早速也、未練之職事、於事如此、但御禊以前奏宣命、爲定例也、余著殿上、（御倚子下方也、）此間上卿內府、召使欲給宣命、懈怠之條爲奇、仍余問之、內府云、使雖召全不參云々、然間藏人業淸出來云、使凡申不可參之由云々、事不被信受、爲賜宣命有召之由、慥可仰問之由仰之、卽使參上、內府召小板敷、取出宣命披見給之、使隆信朝臣取之退下、此間實教朝臣、告御裝束了之由、余起座參御前、卽以出御御拜座、（出自當間、余褰御簾、令著西面給、）次頭中將獻御笏、（入宮持參、上令取御笏給、頭中將取宮退下、）次供御贖物、（陪膳實教朝臣、役供五位藏人定經、先例自御座西間供也、今日自當間供之、）次宮主取御麻、就中門廊南妻獻之、實教朝臣取之（於西緣南妻取之、）持參、主上（○後鳥羽）令持實敎撫之給了返給、實敎返給宮主、宮主取之著座、（西面、）次余催使可著座之由、卽使隆信朝臣、入自東中門參上著座、（西面、付魚袋、持笏如例、）次舞人三人牽御馬、（第一少將信淸、第四兵衞佐顯兼、行事藏人業長、）入西幔門引立、（幣安西面北上、）次御禊、（此間主上撫人形等如常、）訖宮主退出、

〔明月記〕建曆三年（○建保元年）十一月十九日、午一點參內、（乘毛車、）奉行職事之外無一人、（殿下參給、）陪從下襲、少將內侍之分遲々未給云々、此間雨雪漸止、陽景忽晴、猶可爲晴儀、可敷乾沙之由下知之、頻雖遣使者、使

御禊

壽殿西上廂出二間、自長橋馬道歸著本座、次陪從發物音、所衆二人舁和琴、（拾遺）歌人進於吳竹南西、次舞人右近少將伊保朝臣、右少將泰通朝臣、右少將顯信朝臣、右衞門佐忠度、少納言定宗、侍從成定、左兵衞佐家光、藏人右兵衞尉高階泰信、右兵衞尉藤原盛仲（院藏人）進出東庭列舞、此間臨昏黑、主殿官人擧燎照舞、駿河舞訖、舞人退入、次相揚進出舞求子、事訖舞人退出、歌人反大比禮、次主上入御、公卿退人、藏人撤却裝束、○又見愚味記

〔江家次第十一十一月〕賀茂臨時祭

鷄鳴懸舞人陪從裝束、大盤所渡殿、并御裝物所引繩懸之、內藏寮居朝飯（弓庭殿居二行對座）之、平旦賜使御衣（半臂下重表袴等、近年例去夕給之、）舞人陪從賜裝束、侍臣宿衣賜之、地下人東帶賜之、舞人爲之地下、於高遣戶傳給之、主殿供浴、奉仕御禊御裝束、其儀先垂東廂御簾、額間以南反燈樓綱、南第三間敷小筵二枚半疊爲御座、北面當御階北端庭中、（去階丈餘）敷葉薦一枚、（掃部敷之）其上立黑漆案二脚、（藏寮立也）安御幣六捧、（以西爲上、机別三捧、）去机五許尺敷圓座二枚、爲使宮主座、（使東、宮南、差）出御（位袍束帶、藏人頭獻御笏、卽先候御簾、）次供御贖物、頭爲陪膳、五位藏人爲益供、高坏二本、內藏寮排備安御膳棚、次宮主獻大麻、入自仙華門、就長橋供之、陪膳傳供、卽以返給、次宮主著座、次使著座、入自仙華門、巡方魚袋、爲衞府之者、著闕腋螺鈿劔、次舞人牽御馬、入自瀧口戶、牽之、舞人不足時、歌人假牽之、御禊畢宮主退出、歌人發物聲、於北廊戶外發之、拍子笛篳篥、必可參會、次引出御馬、次撤御贖物、次使捧御幣立先上社、次下社、松尾等取加之、次拜（兩段再拜）次使安幣退出、次入御、次撤御幣并御座等、○下略

〔世俗淺深秘抄下〕一如臨時祭御禊之役、貫首不參時、次將勤之常事也、但於獻御笏事者、不論上下﨟事役之也、是例也、

〔左經記〕長元元年十一月十九日己酉、參內、臨時祭御禊間、御幣四裹置案上、仰云、件御幣六裹可有也、而四裹也、其由如何、余（○藤原經賴）令申云、无仰以前見此由、召問寮官人、申云、松尾御幣、社司今朝來請了、

天仁元年十二月十五日、臨時祭試樂也、依御物忌垂御簾、付御物忌中殿南面南庇立御倚子、〇中略 又南庭南北行引幔、（當南殿東程也、）申刻事始、主上（〇鳥羽）御于簾中、攝政殿（〇藤原忠實）先令候簀子敷給、以藏人頭爲房朝臣召人、右大將（〇藤原家忠）按察中納言（〇藤原宗通）皇后宮權大夫（〇源顯通）下官（〇藤原宗忠）候御前座、〇中略 參議一人不參、籠太奇怪也、殿上人兩貫首（〇藤原實隆、藤原爲房、）以下五六輩候壁下座、次執柄殿下令氣色給、頭爲房候年中行事御障子南邊、依殿下御氣色出東中門、（著沓、）召舞人以下、（召以前發歌留聲、是失也、）陪從等漸進出南庭、舞人八人列舞、〇中略 秉燭以前事了、

代始四位四人舞人之時、不召一舞也、被相尋處、延久五年三月臨時祭、四位四人、〇中略 不召一舞、只任位階舞之也、依後二條殿（〇藤原師通）御時例、今日中將殿（〇藤原忠通）不召一舞也、

〔兵範記〕仁安三年十二月十四日辛丑、臨時祭試樂也、朝大盤後、退下直廬改裝束昇殿、頭中將（〇藤原實家）被參內、舞人參集桂芳坊之由、行事藏人右兵衛尉高階泰信申上、未時殿下（〇藤原基房）令昇給、（御直衣、）次有御馬御覽事、藏人垂東廂御簾、其內南第三間敷大床子圓座、爲主上御座、反弘廂燈爐綱、年中行事障子押東南、次主上（〇高倉）出御、（御引直衣、）殿下令候簾中給、左近中將賴定朝臣、持毛付文二通候第二間簀子、行事藏人於瀧口戶行之、先左御馬乘率五疋、御前三匝了、依次將仰騎之、數廻之後、又依仰下之、次右御馬次第如左、次入御、度々召樂所見參、隨進上奏聞、藏人奉仕試樂御裝束、東弘廂第三間敷二色綾毯代、四角置鎮子、其中央立殿上御倚子、東簀子二間以南敷菅圓座、爲殿下以下納言座、（北第一枚敷厚疊座、爲殿下座、）長橋敷參議座、南廊長橋內敷殿上人座、（二行、）酉刻主上出御、（御直衣、无御冠、）頭中將供御插鞋、著御御倚子、（不敷疊、承足著御之間有尋、臨時不叶、行事失也、）殿下直令著座給、次頭中將依殿下召參進簀子邊、依仰告御出之由於公卿、次中納言宗家卿、左衛門督實國卿、右衛門督時忠卿、參著簀子座、參議家通卿、著長橋座、頭中將幷下官（〇藤原信範）左中將賴定朝臣、已上四位五位、經明義仙華門等著壁下座、次依殿下仰、目頭中將參上候納言座前邊、奉仰退去、著沓經侍臣座後、出長橋馬道、北行自吳竹西向瀧口戶、召舞人、次自竹臺東、經仁

〔古事談王道后宮一〕一條院御時、臨時祭ノ試樂ニ實方中將依遲參、不賜插頭花、逐加舞之間ニ、進寄竹臺許、折吳竹枝插之、優美之由滿座感歎ス、依之試樂插、永用吳竹枝云々、（○又見十訓抄）

〔左經記〕長元元年十一月十七日丁未、從宮參關白殿（○藤原賴通）幷內、今日有臨時祭試樂及昏黑始歌舞、舞人多申障不參入、纔五位三人、六位二人、參入、試了、　七年十一月廿一日丁未、臨時祭試樂日也、仍參內、及秉燭覽試樂、舞人六人、（五位四人、六位二人、）

〔經信卿記〕永保元年十一月廿五日丁未、今日臨時祭試樂也、未刻先參殿、（○藤原信長）左大將（○藤原師通）大宮權大夫（○藤原伊房）三位中將（○藤原基長）以下被參會、有頭殿下令參內給、人々同參御共、祇候殿上、大宮大夫（○藤原俊房）右大將（○源顯房）別當（○源俊明）左兵衛督（○源家賢）新宰相中將（○源雅實）參入、酉刻出御、頭辨（○藤原通俊）出殿上、中召由於殿下、殿下以下進著、以前殿上人等候壁外、行事藏人令申云、兵部少輔彖俊參後、白地罷出、于今不參候、仍御琴可勤仕人不候者、殿下令議上達部座、候御氣色、被仰下云、唯今可仕琴之人不候、以博定令仕御琴、以彖方爲陪從役、可令仕笛者、藏人又申云、令申未仕之由者、然間舞後參入、舞人陪從進立竹臺下之後、被仰一舞、（經實、宗信、）事了退出了、

〔中右記〕寬治五年十一月廿四日、今日有臨時祭御馬御覽幷試樂、召頭中將（○藤原仲實）仰一舞、（頭辨御隨身□□左少將共也）　七年十一月廿一日乙未、今日依例御覽御馬、右少將顯實朝臣候御前、次於中殿南面御覽臨時祭試樂、樂人等遲參、光景已傾、依臨昏黑、主殿官人六人、炬火南庭、（左右三人）中宮御東廂方南階間、立倚子如例、少時出御、（御直衣）依召公卿參進、執柄已下、（白川殿下）內大臣（○藤原師通）民部卿、（經）中宮大夫、（師）治部卿、（俊）右衛門督、（公）權中納言、（基）右大辨、（通）左大辨、（匡）左宰相中將、（保）三位侍從、（能）新宰相中將、（仲）頭中將、（○藤原宗通）以下雲客著座了、後召人頭中將、參進年中行事障子東頭、御氣色後、行向西中門召舞人等、于時小雨間下、暫以遲々、可被用雨儀歟如何、議定之間天已晴、仍舞人陪從出南庭、于時召人頭中將參進、被仰一舞、進出仰之、忠教宗輔也、參進之舞人六人、（忠教、宗輔、有賢、藤永實、源宗俊、）戌刻事了退下、

上臈出自當御座間之北間、下臈出自同南間、

漸舞之間、次々舞人、依位階相分進昇、駿河舞畢退、(自上退)於竹臺下右袒、又進舞求子畢退、(自下)陪從遞奏於保比禮、同音唱了退、(○陪從以下十三字據一本補)公卿退、(下臈先退)主上入御、(作著御插鞋入御)若及昏黑者、主殿官人奉炬火於庭中、(相分入自瀧口并仙華門) 上卿參弓場邊、被奏宣命、 近代上卿、只坐小板敷長押上、召內記、內記入宣命於筥、持參獻上卿、退去、次於同處召職事被奏、奏覽之後返給、次召今日使、使參小板敷、上卿取宣命給之使退去、次召內記給筥、

次出御 若御簾中之時、職事告申其由上達部、上達部暫候長橋內座、(殿上人座) 次召人 職事自殿上方參、跪候小戶下、依御氣色下自長押、歷上達部後、不著沓、渡庭中、向瀧口陣邊、他處可出中門邊歟、告由歸入、 次使以下著座畢 次一獻(內藏頭若藏人頭、陪從座五位藏人、) 次二獻 上達部進出弓場、取盃、藏人取盃獻上臈、歟、四位取陪從盃、上達部當使座後上程、揖著座上、又小揖、擬使、使渡次人後、拔笏起座、又揖被著庭座、(以御前方爲上) 次三獻、(陪從數獻傳盃、) 同前、但使進來上達部座前、擬申初獻人、又舞人進倚賜盃、 次盃巡不定、(多不過五獻歟) 次所雜色以下三人、取圓座敷使并舞人陪從座前、殿上四位二人、五位一人勸盃、

次給插頭華 五位藏人一人、跪長橋下、取插頭華、次第獻之、上達部突片膝、插笏取華、渡座插使冠、(左方)舞人同之、右 拔笏左廻退出、 次使以下退出、次又出御、(先是敷圓座等簀子并長橋等)職事召上達部、(上達部著御前座) 次召人、(頭起長押下昇候、隨御氣色、如勅渡庭召之、今度著沓退歸、) 次使以下奏歌笛、進參立竹臺邊、(若被仰一舞之時、召人被仰其人、一舞之由、職事歟、竹臺下仰之歸來、)

次歌舞了退出、次入御、次上達部退出、

〔日本紀略 醍醐〕延喜四年十一月廿三日、賀茂臨時祭試樂、但依雨雪著深履、(○又見北山抄)

〔小右記〕永觀二年十一月廿五日辛未、午時許參入、今日試樂也、未時事始、其儀如例、(主上著御直衣、是例也、) 左右大臣、(○源雅信、藤原兼家、) 藤大納言、(○爲光) 藤中納言、(○文範) 左衞門督、(○藤原重光) 左大辨、(○藤原爲輔) 三位中將、(○藤原義懷) 源宰相、(○伊陟) 候御前、依無座席、中將源宰相在南廊侍臣座、秉燭退出、

試樂

おひたるも、あそびにまじりて、つねに似ず、をかしうきこゆ、夜ふけぬれば、猶あけてかへるをまつに、君だちのこゝろにて、あらたに、おふるとみ草の花とうたひたるも、此たびは、いますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すくすくしうさしあゆみて出ぬるもあれば、わらふをしばしや、などさ夜を捨ていそぎたまふ、とありてなどいへど、心ちなどやあしからん、たふれぬばかり、もし人やおひてとらふると見ゆるまで、まどひ出るもあめり、

〔江家次第十一十一月〕賀茂臨時祭試樂御裝束

下清涼殿東廂御簾、返孫廂登樓綱、孫廂南第三間敷二色綾毯代、其上立殿上御倚子、同第一二間撤子、並長橋所敷、（本所敷○一爲所）菅圓座、爲公卿座、南廊壁下、敷黃布端長帖二行、爲殿上人座、（長橋內）殿上前御膳棚上置御插鞋、

件御裝束、或公卿參入後奉仕之、

給御琴於樂所、（給處）公卿參入候殿上、舞人陪從等參著樂所、（有饗）藏人卽奏見參、（一度）藏人頭仰出納令召之、（近例舞人七人以上參時、雖不足直召之、）舞人以下參集於瀧口戸下、主上出御、（御直衣、紅打御衵、白御袴、鈍御單衣、紅御下袴、）藏人頭取御插鞋持參、又褰御簾、御座定畢、次召公卿、（頭出殿上告御出由）公卿著座、（入自殿上上戸、納言已上實子、參議長橋、）殿上人著座、（藏人頭爲先、入自仙華門、）

今日舞人之外、藏人不著青色、

主上召人、（詞曰男共）職事一人應召、（頭若藏人、微音稱唯、昇候年中行事障子下、奉仰退下、）渡東庭召之、（著履出自長橋東頭、渡廊中央竹臺西、到瀧口戸下、仰行事藏人、退歸經吳竹臺東、并仁壽殿西廊內、出自同廊南第一間、復本座、）

陪從等參進（以琴持爲先、所雜色以下二人昇之、）出立瀧口廊南砌、先吹調子之後、南三度、（手不留）次出一歌、又（手不留）漸步進、留二歌之間、又進又畢不留、漸行當樓欄下立定、舞人進出、（出自駿河歌之間、出參、經吳竹插頭、）巡方帶　螺鈿劍　淺履（雖非衛府、必著半靴、）蹴踏下襲　衞府闕腋袍　六位衞府者著絲鞋　尻鞘等如恒（藏人參著青色）

到吳竹臺下之間、或被仰一舞、（其儀如召人儀、頭經吳竹臺西并北仰之、）一舞二人進出、（插頭）經吳竹臺東、出自仁壽殿西廊、

右石清水賀茂臨時祭准小祀、可爲一日齋歟、伊勢奉幣之外、无前後齋故也、但前三ヶ日、猶有御潔齋歟、○中略 仁安三年十二月十四日、被定法勝寺大乘會最勝寺灌頂等、十六日賀茂臨時祭也、於還立日、必不爲神事歟、○中略 准此等例、可被計沙汰候歟、仍言上如件、

〔政事要略二十八〕十一月下酉賀茂臨時祭事

承平二年十一月二日夕、天子召臨時祭調樂人、覽歌舞及神宴、到曉賜祿云々、

〔小右記〕永觀二年十月廿八日甲辰、傳聞今夜臨時祭調樂、兩度遣取見參、亥時許退出、 十一月三日己酉、參內、今夜調樂、召侍臣等、石灰壇燒火、有神樂興、深更事畢候宿、 七日癸丑、又聞今日調樂、舞人陪從等、召樂所前、有神遊神樂等事云々、內藏寮賜侍臣及舞人陪從等祿、又三品中將○藤原義懷祗候、給御衣、云々、御下襲 曉更事了云々、

〔中右記〕寬治八年十一月十二日庚戌、今夜宿仕、初有臨時祭調樂、以左近陣屋東御隨身所也爲樂所、行事藏人左近將監中兼、 十三日、今夜宿仕臨時祭調樂、有御神樂、依神事不止也

天仁元年十月廿六日壬寅、依吉日始調樂、行事藏人左衞門尉說定、 十一月廿八日甲戌、午時許、從殿下○藤原忠實 有召、則參入、今日中將殿○忠實子忠通 舞始也、仍右衞門督能 左宰相中將參入者、先於中門廊、中將殿令舞給、駿河舞、布衣 御舞師將曹近末、冠布衣帶劍革緒、殿下御直衣、御冠、人々直衣、御覽、令舞始給、人々退出、十二月八日、今夕殿中將初參臨時祭調樂給云々、雖彼衰日、有議不被忌也、座間不論次第、著第一座給、舞之間者、依位階次第令立給云々、

〔枕草子四〕ありがたきもの りんじのまつりのでうがくなどは、いみじうをかし、とのもりの官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入てゆけば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出て、心ことに思ひたるに、君だちの日のさうぞくして、たちどまり物いひなどするに、殿上人のずゐじんどもの、さきをしのびやかにみじかく、おのが君だちのれうに

司ノ座ヲ庭上ニ分設ス、之ヲ庭座ト稱ス、又出御アリテ、使及ビ舞人陪從等ヲ召シテ宴ヲ賜フ、特ニ舞人ニハ螺盃ヲ以テシ、陪從ニハ銅盞ヲ以テシテ酒ヲ賜ヒ、歌舞ヲ覽給フ、式畢リテ、使以下裝束ヲ改メ、列ヲ正シテ先ヅ下社ニ參向シ、使舞殿ノ座ニ就キテ宣命ヲ讀ミ、禰宜幣帛ヲ捧ゲ、祝返祝ヲ陳ベ、次ニ舞人御馬ヲ牽キテ舞殿ヲ遶リ、又舞殿ニ於テ、駿河舞及ビ求子ヲ奏シ、南鳥居ノ外ニ於テ御馬ヲ馳スル等ノ事アリ、既ニシテ使以下宮所ニ入リテ小憩ノ後、更ニ上社ニ向フ、其儀一ニ下社ノ如シ、上社ノ式畢リ、夜ニ入リテ使以下歸參スレバ、天皇淸涼殿ニ出御シテ、酒饌ヲ賜ヒ、歌舞ヲ御覽ズ、之ヲ還立ノ御神樂ト稱ス、往時ハ此時祿ヲ賜ヒシガ、再興ノ後ハ此事ナシ、此祭ハ大ニ男山臨時祭ト相似タレバ、宜シク互ニ參看スベシ、

名稱
祭日

〔運歩色葉集 上〕北祭〈賀茂臨時之祭也、十一月〉

〔北山抄 二 十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

安和元年十一月九日、藏人敏政傳仰云、臨時祭用下酉、來月一日可行、而彼日申日蝕由、行中酉者、遙木〈○遙一作逐〉可延引、如何云々、令奏、延喜七年下酉有穢、同月丑日被行、八年又有穢、十二月二日亥日被行例、

〔年中行事秘抄 十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

十一月有二卯時、必用十二月一日酉日、〈康平元、十二、○中略〉又丑用新嘗會後酉云々、十一月朔日寅卯之時、二丑五節必用上丑、臨時祭月內行之、度々例也、但雖有二丑、臨時祭在新嘗會後之時、五節又用下丑日、度々例也、新嘗會以前臨時祭例不見之、有大嘗會年十二月行之、代々例也、但圓融院天祿元年十一月十七日大嘗會也、廿三日辛酉臨時祭也、

〔年中行事秘抄 三月〕石淸水臨時祭事〈○中略〉

古事類苑

神祇部六十三

賀茂神社三

賀茂臨時祭

賀茂臨時祭ハ、十一月下ノ酉日之ヲ下上兩社ニ行フ、臨時祭トハ恒祭ニ對スルノ稱ナリ、後世ハ北祭トモ稱ス、蓋シ男山祭ヲ南祭ト云フニ對スルナルベシ、此祭ハ、宇多天皇登祚以前、賀茂大神ノ託宣ヲ蒙ルコトアリテ、卽位ノ四年、卽チ寛平二年十一月己酉ノ日ヲ以テ、幣帛及ビ走馬等ヲ奉進シテ、臨時ニ之ヲ行ヒシニ權輿ス、ソノ後寛平三年十一月庚午ノ日、又祭事ヲ行ヒ、繼テ醍醐天皇ノ昌泰二年十一月己酉ノ日、前蹤ヲ追ヒテ之ヲ修セシヨリ以來、歷朝相承ケ擧行セシガ、足利氏ノ末ヨリ中絶シ、三百餘年ヲ經テ、光格天皇ノ文化十一年ニ再興アリ、

祭日前三十日、祭使及ビ舞人陪從等ヲ簡定シ、其後樂所ニ於テ歌舞ヲ調習ス、之ヲ調樂ト稱ス、其後祭ニ先ツ三日、更ニ清涼殿ノ東庭ニ於テ歌舞ヲ試練ス、（降雨ノ時ハ、弓場殿ノ砌下ニ於テス、）之ヲ試樂ト云フ、試樂ニハ、天皇出御シ、使以下參入シ、竹枝ヲ以テ插頭ト爲シ、（往時ハ花ヲ以テ插頭トセシガ、一條天皇ノ時、藤原實方、竹枝ヲ用ヰシヨリ、遂ニ例トナル、）駿河舞求子等ヲ舞フ、此日天皇又祭祀ニ供スル十列ノ御馬ヲ覽給フ、圓融天皇ノ永觀二年ニハ祭ノ前一日ヲ以テ此儀ヲ行ヒ、三條天皇ノ長和三年ニハ、試樂ノ前一日ヲ用ヰタリシガ、後世ニ至リテハ、多ク試樂ノ日ニ行フコト丶ナレリ、

祭祀ノ日ハ天皇清涼殿ニ出御シ、先ヅ御禊ヲ行ヒ、御幣ヲ拜シ給フ、其後更ニ御座ヲ改メ、所

馬引レ之、社家有二騎馬一有二歩行一或衣冠、或淨衣等也、端嚴莊觀幸甚、上賀茂之樣、不レ知レ之可二重記一、但年來之儀式也、無二異事一也、

〔季連宿禰記〕元祿十四年四月十三日庚午、鴨社御蔭山神事、見物成レ群云々、其儀如レ例歟、

〔後中内記〕享保三年四月十六日、御蔭祭也、

〔雅言集覽〕四十九みとびらき　正月十四日、加茂社御戸開始也、

御戸開

〔壬二集〕上雜曉神祇

神山のむつきのなかば月寒て鳥の初音に御戸ひらく也

〔玉葉和歌集〕二十神祇十日あまり四よといふよの御戸びらきひらくる御代はかくぞたのしき

これは、正慶の比、賀茂社の御戸のひらきに參りて、通夜したりける人の夢に、つげさせ給けるとなん、

〔夫木和歌抄〕七夏五社百首　皇太后宮大夫俊成卿

みづがきやさ月のけふのみとびらきかざるあやめのかさへなつかし

〔古今著聞集〕一神祇さかどのさゑもんの大夫源の康季は、年比賀茂につかうまつりけり、ある夜御戸開に參りける程に、鴨川の水出で通がたかりければ、岸のうへに思ひやり奉て居たりけり、かかる程に御戸開きまゐらせんとするに、いかにもひらかれさせ給はざりければ、社司共せんつきて、ねぶり居たりける程に、ある社司の夢に、康季が參をまたせ給ひて、開かぬよしを見てけり、是によりて氏人共を迎に遣はしたりければ、岸の上に忙然としてゐたりけるを、すくふが如くにしてぐして參にけり、其後ぞ御戸はひらかれにける、康季かく神慮に叶ひけるゆゑにや、さしも有がたき大夫の尉に、近康、康綱、康實、康景、累代たえず成にけり、此外季範、季賴、季實、季國、康重、康廣も、此康季が子孫にて、みな此職をきはめたり、他家にはありがたき事なり、（○賀茂社注進雜記傳二保安年間事一）

人、中央(錦之覆葵御紋)御唐櫃、擔夫三人白張、神人(淨衣)左右二人、(同)同擔夫三人白張、神人左右二人、(同)同擔夫三人、神人左右二人、(同)同擔夫三人、神人左右二人、膳部(淨衣)左右六人、御鉾神人、(淨衣)同神人、同神人、同神人、同神人、同神人、同神人、同神人、同御楯神人、金御幣右、銀御幣左、駈人(淨衣)左右二人、(高坏居之)御葵桂神人(淨衣)左右同之、御贄木中央、屋給人、氏人手替駈人、(淨衣)御和琴從四位下下野守賀茂縣主長延、(淨衣)氏人手替靑侍一人靑襖、(沓持一人白丁、笠持一人白丁、)下田伊左衛門、(淨衣錦御袋)靑侍一人靑襖、白丁一人、御弓從(氏人)五位下賀茂縣主康定、(淨衣)靑侍一人靑襖、(沓持一人白丁、笠持一人白丁、)御矢從(氏人)五位下鴨縣主伊氏、(淨衣)從者如上、(氏人手代)林右馬助、(淨衣)(靑侍一人、白丁一人、)錦御袋御劍、從(氏人)五位下鴨縣主伊重、(淨衣)靑侍一人(沓持一人、笠持一人、)錦御袋御大刀、(氏人)山口市之丞、(淨衣)從者如上、(氏人手替)下田右兵衛、(淨衣)靑侍一人(靑襖)白丁一人、神馬別當(靑襖)左右二人、騎神人左右二人、神人御馬副刀禰(貲衣)左右二人、御神馬(御錦覆、御錦覆御綱、)御鞍置之、從五位下鴨縣主伊淸、(淨衣)靑侍一人(沓持一人、笠持一人、)林(氏人)助之丞、(淨衣)下(氏人)田右京、(淨衣)靑侍靑襖各一人、白丁各一人、三行也、騎白丁四人、左右八人、御引替居飼白丁、履持白丁、雨皮持退紅、林(氏人)左衛門、(淨衣)靑侍一人、(靑襖)白丁一人、川(氏人)崎織部、(淨衣)靑侍一人、(靑襖)白丁一人、左右候之、河合權禰宜從四位下鴨縣主祐實騎馬、(靑侍四人布衣冠、襖二人白丁、)沓持一人白丁、笠持一人白丁、履籠一荷白丁、貴布禰禰宜從五位下鴨縣主祐禰、(衣冠騎馬)從者如上、三所禰宜從五位下鴨縣主祐純、(衣冠騎馬)從者如上、三所祝從五位下鴨縣主秀林、(衣冠)騎馬從者如上、沙汰人(靑襖)左右六人、警固靑侍以下三行十五人、雨皮持三行十五人、從(行列奉行)五位上鴨縣主伊連、(直垂)靑侍一人、下部一人、從(行列奉行)五位上鴨縣主康忠、(直垂)靑侍一人、下部一人、次町奉行小出淡路守候之云云、未刻許、自御蔭山還幸云々、

〔百一錄〕元祿七年四月十五日、午日葵祭、依今年御再興、下鴨神、辰上刻御出于御旅所、(高野村)警蹕警固、前行樂人八口騎馬、從社頭迄高野川奏樂、此間四五町程也、各衣冠、唐櫃九合、御鉾八本、御和琴、御弓御矢、御劍御大刀、御贄木、金銀御幣貳本、神馬、鞍上有蓋、團口雲絹、令木鳳含蓋綱、壹人擎之、此外一

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、抑是日鴨社御蔭山祭禮也、祠官神人等、各指合之間、當社御幣可被殘置之條如何、云先規、云傍例、可被注進之由、頭左大辨爲奉行、被尋申局務之間、被引勘之處、無先規、遠國之神社之御幣、他日被送進之事有之、雖然於當社御幣者、被殘置後日被送進者、重又上卿已下可有參行哉、爲事煩歟之由局務被申之、但如新年穀奉幣一社二社御幣、被殘置本官、後日行事官渡社家使之條、連綿之由行事官等申之故、今夜鴨社御幣被殘置神祇官了、後日社家之請使參入之時、可渡之由治定了、今日頭左大辨內々送書狀者、被尋問事等有之、新年祭宣命有無事、內侍參入哉否事等也、宣命無之、內侍無參向之由申返事了、

嘉吉三年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭也、如例云々、

〔親長卿記〕文明四年四月十三日、自鴨禰宜三位祐香卿許有使、來十六日御蔭山之時、渡和琴之處、去去年燒失之時紛失了、（神寶代物）仍去年借渡賀茂社之處、當年不叶、公方之物、有御寄進之樣可申沙汰云云、予云、御物不多、御寄進事如何、當日事爲神事之間、可申出之由返答、奏聞之處可被借下云々、

〔後中內記〕元祿七年四月十五日、（○壬午）辰刻賀茂御祖皇大神宮御蔭山神事、神幸、珍重々々、祭之事、御再興、久中絕之處、珍重也、（凡三百年程歟）行列如此、　警蹕屋給人淨衣、警固青侍青襖左右各六人、中央從（樂人）四位上山井但馬守大神朝臣景利騎馬、（青侍一人青襖、沓持一人白丁、雜二人白張、笠持一人白丁、）從（樂人）四位上備前守多朝臣忠胤騎馬、從者如上、正（樂人）五位下左兵衛大尉安倍朝臣季禰騎馬、從者如上、從（樂人）五位上左京大進太秦宿禰廣貫騎馬、從者如上、從（樂人）五位下左兵衛大尉大神朝臣景村騎馬、從者如上、從（樂人）五位下左兵衛大尉多朝臣忠墨騎馬、從者如上、正（樂人）六位下左兵衛志大神朝臣景敏騎馬、從者如上、從（樂人）四位上安倍信濃守安倍朝臣季高騎馬、從者如上、從（樂人）五位下左近衛將曹太秦宿禰廣當騎馬、從者如上、荷大鼓、擔夫三人白張、荷鐘鼓、擔夫三人白張、長（樂器）櫃一合、擔夫三人白張、履籠二荷、擔夫四人白張、笠籠二荷、擔夫四人白張、以上一行也、刀禰（黃衣）左右各四人、中央白杖、屋給人沙汰人、青襖左右八人、刀禰（黃衣）持杖左右四

御蔭祭

ルモノナルベシ、

〔類聚三代格二〕勅、比年以來、祭賀茂神之日、會集人馬、悉皆禁斷、自今以後、任意聽祭、但祭禮之庭、勿令鬪亂、

天平十年四月廿二日○又見本朝月令

〔台記〕久安三年四月十五日戊申、攝政忠通○藤原詣賀茂云云、○中略公家今日散齋、而今日國祭也、臣下此日奉幣、因之今日又致齋也、

〔京初根四愛宕郡〕御蔭社

下賀茂の神、始めて來現の地にして、上賀茂の神の生所とす、毎歳四月中の午の日、內裏より恆例の祭あり、式嚴重にして、下賀茂より、社務神官等參候し、音樂にて下賀茂の神臨幸あり、

〔雍州府志二神社〕御蔭社　在高野、○愛宕郡下賀茂神、始來現處、而猶上賀茂稱御生所、古每年四月午日、發遣勅使有祭禮、世人稱曰御蔭祭、自是名御蔭社、祭日祝部社務等乘羽車、神官悉出、或騎馬、或徒步、各勤供奉、今無其儀、然下上賀茂社、新改造日、此社亦被造營之、

〔諸國圖會年中行事大成三上四月〕中午賀茂御蔭祭　山城國愛宕郡下鴨に鎭座、御祖皇大神と號す、祭神二座、○中略恆例の祭式、嚴々として神人列を正し、神馬に錦蓋を覆ひ、音樂を奏し、東の方比叡山の西の麓、御蔭の社より迎奉る、御蔭社に祭る所の神二座、神傳秘にして、此地は下鴨の神、影向の所也、午酉の兩日共、葵祭と謂べき歟、葵桂を縵にかくる義あればなり、

〔京都御役所向大概覺書五〕洛中洛外神社祭禮之事○中略

一下鴨社　三月晦日鎭祭有之、四月中ノ午日御蔭神事、同酉ノ日葵神事、

御蔭神幸道筋　下鴨村より高野河原赤宮より東江乘寺村修學院村高野

還幸之道筋　右同斷○下略

國祭

抑已上就儉約之德政、止過差之服飾者、爲代々之蹤跡、存度々之制符、而年暦依相隔、禁綱如不張、自今已後、莫令違犯者、

藏人頭右大辨藤原經光奉

此宣旨奉下左大臣、同廿一日、召右中辨定嗣朝臣被下之、彼朝臣以消息、同廿二日下大夫史季継云々、馬助行範、車已下犯制符事一定云々、被下此宣旨之後、即時犯之、宣下太無詮、如無朝威之由有人口、仍爲散不審、後日尋取右中辨見之、仍又續之、(以正本可違之)車伏輪、所從風流爲銅薄、件薄地紙ヲ以漆塗之、其上或金或銀、兩樣之薄三重押之、仍偏如金銀令見也、次第如此、又絹粥事如銭、皆以犯制了、此儉約之沙汰、人々衆申子細歟、而執柄強以令張行給也、而行範祗候殿中之者也、即破犯之如何云々、有法不行、不如無法事也、誠是前後相違、可謂未曾有歟、抑檢非違使所從中、桙持風流事、宣下狀不得其意、風流停止之由、世以相傾之云々、愚案不可用風流、可停止ト云心ヲ書也、而讀惡之間、人讀誤如此、宣旨之文筆、人可得意之本尤可草歟、

〔公事根源 四月〕賀茂國祭　中申日

欽明天皇の御宇、四月に吉日をえらびて、まつらるゝよし所見あり、又和銅に詔ありて、山城の國司是を檢察すとみえたり、けふの國祭は、賀茂の本祭なるべきにや、酉の日の祭は、公家より使をたてられ、走馬を獻らる、あひかはるべきなり、

〔續日本紀 一文武〕二年三月辛巳、禁山背國賀茂祭日、會衆騎射、

〔續日本紀 二文武〕大寶二年四月庚子、禁祭賀茂神日、徒衆會集、執仗騎射、唯當國之人、不在禁限、(○本朝月令爲二文武天皇二年三月一)

〔類聚三代格 一〕詔、賀茂神祭日、自今以後、國司檢察、常爲年事、

和銅四年四月廿日(○又見續日本紀、本朝月令、)

○按ズルニ、濫觴抄ニ賀茂祭ノ起原ヲ以テ、和銅四年ニ係ケタルハ、恐クハ上文格文ヲ誤解セ

金銀珠鏡錦繍銅薄等、一切可停止、如度々制符、

隨近衞官人已下衣服風流

金銀珠鏡錦繍綾羅纐物銅薄畫圖懸閉總一切可停止、如度々制符、於擣衣者、不在制限、　從類不可過三人、蒔繪鞍豹韉、一切可停止、

馬副手振

擣衣伏組懸閉總繍可停止

小舍人童

同隨制、組纐薄物總著用、狩襖袴裏厚不可引絹粥、　人數不可過六人、走童一切可停止、

雜色

金銀錦繍綾羅銅薄風流擣衣等可停止、狩襖袴裏厚不可引絹粥、　人數不論四位五位、不可過八人、如康平制符、

厩舍人牛飼

同雜色制

不可具引馬事

任代々制符、一切可停止、

隨近衞官人祿法過差事

如寛喜制符、不可有別祿、

檢非違使

從類有輩之中、職掌有限之外、不可召具、雜々所從可停止、杵持杖目衣服金銀珠玉綾羅錦繍等類、不可用風流、可停止、

雜式舎人牛飼

同上、但摺衣一切停止之、

抑瑩車風流、僮僕衣裳、空費十家之產、偏擅一日之美、禁奢之法、豈以可然乎、慥守符旨、永令停止、

一可停止同使等隨近衛官人祿法過差事

抑治承宣下之後、建久折中之法、粗雖似遵行、動人有過差、慥守彼法、莫令違越、

〔平戸記〕延應二年四月十五日己酉、今日賀茂祭也、巳刻許向棧敷見物、油小路以東之棧也及申刻看督長渡、大路、檢非違使七人、内志二人、六位尉二人、五位尉三人、馬寮助行範渡、飾車有童二人、雜色當色赤色狩襖袴、以薄摸車文、抑之、件車文浮線綾丸也、任馬助之時、大殿定給此文云々、或人云、件文禁色文也、仍往古不用于車文也、而有此御計、如何云々、此事不知是非、然而就人口記之、被下制符之即時、破其制符之條如何、但紙薄非制限、至銅薄爲制物之内、見物輩云、非紙薄也、是銅薄也云々、難辨一定、遂可尋之、又車之口簾在人口、眉已下輪已上皆以薄摸伏輪、是又在制内歟、凡近來事、只如此歟、可悲々々、近衛使資基、出立所藤宰相亭云々、父卿著座云々、如何、自列見之辻、小舎人童并雜色等有相論、或逐電、或乍渡大路、罵詈放言之間、鬪諍出來云々、父卿乘車遣出油小路、難行其事、一切不遵行、雜人充滿不能辨物色、油小路以東已以及暗、仍不遂見物、人々多歸去云々、又雜人等奪取風流花云々、飾車已下僮僕等風流、用車文或紅梅或白梅云々、是後日聞々、此時依及暗不見分也、自一條室町邊、僮僕分散、獨身而渡大路云々、未曾有事歟、秉燭之後歸家

彼制符

延應二年三月十二日　宣旨

可停止賀茂祭使瑩車及從類裝束檢非違使所從等過差事

瑩車

正衣裳、御禊日、忘制法著美服之故也

〔玉海〕治承三年四月廿一日己酉、賀茂祭也、使右少將顯家朝臣云云、過差之至、不拘新制、時人莫不傾奇、天氣不快、雖參內不被渡北陣云云、又左馬助爲保、頗有不拘制事云云、中宮使大進基親、雜色令著打衣、人以不爲可云云、春宮權亮維盛朝臣、雖存守制之由、猶有過差之咎云云、於近衞使每事過法、因玆關白天氣不快、是依爲彼殿之結構也、

〔百練抄 八 高倉〕治承三年四月廿三日、藏人中宮大進基親蒙勅勘、是祭使之時破制之故也、

〔山槐記〕治承三年四月廿三日辛亥、傳聞賀茂祭中宮使藏人大進基親、破新制令著衣於雜色、仍恐懼、馬寮使爲保同破制、有院勘籠居、近衞使右少將顯家朝臣、專破之制、美麗不可言、春宮使權亮維盛朝臣、雖无殊、金銀風流皆令著、然而兩人無沙汰、顯家朝臣偏博陸令出立給、雖口被優權門歟、

〔玉蘂〕建曆二年三月廿二日宣旨 左大臣 右大辨

一可停止賀茂祭使齋王禊供奉人豋車及從類裝束過差事、

豋車

金銀珠鏡錦繡銅薄等可停止之、

一近衞官人已下衣服

金銀珠鏡錦繡綾羅纐物銅薄狩襖擣裏可停止、於擣衣者不在制限、

馬副手振

擣衣伏組纐等可停止、

小舍人童

同一制

四月五日　右衞門少志櫻井守明奉

〔政事要略〕(六十七)右辨官下　檢非違使

雜事二箇條狀

一應制止賀茂祭使等裝束備二具、并從者數多令著違法衣袴事
右人之僕從、隨位有數、仍去天延三年、件使等從者數定下知先畢、四位八人、五位六人、六位已下四人也、又不可令著禁色之狀、同以仰畢、而歲月稍移、奢僭更甚、競多其員、各珍其衣、方今澆風已扇、民烟不贍、何以一日之觀、空失百年之貲、左大臣宣、奉勅、宜重下知、勿過先定、又件使等裝束備二具、并從者違法衣袴、一切禁遏者、

永祚二年四月二日　左大史大春日朝臣良辰奉

〔小右記〕長和三年四月十九日甲戌、資平來談昨事、子細在昨記、又云、只今爲訪兄辨(東宮使)向上御社宿所、又可向頭中將(中宮使)宿所、在雲上人々、依有相府(○藤原道長)氣色、可向彼宿所云云、被差遣之四位五位廿人云云、是何由乎、或云、爲令脫衣、過差之制、無益々々、入夜資平來云、今日罷向左中辨頭中將上御社宿所、諸大夫多會合、脫衣給、新中納言賴宗、左兵衞督實成、到頭中將宿所脫衣、是奇怪也、先年有此事、引馬隨近衞等如理、兩所如此、已背儉約之制、又近衞府使宿所事不知者、但內府(○藤原公季)乘車立彼幕邊云云、近衞武晴云、使少將幕、諸大夫廿人許脫衣者、

〔日本紀略〕(後一條十三)萬壽四年四月十五日乙酉、賀茂祭、今日供奉使々、不可有美麗事之由有宣旨、四位雜色八人、五位六人、六位四人、

〔百練抄〕(四後朱雀)長久二年四月廿日、賀茂祭還立、於神館、檢非違使追捕近衞使少將信宗、依牛童過差也、

〔百練抄〕(六崇德)保延六年四月十八日、於別當宗能門前、檢非違使等破裂關白(○藤原忠通)隨身左近府生武

一應同禁制賀茂齋院禊祭日供奉諸司諸衛官人同社臨時祭幷石淸水宮臨時祭使舞人陪從等從者數多及著非色衣袴事　六箇條內、今定從者、

四位八人、五位六人、六位四人、

右從者等、從位階有其數、式條在之、苟年來之間、人心喩岨、好牽多數、或七八十人、或五六十人、帶弓箭、著綾羅、奔走於騎馬之後、眩耀於塵埃之中、梟惡之士相加、動致鬪亂、傷害是尤、雜人狼戾、各爭威權之所致也、仍神事之日、從者之數、量時宜所加定、特守此法、勿以疎漏、非色衣袴、尋常之時、諸人所著、任先制同禁制、夫政有弛張、事有治濫、宜立法、明王舊典、以重從輕、章條通規、宜五位以上、及昇殿六位以下所著、絹袴勿以切勘、以前條事如件、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣文範宣、奉勅、若有乖符旨、致違犯者、僧侶停其釐務、不預公請、俗官不論位蔭、科違勅罪、法官不糺、爲他被告、亦與同罪者、諸司承知、依宜行之、不得違越、符到奉行、

權左中辨菅原朝臣輔正　　左大史春日朝臣良辰

天延三年三月一日

〔小右記〕天元五年三月十九日辛亥、年來賀茂禊祭、職掌供奉者從者、以綾羅爲衣裳裏、所被禁遏、而不拘其制、間有違法、是檢非違使等忘憲法也、有司阿容可停廷尉、職掌之輩若有違犯、停釐務、懲將來者、被仰下左大臣〇源雅信了、至于殿上侍臣、永可除簡者、即令仰知人々了、〇十九日、日本紀略作二十二日、蓋爲宣旨之日、

〔政事要略七十〕左大臣宣、奉勅、賀茂齋內親王行禊前驅、幷祭使等陪從、隨其品秩、各有定數、而年來不唯其數之過差、兼亦著綾羅、施光華、因之禁制之旨、再三重疊、而檢非違使等、乍存其由、偏稱神事、不加制止、還忘憲法、今須重任先定、慥加禁遏、至于著禁色之輩、全捕其身、令著申主人、然後昇殿之人、停其昇殿、以外之輩、不預釐務、若使官人等、猶致阿容者、重處勘責、將懲方來者、

天元五年三月廿二日　　大外記兼主稅助菅野朝臣忠輔奉

ぶれてうちたりけるを、車うちたりときこしめしたりけるとぞ、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕花山院のひと丶せまつりのかへさ御らんせし御ありさまはたれも見たてまつりけんな、まつりの日、事いたさせ給へりしたびのことぞかし、さる事あらんときゝ、けふはなを御あるきなどなくてもあるべきに、いみじき實治一のものども、かうぼうのらいせいをはじめとして、御車のしりにうちむれ、おほくまいりしきそくども、いへばをろかなり、なによりも御ずゞのいとけうありしなり、ちいさき柑子をおほかたのたまにつらぬかせ給ひて、だつまには大柑子をしたる御ずゞいとながく、御さしぬきにぐしていたさせ給へりしは、さる見ものやは候しな、人々むらさいの丶御車に目をつけたてまつりしに、けびゐしまいりて、きのふこといたしたりしわらはべとらふべしといふこといできにけるものか、このごろの權大納言殿〇藤原行成まだ其頃はわかくおはしまし丶、程ぞかし、人はしらせてかう〱の事候、とくかへらせ給ひねと申させ給へりしかば、そこらさぶらひつるものども、くものすを風のふきはらふごとくにげぬれば、たゞ御車ぞひのかぎりにてやらせて、見もの車のうしろのかたよりおはしまし丶、こそ、さすがにいとをしくかたじけなくおぼえおはしまし丶か、さてけびゐしつきやいといみじうからくせめられ給ひて、太上天皇の御名はながくたさせ給ひにき、

〔古事談一王道后宮〕入道殿〇藤原道長賀茂祭見物棧敷間、俄花山院闘亂事アリ、以職事被仰可遣檢非違使之由、奏者申云、上卿誰人哉、仰云、如此急速大事、只稱內侍宣云々、此度院被惜下手人、入道殿仰使廳ノ下部、昇院築垣上、院恐之被出下手人云々、

〔百鍊抄七後白河〕保元三年四月廿日、賀茂祭、博陸〇藤原忠通於町棧敷見物、宰相中將信賴、欲過被前之間、雜人闘亂、打破中將車物見、

〔故事要略七十〕太政官符

禁衣服等奢侈

ど思ひよすれば、牛飼下部などの見知るもあり、おかしくもきら〴〵しくもさま〴〵に行かふ、見るもつれ〴〵ならず、暮る程には立ならべつる車ども所なく並居つる人も何方へか行つらん、ほどなくまれに成て車どものらうがはしさもすみぬれば、簾疊も取はらひ目の前にさびしげに成行こそ、世のためしもおもひしられてあはれなれ、

〔康富記〕文安元年四月十八日丁酉、賀茂祭也、此皇居(一條東洞院東南角)西面御門二有之、南者四足也、北者棟門也、以棟門之通對屋之西妻、被用長橋、有出御、有叡覽云々、女使車等更返南、自正親町西行、至西洞院出一條大路、近衞使等如此、一條大路皇居之北也、近衞使幷府者等乘馬渡之、女房使幷前驅等乘馬被免之、於檢非違使者不被免之、自東洞院令下馬、於高倉又乘之云々、(檢非違使者非祭之使、只是爲路次警固之間、不被免乘馬、其餘事者、皆參社頭祭之使也、今年殊依有御敬神之趣、被免乘馬者也、先例或乘之、或不乘之、雖爲兩樣、可爲御敬神者、不可被下馬之由、及當日有其沙汰云々、)去十三日、北野社炎上、雖然今日祭禮無省略事、如恒例、傳奏萬里小路大納言時房卿、奉行職事左中辨俊秀、今日出仕職事頭右大辨資任朝臣、(昨日被申大辨拜賀、)藏人權右中辨敎忠、六位藏人源政仲也、

〔西宮記〕(四月)賀茂祭事

延喜五年四月廿一日御記云、入夜內藏使秉樹、差隨身近衞、令申社頭鬪濫事、仰左右衞門陣志門部衞士等、遣社頭、令執鬪濫云々、此間右衞門无檢非違使、故仰吉家之各歸家、(且申日記由、且申上下社奉幣事云云、)

〔日本紀略〕(十四後一條)長元七年四月廿日己酉、賀茂祭、齋王(○馨子)御輿、過小一條院御棧敷前之間、以飛礫打御輿、仍遣檢非違使、召捕犯人、

〔榮花物語〕(三十二歌合)四月(○長元七年)祭など物さわがしくてすぎぬ、祭の車を小一條院(○敦明親王)の下部うちたりなどいふことありて、院の人せめられさせ給て、檢非違使どもゐなみて、人もやすくもありかず、いみじき事どもに世人申思へり、日頃ふれど、丼などふたぎて、いといみじくかたじけなきこと丶、世人も申おもへり、院の下部の、しりたりけるげすのいだし車につきたりけるを、たは

新院（○後伏見）御沙汰云々、年預隆有朝臣奉行之、御棧敷治部卿儲之、傳聞先新院廣義門院御同車、御幸御車寄、春宮大夫、（直衣）從車、參會殿上人冬雅朝臣一人、（御幸毎度一人也、）下北面景繁、爲成、藤原範重、源康任、藤原信賢、安陪親富、御隨身秦延躬、同久友、出車二兩、御幸出御之間俄雷雨、其後被返進御車以下、法皇永福門院御幸、（夕立之後）參會公卿、前右大將、（直衣烏帽子）前平大納言、治部卿、二條前宰相、大藏卿、殿上人雅仲朝臣、資清朝臣、隆有朝臣、（奉行）顯彙朝臣、有賴朝臣、隆蔭朝臣、敎行朝臣、上北面朝衡、氏義、仲經等云々、御隨身無御恩之間、只延躬久友之外、無出居御隨身云々、可彈指々々々、檢非違使左尉藤原秀賢、源康清、源重季、左大史尉藤原彙勝、（關東貞藤子）藤原行村、中原章仲、藤原基仲、（關東）中原章敏、中原章右、（明法博士）山城介惟宗重直、内藏權助丹波長守、右馬權助藤原有業、春宮使權大進爲嗣、（故光定猶子、隆長朝臣一向出立之、）（先可爲冬方之處、依經藤入道事服假、仍以爲嗣被新任云々、）近衛使右少將基冬、（良成補藏人頭、則立之、）典侍藤原□子、（保藤女）以上以彙日散狀任之、予不見物、向春日棧敷遠見、東宮使出立、未刻許歸了、入道殿一位殿、於致範棧敷御見物云々、予依所勞不參也、傳聞檢非違使渡之間、又大雨雷鳴、天如暗夜、其後暫屬晴、使々渡之間又大雨云々、

今日式毎事散々歟、

〔徒然草下〕かた田舍の人こそ、色こく萬はもて興ずれ、（○中略）左樣の人の祭見しさまいとめづらかなりき、見ごといとおそし、其程は棧敷不用なりとて、奥なる屋にて酒のみ物くひ、圍碁雙六などあそびて、棧敷には人をおきたれば、わたりさぶらふといふ時に、各肝つぶるゝ樣にあらそひ走りのぼりて、落ぬべきまで簾はり出て、おしあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とありかゝりと物ごとにいひて、わたり過ぬれば又わたらんまでといひておりぬ、只物をのみ見んとするなるべし、都の人のゆゝしげなるはねぶりていとも見ず、わかく末々なるは宮づかへに立居、人の後にさふらふはさまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし、何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明はなれぬほど忍びてよする車どものゆかしきを、それかかれかな

度落馬云々、其馬驚、饗官人沛艾陸梁、但無事騎之云々、

〔玉葉〕嘉禎三年四月十六日、今日賀茂祭也、大殿○藤原教實於御棧敷可有御見物、右少辨高嗣、兼日奉仰所申沙汰也、一條以北、町以東、壞御所南築垣、造檜皮葺七間一面御棧敷、東面西北三有簀子、以西三箇間爲准后○後鳥羽后重子御所、每間敷高麗端帖三枚、東西行北庇敷同帖、每間懸几帳帷、西面妻戸儲御車寄具、以其東三箇間爲殿御見物所、每間各敷高麗端帖二枚、東西行北庇敷同帖、爲公卿候所、東第一間敷同帖二枚、爲前關白○藤原家實歸休所、其北庇副西手障子、立三階棚一脚、居菓子、又置棧手洗、其東敷紫端帖一枚、御簾每間付葵桂、如常、大路以南栽竹、仰假屋令栽之其前引二色幔、北東築垣外有七間板葺屋、南面爲殿上人諸大夫屋、北面構假庇、爲贄殿屋、件屋御文庫也、今日假裝此座、委事見指圖、不能記盡、此御棧敷、讚岐守兼教朝臣營作之也、但御分國也、仍日代左大夫尉行範作之、雜事等一向行範沙汰也、已斜准后渡御、○中略次大殿渡御、○中略殿上人諸大夫爲御共、○中略小時攝政殿○藤原兼經參入給、○中略又内々被告申前關白殿、良久入給、○中略此間攝政殿、右大臣殿○藤原良實大納言殿○藤原基家已下、列立西立蔀前、南上東面前博陸、再三氣色于右相府之後昇給、脫沓於沓脫下給攝政殿已下、次第昇堂上、先是主人入御、前博陸著座給之際出御、次第著座、前博陸、右大臣殿、大納言殿、已上奥座、主人攝政殿已上端座、○中略次居饌、大臣已上高杯三本、一本飯四種已下、一本干物生物、一本進物、納言已下二本、次干物、居加飯、○中略次一獻、○中略次第巡流、○中略次二獻、○中略次居熱汁、次三獻、○中略次居菓子薯蕷粥濁漬等、○中略次第供之、○中略次撤饌、役人如初、次被卷南面三箇間御簾、○中略高嗣於便所下知次第事、内々催促供奉人、先看督長渡、次檢非違使等渡、○中略次近衛使○中略女使等渡、供奉人等渡了垂御簾、役人如初兩太閤、執柄、右相府殿、亞相殿、移御座北庇、有前太閤殿御引出物、御劒一腰、○中略御馬二疋、○中略人々退出、前博陸還給、○中略先是主人入御、即以還御、先寄准后御車如初、今日之事、口口内々之儀也、然而爲獨々之禮、三殿御會合千載之一遇也、彼永延寬弘之儀、皆以揭焉者歟、

〔觀音寺相國記〕正和四年四月廿日丁酉、天陰、賀茂祭也、本行職事光繼自今年御棧敷御幸、幷參會人々以下、

ためあへず、おとなく\しきごせんの人々は、かくなゝどいへど、えとゞめあへず、齋宮の御は、は御息所（〇六條）物おぼしみだるゝなぐさめにもやと、忍のびて出給へる也けり、つれなしづくれど、おのづから見忍りぬ、さばかりにては、さないはせそ、大將殿をぞかうけには思ひきこゆらんなどいふを、その御かたの人々もまじれゝば、いとほしとみながら、ようゐせんもわづらはしければ、忍らずがほをつくる、つひに御車共たてつゞけつれば、ひとだまひのおくにおしやられて、物もみえず、こゝろやましきをばさる物にて、かゝるやつれを、それと忍られぬるが、いみじうねたきことかぎりなし、忍ぢなどもみなおしをられて、すゞろなる車のどうにうちかけたれば、又なう人わろくくやしう、なにゝきつらんと思ふにかひなし、ものもみでかへらんとし給へど、とほりいでんひまもなきに、ことなりぬといへば、さすがにつらき人の御まへわたりのまたるゝも心よわしや、（〇下略）

〔玉海〕建久二年四月廿日丁酉、此日賀茂祭也、午剋親國來云、警固上卿右衛門督云云、未始宮女房幷家女房等、密々向棧敷見物、大將相伴之、余（〇藤原兼實）同稱雖欲見物、昨今春日惟異物忌也、仍不向之、二位最密々見之、棧敷光長卿儲之、先宮御方出車三両、（左少將定國、同少將定家、右少將高通等車也、車副布衣侍二人相具之、）次內牛物車、（小隨兼時侍一人、）次此方女房出車二両、（前兵部大輔能季、此車二位乘之、然而依出車之殿出衣四具、故法性寺北政所、密々御見物如此云云、騎射時又如此、次車前大膳大夫家綱也、各又殿上人也、各侍一人、）次牛物車、（職事信光車也、又侍一人、）次大將車、（八葉車懸下簾、侍一兩相具之、）次其人人車三四両、其後両方雜仕車二両、但不遣出晴方、自棧敷後方稱入云云、事了秉燭之後歸來、無殊事云云、

〔明月記〕元久元年四月十六日、賀茂祭日也、今日殿下（〇藤原良經）令參院御棧敷給云々、入道密々仰云、執柄參棧敷事未聞其例、以曉御幸之時、大臣以下雖參入猶無此事云々、左衛門督今年經營此御棧敷事、竭海內財力云々、小童等見物、予不出門戶、後聞御棧敷公卿、殿下、太政大臣、源大納言、前大納言、（冠衣束帶）左衛門督、二條中納言以下云々、風流造作、皆以綾為簀子、以帷紺為右帖、以銀為簡云々、使少將度

有ラム、然テ大路ヲ澄シテ、歩ヨリ可行キ也ト、定メテ人澄テ後、三人乍車ヨリ下ヌレバ、車ハ返シ遣ッ、其ノ後皆□ヲ履テ、烏帽子ヲ鼻ノ許ニ引入テ、扇ヲ以テ顔ヲ塞テゾ、攝津ノ守ノ一條ノ家ニハ返タリケル、季武ガ後ニ語リシ也、猛キ兵ト申セドモ、車ノ戰ハ不用ニ候ナリ、

〔十訓抄 三〕小松内府、○平重盛賀茂祭見んとて、車四五輛ばかりにて、一條の大路に出給へり、物見車はみなたてならべて、すきまもなし、いかなる車かのけられんずらんと、人々目をすましたるに、ある便宜の所なる車どもを引出しけるを見れば、みな人ものらぬ車なりけり、かねて見所をとりて、人を煩はさじのために、むな車を五輛たておかれたりけるなり、そのころの内府のきらにては、いかなる車なりともあらそひがたくこそ有けめども、六條の御息所のふるき例もよしなくやおぼえ給ひけん、さやうの心ばせ情ふかし、

〔源氏物語 九葵〕まつりの程、○中略とりわきたる宣旨にて、大將の君○源氏君もつかうまつり給、○中略おほよそ人だに、けふの物見には、大將殿をこそは、あやしきやまがつさへみたてまつらんとすれば、とほき國々より、めこをひきぐしつゝ、まうでくなるを、御らんせぬは、いとあまりも侍かなといふを、大宮きこしめして、御心ちもよろしきひまなり、さぶらふ人々も、さう〴〵しげなめりとて、にはかにめぐらしおほせたまふてみ給、日たけゆきて、けしきもわざとならぬさまにていでたまへり、ひまもなうたちわたりたるに、よそほしうひきつゞきてたちわづらふ、よき女房車おほくて、ざう〴〵の人なきひまをおもひさだめて、みなさしのけさする中に、あじろのすこしなれたるしたすだれのさまなど、よしばめるに、いたうひきいりて、ほのかなる袖ぐちものすそかざみなど、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひ、しるくみゆる車ふたつあり、これはさらに、さやうにさしのけなどすべき御車にもあらずと、くちごはくて手ふれさせず、いづかたにも、わかき物ども、ゑひすぎたちさわぎたるほどのことは、えした

ケルニ、馬ニ乘リ次ギテ、紫野へ行カムニ、極ク見苦カルベシ、歩ヨリ顔ヲ塞ギテ可行キニハ非ズ、物ハ極テ見マ欲シ、何カ可爲キト歎ケルニ、一人ガ云ク、去來某大德ガ車ヲ借テ、其ニ乘テ見ムト、亦一人ガ云ク、不乘知ヌ車ニ乘テ、殿原ニ値ヒ奉テ、引落レテ被蹴ヤ、由无キ死ニヲヤセムズラムト、今一人ガ云ク、下簾ヲ垂テ、女車ノ樣ニテ見ムハ何ニト、今二人ノ者、此ノ義吉カリナムト云テ、此ク云フ大德ノ車、既ニ借持來ヌ、下簾ヲ垂テ、此ノ三人ノ兵、賤ノ紺ノ水干袴ナドヲ著乍ラ乘テ、履物共ハ皆車ニ取入レテ、三人袖モ不出サズシテ乘ヌレバ、心悪キ女車ニ成ヌ、然テ紫野樣ニ遣セテ行ク程ニ、三人乍ラ、未ダ車ニモ不乘ザリケル者共ニテ、物ノ蓋ニ物ヲ入テ振ラム樣ニ、三人被振合テ、或ハ立板ニ頭ヲ打チ、或ハ己等ドチ頰ヲ打合セテ、仰樣ニ倒レ、低シ樣ニ低シ轉テ行クニ、總テ可堪キニ非ズ、如此クシテ行ク程ニ、三人乍ラ醉ヌレバ、踏板ニ物突散シテ、烏帽子ヲモ落シテケリ、牛ノ一物ニテ、早ク引ツヽ行ケバ横ナハリタル音共ニテ、痛クナ不早メソ々々ト云行ケバ、同ク遣次ケテ行ク車共モ、後ナル歩チ雜色共モ、此ヲ聞テ恠ビテ、此ノ女房車ノ何ナル人ノ乘タルニカ有ラム、東國ノ鳴合タル樣ニテ、舌ダロタルハ心モ不得ヌ事カナ、東人ノ娘共ノ物見ルニヤ有ラムト思ヘドモ、音氣ハヒ大キニテ男音也、總テ心不得ズゾ思ケル、此テ既ニ紫野ニ行著テ、車搔下シテ立テバ、餘リ疾ク行テ立ツレバ、事成ルヲ待ツ程ニ、此ノ者共車ニ醉ヒタル心地共ナレバ、極テ心地惡ク成テ、目轉テ萬ノ物逆樣ニ見ユ、痛ク醉ニケレバ、三人乍ラ、尻ヲ逆樣ニテ寢入ニケリ、而ル間ニ事成テ、物共渡ルヲ、死タル樣ニ寢入タル者共ナレバ、露不知テ止ヌ、事畢テ車共懸ケ騷グ時ニナム、目悟メテ驚タリケル、心地ハ惡シ、寢入テ物ハ不見成ヌレバ、腹立シク妬タク思フ事无限キニ、亦返サノ車飛バシ騷ムニ、我等ハ生テハ有ナムヤ、千人ノ軍ノ中ニ、馬ヲ走ラセテ入ラム事ハ、常ニ習タル事ナレバ不怖ズ、只貧窮氣ナル牛飼童ノ奴、獨ニ身ヲ任セテ、此ク被掕レテハ、何ノ益ノ可有キゾ、此ノ車ニテ亦返ラバ、我等ガ命ハ有ナムヤ、然レバ只暫シ此テ

更騎馬爭行、向神宮、二御車渡橋、進壇際、此間別當左武衛大貳下向、殿上人三四人向使幄、著膽、大路給退出、參御車邊、但依未除服、心中成憚不渡橋、宰相中將、更被廻此條不參進、不經幾程還御、先之所所使參神館、給祿了云云、尙可有御覽者、渡御後可有此議歟、著輕幄御、以家保朝臣、被仰別當左武衛等云、早參神館、可置御車、仍件兩卿乘車參仕、役了歸參、此後供奉輩渡如常、有實朝臣於知足院北垣、緣指繩渡御前、然而織末忠公正傳馬口渡、人人云、泥障指繩分專不可然、今日山城介不渡、事了本院幷御車經本路還御、皇后宮如前有御見物、今日自新院、〇鳥羽被調獻女房車、夏時富色使公行著束帶持參云云、今日垣下四位實衡公敎、五位公能政範、抑祭間以无寶王饗應之事、而神館無參人、本院又同、攝政以下皆參、可被行諸事也、

〔古事談 六 亭宅諸道〕法性寺殿〇藤原忠通御時、賀茂祭使饑ニ、武正兼行兩人遣タリケリ、殿下カヘサノ日、於紫野御見物ノ間、此兩人御棧敷ノ前、各ケタミチ通ケルヲ、猶亦可被御覽、今一度北ヘ罷渡ト被仰ケレバ、兩人北ヘ渡ニケリ、兼行者猶南ヘ渡ニ、三ケ度御覽畢、武正ミエザリケレバ、イカニト御尋ノ處、早慢ノ外ヨリ南ヘ通候ヌト申ケレバ、武正無術者也ト被仰ケリ、知足院殿〇藤原忠實御坐宇治之時、武正渡礫御所侍、大略及死門之間、侍等參集訴申之、仍仲兼ヲ爲御使、被召問於子細於武正之處、申云、武正ハ小童之時、大殿〇藤原忠實召出御覽、有御感、御沓ノ中三寸許ヲ切捨テ、尻首ヲ閉合ナハキテ候シナリ云云、殿下イミジク申タリトテ、賜酒謝遣侍等、訴訟無沙汰云々、〇又見宇治拾遺物語

〔今昔物語 二十八〕賴光郎等共紫野見物語第二

今昔、攝津ノ守源ノ賴光ノ朝臣ノ郎等ニテ有ケル平ノ貞道、平ノ季武、口ノ公時ト云フ三人ノ兵有ケリ、皆見目モ彌々シク、手聞キ魂太ク、思量有テ愚ナル事无カリケリ、然レバ、東ニテモ度々吉キ事共ヲシテ、人ニ被恐タル兵共也ケレバ、攝津ノ守モ此レ等ヲ止事无キ者ニシテ、後前ニ立テゾ仕ヒケル、而ル間、賀茂ノ祭ノ返サノ日、此ノ三人ノ兵云合セテ、何カデカ今日物ハ可見キト謀

後騎口口官無官武者所衛府濟々焉、攝政御車、右大臣、（渡御之後退出、）御棧敷、內大臣、按察藤大納言、治部卿、民部卿、源納言、侍從別當、（着衣冠、御見物強事歟、）藤中納言、（顯隆、近年云行幸、云御幸、不騎馬、今日別仰云々、）新源納言、左兵衛督、宰相中將、（東帶）皇后宮權大夫、左大辨爲隆、右兵衛督、（已上直衣）殿上人頭中將以下六位以上、兩方昇殿輩、（已上衣冠、或打衣、雜色袍、東皆花美、）豎前駈、三條御所出御北西門、令過宮御所門給之間、有御見物、更立次第、人馬警擾、塵合煙連、自洞院東大路至二條、自西洞院至一條、寄御車於假床、（殿下御領、先年所被儲、久不渡御、今有其儀、座、供唐錦茵、兩院御座如此、但二行鋪之、障子入之、紋色紙形、泥繪押金文、引唐綾色色機、其四立五間錦緣爲公卿座、立床數高麗帖二行十枚、御所東面北引二色機、大路南櫻樹網絹機、御車渡御之間、公卿下居、兩大臣殿下參御之間、公卿不動座、無禮節歟、）御棧敷前牛物車一兩、雜色六人被渡之、（其裝束纐纈金銀、雜作着笠渡、懸伏鞍入鐙、）先山城騎兵渡、（五人）次看督長渡、次檢非違使、爲先下﨟、府生行友、經則、志有定、成國、明兼、（不入尻鞘）尉頼兼、正弘、資遠、（二藍下襲、雜色淺黄上下、）盛兼、大夫尉光信、盛道、（各錦地平緒、沃懸地劍、）次山城介車、（先例可尋）次皇后宮使車、（已上八葉）次馬寮使車、（朝代錦文、着金銅文井緣、）次近衛使車、（其總流、裏頭竹葉、階底、薄蒔詩也、）次山城介廣定、（馬副下尻、褐者解纓、）次所小車、（藏人所近衛府等褐裝也、）次馬寮使權頭忠盛、（馬副紺襖、手振、雜色取物、二藍襖、已上付金銀緣丸、）馬副取口引馬、（院內府隨身、府生國重、番長近付緣丸銀、以錦付之、取養形、）新近衛中將成道、（院御隨身近衛府生厚忠取口、新院御馬、着鈴、腹帶、是也、引馬口番長秀忠、近衛公忠取之、馬副八人、着狩衣、院御所被留之唐笠緒付之、竹葉取物、已上濃蘇芳、緣彩、雜色八人、此外無具、二人、）次皇后宮使權亮實兼、馬副取口、不具引馬、（雜物取物、二藍襖、笠着、引付物古錦緣、似唐物、別樣、）次內藏寮助口口、（雜色取物蘇芳、）次女使、次內侍以下車、（典侍女、出車、自中宮給女房、着衣云云、如何、）申斜還御、

〔長秋記〕大治四年四月廿五日癸酉、賀茂祭也、　廿六日甲戌、辰刻僕等來告云、御幸已成、前驅已在三條堀河辻云云、驚之忩出間、又來云、前驅已還參了云云、然而尙忩參間、於六角室町辻、治部使來告云、已出御了、於今遠路可參者、仍廻軒、於三條町乘馬向參間、前驅等廻室町邊、公卿皆直衣、侍臣垣下外著衣冠、大略同昨日、但伊通卿參、能實能俊二納言、次自三條西行、自堀河北行、皇后宮（〇崇德后藤原聖子）乘御車、於西陣有御見物、昨日其由有御消息、經此路云云、宮內職事等著衣冠、候御車近邊、自一條西行、至紫野、經幄邊、前驅或下馬、或乍馬立、良久著御、留御車、暫廻御案、召家保朝臣、可覽神館之山被仰下、仍

〔中右記〕保安元年四月十五日乙酉、賀茂祭也、依有院(白河)御見物、午時先參殿下、(藤原忠實)爲御共參院御所三條烏丸亭、此日者中宮同御座此亭也、人人參集後、暫被待近衞府使參、未刻使藏人少將季成參入、渡南庭、(車被渡、爲中宮御覽也、)次寄御車、留御車於東御門內、先渡所騎御覽、殿上人六十人許、(衣冠、年少之人出衣、盡鬪、)(雜色裝束、)令上達部右大辨、(藤原長忠)右兵衞督、(藤原實行)中宮權大夫、(藤原通季)源宰相中將、(雅定)別當、(藤原忠教)治部卿、(源能俊)予、(藤原宗忠)右衞門督、新大納言、民部卿、按察大納言、(藤原宗通)內大臣、(源雅實)右大臣(藤原忠實)御車、若君令同車給、御乳母同乘、曾孫王子共有御見物、未曾有之事也、太上法皇誠千載一遇之秋也、左宰相中將信通候御車後、檢非違使等武者所同祗候、殿下御車、其路經烏丸姉小路東洞院近衞高倉土御門京極一條、於大路寄御車御棧敷南面、(一條烏丸東、殿下自令候御棧敷也、)本御棧敷(東面、)北廊爲公卿殿上人座、(西廊上達部右大臣以下著此座、例立平張、今年不然、仍夕陽入來、人人有苦色、東廊殿上人祗候、)殿下自烏丸方追令參給、候御棧敷給、臨申刻山城騎兵渡、行事藏人辨、(實光)外記安定、史盛親下從車渡御前、使使車、次看督使等渡、檢非違使府生經則、忠成、國重、有貞、尉盛道、賴兼、行量、康季、宗實、五位下從馬次第渡、山城使中原助貞、左馬寮使助信仲、左近府使藏人少將季成、飾馬府生末俊、兼近、引馬番長敦貞、敦實、共皆候院者、給祿、今日內御物忌也、不召御前、而給勅祿如何、不召御前時、不給祿歟、使少將物具美麗、皆悉共給也、皇后宮使權亮忠長、餝馬馬副引馬、府生武正、番長兼經、(共殿下隨身)內藏寮使助中原仲季、行列使馬助兼仲、(付魚袋、可尋、)長官伊賀家俊、御輿、次官、膳部等出車、(四季花出衣)典侍車、(基賴女)命婦藏人車等、自餘之事等不能悉記、日入間渡了、院還御三條御所、

〔永昌記〕保安五年四月十四日辛酉、今日白雨間降、參院、(源中納言同車、)賀茂祭御見物御幸也、本院(白河)新院(鳥羽)有別車儀、美作守顯輔調新院御車、(立板、張透金銅唐草、下簾縫物、自餘銅鏁之美不能勞記、)臨期御同車、新院御烏帽、二藍二重織物御奴袴、御隨身右將曹季俊、左番長厚忠、冠胡籙(壺)脛巾、下﨟等如恒、(左將曹、右番長楷量、)本院御車後、御隨身公種祗候、(年來前關白家隨身、今朝初被召、布衣、)御車副八人、(二藍上下、紅打衣縫物、牛飼糸村濃、有金物、牛童裝束又調縫物、)左衞門督(直衣、○藤原通季)

第相渡、而中宮使實能朝臣小舍人雜色、皆悉著替裝束也、近代不見事也、今年依中宮初度、每事過差歟、所之前駈長官、齋王御車、出車如輿侍以下車、如宗、申時事了、還御之後歸家、著束帶相具宗能□□宗成、依民語、行向使少將重通還立所、已及乘燭也、師中納言(〇源重資)新宰相中將(經)二人、勸盃於舞人、事已了也、但於北面方、給官人以下祿、如例、次舞人首應鐵四人、先召府生秦重(候院者)給例祿、被物十餘領、使裝束人人十餘人纓頭、又召府生公胤、(殿下□□、召御隨身、)如初給了、次召番長敦忠、(候院者)次召近衛末重、(候院者)凡家主予、師中納言、新宰相中將、左大辨、頭中將、頭辨以下、殿上人諸大夫、及五十人、相分纓頭、誠過差也、從御禊前駈人人許、及祭使所所數十人集會纓頭、天下過差、如此事度度雖被制、不隨順歟、

〔長秋記〕元永二年四月廿二日、未刻上皇(〇白河)爲御見物、御幸於關白殿產食、依渡門前給、自然見物、內大臣、(〇源雅實)右大將、(〇藤原家忠)藤大納言、(經實)民部卿、(宗通)右衛門督、(顯通)藤中納言、(宗忠、束帶向使所歟、)治部卿、(能俊)別當、(忠教)新中納言、(實隆)中宮權大夫、(通季)右兵衛督、(實行)新宰相中將(雅定)供奉、宰相中將信通爲□□關白殿追從給、梁園官催御車□□後聞史外記許渡、無辨云云、未聞事也、大夫尉宗實垂纓渡大路、世以不可云云、　廿三日、扶女車、於雲林院大門邊見物、先人人車渡、(近衛使車、牡丹中居孔雀、織假花環、)申刻史外記渡、辨不渡、不知故、皇后宮大進敦俊渡、隨近衛秦兼利、同行重、(共右大將隨身)次近衛使右少將成通朝臣、隨右近番長敦方敦忠、(共院御隨身、兄弟也、)昨日彼馬隨、府生敦利季利、(共院御隨身也、)雜色、(萌木款冬打衣、織襲、)笠、(彼鎌付孔雀、如車、)小舍人、次馬助、(不知名、對馬前司厩注備男、)藏助道友、(佐渡守師季男也、□□□□、經外記者男、作藏人、今度始之、)次第使馬助範顯、長官家俊朝臣、給院御馬云云、但昨日不渡、無隨故也、齋王渡給了、見物上下競歸、垣下中宮權亮實能朝臣、今一人闕、雖有其催、申障由云云、五位公範季成、六位盛行盛俊、□□使泥障懸伏輪、件事大臣殿仰云、後三條院住吉詣御馬懸伏輪、當院古河詣又如此、其前未見此事、但大殿(〇藤原師實)臨時祭使勤仕給時、宇治殿(〇藤原賴通)鐙摺下付金銅魚形者、案此事、於和鞍專不可懸歟、賜上皇貴所鞍、不懸伏輪何事有乎、

物給、加賀介家定、丹波前司季房、刑部大輔仲房、居庭上、京之輩居隙有何事乎、御紫野幄幄、人人多擬神館御見物、不下自馬、下官（○源師時）不堪炎暑、暫下居幄頭辨實行少將雅定朝臣同之、相次人人多同之、此後上達部多被下自馬、上皇御車留幄北、幔下供奉上達部群居、右大將以下、兩貫首并下官藏人少將忠宗等居此幄、内府（○源雅實）祗候御車際、按察宗通卿、行向使幄、良久歸參、紫野幄南北行立、五間幄爲前驅座、其北北面引幔爲御所、其東立御車、幄南五六丈引幔（已上縹）自道東一町許、引諸司斑幔、幔北妻大夫尉重時、志資清候、追退雜人、南妻大夫尉兼季祗候、未了車渡、次内藏助行仲、次馬寮使有隆、次近衞使少將伊通、隨府生敦利兼久、（院）引馬府生兼近（隨政）番長季利、（院）車風流傳餝屋也、次皇后宮使大進重隆引馬、隨院兼久子、殿御隨身番長國重等也、次次第使馬助（某）次雜色所衆、次長官定仲、次御車、出車（森芳鄰國）次内侍前驅（安藝守尹通、出雲守左衞門大夫顯能、左衞門大夫說定、藏人實綠等也）出車（紅鄰）次命婦金作車、次藏人、次國司等渡了還御、於齋院前、垣下殿上人等留、酉刻還御大炊殿、後日左府（○源俊房）仰云、祭歸日、汝不具胡籙如何、申云、前日自内依召進上、仍不具儀也、仰云、老屈次將不具何事有乎、又仰云、行事辨爲隆、率上官渡、上皇（○白河）御前、不過幾程、當眼路乘車、極無禮事也、攝政關白見物時、尙隔眼路乘之、况於上皇御座哉、

〔百練抄　五鳥羽〕永久四年四月廿三日、賀茂祭還立、太上皇（○白河）御見物、右大臣（○源雅實）已下騎馬前驅、近年。大。路。爲。連年事、

〔中右記〕永久六年（○元永元年）四月廿一日癸酉、賀茂祭也、院（○白河）可有御見物也、　廿二日、今日院又有御見物由有催、仍巳時許參院、人々未被參間、暫參一條殿西御方休息、（依近々也）未一點御出、諸卿關白殿（○藤原忠實）内府（○藤原忠通）以下如昨日、但右府不被參、治部卿（○源能俊）源宰相中將（顯雅）參加、別當今日直衣、火長看督長四人、殿上人（衣冠）經東洞院被相具口條大宮大路等、立御車於知足院南大門南邊、立幄爲公卿座、（引諸司幔）行事右少辨師俊、下從車過御車前之間、以家保朝臣被問齋院事之具否歟、外記史等同渡了、使使飾馬引過之間、馬副令裝束渡如何、今日不渡馬副由、只手振許令裝束、令持取物之渡事也、使使次

兵衞尉平爲後、帶胡籙候御車後、先神館邊留御車、數刻御見物、此間供奉所司被相催、公卿於御車前、或有前（〇一本爲荊）合輿、或有輿言、而間御車前五六段許、傍樹陰有騎馬過者、萬人失色驚目、令御隨身秦兼久問姓名、肥後守藤盛房也、此人爲大奇怪、右大臣（〇源顯房）追被參、內大臣（〇藤原師通）新大納言（〇藤原宗俊）中納言中將（〇藤原忠實）自神館被參、殿下御神館齋王御所、未時許、院御車還至御見物所、公卿座設輕幔、使使渡之、但山城國司今日不渡、依例也、申初事了還御、內大臣、新大納言、中納言中將、留齋院、

〔中右記〕嘉保二年四月廿日、午時許參一院（六條殿）上皇（〇白河）幷郁芳門院（〇媞子）共有御見物、先從町尻末東、五間三面御棧敷（檜皮葺）其東又十間棧敷一宇、爲公卿殿上人座、兼居饗饌（高器）東西引幔（纐纈）左近埒北引主殿寮幔、寄兩院御車、有仰女院院司公卿幷殿上人、可勤仕女院前驅者、先一院前驅御隨身公卿前行、（公卿直衣、但此中左大將東帶、依可令參齋院給也、治部卿東帶、依使訪也、）公卿藤大納言（宗）左大將（忠）治部卿（通）左衞門督（公）藤中納言（基）左衞門督（家、次第不同、）御車（唐）二位宰相中將候車後、女院前駈殿上人（廿人許、予在此列、皆衣冠、）公卿新宰相中將、宗通別當（俊實、一人衣冠、）民部卿（俊明）御車（唐）加賀守爲章朝臣候御車後、女房出車五兩、（殿上人車代也、）女院侍所武者所屬從下御御棧敷之後、前驅公卿殿上人有盃酌、（公卿階緣殿上六位、殿上人階緣武者所、）此間從御前下給雪、炎天流汗之間、人々饗應、暑月給雪、誠以珍事也、事了撤饗饌、頃而兩殿下、從齋院令參御棧敷給、大殿依召參入御前、關白殿御公卿座上、仍殿上人皆敷疊於土見物、申時許事成、禊齋行事左少辨有信、（兼左衞門權佐）大夫史祐俊、新外記成宗、御棧敷前從車下渡、使左中將顯實朝臣、物具優美之由人々被申、車（八葉車、物見鎮、）中宮使大進仲實朝臣、長官左少將忠教、次官少納言惟信、齋院出車、女房打出衣華美也、（四季花）酉時許事了還御、兩殿下令急參齋院給歟、

〔長秋記〕天永二年四月十八日、祭歸上皇（〇白河）御見物、巳刻著衣冠參大炊殿、須相具壺胡籙也、而昨日依內召進上、仍不相具之、播磨守長實朝臣、間人々見參、其次語云、殿中納言（忠）參給後、可有御出也者、及未刻中納言參給、仍出御、經大炊御門、東洞院、中御門、大宮大路、攝政（〇藤原忠實）於高陽院北面小門見

車例也、而外記文任、令持使部人云云、史祿白單也、而外記祿赤被也、爲施勝劣之面目歟、猶可入車、

〔日本紀略後一條十四〕長元三年四月十五日丁酉、賀茂祭、今日見物車出、紅衣、檢非違使源清以下糺彈之、

〔榮花物語紫野四十〕四月〇寛治二年に成て、祭、院〇白河齋宮〇令子など御覽ずべしとて、世中の人心する中にも、齋宮のわらはべ、ちひさきおほきなる、いといみじくうつくしきに、女房われも〳〵といどみて、えもいはずしつくしたり、ふせむれうのうはぎに、しがきぬひものし、にしきのはかまをき、いひつくすべくもあらず、殿〇藤原師實にもさま〳〵にいみじうしつくしたり、院の御車は、との、御さじき見やらる、ほどなり、むまのときばかりに、院と齋宮とひとつ御車におはします、齋宮をば、くちにのせたてまつらせ給て、しりにをはします、いとかたじけなくあはれなり、御直衣の袖のほのかに見えさせ給へる、いみじうあはれにかたじけなし、女房花の色なるやまぶきどもに、唐衣いと花やかにいまめかしう見ゆ、ぬしはたれといはまほしうぞ、殿をはじめ奉りて、左右の大殿〇藤原俊房、源顯房、内大臣殿〇藤原師通大納言たち、それよりしもはたゞのこりなくつかうまつれり、殿をはなちたてまつりては、大臣たちもみな御馬にてさぶらひ給、世人いみじき見物になんしける、世ゆすりたるさしなり、齋院〇令子などの、たうじの后ばらのみこなどにておはしますこそはめでたけれど、かくはなかりき、かへさも同じことにて御らんず、まづ院のおはしますみち、むらさきのへ、きほひいそぎたる車のひゞきみちてみゆるとは、かゝるをりにやとみえたり、さき〳〵かく心のどかにことなくて、おりさせ給ておはしますみかど、ひさしくおはしまさゞりつれば、世にめでたき事にぞありけるとめで申けり、齋院の御車とゞめさせ給て、いりはてさせ給はず、ゐんのかへらせ給を御らんずるを人めで申けり、

〔中右記〕寛治六年四月廿二日甲戌、巳時許、上皇〇白河爲御見物、有御幸紫野、公卿源大納言〇經信中宮大夫〇源師忠左衛門督〇藤原家忠二位宰相中將、右兵衛督〇源俊實三位侍從、殿上人四十人許也、檢非違使左

一條ノ大路ニ札ヲ立テ、人ヲ恐シテ、シタリ顔ニ物ハ見ケルゾト、其ノ由惱ニ申セト被問ケレバ、翁申テ云ク、札ヲ立タル事ハ、翁ガ仕タル事也、但院ヨリ被立タル札トハ更ニ不書候ヌ、翁既ニ年八十ニ罷リ成ニタレバ、物見ム心モ不候ズ、其レニ孫ニ候フ男ノ、今年藏司ノ小使ニテ、罷リ渡リ候ツル也、其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ、罷出テ見給ヘムト思給ヘシニ、年ハ罷老ニタリ、人ノ多ク候ハム中ニテ見候ハヾ、被踏倒テ死候ナム、益无カリケムト思給テ、人不寄來ザラム所ニテ、ヤスラカニ見給ヘムト思給ヘテ、立テ候ヒシ札也ト陳ケレバ、陽成院、此ヲ聞シ食シ、此ノ翁極ク思ヒ寄テ札ヲ立タリケリ、孫ヲ見ムト思ケム尊理也、此奴ハ極ク賢キ奴ニコソ有ケレト感ゼサセ給テ、速ニ疾ク罷返リネト仰セ給ケレバ、翁シタリ顔ナル氣色ニテ、家ニ返テ、妻ノ嫗ニ、我ガ構タリシ事當ニ惡カランヤ、院モ此ク感ゼサセ給フト云テ、我レ賢ニナム思タリケル、然レド世ノ人ハ此ク感ゼサセ給不受申ザリケリ、但シ翁ノ孫ヲ見ムト思ケムハ理也トゾ、人云ケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、〇又見二十訓抄一

〔日本紀略村上三〕天暦三年四月廿五日戊戌、解陣、今日上皇〇朱雀御知足院、覽齋王還院、

〔百練抄四一條〕永延二年四月廿三日、齋王御禊、攝政〇藤原道長被向左府〇源雅信棧敷、院三四兩親王〇爲尊、敦道、同渡御、其儲不可數言、

〔小右記〕長和五年四月廿四日丁酉、午刻許、密々與小兒同車向狹敷、又西殿被見物、齋王日未入之間渡給、今日頗有次第違濫之事、須宮々走馬次有馬寮走馬、而列近衞府使前、次第使右馬助惟忠失歟、行事上并宰相、先是參攝政狹敷、騎兵不著熊皮行縢、皆著鹿皮行縢、近代如此、可謂違式、近衞府使右少將兼房、中宮使定頼、各從童六人、著縑狩衣袴、蓋依被制綾織物之類歟、未秉燭之前、從狹敷歸家、

〔日本紀略後一條十三〕長和五年四月廿四日丁酉、賀茂祭、　廿五日戊戌、若宮〇敦良親王於紫野見物、攝政〇賴通、原作長道、恐誤御車、行事辨以下、下車過御車前、左中辨經通、以祿令持藏人小舍人例也、外記史祿人

れて侍ける、　　前齋院式子内親王〇後白河皇女

神山のふもとになれしあふひ草引別ても年ぞへにける

〔薩戒記〕應永卅三年四月廿日甲申、賀茂社送葵桂、(葵插木居、副桂入折櫃居上、高杯二本、)社司著布衣持來之、

〔親長卿記〕文明十七年四月十七日、賀茂祭也、社家之儀、如形執行云々、葵桂自社司等許送之、如例年、

〔諸國圖會年中行事大成三上四月〕中酉賀茂葵祭、〇中略同日葵蔓幷桂枝を、禁裏仙洞及び關白家に獻ず、則御簾に掛らる、關東へは三月十三日京を立、四月朔日獻之、其餘諸家及び賀茂地人、悉く門戸に掛く、祭日には、賀茂地人各是を頭髮に插み、官家の人は、各葵蔓を衣領に懸らる、葵蔓桂枝是を諸蔓(モロカツラ)と稱す、葵は靜原より取來る、桂は松尾より伐來る、傳云、諸蔓を家に掛れば、夏日霹靂の災なしと云、

〔今昔物語三十一〕賀茂祭日一條大路立札見物翁語第六

今昔加茂ノ祭ノ日、一條ト東ノ洞院トニ、曉ヨリ札立タリケリ、其ノ札ニ書タル樣、此ハ翁ノ物見ムズル所也、人不可立ズト、人其ノ札ヲ見テ、敢テ其ノ邊ニ不寄ズ、此ハ陽成院ノ物御覽ゼムトテ被立タル札ナリト、皆人思フテ、歩ノ人更ニ不寄ケリ、何況ヤ車ト云フ物ハ、其ノ札ノ當リニ不立ザリケルニ、漸ク事成ラムト爲ル程ニ見レバ、淺黃上下著タル翁出來テ、上下ヲ見上見下シテ、高扇ヲ仕テ、其ノ札ノ許ニ立テ、靜ニ物ヲ見テ、物渡リ畢ニケレバ返ヌ、然レバ、人陽成院ノ物可御覽カリケルニ、怪ク不御マサヾリヌルハ、何ナル事ニテ不御覽ヌニカ、札ヲ立乍ラ、不御マサヾリヌル、怪キ事カナト、人口々ニ心不得ズ云合タリケルニ、亦人ノ云フ樣、此物見ツル翁ノ氣色ハ、怪カリツル者カナ、此奴ノ、院ヨリ被立タル札ト人ニハ思ハセテ、此ノ翁ノ札ヲ立テ、我レ所得テ物見ムトテ爲タルニヤ有ラムナド、樣々ニ人云繚ケルニ、陽成院自然ラ此事ヲ聞シ食テケレバ、其翁慥ニ召シテ問ヘト被仰ケレバ、其ノ翁ヲ被尋ケルニ、其ノ翁、西ノ八條ノ刀禰ナリケル、然レバ院ヨリ下部ヲ遣シテ召ケレバ、翁參テケリ、院司承リテ、汝ヂ何カニ思テ、院ヨリ被立タル札ト書テ、

葵桂

年既及勅問、殿下被獻勘物一紙、被爲見了、

〔本朝月令 四月〕中酉賀茂祭事

鴨祭之日、楓山之葵插頭、當日早朝、松尾社司等令賚插頭料參候、內藏寮祭使既來、置楓山葵於庭中、韶戶申使等、各插頭出立、禰宜祝等賜祿物、又走馬近衞二捧謝幣、與禰宜祝俱參松尾神社、是乃父母子愛之義、芬芳永存之心也、

〔兼載雜談〕賀茂の祭の時は、齋院神館にて、庭に筵を敷て、二葉の葵を枕にして寢給ふなり、忘めや葵を草にの歌は、不慮に面白き心を忘めやと讀り、

一賀茂祭に出る葵は二葉なり、そばの葉に似たり、又世上におほき、花の紅にさく葵も用ゆるなり、

　葵草照日は神の心かもかげさす方に先むかふらん

此歌にてしれば、二葉の葵にかぎらざるなり、この歌は、葵花向陽の心なり、

〔秦山集 雜著 甲乙錄 一〕葵桂、兩備曰、諸蔓葵、一種曰、片蔓、

〔倭訓栞 前編 二 安〕あふひ　葵をいふ、〇中略賀茂祭に用らるゝ、あふひは、訓義同じく、物異れり、二葉草とも、兩葉草ともいへり、杜衡を杜葵ともいふ、其類也、

〔親信卿記〕天延元年四月十四日、祭也、　十五日、葵桂各二折櫃、內藏寮付內侍所、上御社二櫃、下御社二櫃、掃部女官傳取奉女房、櫃付臺盤所御帳角、又櫃付南殿御帳云々、

〔永昌記〕嘉承二年四月十七日癸酉、今日賀茂祭也、〇中略中宮使掛葵、年々人々或掛之、或不掛、

〔玉海〕壽永元年四月廿日庚申、賀茂社司持來葵桂、聞著重服之由、稱可有憚、故進少將方、家不懸葵、但少將姬君等方懸之、

〔千載和歌集 三夏〕賀茂のいつきおり給ひて後、祭のみあれの日、人の葵を奉り侍けるに、かきつけら

生爲率馬鐵、桑絲十匹、八木卅石、被物等云云、人之狂亂、世之衰亡、或居飼祿絹二匹、或手作布五端、加被物云云、奇怪々々、不可陳盡、

治安三年四月十七日庚戌、早旦遣祿物于宰相許、（合褂二重、袴單重八重、所儲祿不足料、）右兵衛督幷宰相、向使少將社頭幕所云々、近代例云々、令催饗饌等、西對裝束等昨（○昨上恐脱如字）未終許、權大納言行成卿來向、人々言、唯今對面之由、余（○藤原實資）出客亭著座、權大納言、右兵衛督、式部大輔等著座、宰相昨今不著、上達部座居殿上人上座、行事上達部饌等、及盃所之間、使少將來向、（申刻）重義朝臣（四位）執盃、（謂迎盃）於中門外勸之、五位執盃肴物、（古昔例、執盃者四位一人、五位一人、肴物者二人也、而近代不然云云、）少將入自中門、次發歌笛聲、陪從等進立庭中、止駿河舞、令舞求子、了使陪從等座一獻、（殿上四位）仰案內、止往來盃直下也、余執盃勸大納言、二獻、（大納言）上達部座、（殿上四位）式部大輔廣業、起座來受余盃、須右兵衛督經通進受、而依親親有所憚歟、次居上達部座粉熟、先是居使陪從殿上人座汁物、（還立日、使陪從殿上人座不居粉熟例也云云、）三獻、（廣業）上達部座、（殿上四位）次下箸歌遊、次給祿、（祿在渡殿、仍殿上四位五位地下人等、經西對東簀子、到北渡殿執祿給、使番長、信濃布四段、案主府掌三段、近來于陪從減一段、）畢起座、次上達部退出、加陪從六人、於渡殿北邊給之、祿法加使左右官人、（右將監吉眞、光高、將曹重種、（陪從）季理、武數、延命、府生久支、（陪從）弘近、右將監扶宣、將曹紀正方、多政方、高範、正親、府生保重、扶武、（陪從）公忠、）神館祿、（五位將監重方、白綾褂一重、袴、重方宿禰爲山城介、供奉、年預行事云云、將監重褂一重、府生單重一領、舞人陪從單衣、加陪從同祿、）歸日祿、（五位將監白褂一重、摺袴一腰、將監二疋、摺袴、將曹一疋、絹一、袴、府生一匹、［細字］右府生公忠［細字］綾褂一重、摺袴、絹廿匹、府生扶武［細字］褂一重、十五匹、左近番長近則［細字］同扶武、袴、右番長光武［細字］如扶武等、但絹十八匹、公忠扶武近則光武四人也、兩殿返、舍人各褂絹十匹、居飼各二匹、送官人、余隨身各匹絹、社頭幕所褂頭極猛、使所儲外、兩宰相上侍臣十余張、地下四位五位數多到訪、衣、公忠被物及卌余領云云、件祿事、余不口入、又不見、早入簾中、奇怪事也、從近代例歟、然可謂世之狂亂、）

〔玉海〕文治二年四月十四日辛酉、此日祭也、使左少將定輔朝臣、以職事兼時、遣舞人半臂下襲六具、（依使申請、去夜遣了、猶今日可遣也、）今日使無御前召、只給勅祿、近代例也、是又使所望云々、昨日親經所觸也、余（○藤原兼實）雖可參、依物忌不出仕也、

〔宗建卿記〕享保十六年三月十七日、殿下（○近衛家久）仰云、先日予尋中賀茂祭使、無御前給祿事、享保十三

賜祿

直物之次、被成上官何事之有哉、仍召頭辨被仰了、祭以後可有除目直物者、

(朝野群載十二内記)賀茂祭女使申爵

正六位上藤原朝臣清時

望榮爵

大治二年四月十四日

件名簿、本自内給之、故不書、右狀又書位也、而職事被下内記之時、裏書狀云、女使某子申請止被注也、

(明月記)元久元年四月十二日、祭除目、(去三日延引、今日被行云々、)兩方所望更無許容、奉公甚無念、　十三日、巳時許見聞書、任人如春秋除目、(○中略)在朝中將皆非人、或放埒狂者、尾籠白癡、凡卑下﨟、不可超上﨟、非器上﨟、無昇進之道理之由評定云々、每除目剩加五十人、末代中少將不異匹夫、兩箇所望遂以不許、愈定盛經、成業非成業不書漢字、依商賈之力、造作之勤加任、爲長辨官世可驚、盛經父之子也、兄之弟也、理運之由、實者等擧申、又母后之懇切云々、　二年四月五日、祭除目、來十日可被行云々、家隆之望、於今者勿論、國自諸方被競望云々、　十日、今日祭除目云々、每月被任納言以下、人々昇進急於流水、悲哉衰老沈淪之身、　十一日、午時許聞書到來、羽林剩任又如例、權門狂女等之夫、帶重職顯官、是恒例也、經高遂任顯官、

(平戸記)仁治三年四月九日辛酉、昨今殿下(○藤原良實)御參内、今夜可被行祭除目、仍其沙汰之間、御早參云々、(○中略)秉燭之間被行除目、是祭供奉官等也、其次已及公卿昇進、

權大納言源顯定(超越數輩)　權中納言藤原公好(父卿辭左大將大納言等中任之)　少内記中原國秀　内藏助中原盛家　木工助中原師齊(○下略)

(小右記)寛仁三年四月廿二日己酉、今日祭使也、　廿三日庚戌、今年大殿(○藤原道長)御馬舍人祿、二位宰相子中宮亮兼房給絹十五匹被物云々、皇太后宮使亮濟政、東宮使學士廣業、過差無極、兩殿隨身府

物、今日遲々、藤中納言基忠卿出車不獻之故也、但以左大將御車爲其替、如此間自懈怠也、又內藏寮使早々渡也、頗可謂違例歟、齋王渡給之後、兩殿下令參下御社給云云、

〔薩戒記〕永享五年三月十七日辛未、四條宰相（隆夏）送使者云、賀茂祭女使出車可獻之由、頭中將（隆遠）所相催也、車已下不所持、仍雜色一人可召進之由返答了者、予答云、賀茂祭女使出車、至牛童車副者所相副也、至雜色者未知其例、奉行誤所相觸歟者、　六年四月十四日辛酉、賀茂祭也、藏人右少辨重政申沙汰也、近衞使左少將資益也、典侍俶子、於此亭出立、左祭也、表著用蘇芳、出車花山院大納言（持忠）、四條宰相（隆夏）等從也、雖依諒闇出車、童女出衣如恒、治承五年例也、但不付扇於簾、童女用檜扇、已上予今案也、於北陣御覽之時不立榻、是先例也、但舊例不詳、自餘大略不相違恒年、抑近代諒闇不飾葵於車云々、然而予以今案飾葵了、

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）四月五日、今日有祭除目、新大納言（家）左大辨參仗座、先御禊前駈定、次除目、馬助二人、近衞將監一人云々、又內侍除目、典侍藤房子、故常陸守家房朝臣女也、又左少將忠教朝臣還昇、殿下（○藤原師實）令參內給、事了退出、

嘉保二年四月五日、今日祭除目、幷御禊前駈定也、但除目之間、依可有僉議、公卿參會、（○中略）又諸陵頭被補事、如何、可尋、祭除目猶可有禁忌歟、可尋先例事也、

〔永昌記〕嘉承二年四月五日辛酉、今夕有祭除目、源大納言藤宰相參仗座行之、前駈定日、多是被行、然而亦例也、

〔中右記〕天永二年四月五日、候殿下、（○藤原忠實）被仰云、明日欲申行祭除目之處、山城介親行申輕服之由、被相尋之處、已以無實、仍返辭書、猶可勤賀茂祭之使由被仰下也、然者不可有除目歟、但近日外記史有其闕、猶可被成歟、而院御鳥羽、又我物忌也、被延行如何、予（○藤原宗忠）申云、賀茂祭以前被行除目事ハ、可供奉祭之諸司、闕時爲被成也、不然者強祭以前不可被行事也、就中近日可有直物者、祭以後被行

〈辨、史同着、院司着東廊西面北上、中上卿、敢无他人、〉

定文體

可被出禊祭兩日檳榔毛車六兩事

源大納言家　右衞門督家　新中納言家　藤中納言家　右大辨家　宰相中將家

車副各六人〈可着冠褐衣袴布帶、從院可受、〉

年月日

可被勞祭日童女騎馬四匹事

近江守朝臣　右馬頭朝臣　右京大夫朝臣　殿新少將朝臣　少納言朝臣

陪從各二人、口付各二人、

可副沓笠雨衣深沓等

年月日

○按ズルニ、右ハ中右記大治四年四月十三日辛酉ノ文ナリ

〔西宮記〈四月〉〕賀茂祭事

延喜七年四月十四日庚申、御記云、年來例、齋院女騎、以左右馬寮調度備給、而右馬寮有穢、因令仰左馬寮召女騎料覽、又左右大臣〈○藤原時平、源光、〉左衞門督等進女騎料馬、此中選定公卿等馬、先日所仰也、

〔日本紀略〈七圓融〉〕天元五年四月廿二日癸未、賀茂祭女使料唐鞍等、內裏臨期之間觸犬死穢了、仍諸卿可獻借〈○借當作備〉之由被宣下之、今日警固、

〔中右記〕寛治八年〈○嘉保元年〉四月十五日、賀茂祭也、〈○中略〉終日候內、供內外御膳不見物、後聞上皇〈○白河〉有御見物、女院〈○郁芳門院媞子〉御同車、二位宰相中將修理大夫俊綱朝臣候御後、藤大納言以下公卿十人許前驅、立御車於一條東洞院西、大殿〈○藤原師實〉北政所新殿下令參齋院給、齋王出御之後、於西洞院御見

一同壹石　宣命料紙（圖書寮）　一同三石　祿料（内藏寮）
一同五斗　勸盃（造酒司）　一同五斗　瓶子（同上）

葵祭下行高三百石
　殘米拾壹石四斗

〔泰山集（甲乙錄　雜著一）〕葵祭用四月中酉日、三百年中絶、去年再興、賜祭料千石、當年（〇元祿八年）一神主梅辻三位下向、拜其柰也、其祭尤嚴重、神前掛葵與桂、有勅使、

〔吹塵錄（皇室追加　三十五）〕御貢獻米幷定例御下行（〇中略）
葵祭御下行
一米千三百三拾石　堂上方
　内米三百石
　米五百五拾壹石八斗　上加茂
　米四百七拾八石貳斗　下加茂
是は年々二條御藏より御渡相成申候

〇按ズルニ、此ニ記スル所ノ下行額ハ、德川幕府ノ末ニ、皇室ノ御料ヲ增加セシ時ノモノナリ、

〔江家次第（四月　六）〕御禊前驅定（〇中略）
同出車騎馬等定
上卿辨史參本院、著客殿、（上卿昇自北、辨昇自南、但辨昇自南廊、著東鳥居下、上卿昇後進昇、著南廂、）座定、先有勸酒事、（先是居饌、）長次官勸盃、（長官次官著東廂、）上卿擬辨、辨起座給盃、復座飲之、（史不參著、先可給盃、）次居粉熟、（上卿以下立箸、）上卿召文書、院司獻之、（例文一卷入柳筥、置上卿前、紙筆入同筥、置辨前、）辨隨上卿命書之畢進之、（一枚出車、一枚騎馬也、）上卿副文書下給院司、（〇司下一本有又字、）召覽禊祭進未勘文、辨仰院司令進之、下給辨、辨拔箸、辨先起座、下立巽角、上卿相揖各以退出、（上卿著母屋東面、辨著南廂北面、有于故障輩者、院司觸

〔下行賦類抄上〕賀茂祭 中酉日

應仁元年、大亂以後斷絶、元祿七甲戌年四月十八日、御再興、

一現米三十五石　勅使 左右近衛中將　一同十五石　賀茂傳奏 大中納言

一同拾石　同奉行 五位職事　一同三石　宣命 大內記

一同拾石　宿料 內藏頭　一同四拾石　奉幣料 內藏寮

一同壹石五斗　少外記　一同七石　內藏使

一同七石　山城使　一同拾四石　檢非違使二人

一同三石　左右馬寮一人　一同拾石　御隨身四人

一同四拾八石　舞人六人　一同四拾二石　陪從六人

一同壹石　出納　一同五斗　大藏省

一同五斗　內藏寮　一同五斗　小舍人

一同五斗　掃部寮　一同九石　看督長八人

一同二石八斗　火長四人　一同二石　內藏寮史生二人

一同二石　衞士二人　一同二石　使部二人

一同壹石五斗　童子一人　一同壹石六斗　杖持一人

一同八斗　雨皮持一人　一同八斗　掛杖持一人

一同八斗　雨皮掛竿持一人　一同壹石六斗　榻持二人

調進方

一同三石　御馬 馬寮　一同九斗　圓座三枚 掃部寮調進

一同三石　殿上疊 出納　一同五斗　小板敷疊 大藏省

寛仁三年四月十九日丙午、未剋許參齋院、宰相相從參入、宰相著殿上人座上首、行事辨經通著同座、外記史著南座、令召院司、良久長官光清朝臣參入、依禊祭料未究進、院事難成、走𢊨等狩袴未調、又下仕裝少々不足者、又申云、下仕裝不足、以舊裝令著如何、又走𢊨狩袴、用舊如何者、令仰云、事已臨御出期、不可事闕之樣、可計行之由、令召仰也、仍行事辨朝臣云、先日進禊祭未進勘文、其後不申左右、已知究進申已、臨當日申此由、不可然者、

〔左經記〕寛仁四年四月十一日壬辰、參關白殿(○藤原頼通)入道殿(○藤原道長)内等、(○中略)賀茂祭御幣不辨濟國國、遣檢非違使可令催之由有仰、

〔中右記〕天永二年四月十三日乙巳、去年依初齋院行事所始有鎭西召物、而臨歳末所持來也、件絹八百匹、奉齋院女房、是裝束不足料雖申請、榮爵先猶以不足、仍奉此、太宰府去年所進之絹也、

〔吉續記〕文永四年四月八日、今日被行小除目、賀茂祭用途諸國難濟之間、被成任官、予(○藤原經長)依失火之穢不申沙汰、光朝奉行、功人濟々、

〔康富記〕應永廿九年四月廿三日己酉、賀茂祭也、行列外記宗種也、(行粧雜色二人、仕丁牛飼等也、車官務□□也、歟亦無念々々、)御訪如例年、三百疋被下行之、

〔建内記〕文安元年四月十二日辛卯、賀茂祭總用内、昨日且八千匹、可致沙汰之由、伊勢入道異蓮申候、仍以使者(常慶)所被下知付正實坊許了、以家種名判、可書切符之由裁折紙、示正實了、依六斎五體不具穢事、昨夕神事不及執沙汰、今日以依赤口舌日、昨日日付、少々出切符也、　十七日丙申、藏人辨來、賀茂祭總用殘三萬五千匹、(先日八千疋到來、予下行了、)自伊勢入道下知兩所、(正實、籾井、)仍俊秀悉下行了、總都合總用未決云々、召常慶算勘無相違也、珍重々々、

〔康富記〕文安六年四月十五日乙丑、參萬里小路、賀茂祭行列切符催促、料足未到云々、辨令對面給、廿一日辛未、賀茂祭御訪三百疋、自籾井方到來、傳奏切符直付之、行法朝臣請取來了、

〔延喜式主税二十六〕凡賀茂祭使食料、以山城國正税五百廿束充之、

〔延喜式大藏三十〕四月賀茂祭日、立七丈幄四宇五丈幄八宇、懸幔、上社七宇、下社五宇、給諸司祿料庸布二百段、送齋院司、令班給之、

〔延喜式齋院六〕下上兩社幣帛料

五色絁各四丈三座、座別一丈三尺三寸三分、

右院司、就内藏寮請之、○下略

〔小右記〕寛弘二年四月廿一日戊戌、今年賀茂祭日、齋院女房唐衣外著白衣、似有所思、以信乃國前司濟政、新司佐光、禊祭料紅花、今年許依新司申、被許色替、一斤代布一端一丈、勘定一斤二端、以去年紅花、前司辨濟、而公家被定云、去年十一月辭退新司須辨濟者、新司申云、紅花有時、仍以前司分附新司、承之可辨濟也、而不度一斤、爲之如何、前司云、去年旱損、悉以損失云云、猶以後司可令辨濟云々、仍今年許申請色替云々、左府所定申云云、事頗乖理、仍爲令知衆人、令著白色、誠有所以、爲後所記也、

長和四年四月廿一日庚午、未剋許參齋院、左少辨經賴朝臣、外記元規、史行信等、列立客殿東庭、余揖著座、次辨已下著座、經賴朝臣著殿上人座、少時參議朝經參入、右大辨 召長官爲政朝臣、傳經賴朝臣、令問禊祭料未進國々事、加賀播磨等事、爲政朝臣所申有理、仍仰以使官人可令催進加賀禊祭料之由、播磨究進了、但去年御月料米、左右相論不進、仍以當年禊祭料所寄納也者、令仰了、以禊祭料不可寄收御月料米、爲政申云、去年御月料事、令催仰之處、國司申云、進濟了、若有未進者、先以禊祭料可被寄納、亦以不被寄納、可知究濟御月料之由者、仍以當年禊祭料所寄納也、當年御月料、進解文下文等、去年事既以牢籠、去長和元年、初任彼年御月料米、同二年進濟、其解文注去年料、而今更案得、以彼元年料、可爲去年料之由所申也、但先日諸資宣旨了、返解申元年料進濟由、以彼解文可被相定者、如爲政朝臣申、似有理致、仰可進國司返解文之由了、

綿一屯、曝布一端、緋布一丈四尺、飼絡八尺、左近緋、右近緋纈、已上官物、馬寮官人五位已上一人、絹五匹、細布五端、並官物、緋貲布一端、寮物、馬部一人、貲布一端、紅花大一斤、並官物、御馬十二匹、二匹松尾社料、結額料緋絲二絇、鬠幷腹帶料曝布三端一丈四尺四寸、並官物、中宮五位已上官人一人、絹五匹、細布五端、並官物、緋貲布一端、寮物、史生二人舍人二人裝束料、同寮使、持幣帛衞士、同物、女使料、白絲四匹、色絲四匹、緋絹二匹、纈絹二匹、纈油絁一匹、錢五十文、竹大笠一蓋、已上內侍料、白絲二匹、色絲二匹、白絹一匹、白綾一丈五尺、緋絹一匹三丈、纈油絁一匹、望陀布一端二丈、錢四貫文、已上命婦料、白絲一匹、色絲一匹、白綾一丈五尺、緋絹一匹、纈油絁一匹、望陀布一端一丈、紺細布三端、已上藏人料、白絲一匹、色絲一匹、已上闡司料、並用寮物、

右夏四月中酉祭之、當日巳一剋、寮使就內侍、申罷狀、給宣命、然後使內侍已下退出、於寮廳前、與使官人等共解除、訖松尾社幣便附禰宜祝等、即使等再拜兩段退各就座、掃部主水等寮司並供奉、寮家供饌行酒乃發、山城國司率騎兵等、於京外路前驅祗承、○又見本朝月令所引弘仁內藏式、

〔延喜式三十六主殿〕賀茂神祭料

油二升、油䃭一口、燈盞八口、燈炷布二寸、續松五十把、

〔延喜式四十造酒〕賀茂神祭料

酒一石二斗、絁四尺、篩料、曝布三丈二尺、二尺酒臺二具折敷料、八尺缶四口覆料、二丈二尺机二前覆幷折敷料、缶四口、坩二合、酒臺二具、筵

坏卌口、盤廿五口、匏四柄、八足机二前、

〔延喜式十二中務〕賀茂祭四月

使命婦二人女孺二人裝束料、帛十匹、絹十六匹、細布五端、紺細布廿端、紅花十四斤、裙四腰、直

〔延喜式二十五主計〕凡大和國交易所進齋院四月賀茂祭料、冠絹十五匹、河內國白絲卅匹、每年二月送之、其直用正稅、並以彼院返抄、勘會抄帳、

用途

〈○藤原實光〉殿上人兩三人、或直衣、或布衣、有盃酌、中時檢非違使等渡、山城介則宗、〈治師〉内藏助、皇后宮使亮信雅朝臣、中宮使權亮經定朝臣、近衞使左中將公隆、女使等典侍命婦藏人闈司等、依齋院不渡給、無所前騎、秉燭以前渡了、人々歸、〈○又見長秋記〉

〔山槐記〕治承三年四月廿一日己酉、今日賀茂祭也、初齋院〈○範子〉去九日入御左近府、仍不渡御、

〔延喜式〈十五内藏〉〕賀茂祭

下社上社松尾社〈社別禰宜祝各一人、下上兩社各物忌一人、〉社別五色薄絁各六尺、絲一絇、曝布一端、安藝木綿麻各大二斤、〈已上幣料〉裹料商布一段二丈一尺、〈二社各二丈三尺、松尾社八尺、〉阿禮料五色帛各六匹、〈下社二匹、上社四匹、〉盛阿禮料筥八合、〈下社三合、上社五合、並方一尺六寸、〉布綱十二條料調布一端一丈四尺、明櫃四合、〈已上官物〉

物忌裝束、人別夾纈三丈、〈袍料〉表裙一腰、〈充直〉帛一匹、〈袍裙裏幷裙腰料、已上官物、〉下裙一腰、紫絲十二兩、白紗一丈八尺、赤紫帛四尺二寸五分、兩面一尺五寸、絲四兩、〈並寮物〉帶一條、履一兩、紅花四兩、〈已上官物〉禰宜祝、人別當色料貲布四丈、絹一匹、絲一絇、〈祝除絲〉調布各一端、

使儲幣

五色帛各五丈、調布一端、安藝木綿大三斤、麻大一斤、紙七十張、〈已上寮物〉

使等向祭日解除料曝布一端、商布二段、安藝木綿麻各大一斤、鍬二口、白米三升、酒四升、合盛腊一籠、鹽一升、〈已上官物〉

使等裝束料

寮官人五位已上一人、絹七匹、細布五端、曝布五端、〈已上官物〉袜貲布一端、〈四位深緋、下同、寮物、〉史生二人、各絹一匹、細布二端、曝布一端、藏部一人、絹一匹、貲布一端、曝布一端、紅花大一斤、持幣帛衞士四人料緋調布二端、〈衫料〉曝布一端、〈布帶幷袴料、已上官物、〉

近衞府五位已上官人一人、絹五匹、細布五端、〈並官物〉袜貲布一端、〈寮物〉近衞十二人、〈二人松尾社、其料充寮物、〉各絹一匹、

齋王不侍祭

事從神事之時、主上臣下、皆改諒闇服、是例也、於內裏之鋪設者、已是諒闇之御裝束也、豈觸神物哉、愼事理不懸、何事之有哉、隨又社司等申云、亮闇年簾、進葵不懸、黑漆臺盤不懸蘆簾云々者、

〔明月記〕建久三年三月十三日、未明雜人云、院〇後白河已崩御、〇中略諒闇一定也、〇中略臨時祭賀茂祭、四月諸社祭皆可止云々、

〔續史愚抄後柏原〕明應十年〇文龜元年四月十九日丁酉、賀茂祭無沙汰、但如例年者、被懸葵於簾、而今年依亮闇無其儀、

〔文德實錄三〕仁壽元年四月辛酉、遣使者向賀茂大神社奉幣、但齋內親王未登齋院、故不得侍祭、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年四月十七日丁酉、賀茂祭如常、齋內親王未入野宮、故不向社、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年四月廿三日丁酉、賀茂祭、朝使幷齋內親王不向於社、山城國隨例奉祭、

〔類聚國史五神祇〕貞觀十年四月廿一日乙酉、賀茂祭、齋內親王依穢不向於社、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年四月廿日丁酉、賀茂祭、內藏權頭從五位上兼行讃岐介良岑朝臣晨直奉承祝詞向社宣旨、其祝詞尾曰、辭別申久、前年爾進留齋王波、重喪爾遭留太留依天、退出志女天岐、今須波諒闇波天天乃後、占定天進无、其間波天皇我朝廷乎、平介久安夏久介幸賜比護賜倍止申賜波止久申、

〔西宮記四月〕賀茂祭事

延喜十五年四月十九日己酉、祭如常云々、只齋王不參社頭云々、午剋使等令申向社之由、覽使等飾馬從者了、命婦藏人閑司等召南廊給祿、典侍於陣外令申參由、未一剋出南殿、拜賀茂大神、申齋王不參狀、兼祈平安、〇又見日本紀略

〔日本紀略六圓融〕貞元元年四月廿五日辛酉、賀茂祭、齋王〇選子未入本院、仍無供奉、

〔中右記〕長承三年四月十八日丁酉、賀茂祭也、但齋院不渡給、仍祓祭上卿以下無之、只外記一人行向列見辻渡之云々、依大殿〇藤原忠實召參御棧敷、一條南、烏丸西、關白殿〇藤原忠通民部卿、中宮權大夫〇源師時左大辨、

上不御帝都、仍無沙汰、今度者主上〇後光嚴不動洛中御座、依不合期延引、可爲下支干之由有沙汰歟、但不及宣下歟、此間有勅問云々、議奏人々可尋記、

停止

〔文德實錄五〕仁壽三年四月乙酉、以疱瘡流行、人民疫死、故停賀茂祭、遣侍從從五位上島江王、神祇大佑從七位上忌部宿禰高善等、向社下申謝事由、但山城國司齋供如常、

〔文德實錄六〕齊衡元年四月癸酉、以有穢事、停賀茂祭、但山城國司齋供如常、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年四月廿四日己酉、賀茂神祭、停遣朝使、緣有穢也、〇又見西宮記

〔三代實錄清和二十五〕貞觀十六年四月廿一日己酉、賀茂祭、染淳和院火穢之人入於齋院、仍停祭事、

〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年四月十四日辛酉、停賀茂祭、以大極殿火災也、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年四月十四日癸酉、停賀茂祭、〇中略緣太皇太后〇仁明后順子崩也

〔日本紀略朱雀二〕天慶元年四月廿日丁酉、停賀茂祭、依内膳司人死穢也、　廿八日乙巳、仰國令祭、

諒闇例

〔西宮記四月〕賀茂祭事

元慶五年四月廿日、〇丁酉鴨祭、依諒闇不用歌舞云云、

〔北山抄一四月〕中申酉日賀茂祭事

天曆八年、近衞府令申發向之由、命婦藏人等給祿如例、不寬使々被馬、諒闇可尋之、内藏使

〇按ズルニ、此年正月太皇太后〇穩子朱雀母后崩ジ給ヒシヲ以テ、飾馬御覽ノ事ヲ止メラレシナラン、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年四月廿一日癸酉、賀茂祭、依諒闇無歌舞、近衞等袴不摺、依無齋王無次第使、中宮使宮司等各申故障、仍本宮以散位源正雅爲代官、

〔玉海〕治承元年四月廿六日乙未、定能朝臣來語云、祭之間蘆簾可懸葵葉哉否有其議、忠親問曰、保元懸之由覺悟也、彼時爲職事、慥見之、但可否者不知云々、藏人次官基親云、保元依亮闇不懸葵之由、祖父範家所記置也、是定例也云々、兩人之說已以參差、然而遂付基親說不懸之云々者、余〇藤原兼實案此

中絶
再興
延引

〔二十二社註式〕賀茂祭（四月中酉日、若朔日當酉者、下酉行之、式云、賀茂祭爲中祀、○中略）

衆敎案之、於造社者、天武六年也、於祭者、自欽明被始行歟、（賀茂祭日、佩山之賽插頭、當日早朝、松尾社司等令賽之、）

〔一代要記　天智〕六年丁卯、賀茂祭始之、

〔宣胤卿記〕文龜二年四月十九日辛酉、賀茂祭禮、亂。來。不。及。沙。汰。

〔公卿補任　東山〕元祿七年四月十八日、賀茂祭、（再興）近衛使左中將定基朝臣、奉行俊清、

〔三王外記　憲王〕賀茂廟者、平安大祠也、每歲四月兩次祭之、天皇遣使享獻、其禮甚大、自皇家衰微、大祭廢三百餘年矣、王命復之、博士祝士考其禮、元祿七年始行事、

〔秦山集　雜錄甲乙錄二〕葵祭、梨木氏公通卿、皆以爲下鴨祭、今度（○即元祿七年）有議、爲上鴨祭、予扣梅辻請其說、三位秘而不傳、只言梨木說非是、

〔西宮記　四月〕賀茂祭事

承平七年四月齋院兄代明親王薨、祭延引

天德四年三月卅日御記云、民部卿藤原朝臣令奏、外記朝望勘申、諸祭有穢之時例文、仰云、（○中略）至于賀茂祭、依天曆四年例、以下酉可行之由仰了、

天德四年四月廿七日御記云、丙申、此日有齋院（○樂子）禊事、例午日行、而依穢今日行之、藏人所陪從、山城近江牛等不覽、遣彼院也、

〔園太曆〕文和四年四月十一日、今日右府（○藤原道嗣）被送消息云、又賀茂祭延引、不打任事歟、停止又如何、正慶比不被行歟、覺悟分可承云々、（○中略）賀茂祭事、有異子細之時、或以次支干被行之、或停止之、其以難存例、有限之神事、依難沙汰具被停止、延引停止例、穢氣之義頗邂逅歟、依事之不具、偏停止嚴重之祭禮、神慮猶有畏、　十七日、今日賀茂祭不被行云々、是每事不被沙汰具之故云々、穢氣之時延引、天曆以後至仁安、二度之例也、停止、自仁壽三年至元弘三、依穢氣停止了、其外正慶二、觀應三、有子細、主

起原

〔日本紀略 三 村上〕天暦元年四月十八日癸酉、賀茂祭也、中納言元方卿著齋院行事、自未剋天陰暴雨、因之齋院司大營、令實檢院內雜人之處、混雜人重服之者、仍解除其由、陰雲忽晴、祭事无滯、

〔日本紀略 六 圓融〕天延三年四月十四日丙辰、內裏有觸穢、賀茂祭可被行否、令神祇官陰陽寮等占卜之、殊申无咎之由、仍以不穢所司、可令奉仕祭事之由被仰了、祈年、當麻、杜本、當宗、平野、松尾、大神等祭、依恒例供奉、但至于賀茂祭、供奉諸司多敉（○敉恐穢誤）非無穢疑、依弘仁天長貞觀天慶等例、行司被下了、

〔小右記〕天元五年四月廿三日甲申、今日有大祓事、賀茂祭間、內裏有穢之時、前例被行大祓云云、上達部不參入、仍以右中辨爲上代被行云云、　廿四日乙酉、儲所饗處來問人等未時許參宮、設唐鞍引馬等、申時許有祓事、祓了向一條大路、於上東門騎唐鞍馬、權左中辨致方、民部少輔時通、修理亮孝忠來會相訪、差史生公助、遣內藏寮、令受葵桂等、酉時許渡一條大道、姬宮使於式御曹司理髮、於其邊騎馬、寮使正充、忽有服身之暇、（今日見念祥亡）仍以次第使左馬助保信、爲馬寮使、仍无次第使、皇后宮依穢不被立使、東宮依御服又不被立、酉終著下御社宿所、戌時許參社頭、令奉御幣、可參上御社、即參御幣、了歸宿所、（件宿所在河東、號御社政所、）今日大相府（○藤原賴忠）左府（○源雅信）被見物、今日納言不參齋院、唯參議二人參入、依仰爲上代行云云、（○又見日本紀略）

〔後愚昧記〕應安四年四月十五日、賀茂祭也、近衞使□□□□、檢非違使景賴、（五位尉）云々、抑賀茂社中門內者、去十一日死人手犬喫入候、然而不可穢之由法家依勘申之被遂行、今日祭禮了、又有勘問等云々、

〔本朝月令 四月〕中酉賀茂祭事

秦氏本系帳云、（○中略）其祭祀日乘馬矣、志貴嶋宮御宇天皇（○欽明）之御世、天下擧國、風吹雨零、爾時勅卜部伊吉若日子令卜、乃賀茂神祟也、撰四月吉日、馬繫鈴、人蒙猪影、而驅馳以爲祭祀、能令禱祀、因之五穀成就、天下豐年、乘馬始於此也、（○又見伊呂波字類抄、年中行事抄、河海抄、詞林采葉抄、）

〔西宮記四月〕賀茂祭事

承和六年四月廿二日(〇癸酉)、依鴨祭廢務、勅使幷女使等騎馬、度紫宸殿前、天覽了參東宮、御覽了到內藏寮云云、將進發之間、自內裏使來仰云、有下血之穢、仍各勅使幷齋王、忽停止、山城國司依例祭祀、
檢故實、內裏有穢、彼院不穢、齋王猶參入、而此度不檢記文、忽停止齋王、不可爲例、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年四月十七日辛酉、修賀茂祭、先是內藏寮有人死穢、仍勅使自縫殿寮進發、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年四月廿日乙酉、賀茂祭如常、先是左近衞官人之染死穢者、入侍陣座、是故祭使不更辭見、使自內藏寮赴社、

〔西宮記四月〕賀茂祭事

延喜八年四月十七日御記云、左大臣(〇藤原時平)令外記春正申云、齋院御禊所木工寮工暴死云々、同十八日、道明朝臣、子細奏裝束所死穢狀云々、仰穢所在幕外、无限川原、限何處爲穢、以爲不可穢、中臣祓有視離穢詞、雖不爲穢、宜避其詞、又令替近邊幄幕等云々、

延喜九年三月廿二日御記云、高階朝臣申云、齋院供奉祭日日記進止如何、(輕服)仰外記令勘先例、外記春正申云、國史日記等无所見、案令式文、親王有服云々、然則齋王不可參祭也、又召神祇大少副藏人所問之、申云、齋宮不忌輕服、准此則可參祭、又令公卿等定申云云、准齋宮例、參祭无妨云々、依公卿定、可參祭事、仰高階朝臣了、

延喜十年四月十四日、賀茂祭饗、依內藏寮穢、於御廐可行事所、院司共催禊祭料男女使等飾物、女官申河原饗料事、藏人奏下、

承平七年四月一日、貞公御記云、賀茂齋內親王、(〇婉子)遭兄弟喪、參祭否之由令公卿定申、民部卿(〇平伊望)令申云、今日公卿少數、須明日朝可令定申、三日齋宮齋院著輕服否之由、令問彼宮々、不著者齋院可參祭之事定了、(中務卿親王去月廿九日頓滅、)

〔夕拜備急至要抄上四月〕一賀茂祭

解陣　上卿　六府　官外記〇中略

上卿賀茂祭解陣、可令參陣給者、依天氣言上如件、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年四月十八日戊戌、諸衞解嚴、〇西宮記二十七日祭當日解警固トアリ

〔西宮記四月〕賀茂祭事

承平八年四月廿一日九記云、大納言以藏人時經、令奏可解陣之由、依內侍不候也、蒙仰之後、大外記公忠令召諸衞官人、公忠申云、左衞門陣官人、警固日一人不候、因之被勘定陣之由、未進過狀之間、令召有事疑如何、納言差公忠令申大相府、〇藤原忠平被命云、彼府已不蒙召仰、何仰解陣哉、因之只仰五府、左兵衞佐尉等不候、仍督列立、此事雖無近例、式文已稱尉以上、因之所召仰也

〔日本紀略一十後〕長保四年四月廿二日丁亥、解陣、昨日依上卿不參延引、

〔小右記〕長和三年四月廿日乙亥、右衞門督〇藤原懷平被示送云、昨日酉刻許、有召參內、行解陣事者、

〔中右記〕永久六年〇元永元年四月廿二日、依有催參內、依解陣事也、先著奧座、召外記、問衞府參否、五府參之由所申也、右衞門府不參也、雖五府先々所行也、招新藏人重俊、奏事由、歸來仰聞食由、移著端座、以官人令召內豎、內豎候小庭、〇或以外記召也仰云、司司召之、諸衞出入日花門、列立軒廊南庭、西上北面、〇佐尉相加予向北問云、誰、各稱官姓名、了仰云、陣解〻、稱唯退歸、其後退出、亥時許歸家、

〔明月記〕建曆三年四月十五日、少將直衣參內、未時許、取寄裝束物具云々、彼聞日入之程、按察參入行解陣、召外記問諸司、此間六府、出敷政門向日華門、左少將爲家、右少將敎通、左衞門佐家季、右衞門權佐成長、左右兵衞尉二人云々、內豎告召由、將佐入日花門、〇左近爲先自庭上進立軒廊南砌外、〇左近當上、爲後程、六位在後列、上卿仰云、陣解介、稱唯右廻、經下臈前退出云々、近代不仰本陣解陣事、亦本自無平張也、

〔園太曆〕貞和五年四月廿六日丙戌、今日解陣、右衞門督忠季卿奉行云々、

解陣

衞門督、新中納言、宰相中將、藤宰相、相率參著、兩貫首以下、殿上人五六輩被參候、攫餜盃酌如例、頃之近衞府使參上、先著幄、舞人片舞、使出立如例、次給祿、次寄御車、（東面）此間辨以下賜祿、（於幄下立給之）午即以前行於柏社、列見、相副牛車前行、參向本院、（自東門入）參著客殿、近衞早參、頗被鬱結、依示子細、被著客殿、（座饗盤）申斜、齋王入御自中門、寄御車、予幷史等列立如初、（相對面、依例予獨立、不被參、然）不曳御車以前予逗退、爰內府被催仰長官、時刻推移、每事懈緩、內府又被催、予直行本院事、先令敷所々座、使々座敷南庭、（北上東面、頗斜向、是去樹前六七尺）前駈雜色所衆座橘巽庭、（西上北面）垣下殿上人座瀉渡東庭、（北上西面）其後同所衆座、（內北上西面）辨外記史史生官掌等座東廊南庇、（西上南面）每座令居衞重、次依催使々參著、入自南中門、依本所次第、不依位次、（今度頗有違濫）事、先一獻、垣下顯重朝臣起座、於橘下取盃向使座、自其後廻立於座上勸盃、所衆執瓶子相從、（自座前可寄歟、可相尋）陪從座以次官令勸盃、依有其便也、二獻、美作少將通季朝臣、瓶子同前、次召近衞府舞人、入自南門、於使座片舞、次使々賜祿、（內藏寮使不參、自餘皆參）垣下殿上人同取之、次辨已下給祿、（予祿長官□□朝臣取之）各々退出、予歸華、入夜參內宿侍、

〔內裏式 中〕賀茂祭日警固式

戊日早旦、大臣令內侍奏解陣之狀、於陣邊使內豎喚諸衞解陣、（雖無勅使、其儀亦同、○又見儀式、內裏儀式、）

〔九條年中行事 四月〕戊日解警固陣事

齋王還本宮之後、大臣令內侍奏解陣之由、若不候時、大臣進御在所、付藏人若殿上辨令奏其由、召內豎令召諸衞官人、官人等列立後、大臣仰曰、解陣、（計、○又見小野宮年中行事）

〔江家次第 四月〕賀茂祭警固　解陣日

儀同上、○警固　但諸衞帶弓箭列立、上卿仰云、陣解計、兩儀諸衞經宜陽殿砌、立軒廊內、

若三府參、三分已上不候之府、令外記傳仰、故賴隆眞人云、二府雖參、只奏諸衞候之由行之、後日修日記而云々、

使參著之、有酒肴、事漸了間予〇藤原資房退出、參內奏復命、

〔後二條關白記〕寬治七年四月十六日壬戌、午時參神館、直衣也大盤所有御見物、率侍院之間、時刻推移、仙院〇白河渡御、神館片舞如常、先是近衞將、相率參神館云々、中宮使中將信通不參、使々雜色所衆等給祿、廳官取之、見去年日記、執祿之人相違、仙院還御了、女房裝束如昨、但拔扇云々、祭日扇者、自殿下〇藤原師實所令獻也、今日扇被設齋王方云云、齋王乘御車之後、大盤所殿下、予〇藤原師通同車、但馬前守良綱朝臣、於垣下立御車等給、殿下中宮使未見云云、奇怪思食也、人々心尋常之上、可有左右歟、異樣不少、召家綱被仰云云、中宮使未見之由承、令申事由、大略殿下被仰云、依謂隨身有拳纈、稱所勞不參之故也、御返事云、不參之由所聞食也、早以可罷度也、

〔中右記〕寬治八年四月十六日、今明大內御物忌也、參籠、夕方行向使還立所、公卿殿上人未被座、閑上皇〇白河又有御見物間、依勤仕前驅、人々遲來也、暫間家主右大將〇藤原忠實被還來也、殿上人兩三、右兵衞督來座、及酉刻、使少將還來、下官〇藤原宗忠於中門邊勸盃、地下五位取肴物、其後右兵衞督著公卿座、殿上人兩三人著座、舞人等歌舞著座了、纔二獻、依人數不足也、賜祿立座、入夜於便所給官人等祿、又雲客十余輩追參入、有纏頭儲等、將曹秦武元、府生信良、番長敦利、已上院御隨身、番長貼久、關白殿隨身、入夜歸家、

〔永昌記〕長治三年〇嘉承元年四月廿五日丙戌、祭還也、差遣官掌、令引刷御所幄等、院司亦洒掃所々、令立直出車等、近衞使々平張幄、行事官幄、進物所、祿所、上達部座等如例、日漸欲及午、著束帶參上、帶丸柄率史外記等、自屋西北、行著行事所幄、辨侍小舍人相從但先覽臨所々、此間史外記著座、次予〇藤原爲隆著之、南面、著幔之、已上南面、上西、史自西面、可著之、座定有三獻、造酒司執瓶、予傳史、本院分檜破子二重、每座置二、仰外記令催所々使々等、遣使部等柏社近邊宿所、令相尋、次令尋臺盤床子饗、官掌申云、今朝居了即撤却、從中床子上並之、山城國司前饋、前驅早且所司書料紙、良久社司令獻葵桂、院司役供賜祿如例、社司又葵桂等送幄屋、辨官宿所又持來、雜須相待、殿□先是、所見要參上也、依使使幷陪從等或參上或獻、使者預祿、院司大夫取之、此間女房令寄出車、及未刻、內府〇源雅實被參向、直衣左

人等進舞求子、次舞人等進著座、次陪從著、次一獻、(舞人料殿上四位、陪從料地下五位、)次居粉熟、(先舞人、次陪從、[illegible])箸下、二獻、(舞人公卿、陪從地下五位、)居汁物、(先舞人、次陪從、)箸下、陪從發歌笛、三獻、(進行直下、)給祿、(殿上人取之、)陪從料(諸大夫)插笏賜祿、(諸大夫一人傳授之、)出自廣廂東戸、經殿上人座末進祿法、舞人[illegible]番長、[illegible]府生、[illegible]近衞、[illegible]陪從[illegible]於便所給祿、官人舞人陪從立退出、

〔二中歷八儀式〕還立日(格云、齋王不御時、無還立、)

　　齋王、(車)所々使等、(不乘飾馬、各乘引馬、手振取物並等猶々先行、)檢非違使不渡、(參神館之使、自閑路各歸路、)無山城介、無女使等、

〔小右記〕天元五年四月廿五日丙戌、辰時許參齋院、著饗座、先召藏人所前驅、於御前賜祿、其後給使之祿、了歸御本院、先著客殿、次召御前、賜肴物、給祿、近衞府使進立御前、發歌笛聲、依例有歌舞、未時許歸宅、儲所饗賜史生藏人手振等、給祿有差、近衞府官人等賜祿有差、

〔左經記〕長元元年四月廿一日丙戌、厨家儲饌、巳刻率史外記參齋王御在所、示外記令催使使、午刻使參著幄下座、近衞府歌舞畢、院司等使以下賜祿、次寄御車、余率史以下參院、穀倉院儲饌如常、齋王還御之後、院司南庭敷座、召使以下云云、依例著座、穀倉院賜衝重、兩三巡之後、(垣下勸盃)近衞府使起座、率陪從舞人等、於南庭歌舞、了垣下并余取祿賜使以下、余執祿雖不可然、依為院別當所執也、不可為例、余祿白綾褂也、有權威儀所被行歟、　八年四月廿一日甲戌、午刻之間、自殿(○藤原頼通)有召、卽參入、令出見物給、未刻齋院還給、殿下卽參院、御前敷座、儲召使并藏人所御前等兩三盞、了近衞司使起座、率歌舞人、於南庭舞、(有御求子)次給祿頭之殿上以下退出、余向使少將還立所、此間二獻給粉熟、三獻了給祿起座、余右金吾(○藤原頼宗)并拾遺兩納言云云、

〔春記〕長久元年四月廿六日庚戌、巳時許參內、仰云、夜來之動靜如何、此由參向神館、可傳示者、卽參神館、以仰旨令女房傳申了、先是上達部殿上人多參候之、有饗饌、未時許、使々參入、申初許有歌舞、此間予資基相共同車、於紫野見物了、又參齋院、上達部殿上人參入、近衞司使參入、供歌舞了、敷庭前座、使

還立

尾髪にはどうじみをして、與のゐ書たる水干に著て、歌の心などいひて渡りし事、常に見及侍しなども、興ありてしたること、ちにてこそ侍しかど、老たる道志どもの、今日もかたり侍る也、此頃は、つけ物をしを送りて、過差殊外になりて、萬のおもき物をおほくつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからはほこをだにももたず、いきつぎ苦しむ有樣、いと見ぐるし、

〔野荒問答〕つれ〴〵草の三箇の大事とやらん世間に申ふらし候、かの草紙に放免のつけものと候を、こと〴〵敷深說ありと申なし候、これは俳諧師の貞德と申もの、申出したる由聞及候、天台の空假中を以て其說をなす由に候、一笑に候、貞德は、官家の故事にならはず候故、放免と申ものを不知して、申出たる事と存候、此事平家物語にも見え申候、文覺ながされの砌に、伊豆の國へゐてまかるに、放免兩三人をぞつけられける、これらが申けるは廳の下部のならひ、かゝる樣の事につけてこそ、おのづからえこも候へと有之候、此文段よき放免の注に候、檢非違使廳の下部を放免と申候也、

○按ズルニ、儀式賀茂祭儀ノ條下ニ、韓櫃二荷在其間、（一荷酒器、一荷盛器、以今良二人爲擔夫、皆着紺衣、）トアリ、齋院式ニ紺調布四丈（今良二人表衣料、別二丈、）トアル、今良トイヘルモノハ、後世ニ至リテハ、其名史書ニ見エザレドモ、是レ或ハ奴婢ノ制ノ廢セシ後ハ、自ラ免囚ノ徒ヲ以テ、今良ノ職ヲ執ラシメ、之ヲ放免ト稱セシモノ歟、未ダ其由ヲ知ラズトイヘドモ、姑ク附記シテ參考トナス、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事　警固（未若中、見式也、蔵停止祭、有警固、）

歸立日、使等著母屋、（辨已下著、縁日無垣下、）次召御前給酒肴祿、（著庭中、北上、東面、順例也、）

〔江家次第 六 四月〕賀茂祭使還立儀（鎮東知節）

公卿肴物等皆先居之、公卿著座、殿上人著座、使次將來立於中門、四位殿上人勸盃、（徒跣作立勸之、地下五位一人執瓶子、次將飲畢、給坏於隨身一人、一人執肴、）次將入自中門、經車寄廊、入自東庇南戸、次地下四位一人勸盃於舞人、（其儀同上、）次舞

放免

入人、火長左右二人、檢非違使堀川判官因幡守、素襖左右二人、騎馬纜二人、白張左右六人、火長二人、
檢非違使姉小路判官彈正、從者同上、白張左右二人、素襖衞士、御幣內藏寮史生捧之、白張左右二人、
衞士御幣同上、白張左右六人、神馬纜二人素襖、馬寮使左右素襖、纜二人白張、左右二人、舞人素襖、纜
二人、白張左右二人、白張左右二人、舞人行粧同上、巳上騎馬、布衣左右四人、近衞使、騎隨身左右四人、
手振左右二人、小舍人童雜色左右八人、陪從素襖左右二人、白張左右四人、陪從同、行粧同上、內藏寮
使素襖左右二人、白張六人、以上騎馬、前後武士警固、

〔京都御役所向大概覺書五〕洛中洛外神社祭禮之事○中略

一下鴨社○中略葵祭　近衞使參向道筋

巽御門より升形口、下鴨社江參向、規式相濟、下鴨より升形江、夫より堤通、上賀茂社江參向、規
式相濟、上賀茂より堤通り、近衞使退去、

〔江談抄一公事〕賀茂祭放免著綾羅事

被命云、放免賀茂祭著綾羅事、被知哉如何、答云、由緒雖尋未辨、被命云、賀茂祭日、於棧敷隆家卿問齊
信卿云、放免著用綾羅錦繡服、爲檢非違使共人何故乎、戶部○齊信答云、非人之故、不憚禁忌也、公任卿
云、然者雖致放火殺害、不可加禁遏歟、他罪科者皆加刑罰、於著美服條有指證文歟、齊信卿答曰、贓物
所出來物ヲ染、摺成文衣袴等、件日搦焉之故、所令著用歟、四條大納言○公任頗被甘心云々、

〔安齋隨筆前編十四〕放免ハウベン檢非違使廳の下司、卑賤雜役の者也、是を放免と號するは、賀茂
の祭の日、鉾持の役を勤むるより、常の號ともなれるなるべし、○中略貞丈云、非人とは甚賤たる
詞也、至極の下司にて、人に非る者なれば、美服を憚らず、放免はホシイマヽニユルスとよむ、祭
の月ばかりの事也、是を推して常の號ともなりしなるべし、

〔徒然草下〕建治弘安の比は、祭の日の放免のつけ物に、異樣なる紺の布四五たんにて馬を作りて、

事（藏人染之、獻中殿下、牛行事出納進之、）出車十兩（五兩典侍、三兩命婦、二兩藏人、）檢非違使（觸大理、）藏使（使井女使內藏寮沙汰、但於女使者可尋、中御衣有无於、）
女房（可爲紅打御衣、）使勸盃（五位藏人、瓶子六位藏人、）同祿（同取之、藏人）宣命（兼相觸內記、爲內侍沙汰、給內藏寮使、）飾馬（御馬寮、）女使中、
功人（可除目之時、有沙汰、）供奉官除目（兼日中沙汰之、）上卿　宰相　辨　官外記

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

吏部記云、天慶二年四月十四日、賀茂祭、終日大雨、內親王（〇康子）參社、而鴨河暴漲、不得渡、仍移時、就車休息官幕下、明日還院、內侍又不渡、但近衞府內藏中宮等使、乘太政大臣（〇藤原忠平）白河家船、渡河參社、因相會、奉幣了、參院給祿、如常云々（〇又見日本紀略）

〔小右記〕長和五年四月廿日癸巳、頭中將（〇藤原資平）傳左將軍（〇藤原賴通）消息云、祭次第有不審、就中女使井內侍等車次第如何、可開儀案內、余報云、女使等次第可依式、車次第、式云、御車、次內侍車、次女別當車、次宣旨車、次侍者車、次釆女以下車者、依式次第、還以狼藉、仍御車、次院類車、次內侍釆女以下車、依一類車無狼藉、是新案也、

〔吉記〕安元二年四月廿二日丁酉、今日賀茂祭也、（〇中略）

路頭次第甚狼藉也

先馬寮使車（上覆物見付藤猿、紫金銅輪知加陪、長物見有立緣、獻襖、寮津綾造繩、院御牛黄斑、牛童上着下袴、款冬打衣付藤丸、）

次使左馬助業忠（飾馬、御厩舍人、私舍人、居飼如常、相副如何、寮下部二人、）

馬副六人　手振十二人　童二人（付藤丸、不着髮、着毛沓、）　雜色六人

□□、取物四人（同上）

次白張五十人許

次檢非違使□□人（志府生多打梨、可開陸運、）　右府生紀兼康（駕鹿毛馬、下部、）　左府生大江經弘（駕仁毛馬、下部、）

右志中原重成（駕仁毛馬、下部、）　左志安倍資成（駕黑馬、下部、）　清原季光（駕仁毛馬、下部、）

中宮藏人　內藏人　中宮命婦　內命婦　左右火長各十人
門部兵衛近衛左右各二人　長官　御輿（駕輿丁前後各廿人、輿長左右各五人、）
女孺十人　執物十人　腰輿　供膳韓櫃三荷　雜器物二荷
膳部六人　陰陽寮漏剋　騎女十人　童女四人　院司二人
韓櫃十荷　藏人所陪從六人　御車　內侍車（近代在後）　女別當車
宣旨車　女房車六兩（童女在此中）　馬寮車

齋王先詣社、暫留社頭小舍、脫却衣裳、更清服、即駕腰輿入社、（用輿具）行列在式、未到社十許丈、齋王下腰輿歩行、（以筵布道）就社前左殿座、事畢出社外、駕牛車參上社、先留輦、次就社前右殿、（山城介、中宮使、東宮使、馬寮使、近衛使、內藏使、）

〔二中歷（八儀式）〕祭日次第
騎兵行事　看督長等　廷尉渡車　國司幣物　宮主諸使
近衛內藏　國司藏人　中內命婦　次第使助　長官御輿
執物腰輿　火長院司　雜色所乘　祿櫃別當　次第馬允
宣旨女車　寮車膳部
說云、先騎兵、次行事辨外記史、（各乘車）次左右衛門看督長、次檢非違使、（下臈爲先）渡車、（下臈爲先）山城國司、次內藏幣、次東宮、皇太后宮、皇后宮、中宮、本院（院○中略）寮等幣、次宮主、東宮使、及皇太后、中宮、馬寮、近衛使等、內藏寮、中宮藏人、國司、內裏藏人、次中宮命婦、內裏命婦、次第使、馬助長官、御輿、執物、腰輿、火長、院司以下、主典已上、次第使、馬允、宣旨車、女房車、（童車在此中）內侍車、馬寮車、膳部、

〔夕拜備急至要抄（上四月）〕一賀茂祭
幣料（內藏寮中請與）　使（近衛、馬寮、內藏寮、山城、女使、典侍、命婦、藏人、）　金作車（典侍乘之、絲毛、）　銀作絲毛（命婦乘之、牛井牛童行事藏人進之、）　金作檳榔

路頭式

贖物一前(米散)參上、就階間簾下、役女房取之、授陪膳役送、奉行少進兼時又持御贖物(人形解繩)參上、宗頼取之、又授女房供之、次宗頼於中門內緣南妻取大麻、(宮主進之)如初簾下進之、宮主撫給返給、宗頼取之返授宮主、宮主經案南著圓座、次使忠季朝臣、(疊濃打著下襲)同經案南著使圓座、件案當階間東間南北妻立之、倚立御幣等、其西敷宮主圓座、宮主乾敷御座也、次宮主御禊、此間宮解解繩撫人形給、御禊了、宮主經本路退下、次宗頼朝臣參上、(兼時相從)撤御贖物、次使起座、跪案下插笏、(其實懷中)更起進案南端、懸手於幣帛立、(取二捧可立也、懸手之條不可然)次御拜、(向乾給、兩段再拜)了、次使跪拔笏、經本路退下、次小使等以幣進西方、更可渡御前之故也、

次渡南庭御覽、

〔三長記〕建仁元年四月十八日丁酉、今日賀茂祭也、午刻參東宮、(○順德)丑刻使權大進宣房參、頃之有御禊、南面弘庇儲御座、西面庭中立幣案、敷宮主使等座、(各四面)出御、(御襪、角御簾持御笏、不令御覽給、內眞鈍君出御後獻御笏、然而自簾中持御笏有出御、先例歟、○中略)

春宮使權大進宣房　纖院御隨身府生頼武近武、雜色萌木之間歟冬衣付薔薇、

皇后宮(○土御門准母範子)依御服假不被立使、但去三日、春日祭被立使、令停止之如何、與侍儀子、

〔園太曆〕觀應元年四月廿一日、抑今日聞書到來、參議在登卿被任之、是賀茂祭春宮使可沙汰立之故云々、長員卿爲上首也、此間雖申子細、依支公務闕如、遂被任之、卽子息在弘、任權大進也、且永仁在嗣卿、墓此身被抽任、在經朝臣、爲學士勤此役云々者、

〔江家次第六四月〕賀茂祭使　路頭次第

步兵左右各卅人　騎兵左右各六十人　郡司八人　一人(介亦隨○一人介亦隨、一本作隨兒、各十人、檢非違使一人、史生目掾各一人、守一人介亦同、)

內藏御幣　中宮御幣　春宮御幣　院御幣

宮主　春宮走馬　中宮走馬(各二匹)　馬寮走馬(左右各六匹)　春宮使

中宮使　馬寮使　近衛使　內藏寮使　闈司

絹五匹、細布五端、貲布五端、當色一具、（已上五位使料、若四位者加絹二匹、）絹一匹、細布五端、貲布一端、當色一具、（已上史生料）八丈、貲布二端、紅花二斤、（已上舍人二人料）紺布四端、（騎料）貲布一端三丈、（一丈六尺布帶料、以八尺充二人、一端四尺褌料、人別一丈四尺、幷持幣仕丁六人料、）細布二端、調布六端、紅花二斤、（左右馬寮御馬騎者喚牽二人料）絹廿六匹五丈、縑二匹四丈三尺、紅花卅八斤、紗一匹、細布七端、錢十七貫六百廿文、（已上命婦料）絹八匹、縑一匹五丈二尺、紗四丈、細布四端二丈、紅花卅八斤、錢十貫三百廿文、（已上藏人料）

右依前件、男官料請大藏内藏等省寮、但馬人幷女使料、以職庫物充之、

〔延喜式 四十三 春宮〕凡同月〇四月中酉、奉賀茂下上松尾三社幣帛、社別五色薄絁各三尺、調布一端、裹以調布幷薦、差亮（若有障、差學士）令奉、若加史生一人、走馬舍人二人、即申送辨官下知當國、其日遲明、使史生率舍人裹幣六捧、（社別二捧）使官率史生等令待幣帛、入自東門、安東細殿南案上、（預樹二高案於二實上）主殿署設東宮座於前殿南廂北向、史生及舍人總八人、俱昇幣案、進昇自南階、使官相副扶之、樹廂座北、使官降侍階下、史生舍人退出、東宮服朝服就座、宮主捧麻入跪庭中、解除退出、即東宮兩段再拜、史生舍人入昇幣案、使官隨即退出、東宮待使人過細殿南、即復本座、使官更集於坊廳前庭、宮主捧麻解除、畢使官以下、向内藏就庭座、松尾社禰宜祝二人候于内藏、史生一人、舍人一人、各捧幣帛、進授禰宜祝等、即内藏給饌、畢各達前所、

〔日本紀略 一十一條〕寛弘五年四月十九日己酉、賀茂祭、中宮〇藤原彰子依御懷孕、不被立使、東宮〇三條依花山院御事、不被立使、左馬寮使頭相尹朝臣、忽申本病發由、奏聞之處、次〇以下恐誤文圖書頭藤原則孝爲代官、長官依遭妻喪、掃部頭藤原成親爲代官、如此之間、齋王〇選子出御及秉燭、希代之事也、

〔玉海〕建久二年四月廿日丁酉、此日賀茂祭也、〇中略中刻中宮〇藤原任子後鳥羽后使權亮右近中將忠季朝臣參入、即出御御拜座、（當御簾敷御座、敷小筵二枚、其上敷高麗半帖一枚、立五尺屏風二帖、東面敷之、御拜之時向艮給也、）著給打衣表著裳（以大腰結之）唐衣等、又著釵子給、陪膳堀川殿（元大納言殿、内大臣女也、）役供中臈一人、皆著物具、著釵子、次陪膳亮宗頼朝臣、持御

中宮東宮使

皇后宮使被止、是依京極殿(藤原師實)事也、

後聞、使中將於伊豫守基隆三條宅出立、治部卿、右大辨、大藏卿、新宰相中將(實)被來云々、四位殿上人遲參間、少將伊通、雖五位初獻云々、參內召御前給御衣者、

〔康富記〕應永廿六年三月廿六日辛未、詣淨居庵、來月賀茂祭、予行列事相違之由被語仰了、去應永廿三年度、少外記親種也、同廿四年度、權大外記師胤也、去年少外記宗種也、仍當年既予雖為巡年、如此相違了、其故者、當年二月祈年祭、三﨟親種分配也、春日祭予令參向了、來月於日吉祭者、二﨟參向之間、一﨟一巡御訪也、無足之故如此云々、不心得事也、其故ハ去年冬春日祭予參向之間、當年冬又南都可參向之處、於春日祭者、冬ノニ相轉之由被申候之間、令參向了、就之何巡年ノ賀茂祭ニ不可出之哉之由、(師胤)局務許罷向令申之處、大外史他行之間、子息播部頭師鄉對面之間、申置罷歸了、參差之分配、比興云々、予又且御訪三百疋ノ事ナル間、當欲心不申所存、雖然為後日如此令申者也、比興云々、次詣飯尾善右衛門許留守云々、

〔延喜式十三中宮〕凡四月中酉、奉賀茂上下松尾三社幣使者、五位已上官一人、(若大夫帶參議不須)史生一人、(已上名簿)舍人二人、仕丁六人、其日遲明、使史生率舍人等、裹幣六捧、(社別二捧)賀茂上下社別五色帛各六尺、絲一絇、曝布一端、木綿麻各大二斤、(已上幣料)商布一丈三尺五寸、(裹幣料)五色絁各三匹、(阿禮具料)三楊筥三合、(盛阿禮料)絁一匹、絲一絇、曝布一端、(已上禰宜祝料)絁一匹、曝布一端、(已上祝料○中略)使官率史生等、令持幣帛、入自玄輝門、安左腋庭門案上、(預樹高案二脚於簀二枚上)史生及舍人總八人、共舉幣案進、使官相副扶之、付藏人候常寧殿東、次宮主奉御麻、解除畢退出、即藏人持案授使者、受取罷出、更於廳前宮主解除、畢使官已下向內藏寮、就庭座、松尾社禰宜祝、候於內藏寮、史生一人、舍人一人、各捧幣帛進授禰宜等、即內藏寮給饌、畢各達前所、

裝束料

絹一匹、纐纈三丈、(表裙料)帛一匹、(三丈裙裏料、三丈下裙料)表裙一腰、(直)帶一條、(直)沓一兩、(直)紅花四斤、(已上上社物惣料、下社亦同、)

〔延喜式三十一宮內〕凡四月中酉日鴨祭、丞一人、錄一人、史生一人、省掌一人、臨祭所檢按饌物、

〔延喜式六齋院〕凡齋王參下上兩社祭、祭日入夜、山城國儲松明、掾若目一人祇承、其名簿前一日進官、

〔類聚三代格一〕太政官符

應科決發差賀茂祭騎兵致拒捍土浪人事

右得山城國解偁、管八箇郡司解偁、件祭騎兵、擇土浪人堪事者差進既畢、而寄事高家、不順國仰、若不言上、恐有後責、仍注拒捍人交名申送者、國檢案內、承引之輩不及廿人、闕列之儀當致闕怠、望請官裁、如此之類、不限土浪、不論蔭贖、行齋之外、決笞五十、以懲將來者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、可贖之色、國司先勘其過、依法責贖、自餘依請、

寛平九年四月十日

〔扶桑略記二十四裏書〕延長五年四月十七日丁酉、賀茂祭也、上卿參入、被定內藏助仲連爲齋院長官、山城守介依病不供奉、以掾一人可奉仕其替之由、

〔日本紀略十一一條〕寛弘四年四月十九日乙酉、賀茂祭、山城國司不供奉、延長五年例也、

〔中右記〕永久二年四月十六日辛酉、天陰雨下、賀茂祭也、早旦自院白河被仰下云、去夜今朝雨脚殊甚之間、鴨川浮橋等定流損歟、齋院渡給之間有其恐、早差遣檢非違使等、可令固件橋者、仍仰行重經則等了、巳時以後、天晴雲收、扶桑甚明、參一條殿、密々竊見祭、雖無御棧敷、大略見物、申時許、行事右中辨以下外記史等渡、左右看督長看人許渡也、不足廿人檢非違使府生經則有貞、志明兼行重、尉盛道宗實、大夫尉忠整合七人渡、殘輩或重服、或所勞不出仕也、廳下部裝束過差、皆從停止、兼日仰下之故也、山城介、馬寮使、右權頭時家近衛府使左中將信通朝臣、浮線綾表袴、蘇芳下襲、車簾五月會打毬具風流、隨府生敦利、兼重、秀長、末利、敦忠、內藏寮行仲、次第使馬助兼永、齋院御輿、所前驅具侍以下次第頗違亂歟、秉燭以前事了、

於予者、雖不可預彼兩人、就沙汰來不能固辭者也、去年予已役、當年廣橋一品番也、而宸筆御八講、息辨宣光朝臣奉行之故歟、每事申沙汰、於祭者可有恩免之由頻申請云々、仍重被仰予、兼日雜事在別記、早旦下家司紀豐弘(藏人所小舍人也)參入、尋沙汰諸事、又飾葵桂於御簾等、奉行家司前但馬守重實(重長改名)也、糸毛車(典侍料)自行事所渡之、下家司請取之、出車二兩、一(兩納言、一兩參議、)奉行職事催渡之、先扇使(小舍人)參入、立西侍廊東庭、(可進立中門下也)左衛門尉藤定長(布衣)下逢請取之、則賜祿、(內々代百匹、〇中略)次有御禊事、兼日仰在方卿、賀茂定藤勤仕之、立八脚於西庭、其西方敷圓座、次身固如常、

〔康富記〕文安四年四月廿四日乙酉、賀茂祭也、二﨟外記忠種(分配)向一條堀川立行列、每事如例、雜色二人、仕丁一人、牛童一人也、被借請中御門黃門車矣、今年典侍中御門大納言宗繼卿息女也、未被伺候禁中仁也、典侍(藤原繼子)宣旨、去月廿三日日付、今月十三日到來、局上卿師鄉也、別而有禮節、名字誠恐頓首謹言、此分師與禪門師鄉朝臣等、令談合之由令語給了、判官大判事明世也、近衛使伯少將忠富朝臣也、左少將也、一昨日(廿二)轉右少將者也、內藏使今年就典藥頭盛長朝臣沙汰進了、山城使施藥院保家朝臣沙汰進之、是定役也云々、傳奏萬里小路前內府、奉行權右中辨親長也、　六年四月廿三日癸酉、賀茂祭也、今年女使典侍菅坊城相公姉妹也、長橋局歟、近衛使伯中將也、新判官明定渡列見、其儀如恒、行列外記二﨟康顯爲巡役參向之、借請勸修寺左少辨車用之、轅(黑)同之、小雜色二人、(左近二郎、又一人雇之、)仕丁、(於花山院中請之、持笠之公人、)牛飼、(借狩衣、於狩衣者中請勸修寺了、二十疋下行牛飼之方了、)中間、(又次郎雇之、)如例年、一條堀川淨善提寺門下立車、不褰簾不税鴛者也、主水正殿喝食二人、令來同乘給、三﨟小僧同乘之、於車中有風流(一盞)(藏氷令取寄給云々)云々、兼日反橋破損、自八幡可修理之處、修理遲々不可事行之由申候間、判官自西洞院可渡之由申傳奏之間、然者行列外記可立車於西洞院之由有談合、雖然廿一日廿二日兩日之間、橋之修理出來、如例年判官自猪熊渡之間、行列如恒立淨善提寺門下者也、今年每事祭儀無省略者也、傳奏萬里前內府、(時房公)奉行藏人右少辨勝光、武家奉行齋藤遠江入道云々、

〔吉記〕治承五年四月十六日辛酉、今日賀茂祭也、仍午刻向二輿侍出立所一、佐女牛東洞院大理亭、大理○時忠不レ被レ出逢一、談二世事一之間、殆及二一時一、權右中辨、右衞門權佐、堀川中納言息少將侍從等來臨、○中略輿侍車立二二條面小門前一、南面、南向、前駈六人、式部大夫五位等也、同出車、出二白衣一、立二其西一、東上、面女官等云、前々立二輿侍車東一、西上、云々、然而大理可レ爲二東上一之由被レ行レ之、上、命婦藏人等車立二其西一、藏人衆時奏二事由一、次取二祿掛一給二輿侍一、爲二生衣一、定非レ例歟、式部大夫爲貞請二取之一、次命婦藏人祿、已上絲、內藏寮逢レ之、雖二祿一、隨年一參給レ之、出納持二向之一、次輿侍已下向二列見一、次予○藤原經房退出、路頭儀、相二尋見物者一粗聞レ之、

〔玉海〕文治二年四月二日己酉、藏人辨親經來、申二條々事等一、賀茂祭女使命婦事、陰陽頭宣宣女子、內女房尾張日來辭退、今日頗有二領狀之氣一、尤神妙云々、

〔薩戒記〕應永卅五年四月十七日、雨降、賀茂祭也、輿侍敦子、大納言殿(中山滿親)第四御女、年十、第二度也、自二此亭一出立、相二待雨脚休止一之間、時刻推移、家司前但馬守重長、尋沙汰之、又下家司紀豐廣、藏人所小舍人催二沙汰諸事一、輿侍乘用糸毛自二行事所一送レ之、於二出車一者、奉行職事奉レ勅相二觸公卿一也、晝後天晴、先有二御禊儀一、陰陽師賀茂在貞修レ禊、但馬前司重長傳進、女房則返二給之一、次在貞參二簾中一、身固事如レ恒、此間童女著二裝束一、件裝束、師久我前右大將調大夫也、獻二大藏大輔入道一也、次髮上來、青侍左衞門尉藤原定長寄レ車、是近例歟如何、諸大夫可レ寄レ車之由、女官等執レ之云々、太不レ可レ然、髮上經二中門廊一、於二公卿座妻戶前一跪、自二簾下一進レ額、女房一人著二衣一請二取之一、次髮上退出、次輿侍出レ門、寄二車於南面車寄戶一、予著二衣冠一進寄、左方立二屛風一令レ敷二打敷一、諸大夫予褰レ簾、次乘車、次役車一兩、次童女乘車、各連レ軒前駈一人、前但馬守重長也、路次行列、先前拂、持レ棒著二退紅一、次前駈、次車、車副褐冠、雜色四人、牛童褐袴、藺皮持、[illegible]牛○童持レ攩、次手振四人、乘馬次理髮、近馬騎下參行、車駐同同民次出車、毛車、車副二人、雜色四人、次童女車、同前、但車副一人、武者小路東行、高倉南行、一條東行、萬里小路南行、鷹司西行、東洞院北行、參二陣御覽畢一、正親町西行、西洞院北行、自二萬里小路一歸レ家、　卅二年四月一日辛丑、自二今日一始二祭神事一、立二札於門一、依二輿侍出立一也、

賀茂祭神事也、僧尼幷重輕服不淨輩不レ可二入來一、簡長三尺、弘四寸、

廿一日辛酉、今日賀茂祭也、輿侍僚子、予(中山定親)妹十歲自二此亭一出立、近來一位新一位入道、予、輪轉沙汰立之、

内、強不昇殿、不可然事也、又職父卿著直衣參候内裏、近年使出立所、無公卿相訪之儀、仍著直衣之儀、不可有巨難歟、若存舊例者、猶不可着直衣歟、實任參議五位者著四位袍、是彼家例云云、行粧等如例、年、不能悉記、近年無手撰、太無念、

女房使　典侍光子入道一位光藤女

童女一人也、前駈四位一人具之如何、父四位前駈太不審、可尋可否、

〔詞花和歌集夏〕斎院の長官にて侍けるが、少將になりて、賀茂の祭の使にて侍けるを、めづらしきよし、人のいはせて侍ければよめる、　大藏卿長房

としをへてかけしあふひはかはらねどけふのかざしはめづらしきかな

〔西宮記四月〕賀茂祭事

延喜七年四月十五日御記云、召男女使飾馬覽之云々、使内侍藤原長子、令申依病不得騎馬狀、不許、云々、十六日祭使命婦清原信子復命、自餘等未奏、

延喜十九年四月廿四日御記云、云々、使掌侍守子、申有病不堪騎馬由、殊許乘車、

○按ズルニ、北山抄四月酉日於南殿覽被馬ノ條ノ註ニ、掌侍供奉時、令奏病由、殊有勅許、乘車也トアルニ據レバ、掌侍ノ乘車スルコトハ、當時既ニ例トナリシガ如シ

〔貞信公記〕延長九年四月廿一日、今日行列無命婦藏人、只有騎馬女一人、又典侍車無下仕者、不催出命婦藏人、是尤吾失、但見來歸後、兩女追參云々、

〔西宮記四月〕賀茂祭事

承平四年三月十一日九記云、參内、賀茂祭内侍、理須仰典侍、而去年典侍奉仕重役、仍仰滋子内侍、令奉仕云々、

〔本朝世紀〕長保五年四月十四日癸酉、此日賀茂祭也、依例諸官使々奉供如常、但依一條院北面、始自大宮大路、至于堀川下馬渡、但女使不下馬、并車等任例渡者、○又見日本紀略

大夫、右衛門督、左宰相中將參候、又殿上人十許人參候之、小時乘御輿、參給御社了、女房供奉、御車帶之後歸給、乘移御車、參給上御社、殿上人等執炬火前駈、予同供奉、儀式同下御社、但齋王下御云々、良久之事了、又歸給神館、殿上人等又供奉之、此間左少將經季爲勅使參入也、下御了、予等卽退歸蓬戶、近習人々留候也、于時及五更、心神太辛苦、今日内侍等參候北陣、可備祿仰藏人了、又今日仰云、可召近衛司使歟、將雖不召、猶可御覽飾馬歟、予申云、不召使之時、不可御覽飾馬歟、又召使必有歌舞者也、今年無此事如何、仰云、可觸關白者、予參入申此由、命云、如資房申、予卽奏此旨了、仍不召云々、又不御覽飾馬云々、不召使之時不給祿云々、是近代之例也、

〔百鍊抄七六條〕仁安三年四月十八日、賀茂祭也、

皇后宮使藏人左衛門權佐兼大進經房

飾馬　院（後白河）右將曹秦兼賴[illegible]　同左府生秦兼國

引馬　殿下（藤原基房）右府生秦兼清[illegible]　院左番長中臣近武

近衛使左少將兼美濃守修範朝臣

飾馬　院左將曹中臣重近[illegible]　同右府生秦賴文

引馬　殿下左府生中臣季近　院右番長秦公景

〔玉葉〕承久二年三月十二日壬寅、頭經高朝臣來云、賀茂祭發遣近衛司、可被解宣之由、自熊野送飛脚到來、早可被宣下、左少將基保朝臣顯平朝臣等也、口宣副之、其狀云、

左近衛權少將藤原基保朝臣

源顯平朝臣

件等人、賀茂祭使依爲巡役、雖蒙催促仰、却以辭遁、期日旣迫、無止神事、須及闕如、所爲之旨宜可然乎、宜令解却見任

藏人頭正四位下平朝臣經高奉

〔勘仲記〕應永卅三年四月廿一日乙酉、今日賀茂祭也、爲見物參院、院南面使使皆渡之故也、○中略

近衛使左少將爲資登年十、左中將雅兼朝臣男、伯二位資忠卿孫也、父朝臣依所勞申請羽林令勤之、然而依得減内内奏布衣相副、加扶持則參内云々、太不可然、凡着布衣人參

申刻許降雨、終宵不休、朝間雲蒸雨零、巳時許、雨止雲晴、可謂神感歟、送摺袴于使左中將道雅許、

寛仁三年四月廿二日己酉、摺袴送源大納言〈○俊賢〉御許、息左少將顯基今日祭使也、宰相〈○藤原資平、實資養子、〉

來云、罷祭使所、〈一條院別納〉從彼可參院者、余未刻參院、先示遣事由於宰相許、左近府生久友、於途中傳中

源大納言消息云、藥袋十二忽可借送者、差副人於久友、仰遣師重許、宰相從上東門相從參院、宰相云、

源大納言思忘不儲手振藥袋、又不具魚袋、仍忽所遣也、古實云、近衞府使或著飾劒代、何況魚袋乎、今

日饗院所設、師經朝臣〈四位〉勸盃、余目左少將誠任、誠任來擬盃、宰相左中辨等雖在座、依無便擬誠任、師

經誠任等依饗事爲埦下在座、令催院事、長官光清申云、事漸成了者、見飾馬童女馬、童女馬今一匹未

將來、是帥宮可被出之馬也、重令催仰也、日漸及申刻、又有陰氣、仍起座進御所、令寄御輿、而騎馬女十

二人、髮未理髮、申云、供奉女等遲參來也、仍不能早上髮者、分手令上髮、時刻推移、僅上了、以院司經案

內、御衣未縫出、又童女汗衫未縫了者、此間良久停立、院司申云、帥宮出馬被申不堪者、仰院司相構可

奉之由、申無術由、童女一人不供奉、依無馬也、時刻多移、乘給御輿、余於一條院北邊見物、宰相乘車尻、

未及昏黑、御後供奉者渡了、歸家之後、小時秉燭、

〔春記〕長久元年四月廿五日己酉、未時許、到祭使許、左少將基家出立、左大辨經輔大炊御門家也、先是

舞人陪從等著座也、新宰相修理大夫〈○藤原經任〉在之、二獻巡行間也、予〈○藤原資房〉卽退出參齋院、皇后宮大

夫〈○藤原能信〉被參候、行事殿上人多々參候、申時許、事成了、寄御輿、予實基同乘見物、申三點許、齋王渡御

也、內藏寮仲康、近衞府使少將基家、后宮使少進資國、春宮使亮隆佐、山城介爲行、齋院長官章經等也、

件等人々從者裝束或有染色、但其衣員皆如制也、使使車等、殊無過差風流也、女房車等如例、但衣員

減定云々、次第使馬允政則云々、女使典侍〈藤原芳子〉云、糸毛車可在齋院車次、仍可在彼出車上也、爲之如

何、予云、專不然事也、有內侍前駈、是例事也、何可次齋院糸毛車哉、尤無由事也者、仍渡了、見物了、予卽

參歸解脫、著宿衣騎馬、〈賴資馬也、定成爲恒在共、〉參下御社、爲供奉齋王御共也、此間齋王御坐假屋也、先是皇后宮

條辻、雨脚若降、更張有煩、隨日氣色撤却甚易者、仍不令撤、爲理朝臣申云、供御輿之間、近習人々率仕其事、而一人不參、以女房可令率仕退出者、余早退出、宰相已下相從耳、於大宮院北邊見物、宰相還車、次第事、違濫太以多々、但無過差事、守儉約宜旨歟、今日使內藏寮頭賴光、近衞府右少將公成、馬寮右馬權頭道成、皇后宮大進賴國、中宮亮能信、皇后宮亮方理、東宮亮經通、使與侍右衞門乳母、無前驅、糸毛車外無金造檳榔毛車、只有黑作檳榔毛等而已、予〇藤原實資依與侍消息、遣車見物畢、未秉燭歸家、聖日資平云、賴定說云、祭使出立所源中納言〇俊賢、左大辨〇源道方、修理大夫〇藤原通任、外無卿相云云、資平事未始前退出、爲訪兄經營者、又云、左相府破物忌、於棧敷見物、權大納言〇藤原賴通、源中納言〇俊賢、侍從中納言〇藤原行成、右衞門督〇藤原懷平、左衞門督〇藤原教通、新中納言〇藤原賴宗、左宰相中將〇源經房、左大辨〇源道方、源宰相〇賴定、候棧敷、今日近衞府幷中宮使隨身不帶弓箭、是往古例也、近年依左府命帶弓箭、世間人爲奇、而今般不令帶弓箭、若歸舊例歟、只偏以荒凉事、被稱古實之由、萬人不甘心云々、彼日隨身近衞荒木武晴云、內大臣出居、彼初獻右中將定賴、一度番長多重隆受盃進而獻、內府受之給、二度番長長谷部兼行、次第進受如之云云、丞相不可受盃、給盃之例也、不知故實也、一獻後可被出居者也、可給盃於一度者、第二獻盃吾受召、一度者可給歟、知與不知耳、三獻源中納言云云、後聞近衞府使不參內、直到列見、大略往古不聞之事也、修諷誦賀茂神宮寺下御社之例也、

四年四月廿四日癸酉、辰剋以前雨脚太密、未剋許、參齋院、先是右大辨〇藤原朝經、左少辨經賴、及外記史等參入、右大辨候御所邊歟、余著客殿之後、出自屛內、著座、史行信起座、立客殿巽庭、太辨著座後、更昇著座、依恐大辨歟、御禊日又同、被引上卿著座更下立之禮、古實歟可尋先例、召見下仕走孺等、次飾馬童女馬、女馬一匹闕、余忽獻進、令牽別馬、日漸欲暮、起座進御所、令寄御輿、作法如例、於大宮院北邊見物、右大辨相從、內侍車度間、日始入、內藏寮使權頭爲理牽馬片口右府生保方執、不可然、近衞府使左中將道雅、馬寮使右助惟忠、皇太后宮使亮兼綱、中宮使亮雅通、皇后宮使大進師通、左近番長信武一人執引馬、年來一人執引馬率不見、東宮使學士資業、今般無過差、无重從者如法、從昨

やかにとしねびたる四十人、中どうし廿人、めしつぎどもはもとのぞくどもつかうまつれり、御くるまのしりにてんじやう人ひきつれて、いろ〳〵さま〴〵にて、あかきあふぎをひろめかしつかひで、御さじきのまへあまたたびわたりあるかせ給ほど、たゞのとしならば、かゝらでもと、とのみたてまつらせ給ひつべけれど、つかひのきみの御もの、はへにおもほされて、かんだちべうちほゝゑみ、との、おまへなほけしきおはしますゐんなりかしな、この男のつかひにたつとし、われこそみはやさめとの給はすとき、しもしるく、ゆくりかにもいで給へるかなと、みなけうじきこえ給、みなことゞもなりて、つかひのきみ、なにとなうちひさくふくらかにうつくしうてわたり給、との、おまへ、御なみだたゞこぼれにこぼれさせ給へば、このかなしさしり給へるとのばら、みなおなじさまにおぼししるべし、世の中のみやとのばら、いへ〳〵のめのわらはべを、いまのよのこと、しては、ものぐるほしう、いくへともしらぬまできせたる、十廿人、二三十人、おしこりてわたれば、いづくの人ぞと、かならずめしよせて、御らんじとはせ給へば、そのみやのかのとの、なにのかみのいへなど申を、よきをばみけうじ、又さしもなきをばわらひなどせさせ給も、さま〴〵いとをかしういまめかしきありさまになんありける、

〔小右記〕長和三年四月十八日癸酉、祭使少將公成於内大臣公○藤原季第出立、内大臣先左將軍、自左將軍第出立、右將軍有前例、也、摺袴二腰差將曹正方送之、一腰者貲平也、於家中奉幣、相加毎月御幣、七十二使時奉、帖、從去夕雨脚頻降、巳無晴氣、伺隙欲參齋院、猶以滂沱、未剋許、乾風扇、雲赴巽、須臾而止、似有神感、經營參入、中納宰相辨外記史先是參入、左中辨經通爲東宮使、仍權左中辨重尹、行事史奉親朝臣不參、史爲賴行事、奉親朝臣有故障者、先申事由、隨仰可仰他史歟、光景已傾、仰外記并院司、令催仰雜事、見飾馬、次見童女馬、今二匹未將來、是當帝條○一宮違可被奉之馬等也、次見下仕走孺等、日漸迫西山、仍起座進御前、宰相上宣相從、令寄御輿、雨皮不撤、今間無雨氣、若可撤歟、仰其由於長官爲理朝臣、爲理朝臣云、御輿必遲留、一

呼ナルベシ、此ク云ツヽ車毎ニ向テ、手ヲ折ツヽ計ヘテ云聞カス、如此ク云畢テ、遠ク立去テ、大路ニ突立テ、糸高ク冠持詣來ト云テナム、冠ハ取テ指入レケル、其ノ時ニ此ヲ見ル人、諸心ニ咲ヒ嘷ケリ、亦冠取テ取ストテ寄タル馬副ノ云ク、馬ヨリ落サセ給ツル即テ御冠ヲ不奉シテ、无期ニ由无シ事ヲバ被仰ツルゾト問ケレバ、元輔白事ナセソ、尊此ク道理ヲ云聞セタラバコソ、後々ニハ此ノ君達ハ不咲ザラメ、不然ズハ口賢キ君達ハ、永ク咲ハム者ゾト云テゾ渡ニケル、此ノ元輔ハ、馴者ノ物可咲ク云テ、人咲ハスルヲ役ト爲ル翁ニテナム有ケレバ、此モ面无ク云也ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、〇又見宇治拾遺物語一

〔榮花物語初花八〕寛弘二年になりぬ、〇中略春日の使の少將〇藤原頼通は中じやうになり給て、ことしのまつりのつかひせさせ給、との〇藤原道長は一でうの御さじきの屋ながく〵とつくらせ給て、ひはだぶきかうらんなどいみじうをかしうせさせ給て、このとしごろ御けいよりはじめまつりを、とのもうへ〇倫子もわたらせ給て御らんずるに、ことしはつかひのきみの御ことをよのなかゆすりていそがせ給、その日になりぬれば、みな御さじきにわたらせ給ぬ、とのはつかひのきみの御いでたちのこと御らんじはてゝぞ、御さじきへはおはします、おほくのとのばらてんじやう人ひきぐしておはします、さしもあらぬだにこのつかひにいでたち給きみたちは、これをいみじきことにおやたちはいそぎ給わざなれば、まいてよろづことわりにみえさせ給、御とものさぶらひ、ざうしきこざねり、御むまぞひまで、しつくさせ給ほどに、えぞまねばぬや、ことしはこのつかひのひゞきにて、帥宮〇敦道親王花山院などわざと御くるましたてゝ、ものを御らんじ、御さじきのまへあまたゝびわたらせ給、帥宮の御くるまのしりには、いづみ〇和泉式部をのせさせ給へり、花山院の御くるまは、きんのうるしなどいふやうにぬらせ給へり、あじろの御くるまを、すべてえもいはずつくらせ給へり、さはかうもすべかりけるとみえたり、御ともに大どうしのおほき

天德四年○中略賀茂祭、依天曆四年例、以下酉可行云々、廿八日月○四使可發也、而廿五日關食理子內親王○村上皇女薨由、依承和八年例、件例官未奏前也、延長五年九月例奏又知之、停勅使坊司等、齋王可參祭、○中略廿八日、內藏近衛府馬寮、及與侍命婦藏人春宮坊使等停止、但中宮使發向、以無忌也、○又見本紀略二日

〔今昔物語二十八〕歌讀元輔賀茂祭渡一條大路語第六

今昔、清原ノ元輔ト云フ歌讀有ケリ、其レガ內藏ノ助ニ成テ、賀茂ノ祭ノ使シケルニ、一條ノ大路渡ル程ニ、□ノ若キ殿上人ノ車、數並立テ物見ケル前ヲ渡ル間ニ、元輔ガ乘タル莊馬大躓シテ、元輔頭ヲ逆樣ニシテ落ヌ、年老タル者ノ馬ヨリ落タレバ、物見ル君達糸惜ト見ル程ニ、元輔糸疾ク起ヌ、冠ハ落ニケレバ、髻露无シ、瓮ヲ被タル樣也、馬副手迷ヲシテ、冠ヲ取テ取スルヲ、元輔冠ヲ不爲ズシテ、後ヘ手掻テ、イデヤ穴騷ガシ、暫シ待テ、君達ニ聞ユベキ事有ト云テ、殿上人ノ車ノ許ニ歩ミ寄ル、夕日ノ差タルニ、頭ハ鑭々ト有リ、極ク見苦キ事无限シ、大路ノ者市ヲ成シテ、見喤リ走リ騷グ、車狹敷ノ者共皆延上リテ咲ヒ喤ル、而ル間、元輔、君達ノ車ノ許ニ歩ビ寄テ云ク、君達ハ、元輔ガ此ノ馬ヨリ落テ、冠落シタルヲバ、嗚呼也トヤ思給フ、其レハ然カ不可思給ズ、其ノ故ハ、心バセ有ル人ソラ、物ニ躓テ倒事常ノ事也、何況ヤ馬ハ心バセ可有キ物ニモ非ズ、其レニ此ノ大路ハ極テ石高シ、亦馬ノ口ヲ張タレバ、歩バムト思フ方ニモ不歩セズシテ、此引キ彼引キ轉カス、然レバ我レニモ非デ倒レム馬ヲ惡ト可思キニ非ズ、其レニ石ニ躓テ倒レム馬ヲバ、何カハ可爲キ、唐鞍ハ糸盤也、物可拘クモ非ズ、其レニ馬ハ痛ク躓ケバ落ヌ、其レ亦不弊ズ、亦冠ノ落ルハ、物ニテ結フル物ニ非ズ、髮ヲ以テ吉ク掻入タルニ被捕ル也、其レニ鬢ハ失ニタレバ露无シ、然レバ落ム冠ヲ可恨キ樣无シ、亦其ノ例无キニ非ズ、□□ノ大臣ハ、大嘗會ノ御禊ノ日落シ給フ、亦□□ノ中納言ハ、其ノ年ノ野ノ行幸ニ落シ給フ、□□ノ中將ハ、祭ノ返サノ日、紫野ニテ落シ給フ、如此ノ例計ヘ不可遣ズ、然レバ案內モ不知給ヌ近來ノ若君達、此レヲ可咲給キニ非ズ、咲給ハヾ君達返テ嗚

詳ナルモノヲ掲ゲテ一例ヲ示ス、

走馬

〔延喜式四十五左右近衛〕凡諸祭供走馬者、○中略賀茂社少將已上一人近衞十二人、二人先參松尾社供走馬、並每祭左右遞供之、其裝束預奏請受、色數見內藏式、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡賀茂二社祭走馬十二匹、松尾二匹在此內也、馬別韉韀料調布四尺二寸、表腹帶七尺、結額髮料二兩、餘祭准此、其使五位已上官一人、使者裝束之數、見內藏式、皇后宮走馬二匹、同上、並二寮遞供奉、餘祭准此、又女騎料四匹、內侍已上料、前祭二日經御覽、兩寮之間點定能否、齋院女騎料八匹、屬馬寮史生各一人、共預供之、

供奉職員

〔續日本後紀五仁明〕承和三年四月乙酉、天皇御紫宸殿、閱覽賀茂祭使等鞍馬調飾幷從者容儀、賜使等祿、以播磨守從四位下橘朝臣永雄爲內藏頭、令供祭使、

○按ズルニ、賀茂祭使飾馬御覽ノ事、始テ此ニ見ユ、

〔小野宮年中行事四月〕中申酉日賀茂祭事

仁和五年○寬平元年四月乙酉、辰四刻、鴨祭使左近少將友于參入、便令歌舞云云、然近衞府所歌舞、極以冷淡、仍喚殿上人等更歌舞、酣之至、多過他日、卽賜件人等祿各有差、

〔西宮記四月〕賀茂祭事

昌泰四年○延喜元年四月廿一日、右馬寮有牛死穢、仍仰國飼御馬可送齋院之由云々、右馬頭連並觸穢之代、以右近權少將佐方假充彼使、以事之起倉卒、賜御衣一襲、申刻雷雨、差藏人俊蔭、問齋王途中安否云々、

承平七年四月十五日賀茂祭云々、使左近中將敦忠朝臣參內之次、召使舍人等有東遊云々、後日太閤○藤原忠平仰云、賀茂祭使未必召御前、若可有如此之事者、被問事由而進退而無仰事、禁中事甚難行、但使其日有此事、其例不豐者云々、

〔北山抄一四月〕中申酉日賀茂祭事

撤土屋圓座、次禰宜祝相分著廊座、於玉橋邊有祓、陰陽大夫役之、先是忌子參社頭、候神殿東階下、次渡御鍵於正祝、頭大夫役之、次正祝參進大床、於階上下二拜、次開御戶、社司已下各平伏、此時樂人奏亂聲、次神主參進御前、次神主正祝、相並於階上下二拜入內陣、次社司各候御前、拜而列坐左右、次捲御簾、祝役之、次獻神供前、開神供之唐櫃之蓋、別當所司役之、次神供畢下御簾、祝役之、次社司各退下、自末座退、次神主祝出內陣、五官役著祝言屋、待片岡社祝詞、次八社祠官各參某社、開御戶獻神供、如本宮之儀、次五官申祝詞、申片岡社祝詞之後、申本宮祝詞、預大夫告申之、次供外陣朝御饌、權禰宜祝役之、次正祝參進御前、假納御戶、不加御鎖、次納神供之唐櫃蓋、別當所司役之、次社司各起座、

松尾土師尾若宮新宮片岡社巡拜、而各止樓門、次勅使昇橋殿南階、著給橋殿座、兼而儲幣案於橋殿北庭、寄立御幣、次二拜、次開給宣命、次二拜、次神主昇從橋殿北階東方、請宣命、次持參於御前宣命、此間官人捧御幣入社內、次於中門內唐戶前、神主請取御幣、次於祝詞屋申祝言、先二拜、祝言、又二拜拍掌、次歸出申返祝詞、於片岡社四目之中石上申之、申了拍手、次勅使拍掌、次神主昇從橋殿北階東方、進御葵於勅使、返祝言前、兼採御榻之御葵、渡禰宜、禰宜持出置御幣案上、次勅使退下、降橋殿南階、假著給土間西折下、次官人牽神馬廻橋殿三匝、次有東遊、舞人立階從發歌笛、次東遊畢勅使退下、次內藏使舞人以下參仕輩各退散、役人撤橋殿御座、次神主祝於橋殿有祝言之儀、次走馬、走馬參神館、子時所司大夫申祝詞、次神主以下社司參御前、著廊座如始、次正祝參進御前開御戶、社司以下各平伏、次神主祝入內陣、次社司各參進御前、次褰御簾、祝役之、次撤神供、樂人奏樂、次社司從末座退、次神主從內陣退出、次祝閉御戶、加御鎖、社司以下各平伏、次神主以下社司各退下、次著橋殿座、昇橋殿南階、次走馬乘尻告歸參之由於社司坐、次神主以下社司各起座、降橋殿南階、渡東橋、次岩本澤田奈良社巡拜、次著廳座、有發之儀、事畢退散、

○按ズルニ、往昔ノ社頭式ハ、本篇祭式ノ下ニ引ケル儀式ノ文中ニアリ、今ハ記錄中ニ就キテ

社頭式

前日請紅紙分配、內記於宅書之、以使部付內侍所、若當御物忌者、前日付之、使內藏也、

清涼記云、當日早旦、內記書宣命、付內侍、內侍奏覽、訖令給內藏寮使云々、

口傳云、若內侍不候者、當日上卿奉勅召內記、令持宣命就御所、付藏人奏覽之後、歸陣座賜使、

〔日本紀略 四村上〕天德二年四月廿一日壬申、賀茂祭宣命、先例內記付內侍奏聞、而內裏有丙穢、使不可參內、被尋先例之處不見、宣命之事、准臨時奉幣之使、不穢內記於陣外書宣命、不經奏聞、付使內侍、令給內藏寮使料紙、可請左大臣實賴、○藤原家者、○又見西宮記、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

應和元年四月十七日御記云、少內記紀時文令藏人守仁奏宣命、依內侍不候、付藏人令奏、午刻命婦藤原口子於南殿西檻、以宣命授內藏使助繩云々、

同三年四月十六日、女藏人給宣命於藏司使、

〔宗建卿記〕享保十七年四月十四日、殿下○近衞家久仰云、去廿二日、賀茂祭內藏使殿諸大夫也初參、懷中宣命、入宮入白生絹袋、以同糸袋ノ口ヲ引スヘ、懸之於頸、近年定規一條家諸大夫參向之時、不及懷中、手振持之、又內藏助中原昌俊參向之時、雖懷中之不入袋、今度權頭孝道如此事、伊勢宣命於殿上上卿下之、內藏寮使賜之、入白袋懸頸之由、人車記有所見、仍殿下被命之由也、

〔後中內記〕元祿七年四月十八日、卯刻行水參內、賀茂祭也、○中略於社中次第、刻限先神主以下禰宜祝廿一人、各參社頭、預參集侍所、從是行列、次轉供氏人三十人、各參社頭、社司氏人、徘徊於二鳥居內、待勅使、次勅使參向、先於一鳥居外下輿、從是行列、檢非違使前行、於二鳥居外止、次自一鳥居陪從發物音、次勅使入給二鳥居、神主以下社司、各列立二鳥居內南上東面、次勅使於休幕內暫猶豫、以樂屋爲休所、次神主以下著土屋、祝相分出二鳥居、著廳舍屋座、次從贄殿進神供於左右御料屋、祝捧御葵桂、神供經土屋邊時、社司各敬屈、於玉橋邊有神供之祓、陰陽大夫役之、次社司各參御前、社司起座之後、

次官時範、左近將監仲兼二人居₂衝重₁、藏人兵部大輔通輔勸盃、次御覽飾馬手振引馬等、次藏人頭季仲朝臣取₂御衣₁賜ㇾ使、紅打御衣井單衣使拜舞退下、使車雜色等、皆悉於₂北陣方₁密々御覽、

〔園太暦〕貞和五年四月廿五日、今朝去夜聞書到來、○中略抑今日賀茂祭也、其儀北陣幷物音等被ㇾ止ㇾ之、花園院周回之故也、不ㇾ及₂御前召₁勸盃、於₂弓場₁賜ㇾ祿云々、

〔後中內記〕元祿七年四月十八日、卯刻行水參內、賀茂祭也、近衞使參內以後、著₂御御引直衣₁、御單高倉三位永福卿、御前宗顯令₂奉仕₁之、出御者女中沙汰也、祭使進發次第召₂御前₁儀、早旦內記付₂宣命於內侍₁、以₂長橋局₁爲₂內侍所代₁、次奏聞畢、內侍召₂內藏寮使₁賜₂宣命₁、

次出₂御大床子₁圓座、關白候₂便所₁、出₂御晝御座₁者候₂御前₁、○中略次相具舞人陪從等立₂弓場代₁、次使令₂陪從發₁歌笛、次職事聞₂物音₁出逢、次使奏₂事由₁、次職事還出示₂召由於使₁、次使入₂長橋廊間₁、昇₂假橋₁著₂圓座₁、次藏人二人、極﨟藤原相公、卜部兼充、居₂衝重肴物於使前₁、次職事後清勸盃、藏人極﨟藤原相公取₂瓶子₁、此間陪從進₂東庭₁發₂歌笛₁、舞人相共進₂出庭中₁舞₂求子₁、了退入、次藏人頭於₂鬼間簾下₁取₂勅祿₁賜₂小葵紅打相一領₁使、次使懸ㇾ祿降₂庭中₁拜舞、次使引₂舞人陪從等₁渡₂南庭₁參₂向社₁、

〔延喜式 十二 內記〕凡宣命文者、皆以₂黃紙₁書ㇾ之、但奉₂伊勢大神宮₁文、以₂縹紙₁書、賀茂社以₂紅紙₁書、

凡賀茂祭日宣命、前一日書、付₂內侍₁奏ㇾ之、

〔朝野群載 十二 內記〕賀茂祭用ㇾ宮 十一月臨時祭用₂此狀₁、但加₂寬平御代與利奉出給之字₁、

天皇我御命爾坐、掛畏支皇大神爾申給波久止申久、大神乃助給比護賜仁依氏、天皇朝廷者、平久大坐氏、食國乃天下無ㇾ事可ㇾ有止爲天卒、奈常毛進留宇都乃大幣乎、內藏頭若助位姓名爾令₂捧持₁氏、阿禮己乎止阿禮女乎止走馬進止申留申、

年四月日 中酉日○又見₂柱史抄₁

〔柱史抄 上 四月〕中酉日賀茂祭 宣命用ㇾ宮奏等載₂內覽草₁○中略

相從、右近府生公忠、(關白隨身)同府隨身扶武、(余隨身)等爲䌫、次引引馬、(禪室馬)左近番長親年、(左大將隨身)右近番長光武、(候禪室者也、如隨身、)隨身雜色相續渡庭前、近代例云々、使少將資房、執盃勸兼隆卿、其後使參內、(未祿歟)給使陪從等裝束等、裝束訖良久已後、從皇太后宮(○三條后藤原妍子)給摺袴二腰、(濃綾縫物歟)使六位(侍歟)被物、(白合袷歟)依父資平之宮司、所給歟、今朝禪室、以右中辨章信朝臣、被給絹五十匹于使少將、其命云、今日不可申返事者、緣親不與祿、隨身裝束大納言能信卿調送之、使十二人下襲、關白(○藤原賴通)被送、其使範國朝臣與白合袷等、皇太后宮袴異他、不可默留、仍給大將隨身二人、令改著也、一二座者大凡也、亦此中无關白隨身、彼是相議重所給也、近來事異于古跡云云、垣下公卿中納言兼隆、參議公信、經通、資平、通任、右三位中將兼經、參議廣業、廣業依爲祭行事早出、今日无別插頭、於內藏寮請桂葵、使少將陪從等同插頭多、檢非違使、三獻間、出居庭中床子、(看督長立)卽起座出、

〔中右記〕寛治三年四月廿一日、賀茂祭也、使右少將俊忠參內、先參弓場殿、次召御前、參長橋居衛重、(殿上五位取之)勸盃、(藏人左衛門佐爲房、瓶子六位藏人取之、)藏人頭季仲朝臣取御衣給之、(紅打衣一重)使於庭中拜舞、舞人片舞了、內藏寮給祿了、(絹布等類)御覽俗馬手振等、次牽馬、(寮官人又引之)小舍人童六人隨身等參進御前、是失也、又於北陣方、內侍以下女使等參入給被物、(內侍師子祿、藏人取之、)使車幷雜色笠等、於北陣密々御覽之、雖无先例、御于里亭間、隨便宜歟、又內藏寮使參內給宣命、(掌侍於北中門方給之)今年齋王不渡給、仍上卿以下、幷所前驅次第使等不參、只外記一人於列見辻行事云云、又戊日、无還立儀、午日无御禊、但警固解陣之儀有召仰云々、去十三日、齋院(○齋子)依母喪退出本院也、　八年(○嘉保元年)四月十五日、賀茂祭也、早旦依無女房陪膳、參內供朝膳了、後行向使少將顯通出立所、(右大將土御門亭)則逐電歸參內、于時新殿下(○藤原師通)令參內給、北陣方輿侍命婦藏人(新參名姪子、新殿下女房也、)聞司參也、給祿(藏人宗佐取輿侍祿、自餘出納取之給、)則退歸、又於御殿南庭、御覽雜色所衆等、藏人頭季仲朝臣被候簀子敷、殿下御簾中先御覽畢、次騎馬一兩廻之後、依仰罷出、(於所給、出發)使內藏寮頭政長朝臣、參自北中門方賜宣命、近衛府使左少將顯通參弓場殿、有仰召御前、使候長橋、藏人

庭中、(謂求子、)次舞畢、舞人以下退出、次給祿、(紅打袙一重、女房傳給、五位藏人於鬼間障子下取之、出自殿上戶、進被之退出、)次使將下自長橋拜舞、(低頭不振鶯尾、於河竹臺長可拜云々、或於長橋內拜、是雨儀也、)畢退出、暫佇立於弓場邊、(此間可給舞人以下祿、有所)次覽被馬、(自瀧口引之、官人爲儺、覽畢引歸、)(副不改覽之云々、手振不覽之、)次覽引馬、(不稱事云々、飾馬ノ鶴ノ官人重引之、不令番長引之、)次使將以下退出之、

〔年中行事秘抄 四月〕賀茂祭事

早旦、內記付宣命於內侍所、召內藏寮使於上御壺禰北𦽳前、令內侍給之、次女使與侍命婦藏人等參朔平門、付藏人奏事由給祿云々、近衛使參弓場殿、或召御前給祿、其儀同春日祭、

〔蓬萊抄 四月〕中酉日賀茂祭事(或用下酉)

於禁裏召近衛使、覽所陪從等之間、殿上人無別所役、無故障之輩、著束帶所參齋院也、訪近衛府使例也、

〔文德實錄 四〕仁壽二年四月辛酉、修賀茂祭如常儀、

〔日本紀略 村上三〕天曆二年四月十八日丁酉、賀茂祭、天皇御南殿、覽使々飾馬、

〔小右記〕治安三年四月十六日己酉、今日賀茂祭、使左少將資房、出立自家西對、使座出雲筵上敷圓座、黑柿机、陪從座緣端疊、朴木机、上達部座高麗端疊上敷茵、(中略)○上達部前用高坏、殿上人座紫端疊、黑柿机、諸大夫饗在西中門北廊、官人加陪從饗儲、隨身所舞人陪從裝束、從腋方令給、小時中納言兼隆卿來、兩宰相先來、令催使陪從等、良久之著座、一獻左頭中將朝任、使請盃獻上達部、往來及殿上人、二獻兼隆卿、余令催粉熟、卽居、三獻參議公信、余以右中辨章信、令仰三獻以後不可有往來盃之由、仍直流巡、使陪從歌遊、余著座作座召盃、流巡不及使、次示大藏卿通任令勸盃、示事由於使陪從、不令起座直流巡、示左中辨重尹、令執上達部盃、左兵衛督公信(廷尉)起座退出、依爲廷尉歟、先駿河舞、次求子、仰將監光高將曹延命、爲一舞、蓋是故殿例也、天曆十一年二月、春日祭時例也、(將監播磨公仲、府生宇自可最平、)余脫衣(合和)給光高、兼隆卿給延命、次上達部殿上人、脫衣給陪從官人等、(左近右)舞了令引唐鞍馬、(闕白馬)馬副八人

使等祿馬從者、於清涼殿東庭覽之、又召藏人所陪從等御前、（其馬陪下或隨之）或召近衛府使於御前賜酒肴、象令奏歌舞給祿、一同春日祭使、

〔江家次第 四六月〕祭日

覽前驅同禊日、若有青色不具之前驅者、先參入付藏人奏此由、有仰召藏人青色給之、今日二藍下重、丸鞆帶、鼻切履、又給青色帖紙、使次將參入、於弓場殿發物聲、即召御前、入自仙華門候長橋妻、先是先敷圓座、六位居衝重、五位藏人勸盃、舞人入自同門、於東庭奉仕舞、（求子）畢舞人退出、次使給祿、五位藏人取之、紅打袒一重、五位藏人出自殿上上戶被之、使進川竹臺艮拜舞、畢自仙華門退出、（雨儀、舞人於露臺下舞、次將於壁下拜舞、）次覽飾馬、入自瀧口戶、鐵馬副隨身手振等也、於引馬者不覽、次飾馬如本引出之、當御物忌時、皆不召御前、前驅自所給帖紙退出、使於弓場殿給白褂、或雖不召御前、猶給紅打袒、舞人等祿、須給佐渡布也、近代不給、內藏寮使、著內侍所奏事由、給宣命退出、警固解陣召仰如日記、

賜宣命儀

內記以宣命付內侍所、御湯殿畢後、上御壺禰前召內藏寮使、內侍賜宣命、（御物忌時、籠宣命云々、使候內侍所、以女官傳）

闕

賀茂祭使（使東對儀注之、自餘准可知、）

公卿著西庇座、（北上東面、經對南廣庇井同西簀子敷著、）殿上人著南庇座、（西上北面、入人座設之、有饗、並居之、）諸大夫著車寄廊座、（北上西面、近代不必著、）舞人十二人著座、（入自中門、經車寄廊西簀子、渡庇西第五間庇第四間、著母屋座、上臈者西上南面、下臈北上西面、）陪從（中將時八人、少將時六人、雖少將、兼藏人者八人云々、）著廣庇座、加陪從著便宜座、（西上北面、）居公卿肴物、（人別三本、土高坏給折敷等也、地下五位役送、其路經陪從前井西簀子敷可進、或經殿上人座東井南西進、）

一獻　舞人、（殿上四位勸盃、於廣庇五間西柱東頭取之、諸大夫持來、經廣庇井西簀子敷、自西庇南第四間昇、著舞人上頭、地下諸大夫執瓶子、白、）陪從（地下五位勸盃、經南簀子、著陪從上頭、地下諸大夫執瓶子、）

二獻　舞人、（垣下公卿勸盃、地下諸大夫持盞坏、居於檜折敷、經廣庇到西簀子、公卿下座、於長押下取之、殿上五位執瓶子、舞人受之、起座擬第二公卿、第二公卿取之、擬第二舞人、第二舞人來）

宮中式

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

禊祭日、上卿見下仕出馬等、(倚御車與之時、上卿以下列御前、)覽被馬、(見式也、外記仰諸陣、令入馬手振事、近衛府使參射場、就內侍所受祿、近代不着、)天皇御南殿、(御座在南庇中間、立馬形御屛風二帖、廣莚二枚、近代上立大床子敷御褥、天皇位袍、)御出、(置御釼、)內侍出、上卿昇、(着緣座、西上北面、上、)出居昇、(異他儀、)男女使馬手振次第渡、(主人不渡、入自日華門、出自月華門、)內藏近衛衛府(有顯身、)馬寮宮々男使命婦藏人宮々使闈司等馬從渡、(舊例度後歸渡、延長天曆不歸渡、)內侍取御釼、天皇入御、公卿下、本殿儀、(藏人仰北陣、令入馬、)召命婦、(內侍給祿、闈司可召歟、)近代典侍在陣外、申寵由、(給祿、)召所々飾馬具、或召近衛使、(使居長橋、歌人立東殿砌下、給御衣、舞人給布、)

〔北山抄 一 四月〕酉日於南殿覽被馬事

御座在南廂中央間、(立大床子、御後施御屛風、)公卿座設東第二三間簀子敷、(敷莚、)出居座設東階上簀子北頭、時刻出御、內侍召人、公卿次第參上、次出居著座、先內藏寮使馬、次近衛府、次馬寮、次中宮、次東宮、次內侍、(典侍供奉者、唯有走馬手振等、)次命婦、次中宮命婦、次藏人、次中宮藏人、次國司、入自日華門西度、(或東還度、)訖還御、公卿出居等退下、(掌侍等供奉時、令奏病由、殊有勅許乘車也、)此日內記付內侍令奏宣命、內侍卽給內藏寮使、若內侍不候、上卿奉勅令奏之、召使於陣頭給之、或令使內侍給、近例內記令藏人奏、以代給之、

〔小野宮年中行事 四月〕中申酉日賀茂祭事(酉日陣儀、當日使立、)

先二日、少納言付內侍、奏可祭齋之文、當日早旦、內記書宣命、付內侍、內侍奏之、覽訖令給內藏寮使、又巳一刻、使等參入、付內侍令奏寵向祭所由、卽給例祿、天皇御南殿、(南廂中央間、立大床子、為御座、御後施御屛風、)內侍臨檻喚人、公卿自東階參上、著簀子敷、(東第二三間敷莚、為座、西上北面、)次出居次將昇自同階著座、(東階上者、簀子北頭敷莚一枚、為座、南上西面、)便男女使被馬及從者等、入自日華門、西度、出自月華門、(其次第、內藏寮使馬、次近衛府使馬、次馬寮使馬、次中宮使馬、次東宮使馬、次內侍馬、次命婦馬、次中宮命婦馬、次藏人馬、次中宮藏人馬、次闈司馬、若典侍供奉、唯有走馬幷手振等、貞觀十五年例、使馬等西度、更又東還、而延長二年例、依日暮不更還渡、令卻出自月華門也、)祭日若不御南殿、巳刻使等付內侍申寵向由、又內侍已下女使等參上、候南廊小板敷、內侍授祿、(典侍候朔平門外、參事由、卽令傳給其祿、)

外、寘牛車參於上社、先留轅下、次就社前右殿、勅使内藏寮五位已上官一人、近衞府馬寮五位已上官各一人、並左右更供走馬十二騎、左右近衞更供中宮東宮使五位已上官各一人、内侍并命婦藏人聞司各一人、中宮命婦藏人各一人、自餘准初度四月禊儀、但加腰輿一具、駕輿丁四人、事見儀式

〔延喜式十一太政官〕凡賀茂二社四月中申酉祭、齋内親王向社、史一人、左右史生各一人、官掌一人、向祭所檢校諸事、山城國司預錄祭日申官、差勅使令奉幣、并有走馬、事見内藏及左右馬寮式前一日大臣侍殿上、召諸衞府次官已上於殿前庭、而仰警固事、及日解陣亦准此、並事見儀式、○又見本朝月令所引弘仁神祇式

〔延喜式三十八掃部〕四月奉賀茂神幣帛使座、於内藏寮設之、又設座於下上社、其輕幄二具、牀二脚、屛風四帖、疊四枚、預請齋院、事訖返送、

〔禁秘御抄中〕一神事次第

賀茂祭自一日神事、有浄佛、年自九日、輕服無憚佛、自九日神事、是被用例也、神事條大略同神今食等、但自一日爲神事、御身殊神事自中日、是故實也、

〔賀茂皇大神宮記〕年ごとの四月の祭は、○中略中酉日、御祭禮、齋の行啓あり、御こしにめして、一條大路を通りて、賀茂の御やしろへ御なりありて、神事にあひ給ふなり、今日は公家より公卿勅使を立られ、餝馬をあまた奉らる、檢非違使近衞使中少將内侍使おほくの車やりつゞけて、地下の官人、御鉾御弓それ〴〵の神寶持つらねてわたるに、思ひ〴〵の風流をつくし、はなをかざりたれば、天下のおもき事にたぐひすくなきもの見なり、これによりて一條の大路には物見車立ならべて、棧敷處せきまでかまへたり、さてこそ車あらそひなどのありしも今日の事なり、北祭といふ是也、

〔後中内記〕享保七年四月十九日、陰、賀茂祭也、近衞使櫻井中將、雖雨御所之作法被用晴之儀云々、於社者雨晴間勤之、於上賀茂者如何不聞也、及申刻近衞使已下被歸云々、

〔公卿補任光格〕寛政十二庚申年四月十五日、賀茂祭被附社司、

路少後腰輿次之、駕輿丁四人擔之、〈縫色同上〉火長左右各十人、〈前騎與駕輿丁在後者相當、行列相去一許丈、〉其內齋院次官判官、次腰輿各一人、〈與大長齊首、若次官五位者、進列長官前、〉主典史生並左右各一人、陪從左右各三人次之、其閒清器韓櫃一荷、〈與史生相當、〉壺器韓櫃一荷、〈與陪從相當、並以今良舁、擔丁著紺布衣、〉陪從之後馬寮屬左右各一人、馬醫左右各一人、史生左右各一人次之、中路少後宣旨車次之、〈男從左右各八人、女從近車左右各二人、〉供膳韓櫃三荷次之、膳部相夾左右各三人、〈並著[illegible]纈布衣、〉衣服韓櫃左右各二荷、荷傾左右一人、雜物韓櫃左右三荷次之、荷傾左右各二人、〈並在韓櫃外、著退紅、〉〈染衣、〉中路少後侍者車二兩、〈男從左右六人、女從近車左右二人、〉采女車一兩、〈男從左右各三人、女從近車左右各一人、〉司人車一兩、〈以居飼一人、爲御車、〉騎兵左右各五人、國司在其閒、內藏寮幣帛次之、少後舍人史生左右各一人、中宮幣帛次之、少後舍人史生左右各一人、春宮幣帛次之、少後舍人史生左右各一人、齋院幣帛次之、舍人一人隨之、少後宮主一人在左、史生一人在右、少後走馬左右各六匹、〈近衞牽之、〉內藏頭近衞少將馬寮頭中宮亮春宮亮次之、少後兵衞左右各一人、少後齋院長官在中次之、少後藏人命婦內侍各一人在左、闈司藏人內侍代各一人在右、少後齋院宣旨一人、執劒在中次之、少後乳母執翳左右各一人次之、腰輿在中路、其前後輿長左右各六人、相列相夾內外各三人、女孺一人、執行障在腰輿近前、藏人二人、夾女孺相對而在松內、藏人左右各一人在松外、童女左右、各一人次之、陪從左右各三人在輿外、〈其前頭及後列、並與前後松外藏人相當、其在中者執蓋、與執行障女孺上相當、〉女孺二人、雙立在松內、〈在執行障女孺少後上、〉走孺六人、雙立在松後、其後陣次第也、齋院次官一人在左、判官一人在右、主典各一人隨之、〈在女孺少後左右、若次官五位者、進列長官前、〉近衞兵衞門部左右一人次之、〈前頭與主典相當、在其外、〉未到社十許丈、齋王下腰輿步行、〈以兩面布道、〉就社前左殿座、其內藏寮幣到社中門、史生二人相代舍人捧持入社、使就座壽詞了後、付禰宜祝退出、訖齋王還幄、此時少將馬寮頭向馬場、令走御馬、訖還府也、上社次第行事如此前、但齋王就社前右殿座、

〔延喜式齋院六〕凡齋王每年四月中酉日、參下上兩社祭、〈先參下社、暫留社外舍、脫換衣裳、更著淸服、即駕腰輿、卻駕輿丁、令輿長供、就社前左殿、事畢出社、〉

御覽也、仰云、是例事也、早可有也者、予即參內、即有御馬御覽事、此間予奏事由、點定御馬三疋、命婦藏人闕司料也、兼日仰長上等、令還申善行御馬也、御覽了退歸、御馬解文注付、命婦藏人闕司、不注名、又有注名之例也、給行事藏人賴資了、

〔蓬萊抄 四月〕中未日御覽女騎馬事

近代絕無此事、藏人頭點定之、行事藏人所宛催、殿上四位已下也、

〔類聚國史 五神祇〕弘仁十年三月甲午、勅、山城國愛宕郡賀茂御祖幷別雷二神之祭、宜准中祀、

〔延喜式 一四時祭〕凡〇中略賀茂等祭爲中祀、

〔儀式 一〕賀茂祭儀四月中酉、若有三酉則用中酉、有二酉則用下酉、

祭日卯四刻、奉幣使等、就內侍奏參社之狀、皇帝覽使等乘馬、各有從者、訖賜祿各有差、內侍已下與使等共向內藏寮、於寮事前解除、以松尾社幣使付祝宜祝等、即使等兩段再拜各就座、先是掃部寮預設座、主水司供事、內藏寮供饌行酒、訖使等相引到北邊路、待齋王發、舍人二人、左右相分領幣在前而行、山城國司率騎兵等祗承、時刻齋王駕輿而出、其前驅次第也、山城國步兵左右各十人、著皂緌黃衣、白布帶、蒲脛巾、執杖、騎兵左右各十人、著皂緌退紅染衣、白布帶、橫刀、弓箭、熊皮行縢、其間郡司八人、前頭與騎兵道引者相當、並著皂緌綠布衫、白布帶、橫刀、弓箭、熊皮行縢、從者各二人、史生醫師博士目各一人、並著朝服、橫刀、騎、從各二人、掾一人、著朝服、橫刀、騎乘唐鞍、從六人、春宮走馬左右各一匹、中宮走馬各一匹、馬寮走馬各五匹次之、中路少後春宮亮、從左右各三人、中宮亮、馬寮頭、並從同上、近衞少將一人、隨身近衞左右各一人、從各三人、內藏頭次之、從左右各三人、中宮藏人一人、男從左右各四人、女從近馬各二人、藏人一人、命婦一人、並從同上、內侍一人次之、從並同宮內侍、齋院長官次之、從左右各三人、左右少後門部二人、兵衞近衞各一人次之、並著青摺衫、下同、齋王輿在中路、次之輿前後駕輿丁各廿人、綱內左右各一人、綱外九人、並著紺布衣、白布帶、輿長各六人、在綱外輿丁之外、以三人分頭行列、並著黃衣白布帶、左右少後近衞兵衞各一人次之、其內執屏繖左右各一人、執翳各一人、執笠各一人、執壺各一人次之、並著緋衣白衣帶、乳母左右各一人、男從馬副各三人、女從近馬各一人、藏人左右各四人、男女從同乳母、女孺左右各三人、男從馬副各二人、女從近馬各一人、童女左右各二人、男女從同女孺、中

〔薩戒記〕應永廿五年四月十五日、賀茂祭警固召仰也、爲伺見密々參內、奉行藏人右少辨經興也、而不參、藏人左衞門權佐宣光參陣、則申沙汰也、上卿一條中納言(實秋、蒔繪劍、平緒、)著陣、(奥)次官人職事藏人左衞門權佐宣光出陣昇座、候上卿坤方、上卿奏警固候之由、次宣光歸出、仰聞食之由退下、次上卿移著端座、召官人令敷軾、則召外記、六位外記參上、召內豎歟、而不出現、則右近權中將有定朝臣(持笏、懸緒可引歟、)左衞門權佐宣光、(持笏、)入宣仁門、(此殿依月華門代、各在之、若可入件門歟、)列立小庭、(北上、大內之儀、立軒廊南砌也、今依此殿、西面、但猶退東方、可立軒廊內歟、)上卿仰詞不聞如何、次自上﨟退下出同門、次兩人(中將、權佐、)帶弓箭、(蒔繪劍、壷胡籙、老懸緌也、今度引緒如何、所存、今度可懸緒歟、)入宣仁門代、列立如前、(此事近例也、不可然、奏仰之後、只帶弓箭可參御所邊歟、再參列上卿前不審也、可尋之、自上﨟出了、)次上卿召官人令撤軾退出、

〔西宮記〕(四月)賀茂祭事　定禊日前駈定、(上旬)

未日、藏人近衞次將、共於右兵衞陣前、點命婦藏人闈司馬、(院女騎馬不點、或於御前點、延喜□年後不點、典侍馬、額闈內裏女使不立、近年立、)

〔小野宮年中行事〕(四月)中未日御覽左右馬寮女騎料御馬事

中少將一人候御前、隨勅仰騎下之由、御覽十列之時、又以效之、

〔西宮記〕(四月)賀茂祭事

康保二年四月十九日己未、御記云、午刻左大臣(○藤原實賴)參上、奏官奏、訖於仁壽殿、覽賀茂祭女騎料馬、及右馬寮家嶋牧馬、

〔小右記〕永觀三年(○寬和元年)四月廿一日乙未、參內、於淸涼殿覽女騎料馬、(左三、右三、)余(○藤原實資)候御前、以右三匹爲女騎料、(命婦藏人闈司等也、)毛付後注付、下給馬寮官人、(○中略)覽女騎馬之後、覽左右馬寮十列及二坊御馬等、臨時仰事也、

長和五年四月廿三日丙申、昏黑資平來云、今日御覽御馬、被定女騎、須昨日御覽、而依坎日及今日、(治天下之初、依祭事坎日御覽有案、減膳式日、減中日覽者、仍今日御覽、一日余所相示也、申攝政所行云云、)

〔春記〕長久元年四月廿四日戊申、午剋許參關白殿、(○中略)予(○藤原資房)申云、今日可點定女騎、仍可有御馬

穢之人入於齋院、仍停祭事、　廿二日庚戌、諸衞解嚴、

〔三代實錄（三十五陽成）〕元慶三年四月十三日壬申、諸衞警固如常、以明日賀茂祭也、　十四日癸酉、停賀茂祭、（○中略）緣太皇太后崩也、

〔三代實錄（四十一陽成）〕元慶六年四月廿四日丙申、諸衞警固、以明日賀茂祭也、雖停祭事、猶有警陣例也、

〔西宮記（四月）〕賀茂祭事

延喜十三年四月廿三日己未、鴨祭、仍警固、但諸衞无佐已上、六位官人奉之、仍上宣、令進佐已上散狀、

〔日本紀略（五冷泉）〕安和元年四月十九日辛未、警固、此間无齋王、然而依承平二年例也、　二年四月十三日庚申、可有賀茂祭警固、而去月廿五日以後有警固、仍無召仰、

○按ズルニ、是ヨリ先キ橘繁延等ノ亂アリ、故ニ去月廿五日ヨリ警固アリシナリ、

〔小右記〕長和三年四月十七日壬申、今日警固、違式、昨日依坎日延及今日、幸枇杷第之後、未有被行之事、仍避坎日所被行云々、

〔本朝世紀〕久安四年四月廿日丁未、今日雖可被仰警固事、上卿不參、仍延引、　廿一日戊申、權中納言藤重通卿參仗座、行警固事、二府總參、（右近將監高階爲安、右衞門少尉宮道光兼、）頗希代例也、

〔吉記〕安元二年四月廿日乙未、今日警固召仰也、上卿別當午刻參內被仰之、左近少將通資朝臣、左衞門權佐光雅、右衞門少尉兼綱、今日三府不參云々、

〔山槐記〕治承四年四月十三日乙未、今日雖可有警固召仰、依凶會坎日明日可被行云々、代始日次不宜之時延引例歟、　十四日丙申、今日有警固召仰、昨日依日次不宜延引、代始依日次行之例也、

〔後深心院關白記〕應安二年四月十九日癸未、賀茂祭警固也、近衞將無領狀之仁、一人可沙汰進之由、以頭辨嗣房朝臣被仰下之間、沙汰進季村朝臣了、　廿一日乙酉、賀茂祭如例年云々、刻限遲々、猶超過于近年之例云々、

警固

〔内裏式中〕賀茂祭日警固式

先祀一日、大臣(若無大臣者、中納言以上亦得之、)令内侍奏可衛固之狀、又遣内豎喚六衛府佐以上各一人、(若無佐者、尉亦得之、)諸衛來集、即大臣上殿喚內豎、宣喚侯司、內豎稱唯、出喚諸衛、若夜喚之、諸衛各稱名、如行在所將軍等之儀、以次入立、(入自日華門、立殿庭、)大臣宣、欲爲賀茂祀(我)故(爾)、如常率衛固、諸衛共稱唯退、○又見儀式

〔九條年中行事四月〕先賀茂祭日警固事(雖停祭使、猶有警固例、期先一日、國祭前、延長八、四、十四、內裏儀、)

大臣付內侍、令奏可警固之由、若不候者、進御所令奏之、次復本座、仰陣官令召內豎、內豎候小庭、大臣仰云、召諸衛官人、(式云、喚侯司者、年來所仰詞、必不然也、)官人具了、列立軒廊南庭、(西上北面、)大臣在陣南座宣云、賀茂祭爲(止留加)故(仁)、如常固(女)衛(利末部禮)、諸衛官人稱唯退出、(若有故入夜、上卿先可問誰、各稱官姓名、他皆准之、)同警固、

雨儀時、諸衛官人出自日華門、經宣陽殿西廂柱外、進立軒廊、(西上北面、如常、)

〔西宮記四月〕賀茂祭事　警固(未若申、見式也、雖停止祭、有警固、)

上卿付殿上辨若藏人、令申可警固狀、(內侍不候、諸衛不具者、加其詞、)勅許仰外記、召內豎、內豎候小庭、(出自敷政門、)上卿仰云、諸衛召(世)、內豎稱唯出召、諸衛入立廊南、(雨日立廊下、入夜上卿問、諸衛稱官姓名、六位立後、四位者依位立、)上卿仰云、賀茂祭欲爲(加)故(爾)、如常固守奉(禮)、諸衛稱唯左廻出、(左近陣小庭、右近陣射場、諸衛各門前立平張、往還人入自中、解陣時同此儀、上卿仰云、陣解令、)

〔江家次第四月〕賀茂祭警固

祭前未日、或申日行之、雖祭停止年、猶有警固、依有國祭也、○下略

〔三代實錄二清和〕貞觀元年四月廿三日戊申、六府警固、緣賀茂祭也、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年四月十六日庚申、諸衛警固、緣賀茂祭也、

〔類聚國史五神祇〕貞觀十三年四月廿日丙申、諸衛警固、緣賀茂祭也、　廿一日丁酉、停賀茂祭、　廿二日戊戌、諸衛解嚴、

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年四月廿日戊申、諸衛警固、緣賀茂祭也、　廿一日己酉、賀茂祭、淳和院火

議左大辨雅兼云々、左中辨師俊、大夫史雅重、外記渡、辨渡、御前跪候、上皇以手示可渡之由御、次前駈車少々渡、行列如常、右兵衛尉、左兵衛尉、右衛門尉成宗、左衛門尉光忠、(乘院御馬)右兵衛佐顯長、[illegible]院番長季忠公正、小舍人四人、笠車牡丹也、雜色裝束殊華美也、乘院御馬、左兵衛佐經宗、[illegible]院府生左兼弘、右敦方、乘院御馬、小舍人四人、車唐菱、右衛門佐長門守、[illegible]院下臈二人敦則季敦、乘院御馬、車霍地、小舍人二人、御禊前駈、先々不過二人歟、近來如此、左衛門佐代刑部大輔忠定、次第使馬助有時、長官有賢朝臣、次第如常、女房衣薄衣、紅打衣、款冬表衣、靑朽葉唐衣、冬扇、事畢還御、日沒後也、諸人退出、下官暫候間、忠盛朝臣傳勅云、今日祭見物料、家保朝臣造新車、彼日日次不宜、仍今夜可乘、又女院御料、顯賴朝臣調新車、○下略

御禊停止及延引

〔愚味記〕仁安二年四月廿七日甲午、御禊也、爲見物向一條大路、朝宗親宗同車、申終、外記□□□□渡如常、辨長方也、而依爲前駈騎馬渡、行列外記史後、前駈等前也、今日前駈等左衛門佐外皆以代官、如何如何、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十九年四月廿一日戊午、止齋院禊、依穢也、

〔日本紀略三村上〕天暦元年四月十六日辛未、賀茂齋內親王御禊也、恒例用午日、依有不具事、延引及今日、

〔永昌記〕長治三年○嘉承元年四月廿一日壬午、今日御禊延引、賀茂上御社御殿預眞久宅死穢觸來、本社可爲穢之由、去十八日有仗議、日數及今日、仍有議、明日可被行之由所被宣下也、上卿不下知下官、頭辨直觸官者、不可爲例歟、但又被仰外記歟、(中日被行御禊、天暦三年例、外記師遠勘申云々、)此日召陰陽寮於本院、令勘申延引之由、明日凶會九坎、加之先例不勘日時之由、大外記示之、然而恒例禊祭、觸式日猶勘之、何況延引之時尤可令勘歟、大史宿禰承諾、仍令勘之、奏下如例、　廿二日癸未、今日齋內親王御禊、

〔玉海〕養和二年○壽永元年四月十八日戊午、无御禊、依齋院不御坐也、

著之、下仕二人、駮子著十二人、絲鞋著十人、渡御前南庭、出従中門、經客殿西南東行、次引御車牛一頭肥牛十頭、（或先渡、経北、西南、又東行、）検非違使早可罷出由仰了、有定退出、長官有賢來著座、（南庭西面）予問云、本院之事具哉、申云、皆具了、以召使令見出車、女房車六兩皆乘了、乍六兩引立南門、臨中時寄御車、左衛門督實行卿、左兵衛督實能卿寄御車、立御几帳屛風近被候、予入従南門、與宰相中將列南庭遣水西頭樹木下、辨外記史在後、御于御車之間、予與宰相中將出従中門并南門、乘車南行之次、過右衛門佐經隆馬乘所、問前入前駈間事具否、皆申具了由、此中將并備中守忠隆朝臣在此處、令乘馬到列見辻、一條堀川邊立車、齋王御車已出御大宮辻也、尋供奉諸司處、四府尉遲參之間、懈怠無極、先行事辨外記史車令渡、次前駈車、今年無風流、只左衛門佐車只一透也、左右京職、但進二人遲參、處以下且渡、御禊物宮主、右兵衛尉平遠房遲參、且左兵衛藤通定、右衛門尉大江成重、左衛門尉藤通職、阿波守季行、（兵衛佐代）左兵衛佐清成、左右京進二人遲參、此間渡大路、右兵衛尉又遲參、右衛門佐經隆、左衛門佐經雅、所衆四人、雜色二人、次第使馬助忠雅、長官但馬守有賢朝臣、漏剋、齋王御車、次官判官各二人三三車、次第使馬助允、出車六兩、（雜參衣）酉時次第渡畢、予廻車歸家、上卿不參河原也、不見其儀也、右兵衛尉左右京進共遲參、僅尋問可申子細由、遣仰外記許畢、

〔長秋記〕天承元年四月十六日壬午、御禊、上皇（○鳥羽）有御見物、午剋著直衣參院、未下出御、先是家保朝臣令奏云、今日御車遣繩并下簾欲用新如何、仰云、早可用新者、仍改替新、未四刻出御、上達部右衛門督下官（○源師時）許也、侍臣廿人許也、出自三條殿西門、自三條東行、自東洞院北行、自近衛東行、自高倉西行出一條、自東洞院西、自一條南、（一條殿門西脇立御車）家保朝臣付御軒候、副一條殿東垣、打板上敷高麗端疊、立雙五脚、爲上達部座、（件打板、家保朝臣所儲也、）其西平地敷紫端疊、爲殿上人座、副北小室、引主殿寮斑幔、北屋軒切立竹、南邊少室又如此、北邊幔自東洞院及半町、山非実垣東邊也、大略切立松枝、此後遣隨官召次被催本院事、良久別當宰相中將自本院參、東帶、齋王已出大宮給了云云、今日上卿中宮大夫宗忠、參

衣紅打　次女官車

〔中右記〕天永三年四月十一日癸卯、今日齋院御禊點地文、右中辨持來、(三枚)見了付右中辨、覽殿下、(〇藤原忠實)則下了、每年御禊點地、以今日卯日為式日也、件勘文ハ可奏之文也、幼主御時、只覽攝政殿許也、

永久六年(〇元永元年)四月十八日庚午、齋院例御禊也、

〔長秋記〕元永二年四月十九日、御禊也、山城所課、本院幷河原掃除人夫、桂松六本、續松百廿把、獻物一荷、饌物十四、(饌、薑、區々薄、檬、付五葉枝、)別雜掌解文送禊所、又肥牛五頭、(借人人)送藏人行事所、遣縄代別白布一端、又關白殿(〇藤原忠實)牛飼童(御車牛飼也)取之、又御牛粥料同童給米五斗、(已上山城所課也)或人云、上皇(〇白河)於三條殿、左兵衛佐顯盛、右衛門權佐顯頼、左衛門佐清隆等、於北面御覽之云々、申剋自左大臣殿(〇源俊房)御使來云、只今為御見物、可渡給伊豫守棧敷、早可參向者、申承由、皇后宮大進敦俊追參、下官(〇源師時)乘加車、參入、莊嚴院僧都被參、酉一剋、車渡京職邊、不知名、右兵衛尉貞利、左兵衛尉行安、右衛門尉資則、左衛門尉光信、右兵衛佐經親、左兵衛佐顯盛、右衛門權佐顯頼、左衛門佐清隆、次第使右馬助範景、所衆雜色、長官家俊朝臣、御車、一二車、女房車、(檳色衣、紅單衣、紅打衣、二輛表著蘿蔔唐衣、)童女車、顯盛進番長敦方、敦忠、顯忠、顯頼隨近衛中臣季重、清隆進下毛野季忠等也、左府仰云、中臣季重、付金銀花在靭負佐、共古今奇異事也、今日辨幷外記不渡、未聞事也、

〔中右記〕大治五年四月十一日壬午、齋院御禊也、予(〇藤原宗忠)依為禊祭上卿、午時參齋院、入從東門、參御所方、先別當實行卿參入、被行本院事、是親王方勅別當也、未時、內御使右少將敎長朝臣參、長官有賢朝臣申事由、敷座於東戶口前下板敷、高麗一枚、茵一枚、(已下五位數之)召使女房扇持參、左兵衛督實能卿取祿給之、勅使二拜歸參、予與宰相中將宗輔著客殿座、(西庭、東面北上、)右中辨實光、新外記景隆、史久辰著座、(南庭、北面西上、各居蹲、)垣下藏人長時參著座、(北庭、南面西上、)母屋雖儲前駈座、近代不見、皆在近隣也、予問外記、供奉諸司京職前駈等參哉、申云、皆參候近邊、檢非違使可著座之由催、志有定參也、看督長舁床子立南庭、有定

歟、又著白重平、答曰、其例慥以不知給、但爲祭使渡一條大路之時、皆可相具也、若同事歟、若可被具者、著布袴可立小舍人上歟、勤御禊垣下人、上古不著白襲、今世不必然云々、已知勤職掌人、道理不著白襲歟、又々可被相尋者、申時刻前若州來向、相共向彼一家棧敷、（大宮條東、未逢相具、）件棧敷者、自一條南、自油小路東也、酉刻雨止見物成了、行事辨相具小舍人二人、（布袴、淺沓、）辨侍一人、（冠、白襖、束帶、沓、）昏黑渡了歸來、

〔永昌記〕嘉承二年四月十四日庚午、今日齋内親王御禊、○中略 酉刻寄御車出御列見、昏黑渡御者、

路頭次第

行事左少辨雅兼　網代八葉車（開物見）赤楸　牛飼雜色白裝束、辨侍清末、小舍人經行相從、（先々行、列南北、執綺、然而小舍人立南側也、而今日辨侍先行、小舍人在後、可謂非也、）

大夫史盛仲（小八葉車、不開物見、相具史侍、）　外記兼弘（小八葉車、不開物見、相具外記使部、）

前驅車　仲兼（青文車加彩色、）　能明（唐綾文透綾打金物、）　顯俊（大雜物見立鏡）　隆賴（無文網代圍大洲濱左右立遠山、）

次左右京職（進以下衞）　次右兵衞尉季保（府隨身小舍人童雜色朽葉取物等相具）　次左兵衞尉遠輔（同前殿御馬）　次右衞門尉檢非違使繁賢（院御馬小舍人童府隨身二人、調度懸、大看督長二人、放免上括、雜色取物同裝束、）　次左衞門尉經元（殿御馬府隨身二人小舍人童、雜色取物蘇芳看違々打衣、）　次御禊物幷宮主（須列京職次、而今度如此、可謂違亂、）　次參河守藤原隆賴（右兵衞佐代）殿下番長兼近圖重、取口張差縄、幼少之人先例如此、　雜色取物、二藍縫窠文歟多打衣笠、　次左兵衞佐能明（殿下御隨身敎時取口）　雜色取物薄蘇芳濃打衣笠　次前驅車相交亦以違濫　次武藏守顯親（右衞門佐代）　院府生兼重取口　雜色朽葉取物若鷄冠　次和泉守仲兼（左衞門佐代）　殿下近衞公方取口　雜色取物朽葉青打　次縫殿頭信俊（馬助代）　馬助兼長去五日被任、然而依所勞爲代官、但不渡大路、　次所衆四人雜色二人　次長官長兼朝臣（無取物雜色、只具白張男二人也、）　次齋王御車　次院司（六位次官判官、共有代官、）　次院別當車（宣旨車）　次行列馬允友宗　次出車（白

記爲國祇候、見肥牛、其後見下仕童儒等、小時新宰相（公信）參入、仰外記令催衛府前驅次第使等、總一人不著座、代官二人也、（左衛門佐代掃部頭成親、次第使代刑部少輔忠重、）垣下殿上人五人、而不勸盃、依无行酒之所忝歟、申始許、起座進御所、令寄御車、乘給畢退出、於大宮院北邊見物、宰相同見、前驅從者數如新制、无過差人、又副馬之近衛舍人不著美服、日未沒之前、齋王度給、左府於例狹敷被見物云々、被復例歟、右兵衛尉藤原惟道申、予隨身近衛紀元武爲識而著綾支子染衣、看督長三人捕元武、其處堀河橋東頭、元武執馬口不離、已如拏攝惟道所騎馬左大臣家馬、彼馬舍人欲打看督長、仍不能搦得元武、此間作法還損朝威、使官人等集會列見辻、任放看督長令斷、非違如何、左大臣隨身等著綾衣而不禮行、似有偏頗、見物間、於所々破却禁物云々、

〔左經記〕長元元年四月十七日壬午、及午刻參齋院、催行雜事、未刻覽走童十人、展子著十四人、次覽牛十一頭、（御車料右府家牛、自餘近江山城各五頭、）及申刻齋王出御、酉刻著河原、御禊了入夜還御、於客殿前駈辨外記史等賜祿、（諸衛佐紅衾一帖、尉白單衣一領、余白褂一領、貞行宿禰同單重一領、外記紅衾一帖、）一今夜右衛門權佐雅康、左衛門權佐定任、左右衛尉等之外不歸參、仍不賜祿云々、（垣下殿上人取五位等祿、院次官以下取六位祿、長官取余祿、次官貞行宿禰判官外記祿、）

〔春記〕長久元年四月廿二日丙午、齋王御禊日也、○中略未二剋許、御覽肥牛等、其儀如御馬御覽也、予先候御前、即令引牛等、第一牛（關白牛御車料也、先是行事藏人申事由、）出納引之、近江肥牛五頭、山城肥牛五頭等、小舍人（皆著衣冠也、件牛等並以所稱所召也、）引之、三廻後引出了、可遣齋院之由仰了、○中略予即退出參齋院、（經一條大路、）此間女房等乘車云々、天陰欲雨、于時申三點許歟、即寄御車、予等著御車、上達部殿上人多以參入、殿上人依仰所催也、乘御車了、予實基同乘見物、人々從者皆如法、但多有染色、不遑記、相從參河原院、皇后宮大夫、右衛門督等參入、殿上人又如之、御禊後予參內、于時戌剋許也、參御前申今日事、

〔經信卿記〕永保元年四月十三日庚午、向越中守公盛朝臣宅、依彼族子右兵衛尉師隆爲御禊前駈也、頭之退出、頭辨送書云、藏人頭爲禊齋辨渡一條大路之間、相具藏人所小舍人平、若具者可立辨侍上

應和元年四月十一日御記云、右大將藤原朝臣〇師尹令延光朝臣申云、齋院御禊前駈、申障之替差諸大夫等、而皆申障、請被差殿上侍臣等、略令仰安親佐理等、

同二年四月十九日丙午、齋院禊如常、巳刻召左大臣〇藤原實頼家幷山城近江等國牛、於東庭覽了遣院、午刻右大臣〇藤原顯忠參上奏官奏、未刻召藏人所陪從及騎馬等、覽了遣彼院也、

〔小右記〕天元五年四月廿一日壬午、傳聞亥時許、齋王被向河頭云々、今日上卿及參議不參齋院、仍以左中辨懷忠、爲上代、令行其事云々、事已希有、奇驚了、

寛弘二年四月五日壬午、參內、左府〇藤原道長定御禊前駈、〇中略申刻參齋院、實檢行具、令注損破、付左中辨奏聞、定出車童女騎馬事、如例、院有粉熟餚、黄昏罷出、　十四日辛卯、左中辨將來勘宜旨幷御禊點地、幷御出時刻、祭日御出時刻等勘文、卽答可奏狀了、但勘宜旨留矣、

〔法成寺攝政記〕寛弘五年四月九日己亥、著陣定禊日前駈、　十六日丙午、見禊上達部多被來、顯信能信等奉仕前駈、家馬十一匹、給人不申馬、人雖他所、皆是本我馬也、

〔日本紀略一十一條〕寛弘八年四月十五日戊午、賀茂齋王禊、仰外記云、一條院北至于堀河、例年禊祭供奉之人、皆以下馬、但今年不可然、皆可騎馬者、

〔小右記〕長和三年四月七日壬戌、中宮屬良明申云、九日行啓可奉車者、未刻許、參齋院著客殿、左中辨經通、史奉親朝臣候之、召院司令進出車出馬例文、以左中辨令書定文下給也、　九日甲子、今日大納言齊信定賀茂齋內親王禊前駈、　十二日丁卯、禊祭、宰相可仰新任宰相公信朝臣、亦辨可仰權左中辨重尹朝臣者、次第也宰相事、仰大外記敦頼朝臣、辨事便仰左中辨經通朝臣、令傳仰史奉親朝臣、　十五日庚午、御禊點地等文、辨于今不齋來、仍問遣左中辨經通許、報云、不知案內、仰遣史奉親朝臣畢、又云、欲承子細者、先取具件文書等、見行事上卿、次內覽左相府、〇藤原道長次經奏聞、當日愚雖不見、早可奏聞之由示遣畢、未始許、左中辨經通持來點地文等云、奏聞畢者、下愚未刻許參齋院、辨史奉親朝臣、外

御禊例

長次官八省輔改差、唯以詞仰外記、

賀茂齋内親王禊日前駈

左衛門佐藤原朝臣惟忠　右衛門權佐藤原朝臣章信　左兵衛佐藤原朝臣惟任　右兵衛佐藤原朝臣經輔　左衛門權大尉藤原朝臣爲親　右衛門權少尉源朝臣孝重　左兵衛權少尉藤原致任　右兵衛權少尉藤原頼業

次第使

右馬權助源朝臣頼職　左馬權少允橘季任

寛仁三年四月十日

〔二中歴 入儀式〕賀茂祭 御禊次第

行事兵士　禊物宮主　左右京職　衛府馬助　雜色所衆　長官御車　次官已下　別當宣旨

出車内侍　馬寮等車

説云、先行事辨外記史、各乘車次左右京職兵士、次御禊物、次宮主、次左右京進屬已下、次左右兵衛幷衛門尉、次左右兵衛佐衛門佐、次次第使馬助藏人所、雜色所衆次長官、次御車、執柄獻之次次官已下女別當幷宣旨出車、公卿獻之次第使馬允内侍車馬寮車、〇又見二拾芥抄一

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

天暦五年四月五日〇丙申九記云、外記正説云、左閤〇藤原實頼命云、有所勞不參、令參入上、申行御禊前駈事者云々、依宰相等不候、令右大辨有相奏、降雨故自不參上、令件辨奏、

〔日本紀略 四村上〕天徳二年四月十九日庚午、可有賀茂齋院禊、而依自明卒、明日可行禊、今日奏參議源自明朝臣去十七日卒由、今上兄、齋院〇旋子内親王弟也、廢朝三箇日也、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

御禊路頭式

庭、南上西面、故顯實卿仰北上之由、人不爲可、天覽之後仰云、東罷向、天覽畢如本西向、頭仰云、取御馬參來、前駈等還自瀧口、取御馬參入、故隆方朝臣云、往年先令奏下御馬可差泥障由、近代不然、一兩廻之後、頭仰云、罷乘、第一御馬到御前時仰之、下又准之、五六廻後、頭仰云、罷下、前駈等退出候所、即令出納給帖紙白色紙、前駈等退出、次覽牛、第一牛出納引之、自餘小舍人引之、兩三廻之後、頭仰可遣齋院之由、近代必不仰覽牛、齋王料間白遣之、出車料山城近江進之、

〔師遠年中行事 四月〕十日奏聞賀茂齋王禊同前駈事前十日差之、大臣定申、若有障、行齋院事上卿定日、○中略

中午日齋內親王禊事今朝覽齋王以下料事、前後次第使等、自志轉尉之人使、近代例不差、

〔師元年中行事 四月〕中午日齋內親王禊事御前装束如節會、不付魚袋、雜色所來爲前驅、

〔蓬萊抄 四月〕中午日齋內親王御禊事

當日早旦、於中殿前庭覽牛遣院、又覽所陪從同遣之、殿上人仕垣下座、行事藏人、一藏人役之

昨日書垣下押殿上、禊日四位二人、五位二○二一本爲一人、六位二人、祭後朝其數同之、但偸見頃年例、以大臣子姪當時花族、爲還立日垣下、以次之輩爲禊日垣下、仍近代偏有舉緣之人歟、往古以宿德人入之、非凡輩又參河原御所、取前駈馬祿物例也、猥以退出、尤以不穩便歟、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事　定禊日前駈上旬定

上卿著陣、外記置例文硯、上卿示參議令書、書畢付上卿、上卿乍居本座令奏聞、付殿上辨若藏人返給下外記、令催、佐彈經二分○二分謂志者差、尉經二分者不差、有申障輩者、以侍從馬助諸司長次官八省輔改差、據當時之例云々、延喜間諸衛佐尉有障、差二家頭內舍人云々、藏人所差陪從、衛府及文官有二人之時共差、文章生不差、給官後差之、修理唐鞍、替作額櫛事、殿上人飾馬事、十二日申糸所進楓蔓、口院行事上卿奏點地敷文、送齋院裝束、二具金銀泥、各五兩

〔江家次第六 四月〕御禊前駈定

上卿著座、外記二人置例文硯、一人取例文、置上卿前、一人取硯、置參議前、上卿示參議令書之、書畢付上卿、上卿乍居本座、殿上辨若藏人奏之、返給下外記令催之、有申障輩者、外記申上卿、上卿奏事由、以侍從馬助諸司

陰陽寮點禊地、
從内裏幷齋王御所、無其忌方、御在所幔際、木工寮四面曳繩、四角立榜、
山城可祗候
辨立座、被仰下畢、拒捍使令入日後、令催掃除守護、莫令置汚穢物、
山城國夫掃除
辨以下參本院、著客殿、　木工山城不參　本院置紙筆於折敷持來、作勘文一枚、付本院、一枚、辨本
祿
史白大褂一領　陰陽助白大褂一領　允屬史生官掌疋絹　使部十人麻布　寮直丁麻布
可點齋院御禊地日時
行事所勘之渡本院、　不覽上卿、　彼日本院設饗　北極幷四大路廣各十丈、町各卌丈、　壬生十丈　大宮二十丈　二洞院各十丈　京極十丈　小路十二各四丈、如二洞河東西邊各二丈、町十六各卌丈
件勘文辨申上、上令辨奏之、辨廳上　地下辨付藏人奏之、
清涼抄、別當辨付藏人奏之云云、但地下辨歟、
〔年中行事秘抄　四月〕中卯日齋王御禊點地事
辨史已下幷本院相引點之

御禊前宮中式

〔西宮記　四月〕賀茂祭事　定禊日前驅　上旬定○中略
禊日覽肥牛、二車、近江五、山城五、召大臣家、召陪從、御物忌日不召、先進參入、　次牽馬、覽御簾、祭日闕、御禊日歸立著垣下、如藏人所、
〔江家次第　四月六〕御禊日　賀茂祭前中儀也
雜色所衆等、白重、巡方帶、濃裝束、淺履也、
垂東廂御簾、以大床子上御座、敷第三間簾下、頭中將候簀子敷第二間、所御前等、入自瀧口戶列居東

御禊點地

師部司等候京東極路奉列、齋王已到幕底、臨流而禊、神祇官中臣捧麻、進授院司、院司轉取、付宣旨供之、訖返授院司、院司授中臣、中臣受之授宮主、宮主受之、捧持讀祓詞、訖辨官已下山城國郡司已上、辨官錄見參付院司賜祿各有差、（辨大夫史齋王饗前宜旨賜之、自餘齋院外院司賜之、）既而齋王廻駕、

〔延喜式（六齋院）〕尋常四月禊

右供神料並儀式、同入初齋院之禊儀、但无勅使、

〔延喜式（三十一宮內）〕凡賀茂齋內親王四月祓禊之日、丞錄各一人、史生一人、省掌一人、率供奉諸司參祓所、

〔九條年中行事（四月）〕齋內親王禊事（祭前午日行之、有未日之例、）

先禊日十許日、定奏前驅次第使等、近代例不差自志轉任之尉等、

〔小野宮年中行事（四月）〕中午日齋院禊事（有未日之例）

前二日、齋院別當辨率陰陽寮及供奉諸司等、到河邊點定其地、付藏人奏之、當日早旦、召王卿家及山城近江等國牛、給彼院、先是被召仰件牛、但山城近江給所牒、祭日同用之、又御覽藏人所陪從、其後遣彼院、

〔北山抄（一四月）〕中申酉日賀茂祭事

前十許日、差奏禊日、（午日修禊、有未日例、）前驅次第使等、（參議書之）不差自志轉尉之者、（主佐不經）一上、若有障、以次人差奏、（加奏一上有障之由）令藏人奏之、返給給外記、

〔江家次第（六四月）〕齋院御禊點地（齋院齋王卜定之後、將入初齋院、先臨川祓禊、初齋院卜定宮城內便所、[illegible]齋王於初齋院三年齋畢、其後四月始將參神社、卜吉日臨流祓禊、就選野宮、[illegible]酉日賀茂祭、齋王參上、下神社行祭、御禊中午日、點地中卯日、）

官史率官掌史生等、向川原、催大藏主殿掃部等、立幄曳幔敷座、山城拒捍使檢非違使著冠參候、陰陽寮頭助允屬、木工寮官人等參會、辨幷本院司等著座

彼所也、仍有此定、四月十七日、有賀茂祭延引大祓、

〔年中行事秘抄 四月〕下酉日賀茂祭例

天暦四年四月四日辛未、仰云、今年賀茂祭當今月十七日、而内裏有穢、來十八日可滿、已齋内也、先例齋内穢時從停止、又有御卜、停止歟、以下申酉、令祭吉凶事也、五日壬申、口鴨下社禰宜是秀、上社禰宜祝部春里仰云、今年祭當十七八日、而内裏依有穢停彼日、但下申酉當廿九卅日可被供奉、但神祇官卜云、被延引可宜、若臨彼期、有不淨氣歟、上卿宣、奉勅於明神社、各致誠可祈申者、件祭有穢從停止、而今有朝議、以廿九卅日可祭云々、廿七日甲午賀茂御禊也、卅日丁酉鴨祭也、天德四年四月廿八日鴨祭子細見御記、○又見北山抄

〔儀式 一〕賀茂祭儀

齋王御禊

前祭擬禊、辨官仰陰陽寮、預擇吉日、先禊二日、率齋院司、陰陽寮、及供奉諸司、到鴨川、占定其地、奏之、前一日、所司臨川、供張如常、其日辨大夫史各一人、史生二人、官掌一人、率供奉諸司、先就禊所行事、左右京職率坊令兵士等迎候、時刻齋王御車赴向、其前駈次第也、京職進屬史生各一人、坊令二人、兵士十人、左京在道左、右京在道右、下諸衞亦同、陪從左右六位二人、五位二人、門部各二人、兵衞各二人、近衞各二人、並著緋色、次齋院長官、次齋王御車、從左右各十人、並著褐衣、走孺左右各二人、近在齋王車後、次執物左右各四人、一人大翳、一人大笠、一人捧寶、一人行障、並著退紅染衣、其後陣次第也、衞門火長左右各八人、其内齋院司次官以下相分左右、次官主典史生各一人、陪從三人在左、判官主典史生各一人、陪從三人在右、韓櫃二荷在其間、一荷清器、一荷盛器、以仕丁爲擔夫、並著紺衣、女別當車次之、男從左右各九人、並著褐衣、女從近車左右各二人、宣旨車次之、男從左右各八人、並著褐衣、女從近車各二人、供膳韓櫃三荷次之、膳部左右各三人、著纐纈染衣、雜器韓櫃二荷、衣服韓櫃二荷次之、舍人左右各一人、祿物韓櫃四荷次之、荷領左右各三人、並著退紅染衣、供已下以衞士爲擔丁、並著纈染衣、侍者車二兩次之、兩別男從左右各四人、女從近車左右各二人、藏人車二兩次之、兩別男從左右各三人、女從近車左右各二人、采女車次之、男從左右各三人、女從近車左右各二人、侍者以下男從並著褐衣、采女代車次之、男女從同女孺、女孺車次之、男從左右各二人、女從近車左右各一人、宮人車次之、男女從同女孺、先是山城國司率史生博士醫

祭日

傍有幄屋、是存齋宮遙拜之儀、〇中略社家氏人、各懸葵桂於衣領、先詣斯宮、奉裂幣面拜之、然後奉拜御生所宮、故此神事稱葵祭、

〔賀茂皇大神宮記〕年ごとの四月の祭は、〇中略中の酉日御祭禮、〇中略北祭といふ是也、

〔九條年中行事 四月〕中申日賀茂祭事、中日有祭、酉日解齋、雖停祭猶解齋例、延長八年、

〔師遠年中行事 四月〕中酉日賀茂祭事、酉日解齋、當日使立、若朔日當酉日者、下酉行之、依用國祭後酉也、〇又見師元年中行事、師光年中行事、

〔年中行事秘抄 四月〕中酉日賀茂祭事

有三酉時用中酉例

天慶二　安和二　長保五　治暦二　延久元　寬治四

御記云、延長二年四、十七、〇乙酉祭也、出御南殿覽使等、

四月朔當酉時、禊祭用下午例、

天慶九、四、廿二、禊、廿五〇乙酉祭、　天元二、四、廿二、禊、廿五〇癸酉祭、

長暦三、四、廿二、禊、廿五〇癸酉祭、　長久元、四、廿二、禊、廿五〇己酉祭、

貞元四、〇四恐元誤四、廿二、禊、廿五〇辛酉祭、　延久元、四、廿二、禊、廿五〇辛酉祭、

康和元、四、廿二、禊、廿五〇丁酉祭、　康和五、四、廿二、禊、廿五〇癸酉祭、

大治元、四、廿二、禊、廿五〇辛酉祭、　大治四、四、廿二、禊、廿五〇癸酉祭、

〔簾中抄 上〕賀茂祭

年中行事曰、若當四月朔酉、下酉行之、依用國祭後酉也、內藏寮近代用上酉日云云、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

天暦四年三月廿九日、小一條記云、左大臣〇藤原實賴以下、於陣頭議定賀茂祭事、外記勘申云、先例无、以下申酉日行此祭例、雖然准他祭、下申酉日可行之由、諸卿定申、仍從其定、進物所膳部觸穢、去廿日參

〔拾芥抄 下本 神事〕賀茂祭爲中祀、諸司齋之、〈御阿禮、限賀茂一社云々、〉

〔倭訓栞 前編 二十九〕まつる　歌集に、まつりとのみいへるは、賀茂の祭をいふ也、又まつりの日ともいへり、あふひ祭ともいふ是也、

〔倭訓栞 前編 三十 美〕みあれ　賀茂の祭にいへり、御生とも、御形とも見え、或は御靈をもよめり、

〔紀貫之集 四〕車にのれる人賀茂にまうづ

人もみなかつらかざしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり

〔源氏物語 三十三 藤の裏葉〕みあれにまうで給ふとて、れいのおんかた〴〵、いざなひきこえ給、

〔古今作者部類 庶女〕御形宣旨　新二、勅一、玉二、

〔延喜式 十五 内藏〕賀茂祭

阿禮料、五色帛各六匹、〈下社二匹、上社四匹、〉盛阿禮料宮八合、〈下社三合、上社五合、並方一尺六寸、〉

〔延喜式 四十九 兵庫〕凡大射建羅幡者、〈中略〉阿禮幡十二旒、各著柄、〈左第一紫色、次深緑、次緋、次緑、次黄、次淺緑、右方准此、〉

○按ズルニ、ミアレノアレヲ、舊說ニ、產出ノ義ト爲シ、別雷神ノ降誕ノ地ナル故ニ、此名アリトス、然レドモ此名ハ古ヨリ社ヲ指スニアラズシテ、祭ヲ云フガ如シ、因テ意フニ、アレハ鮮明ノ義ニシテ、古事記雄略卷、及萬葉集ニ、鮮明ノ衣ヲアリキヌト云ヘル、アリト同言ナルニヤ、ソハ此祭ニ、五色ノ帛ヲ以テ、阿禮ノ料トスルコト內藏式ニ見エ、又大射ニ、六色ノ幡ヲ稱シテ、阿禮幡ト稱スルコト、儀式延喜式等ノ書ニ見エタレバナリ、朝野群載ニ、此祭ノ宣命ヲ載セテ、阿禮乎止己、阿禮乎止女ヲ進ムトアリ、亦鮮明ナル裝ヲ爲シタル男女ナルベシ、且ツ後世マデモ、此祭ノ華美ヲ競フ狀ヲモ思フベシ、

〔雍州府志 二 神社〕上賀茂社　山城州之一宮也、白鳳年中大己貴命來現下賀茂、〈中略〉故兩社世稱下上賀茂、然則平安城遷都以前之神社也、自是每年四月中酉日、於御生所地、以青葉構假宮、擬來現之時、

給ス、此日警固ノ陣ヲ解ク、

此祭ハ、奉幣使ノ行列甚盛ニシテ、供奉ノ職員ハ、皆車服ヲ裝飾シ、互ニ華麗ヲ以テ事ト爲シ、實ニ當時諸祭中、第一ノ壯觀タレバ、上ハ上皇女院ヨリ、下ハ田夫野叟ニ至ルマデ、先ヲ爭ヒテ往テ覽シカバ、棧敷ハ處々ニ構ヘラレ、物見車ハ路上ニ塡塞シテ、容易ニ往來スルコトヲ得ザル狀況ニテ、之ガ爲ニ、僕從ノ爭鬪ヲ引キ起シヽコトモ毎ニアリキ、朝廷ニテハ、特ニ令ヲ發シテ、衣服ノ奢靡ヲ禁ジ、爭鬪ヲ戒メシコトモ屢アリシカド、終ニ遏止スルコト能ハザリシナリ、御禊ハ其盛ナルコト、祭日ノ比ニハアラザレドモ、集觀スル者、亦多カリシナリ、齋王ノ廢セラレシ後ト雖モ、使以下列ヲ整ヘテ、大路ヲ渡ルコトハ、猶ホ舊ノ如クナリシガ、應仁ノ大亂ヲ經テ後ハ、祭儀モ之ガ爲ニ中絶セリ、元祿年間、再興セラレシト雖モ、往時ノ盛ナルニハ比スベクモアラズ、

祭日、葵ノ葉ヲ供奉職員ノ衣冠ニ付シ、又社前ヲ飾リ、車簾ニ懸クル等ノ事アルハ、特ニ此祭ノ古例ニシテ、後世ニ至ルマデ、曾テ廢セラレズ、是レ世ニ此祭ヲ、一ニ葵祭トモ云フ所以ナリ、而シテ元祿再興ノ後ニハ、使者ヲ以テ、江戸ノ將軍ニ之ヲ獻ズルノ例ヲモ生ゼリ、

國祭ハ、山城國司檢察シテ事ヲ行フモノニテ、毎年四月中ノ申ノ日ヲ以テ當日トス、抑、賀茂祭ハ、大寶ノ令ニ見エズ、嵯峨天皇ノ朝ニ、始テ中祀ニ列シタルモノナレド、國祭ハ、文武天皇ノ朝ノ初ニ、既ニ國史ニ見エタレバ、イハユル賀茂祭ヨリ前ニ起リシコト知ルベシ、或ハ云フ、此祭ハ欽明天皇ノ朝ニ始マルト、

御蔭祭ハ、後世ニ起リシモノニテ、四月中ノ午ノ日ニ之ヲ行フ、其儀社務以下列ヲ成シ、下賀茂ノ神輿ニ供奉シ、其神ノ來現セシト傳フル所ノ、愛宕郡高野村御蔭神社ニ參向スルヲ云フ、

古事類苑

神祇部六十二

賀茂神社二

賀茂祭

賀茂祭ハ、四月中酉ノ日(二酉ノ月ハ下酉ノ日)下上兩社ニテ之ヲ行フ、或ハ之ヲミアレト云ヒ、或ハ男山八幡宮ノ祭ニ對シテ北祭ト云ヒ、又單ニ祭トノミ云フハ、其式ノ盛大ナルヲ以テ、總稱ヲ以テ別稱トスルナリ、

祭前午日、若クハ未日ヲトシテ、齋王ノ御禊アリ、御禊ヨリ前ニ、宮中ニ於テ前驅ノ人ヲ定メ、又數日ニシテ、御禊ノ地ヲ點定シ、又數日ノ後ニ至リ、始テ禊ヲ修ム、此日天皇南殿ニ御シ、齋王前驅ノ馬、及ビ其乘車ニ用ヰル牛ヲ覽給フ、既ニシテ齋王ハ齋院ヨリ車ニ駕シ、前驅後陣ヲ從ヘ、鴨ノ河原ニ向ヒ、流ニ臨ミテ御禊アリ、

御禊ノ後、六衛府ヲシテ戒嚴セシム、是ヲ警固ト云フ、此日天皇、祭ニ供スル所ノ、女騎料ノ馬ヲ覽給フ、

祭日ニハ、朝廷ヨリ奉幣使以下ヲ發シ、齋王ニ供奉セシム、此日天皇其乘馬等ヲ覽給フ、齋王ハ齋院ヨリ出デヽ、先ヅ下社ニ參向シ、次ニ上社ニ向フ、其式ハ兩社同一ニシテ、齋王先ヅ輿ヲ下リ、社頭ノ幄ニ就キ、淸服ヲ著シ更ニ腰輿ニ駕シ、社ニ近ヅキテ步行シ、社前ノ殿ニ就キ給フ、使モ亦社ニ入リテ、座ニ就キ、壽詞奉幣アリ、

祭ノ翌日、齋王神館ヲ發シテ、齋院ニ還リ給フ、宮中ニテハ、使等ヲ御前ニ召シ、宴ヲ賜ヒ祿ヲ

木綿疊手向乃山乎、今日超而、何野邊爾、廬將爲子等、

〔新古今和歌集十九神祇〕賀茂にまゐりて　周防内侍

年をへてうきかげをのみみたらしのかはる世もなき身をいかにせん

〔千載和歌集二十神祇〕賀茂社の歌合とて、人々すゝめて讀侍ける時、述懷の歌によめる、　賀茂重保

君をいのる願を空にみて給へわけいかづちの神ならば神

雜載

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授出雲井於神、從五位上、

〔山城名勝志 十一愛宕郡上〕奈。良。社。（坐澤田社西南）

〔延喜式 九神名〕山城國愛宕郡鴨。岡。本。神。社。

〔山城名勝志 十一愛宕郡上〕片。岡。

社（片岡、土地名也、仍爲社號、亦名鵜岳、本宮樓門外川東南、）　片岡神（按片岡社片岡神同神歟）

〔日本紀略 十三後一條〕寛仁元年十二月一日乙丑、詔授貴布禰、片。岡。河。合。神。等正二位、依行幸之賞也、

〔山城名勝志 十一愛宕郡上〕半木宮（坐賀茂下上社間、下上各隔八丁、故號中賀茂、或曰、當社者浮田三座之一座也、一年洪水、社流留此地、故號流木宮云々、）

○按ズルニ、宇治拾遺物語ニ、藤原實重ガ賀茂ニ詣デケル時、此社ノ所ヲ過ギシ由見ユ、全文本社ノ下ニ引ケリ、

〔雍州府志 二神社〕大宮　前賀茂條下所謂、大宮本社也、凡大賀茂社家氏人之子孫、加首服日、先詣此社、凡勤神職人、天兒屋根命之苗裔、中臣之餘流也、故先詣此社、世誤爲大賀茂土人之氏神、今洛西大宮通、自此宮前通南之街路也、故稱大宮通、

〔吉記〕承安四年九月四日戊子、自今日於賀茂下上社、限三ケ夜、被行御神樂、藏人佐光雅參向奉行之、

〔百練抄 六崇德〕大治二年十一月六日、自今日修鴨河堤、鴨御祖社可有水害之故也、

〔西行物語 下〕四國のかたへ修業せんとおもひたつに、年ごろつかうまつりし、賀茂の宮にも御いとま申さんとて、御幣なんど用意して、仁安二年十月十日頃の事なるに、御前に近づかん事も、此たびばかりなどおもひて、内へも參らぬ身なりければ、なみだをながし、かくなん、

かしこまるしでになみだのかゝるかな又いつかはとおもふあはれに（○又見山家集）

〔萬葉集 六雜〕夏四月、（○天平九年）大伴坂上郎女、奉拜賀茂神社之時、便超相坂山、望見近江海、而晩頭還來作歌、

〔釋日本紀 九述義〕山城國風土記曰、可茂社、稱可茂者、日向曾之峯天降坐神、賀茂建角身命也、神倭石余比古之御前立坐、而宿坐大倭葛木山之峯、自彼漸遷至山代國岡田之賀茂、隨山代河下坐葛野河與賀茂河所會至坐、迴見賀茂川而言、雖狹小然石川淸川在、仍名曰石川瀨見小川、自彼川上坐、定坐久。我國之北山基、從爾時名曰賀茂也、

〔瀨見小川〕久我の國と云へる地名、他書どもに見およばず、釋日本紀に、賀茂建角身命は、大和國八咫烏神社、山城國愛宕郡久我神社、三井神社、此三井神社、本名三身神社ともなせり、下に注すべし、以上鎭座三箇所とあり、いはゆる久我神社は、當初建角身命顯身にて、久我國の北の山基に在住給ひし、御殿舍の跡所にも社を建て、舊地名をもて、久我神社と申して、祀りしなるべし、本座は下賀茂の御祖神社に鎭坐ませり、其由は下に注すべし、神名帳に愛宕郡久我神社あり、卜部兼倶朝臣の本の書入に、建角身命也とあり、三代實錄に、貞觀元年正月廿七日、授山城國正六位上久我神從五位下、此神社今詳ならずとぞ、今御祖神社所謂下賀茂社の北に、久我神社とて攝社あり、本社のおところへ給へるを、徙し來て祀れるにやあらむ、さて久我國といへるは、古の大名の地なりけるに、賀茂といふ神地の出來はたやごとなき其大神等の鎭坐せる御社の、二所まで立榮えませるにあはせて、其地名の漸々に廣ごりて、久我といふ名は廢れゆきて、後世に聞えずなりたるなるべし、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授正六位上久我神從五位下、

〔山城名勝志 十一上愛宕郡〕一言神坐本宮瑞籬内、自一言迄七言、都合七社、祭大己貴命七名云々、

〔續古今和歌集 七神祇〕題しらず　賀茂氏久
君を祈るたゞひとことの神のみや二心なきほどは知るらん

〔延喜式 九神名〕山城國愛宕郡出雲井於神社大、月次、相嘗、新嘗、

〔山城名勝志 十一上愛宕郡〕出雲井於神社坐御祖社東、俗井御上、

〔徒然草上〕賀茂の岩本橋本は、業平實方なり、人の常にいひまがへ侍れば、一年參りたりしに、老たる宮司の過しをよびとゞめて尋ね侍りしに、實方は、御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本や猶水のちかければと覺え侍る、吉水和尚、月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにありはら、とよみ給けるは、岩本のやしろとこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なか／＼御存知なども こそさぶらはめと、いとうや／＼しくいひたりしこそいみじくおぼえしか、

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕橋。本。社。（在土屋四神宮、有流水架石橋、故爲社號、）

〔二十二社註式〕賀茂

橋本社者　英明中將（宇多御孫、齊世親王御子也、御母菅丞相御女、）

〔賀茂註進雜記中行幸官幣御幸〕伊勢大輔といへる官女、一生の内に秀歌よませてたべと、賀茂へいのりをかけ、橋本社のもとながるゝ水を硯水にして、千首をよみて奉りければ、千首大輔と呼れ、世の人の口にある秀歌よみけるとなり、

〔延喜式神名九〕山城國愛宕郡三。井。神。社。（名神大、月次新嘗、）

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕三井社（元在蓼倉里、今在河合社南方、三座北向、）

〔延喜式神名帳頭註〕山城愛宕郡　三井　三身社也、本緣見風土記、賀茂建角身命也、又曰蓼倉鄕三身社、稱三身者、賀茂建角身命、丹波伊可古夜日女、玉依姫也、三神身坐、故名三身社、今漸云三井、

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕比。良。木。社。（在本社西南、下社地主神、案津島等云々、御經所北有拜殿、當社下社社家井在地人氏神也、古者坐一乘寺村西比良木森、）

〔帝王編年記十九鳥羽〕元永二年十一月一日、戊刻鴨御祖社寶殿已下燒亡、（失火）御體先奉渡御讀經所、其後奉移地主明神神殿、（號比良木明神、）

〔延喜式神名九〕山城國愛宕郡久。我。神。社。

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕久我社（在本宮北、）

川合神

作神社立始、又祭始之由無所見、但彼社祝申云、去天安二年八月七日、預四度官幣、又去寛平五年九月十五日、預相嘗祭、自爾以降、社祝奉仕者、

川合奉幣事

若朔日當酉日者、中酉行之、依國忌使酉也、

〔文德實錄十〕天安二年八月丁未、在山城國從五位下鴨川合神、預名神、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授從五位下鴨川合神從五位上、

〔三代實錄清和六〕貞觀四年十一月廿五日己丑、授山城國從五位上鴨川合坐小社宅神正五位下、

〔中右記〕天永三年十月廿九日、戊刻當丑寅方有燒亡、下人走來云、賀茂下御社之川合社廻廊等燒了者、十一月一日甲寅、晚頭藏人辨來云、夜前川合社廻廊中門等燒亡、寶前一宇、雖免炎上、御體早奉渡貴布禰社中了、但下社民人等皆穢了、又歸參下御社、奉每日御供了、仍下御社穢了、

〔百練抄八高倉〕安元元年十月廿六日、强盜亂入河合社之内、廊壁射立矢、小鳥明神前血落、去四日入供僧房、及刃傷、重又有此事、

〔延喜式神名九〕山城國愛宕郡太田神社

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕太田社(坐本宮東南五六町許、山讀、祭十一月十日、)

〔百練抄十六後深草〕建長四年十一月八日戊子、賀茂太田社壇鹿斃、(件鹿氏人於太田山奥射之、鹿雖蒙疵、走來社傍斃、)事、被問外記官、無先規之由申之、被尋法家之處、可爲五箇日穢之由申之、仍朝夕御供爲鳥居外供之、

〔雍州府志二神社〕上賀茂社　岩本社、在片岡社與澤田社之間、蓋岩上構神籬、故有此號乎、橋本在二鳥居北土屋西、神前有流水、架石橋故名之、神祇拾遺曰、住吉玉津島和歌之兩神也、業平實方常詣此二社、祈和歌之秀逸、世人稱二人、爲兩神化現、

若宮本宮東傍　新宮若宮東　土師(ハジ)尾社御札屋前　藤尾社新宮南　鎮守社本宮東片岡山鼻　太田社自本宮五六町東也　白髭社太田社辰巳　福德社　鎮守社共太田社南、神宮寺南、石橋ノ南ニ有、　川尾社回廊ノ丑寅、玉垣ノソト、　片岡社　諏訪社共本宮樓門外、川東南側有、但片岡ハ東、スハ、南、橋殿ノツギナリ、　澤田社諏訪社南　岩本社澤田南橋本　奈良社澤田南有ニ島居　梶田社奈良社南川東也　流木(ナガレキ)社梶田社ヨリ辰巳方　杉尾社本宮傍、未申、西足門内、　棚尾社西足門段橋右方小社　橋本社樓門回廊西、石橋北傍、　山森三間社本宮西方　氏神社一鳥居外未申

下賀茂　攝社

比良木社、當所地主神也、　河合社、式稱小社宅神是也、○中略　小烏社、河合之東ニアリ、　三井社、或三身社トモ、三座有、　久我社　未刀(ミト)社、共本宮ノ北ニ有、　蠱(オシテ)璽社

〔雍州府志二神社〕上賀茂社　末。社。有數十座、其內太田、白髭、新宮、山尾、藤尾、白大夫、福德社、若宮、奈良社、土師尾、川尾、片岡、諏訪、椙尾、澤田、梶田等、尊崇勝他末社、

〔延喜式九神名〕山城國愛宕郡、鴨川合坐小社宅神社、名神大、月次相嘗新嘗、

〔山城名勝志十一上愛宕郡〕河合社家説云、河合玉依姫也、上社片岡同體云々、

〔雍州府志二神社〕河合社　或稱小社宅神也、上賀茂社司、詣下賀茂社日、先拜斯社、而後拜本社、是爲恒例、

〔本朝月令四月〕中酉賀茂祭事

奉河合神幣帛事

右件神社、祭始之由無所見、但依天安二年八月七日太政官符、預大社、又去延喜元年十二月廿八日太政官符偁、得神祇官解偁云々、件河合神、是御祖別雷兩神苗裔之神也、加之此神靈驗顯然、然貴賤歸仰、奉大神幣帛之時、先奉此神云々者、左大臣宣、奉勅依請者、預相嘗祭云々者、

〔年中行事秘抄四月上〕中酉日賀茂祭事

了、

鴨社條々

一社務職事、依時前官與權官、相替可被任之歟、年限二箇年歟、三箇年歟、可被定仰事、(訴傍人歟、於所望之輩者、雖爲理運不可被任歟、)

一社務職任中、爲自由神事日供、及他日他月者、即時一社一同可致注進、其時被改職、可被召放私領、於無分領之輩者、雖爲子孫、無左右不可被任件職事、

一神事用脚、依亂中令減少、或半分或三分一下行之上者、式月祭禮延引他月、式日神事及翌日之條不可然、堅可遂行、難叶者衆日可辭職、猶非分之違亂出來者、非制限事、

中嗣人々

勸修寺大納言　廣橋大納言　親長

如此令清書見兩卿了、無相違云々、

奏聞、仰云、第一度前官權官相替任補事、被定置之條不可然、先權官可任事也、依時前官之輩可被任補之間、自衆不可被定、

式月式日神事延引事者、云亂中云當時、可有事也、其時每々改替、不可有詮、猶可思案、次指置傳奏、令內奏之條不可然、可書載云々、

予申云、第一仰勿論、式月式日神事之事、堅無法式者、彌可有自由之儀、自然無殊儀者、無御改替之條可爲善政、次以內奏申入事、予所存也、雖然予申出條似無而仰畏存候、何樣兩卿可加談合之由言上了、

〔梵舜日記〕寛永五年三月四日、上賀茂氏人之權祝大藏來、

〔諸社一覽 三山城〕賀茂　攝社

同祝從五位下同成氏（讓藤原定政）

下社司五人

禰宜正五位下鴨縣主惟季（自敍四位）　　祝從五位下同伊房（讓息男伊俊）

權祝從五位下同職通（讓藤實俊）　　川合禰宜從五位下同經貞

同祝從五位下同惟輔（讓伴季繼）

已上十四人、倍加一階、

下社權禰宜從五位下季長、依重服漏勸賞、○中略季長可有勸賞由、追有宣旨者、

〔太平記 十五〕賀茂神主改補事

大凶一元ニ歸シテ、萬機ノ政ヲ新タニセラレシカバ、愁ヲ含ミ喜ヲ懷ク人多カリケリ、中ニモ賀茂ノ社ノ神主職ハ、神職ノ中ノ重職トシテ、恩補次第アル事ナレバ、咎無シテハ、改動ノ沙汰モ難有事ナルヲ、今度尊氏卿、貞久ヲ改テ、基久ニ被補任、被レ眉ヲ開ク事僅ニ二十日ヲ不過天下又反覆セシカバ、公家ノ御沙汰トシテ、貞久ニ被返付、

〔親長卿記〕文明六年六月廿九日、鴨一社申狀到來、祐躬祐尙相論事也、先日尋仰一社了、各捧申狀、廿四日今日以連署可申之由被仰出了、各々所存無謂之由仰之間、少々加連署、但不一具云々、○中略仰云、此事可爲如何哉、勸修寺大納言、廣橋大納言、予等可申所存云々、申云、○中略所詮凡慮難計事、於神前以御鬮子可被決歟、殊舊院○後花園之御時、就御不審事被取御鬮子了、可爲如何哉云々、兩三卿所存同前、卽奏聞、仰云、叡慮ニハ兩人（祐躬 祐尙）科條兩端也、只權官之者可被新補云々如何、猶可取鬮子歟、重可尋之、　七月二日、今度兩三卿就意見、可被取御鬮子之分、叡慮治定之處、按察一身張行事、若有趣者歟、可召進、祐尙無誤之由誰人申哉、慥可申之由被仰前內府云々、　十八日、先日被仰於鴨社新補事、招勸修寺大納言談之處、廣橋大納言、參仕同加談合、予所存之分命之、加之令依兩亞相命令除加

造塔

〔帝王編年記〈十九鳥羽〉〕永久四年六月廿日壬午、申剋雷雨、此日賀茂別雷社御塔供養也、件塔但馬守家保朝臣、崇勅命所造立也、〈○中略〉以僧正覺助爲御導師、請衆二十人云々、御願文式部大輔在良朝臣草之、今朝鎮壇事有之、

〔百錬抄〈五鳥羽〉〕永久四年六月廿日、公家供養賀茂上社多寶塔、今上懷孕之時御願也、〈但馬守家保造立之〉

〔中右記〕元永三年〈○保安元年〉正月八日己酉、今日公家依可被立塔於賀茂下御社、差遣藏人辨實光、有木作始事云々、被下日時、但未被定所、又不被仰下上卿、只從院被進材木者、

〔百錬抄〈六崇德〉〕大治三年七月廿日、太上天皇〈○鳥羽〉供養鳴御祖社東御塔、〈御在位之時、播磨守家保造進之〉

神領

〔延喜式〈十八式部〉〕凡國司五位已上、就朝集使入京者、皆聽預節會、〈○中略〉其賀茂兩社祝禰宜、若帶五位者亦聽、

〔廿二社本緣〕賀茂事

上乃祠乃官〈和〉、賀茂乃縣乃主、下乃〈和〉鴨乃縣乃主卜云、本〈和〉同祖也、昔神武天皇東征乃時、山中嶮絕〈仁〉天之路〈乎〉失比給〈志利〉、此時神代〈○代下、二十一社記有神字〉魂命乃孫鴨建津命、武津第〈登毛○第、二十一社記作見字〉云宇、化〈シ〉天大鳥〈登奈利〉翔〈里〉飛〈天〉良賀〈乎〉奉〈留〉導天中州〈仁〉達〈シ〉、天皇褒〈天〉其功〈乎〉厚〈ク〉賞給宇、是〈乎〉天乃入咫烏〈卜〉號〈ス〉、彼乃苗裔此社〈爾〉奉〈留〉仕由來〈和〉無〈仁〉所見阿羅〈寸〉、此乃御事自〈利〉昔殊〈爾〉被尊崇、

〔中右記〕嘉保二年四月十五日庚辰、今日賀茂行幸也、〈○中略〉上下社司勸賞、

上社司九人

神主從五位下賀茂縣主成繼〈讓外甥藤原政季〉　禰宜從五位下同安成〈讓外甥源保〉

祝從五位下同成季〈讓舅父藤原行季〉　權禰宜從五位下同重助〈讓源一本作漆部國守〉

權祝從五位下同成長〈讓舅父惟宗親傳〉　片岡禰宜從五位下同成定〈讓外舅紀貴定〉

同祝從五位下同成賴〈讓藤原爲包〉　貴布禰禰宜從五位下同成忠〈讓平正經〉

直也、庭下有穢、我欲責之、而師之所爲也、我不能如何、便召神人、穿去其地方五尺餘、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年五月辛卯、始自今日限三ヶ日、爲賀茂大神轉讀金剛般若經一千卷、

〔三代實錄 二十三清和〕貞觀十五年五月九日壬申、遣使於賀茂神社奉幣、申謝雨雹之咎徵、告文曰、始自今月二十日天、一萬卷乃金剛般若經令奉讀須、止仍參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人乎差使天云々、

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕永承七年四月七日、僧綱以下、於賀茂社、爲攘疾疫、奉供養大品般若經四部、依夢想告也、

〔左經記〕寛仁四年八月十八日丁酉、入道殿○藤原道長令詣賀茂給、上達部八人、僧綱五人、凡僧十一人、四位九人、五位十二人、上達部僧綱井日勘遷敎車、自餘馬云々、巳刻著下社給、先奉幣、次被供養仁王經百部、請十口僧、慶口實誓、懷壽、定基、日助、遷敎、敎圓、良範、圓曉、行香畢被參上社、事同前、但有饗饌、又事了、十口請僧給布施、今日供奉上達部已下皆帶劒、採御之、又上下社司在御供之、不及秉燭還御御寺云々、

〔中右記〕天仁元年六月廿三日壬寅、今朝公家、於賀茂下御社、奉供養金泥法華經一部、同仁王經一部云々、上卿源中納言國綱行事左少辨雅兼、早旦於仗座被定申日時僧名、十一日以權少僧都公伊爲御導師是近日件怪異頻以言上、被行御卜之處、多以公家御愼也、仍被供養也、但公家於神社被供養經事、八幡宮外殊不見也、後聞於下御社舞殿有此事、有御誦經、使内藏頭、御誦經物、分給請僧等也、僧名今朝左少辨書之、供參議不參也、左少將顯國朝臣仰度者井御願趣云々、

〔百練抄 八高倉〕治承三年四月廿三日、上皇○後白河限十ヶ日御參籠賀茂社、令轉讀千部經給、又被行御八講、

〔吉記〕承安四年九月五日己丑、昏黑參吉田、次賀茂有心經供養、去春以後有每月之勤、

○按ズルニ、本社ニハ、此他恒例法會トシテ樓會アリ、事ハ釋敎部法會篇ニ詳ナリ、

神異

後室一期知行せらるべきよし仰られけるに、過分の事なり、辭退申べきにこそと思はれけれど、かの夢の御告に任て、御請申され、年久しく主のはからひなりしより、いつしか身の威勢、龍に雲のゑたがふごとく、天が下のはからひをも、心にまかせられける事、偏に神恩なりしと云々、

〔古今著聞集神祇一〕仁安元年六月、仁和寺の邊なりける女の夢に、天下の政不法なるによりて、賀茂の大明神、日本國を捨て、他所へわたらせ給べきよし見てけり、同七月上旬、祝久繼が夢にも、同體に見てけり、是によりて泰親時晴を召て占はせければ、實夢のよし各申けり、〇又見百錬抄

〔續古事談一王道后宮〕堀川院、皇子オソクイデキ給ケレバ、白川院ナゲキ給テ、鳥羽院ノ御母后ハ入内アリケリ、ハラミ給テ後、カノ御母坊門尼上、賀茂ニコモリテ、男子ヲ祈ケル夢ニ、大明神キヌノソデニキサセ給テ、モノ仰セラレケリ、又男子ヲウムベシ、又其マキナル物ヲトレトミテ、オドロキテ、マキヲサグリタルニ、ツクリタル籠アリケリ、ソレヲトリテツタハリテ、鳥羽院ニタテマツラレニケリ、カノ大明神居給タリケルキヌヲバ、御正體トシテ、四條坊門ノ別宮ヲバ、カノ尼上作レルナリ、女御ハラミ給ケル時、女一人參リテ、女房ニ申テ云ク、コノハラミ給ヘルハ王子也、メデタクオハシマスベシ、右ノ御尻ニアザオハシマスベシト云ケレバ、女房、東宮大夫公實ニツゲ申タリケレバ、イデアハントセラレケルホドニ、イヅチトモナク失ニケリ、生給テマコトニ右ノ御尻ニアザオハシマシケリ、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月丁亥、是日日赤無光、大井比叡小野栗栖野等山共燒、烟灰四滿京中、晝昏、上以爲所定山陵地近賀茂神、疑是神社致災火乎、卽決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、卽自禱祈、火災立滅、

〔元亨釋書十七感進〕釋淨藏、洛城人、諫議大夫殿中監善淸行之第八子也、〇中略藏夏橫川如法堂、一夕旋庭、俄有異人自西方來、藏問誰、答曰、我是賀茂明神也、昔慈覺大師、令京畿二百餘神番護此經、今日我之

將にてましく\〱けるが、大將を辭し申させ給ふ事有けり、ときに、德大寺の大納言じつていの卿、其仁にあひあたり給ふ、〇中略新大納言なりちかの卿もひらに申さる、此大納言は、院〇後白河の御きしよくよかりければ、樣々いのりを始らる、〇中略ひるは人めのしげゝれば、よなく\〱ほかうにて、中のみかどからす丸の宿所より、かもの上の社へ、七夜つゞけて參られけり、七夜にまんずる夜、宿所に下かうして、くるしさに少まどろみたりける夢に、かもの上の社へ、參りたると思しくて、御ほうでんの御戸をひらき、ゆゝしうけだかげなる御こゑにて、

　櫻花かもの川風うらむなよ散をばえこそとゞめざりけれ、大納言、是に猶おそれもいたされず、かもの上の社の御寶殿の御うしろなる、杉のほらにだん、を立、あるひじりをこめて、だきにの法を、百日行はせられけるに、ある時俄に空かきくもり、いかづちおびたゞしうなつて、かの大杉に落かゝり、らい火もえあがつて、宮中すでにあやうく見えけるを、宮人共はしりあつまりて、これをうち消、さてかの外法行ひけるひじりをおひ出さんとす、我たうしやに、百日さんろうの心ざし有て、けふは七十五日になる、まつたく出まじとてはたらかず、此由社家より、大内へそうもん申たりければ、たゞ法にまかせよとせんじを下さる、其時神人、しらづえをもつて、かのひじりがうなじをしらげて、一條の大路より南へおつこしてけり、神はひれいをうけずとこそ申に、此大納言、ひぶんの大將をいのり申されければにや、かゝるふしぎも出來にけり、

〔賀茂註進雜記〕中行幸官幣御幸平清盛公、いまだ淺官なりし時、夢の告に賀茂御神より寶の山を給ふとて、〇中略神官二人出來り、これは賀茂大明神より下さるゝなりといへるに、一人の云、是は春日大明神の使にて、しばらく清盛にあづけらるゝとありて、夢はさめけり、慎つゝしみて、いかなる冥助をか、うつゝに得せしめ給べきとたのもしく、彌信仰あさからざりしに、後に白川の准后女〇平清盛子と聞えしは、清盛の妹女にて、其比の殿下〇藤原基實の北方に物せられしが、其御領悉、かの

神託

〔後二條關白記〕應德三年十月廿三日丁未、賀茂詣〈○藤原師通〉也、入夜參、前駈六人、殿上人二人、右馬頭少將定忠前駈衣冠也、一人裝束也、上下被物大褂二具也、下社解帶〈○帶下恐脫ニ劔字〉了、上不解云云、

〔親綱卿記〕文祿四年十一月廿一日、早天賀茂下上ヘ參詣、太閤〈○豐臣秀吉〉御祈禱爲勅使、如法於森朝飯用之、

○按ズルニ、賀茂神社參詣ノ事蹟ハ、祈禱篇ニ雜出シタレバ參看スベシ、

〔新古今和歌集〕〈十九神祇〉われたのむ人いたづらになしはてば又雲分てのぼるばかりぞ

賀茂の御歌となむ

〔玉葉和歌集〕〈二十神祇〉たのもしきちかひたがへでもろ人のまつためしにはなれをひかせん

此歌は、ある人賀茂大明神より歌を給はると夢にみて、おどろきて侍れば、白きうすやうにかかせ給て、おかれたる御歌と申つたへたるとなん、

〔風雅和歌集〕〈十九神祇〉世中に物思ふ人のあるといふはわれを頼まぬ人にぞ有ける

是は鴨御祖明神の御歌となん

〔古事談〕〈五神社佛寺〉範兼卿者、奉仕賀茂社之人也、每參詣之度、書心經被參ケリ、而仍此事免三熱苦之由示現之後、金泥ニテ被書ケリ、

鴨社禰宜季繼、保延六年正月廿三日、依當番通夜御社之間、夢ニ八幡宮ヨリトテ師子頭ヤ、鋒ナド體ノ物、神寶等多持運テ、舞殿ニ置ケレバ、彼者何事哉ト問バ、神人等答云、八幡宮燒失候ヘバ、大菩薩是ヘ令渡御也云々、夢覺之後、天曙之後朝ニ、ミノ權守親重宮廻シケルニ、斯ル不思議之夢ヲコソミツレト語間、自京參詣之人云、去夜亥時八幡宮燒失云々、

〔平家物語〕〈一〉𛀙ゝの谷の事

去程に今年もくれぬ、嘉應も三年に成にけり、〈○中略〉妙音院殿〈○藤原師長〉其比はいまだ内大臣の左大

參詣

陣如常、

〔百練抄白河〕永保二年正月廿五日、中宮行啓賀茂社、具舞人一員、

〔日本紀略一九條〕永延元年五月廿一日壬午、今日右大臣爲光參詣賀茂社、四位廿人、五位卅餘人、六位卅餘人前駈、

正暦三年四月廿五日戊子、内大臣〇藤原道兼參賀茂社、上官前駈、

〔小右記〕寛弘五年四月十八日戊申、從小南詣賀茂、〇藤原實資舞人頼宗、敎通、已上四位兼綱、兼貞、顯信、忠經、能信、資平、已上五位惟任、成順、六位陪從忠道、長能、公忠、行義、孝義、保名、忠隆、頼信、與光、遠理、惟忠等也、上達部十三人被來、右大將左衞門督、權中納言、勘解由長官、大藏卿、三位中將、權大夫、中宮權大夫等乘馬、殿上人無殊障、兩頭皆來、

長和三年四月廿五日庚辰、今日左大臣〇藤原道長參賀茂之日、而自辰刻許微雨、仍明日可被參入云々、

廿六日辛巳、左相國參賀茂、資平追從、 廿七日壬午、早旦資平來云、昨左相府參賀茂、午刻許神馬二匹、上下御社各一匹、永以被奉之、走馬十匹、右近府官人騎之、著青摺、衣袴皆是舞人、未被參詣之前、於出立所儲饗饌、求子許舞、琴尻持用左右大將隨身番長、但插頭雲上侍臣執給之、上下御社、各被奉金銀幣神寶東遊神樂等、於下御社走馬之間降雨、上下執笠、相府乘車見之、大納言頼通、中納言敎通、頼宗、參議經房、兼隆、實成、道方、頼定、公信、相府車下見物、大納言齊信、中納言俊賢、懷平、乘車相近見之、太無便宜之事等也、從下御社到上御社之途、雨脚不止、社間猶降、臨被還口止抑出立所、而相府傳大納言齊信令仰左大辨道方云、未放還之國司兩三在共、可免奉者、於上御社給舞人陪從祿云々、下御社鳥居内立簡、其銘云、神宣云、惟憲朝臣、左大臣家事執行不堪、依有偏頗、右衞門尉致方、左衞門府生良信令申云、隨身元武召名被免畢、致方云、依有相示、達別當、仍所被免也者、或云、相府御共卿相、多從下社退歸、又自上社取別道歸、〇下略

中宮行啓

禰宜代官祐幸、同祝祐景、飾大刀乎取天同參入、貴布禰禰宜祐茂、同祝代官祐基、取野大刀同參入、氏人祐長正時有高伊爲等、御案於舁入、次祝光家以榊葉御插申返祝、言終之後、土御門大納言顯言取御插、如先、自二間登天奉上皇、上皇取御、御冠右角令著之御之後御起座、下重御尻如先度、殿下從之、經本道入御勅使殿、次爲先神馬舞人、各二返被廻舞殿之後、神馬者比良木禰宜祝、貴布禰禰宜祝請取之引入、御前正面西方腋柱爾ツナク、次舞樂萬歲樂地久賀殿□□陵王納曾利、其間左中辨、禰宜祝於召天被仰勸賞、(三所御前之辰巳角)其後自御前經中門廻廊、爲神人廊北端賜祿、自餘社司等、神殿等請取、次御神樂如先々、庭火燒之、事終之後、自勅使殿南面出御、還御御行本道也、自南鳥居被召御車、入御神館御所、次被走舞人馬、其後御幸于上社、(〇中略)(于時亥剋)

一神館御所、今度社家沙汰也、去年二月、御寄進御領、讃岐國鴨郷ヲ、祐俊可子孫相傳之由、被下宣旨造進畢、御簾御座等、以成功公人等調進之、柱松貳本、如先々社家沙汰也、(〇中略)

一祝被行勸賞、今度爲始例也、希代慶賀也、

〔勘仲記〕弘安七年三月十一日庚申、參殿下、(〇藤原兼平)上皇(〇龜山)自今日御參籠賀茂社七ヶ日、恒例勅願也、院司右大辨經賴朝臣奉行、

〔勘仲記〕弘安十一年(〇正應元年)二月四日己未、昨日依甚雨不幸賀茂北野兩社、仍今日有臨幸、還御所伺見也、

公卿　堀川大納言　皇后宮權大夫　大炊御門中納言　堀川中納言　平宰相　左大辨宰相

高三位(〇下略)

〇按ズルニ、當時後深草龜山後宇多ノ三上皇アリト雖モ、此御幸ハ恐クハ今上(伏見)天皇ノ御父後深草天皇ナラン、

〔扶桑略記(三十白河)〕永保二年正月廿五日丁未、中宮(〇藤原賢子)行啓賀茂社、殿上侍臣勤仕舞人、公卿扈從、啓

幣案下、取白妙幣立、（一本、維忠行家取御幣、一本、親頼取上社幣、各一本、）次供御祓物、陪膳頭中將、役送經俊、次御拜、（北向御）次入御、次撤御祓御座等、供尋常御座、（如元）次出御、内大臣候御簾、大膳權大夫維範朝臣進自西奉仕反閉、（此間）（立御座、四御）勤仕畢賜祿、次挿御車、院司行家親頼等朝臣付轅、中宮權亮顯方朝臣役御劔、内大臣褰御車御簾、乘御、御隨身追前、於大炊御門東洞院整行列、○中略

今度社頭鋪設任建久例、社家一向致沙汰、訖下上社共引幔、建久上社許引之、經俊供奉如常、但隨身者菓歷巾狩胡籙、看督長火長如先々、爲房卿永保三年四月賀茂詣之時、所爲如此、其後天永元年保延六年賀茂詣之時、重隆親隆自彼例、又如此、仁安日吉御幸之時、經房卿供奉、隨身菓歷巾狩胡籙也、仁安二年八幡御幸之時、檢非違使別當隆季卿隨身、同用狩胡籙菓歷巾、嘉應元年二月八幡御幸之時、時忠卿爲大理、隨身用狩胡籙菓、彼時盛隆廷尉之時、隨身垂袴壺胡籙、尤非之由見于經房卿記、今度引勘代々之例、用菓狩胡籙、廷尉遠行之時、隨身尤可著菓、右佐不然、隨身用垂袴壺、若不被存子細歟、內大臣以下供奉衞府等隨身、皆垂袴如常、

〔賀茂御祖皇大神宮御幸記〕建長六年十月廿八日（丁酉）當社一員御幸（○後嵯峨）午剋著御神館御所、（御紫衣）御車自野鳥居至于御所、手引、入御御所之後、調進神寳、廳官等爲先、御幣神寳神馬等參向社頭、自南鳥居經樓門中門左右廻廊、備神寳、金銀御幣案一脚備之、白妙御幣者、自廳官手小預請取之、先御前玉垣際備之神馬二疋、（鹿毛、河原毛、）嚴殿北面西向引立之、次自神館御所御幸、（止儀也）自南鳥居入御、經樓門自勅使殿南面刻橋入御、有暫同北面東一間出御、即著御舞殿、御下重御尻殿下之御役也、上皇著御之後、殿下同殿自南二間西向令著給、其時土御門大納言顯言、自舞殿西二間登（天、）差笏取金銀御幣獻上皇、上皇令取之御、即御拜、（四反）給之後返給、御幣經本道中門前、橋西端（留天志）賜御幣於禰宜祐俊、祐俊賜之、（笏中懷）中門前（天于）分賜御幣於祝光家、光家取之相從禰宜參、即于寳前、次權禰宜弘繼、同祝秀明、御鉾（乎）取（天）參入向、次川合禰宜祐國、同祝光基取弓箭同參入、次比良木

有禁制事也、○廿八日壬戌、巳刻令參御前、奉幣如例、次參下宮、其儀如先々、令下向間、於河原大雨、遇上宮宿所間雨休、即又參社、小時還宿、至神館、今日社司氏人等競馬、雖社司若輩乘之、各著狩衣、一番、（太田禰宜久時勝、若宮祝部重長、）二番、（太田祝部清平勝、氏人有重、）三番（氏人季久、氏人經忠、）持、季久ハ權禰宜能久弟也、四番、（氏人能継勝、氏人春平、）能継ハ能久子息也、今日競馬中有興番也、春平ハ神主幸平末子也、五番、（氏人彌平、氏人久友勝、）彌平ハ貴舟禰宜雄平嫡子也、久友ハ貴舟祝部資平子也、六番、（氏人忠友勝、氏人氏房、）忠友ハ片岡祝部忠長子也、七番、（氏人弘保、氏人清助勝、）弘保ハ久友之兄也、下品競馬也、清助ハ氏人也、但隨身秦久清之一腹弟也、雖不及久清今日勝也、久清今日參見物、余乍乘馬見物之、依無便宜所、乍乘馬見之也、競馬之間雨脚爲滂沱、事了還宿、供儀、

廿九日癸亥、天陰雨不降、巳刻著淨衣、令參御前、奉幣如例、但有神馬、祈念良久、令下向、欲乘輿時、召床子居之、向社頭方祈念、參下宮如例、天晴雨止、於流木邊聊小雨、參河合社、午一點令乘輿、令下向、同二點還亭、

〔葉黄記〕寛元四年四月廿五日甲申、早旦按察（伊平）來臨、有相觸事、謝遣了、自院（○後嵯峨）賀茂御幸御神事有御尋、後鳥羽院御時、或有御佛事、或被行御佛名、或僧侶參入、全不被憚佛事、但御修法御加持ハ、猶可被止歟之由申入了、前內府（○源通光）ハ可被憚佛事、可被止御修法之由計申云々、是古儀歟、

〔賀茂御幸記〕寛元四年四月廿九日戊子、日出以前參院、（○後嵯峨）今日賀茂御幸也、先奉仕御禊御裝束、大略如八幡、但御座幣案等皆東向儲之、幣案白妙御幣九本倚之、下社二捧、松尾河合各一捧、（在南）上社一捧、若宮貴布禰片岡太田各一捧、（在北）其南舁立金銀幣辛櫃二合、（已上皆以南爲上）神馬二匹引立東中門外、（舎人四人引之）此間前內大臣（○源通光）參仕、候公卿座、經俊覽日時、（入筥、維範朝臣於下侍勸之、）前內府見畢奏聞、次返下、次下主典代、午刻人々參集、先著御御禊御座、內大臣（○藤原忠家）候御簾、頭中將（○源雅家）獻御笏、（今度牙御笏也、大相國被調進之、今朝被下之、入筥本筥、於木御笏者進入御前、）次御隨身將曹久員兼利等、引立下社神馬（栗毛）於金銀幣辛櫃東、（東向、頭向北、在南）次府生久則兼躬、引立上社神馬（鴾毛）於下社神馬北、次院司維忠朝臣、行家朝臣、親頼朝臣等、參進

東帶、○中略殿下御共參院、(二條殿也)神寶御覽了間也、

〔百練抄 十一 土御門〕承元元年十二月十九日、今日上皇(○後鳥羽)御幸賀茂社、於上下社有御遊、上皇御琵琶、

三年六月十日、今日上皇(○後鳥羽)臨行賀茂社、有御神樂、

〔百練抄 十二 順徳〕建暦二年三月廿六日、上皇(○後鳥羽)自今日七箇日、御參籠賀茂社、(下社三箇日、上社四箇日、)廿八日、上皇於賀茂上下社有競馬事、各五番、

〔後鳥羽院御記〕建保二年四月廿一日乙卯、著淨衣乘輿、參賀茂社、自今日七箇日可參籠也、未一點令參著、先參河合宮、但不奉幣、次參下宮、奉幣如例、葵桂獻之、頗似無其謂、祭以前獻之猶不審、況祭以後條如何、然而社習歟可尋、事了參比良木社、自西鳥居乘輿參上宮、奉幣如下社、獻榊如常、申刻著宿所、即著改淨衣步行宮廻參下宮、次河合宮、經太田中路、次第宮廻如常、近習女房乘車宮廻、余出上宮鳥居間、車在鳥居邊、酉刻著宿所、食破子、即又參御前、是御前許也、良久還宿、女房又步行宮廻是例也、

廿五日己未、巳刻宮廻如例、自今日參籠上宮也、宿所長廊也、爲成宿所頗加修理歟、午二點奉幣如例、次參河合社、次參上宮、於下社伏禮、昇居輿聊祈念定法也、公卿以下下馬、下宮余之宿所外侍也、是定宿也、後白河院御參籠時宿即是也、午三點參上宮奉幣、如例獻榊、於下社者猶獻葵、天慶行幸、四月祭以後也、然而獻葵、其外院御幸、關白參、多四月祭以後有之、皆以獻葵云々、社家存先例獻之、仍不及止之、於先例未勘之、社家定有所見歟、其上不能勘者也、午三點還宿、即改淨衣步行宮廻如例、雨降、右衛門佐朝俊奉仕笠、笠甚太重雖奉仕之、自太田社醫王奉仕之、堪如此事者也、仍無其煩、奉仕此役也、醫王妻令懷妊、仍今度著直垂候、不參中門中、其外不憚之、即社家所申也、於伏禮聊蹲居、直河合社へ參、經新路令參下社、祈念良久、先是依便路參比良木社、步行時用床子、未一點還宿、即供饌有雀小弓會、隨勝負令亂舞、有甚興、雨脚猶不止、戌二點許令宮廻如下宮、良久還宿、總於宿所解脫本鳥不憚之、仰扈從上下宿々狼籍禁制之、先例甚以狼籍也、然而余之參籠時、敢無此儀、由社司殊悅申、殊能々可

入、小時重又示遲々之由、前駈等依遲參重加催了、巳剋始參入、小時出御、御禊御座、其儀大略如八幡、但階隱西面供御座、東面、當寢殿東一間庭中、舁居神寶等、其西置白木案、倚白妙幣、其西立八足机、其前敷軾、其西去一丈許寄車、北敷軾、爲院司座、御座定供御贖物、陪膳修理朝臣、役供信基、次在憲著座、次予○藤原實房著軾、懸膝、依地濕也、御禊了獻大麻、先廳官取之、引渡神寶等、不可然事歟、次撤八足机等、予捧幣立如先、但依蓋雨不取上、只懸手立、次御拜了、拔笏退去、次神寶等先行、次寄御車、公卿已下騎馬如常、午始著御下社、於鳥居外下御、新大納言候御裾、殿上人列鳥居內東方、公卿列立其前、經樓門入御勅使殿御所南面、予著御簾、次舁居神寶等、先是立机等於橋外、亞相仰可立中門柱內之由、然而社家固辭不改直、未知可否、次敷御拜座、北第二間、次著御座、公卿列居御所北西等砌內、修範朝臣取幣、金銀二本、立舞殿南殿、予進跪指笏取之、經西庭昇自第三間、懸膝於長押、脫沓膝行昇也、獻之、拔笏左廻退去、□□御拜了、參進給之、下自北面西間、此間長継□□來相跪、給之退去、予取笏右廻自北廻西取□於坤角程跪著之、次社司等舁神寶等、次惟明捧榊、插白幣木、參進、申還祝了、予經西庭進跪、指笏取之、右廻經本路、昇自第三間獻之、上皇仰云、冠指歟、予申云、然候、仰云、指々、予奉指之處、御冠後不被放、□予申云、御冠不被放候也、不令指御事〻候歟、仰云、有不指事歟、申云、爾候、御承諾取之、令入御懷了、即還御勅使殿御所、次有神宴事、次參御寶前、入御廻廊御所、予著御簾、有御誦讀事、御經二部、須臾終之、次有郢曲事、酉刻事了、參御上社、於一鳥居外、提放御牛、廳官等引御車、寄頓宮西面下御、此間公卿列立幔內、東上北面、公卿著南廂座、供膳之後、參御社頭、入御舞殿西北屋、自南面入御、予著御簾、次御拜座、次遷御舞殿、出御自東面、予取金銀幣獻之、脫沓昇之、御拜之後參進給之、直下自北、召社司給之、了自舞殿西方板橋退歸著殿、申還祝了、還御御所、此後予退出、寅刻許歸參、小時還御、

講、

〔百練抄八高倉〕治承三年四月廿三日、上皇○後白河限十ヶ日御參籠賀茂社、令轉讀千部經給、又被行御八

〔猪隈關白記〕建仁二年三月廿八日癸酉、今日上皇○後鳥羽賀茂御幸也、其儀如石淸水、御幸日出之程著

其南置軾、其西南置上卿圓座、幣案東、金銀幣長櫃二合、（朱漆）御劒櫃等舁立、件御劒本候院御劒也、各入錦袋、前日八幡時、宮寺司不可下用之由被仰云々、幣案西、引神馬二疋、次陰陽師宗憲著軾、次上卿權中納言實行卿著西南圓座、御禊間、廳官（著東帶者）謝清酒、

抑御禊御座、東間庭設座、准清凉殿向艮可被修歟、今般正向御前解除、頗似無便宜、然而禪皇仰云云、

御禊了、陪膳有賢朝臣取大奴佐供之、事了撤御贖物、次上卿取幣立、稱幣重突地持、御拜了撤幣退出、廳官等撤幣案、次新院御使如前、陪膳敦兼朝臣、役送經隆、上卿權中納言雅定卿、新院御方無御劒、次乘御車出御、供奉人内大臣、大納言經實、能俊、中納言顯雅、實行、雅定、實能、參議下官、伊通、三位經忠也、日沒程下御社著御、諸卿立鳥居中、下官立外、依爲服日數内也、此後舁下御車、被待日暮、及衛黒入御、此後左右武衛下官先行、參上御社、於馬場舍暫奉待、須臾著御於一鳥居外、放牛引御車、於二鳥居下御也、此後招具少納言俊隆、中務少輔師能、治部師行等、向正禰宜成平宅、食了間還御、

〔中右記〕長承三年四月十五日甲午、今日院（〇鳥羽）有御幸賀茂、從白川酉時出御、後聞先御禊、陰陽頭家榮朝臣奉仕、陪膳院司忠隆朝臣、役送判官代憲方、御禊了、民部卿忠教卿取幣、立神寶神馬等案頭、御拜了人々騎馬、大納言、（忠教、實行、顯長、）中納言、（雅定、宗輔、宗能、顯頼、）參議、（經忠、家保、公教、實衡、重通、）關白殿令扈從給、及秉燭著御下御社、民部卿被獻金銀御幣於舞殿御奉幣、此間廻神馬、（三匹）祝是輔申返祝給祿、（主典代取之）獻葵、松尾幣被分獻、（使廳口云々）上御社儀同前、无御神樂、又无社司賞、依每年事歟、

〔十三代要略〕（二崇德）保延二年九月廿五日、上皇（〇鳥羽）御幸賀茂、先有金泥大般若供養、次有競馬、

〔台記〕久安三年十月廿五日乙卯、法皇（〇鳥羽）詣賀茂社、儀一如八幡云々、下社禰宜季繼、叢可追賞之詔、依爲正四位上也、上社神主重繼賜一階、无御經供養、御出家後始詣、

〔愚昧記〕仁安四年（〇嘉應元年）二月廿九日、今日賀茂御幸也、（〇後白河）辰時許、著束帶之間、光能示送云、早可參

大納言實季也、被下實季卿付社司了、申還祝了、左加木奉之、御手打三度聞之、乘打手云々、口御所御座殿下御屏風不立、猶可被立歟、舞事如恒、御神樂如常、此間予候御前、右兵衛督(經)於御前被召、殿下御云、被仰賞事、予仰承了起座、就上達部座、召頭辨其由可仰社司者也、了御馬、此間仙院乘御御車、馬場舍前數疊、(高麗端)右大臣、予以下就畢、左大臣依所勞罷歸、殿下院車後乍立佇立也、予隨身褐衣袴、(蘇木色)打衣黃欵冬、殿下御隨身如常、權中納言隨身二藍袴也、

〔中右記〕天永二年四月廿八日庚申、今夕上皇(白河)令參詣賀茂社御也、仍晩頭著束帶、申時許參院御所、(大炊御門萬里小路)及酉刻先有御禊、南庭引御馬二疋、(上下社料)神寶長櫃二合、御幣二捧、大炊頭光平御祓、次但馬守家保朝臣捧御幣暫立於簾中、有御拜歟、(不知件事有無)暫而置御幣、皆以前行、寄唐御車、(御車副布衣冠、傭子、供舍略儀)諸卿內大臣、右大臣、藤大納言、源大納言、新大納言、左衛門督、藤中納言、右衛門督、予、新中納言、右宰相中將、(家)新宰相中將、(實)左大辨、(修理大夫)殿上人五十人許、(前行)御車、別當、左兵衛督、(能)候御後、檢非違使武者所出車、出御東御門、經大炊御門京極一條大路等、於下御社外鳥居下、此間及秉燭、下御從御車、(敷筵道、今著法服御也、)公卿殿上人有仰前行、近習人兩三輩近候、以舞殿北一間懸御簾爲御所、入御之後、院司取御幣暫立御前、神馬神寶付社司了、社司返祝、可早出御、上社作法如此、但於內鳥居下留御車下御也、(依不入社中、不見子細、)良久還御、其路經齋院前幷大宮中御門東洞院大炊御門大路等還御、子刻許人々退出、

〇中略

裏書云、後日或人談云、上皇入御所給之後、金銀御幣、新大納言取之捧立、白妙御幣、家保朝臣取之捧立、上皇令拜給、次又無別神寶、入佛舍利於金銅壺被奉者、件舍利金銀御幣入長櫃一合也、

神寶行事但馬守(家保朝臣)

〔長秋記〕大治四年正月廿九日戊申、兩院(白河、鳥羽、)御幸賀茂社也、〇中略及申刻御禊、其儀藏人二人取小筵半帖、入御簾中鋪了、次御座定、次有賢朝臣(別當)季成(判官代)供御贖物、先立幣案、當御座正方、其南倚幣

〔明月記〕嘉祿元年十二月三日、賀茂行幸、〇後堀河輦路今日忽改、　十日天晴陰雪間飛、午時許中將來、一昨日行幸、雨儀下、雨後寄御輿、盛兼劒璽次將參、只三人、爲家、資季、實淸、皆左也、實淸渡右宜標參日花門、師季、實俊、敎雅、藤家定、賴氏、象輔、儲路頭、下御社安御輿、鳥屋車面御輿前陣南也大將以下皆跪深泥、具實昇御輿前陣、召次將令解雨皮、右將有便目實俊、實俊又指其子令昇、但示之自御後令昇、解雨皮緒還下、具實進役劒璽、右大將被追却、具實隨身於前陣昇者、無加詞人、父又見之云々、御禊間、上卿具通勅使於幔外揖笏振手參軾、不揖召使取笠、御禊了、立取御幣置之拔笏、置誤之間、自幔外諸人示驚之間、更歸立庭中、親定卿折花出立、□□□□□□□極難及歟、相構揖之云々、御神樂訖歸參、奏御願平安由、即出、乘輿赴路、數町之後、出納俊基尾籠、無故喚返之間、忽歸參於幔下下輿、人々告無召返事由之間、忿怒又乘輿、前驅騎馬於幔下乘、無便云々基馳歸、今度具實自御輿之後遲參、無故失錯歟件卿裹こき紅梅下襲著之、但八幡青色二紅葉之裹山吹色也、人驚目、相具童二人、隨身袴同付丸文、兩社可著同裝束由、已以宣下、更施風流相具、前不具、別之違勅歟、左大將殿自下社直退出給云々、雅親卿始終供奉云々、

〔扶桑略記〕三十堀河寬治二年四月廿七日癸卯、御幸賀茂社、

〔後二條關白記〕寬治五年正月十一日辛未、予〇藤原師通束帶、紅梅下襲、平緖蒲色、劒地螺鈿畫樣也、巳刻參院、次第如式、今日寶子敷、菅圓座不敷云々、下御社申刻許御詣、社司上臈一人給一加階、右兵衛督來云、仰其由承了、此間候御前、起座著上達部座、召頭辨季仲、示一加階云々、戌刻許事畢、上社事如式、但神寶等如賀茂詣云々、〇中略

裏書、十一日、殿下、〇藤原師實左大臣、予等候殿上、此間御覽神寶等、五位不候者、但候人々殿上人可舁神寶者也、御覽了、院〇白河御出、殿下被召、而候寶子敷菅圓座、插頭給之、右兵衛督家司來、左大臣仰召由、上達部等候寶子敷、前拂等神寶舞人如初御行云々、寄御車於馬場舍下御、御禊間、予候公卿座、御禊了、院著淺履御沓、自馬場步行先是殿下懸下襲於劒之尻云々、御社頭御拜如賀茂詣云々、今日幣取按察

聞食之由、次撤東北南三面幔、（如舊記者、東一面撤之歟、供御今度撤三方、爲違見、）次敷公卿座、（綠端疊、御所以南與實子平敷、疊之三枚敷之也、先例不撤南幔、南幔內敷一帖、上首兩三人著座也、）次召高能、（藏人頭）高能可召公卿之由被仰、向公卿座仰之、（入北幔門著橫座、告召由也、）次公卿內大臣殿（藤原良經）已下、次第著座、（北上東面）次舞人上御馬、（南上也、）左少將知光駕騰馬、次馳御馬、（馳北也）〇中略次寄御輿、幸上社、（御輿經本路、自川原幸也、）予時申斜也、〇中略社內次第一同下社、頻遣使向社頭、此間采女供朝御膳、殿下有召仰曰、於頓宮供御膳、一宿時事歟、予申曰、天仁於下社供之、長治永久於上社供之、於頓宮供朝膳、於本宮供夕膳、是恒例也、仰曰、有例者早可供、即供之、次以女房申殿下云、衡重可令供、暫可待之由有仰、頃之早可供之由有仰、御所西面二ヶ間、（自北第二三間也、）儲殿下御休所、（今度上社御休幕屋破壞、仍無其所、公定兼申事由、儲件御休所也、）件所供之、御厨子所致用意、（兼下知也、）內大臣殿即令候給、同可供、仍相尋之處、不用意之由御厨子所稱之、可相構之由加下知、仍如形調出之、兩所御料供之、予并六位藏人等役之、此間予向宿所、如形助窮屈、即歸參候東方殿下御座方也、頃之殿下渡御休所、可供御湯漬之由有仰、予供之、御湯漬如形、御箸下、次令漱給、手洗不用意、東西尋出、內大臣殿同供之、已上予一身役之、此皆內々事也、亥初上卿歸參、於南幔門、（經西幔門外、被進自南幔門也、）被奏御願平安之由、予奏之、（於西面南妻奏之）殿下令傳奏給、歸出仰聞食由、次撤西北南三方幔、敷公卿座、（頓宮南第一間以南、南北行敷之、）次高能朝臣又召公卿、次第著座、次舞人上御馬、（南上）次馳之、（馳北）有召仰曰、舞人九人馳御馬如何、可尋子細、侍從公雅稱所勞由、仍上卿可令陪從馳御馬之由、於社頭被加下知、而陪從又皆悉逐電、予兼不知此事、公定不示此子細、仍藏人兼範駕後、公雅馬再馳之、可謂違亂、此間內大臣殿起座、於公卿座覽見參、於南幔門進令奏給、高能朝臣奏之、公卿各又起座、徘徊于南幔外、於件所給公卿以下祿、〇中略次如元引幔寄御輿、經本路還御子初許、還御閑院殿、〇中略曉天歸蓽、今日行幸、予外無御後殿上人、可謂末代、〇中略末代公事奉行如鴻毛、專無由歟、諸人以自由爲先、何爲々々、

〔玉海〕建久七年十一月五日、此日賀茂行幸也、（今上〈後鳥羽〉第二度、去月廿五日有石淸水行幸、）寅刻著束帶參內、主上御裝之間也、即內大臣參入、此外公卿一人不參、〇下略

起座、進南幔門下了、御禊間事不見之、可尋記、申刻幸頓宮、到戌刻、社頭事不被終、不知何故、可尋記、
亥刻上卿歸參、奏御願遂行由、撤幔等敷公卿座、(御座南方、東面北上、敷繧繝帖、)予、大納言實房、中納言兼雅、(乍差插花著座、)實家著座、他人停立、舞人等騎御馬了、予以下起座、予渡階前立北方、(先度立南方、失也、仍被改立之、)乘輿了、騎馬先行之間、太狼藉多怖畏、幸上社頓宮、公卿列立幔中、(北面東上、)予入西幔門立北方、(公卿列立之上也、)下御之間、予以下跪地、御輿寄平敷也、下御了、予即退宿所、用毛車、權禰宜(右相公相共之、)賚保住屋也、儲雜事、良久休息、曉鐘已報之間還宮、予自宿所參會、路頭幸閑院、有鈴奏名謁等、予不昇殿、直歸家、行事賞、

正三位藤原隆忠(廉時)　　平知盛

藤原實宗(去春平野行幸賞)　　藤原長方(參議)

從五位下中原仲重(外記)

上卿辨史檢非違使等、可追申請也、

〔三長記〕建久七年十一月五日庚辰、天皇(○後鳥羽)行幸于賀茂社之日也、(○中略)卯刻出御、予(○藏人藤原長兼)獻御草鞋、殿下(○藤原兼實)令取御裾給、予又取殿下御裾、璽劔內侍候前後、(近衞次將扶持之、)御出後之間可引陣之由仰之、次出御南殿、陰陽頭宣憲朝臣奉仕反閇、(進自西方反閇了給祿、○中略)巳刻著御下社、外記立五位六位下馬標、(五位於鳥居外下馬也、)雅樂寮奏立樂、乘輿入鳥居、於大幔(大藏省幔也、)外神祇權大副大中臣爲季朝臣獻大麻、經頓宮西南入御自東幔門、置鈴印大刀契於東簀子、(寄南置之也、)公卿列立幔內、(西上北面、左大將殿(藤原良經)令立北面、)寄御輿於東庭、(社司構御輿寄、所司敷筵道等、)次將跪候、駕輿丁平伏、花山院宰相中將上御簾、次開簾戶、取璽授內侍、(內侍兼參、候簾中、)次獻御草鞋、(同人役之、東豎子供之、自北方進、)次宸儀入御、(○中略)社內儀不見及、上卿以下著勅使殿、次付神寶於社司、次上卿取宣命、著舞殿座、讀宣命、讀了給社司、社司申祝、次還祝、次拍手、次上卿歸著勅使殿座、次廻神馬十列馬、次引入神馬於中門內、次東遊、次神樂、次音樂、(左、萬歲樂、賀殿、陵王、右、延喜樂、地久、納曾利、)次仰社司賞事、次給社司祿、(次第如給歟、可尋、)申初社頭事了、上卿歸參、於北幔門被奏御願平安之由、予奏之、(於北第一間程奏之、跪候也、)歸出仰

卿座、仰外記（頼業）令進見參、披見了、籠三通於一紙中、挾杖（外記挾之）令持外記、就御所（南殿門下）以基親（藏人五位）奏之、返給之後給外記、須復座給也、然而省略如此、次給公卿祿、次乘輿還宮、鈴奏名謁如常、其後則退出、於六條東洞院松明了、

〔庭槐抄〕治承三年九月五日己未、今日賀茂行幸（○高倉）也、連日雨脚、自去夜天霽了、神德之令然也、吾君之聖化也、可貴可憑、辰刻可有出御之由、行事職事（右少辨兼光）兩度投書狀、仍巳刻著束帶、（蘇芳下襲如常）隨身狩袴、可用八幡行幸之山衆案也、且兩社行幸、上下諸人不可改衣服之由、新制其一也、然而大雨濕損、仍亦新調之、舍人裝束調同色給之、同依濕損也、前駈四人、（雅亮、範資、懷綱、源範實、□□、）乘馬用糀葦毛、（行幸之時、公卿不用此毛、似淨梵王云々、然而近代皆用之、）相具乘替馬、（置舌長鞍、舍人賜小袴裝束、）移馬（三位基家朝送額白栗毛馬、額有半浜之氣、）舍人裝束、（同八幡行幸日）巳刻參內裏、（閑院）關白未被參、仍被相待之間也、午刻關白被參、其後有神寶御覽事、（先々早旦御裝束以前覽之）召仰留守路事、行事春宮大夫兼雅卿先行之了歟可尋、神寶御覽了、自清涼殿直出御南殿、御返閉如常、左右近引陣、右將渡東、御輿兼奉安中門（日花門代也）諸卿降立中門砌下、予（○藤原實定）進立南階東邊如例、公卿列立、（大納言定房、實房、中納言宗家、時忠、權中納言實家、參議朝方、權中納言實守、實宗、中將□□、三位實清、）寄御輿、左右近將監出大刀、次宸儀駕御、出御自東門、其路自西洞院南行、至三條東行、法皇（○後白河）於三條殿御棧敷、有御見物、於橋下予取弓渡之、至東洞院北行至一條、東行至京極、北行至出雲路、予不改馬（自京極邊前駈具之）到頓宮、於左衛門陣列立前下馬、經鳥居北邊御輿到之間暫停立、予前行欲經頓宮幔北、（承保二年江記如此注之）而行事辨光雅云、可被用幔西并南之由、指示近衛司等、仍予用此路了、何是何非、可尋決也、入御自東幔門、（主殿寮撤之）公卿列立幔中、（西上北面）先例跪地之由、見日記等、今日不然可尋、予立御輿寄之南、（後日案之、左大將可立北也、思失也、不替又例也、強不可失儀、）宸儀下御、右宰相中將實守候劍璽役、下御了、予以下居公卿幄座、（不撤弓箭、作帶胡籙居之、諸卿辟出了、予權中納言、右新宰相中將留居、各无休所也、秋風入骨、可謂令然歟、）春宮大夫（今日上卿）於座示予云、宣命清書可令奏給歟、予示可被奏之由了、當日上首奏之、或行事上卿奏之、兩端相存、予不致奮、仍便可被奏之由指示之、仍上卿先召召使、下軾召宣命、內記進寄、披見了返給之、令持內記

大辨列立、予立宜陽殿未申程庭、依爲留守、寄御輿、（花蓋）出御、左衞門陣人々騎馬之間、予於北陣方見物、中宮於北對北面御覽、其路經烏丸土御門西洞院一條院御棧敷烏丸一條也、殿下馳參御棧敷給也、

〔賀茂註進雜記（中行幸官幣御幸）〕近衞院久安元年十二月四日甲辰、御代始の行幸なり、此御代三ヶ度行幸なりける、

〔山槐記〕永暦元年八月廿七日壬申、今日賀茂行幸（〇二條）也、（〇中略）左馬助長定、（爲舞人也）於二鳥居內騎馬、頗似不知案內、上卿被咎云々、然而不下馬云々、勿論事歟、凡馳御馬時、於二鳥居外騎馬、經御所前、至于一鳥居許、更向社頭馳也、

〔賀茂註進雜記（中行幸官幣御幸）〕二條院永暦元年八月廿七日壬申、御代始賀茂行幸ありて、此御代に五ヶ度行幸有ける、

〔百鍊抄（七二條）〕長寛元年十月廿七日、行幸賀茂、去三月有行幸、依每年可幸也、而以別御願又有臨幸、年中兩度行幸、无先例、

〔賀茂註進雜記（中行幸官幣御幸）〕高倉院嘉應元年八月廿九日、行幸、此御代五ヶ度也、

〔愚昧記〕安元三年（〇治承元年）十月十四日庚辰、賀茂行幸（〇高倉）日也、（〇中略）申刻許著御下社、經御在所西面、入御東面幔門、（於幔門下、次將等立改如常、）下輿之儀如例、（頭中將定能御劒役、御璽）此間公卿不跪、是又例也、蔀屋之時跪地者也、予（〇藤原實房）著公卿座、上卿宗家卿等同著、上卿奏宣命、先請予之後奏之、此間予、堀河宰相中將相共下宿所、（出雲路也、相公儲之、）解脫口食事了、暫休息之後歸參、公卿座饌幷疊等撤了、狼籍無極、仍敷皮懸口、此後人々少々參上、少時社頭事了、上卿歸參、次左頭中將定能來召予、時予以下佇立公卿舍邊也、予以下著座、次乘輿、予上社下輿之間、公卿不跪例也、但宗家兼雅等卿欲跪地、而上﨟下﨟等不跪、仍覺悟輿揚了、次予、宰相中將等下宿所、（靈殿廳舍云々）神主重保相儲也、予所示也、著食了、暫假寢、（不脫衣帶）曉鐘之後參上、著公卿座、頃之上卿歸參云々、次定能朝臣來召、仍著砌下座、舞人馳御馬、同下社、此間予起座、著公

より歸らせ給ける又のあした聞えさせ給ける、　選子内親王（○圓融皇女宮院）

みゆきせしかもの河波かへるさにたちやさまるさまちあかしつる

〔續後撰和歌集〕（九神祇）後一條院、位におましましける時、賀茂社に行幸ありける又の日の朝、選子内親王の御返事のついでに、　上東門院

立かへり賀茂の河浪よそにてもみしやみゆきのしるし成らん

〔賀茂註進雜記〕（中行幸官幣御幸）後朱雀院長曆元年八月十一日、御代始の行幸あり、

〔扶桑略記〕（三十白河）承保三年三月四日、重行幸石淸水宮、　四月廿三日戊申、行幸賀茂社、已上二箇行幸、依別御願也、（○中略）毎年四月中申日、爲賀茂行幸式日、

〔百練抄〕（五白河）承保三年四月廿六日、行幸賀茂社、自今年以御阿禮日、可爲式日之由被載宣命、（此後爲每年事）

（○又見榮花物語、十三代要略）

〔中右記〕嘉保二年四月十五日庚辰、今日賀茂行幸也、（○中略）堀河、當社行幸、朱雀院天慶五年四月廿九日、（壬午）初所被行也、平將門亂逆御願者、其後至今度、合廿四度也、

元永三年二月廿六日丁酉、賀茂行幸、（○鳥羽）也、辰刻參內、依可勤留守、用无文帶、院（○白河）渡御本棧敷、是依御見物也、依陣中前驅步行也、予（○藤原宗忠）先參御棧敷、仰云、留守人猶早可馳參內、依仰參內、著仗座、內大臣以下諸卿著仗座、依人數多、相分端座、人々著了、頭辨已下、賀茂別當司解狀（副外記官勘文）可定申者、內府乍奧座給之、一々見下、恩多社若宮社司等、申預官幣幷關行幸賞事也、右兵衛督實行讀上申文、則一々申上、大略可有裁許也、予申云、當社行幸、代始上下小社司皆預勸賞、次之行幸皆或迷惑、上臈一人、右勅定也、但若皆悉可給賞者、被加若宮恩多、何事之有哉、如此時靈社事、隨申請增加、是定法也、又預官幣、尤可被裁許歟、人々多同予定、付頭辨以詞被奏、巳刻御出、陣引右次將渡、內大臣、右大將、按察大納言、源大納言、新大納言、右衛門督、治部卿、別當、侍從中納言、宰相中將三人、（信通、忠季、雅定）右兵衛督、右

馳御馬、次音樂、（大唐高麗各三曲之中、有龍王納蘇利、舞裝束用大殿、）事訖召禰宜祝等、以辨令仰勸賞事、（依禰宜久清讓、子久澄事、依請、祝伊信叙一階事、伊信申云、未成位記之間、有可申請者、）卽先拜神、次拜余、給社司祿神人布事了、黃昏（小雨不止）參御所、陪從相從歌遊、以藏人頭定賴、令奏御願平安奉果之由、又令申祝伊信所申之趣、今日皇太后宮女房等乘車、先參而未下車之間、臨幸已訖、仍不能下車、依陣內、秉燭後寄御輿、（供雨皮、今日晴陰不定、）幸上社、未入御幔門之間、神祇官獻御麻、以馬場舍爲御在所、舍太狹、後方指庇葺檜皮、件舍覆斑幔皮、依入夜御前懸燈爐二、上下御所各立輕幄二字、（依儀、母后御料、）諸卿著官幄、（板舍之上覆斑幔皮、上下上達部座舍、修理職所造、不給料物、上下御在所木工寮所作、但宛給材木幷用途物等、）酒饌如下御社、殊羞湯漬、此間藏人賴宣來召於此座、解弓箭緌等（插頭如元、）參御所、羅列御幣神寶等於御前、引立御馬、如下御社、御禊等儀相同、余就案下捧御幣一夾而立、御拜了、置御幣退出、（異下御社儀、依插頭事復座、作指插頭、候御前、仍置退出、）以定賴令申社司賞事、傳仰云、如下社司可加一級者、禰宜賀茂縣主茂忠六位、可叙外從五位下、祝外從五位下祝部茂延、可叙一階、（入內歟、）參廣前之北、雨脚不止、陪從歌遊、掃部寮不敷座、令召之間、時刻推移之後、鋪座於河上廊、（讀宣命座、）幷北舍、（讀宣命了著此座、辨內記史等同候件舍、）御幣神寶等舁立如下社、社司檢請持參廣前舍、洗手著座、讀宣命等儀如下社、宣命賜禰宜茂忠、茂忠傳神宣、余拍手兩段再拜、著北舍座、引廻御馬、東遊神樂、馳御馬、音樂等、皆如下御社、東遊了仰禰宜祝等賞事、次給表衣笏等於茂忠、須事了召仰、而禰宜茂忠申云、早給位袍從事者、爲散鬱結、中間所給也、茂忠著位袍來拜、事訖給禰宜祝等祿、給了致拜、禰宜茂忠申云、庭積布（神人祿、）未給者、件布依大藏省下文、召上野國、國司定輔寄事於左右不進、仍今日不給下御社如此、過今日可給之由召仰了、且上下御社司賜送文了者、還參御所、（雨猶不止、）以定賴令奏御願奉果了由、（○中略）寄御輿、還宮之路、從下御社西方道、（去御社差遠、）到出雲道、如元、暗夜間、河原道東西難辨、道々相分處々立柱松爲指南、入京洛雨脚止、乘輿到院西門、神祇官獻御麻、於南殿有警蹕鈴奏名謁等、（卿相列立南殿南砌、依雨儀立傾所歟、○中略）丑一刻退出、（○又見日本紀略、左經記、）

〔後拾遺和歌集十九雜〕後一條院御時、賀茂行幸侍けるに、上東門院（○彰子、母后、）御こしにのらせ給て、紫野

五日癸卯、天皇行幸于賀茂社、皇太后○母后詮子同輿、○又見扶桑略記、

〔本朝世紀〕長保五年三月廿六日丙辰、今日賀茂上下行幸○一條也、其儀式如例、

〔小右記〕寛仁元年十一月廿五日己未、今日幸賀茂、○後一條未明修諷誦三ヶ寺、清水、祇園、賀茂下神宮寺、早旦參內、今日物忌、又入卦厄日、諸卿未參、御輿未候門、○中略時刻巳二點出御南殿、吉平朝臣奉反閇、御輿持立西中門、諸卿列立、左右大將進立、左大將渡階前、先是左次將率御輿長等渡階前、大將立定了、寄御輿、蔥花母后○彰子同輿、南殿格子懸下、只上階間、依母后同輿也、無警蹕鈴奏等、又不仰御綱事、出從西門、今日太白在西方、而件西門自御所當坤方、又先日勘文注坤門、吉平文高等勘申也、經大宮一條大路并出雲道等、大殿乘唐車、車副著冠青褐朱濾務等、攝政騎馬候御輿後、午刻著給下御社、神祇官奉御麻云云、諸卿著官幄、當御所南立假舍、覆幔、上社相同、修理職所造、不給料物、上下社御所、木工寮奉仕、宛給料物、大膳饗饌、行事所宛料物、料物所々召皆悉給料物、山城國不奉仕、皇太后宮司饗、內藏寮奉仕、依無山城勤、行事所內內仰內藏寮云云、諸卿就食、大殿攝政被候御所、有食饗歟、上社相同、略藏人賴宣來告召由、即參入、御幣神寶等立御前、侍臣供御贖物、宮主著座、次余著座、其座非例、仍令改敷、大殿加詞、余解弓箭緌等、但卷纓如元、舞人牽立御馬、御禊了發歌笛聲、引出御馬、又撤御贖物、余起座就案下、搢笏執御幣、取合二挾而立推、御拜了、程依御簾中復座、左大將執插頭藤花搢余冠了、起座退出、社司勸賞事、以藏人頭定賴右中辨請處分、禰宜祝等有可加一階之仰、大殿攝政共命云云奉仰參御社、爲先御幣神寶等、余引舞人陪從并行事并史史生等相從、陪從歌遊不休到社頭、余於御社解劒洗手著廣前座、舞舍內所司預敷座次內記進宣命、先是御幣神寶昇立中門前、當門中央余兩段再拜、了讀宣命、了又兩段再拜、召禰宜久清給宣命、此間引立御馬、禰宜久清、祝伊信等歸出、分居中門東西、禰宜西、祝東、祝傳神宣、余拍手、衆人合應、社司內藏史生官史生等、檢御幣神寶、社司請預、次牽廻御馬三度、八度須廻、而依日暮耳、畢余起座、著舞舍坤舍座、差西去敷辨座、其西舍敷內記史等座、辨以下著座、仰辨召禰宜久清、令問以加階讓子久澄之事、所申懇切、又問禰宜祝位階、申云、禰宜正五位下鴨縣主久清、祝外從五位下縣主伊信、至祝可入內歟、將可叙從五位下歟、件等事以辨令申案內、傳宣云、讓事依請、祝事神社事、ともかくも有、但尋前例可行者、久清申云、初叙外階者、入內之事思忘不問、後日令師重申云、御馬廻了東遊、次神樂了

る御示現どもをあらはしたまふ事は、みかどなのめならずたのもしくおぼしめし還幸なり給ひぬ、その、ちいくほどもなく、將門は、田原藤太秀郷にうたれ、すみともは、その、よしふるにほろぼされて、東國も西海も事ゆゑなく靜り、人民安堵をなしにけり、此とき帝のえいりよには、賀茂皇大神のおうごの御めぐみふかくましますに、世はしづまりぬと覺しめし、かば、御しんかうまし〳〵て、幣帛をそなへ、神德をかゞやかし給ひけり、此例によりて、後一條院も賀茂の御社に行幸し給ふ、

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年四月廿五日丙申、天皇行二幸賀茂社一、　五年四月廿九日壬午天皇幸二賀茂社一、奉二神寶幣帛走馬一、禰宜等加二給爵位一、依二兵亂平和之賽一也、〇又見扶桑略記、一代要記、

〔濫觴抄〕賀茂行幸

朱雀天皇十三年壬寅天慶五四月廿九日始之、依二同御願一〇將門追罰也、〇又見中右記、二十二社註式、賀茂注進雜記、四月年中行事秘抄作十一月、恐誤、

〇按ズルニ、賀茂皇大神宮記ニハ、承平五年賀茂行幸ヲ以テ諸社行幸ノ始トシ、濫觴抄ニハ天慶五年ヲ以テ、賀茂行幸ノ始トス、中右記亦同シ並ニ誤レルガ如シ、上ニ引ケル日本紀略、延曆十三年ノ條考フベシ、

〔賀茂註進雜記中行幸官幣御幸〕天元三年十月十日、天下のます〳〵泰平にして、五穀豐年に、萬民安く平けく守給へと、御代の御祈として、行幸なりおはしまし、御みづから〇融圓御幣奉らせ給ひ、神馬寶物等例のごとしと云々、

〔廿二社本緣〕賀茂事

圓融院以來行幸岡利、八幡恐有遺波行幸、必ズ當社常有二行幸一、仍天兩社行幸登號す、

〔日本紀略一九條〕永延元年十月十一日庚子、奉二遣石淸水賀茂幣帛使一、被レ申二行幸延引之由一、　十二月十

行幸

人者神之所護也、尊神有靈者、人又無患、仰願明神哀納丹心矣、仍立願如件、敬白、

元亨四年（○正中元年）九月日　太上天皇（花園）敬白○

〇按ズルニ、本文所謂准宮ハ、花園天皇ノ母后ナラン、女院小傳ニ、顯親門院（季子）花園母、正中三、二、七准三宮、同日院號、（六十二）トアリ、

〔親長卿記〕文明十九年（○長享元年）八月廿四日、勸修寺大納言奉書到來、就近江國之事御祈事、重靜謐、殊可抽懇祈之由、可下知賀茂下上由、有仰、于奉行職事了、

〔續史愚抄（後陽成）〕天正十六年三月二日乙酉、自今日於賀茂下上社有御祈、（及諸寺社等歟）已上今月、聚樂第行幸無爲事也、

〔日本紀略（桓武）〕延暦十三年十二月庚申、幸賀茂社、

〔賀茂皇大神宮記〕承平のみかど朱雀院とぞ申ける、寛平法皇（○宇多）の御孫、延喜の帝（○醍醐）の皇子なり、この御代にいたりて、世中さわがしき事あり、その故は平將門といへるもの、勅定をそむきて、東へくだりて、謀逆をくはだて、東八ヶ國をうちなびかして、平親王と號し、一門兄弟眷屬をば、卿上雲客諸司のつかさになしける、下總國相馬の郡に都を立て、正税官物をうばひとり、是のみならず、藤原のすみともといへるもの、將門に內通して、西國にて謀逆をおこし、つくし九ヶ國をうちなびけむとす、東夷西戎一時におこりて、四海をうごかし侍しかば、天下のさわぎ人民のなげきいふばかりなかりき、然ば叡慮おだやかならず、公卿僉議ありて、とかく賀茂皇大神の冥助の御めぐみおこたらせたまはずば、などか靜謐なかるべきと覺しめして、承平五年四月廿五日に、賀茂御やしろに行幸なりて、ふかく信心おこたらせ給はずして御願まし〳〵けり、諸社の行幸と申御事は、是ぞはじめなるべし、十善萬乘のやごとなき玉體にて、みづがきのほとりまで御幸ありし御事、まことに希代のちんじなれば、神慮もさこそうれしくおぼすらむかし、あらたな

祈請

（上達部侍臣頭、次東外）給禄於社司等、次著中門内西廊、（殿下西頭、次東上、對座、先居粉熟、）殿上人著同門西掖舍、諸大夫著西舍、次廻御馬、（三度時、馬寮奉入、）次有歌舞事、（拍子時助、琴秋忠、時助一歌、二歌無人可歌、仍有御氣色、祐忠歌也、）此間社司持來桂葵、又獻酒於殿下、如例、出御上達部乘車如例、舞人上馬幷馳了、次御上社、先御祓、次入御於橋殿、有御幣事歟、禄於社司等、次著御饗座、殿上人給、諸大夫同前、社司獻桂葵、次廻御馬、歌舞如例、此間社司持參神酒、羞膳、諸大夫役之、次歌舞了、給禄於舞人陪從等、出御（此間雨下炬火）御馬場、馳御馬了、自是以後無御前上官、次歸御、（於中御門）（邊炬火）予依日不暮、參殿邊退出了、

〔中右記〕天永二年四月九日、今朝殿下（○藤原忠實）有奉幣三社、（春日、賀茂、日吉、）有告文、右少辨實光作之、就中賀茂社告文之中、依例今日以後雖可忌佛事、所惱若有餘氣者、可召僧侶之由口被載也、是依有先例也、今日以後不召僧侶也、夜前御讀經等被渡小寢殿方也、巳時許頗令發御也、

〔賀茂社進難記（中行幸官幣御幸）〕賀茂皇大神の靈驗あらたなる事ども書たる記云、皇太后宮大夫俊成卿、若かりしより賀茂御神にふかく祈申されしは、我和歌の道にかなひ、子孫までに此道をつたへ、世にほまれある冥助を垂させ給へと祈り奉る志他事なしと、年比參詣怠りなかりしが、殊に千日のあゆみはこびて念じ申されければ、願のごとく其名雲井に高くして、嫡男定家卿は、父に超て中納言に昇り、孫爲家は大納言まで昇進ありしは、歌道名譽ゆゑにして、偏に當御神の感應なりとぞ申傳へし、

〔伏見宮所藏宸翰類（七）〕敬白

立願事

右准宮誠信之餘、當社參籠之中、俄被侵病痾、不慮有退出、訪之醫家、鵲瘵未驗、考之術道、鳳擀未快、若依非分汚穢之觸及、則有冥鑒嚴重之譴告歟、誰敢知而可侵、殊以謹而可謝、自非明神之擁加者、爭慣昆毋之秘方、早如所存速令平愈者、共詣當所同可參宿、於戲神者人之所敬也、其人有信者、神豈捨諸

私幣

(中右記)長承二年六月朔日甲申、今日賀茂一社有奉幣云云、上卿民部卿、行事權左中辨宗成、是靈木折由被申也、使新宰相中將公教、次官藏人助元正、　七月十四日丁卯、今日有御召、上卿治部卿、是一日出入待賢門之下女、可爲穢哉否事云々、〇中略今日可有奉幣賀茂由、雖有其議、御占之後、有穢氣遁滿疑、延引云々、　十八日辛未、今日有奉幣賀茂一社、是先日穢氣事云々、上卿治部卿、行事權辨宗成、使宰相中將宗能、後聞宣命仰詞無沙汰、職事上卿又不被沙汰間、已及數刻不便云々、

(百練抄七近衞)仁平三年六月六日、左大臣侍等亂入賀茂社中門內、搦取南京僧玄忠之間、中門觸穢血氣、　七月廿五日、奉幣賀茂社、依左大臣狼藉、可被改造中門東西廻廊之由被申之、

(吉記)治承五年五月二日丁丑、傳聞自院〇後白河被奉獻銀劒唐錦等於諸社、以廳官爲御使云々、〇中略賀茂下上、〇中略御劒一腰、唐錦一帖、御幣紙二帖、白布一段、

(勘仲記)弘安七年閏四月十三日辛酉、被發遣賀茂一社奉幣、頭中將公敦朝臣奉行、康和祭停止之時有奉幣、任彼例所被祈謝也、松尾社同有奉幣、且依同體神也、上卿吉田中納言、

(親長卿記)文明五年四月十六日、鴨禰宜祐尙、縣主正下四位所望事、幷神服織手下地事、近年無神服之儀之間、可改下地云々、有來事、可改之條不可然歟、神服用脚、未到來之時者、已面々令受用歟之由答之、然者可申付他人云々、於其事者非可存知之由返答、

(百一錄)正德二年九月三日、下鴨一社奉幣陣儀、亥刻下鴨本社遷宮、傳奏奉行一社奉幣使等參向、依祝服中差次社氏勤其事云々、

(經信卿記)永保元年四月廿八日乙酉、午初參殿、〇中略出御西對南面、次舞人渡東、次殿下〇藤原師實下御廣庇、以下上達部候同庇、殿上人候南廊、諸大夫候同廊長押下西戸前、次前擧二人渡西、御幣二人次神寶韓櫃二合、次御琴、次神馬二疋、被物、次出納二人、次下家司二人、次神馬二疋、此次第不覺次舞人騎馬渡之、次殿下出御、午初、諸從鳴物等午刻著河原幄、有御祓事、被了右大將渡、留了次入御社頭、先於舞殿有御奉幣、此間

茂社、被謝鹿事也、

(扶桑略記二十九後冷泉)天喜三年五月八日乙丑、發遣奉幣使賀茂貴布禰兩社、是卽貴布禰本宮爲水流損、仍被移立他所之由也、

(經信卿記)永保元年四月廿五日壬午、參內、○中略予著端座未奏時、令置藤実、辨令勘日時持來、勘文云、來七日甲申、時巳二點、若午二點、有懸紙、目辨云、可定申奉幣使者、辨退去了、次召官人、只令官人參入令示外記可奉文書并硯可持來由、外記入文書於宮持來、置前退去、隨時奉幣定文可進入、次官五位三四人、置硯於宰相座前、次藏人辨把笏著座、予等可出奉幣使由辨執筆事也、

奉幣二社使

石清水　前下野守源義家○中略

賀茂上下　參議藤原朝臣公房　內藏助藤原朝臣安高

永保元年五月二日外記申云、左京大夫後遣者、所令進寃也、

辨書了持來、置笏授文、予取之副笏暫持、辨復座後、披見之後、取下入宮文書、入日時勘文、并使定文、目辨、辨起座、自砌進著藤実、予授召宮云、可被內覽并奏者、辨稱唯退出、良久持來云、予披文合眼、辨云、任勘文云々、予稱唯後目辨、辨退去、次令召外記、外記跪少進、予目外記、稱唯著藤実、入日時并定文於宮[illegible][illegible]差日時使定文之後更可之口撤筥、而依近代例一度給之、給之、外記取之、仰云、使儲令催儲者、外記稱唯退出之、次取硯出之、外記申云、大內記敦基朝臣觸穢、少內記安清罷三井寺、晚頭罷歸、宣方可勞候由令申者、予仰云宣方文章生歟、申云、文章生候者、仰云、然者明旦可來之由可仰遣者、外記稱唯退去了、次予罷出了云々、廿六日癸未、內記憲方來向、仰云、明日有石清水賀茂行幸延引、奉作儲宣命、早旦可祗候內也、其趣者、石清水行幸者、須三月內被行也、而聊有思食憚事、自以延引、賀茂行幸者四月被行也、而相當后宮御產當月、仍使陰陽寮占、申云、不快者、所被延引也、此由可載宣命、但相逢藏人辨伊家、慥可尋問者、

令卜求賜留陰陽寮占申云、皇大神留祈申賜波、卽愈息萬利給比奈无止勘申世利、依此天乍歎、參議治部卿正四位下藤原朝臣仲統乎差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持天奉出須、然毛今年乃四月祭使乎、依例天奉出給无止世之留、淳和院乃失火之穢留相交流人々、大宮之内留參雜禮利止聞食天、御卜留令問求賜之留、穢氣見太利、今年波祓謝申賜天、祭使波停止天、可吉止卜申世利岐、仍御卜乃隨留、行仕奉之女太利、故息留波不在、然而祟咎毛也成給无可止奈无謹畏御坐須、此狀乎聞食天、無咎祟久守惠比助幸部奉賜倍、又皇大神乎異留榮飾奉止之奈毛天禰宜千繼門麻呂等留外從五位下乃冠授賜布、神那可良毛每事平久聞食天、天皇我御體乎自常異留、夜守日守留、宜磐堅磐留、護幸倍奉賜比、國家無事久、天下平安留、風水無災之天、五穀豐登左之女給倍止恐美恐美毛申賜久止申、

〔三代實錄陽成三十七〕元慶四年二月五日己丑、遣正四位下右京大夫兼山城權守基棟王、向於賀茂御祖別雷兩社、○中略並奉幣、告以大極殿成、

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年九月廿二日癸卯、分遣使者於賀茂上下○中略神社奉幣、告文曰、天皇我詔旨止掛畏岐賀茂大神乃廣前留申賜倍止申久、頃間天皇我御爲留、不祥之事可有之止就事天所示奈毛有留、如此之事乎波、掛畏岐皇大神乃廣惠留依天之豫防倍岐物奈利止奈毛所念行須、故是以參議正四位下行近江權守源朝臣是忠乎差使天、禮代乃大幣乎令捧持天奉出須、掛畏岐皇大神此狀乎平久聞食天、天皇朝廷乎寶位无動久、常磐堅磐留、夜守日守利護幸賜比、諸不祥事乎波、未然留防除賜比天、風水之災不發賜天、五穀豐稔留、天下平安留、守護賜倍止恐美恐美毛申賜久止申、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十六年六月十二日乙未、奉石淸水宮賀茂上下社臨時幣帛使、奉左右馬寮十列御馬各五匹、左右近衞各十人、

〔日本紀略圓融七〕天元五年六月廿日庚辰、奉遣賀茂幣使、有音樂走馬等、

〔日本紀略後一條十四〕長元七年十月廿五日辛巳、軒廊御卜、依賀茂社鹿入寵事也、　廿九日乙酉、奉幣賀

〔日本紀略嵯峨〕大同四年五月庚午、奉幣於松尾鴨御祖鴨別雷等社、爲止霖雨也、

〔續日本後紀仁明二〕天長十年六月癸亥、是日爲聖體有間、使神祇伯正四位下大中臣朝臣淵魚、奉幣於賀茂大神、

〔續日本後紀仁明十三〕承和十年十一月丙申、遣參議左大辨從四位上正躬王、奉幣帛於賀茂神社、爲令國家昌泰也、

〔續日本後紀十八〕嘉祥元年七月丁卯、奉幣帛於伊勢大神宮、及賀茂上下松尾社、並告依瑞改元、兼令祈防水旱也、

〔文德實錄二〕嘉祥三年八月丁巳、遣右中辨從四位下藤原朝臣氏宗、向賀茂社、○中略告以卽位之由、
九月戊子、遣參議左兵衞督正四位下藤原朝臣助、向賀茂大神社、策命曰、天皇我詔旨止掛畏支大神乃廣前爾申賜倍止申久、先先爾禱申賜倍留御馬幷神財乎、九月爾潔備天奉出賜波波可吉止卜申利七、故是以神財乎設備天、潔捧天奉出須、但御馬波馬寮內爾有穢爾依天、此度波不奉出、來年乃四月乃祭爾設備天奉出无此狀乎聞食天、天皇朝廷乎堅磐常磐爾、天下平安爾護賜比矜賜倍止恐見恐見毛申賜波久止申、庚子、遣侍從從五位上嶋江王向伊勢大神宮、神祇大副從五位下中臣朝臣逸志向賀茂大神社、○中略告以賀瑞之由、

〔文德實錄四〕仁壽二年七月乙亥、遣使者向賀茂松尾稻荷貴布禰等名神、奉幣祈雨、卽日得甘澍、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年七月十四日丙辰、班幣賀茂御祖別雷、○中略賽前日禱、兼祈嘉澍也、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年十一月十二日丁未、遣使於賀茂御祖別雷○中略等神社奉幣、先月祈五穀、今以賽焉、

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年八月廿日丙子、天皇聖體乖豫、遣使於賀茂御祖別雷兩社、奉幣祈禱、告文曰、天皇我詔旨止掛畏岐賀茂乃大神乃廣前爾申賜倍止申久、近來皇帝御體爾、勞苦給處有爾依天、

奉幣

之由乍ㇾ加ニ連署一、今又一身訴申候條、其咎不ㇾ輕、所詮可ㇾ被ㇾ補ニ𦶟香三位一(自ニ舊院一於ニ後聞一、可ㇾ有ニ御沙汰一之由仰ㇾ之)云々、仰ニ其子細一了、

〔朝野群載　內記二十二〕廿二社奉幣次第

宣命紙　賀茂(紅花)

奉幣使　賀茂(公卿一人、五位一人、)

〔夕拜備急至要抄　下〕一賀茂一社奉幣

日次(日時使定)　上卿　參議　辨　內記(宣命料)　使(參議)　官外記

〔二十二社註式〕二十二社次第幣數(○中略)

上七社(○中略)　賀茂二本

〔續日本紀　聖武九〕神龜三年七月乙未、遣ㇾ使奉ニ幣帛(○帛字據ニ類聚國史一補)於石成、葛木、住吉、賀茂等神社一、

○按ズルニ、此ハ太上天皇(元正)ノ御不豫ヲ祈ルガ爲ニ奉幣アリシナラン、

〔續日本紀　聖武十六〕天平十七年九月癸酉、天皇不豫、(○中略)奉ニ幣祈ニ賀茂松尾等神社一、

〔續日本紀　桓武三十八〕延暦三年六月壬子、遣ニ參議近衛中將正四位上紀朝臣船守於賀茂大神社一、奉ㇾ幣、以告ニ遷都之由一焉、

〔賀茂皇大神宮記〕今の京と申は、延暦三年六月甲子、參議近衛中將紀朝臣船守を賀茂皇大神御社につかはして、奉幣をもて、遷都のよしをつげ奉り給ひ、王城の鎭守として、御めぐみふかく、まなじりをめぐらし給ふゆゑに、代々をへて繁昌ましまし、うごきなきこそめでたけれ、

〔日本紀略　桓武〕延暦十二年二月辛亥、遣ニ參議治部卿壹志濃王等一、告ニ遷都於賀茂大神一、

〔日本後紀　桓武五〕延暦十五年十一月辛丑、始用ニ新錢一、奉ニ伊勢神宮賀茂上下二社松尾社一、

〔日本後紀　桓武十二〕延暦廿四年四月己酉、遣ㇾ使奉ニ幣帛於賀茂神社一、

神供

同断
一同　九石五斗七升餘　同人屋地子
合現米百六拾四石壹斗六升餘
右者此度修理料ニ相定之條、向後神藏ニ納置之、社屋小破之節、相窺可修補候、且又山之物成、并風折倒木等於有之者、不限多少、神用ニ相達候様ニ、元祿四年五月、兩奉行奥書ニ而書付相渡、

〔百練抄五堀河〕寛治三年八月十六日、諸卿定申石清水社與松尾社相論事、并賀茂社御供事、件御供自去應德三年、依託宣供之、而於今者社司无力之由、言上之故也、　四年三月廿六日、自今日始調備賀茂社神膳、依託宣云々、有奉幣、

〔親長卿記〕文明三年七月廿日、鴨社日供闕怠云々、先規希歟、　廿一日、今日鴨社注進、依神人違亂、昨日日供闕怠云々、暫社務祐康、祝秀顯縣主、氏人等來、申件子細、可有御罪科神人等云々、　廿三日、自去廿日至今日、猶日供闕怠云々、社司與神人相論之故也、自公家被申武家了、　後八月十七日、及晚參内、衣冠祐康縣主與祐樹縣主相論事奏聞、申狀在別、
祐樹申云、自去七月廿日至卅日、日供闕怠、祐康過怠云々、祐康申、今度神人不隨社司氏人之命之間、任先例退神人等、以社家之雜色可備日供之由可訴申、然者定神人可及嗷訴、其時若神人等及違亂、可闕怠日供、神人奉行日供云々其時者不可有社務、一身過怠之由、各以連署定置了、依可有其過哉、今度又氏人等并秀顯者、於祐樹令被補社務者、止神事可及違亂云々、
仰云、日供十箇日闕怠事、神人與自兼日有相論、如此强非社務咎、但神用及數日無沙汰之故、神人之及違亂了、依神用未到不叶者、可辭職之由、乍捧請文、無其儀之條過怠也、今度支狀事被仰出之處、内伺申入之處、於社務職者、不可有御改替之由號被仰出之由、難遁虛言第一也、可被改職也、
祐樹事、去年氏人一同訴申云々、今又同前也、其上日供闕怠事、自兼日一社一同評議、不可有社務處

外ニ八石三斗　造營料

右之通此度修理料ニ相定、向後社納〇中略候樣ニ、元祿四年五月、兩奉行以奥書渡置之、

〔京都御役所向大概覺書〕五山城國中御朱印神社之事〇中略

上賀茂　山城國愛宕郡賀茂山鎮座

一御朱印社領　別雷皇大神宮

高貳千五百七拾貳石　此內ニ凡五拾石程貴布禰領有

境內東西貳拾壹町、南北三拾五町、但山林共

上賀茂　社三拾七箇所內　本社壹箇所攝神八社末社貳拾九箇所

同　佛閣拾八箇所內　社領配當寺八箇所、境內之寺庵拾箇所、〇中略

同社修理料

社領高貳千五百七拾貳石之外

一現米百三拾石　柊原新開年貢

同斷

一同　五斗五升　御沼池新開年貢

社領高貳千五百七拾貳石之內

一同　四石七斗貳升　川成荒起年貢

同斷

一同　八石七斗三升餘　慈雲庵貞信松女年貢分

同斷

一同　五石六斗三升餘　右馬助分年貢

貞享二年六月十一日

〔京都御役所向大概覺書 五〕山城國中御朱印神社之事〇中略

下鴨　山城愛宕郡下鴨村

一御朱印社領　御祖皇大神宮二座

高五百四拾壹石

境內南北三百七拾間、東西貳百九拾間、

社　貳箇所

佛閣四箇所

百貳拾石　梨木左京權大夫

拾石　祝　鴨脚周防守

同社修理料

社領高五百四拾石餘之內

一高拾貳石七斗五升五合　無社役 百姓拾三人分

同斷

一高四石九斗九升八合　同斷 大工三人分

同斷

一高八斗　同斷 善勝庵分

同斷

一高貳拾九石四斗三升四合　同斷 靜原百姓分

合四拾七石九斗八升七合

（○後光嚴）御代、再往有其沙汰、鞍馬寺寛和宣旨、嘉禎官符等不備進、正文之由有沙汰、舊院御代、賀茂社得理に而、當御代（○後圓融）鞍馬寺至越訴、宣旨官符等正文、寺家雖令所持、奉行引汲賀茂間、不備上覽之由申之間、當御代被裁許鞍馬寺之處、武家忽經奏聞、賀茂社又得理云々

〔親長卿記〕文明十年八月廿二日、參內番也、奏賀茂條々、

由良庄事、自一社如元可被付社家領之由申之、（去々年被訴、勝平縣主爲別納可知行之由爲一社申之、仍先年被下勅裁於勝平了、其後勝平被誅之間、爲無主之地之間、彌久縣主去々年冬申給了、）彌久縣主已爲聖斷被下之上者、止社家之競望之樣可被仰付、以社領爲社領之例、一紙注進之、信平（勝平養子）申云、故勝平縣主爲拜領之地可被返下云々、仰云、本役（貴布禰兩宮各千疋宛沙汰之）致其沙汰了、雖被召返、當年事者、先被指置、後年可被經御沙汰云々、

長享三年六月廿三日、早旦參內、鴨社社領、亂中無沙汰之在所令沙汰歟否事、去年雖相尋祠宜信祐、申不沙汰之由、當年又依有其聞令尋之處、無其儀云々、仍尋代官處、申子細、奏聞兩方之申狀、猶堅尋決可申云々、

〔集古文書（四十一 施行）〕天正十一年施行狀

賀茂社領境內六鄕、幷所々散在等事、從先規三社之內爲守護使不入、度々御下知被帶御朱印、殊秀吉被遣御折紙之上ハ、山林竹木、人足非分課役以下、如先々令停止之狀如件、

天正十一　十二月廿三日

賀茂　總中

〔京都御役所向大概覺書（四）〕御朱印傳文言之事

御朱印

上賀茂社燈明料、山城國愛宕郡西賀茂川上鄕之內三拾八石之事、任元和三年八月廿八日、寛文五年七月十一日、兩先判之旨、中大路甚助、岡本下野、如有來全收納、永不可有相違者也、

可早無事煩令運上賀茂別雷社領山田竹原等庄年貢米事

右彼庄々御米者、殿重用途也、云點定之船云水手之催不准他所早停止件等之課役止之路次之狼籍合期可令運上之狀、所仰如件、在廳官人庄官等宜承知、不可違失、故下、

壽永二年十一月四日　主典代織部正兼皇后宮大屬大江朝臣判〇此他連署略

〔吾妻鏡三〕壽永三年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二所〇二原本作一、據下條賀茂社遷幸記改、ヶ所、任院廳御下文可止武家狼籍之由有其沙汰云云、

〔賀茂社遷幸記神領下〕下　諸國

可早任院廳御下文、停止方々狼籍備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、

近江國舟木庄　安曇河御厨　美濃國脛長庄　尾張國高畠庄　玉井庄　参河國小野田庄　遠江國比木庄　笠名鄕　蒲居濱　丹波國由良庄　私市庄　攝津國朱谷庄　播磨國安志庄　林田庄　室塩屋御厨　美作國倭文庄　河内庄　便補保　備前國山田庄　竹原庄　備後國有福庄　伯耆國星河庄　稻積庄　出雲國福田庄　伊豫國菊方庄　佐方保　周防國伊保庄　矢島柱島　竈戸關　和泉國深日　宮作庄　淡路國佐野　生穗庄　紀伊國紀伊濱御厨　阿波國福田庄　能登國土田庄　桃浦　若狹國宮川庄　矢代浦　加賀國金津庄　越中國新保御厨

右肆拾貳箇所神領任院廳御下文、停止方々狼籍武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、慥可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年正月廿二日丙午、以出雲國安東鄕、先日令寄附于鴨社神領給訖、而可爲冬季御神樂料所之旨被仰遣、廣元施行之、

〔後深心院關白記〕永和五年〇康曆元年十月十九日壬午、賀茂與鞍馬寺、堺相論及合戰云々、此事自舊院

官物三斗也、仍進其官符案等者、右宰相中將成通朝臣發語定申云、以兩方所進文書、被下法家、理非勘決後可被裁許歟、内大臣、民部卿(忠教)新大納言(實行)右衛門督(實能)左兵衛督(宗輔)中宮權大夫(忠宗)左宰相中將(宗能)左大辨(實光)等皆同之、

下官獨申云、所論賀茂吉田兩社司、各寄於神威所進長和寬仁二歳符、共出自論言、理非難決、左右爭定、先於官底對問論人、比校官符、其後可被裁許歟、右兵衛督定申云、吉田社司之所進者、左大辨讀之書之、長和寫官符帳坪奉免、其狀云、粟田左大臣爲長者時、分私領所寄進也者、鴨御祖社司所進、寬仁二年官符、一郡皆進、其狀云、於社領寺領、并氷室寄人右近馬場守等作田、比叡山四至等者免除、其外雖私人領、於三代國司免除所非自專云々、如此狀者、雖有寬仁一郡所進符、於長和奉免地、吉田社可領知歟、倩案鴨社司申狀云、所免之官省符不輸田也、於地子領地、任官符當社徴三斗官物例也者、此事尤可被對決傍例顯然歟、長和官符、粟田左大臣長者云々、件人不分明不審也、符案皆在官底、被比校時、眞僞無其疑歟、仍所申此旨也、

諸卿無心、併在吉田方、皆是爲氏人、(○藤原)其程可然歟、

〔賀茂註進雜記(神領下)〕下賀茂神主重保所

可令早且任院宣狀、且依先例、无相違致其沙汰當社御領等事、

右一天之下、誰人不奉仰神明之驗德、四海之中、何所可相背皇化之叡旨、因茲往昔奉免之地、其數繁多、而平家誇自權、蔑如皇憲之間、忽以滅亡、其間近日、於當御神領者、任先例可令致其沙汰之由、雖被下院宣、不令承引之條、甚以不當也、於今者早且任院宣狀、且依先例、可致其沙汰之狀如件、故下、

壽永二年十月十日　前左兵衛佐源頼朝(判)

〔賀茂註進雜記(神領下)〕院廳下備前國在廳官人等

右去年十一月廿五日、行幸彼社、以件八郷被奉寄了、今商量便宜、平均田圖所定如件、抑件諸郷所在神寺所領、及齋王月料、勅旨湯池、埴川氷室、徭丁陵戸等田、幷左近衛府馬場、修理職瓦屋、其守丁役人、皆是百王之通規、曾非一時之自由、仍任舊跡、不敢改易、加以延暦寺領八瀬横尾兩村田畠等、代々國宰、以租稅宛禪院之燈分、令住人勤彼寺之所役者、久作佛地、何爲神戸哉、但除社素所知之神山採葵山之外、諸山者或是寺社領來之處、或又公私相傳之地、自暦年紀、難輙停止、亦至于戸田治田造畠等者、社司領主共檢公驗、租分令納於社、地子可免本主、此外田地官物官舍等類、自今以後、悉爲神領、即以其應輸物、永宛恒例祭祀、神殿雜舍、幷上下枝屬神社、神館神宮寺等修造、幷臨時巨細之料矣、正二位行大納言兼右近衛大將藤原朝臣實資宣、奉勅依件分宛者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左少辨正五位下兼近江守源朝臣　　正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣

寬仁二年十一月廿五日

〔百練抄五堀河〕寬治四年七月廿三日、賀茂上下社被奉不輸田六百餘町、〇六百餘町、一代要記、帝王編年記、作百餘町、爲御供田、近日稱有夢想供御膳、依神稅不足也、又分置御厨於諸國、俗諺曰、將亡聽政於神、此謂也、

〔朝野群載七攝籙家〕制封戸奉寄諸社、〇中略天永元年十一月廿日、攝政右大臣正二位藤原朝臣、〇頼通中略、

賀茂下社十烟尾張五烟、美作五烟、　賀茂上社十烟備後五烟、阿波五烟、

〔長秋記〕長承元年五月十五日甲戌、未剋參內、〇中略大臣仰官人召取文、以次第下之史、秉燭大辨開文讀之、

一鴨御祖社司與吉田社司、相論御供田四段間、吉田社司申云、件田粟田左大臣爲長者、以私領施當社、隨長和四年可爲社領之由則官符、數百歲間、無牢籠所領掌也、其旨見所進長和官符、而鴨御祖社司乖此旨、始自去年致其妨云々、鴨社司申云、寬仁二年分一郡所被寄進當社、其中雖有神社佛寺領、非官省符所者、尙於官物三斗辨當社、於地子辨本所也、而件吉田領、本官省符由不見、仍所徵

〔九暦〕天德元年四月十六日、賀茂社奉封事、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁元年十一月廿五日己未、天皇行幸賀茂社、皇太后〈○母后彰子〉同輿、宣命云、愛宕郡可奉寄之由先年祈申、而件郡或帝王城都、或明神鎭地、皆是萬代相傳之處、非一人自由之地、仍南限皇城北大路、東限郡界、西限大宮東大路末、北限郡界、但此内有陵室〈○室恐靈誤〉藏氷之邑、是百王之職事、難致一時之改易、縱在神郡内、可除此一邑、抑上下御社平均所進分也、

〔左經記〕寛仁元年十一月廿九日癸亥、參右大將御許、被奏云、被奉寄賀茂社愛宕郡中所有社司諸寺諸人所領田畠山野幷省營田等、仰國司幷所々、令奉官省符幷坪付等、兼又仰國司令奉繪圖等、官省符分明〈仁之氏〉、無牢籠之所者、如本令領掌、不分明所々、幷自本爲國領所々、遍相定可分奉上下御社也、隨仰可仰行也者、昨今攝政殿御物忌、仍不參、直歸畢、〈○又見小右記、年中行事秘抄、〉

〔小右記〕寛仁二年十一月廿五日癸未、參内、〈○中略〉被奉寄賀茂上下郷々事可定申也、栗栖野小野二郷上下社司各申、但昨日下社司久清進解文、可尋舊記、皇御神初天降給小野郷大原御蔭山也云々、亦栗栖野可爲下社之山、有採桂葵山之由、先年給官符、仍件小野幷栗栖郷、可爲下社領者、令仰降座御蔭山之記文可進之由之處、申云、康保二年、禰宜宅燒亡次、燒失者、

〔類聚符宣抄一〕太政官符〈民部省〉

應以山城國愛宕郡捌箇郷奉寄賀茂上下大神宮事

四至〈東限延暦寺四至　南限皇城北大路同末　西限大宮東大路同末　北限郡界〉

御祖社四箇郷

蓼倉郷　栗野郷　上粟田郷　出雲郷

別雷社四箇郷

賀茂郷　小野郷　錦部郷　大野郷

〔二十一社記〕二十一社（分賀茂下上爲二社、則二十二社也、）

上七社

伊勢　石清水　賀茂　松尾　平野　稻荷　春日

〔大日本國一宮記〕鴨大明神（號下社、大山咋父、故號御祖、又曰糺宮、大己貴命也、）賀茂大明神（號上社、大山咋神也、號別雷、母玉依姫、武角身命女、）　山城愛宕郡

〔廿二社本緣〕賀茂事

凡昔伊勢八幡賀茂乎波三社都天、神領モ餘社甫不准、崇重禮異他奈留者也、已上

〔延喜式（臨時祭三）〕凡鴨御祖別雷熱田三社、神税穀者、社用之外不得用、雖充社用、申辨官待報、

〔新抄格勅符抄（神封）〕大同元年牒

若雷神廿四戸（山城十四戸、丹波十戸、）　鴨御祖神二十戸（山城十戸、丹波十戸、天平神護元年九月七日、）

〔續日本紀（桓武三十八）〕延暦四年十一月庚子、詔賀茂下上社、充愛宕郡封各十戸、

〔續日本後紀（仁明十八）〕承和十五年（○嘉祥元年）二月辛亥、正一位勳一等賀茂御祖大社禰宜外從五位下鴨縣主廣雄等欵云、去天平勝寶二年十二月十四日、奉充御戸代田一町、自爾以降、未被奉加、因玆年中用途之少、請（○請上一本有望字）准別雷社、加増御戸代田一町、勅許之、（○又見本朝月令）

〔三代實錄（清和十）〕貞觀七年四月十七日丁卯、勅奉充諸明神神田、（○中略）賀茂御祖神五段、別雷神五段、（○中略）並以山城國愛宕紀伊乙訓葛野等郡、得度除帳田充之、

〔新抄格勅符抄（神封）〕諸神新封　本封之外合加私注付（○中略）

賀茂御祖神十戸（山城國）　同別雷神十戸（山城國）

○按ズルニ、此書上文、伊勢大神封戸ノ下ニ、天慶三年八月廿七日奉寄ト註セルヲ以テ、之ヲ日本紀略扶桑略記ノ二書ニ參考スルニ、賀茂神社ノ新封モ亦此時ノ事タルヲ知ル、

大野市右衛門

〔公卿補任光格〕寛政十三年〈○享和元年〉十一月廿一日、賀茂別雷社、片岡社貴布禰社等、正遷宮日時定、上卿中宮大夫、〈○光條〉辨延光、奉行國長、

神階

〔續日本紀三十八桓武〕延暦三年十一月丁巳、遣近衛中將正四位上紀朝臣船守、敍賀茂下上二社從二位、〈○中略〉以遷都也、〈○又見日本紀略、類聚國史、〉

〔日本紀略桓武〕延暦十三年十月丁卯、鴨松尾神加階、以遷都也、

〔本朝月令四月〕中酉賀茂祭事

大同二年三月、〈○三月、日本紀略作五月、〉從一位勳一等賀茂御祖神奉授正一位、〈○中略、又見日本紀略、帝王編年記、〉

社格

〔延喜式九神名〕山城國愛宕郡

賀茂別雷神社〈亦名若雷、名神大、月次相嘗新嘗、〉

賀茂御祖神社二座〈並名神大、月次相嘗新嘗、〉

〔延喜式三臨時祭〕名神祭二百八十五座

賀茂別雷神社一座

賀茂御祖神社二座

〔類聚國史十九神祇〕天長元年四月甲午、以祝部枚麻呂補正一位勳一等鴨別雷大社祝、乙未、以從八位上鴨縣主淨益爲正一位勳一等鴨御祖大社祝、

〔中右記〕嘉承元年八月三日、依有陣定酉時許參内、〈○中略〉去四月賀茂上社失火之輩罪名、明法博士實清勘申事也、彼社預實久准大社失火可處遠流徒年者、先日陣定之時、稱大社者伊勢神宮也、於此社者、從昔不定大中小社、而稱大社條、若是有證據歟、可進證文之由、前日下官定申了、仍被問明法處、今度重勘文不進證文、只申准據之由、人々可勘定之由議、但去四月本社燒亡之後、准大社被行廢朝了、如此之間難左右、故可隨聖斷之旨定申、　廿二日、後聞今夜被行賀茂失火輩罪名了、上卿右大將新宰相、頭實□、少納言家隆參仕、〈本社預實久流罪隱岐國、從二人徒罪三年、〉准大社火事被行歟、

外金七千四百拾兩貳步

下上賀茂幷貴布禰、神寶神財、佛像佛器、品々修補新調遷宮料、

右者、寶永八卯年、御老中御證を以、大坂御藏金相渡ル、

〔京都御役所向大概覺書 五〕山城國寺社方間數御修復所之事〇中略

一上賀茂社堂舍

御本社桁行三間梁行壹間六尺壹寸　御拜桁行三間奥行壹間四尺六寸　權之社桁行三間梁行壹間六尺壹寸　御拜桁行三間、奥行壹間四尺六寸、　透廊桁行四間梁行壹間三尺六寸　曲り廊下桁行貳間三尺六寸梁行壹間壹尺　祝言屋桁行五間三尺、梁行壹間壹尺八寸、　御料渡屋桁行六間梁行壹間壹尺七寸　祝方御料屋桁行五間梁行貳間　西渡り之屋桁行三間貳尺八寸、梁行壹間、

樂之屋桁行貳間三尺七寸梁行貳間壹尺　神事御料屋二間六間　直會所桁行九間壹尺六寸梁行壹間四尺五寸　縁側九間一尺六寸、五尺、　御所之屋桁行六間壹尺梁行三間壹尺五寸　高倉桁行六間梁行貳間　細殿梁行貳間壹尺桁行五間貳尺五寸、　舞殿梁行貳間、桁行六間三尺、　土之屋梁行貳間壹尺桁行六間壹尺　樂屋梁行貳間壹尺桁行三間壹尺五寸　幣殿梁行三間桁行四間

右之外小社拾九箇所、大小鳥居井垣板橋所々門、幷番所所々廊下、所々塀板塀木柵井土屋形雪隱等、幷取置假殿舞臺等有之、〇中略

右上賀茂社堂舍御修復、寶永七寅年より、正德元卯年十一月迄ニ御造畢、

御本社御造替、其外者御修復、

右御入用

銀六百貫四百拾貳匁九分壹厘　但大坂御藏銀相渡ル

金ニ仕壹萬六兩三分銀七匁九分壹厘　但壹兩ニ付銀六拾目替

松平紀伊守與力奉行

羽太半右衞門

東御本社〈表三間五分、奥行壹間六尺三寸〉御拜共　西御本社〈表三間五分、奥行壹間六尺三寸〉御拜共　祝言屋〈梁行壹間三尺壹寸、桁行四間五尺五寸〉幣殿〈梁行貳間半、桁行八間六尺〉　東御料屋〈梁行三間、桁行四間〉　西御料屋〈梁行三間、桁行四間〉　畔藏〈梁行三間、桁行三間〉、一言社〈表三尺、奥行五尺五分〉御拜共宛貳社　二言社〈表三尺、奥行五尺五分〉御拜共宛貳社　三言社〈表三尺、奥行五尺五分〉、御拜共宛貳社　四ッ足中門〈桁行貳間三尺四寸、梁行壹間五尺九寸〉　東樂屋〈梁行壹間、桁行三間三尺五寸〉　西樂屋〈梁行一間三尺五寸、桁行三間〇中略〉　神馬屋〈梁行貳間半、桁行三間半〉　大炊殿〈梁行三間、桁行五間〉廂有　御服所〈梁行四間、桁行五間〉　御供所〈梁行三間、桁行九間〉廂有　舞殿〈梁行三間、桁行四間〉　御手洗水屋〈梁行七尺壹寸、桁行七尺壹寸〉但小社有　雷殿〈梁行貳間、桁行三間〉、御拜有　橋殿〈梁行三間三尺、桁行四間四寸〉　樓門〈梁行四間四寸、桁行貳間壹尺貳寸〉　廻廊〈梁行七尺、桁行延三拾貳間四尺八寸〉　細殿〈梁行貳間貳尺、桁行五間五尺〉御拜有　比良木社〈表壹間五尺六寸、奥行貳間三尺七寸〉御拜有〇中略　御蔭東西之社〈表六尺貳寸、奥行壹間四尺五寸〉御拜共宛貳箇所　同所拜殿〈梁行壹間半、桁行壹間半〉

河合御本社〈表三間五分、奥行壹間六尺三寸〉御拜有〇中略

右之外ニ小社拾貳箇所、犬小鳥居井垣玉垣、所々板橋、所々門并番所、所々廊下、所々練築地塀木欄湯殿雪隱等有之、

右下鴨并河合社堂舍、正德元卯年より、同二辰之年九月迄御修復、御本社御造替、其外者御修復、

右御入用

銀六百貳拾四貫貳百三拾四匁貳分口羞　但大坂御藏銀相渡ス

金ニ仕壹萬四百三兩三步銀九匁貳分四羞　但壹兩ニ付銀六拾目替

松平紀伊守與力奉行

古庄彌五左衛門

安藤總大夫

申渡也、多舊記內能々類入候由申渡也、爲其一禮黃金一包持參也、中々不及請取候へ共是非ニ
申候間、先預置義也、
〔親長卿記〕文明十年九月四日、及晚參內、北小路殿御申賀茂祝事、可被任補重則事假殿用脚事、無所帶、去々年社司致約諾、社頭及回祿、依其科條可被召所帶之由被仰出之處、歎申之間、然者年々造營中、私領之內、依分限可進公用之由被定仰了、其內祝重修、于今一錢不及其沙汰、仍被改祝職也、但重則弟、北小路殿被執申之故也、於重則者非其人數、雖任祝於所帶者非知行、只渡領許也云々、申所有其謂、然者先可被任祝、於重修者、猶其用脚不致沙汰者、可被召所帶之由可仰云々、
長享三年十月十四日、鴨社務宣祐三位來、鴨社造營事、已前直社頭樹、其外可爲五千疋之由申定畢、幸梅原庄年貢可有之上者、一向以彼用脚可有沙汰歟、仍改損亡云々、何樣可奏聞之由返答、
〔鴨社司祐信記〕寛永五年正月八日、河合の內三家へ參る、〇中略 祝詞をよむ、
掛毛畏岐河合大明神乃廣前仁恐美恐美毛申佐久、縣主祐信、慶長十二年十一月二日仁、河合禰宜職拜須止雖止毛、身才足仁佐留依氏、徒仁年序乎經、今年中宮殿下〇後水尾后藤原和子御再興有遷宮由、因之氏奉奏慶乎、神奈加良毛此狀乎聞食天、咎毛奈久祟毛無久、夜乃守利晝乃守利仁、守利幸賜倍止恐美恐美毛申壽、〇下略
〔公卿補任〕後水尾寛永五年三月六日、賀茂別雷社造替、八月廿日、鴨御祖社木作始、幷賀茂別雷社立柱上棟等日時定、上卿中御門大納言、〇光廣 辨俊光、奉行基親朝臣、
〔公卿補任〕靈元延寶七年正月廿三日、賀茂下上社幷河合社造營木作始日時定、九月十六日、賀茂下上社貴布禰奉幣發遣、同日賀茂社正遷宮、奉幣使民部卿、〇甘露寺方長次官在庸、辨顯定、
〔京都御役所向大概覺書〕五山城國寺社方間數御修復所之事、〇中略
一下鴨河合社堂舍

殿御遷宮去六日夜也、依為奉行所参也、辨許参也、件造營事、社家勤之、但金物神殿御裝束御鏡及神寶等、自官行事所調送也、半分已為成功者、　九月十六日乙酉、今夜鴨御祖社遷宮、此造宮依恒例社家經營、但任例自公家給日時、又被調進神寶、神殿之御裝束、行事辨左少辨俊經也、神殿之御裝束、盡自官付社家、遷宮亥剋云々、行事辨俊經參入、着中門西廊座、自社家居饗、次遷宮之間、敷半帖於中門砌下、辨居朝御膳於假殿供之、夕於新殿供之、遷宮之後、辨歸着本座、食御納禮退出云々、後日俊經所談也、

〔吉記〕養和元年三月八日甲申、參院、相待藤中納言參奏條々事、

一鴨御祖社司申云、今年滿廿二年造宮也、被仰成功者可被造營、件事自去々年雖奏于今无裁許、御領等違亂之間、社家彌无力之由所申也、仰云、攝政可被計申、又可被仰合可然人々歟、　十一日丁亥、參右府、○藤原兼實依仰合鴨社造營事也、即出逢給、任先例可為社勤、其上自公家可有御沙汰歟之由令申給、次參院、依中間及晩付左京兆奏條々事、于時殿下令參給、无御謁見、次參內、頃之退出、

〔百練抄安德九〕養和元年十月廿二日、鴨社遷宮、

〔親長卿記〕文明二年十月卅日、參院、鴨社假殿損亡事、萬三千疋奏聞次仰廣橋大納言○綱光了、可申武家之故也、

十二月十七日、鴨社假殿造營事今日也、　三年十月廿三日、今日鴨社假殿立柱上棟也、　八年二月廿九日、鴨社造營事奏聞、可被申武家云々、

〔長興宿禰記〕文明八年八月廿三日、賀茂社燒亡、去五月、社司等數輩、為氏人等張行被殺害、然間今日相殘社司等相語、軍兵發向、氏人等館放火、數十人打殺、氏人等數百人內、少々閉籠社頭、及合戰之間、自放火令自害云々、仍本社悉燒失、御神體別雷氏人奉取出云々、末社少々燒殘、氏人以下在々所々各燒亡、神官在家人悉分散、社家為空原云々、可歎事也、

〔梵舜日記〕寛永八年五月卅日癸卯、上賀茂氏人兩人來、權大副左馬助、總氏人為使者夜入來、申渡義者、先年文明八年ニ、社頭炎上之時、當家兼俱社頭置目申渡之由也、然共文明八年記不具之由

後聞神人國貞〈加〉從者男、取松火入幣殿、出了閉戸、頃而火從幣殿出來、定知件松之餘火落留、付幣紙出來也、

八日、今夕頭辨依院御氣色送消息云、鴨御祖社早可造之事、社司觸申也、當社無成功例、何樣可被行哉、可計申者、

進返狀云、件御社造營事、先正殿幣殿下知社司、可被造進也、正月元三之間、御假殿由頗不穩便、年月內可造畢之旨、可被仰社司也、若力不可堪之由猶以言上、申請事可被裁許也、如榮爵被下宣旨如何、中門回廊舞殿等已及廿年了、早尋成功者、明年四月祭以前、可造進由可被仰下也、當社未有如此大事、仍可被忩作事也、春日、平野、大原野、吉田等社、有大破時、皆募受領功、所被造營也、仍彼社等例被修造、有何難哉、但臨時祭在近、作假殿屋、擬舞殿、被遂如在之禮可宜也、早以此趣可被奏達之狀如件、

今夕鴨御社作假殿、亥時許奉渡正體了、行事右中辨雅兼朝臣、史貞辰也、　廿三日、夜前以阿波守尹經、賀茂下社正殿回廊中門等、皆悉可造進之由被仰下了、今日正殿棟上云々、被用神祇官御卜也、

十二月廿二日甲午、今夜賀茂下御社、從假殿渡御新造正殿、神寶從公家被調進、今朝於御前有御覽云々、

抑公家被調進神寶、而今日僧侶參御前如何、又中宮有御佛名、頗首尾相違也、

〔百錬抄〈六崇德〉〕保延四年二月廿三日、鴨社神館并神宮寺社頭西塔燒亡、

〔本朝世紀〕康治二年七月廿九日甲申、權大納言源雅定卿參仗座、定申賀茂遷宮日時事、〈八月四日戊子〉　八月四日戊子、今日賀茂別宮社御遷宮也、〈去月廿四日依雨延引〉左中辨藤資信朝臣參入行事、〈○又見賀茂社遷宮雜記〉

〔山槐記〕應保元年七月八日己卯、藤中納言〈實定〉被定申鴨御祖社假殿遷宮日時、信範同所奉行也、件事只勘日時、下給社家之許云々、造營事、公家不知食、廿年一度本社作改云々、　八月六日丙午、今夜鴨御祖假殿遷宮云々、社家造之、但行事辨俊經參向云々、　十四日甲寅、左少辨俊經曰、鴨御祖社假

了、社司等奉仰馳歸本社、　二日甲辰、臨未刻右大臣、（〇源雅實）內大臣、（〇藤原忠通）右大將、（〇藤原家忠）右衛門督治部卿、別當右兵衛督左大辨、參集仗座、予加其座、頭辨顯隆朝臣、下社解、幷官外記勘文云、可定申、右大臣給之、一々見下、予披見之、社解云、去夜戌刻火出、從御庫及正殿、中門廻廊舍屋廿宇已燒了、是神人國貞當番也、又官外記勘文云、去嘉承元年四月十二日夜、上御社燒亡時被行例也、廢朝奉幣、軒廊御卜、假殿正殿、可被作日時等、被勘申事也、左大辨定申上云、偏依嘉承例可被行也、數日御小社、神慮有恐、早忩作假殿、可奉渡也、右兵衛督同之、別當被申云、本社造作事可被忩也、但先被問本社司、爲若不堪者、以成功人可被作歟、事已爲大厦、難終不日功也、治部卿定申云、番直者、只雖申國貞一人、大社之中、當番只一人甚有疑、先召件國貞可被拷問歟、且爲誡傍輩、燒亡之根元、尤可被尋問歟、自餘事同人人議、（〇中略）此間入夜、奉幣假殿事正殿事、軒廊御卜事、早可被勘日時者、右大臣移著端座、以官人令敷膝突、右府被議云、先可勘日時歟、又可行軒廊御卜歟如何、予申云、先被勘日時可宜也、若今夕假殿木作始可候者、早々下給日時可宜歟、就中正月、又御假殿事、社司無便之由申上、年內依可被作正殿、件日時早可下給事也、右府被答云、尤可然、仍召右中辨雅兼、可令勘件日時之由被仰下、（陰陽寮召儲也）則日時三通勘之、假殿日時一枚、（木作始今日甲辰、立柱上棟今日、奉渡八日庚戌、）正殿日時一枚、（木作始八日庚戌、立柱上棟廿三日乙丑、奉渡御體十二月廿二日甲午、）奉幣日時一枚、（今月十六日戊午、依物忌皆書宿紙、）則披見之被定申、奉幣使依嘉承例、使中納言、（予）次官四位殿上人、（家定朝臣）定文左大辨書之、（給召例文可被定歟、上卿不召如何、）日時三枚、使定文一枚、召外記筥入之、時付頭辨被奏、則下給、召右中辨、被下日時二枚之次、被仰下云、早參向下御社、燒亡之事可實檢也、又此日時勘文等可下知也、（〇中略）入外記筥付頭辨被奏、則被仰下云、廢朝三ヶ日、明日明後日、諸社祭延引、（〇中略）今日齋院相嘗後朝御神樂延引云々、去嘉承、上御社遷宮之次年燒亡、今度下御社遷宮之次年燒亡、兩度同樣也、抑去嘉承元年四月、上御社燒亡、今年十一月、下御社燒亡、祭相嘗之月有此火事、誠有恐事也、上御社燒亡之時、依未有此事、有諸道勘文、今度只依嘉承例、雖無諸道勘文所被行也、

可慎可尋、

廿七日戊子、參殿下、入夜內大臣被參、仗座、令予奏賀茂遷宮日時之由、被仰聞食由、其次奉幣日時、同被仰可勘之由、予被仰下官仍召陰陽寮令勘日時、(遷宮日時七月二日、奉幣日時五月一日、)二通覽上卿、(藤實)又可始同御社御裝束之日時令勘申之、予奏覽之、前駈幷行事所日時被下、右中辨、奉幣日時被下予、宣下中口史、七月二日辛卯、今日賀茂社假殿上棟云々、　廿六日乙卯、御物忌、今日賀茂上御社御遷宮也、寅刻渡御假殿、辰時遷御正殿、行事右中辨長忠朝臣參向云々、史廣信、官掌行久等同參行者、○又見賀茂注進雜記

〔百練抄 五堀河〕嘉承元年四月十三日、賀茂別雷社燒亡、御正體奉移貴布禰社、令諸卿定申其間事、廢朝有無、仰諸道勘申之、三ケ日之由被定云々、

〔帝王編年記 十九鳥羽〕元永二年十一月一日、戊刻鴨御祖社寶殿已下燒亡、(失火)御體先奉渡御讀經所、其後奉移地主明神神殿、(號比良木明神、)同二日、被仰下廢朝三ケ日、○又見百練抄

〔中右記〕元永二年十一月朔日癸卯、丑刻大有叫門者、乍驚聞之所、從院有召、(白河)○是急事也、早々可馳參者、申承由出立之間、又有御使、早可參者、飛車參院御所三條烏丸亭、以頭辨被仰云、賀茂下御社、此戌刻拂地燒亡了、火出從庫中及寶殿之由、只今禰宜惟長、祝惟助、馳參所奏也、誠驚思食、儀間子細可申者、依仰問之所、今日依相嘗供新嘗了、其後各歸家休息之所、御社方有火、馳參見之、火炎廣及、已付正殿、奉取御正體、渡御經所了、其後中門廻廊樓、皆以爲煨燼也、予奏云、先奉渡經所、甚以可無便事也、去嘉承元年四月十二日夜、上御社燒亡時、御正體所奉渡貴布禰社也、依彼例、若所殘之小社候ハヾ可奉渡也、禰宜申云、氏神社と號小社殘也、然者欲奉渡彼社如何、奏事之由、尤可然也、又問云、今日中作假殿可奉渡歟、惟長申云、上社ハ一夜御他所之例不見、仍一日之中作假殿、已於下御社者渡他所經數日常事也、仍雖非一日中可被候假殿也、又付上御社燒亡例、萬事可被行之由奏了、且又明日有障定、此間之事、可依群議由奏了、頭辨奉仰、以消息告廻諸卿了、早々天不明前、可渡御氏神社旨仰社司

消之、火光暫以不見、須臾告祝成季、走出檢知之處、餘焰熾盛、及西寶殿、爰改衣冠、參向本御殿、御戶鑰忽以難得、仍放鎰參入殿內、奉覆御裝束於御體、塞眼傾巾奉抱之、高稱警蹕、猶待火焰、社司神民等忽然群集、或以禦火、或奉出神寶、神慮之令然、人力已不及、兩寶殿悉以燒亡、御體奉移貴布禰寶殿、貴布禰御體奉移若宮寶殿、時是遲明、於彼經所預幷當番男眞久者所召禁也者、委以奏聞、○中略

賀茂別雷社

注進御寶殿燒失日記事

右以去夜丑刻、從御經藏失火出來天、渡殿ニ移テ、次ニ正寶殿ニ移留間、以寅刻天、御正體ヲ貴布禰乃新宮ニ奉渡畢、隨又新宮御正體ヲ別乃保久良ニ奉渡畢、仍注進如件、謹解、

長治三年四月十二日　神主賀茂縣主成繼

十六日丁丑、爲御使兩度參鳥羽、又參內幷殿下、次又參內府、被申云、賀茂社御殿造營事、召問社司之處、造營御殿、雖一日不可遲留、然者付本議、祭以前可造畢歟、而依如法儀已過祭日、來廿七日有遷宮、（去十三日、伏儀之日、不日造營、十九日可有遷宮、而忽然被改定也、）事與心相違、何者午日以後鎰中門、不令出入上下、加之御社修造材木、於他所不作、又於御殿前構麻柱、廿七日議已以不相叶、廿五日以後可結構者、十九日亦以同、同者亦祭以前可畢其功歟、但例遷宮材木、數月數日殊以採擇、不日造營、定有不法事歟者、今朝奏聞此旨、成繼又參院申此由者、院宣曰、數日御假殿、非无其恐、又早以有遷宮、可爲善之由雖存思食、社司申旨尤有其謂、延引何事有、且可隨勅定云々、又上卿可量申者、被申之旨同前、大神宮御假殿之間、被行御祭已有其例、可被准據、就中鎗板金物急作事、最不法歟、近例去々年遷宮間、取用古金物之由、事已諠譁、或又遷宮之後、構橋工匠打替之、非例也、非禮也、遂其咎懲歟云々者、勅命曰五月有憚、六月无日、七月二日可有遷宮歟、陰陽家申旨、已以如此、可延引由早可宣下者、

近曾謂泰長、去々年遷宮之日、支幹庚辰、彼日遷移、有失火之由見本條、依上萬勘申、（家榮）然以連戰

尋行、抑先例依勅修理、仰諸司云々、而被寄郡以來、社司儲料材歟、早尋先例可被行者、

〔殿暦〕康和五年八月廿四日、戊刻許、以藏人廣房進銀六十兩、是賀茂遷宮間、有可被用事、而納殿無物、仍余〇藤原忠實進之、神事上懈怠條、爲世間極有恐、　九月三日、依物忌不出行、申刻許藏人廣房來、賀茂遷宮間、銀金廿兩不足爲之如何、余答云、隨有六十兩、以先日進上了、金廿兩許、行事所可致沙汰歟、何行事所に如此者聊なからん乎、

〔重憲記〕康和五年八月廿九日丙子、權中納言能實參入、被定申賀茂別雷社御遷宮日時、來月四日庚辰、件日內奉渡假殿、御殿造畢、奉遷正殿、三ヶ年可有也、右中辨長忠朝臣、右少史中原兼時行事、　九月四日庚辰、賀茂別雷社御遷宮也、右中辨長忠朝臣、右少史兼時以下、參社頭行事、〇又見本朝世紀

〔永昌記〕長治三年〇嘉承元年四月十三日甲戌、今日御物忌、遲明賀茂社權祝成長幷成文等、成繼男參入射場殿、令藏人仲光奏聞云、去夜寅刻、別雷社寶殿燒亡、火起於西經藏、東西寶殿已爲灰燼、於御體幷御裝束神寶等者、併奉取出者、仲光仰云、早以解狀可經奏聞、且聞食了者、及辰刻神主成繼、相具解狀參內、下官奏聞、依御物忌、寄宿紙委可尋問火餘子細者、成繼申旨大都同成長等、但當番社司成季、奉渡御體於貴布禰社、貴布禰社御體、同所依无便奉移今宮寶殿、成繼不參會、凡社司等火焰之間各馳參、雖令相觸、遂及御殿、恐懼之至、跼蹐有餘、陣申之旨大都執奏、假殿日內可奉造立、可奉日時者、仰云、可申先例幷奉渡假殿子細者、申云、天降以來未聞火事、於遷宮者、廿年內早晚隨其朽損、社司經奏聞、任其日時、社家造營、遷宮當日、先奉渡假殿、四寶殿刻限移御新殿、遷宮更不經夜宿者、日漸及午、御殿可出來哉如何、更不可懈怠之由所申請也、相儲料材、可隨重仰、兼可召進傍官社司者、又召陰陽師等於所、且可令問日時、頃之道言朝臣家榮等參上、遷宮更不經一夜之上、今日幸當吉曜、未刻始木造、亥刻遷宮云々者、予仰云、內々聞食子細、早於陣方可勘申日時者、即又分使令催諸卿、頃而社司祝成季、番直預相共參上、令申云、一切經所預、西廂內竊以掌燈立、納其所、空以退出、在外預驚焰氣、浸衣裳於御手洗川令

檜皮葺五間馬立舍一字

政所町雜舍檜皮葺寶倉一宇一面板葺五間一面竈殿屋一宇

馬場殿檜皮葺五間寶院御在所舍一宇檜皮葺三間御膳所舍一宇

檜皮葺十刑馬立舍一宇板葺三間御輿宿舍一宇

檜皮葺四間細殿舍一宇

右中納言源朝臣伊陟宣、奉勅當社雜舍等、去永祚元年八月十三日大風之後、從五位下藤原朝臣貞順蒙宣旨、新以修造、又正暦二年、右馬權助高階朝臣助順、同蒙宣旨、重加修理、共預朝恩也、而社司去年九月廿六日解狀偁、御殿玉垣幷雜舍等爲同月廿六日大風、或顚倒或大破者、檢錄損色之後、乍准得業生川瀨致光、亦蒙宣旨修造又了、方今修理重年、破損無程、抑當社司等、身列朝士、宜存公益、而偏寄勅修理、非致守護之勤、如此之間、村里雜人、不怖神威、好致破損、社司等儻加呵叱、宜違犯哉、今須若大風地震之外、重致盜失損壞之聞、卽以社司全令修造者、宜承知依件令守護、不得疎略、

正暦五年五月廿三日　少史安茂忠奉

〔左經記〕寬仁四年十月十四日、以卯剋、賀茂下御社作假舍奉遷正體、春宮大進□朝臣爲別功修造、件上下社請覆勘先了、而依當御忌方、暫不候、替件正殿、而依御方忌、爲造替件正殿所奉遷也、今日酉刻可上棟也、爲行此事等、以寅剋參賀茂、諸司不敷座、仍仰社司令敷座、史以下相共著座、剋限奉遷了、次義通朝臣幷社司等儲酒肴、兩三巡之後、歸路參結政所、事了參內、依御物忌不參殿上方、

〔定家朝臣記〕康平三年七月九日、頭辨被申云、大納言令申云、先日承賀茂別雷神社殿濕損可修造事、而尋先例、儻無所見、但去長元之比、御祖社申此由、故右大臣承行之、於陣勘日時、奉移假殿、卽日葺修事移者、但作假殿日時無所見者、抑社司申云、上社神殿二字、相傳云、一字加假殿、仍修補之間、申祝先修一字、次又修一字者、被報命云、上御社不作假殿、儲材木檜皮□吉日同日修二字、是恒例也、儻可被

〔類聚三代格 一〕太政官符

應禁制賀茂神山狩獵事

右右大臣宣、奉勅、件神山四至之內、不可穢瀆之狀、制旨間降、如聞無賴之輩、偸射猪鹿、宜嚴加禁止、若有犯者、五位已上取名奏聞、六位已下捉進其身、依法科處、曾不寬宥、

元慶八年七月廿九日

〔二十二社註式〕賀茂

人皇四十代天武天皇白鳳六年丁丑二月丙子、令山背國營賀茂神宮云々、〇又見諸社根元記

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆三年十一月乙丑、遣使修理賀茂下上二社、

〔賀茂社進雜記 中造營〕或記云、賀茂造營粗勘例、

冷泉院御宇、安和元年賀茂社造營、 一條院御宇、正曆五年造營、 後朱雀院御宇、長曆五年造營、後冷泉院御宇、康平三庚子年造營、四月八日木作始、六月廿日上棟、八月廿九日遷宮也、 白河院御宇、永保元年三月十三日可奉造之由奏聞、則六月朔日木作始、七月三日上棟、八月十三日遷宮、神主者成助也、 堀河院康和五年三月十八日奏聞了、七ヶ月之內奉造了、 鳥羽院御宇、天永三年造營、崇德院御宇、保延六年二月朔日木造始、八月四日遷宮、此時成重神主之由也、 近衞院康治二年三月廿三日上棟、〇中略 去保延之造營、依爲堀川材木被改定云々、 高倉院承安二年三月五日木造始、六月十七日上棟、八月十六日御遷宮、是重保神主之時也云々、

〔類聚符宣抄 一〕左辨官下賀茂別雷社司

應慥加守護社修造雜舍等事

御殿前檜皮葺七間軒廊一宇

同御殿廻玉垣十八丈東面十丈、南面五丈、北面二丈、

雜祀等、

〔延喜式三臨時祭〕凡鴨御祖社南邊者、雖在四至之外、濫僧屠者等不得居住、

〔類聚三代格一〕太政官符

應禁制汚穢鴨上下大神宮邊河事

右得彼神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等解偁、鴨川之流經二神宮、但欲淸潔之、豈敢汚穢、而遊獵之徒、就屠割事、濫穢上流、經觸神社、因玆汚穢之祟、屢出御卜、雖加禁制、曾不忌避、仍申送者、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣、奉勅神明攸祟、不可不愼、宜仰當國、俾禁斷之、若違制犯者、禁其身申上、容隱不申國郡司、并禰宜祝等必處重科、不曾寬宥、

承和十一年十一月四日（又見日本後紀）

〔類聚三代格一〕太政官符

應令神戶百姓護鴨上下大神宮邊川原并野事

四至

御祖社（東限寺田、西限百姓宅地并公田、南限故參議左近衛大將大中臣朝臣諸魚宅北路末、北限槐村下里南畔并寺田）

別雷社（東限路并百姓宅地、西限鴨川、南限路并百姓宅地公田、北限棒原山）

右得山城國解偁、依太政官去十一月四日符、仰愛宕郡司、令禁護件社邊河、而郡司解偁、郡中徭丁數少、無人差充、望請以在此郡神戶百姓、分番令禁守、若致汚穢、永出神戶、以公戶民、相替補入者、國加覆審、所陳有實、謹請官裁者、左大臣宣、依請、

承和十一年十二月廿日

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月廿二日甲子、勅禁葬斂山城國愛宕郡神樂岡邊側之地、以與賀茂御祖神社隣近也、

社地

出、被尋出申者有勅免、可被任社務歟之由申之、仰云、去々年非罪科勅定之、違有之間、一往有御折檻、如此申之上者可有勅免、神體事、已觸凡人之手、又何樣之草堂にか安置し候つらん、雖然立歸可被用神體歟否事、召寄吉田三位可尋云々、仍兩亞相幷召寄吉田三位、兼俱吉田三位參仕、仰云々趣、申云、諸社神體事、樣々相替也、以靈寶爲神體、以神木爲神體、賀茂社事、以矢爲神體、鴨社事、有別神體之由、先年故祐顯三位相語之間、不知子細、但爲其神體者、已累年爲神體上者、觸凡人了、自然雖安置堂舍佛閣、不可若云々、即奏聞、仰云、書載可申云々、又彼神體事、所詮召寄傭社司等、令檢知、無子細者、其時忠節事、一段可被仰之由可仰祐躬云々、○中略入夜吉田三位來、載久申子細云々、次雜談、如此就神體之儀、有先規之由存之云々、然者可注進之由仰了、

鴨社先年回祿之時、神體紛失之處、近日出現、但數年奉安置佛閣歟、非無汚穢混合之疑、因茲新可被定申御體歟、可被奉用古物歟否事先被決、一社一同勘進、元來鎭座之神體、證據已爲分明者、可被用件御體之條不能猶豫歟、但可被執行靈神安鎭祭、幷鎭御魂祭等者乎、且先蹤備左、

崇神天皇即位十六年秋九月、皇大神、初而奉遷大和國笠縫邑以來、諸國遷座每度、被祭靈神安鎭幷鎭御魂等矣、

神護景雲二年、春日大明神、自鹿島奉遷御笠山之時、爲被旅宿之汚穢、被行件兩祭矣、

文明八年八月日　　神道長從三位卜部朝臣兼俱

十九年十二月十七日、參內、鴨社申御體事、當社神秘覺悟之處、今度御體事、自他社吉田二位兼俱卿可安置之由申之、不便之次第、爲社家可致其沙汰之由、以連署言上奏聞、仰云、御體紛失已及數年了、其時何自社家無謂事也、但申請之上者、一向以社家之力、可致其沙汰之由可仰云々、

〔神社啓蒙　二〕賀茂社者、在山城國愛宕郡、去王都北半里許、山麓有宮、曰賀茂別雷皇大神宮、鴨社、謂之下賀茂、在王都東北數百步平林中也、所祭之神、玉依姬、大己貴命、○又見諸社一覽、山州名跡志、山城名勝志、閻花萬

神體

〔二十二社註式〕賀茂

鴨社（號下）御祖神（玉依日咩、別雷御母、大己貴神、別雷御父、）　賀茂社（號上）別雷神一座（八咫烏、高皇產靈尊之苗裔也、）

鴨建角身命女玉依日賣（母丹波國伊賀古夜媛、或云賀古比賣、）

〔延喜式神名帳頭註〕山城愛宕郡　御祖　一社者、大己貴子、大山咋神、一社玉依日女也、

久我　建角見命也

○按ズルニ、二十二社註式及ビ一宮記ニハ、下社ノ祭神ヲ大己貴命トシ、一宮記及ビ神名帳頭註ニハ、上社ヲ大山咋命トス、竝ニ信ジ難シ、

〔親長卿記〕文明七年九月四日、早旦賀茂社司（昨日同人數）來申云、昨日遣人勢、令警固社頭、令拂亂妨人等了、雖然件惡黨氏人等、猶令散在山中、可奪取神體之由有支度、所詮此構中、當社末社（新宮）御坐之間、可奉移神體之由可奏聞云々、予申云、此事爲一大事、疎骨之儀、神慮難測、如何之由令猶豫、社司等申云、今間者不存知事也、押取申者、可爲生涯之由再往申之、然者給申狀可奏聞之由返答各歸了、晉延久縣主一人持來申狀、卽奏聞之處、仰云、禁中自昨夕三十箇日觸穢也、相計可申沙汰、先不可參內、神事也、不可申入云々、此事爲急事之間、罷向勸修寺大納言許談合之、申云、誠雖爲陵遲、惡黨等奪取申者不可然、所詮可移申歟之由存之云々、可尋廣亞相（○廣橋綱光）之由存之、令晉信之處、所勞猶不得減、頭辨他行云々、仍先歸宅、及晚陰向室町殿、唐門邊晉信廣亞相、（門北陣屋也）頭辨兼顯朝臣出逢、仰件趣、返答云、於愚意者、可移申之條太以不可然、其故者大社事陵遲至也、猶可被申談室町殿關白等歟、予云、然者先可被申室町殿歟、返答云、亞相勸等、以頭辨申事者爲重事、勸修寺可然歟、予云、關白事者、此間無一僕之間難參申、猶追可申合之由返答歸了、　五日、早旦賀茂社司棟久縣主來尋、彼御左右難叶之由先返答、社司等可來、猶可談合之由仰之、　八年八月十三日、參內、（○中略）次奏鴨前社務祐躬、去々年社務相論之時御折勸、所詮每事可有勅免、神體事、多々須敵亂入放火之時紛失了、予今社務等不尋

穿屋甍而升於天、乃因取外祖父之名、號可茂別雷命、今所謂丹塗矢者、乙訓郡社坐火雷命在可茂建角身也、丹波國神伊可古夜日賣也、玉依日賣也、三柱神者、蓼倉里三井社坐、

〔本朝月令 四月〕中酉賀茂祭事

秦氏本系帳云、〇中略初秦氏女子出葛野河、澣濯衣裳時、有一矢、自上流下、女子取之還來、刺置於戶上、於是女子無夫妊、既而生男子也、父母恠之責問、愛女子答曰、不知、再三詰問、雖經日月、遂云不知、父母以謂、雖然無夫而無生子之理也、我家往來近親眷族、隣里鄉黨之中、其夫應在、因茲辦備大饗、招集諸人、令彼兒執盃、祖父母命云、父止思人略可獻之、于時此兒不指衆人、仰觀行指戶上之矢、卽便爲雷公、折破屋棟、升天而去、故鴨上社號別雷神、鴨下社號御祖神也、戶上矢者、松尾大明神是也、是以秦氏奉祭三所大明神、而鴨氏人爲秦氏之聟也、秦氏爲愛聟、以鴨祭讓與之、故今鴨氏爲禰宜奉祭此其緣也、

〇又見年中行事祕抄

〔伊呂波字類抄 加 諸社〕本朝文集云、御祖多々須玉依媛命、始遊川上時、有美箭流來依身、卽取之插床下、夜化美男相副、既知妊身、遂生男子、不知其父云々、吾天神御子云、乃上天也、于時御祖神等、戀慕哀思、夜夢天神御子云云、云、造葵蘰、嚴飾待之云々、山本坐天神御子、稱別雷神、

〔古事記傳 十二〕下鴨は式に賀茂御祖神社二座とあれば、彼丹塗矢靈〇大山咋神と、玉依比賣と二座ならむか、これ別雷命の御父母なるゆゑに、御祖とは申すなるべし、さて御父なれども、丹塗矢は、松尾乙訓に主として祀る故に、下鴨にては、玉依日賣を表に祀るなるべし、さて上鴨は別雷神社とあれば、彼別雷命なること論なし、然るに此下上賀茂社、今京となりて、皇朝の尊崇坐こと、伊勢に亞て比なきゆゑに、かの別雷命には非じかと嫌ひて、或は秘事なりと云ひ、或は上は瓊々杵尊、下は神武天皇など申すことの聞ゆるは、由もなきことなり、公家の尊崇ますことの重きは、皇京の守神に坐ゆゑにこそあれ、必しも其神の本の尊き卑きにのみよることにあらず、

タリキ、孝明天皇ノ文久三年三月、攘夷御祈ノ爲メ行幸アリシ事ハ、帝王部行幸篇ニ詳ナリ、

此神社ハ、毎年四月ニ恒例ノ祭祀アリ、十一月ニ臨時ノ祭祀アリ、此等ハ別ニ其篇アリ、又五月五日ニ競馬アリ、堀河天皇ノ時ニ始メシモノト云フ、其他即位改元造營行幸等ヲ始メ、旱霖氣疫等アル毎ニ、必ズ幣帛神寶ヲ獻ジテ祭ヲ致シタリ、

尙ホ當社ハ、古來貴布禰神社ト關係アルヲ以テ、互ニ參看スルコトヲ要ス、又當社ニ相嘗祭アリ、事ハ新嘗祭附相嘗祭篇ニ見エタリ、

又下上社ニ、攝社末社多シ、中ニモ川合、太田、岩本、大宮、半木社等ハ、今ニ至ルマデ尤モ著名ナリ、

名稱

〔八雲御抄名所五〕社　かものやしろ山　賀茂宮山

〔延喜式九神名〕山城國愛宕郡

賀茂別雷神社

賀茂御祖神社二座

〔廿二社本緣〕賀茂事

賀茂社、中略〇今下上乃有二社、下平波鴨乃御祖屋登申ス、上波賀茂乃別雷都號ス、鴨賀茂昔波通也、今波下上各別用之、鴨賀茂雖各別奈利以賀茂爲本、但シ下上登云事和依御祖乃儀仁歟、

〔雍州府志二神社〕下賀茂社、謂糺宮、〇或作只洲、高野川與賀茂川、於此社南合流、故或稱河合神、

祭神

〔釋日本紀九述義〕山城國風土記曰、可茂社、稱可茂者、日向曾之峯天降坐神、賀茂建角身命也、中略〇賀茂建角身命、娶丹波國神野神伊可古夜日女生子、名玉依日子、次曰玉依日賣、玉依日賣於石川瀨見小川遊爲時、丹塗矢自川上流下、乃取插置床邊、遂孕生男子、至成人時、外祖父建角身命造八尋屋、竪八戸扉、釀八腹酒、而神集々而、七日七夜樂遊、然與子語言、汝父將思人令飮此酒、卽擧酒坏向天爲祭、分

神祇部六十一

賀茂神社一

賀茂神社

賀茂神社ハ、下上二社アリ、下社ハ、山城國愛宕郡糺ノ森ニ在リテ、賀茂御祖神社ト稱シ、後世下社ハ、賀茂ノ字ヲ鴨ト書シテ上社ニ別ツ、賀茂別雷命ノ御母玉依媛、及ビ其外祖父賀茂建角見命ヲ祀ル、上社ハ、同郡鴨山ノ麓ニ在リテ、賀茂別雷神社ト稱シ、即チ賀茂別雷命ヲ祀ル、其下ト云ヒ、上ト云フハ、地勢ニ由リテ區別スルモノニテ、祭祀行幸等皆同日ニ於テシ、並ニ山城國ノ一宮タルナド、其地ハ相隔レドモ、殆ド一社ナルガ如シ、故ニ多クハ二社ヲ合セテ、賀茂神社トノミ稱セリ、現今官幣大社タリ、

此社ハ往昔以來、著名ノ大社ニシテ、祭祀奉幣ノ事、屢、史上ニ見ハレシガ、桓武天皇都ヲ山城國ニ遷シ、當社ヲ以テ王城ノ鎭守ト爲シ、大ニ尊崇ヲ致シ給ヒシニ由リ、益、旺盛ニ趣キ、社殿ヲ修メ、神位ヲ進メ、封戸ヲ增ス等ノ事屢、アリテ、終ニ社殿ハ二十年一度改造ノ制ヲ立テ、或ハ二十一年一度改造トモ云フ神位ハ、大同二年正一位ヲ授ケ奉リ、社領ノ如キハ、公私寄進スル所、積デ數十箇所ニ至リ、近ク德川時代ニ在リテモ、尙ホ下社ニ五百餘石、上社ニ二千餘石アリ、且ツ延曆十三年十二月、桓武天皇ノ始メテ行幸アリシヨリ以來、行幸御幸行啓等ノ事、史上ニ累見シ、圓融天皇以來ハ、八幡ニ行幸アレバ、必ズ亦本社ニ行幸アリテ、之ヲ兩社行幸ト號シ、白河天皇ノ承保三年四月ニハ、勅シテ、毎年四月中申日ヲ行幸ノ式日トセラレテ、共ニ久シク恆例

摩國等へ、異人共不立入樣、猶又堅固に其役々へも申渡、相心得候樣、被遊度候間、早々關東へ申達、於關東承知取計方、被聞食思召候事、

別紙之通、武邊へ被仰達有之候間、若右御應復不相濟中、異人共立寄候儀も候ば、前條之意味を以、可及應接候事、

右早々武邊へ自武傳可達被仰出、武傳申渡候、

〔國崎村所有古書〕

建仁三年官符　正嘉元年廳宣　正中元年永制　享德三年廳宣

以上四通文書、經數百年不紛失傳來之條、神妙之至所感也、今後彌堅固守護、可重寶者也、

文久三年三月廿七日

權中納言藤原柳原殿

左近衞權少將藤原橋本實梁殿

志州海濱巡覽之日、國崎村村長、建仁已來古文書數通持參之間、令披見之處、從古大神宮御贄調進之事顯然也、而至今日不絕獻備、最所感、彌以如舊典不可懈怠者也、

文久三年三月廿七日

祭主神祇大副大中臣藤波教忠朝

追捕使

右件所々地頭等、依別御祈願所、被停止彼職候也、鎌倉中將殿御消息如此、仍執達如件、

建久十年三月廿三日　兵庫頭〇大江廣元

祭主殿

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕廳宣

早可遂勸進節令再造神風伊勢國鈴鹿神戶野村神福寺事

右神戶者、忝天照大神御降臨時、味酒鈴鹿關奈具波志忍山冊遷御、神宮造、六ヶ月奉齋、神田並神戶進支、如此神代有謂、清淨之靈地、異于他矣、神宮之規範、而表雖屏佛法之經教、裏奉仰神明之垂跡者哉、然造立堂舍大伽藍、號神福寺、致法樂勤行之處、去文明四年兵火起、聖德太子製作、行基菩薩彫刻之佛像等滅盡、子細載勸進帳具也、爰沙門宣光、欲令再興、所存之至、神妙々々、助成輩可爲神忠之狀所宜如件、

永正八年正月日

禰宜荒木田神主判十人省判

三禰宜依所望被成之也

〔言渡〕文久元年八月九日、神宮神三郡、志摩國、夷族不上陸樣之事、內宮祠官等申立書、祭主被差出、由、德大寺大納言被附、殿下議申入處、早可被入御覽由答命之由以常丸申上被止于御前、　十日、昨日權大納言被附候、神宮祠官等申立候書取之儀、於御前久我殿御奉、

今度英國より測量之儀申立候趣、從神宮言上之儀有之、初て聞食、御驚候、神宮之儀は、兼て被仰立も被爲在候義故、於關東助才無之儀とは被思召候へ共、自然神三郡志摩國等へ立入候ては、被對神宮、御尊神之御廉も不相立、被爲恐入候御譯にて、皇國御瑕瑾にも可相成義、必神三郡志

七月一日丙子、伊勢國林崎御厨被止地頭職訖之由事、今日所被仰遣左中辨光長之知行爲奏聞也、

大神宮御領、林崎御厨事、可令停止武士之知行之旨成下文、謹以進上之候、恐々謹言、

七月二日　　　　　　　　　　御判〇源頼朝

謹上　頭左中辨殿

〔吾妻鏡　七〕文治三年六月廿日庚寅、伊勢國沒官領事、加藤太光員、隨令注進之、被補地頭之處、彼輩於大神宮御領、致濫行之由、自所々有其訴之間、宜令停止之由、今日被定下、其狀云、

下　伊勢國御領內地頭等

早可停止無道狼籍、從內外宮神主等下知、致沙汰事、

右件於謀叛輩之所領者、任先蹤令補地頭職許之處、各致自由之濫行、或押領所々、或煩神人之由依有其聞、可先神役之由度々令下知畢、仍神宮官等、擬致沙汰之處、任光員注文、補地頭之輩、尙所々押領、致神領煩之由有其訴、所行之旨、甚以不當也、自今以後、從神官之下知、可令致神忠、縱雖地頭、何煩神人、怠神役乎、宜停止件狼籍、若於令違背者、慥注交名、可言上之狀如件、以下、

文治三年六月二十日

〔吾妻鏡　十六〕建久十年〇正治元年三月廿三日乙卯、中將家〇源頼家依有殊御宿願、大神宮御領六箇所、被止地頭職、其所々內、謀叛狼籍之輩出來者、自神宮可被搦出、且又可觸案內之旨、被仰遣祭主之、而彼六箇所內、尾張國一楊御厨、自神宮達雖掌可追出地頭職之由加下知、檢封得分之旨令風聞之間、故右大將殿〇源頼朝令薨去給最前、及件狼籍之條、頗爲遺恨、尤可有御尋者歟之由、同所被仰遣也、御奉免狀書樣、

御神領

遠江國蒲御厨　尾張國一楊御厨　參河國飽海本神戶　新神戶　大津神戶　伊良胡御厨總

幷郡司等科上祓、於離宮院勤了、使中臣大中臣正康、卜部氏吉等也、但國司依有病惱不參、以目代所令勤仕也、

〔經信卿記〕承曆五年〇永保元年五月廿四日、自殿有召、卽參、令申見參、〇中略及昏黑參陣、先是東宮大夫左大辨著陣、被定申奉幣使、廿一社、被謝申遠江守基淸令射伊勢神戸田事云々、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十日戊子、伊勢大神宮領地頭等之中、乃貢已下事、可致精勤之由、日來有其沙汰、今日被施行之、御信仰異他故也、

下　伊勢國神宮御領御園御厨地頭等

可早任先例、辨備御上分神役、幷給主禰宜得分物事、

右當國神領神民之中、令停止狼籍、有限御上分雜事、幷給主禰宜神主得分物、不致對捍、任先例可令辨備也、若依處之異損、泥本法之辨者、雖地頭得分、僅可令急用正物、於神役者、敢不可闕乏之故也者、御園御厨住人、宜承知、不可緩怠之狀如件、

文治二年三月十日

六月廿九日乙亥、伊勢國林崎御厨事、爲平家與黨人家資跡、雖加沒官領注文、就大神宮訴申之、不可有地頭之旨、被下院宣之間、今日有沙汰、所被停止宇佐美平次實正知行也、〇中略

下　伊勢國林崎御厨住人

可令早停止宇佐美平次實正地頭職、勤仕神宮課役事

右件御厨者、謀反人家資知行之所也、仍任前蹤、爲令致沙汰、以被實正補任地頭職畢、然而依有神官訴、所令停止實正之沙汰也、但今雖令改易其職、自神官令還補本人者、甚以可爲不便之沙汰也、早爲神官之沙汰、可致有限御上分已下雜事之沙汰歟、如件、以下、

文治二年六月廿九日

沼木鄉小刀禰――某判

彼田書文書―之由、在地刀禰。證判明白也、仍爲沼木鄉總刀禰。。。任傍例加證判之、

豐受大神宮二禰宜度會神主判

〔大神宮諸雜事記 二〕永承八年正月六日夜、大司義任宿宅燒亡之次、度會多氣飯野三ヶ郡、文圖田籍、安乃三重朝明員辨四ヶ郡、及當隣國神戸文圖帳等、總司中代々公文、皆悉燒亡失了、

〔通憲入道藏書目錄〕一合第八十三櫃

神宮御領目錄一弖

〔大神宮諸雜事記 一〕寶龜四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、與彼國書生總判官代酒見文正、伊雜神戸檢田程、爲狩志天、伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、爰宮人等雖加制止、專不承諾、仍內人等訴申於本宮、隨則大神宮申上宮司、依宮司解、神祇官奏聞於公家、即被下官使、召對伴良雄等離宮院、各科大祓、又國司科中祓清已了、

〔續日本後紀 十五 仁明〕承和十二年六月癸未、勅令齋宮寮頭并助檢校大神宮并多氣度會兩神郡雜務、自今以後、立爲恒例、

〔大神宮諸雜事記 二〕延長六年四月十三日、一志神戸島扱御厨預等申文云、當神戸者、是二宮御鹽調備供進之所也、而御鹽濱四至阡陌、所指有限、爰彼御鹽濱之內、有不意之死人、不知誰人、若有神戸之內住人者、以彼所由、且令取棄其屍骸、且可令祓清御鹽濱者也、然而依不知由來、雖令觸知在郡司、專無肯承引、況乎神戸住人等、各稱禁忌之由、早不掃棄之間、朝夕之勤闕怠、而宮司以此由、雖示在郡司、遁事於左右、依不承引、牒送國衙之處、國司賜廳宣於郡司、擬令掃棄之間、件死人爲犬烏被喰散云々、恐此穢氣及于數月、御鹽勤懈怠也者、爰始自同年八月中旬比、天皇御藥坐、仍被卜食之處、勘申云、巽方大神、依神事違例御祟也者、仍被尋搜其由之處、注申上件死人條了、隨則以同年十月廿八日、國司

弘安十一年正月十九日

祭主神祇權大副大中臣朝臣

〔古老口實傳〕一年中行事

十月

宮崎御常供田御稻奉納之時、作下部等、一二禰宜方江一瓶一種進上之、在大物忌父送文、道前三部安濃東西部飯高正權專當等、一二禰宜方江酒肴節料、安濃專當各鳥一羽、飯高專當各鹽二枚、

〔安東郡專當沙汰文〕一外宮長官以下禰宜、或依神宮大訴、或應勅定、京都上洛之時者、其日安東郡被落著之間、東郡正權專當等、寄合落著御雜事勤營之先例也、○中略後朝御立雜事者、西郡正權專當兩人勤營之先例也、但近年御上洛之時者、以代錢人別壹貫文宛長官進之畢、東郡正權シテ二貫、西郡正權分ニ二貫、彼是四貫進之畢、

〔神宮雜例集二〕天平賀事

造進事

御器長兼下有爾村刀禰敢貞元解申進陳狀事

依實正陳申御遷宮時爲諸代者天平賀役勤仕子細狀

右件事、貞元爲敢氏之相傳職、任先例可勤進也、抑大中臣一門氏人、不被兼總刀禰之職志天、無被供奉天平賀勤之事、仍注子細進陳狀以解、

仁安四年三月十五日

下有爾村刀禰敢貞元

〔古老口實傳〕一沼木鄉總刀禰事、應和年中以二禰宜被定置刀禰職以來、補小刀禰、檢察鄉內不淨、令禁狼籍者也、鄉民所帶文書紛失之時、請在地刀禰判、

件―――實正明白也、仍任傍例所加證判也、

坐豐受神宮祟給、御厨案主秦茂興修三寶事、同案主新家恒明、同異行等、依過穢神事、遣使科上祓、可令祓清奉仕事

同宮鈴鹿郡神戸預等、依過穢神事祟給、科下祓、可令祓清奉仕事、〇中略

應和二年八月廿二日

〔大神宮諸雜事記〕二天喜六年七月廿七日宣旨偁、應早撰補替人、來九月御祭、供進去二年十二月、同三年六月、兩度闕怠、飯高神戸御神酒事云云、不記事發前大宮司義任、彼神戸檢田行之由愁訴、闕怠御神酒也、以去三年六月二日、依宣旨、左大史中原師範、右史生惟宗資行、伴成道等差使、以同月七日、義任與神戸預河內惟清被對問之處、惟清所爲、前後相違、既成故入人罪之重也、仍被停止件惟清職掌、被科大祓已了、同年七月廿七日宣旨、件惟清科大祓事也、使中臣大中臣公庭、卜部神祇大祐卜部兼國等也、宣旨狀偁、內大臣宣、奉勅、件惟清等、去天喜二年十二月、同三年六月、兩度御祭之間、寄事於訴訟、闕怠御神酒、須任格條專科上祓也、而猥依故入人罪之謀略、忝致無止神事之闕怠、况能公田爲私領、徒假神戸威、不致司庫之辨者乎、仍科大祓、差件人發遣、如件云々、依件宣旨、以同年八月二日、檢非違使河內重清、被改補神戸預已了、

治暦元年九月廿四日、宣旨偁、應令如舊勤行飯高神戸預職河內維清事云云、不具記去天喜三年十二月、同二年六月御祭、彼神戸恒例神酒闕怠了、仍依件咎、以去康平元年七月廿七日、科大祓解任早了、而今年所被復任也、

〔公文筆海抄〕一諸神戸預所職任符樣

定補尾張國本神戸預所職事

權禰宜荒木田神主延興

右人補任彼預所職、如件、司幷百姓等宜承知、更不可違失、以下、

罪者、右大臣宣、奉勅依請、

延暦廿年十月十九日〇又見類聚國史

〔公文筆海抄〕一郡司任符下様

祭主下　大神宮司

大中臣良貞（闕替トハ狼科ノ時、若死闕替之歟、打任テハ郡司職之由載之、）

右人補任飯野郡司政後闕怠職知件、宮司宜承知、因准先例令勤神役以下、

弘安元年十一月十日

祭主正三位行神祇權大副大中臣朝臣

〔大神宮諸雜事記〕一天平寶字六年九月十五日、洪水五十鈴川洗岸流天、而間度會郡司依例天大神宮御前乃御川、黒木御橋一道奉造渡之程、郡司俄落入於御川天、鹿海之前、宇砥鹿淵乃木根仁流懸天、僅存身命世利、流下之程、五十餘町許仁不溺死事、是尤奇恠事也、而人々問之處、郡司云、以去八月晦、食用宍之故也者、故知自今以後、神郡司不可食用宍也、

〔大神宮諸雜事記〕二康平三年八月三日、伊勢守義孝、被配流於隱岐國已了、事發以去元年七月天、件守爲檢田入部一志郡之處、郡司伊元宿禰之住宅燒拂已了、而件宿禰乍爲郡司、豐受大神宮之御領、字阿射賀御厨司兼任也、仍供祭物徵納之間、同以燒失了、依即件訴天被配流也、

〔仲資王記〕元久三年六月九日己未、御體御卜奏卜合、伊勢國大神宮幷豐受宮御領、伊賀神戸司、飯野郡司、朝明郡御掌供田預、三重郡御掌供田預、神服機殿大神部、麻績機殿小神部等、東海道山陰道南海道也、

〔類聚符宣抄〕一太政官符伊勢國幷大神宮司内印

應科祓大神宮御厨案主神戸預等事〇中略

寛治二年六月四日

祭主神祇權大副大中臣朝臣判

下　道前三箇郡司等

權禰宜度會神主延房

寛治二年六月四日

祭主――判

此外諸神戸司賜任符、必非同日之儀、補任之狀跡、有與之職掌、補任之料也、

〔元亨三年内宮遷宮記〕同日(元亨三年四月十一日)ゑまの山へ杣引のために、道後政所さだちか、編官奉行ありとしの神主等、ゑまの山へむかふ、正殿東西寶殿の御材木相のころあひだ引かせんためなり○下略

〔寛正造内宮記〕文安三(丙寅)

廿九日、(○十二月)木造始神事、○中略今日御記奉行事、一方之作所永量神主被勤、件神主者當時道後政所職也、抑道後政所者、被補祭主家子、拾歲以後祭主供奉之、宮中之共幷手水役等不勤者也、○下略

〔延喜式〕(四伊勢大神宮)凡齋内親王、三節祭時參神宮、及向四度祓所者、三箇神郡司互供給之、其料米國司以公郡正稅春精送之、夫馬者、三箇郡司儲備、(度別夫五十人、馬八十四疋、)

〔延喜式〕(五齋宮)凡新嘗解齋日、大神宮司率禰宜内人御厨案主三郡司神部歌人等參會、賜宴祿各有差、(寮頭已下亦賜祿、)

〔類聚三代格〕(一)太政官符

應加決罰神郡司事

右得伊勢國解偁、調庸租稅、依例勘徵、而多氣度會二郡司、猲頼神事、數致闕怠、望請神界之外、將加決

年御遷宮亂入之訴所被行也、祓使大中臣神祇大副兼輿朝臣、卜部神祇權大副兼忠宿禰等也、治曆二年十二月、祭使權少副公輔朝臣參下、齋內親王依例參著離宮院、十五日大祓依例了、以十六日朝、勅使以檢非違使時武、差使神主許示云、昨日自飯高驛家利立天、御幣令持神部等、前陣立天參下、勅使遙曳後天參下之間、前立衞士返對申云、著緋牛皮兵仗等之者、主從四人打合天、專不致禮敬天過通候之程、執幣衞士乃咎侍之間、件騎兵等不論是非、衞士射危天罷過也、後後來郎等乃男共、此由令仰知之程、權追捕使藤原高行被射落已了、又檢非違使武時(加〇武時文作時武)隨身男一人被刃損、如此合戰之間、件騎兵一人被射殺已了、又步兵二人捕得之由云々、此既後陣來下人等乃所爲也、仍乍驚御幣隨身天、前立天進來也者、　三年二月十日、宣旨偁、應令奉供去十二月月次御幣事、右權中納言藤原朝臣經輔宣、奉勅下知使等、今度御幣相共奉幣者、宮司宜承知、依宣行之者、同年二月十日、勅使王中臣少祐輔長也、〇中略抑依件穢氣天、祭使公輔朝臣、始從去十二月十五日迄于今年二月十四日、離宮院被宿天、其間朝夕供給、大神宮司勤仕了、又四所領等之勤無間斷、檢非違使追捕使等造巡天宿直、就中郡司驛專當等之勤無懈怠也、

〔公文筆海抄〕下道後政所　神三郡司等

　前伊豆守大中臣國茂

右人補任當郡政所職、如件、郡司等宜承知、勿違失、故下、

　寶治二年六月四日

　祭主神祇權大副大中臣朝臣(有御判)

安濃政所下　安濃東西郡司等

　掃部權助藤原賴業

右人補任當郡政所職、如件、郡司等宜承知、勿違失、故下、

諸鄕刀禰二匹(宇治鄕絹三匹云々、但良歴之度馬壹匹云々、弘安八、十、二、馬壹匹進之、) 安濃政所卅匹(奉行料十匹女房分五匹、) 同神戸司十
匹 同郡司(東西)各十匹 安濃一志總追捕使各五匹(奉行料三匹) 道前政所卅匹(女房分十匹、奉行料五匹、) 柴田
鄕司五匹 河後鄕司五匹 久米鄕司五匹 飯高政所總官下向之時、於驛家馬一匹進之、 同
神戸司十匹 同神酒預五匹 同南北兩郡司各五匹 鈴鹿神戸納所司十匹 同神酒正權預
五匹 同總追捕使二匹 同公文 濱名神戸司上絹卅匹上馬二匹 諸鄕刀禰 尾張本新兩
神戸各廿匹(奉行料五匹) 飽海神戸司十匹 儲柄神戸司 同總追捕使 同四度使 同檢挍 同
刀禰一匹 佐々良嶋刀禰二匹 奈波里檢挍一匹 伊賀神戸預所 同神戸司十匹(奉行料三匹、弘安四
年沙汰之、) 同鄕長五匹 同總追捕使五匹 同庤禰宜一匹 河曲神戸五匹

〔類聚三代格 一〕太政官符
應置伊勢大神宮神郡檢非違使事
右依神祇官奏狀偁、大神宮司解偁、檢非違使蹔在國内、非卜食者、無入神郡、因茲管度會、多氣、飯野、三箇神郡諸人、或犯禁忌、或好濫惡、訴訟之輩、日月不絕、司勤神事、無遑巡察、望請神民之中、幹事者充檢非違使、一向令糺犯罪之人、但不給俸料、准大内人、把笏從事者、官錄解狀、謹請天裁者、權大納言正三位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣宣、奉勅依請、

寛平九年十二月廿二日

〔類聚大補任 宇多〕寛平九年(丁巳)
十二月廿二日、被始置大神宮司檢非違使、豐受大神宮權禰宜春彥、

〔大神宮諸雜事記 二〕長曆三年三月十二日、依宣旨科祓人々廿一人、(中略)前大宮司永政、前大司爲清、(祭主男也、)一木工允大中臣賴成、造大神宮使同義任、同判官宗孝、齋宮助同奉方、追捕使同成佐、前齋宮助伴爲利、佐伯秀高、藤原眞任、多治武近、姓名不知一人、已上廿一人科大祓了、(是等皆祭主傍親等也、)件祓波、依去

〔公文筆海抄〕下　大神宮司
　可早任先例令修治御常供田堰溝事
右任先例可令修治之由、可被沙汰之狀如件、以下、
　某年正月某日
　祭主神祇權大副大中臣朝臣

〔神境雜例　二〕太閤様〇豐臣秀吉御朱印
　條々
一今度伊勢總國檢知雖被仰付、從宮川内之儀、大神宮敷地候條、兩宮儀崇敬上者、不及其沙汰、檢地免除之事、
一兩宮宮司神主年寄共、猶以神慮專尊敬、法度以下猥儀不可有事、
一宮川内、山林竹木屋敷田畠等、如先規可沙汰、其外諸役令免許事、
右條々永代不可有相違者也
　文祿三甲午年十一月十六日御朱印
　伊勢山田總中
　宇治總中
　大湊濱總中

〔御定書百個條〕從前々之例追加一勢州山田於御神領は磔、火罪、獄門等之死骸を晒し候御仕置無之事、

〔公文筆海抄〕任料事
　神領
道後政所率行料五匹　度會郡司　同權大領　多氣郡司五匹　飯野郡司　神三郡總追捕使

神領職員

由觸申之、社領者不可拘年紀之旨被定置畢、然則於彼田地者、如元可爲社家進止云々、

一遠江國謙田御厨内、拾八町四〇四下一本有反字大、畠一町八反二大半事、神領之事者、不拘年紀、於非器輩傳領者、可被停止云々、

〔國崎御厨古文書〕廳宣

可早被成存知、大神宮御領國崎神戸役人等、就神税徴納等路次廻船時、嶋浦違亂煩、頗神慮叵測由事、

右大神宮御領國崎神戸者、毎祭第一御饌料所也、然近年動彼役人等、神税徴納之御神船彼成嶋浦人々煩之由、神宮注進、爲事實者、大神宮慮〇慮上恐脱神字叵測次第也、然早被止諸方之煩、役人等徴納神税、可令勤仕神役之狀、所宜如件、

享徳三年十月廿一日

禰宜荒木田神主〇以下署名略

〔皇大神宮引付〕廳宣

可早任先例本員數致催促沙汰美濃國開發御厨本宮御裳濯河堤坊役河籠米事

右件御厨、毎年本宮御裳濯河堤坊役河籠米事、任正應六年源頼範寄進狀之旨、遂究濟徴納、可令修治御裳濯河頽損之所々之狀、所宜如件、以宜、

文明三年九月廿一日

禰宜荒木田神主判

予氏經　二經興　三永量　四守秀　六守氏　七守則　九氏綱加判　五守朝　六經房忌中　一人は未補

件廳宣開發御厨口入所、觀音寺當住順正、出帯證文等、依所望成之、雖證文多、就河籠米、此一紙留案、

凡三神郡神社溝池堰驛家官舍、若致破損、及桑漆等不催殖者、拘宮司解由、

〔延喜式十八式部〕凡伊勢大神宮神戶百姓者、勿聽進仕、其緣蔭出身者、便直神宮、上日行事、送省預考、其選敍法同內分番、

〔類聚國史四神祇〕弘仁八年十二月庚辰、伊勢國多氣度會二郡雜務、悉預大神宮司、交替付領、一同國司、以國司不獲行決罰也、〇又見類聚三代格

〔類聚三代格一〕太政官符

不可割取伊勢大神宮神戶百姓事

右神祇官去閏十月廿九日解偁、大和、伊賀、伊勢、志摩、尾張、參河、遠江等國司論云、去延曆廿年七月二日格云、檢案內、太政官去四月十四日符偁、自今以後、神戶限以二丁、田租定五束者、丁減物少、供祭懸之、宜天下諸社同共改張丁并租數一依舊例、又養老七年格云、神戶增益卽減之、死損卽加之者、宜後有增丁隨減之、但至于死損取彼加此、於事不穩、宜勿更加者、仍案彼延曆廿年四月十四日格偁、大神宮封戶非改減之限、而件國神戶百姓愁云、神戶有死須依實除帳、而國司拗返不除帳、名雖附帳、實無其身、因茲丁數空過五六丁、爰國司號除丁、卽出自神戶、貫於官戶、至于課役皆悉徵納、若致延怠、遂加決罰、神事難濟、職此之由、望請件大神宮封戶丁、雖有餘剩、永無減省、以供神宮、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅凡大神宮事、異於諸社、宜依延曆廿年四月十四日格、永無改減、若有乖忤、科違勅罪、

貞觀二年十一月九日

〔延喜式二十二民部〕凡志摩國百姓口分田、便班授伊勢尾張兩國、唯伊勢神郡不在授限、

〔新編追加雜務〕一伊勢國道前三郡政所者、雖經七十年、依申狀子細、本所蒙御成敗畢、

一下總國萱田神役御厨者、雖送數百歲、依爲神領、預御成敗畢、〇中略

一駿河國方上御厨內沽却地條々事、如同年〇弘安八年九月十八日御下知者、買領之後、知行經年序之

神領雜制

右件御厨者、季滿神主、代々相傳、無相違在所也、然依有子細、皇大神宮禰宜氏經神主仁年貢參分一、幷代官職事、永代避渡畢、仍去嘉吉三年十一月三日、季滿神主乃避狀明鏡也、然自氏經神主方、爲勝相傳畢、然其後山田住人榎木藏自季滿神主方依令買得歟、一圓仁令押領之條、太以無謂、於代官職幷三分一之年貢者、每年爲勝令知行、於相殘年貢者、榎木藏江取渡、相互可專神役勤者也、仍所宜如件、以宜、

享德元年八月三日

禰宜荒木田神主判九人、十人署合、

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕皇大神宮神主

注進、可早任先例理運蒙御成敗、全知行、專年中數ヶ度神役、抽御祈禱、大神宮御領、河曲郡南職田事、

右件南職田者、年中四ヶ度官幣使供給役、嚴重異于他神役料所也、然近年神主方無故依押領、色々之神役退轉之基、神慮難測者哉、早任先例理運、蒙御成敗、遂神宮徵納、專神役之勤、致御祈禱者、御神忠何事如之矣、仍注進如件、以解、

永正五年九月日　大內人——

禰宜從四位下荒木田神主守則〇以下署名略

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡三神郡、及神戶百姓、不得預出身例、但以蔭出身者、便直神宮、其上日行事、送神祇官、不可輙任內外官、

凡齋內親王參入之日、飯野郡櫛田河浮橋者、大神宮司專當其事、令神郡人臨時營作、歸京之日亦准之、

凡三箇神郡校班損不堪佃、及計帳疫死等政、宮司與國宰共行之、其隔郡授田、混給一處、雜務者、起自度會郡宇治鄉、始行、國司先移名簿、卜食從政、若朝使來者、先留神郡堺外、卜食後入、不卜食者、堺外行事、

云云、可被糺明之旨、自仙洞(○後白河)被仰下之、卽被尋問義定之處、在鎌倉旣及多年之間、不知彼國子細、可召進眼代之由謝申之、而懷理訴者、追可言上歟、今臨耕行之期、武家雖押領件式田之上旨、乍含勅定不行、其科者、似恒御旨、仍被收公義定恩地云云、

〔吾妻鏡 九〕文治五年七月十日戊辰、大神宮領、伊勢國沼田御厨土民等捧訴狀、去比參著當所、元畠山次郞重忠充賜之處、依員辨大領家綱之訴狀、被收公之、賜吉見次郞頼綱訖、而頼綱亦巧不儀、追捕民戸、點定財寶云云、仍今日有沙汰、爲平民部丞盛時奉行、早可令停止彼非據之由可下知之旨、被仰遣山城介(久兼)、爲抽征伐御祈禱、以及急速裁許云云、

〔御鹽田古記文寫〕廳宣　權禰宜文淸盛光神主

可早致問答沙汰、二所大神宮朝夕御饌料所、二見御厨御鹽所司神人等、申被止軍勢寄宿儀所司神人等成安堵思、欲令備進無止日次朝夕御饌御鹽以下式日色々神使由事、

副下　申狀具書

右當御厨者、爲二宮朝夕御饌御鹽料所、殊重異他之神領也、因茲世上動亂之間、軍勢甲乙人等、終以不致亂入狼籍者也、而如狀者、今明日冷泉殿爲泊浦御入、大將以下可有御寄附(○附恐宿誤)當御厨之由風聞云々、若軍勢及亂入、狼籍有穢氣不淨之事者、朝夕御饌御鹽、忽令闕如歟、早觸申事由於大將御方、遂問答、止軍勢寄宿之儀、重役人等成安堵、可備進日次朝夕御饌御鹽以下神役之狀、所宣如件、以宣、

正平七年十月廿三日

禰宜渡會神主(○以下署名略)

〔皇大神宮引付〕一廳宣

可早任先例依理運爲勝致催濟沙汰伊勢國度會郡牛庭御厨事

一御調進物目錄　壹通

右之通舊記當村之所持仕候ニ付、寫差上申候、以上、

延享三年寅三月　志摩國答志郡國崎村百姓總代　杢右衛門印

同村肝煎　甚治郎印

同村庄屋　與八郎印

島田庄五郎樣

中野勘右衛門樣

瀨名傳右衛門樣

御取次御衆中

伊豆國

〔吾妻鏡　一〕治承四年八月十九日己亥、兼隆親戚史大夫知親、在當國〔○伊豆〕蒲屋御厨、日者張行非法、令惱亂土民之間、可停止其儀之趣、武衛〔○源頼朝〕令加下知給、邦道爲奉行、是關東事施行之始也、其狀云、

下　蒲屋御厨住民等所

可早停止史大夫知親奉行事

右至于東國者、諸國一同、庄公皆可爲御沙汰之旨、親王宣旨狀明鏡也者、住民等存其旨、可安堵者也、仍所仰故以下、

治承四年八月十九日

〔吾妻鏡　五〕文治元年十月十五日甲子、齋宮用途、可被進納之由事、幷大神宮御領、伊雜神戸、鈴母御厨、沼田御牧、員部神戸、田公御厨等、所々散在武士、無其故押領事、可被尋成敗之由事、院宣到來、兩條所被載別紙也、

〔吾妻鏡　七〕文治三年五月廿六日丁卯、宇治藏人三郎義定代官、押領伊勢國齋宮寮田櫛田鄉內所處、

御鹽米等、品々之貢物、三祭禮之節、山田宇治御兩宮江持參仕奉調進候、御饌料第一之地ニ而、百餘年以前迄ハ、御神領地ニ而、其上ニ勢州安濃郡ニ神田三町、志州伊雜神戸ニ、神田六反半之上分米茂被為下置、相勤申候之處御座候、勢州安濃郡之儀者、藤堂和泉守樣御領地ニ罷成、志州伊雜神戸者、九鬼大隅守樣御領地と相成候時節、如何仕候哉、御神領地、并神田三町六反半之御上分米も、國崎村江受納仕候儀共斷絶仕、到只今ハ、御正印廳宣御綸旨計所持仕候而、御役之所務、一圓無御座候、然者御饌料貢物、御潜御神事之儀者、是迄無斷絶相勤申候、百餘年以後、御私領と相成候ニ付、御神役御公役、兩用相兼申候故、追日困窮仕、何共御神役難相勤儀至極仕候御事、〇中略神宮衆中江申入候得共、神宮衆中より、鳥羽御役所江國崎村貢物及不納候而者、天下國家安全御祈禱第一之貢物ニ御座候、相勤させ被下候樣と被相願候ニ付、鳥羽御役所より、相務申候樣と被仰付候得共、御違背も難成筋ニ付、難儀體に而相勤申候故歟、神慮にも不相叶、村困窮仕候、然上者勢州安濃郡神田三町之田所納より外ニ上分御座候哉、乍恐御吟味被為遊被下、是迄斷絶仕居申候、右三町之神田、如往古國崎村御神役料ニ奉頂戴候樣ニ被為仰付被下候ハヾ、難有仕合可奉存候、神役之所務、一圓無御座候故、右奉願上候通相叶申候ハヾ、國崎村往古之通、御饌料御調進之貢物、無恙可奉調進候段困窮募リ、御神役御公役、兩役相勤候儀、神慮難測、無勿體奉存候得共、此末御神役難相勤時節罷越候ニ付、近頃恐入奉存候處、此度無據御願奉申上條、哀願旨御憐愍被為召加、幾重ニ𪜈御慈悲之上、勢州安濃郡神田三町之上分、往古之通奉頂戴度候、又者國崎村御神役、入用金之儀、伊勢兩宮禰宜衆中より、毎年御合力被成被下候而、何れ之筋ニ而も、御神役無退轉相勤申候樣ニ、兩宮禰宜衆中江被為仰付被下度旨、偏奉願上候、乍恐御訴訟奉申上候趣如件、

一御正印廳宣寫　二通

一御綸旨寫　壹通

右彼神領者、爲國家御祈禱、往古以來、見定置地也、就近年不領、當祭料及退轉、因茲祭主二位朝忠、以綸命再興久廢、在先御屋形氏康御代、便合符于神宮、遂訴訟、于時神官度會常辰神主致御取次、奉獻目安之狀大抵被聞召、分國御事繁劇、遠途云彼云是遲延者也、然則依其筋目有謂所、家弟常弘神主、奉存知之分明也、縱雖有他望申輩、以御分別常弘拜受、併神慮御感應、御武運長久御祈、何事如之哉、仍注進如件、以解、

天正八年　　　　大內人正六位上――

禰宜正四位下度會神主〇以下署名略

豐受大神宮神主

注進早可被遂御披露青柳神領受納子細間之事

右彼神領者、爲國家御寄附之地也、然間近年無受納之條、當祭領既及退轉、神鑑大有其恐者歟、因茲先年自祭主二位朝忠、令告知神官中、於彼青柳庄、急度遣神使、于時久志本治部少輔度會常辰、致御取次、奉獻目安之處、先御屋形氏康御代、速雖被聞召分、兎角遲延之處也、然依有謂所、其家弟常弘神主、神役存知事分明也、縱雖有訴訟數人、於常弘外申請輩、不可有御許容者也、此度常弘神主申上旨、至御合點者、併神慮御感應、御武運長久、何事如之哉、仍注進言上如件、

天正八年　　　　大內人正六位上――

禰宜正四位下度會神主〇以下署名略

〔國崎御厨古文書〕乍恐以書付御訴訟奉申上候御事

一志摩國答志郡國崎村之儀者、伊勢御兩大神宮御饌料之地ニ而、從往古御膳調進之貢物取揚候職場、四至之堺、往古此十九字、原書本文此度書落、仍傍ニ記、御正印廳宣御綸旨被爲定、忝奉頂戴、既に今當村ニ所持仕候、每年六月朔日、御潛御神事執行仕、每祭御調膳之御蚫、水取玉貫、御桒螺煎、御干若和布、檜籠御膳、

(內宮禰宜荒木田守晨引付)皇大神宮神主

早可蒙御裁許大湊事

右件大湊者、自往昔異廉重于他神領也、所以者何、兩大神宮朝夕御膳米、神船調役、勤仕無懈怠之處、自愛洲方可有發向彼在所之由風聞、爲事實者、神供闕如之基歟、神慮太以難測、然間忝奉行神明之正印令言上者也、尙以巨細宇治六鄕神人等之載注進具也、神訴之旨爭被棄捐乎、早被仰宥、忝以大湊之儀令靜謐和與者、御神忠御祈禱何事如之、仍注進如件、以解、

永正六年七月日

禰宜――守則十人

外宮廳宣文言同仍不注

宇治六鄕大少內人神役人等謹言上

可早預御成敗爲無事安全神領大湊事

右在所者、御裳濯宮川兩神水之流、而瑞籬之近鄕、而二所大神宮朝夕御饌料、神船勤役調進、嚴重御神領也、次兩宮神家長官傍官於始申、大少內人、在々所々攝社末社等祝、諸役人等、衣食賣買乃便、悉皆大湊乃不倚助者、迷惑何事如之、殊宇治鄕者、異無力于他、諸商賣以下、彼在所於不煩波、每事不可叶、爰先度愛洲殿、大湊江可有御勢遣剋仁、被仰和無事之由承及、各喜悅之處、此間可有御發向之由風聞、爲事實波、神慮最叵測者哉、可然樣仁被仰宥、被止御發向之儀者、神慮快然、御神忠之瑞一、殊實者愛洲殿御祈禱之專一不可過之、仍蒙御成敗、神人等一同謹言上如件、

永正六年七月廿日

(應永以來外宮注進狀)豐受大神宮神主

注進早可被逹于御披露靑柳神領受納子細間事

宮、奉免之後者、爭可成其妨哉之由被載之云云、

〔玉葉〕建暦元年六月廿八日未刻許、藏人兵部大輔家宣來、下宣旨事、有二ケ條、(仰詞書立紙相加下之、近代例也、以人傳獻之、)

一宮勘申、齋宮寮保曾級貢御人等、與縣德吉相論、伊勢二所大神宮御領、同國平生御厨北境事、仰保曾級貢御人所進、延喜三年糺定文、依有僞書之疑、德吉申狀似有其謂、然而重令貢御人等且辨申委細、備進正文、

一祭主卿言上、大神宮司禰宜等注進、本宮使權禰宜荒木田近朝申、爲尾張國一楊御厨中鄉下司行直、并後見寬養法印等、彼行直與貞時、貪財相論間、任次第不知旨爲致沙汰、罷向在地處、出立所從并百姓八十餘人、不論是非、從馬引落、打剥烏帽子、破損狩衣、打破面貌、及種々耻辱、古人無雙狼藉事、

仰遣官使、召出下手輩、宜令行所當罪科、以上事、以消息(以經□令書消息、)之、加予消息、遣宣房朝臣許、

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕自愛洲殿可有大湊御發向由愁訴事

抑彼在所者、御鎮座近邊而久住者、各專役人等也、並御膳料調進舟、出入之津也、然到□所者、必定御供可有懈怠歟、神雖此事耳也、且者一天之凶事歟、以之早被成御嚴重御下知、令爲無爲者、御神忠何事如之、爰元體以內外御廳宣□御申御沙汰之條、不能迹索、唯奉憑寬宥御助外無他、謹訴狀趣、蓋如件、

永正六暦夷則日

乍恐申上候、仍就湊之儀、自兩宮以御廳宣被申候、并宇治兩所各捧目安候、於此上先度內々申上候、万疋御禮物之計、湊へ可申付候、猶々御廳宣申事候、忝御神御正印被行候、併御神訴迄候、不少□義候□奉憑御心得候、恐惶謹言、

七月　山田

謹上　佛光寺

度下院宣、依被相尋眞僞、勒不誤之狀、進請文畢、而今被送告文、輙不能領狀云云、以此旨可經奏聞也、是後日勘揚之疑、可有其恐之故也、神宮事、偏雖仰神明、又不蒙公家裁定者、不致沙汰之例也、又東國之中、大神宮御領、既有其數、云神戶、云御厨、皆所勤有限、嚴重無止、而彼所司神人等、寄事於騷動、又號有兵粮米之責、所當神税上分等依令難濟、任先例遣宮使、令加催促之處、辨濟既少、對捍甚多、因之色々神役闕乏、各々神人抱愁吟、神慮有恐、人意無休之間、令不可致妨之由被載狀、可存其旨候之狀如件、

治承六年〇養和二年五月廿九日　大神宮政所權神主

侍中披返狀之後、知神慮不快之由、更令周章、

〔吾妻鏡五〕文治元年十月十四日癸亥、院宣到來于鎌倉、〇中略

當國小杉御厨、於神宮御領、已被下宣旨畢、而自國司有妨之由所訴申也、尤不便、早如元可被奉免者、依院宣執達如件、

九月二十四日　右馬頭奉判

遠江守殿

〔吾妻鏡七〕文治三年十月十三日庚辰、依大神宮神人等訴、被召放畠山次郎重忠所領伊勢國沼田御厨、被宛行吉見次郎頼綱、仍於重忠者、雖被召禁其身、申不知子細之由、頗有陳謝歟之間、厚免已畢、至當御厨者、賜他人之旨、被仰宮之上、員部大領家綱所領資財等、任員數、可沙汰本主、雖向後於彼邊、可停止武士狼籍之趣、令下知山城介久兼給云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十月廿四日癸未、參河國內、御寄附大神宮之庄園有六箇所、而守護人藤九郎入道蓮西代官善耀、被押妨之由、自神宮依訴申之、爲廣元朝臣奉行、被尋問蓮西之處、於六箇所者、御奉免之後、更以不交其沙汰之由、善耀內々申之旨、昨日進請文之間、副其狀於御教書被遣本

文契、如舊付範明、被備進件上分者、權中納言藤原朝臣雅教宣、奉勅宜任本領主義國起請、并義清陳狀、以範明如元爲口入神主者、宮宜承知、依宣行之、

永曆二年五月一日　　大史小槻宿禰在判

權右中弁藤原朝臣在判

〔玉海〕治承五年〇養和元年七月十三日丁亥、今日行隆來臨、以前以消息返遣福永御廚文書了、其狀如此、

近江國福永御廚事、兩方文書加一見返上之、彼是共被下宣旨了、用捨之間、宜在勅定歟、但如保延四年明法勘狀者、御廚執行之職、道理在親國、然者親次尤當其仁歟、至于領家之條、若猶不分明者、重被下法家、詳可令勘決歟者、以此趣可被洩奏之狀如件、

七月十二日　　右大臣

左少弁殿

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年五月十六日乙酉、及日中老翁一人、正束帶把笏、參入營中、候西廊、僮僕二人從之、各著淨衣捧榊枝、人怪之面々到其座砌、雖問參入之故、更不答、前少將時家始發言語、直可申鎌倉殿〇源賴朝云云、羽林重問名字之處、不名謁、即披露此趣、武衞自簾中覽之、其體頗可謂神、稱可對面、令相逢之給、老翁云、是豐受大神宮禰宜爲保也、而遠江國鎌田御廚者、爲當宮領、自延長年中以降、爲保數代相傳之處、安田三郎義定押領之、雖通子細、不許容、枉欲蒙恩裁云云、以此次、神宮勝事、引古記所見述委曲、武衞御仰信餘、不能被問安田、直賜御下文、則以新藤次俊長御使、可沙汰置爲保使於彼御厨之由、被仰付云云、　廿九日戊戌、十郎藏人〇源行家去十九日奉告文等於伊勢大神宮、彼禰宜等返狀、今日到著于參河國、

今月十九日告文、并御消息、同廿二日到來、子細披見畢、抑自去年冬比、關東不靜、殊可祈請之旨、頻依被下綸言、各凝丹誠之處、不圖外、神主禰宜等背朝家、同意源氏、致彼祈請之由、讒奏出來之間、度

宗元神主、差遣私使、不論是非、依徵取上分口入料等、以範明假名山口久行勤子細、成外宮解狀副奏狀、右中辨親範朝臣職事之時、從內大臣家被奏狀付之處、雖被經奏聞、不被遂沙汰之間、被敘四品畢、其後彼奏狀、雖令尋返、稱蓮妙給田不返給、件旨見副進右中辨消息、因茲彼宗元等狠籍、彌以倍增、望請早任次第證文、被聞召問件義清、停止宗元神主沙汰、如元令範明備進件御厨上分口入料、將仰道理之不空者、右少辨藤原朝臣成頼傳宣、中納言藤原朝臣忠雅宣、奉勅宜令彼義清言上件子細者、謹所請如件、抑件御厨、任祖母之處分所領知也、任宣旨之狀、雖須陳申子細、幼少之上、依領知日淺、全不知於口入神主之條者、父祖文契末及違背、但左右可依勅定也者、就宣旨并義清陳狀、謹檢案內、彼御厨義國雖有可領知之理、故利光神主、同意家綱不承引之間、義國乍抱訴訟、經年序之處、以親父元定神主、永相傳于子孫、可爲口入人之由依令起請、以件起請、上分口入料之內、元定又分與外宮一禰宜彥忠神主之由起請畢、以義國之寄文、請廳判、元定令渡與義國、其後義國、經院奏之刻、論人利光同以言上、問食兩方理非、義國得理畢、仍任起請、元定備進二宮御上分之間、義國卒去、義康相傳件御厨、元定又卒去、凡所預置範明文書等、舍兄氏定盜取之間、彼御厨沙汰文書掠取畢、以件文書可致横妨之由、依令風聞、相觸子細於義康之處、且聞開由緒在御厨下知、仍任文契、上分口入料、敢無相違、範明所致沙汰也、爰去保元二年五月、義康卒去之刻、利光之孫致訴訟、仍範明告知其由於義國後家蓮妙之刻、以元定沙汰之文書、無相違申成宣旨、領掌御厨、雖然以去保元二年九月之比、蓮妙背文契、暗改付宗元神主、差遣私使、不論是非、依徵取上分口入料等、山口久行勤子細、成外宮解狀副祭主奏狀、右中辨親範朝臣爲職事之時、從內大臣家被付彼奏狀之處、雖被經奏聞、不遂沙汰、被敘四品畢、其後件奏狀雖令尋返、稱給蓮妙之由不返給、件旨副進、右中辨親範朝臣書狀具也、如此之間、宗元等狠籍、彌以倍增、仍以祭主奏狀案、幷右中辨書狀、及次第證文等、被奏聞之日、彼御厨領主、被聞召問義清之處、父祖之文契、末及違背之由所陳申也者、就之言之、蓮妙獨背文契者歟者、早下宣旨、永停止宗元非論、任

〔中右記〕天仁元年六月九日、依有陣定儀、午時許參内、先參殿下〇藤原忠實御直廬、言上諸事、未時人々參仗座、内大臣、民部卿源大納言、予、治部卿、左宰相中將、左大辨、藤宰相、官使注申、大神宮神戸伊賀國六ケ山、與興福寺末寺傳法院領相論事、大神宮領頗有理歟、

永久六年〇元永元年正月十五日戊戌、參院〇白河候院北面間、依仰參御前、密々被仰云、大神宮神人等訴申、遠江國司事、不裁決及數月、甚恐思之由、可云關白也、如此事、恐其咎及高、仍只任理可決斷者、申承之由退出、

〔台記〕仁平四年〇久壽元年五月廿三日乙亥、余已下著陣、定申祭主清親卿、散位正弘、阿闍梨相基等相論事、大神宮領伊雜神戸、内膳司領畔乘御厨相論事、

〔久志本常辰反故集記〕左辨官下　伊勢大神宮

應任本領主散位源朝臣義國起請、并源義清陳狀、以權禰宜荒木田神主範明、如元爲口入神主、二所大神宮御領下野國簗田御厨事

右得彼範明去平治元年十二月九日陳狀偁、今月七日宣旨同九日到來偁、去月十一日義清陳狀偁、今月三日宣旨同日到來偁、得範明去十月九日解狀偁、件御厨、義國雖有領知之理、故利光神主同意家綱、不承引之間、義國致訴訟、經年序之間、以親父元定神主、永相傳于子孫、可爲口入人之由、依令起請、以件起請、上分口入料之由、元定又分與外宮一禰宜故彥忠神主之由起請畢、以義國之寄文、請廳判、元定今渡與義國、其後義國經院奏之剋、論人利光同以言上、聞食兩方之理非、義國得理畢、仍任起請、元定備進二宮御上分之間、義國卒去、義康相傳御厨、元定又卒去、凡所預置于範明文書等、舍兄氏定盗取之間、彼御厨沙汰文書掠取畢、以件文書、可致横妨由依令風聞、相觸子細於義康之處、且任義國之起請、御厨上分口入料、敢無相違、範明所致沙汰也、爰去保元二年五月、義康逝去之剋、利光孫致訴訟、仍範明告知其由於義國後家蓮妙、以元定之文書、無相違申成宣旨、領掌御厨、雖然背範明、暗付

爲祈禱料、如父祖之時、以丹生河年貢內、每年可奉社納事

右意趣者、此方之儀、屬本意敵等、早速令退治、兼爲武運長久、家門繁昌、息災延命、奉立願狀如件、

文正元年十月十七日　　畠山　政長

〔皇大神宮引付〕皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰嚴密蒙御成敗、致神宮知行、專神役勤、致御祈禱大神宮御領美濃國中川御厨事

右件御厨者、爲大神宮御領、異于他嚴重神役料所也、而地下依無神宮知行、當時神税、如形致其沙汰之間、神役之勤營不叶事、御祈禱令退轉之條、神慮難測者哉、爲神爲〇爲下恐有脫字太以不可然、殊今依天下忩劇、禰宜等、別而勵御祈禱丹誠、折節嚴密被成下御敎書、致本宮知行、專神供之備、勤方々色々之神役、遂行神事者、聖運增長、武運長久、天下泰平、國家安全、御祈禱何事過之乎、不日蒙御成敗、致本宮知行、遂神事勤營、爲抽御祈禱丹誠、注進如件、以解、

應仁二年六月日　　大內人――定治

禰宜從四位上荒木田神主氏經

神領訴訟

〔小右記〕長元二年七月十八日乙亥、右中辨持來伊勢大神宮伊賀神戶愁文、幷伊賀守光清申文等、傳宣旨云、差遣檢非違使於事發所、可勘糺也、國々異損由云々、不可本多類、可無事煩之由可召仰者、永可給下之由口二人宜歟口各爲有所口也、抑別當有所行歟、廷尉不慮之聽備耳而已、

〔大神宮諸雜事記　一〕長元四年五月日、伊賀守從五位下〇下字下恐有脫文朝臣光清、被配流伊豆國、發〇發上恐脫事字、彼國神戶御酒田一町苅取了、因之二所大神宮御神酒已以闕怠、仍神戶預注子細訴申於大神宮司、隨則且牒送國衙沙汰、且上奏於公家之程、訴神民之中仁、倫爲國司被殺害之由具也、依彼訴天國司所被配流也、

九月　　　　氏經判

飯尾彥右衞門尉殿

皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰美濃國中河御厨神稅被停止飯尾彥衞門尉押妨全徵納致神役勤事

御祈禱子細事

右件御厨者、自往古每年兩宮上分、并祭主分附、宮司御封錢等無懈怠、嚴重神領也、仍任例致催促之處、飯尾彥衞門尉押留神稅、不致沙汰之間、令神役闕如、御祈禱可退轉之條、神慮巨測者哉、嚴密蒙御成敗、色々神稅全徵納、彌爲專祈禱、注進如件、以解、

寬正五年十一月日　　大內人――安行

禰宜從四位上荒木田神主氏經十人署

皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰被停止飯尾彥衞門尉押妨全神役徵納遂行神事專御祈禱美濃國中河御厨事、

右件御厨、色々神役難澁事、捧禰宜等連署解狀、依令言上、雖被成下御奉書、猶以難澁之儀、神慮難測者哉、殊來月次祭以前、不遂徵納者、諸役人等之下行可闕如、然者神事可退轉者哉、不日重蒙御成敗、全徵納、遂行神事、爲專御祈禱、注進如件、以解、

寬正五年十一月日　　大內人――安行上

禰宜從四位上荒木田神主氏經十人署

〔寬居反故帖〕奉立宿願事

大神宮

廳宣

可早任先例、全本主河北八郎左衛門尉貞經知行、毎年本宮上分米無懈怠致其沙汰、專式日神役、致天下御祈禱、伊勢國朝明郡末永末富御厨事、

右件御厨者、爲嚴重神領、令備進毎年本宮上分米之處、當時依本主不知行、不及其沙汰、仍式日神役令闕如、天下之御祈禱令退轉之條、神鑑難測者哉、然早經其沙汰、全本主知行、爲專神役等勤、所宣如件以宣、

寛正五年二月十七日

禰宜荒木田神主判十人例

〔寛正年中日記〕一廳宣

可早任先例被止新儀課役催促美濃國中河御厨事

右當御厨者、爲嚴重大神宮御領、自往古守護不入之處、近年被相懸新儀之課役、殊當年德錢以下、被致譴責之間、及數度致其沙汰畢、仍有限神役之沙汰不可叶之由、百姓歎申之間、致注進嚴密雖被成下御奉書、押留御遵行、剩重被課段錢之條以外次第也、早速被經返彼德錢、自今以後可被停止臨時之課役、若御成敗及遲怠者、押止神事、可歎申公方樣者也、仍所宣如件以宣、

寛正四年九月日

禰宜荒木田神主判十人加例

一大神宮御領美濃國中河御厨上分當年分事、致催促候處、於神宮上分事者、一向無存知之由自御代官方承候、驚入存候、彼御厨者兩宮上分、祭主分附、宮司御封錢等、每年沙汰、自往古無相違、嚴重神領候、任先例員數候之樣、可被仰付候、若猶難澁候者、式日神役令闕如天下之御祈禱可退轉候之條、無勿體候、嚴密預御成敗候者、可目出候、恐々謹言、

判

文通判

就寄進狀等檢案內、以如此神領、彌爲奉仰神威、重奉寄之條、先規多存之上者、早任申請者、口入人文通貞松等致管領、至有限御油料錢者、無懈怠可令備進、寄文三通加判一通者留之、二通返之、仍爲末代龜鏡與判如件、

禰宜度會神主判禰宜十人連署也

〔內宮子良館記〕一今度〇長享三年事ノ一亂ハ、神戸七鄕ヨリ、神路山ノ山賊事ニヨリ、一段憤ヲ致シ、勢遣スル間、當祭ノ御贄クミ申サズ、去月ヨリ申事アル間、兩祭トモニ御贄不參、

一延德元年十一月御祭日記

當祭ニモ、神戸ヨリ御贄ノミ申サズ、子細ハ數年惡錢六貫サシタル所ヲ、廿サシ可進由申、傍官方ヨリ役人方ヘハ、數年卅指ニ御渡アル處、今度如此申ニヨリ、當祭ヨリ過分ニ惡錢ヲサシテ可渡由承候間、先々神戸ヨリ六貫指ノ時、其マヽ御渡有ラバ、今モ神戸ヨリ申分ニ、廿指ニ御渡有テコソ、廉直ノ御沙汰ニテ候ヘ、六貫指ノ時モ、卅指御渡アル時ハ、神戸ヨリハイカ程御請取候共、御懐ニハ、如近例三十指ニ御クミアルベキ由返答申ニヨリ、事スマズシテ神戸ヨリモ御贄參セズ、

〔皇大神宮引付〕一永奉寄進大神宮毎年供用米事

合毎年五石者在伊勢國飯野郡末永末富御厨年貢內也

右件御厨等、本宮上分米之外、年貢之內、毎年五石宛取、奉寄進大神宮供用料米也、仍雖至末代、無懈怠可奉運送神宮者也、若雖爲少分減員數、殊者有無沙汰子細者、件御厨等一圓、爲神宮口入所氏經神主御進退、永可有御知行者也、其時更不可申異儀、仍爲末代龜鑑、寄進之狀如件、

寛正五年甲申二月十七日　河北八郎左衛門尉貞經在判

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月廿八日丙寅、伊勢大神宮御領、武藏國大河戶御厨所濟事、增員數對神主被定下、當所田代捌佰餘丁也、平家知行之時、本宮御上分、國絹佰拾參匹外、雖不能神用、當于此御時、爲公私御祈禱、正官物幷所被奉免也、所謂本田別貳匹四丈、新田町別貳石、所當田町別壹石參斗云云、因幡前司、藤民部丞等奉行之云云、

〔松原家舊記附錄乾〕廳宣　權禰宜文貞神主

可早內宮使相共致沙汰、國崎神戶所司神人等所申、爲伊雜神戶所在神田六段半、安濃郡神田三町、作人等稱不熟由(○由恐田誤)任自由對捍所當上分、擬令闕怠御饌由事、

右件事如申狀者、彼作人等對捍所當上分、擬令闕怠神役之條無謂、然則早內宮使相共可令催辨彼所當之狀如件、以宣、

副下　本解

正嘉二年十月廿二日

禰宜度會神主判(○以下署名略)

〔神領給人引付〕一權禰宜度會神主文通貞松等謹言上

欲早任先規傍例、且依代々地頭方寄進狀、預御與判、全以下領、被備進有限二宮御油間事、副進、一卷

代々地頭寄進狀案、

右於伊勢國奄藝郡栗眞庄黑田鄕千王名內禰久者、代々地頭被奉寄二宮御油料所之間、口入文通貞松等致管領、令徵納有限神稅等、爲兩宮御油料、以每年三貫文代錢、無懈怠、爲口入所沙汰可令備進、時長官御方此外更不可有他煩者也、仍守傍例、且任地頭寄進狀等且與判、備末代龜鑑、彌令知行、爲專地下安堵、泰平祈禱、言上如件、以解、

康安元年(辛丑)十月七日　　口入所權禰宜度會神主貞松判

必加刑罰、已虧齋事、或致逃散、是以昔年停出擧、自茲以後、借求富民、至于報償、加利數倍、擧者有罪、償者受弊、宜始自明年、神税之外、擧正税十三萬三千束、以其息利充齋宮用、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事

右得神祇官解偁、承前之例、大神宮司檢納伊勢國多氣渡會兩郡神田租、及七處神戶田等租、支用祭祀、從來尙矣、中間國司預以檢納、仍檢案內、太政官去延暦廿四年四月七日、下伊勢國符偁、得神祇官解偁、神宮司解偁、伊勢國司移偁、太政官去延暦廿年七月一日、下諸國符偁、今案神祇令云、神戶調庸及田租、並充造神宮及供神調度、其神税者、一准義倉、皆國司檢挍者、准據令條、既稱檢挍、至于支用、理難專輙、宜國司郡司神主等支度祭料、幷注其殘、申上聽裁者、國司等勘知用帳、封收神物、既違舊例、凡此大神者、天下貴社、如是之類、元來所禁也、而今准諸神、國司檢收、於事不穩者、右大臣宣、宜依舊例勿預國司者、自厥而後、宮司檢納、充用祭料、但物被充造神宮及離宮之用、所殘數少、祭用有闕、仍更請闕料、卽太政官去弘仁六年六月九日、下神宮幷國司符偁、得神祇官解偁、大神宮司解偁、年中神事、雖一可闕、當國神税、所殘數少、望請他國神税、充用所闕料者、右大臣宣、他國所有、徒積希用、當國所納、隨用已盡、縱有要須、卒爾何支、宜以他國神税、一充年中雜用料、其當國神税、每年儲置、若不得已必可用者、先申後用者、從此國司始亦預納、須依符旨令充用、而年中祭用稻合四萬一千一百九十束一把、今在他國神戶合百卅一烟、所輸租五千二百五十束、除例用外、所遺亦一千五百八十五束、亦當國所出租三萬五千束、爰當國他國神税合三萬六千五百八十五束、卽共充用、猶所闕稻四千六百五十束、其代借用正税、雖割所輸租卽便塡進、而每年有殘、封納爲煩、望請停煩預國司、令神宮司依舊檢納、預以支用、濟其祭事、但借請正税充闕料者、永從停止、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁十二年八月廿二日

伊勢大神封戸、調絁三百匹、庸米三百斛、已上置當國口前繞乃神祇伯大中臣等家、比年政納神祇官、

右被右大臣宣偁、今諸神封物、停收神祇官、宜自今以後、上件等物、納齋宮寮以充雜用者、宜承知、依件施行、但諸國所送之齋宮料用絁三百匹、庸米三百斛、永從割、仍即納官、符到奉行、

延暦廿年九月十三日

〔神宮雜例集 一〕太政官符伊勢大神宮

一多氣度會二ヶ郡堺內、授受寺田幷王臣位田、及他郡百姓口分田事、

上件三色田、割出神郡、應授他郡田、但禰宜祝位田者、不在此限、

二ヶ神郡逃走百姓口分田地子、國司徵納、混合官稻事、

上件地子稻、應收神稅、

右二條事、國司依件施行、〇中略

以前得神祇官解偁、今月廿日供奉御卜所祟事條如件者、被右大臣宣偁、奉勅宜依狀施行者、國幷司宜承知、依宜施行、符到奉行、

從五位上行右少辨當麻眞人永嗣　　左大史正六位上會賀臣直繼

寶龜五年七月廿三日

〔類聚三代格 一〕太政官符

應收神郡百姓逃亡口分田地子事

右得神祇官解偁、御卜所祟多氣度會二箇神郡百姓、逃亡口分田地子可爲神稅、而元來國司混合正稅、自今以後、擬收神稅者、被內大臣宣偁、奉勅依請施行、

寶龜五年八月廿七日

〔日本後紀 二十嵯峨〕弘仁三年五月辛酉、勅伊勢國多氣度會及飯高飯野等七郡神戸百姓等、緣徵正稅、

信濃國廿五戸

代米百八十三石一升

濟例

正物布百卅端　曳出物馬二匹　卒馱五匹　使料布八十段　祝料布十段　使供給雜事

上野國廿五戸

代米

濟例同二于信乃一

〔公文筆海抄〕檢納

米參万斛　稻參万束　大豆參万斛　絹參万疋

布參万端　糸參万兩　綿參万屯斤トモ書之　綾參万疋

潤月年ハ綵三万疋副之

紙參万帖　鐵參万挺　馬參万疋　牛參万頭

右諸國神領所レ進、檢納如件、

其年正月某日

祭主御判

御下文者、遣二宮司之許一、下家司役也、檢納返抄者、吉書目代預二置之一、

〔續日本紀二文武〕大寶二年七月癸酉、詔伊勢大神宮封物者、是神御之物、宜下准二供神事一、勿上レ令二濫穢一、　八月癸亥、勅伊勢大神宮服料、用二神戸調一、

〔續日本紀十聖武〕天平元年四月癸亥、勅毎年割二取伊勢神調絁三百疋一、賜二任神祇官中臣朝臣等一、　二年七月癸亥、詔曰、供二給齋宮年料一、自レ今以後、皆用二官物一、不レ得下依レ舊充中用神戸庸調等物上、

〔新抄格勅符抄神封〕太政官符　民部省

具米八百四十九石六斗四升二合八勺、運賃雜用如定、曳出物上馬二匹、今匹三郡々催使菜料雜事卅度、

主税寮

勘申伊勢二所大神宮近江國御封所當幷能官米差別見否勘文事

合五十烟　代米三百六十六石二升

少屬佐伯末則

允　菅乃倫時

右今年二月十八日宣旨、同廿九日到來偁、左中辨藤原朝臣資信傳宣、權大納言藤原朝臣宗輔宣、奉勅、件御厨令彼寮宜辨申者、抑就宣下、謹檢彼國文簿、御封所當三百六十六石二升之外、至于自餘裝束米等者、在國沙汰也、非當寮所知、又以官米爲能米、以乃米爲官米、差別式條不分明矣、但於如此之濟例者、且依先例、且任國例、可有裁報歟、仍錄言上如件、

久安二年三月二日　竿師同

頭兼典藥頭侍醫美作權介丹波朝臣重基

美濃國五十戸

保元院宣、以中河御厨爲濟所、

代米三百六十六石二升

濟例

凡絹百六十匹　准米二百八十一石五斗八升　曳出物馬一匹、代絹五匹、

永暦元年大司公清在任以後、以八丈絹七十匹、凡絹五十匹辨濟之、在曳出物馬一匹、

仁安元年大司有長任、以八丈絹八十匹、凡絹五十匹濟之、在曳出物馬一匹、催使供給雜事、幷副夫領送司庫、

遠江國五十戸

都田御厨爲使補所

代米百六十三石五斗（治承主税寮勘文）

調絹五十匹（代五十石）　庸糸百絢（代十一石）　中男作物油三斗五升（代十石五斗）　租穀二百石（代七十八石）

封丁二人（代十石）

運賃（石別二斗）卅二石七斗

合准米百九十六石二斗

済例

保元　宣旨（天）可済三百七十石

治承　宣旨（天）可済四百七十石

抄帳云

御上分用紙一千三百帖、中紙五百帖、具米八百五十六石、（運賃雜用如定）使供給卅五ケ度、

近江國五十戸

國司支配郡鄕有其沙汰

代米三百六十六石二升（久安主税寮勘文定）　調絹五十匹、代二百石、（匹別四石）　庸米六十石（烟別一石二斗）　中男

作物油三斗五升、（烟別七合、升別二斗五升、）代十石五斗、（升別三斗）　租穀二百石、（烟別代四石）代八十五石五斗二升、

（石別四斗二升七合六勺）　封丁二人、（但廿五烟一人）代十石、（人別五石）

運賃百八十三石一升（石別五斗）

合准米五百四十九石三升

済例

調絹一匹　庸米一石二斗　中男作物油七合　租穀四石　封戸（○戸恐丁誤）廿五烟一人

運賃

隨國有法、但美乃副夫領、信乃上野副駄賃、仍除之、

合准米

除色代濟國分

尾張國

本封

調絹九十匹　庸米十一石　租穀四十石　徭功米三十六石　中男作物胡麻油七升　封丁一人

新封

調絹二十五匹　庸米三十石　租穀百石　中男作物胡麻油一斗七升五合　封丁一人

參河國

本封

調絹十九匹三丈七尺五寸　庸米二十三石一斗　徭功米七十五石　中男作物胡麻油七升　封丁一人

新封

調絹參拾漆匹壹丈壹尺貳寸五分　庸米四十二石八斗七升五合　租穀百石　中男作物胡麻油一斗七升五合　徭功米六十二石五斗　封丁一人

又云、准米三百十二石五斗九升九合、庸米六十五石九斗七升五合、　雜用二百四十六石六斗二升四合、使供給雜事、

出納、

〔延喜式伊勢大神宮四〕凡封戸仕丁者、大神宮三人、豐受宮二人、荒祭宮、月夜見宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊佐奈岐宮、伊雜宮、多賀宮、各一人、御厨十六人、齋宮卌八人、祭主十人、

凡神封調絹一百匹、神嘗祭明日買進齋宮、

凡大神宮司二員、大宮司一員正六位上官、少宮司一員正七位上官、其季祿以神税給之、大神宮并豐受宮禰宜帶五位者位祿、同以神税給之、資人以神郡人補之、

凡三箇神郡、并六處神戸、及諸國神戸調庸田租者、依國司所移之調文租帳等、宮司勘納、其勘納之狀附國司、移送主計主税二寮、

凡年穀不登、調庸減少、先割置供神料、所遺量充宮司俸料并諸使祿、若無遺餘、不必充之、

凡三神郡、并六處、及諸國神戸者、不出擧正税、

〔延喜式民部二十二〕凡伊勢齋宮者、差神戸百姓一百卌二人、爲番令守衞、仍免其庸、

凡伊勢齋宮仕丁卌八人、以神郡并神戸百姓充之、

〔神宮雜例集一〕神封事

一七ヶ國封戸

二百九十戸、

十戸尾張國本封 年記未詳、或云、天慶三年八月廿七日符、是新神戸歟、 卅戸參河國本封 寛弘二年以前符 百戸參河、近江、美乃、上野、各廿五戸、長曆二年七月符 百戸尾張、近江、美乃、信乃、各廿五戸、永承三年十二月十日符、 五十戸、遠江國、載于正曆正税帳之由、見主税寮勘文、

代米

畑別所當

一高五百二拾六石五斗　檜垣主馬

〔神封通考〕上件ノ御朱印地總高、六千百九十八石五斗ナレドモ、其内六百石餘ハ祭主職料トシテ藤波家領セラル、但シ天正十二年ニ、祭主慶忠朝臣ヨリ始テ所納セラルヽナリ、又九十石餘ハ大宮司職料トシテ河邊家ニ領ス、又百四十石ハ神用ノ土器料トシテ有爾村ノ役人等收納シ、二千百三十貳石餘ハ神供ノ御鹽料トシテ二見鄕ノ役人等收納ス、又二千八百餘石ハ兩宮ノ正員禰宜幷諸代ノ權官物忌等ノ內、其外慶光院等ノ寺門ナドニ天正以來收納シ來ル定メアリテ、凡五十戶許ニ配分受納ス、其所納ニ不同ハ有レドモ、各家領ノ如クニシテ相傳セリ、其餘二百八十石許ヲ朝夕ノ御供米トシ、四十餘石ヲ神事料トス、此配當ノ子細ハ古今少ゾト差異アリ、今ハ其概略ヲ述ルノミナリ、

〔寺社御朱印記伊勢一〕御朱印

一高二百石　內宮　山本大夫

一高八百石　外宮　春木大夫〇中略

一御法度　同二宮　年寄共中

一御法度　外宮　年寄共

一高四百三拾石八斗　外宮　上部大夫

一高百四十七石七斗餘　同　松尾大夫

一高五拾石　同　丹藏大夫

一高五拾石　同　福島大夫

一船壹艘　度會郡大湊　角屋七郎次郎

〔延喜式三臨時祭〕凡諸國所進神稅交易雜物、幷伊勢國度會多氣飯野三郡浪人調庸等者、校此官諸司

貢賦徭役

臣〇志摩國鳥羽城主の御預りなりし故、伊州と幸次朝臣とに御奉書を下され、兩家の御家來幷山田三方立合て、前山の領分定めたり、〇中略さて此後前山の内に、紀州御領と山田領の界目分明ならざる所あり、寛文七年桑山貞政朝臣御奉行の時、紀州へ御達しありて、田丸表役人と前山にて出合給ひ、三方の輩も罷出て、界目を定めたまひたり、

〔二宮年表附錄二〕此以前より其方内々被申候伊勢大神宮近所に運上のあがり候山之事、右之運上可被成御赦免之旨被仰出候、彌山之名其外之樣子、具以書付可被申上候、恐々謹言、

九月十一日　阿部對馬守判
　　　　　　阿部豐後守判

花房志摩守殿〇中略

勢州山田前山之山手年貢事、今度被聞召屆被成御赦之間得其意、以來申事等不仕候樣、境目以下能々入念可被申渡候、恐々謹言、

寛永十六卯九月十七日　阿部豐後守
　　　　　　　　　　　阿部對馬守
　　　　　　　　　　　松平伊豆守

內藤伊賀守殿
花房志摩守殿

〔寺社御朱印記伊勢一〕御朱印

一高二千百三拾二石餘　度會郡二見鄉六ヶ村惣代三村總左衞門
　　　　　　　　　　　同宮總代井面兵部
一高三千五百四十石　伊勢大神宮尾崎左膳

二見鄕總中

條々

一今度二見鄕六ヶ村、爲二內外兩宮御鹽田御寄附一有レ之、御鹽無二怠慢一可レ勤二仕之一、

一江村、三津村、山田原村、內宮方、今一色村、西村、庄村、外宮方御定之上者、諸役以二降鄕之並一無二違亂一可レ勤レ之、

一御鹽之宮、此度造營有レ之、以來及二破損一者、從二六ヶ村一可レ修二理之一、

一山林竹木猥ニ不レ可二伐採一、雖レ然御鹽之宮修理之時者、應二其用一可レ伐レ之、其外禰宜百姓居屋敷之內者非二制限一、

一二見鄕中牢人惡黨不レ可二抱置之一、

右條々堅可二相守之一、仍執達如レ件、

寛永十年六月十三日　河邊侍從忠勝

古河侍從利勝

前橋侍從忠世

二見二鄕總中〇中略

花房幸次朝臣〇山田奉行前山を神領に還し給ふ事、附桑山貞政朝臣〇山田奉行前山の堺目を定め給ふ事、

前山は外宮宮山に降りて他領なるべき地勢にあらずといへども、亂世より一字鄕村に屬す、それ故山田より前山にて薪を取るため、一字鄕村に山手といひて年貢を出し來れり、神民此事を御奉行花房志摩守幸次朝臣に歎奉り、御推舉を以て江戸に訴へしに、寛文十六年己卯九月十日願の趣許容ありて、前山の地前規の如く神領に還し付け給ふ、其頃一字鄕村は內藤伊賀守某朝

右之內宮司高モ入
右之外六百九拾壹石三斗三升四合分祭主
總高三千四百五拾六石六斗七升六合
正保貳年九月九日　兩宮長官
同神主中

如右シテ公儀江上ル

右之神領御朱印ノ表ノ高ト扨納所之高相違之子細ハ御朱印ニ有爾村百四拾石ト有、是ハ長の分也、其故ニ四ヶ村の內にては納所せず、神領之外にて餘村ヨリ納所スル也、御朱印之表ノ如ノ外ニ納所スル高五十六石六斗七升六合多シ、此子細文祿年中之御朱印二千五百石也、其後檢地有シ時八百石餘打出ス也、其時兩宮ヨリ內宮上人〇慶光院ヲ頼、神領ニ相添被下候樣にと申上候へば、則相調元和三年九月之御朱印ニ、三千五百四十石ト被下候也、彼五十六石六斗七升六合ノ所ヲバ水帳ニ被下候故ニ納所スル所也、御朱印ヨリ納所スル所多キ也、

〔代々乃恵〕花房志摩守源幸次朝臣〇山田奉行二見の鄕を神領に復し給ふ事、
二見ハ江村、三津、山田原、庄村、西村、今一色六村あり、高二千百三十六石餘の地也、亂世より北畠氏に押領せられ、其後鳥羽の城主九鬼氏の領地となりたりしを、幸次朝臣江府に吹擧ありて、垂仁天皇の御代、內宮御鎭座の時より御鹽を調備せし由緒上聞に達し、寛永十年六月十三日神領に復し附け給へり、其時下し給へる御朱印幷御條目左のごとし、

伊勢國度會郡二見鄕六ヶ村、合貳千百三拾石餘事、爲御鹽田之處、近代斷絕畢、今度相改寄附之、兩宮御鹽之儀無懈怠可勤仕之者、永代不可有相違者也、
寛永十年六月十三日

天明八年九月十一日〇德川家齊

天保十年九月十一日〇德川家慶

右者御代々御朱印頂戴之年月〇中略

御當代御朱印

伊勢國渡會郡之內田井村、野尻村、相地村、田宮寺村四箇村、都合五百貳拾六石五斗之事、如先々令社納、不可有相違之狀如件、

元和三　九月七日御朱印

內宮長官神主中

右御代々御朱印頂戴年月如前

〔外宮引付〕一正保二年九月二日ニ、五ヶ村〇神領知行之儀ニ付、小林〇山田奉行所ヨリ兩宮ヘ申來ル下書、

一宮川ヨリ外之神領不殘其村之內北南西東間數幷一在宛之家數書付可申候、但家數ハ寺方隱居後家等共ニ、

一其村田畠之高水損ひそん之分細ニ書付可申候、

右は外宮神領之事まで

右ノ如ク申來ルニ付、神領入組ニテ有之故ニ、外宮領計難分之由コトハリ申、兩神宮ト宮司出合、間數打申候覺書之事、〇中略

神宮領總高積タル覺書、祭主宮司上人皆々入テ兩宮神領目錄、〇中略

五口〇棗宮村、平尾村、有爾中村、竹河村、上野村、合高貳千七百六十五石三斗四升貳合

此內百八十石御上人分

此內百廿石上野村ニ有

一四百五拾石　野後村
一六拾石　田みや寺村
合五。百。貳。拾。六。石。五。斗。
文祿三年九月廿一日御朱印、
內宮長官神主中〇中略

〔料封通考〕豐臣家ヨリ朱印ノ證書ヲ賜ハリシ高、合テ四千六十六石五斗ナリ、

〔御朱印寫〕御當代〇德川秀忠御朱印
多氣郡之內、齋宮鄉、中村、上野村、竹川村四箇村三千四百石、同國渡會郡之內有爾村百四拾石、都合
參千五百四拾石、
元和三年九月七日御朱印
祭主
宮司
兩宮長官
神主中
上人
寬文五年七月十一日〇德川家綱
貞享二年六月十一日〇德川綱吉
享保三年八月十一日〇德川吉宗
延享四年八月十一日〇德川家重
寶曆十二年九月十一日〇德川家治

伊勢多氣郡神領目錄

一貳千五百石　齋宮中村　上野村竹川村

同渡會郡

一百四拾石　うに

合貳千六百四拾石

文祿三年九月廿一日御朱印

祭主

宮司

兩宮長官

上人〇慶光院

神主中

太閤秀吉公御朱印　橫折ニ認有之

勢州多氣郡齋宮村社領出米方玖百石之事、以檢地之上令寄附畢、可令社納候也、

慶長元十二月廿八日御朱印

兩宮神主中

上人

太閤秀吉公御朱印

伊勢國渡會郡內神領目錄

一拾三石　たぬ井村

一三石五斗　さうち村

岡本下野守殿

一柳右近殿

服部釆女殿

松庵　各御中

宮川之内御検地之儀、先度預御状候、申候へバ被成御免候、則上部被下候、定而様體可有物語候、此上於其元御地走肝要候、御奉行衆折紙を以申候間被仰屆、山田宇治湊濱、安堵仕候様被仰付、神慮之儀奇特難有存候計候、頓而御□被明□驚待申候、恐惶謹言、

十月十七　　施薬院全宗

稲葉兵庫頭殿人々御中

従宮川内、御検地之儀ニ付、永々御逗留候、然者御免許被成候間、安堵之様ニ可被仰候、坂喜右衛門方にも、此分可被仰、周養三人、先度御越候而、別而肝煮に候、是にも懇に可被仰屆候、御奉行衆、定而可為祝着と存候、参可申候へ共、上様御成候□□□□候間令覧候、恐々謹言、

十月十七日　　薬院全宗

上部大夫殿

先度申入候、依宮川内、御検地候す、施薬院様奉頼、御詫言申上候處、被成御赦免之旨被仰出候、御奉行、中之濱施薬院御折紙、稲葉兵庫頭殿之御状拙者方へ之御折紙、爲御拜見寫遣候、誠神慮有難被存候、恐惶謹言、

十月廿一日　　上部大夫貞○花押略

湊御老方中

〔御朱印寫〕太閤秀吉公御朱印

禰宜從三位度會神主貴彥〇以下署名略

二月三日　　秀吉御書判

上部大夫殿御宿所

〔神宮家舊記〕皇大神宮神主

注進被經次第上奏、可令奉達叡聞之旨、兩大神宮領中、祭主謀訴、神宮悲歎申分子細專要之間事、

右〇中略抑神領勢州南北之分、以南方郡內羽林信雄替地貳千五百石分兩宮相定了矣、其以後自祭主被致重訴、於神宮領中五百石分可有收納之由、神宮各驚存、〇中略、豐受大神宮禰宜ヨリ亦同旨意ノ注進狀ヲ上レリ、

天正十二年十月十四日〇署名略

注進申上伊勢兩宮神領之事

右國々在々所々神領減來三千石餘、雖為宮著近年依不納、神事御供等難致調進之條、新寄進至被仰付者、神宮末代御相續可目出度之旨、注進言上如件、

天正十九五月日　　兩宮神宮中

進上　御奉行所

〔勢州社家文書下〕秀吉公神領檢地御免之一件旨、先度以折紙申候段、宮川內御檢地之事、被成御免由御諚候間、御檢地有間敷候、於根體者、上部大夫可被申候、神慮之儀、奇特存候、定而各處可御滿足候、恐々謹言、

十月十日　　施藥院全宗

羽柴下總守殿

稻葉兵庫頭殿

朽木河內守殿

〔神領〕天正七年外宮神税上分調子書に、員辨、河曲、朝明、三重、鈴鹿五郡にて、米六百八十一石六斗四合、錢二十六貫九百七十二文と記したり、然るを天正十一年、信雄朝臣〇北畠の時、多氣郡の内にて、齋宮、上野、竹川、中村の四ヶ村にて、二宮分二千五百貫文を給へり、此後太閤秀吉公御代、文祿三年九月廿一日、神領二千五百石の御朱印を給ひ、御當代〇德川元和三年九月七日、三千五百四十石の御朱印を玉ひしより、今の神領となりぬ、

〔永祿天正外宮引付〕信雄御朱印寫

目錄

一齋宮　　一同上野

一竹河　　一有爾中村

以上

右四箇郎、合貳千五百貫文、大神宮内外爲御供料、奉神納畢、全社務不可有相違之狀如件、

天正拾壹年拾月八日　　信雄御朱印

宮司殿

一神主殿

同神主中

〔應永以來外宮注進狀〕豐受大神宮神主注進早可經次第上奏被達叡聞神領子細間事

右當宮御領、到國々在々、近年御檢地以來、不納分千四百石餘矣、依之神事御供等、雖勵勤仕次第、神宮零落之間、既可及退轉事、寔悲歎之限、不過之處也、然者太閤秀吉欲致上訴之趣、先奉寬叡慮旨、以勅命、神領令寄附給者、聖運御長久、國家安全御祈禱何事如之乎、仍注進言上如件、以解、

天正十年二月日　　大内人正六位上度會神主久能上

十二月廿四日　　國綱（○花押略）

內宮佐八七神主殿

氏家郡之內栗嶋郷之事、忠綱任㆓寄進旨㆒、於㆓向後㆒不㆑可㆑有㆓相違㆒候、猶以被㆑抽㆓精誠㆒候者、可㆑爲㆓快悅㆒候、仍狀如㆑件、

天文四年乙未十一月三日　　藤原俊綱（○花押略）

內宮佐八與次殿

寒川郡（○下野名）之內、千足之所、宿願付而令㆓寄進㆒候、武運長久、當城繁榮之被㆑抽㆓精誠㆒候、（○此間闕文）至可㆑爲㆓大悅㆒候、恐々謹言、

永祿五年壬戌正月十三日　　□綱（○花押略）

佐八掃部大夫殿

祇園（江）歸城之爲、祈念大御供、伊勢掛㆓立願㆒候、仍下出井郷、永代奉㆓寄進㆒候、急度逹㆓本意㆒様、御精誠任入候、恐々謹言、

天正五年丁丑八月廿四日　　伊勢千代丸（提盛氏カ）

謹上佐八掃部大夫殿

〔勢州社家文書〕（上）秀吉公御書寫

國友之內、海老名藤三郎分、以㆓百石㆒令㆓寄進㆒候、可㆑有㆓全領知㆒狀如㆑件、

天正貳八月一日　　羽柴藤吉郞（秀吉御書判）

上部大夫殿（參る）

大神宮へ御初尾として、福永之內を以㆓百石分㆒口分進獻候、其御意得あるべく候、恐々謹言、

天正七　　羽柴藤吉良

右件神田者、爲大神宮御領、異他神田也、然近年上分許致沙汰云々、子細載難掌解具也、神慮難測者哉、然早任先例、遂究濟徵納、全勤仕式日神役、可致御祈禱之狀、所宜如件、

文明五年七月日

禰宜荒木田神主判

判十人

〔神鳳抄〕伊勢國朝明郡澤渡神田内宮五斗二月十　柿神田五斗

〔皇大神宮引付〕皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰、任先例理運、蒙御成敗、全神田内宮禰宜職田朝明郡柿杼渡神田事

右件渡神田者、爲當宮禰宜職田、往古以來無煩神田也、然荒木新左衞門尉、不知實名號公文給、後神税内半分押之間、不致神宮徵納、預置名主之處、數ヶ年神税、悉押取畢、不恐神慮猛惡沙汰、以外子細也、仍神役令懈怠之條、神慮難測者哉、然早任先例理運、蒙御成敗、被停止荒木押領、遂神宮徵納、專式日神役、爲致天下泰平精祈、注進如件、以解、

文明五年八月日

大内人正六位上荒木田神主定治

禰宜從三位荒木田神主氏經

〔鎭矢記〕大神宮御祓之箱頂戴、目出度候、仍葛西庄御神領之由承候、到于可爲如上代者、其類可多候、宜諸國之次候、伏所冀者、以神慮房總可乞本意候、此願令成就者、新御神領可令寄進候、委細者石卷父子可申上也、仍狀如件、

二月廿七日

氏康判

大神宮禰宜中

〔寬居反故帖〕氏家郡之内栗嶋鄕之事、任先例之旨、令寄附處也、無怠慢御精誠任口候、恐惶謹言、

勤注進如件、以解、

文明元年十一月日　　大内人――定治

禰宜從四位上荒木田神主氏經 十人加署

壁書

大神宮一切經所建國寺雜掌事

右伊勢國三重郡禰永之內一分事、爲藏經料所、神宮當知行之處也、若號寺領有掠申族者、彼郡下可明申者也、

文明元年十一月日 公方捺之

〔神鳳抄〕伊勢國三重郡伊佐奈岐神田 二丁

〔皇大神宮引付〕皇大神宮別宮伊佐奈岐宮物忌代荒木田俊重謹言上

欲早任先例被成連署御廳宣大神宮御領當國三重郡伊佐奈岐神田全知行專神役勤子細事

右件神田者、爲最重神領、迄一色成就院殿(○義直)御代者、無相違爲日野永隆庵代官、執沙汰之處、當一色殿國御成敗、自康正年中、岡田源左衞門尉令押領、上分許致沙汰、其後世保殿御代官者、相差羽繩、又上分許致沙汰之間、年中諸神役令闕如之條、神慮巨測之由、多氣殿樣(○北畠)國御成敗之刻、以連署御廳宣依被歎申、被返付神宮處、當職吉內殿樣、不預御成敗之條、諸役人等愁訴此事也、然早重而被成御廳宣、以當職御成敗、全知行、專神役、爲致御祈禱精誠、俊重謹言上如件、

文明五年七月日

廳宣

可早任先例致所務專神役三重郡伊佐奈岐神田事

副雜掌解

也、然近年依守護方御被官人押領、不知行之間、官幣供給、幷神供勤營闕怠、神事御祈禱令退轉之條、神慮叵測者也、然早任先例理運、被成御廳宣、於守護方、全知行、專神役等勤、無神事懈怠、爲被專天下泰平御祈禱、謹言上如件、

應仁二年五月廿五日

廳宣

可早任先例理運、被沙汰付神宮雜掌、全知行、備色々神役、遂行神事、專天下御祈禱、伊勢國河曲郡南職田事

副進

雜掌解

右件在所者、爲本宮年中色々神役、幷年中四箇度官幣使供給役料所、異于他神領也、載于糾雜掌解具也、抑件南職田者、色々神事禮奠、天下御祈禱嚴重料所也、被妨之條、神鑒最難測者哉、然早任先例理運之旨、被返付神宮、令勤仕式日神役、可致御祈禱之狀、所宜如件、以宜、

應仁二年五月廿六日

禰宜荒木田神主判十人

〔皇大神宮引付〕一皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰、嚴密蒙御成敗、大神宮領內宮藏經料所伊勢國福永御厨被停止高橋右京亮押妨、全神宮知行、專御祈禱事

右件大藏經者、勝定院殿樣〇足利義持有御寄進大神宮、而代々一禰宜致奉行之由蒙御成敗、安置內宮建國寺、致御祈禱者也、爰普光院殿樣〇足利義教有御建立藏殿、而被寄進福永御厨一分、無知行相違、致長日御祈禱之處、高橋右京亮成妨之條、神慮難測者也、不日蒙御成敗、全神宮知行、彌爲專御祈禱忠

勾當伊賀朝臣是直
檢校税臣秋實
擬領名口今釜
副判
守滋野朝臣在判
權掾橘
目日置豐秀
權目高橋

〔神領給人引付〕富房寄進

一永奉寄進所領事
　合田地五段者
右田地者、度會氏子買得、相傳之所領也、而依有敬神之志、爲仰神威所令奉寄也、豐受皇大神宮月次祭、御神酒料田也、於御神酒者、以毎年十二月可令備進于宮中者也、仍寄進文二通、內一通者留神宮、一通者被返之、備後代龜鏡、爲全領掌奉寄之狀如件、
　貞和五年十月日
　　　　　　　　　　　　領主度會氏子

〔皇大神宮引付〕一目安
皇大神宮御領伊勢國河曲郡南職田口入所雜掌成利謹言上
欲早任先例被成連署御廳宣全知行事、諸神役勤營大神宮御領伊勢國河曲郡南職田事
副進
　證文等
右件南職田者、爲一圓不輸之神領、年中本宮勤役、幷年中四箇度官幣使供給役、色々嚴重神役料所

田　同郡有重神田　一志郡近運神田　安濃郡福次神田　同郡内佐宇神田　川曲郡光富神田　三重郡米富神田　同郡櫻田神田　朝明郡頼田神田　同郡澤渡神田　同郡若栄神田

志摩國宿島出町神田

外宮

伊勢國度會郡九段　同郡丹河御厨内神田一町　多氣郡一町一段　飯野郡立野名一町　安乃郡二町　川曲郡井戸神田

志摩國胡佐莊内神田四町四段

〔光明寺舊記　四〕伊賀國名張郡夏見郷刀禰等解申註進伊勢大神宮所領地山河四至事

一四至東限高四河其河後伊賀郡阿保村主　南限大和國木堺西限粟河在夏身郷夏身村主　北限大池頭在

一四至所在地名比奈知、針生、長木、布乃布、大野、大夏平、色豆、上家、菅野、土屋原、曾見、高羽、

一荒田新開等　在件所所□□注□□

一柚山等　東在馬背柚　南在柚木知名

一河西在粟河　中在横河

一鷹巢一所號色豆巢

右大神宮所領地山河野等并四至依郡符旨如舊注申如件、郎大神宮司使被濟奉幣建牓示已畢、仍注事狀注申、

承平四年十一月十九日　刀禰夏身今世

夏身貞宗

郡判　前勾當式部卿宮侍伴友高

右神田如件、割度會郡五町四段、二町四段大神宮、三町度會宮、令當郡司營種、收獲苗子、供用大神宮三時幷度會宮朝夕之供、自餘依當土估賃租、充供祭料、

〔神宮雜例集〕一神封事

一神田事〇中略

御常供田五十九町三段百廿步代田百十二町一段九十步、以二段爲供田一段、

度會郡三町

飯高郡三町以二段爲供田一段、代田六町、

安乃郡七町三百步東郡三町四段、田代五町一段、以一段百八十步、爲供田一段、西郡三町六段三百步、代田五町五段九十步、

三重郡十町七段、以二段爲供田一段、代田廿一町四段、

朝明郡十四町、以二段爲供田一段、代田廿八町、

員辨郡廿一町五段百八十步、以二段爲供田一段、代田四十三町一段、此內三町、天曆七年正月廿八日、大宮司大中臣中理任奉加之、

神田別宮攝社田除之、中理奉加之田、不申請私奉寄、應和元年被停止訖、

二宮

伊勢國川田神田

伊賀國阿保神田

志摩國賀茂村神田內宮推迫神田三段、外宮三町、五（五恐三誤）百廿人又五段、　甲賀村神田、內宮五町九段、外宮二町二段、又二段百二十八如何

內宮

伊勢國度會郡若菜神田　飯野郡池田神田　同郡稻木神田　飯高郡英太神田　同郡牟呂山神

合壹段別仁口入所御得分百文宛者

右所帶者、爲往古一圓大神宮御領、於領主職者、良雅重代相傳之地也、而爲奉尊敬神、加進新加上分、以當五禰宜國行神主所定口入所、每年無懈怠可送進彼宿所、若不法懈怠之時者、自口入所可被致苛法之責、仍爲後代寄進之狀如件、

康永三年七月廿六日　　領主法眼良雅判

〔神鳳抄〕伊勢國朝明郡德光御厨内宮二石

〔皇大神宮引付〕廳宣

可早任先例被停止段錢催促沙汰專神役瀧原宮御筒料所朝明郡德光御薗事

右件御薗者、自往古每年御筒役上分、幷四ヶ神役之外者、不及段錢以下之他役催促、嚴重神領也、然今及新儀催促之條、神慮難測者哉、然早任先例被止催促、全神領、可令備進式日神役之狀所宜如件、以宣、

寬正四年四月廿一日　　世古部彌兵衞申

禰宜荒木田神主十人判

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、○中略從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、現神御宇倭根子天皇詔旨宣大命、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食宣、○中略辭別氏宣久、大神宮乎始氏、諸神多知爾、御戶代奉利、諸祝部治賜夫、○下略

〔延喜式四伊勢大神宮〕神田卅六町一段

大和國宇陀郡二町

伊賀國伊賀郡二町

伊勢國卅二町一段桑名、鈴鹿兩郡各一町、安濃、壹志兩郡各三町、飯高郡二町、飯野郡十一町六段、度會郡十町五段、

合捌段六十歩者

右當御園者、去承元年中、建立豐受大神宮御園、送多年畢、而永樂寺領地頭、致押妨之間、年々不及上分口入沙汰、仍以有近之名字、賜本所御擧狀、訴申六波羅家、番訴陳之處、有近帶證文、道理之刻地頭遁避之間、去正月廿二日、預武家御裁定、賜本所御下知畢、仍仰神威、依有存旨、以權禰宜行文神主定口入所、如本號荒張御園、米叄斛御園本器定限永代、每年無懈怠可備進彼宿所也、但於上分者、以此內爲口入所御沙汰、直可被備進御贄上分也、末代若致對捍之時者、付件八段餘之地本自口入所可被致寄法之責、仍爲後代寄進之狀如件、

弘安三年四月廿三日　　御園領主法橋上人位判

〔神鳳抄〕美濃國內宮津布良開發御厨但建久以後神領

〔皇大神宮引付〕重寄進美濃國津布良開發御厨御上分用途事

合錢五拾貫文者

右當御厨事、爲大神宮御沙汰、如元令安堵者、先度御上分五拾貫文令寄進之上、重相加伍拾貫文、每年百貫文、無懈怠可令備進也、加之御裳濯河堤築、每年拾貫可令沙汰者也、然者向當御厨、賴範子々孫々、若不慮之煩、有令出來之事者、神宮可被致一味之沙汰也、領知無違亂者、上件之御上分等、子々孫々、永代可致勤厚之沙汰者、爲後代龜鏡寄進狀如件、

正應六年六月日　　開發領主源賴範判

〔神鳳抄〕伊勢國安西郡永富神田八丁七反

志摩國答志郡相可御厨、木本御厨、

〔鏑矢記〕永寄進申伊勢國安濃郡永富本名中馬神田三疋田荒張佐奈散在副世戸同領志摩國木本相哥等口入所職事

伊勢國鈴鹿郡葉若御厨内時御神領内　二斗五升九月　井後御厨承久神領内　二斗五升九月

〔吾妻鏡　二十五〕承久三年八月七日戊午、世上屬無爲、是符合二品禪尼〇源頼朝妻政子夢想、仍奉寄所於二所大神宮、所謂内宮御料、後院領、伊勢國安示村井後村、外宮御分同國領葉若西園兩村也、祭主神祇大副隆宗朝臣、藤原朝臣定常彼寄附狀等、重爲報賽使節云云、

〔神鳳抄〕尾張國一楊御厨内宮　上分三十石、田六十二丁、畠二十四丁五反、

〔檜垣兵庫家古文書〕永寄進尾張國一楊御厨上分口入米事

合壹石之中

上分壹斗、口入料漆斗也、神庫狀定也

右件御厨者、往古爲内宮御領之處、神宮解狀事不成上之間、任傍例所寄進當宮也、縱雖爲一方爲成給解狀、以當時七禰宜定行神主定口入所、每年無懈怠、自在地可運送上分口入料等也、當時向後訴訟出來之時者、爲口入神主沙汰云、解狀應宣云、連署正印、旁可有其沙汰、仍迄至永代不可有相違、寄文三通、内一通者願正印、可返給領主、一通者可被納神庫、一通者可被留口入所之狀如件、

弘長元年六月十五日　　　　　　　　　　　雜掌沙彌唯稱

領主飛驒守大中臣權惟〇花押略

判

就寄文檢案内、以一宮御領寄進二宮之條、傍例多存、然則早號一楊御厨、任寄文之旨云上分云口入料、每年無懈怠可被備進也、仍寄文三通之中、加判一通者返之、二通者留之以判、

禰宜度會神主〇以下署名略

〔神鳳抄〕伊勢國多氣郡相可鄕内佐奈村

〔檜垣兵庫家古文書〕永寄進多氣郡相可鄕三疋田村荒張御園口入料田事

大將家ノ立テ給ヘル日本第二ノ御クリヤ、今ハ日本第一也、○中略

弘安二年十月一日　日蓮在御判

〔神鳳抄〕駿河國方上内宮上分三十石、百七十八丁六段、

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月廿八日己酉、被召皇大神宮禰宜長重、長重著衣冠參營中、而被寄附駿河國方上御厨於本宮之由、二品○源頼朝直被仰含、於御下文者、去廿二日所被成置也、而長重遲參之間、于今被閣之、今日被下彼神主了、是義行○源義經參詣神宮、擬丹祈之由風聞之間、爲改其逆心、及此儀云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年三月十日己卯、自去夜亥剋、將軍家○源頼家俄以御病惱、而依有御夢想之告、駿河國方上御厨、止地頭武田五郎信光所務、寄附大神宮領、廣元朝臣奉行之、

〔神鳳抄〕參河國橋良御厨内宮六石　薑御厨外宮六石

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年五月十六日丁未、今日以參河國薑御厨、并橋良御厨地頭職、令去進大神宮給、兵庫頭廣元奉行之云云、

〔神鳳抄〕但馬國田公御厨内宮上分紙五段、口入百帖、件御厨、建仁二年寄進、上分紙在之、

備中國神代野部御厨内宮花山院前右大臣家領、建仁二年立之、供祭物、上分料絹貳千疋、口入料絹千疋、

〔神鳳抄〕若狹國白笠御厨内宮件御厨、去正治元年可爲大神宮領之由、國司奉免之上、建仁三年七月十日被下宣旨之後、同年八月日注上分口入員數、上分絹拾疋、口入料十疋、

伊豫國玉河御厨二宮臨時祭料前祭主土御門御領、件御厨、爲二所大神宮御領、可充臨時祭料用途之由、任院宣、建仁三年四月日國司奉免之後、同年五月三日被成院廳下文之上、任先度廳下文、并國司廳宣、以彼保永爲一圓神領、宛臨時用途、雖濫妨、子々孫々、相節知行保務、可令奉祈仕筭之由、元久元年三月九日重被成下院廳御下文、國郎國司同廳宣、留守所施行具也、仍毎年以彼御厨所當物、所令勤仕臨時祭也、

〔神鳳抄〕備前國永治御厨二宮勅願寄進、建暦二年所被下院廳御下文也、

〔神鳳抄〕下野國寒河御厨二宮上分同百八十丁、御紙三百六十帖、建暦三年被下院廳御下文、爲一向神領、

伊豫國千富御厨去建保五年被下奉免宣旨也、二宮上分饗料米等、相并百石、

所可令知行也、但於地頭等者、不可有相違、仍爲後代寄文如件、以解、

寿永三年正月日　　前右兵衞佐源朝臣

〔神鳳抄〕遠江國土田御厨

〔吾妻鏡　三〕壽永三年元年〇元暦三月十四日癸卯、遠江國都田御厨、如元從神宮使可致沙汰之由被定下云云、

〔神鳳抄〕武藏國飯倉御厨、當時四貫文　飯倉御厨、長日御幣紙五十丁

安房國東條御厨、上分四丈布五段、長日御幣紙五百六十帖、雜用料布百段、　白濱御厨、東條御厨内也、號ニ阿摩津御厨、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年元年〇元暦五月三日庚寅、武衞〇源頼朝被奉寄附兩村於二所大神宮、去永暦元年二月、御出京之刻、感靈夢之後、當宮事、御信仰異他社、然者平家黨類等、在伊勢國之由依令風聞、遣軍士之時者、縦雖爲凶賊之在所、不相觸事之由於祠官、無左右不可亂入神明御鎭座砌之旨、度々所被仰含也、謂件兩所者、内宮御分、武藏國飯倉御厨、被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主、外宮御分、安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖、爲一品房奉行、遣兩通御寄進狀、彼東條御厨事、先日雖被付御寄進狀、去年十一月、禰宜等捧請文云云狀跡不相應云云、不甘心歟、此上可爲何樣哉由御猶豫之處、御心中新願納得、偏蒙神御冥助之旨、彌以催御信心、而折節生倫參候之間、被御願旨趣、賜御書此寄進狀外也於生倫、生倫正衣冠、參御所給之、御寄進狀云、

寄進　伊勢皇大神宮御厨壹處　在武藏國飯倉

右志者、奉爲朝家安穩、爲成就私願、殊抽忠丹、寄進狀如件、

壽永三年五月三日

正四位下前右兵衞佐源朝臣

〔高祖遺書　五〕聖人御難事　錄内廿二

去建長五年癸丑四月二十八日、安房國長狹ノ郡ノ内、東條ノ郷、今ハ郡也、天照大神ノ御クリヤ也、右

上美始自政王免、下迄于百司民庶天、安穩泰平仁令施惠護天、賴朝加伴類仁璞寓天、夜乃守利日乃守利仁、護幸倍給倍止恐天恐天毛申天申久、

治承六年二月八日　前右兵衞佐從五位下源朝臣賴朝

〔皇大神宮引付〕應仁三年己丑

一大神宮領大庭御厨事、爲權五郎影正寄進、自往古無相違在所候、然間爲神宮代官下置出口室田候處、彼等押領仕、剩近年迄、至如形上分依不法、棄神祠罷成御敵御出候了、他國仕候、其後國事御成敗候、然間可被返付神宮事候、依如此子細、御陣未靜謐候歟、重而御寄進候者、可致御祈禱精誠候、次又委河方室田方幷武藏飯倉上分嚴密可致沙汰之由、堅預御成敗候者、可爲御祈禱專一候、恐々謹言、

正月廿六日　氏經判

謹上　太田備中入道殿〇太田持資

太田左衞門大夫殿〇子息也、太田資友

〔神鳳抄〕武藏國二宮大河土御厨内八丈絹三十疋之内十疋濃原上分、御幣紙四百三十口、入三十疋、外上分八丈絹三十疋、長日御幣四百六十八帖、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年正月三日癸巳、武衞〇源賴朝有御祈願之間、奉寄領所於豐受大神宮給、依爲年來御禱師、被付權禰宜光親神主云云、狀云、

奉寄御厨家　合一處

在武藏國崎西足立兩郡内大河土御厨者

右件地、元相傳家領也、而平家虜領天下之比、所神領也、而今新爲公私御禱、奉寄于豐受大神宮御領、所令勤仕長日御幣、每年臨時祭等也、抑令權神主光親祈請天下泰平之處、依有感應、爲殊祈禱

〔吾妻鏡 二〕治承五年養和元年〇十月廿日癸亥、昨日大神宮權禰宜度會光倫相鹿二郎大夫、自本宮參著、是爲致御祈禱也、〇中略仰曰、去永曆元年出京之時、有夢想告之後、當宮御事、偶仰之思異于他、所願成辨者、必可寄進新御厨云云、

〔神鳳抄〕相模國大庭御厨内宮上分、糙四十石、白布十三段、長紙五百帖、百五十丁十三郷、權五郎影正寄進家、田、鎌倉家知行之、然上分斗當十貫文沙汰、號各別本御領也、出口室田如行、領上分十貫沙汰、

〔吾妻鏡 二〕養和二年壽永元年〇二月八日己酉、被奉御願書於伊勢大神宮、大夫屬入道善信獻草案、是爲四海泰平萬民豐樂也云云、生倫著衣冠、參營中、賜之、則進發、中四郎維重被相副之、長江太郎義景爲神寶奉行、而首途、義景先祖權五郎景政、抽鄭重信心、去永久五年十月廿三日、以私領相模國大庭御厨、永奉寄神宮之間、彼三代孫、尤可相叶神慮歟之由、被經御沙汰、應其撰云云、

御願書云

維當歲次治承六年壬寅養和二年〇二月八日己酉、吉日良辰遠撰定天、前右兵衛佐從五位下源朝臣賴朝、謹代御幣砂金神馬等令捧齎持天、天照皇大神廟前仁恐天毛申天申久、〇中略愛平大相國淸盛〇俄早世勢留間、神慮不快乃由露顯奈利、但賴朝殊所恐波、如風聞波、熊野乃衆徒號志天、姦濫之巧乎類等、去年正月仁皇大神宮仁濫入志天、御殿於破損志、神寶遠犯用須、因茲御體遠皇大神乃御殿乃砌利、五十鈴乃河上乃邊仁假奉遷云云、亦同月仁、彼凶賊等、二所大神宮乃御殿近邊乃人宅仁亂入志、資財遠搜取利、舍宅遠燒失須留間、剩祠官等成恐怖天、參宮中天令騷動牟、此兩條全賴朝不謬、神明乃仰照鑒久、方今無事仁遂參洛天、防朝敵天、世務遠如元一院仁〇後白河奉任天、爲王乃慈悲遠令訪、神事遠如在仁奉崇天、正法乃遺風遠令繼牟、縱雖平家毛、雖源氏毛、不義遠波罰志、忠臣遠波賞志賜倍、兼又古今乃例遠訪天、二宮仁新加乃御領於申立天、伊雜宮遠造替志、神寶遠調進土勢牟所所請奈利、抑東州御領、如元久不可有相違留由、任二宮注文、染丹筆天奉免畢、此凡不能盡須、皇大神、此狀遠令照納天、

〔鏑矢記〕下野守源義朝朝臣寄文

寄進領地壹處事

在下總國管相馬郡

四至東限須渡河江口、南限龍沼上大路、西限蟯谷井日吹岑、北限岡太加井絹河、

右、處相傳令領地、令無他妨、於于今者所寄進伊勢大神宮御厨也、於地利上分者、可備進供祭物、爲奉大神宮御威、限永代所寄進也、於下司職者、至子々孫々、不可有他妨、仍爲後代勒新券、所寄進如件、

天養二年三月十一日　源押○花略

源頼朝卿寄文

永起請

下總國相馬御厨所當年貢料四丈白布事合佰肆拾端者

右當御厨所當、内外二宮上分口入料四丈白布參佰參拾端也、其外顯盛神主避文、爲令沙汰取所附起請也、然者至于彥章神主子々孫々、永無相違可令辨濟之旨、所起請如件、

永萬二年六月三日　源押○花略

〔神鳳抄〕攝津國中村御厨廿七丁、藤井中納言家領、件御厨元庄園也、而依宿願任傳例、承安五年寄進神領、供祭物上分米三石、雜用料八丈絹三口、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月十一日庚申、武衞頼朝○源邂逅見安房國丸御厨給、丸五郎信俊爲案内者候御共、當所者御曩祖豫州禪門頼義○源、平東夷給之昔、最初朝恩也、左典厩義朝○源令請廷尉禪門爲義○源御讓給時、又最初之地也、而爲被申武衞御昇進事、以御敷地去平治元年六月一日、奉寄伊勢大神宮給、果而同廿八日補藏人給、而今懷舊之餘、令莅其所給之處、廿餘年往事、更催數行哀淚云云、爲御厨之所、必尊神之及惠光給歟、仍無障碍于宿望者、當國中立新御厨、重以可寄附彼神之由有御願書、所被染御自筆也、

則加濱名本神戸田云々、被國司陳申云、件御厨起請以後、建立之上、前司爲勝已以停止、但任終年依人訴口然而依之口免除之理、爲檢田島嚴尚之處、住人皆悉逃去、然間暫寄住人宅等、以檢田口訴中被掠内財雜物、井被燒亡住宅之由上也、〇下略

〔神鳳抄〕外宮參河國饗庭御厨外宮見作三分一所當内七石五斗上分、殘口入、

信濃國長田御厨外宮二百八十丁、上分四丈、布二百段、神馬二疋、雜用布百段、一名保科、

〔中右記〕長承元年十一月四日、今朝彼御厨事、申子細了、

參河國饗庭御厨内、字角平等鳴鄕事、

件所代々國司奉免

永久三年被奉免宣旨了、於今者可爲御厨歟、後日宣旨違口口國司、

信濃國長田御厨事

件所代々國司奉免上了

年紀久積可爲御厨歟、可爲御厨、

同國芳美御厨事

件所無指本券、本領主源家輔負物之代讓而禰宜常季許之國司國房爲行二代隨奉免、其後久爲

公卿勤仕國役、仍不可爲御厨歟、可停止御厨、

右三ヶ所、大略所見注進如件、

三年正月廿九日、酉時許、爲申行陣定參内、源大納言師頼 按察大納言實行 右衞門督實能 右兵衞督宗輔 新中納言伊通 左宰相中將宗能 右宰相中將成通 右大辨師俊 新宰相中將公教 下文書、祭主卿言上、信濃國外宮御厨長田、國司稱新立御厨欲停廢間、神人被殺害事、大略一同定也件御厨、去々年有議、可爲御厨由被下宣旨了、於今者不可有左右、

〔神鳳抄〕下總國相馬御厨内宮上分布五十段、口入百段、雜用布百段、外宮上分四丈、布五十段、御幣紙三百六十帖、千丁、

御厨御園

大和國十五戸、　伊賀國廿戸　志摩國六十六戸　尾張國卌戸　參河國廿戸
遠江國卌戸
右諸國調庸雜物、皆神宮司檢領、依例供用、其當國地租、收納所在官舍、隨事支料、若遭年不登、損田七分已上、免徵租稻、並注帳申送所司、
〔扶桑略記二十八後朱雀〕長曆元年十一月、大神宮奉封戸百烟、
〔大神宮諸雜事記二〕長曆二年七月日、勅使參宮、宣命狀云、公家可有御愼之由頻卜申、仍御封百戸所奉寄也、又二宮禰宜等賜一階了、御封近江國廿五戸、美乃、參河、上野等國、各廿五戸、官省符到來了、
〔神宮雜例集一〕神封事
一七ヶ國封戸
二百九十戸○中略
百戸尾張、近江、美乃、信乃、各廿五戸、永承三年十二月十日符
〔勢州軍記上〕勢州諸家第一
南方渡會郡、山田三方、宇治六鄉、幷在々所々、天照大神之御領也、是守護不入之地也、古謂神三郡者、度會多氣飯野云云、當國奉行之、其外國中亦神領在、諸昔者諸國中有神領、號之神戸也、
〔神宮雜例集一〕一御厨御園事
合四百五十餘處
二宮御領百十餘所　內宮御領二百餘所　外宮御領百卌餘所
此內志摩國牢籠御厨在之、此外伊勢國別名御園在之、
伊勢國三百餘處二宮御領七十餘所、內宮御領百廿餘所、外宮御領百餘所、
〔經信卿記〕承曆四年五月八日庚午、民部卿○源俊明被下伊勢大神宮訴申文書、遠江守基清停止尾奈御厨、推刈卅餘町作田之次、

飯高神戸、（廿六戸）壹志神戸、（廿八戸）安濃神戸、（卅五戸）鈴鹿神戸、（十戸）川曲神戸、（卅八戸）桑名神戸、（五戸）

大和國宇陀神戸（十五戸）

伊賀國伊賀神戸（廿戸）

志摩國（六十六戸）

伊雜神戸　國崎本神戸　鵜倉神戸　慥柄神戸

右伊雜神戸者、別宮伊雜宮御鎭座之地、國崎鵜倉慥柄等嶋者、朝夕御饌御贄之所也、

尾張國（六十戸）

本神戸卅戸、（號中嶋神戸）新神戸十戸、新加神戸十戸、

參河國（卅戸）

本神戸廿戸、（號渥美神戸）新神戸十戸、（號飽海神戸）新加神戸十戸、

遠江國（六十戸）

本神戸卅戸、（號濱名神戸）新神戸十戸、（號中田神戸）新加神戸十戸、

〔新抄格勅符抄〕大同元年牒

神封部　合四千八百七十六戸

伊勢大神、一千百卅戸、（大和百一戸、伊賀廿戸、伊勢九百卅四戸、志摩六十五戸、尾張卅戸、參河廿戸、遠江卅戸、）

〔延喜式四伊勢大神宮〕封戸

當國

度會郡　多氣郡　飯野郡　飯高郡卅六戸　壹志郡廿八戸

安濃郡卅五戸　鈴鹿郡十戸　河曲郡卅八戸　桑名郡五戸

諸國

神戸

由、可令散宣命者、即傳仰大弼、即余奉之、令賜官符於民部省、

〔神宮雜例集　一〕伊勢國神郡八郡事

朝明郡　寬仁三年九月十一日符、員辨、三重、朝明、郡之道前三郡、安濃之間東西郡、

飯高郡　文治元年九月九日符

南北兩郡

〔類聚大補任　後鳥羽〕文治元年乙巳

當國伊勢○飯高郡一郡、幷封戸參拾戸、尾張國拾戸、參河國拾戸、遠江國拾戸奉寄、今年九月九日官符、

〔南勢事略　神二郡〕古者度會、多氣、飯野爲一郡、○中略抑割度會爲三郡、而來有神三郡名、度會固神領也、光仁天皇寶龜三年官符、以多氣度會二郡寄進于神領、光孝天皇仁和五年、加飯野以爲御世之寄附、宇多天皇寬平九年、勅藤原時平、永世附屬飯野於神領、稱神三郡也、爾來世々加進員辨、三重、安濃、朝明、飯高五郡、以稱神八郡、

〔續日本紀　光仁三十六〕寶龜十一年五月壬辰、伊勢大神宮封一千二十三戸、○中略隨舊復之、

〔神宮雜例集　一〕神封事

延暦廿年四月十四日格云、大神宮封戸、非改減之限、

神戸四百十三戸（在七ヶ國廿一ヶ處）

三百五十三戸（本神戸）　御鎭座之昔、國造貢進、

四十戸新神戸、天慶三年八月廿七日符、

新戸新神戸、文治元年九月九日符、

伊勢國百五十二戸、六處、

弘仁八年十二月廿五日格、行之、符到奉行、

從四位下行權左中辨兼東宮學士文章博士菅原朝臣　　左大史正六位上伴宿禰

天祿四年〇天延元年九月十一日

〔神宮雜例集〕一伊勢國神郡八郡

安濃郡　天祿四年九月十一日符、三百八十九烟、

例幣宣命辭別云、辭別氐申給久、踐祚乃初利與一郡乎寄奉止、御心乃中爾令祈申左給岐、因茲天今以安濃郡天寄奉給布、皇大神重天平久聞食天、寶位無動久、護助介奉給比、天長久地久支御寓止惠幸倍賜倍、又月來天變物怪妖言等頻仁出來止古有利、此乎恐御坐止古無限之、如此乃事仁依天可有加良牟災難乎、未兆仁攘却給天、朝廷平安爾、天下豐饒仁奈牟令有給止倍恐美恐美毛申賜止波久申、

天祿四年九月十一日

〔類聚符宣抄〕一太政官符民部省

應以伊勢國朝明郡奉加寄大神宮事

右正二位行大納言兼右近衛大將藤原朝臣實資宣、奉勅件壹郡、宜レ加寄彼大神宮者、省宜承知、依宣行之、仍須件朝明郡官物官舍之類、准弘仁八年十二月廿五日格行之、符到奉行、

左少辨正五位下源朝臣　　正六位上行右少史津守宿禰

寬仁元年十一月九日

〔小右記〕寬仁元年十一月九日癸卯、經賴傳攝政道長〇藤原命云、宣命辭別、可載依御願奉寄朝明郡之由者、攝政被命、早參由、便可給官符於民部省事仰經賴、次仰義忠、次仰文義、召日記進、應和二年二月廿七日日記、奉寄三重郡御祈禱事、天祿四年九月十一日日記、踐祚御祈、奉寄安濃郡、見了返給

〔左經記〕寬仁元年十一月九日癸卯、以伊勢國朝明郡永可奉加寄大神宮依御願也、以件郡永奉寄之

被寄員辨郡、是亂逆間所遂奏也、〇又見新抄格勅符抄、日本紀略所引遽本、

〔大神宮諸雜事記 一〕天慶四年三月廿八日、以員辨郡、被奉寄大神宮已了、又依官省符、尾張參川遠江等郡神封戸各拾烟、被奉寄於大神宮已了、今號新神戸是也、

〔神宮雜例集 一〕伊勢國神郡八郡事

員辨郡　天慶三年八月廿七日符、二百烟、

太政官符民部省

應奉加寄伊勢大神宮壹郡并封戸事

同國〇伊勢員辨郡　封戸參拾戸　尾張國拾戸　參河國拾戸　遠江國拾戸

右從三位守大納言兼右近衞大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣實賴宣、奉勅件一郡并封戸、宜奉加寄彼大神宮者、省宜承知、依宣行之、仍須件員辨郡官物官舍之類、准弘仁八年十二月廿五日格行之、符到奉行、

右少辨正五位下兼行內藏頭源朝臣　　右大史正五位上大窪宿禰

天慶三年八月廿七日

〔日本紀略 四村上〕應和二年二月廿七日乙卯、天皇幸八省院、奉幣伊勢大神宮、奉寄伊勢國三重郡、

〔神宮雜例集 一〕伊勢國神郡八郡事

三重郡　應和二年二月廿三日符、二百一烟、

〔日本紀略 六圓融〕天延元年九月十一日、伊勢例幣、天皇行幸八省院、以伊勢國安濃郡奉寄之、

〔類聚符宣抄 一〕太政官符民部省

應以伊勢國安濃郡奉加寄大神宮事

右內大臣宣、奉勅件一郡、宜奉加寄彼大神宮者、省宜承知、依宣行之、仍須件安濃郡官物官舍之類、准

〔神宮雜例集一〕太政官符伊勢大神宮

一多氣度會二ヶ郡堺內、授受寺田幷王臣位田、及他郡百姓口分田事、〇中略

二ヶ神郡逃走百姓口分田地子、國司徵納混合官稻事、〇中略

右二條事、國司依件施行、〇中略

從五位上行右少辨當麻眞人永嗣

寶龜五年七月廿三日　左大史正六位上會賀臣直繼

〔類聚三代格一〕太政官符

應多氣度會兩郡雜務預大神宮司事〇中略

弘仁八年十二月廿五日

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年九月十一日、奉例幣於伊勢大神宮、以飯野郡寄申神宮、被申兵亂可平之由、

〔類聚三代格一〕太政官符

應以伊勢國飯野郡寄大神宮事

右郡依去仁和五年三月十三日勅、一代之間、奉寄彼宮、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、奉勅、自今以後、永以奉寄、仍須貢物官舍等之類、准弘仁八年十二月廿五日格行之、

寬平九年九月十一日

〔神宮雜例集一〕伊勢國神郡八郡事

度會郡　多氣郡〇中略　飯野郡〇中略

已上謂之神三郡、又云道後、　封戶九百七十二烟度會郡四百四十七烟、多氣郡三百十五烟、飯野郡二百十烟、

烟別所當濟例　祭料二見鄉一石八斗、沼木鄉七斗二升、餘鄉三斗六升、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶三年八月廿七日尾張參河遠江三箇國封戶各十烟、有勅奉寄伊勢大神宮、又

リシガ、天正年間ニハ信雄二千五百貫文ノ地ヲ獻ジ、豐臣秀吉ハ加ヘテ四千六十六石五斗ト爲シ、德川氏ハ更ニ加ヘテ六千百九十八石餘ト爲シタリ、維新ニ至リ皆之ヲ公郡ニ屬ス、

〔皇大神宮儀式帳〕一天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事略○中神堺、以東石井嵩、赤木嵩、朝熊嵩、黃楊山嵩、尾垂峯等爲山堺、以北比奈多嶋、慈嶋、志婆埼、酒瀧嶋、阿婆良岐嶋、大嶋、屋嶋、歌嶋、都久毛嶋、石嶋、牛嶋、小嶋等爲海堺、以南志摩國鵜椋山嵩、錦山阪、並爲山堺、以西伊勢國飯高下樋小河此稱神之遠堺、常入ニ參大神宮ニ朝使給口塞飯野郡磯部河稱神近堺、以北海限、略○下

○按ズルニ、此經界內ノ土地ハ卽チ後ノ所謂神三郡ナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕一初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事

右從纏向珠城朝廷仁○垂以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇孝○德御世、有爾鳥墓村造神庤氏、爲雜神政行仕奉支、而難波朝廷天下立評給時仁、以十郷分氏、度會乃山田原立屯倉氏、新家連阿久多督領、礒連牟良助督仕奉支、以十郷分、竹村立屯倉、麻績連廣背督領、礒部眞夜手助督仕奉支、同朝廷御時仁、初大神宮司所稱神庤司、中臣香積連須氣仕奉支、是人時仁、度會山田原造御厨氏、改神庤止云名氏、號御厨、卽號大神宮司支、近江大津朝廷天命開別天皇智○天御代仁、以甲子年、小乙中久米勝麻呂仁、多氣郡四箇郷申割氏、立飯野高宮村屯倉氏、評督領仕奉支、卽爲公郡之、右元三箇郡攝一處、大神宮供奉支、所割分由顯如件、

〔大神宮儀式解二十〕此一段すべての意は屯倉をはじめし來由と、延曆の頃、飯野郡は神領にあらず、公領なるをいふなり、しかるに上に初度會多氣飯野三ヶ郡といふはいかにといふに、當時飯野郡は公領なれど、天智天皇御世まで、多氣郡の中にて神領なりしゆゑ、その古昔の來由をかたればかく端書せしなり、延曆の頃、飯野郡全く神領ならぬは上にいふが如し、寛平已後一郡全く神領となれり、右云云といひし元の字心をつくべし、

古事類苑

神祇部六十

大神宮十

神領

神宮ノ神領ハ、垂仁天皇ノ朝、各所御遷座ノ際、所在國造等ガ、神田神戸ヲ獻リシニ始マレリ、當時有貳(後ニ多氣郡ニ屬ス)ニ神庤ヲ立テヽ、神宮ノ庶政ヲ行ヒシガ、孝德天皇ノ郡縣ノ制ヲ建テ給ヒシ時ニ、始メテ神郡ノ名アリ、神郡トハ、全郡皆神戸ナルヲ云フ、時ニ多氣度會ノ二郡ヲ以テ神郡トス、天智天皇ノ朝、度會郡ヲ割キ、飯野郡ヲ立テ以テ公郡ト爲シヽガ、宇多天皇ノ朝ニ亦神郡ト爲セリ、是ニ於テ神三郡ノ稱アリ、是ヨリ以後、漸ク增加シテ、文治ノ初ニハ、八郡ト爲リ、神八郡ト稱ス、其郡ハ皆伊勢國ニ在リ、此神郡ニハ、神宮ヨリ政所ヲ置キテ、收納其他ノ庶務ヲ掌ラシム、

御厨ト云ヒ、御園ト云フモ、卽チ神戸ナレドモ、中世以後庄園ヲ稱シテ御厨御園ト云フ、卽チ公家武家及ビ一般人民ノ寄附ニ係レリ、其御厨ト云ヒ、御園ト云フハ、專ラ神饌御贄ヲ供ズルノ謂ナリ、而シテ神郡中ノ一處ヲ稱シテ、御厨、御園、神戸トモ云ヘドモ、神郡外ナルヲ云ヘルモノ尤モ多シ、又神田ニハ、神戸外ナルト、神戸內ナルトアレド、總括シテ言ヘバ、亦神領ナリ、神鳳抄ニ據ルニ、建久ノ比ハ、神領四十箇國ノ廣キニ涉リシガ、延元四年ノ注郡ニハ、二十三箇國ヲ舉ゲタレバ、此比ハ漸ク減ゼシナルベシ、是ヨリ後、海內ノ喪亂武人ノ兼幷ニ遭ヒテ、神領益、古ノ如クナラズ、後ニ伊勢ニ於テ若干ノ地ヲ有セシモ、多クハ北畠氏ノ所領ト爲

延久四年十二月十一日

七大夫　保延元年六月八日加任　以伊賀戸神社為勢社歟、

康治承久三年三月廿六日任
八員跡　　九十員　　无勢社

〔氏経卿神事記〕永享六年四月廿日、予舘社二見堅田社ニ参詣、衣冠　件寶殿年久令退轉間、以神忠之儀、去年十月造進畢、

〔大神宮諸雜事記 二〕長暦三年三月十三日、宣旨偁、二所大神宮禰宜等、自今以後、不得入京、若有背此旨之輩者、永此停止見任、若有可訴事者、權任禰宜一人、聽上道者、

〔類聚神祇本源 十一 外宮別宮〕一諸社勞事

應定置諸社記

月讀社 三祝 大傳夫松　大間社 一祝 大安夫貞　大河內社 二祝 大末夫永
田上社 五祝 大有夫常　草奈岐社 二祝 大有夫常　水饗社 六祝 大今夫安
河原大社 一祝 大有夫清　高河原社 四祝 大時夫重　湯社 三祝 大傳夫吉
國生社 五祝 大安夫松　大國大社 六祝 大屋夫安　伊雜社 一祝 大伊夫直近
山末社 四祝 大正夫武　清野社 一祝 大助夫世　宇治野社 一祝 大重夫枝
雷社 一祝 大弘夫忠　小俣社 一祝 大則夫安　志止見社 二祝 大春夫縣

右依例以毎年二月之內、爲令勤仕於神態、所定補如件、諸社祝等宜承知、致所攝神田者、勞主並祝等可進退也、於恒例之勤者、不可懈怠之狀如件、

天喜三年三月廿一日 中略

禰宜勞社等

一大夫常秀　高河原社　山末社　櫛田社
二大夫賴元　度會大國玉比賣社　御饗社　佐奈社
三大夫賴房　草奈岐社　須麻漏女社　河原大社
四大夫康政　田上大水社　度會國見社　河原淵社
五大夫廣雅　大間國生社　志止見社　宇須野社
六大夫雅行　小俣社　清野井庭社　大河內社

御師

祇權大副大中臣朝臣隆通、宮司皆參、○中略儀式如例、初度饗膳、○中略祿取內宮詔刀師祿、權少副隆顯、取繼定氏神主、外宮詔刀師祿、權少副隆有、取繼繼房、○中略次度酒肴陪膳勸盃等同前、祿取內宮詔刀師祿、權少副隆世、取繼茂明、外宮詔刀師祿、權少副隆重、取繼延房、

〔明德記〕下大夫入道○山名義理大神宮ヘ參詣シテ社中ヲ拜見シ給、○中略日モ暮方ニ成リシカバ、御師ノ宿所ヲ尋テ立寄給ケリ、御師、大夫入道ヲ見奉テ、淚ヲ流シテ請ジ入レ、兎角痛ハリモテナシテ、夜スガラ物語共申テ慰メ奉ル、

〔神馬引付〕一大神宮內外、爲若君樣御元服御祈禱、神馬一疋、河原毛、栗毛、可奉進之由所被仰下也、依執達如件、

文明五年十二月十九日　伊勢守

大神宮御師

雜載

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年五月廿三日壬子、伊勢國度會郡大神宮氏人神主、姓荒木田三字、大神宮氏人有三神主姓、荒木田神主、根木神主、度會神主是也、自進大肆荒木田神主首麻呂以後、脫漏荒木田三字、今首麻呂裔孫向官披訴、故因舊加之、

〔大神宮諸雜事記一〕天德二年十二月、祭主神祇少副從五位下大中臣朝臣公節、任三年同三年九月廿三日、亥時內裏燒亡、同年十月中務宮燒亡、天下旱魃、疾癘熾也、仍公家驚御天下、宣旨於神祇官陰陽寮、被卜食之處、勘申云、若異姓人供奉神事咎歟、因之巽方大神、依其違例御祟歟者、而間本官幷大中臣氏人等奏狀云、祭主公節朝臣旣橘氏人也、卽付公節之自筆消息具也、又宮司氏高、是淸原氏豐之男子也、氏高之母前宮司邦光之女子也、仍請母方姓、號大中臣氏之由也、以如此異姓之輩、被補任祭主宮司之故、天下不靜也、被始置祭主職之後、於大中臣氏之外、以他姓者未被補任之例乎者、依件奏聞、以天德四年十月三日、公節宮司氏高等之輩務停止之後、以同十一月十日永停任了、

詔刀師

正月元日二宮御節供事

外宮儀式雑鳴參拜内院、（禰宜束帶、權禰宜位袍、物忌父等衣冠、）五次館母獻鏡、（餅在酒鐇）

〔皇大神宮年中行事　六月〕一祭使參宮之間事〇中略但齋内親王御參宮之（〇之字上恐有脱字）時件酒立役母良弁地祭物忌子良一人勤也、

〇按ズルニ、延喜式ニハ、件酒立女、齋王參祭之日、采女供奉、或用女孺、不參之時用禰宜内人等妻子トアリ、

〔元亨三年内宮遷宮記〕こら十人、おもら、副の姥が裝束、今日作所與正神主長官の館へもたせ參す、〇中略

一おもらがふん

うすぎぬ　きなる裳　かけおび　うらなし

一そいのうばがふん

ゑろきぬの、大かたびら一〇下略

〔氏經卿神事記〕永享八年六月卅日、輪越神事、禰宜、子良、母良、物忌副媼等越畢、

〔外宮御母良年中行事　奥書〕右〇中略予勤常和神主御代御母良後、故記所其勤、助後輩蒙而巳、

貞享二年孟夏日　外宮御母良正五位下大物忌父度會神主貞秀

〔大神宮儀式解　十七〕今世も母良一人、子良館に齋居して子良を介保る事古のごとし、荒木田氏人の女年老其器に堪、月事止の後これをつとめしむ、一禰宜よりこれを差定らるゝなり、

〔大神宮諸雜事記　二〕長曆二年九月、大神宮廿年一度御遷宮也、〇中略爰公卿口宣仁依天、祭主下向シ天、九月十五日、到來於離宮院了、〇中略祭主波召大神宮司詔刀師種光天、手祓奉仕之由云々、

〔大神宮司神事供奉記　一〕延應二年七月廿二日、公家臨時御祭二箇度（去年未勤、去年分）使祭主從三位行神

始奉、奉仕之後、又物忌父等之駈仕內人調進例也、〈中略〉抑大物忌方御饌ヲ、大御方ト申、宮守物忌方ヲ二御方ト申、〈左相殿御料〉地祭物忌方ヲ三御方ト申、〈右相殿御料也〉

〔皇大神宮年中行事六月〕一十六日、〈中略〉鋪設出納二人開御稻御倉、所納御稻ヲ方々ニ奉下、一御物、〈大物忌父請〉二御物、〈宮守物忌父請、左相殿御料、〉三御物、〈地祭物忌父請、右相殿御料、〉荒祭御方、〈彼宮大內人大物忌父請〉瀧祭御方、〈同前〉白御饌料、〈清酒作內人請〉黑御饌料、〈酒作內人請〉四主神御料、〈御巫內人請〉件ノ御稻方々奉下、〈中略〉方々御稻等之中ニ、一御稻方者、於忌屋殿奉舂、大物忌子良、〈荒木田氏女〉先奉仕、母良相具也、至于二三荒祭御方者、於主神司殿奉舂、宮守子良、〈荒木田氏男〉地祭子良、〈荒木田氏女〉荒祭子良、〈石部氏女〉各屬方々先奉仕、但於子良者、奉懸手許ニテ、神拜之後歸宿館、其後三職物忌父等、并荒祭大內人物忌父等、各ガ駈仕共ニ所奉仕也、

〔正應六年七月十三日公卿勅使御參宮次第〕一參勤物忌父等交名事、大物忌父一﨟興兼神主、宮守物忌父一﨟尙國神主、地祭物忌父一﨟有久神主、三人者、御玉串奉拜供奉、兼邦神主、〈大物忌父二﨟〉忠村神主、〈宮守二﨟〉在言神主、〈地祭三﨟〉祭庭供奉、大物忌副包延、瑞垣御門幌役、宮守物忌副盛重、玉串御門幌役、地祭物忌副千與光、第四御門幌役、不參輩交名事、弘元大物忌父三﨟、〈服氣〉家氏宮守物忌父三﨟、〈服氣〉弘氏地祭物忌父二﨟、〈服氣〉

〔大神宮參詣記〕〈坂士佛〉當宮〈〇皇大神宮〉には巫女なし、子良とて幼稚のをとめの、いまだ夫婦のわざもしらぬが、御膳をそなふる器用にて、召つかはるゝばかりなり、神慮にかなひぬれば二三十までも月事なし、冥鑒にそむきぬれば十一二よりさはる、さはれば即ち職を辭す、

〔神境紀談附錄下〕物忌

外宮物忌ノ始メハ、〈中略〉何レノ時ヨリ將替リ增來レルニヤ、今ノ如キハ大物忌一人、父三人、御炊物忌父三人、御鹽燒物忌父三人、副物忌七人、〈元有二九人、近世二人絕、〇下略〉

〔神宮雜例集二〕年中行事

乎頂奉齋、倭姬內親王朝廷還參上時爾、今禰宜神主公成等先祖天見通命乃孫川姬命、倭姬乃御代仁大物忌爲氐、以川姬命大神乎令傳奉氐、從其時始氐、大神專手附奉氐傳奉、今從齋內親王大物忌者、於大神近傳奉、晝夜不避、迄今世最重、仍大物忌元發由如件、亦父毛子共忌愼供奉、

〔止由氣宮儀式帳〕一職掌禰宜內人物忌事

大物忌無位神主岡成女

右人等行事、卜定任日後家雜罪事祓淨氐、他人火物不食、宮大垣內立忌庤造、不歸後家宮侍氐、拔穗田稻乎御炊物忌爾令舂炊氐、御鹽燒物忌燒仕奉留御鹽、幷志摩國神戶人夫進御贄乎、土師物忌造儲備奉雜器爾盛奉氐、著明衣、木綿手次前垂懸氐、天押比蒙氐、洗手不干之氐、二所大神朝大御饌夕大御饌乎日別齋敬供奉、又三節祭幷時々幣帛使參入時、奉諸物忌等第二御門齋敬侍、

父無位神主諸公

右人行事、與物忌共副雜行事齋敬仕奉。下略

〔神宮雜例集〕二所大神宮朝夕御饌事

一供奉始事

大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四箇條內、朝夕御饌條云、皇大神宮、倭姬命戴奉天、五十鈴宮爾令入坐々鎭理給時爾、大若子命乎大神主止定給天、其女子兄比女乎物忌定給天、宮內爾御饌殿乎造立天、其殿爾爲天、拔穗田稻乎令拔穗拔天、大物忌大宇禰奈止共爲天、令舂炊供奉始、又御酒殿乎造立、處々神戶人夫進、神田以稻神酒作天、先大神供奉、次倭姬命奉、殘者仕奉物部人等給支、中略自爾以來、大神主爾仕奉氏人等、以女子乃未夫婚物忌止爲天令供奉、

〔皇大神宮年中行事正月〕一六日、御稻奉下事、早旦ニ宮政所出納ヲ相具、御稻御倉ヲ開奉下、三色物忌父等、幷荒祭瀧祭物忌、及日新內人等請預ヲ退出、於忌屋殿奉舂、但三色物忌子良、幷荒祭子良先

年、或告冒名、或云假姓、尋其端緒、互有是非、〇下略

〔二所大神宮例文〕二所大神宮神主等始浴朝恩賞次第代始臨時

治安元年九月外宮玉串大內人忠雅、番檢大內人氏頼等叙爵、

延久四年六月、內宮宮掌玉串大內人等叙爵、

〔皇大神宮年中行事〕一公卿勅使幷臨時奉幣使參宮之間、〇中略又於饗膳者、正員禰宜各上二前、權任神主各中一前、六位權禰宜、幷大小內人等各小机一前所勤也、〇中略但至于宮掌大內人等者、不勤例也、是爲宮中重役人故云々〇下略

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕注進

假殿御遷宮次第行事〇中略

建久九年二月二日

三頭工荒祭宮宮掌內人磯部武遠

二頭工權宮掌內人磯部時次

一頭工大內人荒木田光季

同十七日〇建久九年七月於宮廳公文所新宮御裝束絹布等任先例正權神主、幷六位權禰宜大小內人等所分行也、〇中略

權宮掌內人六人〇中略各絹二尺二寸

〔安貞二年內宮遷宮記〕廿九日晴、〇安貞二年九月右物分配、〇中略大宮掌目代有忠常親神主等、帶例文祗候、〇下略

物忌

〔皇大神宮儀式帳〕一職掌雜任卌三人

大物忌無位神主小清女　父無位同黑成

右二人、卜食定補任之日、後家之雜罪祓淸齋愼供奉職掌、天照大神朝御饌夕御饌供奉、此初大神

内人

〔建久九年内宮假殿遷宮記〕抑件御裝束奉裁縫事、前々或三箇日或二箇日也、而今度御裝束、于今不被奉送之條、不便之由度々觸遣司廳之處、稱不合期之由、十四日申時許、適雖被奉送、依及晩景、當日不能始勤之上、違先例天、御裝束料絹十四疋漆丈捌尺被奉送之條無其謂、早任先例、可被書改送文之由被觸遣之處、司廳目代外宮權神主國隆、隨身日記天云、件御裝束絹波、先例以六丈號一疋旨陳申之間、宮廳目代等、又前々日記、及御裝束奉裁縫之記文等令披見之號閉口、所詮於不足者、任先例可奉送之由令申天罷歸了、因之明日早旦、隨當時見在先可奉裁縫、於不足者可相催之由評定畢、

〔貞治三年内宮遷宮記〕貞治三年二月廿三日錦綾分配行事

同廿三日、被遂其節畢、○中略二禰宜奉開御戸、總官出納千村神主、本宮出納良尙神主、司中出納尙重神主參昇也、

〔大神宮諸雜事記〕一天皇○垂仁即位廿五年丙辰、天照坐皇大神○中略奉令鎭坐伊勢國度會郡宇治鄕五十鈴川上下都磐根御宮所也、○中略伊勢國飯高郡御坐三月之後、差度會郡宇治鄕五十鈴之川頭仁進參來稱申云、此河上最勝地侍、其妙不可比他處、早速可垂照覽御也、即奉迎而大田命神御共奉仕、令照覽早畢、于時皇大神宮託宣偁、此地者於天宮所見定之宮所是也者、奉鎭座既畢、即神代祝大中臣遠祖天兒屋根命神、禰宜荒木田遠祖天見通命神也、宇治土公遠祖大田命神、當土乃土神也、然而爲玉串大内人、即與荒木田禰宜相並、供奉於祭庭之例也、

〔二所大神宮例文〕豐受大神宮

二員禰宜

雅風禰宜冬緖一男、權大内人頁房二男、天曆四年閏五月、加任二員、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年六月廿一日甲子、宣詔伊勢國司幷大神宮司云、豐受宮禰宜正八位上神主河繼、内宮大内人外從八位下神主眞雄、同宮副大内人外少初位下神主伊勢雄等、一祖之後、分爭歷

召立文之間、無歷行之錯亂、無神事之遲留、至當宮者、交座一列之權任等稱重代雖異體、肯召立文不參祭庭之間、依無請取之仁、神事令停滯、〇中略所詮於自今以後者、任内宮之例、守座次可結合手之由、〇中略令議定了、〇中略爲御存知申上子細候也、誠恐謹言、

十一月廿七日〇永仁二年　外宮禰宜度會

進上　祭主三位殿

〔宮川日記〕十一日丁丑〇延寶三年二月

一正員に任ずるを重代家と稱す、外宮にては、

松木　檜垣　宮後　川崎　久志本　佐久目

内宮には

薗田　中川　佐八　藤浪　世木　澤田

此家々先權禰宜に任じ、次第に正に轉ず、正員は神宮内の昇殿し、權は大床まで參ず、度會に二百人ばかり、荒木田に百人ばかり、地下の權禰宜といふあり、世にこれをわけて權任といふ、俗に誤て五位人と稱す、是は正に轉せず、大床に參せず、延佳神主なども此列にて有しなり、又此度會荒木田の外は、源平藤橘その外何姓にても、宮中にては秦氏と稱す、

〔皇大神宮年中行事〕正月十一日旬神拜事

早旦ニ衣冠ヲ著、被勤仕、家子ノ禰宜ハ長官ノ館ニ參集、于時番公文所衣布疊ヲ番文ヲ整、硯ヲ相副、長官ノ御前ニ蹲踞テ獻、長官筥ヲ持テ禮シ、又二座ニ禮シテ被加判、公文所番文硯ヲ給、又立退候于時又禮、次々同前也、其後以番出納、傍官御判ヲ申、上首次第也、

〔皇大神宮年中行事〕二月十二日次日二神態、〇中略祝申奉分也、其詞云、實君弘給火切御物壽堅富物代役廣手先官長神主給目代座向如此申、抑宮政所是目代之異也、

請被任再三符判公驗裁下禁制神主德世幷諸人民等已稱公驗點地立居及强作神宮遠近四至地狀〇中略

天慶九年四月七日　　權大內人從八位下神主在判

禰宜從五位下神主在判晨晴　　大內人從八位下神主在判

擬禰宜大內人正六位上神主　　權大內人從七位下神主

禰宜代大內人從八位上神主在判雅風

禰宜代大內人無位神主在判安象

○按ズルニ、擬禰宜禰宜代又ハ權禰宜等其初メハ一員ノ禰宜ナルニ依リ設ケタル者ナラン、而シテ禰宜加補ノ後モ之ヲ存シタル者ハ權禰宜ナリ、又擬禰宜ハ後々迄モ小內人ノ職トシテ、正月ニ擬禰宜修祓ナルモノアリシコト豐受大神宮年中行事今式ニ見エタリ、

〔豐受大神宮禰宜補任次第〕一禰宜從四位上度會神主常季在任卅四年、執印十五年、

首書萬壽四年十二月廿五日、加補官符權禰宜、長元四年八月廿四日、外從下、長曆元年六月十一日、入內、長久四年十一月廿六日、上階、永承二年十一月十五日、正下、

〔皇大神宮年中行事〕一公卿勅使幷臨時奉幣使參宮之間〇中略饗膳畢之後、神主等給祿〇中略官符權禰宜上﨟三人、擬符權禰宜上﨟三人〇中略各單衣一領〇下略

〔權禰宜考證〕權禰宜に三種ある事〇中略

權禰宜とばかり稱するは、四位五位に敍したる權禰宜なり、官符と稱するは、員數三人ありて闕をまちて補任し、職掌ある權禰宜なり、擬符と稱するは、六位の權禰宜をいふなり、

〔外宮假殿要須記〕一召立文書次第〇中略

二所大神宮並諸別宮假殿御遷宮之時、取物供奉人事、於內宮者、不謂重代非譜第、任座次結合手、調

後光明院慶安二年九月廿七日、正遷宮召立文に載する所の權禰宜、百七十五人、○中略

同帝承應二年九月十一日、後光明院御卽位、總位階交名に載する所の、權禰宜、百八十三人、○中略

寛文三年十二月三日、靈元院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、二百廿一人、

延寶元年五月廿一日、靈元院御不預御祈賞、總位階交名に載する所の權禰宜、二百二十六人、

貞享四年四月廿八日、東山院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、二百七十三人、

寶永七年十一月十一日、中御門院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、二百廿六人、○中略

享保二十年十一月三日、櫻町院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、二百廿八人、○中略

延享四年九月廿一日、桃園院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、二百七人、○中略

寶暦十三年十一月廿四日、後櫻町院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、百七十四人、○中略

明和八年四月廿八日、後桃園院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、百七十九人、○中略

安永九年十二月四日、光格天皇御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、百三十一人、

寛政五年、交名帳に載する所の權禰宜、百廿八人、擬符權禰宜五人、

是までは權禰宜人數、逐々減少すといへども、百人より不足する事なし、

文化十四年九月廿一日、仁孝天皇御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、八十五人、

近來權禰宜の家數、逐々減少し、人數百人に滿つことなし、度會氏の衰微、まことにかなしむべき事なり、

〔豐受大神宮禰宜補任次第〕一禰宜從五位下神主雅風 在任廿一年、執印廿年、

昔書 延喜廿三年三月九日、任大内人、乙長替、承平三年十二月四日、兼任擬禰宜、同六年九月九日、蒙本官符、爲禰宜代、天慶五年四月七日、叙從八位上、天暦三年二月十三日、宣旨爲權禰宜、

〔皇字沙汰文 上〕伊勢豐受大神宮神主解申神祇官裁事 ○永仁四年八月十六日豐受大神宮禰宜二同狀引用

〔中右記〕永久二年正月十六日、未時許、民部卿來給、爲二一家長一之上、此人爲二檢非違使別當一時、二箇度被レ勤二仕伊勢勅使一也、仍爲レ思二吉例一、尋二申不審事等一、〇中略禰宜祿法如何、命云、每度人數陪增云々、口率使人必尋二遣內外宮一、一禰宜隨レ注上可レ給也、人數甚少、近代權禰宜員數頗增之故、必可レ被レ事也、

〔新任辨官抄〕神宮事

權禰宜不レ定レ數、或及二百餘人一云、近代祭主任レ意任レ之云々、

〇按ズルニ、辨官抄ニ百餘人云々ト云フハ、皇大神宮及ビ豐受大神宮權禰宜ヲ合セタル數ナリ、朝野群載ナル公卿勅使給祿ノ人員ニテ知ル可シ、

〔權禰宜考證〕權禰宜の人數增減の事

元德元年十一月奏覽、度會系圖に載する所の權禰宜、五位以上三百十二人、

永享六年九月十五日、正遷宮召立に載する所の權禰宜、三百五十五人、

此頃は權禰宜の總數三百人にあまれり、元亨建武亂世以後といへども、度會氏の繁榮是を以て知るべし、

永正十六年十二月、總位階交名に載する所の權禰宜、百八十四人、

天文五年二月、總位階交名に載する所の權禰宜、百五十六人、

永祿二年十二月、正親町院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、百八十五人、

天正十五年正月十六日、後陽成院御卽位、總位階交名に載する所の權禰宜、百六十人、

慶長十四年九月廿七日、正遷宮召立に載する所の權禰宜、百七十六人、

以上皆關東御治世以前なり、永正より慶長まで亂世の間も、猶權禰宜の數百五十人にくだらず、今にくらぶれば一倍の人數なり、

明正院寬永六年九月廿三日、正遷宮召立文に載する所の權禰宜、百五十六人、〇中略

同九年五月十一日叙正三位、禰宜六十年、長官七年、天和二年閏四月五日卒、六十七、

〔神宮雑例集 二〕年中行事

四月十四日二宮供御笠事

内宮早旦供御蓑笠、（御笠縫内人役之、一禰宜率傍官権任、参御前、申詔刀、神拝拍手、）

〔二所大神宮例文〕依罪科雖解却所職預勅免還著本座例

禄物忌職

権禰宜元継（件神主、天平勝寳六年六月、依豊受宮御稲御倉之様、従取御饌料御稲廿八束之闕、被解所職、被補他人畢、而天平寳字七年、復任著本座、従神事、）

〔権禰宜考證〕右の元継、権禰宜とあるは信じがたし、天平のころ、権禰宜とあること此外曾て所見なし、大神宮諸雑事記天平勝寳六年六月元継解任條、天平寳字七年四月復任の條にも、御炊内人神主元継とあり、是正説なり、

〔類聚大補任 宇多〕寛平九年丁巳

十二月廿二日被始置大神宮司検非違使、豊受大神宮権禰宜春彦、

〔類聚大補任 朱雀〕承平三年癸巳

豊受大神宮禰宜正六位上神主晨晴（十一月廿日任、父春彦譲、在任十六年、父自解、元権禰宜大内人、）

〔類聚大補任 村上〕天暦元年丁未

豊受大神宮禰宜正六位上神主康平（八月五日任、父自解、父晨晴譲、在任三十六年、元権禰宜大内人、）

〔権禰宜考證〕権禰宜の始めて古書に見えたるは度會春彦なり、次度會晨晴なり、次度會康平なり、

〔朝野群載 六神祇官〕伊勢大神宮勅使祿法

大神宮（中略）○権任卅四人、（四位二人、各調布、五位卅二人、各調布、）六位十二人、（官符権禰宜三人、（中略）各単衣、）

豊受大神宮（中略）○五位権禰宜廿八人、（已上各大調布）六位、（官符権禰宜三人、（中略）各単衣、）

康房一禰宜彥基男、承久三年三月、加補八員、

九員禰宜

行宗一禰宜行忠次男、行忠以自解申之、嘉元二年十月三日、加任九員、

十員禰宜

貞藤子時二禰宜常尚、以自解申補十員禰宜、嘉元二年十月十二日任、〇節略

〔大神宮儀式解十六〕禰宜職は、〇中略天見通命より村上天皇應和元年まで、大神宮禰宜一員なりしを、應和元年十月廿四日、荒木田神主興忠を加補して二員とし、圓融天皇天延二年二月五日、荒木田神主秋眞を加補して三員とし、一條天皇正暦五年十二月十一日、荒木田神主厚顯を加補して四員とし、同天皇寛弘三年六月十一日、荒木田神主賴光を加補して五員とし、同天皇同年同月同日、荒木田神主延親を加補して六員とし、崇德天皇保延元年六月八日、荒木田神主氏實を加補して七員とし、順德天皇承久三年三月廿六日、荒木田神主延季を加補して八員とし、後二條天皇嘉元二年十月三日、荒木田神主仲滿を加補して九員とし、同天皇同年同月十三日荒木田神主泰定を加補して十員とせり、されども時によりて缺望の人もなかりし歟、或は八員となり、又九員となり、時に定りなかりしを、慶長寛永の比より十員に滿て、今の世まで闕る事なし、

〔神道名目類聚抄五職官〕長官(チヤウクワン)　伊勢禰宜ノ上首ヲ云

〔內宮長職次第記〕四十四代延基　延利子、僧院肇子、號井面長官、長元二年任禰宜、伯父賴親替、天喜元年任長官、禰宜五十一年、長職廿六年、

〔外宮長官記〕滿彥　號松木長官、

元和八年十二月廿二日任禰宜、五宰彥替、延寶四年九月十一日任一、同五年六月十一日叙從三位、

〔二所大神宮例文〕豐受大神宮

度會遠祖奉仕次第

天牟羅雲命天御中主尊十二世孫、天御雲命子、

大神主　大若子命彥久良爲命子、垂仁天皇御代奉仕、

二宮兼行大神主　大佐佐命彥和志理命二男、雄略天皇御代奉仕、

一員禰宜補任次第

禰宜神主兄虫御氣一男、在任十五年、

二員禰宜

雅風于時一禰宜康平於超、以雅風爲上座、禰宜冬雄一男、權大内人眞房二男、天曆四年閏五月加任二員、

三員禰宜

安彙貞元元年、安雄訴申前勢之由、列廣調之上、高主男、秋並男、常相男也、天延二年二月五日加任三員、

四員禰宜

行彙彥晴雖爲先補禰宜、依年齒坐行兼之次、長保三年執°印°、高主男、秋並男、常相五男也、永延元年十二月十六官符、加任四員、在任十、

五員禰宜

滋彙高主四男、秋並男、常相四男、正曆五年七月、加補五員、在任十六年、

田上大水四門　六員禰宜

連信權禰宜有眞二男、寬弘三年八月、加任六員、在任卅六年、

七員禰宜

雅彥于時一禰宜彥忠養子、保延元年六月、加任七員、

八員禰宜

禰宜神主志己夫（大神主吉田三男、天牟羅雲命末孫也、）

最世（大物忌佐美主子、自志己夫至最世一員奉仕也、一門十六人、歷年、延喜廿三年三月六日任、在任廿年、）

村上天皇御代

二員禰宜（一禰宜行員以後）

興忠（應和元年十月廿四日、加補二員、在任十八年、）

圓融院御代

三員禰宜（旅忠以後）

秋眞（天延二年二月五日、加補三員、在任十五年、）

一條天皇御代

四員禰宜（氏長以後）

厚頼（正暦五年十二月二十一日、加補四員、在任二十年、）

一條天皇御代

五員禰宜（重頓以後）

頼光（一延利男、寛弘三年六月十一日任、在任十七年、）

一條天皇御代

六員禰宜（三禰宜重頓以後）

延親（一氏長男、寛弘三年六月十一日任、在任卅年、）

讃岐天皇御代〇崇德

七員禰宜（二寛定以後）

氏實（保延元年六月八日加任、在任十年、）

廢帝天皇御代〇仲恭

八員禰宜（經定以後）

延秀（承久三年三月廿三日加任）

後二條院御代

九員禰宜（入忠世以後）

仲滿（嘉元二年十月十八日任、依位次、爲八禰宜、）

同御代

十員禰宜（八忠世以後）

泰定（嘉元三年十月日加任〇節略）

名佐古久志留伊須々乃川止申、是川上好大宮地在申、卽所見好大宮地定賜比支、朝日來向國、夕日來向國、浪音不聞國、風音不聞國止、弓矢鞆音不聞國止、大御意鎭坐國止悅給氏、大宮定奉支、中略○爾時大神宮禰宜氏、荒木田神主等遠祖國摩大鹿島命孫、天見通命乎禰。宜。定氏、倭姬內親王朝廷爾參上坐支、從是時始氏、禰宜氏無絕事氏職掌供奉、

〔大神宮諸雜事記一〕雄略天皇卽位廿一年丁巳天照坐伊勢大神宮乃御託宣僻、我食津神波坐丹後國與謝國眞井原須、早奉迎彼神、可奉令調備我朝夕御饌物也、託宣賜既了、仍從眞井原奉迎天、伊勢國度會郡沼木鄉山田原宮仁奉鎭給借利、今謂豐受大神宮是也、其後皇大神宮、重御託宣僻、我祭奉仕之時、先可奉祭豐受神宮也、然後我宮祭事可勤仕也云々、彼宮禰。宜。仁八、天村雲命孫神主氏乎別定置令供奉也、卽依託宜豐受神宮乃艮角造立御饌殿、毎日御朝夕御饌物調備令捧賚、令參向大神宮、爾時大神宮禰。宜天見通命孫、神主氏乃。禰。宜、請預供奉之例也、

〔二宮禰宜補任至要集〕禰宜職被始補事

一員

內宮志己夫　大神主吉田三男

外宮兄虫　大神主吉田四男御氣一男也

右人、天武天皇卽位元壬申停大神主職、所被始置禰宜職也、

〔二所大神宮例文〕皇大神宮

荒木田遠祖奉仕次第

天見通命天見屋根命廿一世孫、大狹山命子、垂仁天皇御代奉仕、

荒木田最上彼己利命子、始賜荒木田姓、成務天皇御代奉仕、

一員禰宜補任次第天。武。天。皇。元。年、停大神主被置禰。宜。職、志己夫初之也、

大神主

建長八年四月十六日

祭主從三位行――――闕

〔神宮雜例集一〕神封事

本記云、皇大神御鎭座之時、大幡主命、物乃部八十友諸人等率、荒御魂宮地乃荒草木根苅掃、大石小石取平天、大宮奉定支、爾時大幡主命白久、己先祖天日別命賜、伊勢國內礒部河以東神國定奉、飯野多氣度會評也、即大幡主命神國造幷大神主定給支、

〔詔刀師沙汰文〕外宮祠官謹辨申

諸國參輩幣物間事

爰垂仁天皇即位二十五年丙辰天照大神五十鈴河上御鎭座之當初、以大若子命、被定大神主畢、○中略

雄略天皇御宇　大佐々命

已上自大若子命至大佐々命、累祖九代、爲大神主奉仕內宮畢、

雄略天皇即位二十一年丁巳依內宮御託宣、明年戊午秋七月、從丹後國與佐郡被奉迎豐受大神之時、大佐々命爲御使、布理奉、御鎭座山田原、後大佐々命爲大神主、兼二宮、同御宇奉仕、○中略

天武天皇御宇　神主御氣

已上帝錄十七代遠祖十九代、爲二所大神宮之大神主、一身兼行兩宮神事畢、都三十七代、爲兩宮管領之祠部也、

禰宜

天武天皇即位元年壬申改大神主、禰宜職、被始置、執行職於兩宮、共以當氏之最祖也、

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

纒向珠城宮御宇活目天皇○垂仁御世爾、倭姬內親王遠爲御杖代爾奉支、○中略次百船乎度會國佐古久志呂宇治家田田上宮坐支、爾時宇治大內人仕奉、宇治土公等遠祖大田命乎、汝國名何問賜支、是川

建治三年三月五日

祭主正三位行神祇大副大中臣朝臣御眞名

〔皇字沙汰文上〕度會神主氏解申進氏新撰本系帳事、○中略

延喜十四年正月廿七日

豐受宮禰宜外從五位下神主

豐受宮大内人從六位上神主○中略

神郡檢非違使司目代從八位上神主○下略

〔公文筆海抄〕一檢非違使補任目代樣

祭主下　大神宮司

檢非違使坂合部俊村

右人兼補家目代職、如件、宮司宜承知、因准傍例、令勤職掌、以下、

寶治三年六月廿六日

祭主正四位上行――在御名

〔貞治三年内宮遷宮記〕貞治三年二月廿三日、錦綾分配行事

同廿二日者、依雨降延引也、同廿三日、被遂其節畢、○中略

二禰宜奉開御戸、總官出納千村神主、本宮出納良尙神主、司中出納尙重神主參昇也、○中略

一司中出納　一段○中略

一知家事分ニ一段カ三分一○下略

〔公文筆海抄〕一知家事補任樣

祭主下　大神宮司

檢非違使成澄

右人兼補知家事職、如件、宮司宜承知、因准先例、令勤職掌、宛行衣粮、以下、

祭主三位殿

(兵範記)仁安三年十二月廿八日乙卯

大神宮司解申進申文事

言上大神宮禰宜等注進、當宮御正殿假殿不レ合二期間一、暫奉レ鎮二忌屋殿一子細狀、○中略

仁安三年十二月廿四日

從五位下行權主典新家宿禰兼季

從五位下行主典新家□□□□

大司從五位上大中臣朝臣有長○權大司少司署名略

(延喜式伊勢大神宮四)凡卜部一人、置二大神宮司一、令レ卜二年中雜事一、其衣糧者、以二神封物一給之、

(大神宮諸雜事記一)長和二年九月、祭使王從四位下行神祇伯秀頼、中臣祭主從五位上行神祇大副大中臣朝臣輔親、忌部正六位上齋部宿禰春光、卜部兼光等也、即依レ例以二十五日一到二著於離宮院一、大祓直會了之後、明十六日朝仁、忌部春光宿居仁、隨身馱落胎事於見付多利、爰祭主聞二件事一天、先驛使院之門於全令二塞固一天、依レ有二穢氣一天、雜人等不レ可二往反一之由立レ札天、○中略彼驛使院內仁同宿、王忌部卜部等和不レ參二宮志一天、卜部代仁大神宮司卜部行正違以、二所御川之御祓違被二勤仕一、官幣違波齋士捧持天、宜命留刀之時仁和、二宮內人物忌父仁令二捧持一天奉仕了、

(類聚大補任役烏羽)文治二年丙午六月八日、頭左中辨光長奉書云、司中雜事以二去年神税用殘一、以兄部兼親可レ致二沙汰一、○下略

(公文筆海抄)一司中兄部任符樣

祭主下　大神宮司

正六位上清原眞人親昌

右人補二任司中政所兄部仲昌替職一如レ件、宮司宜二承知一、因准先例、令レ勤二職掌一、宛二行衣糧以下一、

第廿一野守（延暦十年八月、大神宮燒亡事依科祓解却、東人孫、山守男、延暦五年三月任、此時始任限定六年、在任六年、）

〔宮司系圖沙汰文〕一醍醐天皇延喜二年、大中臣文通を以て、初て權大司を被加補、大司少司の間に被置之候、以上大司權大司少司を三員の宮司と申候、宮司と申候は三司の總名、大司權大司少司と申候は、各一員の名にて御座候、又司中とも申候、又權司少司をば任用の宮司と申候、其後は相續き三司を被任候て、或は少司より權司に轉補いたし、權司より大司に轉任、或は祭主に昇進の例も御座候、嘉暦のころまで、大司權司少司三員御座候、亂世のころ、いつとなく權司少司は絕果申候て、大司一員、僅に相殘申候、又一任六年の儀も、今代は交替不仕候、凡大神宮の儀、元始は治世の御事にて、古記分明に御座候へども、斷絕は皆亂世の事故、時節不憶候、

〔大神宮儀式解二十〕大神宮司（略○中）中世まで嚴重なりしを、處々神郡御厨すたれ、權。。大。司。少。司。も絕。て。今。世。は。大。司。一。員。と。な。れ。り。近世川邊の一家のみこれに補任す、各神祇官を兼たり、

〔宮司引付〕大宮司長盛謹言上（略○中）

內外宮祭禮御修理幷御遷宮勤役等事、先規爲三員之宮司、致每月三旬（上旬大司、中旬權司、下旬少司、）之勤役之處、依權司少司兩人未補、年中悉大司長盛一人、內外宮幷離宮等之勤營供奉兼行之間、自然所勞故障出來者、很勤行可延引也、早任先例（例文一卷備進之）被成下御敎書、若然者以代官可被全年中神事幷御遷宮等勤役御祈禱者也、

右條々言上如件、

應永十八年十一月日

〔大宮司家古文書〕祭禮遷宮之時、宮司自然有所勞故障之儀出來者、以司代可令勤行神事之由、可令下知大宮司氏長（○永享十年十二月八日任、嘉吉二年重任、）給之由、內々被仰下候也、恐々謹言、

九月廿一日　　兼綱

宮司復任例
宮司有範（八月廿八日復任）
宮司置二員事
澤松（同日兩人補任、依八月十六日格、加置二員、）

〔類聚三代格一〕太政官符
應定伊勢大神宮司大小員并位階事
大宮司一員　右正六位上官
小宮司一員　右正七位上官
以前得神祇官解偁、檢案內、大神宮司元置從六位官一員、而去貞觀十二年更加一員、今件兩司大少無別、職掌有同、各稱受領、交爲爭論、甲之所行、乙還妨之、執論之間、政事擁滯、望請定大小員并位階、遷代之日、分付受領、一准長官任用者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、
元慶五年八月廿六日

〔類聚大補任（異本）〕元慶五年（辛丑）
祭主宮司禰宜同前（但宮司有輔、二月廿七日始參宮、）
依八月廿六日格文、定大少官、以有輔爲大司、以貞世爲少司、

〔類聚大補任（異本）〕延喜二年（壬戌）
正六位上大中臣文通（九月十三日始加任權大司、在任六年、祭主子老男、權万介安遂麻呂男、豐後守並作三男、散位雄貞二男也、）

〔二所大神宮例文〕大宮司次第
第一中臣
香積連須氣（河內國讃良郡人也、孝德天皇御代任、在任四十年、）
第二
大朽連馬養（朱雀二年持統天皇御代任、在任十七年、或十五年、）
第三
村山連糠麿（大寶二年正月任、在任十六年、○中略）
第十七（此宮司以後不任他姓、）
中臣比登（祭主廣見七男也、寶龜元年十二月任、在任四年、同三年正月司家司官奏上畢、○中略）

庤氏、爲雜神政所仕奉支、而難波朝廷天下立評給時仁、以十鄕分氏、度會乃山田原立屯倉氏、新家連阿久多督領、礒連牟良助督仕奉支、以十鄕分、竹村立屯倉、麻績連廣背督領、礒部眞夜手助督仕奉支、同朝廷御時仁、初大神宮司所稱、神庤司中臣香積連須氣仕奉支、是人時仁、度會山田原造御厨氏、改神庤止云名氏號御厨、卽號大神宮司支、近江大津朝庭天命開別天皇智○天御代仁、以甲子年、小乙中久米勝麻呂仁、多氣郡四箇鄕申割氏、立飯野高宮村屯倉氏、評督領仕奉支、卽爲公郡之、右元三箇郡攝一處、大神宮供奉支、所割分由顯如件、

〔大神宮諸雜事記一〕齊衡三年丙戌二月廿七日、大神宮司印一面被下置了、卽神祇官下大神宮司符云、太政官去齊衡二年八月十日、下中務省符云、得大神宮司從八位下大中臣朝臣伊度人、去仁壽二年十一月三日解偁、大神宮司印依無分附、詞中公文田圖名籍符返抄等、捺大神宮之印也、今以商量、於事情不當、望請停宮印被下公印者、官加覆審、所申有實、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之者、鑄作件印已了、宜付下彼宮司者、送遣如件、宮司宜承知、依件順用、符到奉行者、從五位上行大副兼內藏頭大中臣逸志、正六位上行大史奈男代海山者、抑按舊記云、寶龜三年正月四日夜、宮司比登館燒亡、次司印公文共燒亡了、其後代々宮司、以大神宮印捺公文來也、然間宮司伊度人與神主有訴所、申下印也、但爲氏人等依有辱恥所不申燒亡之由也云々、

〔類聚三代格一〕太政官符

加置伊勢大神宮司員事

元一人　今加一人

右從三位守大納言兼左近衞大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅宜依件加置、永爲恒例、

貞觀十二年八月十六日（○又見三代實錄十二）

〔類聚大補任清和〕貞觀十一年（己丑○十二年庚寅誤）

宮司

〔祭主補任〕祭主從三位行神祇大副大中臣朝臣公長卿在任十七年〇中略

裏書云、

公長誠惶誠恐謹言

　大神宮禰宜忠元神主申三位事

抑祭主者總官、宮司次官也、禰宜者隨宮司之下知奉行神宮之雜務、〇中略

　天治二年五月廿四日　　祭主神祇大副大中臣朝臣公長

〔大神宮諸雜事記二〕康平二年、十月廿三日、祭主乃宅別當散位從五位下大中臣朝臣賴經被補於左衞門弓場已了、

〔類聚大補任後鳥羽〕文治四年戊申

二宮禰宜同前内宮七禰宜成頁、□月□日補祭主政所、

建久二年辛亥

宮司權大司從五位下忠國二月□日任、前權大司祐家替、于時祭主政所、爲前權司所、今再任也、在任十年、

〔建久元年内宮遷宮記〕十六日〇建久元年九月亥時許、〇中略于時任先例以祭主目代封可付古殿敷之由、自長官之許被申祭主、隨即祭主目代經長神主封、并宮司出納惟時封等付也、〇下略

〔元亨三年内宮遷宮記〕同日〇元亨三年四月十一日ゐまの山へ杣引の爲に、道後政所さだちか、總官奉行あり、としの神主等、ゐまの山へ向ふ、正殿東西寶殿の御材木相殘る間、引かせん爲なり、〇下略

〔貞治三年内宮遷宮記〕貞治三年二月廿三日、錦綾分配行事、

一總官出納御分、二段又三分一、　一總官奉行御分、三段、

〔皇大神宮儀式帳〕一初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事

右從纏向珠城朝廷〇垂仁以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇〇孝徳御世、有爾鳥墓村造神

年〈壬戌〉經祭官三代以中納言兼神祇伯直大貳中臣大島卿改祭官補祭主、從是以降祭主相承補任來也、

或本云、孝德天皇御代、改祭官爲祭主者、

〔大日本史神祇二十三〕按改祭官爲祭主、諸說不一、文保二年所撰年代記云、舒明帝改之、大神宮例文云、始于天武朝、未知孰是、今姑從二書、〇祭主補任、大中臣氏文、

〇按ズルニ、祭官、祭主、共ニマツリノツカサト訓ジテ一ナリ、サレバ上代ハ其文字一定セザリシナラン、

〔官職秘抄上〕神祇官

祭主

大中臣二門流中、居副祐爲祭主、重代者任之、雖六位補之、永輔是一門流不任之、邂逅拜任之例皆爲不吉、又無官者不補之、仍頼宜爲祭主、辭大副、以嫡家成中任祐、而依氏人訴狀、以頼宜如先任副、被停家成職畢、

〔百寮訓要抄〕神祇官

祭主　百官には入ざれども次にしるし侍る也、伊勢大神宮の事をつかさどる、昔は可然人もなりけるにや、今は一向地下の者にて有なり、二位三位などになれども昇殿などする事なし、

〔諸家補任〕藤波〈祭主大中臣〉

慶忠〈〇中略〉

友忠朝臣〈〇中略〉

同日〈〇元龜三年九月六日〉爲祭主、〈〇中略〉同〈〇天正十六年〉年二月廿二日〈卅一歲〉聽內昇殿、

同日〈〇元和十年正月六日〉爲祭主、〈〇中略〉同年〈〇寬永六年〉十一月廿八日聽昇殿、

○又見神名秘書、詔刀師沙汰文、

〔職原抄上〕神祇官

垂仁天皇御宇、天照大神鎭座伊勢國度會郡五十鈴川上之時、命中臣祖大鹿島命爲祭主、其後代々爲祭主、朝廷被置官以後、神祇官伯、(書爲祭主職)伊勢神宮祭主、又各別、但見伯職掌、掌爲祭主云云、然乃其職已一、本爲一體、以之可知者也、○下略

〔神皇正統記皇極〕鎌足の大臣は天兒屋命二十一世の孫なり、むかし天孫あまくだりたまひし時、諸神の上首にて、この命ことに天照大神の勅をうけて、輔佐の神にまします、中臣といふことも、二神の御中にて、神の御こゝろをやはらげ申したまひけるゆゑとぞ、その孫天種子命、神武の御代に祭事をつかさどる、上古は神と皇と一にまします〳〵しかば、祭をつかさどるは、すなはち政をとれるなり、(政の字の訓にてもしるべし)その後天照大神はじめて伊勢の國にしづまりまし〳〵、時、種子命のすゑ、大鹿嶋命祭官になりて、鎌足大臣の父小德冠御食子までもその官にてつかへたり、

〔二所大神宮例文〕祭主次第

第一 御食子大連公(天兒屋根命廿一世孫可多能祜大連公一男也、推古天皇元年任、在任十六、)

國子大連公(可多能祜大連公二男也、舒明天皇御代任、在任十六、)

國足朝臣(國子一男、孝德天皇元年任、在任十八年、)

大島朝臣(可多能祜大連公末孫、許米連一男也、天智天皇元年任、在任十二、)

中納言伯 意美麿(國足一男、始爲祭主、改祭官字爲主者也、天武天皇元年任、在任廿七年、)

〔祭主補任〕祭主次第

小德冠前事奏官兼祭官中臣御食子大連公

(眞者云)或記云、推古天皇卽位元年(癸丑)以小德冠前事奏官中臣大連公(○御食子)始任祭官、其後天智天皇卽位元

祭主

清酒物忌　酒造物忌　山向物忌
土師器作物忌　御笥作内人物忌　陶器作物忌
木綿作物忌　忌鍛冶物忌　御馬飼物忌
御笠縫物忌　日斬物忌　菅裁物忌
御炊物忌　根倉物忌
人皇七十二代白河院治五年、承暦内宮註文、
御鹽湯内人　鎰取内人　御巫内人
土師内人　陶器内人　清酒作内人
山向内人　宮守内人　地祭内人
酒作内人　瀧原内人　副清酒内人
以上皆内宮人云々
王串大内人　宮掌大内人　番檢大内人
内宮子良十人童三人、女七人、此内一人竈祭、
外宮子良四人内一高宮人
館母内宮一人、外宮一人、
以上館母子良子昇殿供奉者也　鳥名子地下所役者也
倭姬命世記、廿六年〇垂仁丁巳冬十月甲子、奉遷于天照大神於度遇五十鈴河上、中略、〇爾時皇大神倭姬命乃御夢喩給久、我高天原而坐、甦戸押張原如見見志眞岐志國宮處波是處也、鎭理定理給止覺給支、中略、〇于時差驛使朝廷還詣上、倭姬命御夢狀細返事白支、爾時天皇聞食氏、卽大鹿嶋命祭。官。定給支、大幡主命神國造兼大神主定給支、神館造立、物部八十友諸人等率、雜神事取總持氏太玉串供奉、

豐受大神宮

正禰宜六人、四位一人大據、副將、五位五人各大據、五位權禰宜廿八人、已上各據、六位、官符權禰宜三人、大內人三人、玉串大內人、番檢大內人三人、宮掌大內人五人、已上各單衣、物忌父九人、大物忌父三人、御炊物忌父三人、御鹽燒物忌父三人、已上各單衣、色飾內人四人、鎰取內人一人、大麻內人一人、御鹽湯內人一人、山向內人一人、已上各匹絹、物忌子四人、大物忌子一人、御炊物忌子一人、御鹽湯物忌子一人、高宮物忌子一人、已上單衣、館母二人、一人單衣、一人匹衣、陪膳六人、已上各匹衣

〔新任辨官抄〕神宮事

祭主

宮司三人　大宮司、權大宮司、少宮司、已上中臣氏、大宮司沙汰封戸等事、

正禰宜　內宮七人、荒木田神主、神主戸也、外宮七人、度會神主、五位以上、以宣旨補之、

正禰宜十四人、有制不上洛、不渡櫛田川以西、在齋宮西也、

權禰宜　不定數、或及百餘人云々、近代祭主任意任之云々、

大內人　內外宮、近代不定數、二姓任之、同禰宜、近代一宮各百餘人、六位補之、兼權禰宜、有闕祭主補之、

玉串　以大內人中補之、齋宮若勅使參宮、取鬘木綿並玉串奉之職也、仍號之、但勅使ニハ不奉玉串也、奉鬘木綿許也、玉串榊枝付木綿也、齋王取之參給也、

宮掌　卜人也、但兼大內人、

番檢　沙汰禰宜等諸番之職也

內人

祝

已上神官如此

〔二十二社註式〕職掌人　神式

宮守物忌　地祭物忌　御鹽燒物忌

以上隨二一禰宜申一、令レ頒二給之一、〇中略

次參二大神宮一〇中略

此間給レ祿

四位禰宜五人 正四人、權一人、各褂袴　五位禰宜卅四人 正二人、權卅二人、各褂

宮掌大內人二人 五位各褂　官符權禰宜一人

宮掌大內人三人　玉串大內人一人

內物忌父十一人　館母一人

山向內人一人　御鹽湯內人一人

鎰取內人一人　荒祭宮物忌父一人

以上廿一人單衣各一領

子等三人 大物忌子、御炊物忌子、御鹽燒物忌子、　荒祭宮物忌子一人

以上四人各匹絹〇中略

給二大神司祿一

大神司 女装束一具　權大宮司

少宮司 已上各一領褂　主典 單衣

〔朝野群載 六神祇官〕伊勢大神宮勅使祿法

大神宮

正員禰宜六人、四位一人褂袴、五位五人各褂、權任卅四人、四位二人各褂袴、五位卅二人各褂、六位十二人、官符權禰宜三人、玉串大內人二人、宮掌大內人七人、已上各單衣、館母一人、子等十人、物忌父十二人、已上各單衣、山向內人一人、御鹽湯內人一人、鎰取內人一人、御廐內人一人、已上各匹絹、大宮司 女装束一具、權大宮司、少宮司、已上各大褂、主典 單衣

右諸別宮、(○中略)其宮別各内人二人、(其一人用二入位已上嫡子孫一)物忌父各一人、但月讀宮加二御巫内人一人一、

度會宮四座

禰宜一人、(從八位官)大内人四人、物忌六人、父六人、小内人八人、

多賀宮一座

内人二人、物忌父各一人、

〔延喜式 四伊勢大神宮〕凡(○中略)大神宮雜任卅二人、(禰宜一人、大内人四人、物忌九人、物忌父九人、小内人九人、)所攝六宮廿五人、(宮別内人二人、物忌一人、物忌父一人、月夜見宮加二御巫内人一人一、)度會宮廿五人、(禰宜一人、大内人四人、物忌六人、物忌父六人、小内人八人、)所攝宮四人、(内人二人、物忌一人、物忌父一人、)

右雜任人等、皆免二調庸一、其馬飼丁十八人、(大神宮十二人、度會宮六人、)神服織、神麻績、各五十人、輸レ調免レ庸、

〔江家次第 十二神事〕伊勢公卿勅使

參二豐受大神宮第一鳥居下一(○中略)

次給レ祿

四位禰宜二人(各白襖一領、袴一腰、)　五位禰宜卅三人(正四人、權廿九人、)各掛一領

官符權禰宜三人　玉串大内人三人

宮掌大内人三人　大内人一人

番檢大内人一人　内物忌父九人(大物忌父三人、御炊物忌父三人、御鹽燒物忌父三人、)

館母二人

以上廿二人、單衣各一領

物忌子三人(大物忌子一人、御炊物忌子一人、御鹽燒物忌子一人、)　高宮物忌子一人

以上四人各疋絹

禰宜正六位上神主五月麻呂　長上

大內人無位神主御受　大內人無位神主牛主　大內人無位神主山代

大物忌無位神主岡成女　父無位神主諸公

御炊物忌無位神主河刀自女　父無位神主乙麻呂

御鹽燒物忌無位神主乙繼女　父無位神主虫麻呂

菅裁物忌無位神主米刀自女　父無位神主長麻呂

根倉物忌無位石部稻依女　父無位石部吉繩

高宮物忌無位神主種刀自女　父無位神主夫獻

御巫內人外從八位上石部老麻呂

木綿作內人無位石部淨人

忌鍛冶內人無位敢石部廣公

御馬飼內人無位神主豐繼

御笠縫內人無位石部宇麻呂〇節略

〔延喜式四伊勢大神宮〕大神宮三座

　禰宜一人從七位官、大內人四人、物忌九人、童男一人、童女八人、父九人、小內人九人、

荒祭宮一座

　內人二人、物忌父各一人、〇中略

伊佐奈岐宮二座　月讀宮二座

瀧原宮一座　瀧原並宮一座

伊雜宮一座

以上三人物忌等（波）、宮後川不度、若誤度時（波）、更不任用即却、

酒作物忌無位山向部古刀自女　父無位山向部虫麻呂

清酒作物忌磯部大河女　父無位磯部稻守

瀧祭物忌無位磯部鹽刀自女　父無位磯部古麻呂

御鹽燒物忌無位神主稻刀自女　父從八位上神主牛養

土師器作物忌無位麻績部春子女　父無位麻績部倭人

御筥作内人無位磯部稻長

忌鍛冶内人無位忌鐵師部正月麻呂

陶器作内人無位磯部主麻呂

御笠縫内人無位郡乙淨麻呂

日祈内人無位神主宮守

御巫内人無位磯部足國

山向物忌無位磯部祖繼　父無位磯部繼麻呂

御馬飼内人外從七位上磯部淸人

右大内人物忌以下御馬飼内人以上、掛畏皇大神宮臨興此土建大宮初八十支部卜食補任日後家祓淸、迄今世重預職掌、供奉行事具件如前、〇節略

〔止由氣宮儀式帳〕一職掌禰宜内人物忌事

合貳拾壹人（禰宜一人、大内人三人、物忌六人、物忌父六人、小内人五人、）

惣戸壹拾五烟（並貫度會郡）

連供奉戸人九十餘人、中男已上、

神官

大神宮ノ神官ニ、祭主、宮司、禰宜、内人、物忌等ノ職員アリ、祭主、内人、物忌ハ、天照大神伊勢國ニ鎭座シ給ヒシ初ヨリ其名アリ、宮司ハ孝德天皇ノ時ニ起ル、祭主、宮司ハ大中臣氏ノ人之ニ任ジ、禰宜ハ荒木田、度會二氏ヲ以テ之ニ任ズ(上古ハ荒木田、根木、度會三氏アリテ三神主ト稱セシカド、根木氏ハ早ク絶エタリ、而シテ荒木田氏ハ内宮ニ屬シ、度會氏ハ外宮ニ屬ス、)他姓ノ人其職ニ居ルコトヲ得ズ、祭主ハ古今一員ナリ、宮司ハ初メ一員ニシテ、後ニハ大少ヲ分チテ二員トシ、又權任ヲ置キテ三員ト爲シヽガ、權司、少司ハ早ク絶エテ、後ニハ大司一員ノミトナレリ、禰宜ハ延喜ノ頃マデハ二宮各〻一員ナリシガ、漸ク員ヲ増シテ十員トナル、而シテ寛平ノ頃ヨリ權禰宜アリ、其數次第ニ増加シテ、二百人ニ餘リシコトアリ、内人、物忌ハ各〻大少アリ、其職掌ヲ冠シテ某内人、某物忌ト云フ、而シテ物忌ハ童男女ヲ用ヰ、其父之ヲ助ク、此外數多ノ雜職アレドモ一一々辨ゼズ、猶ホ本宮神官ノ事ハ、神職篇ニモ雜出セリ、宜シク參看スベシ、

延暦

〔皇大神宮儀式帳〕一職掌雜任卌三人(禰宜一人、大内人三人、物忌十三人、物忌父十三人、小内人十三人、)

天照坐大神宮廿一烟(禰宜一烟、大内人三烟、物忌九烟、小内人八烟、○小内人八烟五字、依二大神宮儀式解一補、)

所管四宮九烟(内人五烟、物忌四烟、)

禰宜大初位上神主公成

宇治大内人無位宇治土公磯部小紲　内人外正八位上荒木田神主家守　内人無位神主廣川

大物忌無位神主小淸女　父無位同黒成

宮守物忌無位磯部䗶麻呂　父無位磯部四五麻呂

地祭物忌無位磯部宮成女　父無位磯部子松

〔源平盛衰記　二十七〕奉幣使定隆死去付覺算寢死事

去十一日〇養和元年九月ニ、神祇官ニシテ神餐アリ、例幣二十二社ニ奉ル、〇中略奉幣使ハ當社〇伊勢ノ神宮祭主中臣親能、同子息神祇少副定隆朝臣勤ケリ、〇中略十五日ニ、伊勢ノ離宮ニ參著ス、

しつゝ、はかりなくせまりて、院のうちにすげなく、せうかう、ざうしき、くりやめ、いふこともきかすかはやいで、まれ〳〵ざにつけば、院のうちわらひさわぎて、日に一たびたんざくをいだして、ひとけのいひをくらふ、院し、がいどり、どうえいがかて一のひねりぶみとわらはれ、はかせたちにいさゝかかずまへられず、ちゝ、はゝ、すさ、やから、ひとたびにほろびて、はかりなくたよりなし、こともなきがく生あまたに、ついでをこえらるれども、どうえいたいさくなすべきたよりなく、かくてありふるさし三十五、かたちこともなく、ざえかしこく心かしこきがく生也、

〔皇大神宮年中行事六月〕一祭使參宮之間事

抑祭使參入之時先吹笛、各著座之後謳歌吹笛、自忌火屋殿請取御琴撥之、于時司。掌召寮掌三度、無唯稱、略○下

〔神宮雜例集二〕政印事

一宮司政印事略○中

延久三年五月二日六ヶ條宣旨云

一應令停止印幷文書等置私館略○中事

右得元範去四月廿一日解狀偁、略○中方今檢案內、大神宮司印、是自上古時奉納於離宮廳調御庫。公文請印之時、先宮司著衣冠把笏、次鎰取一人著座、對於印櫃御封申、而令鎰取請印之後、更御封申、畢奉納御庫之例也、略○下

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡封戶仕。丁。者。略○中御厨十六人、

凡二所大神宮大小內人物忌及御。厨。雜。色。人等者、不得輙讓所帶之職、別宮內人、物忌、彈琴、笛生、歌長、織殿神部准此、

〔治承元年公卿勅使記〕九月十四日庚申、午刻終著離宮、宮司儲十分之一云々、

以離宮爲齋宮

職員

五月晦日離宮院修祓事

宮司二宮禰宜供奉饗料、宮司下行之、宮司成廳宣(來月御祭宮前御祭事)祇承事、道橋事、宿坊(號雜舍)造立事、(無印)

六月十日離宮院行事

御卜事、御祭神酒料事、島名子所食料事、歌長請之、餘祭不請、件三ヶ條料米、司中下行、

八月ヵ日離宮院宮司政始事(在雜事)

配符(二宮上分御器、後丁、國々封戸請狀、所々神稅收納、伊賀神戸返抄、在印)

九月十五日離宮院御氣殿御裝束奉下事(伊賀神戸所濟、到來之日奉納御倉、當日奉下之、物忌請之)

十二月晦日離宮院雜膳代米下行事(拍手長請之)

〔皇大神宮年中行事十二月〕一晦日夜被立火燈事

御巫内人等離宮院參、從司中油五升、雜魚五隻、雜膳代、屠蘇白散、竝御饌料年魚三百隻請取、

〔類聚國史四神祇〕天長元年九月乙卯、詔曰、天皇詔旨(良万止)坐、掛畏(支)大神(乃)大前(爾)申給(閉止)申(久)、多氣(乃)齋宮(波)大神宮離遠(天)、毎事(爾)無便、因茲度會(乃)離宮(乎)卜定(天)、常齋宮(止)須倍伎狀、申出事(乎)恐(美)恐(美毛)申給(止)申(久)、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十一月癸未、火于伊勢齋宮、燒官舍一百餘宇、十二月庚戌、遣參議從四位上行春宮大夫兼右衞門督文室朝臣秋津奉幣於伊勢大神、以齋宮燒損也、又去天長元年九月、依多氣齋宮遠離大神宮、毎事無便、卜定度會離宮以爲齋宮焉、今依火災、卜定多氣宮地可爲常齋宮之狀同令此使祈申於大神宮、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡御廚案主十人、司掌一人、鎰取三人、廚女一人、並取三箇神郡、幷六處神戸百姓充之、其衣食以神封物給之、

〔空穗物語祭の使〕勸學院のにしのさうしに、みのざえもさよりあるうちに身をすて、學問を

造離宮使從五位下大中臣朝臣信房

康和二年七月十一日

〔類聚大補任 後堀河〕嘉祿元年乙酉

祭主卿〇大中臣輔臣能隆申條々

離宮院并兩機殿修造事

故障殘日不幾云々、過彼日數早可致其沙汰、〇中略

右〇中略天氣如此、早可被下知之狀如件、

八月五日　　　　中辨家光奉

大夫史殿

〔司家舊記〕離宮造營功人等已被宣下訖、位記未到之間、且可令存知候由、可被下知之狀如件、〇日月缺

左少辨俊國判

四位史殿

上卿權大納言

應永卅一年四月十五日　宣旨

度會行重

宜敍從五位下

藏人左少辨藤原俊國奉

此時行重以下廿六人、八月十一日御竈木張引付、自神宮施行料相論アリ、五位一人貞藤被出畢、功本大宮司長資也、依是引付遲々也、侘申されて道行畢、

〔神宮雜例集二〕年中行事

正月元日離宮院宮司二宮禰宜參事

內宮一兩人參、外宮率權官內人等參、宮司二宮參拜之後、大司率任用歸宿館、在飯酒、

〔神宮雜例集二〕年中行事
六月十五日離宮院大祓事（齋王御著、祭使下著、宮司列參、於祓殿行之、）
〔中右記〕永久二年二月二日、今夜宿離宮、以齋王祓殿爲使宿所、
〔大神宮司神事供奉記一〕延應二年六月夕（天晴）大祓神事、
齋王御著河原殿、幣使神祇權少副隆時朝臣、幷寮頭以下著外九丈殿、宮司皆參、豐房良房長則也、幷主神司中臣以下著外主神司殿、儀式先手水、其後御祓、主神司中臣勤之、次刀禰申、〇下略
〔百練抄五堀河〕康和四年七月十六日、伊勢離宮院官舍放火、禰宜宣綱所爲云々、　五年八月十三日、神祇權大副輔弘、大神宮神主宣綱、及同意之輩配流、依離宮放火也、令諸卿定申罪名、（以前度々有仗議）
〔延喜式四伊勢大神宮〕凡神宮諸院、及齋內親王參神宮時館舍者、大神宮司並使神戶雜徭隨破修理、不得以致損壞、
〔續日本後紀十仁明〕承和八年七月癸未、是日令造伊勢齋內親王離宮、以伊勢尾張兩國正稅稻充料、
〔朝野群載九功勞〕造離宮使從五位下大中臣信房誠惶誠恐謹言
請殊蒙天裁因准先例被覆勘以私物造了伊勢大神宮離宮院殿舍築垣等、兼如傍例、宮司一人外、榮爵七人內、下給殘參人宣旨狀
右信房謹檢案內、件離宮院造畢之時、隨申請被覆勘者古今之例也、爰依去永長二年閏正月廿日宣旨、專藉私物造畢彼院、誠思土木之勤、可謂莫大之功、其勸賞之內、宮司一人、榮爵七人也、抑信房重檢先例、造進當院之輩、各拜要官之例也、近則爲祭主神祇少副元範朝臣損色使之剋、大宮司一人、民部丞一人、榮爵四人也、前司國房幷當宮宮司宣孝之時、大宮司榮爵七人、彼三輩抽賞如此、信房一人豈浴此恩、望請天裁因准先例、且被覆勘彼院殿舍鳥居門築垣等、兼被下給殘三人榮爵宣旨、彌知成功之貴矣、信房誠惶誠恐謹言、

御廐、

〔大神宮諸雜事記 一〕長和二年九月十六日朝仁、忌部春道宿房仁隨身駄落胎事於見付多利、爰祭主聞件事天、先驛使院之門於令塞固天、依有穢氣天、雜人等不可往反之由立札天、司中兄部案主等仁尋問先例之處、度會郡大領新家望尋男同貞昌之許興利奉古記文一通、醍醐天皇御代柔子內親王御時、延喜二年六月御祭、十五日早旦仁、離宮院內〇內下一本有院字板敷下仁犬死事有利、仍內院南西御門違塞固天、不令往人等、依有先例天齋王宿坐於祓殿院志天、令參宮天、豐明之神事和依例於川原殿院被勤仕了、又仁明天皇御時、久子齋王御時、承和七年十二月十四日、離宮寮司院仁牛斃世利、仍寮頭并次第官人等、不寄於彼院志天、祓殿并可然之便宜仁寄宿志天參宮了、但內膳炊部等爲例所奉仕御膳了、又桓武天皇御代朝原齋內親王御時、延曆五年九月御祭、十六日未時、脚力自京參下申云、內侍從五位下藤原朝臣榮子乃親父左京大夫、以今月十四日酉時卒去者、卽乍驚內侍朝臣者、自離宮內院退出了、因之主神司遠召天祓淸天、齋王御參宮如例者、件日記文遠被曳勘天、彼驛使院內仁同宿、王忌部卜部等和不參宮志天、卜部代仁和大神宮司卜部行正遠以、二所御川之御祓遠被勤仕、官幣遠波衞士捧持天、宣命詔刀之時仁和、二宮內人物忌父仁令捧持天奉仕了、卽件日記和祭主納給了、

〔大神宮司神事供奉記 一〕延應二年九月豐明神事

齋王御著內河原殿、總官主〇祭寮官等著內九丈殿、但頭不著宮司少司一人供奉也、著主神司殿、主神司同著、神事儀式如例、神事畢之後、少司持供御解文參御所河原殿砌、〇下略

〔大神宮諸雜事記 二〕永承四年六月御祭、齋內親王依例御參宮、被著於離宮院天、大祓之後、齋宮御汙殿下坐之〇下略

〔江家次第 十二神事〕伊勢公卿勅使

著離宮、以祓殿爲宿所、供給湯殿、束帶進發、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

正月例

以朔日卯時、禰宜内人物忌等皆悉參集、神宮拜奉、〇中略次禰宜内人等直會酒被給畢、卽皆悉御廚參向、

〔大神宮司神事供奉記〕一延應二年正月元日、〇中略參離宮院、〇中略其後參廳院、於南門對拜之後、禰宜自東門參入、

〔神宮雜例集〕二一宮司政印事

延久三年五月二日、六ケ條宣旨云、

一應令停止印幷文書等置私館兼態尋進造印者事

右得元範去四月廿一日解狀偁、〇中略今檢案内、大神宮司印、是自上古時、奉納於離宮廳調御庫、〇下略

〔神宮雜例集〕二年中行事

正月元日離宮院宮司二宮禰宜參事

二宮參拜之後、大司率任用歸宿館在飯酒、次參之次、於廚家南門外、宮司禰宜對揖次參入、

五月晦日離宮院修祓事

宮司成廳宣、〇中略宿坊(號忌殿、)造立事、(無印)

〔大神宮司神事供奉記〕一延應二年六月十五日夕、大祓神事、〇中略宮司各著齋殿、

〔大神宮司神事供奉記〕二仁治四年六月十五日夕、大祓神事、〇中略次直會酒肴也、事畢之後、各(〇月次幣使及)(宮司)著齋屋、

〔延喜式〕(五齋宮)右〇中略三時祭月十五日、齋内親王向離宮、〇中略主神司供奉、内院大殿祭、(所須祭物、神宮司儲之、)然後齋王遷内院、〇中略十六日朝饌之後、齋王參度會宮、〇中略其後齋王還著離宮、主神司中臣候南門、奉

所在

時勅使此所に著く、もと神序とて、雜神政を行ふ所あり、それを御厨とも、大神宮司ともいふ、そこに此宮舍を作りそへたるなり、〇中略、又此比〇事にやあらん、齋王の離宮、諸司の宿舍をもここに作りそへて、此院をすべて離宮院といひ、大神宮司預りて、事々沙汰せり、

〔新任辨官抄〕神宮事

離宮院（驛家也、勅使著之、齋王參宮同御此處、自外宮至離宮院三十六町、自離宮院至齋宮寮、又廿六町云々。）

〔神宮雜例集一〕一離宮院

延曆十六年丁丑八月三日官符、從度會郡沼木鄉高川原、移造於同郡湯田鄉宇羽西村畢、

〔岡太曆〕延文二年十二月九日、古記云、離宮院事、在度會郡湯田鄉宇羽西村、件院元在高河原、而依延曆十六年八月三日宣旨、移立彼宇羽西村、〇中略

殿舍

神祇官符伊勢大神宮司

應遷造大神宮御厨幷齋內親王離宮諸司宿舍等事（內外院々廳舍築垣門々鳥居等具不記）

右被太政官今月三日符偁、大神宮司解偁、件宮舍去寶龜四年改造以來、既經廿六ケ年、皆悉破損、加之南北通河、暴水汎溢、崩壞不少、雖加修理、猶不全堅、徒費人功、因之擬遷他處、神郡課丁、其術盡役、望請宛給功食、早將壞遷者、今所陳合理、仍請處分者、被大納言從三位神王宣、奉勅依請者、官宜承知、依宜施行、

參議正四位下行伯式部大輔左兵衞督近江守大中臣朝臣諸魚　大史從八位下卜部宿禰淸成

延曆十六年八月廿三日

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

正月例

以朔日禰宜內人物忌等皆悉參集、入南門五重侍（弖）大神拜奉、〇中略畢卽悉宮司御厨參向、朝庭拜奉、

名稱

也、

〔齋宮女御集〕ためちかゞはらからためくに、さい宮のかみなり、五月五日まゐりて、宮の御まへのやり水を、みかはの池となんいふなるを、だいばん所に、
ことしおひのみかはの池のあやめ草ながきためしに人もひかなん

離宮院

離宮院ハ、度會郡湯田郷宇羽西村ニ在リ、原ト同郡沼木郷高川原ニ在リテ、齋王離宮及ビ大神宮司廳院、諸司宿舍等ヨリ成レリ、齋王離宮ハ、之ヲタビノミヤト云フ、卽チ齋王多氣ノ齋宮ヨリ二所大神宮ニ參リ給フ時、暫ク停リ給フ所ノ官舍ニシテ、勅使等亦此處ニ著スルコトアリ、大神宮司ノ廳院ハ、一ニ御厨ト云フ、雜神政ヲ行フ所ニシテ、共ニ大神宮司ノ管スル所トス、

〔神名秘書〕離宮院大神宮御厨、齋内親王、井勅使離宮也、

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事
以十五日〇九月巳時、齋内親王參入坐於大神宮、〇中略卽親王還出度會郡離宮之、

一初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事
右從纏向珠城朝廷〇垂仁以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇〇孝德御世、有爾鳥墓村造神庤氐、爲雜神政所、仕奉支、而難波朝庭天下立評給時仁、以十郷分氐、度會乃山田原立屯倉氐、新家連阿久多督領、磯連牟良助督仕奉支、以十郷分竹村立屯倉、麻績連廣背督領、磯部眞夜手助督仕奉支、同朝庭御時仁、初大神宮司所稱、神庤司中臣香積連須氣仕奉支、是人時仁、度會山田原造御厨氐、改神庤止云名氐、號御厨、卽號大神宮司支、

〔大神宮儀式解十一〕度會郡離宮は、齋王多氣齋宮より、大神宮に參りたまふ間此宮に御し、又時

所、進怠狀已畢、又寮頭於無止之祭庭寄事於闕怠、不令供奉神事之由無所遁、進怠狀又畢、隨則以同年十一月十三日、差下使中臣神祇權大祐正六位上大中臣朝臣頼基、卜部正六位上宮主卜部宿禰茂行等、且被令祈申其由、禰宜科上祓、寮頭科中祓、門部司長貞道科大祓、天勤仕、即至于貞道者、追却寮中畢、

〔日本紀略後一條十四〕長元四年八月五日庚辰、召問祭主大中臣輔親、去六月伊勢荒祭宮託宣之趣、申云、齋宮頭藤原相通妻宅內、作大神宮寶殿、詐假神威、誑惑愚民、其罪已重、早可配流者、 八日癸未、被定齋宮寮權頭藤原相通、并妻藤原小忌古曾等配流事、件夫婦共、致不淨不信之由有託宣、相通流佐渡國、妻流隱岐國、

〔延喜式齋宮五〕凡陞中有失火穢者、隨之祓淸、其宅人七日不得參入宮中、

〔續日本紀文武三〕慶雲二年十二月乙丑、令天下婦女、自非神部齋宮宮人及老嫗、皆髻髮、

〔續日本紀光仁三十六〕天應元年正月辛酉朔、詔曰、〇中略比有司奏、伊勢齋宮所見美雲、正合大瑞、彼神宮者、國家所鎭、自天應之吉無不利、抑是朕之不德、非獨臻茲、方知凡百之寮、相諧攸感、今者元正告曆、吉日初開、宜對良辰、共悅喜貺、可大赦天下、改元曰天應、〇中略其齋宮寮主典已上、及大神宮司、并禰宜大物忌內人、多氣度會二郡司、加位二級、

〔三代實錄淸和十三〕貞觀八年九月十日壬子、伊勢齋宮寮允以上並有穢、不堪其供祭、〇中略故勅遣中務少輔從五位下藤原朝臣諸房、向大神宮行事、

〔尊卑分脈藤原〕時長——利仁——叙用齋藤號、起叙用、依補齋宮頭、世號齋藤也、

〔古老口實傳〕一神職氏人、召仕從女之名字謂、榊葉、木綿志手、有怖事也、仍代々禁制之、件兩名者齋宮女孺之定名也、是神代古風傳也、故神職人一切禁之、

〔百練抄後三條五〕延久四年十二月七日、藤原仲季父大和守成實勘罪名、配流土佐國、於齋宮邊、依射殺白專女、

處刑

端疊二帖上、筵一枚、紫端二帖、左右御高坏三本立天、獻御酒等、于時勅使、寮頭給織物女房裝束一具、主神司中臣範任給蘇芳掛一襲、助文季永給黃掛一襲、一番刀自給單襲等、更又西面參坐給天、女房御對面、萬事令聞給了、

〔朝野群載 朝儀四〕太政官符伊勢國幷齋宮寮
應勘申齋宮寮雜物事

右正三位行權中納言源朝臣基綱宣、彼宮所在雜物、勘錄令申者、國寮宜承知依舊例相共勘申、符到奉行、

從四位上行左中辨　　　　右大史正六位上朝臣

嘉承二年十二月四日

〔延喜式 五齋宮〕凡雜色人已上、與人毆鬪者、科上祓、

〔延喜式 五齋宮〕凡寮官諸司、及宮中男女、修佛事、和奸密婚者、科中祓、

〔大神宮諸雜事記 一〕弘仁五年甲午六月御祭仁、齋宮寮依例參宮、而大神宮御祭夜、直會三獻之間、寮頭藤原朝臣尙世、與禰宜公成俄成口論、爰御遊之後、不賜禰宜之祿物、齋王令還向給已了、仍任禰宜解狀、宮司上奏又了、以同七月廿三日被下官使、被對問寮頭尙世、與禰宜公成之處、寮頭陳申之旨不分明也、禰宜辨申之旨無過怠、因之寮頭官人共伏、辨怠狀了、其後以同八月十五日、從齋宮大盤所召禰宜公成、賜恩言、被物御衣一襲給畢、爲禰宜面目在了、

承平四年九月御祭仁、〇中略神宮酒殿荒木田希繼、與齋宮寮門部司長佐伯眞〇眞下文作眞道、俄成口論之間、件希繼、悉以被陵礫畢、卽付希繼之呼響天、神民與寮人已下、倂亂合成鬪亂、于時寮頭礼問本末之程、禰宜最世、不聞其沙汰、俄取合於寮頭成亂間、勅使大中臣等立座天入彼此之中、〇中略仍以同十月廿三日被下宣旨、左衞門尉府生各一人、到著於寮廳、被對問禰宜與寮頭之處、禰宜所爲甚非常、無陳遁

〔類聚三代格一〕太政官符

一齋內親王禊用度事

右內親王行禊之日、依例神郡供給、及儲雜物、宜停止之、仍齋宮寮每事儲之、其供給料稻二百卌束、舂備正稅、運送寮家、但夫幷馬、依承前例神郡行之、

一齋宮寮年料乾薪事

右薪依例令輸神郡百姓所進三千斤、而百姓等申云、調庸雜徭之外、輸件乾薪、艱辛殊深者、宜停輸薪、寮差神戶令刈、其粮食料充用正稅、

以前被右大臣宣偁、奉勅如右者、寮依件施行、自今以後永爲恒例、

延曆十一年七月三日

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁三年五月辛酉、勅伊勢國多氣、度會、及飯高、飯野等七郡、神戶百姓等、緣徵正稅、必加刑罰、已亂齋事、或致逃散、是以昔年停出擧、自茲以後、借求富民、至于報償、加利數倍、擧者有罪、償者受弊、宜始自明年、神稅之外、擧正稅十三萬三千束、以其息利充齋宮用、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年十月廿七日壬申、勅以伊豫國正稅穀千斛、讚岐國千斛、充齋宮寮、承前之例、齋內親王入大神宮之後、以伊勢國正稅穀三千斛、資新居之費、今廻換以充之、

〔寬平御遺誡〕齋宮者、出在外國、用途雖繁、料物不足、隨其申請、量宜進止、唯寮司能々可選任之、

〔大神宮諸雜事記二〕治曆二年十一月廿一日、參宮勅使參議從三位行右大辨齋宮大別當藤原憲(上卿)〇(中略)王信淸王、中臣少祐元範等也、〇(中略)以同廿八日、件勅使參入於齋宮、先西陣、寮頭兼懷朝臣、助文季永、主神司中臣範任等、各束帶天、西陣參著天、西陣開天、西面妻戶許令參入給天、下板敷侍坐、蒞繝端疊二帖、茵一枚、從本院兼日所被下也、從御前被物、五重襲織物紅御袴裳唐衣也、寮頭給天勅使奉了、卽勅使退立天、南面御前天ニシ奉拜賀了天、卽進物所退出天、束帶ヲ解置天、冠直衣著天、坐蒞繝

町八段卌六歩、在飯野郡、其外供田地子稻者、勘納寮家、充供御之闕乏、墾田准鄉土估賃租、充寮家雜用、

〔延喜式二十六主税〕凡齋宮官人以下女孺以上食料、以伊勢國庸米宛之、若不足者、春正税送充、

〔延喜式五齋宮〕凡諸司男女官月俸、雜色人衣服者、隨當國他國所進之多少、不論上下、每色分別、但須先女官後男官、

〔延喜式十二中務〕凡女官人、自八月至正月、計上日一百廿以上者、給春夏祿、○中略其齋宮寮女孺等季祿者、准時沽價、以伊勢國正税給之、

〔延喜式五齋宮〕凡寮官人以下春秋祿者、以當國神税充之、夏冬服寮家賜之、夏男各絹四丈五尺、女絹一匹、但中等以下女孺各絹三丈、今良女、女丁各絹三丈、庸布二段、火炬小子各絹二匹、調布二丈、冬男各絹一匹三丈、綿四屯、女絹一匹、綿二屯、今良女各絹一匹、布一段、綿二屯、火炬小子各絹四丈、布一段、綿二屯、女丁各絹一匹、綿二屯、庸布一段、自餘駈仕丁夏庸布一段、冬布一段、綿二屯、

〔延喜式二十一治部〕凡齋宮寮官人賻物、以伊勢國正税給之、

〔延喜式五齋宮〕凡馬部司御馬八匹、年料秣稻干蒭者、不待寮移、勘納本司、隨日充用、但其納用帳者、每季勘造、請寮勘署、

〔延喜式十八式部〕馬料

齋宮寮廿四人（從五位官一人、六位官四人、七位官七人、初位官十二人、○中略）

右自正月至于六月、上日一百廿五以上者、給春夏馬料錢、秋冬准此、○中略其齋宮寮馬料者、以神税給、若不足者、通用比國、

〔延喜式五齋宮〕凡寮官人緣公事入京者、聽乘驛馬、五位四匹、八位以上三匹、初位以下二匹、（女亦同）

〔續日本紀十一聖武〕天平二年七月癸亥、詔曰、供給齋宮年料、自今以後、皆用官物、不得依舊充用神戶庸調等物、

百斤、(已上下總)熊皮八張、(信濃)龜甲十二枚、(志摩)履卅兩、紙一千張、(已上伊勢)筆二百廿八管、(伊勢一百管、尾張百管、美濃廿八管、)一兩面三匹三丈、緋帛七匹三丈、錦一丈七尺六寸、油絁八匹一丈、雜藥五十六種、(色目在上條)白綿六百屯、鍬二百卅五口、鐵五十廷、砥八顆、墨十九廷、(已上京庫)庸米一千六百六十七石五斗、(伊賀三百卌二石、伊勢四百七十三石二斗、參河五百五十九石三斗、美濃二百九十三石、)舂米一千三百卌四石八斗、(伊勢五百卌四石八斗、就中黑米二百九十五石、尾張二百石、參河二百石、美濃四百石、)糯米十石、小麥十石、大麥一石、粟三石六斗、大豆小豆各六石、醬大豆十八石、胡麻子一石、荳子一石、(已上伊勢)黍子一石、(參河)鹽八十石、(志摩十五石、尾張六十五石、)胡麻油三石、(遠江)櫻椒油四斗四升、(伊勢)東鰒三百斤、(安房)堅魚五百斤、(志摩二百八十八斤、伊豆二百十二斤、)煮堅魚一百卌四斤、(駿河)堅魚煎四斗、(伊豆)猪膏三斗、楚割鮭一百廿隻、(已上信濃)煮鹽年魚二石、鮨年魚一石、(伊勢)醬鮒三石、(近江)鳥腊十斤、(尾張)鯛楚割九十斤、貽貝鮨一石八斗、鯛枚乾一百斤、(已上參河)雜腊五石、(志摩二石、尾張二石、遠江一石、)腸漬鰒七斗、(相模)雜魚鮨十石、(伊勢尾張各五石、)熬海鼠一百斤、鮨鰒二石、雜鰒三百卌四斤、海藻三百九斤十四兩、凝海菜三百卌斤、(已上志摩)芡菜十圍、(尾張)甘葛煎一斗、(伊勢)芥子五斗、(信濃)山薑二斗、(飛驒)陶器六百九十六口、(美濃)贄直稻日別二束、(伊勢)馬秣稻百廿束、(大神宮司所充、三時祭別卌束、)蒭四千八百圍、(半分大神宮司、以神郡內浪人刈送、半分國司、以國內浪人刈送、)

〔延喜式五齋宮〕凡寮中所納之雜物、用殘未進色目者、注載季帳、四孟差使進官、但被管諸司季帳、寮官覆審押署進上、

〔延喜式二十五主計〕凡諸國進納齋宮寮調庸雜物、待彼寮移返抄、勘會抄帳、

〔延喜式二十六主稅〕凡諸國進齋宮寮調庸雜物、若有未進者、隨彼寮年終移送未進之數、沒國司公廨、

〔延喜式五齋宮〕凡齋內親王月料及節料等、皆准在京、

〔延喜式四十主水〕凡氷者、(中略)〇齋內親王妃夫人侍、起五月盡八月、日別一顆、

〔延喜式五齋宮〕凡齋內親王到國、初年割正稅七百束、供用年料之勝、當郡每月舂送寮家、後年用供田稻、其供田二町、(一町在多氣郡、一町在度會郡、)外供田四町、(三町在多氣郡、一町在飯野郡、)墾田廿七町八段一百十七步、(十七町七十一步、在多氣郡、十一

八兩、白朮七斤十兩二分、烏頭十四斤四兩、半夏二兩二分、桔梗九斤五兩二分、細辛七斤十四兩、呉茱萸一斤六兩、菖蒲二兩二分、茯苓二兩二分、蜀椒二斤二分、桃人二兩、枳實十二兩一分二銖、葶藶子二兩一分、杏人二兩三分二銖、厚朴二分二銖、支子百廿枚、升麻十一兩二銖、干薑二分、豉一合一勺、前胡二斤一分、白芷二斤一分、當歸四兩二分、蒴藋一斤一分、商陸四兩一分、茵草三斤五兩、黄耆四兩一分、牡丹四兩一分、地楡四兩一分、大戟五兩一分、玄參三兩三分、白頭公三兩一分、躑躅花九兩一分、菝葜一兩一分、酢二斗五升、砥一顆、兩面九尺六寸、油絁九尺六寸、帛四丈一尺、緋帛一丈五寸、絹八尺、紗三尺、布三丈五尺、絲二兩、木綿七兩、紙八十四張已上寮充之、陶坩叩盆各四口、陶手洗一口、陶椀二合、盤二口、已上美濃國充之筥三合、机二脚、折櫃一合、明櫃一合、大案一脚、麻笥一口、杓一柄、大笥一合已上當國充之、藥刀一具、鐵臼一口、杵一枝、銅鍋一口、銅升一口藥刀以下長用、合藥明衣料絹一匹、綿二屯長料、調布二丈生料、正月供屠蘇命婦以下嘗藥小兒以上服料帛十匹、綿廿屯帛用二齋王生氣色一、並寮充之、

右藥部司所請

緋帛紫帛油絁各二丈七尺六寸、麻卅斤已上寮充之

右馬部司所請

凡齋內親王月料、及節料等皆准在京、其官人主典已上廿六人、番上一百一人、命婦一人、乳母三人、女孺卅九人、御厠人二人、御洗二人別米二升、鹽二勺、仕丁十五人、駈使丁廿五人、飼丁八人取二神郡并神戸仕丁一充之、今良八人別米二升、鹽二勺、女丁十人、將從二百七十三人別米一升五合、鹽一勺五撮、戸座一人、火炬小女二人別米一升四合、鹽一勺四撮、宮主并卜部家口四人別米一升五合、鹽一勺五撮、

凡諸國送納調庸、并請受京庫雜物、積貯寮庫、支配雜用、絹絁七百匹伊勢三百匹、尾張長絹廿匹、參河白絹卅匹、遠江絹一百五十匹、駿河絹一百匹、相模絹五十匹、美濃絹五十匹、絲三百絇尾張調二百絇、遠江庸一百絇、庸綿一千一百屯相模、布一千段上總細布一百段、常陸調布一百段、相模五百段、下總三百段、庸布八百五十段上野六百五十段、駿河二百段、倭文二匹常陸、木綿三百斤伊豆二百六十二斤、遠江卅八斤、麻四百斤、熟麻一

脚、明櫃二合、匏五柄、笥杓五柄、箕十枚、已上當國充之

右水部司所請

兩面二丈六尺三寸、緋帛四匹三丈七尺、油絁二匹五丈九尺二寸、白絁六尺、絹五丈三尺五寸、曝布九段二丈一尺七寸、紵布六尺、調布二丈九尺、絲二分、褥案一脚、油坏盤各三口、鑽火取塌一口、鐵五廷、鍬二口、以上寮充之湯槽一隻、洗床一張、大案二脚、木蓋五枚、洗頭槽一隻、洗足槽一隻、洗物槽一隻、韓櫃二合、燈臺二具、明櫃二合、筥二合、龜筥二合、匏三柄、已上當國充之池由加一口、由加四口、匜一口、𨡫一口、缶二口、叩瓮四口、以上美濃國充之

右殿部司所請

錦緋帛各一丈七尺六寸、黃帛一匹四丈四尺四寸、油絁一匹四尺、拂綱布一丈二寸、已上寮充之筥一合、當國充之

右掃部司所請

合藥十七劑三分劑之一

四味理中丸七氣丸各二劑、呉茱萸丸芎藥丸溫白丸各一劑、犀角丸三分一劑之一、神明膏萬病膏各二劑、升麻膏賊風膏各三劑、

神明白散五十二劑、度嶂散二劑、屠蘇二劑、

所須藥種

桂心六兩一分、巴豆五十五枚、甘草十兩三分二銖、犀角四分二銖、蜜五升、芒硝七兩四銖、防風一兩二分四銖、麻黃二兩三分四銖、蜀椒九兩一分、石膏一兩三分、芎藭七兩三分、大黃一斤四兩二分四銖、人參十兩、紫菀二兩二分、茈胡五兩、黃芩十一兩二分二銖、黃連一兩二銖、皂莢二分一銖、芍藥六兩、漏蘆六兩一分、連翹十五兩、白蘞十兩二分、藘茹四兩一分、附子九斤十五兩、干薑七兩二分、猪膏六十四斤

尺、蔀料庸布八段、簾料細布三段三丈九尺、斗帳料絹七匹二丈四尺、綿卅屯、床帷帳料絹二匹、綿十屯、床覆料絹一匹二尺、褥料絹三匹一丈六尺七寸、綿廿四屯、被料長絹十二匹、調綿八十四屯、服料絹百十匹、綿百八十屯、襪料絁一匹、絲卅絇、履廿四兩、已上寮供之、

右女部司縫備、其簾以上隨損替之、

兩面一匹四丈、緋帛五丈七尺、油絁一匹三尺、絹三丈四尺、細布一丈六尺、暴布二丈四尺、綿一屯、絲一絇、麻一斤、水甕二口、水壺麻笥三口、韓竈四具、長刀子二枚、短刀子五枚、砥一顆、以上寮充之、膳案一脚、菓案一脚、筥笥三合、飯笥二合、筋筥一合、匏筥五合、切案二脚、擲案二脚、大案二脚、韓櫃三合、明櫃八合、大笥五合、別脚案二脚、橫筥二合、缶十口、槽一隻、圓槽二隻、席八枚、食薦六枚、臼一口、杵二枝、匏廿柄、笥杓廿柄、箕二枚、盤籠四脚、以上當國充之、

右膳部司所請

兩面八尺、緋帛一丈二尺、油絁八尺、調布一段、已上寮充之、碓一腰、杵二枝、箕二枝、槽一隻、明櫃三合、足別案二脚、已上當國充之、

右炊部司所請

兩面四丈一尺九寸、緋帛二丈九尺九寸、油絁五丈、絹一丈九尺、細布二段七尺、調布三丈五寸、庸布三丈、酒盞卌八具、片盤廿口、洗盤一口、絲二兩、鍬二口、筌十口、以上寮充之、足別案二脚、韓櫃三合、明櫃一合、酒槽二隻、押槽一隻、大案二脚、匏廿柄、笥杓十柄、籮二口、箕二枚、置簀四枚、薦四枚、以上當國充之、

右酒部司所請

兩面三丈六寸、緋帛二丈四尺七寸、油絁四丈四尺、絹二丈四尺、薄絹一丈二尺、絲一兩、暴布三丈四尺、細布三丈四尺、紵布一丈、鏁一柄、小刀子二柄、水甕麻笥二口、以上寮充之、坩一口、陶垸卌口、臼二口、盤十口、已上美濃國充之、外居案二脚、白木手湯槽一隻、供水木蓋後盤各四枚、大案二脚、筥一合、匏筥二合、土火爐一

齋宮潔子内親王去文治元年十一月十五日卜定、（中略）女別當藤原定子、宣旨源澄子、

〔延喜式五齋宮〕凡齋内親王臨行、○中略齋宮官人以下皆賜装束、○中略齋宮頭絹十匹、綿廿屯、布廿段、助絹八匹、綿十五屯、布十五段、主神司中臣忌部、寮允、舍人司長、膳部司長、各絹四匹、綿六屯、布五段、寮膳藏部、炊部、酒部、水部、女部、殿部、藥部、掃部、門部、馬部長及二司判官等絹三匹、綿五屯、布四段、宮主、舍人、藏部、門部主典各絁二匹、綿四屯、布三段、史生、大舍人、寮舍人、及諸司番上等、各絹一匹、綿二屯、布二段、寮使部各布二段、飼丁、今良各布一段、其命婦者雜色綾廿匹、綿卅屯、布廿段、乳母各雜色帛綾十四匹、綿廿屯、布十三段、一等女孺各雜色帛十匹、綿十屯、布五段、二等女孺各雜色帛八匹、綿七屯、布四段、三等女孺各絹六匹、綿五屯、布三段、殿守各雜色帛四匹、綿四屯、布二段、女丁各雜色帛二匹二丈二尺、貲布一段、綿四屯、戸座、火炬小子各絹二匹二丈、綿四屯、布二段、緂布一丈五尺、

齋宮鋪設

齋内親王板牀二張、紫端帖二枚、黄端帖二枚、緣端帖六枚、席廿枚、五位及命婦各板牀二張、黄端帖二枚、乳母各板牀一張、緣端帖一枚、寮助板牀、楉牀各一張、折薦帖二枚、自餘官人女孺牀帖各一枚、番上各帖一枚、

右齋内親王向國鋪設、初年當國供之、後年寮司備之、

幄四具、紺布幃二具、蒲防壁十枚、

右以京庫物充之、隨壞替之、

酒卅甕、甕別米三石七斗酢五甕、甕別三石七斗醬六甕、甕別大豆三石

右齋内親王初到之年、國司預割可納寮米、大豆鹽等、造儲供之、若有甕破壞者、令尾張國供之、

年料供物

寢殿壁代帳料絹十三匹一尺七寸、綿卅七屯、蓋代料調布十五段二丈二尺、承塵料調布一段二丈三

〔玉海〕文治三年四月卅日辛丑、親雅參上、申齋宮勅別當事、　五月一日壬寅、親雅來、申齋宮勅別當無還補例之由、官外記勘申也、又申所望之輩、本官推擧之人三人云々、　八月二日庚午、今日召定經宗隆等、仰條々事、目錄在別、齋宮寮官除目、幷同御禊前驅日時等定、今月上旬可被行其事、未存歟、仍驚仰之、凡近代如此事一切不存知、每度自上卿下之、前例全不然者也、末代每事如況、可悲可悲、　九月五日癸卯、此夜被行寮官除目也、

〔三長記〕建仁元年八月十日丁亥、右少辨送書狀曰、顯兼朝臣、可爲齋宮別當之由可宜下、行房依無成敗、改補云々、行房者、顯時卿孫、右大辨行隆男也、齋宮寮事、何不堪成敗哉、

〔百練抄十二順德〕建保五年九月二日、被行齋宮十二司除目、

〔大神宮諸雜事記二〕長曆三年四月一日午時、齋宮內侍從五位下源朝臣託宣侍、○中略同年七月十六日齋宮內侍ノ託宣侍、我是皇大神宮ノ第一別宮荒祭宮也、而依皇大神宮勅宣、今更所託宣也、

〔朝野群載四朝儀〕補齋宮女官

從五位下藤原朝臣憲子

可爲齋宮內侍、

從五位下源朝臣成子

可爲齋宮宣旨、

無位藤原朝臣仁子

可爲齋宮女別當、

寬治三年九月十五日　藏人左衞門權佐藤原朝臣爲房奉

〔本朝世紀〕仁平三年九月十四日庚子、被下齋宮女別當藤原經子內侍、女王顯子宣旨等藤原能子宣旨、

〔類聚大補任後鳥羽〕文治三年丁未

追可有之由申之上卿頭辨内覽、又奏聞召史賴衆、仰官寮可罷退之由了、廿一日戊寅、以散位藤原忠房、
可爲初齋宮勅別當之由被宣下、上卿重通卿仰辨、廿八日乙酉、酉刻中納言重通卿、參議師長卿著
仗座、有長奉送使定事、次頭辨下折紙退出、（齋宮寮官夾名也）大外記賴業申言、先例主神司除目被行之後、被
行寮官除目、今度如此、尤違例也、仍忽召取主神司請奏、於寮忠房所被行也、〇中略次有齋宮寮官除目
事、召藏人高佐内覽奏聞、依式部丞不參、無三度申、召外記、於軾令封除目、仰可傳給之由退出、〇中略

太政官謹奏〇中略

伊勢齋宮

主神司

宮主正六位上卜部宿禰永清　中臣正六位上大中臣朝臣兼保

忌部正六位上忌部宿禰守恒

齋宮寮

頭從五位上藤原朝臣忠房　助從五位下大中臣朝臣兼房

大允從五位下淸原眞人安賢　大屬正七位上藤井宿禰行正

仁平三年八月廿八日

〇按ズルニ、寮頭藤原忠房ハ、此月二十一日齋宮勅別當ニ補セラレタレバ、寮頭ニシテ勅別當ヲ兼ネタルモノカ

〔台記〕仁平三年九月十四日庚子、頭朝隆朝臣曰、〇中略今夜重被任齋宮寮官、卽覽本官請文、仰不可内
覽除目之由了、〇中略深更大外記師業、送除目聞書、任齋宮寮官、（助以下至于史生、先日任了、）

〔類聚大補任〕（後鳥羽）文治三年（丁未）

齋宮潔子内親王（主文治元年十一月十五日卜定、（中略）主。神。司。中臣家光、（中略）勅別當前中納言權卜、輔藤伊經、後源賴澄、）

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月卅日戊申、以散位從四位下在世王、爲齋宮頭、

〔西宮記臨時五〕群行

天慶元年七月五日貞公御記云、齋宮司等且任之、頭未補、寛平例後除目任之、依彼跡今日不任、

〔本朝世紀〕天慶元年九月三日丁未、齋宮助正六位上口朝臣忠幹授從五位下、(位記今夜不給)任齋宮頭、自餘則齋宮寮被官諸司長官以下也、

〔日本紀略三村上〕天曆三年八月廿一日壬辰、被定齋王御前及寮人等云云、　九月十九日己未、齋宮寮召名給二省、幷寮頭位記請印、

〔日本紀略六圓融〕天祿二年八月十一日甲戌、初齋宮寮官除目定考延引、依觸物忌也、　九月廿一日癸丑、齋宮寮諸司除目、

貞元二年九月七日甲午、齋宮寮除目、　十五日壬寅、齋宮寮幷十二司除目、

〔小右記〕天元五年六月一日辛酉、伊勢守奉高被任齋宮權寮頭、(兼)卽被仰按察大納言、(於陣座奉行除目云々)須被仰左府(○藤原兼家)歟如何、

〔日本紀略九一條〕永延二年九月十五日己亥、齋宮寮官除目、於攝政(○藤原兼家)宿所行之、

〔中右記〕永久二年三月十六日、季實任齋宮寮頭、是被止保俊也、猶先可停任保俊之由、除目以前可被仰外記事歟、

大治五年二月十五日、今夜有小除目、(中略)○齋宮寮頭源清雅、(元伊勢守)

〔本朝世紀〕仁平三年八月十九日丙子、中納言重通卿著仗座、被定齋宮群行事、　廿日丁丑、申刻中納言重通卿著仗座、召神祇官陰陽寮有御卜事、望申齋宮寮頭之輩事也、(左馬助藤原忠房、正親正顯康王、)神祇權大副大中臣朝臣親章、權少副卜部兼康、陰陽助在憲、圖書頭在賢、雅樂頭泰親、陰陽允守信等參入、頭辨朝隆朝臣、進卜形於上卿云々、封之賜官令卜、官卜言、(一丙合、二不合、)寮占言、(一吉、二不吉、)泰親獨不同申言、一不吉、二吉、

慶雲二年十一月庚辰、從五位下當麻眞人楯、爲齋宮頭、

〔續日本紀 七元正〕養老元年四月乙亥、以從五位下猪名眞人法麻呂、爲齋宮頭、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年八月壬戌、補齋宮寮官人一百二十一人、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十年閏七月丁巳、外從五位下引田朝臣虫麻呂、爲齋宮長官、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十八年八月壬寅、置齋宮寮、以從五位下路眞人野上、爲長官、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字五年正月壬寅、以從五位下粟田朝臣足人、爲齋宮長官、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年七月乙卯、從五位下忌部宿禰呰麻呂、爲齋宮頭、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜六年十月辛未、以從五位下笠朝臣名麻呂、爲齋宮頭、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年十月辛卯、從五位下安倍朝臣草麻呂、爲齋宮長官

〔日本後紀 八桓武〕延曆十八年四月庚寅、從五位下中臣丸朝臣豐國、爲齋宮頭、

〔公卿補任 嵯峨〕弘仁十年

參議從四位下安倍寬麻呂弘仁五、二月、齋宮頭、七月十、兼伊勢權介、同八、八月一日、伊勢權守、頭如元

〔續日本後紀 十四仁明〕承和十一年二月辛酉、從五位下並山王、爲齋宮頭、正五位下長岑宿禰高名、爲兼權頭、伊勢守如故、

〔文德實錄 四〕仁壽二年五月丙子、除伊勢齋西〇西恐衍宮諸司、

〔三代實錄 十淸和〕貞觀七年五月十六日丙申、以從五位上行伊勢權守藤原朝臣宜、爲齋宮寮頭、伊勢權守如故、

〔三代實錄 十二淸和〕貞觀八年二月十三日己未、以齋宮寮頭從五位下藤原朝臣諸房、爲中務少輔、〇中略從五位下藤原朝臣諸藤、爲齋宮寮頭、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年七月五日癸巳、授中監物正六位上藤原朝臣最實從五位下、爲齋宮頭、

凡朝夕御膳、若致闕乏、科責寮官并膳部司、

凡濠隍四邊、列植松柳、并掃除大垣廻及大庭等之事者、令門部司加勢守、若折損樹木、緩怠掃除、責其官人、亦同上條、

凡仕丁卅八人之中、六人分充造寮并厨家之料、便寮官一人專當其事、勸納功物、隨其破損、司加修理、其立用帳、請寮吏判、若不營小破、妄致大損者、科處勾當官人、但至于非常異損、隨申處分、

官位相當

〔拾芥抄中本官位相當〕從五位上齋宮頭　正六位下齋宮助　正七位上齋宮大亮　正七位下齋宮大允

從七位上齋宮少允、齋宮判官、主神司中臣　從八位上齋宮大少屬、同主神忌部、同宮主

〔古語拾遺〕肇自神代、中臣齋部、供奉神事、無有差降、中間以來、權移一氏、齋宮寮主神司中臣齋部者、元同七位官、而延曆初、朝原內親王奉齋之日、殊降齋部、爲八位官、于今未復、所遺六也、

〔延喜式二十八兵部〕凡齋宮寮門部司長官一人、從六位官、主典一人、大初位官、門部十六人、左右衞門府所送各四人、寮家補入八人、馬部司長一人、從七位官、馬部四人、並本寮判帶仗、其考選季祿馬料並准諸衞府、但季祿馬料、以伊勢國神稅給之、

補任

〔延喜式十一太政官〕凡天皇初卽位者、定伊勢大神宮齋內親王、〇中略 潔齋三年、五月以前任齋宮寮官人及主神司、其諸司七月以前任之、卽依例准擬庶事、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、〇中略 齋宮寮并所管諸司、始任者並給鑑符、

〔延喜式五齋宮〕凡以大神宮封戸百姓、不得補寮舍人、

〔延喜式十八式部〕凡補諸宮舍人者、〇中略 齋宮入色白丁各十人、〇中略 但白丁舍人未敍之前、无故不上之替、惣補白丁、其敍位之後、依病不上、并遷他色之替、以雜色人補之、

〔續日本紀二文武〕大寶二年正月乙酉、以從五位下當麻眞人橘、爲齋宮頭、

〔續日本紀三文武〕大寶三年六月乙丑、從五位上引田朝臣廣目、爲齋宮頭兼伊勢守、

〔延喜式齋宮五〕凡齋王到國之日、取度會郡二見鄕礒部氏童男、卜爲戶座、其炬火取當郡童女卜用、但遭喪、及長大即替之、

凡遷入野宮之後、及到齋宮、每月下旬、雜色及仕女已上名簿移送於主神司、隨即卜之、亦至六月九月十一月十二月、更亦卜之、預供祭事、但野宮下爲祭卜、其寮吏諸司卜食已訖、行列就版位、于時中臣官人命云、兆竹折、害事祓淸供奉、其稱唯退出、內侍采女女孺已下、在座承命、不卜食者、不得參供宮中、野宮者內院、齋宮者中院、皆忌之、

〔日本紀略桓武〕延曆廿二年正月丁巳、始置伊勢齋宮寮史生四員、

〔日本後紀平城十七〕大同三年八月壬子、齋宮寮之炊部司、元長一人、而今改置長官主典、宜准舍人藏部等司官位、〇又見類聚三代格、令集解、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符
　加置齋宮寮權史生一員事
右右大臣宣、奉勅宜依彼寮請、加置件員、但其衣粮、以寮舍人一人料充之、
　昌泰三年四月九日

〔仲資王記〕安元三年十月廿七日、初齋宮主神司等、上差文了、中臣卜部忌部女中臣也、

〔續日本後紀仁明十五〕承和十二年六月癸未、勅令齋宮寮頭幷助、檢校大神宮幷多氣度會兩神郡雜務、自今以後、立爲恒例、

〔延喜式齋宮五〕凡內院神殿者、令主神司專一勤守、若致破損、奪其俸料、
凡內院及諸司雜舍者、造宮使作畢之後、寮官每季巡檢、若居住官人致損、奪其俸料、寮官解怠、不勤巡檢、譴責之法、亦同諸司、
凡中重庭者、須令諸司每晦掃除、寮官遞加巡檢、若致緩怠、譴責同上條、

ノナレバ、原本果シテ此ノ如クナリヤ否ヤ、今之ヲ確知スルコト能ハズ、

又按ズルニ、是ヨリ後ノ延喜齋宮式ニハ、此條ニ炊部門部馬部アリ、蓋シ當時未ダ之ヲ置カザリシモノカ、或ハ蠹蝕ニ由リテ、其名ヲ失ヒシカ、並ニ知ルベカラズ、

〔職原抄下〕伊勢齋宮寮

頭一人〈無權官〉　相當從五位下

四位五位殿上人、若諸大夫任之、

助〈權〉　相當正六位下

允〈大少〉　〈大相當正七位下　少相當從七位下〉

屬〈大少〉　大少共相當從八位下

〔職中抄下〕百官諸國

齋宮主神司

中臣　忌部　宮主

齋宮寮　頭　助〈正權〉　允〈大少〉　屬〈大少〉

舍人司〈長官主典〉　藏部〈同〉　膳部〈同〉　炊部〈同〉　酒部〈同〉　水部〈同〉　采部〈同〉　殿部〈同〉　薬部〈同〉　掃部〈同〉　門部〈同〉　馬部〈同〉

以上齋宮被官十二司といふ

〔拾芥抄中本官位唐名〕齋宮頭〈齋宮寮頭、俗只稱齋宮頭、不書齋宮字、〉

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〈○中略〉齋宮寮五人、〈權一人〉

凡諸司使部者、〈○中略〉齋宮寮十人、

〔延喜式二十二民部〕凡伊勢齋宮仕丁卌八人、以神郡幷神戶百姓等充之、

凡伊勢齋宮者、差神戶百姓一百卌二人、爲番令守衞、仍免其庸、

藏部司
長官一人、從六位官　主典一人、大初位官
膳部司
長官一人、從六位官　判官一人、正八位官　主典一人、大初位官
酒部司
長一人、從七位官　酒部□□
水部司
長一人、從七位官　水部四人、
釆部司
長一人、從七位官　□部二人、
殿部司
長一人、從七位官
藥部司
長一人、從八位官
掃部司
長一人、從七位官　掃部六人、
勅依前件
神龜五年七月廿一日
○按ズルニ、本書原本、蠹蝕割裂シテ、其詳略次序ヲ知ルコト能ハズ、今姑ク刊本ノ訂正ニ從ヒ、更ニ原本ニ依リテ、其次序ヲ改ム、然レドモ刊本ハ、各處ニ散在セレ令集解ノ文ヲ拾綴セルモ

大副ニ擧、

〔類聚大補任(後堀河)〕安貞二年(戊子)

宮司大司從五位下賴重(褒重任宣旨、遣齋宮中院功、)

寬喜三年(辛卯)

宮司大司從五位下賴重(今年四月廿三日重任、遣齋宮寮中院功、)

〔類聚大補任(龜山)〕文永二年(乙丑)

宮司大司從五位下大中臣朝臣﨑長(在任三年、有人御修理懈怠之聞、超過前々之由、神宮訴訟興成、其上弘長二年、齋宮中院、依近例可造進之處、未作殿舍、懷口云、依寮家訴訟出來、致之間、楚忽被停任畢、)

政印

〔延喜式(五齋宮)〕凡齋王歸京者、寮印授山城國令納、(寮司任畢、中官請用、)主神司印、及長例公文、並納神祇官、備後據勘、

〔續日本紀(八元正)〕養老二年八月甲戌、齋宮寮公文、始用印焉、

〔三代實錄(八清和)〕貞觀六年正月廿九日丙辰、銅印一面鑄宛伊勢齋宮主神司、

職員

〔享祿本類聚三代格(四)〕勅

齋宮寮

頭一人(從五位官)助一人(正六位官)大允二人、少允一人(從七位官)大屬一人、少屬一人(已上從八位官)

主神司

中臣一人(從七位官)忌部一人、宮主一人(已上從八位官)

舍人司

長官一人(從六位官)主典一人(大初位官)

定額等、各造進一箇院、皆以浴朝恩、加以上總介永實、造進中院一所、兼日關殊賞、而公隆既募造進三箇院之大功、徒被超越一兩輩之下臈、大神宮事、以道理爲先、是則神不享非禮之故也、今量成功第一、横成競望之條、豈以可然乎、○中略望請天恩因准先例、依彼成功、被補任大神宮司公衡秩滿替者、將知倫理之不空者、右大臣宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

正四位下行右大辨兼中宮亮越前權守藤原朝臣

修理右宮城判官正五位下行內匠頭左大史笇博士越後介小槻宿禰

元永元年六月八日

〔二所大神宮例文〕大宮司次第

公宗 公盛二男、永治元年二月十三日任、同廿五日着任、父公盛齋宮外院功、

〔本朝世紀〕仁平三年五月廿六日甲寅、戌剋權中納言忠基卿著左仗、被定勅可被立齋宮寮內院幷荒祭高宮兩神殿之日時、○中略

擇申可被立伊勢齋內親王內院幷荒祭高宮兩神殿雜事日時、

始木作日時　六月一日己未　時巳二點若午

立柱上棟日時　十三日辛未　時卯二點若午

立柱次第　先北、次南、次西、次東、

仁平三年五月廿六日　權助兼博士宣憲

雅樂頭泰親

頭憲榮

〔類聚大補任 後鳥羽〕文治三年丁未

齋宮潔子內親王 去文治元年十一月十五日卜定、(中略)造宮使內院祭主能隆朝臣代官下野權守俊隆、中院甲斐權守定輔、先功之上、兼以先補神祇權少輔、外院三位基親、同以先補權

正四位下行權大輔兼丹後守大江朝臣　正六位上行少丞藤原朝臣（未到）

從五位上行少輔兼越前權守藤原朝臣　正六位上行少丞藤原朝臣

正六位上行少錄中原朝臣

正六位上行少錄小野朝臣

少錄（闕）

〔水左記〕承保二年十月五日、巳剋許、右中辨正家朝臣、持來造齋宮使覆勘之文、予（○源師房）示辨云、依爲輕服所辭申也、齋宮事、早令申左大臣殿（○藤原師實）可令他人奉件事歟、

〔勅使部類記〕長治二年八月十三日、公卿勅使內大臣左近衞大將源雅實、　廿日甲申、參齋宮、給祿女房、尋申宮中種々事等、且是爲見宮殿之破壞、且又爲賀申數年御座之由也、異姓他人、不修造齋宮寮之由、祭主訴申之條、問寮頭之處、異姓人造進由獻例文、

嘉承二年二月十一日公卿勅使同公、　十七日、巳剋許參齋宮、候御殿東庭、謁女房、御殿皆修理、寮頭募任伊勢守之功也、又召寮頭公綱、問答宮中種々雜事、或有加勸發之事、數剋之後退出、

〔二所大神宮例文〕大宮司次第

公隆（公義二男、元永元年戊戌六月八日任、十四日著任、在任六年、父造齋宮三ヶ院功、）

〔朝野群載〕（六神祇官）太政官符式部省

應以散位從五位下大中臣朝臣公隆補任伊勢大神宮司同公衡秩滿替事

右得公隆去四月廿五日奏狀偁、謹檢案內、大神宮司者、尋成功次第、被補任定例也、爰去承曆年中、造進齋宮寮內中外、并三箇院數十字殿舍之上、依別宣旨、恒例員數之外、造進數十字舍屋、依件功可被補前宮司宜孝秩滿替之由、去長治元年、具注事狀、經奏聞之處、被下依請宣旨旣畢、然則當時成其望輩之中、公隆已爲成功之第一、採擇之處、誰敢比肩、倩檢先例、前伊勢守親仲朝臣、前壹岐守教清、宮司

修₂理齋宮雜舍₁

〔類聚符宣抄　一〕太政官符伊勢國幷大神宮司 内印

使正六位上大中臣朝臣賴行

右爲₃修₂造齋宮₁差₂件人₁宛₂使發遣₁如₂件₁國宮承知、緣₂造宮事₁聽₂使處分₁、一事已上不₂得₂闕怠₁符到奉行、

位勘解由長官　　　　　　左大史位

承平三年三月四日　　　　　　　　驛鈴一口 三剋

太政官符式部省 外印

應₃補₂任造伊勢齋宮使大神宮司正六位上大中臣朝臣兼任₁事

右正二位行權大納言兼皇后宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣能信宣、奉₂勅件人₁、宜₃爲₂造₂彼宮₁使₁者、省宜承知、依₂宣行₁之、符到奉行、

左少辨正五位下兼行土左權守平朝臣　　　正六位上行左少史菅野朝臣

長曆元年六月五日

式部省解補任事 省印

補₂任造伊勢齋宮使大神宮司正六位上大中臣朝臣兼任₁事

右被₂太政官今月五日符₁偁、正二位行權大納言兼皇后宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣能信宣、奉₂勅件人₁、宜₃補₂彼宮造宮使₁者、省宜承知、依₂宣行₁之者、今日補任申送如₂件₁、謹解、

長曆元年六月八日　　　　正六位上少錄惟宗朝臣

二品行卿親王　　　　　正六位上行大丞藤原朝臣 未到

正四位下行大輔藤原朝臣　　正六位上行大丞藤原朝臣 未到

殿舍

〔新任辨官抄〕齋宮寮
内院〈齋王御之〉　中院〈巳上檜皮、寮頭在此、〉　外院〈萱葺屋五六十宇、屋體如民屋、〉
十二司有闕者、以寮解申請、被宣下云々、別當宣旨内侍宣可尋、

〔三代實錄　十四清和〕貞觀九年二月三日癸酉、齋宮寮火、延燒官舍十二宇、

〔扶桑略記　二十四裏書〕延喜廿二年十月十四日、依齋宮寮失火事、奉遣伊勢臨時幣帛使、

〔春記〕長暦四年十一月廿九日庚辰、午時許有召參内、仰云、齋宮寮有申請事、其故者、彼寮藏部司倉一宇燒亡、其中雜物等〈御幌雜事云々〉燒失了事也、其奏狀早可奏下也者、保家朝臣授予、即以之申關白、命云、下給皇后宮大夫〈別當也〉尋先例可行、又其雜物等可令調之由可被仰也者、予奏之、仰云、隨關白申之旨可仰下也、又命云、彼火焰已近御在所云々、以誰人可遣訪乎、此由可觸關白者、予即申此由、被奏云、以藏人被奉遣可宜者、即奏之、仰云、相定可仰、一定也、

〔山家集　下雜〕伊勢に齋王おはしまさで、としへにけり、齋宮こだちばかりさりとみえて、ついがきもなきやうになりたりけるをみて、
いつか又いつきの宮のいつかれてしめのみうちにちりをはらはん

營繕

〔延喜式　五齋宮〕凡齋宮破壞、國司修理、若壞破過多、在前遣使修造、

〔延喜式　四伊勢大神宮〕凡齋宮寮官舍者、預大神宮司令修理、

〔續日本紀　三十一光仁〕寶龜二年十一月庚子、遣鍛冶正從五位下氣太王、造齋宮於伊勢國、

〔續日本紀　三十三光仁〕寶龜六年八月癸未、伊勢尾張美濃三國言、異常風雨、漂沒百姓三百餘人、馬牛千餘、及壞國分幷諸寺塔十九、其官私廬舍不可勝數、遣使修理伊勢齋宮、

〔續日本紀　三十八桓武〕延暦四年四月丁亥、從五位上紀朝臣作良、爲造齋宮長官、

〔三代實錄　三十九陽成〕元慶五年二月廿一日己亥、割伊勢國正稅一萬束、付大神宮司、毎年出擧、以其息利、

齋宮之狀、同令此使新申於大神宮、

〔職官志 四〕齋宮寮

自垂仁帝命倭姫奉神器廟於伊勢國而齋宮已建、然齋宮司准寮、屬官准長上、即見於大寶元年八月、凡官司云准某者、類是非所常置、職員令是以不載也、養老二年八月、齋宮寮公文始用印、神龜四年八月、補齋宮寮官人一百二十員、據其多官員、不獨有寮、似其所管亦置、依官位令集解、神龜五年七月、定寮及諸司官位、然觀遍補官員之多、且尋定官位、則臨時所置從可知矣、其諸司、主神也、有中臣忌部宮主隷焉、舍人也、藏人也、膳部也、炊部也、酒部也、水部也、殿部也、掃部也、采部也、藥師也、至天平十年八月、書置齋宮寮、既廢復置也、齋宮式、采部作女部、又有門部馬部、通前所置凡十三司、在仁壽二年五月、書省伊勢齋宮西○宮四、文德實錄作西宮、諸司、蓋謂諸司皆在齋宮之西、至貞觀十二年十二月、始給齋宮寮及其所管諸司鑰符、是亦省復置、故延喜有十三司云爾、

〔續日本紀 二文武〕大寶元年八月甲辰、太政官處分、○中略齋宮司准寮、屬官准長上焉、

〔年中行事秘抄〕置齋宮寮事

聖武天皇神龜五年十一月廿二日

○按ズルニ、下文職員條ニ引ケル、類聚三代格ノ文ニ據レバ、十一月廿二日ハ、恐ラクハ七月二十一日ノ誤ナラン、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十八年八月壬寅、置齋宮寮、

〔類聚三代格 一〕太政官符

齋宮主神司

右被右大臣宣偁、奉勅件司、令外特置、未有所管、考校功過、無由取決、宜自今以後令神祇官管攝、

延暦十九年十一月三日

所在

〔日本書紀 垂仁 六〕二十五年三月丙申、(中略)到伊勢國、時天照大神誨倭姫命曰、是神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居此國、故隨大神教、其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、

〔倭姫命世記〕大足彦忍代別天皇(○景行)二十年庚寅歲、倭姫命年既老耆、不能仕奉、吾日足止奴宣天、齋内親王仁可仕奉、物部八十氏人々定給天、十二司寮官等遣波、奉移五百野皇女久須姫命、卽春二月辛巳朔甲申、遣五百野皇女於皇大神乃御杖代止定天、多氣宮造奉天、齋慎美令侍給支、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、齋宮十二司等ハ當時旣ニ多氣郡ニ造ラレシ如クナレドモ、此ハ蓋シ後世ノ追書ナルベケレバ信ジ難シ、而シテ其多氣郡ニ設ケラレシ年代詳ナラズ、

〔類聚國史 四 神祇〕天長元年九月乙卯、詔曰、天皇詔旨良万止、掛畏支大神乃大前爾申給止閉申久、多氣乃齋宮大神宮離遠天、每事爾無便、因玆度會乃離宮乎ト定天、常齋宮止須倍伎狀、申出事乎、恐美恐美毛申給止久申、

〔神宮雜例集 一〕齋宮寮(在多氣郡竹鄉)

天長二年乙巳、差遣勅使於伊勢國、撰定勝地於多氣郡、始建齋宮寮院、于時氏子内親王群行、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、天長二年多氣郡ニ齋宮寮ヲ建テシモノニテ、類聚國史ノ文ト合ハズ、蓋シ天長元年ニ、度會ノ離宮ヲ以テ齋王ノ居所ト定メシカドモ、猶ホ前例ニヨリテ、多氣郡ニモ寮院ノミヲ置カレシモノカ、詳ナラズ、

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年十一月癸未、災于伊勢齋宮、燒官舍一百餘宇、遣左衞門佐從五位下田口朝臣房富、賫絹百匹、綿三百屯、調布五十端、存問齋内親王、十二月庚戌、遣參議從四位上行春宮大夫兼右衞門督文室朝臣秋津、奉幣於伊勢大神、以齋宮燒損也、又去天長元年(○元年、原作九年、今據類聚國史改之、)九月依多氣齋宮遠離大神宮、每事無便、卜定度會郡宮、以爲齋宮焉、今依火災、卜定多氣宮地、可爲常

名稱

附 齋宮寮

齋宮寮ハイツキノミヤノツカサト訓ズ、齋宮一切ノ事ヲ處理スル所ナリ、初メ垂仁天皇ノ朝、天照大神ヲ伊勢ニ遷シ奉リ、始テ度會ニ齋宮ヲ建ツ、蓋シ當時ハ齋內親王モ同殿ニ住ミ給ヒシナランカ、其後齋內親王ノ居所ハ別ニ多氣郡ニ置カレシガ、淳和天皇ノ天長九年ニ至リ、多氣ノ宮ハ大神宮ト遠隔シ、奉祀ニ不便ナリト云フヲ以テ、改テ度會ノ離宮ヲ齋宮ト定メラル、其後仁明天皇ノ承和六年ニ火災アリシカバ、再ビ多氣郡ノ舊地ニ復セラレタリ、凡ソ寮中官舍ノ修理ハ、大神宮司之ニ任ジ、齋王宮殿ノ修理ハ、國司之ヲ營ム、若シ破壞甚シキ時ハ、使ヲ遣シテ造營セシム、後世朝綱衰ヘ、用途缺乏スルニ及ビテハ、毎ニ成功ヲ募テ修造セシメラレタリ、

齋宮寮ハ、內中外ノ三院ニ分レ、內院ハ齋內親王ノ所居ニシテ、其男官ニハ勅別當以下、主典番上仕丁等アリ、又女官ニハ命婦、乳母、女孺等アリテ、各〻其職ヲ奉ズ、中院ニハ寮頭アリ、助以下屬官ヲ督シテ、寮中一切ノ事ヲ掌リ、外院ニハ舍人、藏部、膳部、炊部、酒部、水部、采部、殿部、藥部、掃部、門部、馬部ノ十二司、及ビ諸種ノ雜舍アリ、以上諸司何レモ長官主典アリテ、各〻其職ヲ分掌ス、別ニ主神司アリ、初ハ本寮ニ隷屬セシガ、後ニ神祇官ノ被管ト爲リ、中臣、忌部、宮主ヲ置キ、內院ノ神殿ニ關スル一切ノ事ヲ掌ラシム、內院ニ祈年、月次、神今食、新嘗等ノ諸祭アリ、諸司ニモ亦春秋二季ノ祭アリ、

齋王ノ月料等ハ、皆野宮ニ准ジテ之ヲ賜ヒ、其他男女官ノ衣食、月俸、季祿及ビ寮司ノ供給ハ、諸國ノ神戶ヨリ輸送スル庸調、京庫ヨリ下ス雜物、伊勢ノ神税正税等ヲ以テ之ニ充ツ、其用途ノ種類及ビ之ニ關スル制度ノ沿革ノ如キ、一々列擧スルニ暇アラズ、

〔倭名類聚抄 五職官〕職員令云、齋宮寮(以豆岐乃美夜乃豆加佐)

時、文德天皇の御むすめ、これたかのいもうと、

昔男伊勢の齋宮に、内の御使にてまゐれりければ、かの宮にすきごといひける女、わたくし事にて、

千はやぶる神のいがきもこえぬべしおほみや人のみまくほしさに

男かへし

こひしくはきてもみよかし千はやぶる神のいさむるみちならなくに

〔拾遺和歌集雜八〕天暦十一年九月十五日、齋宮くだり侍けるに、内よりすゞりてうじてたまはすとて、

おもふ事なるといふなるすゞか山こえてうれしきさかひとぞきく

〔千載和歌集羇旅八〕天仁○仁恐永誤元年、齋宮群行の時、忘井といふ所にて讀る、

齋宮甲斐

わかれゆくみやこのかたの戀しきにいざむすび見んわすれゐの水

〔金葉和歌集雜上九〕郁芳門院○白河皇女媞子伊勢におはしましける時、六條右大臣北方、あからさまにくだりて侍ける時、思ひかけずかねのこゑのほのかにきこえければよめる、

六條右大臣北方

神垣のあたりとおもふにゆふだすき思ひもかけぬ鐘の聲かな

前齋宮○白河皇女恂子伊勢におはしましけるとき、寮頭保俊、御まつりのほどゝのゐものゝれうにきぬをかりて、程すぎてこれをわすれて、いまゝでかへさゞりけることなど申たりけるかへりごとにいひつかはしける、

前齋宮內侍

かへさじとかねてをりにきから衣こひしかるべきわが身ならねば

いとねんごろにいたはりけり、あしたにはかりにいだしたてゝやり、夕さりはかへりつゝそこにこさせけり、かくてねんごろにいたはりける程に、いひづきにけり、二日といふ夜、男われてあはんといふ、女もはたいとあはじとも思へらず、されど人めしげゝればえあはず、つかひざねとある人なれば、とほくもやどさず、女のねやもちかく有ければ、女人をしづめて、ねひとつばかりに、男のもとにきたりけり、男はたねられざりければ、とのかたを見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、ちひさきわらはをさきにたてゝ人たてり、をとこいとうれしくて、わがぬる所にゐていりて、ねひとつよりうしみつまであるに、まだ何事もかたらはぬにかへりにけり、男いとかなしくてねず成にけり、つとめていぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくてまち居れば、あけはなれてしばしあるほどに、女のもとより詞はなくて、

君やこしわれやゆきけんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか、男いといたうなきてよめる、

かきくらすこゝろのやみにまどひにき夢うつゝとはこよひさだめよ、とよみてやりてかりにいでぬ、野にありけど、心はそらにて、こよひだに人しづめて、いとゝくあはんとおもふに、國のかみ、いつきの宮のかみかけたる、かりの使ありときゝて、夜ひとよ酒のみしければ、もはらあふこともえせで、あけばをはりの國へたちなんとすれば、男も女も人しれずちのなみだをながせど、えあはず、夜やう〳〵あけなむとするほどに、女がたよりいだすさかづきのさらに、歌をかきていだしたり、とりてみれば、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、とかきてすゑはなし、そのさかづきのうらに、ついまつのすみして、歌のすゑをかきつぐ、

またあふさかの關はこえなん、とてあくればをはりのくにへこえにけり、齋宮は、水の尾の御

しも、御ていとよし〳〵しくなまめきたるに、あはれなるけをすこしそへたまへらましかばと
おぼす、

〔十訓抄十二〕天治二年八月十日あまりの比、伏見の齋宮〇輔仁親王女守子野宮におはしましけるに、群行も近く成ぬとて、中御門右大臣〇藤原宗忠花園內大臣〇源有仁など、さるべき人々俄に參會れたりける、夜更る程に、月のくまなきを見捨がたくて、各出もやられぬ折ふし、女房箏を爪音やさしくかき合て、みもすそ川の御出立も無下に近く成ぬ、伊勢まで誰か思ひおこすべき、うち亂たる御遊は、こよひこそと云出たれば、まことにしかるべき事とて、右大臣催馬樂をうたひ、內大臣琵琶引て、みすの內の箏のねにしらべかはしたるさま、いといひしらず、樂共數をつくしけるほどに、內大臣かたき物いみなれば、不明さきにとて出られけるに、ながへをさきにすと詠じて立れけるか、かへるもとまるも、互に名殘惜かりけり、

〔大和物語上〕伊勢の國に、前齋宮〇宇多皇女柔子のおはしましける時に、堤の中納言〇藤原兼輔勅使にてくだり給うて、

くれたけの世々のみやこときくからに君はちとせのうたがひもなし、御かへしはきかず、彼齋宮のおはします所は、竹のみやことなんいひける、

是もおなじ中納言〇藤原兼輔齋宮のみこ〇醍醐皇女雅子を年比よばひたてまつり給て、けふあすあひなんとしけるほどに、伊勢の齋宮の御うらにあひ給ひにけり、いふかひなく口をしく、をとこ思ひ給ひけり、さてよみて奉りたまひける、

伊勢のうみちひろの濱にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな、となんありける、

〔伊勢物語下〕昔男有けり、その男、伊勢の國にかりのつかひにいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人のおや、つねの使よりは、この人よくいたはれといひやりければ、おやのいふ事なりければ、

略○中十六日かつら川にて御はらへし給ふ、つねの儀式にまさりてちやうぶそうしなど、さらぬかんだちめも、やむごとなくおぼえあるをえらせ給へり、院の御こゝろよせもあればなるべし、出給ふほど、大將殿より、例のつきせぬことゞも聞え給へり、かけまくもかしこきおまへにとて、ゆふにつけて、なる神だにこそ、

やしまもるくにつみ神も心あらばあかぬわかれの中をことわれ、思ひ給ふるにあかぬこゝち侍かなとあり、いとさわがしきほどなれど、御かへりあり、宮の御おば女別當してかゝせたまへり、

くにつかみそらにことわる中ならばなほざりごとをまづやたゞさん略○中心にくゝよしある御けはひなれば、ものみ車おほかる日なり、さるの時にうちにまゐり給、みやす所御こしにのり給へるにつけても、ちゝおとゞのかぎりなきすぢにおぼし心ざして、いつきたてまつり給ひし有さまかはりて、すゑの世にうちをみ給にも、物のみつきせず、略○中齋宮は十四にぞ成給ける、いとゞうつくしうおはするさまを、うるはしうしたて奉りたまへるぞ、いとゆゝしきまで見え給を、みかど御心うごきて、別の御くしたてまつり給ふ、いとあはれにてしほたれさせ給ひぬ、いで給をまちたてまつるとて、八省にたてつゞけたるいだしぐるまどもの袖くち色あひも、めなれぬさまに、心にくきけしきなれば、殿上人ども、わたくしのわかれをしむおほかり、くらういで給て、二條よりとうゐのおほぢををれ給ほど、二條院のまへなれば、大將の君、いとあはれにおぼされて、さか木にさして、

ふりすてゝけふはゆくともすゞか川やそせのなみに袖はぬれじや、ときこえ給へれど、いとくらうものさわがしきほどなれば、またの日、せきのあなたよりぞ御かへしある、

すゞか河八十瀬のなみにぬれ〳〵ずいせまでたれか思ひおこせん、ことそぎてかき給へる

宜等成亂行セリ者、爲被作事糺問依寮解所被差下、早催其禰宜等、宮司共參向可申件沙汰也者、○中略卽宣命狀ニ、依件亂行、齋内親王乃無止恒例神態モヲ不奉仕給退還之由、聞食驚天今新申給也、

〔詔刀師沙汰文〕欽明天皇卽位元年庚申以神主小事娘宮子、爲齋内親王代。。。。。。齋奉、其御世三十二年之間、天皇平安、人民豐樂也云々、是又當氏之美談、兼行之蹤跡也、

○按ズルニ、齋宮記、二所大神宮例文、亦之ヲ載セテ、宮子内親王ト稱シテ、齋王ノ第八世ト爲ス、其妄誕ナルコト皇大神宮儀式解ニ詳ナリ、豐受大神宮禰宜補任次第ニハ、以小事女宮子内親王之御杖代立奉支トアリ、此文ニ據レバ宮子ヲ以テ齋王ノ御杖代ト爲シタルナラン、

〔類聚符宣抄〕六伊勢齋宮記文。。。。。。三卷、仁壽貞觀元慶并三箇年

右右大臣宣、作記文、附下辨官令寫取者、

仁和二年六月七日　大外記菅原宗岳奉

〔源氏物語賢木十〕齋宮の御くだりちかうなり行まゝに、みやす所○六條もの心ぼそくおもほす、○中略おやそひてくだり給れいもことになけれど、いとみはなちがたき御ありさまなるにことづけて、うき世をゆきはなれなんとおぼすに、大將の君○源氏さすがにいまはと、かけはなれ給なんもくちをしうおぼされて、○中略つらきものにおもひはて給なんもいとをしく、人ぎゝなさけなくやとおぼしおこして、のゝ宮にまうで給、○中略くろぎのとりゐどもは、さすがにかう〴〵しくみえわたされて、わづらはしきけしきなるに、かんづかさのものども、こゝかしこにうちしはぶきて、おのがどちものいひたるけはひなども、ほかにはさまかはりてみゆ、ひたきやかすかにひかりて、ひとげすくなく、しめ〴〵として、こゝにものおもはしき人の、月日をへだて給へらん程をおぼしやるに、いといみじう哀に心ぐるし、○中略旅の御さうぞくよりはじめ人々のまで、なにくれの御でうどなど、いかめしうめづらしきさまにて、とぶらひ聞え給へど、なにともおぼされず、

所持參也云々、只今可參內、早可參儲之由仰了、相續余雖著直衣、相伴內府參內、定長持來蒔繪小手筥一合、余於鬼門披之、合目錄持參御前、引見群行之間事、當時事許書取了、如本調入、召定長返給、定長云、去夜院御所竊盜罷入、此御記雖開蓋、所取納物不可說事也云々、仍更又披令見、定長返入之後余付封、定長歸參了、件御記草子廿帖書寫本也、目錄可同被相副範囊等也、余所不審也、仰中臣之詞、御記假名不被付之旨、不能散蒙、然而他不審等多以決了、爲悅不少、其由奏聞了、卽余退出、

〔百練抄十二順德〕建保四年七月十七日、被行軒廊御卜、是齋宮野宮造營上棟之日、棟木落事、

〔大神宮諸雜事記一〕貞觀六年九月十五日、依例齋內親王〈○文德皇女恬子〉御行於離宮院之程、齋宮東字錯田橋桁損天、女官一人乘馬共落入了、仍過次第祭日之後、以同廿六日、召取宮司峯雄、於齋宮寮勘之、齋王參宮之時、路次道椅修造、偏宮司勤也、而無其勤間、女官一人落被疵還留了者、宮司懈怠不可勝計者、爰宮司峯雄無遁方進怠狀、隨則寮解上奏之、於官庭被召問、宮司職務停止宣旨了、

〔大神宮諸雜事記二〕永承四年六月御祭、齋內親王〈○敦明親王女嘉子〉依例爲御參宮、被著於離宮院天、大祓之後、齋宮御汗殿下坐之、仍廿三日可被參宮之由一定畢、而間寮頭雅康朝臣被問於祭主永輔朝臣天云、以去十五日午時許大神宮神主等進於寮牒狀云、至于寮頭女別當不可被參宮也者、具不記、如件牒狀者、齋王御參宮之間、非常事可出來歟如何者、祭主云、更不可被信用、早可被參宮也、仍以廿三日齋宮參入乃間、宮中二鳥居許、內人物忌等數十人引率祝部等天云、女別當幷彼家司乃平三致重等不可參入於宮中也者、〈○中略〉以丑時許大神宮參宮給天、齋王齋王殿參入給天、女房女官ハ後天參入之間、荒祭神拜所ニ數多內人物忌等出來天、每手炬火天、女別當幷平三致重等號尋求之由、無止女房女官乃中ニ入亂天尋求、因之內侍朝臣幷諸女房達退歸已了、隨卽齋內親王モ御出給、寮頭次第官人諸司共退返亦了、九月十三日、依宣旨天、左少辨近江守藤原朝臣泰憲、右大史中原朝臣實定、幷史生官掌使部等齋宮ニ到著天、以使部大司美任許遣內案之狀云、以去六月天、齋王參宮之間、神

事。

〔增鏡 九北野の雪〕ことし〇文永四年五月、雨つねよりもはれまなくて、伊勢の宮河も岸をひたして、齋宮〇後嵯峨皇女愷子の御まゐりも御船なり、祭主も別の舟にて御ともつかうまつる、みちすがら歌うたひ、絲竹のしらべなどして、おもしろくあそびくらす、御下のゝち四とせになりぬ、ふるき例にまかせて、准后の宣旨まゐる、御使に中院少將爲定朝臣くだりて、事のよし申、殿上にめして、裳唐衣ろくたまふ、舞踏してのちみやこの物がたりなど、さるべきおとなだつ人々にすこし聞えかはす、えんなる心地して、たゞの宮ばらならば、はかなしごとなども聞えぬべけれど、かう〳〵しくけどほきさまなれば、すくよかにてまかでぬ、

〔日本紀略 入花山〕寬和元年九月廿六日丁酉、伊勢齋王、〇章明親王女濟子自左兵衞府禊鴨河入野宮、野宮雖未造畢依不可過今月所令入也、又禊所前野有火、遣人見之、葬送火也、諸人怪之、　廿八日己亥、夜盜入野宮盜取侍女衣裳、未有如此之事、

〔百練抄 一四 後〕永延二年四月廿三日、齋王〇爲平親王女恭子御禊、攝政〇藤原兼家被向左府〇源雅信桟敷、院〇冷泉三四兩親王〇爲尊敦道同渡御、其儲不可數言、各有贈物、以攝政所帶之蒔繪野劍被送左府、

〔玉海〕文治三年五月廿一日壬戌、親經參上、〇中略申云、野宮地恠異事、問例於官之處、群行以後者、毎度有御軒廊御卜、於諸司野宮等恠異者、一向本官之沙汰也云々者、仰云、此事不審、雖所司野宮、於大事者爭無軒廊御卜哉、雖齋宮於小事者不可必然歟、但此事非大事者、強不可有軒廊御卜歟、　九月十四日壬子、參院、〇中略　又仰中臣之詞、有不審事、同雖尋申、不令逢群行給之間、被仰不分明之由、〇中略延久後三條院御記、天治故殿雖注預給、猶有疑事等、雖有一見之志不能申出里亭、仍內裏歟、院御所歟之間被取出哉之由、乍恐申之、仰云、召出可進、內裏參上可一見云々、恐悅之思甚切、　十五日癸丑、定長告送云、後三條院御記、明日可持參禁裏云々、巳刻可參內之由答了、　十六日甲寅、定長來云、御記

〔神宮雜例集二〕年中行事

正月三日宮司二宮禰宜參齋宮事

宮司禰宜束帶、權禰宜衣冠、各供御物、菓子小鳥參南庭、次拜賀、次饗祿、次拜、二度次退出、

〔類聚符宣抄一〕右大臣宣、齋女王參入伊勢者、是國家大事也、然則舊例之外、去留之狀、外記等所擧申、太遺漏無申、理不容然、宜自今以後、如此之類、存意擧聞、莫致闕怠者、自餘諸大事又准此可申

天長七年九月四日　少外記山田造古嗣奉

〔西宮記臨時五〕齋宮三度禊

康保二年三月六日、使右兵衞佐惟賢送給齋內親王○村上皇女樂子初笄料裝束二具、及唐匣調度屛風、午刻召惟賢於御前、仰云々、了以御衣令給惟賢、下殿拜舞退出、十六日還來、上齋宮報書也云々、

〔左經記〕萬壽二年十一月廿日戊戌、伊勢齋宮○具平親王女嫥子御裝束、白織物唐衣一領、五白綾裳一腰、在紅三重袴一具、綾裳入帷等也、余有仰詞也、令奉大內、是來五日著裳給云々、今年廿一仍差藏人右兵衞佐源資通爲勅使遣件御裝束、抑余仰作物所令作衣筥一合、入此御裝束、又令作銀小筥一合、入合燒物、アハセタキモノ副御裝束云々、使明日可進發云々、

〔扶桑略記二十五裏書〕承平三年十一月五日、被定伊勢奉幣事、依齋王○醍醐皇女雅子御病也、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十三年九月廿七日丙寅、詔遣中納言藤原定方等於伊勢齋宮、勞問內親王○宇多皇女柔子之病惱、

〔榮花物語三十六根合〕十四日○寬德二年正月に、齋宮准后のせんじくだり、つかさかうぶり給はらせ給、

○按ズルニ、此時ノ齋宮ハ、後朱雀天皇ノ皇女良子內親王ニシテ、同月十六日後朱雀天皇ノ讓位ニ由リテ解職セラル、

〔類聚大補任土御門〕齋宮肅子內親王後鳥羽皇女、元久元年六月廿三日、令蒙齋宮准后宣旨給、同七月十八日、勅使左少將藤公雅朝臣下向本寮、在祿物云々、

〔百練抄十二順德〕建保五年九月十四日、有齋宮群行、熙子內親王○後鳥羽皇女六年二月十四日、齋內親王有准后、

雜載

る杜のみちによこたはれるを、人だにもかくとしらせずは、たゞふし木とのみぞ見てすぎなまし、齋宮と申はたえてひさしき跡なりしを、近頃再興あるべしとて、花やかなる風情などありしかども、芳野山のさくら、常なき風にさそはれ、嵯峨野の原の女郎花、あだなる露にしほれしかば、野宮の名のみ殘りて、齋宮の御下りにもおよばず、神慮のうけおぼしめさぬ致なりけりとは、此時こそ思ひ合せ侍しか、これは近き程の事なり、

〔安齋隨筆前編八〕齋宮停廢

伊勢大神宮參詣記云、○中略芳野山の櫻は、御醍醐天皇の御時を云、嵯峨野の原の女郎花は、後宇多院の御時を云、後宇多の時弉子內親王齋宮に下りたまふの後は、齋宮絶たり、其後に後醍醐の御時、太平記の兵亂有て、齋宮永く絶えたり、

〔伊勢紀行〕齋宮と申あたり過侍るに、昔覺ゆることも侍りし中にも、天曆の御時かとよ、齋宮下り給ひけるに、朝忠中納言長奉送使に侍りて、萬代のはじめと今日を祈り置て今行末は神ぞしるらんと詠せし事、おもひ出られ侍りて、

萬代といのる心はけふそへんいつきの宮の跡をたづねて

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡元日諸宮禰宜內人等、各奉拜神宮、○中略三日早旦拜賀齋宮、

〔延喜式五齋宮〕凡元日齋內親王遙拜大神宮、訖開宮南門、頭已下於門外拜賀齋王、其祿法、頭絹四疋、綿廿屯、助絹二疋、綿八屯、允絹二疋、主神中臣忌部舍人藏部膳部門部長各絹一疋、布二段、寮屬舍人判官諸司長各絹一疋、布一段、宮主諸司主典各絹一疋、番上各布一段、命婦准頭、外位者、絹三疋、綿十屯、乳母及上等女孺各絹二疋、中等女孺絹一疋、下等女孺布一段、糸一絇、自餘雜色庸布各一段、三日大神宮司等拜賀、給御衣一領、禰宜被一條、郡司布一段、內舍人各絲一絇、但七日頭給被一條、十六日青摺袍一領、袴一腰、

廢絶

〔古事記傳四十四〕書紀に、伊勢齋王の見えたるは、倭比賣命の次に、景行天皇の御子五百野皇女、次に雄略天皇の御子稚足姫皇女、次に此佐々宜皇女（〇繼體皇女）なり、今思ふに、景行天皇の二十年に、五百野皇女立ち坐してより、雄略天皇の御世までは、三百七十年に及べれば、必ず其間にもかはり坐る齋王坐べし、大神宮例文と云書に、齋王の世々を記せるに、五百野皇女の次に、伊和志眞内親王と云ありて、仲哀天皇皇女と記せれども、其は誤なるべし、仲哀天皇には皇女は坐（マヽ）坐さず、此記に、應神天皇の御子根鳥の王の御子に、伊和島王あり、其にや、然れども、其を入れても、なほ年數に足らず、又稚足姫皇女は、雄略天皇の三年に薨坐しかば、其より此繼體天皇の御代になるまでの齋王も坐べきを、此彼漏て其由の傳はらざるがあるなるべし、又上代のほどは、後の代の如くにはあらで、齋王の坐まさぬ間々もありしか、かにかくに、今詳には知がたし、

〇按ズルニ一代要記ニ九代トアルハ、成務、仲哀、神功、應神、仁德、履中、反正、允恭、安康ノ九朝ヲ云フカ、而シテ清寧、顯宗、仁賢、武烈ノ四朝、亦齋王ノ事所見ナシ、

〔一代要記舒明〕齋王（自此五代中絶）

〇按ズルニ、五代トハ、舒明、皇極、孝德、齊明、天智ノ五朝ヲ指スカ、

〔一代要記平城〕齋王（景行天皇時被始之、其後絶時々有之）

〔類聚大補任安德〕齋宮（不坐）

〔大神宮參詣記坂士佛〕康永元年十月十日あまりのころ、大神宮參詣のこゝろざしありて、伊勢のくに安濃津と申ところに著きて侍りし、〇中略櫛田川祓殿をもすぎて行ほどに、世中みだりがはしくなりしより、國のみなみはあらぬ處のやうにあれはてゝ、竹の林、杜の木がくれのにぎはひたるも、近づきみれば人屋もなし、〇中略いとゞかはれる世の有さまもかなしくて、齋宮にまゐりぬ、いにしへの築地のあとゝおぼえて、草木の高きところ〳〵あり、鳥居はたふれて、朽のこりた

中絶

下シ給ヒシナリ、

〔一代要記 後白河〕齋宮

亮子内親王 帝第一女、久壽三年四月十九日卜定、今日爲親王、保元三年自野宮退出、依御讓位也、

〔女院小傳〕殷富門院、亮子 後鳥羽准母、後白川第一女、〇中略 久壽三、四、十九、爲内親王、卽日爲伊勢齋宮、保元三、八、十一、退下、依天祚改也、未向伊勢、年十、

〔一代要記 六條〕齋宮

休子内親王 上皇(後白河)第二女、仁安元年十二月八日卜定、同二年六月廿八日入御諸司、九月廿一日入御野宮、同三年二月十九日自野宮退出、依御讓位也、

〔齋宮記〕功子内親王 高倉皇女、從野宮下坐、

〔皇帝紀抄 高倉〕功子内親王 帝第一皇女、母前少將公重朝臣女、治承元年十月廿八日卜定、同三年正月十一日退下、依母儀喪也、

〔類聚大補任 後嵯峨〕齋宮曦子内親王 寛元二年十二月十六日壬午卜定、御年廿一、土御門院女、御母大宮局父源中納言有雅女、寛元四年正月廿九日從野宮退下、天皇(後嵯峨)御讓位故也、諱宣花門院、是内親王也、〇又見女院小傳、

〔女院小傳〕達智門院 奨子 後宇多一女、〇中略 乾元元、十二、廿六、爲内親王、十七 德治元、十二、廿二、爲伊勢齋宮、廿二 同三、八、廿六、御退下、依後二條御事、

〔玉葉和歌集 十五雜〕延慶元年八月野宮より出給ふとて　　奨子内親王

鈴鹿川八十瀬の波はわけもせでわたらぬ袖のぬるゝころかな

〔女院小傳〕宣政門院 懽子 院后、後醍醐女、母後京極院、元應元、六、廿六、爲内親王、〇中略 元德二、十二、十九、卜定齋宮、〇中略 元弘元、月日、退下、自野宮退、年月日、密入上皇宮、

〔新葉和歌集 九神祇〕野宮より退下の後雪を見て　　祥子内親王 〇後醍醐皇女

忘れめや神のいがきの榊葉にゆふかけそへし雪のあけぼの

〔一代要記 成務〕齋王 自此九代中絶

余供奉陣、先是左衛門督源朝臣延光參射場、令余奏宣命草、（依可有行幸、上帶弓箭、取宮時寄立弓於柱矣、）

○按ズルニ、隆子女王ハ圓融天皇ノ安和二年十一月卜定、同天皇ノ天祿二年九月赴任シ給ヘリ、

〔帝王編年記　二十二高倉〕承安二年六月（○六月恐五月誤）三日、齋王（惇子內親王、後白河院御女、）於本宮薨、無先例事歟、（○又見一代要記）

〔玉海〕承安二年五月五日癸酉、憲基又來也、其次語云、昨日依召參院、先是主稅頭知康參入、依仰下向伊勢國、是當齋宮煩痢病及獲麟、仍爲彼療治所下遣也、隨御有樣可給哉否、不日可言上左右云々、憲基依遲參不被遣、以先參可遣之由有御定、依事急速也、驛家事併目上有御沙汰、爲給守護、檢非違使一人被指副云々、予聞此事、大略齋宮可替給之期至歟、尤可哀事也、齋院不御坐已及二年了、今又如此、神捨國、豈有憑哉、　七日乙亥、或人云、齋宮隱給了云々、醫師不能參著云々、去三日事云々、可恐可恐、　十日戊寅、此日齋宮薨奏也、（上卿花山中納言兼雅）後家事被付本寮之由被宣下、（上卿同）自今日廢朝三箇日也、又有御錫紵事、

〔百練抄　八高倉〕承安二年五月三日、伊勢齋宮惇子內親王薨于本寮、（十日寮頭忠重奏聞）依御惱危急、件日先退下寮頭館、子刻薨、　六月五日、發遣公卿勅使於伊勢大神宮、依齋宮薨也、內大臣（兼右大將）源朝臣（○雅通）奉仕之、無上官御前、先例多有之、召具一員、

自初齋院及野宮退下

〔三代實錄　四十五光孝〕元慶八年二月十三日甲辰、先是伊勢齋揭子內親王（○文德皇女）在野宮、是日還本家、

○按ズルニ、揭子內親王ハ、元慶六年四月齋王トナリ給ヒシガ、陽成天皇ノ遜位ニ由リ、野宮ヨリ退下シ給ヒシナリ、

〔日本紀略　六圓融〕安和二年十一月四日丁未、伊勢齋宮輔子內親王、（○村上皇女）自左近衛府退出修理職、

○按ズルニ、輔子內親王ハ、冷泉天皇ノ安和元年七月卜定、同二年八月天皇ノ讓位ニ由リテ退

過失解職

在職物故

弘貞、右京大夫從四位下藤原朝臣文山、申伊勢齋內親王歸京之狀石作山陵、〇淳和后高志氏子母、　四月癸巳、御大極殿、奉幣帛伊勢大神宮、勅使參議左大辨正四位下直世王、中臣散位從五位下大中臣朝臣笠作、制曰、天皇我大命留坐、度會乃五十鈴之川上留坐、皇大神乃大前留申給久、今侍留齋內親王波、本病屢發氏、奉齋留不堪留依氏、令退出狀乎、參議正四位下直世王、中臣散位從五位下大中臣朝臣笠作乎、差使氏、禮代之大幣帛乎、忌部弱肩留太手次取挂、持齋波理捧令持氏、進給布御詔乎申給久止申、辭別氏申給久、齋內親王波、令卜食定氏、卜留合武內親王乎、追可進狀乎申給久止申、

〔台記〕久安六年三月廿九日丙午、頭辨朝隆朝臣語曰、伊勢齋內親王、〇鳥羽皇女妍子依病避寮、天長有此例、其後無例云々、又寮頭師敎朝臣送書曰、避寮二許町、其疾頗愈、觸穢刀自入寮內、人不知之廿許日、齋王初疾云々、

〔日本書紀十九欽明〕二年三月、納五妃、〇中略蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛、生七男六女、〇中略其二曰磐隈皇女、更名夢皇女初侍祀於伊勢大神、後坐奸皇子茨城解、

〔日本書紀二十敏達〕七年三月壬申、以菟道皇女侍伊勢祠、卽姦池邊皇子、事顯而解、

〔十訓抄五〕寬和〇花山齋宮〇章明親王女濟子野宮におはしけるに、工役瀧口平致光とかやいひける者に名立給て、群行もなくてすたれ給けり、それよりぞ野宮の工役は留りにける、

〔日本紀略八花山〕寬和二年六月十九日丙辰、伊勢齋王濟子、〇章明親王女於野宮、與瀧口武者平致光密通之由風聞、仍公家召神祇官、令仰祭文、近四日、遠七日、祈申此事之實否、

〔日本紀略六醍醐〕天延二年閏十月十七日辛酉、伊勢齋王隆子女王、〇章明親王女卒于齋宮、依皰瘡之病也、廿七日辛未、卿相參仗座、被下可葬送齋王宣旨、付本寮、　十一月廿一日乙未、天皇行幸八省院、太政大臣以下扈從、今日軒廊御卜、依齋王卒去也、

〔天延二年記〕天延二年十一月廿一日、未剋有行幸事、依伊勢齋王卒去、奉幣帛於大神宮也、其儀如常、

父母喪解職

○按ズルニ、本書齋王解職ノ後、猶ホ三年伊勢ニ滯留ノ由記セルハ誤ナリ、帝王編年記、類聚大補任等ニ、文永九年八月十三日齋王歸京ノ文アリ、當ニ從フベシ、

又按ズルニ、讓位及ビ崩御ニ由リテ職ヲ解クハ、歷朝ノ恆例ナレバ、多ク省略ニ從ヘリ、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月甲辰、是日伊勢齋王（○縣女王）爲遭二親喪、自齋宮退出、

〔齋宮部類一〕縣女王世系未考　按續日本紀、此年三月丁卯、左大舍人頭從四位下高丘王卒、疑爲女王之父歟、然未見諸王譜、無可他證、暫記之備考、

〔日本紀略二朱雀〕承平六年三月七日丙申、奉使於伊勢大神宮、告齋內親王雅子（○醍醐皇女）退出之由、是則遭母喪也、　五月一日戊子、遣正親正有忠王於伊勢、迎齋內親王、

天慶八年正月十八日乙卯、中務卿重明親王室家藤原氏卒、伊勢齋王（○徽子）母也、仍齋王退出、

〔本朝世紀〕天慶八年七月十六日庚戌、今日辨官叢上宣、召神祇官仰云、伊勢齋王去正月十九日、遭親母喪、已了、然則令退出之由、依式差中臣一人、可申大神宮、其差文可奉者、仍奉其差文、

〔日本紀略二朱雀〕天慶八年八月十三日丙子、遣使於伊勢大神宮、告齋王徽子依母喪退出之由、

〔日本紀略十一一條〕寬弘七年十一月廿七日壬寅、齋宮歸京官符請印、恭子女王、遭父爲平親王喪也、　八年三月廿七日庚子、遣使伊勢大神宮、告齋王有故歸京之由、使神祇大副大中臣千枝、　五月廿五日戊戌、伊勢齋宮歸京、

疾病解職

〔一代要記白河〕齋宮

淳子女王、承保四年退之、依父（敦賢親王）喪也、

〔類聚國史四神祇〕天長四年二月丁巳、制曰、天皇恐々毛奏賜閉止白久、伊勢乃齋內親王（○淳和皇女氏子）本病屢發氏、奉齋之事不堪止所奏留依氏、京都爾還參上支倍事乎、中納言從三位清原眞人夏野、大舍人頭從四位上藤原朝臣淨本等乎使差氏、恐恐毛奏賜久止白、　庚申、遣參議式部大輔從四位上南淵朝臣

在任經久

宮、天福元、二、五、退下、

〔日本書紀垂仁六〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜入姫命、託于倭姫命、

〔日本書紀景行七〕二十年二月甲申、遣五百野皇女、令祭天照大神、

〔倭姫命世記〕大足彥忍代別天皇〇景行二十年庚寅歲、倭姫命年既老耆、不能仕奉、吾足止宜天、齋內親王仁可仕奉物部八十氏人人定給天、十二司寮官等遣波、奉移五百野皇女久須姫命、

〇按ズルニ、此書ニ、倭姫命ノ豐鋤入姫命ニ代リシヲ、崇神天皇五十八年ノ事トス、サレド日本書紀ニ合ハザレバ採ラズ、

〔日本書紀用明二十一〕十四年〇敏達九月壬申、詔曰、云々、以酢香手姫皇女拜伊勢神宮、奉日神祀、是皇女、自此天皇時、逮于炊屋姫天皇(推古)之世、奉日神祀、自退葛城而薨、見炊屋姫天皇紀、或本云、三十七年間、奉日神祀、自退而薨、

由讓位及崩御解職

〔大神宮諸雜事記二〕寬德二年正月十五日、齋內親王〇後朱雀皇女良子奉授一品位給已了、以同十六日酉時、天皇〇後朱雀御位下御坐、即日號院、同十九日午時、齋內親王御匣殿下坐、是則本院御、以十八日亥時、依參著也、件日天皇崩御早了、同年四月廿八日、齋內親王歸京了、〇又見十三代要記、一代要記、

〔類聚大補任順德〕齋宮熙子內親王承久三年四月廿日讓位(順德)同廿二日御力到來、依御計過後、同廿七日下坐頓宮館、依天下兵亂、同年六月十八日宇治里行尋入道家御渡、同七月廿五日又頓宮館還、八月廿一日歸京、恭代奥以力者法師仕之、頭以下淨衣、於勢多橋東爪有御祓、二條東洞院御著、定高卿亭也、

〔類聚大補任龜山〕愷子內親王(後嵯峨皇女)依太上法皇(後嵯峨)崩去、十八日(文永九年二月)下坐御匣殿、八月七日歸京之由勅使中臣神祇權少副隆長參二宮、十三日立伊勢齋宮向京、奉行辨兼頼、

〔增鏡草枕十一〕まことや、文永のはじめつかたくだり給ひし齋宮〇愷子は、後嵯峨院の更衣ばらの宮ぞかし、院かくれさせ賜ひてのち、御服にており賜へれど、なほ御いとまゆかざりければ、三とせまで伊勢におはしましゝが、この秋のすゑつかた御のぼりにて、仁和寺に、衣笠といふところにすみたまふ、

幼年拜任

〔帝王編年記〕十九白河 齋王淳子女王 式部卿敦賢親王女、延久五年二月十六日卜定、

〔皇胤紹運錄〕守子女王 保安六、九、九、卜定、號伏見齋宮、○輔仁親王女

〔三代實錄〕三十陽成 元慶元年二月十七日己未、卜定伊勢賀茂齋內親王、伊勢齋識子內親王、賀茂齋敦子內親王並卜食、

〔三代實錄〕二十八清和 貞觀十八年三月十三日辛卯、皇女識子爲內親王、年三歲、

〔日本紀略〕三村上 天曆元年二月廿六日壬午、以悅子女王○重明親王女定伊勢齋王、年六、

〔日本紀略〕九一條 寬和二年八月八日甲辰、今日卜定伊勢齋王、式部卿爲平親王○村上皇子女恭子女王年三、卜食、○又見齋宮記、二所大神宮例文、按、歷中抄爲三年、恐誤、

〔女院小傳〕郁芳門院媞子○中略白川第一女、○中略承保三、八、十六、爲內親王、年一承曆二、三、十六、准三宮、三同八、二、爲伊勢齋宮、

〔顯廣王記〕安元三年○治承元年十月廿八日甲午、齋宮卜定、今上○高倉一女王、二歲、○母公重朝臣女、○功子內親王

〔玉海〕文治元年十一月十五日甲午、此日有齋宮卜定事、○高倉院女王、生年六歲、○潔子內親王

〔類聚大補任〕後鳥羽 齋宮潔子內親王 御年八、(一代要記、帝王編年記作七歲、中略、)文治三年九月十八日發遣、同廿三日御著、

長年拜任

〔百練抄〕十四四條 嘉禎三年十一月廿四日辛未、伊勢齋宮卜定、後堀河院皇女、御年七歲、御名昱子、上卿內大臣、其儀如常、

〔日本紀略〕六圓融 天延三年二月廿七日庚午、卜定伊勢齋宮、規子內親王○村上皇女卜食、

○按ズルニ、規子內親王ハ、本書寬和二年五月十五日薨、年卅八、トアル文ニ據レバ、此時二十七歲ナリ、

〔女院小傳〕達智門院奬子後宇多一女、○中略乾元元、十二、廿六、爲內親王、十七德治元、十二、廿二、爲伊勢齋宮、廿二同三、八、廿六、御退下、依後二條御事、

〔女院小傳〕式乾門院利子○中略後高倉第一女、母北白川院、嘉祿二、十一、廿六、爲內親王、廿八同日伊勢齋

〔一代要記孝謙〕齋宮
山於女王（天平寶字二年八月祭之）
○按ズルニ、孝謙天皇ハ、是月ノ朔ヲ以テ淳仁天皇ニ讓位アリ、今之ヲ孝謙天皇ニ係クルハ誤ナリ、卽チ續日本紀ニ、天平寶字二年八月戊午、遣攝津大夫從三位池田王、告齋王事于伊勢大神宮ト云ヒ、五年八月辛巳晦、大祓、以齋內親王將向伊勢也ト云ヘルハ、此女王ノ御事ナルベシ、
〔一代要記光仁〕齋宮
淨庭女王（寶龜三年四月十九日祭之）
○按ズルニ、淨庭女王ハ光仁天皇ノ皇姪、神王ノ女ナルコト、續日本紀延曆十年四月ノ條ニ見エタリ、齋宮記、二所大神宮例文ニ、光仁天皇ノ皇女御還內親王トアルハ誤ナルベシ、史ニ此內親王ナシ、然レドモ、寶龜三年十一月ニハ酒人內親王ガト定セラレ、五年ニ伊勢ニ向ヒ給ヘバ、此ニ寶龜三年トアルハ誤ニテ、此書ニ、此女王ヲ酒人內親王ノ後ニ列ネタレバ、五年ヨリ後ノ事ナルベシ、
〔類聚國史四神祇〕天長五年二月己亥、宜子（○宜子、大日本史作宜子）女王（○桓武孫仲野親王女）卜定齋王、（○廉中抄、齋宮記、二所大神宮例文、並爲六年、蓋誤、）
〔一代要記宇多〕齋宮
元子女王（仁明孫、本康親王女、仁和五年寬平元年卜定、○又見廉中抄）
〔日本紀略朱雀二〕承平六年九月十二日戊戌、卜定伊勢齋宮、彈正尹重明親王女徽子女王卜食、（八年）右大臣（○藤原仲平）向八省發遣之、（○又見一代要記、廉中抄、）
〔日本紀略圓融六〕安和二年十一月十六日己未、隆子女王卜定伊勢齋王、（彈正尹三品章明親王之一女也）
〔十三代要略後冷泉二〕永承六年十月七日、卜定伊勢齋王、（○式部卿敦平親王女敬子女王）

食、

〔日本紀略 二朱雀〕承平元年十二月廿五日戊寅、天皇始出御南殿、臨視萬機、卜定伊勢賀茂齋王等、先帝〇醍醐第十雅子內親王、伊勢卜食、二年正月三日乙酉、卜定伊勢齋宮雅子內親王、使大舍人頭具瞻王、

〔日本紀略 五冷泉〕安和元年七月一日壬午、有伊勢加茂等齋王卜定事、齋宮輔子內親王、先皇〇村上女也、

〔日本紀略 十二三條〕長和元年十二月四日丁卯、齋宮卜定、第一當子內親王卜食、坐于大和守藤原輔尹六角町尻宅、

〔百錬抄 十後鳥羽〕文治元年十一月十五日甲午、有齋宮卜定事、〇潔子內親王高倉皇女

〔百錬抄 十二順德〕建保三年三月十四日、被卜定伊勢齋宮、先被下親王宣旨、御名字熙子、〇後鳥羽皇女

〔百錬抄 十五後嵯峨〕寬元二年十二月十六日壬午、今日齋宮卜定也、當今御妹御名字曦子、〇土御門皇女式部大輔撰申之、以六條中將忠俊宅押小路京極、爲卜定所云々、先被下親王宣旨畢、

〔歷代皇紀 龜山〕齋宮愷子內親王、後嵯峨皇女、弘長三年〇類聚大補任、齋宮記、作二年、十二月四日卜定、

〔歷代皇紀 後二條〕齋宮奬子內親王、後宇多皇女、母談天門院、德治元年十二月廿二日卜定、

〔續日本紀 七元正〕養老元年四月乙亥、遣久勢女王、侍于伊勢大神宮、

○按ズルニ、二所大神宮例文、齋宮記等ニ、元正天皇ノ皇女トスレド、他ニ所見ナシ、

〔續日本紀 十七聖武〕天平十八年九月壬子、先是縣女王爲齋王、至是發入、

○按ズルニ、二所大神宮例文、齋宮記等ニ、聖武天皇ノ皇女トスレド、詳ナラズ、

〔一代要記 孝謙〕齋宮

小宅女王、天平勝寶元年九月六日、以從三位三原王女小宅女王、爲齋宮、

○按ズルニ、三原王ハ舍人親王ノ子ナリ、二所大神宮例文ニ、孝謙天皇ノ皇女ト爲スハ誤ナリ、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年十一月己丑、以酒人內親王〈○光仁皇女〉爲伊勢齋、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜五年九月己亥、齋內親王向于伊勢、

○按ズルニ、酒人內親王ハ、一代要記ニ據ルニ、淳仁天皇ノ天平寶字三年ニ齋王ト爲リ、光仁天皇ノ朝ニ再ビ齋王ト爲リ給ヒシガ如シ、然レドモ天平寶字二年八月以後ノ齋王ハ、山於女王ニシテ、酒人內親王ニアラザリシコトハ、下ニ錄セル山於女王ノ條ヲ視テ知ルベシ、齋宮記二所大神宮例文ニハ、山於女王ナクシテ、淳仁天皇ノ皇女安陪內親王アリテ、天平寶字五年ノト定トス、國史ニハ此內親王ナキノミナラズ、其御名ノ孝謙天皇ニ同ジキモ疑フベシ、要スルニ、當時齋王ノ次序ヲ列擧スレバ、小宅女王、山於女王、酒人內親王、淨庭女王、朝原內親王ナルベシ、

〔一代要記 桓武〕齋宮

朝原內親王〈○帝第二女、延曆元年八月一日祭之、又見齋宮記、二所大神宮例文、〉

〔類聚國史 四神祇〕大同元年十一月壬寅、以大原內親王〈○平城皇女〉爲伊勢齋內親王、　己酉、遣近衞權中將從四位下藤原朝臣眞夏等於伊勢大神宮、告以易齋內親王事也、

〔類聚國史 四神祇〕大同四年八月甲申、定仁子內親王〈○嵯峨皇女〉爲伊勢齋、〈○齋宮記、二所大神宮例文、爲有智內親王、恐誤、〉

〔一代要記 淳和〕齋宮

氏子內親王〈帝第一女、弘仁十四年祭之、○齋宮記、二所大神宮例文、爲天長元年事、〉

〔續日本後紀 一仁明〕天長十年三月癸丑、以久子內親王〈○仁明皇女〉爲伊勢齋宮、〈○齋宮記、二所大神宮例文、爲承和元年、恐誤、〉

〔文德實錄 二〕嘉祥三年七月甲申、皇女晏子內親王爲伊勢齋、〈○齋宮記、二所大神宮例文、爲仁壽元年、恐誤、〉

〔三代實錄 三清和〕貞觀元年十月五日丁亥、卜定恬子內親王〈○文德皇女〉爲伊勢齋、

〔三代實錄 四十一陽成〕元慶六年四月七日己卯、是日卜定伊勢齋內親王、無品揭子內親王〈○文德皇女〉卜食、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年三月廿二日癸未、喚神祇官於左仗頭、卜定齋王、其伊勢齋者、皇女繁子ト

〔續日本紀 文武二〕大寶元年二月己未、遣泉内親王〈○天智皇女〉侍於伊勢齋宮、

〔續日本紀 文武三〕慶雲三年八月庚子、遣三品田形内親王〈○天武皇女〉侍于伊勢大神宮、　十二月丙子、遣四品多紀内親王〈○天武皇女〉參于伊勢大神宮、

○按ズルニ、齋宮記等ノ諸書ニ、此時多紀内親王ヲ以テ齋王ト爲シタル由ニ記セレド、日本書紀天武天皇朱鳥元年四月丙申ノ條ニ、遣多紀皇女、山背姬王、石川夫人於伊勢神宮、五月戊申、多紀皇女等至自伊勢、トアル文法ニ據リテ考フルニ、此ハ參拜シ給ヒシノミニテ、齋王ト爲リ給ヒシニハアラザルガ如シ、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔一代要記 元明〕齋王

神祇記云、是時齋王不定、信〈○信恐任誤〉田方内親王、多貴内親王、各一度參入、次智努女王、次圓方女王、各一度參入云々、

○按ズルニ、田方内親王多貴内親王トアルハ、卽チ田形多紀ノ兩内親王ノ事ナルベシ、此内親王等ノ奉仕セラレシハ、文武天皇ノ御世ナルコト、上ニ引ケレ續日本紀ノ文ニテ明ナリ、圓方女王ハ、長屋王ノ女ナル由ハ、續日本紀寶龜五年ニ見エタリ、智努女王ハ、萬葉集ニ圓方女王ガ、其薨逝ヲ悼メル歌ヲ載セタレバ、恐ラクハ姉妹ナランカ、然レドモ其大神宮ニ奉侍シ給ヒシコトハ、此書ノ外ニ未ダ見ズ、

〔續日本紀 元正八〕養老五年九月乙卯、天皇御内安殿、遣使供幣帛於伊勢大神宮、幷以皇太子〈○聖武〉女井上王、爲齋内親王、

〔續日本紀 聖武十〕神龜四年九月壬申、遣井上内親王、侍於伊勢大神宮焉、

○按ズルニ、井上内親王ハ、元正天皇ノ養老五年女王ニシテ齋王トナリ、聖武天皇卽位ノ後ニ、内親王ニ進ミ、此ニ至リテ發遣セラレシナリ、

〔古事記垂仁中〕凡此天皇之御子等十六王、〇中略次倭比賣命者、拜祭伊勢大神宮也、

〔日本書紀景行七〕二十年二月甲申、遣五百野皇女、令祭天照大神、

〔二所大神宮例文〕伊勢齋內親王

伊和志眞內親王仲哀皇女

〇按ズルニ、此皇女ハ、古事記日本書紀並ニ所見ナシ、且ツ仲哀天皇ニハ皇女ナシ、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔日本書紀雄略十四〕元年三月、是月立三妃、元妃葛城圓大臣女曰韓媛、生白髮武廣國押稚日本根子天皇〇清寧與稚足姬皇女、更名栲幡姬皇女是皇女侍伊勢大神祠、

〔日本書紀繼體十七〕元年三月癸酉、納八妃、〇中略次息長眞手王女曰麻績娘子、生荳角皇女、荳角此云佐佐礙是侍伊勢大神祠、〇又見古事記

〔扶桑略記天武五〕二年四月十四日、以大來皇女、獻伊勢神宮、始爲齋王、依合戰願也、

〔大神宮諸雜事記一〕白鳳二年、壬申太政大臣大伴皇子企謀反、擬奉誤天皇、〇天武于時天皇之御內心仁、伊勢大神宮令祈申給、必合戰之間令勝、御前以皇子天、皇大神宮御杖代可令齋進之由御祈請、有感應、彼合戰之日、天皇勝御世利、仍御卽位二年癸酉九月十七日、天皇參詣於伊勢皇大神宮、天志令申御祈給倍利、或本云、神宮參著了者、又或本云、從飯高郡遙拜皇大神宮歸御之由具也、件記文兩端也、日本紀記也、

〔續日本紀文武一〕二年九月丁卯、遣當耆皇女、〇天武皇女侍于伊勢齋宮、

〇按ズルニ、大日本史ニ、當耆皇女ヲ日本書紀天武天皇二年ニ見エタル天武天皇ノ皇女ナル託基皇女ト同人ニシテ、卽チ多紀內親王ナリトス、當ニ考フベシ、多紀內親王ハ下ニ引ケリ、

又按ズルニ、一代要記ニハ、天武天皇ノ朱鳥元年ニ齋王ニ定リ、ソノ後、文武天皇ノ慶雲三年二月一日ニ、退出シ給ヒシ由見エタレド誤ナリ、

歸忌日伐日有先例之上、強不可忌歟、於重服日者、先例多雖存、猶可被忌避者、仍任人々申狀、九月九日可被行、十五日參宮事、此間可仰光親、

〔新續古今和歌集　九離別〕伊勢におはしましける時、をみなへしをうゑられたりけるに、京へ歸りのぼり給とて、

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　肅子內親王

うゑおきて花のみやこへかへりなば戀しかるべき女郞花かな

〔百練抄　十四四條〕天福元年正月廿二日丁卯、右少辨信盛、官掌爲継等下向勢州、爲率迎齋王（○後高倉院皇女利子）也、二月五日庚辰、齋王入洛、

〔類聚大補任　四條〕齋宮昱子內親王（仁治三年正月廿六日、下坐頭宿館、二月廿日歸京、退下之後、三箇月之內無歸京例也、）

齋王創置

〔日本書紀　五崇神〕六年、先是天照大神、倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神、託豐鍬入姬命、祭於倭笠縫邑、仍立磯堅城神籬、（○又見皇大神宮儀式帳、）

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、（○中略）建都橿原、經營帝宅、（○中略）天富命率諸齋部、捧持天璽鏡劍、奉安正殿、（○中略）至于磯城瑞垣朝、（○崇神）漸畏神威、同殿不安、故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏、更鑄鏡造劍、以爲護身御璽、是今踐祚之日所獻神璽鏡劍也、仍就於倭笠縫邑、殊立磯城神籬、奉遷天照大神及草薙劍、令皇女豐鍬入姬命奉齋焉、

皇女爲齋王

〔日本書紀　六垂仁〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜入姬命、託于倭姬命、爰倭姬命求鎭坐大神之處、而詣菟田筱幡、（筱此云佐佐、）更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神誨倭姬命曰、是神風伊勢國、則常世之浪、重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神敎、其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、（○又見皇大神宮儀式帳、古語拾遺、）

○按ズルニ、倭姬命世記ニハ、倭姬命ノ豐鍬入姬命ニ代リシヲ、崇神天皇五十八年ノ事トス、

〔古事記　中崇神〕此天皇之御子等并十二柱、（○中略）豐鉏比賣命、（拜祭伊勢大神之宮也）

逸志驛家（十九日未時、令立給、宮司依辨罷勤不勤事、驛家家頭爲國司之間、假屋御所許、門餘僅立、不供御膳、萬事不具云々、）河口驛家、如形御所假屋許也、

米四石を出云々、與折（廿日夜半）不作、山路嶮岨之間、不暇行歩、仍艱難云々、今夜不供御膳、伊賀驛家一

切不請、同在廳不相迎、經卅町宿、廿二日伊賀神部（無先例、聖與丁臣若之後、齋王御泣沸云々、召替御輿、部宿小屋、）二島居なまり（無供給）

（河御被二瀨了、）到木津召御船、

〔三長記〕建久九年正月七日乙巳、讓位事（○後鳥羽）已露顯、兩貫首已下聊議定齋宮（○高倉皇女潔子）歸京事、予可申沙汰之由被示之、於南殿謁大夫史、先可致守護之由賜御教書、可下知祭主之由示之、尤可然事也、今日重日也、諸事不能沙汰、　八日丙午、參殿下（○藤原基通）申齋宮歸京間事、尤内々者可仰遣之由有仰、次參内齋王殊可加守護之由、可下知祭主能隆朝臣之旨、仰遣大夫史隆職宿禰、以出納奉書仰守護武士光貞許、

建仁元年七月十五日癸亥、早旦參院、以辨内侍奏群行日事、豫九月九日有御點、　十六日甲子、參院、以辨掌侍奏條々、

右少辨光親申、九月十五日母遠忌、件日參齋宮啓歸京由、賜祿、可憚哉否事、

仰可申攝政、又可問人々、忌月猶可被憚歟、同可問人々、

十七日乙丑、參殿下、以佐清申同勅問趣於右相府（○藤原家實）御方、即又人々申狀之趣申殿下、被仰可奏由、次參院、以辨掌侍奏人々申狀、

左大臣（○藤原良經）令申給云、奉行辨忌月事、有忌日、無忌月、更不可憚、十五日啓歸京由之條私事也、上卿一人參給祿可宜、雖可參依忌日不參由、奉行辨披露可足歟、翌日有可行之神事者、可及此沙汰、於參宮許者勿論歟、日事於文治例者九日可宜、右大臣令申給云、先例不分明、嚴重神事也、輙難計申、春宮權大夫申云、忌日依別御定從神事之例存歟、忌月公卿勅使之例、外記勘申、尤足准據、於日時者、當時文治之例九日可宜、期日追、答不合期者、十七日甲子（歸忌日）廿三日庚午（伐日）之間可被用歟、

齋輦輿腰輿資具等、向伊勢大神宮、迎前齋内親王、令山城大和伊賀三國、充夫八十人擔夫輦輿等物、遞送前所、

〔貞信公記〕天慶八年三月十六日、在躬朝臣來云、齋院用度物在庫在口有一物、爲之如何者、答云、可令奏大内、好古朝臣來云、齋宮〇靈明親王女徽子入京用入途無一物、爲之如何、可奏事由之狀仰、

〔日本紀略〕五冷泉康保四年十一月七日辛卯、被定來十一日伊勢奉幣日時、是依齋内親王樂子〇村上皇女退出事也、　十一日乙未、被發遣齋王退出使、

〔小右記〕永觀三年〇寬和元年四月三日丁丑、齋王〇村上皇女規子今日入洛云々、　四日戊寅、修理大夫來談、右中辨資忠朝臣、從山科差志送黑牛一頭、迎齋王之勅使也、傳聞昨日齋王著河陽館云々、

〔中右記〕嘉承二年十二月十五日、前齋宮〇白河皇女善子歸京事、上卿新源中納言基綱卿、左中辨長忠朝臣勤之、無奉幣云々、

〔本朝世紀〕久安六年七月十二日丙戌、今日齋宮歸京行事右少辨藤資長下向、又中務丞源成景、同史生一人、王一人、資長王内舍人二人、卜部一人、大舍人四人、左右近看督長二人、官掌中原盛延等下向、　廿六日庚子、今日前齋宮姸子内親王難波禊了入洛日、一院〇鳥羽御車、及前駈料殿上人遣之、以小六條殿爲御所、

〔顯廣王記〕長寬三年〇永萬元年十二月十九日、酉時前齋宮〇後白河皇女好子立本寮、迎左少辨行隆、王氣廬也、亥剋余著逸志宿、　廿日午時立逸志驛家、　廿一日曉著伊世河口、午時出御、萬事不具之故也、廿一日戌時著伊賀山中、一宿了、無先例、迎御輿散々引破如薪、結合持參也、凡無先例事也、　廿二日戌時著伊賀河口、　廿三日著黑太、丈六堂云郎一宿、抑伊賀河口仁天、寮侍武者、所爲殺平大納言河婦宇乘住人致時了、已其身負手、御迎檢非違使廣綱子二人鬪亂、已突殺了、凡路次一切不諧、濫行端多、　廿五日儀著和泉木津、不作御所、仍奉令宿舴艋云々、凡今度歸京散々歟、後代如何、

右大史尾張國宿禰言鑒仰云、右中辨藤原朝臣在衡傳宣、大納言兼右近衛大將藤原朝臣保忠宣、奉勅檢非違使左衛門府生大原忠宗、右衛門府生若江善邦等、宜差巡檢伊勢齋內親王上道大和伊賀兩國道橋使者、

承平二年四月十八日　　右衛門權府生村主保範奉

〔類聚國史四神祇〕延暦十五年二月乙亥、齋內親王〇桓武皇女朝原欲歸京、造頓宮於大和國、　丁丑、遣使奉幣於伊勢大神宮、以齋內親王退也、　三月丙申、遣從五位上守左少辨兼左兵衛佐橘朝臣入居等、迎齋內親王、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月癸巳、令大和伊賀兩國造行宮、爲齋內親王〇桓武皇女布施歸京也、　四月戊申、是日遣右兵庫頭從五位下佐伯王、左衛士佐從五位下百濟王敎俊等、迎齋內親王於伊勢國、　己酉、遣使奉幣於伊勢大神宮、以齋內親王歸京也、

〔類聚國史四神祇〕大同四年六月甲申、令攝津國造頓宮、以伊勢齋內親王〇平城皇女大原歸京也、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月七日丙戌、下知大和伊賀伊勢等國、造行宮、以伊勢齋內親王〇清和皇女識子可出宮歸京也、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月十五日甲子、太政官下符山城攝津等國、偁、前伊勢齋內親王來二月二十二日首途、自大和道經山城河陽宮、赴攝津難波海解除、而後可入都、凡其供具依例准擬、　十九日戊辰、下符山城大和伊賀伊勢等國、偁、前伊勢齋內親王入京、陪從二百十九人、宜行宮飮食乘馬擔夫辨設供給、又下知河內攝津兩國、偁、齋內親王擬出神宮、從河陽宮取水路赴難波宮、依例三處祓除、毎處經一日、卽便取三嶋道、還向河陽宮、其陪從一百人、檢校幷奉迎等使六十二人、酒食夫馬等類、事事祇供、時屬諒闇、莫用魚鳥、　廿三日壬申、絹二百四匹、調布三百六端、賜齋宮寮、充命婦女孺等入京裝束料、　廿八日丁丑、是日遣散位從四位下恒基王、左少辨正五位下兼行大學頭巨勢朝臣文雄等、

中辨藤原朝臣

〔朝野群載四十〕太政官符　伊勢國司

應造儲壹志河口行宮事

右正三位行權中納言源朝臣基綱宣、奉勅伊勢齋王今應歸京、宜准舊例造儲行宮者、國宜承知依宜行之、其鋪設等依例准擬、但入京之期、須待後符之到奉行、

嘉承二年十二月四日　　右大史正六位上紀朝臣

從四位上行左中辨兼備中介藤原朝臣

五色薄絁各五尺下大藏　木綿大拾兩　麻大伍兩　調布伍段　鐵人形十枚　米壹斗下宮内　海藻拾斤下宮内　鮑堅魚各伍升　腊壹斗　鮨壹斗　坏拾口　瓶伍口　筥伍合下神祇官　酒壹斗下宮内

右伊勢齋王歸京路次所々御祓料、神祇官所請如件、

嘉承二年十二月四日　　左中辨藤原朝臣

權中納言源朝臣基綱宣、宜充之

左辨官下　山城國　大和　河内　攝津　伊賀　伊勢國各別紙

中取二荷　水甕麻笥二口　匏四口　盆三口　鍋四口　洗盤四口已上水部所請　杓二柄　洗盤二口　韓竈二口已上殿部所請

右伊勢齋王入京儲料如件、國宜承知預備、不得闕怠、官符追下、

嘉承二年十二月四日　　右大史紀朝臣

中辨藤原朝臣

〔朝野群載十一廷尉〕巡檢道橋

嘉承二年十一月廿八日

〔朝野群載 四 朝儀〕左辨官下　山城國

應裝辨川船事

右權中納言源朝臣基綱宣、奉勅伊勢齋王、擬自河陽宮取水路爲被除向難波、准先例齋王駕船幷陸從口厨船等、隨色裝辨者、國宜承知依宜行之、不得疎略、

嘉承二年十二月四日　右大史紀朝臣

中辨藤原朝臣

左辨官下　山城國

葛野瓮佰枚

折薦佰枚

右伊勢齋王、暫住河陽宮、鋪設料、依例所宛如件、國宜承知、以頓宮儲內、使早宛之、官符追下、

嘉承二年十二月四日　右大史紀朝臣

中辨藤原朝臣

左辨官下　伊勢國

應早速造儲伊勢齋王歸京輿事

輦輿壹基

腰輿壹基

右權中納言源朝臣基綱宣、奉勅齋王月日退宮歸京、宜仰彼國以白木令造儲件輿等、其裝束責具同以調備者、國宜承知依宜行之、期日在近、不得緩怠、

嘉承二年十二月四日　右大史紀朝臣

可辨備物

中取二前　水甕麻笥二口　匏四口　盆二口　堝二口　洗盤六口　杓二柄　韓竈二口

大和國

都祁道行宮　路橋　使々供給　擔夫八十人　辨備物（同山城國）

河内國

擔夫八十人　使々供給　辨備物（同山城國）

攝津國

難波御祓御所　次第雜舍饗饌　擔夫八十人　使々供給　辨備物（同山城國）

伊賀國

河口道行宮　堺屋　道橋　使々供給　擔夫八十人　可造備輿二基（白木腰輿　葱輿）　辨備物（同山城國）

伊勢國

壹志河口行宮　路橋　使々供給　辨備物（同山城國）

近江國

夫百人　馬百匹

齋宮寮

熟食　肥馬　陪從男女官

大神宮

路橋

左右衛門府

歸京駕輿丁各十六人

入京　本齋王者一月可經河陽然而近代密々入京也、
參著日、初出宮時、到伊賀堺令蒞務時、辨束帶、自餘衣冠、

〔日本諸手船入〕齋王歸京次第

釋話、齋王解任歸京次第、裝儀嚴重、先期勅使詣勢之齋宮奉宣可被歸京之勅於是趣裝上道考上文自發齋宮經九箇日抵山城河陽宮到十日入京是爲恒式又云、本齋王者、一月可經河陽然而近代密々入京云々、若然則知期九箇日到于河陽自其而往一月淹留彼宮而後入京其故何也、竊思、自爲御杖皇大神來歷幾年紀、昭事恪勤、其勞不貲、一旦期至、乃離神邑、忽々歸去、想應於王有不豫之心、由是十日緩程、一月留滯河陽者、天子蓋亦優之也、孔子遲々去魯、可併思矣、又每到路次水上修禊給爲、上古之遺風可欽尚、抵伊賀國境、舊輿給主神司、御服辛櫃見棄於谷者、蓋日祀具、不復用餘事、至敬之禮、亦當愼思、諸重檢朝野群載、第三遊女記云、自山城國與度津、浮巨川西行一日、謂之河陽、往反於山陽南海西海三道之者、莫不遵此路、江河南北村邑、處々分派、向河內國謂之江口、蓋典藥寮味原牧、掃部寮大庭庄也、到攝津國有神埼蟹島等地、比門連戸、人家無絕、倡女成群、棹扁舟着旅舶、以薦枕席、聲遏溪雲、韻飄水風、蓋天下第一之樂地也云々、據此中古繁華之地、上自帝王公主、下及雲客風人、莫不放浪徜徉乎此間、宜令齋王爲然遊豫也、

〔類聚符宣抄一〕左大臣宣、奉迎齋內親王使、定散位從五位下幸世王了、宜仰告辨官者、
　仁和三年九月十一日　　大外記菅原宗岳奉

〔朝野群載四朝儀〕伊勢齋王歸京國々所課
山城國
可造相樂頓宮　可裝辨川船　葛野筵百枚　折薦百枚　擔夫八十人　使々供給　米百十四石

賀堺以後國司調備　著阿保頓宮（供給）

四日　供給　分配夫馬（近江國駄幷夫各七十、疋給宣旨、）　給王辨國司以下祿　出御　名張横川禊（卜部給祿、御衣一襲）　甲可川禊（卜部給祿御衣）　就大和都介頓宮（供給）

五日　供給　給夫馬（近江馬自木津可歸由仰之）　國司給祿　出御　和爾川禊（卜部給祿御衣）　過大安寺邊幷奈良坂　至山城相樂頓宮　在木津川南（供給）

六日　饗饌　國司獻船（一艘）　給國司祿　御船（艤船於北岸、自岸至岸敷筵道、駕輿丁等供御船、）　船松明召於國司　著河内茨田眞手御宿所（江口上方）　齋王不下（供給）

七日　饗饌　給國司祿　解纜　向禊所（書例三日有三所禊、近代同日行之、）　三津濱（下方）禊（經住吉）　三津濱禊　安曇口禊　卜部每度給祿（各御衣）　更歸大江御厨儲所　給國司祿　三津寺諷誦（絹五十屯、導師十屯、）　供給（國司設之、齋王不下、）

八日　供給　國司給祿　解纜進發　著眞手御宿所（攝津國供給）　須河内奉仕而如此

九日　河内供給　王辨以下國司祿　解纜　至河陽宮（山城國供給）　國司請寮印　檢按使以下給祿　船進發

十日

看督長二人赴河陽、（向難波唐崎禊、有宣旨、）依凶事入京者、聞京告早退寮、用伊賀道、給頓宮官符事、（遣山城相樂頓宮、大和都岐、伊賀河口、伊勢河口、或壹志等行宮等、）給供具資供口給等官符於國々、給可勘申寮納雜物官符於寮國事、依寮并國々申給官符事、无定事、

大祓事、（使下向）遣中臣被申齋王退狀、（應歸京期遣）經兩三月、令按并奉迎辨史生官掌檢非違使二人下向事、

依伊賀申召近江國人夫馬百匹事、於伊賀國堺弃輿、寮官置笏、（改用小輿、伊賀作、）

向難波禊、（山城依宣旨進給、）攝津河內山城、依官符口給、住河陽一月、以官米百石充經廻、（離宮有故之時、作寮假屋、住或國府也、）

印納山城國、主神司印在神祇官、唐崎禊有宣旨、

〔江家次第十二神事〕齋王歸京次第

勅使參著（前一日給辨以下祿）

一日

分配夫馬（大宮司國司等充之）　給檢按使以下祿　出御（寮官諸司依次供奉）　多氣川御禊（主神司獻御麻）　下樋小川御禊　著壹志頓宮（供給國司寮官分配）

二日

供給　分配夫馬　給祿國司（或不給）　祭主申事由歸向　雜女女房自途頓宮相分京上　出御

著川口頓宮（伊勢供給）　賜辨以下祿（或不給）

三日

供給　夫馬等用昨　給國司祿　出御（召加寮國司令供）　到伊賀堺屋　神祇官奉仕堺祭（料物於京請取也）

供御浴（國司儲之）　預　行事辨召官掌、官掌召寮官等、一人立版引參、寮官參入、辨仰云、停釐務、寮官置笏於棚、（寮官等退、或猶相從、）　舊輿給主神司　御服辛櫃持參弃於谷云々　御衣給忌部（弃舊衣著給新衣）

王中務丞內舍人參入　新輿到來（齋王御也）　伊勢堺常御膳伊勢國司　獻物主膳司供之　伊

各一人、參齋宮檢按歸發、其齋王衣服輿輦之類、官便附使送之、皆埒上而脫易、衣服之類給忌部、輿輦之類給中臣、又各加被馬一匹、其頓宮及供給、准向國之例、

凡齋內親王還京、所有雜物、寮官以下及近宮百姓等皆分給之、其寢殿物給忌部、出居殿物給中臣、但金銀器納齋王家、又幃幄釜甑之類應長用者、皆付國司令收掌、

〔延喜式十七內匠〕同宮齋宮○自伊勢齋宮入京儲料、御輿一具、塗料物、單功同野宮、四尺屏風四帖料、榲榑八材、作骨料、檜榑半材、押料、熟銅大四斤、作鉸金料、半熟銅大十二斤、鑄花形釘料、炭五斛五斗、一斛五斗鑄花形釘料、一斛五斗燒金料、二斛燒骨料、五斗鍛漆料、和炭五斛五斗、四斛作鉸金料、一斛五斗鑄釘料、糯米八升、張布料、擣墨八合、合漆料、白橡一匹三丈六尺、表料、縹絁一匹三丈六尺、裏料、調布一丈六尺八寸、香中張料、墨紫絁四丈九尺六寸、緣料、緋絁一丈六尺八寸、香料、商布七端一丈、下張料、紙二百十二張、中張料、薄紙卌六枚、緣并香料、紫革一枚、綫形料、小麥一斗二升、紙黏料、漆八合、塗押料、滅金十兩二分、水銀五兩一分、塗釘鉸金料、單功一百卌九人、木工十六人、漆工五人、鍛冶工十七人、夫四人、縫工五十六人、鑄工三人、張工卌八人、

御輿蓋一枚料、油絁一丈六尺二寸、調布一丈六尺二寸、單功三人、漆工

塗赤漆御膳櫃六合、各長二尺三寸、廣二尺二寸、深八寸二分、下居机六脚、各長五尺七寸五分、廣二尺三寸、高一尺七寸、杌十六枚、各長九尺、周六寸五分、韓櫃一合、長二尺六寸、廣一尺七寸、深一尺一寸、料漆六升六合、石見庸綿二斤、荏油一升八合、炭一斛、鉸漆并塗料、單功卌九人、御膳櫃并下机卅六人、杌十六枚五人、韓櫃三人、夫五人、

塗黑漆御輿前櫃一合、長三尺、廣九寸、深八寸、小辛櫃一合、長一尺五寸、廣一尺一寸、深八寸、捧壺二合、各周一尺九寸、高六寸、柄二枝、各長八尺、大笠柄一枝、長八尺、幕柱二枝、桁一枝、長一丈五尺五寸、幔柱廿四枚、各長八尺六寸、料漆六升、石見庸綿二斤、黏料調布二尺七寸、一尺五寸黏塗料、一尺二寸鉸漆料、油五合、擣墨一升、炭一斛五斗、單功廿九人、御輿前櫃四人、小辛櫃二人、捧壺五人、柄二人、大笠柄一枚、幕桁一枝六人、幔柱廿四枝六人、夫四人、

〔西宮記臨時五〕齋王入京事

依吉事入京用初道、依官符造頓宮、遣奉迎辨一人、加六位史一王并中務丞、內舍人二人、檢非違使二人、

延喜九年三月廿二日御記云、高階朝臣申云、齋院供奉祭日日記進止如何、〈輕服〉仰外記令勘先例、外記春正申云、國史日記等無所見、案令式文、親王有服云々、然則齋王不可參祭也、又召神祇大少副藏人所問之、申云、齋宮不忌輕服、准此則可參祭、又令公卿等定申云々、准齋宮例、參祭無妨云々、依公卿定可參祭事、仰高階朝臣畢、

同十五年四月十八日御記、齋院長官希世申、齋內親王自昨有月事、仰外記令檢先例、無所見、召神祇大副安則問齋宮例、申云、於離宮有月事不參外宮、又於外宮有月事不參內宮、但所備幣物者、宮主所司等持至河邊祓其由棄之、齋院事、非神祇官之所知也云々、仰希世、齋院參社事宜停止、只於院令祓停止由、又所設幣物、依齋宮例、院司宮主等相共於川邊令祓棄之、

〔大神宮諸雜事記 二〕天喜二年七月日、齋內親王〈乃〇敦平親王女敬子〉御內戚伯父前式部卿入道宮〈〇敦儀親王〉入滅給了、爰齋內親王齋院、皆是以日易月例云々、　五年九月十四日、恒例神御衣式日闕怠不供奉、〈〇中略〉抑齋王御外戚伯母以去八月下旬入滅已了、仍八月御禊〈ニハ〉九月四日於南門被奉仕已了、御參宮之條者、祭主可定申之旨、從關白殿被仰下之日、齋宮齋院如此傍親〈乃〉御忌服之條、以日易月〈乃〉例也者、任先例可令參宮給之由、進上請文了、

康平六年五月廿六日、齋內親王御兄修學院阿闍梨入滅了、然而齋宮齋院祖父母及兄弟〈乃〉忌服不御坐之例也、以日易月之前例所謂服五月五日、服三月三日、服一月一日、是承前之例也、仍其間御匣殿御坐〈天〉、內膳炊部司等〈乃〉御膳物不供〈シ天〉、只進物所〈與〉御飯御菜等進了、但本服五月也、仍五箇日所下坐也、

解職歸京

〔延喜式 五齋宮〕凡齋王相代應歸京者、遣使奉幣亦如初、若遭國喪及親喪者、遣中臣一人告其狀、不奉幣帛、

凡齋王還京者、〈若有遭故還者、不用初入之道、〉遣使奉迎、五位六位各一人、近江與伊勢堺上祗候、辨一人率史生官掌

鰒堅魚各一斤、鮨腊各四升、鹽一升、盤五口、食薦一枚、

水部神祭

五色薄絁各六寸、倭文六寸、木綿八兩、麻四兩、庸布一段、鍬一口、米酒各二升、鰒堅魚各八兩、鮨一升、海藻八兩、鹽五合、

氷室神祭

五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿四兩、麻三兩、鍬一口、米六升、糯米酒各一升、大豆小豆各二升、鰒八兩、堅魚一斤、鮨腊各六升、海藻一斤、凝海菜四升、

竈炭竈山戸御川池等神祭

五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各四兩、庸布一段、鍬二口、米四升、酒六升、大豆小豆各一升、鰒堅魚海藻各一斤、腊鮨各六升、鹽二升、食薦四枚、

〔延喜式 五齋宮〕凡忌詞、內七言、佛稱中子、經稱染紙、塔稱阿良良岐、寺稱瓦葺、僧稱髮長、尼稱女髮長、齋稱片膳、外七言、死稱奈保留、病稱夜須美、哭稱鹽垂、血稱阿世、打稱撫、宍稱菌、墓稱壤、又別忌詞、堂稱香燃、優婆塞稱角筈、○又見大神宮儀式帳

〔古老口實傳〕一齋宮院內禁制如式文

月水故障服氣男女等退出之法也

鼓笛音院中禁忌之用尺拍子也

巫覡禁忌御託宣記

六色禁忌內外七言如式條也

鴨子不供進之貞觀以後禁制也

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

絁五匹、白絹二丈五尺、綿廿屯、紫小纈帛三丈、細布二丈、貲布一段一丈四尺、筥六合、櫛一具、黃楊櫛案一脚、刀子一具、冠一條、爪磨一枚、沓一兩、出雲席一枚、

右齋內親王神忌御服料

絹十四匹三丈、十匹裝束料、四匹三丈青摺衣料、綿一百九十屯、調布六十七段三丈四尺、紅花六斤、已上青摺衣料絹二匹四丈貲布六段六尺、已上雜部并女孺等襷褌料

右小齋人等祭服、寮依例充、其賜祿一准元日、

〔延喜式五齋宮〕凡新嘗解齋日、大神宮司、率禰宜內人、御厨案主、三郡司、神部歌人等參會、賜宴祿各有差、案頭已下亦賜祿、

〔延喜式二十八兵部〕凡伊勢齋宮寮、宮貢祭馬三匹、大祓馬八匹、以下總國牧馬送充、

〔類聚國史四神祇〕延曆十八年七月己酉、停伊勢齋宮新嘗會、但以歌舞伎供九月祭、

〔百練抄五堀河〕長治二年十二月二日、諸卿定申齋宮寮神今食闕怠輩罪名、

〔延喜式五齋宮〕諸司春祭秋祭准此、

膳部神祭

五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各一斤、庸布一段、鍬一口、米五斗、酒四斗、糯米一斗、大豆小豆各二升、腊十二斤、鰒二斤、堅魚熬海鼠海藻各三斤、鮨三斗、鹽五升、醬酢各一升、食薦一枚、

炊部神祭

五色薄絁各三寸、倭文三寸、木綿麻各一斤、庸布一段、鍬一口、酒四斗、米糯米各三升、鰒堅魚腊各一斤、海藻二斤、鮨二升、鹽一升、大豆小豆各二升、

酒部神祭

五色薄絁各六寸、倭文六寸、木綿麻各八兩、庸布一段、鍬一口、米酒各六升、糯米四升、大豆小豆各一升、

合、供机十枚、供料米二斗、粥料米二斗、粟二斗、白黑二御酒料稻廿束、御酒一石、匏十八柄、酒垂四口、槲四俵、漆刻柄刀子二枚、長刀子十枚、短刀子十枚、土火爐二枚、木刺槌二柄、砧木二枚、蝦鰭槽二口、日影葛二荷、輿籠二脚、已上當國充之𤭖五口、平居𤭖五口、都婆波四口、匜八口、小坏八口、陶臼二口、筥坏廿口、陶垸八口、多志良加四口、𤭖六口、陶鉢八口、盤廿口、高坏十口、酒盞十口、油三升、切机二脚、叫瓮四口、已上美濃國充之

東鰒二斤十兩、薄鰒隱岐鰒各二斤、堅魚五斤、煮堅魚十斤、烏賊螺各十兩、鮨鰒二升、干海松二斤、紫菜一斤、海松纒鰒一升、煮鹽年魚醬鮒各二升、干薑二兩、清酒濁酒各二升、米糯米各一升、大豆小豆小麥胡麻子各二升、糯稻四束、糯糒一升、粟糒莖子糒黍子糒各二升、椎子菱子各五升、蓮子干棗各一升、生栗一斗、搗栗六升、干柿二升、橘子十蔭、干槲三俵、弖𦬇葉一荷、已上寮充之輿籠一脚、當國充之

右主神司并膳部所請

稻八束、粟四束、已上寮充之

右炊部所請

細布一尺、酒坏二具、窪坏廿口、片盤十五口、已上寮充之食薦二枚、當國充之

右酒部所請

絹五丈一尺、縣布六段二丈八尺五寸、紵布六尺、絲十兩、篩二口、麻笥二口、楉案一脚、土大盤二口、油一升、小豆一升、以上寮充之湯槽圓槽洗足槽各一隻、棚案一脚、板蓋五枚、明櫃二合、筥一合、篚筥一合、燈臺二具、匏三柄、韮一兩、以上當國充之池由加一口、由加四口、叫瓮四口、油𤭖一口、油杯盤各二口、鋺形一口、陶鉢一口、以上美濃國充之

右殿部所請

拂細布一丈二尺、筥一合、白端帖十二枚、短帖八枚、坂枕二枚、折薦帖二枚、已上寮充之

右掃部所請

竹上社、竹仲社、魚海社二座、林社、相鹿上社、守山社、大海田社、相鹿中社、宇留布都社、畠田社三座、火地社、大與杼社、擇屋社、國生社、大分社、相鹿社、伊呂上社、（已上多氣郡）朝熊社、荒御玉命社、伊佐奈岐社、伊佐奈彌社、蚊野社、鴨社、園相社、狹田國生社、田乃家社、草名岐社、礒社、多岐原社、月夜見社、湯田社、奈良波良社、大水社、津長大水社、大國玉比女社、御饗社、大土御祖社、田上大水社、國津御祖社、坂手國生社、粟皇子社、川原國生社、久久都比女社、大間國生社、江社、神前社、榎村社、朽羅社、度會國御社、度會大國玉比女社、淸野井庭社、志等美社、川原社、山末社、擇原社、川原大社、宇須乃野社、小俣社、川原淵社、大神御船社、雷電社、萩原社、大川內社、（已上度會郡）座別絹三尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、楯一枚、八座置四座置各一束、鰒堅魚各六兩、腊鹽各五合、海藻滑海藻雜海菜各一兩二分、酒一升、坩一口、總祭所須甕三口、匏三柄、薦五枚、祝詞料庸布五段、造幣忌部三人、明衣三段、短帖一枚、

右祭二月四日供祭、其六月十二月月次、鎭火、饗道、大殿、御贖、大祓、幷朔日忌火庭火等祭供神物、及明衣祝詞料、皆准在京、但月次祭加火雷神一座、

每月晦日卜庭神祭（齋王參三時祭、卜庭神祭准此、）

米酒各四升、堅魚海藻各一斤、腊二升、鹽一升、

凡十月晦日祓料、同三時祭祓、

新嘗祭神百十五座（大十七座、小九十八座、）

右供祭雜物並准新年、但鎭炊殿、幷忌火庭火大殿祭等、皆准在京、

供新嘗料（卜男八、女十、）

絹二丈、絲二兩、紵一丈二尺、細布一丈六尺、曝布一丈二尺、調布三段一丈、木綿二斤四兩、土盤十口、手洗二口、片椀十口、高盤十口、洗盤六口、堝十口、瓫四口、手湯瓫二口、（已上家充之）筥十四合、龜筥二合、明櫃三

春祭

さかづきにさやけき影のみえぬればちりのおこりはあらじとをしれ〇四五句、發草紙ニハ、ちりのおそれはあらずさぞおもふトアリ、

〇按ズルニ、長元四年ノ齋宮ハ、村上天皇ノ皇子具平親王ノ女嫥子女王ニシテ、內親王ニアラズ、然ルニ、小右記ノ宣命ニ齋內親王トアルヲ見レバ、女王ノ齋宮モ亦齋內親王ト稱スルコトヲ知ルベシ、卽チ其地位ハ女王ニシテ、其職ハ齋內親王ナリ、續日本紀養老五年九月乙卯ノ條ニ、以皇太子女井上王一爲齋內親王一ナドアル皆此例ナリ、

〔大神宮諸雜事記　一〕長元八年九月御祭、依例齋內親王〇具平親王女嫥子參宮之間、度會川東西岸洗溢流、爰依件洪水恐、從宇郡內川一歸著於離宮院一天、以同廿一日、二宮參宮給、但祭使乃祭主宮司、式日參宮了、十八日豐明直會、齋王乍御坐離宮一不供奉御、寮官同前也、廿一日御參宮之次、勅使宮司神主等例祿給了、

〔延喜式　五齋宮〕齋宮祈年祭神百十五座

大社十七座在齋宮內

大宮賣神四座、御門神八座、御井神二座、卜庭神二座、地主神一座、

座別絹五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、鍬一口、楯一枚、八座置四座置各一束、鰒堅魚各五兩、腊二升、鹽一升、海藻滑海藻雜海菜各六兩、酒二升、坩一口、但加宮賣神馬一匹、御門神各槍二竿、

小社九十八座在多氣度會兩郡

須麻留賣社、佐那社二座、櫛田社、有貳社、麻績社、服部伊刀麻社、相鹿牟山社二座、奈奈美社、宇爾櫻社、宇爾社、服部麻刀萬社二座、紀師社、天香山社、穴師社、流田社、流田上社、石田社、竹佐佐夫江社、伊佐和社、牟禮社、大國玉社、佐岐栗栖社二座、榎倉社、伊蘇上社、櫛田槻本社、牛庭社、大櫛社、賀須夜社、

乎寶位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸給比天、一天無爲爾、四海淸肅爾天之、聖運無限久、內平爾外成爾、衆庶歡樂仁、護助計奉給部止恐美恐美毛申賜波久止申、○中略

長元四年八月廿五日

〔大神宮諸雜事記 一〕長元四年六月、祭使祭主正四位下行神祇伯大中臣朝臣輔親、依例到來於離宮院了、齋王亦依例被著於離宮天、十五日夜、大祓直會無遲留久勤仕、畢而明十六日朝與利細雨蕭々、然而祭主宮司寮方、任例豐受大神宮御祭仁供奉、次第神態直會之間無事了、十七日大神宮御祭也、仍齋內親王依例參宮、著於齋王殿、○中略而御玉串供奉以前仁、忽大雨降天、雷電穿雲、光曜天天地震動、仍參詣衆人、迷心神成恐之間、齋王俄放音叫呼給、祭主輔親朝臣遣召須、仍祭主禰宜等引率齋王殿參、而齋王御託宣云、我皇大神宮之第一別宮荒祭宮也、而依大神宮勅宣天、此齋內親王仁所託宣也、○中略其託宣間仁御神殿御酒召古止數十坏也、其次和歌一首令詠御須、御酒盞於祭主仁下賜之、隨則祭主依宣天、件御盞賜預天、三獻卽御和歌進上既了、御託宣之旨、條々雖有具不記、○中略卽以寅時、御祭次第神事任例勤了、但齋內親王乃御玉串不令奉仕給、何況酒立御節不供奉、寮官人不著於直會之座、倭儛不供奉也、御託宣之中雖無其制、偏依恐上件條々事等所不供奉也、以明十八日辰時許天、內親王御心地平氣給天、四御門遣東妻乃玉垣二間遣破開天、御輿遣寄天、內親王於奉令退出已了、抑御前仁和、御輿者有制法天、腰輿於用之例也、然而依有件事、御垣遣破開天、御輿波所寄也、自昔依有禁制、御門與利者不寄也、而依洪水難、御行不早志天、以酉時離宮院仁令歸著給、祭主幷宮司同供奉仕了、豐明解祭直會、以亥時奉仕、但齋王不著座川原殿、寮官主神司件直會不坐列、

〔後拾遺和歌集 二十神祇〕長元四年六月十七日、伊勢のいつき內宮にまゐりて侍けるに、俄に雨ふり風吹て、いつきみづから託宣して、祭主輔親をめして、おほやけの御事など仰られけるついでに、たび〳〵御みきめして、かはらけたまはすとてよませたまひける、

〔大神宮諸雜事記　一〕延暦四年九月、大神宮御遷宮也、而依大風洪水難、以十八日所奉遷也、即齋內親王女〇桓武皇女朝原參仕、件以十九日離宮豐明奉仕、即日歸御畢、

延喜廿二年六月御祭、齋王女〇宇多皇女柔子御參宮之間、依洪水之難、留坐離宮院、以同廿一日參入二宮、即直會大饗如例、

〔三代實錄　十二清和〕貞觀八年五月廿六日己巳、勅、伊勢齋內親王女〇文德皇女恬子來六月祭停參神宮、先是大神宮司言、頃年國內疫病繁發、神郡百姓病死者衆、疑觸邪穢、無人駈役、望請准據舊例、停齋內親王奉祭神宮之儀、但祭祀之禮、宮司供奉、

〔大神宮諸雜事記　一〕承平四年六月、御祭之間、大洪水頻氾天、祭使齋主以十六日到著於離宮院、即依例參宮、又齋內親王者、〇醍醐皇女雅子從齋宮直道仁豐受宮參宮給、即其夜一殿御夜宿、因之宮司所勤之供給物等、從離宮運進天勤仕畢、是依先例也、十七日波依例大神宮仁參入御之處、御輿宿院內仁和、依有鹿之穢氣天、御輿遠九丈殿西砌仁宿置多利、

〔小右記〕長元四年八月廿三日戊辰、早朝大外記文義來申云、廿六日國忌、仍廿五日伊勢使可立、〇中略頭辨傳仰伊勢宣命趣、是先日內々所承也、〇中略天皇我詔旨度、掛畏岐伊勢乃度會能五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立、高天原爾千木高知氐稱辭定奉留、天照坐皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申賜者久申久、〇中略爰去六月十七日、恒例乃御祭爾奈留依天、齋內親王諸司遠率列天參詣之天、如跡爾欲供奉留所爾、暴風雷雨之天、每事爾不靜須、舊奇布間、齋姬忽仁進退失度比、意氣乖常氐、所寄託奈利、〇中略今此由遠令新申止奉所念給奈利、故是以吉日良辰乎擇定天、參議正四位下行右大辨兼近江權守源朝臣經賴、從四位下昭章王、中臣正六位上行神祇權大副大中臣朝臣惟盛等差天、忌部弱肩仁太繦取懸天、禮代大幣爾、金銀幷唐乃錦綾乃御幣乎相副天、常毛爾別爾潔齋令擎持天奉出給布、皇大神平久安久聞食天、愆過不殘須咎徵毋消天、天皇朝廷

〔皇大神宮年中行事六月〕十七日

一齋內親王御參宮之間次第事

先御祓(件御祓所、自御裳須曾河渡瀬上、自瀧祭御前北中間、自河東也)、御祓畢之後、令參御之間、始從寮頭次第寮官等皆御共步行也、於三所曾司者、乘車迄河原殿也、其後者同步行、於寮御火者於一鳥居止畢、齋內親王河原殿輿二鳥井中間腰輿移御、齋王候殿御著、道之間、若有火光時、寮官等須加制止、總不燭火之例也、件腰輿者、從齋宮取放橋持參、於宮中所造儲也、

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事

常以九月十四日、正殿內壁代帷、寶殿御幌、幷禰宜內人等明衣乎浹、自御裝束使所分請、以十五日巳時、齋內親王參入坐於大神宮、曹侍坐外川原殿院、即自手輿參入坐舊宮御門外、自手輿下氐、參入、侍坐輿玉垣瑞垣間東方、女孺二人從侍、即大神宮司太玉串幷蘰木綿乎捧、第三御門尓候、即女孺一人罷出氐、受取、其太玉串幷蘰木綿乎持參入、爾時親王受取著蘰木綿、太玉串捧持拜奉給畢、即親王還出度會郡離宮之、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

九月例

神嘗祭供奉行事

以同日〇十七日午時、齋內親王參入坐、川原御殿尓御輿留氐、手輿坐氐、致第四重東殿就御座、即大神宮司御蘰木綿捧向北跪侍、內侍罷出氐、受氐轉親王奉、即親王手拍受、宮司又太玉串捧持向北跪侍、又內侍罷出氐、受氐轉親王奉、即親王手拍受氐、即內親王自發內玉垣御門就坐席、(命婦從之)又即避席進前再拜兩段、訖即命婦一人進受太玉串、轉授大物忌子、即大物忌子受、立瑞垣御門西頭進置、即親王還本席坐、〇中略畢即禰宜內人物忌等尓祿賜氐、即內親王御輿離宮還坐、

幣使同賜祿、並各有差、十八日齋王還宮、主神司中臣候南門、奉御麻、兼供奉大殿祭、祇承國司賜祿、

〔延喜式(四伊勢大神宮)〕六月月次祭(十二月准此〇中略)

右月十六日祭度會宮、十七日祭大神宮、〇中略 十六日平旦齋內親王參入度會宮、至板垣門東頭下輿、入外玉垣門、就座於東殿、門內東西各有一殿、東殿設齋內親王座、左右設命婦等座、西殿設女孺等座、訖卽神宮司執鬘木綿、入外玉垣門、北向而跪、命婦若女孺出受以奉齋內親王、拍手而執著鬘、神宮司又持太玉串、(著木綿賢木、是名太玉串、)入同門而跪、命婦亦轉奉齋王、拍手而執、捧入內玉垣院門、就座席、(命婦若女孺二人陪從)避席進前再拜兩段、(命婦不拜)訖玉串授命婦、命婦受、轉授物忌、受執立瑞垣門西頭、齋內親王還就本座、然後禰宜乃著明衣、(衣冠並用生絹)大神宮司著當色、並執太玉串、禰宜立前、(大神宮禰宜立左、宇治內人立右、)次宮司、次幣雜物幷馬、單行陳列、次朝使進入外玉垣門、當內玉垣門並皆跪、先使中臣申詔刀、次宮司宣祝詞、訖物忌內人等舁幣帛案入、奉置瑞垣內財殿、齋內親王幷衆官以下再拜拍八開手、次拍短手再拜、如此兩遍、既而衆官退出、卽使及宮司以下向多賀宮、(齋王不向)再拜兩段、拍短手兩段、〇下略

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

六月例

此以月十六日夜、湯貴御饌祭供奉、〇中略 以十七日平旦朝御饌(毛)如上件引率具備供奉、〇中略 齋內親王以十七日午時參入坐(氏)、川原殿輿留(氏)、手輿(仁)移坐(氏)參入、到第三重東殿就御座、卽西殿(波)女孺侍、卽大神宮司以御蘰木綿參入(氏)、正道同重跪、向大神宮侍、卽命婦退出受取奉親王(爾)、卽親王拍手(氏)取木綿著蘰、大神宮司復執太玉串(氏)、參入(氏)跪同侍、卽命婦亦出受取奉親王(爾)、卽親王拍手(氏)自執(氏)捧、參入內玉垣御門就坐席、(命婦二人授之)卽避席進前再拜兩段、訖卽命婦一人進受太玉串授大物忌子、卽大物忌子受立瑞垣御門西頭進置、畢卽親王還本座就、〇中略 畢卽禰宜內人物忌等(爾)祿給(氏)、卽內親王離宮還坐、

奉記

川、了行啓官廳之後、次第儀了、禊東河進發云々、

〔續古今和歌集 九離別〕文永元年九月、齋宮(○後嵯峨皇女愷子)群行のときたき物たてまつるとて、

月花門院(○愷子姉綜子)

わかるとも立もはなれじ人しれずそふる思ひのけぶりばかりは

おなじ群行の長奉送使にて、まかりくだりて、かへりまうしの曉、女房の中へつかはしける、

[illegible]權中納言長雅

なれきても別るゝみちのたびごろも露よりほかに袖やぬれなむ

〔類聚大補任 龜山〕齋宮愷子内親王(在任九年、去弘長二年十二月四日卜定、今年(文永元年)九月九日庚辰出京、同十四日御著、齋宮群行、中臣長奉送使□□□□辨、)

〔延喜式 五齋宮〕齋内親王參三時祭禊料(○中略)

右五月十一月晦日、隨近川頭爲禊、八月晦日臨尾野湊爲禊、其三時祭月十五日、齋内親王向離宮、行路之間有二處堺祭、(宮東堺外、及多氣度會兩郡堺、祭之、料物色目在上、)到著禊殿、(神宮司幷播部司供奉裝束、)主神司中臣爲禊、(料物神宮司儲之、)大神宮司奉齋王膳、兼賜酒肴勅使已下、次主神司供奉内院大殿祭、(所須祭物神宮司儲之、)然後齋王遷内院、(裝束雜具同禊殿、)奉夕膳、(神宮司以料物附所司、但男女官供給辨備行之、)十六日朝饌之後、齋王參度會宮、路邊窮者賑給如常、禊度會河、參入神宮、至板垣門東頭下輿、入外玉垣門就東殿、(禰宜幷播部司供奉裝束、)神宮司執蘰木綿、入外玉垣門而跪、命婦出受以奉、齋王拍手而執著蘰、又神宮司持太玉串、入同門而跪、命婦亦轉奉、齋王拍手而執、捧入内玉垣院内就座席、(命婦若女孺二人陪從、)避席進前再拜兩段、訖玉串授命婦、受轉授物忌、受執立瑞垣門西頭、齋王還就本座、宮司宣祝詞、訖物忌内人奉幣帛案、齋王幷衆官以下再拜拍八開手、次拍短手再拜、如此兩遍、既而衆官退出、就解齋殿給酒食、訖入外玉垣門供倭舞、先神宮司以下、及主神司寮官次第舞、次齋宮女孺四人供五節舞、訖給祿有差、其後齋王還著離宮、主神司中臣候南門奉御麻、十七日參大神宮、禊御裳洗河、自餘之儀、同度會宮、(事見大神宮式、)是日神宮司獻物、卽賜祿、又奉

内西廂座、(南面自座東著之也、採脱寄不如例、有軾、内記持宣命筥相從、)此間忌部後取等、取内外宮幣立版下、中臣祭主能隆卿參也、
内記置宣命筥於余前、
辨外記史内記等、著同廊門内東廂座、(件座西面)東廊邊立明兩三、次中臣退出、三人相引、此間余以下平伏、
幣物置東廊、(南北廊也)門案衞士等舁之、次余召召使仰云、使王召々、使王來著、余取宣命小開見給使王、使
王取之退出、後召内記給筥、次余起座還著本座、辨以下同之、次齋王退出、寄輿於正廳東面戸、(壇上)輿持
參自東廊戸也、齋王乘輿出自東廊(南北廊也)戸并宮東門郁芳門等云々、齋王起座間輿下之間、天皇還御
朝所云々、
天皇脱帛御裝束、更改著黄櫨御袍、次還御、(齋王輿、遠違不及眼路之程を相量出御也、)寄御輿於朝所南面、如入御、

〔百練抄十二順德〕建保五年八月廿四日、行内文請印、是齋宮群行官符等也、　九月十四日、有齋宮群行、(熙子内親王)仍天皇行幸太政官廳、

〔續古今和歌集十羇旅〕式乾門院、(○後高倉院皇女利子)齋宮にて、伊勢にくだり給ける時を思ひ出て讀侍ける、
式乾門院御匣
都いで、八十瀬わたりし鈴鹿河むかしになれどわすれやはする

〔齋宮記〕利子内親王(後高倉院皇女、號式乾門院、在任五年、嘉祿二年、)

〔百練抄十四四條〕延應元年八月十九日丙辰、齋宮群行定、(九月十六日)又寮官并次第使裝束司等除目也、　九月十六日壬午、齋宮群行也、行幸太政官廳、被行此事、攝政(○藤原兼經)被著齋王頓幡云々、

〔新抄〕文永元年八月四日乙巳、今日齋宮(○後嵯峨皇女愷子)群行日時定、次第使除目、兩河勅使等定也、中宮大夫雅忠、參議右中將伊頼、左中辨高輔朝臣、藏人佐經業以下參入之、　廿八日己巳、今日齋宮御禊點地日時定、中宮大夫雅忠、左中辨高輔、藏人佐經業等參入之、　九月九日庚辰、今日齋宮群行也、内大臣參行之、次第儀如常、仍天皇(○龜山)行幸官司、内大臣行召仰事、右大將通雅以下供奉云々、齋王禊西

相制、卽從可催之由可被仰下云々、親國大略轉頭歟、件國知行末代可用意事也、

〔猪隈關白記〕正治三年(○建仁元年)七月十七日乙丑、藏人辨長兼來云、來九月齋宮群行也、行事辨右少辨光親申、忌月由可有憚歟、又群行九日吉日也、而十五日行事辨光親相當遠忌、件日齋宮參著翌日也、前例件日、長奉送使幷辨參寮、申歸京之由給祿也、可有憚歟、可量申之由有院仰、先被問人々云々、余申云、忌月專可無憚歟、又十五日參寮、相當遠忌日、件日辨不參寮何事候哉、但嚴重神事、恐意趣難計申、猶可被問前例者、　八月廿八日乙巳、藏人辨長兼來云、(○中略)群行御禊路事、

承暦二條堀川爲皇居、不被憚過北陣、

嘉應閑院爲皇居(當時皇居也)有沙汰被憚、

已上兩事可量申者

九月九日丙辰、是日齋宮(○後鳥羽皇女肅子)群行也、申時許殿下令參內給、予秉燭以前著束帶、(如例有文帶、螺鈿劍、紺地平緒、)

(○中略)

密々見正廳御裝束、高御座北頭令供一燈、先之殿下御覽御裝束、多被直之、此間著御帛御衣、(六條三位經家奉仕之也)齋王參入、(入自藻壁門)留輿於官廳北門、行事辨藏人權左少辨光親付頭辨奏事由、次供御手水、(頭辨公定爲陪膳、役送五位、)此間闈司著正廳東戶屛風外左右腋座、次出御正廳、經朝所南廂幷昇廊、(昇廊新有打橋、筵道上敷兩面、如例、)入御自正廳中戶、

殿上人取脂燭、但不入正廳中也、式筥御笏櫛筥、(六位藏人三人候之)內侍一人守護、此間余還著東廊座、仍不見其後事、委在殿下御記歟、(余不記之)召齋王藏人辨長兼云々、

齋王輿經官北門幷正廳北昇廊南第二間、於正廳北面東戶壇下下輿、(八省儀寄壇上、延久官廳依程狹寄壇下云々、)寮頭上卿辨等相從行事、王輿退安東廊北面西第二間、天皇(○土御門)自召舍人云々、中臣參入之後、(余尋寮之召使也)余召召使、仰內記可持參宣命之由、卽少內記持來宣命、立幔下、次余起座、入自東廊、(隨身不入、戶在簾頭)著東廊門

由申請、其外成功尋□□云々、　十八日乙未、辰刻參院、以越中內侍奏兩條、官廳修造永資被止位記可勤仕事、仰叙爵後經年序了、猶可尋他功、　廿三日庚子、次第參著之間、兩度之官廳修造事、入江永資（馬允、去建久八年叙爵、）止位記可造營之由宣下之間、且可召仰之旨、仰權大夫史國宗了、件修造事、去月十日群行藏人方事可奉行之由被仰下、其翌日兼可有沙汰事等注進之由、最前申之、而先可仰御卽位時造國司等之由被仰下、各遁避、次可尋付成功輩之由被仰下、國宗相共、東西南北雖相尋、無所望之者次可給功、爲國宗沙汰可修造之由被仰下、此事背普通之例、爲大夫史沙汰、勤如此之事、何時例哉、國宗私力難及之由言上、攝津國住人馬大夫永資被止位記者、可修造之由擧申之、奏聞之處、經年序之後、被止位記之條不可然、仰可然、但國宗申云、群行日若雨降者、御座一帖不可敷之、偏如露地云々、雖不雨降、後房無板敷、日數已迫了、仰天者、昨日以愚札達此子細於內府（○源通親）許、及闕如者止位記可召付之由被仰下也、仍下知也、群行日奉幣、官廳御裝束事、日來頭右大辨公定朝臣奉行、轉任之間、申事由殿下、仰右中辨親國之處、近江驛家沙汰、口入申難奉行之由、永承秦憲卿（予時右少辨近江守也）雖兼近江守、奉行群行、右中丞依知行江州、令觸申此奉行、依知行國々雜事、遁避官方公事、未曾聞事也、　廿七日甲辰、參殿下、（○中略）進說齋宮群行次第、（予作進之也、可作進之由被仰下之故也、）仰曰、官廳儀、延久經年序了、文治無記錄、大略以此次第可有御存知、申曰、於御裝束儀者、大略載延久記文了、脫漏事少々注加之、定違亂事等候歟、可被注下候、又申云、帛御裝束御帶可被進歟、仰曰、無文有文先例不同也、大嘗會之時自院被進歟、可奏事由、又申云、同御裝束御體裏、天養文書注紅由、文治白云々、於色目者不可限群行、仍相尋女工所幷縫殿寮等之處、申裏白之由、仰云、或生、或練歟、裏又所見分明歟、可依吉例者、　廿九日丙午、參左相府、（○藤原良經）禰宜所望輩、幷群行路可憚門院北陣哉否事、申勅問之趣、又宣下率分所勾當裝束使事、

　三十日丁未、謁申內府、與侍殿子糸鞋裝束、可被付功歟之由被示也、右中辨親國依近江群行驛家沙汰、內府被加勘發、被下御點之庄々、以國使加催之處、庄民等帶刀杖、一切不入使、召總追捕使定綱

塵無拾納物、□□我朝神國也、嚴重神事猶以擁怠、可悲可悲、　廿五日癸酉、參院、以辨內侍奏條々、〇中略

群行定間事、裝束次第司、西河陪從、東河勅使、

已上仰外記、令任可勤仕之輩、并先例件任文被下御點、

官廳修造事

仰猶相構可尋付成功輩

六條中納言長奉送使辭退事

仰猶可責催

廿七日乙亥、參院、以辨掌侍奏條々、六條中納言長奉送使辭退事、仰納言皆悉相催可申散狀、　廿九日丁丑、以辨內侍奏條々、

長奉送使人々辭退事

無左右仰

次第使主典兵部錄可被催事

仰猶可召上城外輩之由可下知〇中略

官廳修造事

仰可給功爲官沙汰、相構可修造之由、可仰國宗、

八月二日己卯、今日有齋宮群行定、予遲參之間、頭中將宣下云々、　十二日己丑、參院、以越中掌侍奏條々、右少辨參會、群行驛家庄々被下御點、關東將軍雜色可相催云々、〇中略　祭主卿申、大神宮封戶近江伴補保、群行役可被停止事、仰可免由可仰國司、　十三日庚寅、今日不出仕、出納貞重來、仰群行御櫛宮寸法事、　十七日甲午、入夜大夫史國宗宿禰來、官廳修造事也、馬大夫永賓被止位記可造營之

玄僧正、衆徒等猶不靜謐云云、

〔三長記〕建仁元年七月□□□□、自右少辨許送群行文書、嘉應故堀川納言藏人方奉行也、相尋彼文書也、……十三日辛酉、參院、以辨掌侍奏條々、○中略

三條中納言長奉送使辭退事

仰猶可相催

群行日事

仰可用九月九日

官廳修造事

仰可勸功程尋成功輩

次參殿下、○藤原基通以佐清申群行間事、　十六日甲子、參院、以辨掌侍奏條々、

六條中納言長奉送使辭退事

仰重可相催

十八日丙寅、巳剋許參院、以辨內侍奏群行間事、

官廳修造損工功程事二万疋

仰可尋付任官功

長奉送使事

仰猶可催六條中納言、○中略

於院或人語曰、佐少辨親國、去歲年事、被仰齋宮行事者、四月始群行行事所、更不致一事沙汰、神事□禮、甚以忘敬神事、以酒會舞妓或藪袖、酣醉之後於齋屋程□之中、令舞妓之間、忽然蛇出來、即隱不見、自翌日病惱、仍辭退奉行、奉行去八日被仰右少辨光親也、此間連日參會行事所、用意六万疋、當時一

遂去不見之由、次主上如元著御黃櫨御裝束、(頼資卿催之)内侍二人進候左右、余仰定經令告出御之由於人々、先是內府參御所、即退下、南大將進幔外左右、余仰職事令卷庇簾、(中間許、是書略也、)次持參御輿、今度橋御輿寄著車堂上也、左中將公時取御璽安輦中、次乘御、(無警蹕)余奉扶持如例、即余降自後房前緣、著沓暫停立、御輿進南門方之間、余出自東門幷郁芳門乘車、自冷泉東行、入自大炊殿南面門、參會御所、良久遷宮、於左衞門陣代外、神祇官獻御麻、余豫仰定經也、下御時無警蹕、其後無鈴奏名謁、是代々例也、天延有名謁、是失歟、延久御記被疑之也、即入御所、持退輿、公卿退出、次余退出、于時報曉鐘及雞鳴、○中略

長奉送使

権中納言通親卿　　左少辨親雅

右大史宗久　　中□□卜部基貞

廿七日乙丑、此日長奉送使通親卿幷親雅等歸參、申齋王平安著寮之由、定經來告此旨、又親雅參來申同旨也、　廿九日丁卯、抑群行年九月齋、異記太多、余檢先例、如式文者、非一月齋、然而近例一月齋、且見故殿(○藤原忠通)御記、仍公家及余至今日為齋、為後代取之□乖式文、愆意雖傾客難皆□□

〔吾妻鏡七〕文治三年五月廿六日丁卯、宇治藏人三郎義定代官、押領伊勢國齋宮寮田櫛田鄉內所處云云、可被糺明之旨、自仙洞被仰下之、○中略今臨群行之期、武家之輩押領件式田之上旨、乍含勅定不行其科者、似恒御旨、仍被收公義定恩地云云、　七月二日辛丑、初齋宮、來九月依可有群行、被進其用途、日來所被充諸御家人也、善信奉行云云、　十月七日甲戌、右武衞(○藤原能保)飛脚參著、去月十九日、齋宮(○高倉皇女潔子)群行也、而勢多橋破損之間、為佐々木定綱奉行、以船奉渡湖海之處、延曆寺所司等相交雜人之中、依現狼藉、定綱郎從相從相咎間、不圖起鬪亂、及殺害、衆徒聞此事、忽以蜂起、擬及嗷訴、而國司雅長卿幷定綱等、殊可加制止、就中於定綱事者、不被觸仰關東者、輙難決聖斷之由、雖被仰座主全

時、依為臨時幣不仰奉幣事、仍無兩段之儀、即是為貞元天喜例之由、見延久三年後三條院御記、天治又依彼例之由、見故殿御記、今度須依彼兩度例也、而寛治同雖為例幣以後、天暦御記説猶兩段被仰之、彼度延久御記雖其沙汰出來、猶兩段被仰之由見為房記、是即白川院京極大殿有御沙汰云々、此子細又具見故殿天治御記、就之案之、延久雖吉例、天治頗不快、於天暦寛治者、共為最吉例之上、案事理雖臨時幣、爭不被仰其由哉、加之故殿御記之意、道理猶在兩段、仍今度所用寛治例也、

中臣又稱唯、退下復本列、即三人相引退出、先是上卿少納言參入之間也内大臣著小戸内西腋座、辨已下著同東腋歟、令中臣退出之後、召使王賜宣命、了復本座歟、

次余召定經、仰額櫛可持參之由、六位藏人持之候高御座西邊、本候北邊、面依齋王御座近、余仰令候西邊也、定經取之受内侍、内侍取之置主上御座前、疊上中帖外也、天治如此、故殿御記被難之、康治置莚上、今度可追彼例之處、當時便宜、疊上有便、仍如此令置也、頗左方也、余仰令開蓋、蓋在北、身在南、又令披内裏紙、即内侍欲退起之時、余仰之、參齋王御座下、可申近可參給之由者、即内侍進西几帳下、申此之由復座、參退共往還、余座與齋王御座之間也、如獻御麻之時、次齋王被欲參進之間、自几帳之隙側望見之、未被上髮、余驚而問齋王之仕女、答云、於莚屋雖被上御髮即撤之、末額等髮上讃岐申給了、今於官廳可被上御髮之由一切不承不存云々、次第不定言、仍以定經問親雅、親雅申云、於莚屋被撤御髮上之由、全以不知行、隨又申子細於女房了云々、仍忽欲上處無其具、仍召出髮上讃岐、召其物具、末額等也、於本御座几帳中陪從女奉上之後、參進御座前給、莚上也、女房指几帳如前々、上取額櫛、奉著加齋王御額給、本儀ヨリハ奥ニ奉指加給也、雖無所見、為不令落失、余申行也、主上如形奉著給、余副手能ク奉著也、余仰從女云、至于勢多之頓宮、可被納御櫛於筥、路間勢多までは不可被撤御櫛、又令向御輿下給之間、不可令顧面給者、次齋王復本座、此間齋王輿可歸參東面之由余仰之、親經來申云、軒廊小戸太短狹也、仍御輿不能通之、為之如何、余仰云、廻廊之東ナ廻天戸、持參者、即持參南庇東面壇下、齋王欲起座、此間余召定經賜御笏、即主上還御、登廊打橋如本歟、莚道、余插笏候御裾、定經取余裾、五位藏人親經付、内藏人二人候御供、皆如渡御、即脱御裝束給、余仰定經、遣人令見齋王遠去、去程歸參、申齋王

定經取藏人所持之御笏筥、授余、余取御笏進主上、是寛治天治等例也、或欲著之時召之、次催中臣可持參御麻之由、此間余仰闈司、令披北面東第一戸、闈司入北屏代屏風北邊、副東大壁北行開之、即復座、其後中臣遲參、大路職事不召儲歟、每事如泥、可謂有若亡歟、數度催促之後、僅以參入、内侍進北戸下、親經扶持之、取大麻、經余座與齋王座之間、進主上御座前、一撫一吻之後返給、經本路於初戸下返給、中臣復座、次闈司進閉戸又復座、次主上正笏御拜、兩段再拜、是被奉拜御幣也、次攝政仰藏人辨親經召齋王、天延藏人辨扶義、延久藏人辨師賢、寛治藏人少將能俊、天治藏人少將公教、天暦長和康治六位召之、當時無藏人少將、仍任天延延久例、召藏人辨也、親經出北門、仰寮頭、良久無音、仍一兩度催之、親經申齋王已參入之由、仍仰闈司、令開北面戸、取入大麻之戸也、次齋王參入、經登廊南第三間、件間讓切長押也、暫昇立北面壇下、此間陪從女房二人、小女一人參入、先是行事辨申云、自何方可參哉、余仰云、北門定無便宜歟、任永承以後例、可參自東門也、彼永承天治等用昭訓門、准彼也、女房三人、此中一人御乳母歟、同輿人也、取几帳三本、又額實卿候御輿邊、即昇居王輿於壇上、齋王下御、經東一間西邊、屏風東邊也、著御座給、女房三人各取几帳、指東南西三方、即女房等就几帳候也、次闈司更進經東壁際、如先之、閉戸復座、王輿持退、候東軒廊第二間歟、次主上召舍人、二音、余近候數申之、堂上職事告召成之由、大舍人稱唯、次少納言參入、就第二版跪候、件版讓當殿第二間置之、延久當第一間歟、大極殿儀堂上人告之、少納言稱唯退出召之、次中臣忌部後取總三人進著版位、中臣著第一版、忌部著第二版、後取立其東、勅曰、忌部參來、職事等傳召之、此間、闈司開東扉代屏風東枚、大極殿之時有戸、其内闈司居其前、立屏風、而此戸無戸、仍以屏風代扉也、次忌部稱唯、經東軒廊南砌幷廳南庇東面扉代屏風南頭、初版入北邊、余命令經南頭也、自東一間入母屋、跪机下、搢笏拍手、三度、先取外宮幣、南方也、捧目上、經本路退下、於東壇授後取、件後取從忌部立壇下、更歸參取内宮幣退下、兩人相共復本列、次勅曰、中臣參來、職事告之、如初、中臣稱唯參上、其路同忌部、小机東頭敬屈跪候、勅曰、能ク申天奉禮、是幣事也、被加例幣之時仰詞曰、常ヲ奉ル九月ノ神嘗ノ幣帛ヲ、汝中臣如常ク能ク申天奉レ、今度依爲臨時幣、省如常等之字也、中臣稱唯、猶候、欲退出、余仰暫可候之由也、又勅曰、今奉進ル齋内親王ハ、此依恒例天、三箇年間ハ齋清天、天照大明神乃御杖代爾定天奉進ル内親王乎、汝中臣宜ク吉ク申天奉進禮、

十一日以前有群行之時、神嘗祭幣例幣也、被付群行勅使、仍兩段仰之、先幣事、次齋王事、例幣以後有群行之

御座後屏風外、南北二行敷疊二枚、爲齋王陪從女房座、其西副北壁敷疊一枚、爲內侍座、南庇東面柱內敷荒薦、立屏風一帖、南北妻、件間無戶、以屏風爲屏、是件延久例也、件屏風外左右、敷草圓座二枚、爲闈司座、南庇東第二間北邊迫西柱、舉一燈、基親云、先例之由廣房申之云々、高御座北東方、又舉一燈、東二三間鋪滿荒薦、東第一間不敷之、在壇也、登廊敷打板、其上敷筵道、筵上加兩面也、及御座邊、不敷後房南庇也、其旨在指圖、南門雖程遠、幣物顯見之條、頗非事之憚、仍仰基親假隱立屏風一帖、入御之後、即可取之由仰了、即歸參朝所、小時有臨幸、入自南門、於此門外不獻大麻、延久永保獻之失也、於門內大將立替、人々東門以北下馬歟、可尋之、經東廻廊以東入御幔門、兩大將立幔內、御輿昇居地上、敷筵、寬仁以來於壇下下御也、康治有議寄壇上、是幣物在大極殿之上、皇后同輿、仍被寄壇上也、而今正殿其壇太下、仍猶無便宜之上、延久又壇下也、余豫徘徊後房前砌邊、昇居御輿之時、近參跪候、兩大將同跪候也、他公卿列立幔外庭、即左中將公時朝臣、當座上頭也、中將依服日數內不參入也、參上、經余前、開妻戶取神璽授內侍、退去、余參御輿下、奉下無蹕、即立御平敷御座前、余候庇座邊、持退御輿之後、兩大將即退下、公卿各著北廊小戶以東座、次余仰職事令垂庇御簾、藏人役之、五位六位他侍臣不見也、即脫御御裝束、不撤御總角、被奉待齋王之間、暫以御休息、供御膳、女房中納言典侍陪膳、此間余以定經問事具否於當座上卿、歸來申幣物使等具了之由、其後經數剋、仰定經、置使者藻壁門之邊、令見之、又走向路頭可見之由仰之、及子終前陣少々參來、又松明多見之由告申、行事辨親雅近參云々、仍召類實卿著御帛御裝束、以白生絹調之、內藏寮進料物於縫殿寮、令裁縫之、直付朝所也、御袍以下皆悉白生絹也、御大口者赤色、是見資房記之由定經所申也、置御衣筥蓋御帶、件帶自院所被獻也、無文玉帶、可用巡方之由見日記、然而院無巡方玉帶、仍被進丸鞆也、又相具白御草鞋、幷生御襪等、生襪未見物也、余仰定經、御笏式筥御櫛筥類卿是也合儲候、六位藏人三人持候之、又仰殿上人持脂燭可候之由、此間行事左少辨親雅付藏人右衞門權佐定經、令奏齋王參入之由、其詞云、齋王可入御何門哉者、此事未聞事也、參入之時只奏其旨、又其門無不審、退出之時外郭門先例不定、仍奏事由者例也、而參入之時申入御門之例未見、及辨失歟、職事之私說歟、仰北門無異議之由、即出御自南庇西面簾、御寢之先槽御笏候御帶也、內侍伊豫一人扈從、五位藏人親經付之、劒璽留大床子、辨掌侍守護之、侍臣指脂燭前行、五位藏人定經取余下襲、藏人三人持候三物、即經後房南庇、不敷筵道、依屋內、南殿御之後如此、幷昇廊打板等、敷筵道、入自正廳中戶、自御座北邊著御、余奉扶持之、次召御笏獻之、

御裝束等了、(黄櫨御袍如例、御大内之時、著御帛御裝束也、)内侍今一人、又以遲參、此間内府自陣座歸參御前語云、右大將密語云、幣物在正廳、幸路用南門、可無便歟云々、此事所云一旦可然、如此之事、後日之難在一身歟、仍以定經仰合件卿、其詞云、昨日以裝束司辨基親朝臣、入御門事仰合左大臣、而被申可被用南門之由、仍下知其旨了、而今被傾申旨尤可然、但被用東門者、可同齋王之道、此條如何者、實房卿申云、一旦所存申計也、左大臣被申旨不能左右、只可存御定、此間親經檢申正家記云、延久永保、共與齋宮不可同道之由所見也云々、尤有與傳家奉公之者、其要在于如此之事歟、仍旁不改南門之儀、正廳與南門其程遠、隨可經東廻廊外、可御朝所、強不可爲巨難歟、北門同可爲齋王路、西門又無實、南門之外無幸路之故也、内侍參入之後、即出御、(于時亥二點歟、)須被待遣野宮之使歸參也、然而秉燭之後遣之、仍禮待者可爲深更、仍且以出御、是先新儀之其一也、奉行未練懈怠之間、違例多端尤不便々々、出御之間儀如例、次御反閇、陰陽頭宣憲朝臣給祿如例、次列陣、次將渡、(右渡左也、)次公卿列立、(大將立階左右如常、)次寄御輿、(葱花、神事行幸之時定例也、)無鈴奏、(但備奉如例、)大刀契共候之、(御大内之時、不候大刀、只候契、代々例如此、)次主上乘御、(頭中將實教朝臣勤御劍役、件人經服日數之内也、然而先例憚神事之役、不憚他役、禁入當之參、不禁内裏、)無警蹕、(止警蹕鈴奏等、是神事之故也、)次乘輿出御、自左衛門陣、不仰御綱、是又依神事也、余(○攝政藤原兼實)乘御之後、出自東面北門乘車、自閑路參會、入自郁芳門、辨官東門參朝所、中央間廣庇東西柱下、(迫長押、)擧燈、(小安之儀、大床子前擧之、面朝所之儀、不立庇布障子、只懸御簾、仍簾中難擧燈之間、擧廣庇之由、裝束司基親朝臣申、有其謂、)卷庇御簾、内侍二人(伊與辨、此中辨掌侍)(兼帶裹之役、叅例也、)候母屋中央間左右柱外、他女房四五人候東北庇邊也、西間母屋儲大床子、中間儲平鋪御座、御座東西北三方、立大宋御屏風、南庇西門副端東西行敷兩面端疊、爲余座、除東三ヶ間(母屋二間、東庇一間也、)之外、以西三ヶ間庇不懸簾、母屋懸簾、(垂之、)南庇第三間西面(余座西面也、)同懸簾、(上之、)東庇東面同懸簾、(垂之、)前庭東南兩面引所司幔、中央有幔門、具在指圖、余待御輿之間、向正廳見御裝束、母屋高御座東間儲御座、(巽向、後立屏風、)其北母屋際疊兩面疊一枚、爲余座、其東間(第二間也、)北邊(母屋也、)御齋王御座後立屏風、余座與齋王座、其間二尺許、共南面也、同間(二間也、)南方迫柱内立小机、安内外宮御幣、(件小机坤艮要、坤方置外宮幣、艮方安内宮幣、)齋王

親廣房等申云、延久行幸用西門、今度無門、打門代幄可備幸路者、余云、彼時皇居內裏也、仍被用西門、有其謂、今度自里內可幸、何必可被用無實之門哉、所申可謂守株歟、東門已全有便宜、不可及異議歟、兩人伏理無所申、　十二日庚戌、廣房持來官廳圖、申禊行御裝束間事、親雅禊行用途幷驛家雜事、近江國柱門領減省之充文、所々猶不承引、院逆鱗給云々、神妙也、　十四日壬子、未剋著直衣參院、以定長入見參、（禊行之間、有可申事之由、內々示定長、）了、即以實教有召參御前、供花御所也、神事之間頗雖憚思、如此之公所、强不可憚之上、不能申子細、余奉問禊行之間主上御作法、先召舍人事、只如內辨云々、出音令呼給、實不違內辨作法、面承聖訓恐悅難謝、又仰中臣之詞有不審事同雖尋申、不令逢禊行給之間、被仰不分明之由云々、　十六日甲寅、親雅申、禊行雜事、大路沙汰具了云々、但近江驛家事、猶有對捍、所々重仰遣了云々、　十七日乙卯、裝束使辨基親、大夫史廣房等參上、申正廳御裝束之間事、條々付後三條院御記、決事等定仰了云々、又行幸入御門、東門歟、（齋王同道如何）南門歟、（無例、又有煩歟、）兩方之間如何、於齋王同道之條者、待賢門被用兩方御路例、即寬治康治也、可憚者宮城門盡憚哉、准彼者東門有便、如何、可被計申之由、以基親問左大臣、歸來云、猶可被憚歟、延久有其沙汰之樣所覺悟也、仍被用南門、有何難哉、尤宜歟云々、仰南門之由了、　十八日丙辰、此日潔子內親王（高倉院皇女、當今（後鳥羽）之御姉妹也、御年九歲、）禊葛野河、即參大神宮之日也、於官廳被行此儀、仍御裝束已下事、被追延久三年佳例也、上卿權大納言實家卿、辨左少辨親雅、長奉送使權中納言通親卿、奉行職事藏人右衞門權佐定經等也、○中略命內府令著陣、余著殿上御倚子下、召定經仰召仰事、（其詞可有行幸太政官廳、召仰諸司、出御路出左衞門陣、經宮小路大炊御門東洞院中御門等大路、可入御待賢門幷宮南門、兼又留守參議光長朝臣、權右中辨定長朝臣者、）定經向陣仰內府、抑依代々例不勘日時、是依勘禊行日時、更不勘行幸日時也、依彼有此行幸也、天永勘之云々、頗失儀歟、又大治御記、依先例不分明、不仰路留守等事、（雖有其人不仰上云々、）之由見御記、此條中不審之處、康治御記被仰之、仍就有道理用康治例也、他年々總不記此事也、小時內府付定經奏宣命草、（延引之由載之、但非辭別、延久又如此、○中略）已及戌終、仍先示女房、分御髮且奉結下、此間賴實卿參入、即御總角

伊勢國闕驛家齋王御所申郡司對捍之間事云々、申慥可勤仕之由可召仰之狀云々、伊勢守爲季參上、申一切不叶之由條々、仰子細懃申可構試之由、慥仰明日可下向之由了、定經來、申群行廳人方武功幷行幸之間事、又條々召仰了、　五日癸卯、及晚定長來、○中略　申群行驛家雜事闕如不便之由條々有子細等、定長殊以歎息者也、親雅定長先是參院、依無傳奏之人歸來、卽相具定長參院了、入夜兩人歸來云、群行可延引、近江驛家事驚聞食、殊可有御沙汰、近衞前攝政基通○藤原幷山宮(院〈高倉〉御子也)等領、各雖不充所領等、只存別之忠勤可被勤一事之由各可被仰也云々、山門領事、又一切不可被免云々、　六日甲辰、以定經問群行日次於左右兩府、○藤原經宗、藤原實定、十四日(歸忌日、不出日、)十八日、(道虛日、)十九廿廿二日(重復日等、)此等間可被用何日哉、歸忌仁和例不快、重復日又殊可憚之上、有嘉應不吉之近例、十八日雖道虛、有准據之吉例等、(於群行無例、)可被計奏者、兩府共被申云、可被用十八日者、定經云、十八日辰日也、閤下御衰日如何者、理須被忌避也、然而於無他日者、強不可有憚歟、道虛之條猶可被預議、明旦召具兩大外記陰陽寮等可參之由仰之、群行依去夜院宣延引、早可仰兩國之由下知親雅了、　七日乙巳、此日召陰陽師三人、(頭宣憲、大膳權大夫安倍季弘、圖書頭加茂在宣、)問群行日次、陰陽之所撰、十四日十九廿廿一日等也、各有障、而余十八日可宜之由存之、仍昨日以定經問兩府、各申可然之由、猶依不審問本道、各申云、尤可也、隨例有道虛之例、(宜子女王、天長七年九月六日群行、其後無不吉事、)又攝政衰日群行例、近代吉例、多以如此、殆可求此例歟、仍一定可爲十八日之由仰下了、晚頭親雅來申條々事、群行驛家雜事、可然之所々、止度々各別之支配、定別所課被充本所云々、雖爲新儀爲成公事也、　八日丙午、親雅申、近江國柱門領驛家雜事、成定所課、各被申本所之請文等、各猶有對捍歟、仰可奏之由了、　九日丁未、及晚親雅申群行驛家雜事闕如之間事、又申儉非違使可及領狀云々、又裝束司基親朝臣參上、余問官廳御裝束之間事、大略所申似不存知、不足言歟、然間廣房參上、卽廣房先日所進覽之指圖先誤多、仍條々仰可改直之子細了、又申行幸入御門幷齋王出入(先例出入替其門也)門等事、余仰云、行幸可用東門、齋王入北門、可出南門歟、但退可仰一定者、基

於此條者、強不可被忌避歟、但浮橋事、無傾危者又何事有哉、　六月四日甲戌、親雅申詳行之間事、其中有前使判官事、中臣氏之中、猶堪事之輩、或二人或三人所被仰下也、今度可仰下三人之由下知了、　七月廿七日丙寅、此日定經來申、長奉送使奏通卿猶固辭、可辭申所帯之由、猶可奏聞之由仰之、今夜奏事於今者不可叶、只以消息可仕定長之由仰之、　八月二日庚午、今日召定經宗隆等仰條々事、目錄在別、齋宮寮官除目、幷同御禊前驅日時等定、今月上旬可被行其事未存歟、仍驚仰之、凡近代如此事、一切不存知、每度自上卿下之、前例全不然者也、末代每事如泥、可悲可悲、　廿九日丁酉、晚頭大夫史廣房來、○中略　此次持來官廳指圖、送延久例事等三箇條申之、

一幣裹所事

延久造曹司也、而當時無其屋、仍准小安殿例、於後房可裹歟云々、

仰可然

一入御門事

延久西門也、而無其門、仍可入御自東門歟云々、

仰可然、

一主上御休息所事

延久朝所也、而今御即位之時、以後房爲御所、今度於後房可裹幣、仍任延久例、猶可用朝所歟、

仰可用朝所

九月二日庚子、親雅來申云、伊勢國鈴鹿驛家、齋王御所已闕如了、爲申件事所上洛也云々、是郡司對捍之故云々、件事能保朝臣有申旨、仍可仰彼朝臣之由仰了、此日群行點地也、史上下向之、幷親雅可向之由仰之、而史上下已參野宮了之上、召遣伊勢國司爲季、爲仰驛家事也、又能保朝臣欲仰子細、仍無其隙之間、檢先例之處、多以辨不向、近則永曆例如此云々、　三日辛丑、未刻親雅來向能保朝臣亭、

屏風、敷綠端疊一枚、齋王座前南柱北邊傾艮坤妻敷葉薦、其上立短足机二前、其上內藏寮置幣二裹、(掌侍參入、令儲之云々、)御座北頭北柱內設關白座、(西面)其後廂一間敷廣筵、南北對座、敷綠端帖二枚、當殿東戶前母屋柱間、南北行鋪葉薦、其上立大宋御屏風一帖、(當屏代、此屏風元鏁子、西面立之、)其後戶南北廂、各置圓座一枚、爲關白座、高御座北階前供燈、(在打敷、)東南庭中務省西面相並置中臣忌部版位二、(白石也、西中臣、東忌部也、當殿東柱外壇內程、兩版間不及丈歟、)東軒廊東福門外(南面也)西廂第一間壁下、敷宣命上卿座、(南面、後立屏、前有旅突臺也、)同門內方(北面也)東廂設辨外記史內記座、其後召使座、(一二三間各中央南北行三疊敷之、)昭訓門內(西面也)北廂壁下鋪葉薦一枚、立置幣物八足、其西砌外當一間、引幔、當昭訓門去砌西丈餘又引幔、同門外以南張幔、設送齋王勅使、并御前長奉送使權中納言定房卿等以下座、(大納言殿并使還御、不被參、此座暫侍御殿壇上、令候次第給、)昭慶門內東廊設公卿座、小安殿中戶懸御簾、(有鈸付綱、)三馬道以東爲御所、其內殿見及兩殿間軒廊東西柱引幔、每柱有掌燈、(付木居云々、)

群行雜事爲成功、中宮亮季行卿沙汰進云々、讚岐重任功歟、後聞午刻王輿至于勢多、夜中可至也、而次第遲怠之間及今云々、近年橋損亡、仍用御船、國司沙汰云々、自餘長奉送使以下供奉雜人等用船、件船召北陸道受領、遣院北面并諸宮等祇候衞府四十餘人、分部著行事渡云々、然而不必尋遇之間、爲自然之擁怠、仍今更仰改、不依召奉行、隨到來渡之云々、大納言殿被仰云、山城人夫一切不參、仍野宮御物不能渡勢多頓宮、件沙汰之間御禊遲々、仍辨觸案內於上卿、不參向西河、留野宮沙汰具如服牛、參大極殿、仍上卿一向令行西河事給云々、御扇使藏人高階泰經著青色、有祿云々、垣下殿上人參西河云々、雖群行以後月中爲齋云々、　十四日己丑、今日齋宮令就寮給云々、　十八日癸巳、今夜長奉送使中納言(定房)歸參內、付藏人申事由云々、

〔玉海〕文治三年四月廿四日乙未、左少辨親雅申齋宮群行之間事、勢多橋於今者不可叶、先例自前年有沙汰猶難叶、況國土凋弊之時、更不可叶、天治例以御船有渡御、今度如何、可渡浮橋歟、仰云、天治例

可被著座歟可尋、次天皇召舍人、（二音）大舍人於昭訓門稱唯、次少納言信範代參、就東版跪候、次天皇宣、中臣忌部召々、少納言稱唯出、次中臣祭主親章卿著版、（西）忌部率後取就第二版位、（東也）次天皇宣、忌部參來古、忌部稱唯、昇自東軒廊南階、（東福門前階脱履）入自東戶、（闈司開扉）經屛風南參進、取外宮幣捧目上、於軒廊階、（殿東戶前階也）下傳授後取、後取取之、南柱中央北面捧目之上立、次忌部如前取內宮幣復本位、次天皇宣、中臣參來古、中臣稱唯參上、（其路如忌部）天皇勅曰云々、其御語不聞及、次中臣歸就版、卽忌部捧幣與中臣、退出、次天皇令刺御櫛於齋王額御歟、其間事、依候壁外不能旁記、次王輿自東福門寄殿東戶、闈司開扉、王輿出自昭訓門、美福門大路南行、出郁芳門、（辨申上卿云、待賢郁芳兩門出御、其例皆存、可用何門歟、上卿命云、可依天治例之由被仰下、可用郁芳門、又若當時禁忌有無可被尋者、郁芳門无憚云々、仍用彼門也、）宮城東大路南行、二條東行、於京極女房裝移網代車云々、東河前驅云云、大納言殿、（上卿也、中納言役也、而皆以故障云々、）宰相俊通卿撤弓箭垂纓供奉、次主上（○二條）還御小安殿、侍臣候脂燭、如初、改易御裝束、頭辨仰藏人云、齋王御輿不及眼路之程可有還御、早可令見、使者歸來曰、其程遠罷成畢者、仍出御、予與實宗見御座覆、寄御輿於壇上、予兼問頭辨云、今度上下如何、答云、无指所見、猶可寄壇下歟、此事如何、（先例多壇上歟、皆見舊記等、寔朝申、大將有思慮、可爲壇上之由被命、仍寄壇上也、）此間暫閉昭慶門、无上﨟、仍予取劒璽、无警蹕、公卿不列也、右大將立幔內東方、乘輿經本路還宮、于時丑刻、先陣猶出待賢門、太奇怪事也、於右衞門陣外、中臣供御麻、次下御南殿、予取劒璽供御草鞋、无警蹕鈴奏名謁等、今夜大將隨身不追前、留守權中納言雅教卿也、件人雖无指障、依不堪騎馬、被免前驅候留守歟、今朝供御湯云々、昨夕令洗御髮御云々、

御裝束儀

高御座以東二間、至于第三間身屋內、鋪滿葉薦、（南北行敷之、二枚也、）西間頗向巽方、裝飾御座、鋪南面端疊二枚、（艮坤妻、）其上供纐纈御半帖、其後立大宋御屛風一帖、其艮方北東戶間身屋內北柱南頭設齋王座、東西行鋪廣筵、其上東西行敷南面端疊二枚、其後東面柱間鋪筵薦、立大宋御屛風一帖、其後相副

（先例歟、不詳、）宮城東大路北行、入御陽明門、經建春建禮等門前、入御昭慶門、（不供大嘗例也、五位以上於門前下馬、此事如何、於廊角可下歟、然而猶存古體、大無益、頗詳、）安御輿於小安殿壇下、御輿下象敷筵、敷筵道於階上、（御輿壇上下事、先例相異、是依近例歟、壇下儀、例幣行幸之時、幣御小安殿之時儀歟、今日幣已在大極殿、何可有壇下儀歟、然而先々有沙汰云々、不知其奧儀、）此間仰陣官令閉昭慶門、（是例也、御所近門、爲禁雜人亂入歟、然而猶以群入、頗猥雜歟、）右大將跪幔內、（東方、此事可尋、若可被候西歟、）自餘公卿不列立、徘徊便所云々、宰相中將進開萑戶、取御劔、供御草鞋、取璽筥、閉萑戶之儀等如恒、入御戶御簾卷之、（鈎有之、）於此所又無警蹕也、下御後、御輿安西廊邊、大刀契置小安殿南壇上、自東第三間置之、次右府被著昭慶門東腋座、自餘公卿不著、次供御厨子所腋御膳、（雖六齋日、依神事供魚味云々、）然而依仰不供云々、上卿被問幣備否之由歟、其間事不見及、次著御帛御裝束、（無御襪、其儀有御不審、又職事不申謹況云々、但建禮門行幸時無之云々、今夜自內藏寮相具奉之云々、）頭辨少將通能奉仕云々、（齋王參入之由聞食、可著御歟、然而猶以著御云々、）次供御手水、頭辨供之、及子剋、齋王猶不參給、是山城人者一切不參之間、每事懈怠云々、于時小雨、須臾晴畢、不及笠、子終剋、齋王參入、（入藻壁門歟、可尋、）御前大納言雅通卿、宰相公保卿、信能朝臣也、王輿駐嘉喜門外、（居久禮止古云々、）行事左中辨雅賴朝臣參入小安殿、頭辨申事由、次主上渡御大極殿、（簾供筵道、筵上供兩面、）頭辨候御（關白依隆長死去、不參給也、侍臣乘燭候、本定軒廊据、左右幔內也、不入大極殿云々、然而兩三參入如何之、）藏人三人、以明持御笏筥、時盛持式筥、兼光齎額櫛筥、參從、可相連御後、而大遲怠、次內侍一人參上、藏人皇后宮大進長方扶持御劔璽、在小安殿、內侍一人留候守護、次御座定、召御笏、頭辨獻之、次中臣獻大麻、於北面東戶外、內侍傳取奉之返給、此戶開閉、闈司進止之、闈司二人東面戶內著座也、次御拜、次令長方被仰齋王可參入之由、長方向嘉喜門、超閾仰寮頭季信、次王輿寄大極殿北面東一戶、向東寄之、闈司開扉、次行事辨、自昭訓門相具女房、參入御輿邊、具几帳、今二人可參、而各對捍不下車、良久頻遣催、逼參入、雅賴季信等引導件二人、無几帳、又遣取之間太遲、次齋王下御、闈司閉扉、王輿居東軒廊北方東福門西第二門、先是右大臣起昭慶門座、懸北幷東廊內幷東登廊柱內上官座北邊、至東福門、著西腋座、（南面、半帖下敷筵、後小筵、前康突小筵也、）立內記入、宣命於筥、置上卿前、次召使王、（召使傳召、）給、重出昭訓門、內記取空筥、上卿經本路還、著本座、若中臣忌部退出之後、

天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立天、高天原爾千木高知氏、稱辭定奉留天照坐須皇大神乃御杖代東定申氏、三年之間齋侍波良牟喜子內親王乎、依例氏奉賜布九月神嘗乃大幣帛度共爾奉出給牟度勢之間爾自然遲怠乃事等出來之後乎、彌齋潔天、去廿日奉出給之處爾、風雨之難又以出來勢里、如此乃事等乎怪比思食天、神祇官陰陽寮爾令問給爾、官八依不淨事氏、可有口舌幷不快事加度申仁、寮八理運天災之上仁、神事不淨不信乃所致加登勘申勢利、如此農違例之事、心乃外爾天志、非所知須、不盧爾懈怠勢留登母古在良牟登恐懼利所念行天奈牟、吉日良辰遠擇定天、王散位從五位下致重王、中臣從五位下行神祇權大祐大中臣朝臣親隆等乎差使氏、忌部正六位上行神祇史齋部宿禰俊房加弱肩爾太繦取掛氏、禮代乃大幣乎持齋移令捧持氏奉出給部、皇大神此口乎平久聞食氏、天皇朝廷乎寶位无勵久、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸倍奉賜比氏、天下泰平爾守恤給止倍恐美恐美毛申給止波久申、

仁平三年九月廿一日

〔山槐記〕永曆元年九月八日癸未、今日齋宮(後白河院第二女、二品好子、號高倉殿、)群行也、上卿大納言殿、未刻令參野宮給云々、予秉燭參內、先是召仰云々、頭辨仰右大臣、亥刻出御南殿、聞食齋宮出野宮之由、可出御也、然而里內程遠之故、不待歸參、便出御也、近衞引陣、(頭辨仰陣可引之由、)陰陽頭賀茂有憲朝臣奉仕御反閇、(公卿列雖在西南、御自御帳西方出御也、)退出之時、於堂下給祿、次左將渡、(御輿在西門也、)御輿長隨身等相從、公卿(右大臣即大將也、宰相中將俊通卿、左京大夫隆季卿列立、中宮亮季行卿、以上兩人非參議、自餘各有憚不參、)予〇(藤原忠親)右少將通能見御輿御座、直進御輿葱花、寄南階、依神事無鈴奏之故也、宰相中將離列副御輿、脫靴昇殿、開簾戶取御劒、置御輿、跪御輿東北、可被退置弓之所歟如何、宸儀乘輿、無警蹕、相公不取御草鞋、不可進璽、內侍前東豎驚申、仍更歸取御草鞋、賜東豎、事々無威儀、次取璽宮入輦中、閉戶、此間將監出大刀契、依里亭共候也、御輿出御西門、不仰御綱、高倉北行西行、(先陣入待賢門、大將已欲入門內之間、頭辨可入御陽明門之由誠仰、仍更大將以下赴陽明門、自餘皆入待賢門畢、此亦太奇怪事也、召仰時蹤不仰歟、以外事也、此間齋院御大膳職、仍被憚云々、此事

〔台記〕康治三年〇天養元年九月五日癸丑、參院白河、師能云、齋宮〇鳥羽皇女研子下向伊勢之間、路次奏樂舞、而件裝束可用列見裝束之由、有執政之命者、予承諾、歸宅之後、召左近將監近方、仰云、舞裝束不可損、注下向舞人等交名可奉、若有損者可召勘之故也、　七日乙卯、少納言俊長來云、依爲齋宮職事、御供下向、可給馬者、則給了、又長奉送使權中納言公能卿、及左少辨師能許各馬一匹送之、爲同行事群行事、招宗輔卿、入夜被來、

仁平三年九月十四日庚子、頭朝隆朝臣曰、上〇近衞疾未平、仍廿日群行、不可幸大極殿、依天慶元年例也、　廿日丙午、自昨日甚雨、自酉剋大風、折木發屋、人民驚駭、今日齋宮群行也、天皇依疾不幸、關白參入省行事、是天慶元年依御物忌不幸之例也、是吏部王記民部卿宗輔卿行宣命事、西河東河皆中納言不候、左金吾忌日、自餘或服、或疾云々、申剋許大內記遠明持來宣命草、余問曰、先是不可內覽之由示上卿了、何持來示、答曰、雖被免內覽事既希有、猶可持參之由上卿所被命也、卽令遠明讀之、畢歸參、申剋許皇后宮權大夫兼長西河前駈參野宮、〇中略傳聞東西河原頓宮、大風吹壞、又吹壞勢多頓宮、仍群行延引、及夜半權大夫退出、其次參內云々、傳聞齋王未出野宮間、未參入省云々、後聞新造內裏南殿半顚倒、依大風也、　廿一日丁未、巳剋頭朝隆朝臣來曰、夜前大風非常災也、仍今日被行御占、上卿左衞門督、重通、齋宮上也、又曰、上目疾、近日殊增云々、〇中略酉剋兼長參野宮、螺鈿劒有文帶、无魚袋、具靴和鞍、用唐鞍鞦鞦、口並付杏葉、隨身蠻繪平胡籙、馬副四人、戌時許大內記遠明內覽宣命草、齋王昨日不發向之由、幷御占趣載之、遠明語曰、泰親密語曰、齋王不合神慮、故有風雨災之由所見也、而諱避不書之者、遠明卽歸參、深更歸、齋王就入省、關白差備云々、後日民部卿曰、關白不召餘人、五位口信、藏人範家、奉關白命、出巽角壇上、仰中臣忌部可就之由、又仰忌部中臣可參上之由、齋王就入省之後所退出也、西河大納言宗能、中納言重通、重通留馬、進不供奉、至于東河者替馬供奉、參議兼長、敎長、東河中納言重通、雖皆稱障、仍兼兩方、有先例云々、參議資信、長奉送使中納言忠基、今朝大地震、天慶元年群行日地震、見吏部王記今日亦地震、天道不失先跡歟、

○藤原敎通所令參仕給也、　十月五日、巳刻許右中辨正家朝臣持來造齋宮使覆勘之文、予示辨云、依爲輕服所辭申也、齋宮事、早令申左大臣殿、可令他人奉件事歟、○二所大神宮例文、齋宮記並爲三年、

〔經信卿記〕承曆四年九月九日戊戌、早旦越中守公盛朝臣、傳送殿御消息、其殿旨云、長奉送使、仁和以後無遣源氏例云々、若可有憚事歟、又彼年以前未能尋得者、令申云、長奉送使可被忌避源氏之由、所未知給也、若自不能宛歟、事情源氏本出皇裔、何憚可候乎、信大臣初賜此姓、仍其前此例定難歟者、十日巳亥、午剋參入、○中略宣云、長奉送使不遣源氏之由、惟無指故、依久無例、遣春宮大夫歟、至于遣大納言之事有何難乎、申云、源氏不可遣者、大納言何事候哉、

〔中右記〕寬治三年九月十五日、有齋宮○白河皇女善子群行、予勤仕、西河前駈源大納言師忠、治部卿俊明兩宰相中將基忠、保實、四位四人、政長、宗信、顯中、予、公卿有文帶螺鈿劍革鞦杏葉、四位巡方帶螺鈿劍楚鞦杏葉、□宰相中將隨身撥繪平胡籙、人々蘇芳淡手綱、上卿治部卿、辨基綱、有行幸大極殿、長奉送使皇后宮權大夫公實、辨基綱、寮頭敦憲、勅別當周防守敦基朝臣、東河前駈不記置、今夜行幸無音奏、

〔榮花物語四十紫野〕齋宮には、故内大臣殿の女御○藤原能長女道子の御はらのひめ宮女○白河皇善子居させ給ぬ、おぼつかなからんことを女御殿は覺しなげかせ給、○中略かくて六月○寬治三年つごもりかたにゐさせ給ぬ、○中略齋宮も母女御ぐし奉りてくだらせ給ぬ、久しくなる事もなければ、昔をいまにこそげに覺えける、いつともなくて、くだる女房の心ちども、あはれならんかし、京に思人などあらん人々、ましていかにおもはん、げすなどのあゆみつゞきて、物のぐ馬などにぐしていくらんいと哀なり、

〔一代要記白河〕後宮

女御從四位下藤原朝臣道子、内大臣能長一女、母贈從三位源濟政女、延久元年八月廿二日入太子（白河）宮、廿八、同五年七月廿三日爲女御、叙從四位下、承保二年十二月廿八日准三后、卅四、生善子内親王之後、退禁隱不入内、寬治三年九月十五日、善子内親王向大神宮之日、同輿發于伊勢國不歸京、

打合天、各頓血流出、一志頓宮ニ、使部等隨身馱俄斃亡、是則十三日朝見付ケリ、仍十五日御祭參宮事、祭主可定申之由案內被仰之處、祭主申云、尤可爲穢氣也者、而檢非違使右衞門尉惟宗公方申云、更不可爲穢、早可有御參宮也、何者依件定、內親王參宮一定畢天、竹河乃御祓之後、齋王俄御汗ニ御坐了、因之齋宮西鳥居許ニ暫御輿ヲ奉下居天、中納言殿、幷左少辨近江守藤原朝臣奏憲此由ヲ議定給天、直ニ御汗殿ニ御輿ヲ可奉仕之由被定之處、寮頭被申云、御汗殿如此非常乃御汗御遷坐之由云々、而何事乃最初ニ先穢所殿ニ著御哉、於事尤有憚、猶今日許御殿乃內今入坐給天、以明日御汗殿可遷坐之由具也、依件定著給、以十四日卯時御汗殿移坐給已了、

〔榮花物語 三十八松の下枝〕齋宮には、當代〇後三條の女二宮〇俊子ゐさせ給へりつる、九月〇延久三年にくだらせ給ふ、あはれなることゞもおほかり、大極殿にてわかれの御くしなどのほど、いとあはれなり、御くしあげさせ給ひて、いとかう〳〵しくしたてゝおはします、この三年ばかり見たてまつらせ給はざりつるをだに、おぼつかなくあかずおもひたてまつらせ給つるを、けふよりのち、またはいつかはとおぼしめす、いみじくあはれなり、とみにもゐざりいでさせ給はで、いみじくなげかせ給をゝ、みたてまつらせ給ひけん、御こゝろのうちもいかばかりおぼしめしけん、あめいたうふりて、なにのはえなくうちよりも、一ほんのみや〇禖子、俊子同母姉、よりも、にようばうひさくるまづゝたてまつらせ給ふ、かへらせ給ひても、うへは齋宮の御ことをあはれにおぼしめす、〇十三代要略爲九月二十三日事、

〔水左記〕承保二年八月八日、今日齋宮除目、余〇源俊房行此事、宰相左大辨伊房卿、除目五通、一通前後次第、一通裝束司、一通國司、二通寮官文武官、定文三通、一通齋王陪從、一通送齋王勅使、一通長奉送使、勘文三通、一通群行日時勘文、一通點地勘文、一通裝束司出居勘文、於出居勘文者不經奏聞、上卿直下辨、自餘皆奏之、定文三通、群行日勘文下外記、點地勘文下辨、文官除目下式部、武官除目下兵部、外記三度申如例、　九月廿日、此日齋王〇敦賢親王女淳子群行也、有行幸大極殿、關白殿

賑ニ據ルニ、兼通ノ子ニシテ廣幡ト號シ、公卿補任ニ、此年四月權中納言ニ任ズトアリ、然ルニ玉葉和歌集ニ、此歌ヲ載セテ、其詞書ニ、規子內親王伊勢のいつきにてくだり侍りけるに、中納言庶明、長奉送使にてかへりまうしの時、祿など給て人々歌よみ侍けるに、トアリテ、中納言ヲ源庶明ノ事ト爲シタレド、庶明ハ是ヨリ先天曆九年ニ薨ジタレバ其誤ナルコト灼然タリ、

〔日本紀略一條九〕永延二年九月三日丁亥、御燈、依齋宮群行停止、但廢務、　廿日甲辰、伊勢齋宮群行、(恭子女王)有行幸、

〔日本紀略三條十二〕長和三年八月卅日癸未、於朱雀門大祓、依齋王群行也、　九月三日丙戌、止御燈、依有齋王群行也、　九日壬辰、依齋王群行、止重陽宴、但平座見參、　廿日癸卯、伊勢齋內親王、(當子)今上第一皇女、(御年十四)參向大神宮、

〔大鏡三條一〕齋宮のくだらせ給ふ(○當子女、三條皇)わかれの御櫛さゝせ給ひては、かたみに見かへらせ給はぬことを、おもひかけぬに、此院(○三條)はむかせ給へりし、あやしとは見奉しものをとぞ、入道殿(○藤原道長)おほせられける、

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長曆二年九月十一日、齋宮(○良子)群行、

〔春記〕長曆二年十月四日丁卯、早旦參御前、(○中略)仰云、群行是國家重事也、聞前例、必於路次非無小愁、而此度無一民之歎、從類無拾遺之心、是尤本意也、又路間右衞門督(○藤原資平)忘身奉仕之由、人々所語也、聞悅不少、此事我一生之大事也、今如本意遂畢、是只長奉送使之德也、返々所悅也者、

〔大神宮諸雜事記一〕永承三年九月八日、嘉子內親王參著齋宮群行、中臣祭主從五位上行神祇大副永輔朝臣也、(祭主卿使)寮頭正五位下平朝臣雅康兼齋宮監勘使、史伴兼國等也、仍宮司明輔依爲造宮使二ケ度供給勤仕、抑齋宮御群行之間、非常事多々出來レリ、　九月八日、粟田口ニ天シ、馬足ニ犬蹈斃、甲賀頓宮ニハ、長奉送使乃侍從中納言藤原朝臣信長乃御房駄斃、鈴河頓宮ニハ、女別當雜色與寮頭雜色

世にふればまたもこえけり鈴鹿山むかしの今になるにやあるらん

〔新古今和歌集 雜十七〕むすめの齋宮〇規子にぐして、くだり侍りて、おほよどの浦にみそぎし侍るとて、

女御徽子女王

おほよどのうらに立波かへらずは松のかはらぬ色を見ましや〇齋宮女御集ニハ、大よどの浦たつ浪のかへらずはかはらぬ松の色を見ましや、ニ作ル、

〔河海抄 賢木五〕おやそひてくだり給れいも、ことになければ、〇中略齋宮女御徽子式部卿重明親王女、母貞信公女、承平六年爲齋宮、歸京之後、天暦二年十二月入内、同三年四月爲女御、生規子女王、此女王爲齋宮、參向伊勢之時、母女御被相伴、雖模此例、延喜以後近代の事なれば、さればれいもことになけれど、ゝいふか、此物語は、古今准據なき事をばのせざるなり、

〇按ズルニ、日本紀略ニ、齋王規子ノ御母徽子、齋王ト共ニ伊勢ニ下向シ給ヒシ時、先例ナキニ由リ、留メシムベキ由ノ宣旨アリトアレドモ、上文拾遺和歌集等ニ據レバ、猶ホ共ニ下向アリシナリ、

〔源順集〕伊勢齋宮規子内親王の群行の後長奉送使ひろはたの中納言京にかへり給ふあした、齋王の御前にて饗まうけ祿等給ふに、男女歌よむに奉る、

神のます山田の原の鶴の子はかへるよりこそ千世はかぞへめ

〇按ズルニ、上ノ伊勢齋宮ハ注ニ云ヘルガ如ク規子ニシテ、下ノ齋王ハ其御母前齋宮徽子ナリ、時ニ京ニ在リテ長奉送使ヲ饗シ給ヒシナリ、歌ハ山田ニ住シ給ヘル齋王ヲ子ノ緣語ヲ取リテ鶴ノ卵ニ比シ、長奉送使ノ京ニ歸レルヲ孵化ノ緣語ト爲シ、鶴ノ孵化シテヨリ千歳ヲ歷ベシト云ヒテ、御母ノ爲ニ御子ヲ祝スルナリ、

又按ズルニ、此齋王ノ群行ハ、貞元二年九月ニシテ、廣幡中納言ハ藤原顯光ナリ、顯光ハ尊卑分

もみちばをぬさと手向てちらしつゝ秋とゝもにやゆかんとすらん

〔貞信公記〕天慶元年九月十五日、齋王〇重明親王女徽子出從八省之後微雨、參八省出無伊勢齋王、依御物忌皇帝不幸、仍以黃楊木小櫛、愁加齋王額、是准據元慶代九月例幣、帝王勅詞、先太閤〇藤原基經仰中臣之例所加也、自餘事外史記之、〇又見日本紀略、本朝世紀、齋宮記、二所大神宮例文、

〔日本紀略村上三〕天曆三年七月十七日戊午、伊勢齋王〇重明親王女悅子裝束使召名給式部、　九月七日丁未、依齋宮群行、於朱雀門行大祓、

〔九曆〕天曆三年九月廿三日、齋王下伊勢、戌刻自野宮向西河、同刻天皇幸八省、丑刻齋王參八省、依有上達部多故障、長奉送使中納言在衡奏宣命、寅一刻進發、二刻上還宮云々、〇又見日本紀略

〔西宮記臨時五〕天曆三年九月廿三日、小一條記云、今日齋王下向伊勢、按察中納言爲長奉送使、天皇御八省院、依齋王遲參臨口、廿四日寅刻還御云々、

〔日本紀略村上四〕天德元年八月廿九日癸未、於朱雀門大祓、依可有齋宮群行也、　九月五日、伊勢齋宮樂子內親王禊西河、參向伊勢、天皇幸八省院發遣之、

〔日本紀略圓融六〕天祿二年九月三日乙未、停止御燈、依齋王〇章明親王女隆子群行也、無廢務、　九日辛丑、止重陽宴、依齋王群行也、但有平座見參、　廿三日乙卯、齋宮群行也、齋王自野宮臨葛野河行禊、參大極殿、天皇同行幸、發遣之、

貞元二年九月三日庚寅、御燈停止、依齋王群行也、　十三日庚子、大祓、齋宮群行也、　十六日癸卯、伊勢齋宮規子內親王從野宮禊西河、參向伊勢齋宮、天皇出自承明門建禮門、御宴安〇宴安二字恐小誤殿奉送、

十七日甲辰、宣旨、伊勢齋王母女御〇村上女御徽子相從下向、是無先例、早可令留者、

〔拾遺和歌集雜八〕圓融院御時、齋宮〇村上皇女規子くだり侍けるに、母の前齋宮〇村上女御徽子もろともにこえ侍て、

齋宮女御

（依夜闌、權在此座）勅召舍人、舍人稱唯、（豫置版二枚、殿東南庭、中務丞一人率舍人五人、侯昭訓門內階下、侯兩有宜、令侯殿東砌下一許丈）即少納言令扶王代趁、自軒廊上昇殿、北面跪、勅曰云々、（少納言跪第二版、唯、西侯夜闌、拜兩有跪、自軒廊上、令參入）出昭訓門、召之、即中臣安則等唯、不付版位、（先例中臣就第一版、忌部就第二版、後取等從之、而依不用此儀云々）勅云々、了中臣等出、天皇御小安殿、齋宮頭具輿、引輿自近廊中門南出、自廊中西進、候殿東戶廊、即內侍闈司開戶、齋王乘輿出昭訓門、至八省東路、南行至郁芳門路、東折至美福門路、南行即出東[illegible]門云云、（寬平三年、承平三年、路如此也云々）

昌泰二年九月八日、齋王參侯伊勢、於會坂驛、九日巳剋到勢多、十日甲賀、十一日垂水、十二日鈴鹿、十三日壹志、十四日依馬落胎穢留壹志、同日到離宮、依未齋宮修理、十五日又離宮有馬落胎、仍齋王不參入、十六七日祭幣使爲過穢不參祭、但去十五日辨官給祿歸京、廿日幣使等過五ヶ日參內外宮奉幣、廿一日幣使歸京、

〔日本紀略（二十朱雀）〕承平三年九月三日丙子、止御燈、無庶務、今月齋王女○（醍醐皇雅子）可參向伊勢之故也、

〔西宮記（臨時五）〕承平三年九月廿六日、內侍在前程、於小安殿裹幣、置於机上云々、又御座幷齋王座後立屏風一帖云々、東福門西第一間壁南邊、設給宣命座、同門北東掖、在外記內記座、昭訓門內北掖壁邊、敷葉薦一枚、立幣案二脚、同門外南掖、設勅使幷長奉送使御前等座、小安殿北廊敷座如常、自餘裝東同昌泰例、天皇御大極殿、王輿入自嘉喜門、寮頭助副之到殿北東第一階壇上、駕丁等滅火退出、此間闈司開戶、王入著座、即閉戶云々、勅使幷長奉送使起昭慶門座、著昭訓門座、天皇召舍人、舍人四人於殿東軒廊西二門砌上唯云々、少納言與平代進、自軒廊昇殿北面跪云々、中臣等退出、右大臣就東福門座、少內記忠範宣命入宮、出自東福門、置上前云々、闈司開戶、齋王乘輿云々、

〔後撰和歌集（十九離別）〕西四條の齋宮女○（醍醐皇雅子）の、九月晦日くだりはべりけるともなる人に、ぬさつかはすとて、

三日戊戌、詔齋内親王行禊、改二十四日定二十五日、　廿五日庚子、天皇御大極殿、發遣伊勢齋内親王、　卅日乙巳、奉送伊勢齋内親王使中納言藤原朝臣山蔭二十八日奏狀、今日申時到來稱、今日巳時、王輿出自近江國垂水頓宮、酉時到伊勢國鈴鹿頓宮、戌時西垣之外、一借屋火、内親王乘更衣滋野朝臣直子車、出於頓宮、即遣守藤原朝臣繼蔭、看督近衞等救止、不能撲滅、西風差扇、火勢甚熾、遂及寢殿匣殿等、延燒四屋、以垣外借屋爲寢殿、安置内親王、召問寮司、申云、火發自舍人長礒部豐瀧宿舍也、賜山蔭手勅曰、須過七箇日入齋宮、若有物煩不可過七日者、解謝早可入、

〔西宮記臨時五〕齋宮三度禊

群行

寛平三年九月四日辛亥、群行、左大臣就左近陣行敍位事、先例齋王參大神宮時、以中臣五位爲幣使、仍大副有本充使、而依病辭之、仍敍少副時常爲使云、勅召舍人、舍人候昭訓門内口唯、少納言公幹代入自同門、就第二版位云々、

寛平三年九月四日、中臣出了云、檢舊例、有故者有宣命、無故者無宣命、仍今日無宣命云々、

昌泰二年九、八己亥、齋王〇宇多皇女柔子參伊勢、仍廢務、早朝左大臣〇藤原時平就左近陣、仰外記令問八省裝束了不、又令問齋王進發河原不之由、申四刻、齋王進發了者、即幸八省云云、御座設高御座東、東向、在殿東第四間、御後立屏風二帖、　齋王座去御座東北二丈、南向設之、在殿東三間、後立屏風二帖、　置幣料薦一枚、敷於殿東第二間、南北爲妻、以短足机二前立薦上、内藏寮幣二裹置机上、當殿東戸第一間、西面立屏風一帖、闈司座置同戸内南北、用菅圓座、小安殿幷北廊公卿已下座如常、長奉送使中納言國經參入、候北廊座云々、天皇御大極殿、中臣神祇大副安則入自昭訓門、到東北頭奉御麻、内侍取奉之、了返授、中臣受之、自同門退出、齋王入自北門東掖門、檢先例、陪從公卿從輿參入、而此般不從、立候昭訓門外、依夜闇也、不可爲例、昇自殿北面東一戸階、於壇上下輿就座、即閉戸持去空輿、候東軒廊北方西二間壇上、奉送勅使幷陪從公卿等、候軒廊南面壇上、昭訓門外南腋、依例有祇候之座、而

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年六月廿一日己巳、伊勢齋內親王〈○繁子〉應取近江國新道入於大神宮、仍下知伊勢國、又停伊賀國舊路頓宮、下知伊賀國、　廿三日辛未、任伊勢齋內親王裝束司、正五位下行神祇大副大中臣朝臣有本、左近衞少將正五位下兼守左中辨行備前權介藤原朝臣有穗、六位已下六人、　八月十四日庚申、任伊勢齋內親王行禊次第司、以從五位上守左少辨兼行式部少輔藤原朝臣佐世爲御前長官、式部大丞正六位上藤原朝臣輿範爲判官、大錄正六位上香山宿禰弘行爲主典、兵部少輔從五位下橘朝臣茂行爲御後長官、大丞正六位上藤原朝臣安柯爲判官、少錄正六位上山田宿禰方輿爲主典、於式部省除、以中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有、參議正四位下行右衞督藤原朝臣諸葛、參議正四位下行皇太后宮大夫兼播磨守藤原朝臣國經、參議正四位下行左近衞中將兼近江權守藤原朝臣有實、從四位上行左京大夫在原朝臣守平、從四位上行右馬頭藤原朝臣門宗、從四位上行左馬頭藤原朝臣利基、左近衞少將正五位下兼守左中辨行備前權介藤原朝臣有穗等八人、爲行禊陪從、以正三位行中納言兼民部卿陸奧出羽按察使在原朝臣行平、參議左大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相、治部卿正四位下源朝臣本有、散位從四位上源朝臣長猷等四人、爲送齋內親王使、以中納言從三位藤原朝臣山蔭、左近衞少將正五位下兼守左中辨行備前權介藤原朝臣有穗、右大史正六位上惟宗朝臣安兄、中務少丞從六位上藤原朝臣高用等四人、爲長奉送使、　廿日丙寅、勅以從四位上行兵部大輔四支王、從四位上行彈正大弼雅望王、散位從四位上源朝臣載有、散位從四位下源朝臣有等四人、爲齋內親王入伊勢大神宮前駈、　廿九日乙亥晦、大祓於朱雀門前、以齋內親王來月應入伊勢大神宮也、　九月五日庚辰、停齋內親王行禊之事、以去二日中務省犬死穢未滿忌限也、　七日壬午、齋內親王今日修禊葛野河、九日擬入大神宮、內親王忽有月事、亦太政大臣堀河邊第犬死、觸穢之人參入內裏、由是停不行、　十七日壬辰、內裏犬死、齋內親王今月十九日欲修解除、依穢而停、公卿於左衞門陣、召神祇官陰陽寮、占定吉日、更二十四日爲期、　廿

大神宮、仍預令點檢、　八月十八日己未、大祓於建禮門前、以伊勢齋內親王可入大神宮故也、　廿四日乙丑、伊勢齋內親王臨葛野河修禊、勅遣中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣氏宗監禊事、　廿九日庚午、大祓於朱雀門前、以伊勢齋內親王九月一日將入大神宮故也、　九月壬申朔、勅遣右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相、侍從三位源朝臣全姬、向八省院、發遣伊勢齋內親王、　九日庚辰、重陽節、〇中略　是月、伊勢齋內親王入大神宮、由是無用宣命、不舉音樂、亦不著靴、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年七月五日癸巳、以正五位下守權左中辨藤原朝臣春景從五位上行神祇大副大中臣朝臣有本等、並六位六人、任伊勢齋內親王裝束司、　八月十九日丙子、任伊勢齋內親王行禊前後次第司、以從五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣道眞為前次第司長官、判官一人、主典一人、從五位上行兵部少輔藤原朝臣時長為後次第司長官、判官一人、主典一人、以正三位行中納言兼右近衞大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世、參議從三位行左衞門督兼美濃守源朝臣能有、宮內卿正四位下源朝臣覺、中宮大夫從四位下藤原朝臣國經等、為送伊勢齋內親王使、參議從三位行治部卿兼備中守在原朝臣行平、正五位下守權左中辨兼行木工頭藤原朝臣春景、右大史正六位上與道宿禰春宗、中務大丞正六位上藤原朝臣高處〇處恐庭誤為長送伊勢齋內親王使、　九月三日庚寅、停御齋燒燈之事、以伊勢齋內親王〇識子清和皇女可入齋宮也、　八日乙未、大祓於朱雀門前、以明日伊勢齋內親王可進發也、　九日丙申、伊勢齋內親王入齋宮、是日早朝、臨葛野河以修禊事、即使參入豐樂院、天皇御豐樂院、令發內親王、天皇喚中臣神祇大副大中臣朝臣有本、稱唯昇殿跪侍、右大臣〇藤原基經代天皇勅曰、常毛奉進留九月神嘗幣帛爾、汝中臣如常久申天奉進禮止宣、有本稱唯、又勅、今奉進留齋內親王波、此依恒例天、三箇年間波齋淸天、天照大神乃御杖代爾定天奉進留內親王曾、內臣宜爾吉久申天奉進禮止宣、有本稱唯、降殿退出、是時天子幼少、右大臣攝政、故行此事、齋內親王駕輿、出自朱雀門掖門、東向就路、乘輿還宮、　廿日丁未、送伊勢齋內親王使參議在原朝臣行平復命、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜五年八月庚午、遣使祓淨天下諸國、以齋內親王〇酒人將向伊勢也、　九月己亥、齋內親王向于伊勢、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年八月丙戌、天皇行幸平城宮、先是朝原內親王齋居平城、至是齋期既竟、將向伊勢神宮、故車駕親臨發入、　九月己亥、齋內親王向伊勢大神宮、百官陪從、至大和國堺而還、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年七月庚午、遣使祓畿內七道諸國、以齋內親王〇布勢將入伊勢也、　八月己卯、祓於埴川、　丙申、奉幣帛於伊勢大神宮、以齋內親王將入齋宮也、　九月甲辰、齋內親王發野宮赴伊勢、遣侍從從四位下中臣王、參議正四位下藤原朝臣乙叡等送焉、是月禁京畿百姓奉北辰燈、以齋內親王入伊勢齋宮也、

〔日本後紀十七平城〕大同三年九月癸未、〇四日齋內親王〇大原向伊勢、

〔大神宮諸雜事記一〕大同三年九月四日、大原內親王參著於齋宮、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁二年八月辛卯、齋內親王〇仁子禊于葛野川、諸司陪從如常、　九月壬辰朔、禁今月祭北辰、擧哀改葬等事、以齋內親王入伊勢也、　乙未、齋內親王入伊勢、諸司陪從如常、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年八月辛丑、齋內親王〇久子祓于賀茂川、爲可入伊勢齋宮也、　九月丁未、天皇御大極殿、發遣齋內親王於伊勢大神宮、

〔文德實錄四〕仁壽二年閏八月丁亥、大祓於建禮門前、伊勢齋內親王〇晏子將參大神宮、故有此祓、　戊子、伊勢齋內親王禊於鴨川、　癸巳、大祓於朱雀門前、伊勢齋內親王將參大神宮、故重有此祓、　九月庚子、伊勢齋內親王參大神宮、帝御大極殿、以遣之、自餘如常儀、中納言正三位安倍朝臣安仁、右中辨從五位上橘朝臣海雄等爲長奉送使、

〔三代實錄五淸和〕貞觀三年六月九日壬子、任伊勢齋內親王〇文德皇女恬子裝束使、大祓於建禮門前、　廿一日甲子、下知近江伊賀伊勢國等國司、役夫一百人、馬二百九十五匹、來九月四日、伊勢齋內親王將入

天慶元年八月廿三日

〔類聚符宣抄〕一太政官符近江伊勢兩國司
應忌擧哀改葬事
右得神祇官解偁、齋内親王來九月十一日、應向伊勢齋宮、今依前例、起九月一日迄卅日、應忌如件者、兩國承知、依例行之、符到奉行、
左少辨正五位下　右大史
長暦二年八月廿五日
件符不載京職、仍遣問史許、申云、依天暦三年符案所行也者、已違式意、若彼符書落京職歟、

〔倭姫命世紀〕大足彥忍代別天皇(景行)○二十年庚寅歲、倭姫命年既老耆不能仕奉、吾日足止(奴)宜天、齋内親王仁可仕奉物部八十氏人々定給天、十二司寮官等(道)波、奉移五百野皇女久須姫命、卽春二月辛巳朔日甲申、遣五百野皇女於皇大神乃御杖代止天、多氣宮造奉天、齋愼美令侍給支。伊勢齋宮群行始是也。

〔日本書紀二十九天武〕三年(甲戌)○十月乙酉、大來皇女、自泊瀨齋宮向伊勢神宮、

〔大神宮諸雜事記一〕白鳳四年(甲戌○天武三年)九月十三日仁、多基子内親王參入於大神宮給利(倍)、
○按ズルニ、朱鳥元年マデハ、大來皇女ノ奉祀セラレシコト日本書紀ニ見エタレバ、白鳳四年ニ多基子内親王參入ノ事ハ誤ナルベシ、

〔續日本紀七元正〕養老元年四月乙亥、遣久勢女王、侍于伊勢大神宮、從官賜祿各有差、是日發入、百官送至京城外而還、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年九月壬子、先是縣女王爲齋王、至是發入、大臣已下送出門外、諸司亦送至京外而還、

依方經、其用度裹藥油絁六尺五寸、紙十八張、木綿五兩、篩二口、料絹四尺、治篩一口、料紗二尺、酢二升、炭五斗、納藥小折櫃一合、搗藥夫十二人、一人日搗一劑、食米二斗四升、一人日二升、鹽二合四勺、一人日二勺、

〔延喜式五齋宮〕凡頓宮者、近江國國府、甲賀、垂水、伊勢國鈴鹿、壹志、總五所、並國司依例營造、所須稻近江一萬五千束、伊勢二萬三千束、鋪設雜器及供給、總用此內、

〔延喜式二十六主稅〕凡齋內親王向伊勢國者、造頓宮并雜用料稻、近江國一萬二千束、伊勢國二萬二千束、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡齋內親王參入之日、飯野郡櫛田河浮橋者、大神宮司專當其事、令神郡人臨時營作、歸京之日亦准此、

〔延喜式五齋宮〕凡齋王將入大神宮之時、自九月一日迄卅日、京畿內伊勢近江等國、不得奉燈北辰及擧哀改葬、

〔類聚符宣抄一〕太政官符左右京并五畿內近江伊勢等國

應以來九月爲齋月事

右齋王來九月十五日、應入伊勢大神宮、從三位守大納言兼行民部卿中宮大夫平朝臣伊望宣、宜彼月之內爲齋月者、宜承知依宣行之、符到奉行、

右大史檜前宿禰忠明

天慶元年八月廿三日

左少辨正五位下兼行文章博士伊豫介大江朝臣朝綱

太政官符左右京職并五畿內諸國司

應禁來九月內奉燈北辰事

右得神祇官解偁、齋王九月十五日、可參入伊勢大神宮、今依前例、可禁如件者、職國承知、依件行之、符到奉行、

左少辨――　　右大史――

坩二口、手洗二口、洗盤二口、壷鉢二口、筋坩二口、杓三柄、匏四柄、打刀子一枚、檜杤卌枝、壁代紗帳一具、所須秘錦三尺四寸、錦五丈七尺一寸、紫纈帛一匹、染紫綾三丈八尺、淺紫綾一匹五丈一尺一寸、深紫帛二丈八尺、淺紫帛一匹一丈三尺六寸、緋綾二匹八尺五寸、油絁十匹三尺六寸、練紗二匹三丈、紫絲十二斤五兩、紫革五張、獨犴皮二張、熊皮七張、簏小一斤、白簏大四兩、錬金小十一兩一分二銖、銀大五斤十一兩、水銀小五斤三兩、青砥二顆、驪黒葛七兩、韉鞍橋二具、已上請内藏寮、兩面六匹一丈一尺七寸、緋帛十七匹五丈八尺九寸、緋東絁二丈九尺一寸、綠帛五匹九寸、纈帛六匹四丈三尺、紺東絁四匹二丈二尺、黃帛八匹五丈九尺三寸、生綾三丈一尺三寸、白綾一匹三丈一尺二寸、帛八尺、橡東絁二匹、帛廿一匹二丈二尺、生絁十四匹五丈五尺七寸、東絁三丈二尺二寸、包綾三丈七尺、緋絲十九斤一兩、綠絲一斤一兩、紺絲四兩、纈絲一斤三兩、黃絲十四兩、橡絲八兩、練絲二斤九兩二分、生絲一斤二兩、調綿五十三屯一兩、纈細布一丈七尺、紺調布二段一丈四尺、纈調布六十三段三丈一尺、細布一段一丈、調布一百五段三丈五尺、紵布三丈、商布十七段一丈六尺、藍四圍、紅花大廿一斤二兩、漆三斗九升五勺、熟麻大一斤八兩、苧小二斤二分、東席三枚、出雲席二枚、葛野席十一枚、葉薦四枚、洗革三張、牛皮一張、膠大一斤、木賊一斤、伊豫砥七顆、金薄卌枚、熟銅大五十七斤七兩、半熟銅十八斤、鐵五十一斤四兩、調韓櫃七合、薄紙七十三張、紙三百廿四張、墨二廷、筆十管、掃墨九升一合、黒葛五斤、油四升五合、一升五合荏、二升椴椒、一升胡麻、荒筥四合、糯米八升二合、小麥一斗二升二合、酢三斗五升、榻榑十五材、柏廿把、匏四柄、篦一百隻、朴十材各徑一尺、厚三寸、櫻十六材各長二尺五寸、方三寸、槻卌四材一材長三尺、徑八寸、厚三寸、一材長一尺二寸、徑九寸、四材各長三尺、厚方一寸二分、二材各長一尺八寸、徑八寸、二材各長一尺七寸、徑一尺、三材各長一尺、徑八寸、四材各方一尺八寸、厚八寸、一材方九寸、四材各長一尺八寸、厚方一寸二分、十二材各長六尺、方三寸五分、篦竹三百七十株、檜榑五十三材、簀子十五枚、步板十枚、五六寸桁四枚、八多板四枚、知佐木卌五枝、萱廿把、荒炭廿二石二斗、和炭九十四石一斗、針卌枝、頭巾八十八條、已上申官請受

〔延喜式三十七典藥〕凡齋内親王向大神宮、充長送使藥十二劑、七氣丸、吳茱萸丸、芍藥丸、四味理仲丸、干薑丸、遼東丸各二劑、所須藥種各

屯、布四段、宮主、舍人、䉼部、膳部、門部主典各絁二匹、綿四屯、布三段、史生、大舍人寮舍人、及諸司番上等各絹一匹、綿二屯、布二段、寮使部各布二段、飼丁令良各布一段、其命婦者、雜色綾廿匹、綿卅屯、布廿段、乳母各雜色帛、綾十四匹、綿廿屯、布十三段、一等女孺各雜色帛十匹、綿十屯、布五段、二等女孺各雜色帛八匹、綿七屯、布四段、三等女孺各絹六匹、綿五屯、布三段、殿守各雜色帛四匹、綿四屯、布二段、女丁各雜色帛二匹二丈五尺、貲布一段、綿四屯、戶座、火炬小子各絹二匹二丈、綿四屯、布二段、縹布一丈五尺、

凡從行群官以下給馬、主神司中臣、忌部、宮主各二匹、頭四匹、助三匹、諸司主典以上各二匹、番上各一匹、其命婦四匹、乳母幷女孺各三匹、輿長及殿守各一匹、其監送使及飼丁、女丁、宮主、卜部等家口不在給限、其將從四位六匹、五位五匹、餘准馬數、品官不要者、在前發遣、

凡御馬二匹、女孺乘馬六匹、並以左右馬寮馬充之、若有死失者請替、

〔延喜式（四十八左右馬寮）〕凡齋王、〇中略其向伊勢者、鞍馬十三匹、迄近江國府、（藏人已下女孺已上料）永充四匹、（一匹御馬、自餘女孺料、其鞍官備、若有闕失、部補之、）

〔延喜式（五齋宮）〕造備雜物

輿一具、下案一脚、（白木）腰輿一具、蓋一具、翳二枚、笠二枚、（一日笠、一雨笠、）胡床二脚、床一脚、（白木）御鞍二具、命婦鞍一具、（已上毛韉）女孺鞍四具、（纈韉）文斑幔四條、斗帳一具、（方一丈二尺、高七尺五寸、）皂頭巾八十八條、裓八十八條、縹布褶衣五十七領、縹布衣九十六領、布袴一百五十三腰、布帶一百五十三條、褶八十條、歷布八十八條、歷纏八十八條、袜八十八兩、沐槽一口、下案一脚、（漆塗）洗槽一口、下案一脚、（漆塗）小槽一口、彤木一具、納韓櫃一合、輕幄一具、紺絁幕一具、四尺屏風四帖、藥韓櫃一合、下案一脚、（漆塗）銀飯筥一合、銀酒盞一具、銀鍋子一口、銀水鋺一合、銀匕一枚、板飯筥二合、小膳櫃一合、膳櫃六合、下案六脚、厨韓櫃一合、膳案三脚、酒案一脚、粥案一脚、切案一脚、明櫃一合、（加二筥形）柳筥七合、龜筥四合、紵巾一條、絹篩五口、調布篩二口、帘七口、拭布三條、（長各一丈）塗漆樽二合、塗漆匜一口、塗漆手洗二口、轆轤槽二口、捧坩三口、木盤七口、負甌四口、平甌二口、陶

左少辨正五位下兼行左衞門權佐土左權守平朝臣

驛鈴一口剋依位階、京職不給、

〔延喜式五齋宮〕凡齋內親王向伊勢時、七月以前、遣寮允史生各一人於齋宮及國、辨備雜事、

〔新任辨官抄〕齋宮群行、幷歸京行事、辨官第一大事也、驛家事兼難催行、近代國力難叶、庄園大略不勤仕、數日旅行、公私大事也、

〔神祇官年中行事臨時〕一齋宮卜定

群行之時、供奉官人、副祐史自野宮至于官廳供奉、國供奉副使四人、長官送使、召幣使、記錄使一人、卜部氏人勤之、群行之時、松尾社奉幣、使中臣官人

〔神祇官年中行事臨時〕齋宮群行

副使中臣忌部卜部、記錄使卜部、同時淸祓使、左右京職一人、五畿內一人、七道各一人、神部各二人、三ケ國使一人、伊勢宮司近江

〔延喜式四十二左右京〕凡齋王臨河祓除、及向伊勢者、進屬各一人、史生一人、將坊令二人兵士十人前驅、

〔延喜式五齋宮〕凡齋內親王三年齋終、四月上旬任裝束司、五位二人、神祇副以上一人、左右少辨以上一人、六位以下四人、諸司主典以上、諸司史生六人、雜使十人、散位六位子四人、雜工卅人、簡取內匠木工隼人等寮司長上以下諸部等爲之、共作廿人、取仕丁充之、女孺廿人、直丁二人、同旬於神祇官西院始行事、五位以下給明衣、史生以上各絹四丈五尺、女孺各三丈、女雜工以上各布二丈六尺、共作及直丁不在給例、其食依常例、

凡齋內親王臨行、預定監送使、參議一人、或以中納言充之辨一人、史一人、六位以下官人一人、即使及齋宮官人以下皆賜裝束、使四位布十段、五位布五段、六位絁一匹、綿一屯、布一段、唯忌部布三段、齋宮頭絹十匹、綿廿屯、布廿段、助絹八匹、綿十五屯、布十五段、主神司中臣、忌部、寮允、舍人司長、膳部司長各絹四匹、綿六屯、布五段、寮屬、藏部、炊部、酒部、水部、女部、殿部、藥部、掃部、門部、馬部長、及二司判官等絹三匹、綿五

使從五位下大中臣朝臣爲元

太政官符近江伊勢兩國幷大神宮司

使正六位上大中臣朝臣政助

太政官符東海道諸國司

使正六位上大中臣朝臣頼助

太政官符東山道諸國司

使正六位上行神祇少祐大中臣朝臣元範

太政官符北陸道諸國司

使從五位下大中臣朝臣爲輔

太政官符山陰道諸國司

使正六位上大中臣朝臣公象

太政官符山陽道諸國司

使正六位上大中臣朝臣致時

太政官符南海道諸國司

使正六位上行神祇大祐大中臣朝臣永輔

太政官符太宰府

使從五位下行神祇少副大中臣朝臣惟盛

右得神祇官解偁、伊勢齋王來九月十一日、可參入大神宮、仍爲令祓淸諸國、差件人宛使、依例申送者、發遣如件、諸國承知、依例行之、符到奉行、

長暦二年八月廿五日　右大史正六位上高橋朝臣

人率坊令坊長姓於羅城外、東西相對分列、左京西面北上、右京東面北上、朝使者坐中央南向、訖卽解除、其齋內親王入大神宮時大祓料物幷儀式亦准此、

〔延喜式五齋宮〕凡齋王將入大神宮、在前七月、若八月、同時遣大祓使、左右京一人、五畿內一人、七道各一人、

凡齋王將入大神宮八月晦日朝廷大祓、(中略)

六處堺川供奉御禊、山城勢多川、近江甲賀川、伊勢鈴鹿川、下樋小川、多氣川、御荒服六具、料庸布六段、鐵人像十二枚、木綿麻各六斤、酒米各六升、鰒堅魚各六斤、腊六升、鹽六升、海藻雜海藻各六斤、𤭖六口、筥四口、各長一尺七寸、席一枚、夫三人、

凡齋內親王在路、每至山城近江伊勢等堺、勢多鈴鹿下樋多氣川等、遣神部卜部各二人在前鎭祓之、所須鐵人像十二枚、布衣六領、裳六腰、以庸布一段作一衣一裳、木綿麻各六斤、米酒各六升、鰒堅魚各六斤、腊鹽各六升、海藻雜海藻各六斤、雜盛六籠、筥𤭖六口、筥四合、方一尺七寸、席薦各一枚、夫三人、其路次社幣料、絹一匹、絲五絇、綿五屯、木綿一斤、麻二斤、又頓宮五處大殿祭料、安藝木綿卅枚、凡木綿一斤、亦路間儲幣料、絁一匹、綿五屯、絲五絇、木綿大一斤、麻大一斤、卜龜甲一枚、並主神司請領祭之、其鎭祓等料者、請受京庫、

〔類聚符宣抄一〕太政官符左右京職

使正六位上大中臣朝臣爲通

右得神祇官解偁、伊勢齋王來月十一日、可參入大神宮、仍爲令祓淸京中、差件人宛使、依例申送者、發遣如件、兩職承知、依例行之、符到奉行、

右大史正六位上高橋朝臣文俊

長曆二年八月廿五日

左少辨正五位下兼行左衛門權佐土左權守平朝臣定親

太政官符五畿內諸國司

行事辨令奏王與可出宮城門可用何門由間、仰依某年例云々、多經八省東路南行出都芳門、
又南折至二條東行至京極云々、往年用美福門、然而門無實年久、
次還小安殿、次內親王去一許町、(以不見爲限) 後改御服還宮、(不稱警蹕、無鈴奏、)
齋王到京極、勅使等留、(或於東河邊留)
寮頭仰云、自是還參氏平留仕ッさ申、
長奉送使相代奉仕

〔柱史抄 下 帝王〕伊勢齋王退出并卜定參向事
天皇卽位後、先朝御宇齋王必退出之時、有宣命奉幣、(若凶事之時無奉幣) 一如伊勢幣儀、又其替卜定之時、有宣命并奉幣事、齋王參向之時、上卿著陣、被奏宣命之後、天皇行幸八省院、(雖御坐離宮必有行幸) 件參向必有此事、仍十一日例幣雖非式日、其使所被奉也、淸書奏、或於八省上卿奏之、(件宣命役於陣奏之、大內記無指障必可參勤也、入省役者六位可直也) 王卿著北廊座、上卿召內記、內記持參宣命、(入筥) 時刻齋王入自藻壁門、進留昭慶門艮角待事、奏齋王參向之由、天皇自小安殿渡御大極殿、齋王輿入自嘉喜門、著大極殿北壇、上卿起座、著東福門南西腋座、行事外記史座在同門北東腋、內記捧宣命參進、仰云、中臣忌部召ㇾ、中臣忌部等進、賜幣物如恒、
中臣奉勅語退出、上卿召使賜宣命之後齋王退、

〔禁秘御抄 中〕神事次第
齋宮群行殊神事也、止音奏警蹕、但堀川院御時、間々有管絃興、又不憚作文之由在舊記、但神事日如此事無詮事歟、

〔延喜式 五 齋宮〕凡齋王出自野宮、入大神宮、臨於川頭在前爲禊、(定日時、方同上)

〔延喜式 四十二 左右京〕凡踐祚大嘗大祓所須、馬一匹、劒九口、鍬九口、鹿皮九張、紙四百五十張、木綿六十三枚、苧小九斤、稻九束、米鹽各九斗、鮭九隻、堅魚鰒海藻各九連、柏九把、食薦九枚、(條列均分買備之、其價充稻錢、但馬申官請受、) 官

次天皇喚舍人、(音二)大舍人四人稱唯、(於昭訓門內壇下屏幔稱之)
少納言代趨、就巽角地版跪候、
天皇勅、中臣忌部召(世)、稱唯退出召云云、
中臣忌部就版立、(中臣就一版、忌部就二版、卜部在後、)
次勅、忌部參來、稱唯昇、自東福門南階、自東軒廊南砌上、進御座前、膝行拍手、取外宮幣退出、授後取者、
又參入拍手、取內宮幣退下、復本位、
勅、中臣參來、稱唯昇、自同階、膝行候御座巽方一許丈、(乾面)
勅、常(毛)奉進(留)九月神嘗幣帛(乎)、汝中臣如常(久)申(天)奉(禮止)宣、中臣稱唯、又勅、令奉進齋內親王者、此依恒例(氐)、三箇年間(波)齋清(氐)、天照大神(乃)御杖代(仁)定奉進內親王(乎)、中臣宜(久)吉(久)申(氐)奉進(禮止)宣、
次中臣稱唯、下就版位、次忌部捧幣、與中臣退出、
次天皇召額櫛筥、次藏人頭執件筥付內侍、內侍取筥開蓋、置御座左方席上、(蓋置北、身置南、)
內侍奉仰進齋王許、申可近參給由、
親王近候御前、(御乳母奉抱、女房捧几帳隱候、)
天皇以櫛刺加其額、勅、京(乃)方(仁)趣(支)給(不)奈、
次內侍以櫛筥給親王乳母、(件櫛今夜刺之、王勢多頓宮納筥云々、)
此間大臣、就東福門南面西掖座、(內記置宣命、)
召使王給宣命、次大臣令奏可給使王御馬由、勅許畢仰外記、
次長奉送使、令奏路次間非違濫行、任法可糺彈由、勅許、(聞食)次闈司開東面戶、次王輿入自東福門、寄於件戶下、次親王出自東戶、乘輿出自昭訓門、(勅使公卿以下相從、女房等候御後、)

次行幸無給奏、不等譯依騎馬行幸、可候大刀契等、

御裝束前例御大內畔者、著給帛御衣、而今年依御堀川院可渡大路給、又諸司可騎馬、仍可著位服、

御輿葱華同前例

至宮城、經待賢昭慶等門、御小安殿、六位於待賢門下馬、五位以上於入舍東北下馬、

次改著帛御裝束、次齋王西川禊畢、入自藻壁門、御於嘉喜門外、先是於藻壁門外参御輿、上臈以下下馬、女騎不下、留立入舍乾角、承曆四年、女房車等列立昭慶門前、

次行事辨奏齋王候由、此間東川勅使、幷長奉送使等、起昭慶門東座、著昭訓門外座、

次主上御輿、此間闈司著大極殿座、

次宸儀渡御大極殿、經道上鋪兩面、藏人持候御笏式幷齋王額櫛筥等、此櫛先仰作物所、以黃楊木令作、長二寸許、入金銀蒔繪筥、方寸四松折枝幷鶴等蒔之、

神璽寶劍等留小安殿、令掌侍一人守護之、延久例

御座定後召御笏、次中臣取御麻、候北面東一戸外、

內侍於戸內傳取奉獻

宸儀一撫一吻返給、內侍中臣受之退出、

次宸儀端笏拜御幣、兩段再拜次令五位藏人仰齋王可參入給由、前例或用六位、而長曆延久等例如此、奉仰向嘉喜門、召寮頭仰之、

次齋王入自嘉喜門、御前幷寮頭馬相扶、內侍及乳母二人、侍者二人、童女四人從之、近代女房三人、執几帳祗候之、

次王輿登自殿北面東第一階、登候同戸下、女房下自昭慶門、是前例也云々、

闈司開戸、齋王入自同戸著座、

闈司閉戸歸著東戸座、王輿暫置東軒廊北面西第二間、駕丁等滅火暫退出

先是若及昏黑者、供燈於高御座北、又主殿官人供炬火、南庭

齋王座南御座東小巽向、鋪羽薦一枚、（子午妻）

立小机二脚、置御幣料、（昌泰記、南北爲妻、寛平三年記、幣後立屏風一帖、）

東戸前當階下以東、差東進南北行鋪葉薦、（西面）

立御屏風、爲屏代、

其屏風後戸南北腋、各置菅圓座一枚、（關司座）

御座北敷兩面帖一枚、爲關白座、（卯酉）

東南庭中務省東西、並置中臣齋部版位二枚、中臣立西、齋部立東、（第二版者、東南去四尺、斜去一尺云々、）並量天覽程置之、

東軒廊東福門南面西腋、敷上卿座、有膝突、（南面）

同門北面戸以東、敷少納言外記史内記座、如常、並西面二行、

昭訓門北腋鋪薦立机、亦如常儀、（壁邊敷葉薦一枚、立案二脚、）

同門西壇下去二許丈、庭中立幔一條、

同門東面南腋設勅使長奉送使御前等上卿四位以上大夫座、（如御齋會時座、）東西對座北爲上、但非參議四位座差絶席、（南方敷之、）

其廻懸幔、其北三間設齋宮陪從女騎下馬休息座、其廻懸幔、其内鋪設、（是無舊例、而天暦十年、仰左近衛中將朝成朝臣所行、）

昭慶門北面西腋五間、設執柄休息所、

早旦御湯殿、内侍以下、向八省令裹幣、

次行幸召仰、奏宣命草并清書、

若有使可叙五位者、此間叙之、

次申齋王出野宮了由、（自藏人所遣小舍人令案内申之、長暦聞食至西川給上後、有行幸、）

北東戸奉麻、內侍傳之、齋王參入、(藏人鎰輿入自嘉喜門、停北東壇立云々、女房一兩候、闈司候戸內、齋王著南面□□座、王幼乳母抱之、有唐衣裳玉裙等、必不上髮爲宜、)天皇召少納言如例、氏々參進立版、召如常、(詞在大嘗式、氏々昇自東福門前小階、入自殿東戸、執幣奉御旨、)天皇以小櫛加王額、(藏人御作物所、令作入小櫛筥、內侍取筆、奉加櫛之間、天皇示不向京由云々、承平攝政加櫛、良親例、依御物忌云々、)給宣命如例、(過十一日者、宜令加延引歟、)王自殿東戸乘輿、出自昭訓門、(勅使等候昭訓門東南座、待王出、長奉送使共相從、)勅使等留京極、(寮頭仰云、自是還參天、平仕給へ、勅使以下再拜、諸司或自京極歸、或自會坂歸、)次於白河有禊、會坂樂、打出濱樂、近江國中每頓宮有樂祿、栗太旅店手水有樂、(中臣氏使多用神祇官人五位以上、而或有例、○中略)

清涼記云、聞食齋王輿到門之由、御大極殿、(藏人持候小櫛、)中臣奉大麻、天皇拜御幣、次令藏人仰齋王可參之由、齋王於殿東北隅下輿、入自北面東戸就座、勅召舍人云々、了少納言進趁跪云々、召中臣勅、常爾毛奉進留九月神嘗乃幣帛毛、汝中臣如常爾申天奉禮止宣、中臣稱唯、又勅、令奉進齋內親王、以此依恒例天、三箇年間波齋清天、天照大神乃御杖代爾定天奉進內親王毛、中臣宜爾吉久申氐奉進禮止宣、中臣稱唯、下殿云々、了天皇召刺櫛、其筥內侍取置御座前、內侍進齋王許、示可進候之由、親王進御前、天皇以櫛刺其額、此間大臣給宣旨於使王云々、王輿出東廊一許町、(以不見爲限、)還御、

〔江家次第十二神事〕齋王群行

前一日、小安殿裝束如常儀、

但東四間南方皆立亘布障子、第三間立大床子、(皇后與幼主御時、有別裝束、)

大極殿高御座以東、至于第三間母屋內、鋪滿葉薦、西二間南北行鋪廣筵、第二間內差進西當階下、少向巽裝飾御座、鋪兩面端帖二枚、其上鋪二色綾端帖、(中帖)後立墨容御屏風、(近例又立大宋御屏風、)其艮方東戸間母屋內北柱頭、設齋王御座、東西行鋪廣筵、其上鋪緣端帖二枚、前鋪小筵、後東西柱間鋪薦筵、立山水御屏風、(近例又立大宋御屏風、)從小安殿北戸內、至于大極殿御座許、鋪葉薦、(其上加兩面、如常、○中略近代以筵代葉薦、)

祥行

いすゞ川たのむこゝろはにごらぬをなどわたるせの猶よどむらん

〔歷代皇紀 後醍醐〕齋宮

祥子內親王　當今皇女、母〇藤原廉子　同東宮、元弘三年十二月廿八日卜定、

〔延喜式 五齋宮〕凡齋內親王發日、所司預設御座於大極後殿、天皇御後殿、(不御)神祇官五位中臣進御麻、史一人行麻於侍從五位以上、時剋御大極殿、齋內親王下輿、入就殿上座、事訖向大神宮、(事見儀式)

〔延喜式 三十八掃部〕凡齋內親王入伊勢齋宮者、於大極殿高御座左直東戶、設御座東向、(鋪高麗帖各二枚、上加六尺御帖一枚、)後樹屏風、自御前東去一間、設置幣案薦一枚、自北方東戶南進一間、鋪內親王座南向、(鋪綠帖二枚、上加兩面短帖一枚、)後樹屏風、

〔延喜式 八祝詞〕齋內親王參入時

進神嘗幣詞申畢、次卽申云、辭別(氏)申給(久)、今進(流)齋內親王(波)、依恒例(氏)、三年齋(比)淸(麻波理氏)、御杖代(止)定(氏)進給事(波)、皇御孫之尊(乎)、天地日月(止)共(爾)常磐(爾)堅磐(爾)、平(久)安(久)御坐坐(志米武止)、御杖代(止)進給(布)御命(乎)、大中臣茂(イカシホコ)桙中取持(氏)、恐(美)恐(美毛)申給(久止)申、

〔西宮記 臨時五〕齋宮三度禊

祥行(大略同入野宮儀)

大臣著陣、任裝束司次第司、(兵閑式部)下定御前、大中納言各一人、參議二人、四位四人、(以上勅使)中納言參議各一人、四位六人、(四人二人)長奉送使、(中納言若參議、辨、史、中務丞各一人、)以上奏聞、下外記、遣檢非違使看督使、〇此間恐有脫文、任寮官、(度々任本宮請、以負名代事任門部司、別紙給兵部、)遣五畿七道近江伊勢祓使、本宮遣先使判官、以月晦朱雀門大祓、當日西河禊、(先例禊後日有祥行、在十一日、先例幣付此使、)請寮印、(仰山城、主神司印請神宮、)依本宮申、遣臨時(所御禊)出車、(公卿出)輿侍候、自野宮著西河、(供奉公卿留八省、寮頭供奉、或記云、十二司自八省相從云々、)齋王著幄、水部供手水、中臣奉麻、(傳節折)御禊供膳、(山城獻物、或止、)御前著幄前、(有突重、給祿、)奉幣松尾、(寮官神祇官共爲使)著八省、(入自藻壁門、奉麻)天皇行八省、主水供御手水、次御大極殿、(御高座東面)中臣自

子、巳刻、親經來門外、（依物忌也、春日依異也、）申云、初齋宮成功之輩、今夜欲申任、而件用途自關東進濟了、其上何樣可候哉之由、今日於院定長所申也、然而已進納私物了、遂不可默止、猶被任宜歟如何、仰云、此事素御禊以後可被任之由仰了、而依用途不足、成傍輩之勇爲、令進殘成功等、先以可被任之由依申請、悲被許之歟、而彼用途已以進納之歟、殘用途不可有不足、仍無成功之要歟、然御禊以後、最前被拜任、尤可宜歟、親經諾、　廿一日甲子、此日被改勘初齋宮入野宮之御禊日時、（本今日也、而依用途不具、延引、）有點地事、上卿實宗卿、及晩藏人辨親經持來日時□□、依物忌不披見、此次申初齋宮間條々事、　廿八日辛未、此日初齋宮禊西河入野宮之日也、公家及余神齋、先日依藏人來催、獻輿侍車牛、東川御禊之時、進齋王御車牛、而於入御野宮御禊者被用御輿也、仍被召輿侍牛歟、定經云、今日可御覽前驅哉、（所雜色等也、）如何、仰云、寬治天仁天治皆依降雨無御覽、嘉應依御物忌無御覽、今日不雨、又非御物忌、可御覽歟者、又云、牛車如何、余云、被用御輿之時、若不覽歟、先例未檢見者也、後聞不覽牛、御覽前驅云々、依雨頭不參、定經候御前云々、

〔百練抄 十四 四條〕曆仁元年九月八日庚辰、初齋宮（○後嵯峨皇女愷子）禊東河、（冷泉末、）入御左近府、　廿二日甲午、初齋宮禊東河、（一條末、）入御野宮、月中兩度禊、天祿例也、

〔增鏡 十五 村時雨〕后の宮（○後醍醐后）の御腹の一品内親王（○懽子）御うらにあはせたまひて、こぞの冬ごろより御きよまはりありつる、けふあす齋宮に居たまふ、八月廿日、（○元弘元年）まづ河原へいでさせたまひて、やがて野の宮にいらせ給ふ、その程のことゞもいみじうきよらなり、

〔南方紀傳 上〕八月廿四日、（○元弘元年）戌刻主上（○後醍醐）行幸南都又笠置山、中宮（○禧子）赴野宮、秀房供奉、（于時一品公主（懽子）立齋宮、在野宮、）

〔新葉和歌集 九 神祇〕野宮に久しく侍りける比、夢のつげありて、大神宮へ百首歌よみて奉りける中に
祥子内親王

藏人所前駈、雜色二人、所衆四人勤仕之、

前駈

大納言隆季　中納言家宗　參議資實　成頼

四位四人

左近少將定能朝臣　右馬頭親信朝臣　右少將有房朝臣　能登守通盛朝臣

五位四人

左衛門佐信基　左兵衛佐盛頼　越後守時實　近江守實教

信基供奉儀、闕腋袍巡方帶螺鈿劒著靴、和鞍付杏葉結唐尾、隨身雖著蠻繪袍、依近例令略了、

〔玉海〕文治二年八月十六日庚寅、定經來、申初齋宮(高倉皇女潔子)藏人方雜事、　十七日辛卯、今日親經參上、申犬死穢之由、然而初齋宮事、無可奉行之辨、上可違亂、仍過穢猶可沙汰之由仰了、　廿四日戊戌、申刻藏人次官定經來云、初齋宮藏人方事、用途闕如、可召付任官功之由雖被仰下、敢無進納之者、期日已近、大事欲闕、自關東進兩社行幸召物云々、先欲借渡如何者、仰云、件所進物本數如何、委相尋可令申、隨其數可計仰也者、入夜藏人辨親經申云、父俊經入道、自今朝至只今(申刻)不寢驚、大略不辨前後、奉行事繁多、爲之如何、但隨今夕明旦有樣、重可申一定者、　廿六日庚子、早旦召大夫史廣房仰云、初齋宮行事辨親經、依父俊經入道所勞危急籠居西郊云々、其間事且仰行事官、且尋親經、殊可致其沙汰、期日近近、奉行違亂之間、神事定闕如歟、尤不便者、〇中略凡近日出仕辨、只親經一人也、光長依所勞、籠居及數月、(就中於神事者、依爲造興福寺長官、不可叶歟、)兼忠依病爲湯治下向有間、基親在西海、定長候天王寺、(此人依爲法皇之御近習、一切不奉行公事、云々、)仍一切無所受取初齋宮事之辨、仍親經父雖及危急、猶不能辭退者也、定經來申云、頼朝卿所進兩社行幸召物五千五百餘匹也、今所申請三千匹也云々、余云、本數非幾歟、申請三千匹宜歟者、　廿七日辛丑、此日初齋宮西河御禊前驅定也、上卿實宗卿、依居所遼遠、免内覽、　九月九日壬

桃花色裝白裙、乳母代以下女騎宮馬次藏人陪從、雜色二人、所衆六人爲先、雜色差泥障、同四月禊前駈儀、次□□□使長官、兵部少輔平時範、作法從同前、長官巡方付魚袋、雜色所□□□□前駈料所被差遣也、而今日行列已以相違、若先規歟、金作車、次二車、次走童左兵衞□官人二十餘人、爲傳相副、次勅使輿侍車、次右兵衞、次□□次第使、次官判官兵部丞、同式部、次右衞門等尉以下、次後次第使主典兵部錄次本院女房出車六兩、女房五兩二十人、著紅葉重、童女一兩人、關白殿下以下、上達部殿上人多被扈從、今日供奉中、春宮藏人中務丞橘爲綱供奉本省、褐衣狩袴胡籙等也、藏人右近將監高階爲章供奉本陣、位袍平胡籙壓巾等也、不具小舍人、

〔兵範記〕嘉應元年九月十七日庚午、初齋宮○後白河皇女惇子自一本御書所禊于東河、可入給野宮、上卿左衞門督實國卿、右中辨長方朝臣、行事下官○平信範參內、藏人兵部大輔光雅日來申沙汰齋宮事、今日同前、藏人所前駈雜色藤原爲成、高階知章、所衆中原康言、同友長、清原定弘、源安元等參集、先給懷紙、以奏事由之處、依御物忌不可有御覽、早可參齋宮御所由被仰含了、

垣下侍臣以下

左近中將賴定朝臣　右少將顯信朝臣　左兵衞佐盛賴　右少將公綱　藏人右衞門尉藤親光

同高階仲基已上著青色袍　所衆四人同差定

以上先參諸司、次可參河原云々、

先是藏人親光爲勅使參向彼宮、其儀如例云々、侍中預祿歸參內了、依御禊乘輿儀、不被獻攝政家牛、又近江山城牛无御覽事、晚頭下官參殿下之間、右中辨參會、令申云、御禊事具、女房乘出車、已欲出御之間、齋王月障事御坐、御禊延否可有議定歟、早可院奏由有仰、又馳參院了、入夜歸參、无左右可延引云々、齋王御年十二、不可有此障由、內々被相存處、不慮故障、臨時大事也、嚴重神事、若有不信事歟、可愼可恐、　廿七日庚辰、今日初齋宮禊于東河、入給野宮、去十七日延引之故、今日上卿左衞門督實國先參內、被勘申日時、次右少辨引率參大膳職、被行御禊事云々、於內裏无前駈御覽事、依御物忌也、藏人所扇去十七日被獻了、仍今日无勅使事、垣下侍臣四位五位六位各二人參仕之、

獻後有祿、(大褂一重)卿相已下各々有差、寄御輿、亥始到給野宮、予不著座能出、左宰相中將同出、宰相中將云、左衛門督(被遣教)被責冠、心神惱亂、自一條辻退去者、還給之後有作法、然而依入夜直以退出、不預祿、依早出也、今日行列次第不能追記、式部輔乘唐鞍、大錄同乘唐鞍歟、不能具見也、歸家之後、馬部給匹絹、居飼信濃二端、車依典侍消息今日送之、(右衛門乳母)今日左衛門督稱陽病自途中退去如何、閑廻思慮、公役之上、既是神事、又非宿人、未得其意計也、左相國敎喩歟、今日典侍乘擯榔毛車、依无絲毛車、

〔左經記〕寬仁元年七月廿一日、史明義來向語云、源大納言御妹(前齋宮女別當)近曾死去、仍不可行齋宮事之由、令明義被奏事由畢、　九月廿一日丙辰、未剋於門外除服、齋王(○具平親王女嫥子)禊東河、(二條末)入野宮、其道從待賢門出給天、東仁行給天、自東乃洞院大路南仁行給天、自二條大路東仁行給天、御河原祓所事、二條西仁行給天、從東乃洞院大路北仁行給天、從一條大路西仁行給天、御坐野宮、經一條院北路之間、供奉諸司不下馬、仍兼被召仰諸陣云々、

〔爲房卿記〕承曆三年九月八日癸酉、今日伊勢齋宮(今上〈白河〉第一皇女、諱媞子、)自大膳職禊東河、(酉刻)亥刻還御野宮、其路經一條大路渡、晴次第、本宮中臣(副例祓物)京職前次第使主典(式部錄)神祇官、次八省幷被管諸司、除諸陵四獄外、三分以下一司四人、彈正勘解由同以供奉、前次第使判官(式部丞橘仲俊、和鞍付杏葉、手振二人、)次左衛門尉以下、次左兵衛尉以下、次前次第使長官(式部少輔菅原在良、束帶如例巡方、)著靴、唐鞍銀面尾袋杏葉如例、馬副四人、(中二人臈)手振四人、(裝束等如祭使)次侍從五位四人、(刑部少輔源成宗、侍從同雅實、宮內大輔藤師季、侍從同定實、)四位四人、(春宮權亮藤公定朝臣、前越前守同家道朝臣、太皇太后權亮源道時朝臣、右馬頭兼實朝臣、)件侍從等爲先下﨟供奉、皆倭鞍楚鞦杏葉、巡方、著靴、五位人々、皆雜色六人、令裝束、兼實師季雅實定實等、各申所々御隨身爲纔、次公卿四人、參議二人、左中將藤宗俊卿、(倭鞍杏葉、馬副□鐙繪井雜色、)左大辨同伊房、(鞍、馬副同前、雜色兩三人、先年參宮爲左大辨供奉、此時祿、官掌二人、辨侍二人、令居從、今年無之如何、)中納言(左大將同師道卿、鏡杏葉、馬副六人、番長以下隨身六人、著蠻繪平胡籙、驚羽出行、居從無雜色、)大納言(太皇太后大夫源俊房卿、鞍同前、馬副八人、雜色兩三、)次左右近將監以下、次勅別當、(左近中將藤家忠朝臣、倭鞍杏葉、西宮記唐鞍者、)次王輿、(步障左右、)在紫蓋屏繖等、(宮輿)走童、(左右官人以下二十餘人、爲傳相副、)御膳具膳部、(四人、淺黃袍、)內舍人(四人、)

十八日己亥、伊勢齋内親王臨鴨水、修禊事、即便入野宮、大納言正三位兼行右近衛大將太皇太后宮大夫藤原朝臣良世、率參議以下奉從行事、

〔日本紀略（三村上）〕天暦元年九月十日辛酉、定齋王（〇重明親王女悅子）初度御禊御前、　廿五日丙子、伊勢齋王禊東河、入主殿寮、　二年九月廿六日、伊勢齋王禊東河、入野宮、

〔貞信公記〕天暦二年八月七日、中使有相朝臣來云、初齋宮申入野宮料絹四百卅餘匹、内二百匹、代以錢被給者、

〔日本紀略（六圓融）〕貞元元年二月十七日甲寅、桂芳坊犬死穢、仍來十九日齋王（〇村上皇女規子）禊延引、　廿三日庚申、於建禮門大祓、去十九日齋王禊延引故也、　廿六日癸亥、伊勢齋王禊、遷座侍從廚家、　九月廿一日甲申、伊勢齋宮從侍從廚禊東河入野宮、

〔小右記〕長和二年九月八日丁酉、右衛門督（懷平）告送云、齋王入野宮之日一定、來廿七日、即加送行事上行成卿責、　廿七日丙辰、今日伊勢齋内親王（今上〈三條〉女〇當子）行禊也、予（〇藤原實資）可供奉、仍先修諷誦於三ヶ寺、（加茂下神宮寺、祇園、北野、）左大臣（〇藤原道長）貢黑糟毛、（字古比干）今日可騎、從寮將來、馬部著冠褐衣、居飼著赤衣、日入之間欲參之程、左相府從見物所差隨身、兩度被催送矣、後度有興言、到郁芳門留車、欲降、左衛門督前驅等云、上達部於美福門外騎馬、御輿出美福門者、乍驚自大宮大路南行、於曲殿北邊騎馬、馬副八人、而今四人遲來、召求之間、御輿停滯、馬副自郁芳門外走來、（親重、義光、致用、致光、）其後就行列、（隨身綾東儀衣、黃朽葉下襲、蘇芳末濃狩袴、紅染袙、白袴、鷹懷羽平胡籙、表帶有纓、樺卷弓、隨身六人、番長在之中、）帶螺鈿劍、著靴、倭鞍付杏葉、結唐尾、中納言教通、（著蘇芳比へ支、行幸日文相府裝束相同、）參議經房通任扈從、途中秉燭、齋王到給禊所、（二條南、三條北、中國河原、行禊路、自宮内出美福門、經二條、）就禊幄、卿相著官幄、侍從行事右少辨資業、垣下殿上人三人著座、自餘座雖有饗饌無著人、何人座乎、御禊事問資業、云酉刻者、仰可催由、起座向御所、復座云、御禊了者、其後外記爲長申云、可著御前座者、卿相起座、著御前座、（御幄南邊、御幄東向、）件座有衝重饗、宮別當民部大輔爲任勸盃之次、余問云、山城國獻物了歟如何、答云、獻了者、一

〔續日本後紀 三仁明〕承和元月九月乙巳、久子内親王爲可待伊勢齋宮、先禊祓賀茂川、始入野宮、

〔三代實錄 四淸和〕貞觀二年八月十五日壬辰、任伊勢齋内親王行禊前後次第司、以掃部頭從五位上藤原朝臣貞敏爲前次第司長官、式部大丞正六位上紀朝臣良舟爲判官、大錄正六位下善道朝臣繼根爲主典、從五位上行兵部少輔源朝臣宜忠爲後次第司長官、大丞正六位上藤原朝臣保則爲判官、大錄從六位下榎原忌寸全吉爲主典、　廿四日辛丑、大祓於建禮門前、爲明日伊勢齋内親王將行禊也、

　廿五日壬寅、伊勢齋恬子内親王、臨鴨水、大修禊事、卽日入野宮、

〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年八月廿日癸未、任伊勢齋内親王〇淸和皇女識子行禊前後次第司、式部少輔兼文章博士從五位下菅原朝臣道眞爲前次第司長官、判官主典各一人、兵部少輔從五位下兼行伊勢權介平朝臣季長爲後次第司長官、判官主典各一人、　廿六日己丑、伊勢齋内親王欲以明日入野宮、仍於建禮門前修大祓、　廿八日辛卯、伊勢齋内親王出自雅樂寮假宮、禊於鴨河、卽日入野宮、

〔三代實錄 四十四陽成〕元慶七年八月廿二日乙卯、大祓於建禮門前、以二十四日伊勢齋内親王可入野宮也、　廿四日丁巳、伊勢齋揭子内親王臨鴨河修禊、便入野宮、中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有、參議正四位下行皇太后宮大夫藤原朝臣國經陪送、所司供奉如式、　十一月五日戊辰、是日減定造伊勢齋内親王野宮工夫數、元工三千十五人、夫一萬五百三十五人、今定工一千四百六十五人半、夫五千二百七十二人半、先是木工權大允正六位上内藏朝臣有永等解偁、謹檢先例、徵發五畿内幷近江美濃丹波但馬播磨等國、所役人別十日、而右辨官宣、濟事之道、公平爲先、支度之程、何拘恒例、今美濃但馬播磨等國、往還稍遠、人民多煩、宜暫停件三箇國、隨狀增加者、今所作屋舍之類頗倍〇倍恐損字誤於先、結構之功、台期而成、減定算功、旣過半分、望請顯功當時、遺例後代者、勅依請、立爲恒例、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年八月十九日辛未、是日伊勢齋内親王〇繁子將修禊事、而典藥大屬蜂田岑範去十一日夜於寮中頓死、邪穢延染供奉所司、仍停止、　九月十六日丁酉、是日於建禮門前大祓、

節略

〔延喜式 五齋宮〕凡齋內親王在京潔齋三年、卽每朔日著木綿鬘參入齋殿、遙拜大神時、先供御麻、次鬘木綿、其料安藝木綿四兩、麻二斤、別當已下料在此內別當大夫已下卜食者共再拜兩段、但九月六月十二月不參、至十六七日參入、再拜兩段、長拍手兩段、齋王不拍手、齋終之後、乃向伊勢大神宮、其野宮內外屋幷垣之類、給神祇官中臣、出居殿御座裝束之類、給主神司中臣、寢殿內雜物、給同司忌部、但金銀器及釜甑之類、納齋王家、

〔源氏物語 十賢木〕齋宮の御くだりちかうなりゆくまゝに、○中略野の宮にまうで賜ふ、○中略物はかなげなるこしばを、おほがきにて、いたやどもあたり〳〵いとかりそめなめり、くろぎのとりゐどもは、さすがにかう〳〵しくみえわたされて、わづらはしきけしきなるに、かんづかさのものども、こゝかしこにうちしはぶきて、おのがどちものいひたるけはひなども、ほかにはさまかはりてみゆ、ひたきやかすかにひかりて、ひとげすくなくしめ〳〵として、こゝにものおもはしき人の、月日をへだて給へらん程をおぼしやるに、いといみじう哀に心ぐるし、

〔徒然草 上〕齋宮の、野宮におはしますありさまこそ、やさしくおもしろき事のかぎりとはおぼえしか、經佛などいみて、なかごそめかみなどいふなるもをかし、

〔日本書紀 二十九天武〕二年四月己巳、欲遣侍大來皇女○天武皇女于天照大神宮、而令居泊瀨齋宮、是先潔身稍近神之所也、

〔續日本紀 三十光仁〕寶龜三年十一月己丑、以酒人內親王、爲伊勢齋、權居春日齋宮、

〔類聚國史 四神祇〕延曆十六年四月癸酉、以布勢內親王、爲伊勢大神宮齋、　八月甲戌、齋內親王祓于葛野川、卽移入野宮、

大同二年八月己卯、齋內親王○平城皇女大原祓於葛野川、卽移入野宮、

盬坏六合、垸卅合、罏二口、盤卅口、由加二口、瓱𤭖廿八合、鍑切二具、打刀子二枚、刀子十一枚、十枚長各五寸、廣三分、一枚長尺、廣一寸、一韓竈二口、銅旅竈一具、長用、木蓋十一枚、鐵火爐一枚、長用、土火爐四枚、鏟一柄、小鏟二柄、酒槽六隻、釜四口、一口受一石、二口各受五斗、煎釜一口受五斗、長用、箕三枚、簀四枚、小匏卅二柄、槽一口、受二石、圓槽三隻、洗槽三隻、御前案三脚、長各三尺、高八寸、廣一尺八寸、外居案五脚、長各四尺、廣二尺、高二尺八寸、御水案二脚、匜手洗各一口、手水案二脚、酒案一脚、已上五脚、長各三尺、廣一尺八寸、高一尺八寸、中取八脚、切案六脚、酒垂一口、鹽臼二口、槲案四脚、砥一顆、小鏟三柄、鑿三枚、已上三物主神所料、鍬八口、掃除料、鹽五石、漬雜菜料、給、黒米卅石、雜給酒料、𤭯五口、長用、𤭯五口、長用、缶十口、油一斗二升、油坏一百廿口、後盤卅口、平瓱二口、十二月晦夜料、墨三廷、

月料、小月物別減卅分之一、

稻卅九束一把六分、粟十七束八把、並大炊寮毎月供、東鰒廿四斤六兩、雜鰒煮堅魚各十一斤四兩、烏賊押年魚各七斤八兩、乞魚皮十五斤、鰯魚汁一斗五升、腸漬鰒貽貝鮨各一斗五升、堅魚廿四斤六兩、鯛楚割鮫楚割各七斤八兩、大鰯九十隻、雜魚脂六斗、芥子堅魚煎汁各三升、口味直錢、其數准時沽價充之、紫菜海松各二斤十三兩、海藻凝海菜各十一斤四兩、鹽搗栗各三斗、生栗六斗、豉六升、醬二斗四升、醬瓜卅顆、味醬一斗二升、糖一斗五升、糯米大豆小豆小麥黍子胡麻子蕓子各三斗、米二斗一升、酢一斗二升、酒二斛四斗、汁糟一斗五升、油二斗四升、供料油六升、灯油一斗八升、瓫十口、堝卅口、大垸十合、鋺形二百口、片盤四百口、枚片坏六百口、窪坏三百八十口、酒盞酒臺各十五具、椀七十合、窪坏六十口、布四尺三寸五分、松明三百把、薪五千四百斤、炭廿四石、藁卅圍、紙七十張、五十張雜用料、廿張主神所料、筆三管、二管雜用料、一管主神所料、龜甲一枚、竹廿株、

〔延喜式齋宮五〕二月祈年祭廿一座、大宮賣神四前、御門神八前、忌火神一前、庭火神一前、竈神二前、御井神二前、地主神一前、

六月祭十二月准此、月次祭大殿祭

野宮六月晦日大祓十二月准此、野宮鎮火祭、野宮道饗祭

十一月祭新嘗祭廿八座、炊殿、忌火、庭火神二前、水部、忌火、庭火神二前、殿部御竈神一前、御川水神一前、酒殿神一前、膳部御食神一前、大炊竈神一前、自餘供祈年祭月次神是、〇

菅翳二柄、（同逆縫作、單功十人、）料、漆四合、掃墨二合、苧小一斤、（結料、）生絲五兩、石見甫綿四兩、（絞漆料、）商布一丈、（拭菅料、）白米二斗、鹽二合、酒六升、海藻一斤四兩、醬滓二升、魚二升、翳柏形四枚、菅金二口、魪金四枚料、熟銅大一斤八兩、滅金一兩、水銀二分、炭一斗、和炭一石五斗、單功卅人、（木工八人、漆工四人、鍛冶工四人、細工十三人、夫一人、）張御殿蓋代料、調布八端四尺、（切卌條、條別長一丈七尺、）練絲一絇、苧小五斤、

〔延喜式齋宮五〕年料供物

絹七十二匹五丈五寸、長絹十五匹、白絹十匹、帛廿匹、白綾二匹、綿一百七十二屯、紵五段四丈、細布一段二丈二尺、絲十斤、（已上冬御服料、自九月迄二月、）絹六十匹、帛卅匹、綿一百屯、（已上夏御服料、自三月迄八月、）斗帳一具、壁代帳十一條、幌三條、（縫殿寮縫備、每年供之、但斗帳骨內匠寮作、一年一供之、）支子一石八斗、紅花廿六斤、酢八斗、簾四張、席二枚、兩面端帖三枚、短帖一枚、絲端帖十枚、（已上秋冬料、）春夏料亦如是、但爲薄帖、（掃部寮作備、每年二季供之、但席隼人司供之、）白布端帖七枚、短帖三枚、（已上乳母料、）黃布端帖三枚、料薦帖九十枚、短帖十三枚、長帖二枚、席百八枚、長席二枚、調薦二百廿三枚、簀七十五枚、（已上官人已下料、）油絁一匹四尺、裏料絁一匹四尺、（膳部酒部水部所前案𣏐料、）絹一匹一丈九尺五寸、（一丈一尺五寸膳部所篩十口料、一丈四尺酒部所篩六口、并御酒案𣏐料、五丈水部所篩廿口、案𣏐料、四尺戶座所篩四口料、）白絹六尺、（酒部所料、）絲七兩、（膳部所三兩、水部所二兩、酒部所二兩、）細布八段二丈八尺、（六段二丈四尺膳部所料、二段四尺酒部所料、）望陀布一端、（水部所料、）緊布一端二尺、（一丈二尺酒部所料、三丈水部所料、）調布七段九尺、（四段八尺膳部所料、三丈一尺酒部所料、一段一丈九尺水部所料、三丈一尺戶座所料、）東席六枚、（二枚水部所料、四枚戶座所料、）調韓櫃五合、（一合主神所料、二合膳部所料、一合酒部所料、一合水部所料、）飯筥蘭笥各五合、折櫃十四合、（八合膳部所料、二合水部所料、四合戶座所料、）杓廿三柄、（八柄膳部所料、三柄酒部所料、十柄水部所料、二柄戶座所料、）木盤一百八十二口、（百六十二口膳部所料、二十口酒部所料、）水瓺麻笥各六口、（二口膳部所料、一口酒部所料、二口水部所料、一口戶座所料、）篩三口、（一口酒部所料、二口水部所料、）水麻笥十一口、（四口膳部所料、二口酒部所料、四口水部所料、一口戶座所料、）大笥二合、（戶座所料、）酒臺五十口、酒盞百五口、（酒部所料、）楊筥六十合、（九合各方一尺五寸、十一合各方一尺、五合各方一尺二寸、五合長各一尺二寸、廣五寸、一合主神司料、廿一合膳部所料、五合酒部所料、二合水部所料、二合戶座所料、）供飯被料帛一匹一丈五尺、綿十二屯、（膳部所料、）砥二顆、（同所料、）銀盞一合、銀鋺一合、銀匕四枚、銀鍋子一口、（並供御料長用、）檳榔葉二枚、（戶座所料、）坩三合、（一合受一斗、二合受五升、）陶手洗十六口、臼八合、瓶五口、（一口受二升、四口受一升、）叩戶十四口、

輿長八人、緋服布帶、駕輿丁卅人、標衫紅褶布帶布袴頭巾歷巾黃布衫卅領、袴卅腰、布帶卅條、（左右京職進擬夫各卅人、料、事了返上、）

〔延喜式内匠十七〕野宮裝束

白木斗帳一具、几帳四基、（三尺二基、二尺二基、）五尺屏風四帖、膳櫃四合、臺盤四面、（各四尺）雕木一具、大壺一合、（已上七種料物單功、同二初齋院一、）

輿一具、（長一丈四尺、廣三尺、高五尺四寸、斗內長三尺一寸、）障子四枚、（一枚長四尺八寸、廣一尺八寸、一枚高四尺一寸、廣三尺三寸五分、二枚各高三尺、廣六寸五分、）料五六寸桁二枚、壁代束柱鳥居等料步板二枚、平帖料檜榑二材、榥十三枚、（各長五尺、方二寸、但一枚廣一尺、）枌料簀子二枚、障子骨料榲榑二材、熟銅大卅六斤、滅金小一斤十二兩、銀大一兩、水銀小十四兩、鐵三廷、炭二斛一斗、和炭五十斛五斗、漆九升、掃墨二升、燒土一斗、帛三尺、油三合、淺紫纈帛三丈六尺、東絁三丈六尺、錦一丈三尺、紫絲二兩、生絲六兩、石見綿三斤、調布一丈三尺五寸、商布一段、苧小一斤、薄紙十五張、膠小四兩、伊豫砥一顆、糯米一升三合、小麥五合、長功三百廿九人、（木工卅七人、銅一百卅七人、鐵七人、漆六十人、畫七人、張五人、笠十人、夫卅八人、）中功三百八十四人、（工三百卅八人半、夫卅五人半、）短功四百卅八人、（工三百九十五人、夫五十三人、）

腰輿一具、（長一丈二尺、廣二尺九寸、斗內長三尺、脚高五寸、）障子二枚、（一枚長五尺、廣二尺、一枚長五尺、廣二尺二寸、）桁料簀子二枚、壁代梁料步板一枚、高欄鳥居等料檜榑半材、障子骨料榲榑一材、熟銅大十二斤、滅金小七兩、水銀小三兩二分、鐵一廷、漆四升、掃墨一升、帛一尺二寸、石見綿一斤八兩、調布七尺二寸、油二合、淺紫纈帛二丈六尺、東絁二丈六尺、錦八尺、淺紫絲二分、練絲二分、薄紙八帳、阿膠小二分、伊豫砥、青砥、糯米六合、小麥五合、炭一石、和炭十四斛二斗五升、長功一百五十一人半、（木工廿五人、銅五十九人、鐵二人、漆卅六人、畫三人、張三人、夫十三人半、）中功百八十人、（工一百六十三人小半、夫十六人大半、）短功二百五人大半、（工一百八十六人大半、夫十九人、）

御輿中子菅蓋一具（菅井骨料材、從二攝津國一笠縫氏參來作、）料、生絲六兩、苧小十兩、（已上二種骨結料）單功十人、食料白米二斗、（人別二升、）鹽二合、（人別二勺、）醬滓二升、（人別二合、）魚二升、（人別二合、）海藻一斤四兩、（人別二兩、）酒六升、（人別六合、）

馬二匹、祝詞料庸布五段、

鎭新造炊殿祭、〈○祭料略〉

新造炊殿忌火庭火祭〈○祭料略〉

〔延喜式 五齋宮〕齋王遷入野宮河頭禊

其日齋王駕輿、〈輿者主殿官人率史生、前禊二日設供、〉輿長八人、駕輿丁卌人、駕馬女廿人、〈乳母二人、藏人六人、采女四人、童女四人、掃部二人、御厠二人、〉

勅使大納言中納言各一人、參議二人、四位五位各四人、禊事既畢、賜饌幷祿、〈勅使已下五位已上內藏寮饗之、六位已下大膳職、〉

訖卽廻歸、使留野宮、更賜祿、〈自餘之儀、大略同初度禊、〉

〔西宮記 臨時五〕齋宮三度禊

入野宮、上卿著陣、定供奉人々奏聞、二省輔丞已下一員爲次第司、〈除目、式部、〉給唐鞍、主禮垂纓、神祇大副辨史中務丞內藏允內匠主典六位二人爲裝束司、〈詳行時任裝束司由見宮式也〉大中納言一人、參議二人、四位四人、五位八人、〈四人王已上、唐尾杏葉、五位式部差云々、〉勅別當〈唐鞍〉除諸陵囚獄修理雅樂司之外、至于勘解由使判官已下一員供奉、先向東河解除、〈中臣宮主侍〉於野宮給祿、與侍所乘供奉、齋王乘輿、〈主殿供奉〉公卿二人出二三車、〈各有下仕、式文云、入諸司〉〈之時、定出車人云々、近代入野宮時定、〉

〔神祇官年中行事 臨時〕入御野宮一條河原所點地

〔延喜式 三十五大炊〕齋內親王從初齋院遷野宮時禊料、雜給米二石、土塊百口、薪卅斤、柏十把、充屬各一人率史生炊部等祇供、其向伊勢日亦同、

〔延喜式 五齋宮〕遷野宮裝束

白絹二十匹、綿五十屯、紅花廿斤、白木斗帳一具、几帳四基、〈三尺二基、二尺二基、〉五尺屏風四帖、輿一具、腰輿一具、菅翳二具、笠二具、〈一盛綠袋、一盛油絁袋、〉刺扇一枚、朱漆臺盤四前、雕木一具、〈已上供料〉絹七十二匹、細布十段、調布一百廿段、錢四貫文、〈已上命婦已下洗人已上裝束〉當色六領、〈別當五位內舍人中臣忌部等六人料〉調布廿五段一丈二尺、〈卜部以下今良以上裝束〉

野宮

爲悅、　五日壬午、巳刻基親朝臣申云、點地七箇日之中例、永承之嘉猷也、仍先日申其旨、七日可宜之由被仰下之處、委引見之、後度兼七箇日、先洒掃其地之後、御禊隔中一日有點地、此外無例云々、仍今日可被行點地之由所存也云々、仍告今日之由於禪門、又以定經遣隆忠亭催之、有可參之報、藏人方事、親雅依服暇不出仕之故、便仰定經了、　十七日甲午、有初齋宮日時定幷御禊點地、　廿三日庚子、今日初齋宮御禊御牛前騶等御覽之間、貫首候御前者例也、而兩貫首共申故障云々、仍昨日仰光長、申可參之由、然間長方卿母亡後、保忠女云々 仍光長服暇之由令申、奉行職事雖未來觸、且聞此由必可參之由仰遣兼忠許、申可參之由、○中略 申刻親雅來、申云、御牛前騶御覽之間、貫首可候、而光長雖申可參之由、忽成服暇了、兼忠先々如此事、凡不叶傍官之輩、兩頭不參云々、五位藏人可候歟如何、仰云、於不參者非此限、但聞光長服暇之由、職事雖未申上、自是仰遣了、定參仕歟者、○中略 後聞、秉燭有前騶御覽、其後無爲被遂御禊了云々、度々延引、雖恐思、遂被行了、尤爲悅、

〔百練抄十二順德〕建保三年九月廿一日、初齋宮○後鳥羽皇女熙子 禊東河、入御右近府、　廿七日齋宮御左近府之間、人々多參入、上皇御幸、

〔延喜式五齋宮〕鎭野宮地祭後鎭准此

五色薄絁各五尺、倭文五尺、調布一段、庸布五段、木綿大一斤、麻二斤、鍬五口、米酒各五升、鰒堅魚海藻各五斤、腊鹽各五升、坩坏各五口、匏二柄、柏二十把、食薦五枚、席一枚、

〔延喜式三十四木工〕凡造伊勢齋內親王野宮支度者、工單一千四百六十五人半、夫單五千二百七十二人半、藁三百五十一圍、以五畿內近江丹波等國所進充之、莫過此限、

〔延喜式五齋宮〕造野宮畢祓料

庸布二段、木綿三斤、麻四斤、烏裝橫刀二口、弓二張、矢卌隻、鹿角四頭、鹿皮四張、鍬四口、米酒各四斗、稻四束、鰒堅魚各五斤、雜腊四斗、海藻滑海藻各九斤、鹽四斗、盆四口、匏四柄、槲廿把、輿籠一口、葉薦二枚、

叶不吉例可被用廿三日之由議定了、而諸國難濟、成功不足、云本宮雜事、云行事所事、都以闕如、枉可申延之由、先日基親朝臣所來觸也、余〇藤原兼實答曰、儲日有哉、申云、廿八日晦日等也、予曰、件兩日共有難、廿八日重日、晦日今經凶相、雖專不可延引、於事之闕如者、更非此限、早奏事之由、可隨御定者、基親經奏聞歸來曰、延引何事有哉、且可計沙汰云々、予可問兩日之優劣於陰陽道之由仰之、後日基親又來觸曰、宣憲勘兩方例、申可隨御定之由、季弘重日專可忌避、晦日申何難之有哉之由、余曰、季弘申狀有謂、但尙仰可問濟憲業俊在宣泰茂等之由、今日來觸、件等輩之申旨、雖其狀途一決不詳、仍仰可問兩日及五月等例於外記之由、基親乍候于此亭、以書遣賴業師尙等之許、待請文伺候、晡時師尙返事到來云、雖兩日共有例、其難尙不輕、五月兩度例、昌泰最吉、嘉應不吉、或吉或凶、雖一向難擧用、今所欲敢行、四月吉凶相交事同五月、然而案近例之凶、用上古之吉、以之思之、嘉應縱雖不快、昌泰已爲佳躅、被用五月、何難之有乎者、所勘申叶愚心、尙待賴業請文之間、戌剋到來、只勘先例不述子細、余仰基親曰、以陰陽道及兩大外記之勘狀、今月之中兩日、及五月等之間、可用何哉之由、宜問左大臣〇藤原經宗內大臣〇藤原實定權大納言忠親卿等者、基親退出了、　廿三日庚午、抑今旦基親朝臣來申人々申狀、一同可被用五月之趣也、余曰、早可奏、兼又內々可問日次、可擇申近日也、基親又曰、元以今日爲點地之日、可延引哉、余曰、示合上卿可進止者、　五月三日庚辰、今日可被行初齋宮御禊日時定幷點地、而依上卿不參延引、大將雖勤仕初齋宮上卿、仍不奉行云々、本上卿通親依病惱辭退之替、諸人厭却、于今不領狀、　四日辛巳、早旦召藏人辨親經、申初齋宮上卿事、光長朝臣昨日參院、不申入退出、而今日依所勞不出仕、殿上人々請文、仍召親經被仰付也、卽參今熊野歸來、依御所中間不得達子細、僅雖申入無御成敗、只可計沙汰之由有仰云々、勿論仍申所勞輩不及譴責、左金吾來月營亡室之法事之由令申、始修奉行辭退頗有謂、仍先日時定點地御禊等事許、可奉行之由仰遣之、只奉點地不可及御禊之由被申、極以不當、仍重仰之、已上親經御教書也、今夜返事不到來、余爲用意、隆忠卿參勤哉之由以書札示、入道關白〇藤原基通有可令參之報、爲悅

宮道光實、左衞門尉藤原永範、次右近將監源實淸、左近將監藤原經遠、右兵衞權佐藤原公行、左兵衞權佐長輔、右近權中將藤原實衡朝臣、左近少將藤原忠隆朝臣、次參議右兵衞督伊通卿、次々第使右馬權助菅原修言供奉路傍、別當散位重實、次步陣、次齋王御車、內舍人藤原仲淸、次雜色四人、次所衆二人、次行具膳部六人著淺黃袍、次漏刻器、今日不見、行鼓又不見、可尋、次藏辛櫃大舍人、次與侍車、次二三車、金作車、可尋、次本院出車六兩、次馬寮車四兩、女房裝束被用寮納物、諸國不濟、被付檢非違使、先日禮部被尋云、二三車下仕裝束无所見、後日糸鞋履子十四人裝束調進、不分何物、令〇此間恐有脫文件料物如何、答可然之由、女房裝束、天仁例文依院宣先日進覽了、抑行列之中有樋臺稱彫木令行列云々、此事如何、後日失也、不具之由、重實示之、　廿七日甲戌、去廿三日齋宮御禊、但馬少將忠隆、於伊豫守基隆朝臣二條宅、召公種纓頭、裹物八人、被物十二人、雖束在此中纓頭人七十餘人、其中公卿四人、纐部鳥帽子直衣大藏卿長忠同前藤納言冠直衣予同敦兼朝臣、以下殿上人兩三輩雲列、右近相具、

〔本朝世紀〕仁平元年三月二日癸酉、有齋宮等定事、先藏人頭右大辨藤原朝隆朝臣進膝突、下內親王宣旨、喜子、（堀河皇女）今日被卜定齋宮、〇中略次召朝隆朝臣、仰勅別當幷行事上卿辨史等、勅別當散位源伊俊、行事權中納言忠基卿、右少辨資長、左大史中原親康等也、　八月十三日庚辰、權中納言季成卿、參議公通朝臣著右仗、被定申伊勢齋內親王可入御諸司之日時幷前驅等、　九月十九日丙辰、今日伊勢齋內親王禊東河、三條末、入一本御書所、自室町嶋小路左馬頭隆季朝臣宅、出御楊中納言季成、右少辨資長、權少外記中原師尙、左大史中原親康等參入行事、酉刻禊東河、勅使參議源雅通朝臣、前驅左近權中將源成雅朝臣、右近少將藤行通朝臣、左兵衞佐藤隆輔、右兵衞佐同實定、左近將監源仲盛、右近將監藤範光、左衞門少尉源賴方、右衞門少尉惟宗信澄、次第使左馬助藤原定兼、行列使左馬允藤原倫康、幷左右京職供奉如常、禊畢入一本御書所、

〔玉海〕元曆二年〇文治元年十一月十五日甲午、此日有齋宮〇高倉皇女潔子卜定、

文治二年四月廿二日己巳、初齋宮御禊日次事、元所撰申十七日廿三日等也、而十七日甲子、支干依

右衛門佐正五位下藤原朝臣輔正　左衛門佐從五位上平朝臣孝明
長和二年八月廿五日

〔日本紀略〕（十三後一條）長和五年二月十九日甲午、卜定伊勢齋王、（○具平親王女嫥子）廿二日丁酉、定齋宮別當、彈正大弼顯定、　九月十五日丙辰、今日伊勢齋宮禊東河、入宮内省後廳、

〔榮花物語〕（三十九布引の瀧）しはす（○承暦二年）に、齋宮（○白河皇女媞子）の御禊とて、世中ゆすりていそがせ給、にようばう廿人いろ〳〵どもを、常のいろかさなりもすぎて、いみじうせさせ給へり、にようばう、さるべき人々のむすめのかしづくを、皆めしいでさせ給、いみじうをしみ、さま〴〵のさはりを申せども、おや〳〵をさへさいなめば、皆まゐらせたり、なかにものひきなどして、見えかはさでぞありける、御輿のしりには、故くわんぱくどの（○藤原教通）の御むすめとて、女御どのにものせさせ給、貫仲の中納言の北の方さぶらひ給、小一條院の信宗中將ときこえしが御むすめ、帥大納言の子の攝津守もろいへ、小野宮の中納言（○通經）の御子の出雲守など、かやうの君だちのおやあるを皆めしいで、諸大夫などのはいふべきにもあらず、むかしにはまさりつゝ、ぞよろづのことありける、

〔本朝世紀〕寛治元年八月廿八日丁未、大納言忠家卿參入、被定申初齋宮（○白河皇女善子）可入御諸司御禊事、（九月廿一日庚子）

〔中右記〕寛治元年九月廿一日庚午、齋宮御禊也、前駈參議一人、（大藏卿）左右近次將、（四位陪膳朝臣）將監各一人、左右兵衛尉各一人、左右衛門尉各一人、馬助允爲行列事口宮勅別當女房車五兩、童女一兩、内侍无、出車、雜色二人、所衆四人、

〔永昌記〕天治元年四月廿三日、伊勢初齋院（○輔仁親王女守子）禊日也、兩院（○白河鳥羽）引出御車於門前、（三條御所）有御見物、云々、予偸閑構假床、齋王御所六角堀川、上卿治部卿車三條油小路立之、（前駈六人、騎之、板輿、以件所爲列見歟）先京職、次前拂二人、著冠持楉、次御禊外居二人、著褌同著烏帽、次宮司代卜部官人等、次前駈右衛門少尉

王向給禊所、出宮比及三四町秉燭、向禊之路、經三條幷東院東大路二條等、於二條末河頭御禊、前駈如定文、左中將能信、隨身四人著盤繪衣黃朽葉下襲、右中將雅通、隨身二人著褐衣、藏人所陪從六人、候御車後、如賀茂祭、參議正光、馬口近衞府生二人取之、院別當民部大輔爲任、近候御車前、瀧口二人爲備、多事不具記耳、齋王禊了、經二條大路入於美福門云々、齋王御車絲毛、二三車又絲毛、大納言道綱卿不奉車、絲毛只進手振車副下仕、而行事所追返、不奉車也云々、　廿六日乙酉、昨日齋王御前差文、敦賴朝臣注送、卽注曆裏、

太政官謹奏

齋內親王行禊次第使

御前

長官式部少輔從五位上菅原朝臣師長　　判官式部大丞正六位上橘朝臣俊孝

主典代式部少錄正六位上津守宿禰致孝

御後

長官兵部少輔從五位上平朝臣爲忠　　判官兵部大丞正六位上橘朝臣行貞

主典兵部少錄正六位上津守宿禰致任

長和二年八月廿五日

齋內親王行禊御前

大納言正二位藤原朝臣某　　權中納言正三位藤原朝臣敎通

參議正三位源朝臣經房　　參議從三位藤原朝臣通任

右馬頭從四位上藤原朝臣兼綱　　侍從從四位上藤原朝臣資平

東宮權亮從四位上藤原朝臣道雅　　左近少將從四位下源朝臣朝任

參議左大辨源道方（依穢不奉仕者、左府云、修理大夫通任奉仕者、主上仰云、通任行本宮事、他宰相可宜者、大藏卿公光有庶幾者、是來月入野宮之度、不可被差遣、其野宮多陪仍所望云々、行事上行成所密語、十九日所談、）

左近衞權中將藤原朝臣能信　　右近衞權中將源朝臣雅道

左兵衞佐源朝臣成方　　右兵衞佐藤原通範

長和二年八月十日

左近衞將監藤原親國　　右近衞將監藤原親業

左衞門少尉藤原邦恒　　右衞門少尉藤原惟佐

同日

初齋內親王行禊次第使

左馬權助藤原惟忠　　右馬權少允藤原有信

同日

十一日庚午、早旦大外記敦頼朝臣注送云、昨日伊勢初齋內親王行禊御前、一代仁王會、左相府（〇藤原道長）被定、先御前事、次仁王會僧名事、各行事上卿被候者、定文案注裏、檢非違使左衞門府生大江貞澄檢封東津材木之使也、依檢封寢屋材木之事、昨日三箇度差使召遣不參來、今朝參來、令仰不足言之由了、件檢封事、以師言朝臣示送侍從中納言許、不可令封上之由、一日仰貞澄了者、召檢非違使右衞門尉連遠、仰檢封事、是則初齋宮行事所檢非違使事也、仍所仰之、彼檢封中口先申行事上卿、可令充上之由示仰了、　十四日癸酉、初齋宮行事所進出車廻文、（檳榔毛車、車副八人、可著冠褐布袴帶等、）上達部八人、（大納言予、齊信、賴通、）公任、中納言隆家、懷平、教通、大納言道綱一日云、可奉絲毛車、可有下仕手振等者、　十五日甲戌、右衞門督消息云、來月齋王入給野宮之行禊料、可奉絲毛車、有可借齋院車之消息使、可被傳仰左中辨經通之由答報了、（經通行院事之辨也）　廿一日庚辰、今日伊勢齋內親王入給宮內省、先禊東河、依先日廻文奉車、（車副八人、著冠褐衣布袴帶等、）密々見物、侍從在車後、齋

鎭子十二枚料、熟銅大十四斤、白鑞十二兩、鐵二廷、炭十二斛、和炭二斛、單功百人、藥袋卅四枚料、六七寸桁一枚、白鑞薄十七枚、方八寸阿膠九兩、炭一斛、漆六升八合、絹五尺、綿二斤、調布二丈、掃墨三升、燒土二升、油五合、炭一斛、單功百人、木工卅八人、漆工卅四人、白鑞十八人、

〔延喜式五齋宮〕凡齋宮諸門、常立著木綿賢木、月別立替、所須木綿二斤、麻一斤八兩、

〔政事要略二十四〕官曹事類云、右符案云、養老五年九月十一日、天皇〇元正御內安殿、以少納言正五位上紀朝臣男人、爲舍人、引中臣從五位上中臣朝臣東人、忌部大初位忌部宿禰呰麿等、伊勢大神宮幣附呰麿、渡會神宮幣附无位中臣朝臣古麻呂訖、卽以皇太子〇聖武女井上王、爲齋王、仍移於北池邊新造宮、其儀右大臣從二位長屋王、率參議以上及侍從幷孫王等而前行之、內侍從五位下播磨直月足、從五位下余比賣太利等率女孺數十人而從之、乳母二人、領小女子十餘許人、繞輿從行、中臣正六位上菅生朝臣忍杵、忌部從七位上忌部宿禰君子、輿前從行、舁輿人用左右大舍人六人、並著靑摺布衣、正五位下葛城王、從五位上佐爲王、爲前輿長、從五位上櫻井王、從五位下大井王、爲後輿長、從五位下石川朝臣勝男、領前內舍人八人、從五位上榎井朝臣廣國、領後內舍人八人、右衞士從宮門至齋宮道兩邊陣立、至宮安置訖、其威儀、從者及衞士、各令却還、其齋宮任中臣從八位下中臣朝臣大庭、忌部從八位上忌部宿禰虫名、宮主少初位下伊吉、卜部年麻呂、神部四人、卜部一人、戶座一人、御炬二人、神祇記文云膳部四人、大炊部二人、酒部二人、馬部二人、

○按ズルニ、初齋院ノ事始テ此ニ見ユ、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年八月十三日辛丑、伊勢齋內親王〇繁子臨鴨水修禊事、卽便入初齋院於雅樂寮、公卿陪從、所司供奉如常儀、

〔小右記〕長和二年八月十日己巳、今日被定伊勢初齋內親王〇三條皇女當子行禊御前、

裏書　伊勢初齋內親王行禊御前

綿四兩、掃墨三合、燒土二合、單功十人、(木工二人半、漆三人、白鑞四人半、)

車榻一脚料、榥二枚、(各長五尺、廣四寸、厚二寸、)檜榑一材、阿膠五兩、鐵一廷、炭二斗、熟銅二斤十兩、滅金四兩、鑞銀一兩二分、鐵半廷、伊豫砥一顆、信濃布二丈、調布二丈、白鑞薄三枚、(方八寸、)阿膠三兩、信濃布五尺、漆一升五合、絹一尺五寸、綿七兩、細布一尺五寸、信濃布二尺、掃墨五合、燒土五合、單功卌人、(木工八人、漆七人、銅十六人、白鑞九人、)

膳櫃四合、(各長三尺二寸五分、廣二尺二寸、深九寸、)下居榻四脚、(各長五尺六寸、高一尺七寸、)並塗赤漆料、漆二升五合、(櫃料一升六合、下居料九合、)朱砂廿兩、絹二尺、綿一屯半、掃墨一升、荏油一升二合、阿膠八兩、炭一斛、單功十二人、臺盤二面、(各四尺、)銀飯筩一合、銀水銚一合、銀盞一具、(已上四種料物、單功並見上、)

銀鍋子一口料、銀卌兩、熟銅大一斤十兩、滅金小三兩、信濃布一丈、炭一石、和炭二石五斗、單功十二人、

銀匕四枚料、銀廿四兩、信濃布四尺、炭五斗、和炭一石、單功八人、手湯戸一合、(周五尺、高一尺四寸、)臺一脚料、漆二升五合、絹一尺五寸、綿一屯、細布一尺五寸、貲布八尺、掃墨五合、燒土一升、油二合、炭五斗、單功八人、

手洗一口、(徑一尺七寸、深六寸、)料、漆一升、絹一尺、綿八兩、細布三尺、調布四尺、掃墨五合、燒土六合、炭五斗、單功七人、

椽一合、(高一尺、周二尺四寸、)料、漆七合、絹一尺、綿七兩、細布二尺、掃墨四合、燒土五合、單功六人、

大壺一合料、漆四合、絹一尺、綿六兩、細布一尺五寸、掃墨三合、燒土五合、單功四人、雕木一脚、(長一尺四寸、廣一尺八分、高八寸、)樋一合(徑八寸、高七寸、)料、漆一升八合、絹一尺五寸、細布三尺、掃墨六合、燒土一升、單功十一人、

燈臺四基料、漆一升二合、絹一尺、綿六兩、細布一尺、掃墨四合、燒土五合、單功十二人、

張御殿蓋代料、調布十端、練絲一絇、苧小五斤、單功十四人、(木工十二人、夫二人、)

輕幄骨一具料、漆七升、絹五尺、綿二屯半、掃墨二升、燒土二升、青砥一枚、炭一斛、單功卌人、

床一脚(方八寸)料、漆四升、絹三尺、綿十二兩、細布三尺、信濃布六尺、掃墨一升、燒土一升、伊豫砥半顆、青砥一枚、炭五斗、單功十二人、

工一百廿一人小半、夫十人大半、短功一百五十一人、工百卅八人大半、夫十二人小半、几帳六基、四尺二基、三尺二基、二尺二基、料、檜榑三材、枝柱等料尺九寸桁一枚、長三尺六七寸桁一枚、長五尺、塗土居料、熟銅大八兩、滅金小一兩、水銀二分、漆一升五合、絹一尺五寸、細布一尺五寸、綿十兩、掃墨五合、油三合、伊豫砥半顆、青砥一枚、炭六斗、和炭五斗、單功五十三人、木作工廿人、漆塗廿人、銅工十三人、五尺屛風四帖料、榲榑十材、骨料檜榑一材、押料炭三斛、鑄釘井塗金料和炭六斛、作二肱金一料熟銅大三斤十二兩、作二肱金一料半熟銅大十二斤、鑄釘料滅金十兩三分、水銀五兩二分、一竄白綾十二丈四尺、表料縹絁十二丈四尺、裏料紫綾五丈六尺、緣料緋絁二丈、畫料調布二丈、畫中張料商布九段一丈五尺、下張料練糸一兩、中張布縫料紙二百五十張、中張料薄紙五十六張、緣料紫革一枚、長二尺五寸、鏤形料、膠小四兩、塗緣料石灰八合、合二麥粉一料糯米八升、張布料小麥一斗二升、張紙料單功一百卅九人、木工十六人、漆工五人、鍛冶工十七人、細工五十六人、鑄工三人、張工卅八人、夫四人、

小行障四具料、檜榑二材、熟銅大三斤、滅金小八兩、鑑銀小四兩、信濃布一尺、白鑞薄六枚、方八寸細布六尺、阿膠六兩、漆一升六合、絹一尺六寸、掃墨四合五勺、炭一斛、和炭四斛、單功六十人、木工十人、漆十人、銅廿八人、白鑞十二人、

大翳宮二合料、波太板四枚、長六尺、厚一寸五分、廣二尺、阿膠廿兩、炭四斗、白鑞薄十枚、方八寸阿膠十兩、信濃布四尺、炭四斗、漆四升、絹四尺、綿二屯、細布四尺、信濃布六尺、調布六尺、掃墨二升、燒土二升、油一合、伊豫砥半顆、青砥一枚、炭二斗、單功六十五人、木工廿人、漆廿人、白鑞廿五人、大笠柄二枚、加二志部一料、檜榑一材、白鑞薄四枚、方八寸阿膠四兩、熟銅大十二兩、滅金小一兩二分、鑑銀三分二銖、水銀三分、炭二斗、和炭八斗、漆六合、掃墨三合、單功廿四人、木工四人、漆四人、銅八人、白鑞八人、捧壺二口、各周一尺九寸、高六寸、柄二枚、各長八尺料、槻一枚、長三尺、厚七寸、檜榑一材、白鑞薄四枚、方八寸阿膠四兩、熟銅大十二兩、滅金小一兩二分、鑑銀三分三銖、炭二斗、和炭八斗、漆六合、絹八寸、綿四兩、掃墨二合、燒土二合、單功廿七人、木工六人、漆四人、銅八人、白鑞九人、

沓宮一合料、波太板半枚、阿膠五兩、炭一斗、白鑞薄二枚半、方八寸阿膠二兩二分、炭一斗、漆六合、絹八寸、

五位、（米二升、酒一升、東鰒、隱岐鰒、烏賊各二兩、鰒一兩三分、鮭三分之一、海藻二兩、鹽五勺、醬一合、酢二勺、滓醬一合、）中臣、忌部、（米二升、酒六合、鰒三兩二分、鮭三分之一、海藻二兩、鹽四勺、醬三勺、酢二勺、滓醬一合、）大舍人、內女孺、宮女孺、（米一升六合、酒魚鹽類同中臣、）宮舍人、（米同大舍人、鮭六分之一、鰒三兩二分、鹽四勺、滓醬一合、海藻二兩、）諸伴部、（米同宮舍人、鰒三兩二分、鹽四勺、海藻二兩、滓醬一合、）內舍人、宮主、（米食木根、餘物同中臣、）采女、（米食木根、餘物同宮舍人、）卜部、（米食木根、餘物同伴部、）戶座、火炬小子、（米一升二合、餘物同伴部、）今良、女丁、（米食木根、醬滓一合、海藻一兩、鹽一勺、）

右計人數毎月給之、若五位以下帶職事者、便以本根充之、

〔延喜式五齋宮〕卜戶座一人（取山城國愛宕郡鴨縣主氏童子）

火炬二人（取同國葛野郡秦氏童女）

右始自初齋院、至于參入大神宮奉仕、其齋王入伊勢齋宮、卽各替却、

〔延喜式五齋宮〕初齋院裝束

白絹十匹、絓東絁二匹、兩面二匹、白綾二匹、東絁八匹、綿二百屯、細布廿段、縣布五十段、紅花大十斤、支子一斛八斗、（直）白木斗帳一具、（高八尺、方一丈、）几帳六基、（四尺二基、三尺二基、二尺二基、）五尺屏風四帖、金裝車一具、小行障二具、大翳二枚、（入平文筥、）笠二枚、（一日笠、蓋錦袋、一雨笠、蓋油袋、並加志部、）捧壺二口、（加錦并志部、）沓筥一合、車榻一脚、膳櫃四合、（各加綿并杪、）銀飯笥一合、銀水鋺一合、銀盞一具、銀鍋子一口、銀匕四枚、漆樽二合、手湯戶一合、（加盞、）手洗一口、線一合、貫簀一枚、彫木一具、大壺一合、黑漆燈臺四本、輕幄一具、床一脚、鎮子十二枚、韓櫃十合、（已上供物、）絁六十四匹、黃絁六匹、帛卅二匹、綿百八十屯、調布八十六段、（已上命婦已下舍人已上裝束、）車副廿四人取物十人裝束卅四具、藥袋卅四枚、

〔延喜式十七內匠〕伊勢初齋院裝束

白木斗帳一具（高八尺、方一丈、）料、五六寸桁二枚、簀子十枚、檜榑四材、熟銅大七斤、滅金小五兩、水銀小二兩二分、鐵一廷半、調布五尺五寸、伊豫砥、膠小六兩、木賊小三兩、帛一匹五尺、白絁一匹五尺、練絲三兩、糯米三升、炭七斗五升、和炭九斛二斗五升、長功一百十三人、（木工五十三人半、銅鑄一人半、鐵七人、畫二人、夫九人、）中功一百卅二人、

辨一人、史一人、史生二人、官掌一人、率供奉諸司、就禊所行事、齋王到幕、臨流而禊、神祇官中臣進麻、宮主讀禊詞、訖卽賜勅使已下饌幷祿、(辨官錄見參、付院別當給之、)既而廻歸入初齋院、卽卜定供膳幷立賢木、

禊料

五色絁各二尺、安藝木綿大三兩、木綿大四兩、麻大一斤、鍬四口、鐵人形二枚、荒服料調布一段、筥二合、酒米各一斗、鰒堅魚各二斤、海藻四斤、腊四斤、鹽四升、水戶一口、坏瓮各四口、柏四把、匏二柄、黃蘗四枚、食薦二枚、葦籠一腰、祝詞料庸布二段、短帖一枚、夫二人、杤二枚、

〔西宮記(臨時五)〕齋宮三度禊

定行事上卿辨幷本院請內舍人大舍人代事

初入諸司、(便所調度裝束云々、在式、卜定年追、期明年入、)院司行事所陰陽寮點禊地奏聞、上卿於陣定供奉人、(外記進例文、)勅使參議一人、左右中將一人、左右兵衛佐一人、左右將監一人、左右衛門尉一人、次第使馬助允一人、藏人所六位、(已上侍從、)勅別當騎馬、京職典侍(或掌侍)諸衛步陣扈從、向東河解除、(宮主中臣候、諸司給祿、)左右衛門府陣衛、

〔神祇官年中行事(臨時)〕齋宮卜定

入御諸司、河原御禊點地、中臣卜部參勤、號河合禊、

〔延喜式(五齋宮)〕初齋院別當以下員

別當五位二人、(一人命婦、)中臣一人、忌部一人、宮主一人、內舍人一人、大舍人二人、宮舍人十人、膳部三人、殿部三人、炊部一人、水取三人、酒部一人、掃除三人、采女二人、內女孺二人、乳母三人、宮女孺十四人、戶座一人、火炬小子二人、今良四人、仕丁十二人、女丁八人、但遷野宮者、加內舍人一人、大舍人二人、神部四人、(中臣連部二人、忌部連部二人、)卜部三人、宮舍人十人、炊部酒部各二人、采女四人、宮女孺廿五人、洗人二人、厠人二人、女丁八人、

食法

初齋院

○又見台記、一代要記、帝王編年記、

〔台記〕久安七年〈○仁平元年〉三月二日癸酉、今日卜定伊勢齋內親王、〈故堀河院女、名喜子、〉先被下親王宣旨、內大臣被奉其事、以左馬頭隆季朝臣室町第為其所、〈○中略〉入夜右少辨資長、內覽卜定齋王文、〈卜彩〉依輕服〈小川〉日數未過不見之、　廿日辛卯、伊勢幣、上卿忠基卿、〈初齋宮上〉是被告齋宮卜定由也、宣命不可內覽之由、送書示之、依輕服日數未過也、須臾少內記來、內覽宣命草、〈上卿未聞免由〉稱不可見由、內記卽出、

〔顯廣王記〕安元三年〈○治承元年〉十月廿八日甲午、齋宮卜定、今上〈○高倉〉一女王、〈二歲、母公重朝臣女、〉　廿九日、卜定所押小路萬里小路侯家也、上卿權中納言實綱卿、辨左少辨兼光、勅別當相模前司藤隆盛、中臣忌部卜部等、任例差獻、了參入神祇官、兼貞、明友、永親、範隆、兼衡、友平、勅使左少將顯家告內親王之由、齋宮卜定勅使、神祇權少祐大中臣範隆朝臣、　十一月九日甲辰、伊勢奉幣、齋宮卜定之由告大神宮也、上卿權中納言實綱卿、辨左少辨兼光、自神祇官發遣、使致重王、中臣範隆、忌部孝友、卜部雅業助兼濟也、

〔玉海〕元曆二年〈○文治元年〉十一月十五日甲午、此日有齋宮卜定、〈高倉院女王、生年六歲、母賴定卿女、[illegible]得御名□□、光範卿申之、上卿忠親卿云云、〉

〔歷代皇紀〈後陽成〉〕齋宮

祥子內親王　當今皇女、母〈○藤原廉子〉同東宮、〈○恒良〉元弘三年十二月廿八日卜定、

〔延喜式〈五齋宮〉〕凡齋王將入于初齋院、臨河頭為祓、〈令陰陽寮擇定日時、入野宮伊勢齋宮之時准此、〉前祓二日、辨官率院別當已下、幷陰陽寮及諸司到河邊、點定其地奏之、至于期日、齋王駕車趣向、走孺十二人、車副廿四人、取物十人、供膳韓櫃三合、同雜器物二荷、豐器韓櫃裝物韓櫃各一合、衣服韓櫃二合、祿物韓櫃六合、〈擔夫並用衛士〉膳部六人、舍人二人、荷領十四人、藏人所陪從六人、內侍及院女別當已下並從車後、〈內侍已下藏人已上乘私車、采女女孺已下乘馬寮車、〉勅使參議一人、院別當一人、四位二人、五位二人、六位四人、並前驅、左右近衛左右兵衛各二人、左右門部各二人、左右火長各十人供奉、左右京職官人率兵士已上迎候、山城國司率郡司候京極路、

内親王、可爲伊勢齋王之由、令卜申者、民部卿召外記、被問神祇官參否、申皆參之由、右大辨實光令敷座、（軒廊西上、）召外記、可令召神祇官由被仰下、少副大中臣輔清以下、官人六人、入自日華門著座、又召外記、可進硯紙之由被仰、少外記捧硯筥置上卿前、（入紙、）上卿書内親王名、卷懸紙、召外記令封、上卿召外記筥入之、輔清朝臣（五位也、仍召朝臣、祭主可參也、未上洛間、召輔清也、）乍入筥下給、可卜定之由被仰歟、輔清歸座、令卜部官人卜了、（卜食之由書付）返奉之後召外記、神祇官暫可退之由被仰下、外記稱唯之間、官人等退之、令持筥於外記、進弓場殿、被奏聞、（上卿候人々云、攝政御于直廬時、乍居座可奏也、但々間御于御前、仍進弓場殿奏聞也者、但撤軒廊座之後可被奏歟、今夜不撤座之前也如何、又依風吹被下幔也、其間卜之、頗不審也、猶神祇官召之後、可被上幔也、件二事如何、）返給之後復本座、（件御卜多以留御所、長和例返給、今夜付被例返給也、）召外記、令召輔清、輔清入從宣仁門著膝突、仰云、姁子内親王可爲齋宮者、奉仰退了、其後令撤座、次頭仰云、姁子内親王爲伊勢齋王之由可下知諸司、又以權大納言源朝臣、右少辨實光、右少史伊岐致政、可令行事、以中務少輔通季、可爲勅別當、奉幣大祓日時可令勘申者、民部卿奉勅之後、召右少辨實光、件事等被仰下、右少辨出腋陣、令勘日時、二枚進之、上卿入筥付頭奏聞、返給之後下右少辨、結申、民部卿召外記、令召輔清、輔清入從宣仁門著膝突、下給御卜串、（不入筥、件御卜返給之時、下給神祇官也、然者今案爲伊勢齋王之由被仰下之次、可下給歟、二ヶ度召之、以无便宜也、）次召外記、返給筥并硯筥畢、民部卿退出、人々同出了、亥時許歸家了、源大納言移著端座、仰右少辨實光、令勘件行事所始日時、勘文又請奏等令進云々、勅使藏人少將忠宗也、頭奉仰之後、遣勅使於彼家也、（後聞、向彼家申此由、彼辭頗以遲々、仍使者退了、）件姁子内親王者、木工權頭季實朝臣孫也、年來人不知、依六壬占爲上皇實子之由顯然也、仍爲齋王也、齋王御所、遠江守國貞之宅、綾小路油小路口也、上卿源大納言右少辨神祇官等行向彼宅、立賢木、藤宰相顯實又行向彼處之由被申、依一家人歟、右少史最下臈行事之條如何、有先例云云、（○又見今鏡、歴代皇紀、按一代要記、爲廿一日、康中抄、貫女抄、爲嘉保元年、）

〔本朝世紀〕康治元年二月廿六日庚寅、左大臣（○源有仁）參仗座、定齋王卜定事、妍子、太上法皇（○鳥羽）女也、母故參議左近中將藤家政卿女也、太后收養爲子、先被下可爲内親王之由宣旨、齋王在本家、（母儀五條堀河第也）

上卿可居座之由雖有其命、強不進寄翠簾前、付女房令啓此由了、即被推出女房裝束、（唐衣裳等也）疊笏取祿立座了、下自本路、於中門前二拜、了令持祿於隨身、（隨身事有祿、各疋絹也）即歸來於殿上、承了由令申頭中將、了退出、

件御使之事、大略五位近衛司所役云々、但被兼職事近衛司有其數、而被仰予事如何、可尋知事也、如此御使役、近衛司之中、職事被候之時、件人々被勤云々、給祿時予欲指笏、右衛門督只乍持笏可給祿之由儀有其命、仍付其數畢、今日衆日依無其仰、作法不尋知、依事儀萬事所推察也、大略此定歟、或記云、勅使差酒肴云々、而今日無其儀也、廿日卜定之由奉幣伊勢、

天仁元年十月廿六日壬寅、未時許、從殿下（○藤原忠實）仰云、只今可參御直廬、依有可被仰合事也、密々著直衣馳參、民部卿被參會、仰云、齋宮齋院全無其人、仍于今不立申、但無止神事又不可默止、而稱院（○白河）幷堀川院皇女之輩、頗有其數、然而其母皆不落居、不知一定、雖申上皇、不憶覺御之由被仰也、去九日爲王胤哉否之條、內々被問筮占也、是依江帥申說可被行也、仍件人四人之中、道言家榮所占申、又以不同也、爲天下大事如何、民部卿幷下官頭爲房、密々付占形量申、季實朝臣孫稱院御女之人、皆以令占、先被立齋宮、何事之有哉、已明後日可卜定、追又可一定者、　廿八日庚辰、今日齋宮卜定也、依有召申時許參內、民部卿、右大將、治部卿、左大弁、藤宰相、（顯）同參集仗座、頭爲房來仰云、恂子女王、是太上皇（○白河）御女也、而可被爲齋王也、其前可爲內親王哉、先被問外記之處、申云、今上（○鳥羽）男女王子之外、內親王宣旨強不見者、人々可定申、藤宰相申云、重猶尋先例、可有一定歟、左大弁定申云、先例不分明者、可隨勅定、治部卿同之、下官申云、先例已不憶見、但被下內親王宣旨、何事之有哉、今思、太上天皇威儀已同人主、就中我上皇已專政主也、仍存件旨所申也、右大將民部卿同予、（內々被問二帥匡房之時、申旨如此云々）以此旨奏聞、頭爲房歸來、仰云、以恂子女王可爲內親王者、民部卿奉仰之後、被移著端座、召官人令敷膝突、召弁、此間源大納言俊實卿被參加、藏人右中弁顯隆參內、親王宣旨被仰下了、次頭爲房來仰云、恂子

今日卜定齋王、右大臣承行之、女王名簿、卽從女王宅獻之、（〇書二世孫子王、具平親王女）中納言俊賢傳奉之、以件名簿下給右大臣、封本名簿令下、封上書丙合、不開封納筥、被奏攝政、（〇藤原道長）開見卽下給大臣、大臣不仰神祇官、只仰承知官符事於辨、但可仰神祇官之由、攝政以中納言行成卿令示案內、大臣云、更不然事也、承知官符事、召仰辨官、以彼所令知也者、齋王事、可被告伊勢之日、令陰陽寮勘申云々、今月廿五日云々、又齋宮別當中納言俊賢、左少辨經頼、左少史憲孝、被仰大臣、大臣不仰下退出、齋王事、大臣仰辨、辨仰外記、外記告神祇官云々、奇怪也、大臣不仰神祇官之事、攝政命云、老愚者也、至今不被出仕、有何事乎者、俊賢卿令奏云、承知官符、明後日許可成歟、此間齋王不可聞食他物、且召仰所司如何、内々仰大炊寮了者、攝政云、依請者、卜定齋王由、以左少將經親被仰遣女王宅染殿云々、今案、件事多違前例、其一返給御下文事、（誤、辨下給、示案內可返事歟、四條大納言案云、准御文給外記訖、）其二下給名簿事、（誤、辨下給名簿、上卿自書可令下、）其三上卿不仰齋王事於神祇官事、故殿（〇藤原實賴）延長九年十二月廿五日御記云、殿下（〇藤原忠平）著陣、諸卿同著、召神祇官、令卜定齋宮齋院、先召外記、召紙硯、書內親王名、令外記密封、召神祇大副奥生朝臣賜之、令卜、先令卜伊勢齋王、二度不合、至于三度合也、（〇中略）殿下令持外記參上、令奏已了、召奥生朝臣被仰以雅子內親王（〇醍醐皇女）定伊勢齋（〇中略）之由、卜定作法詳見件御記、仍所注付也、

〔中右記〕寬治元年二月十一日甲午、自內召、夜前供奉御幸之間、無極口屈畢、僞申所勞之由畢、猶相扶可參入由、攝政殿（〇藤原師實）有指仰、申廻許、著束帶參入、被仰云、今夜齋王卜定也、勤仕御使役、承仰之後、依有當月妊者、其憚可候歟如何、但左右可隨御定之由、參御直廬付職事令申畢、被仰云、不可有其憚者、上卿參陣、入夜事了、頭中將雅俊於殿上仰云、參女御殿（〇藤原道子）姬宮御方、令立齋宮給之由可令申者、卽承仰欲參之處、於陣按察大納言被命云、勅使暫留、上卿神祇官等引參彼宮之後可參者、仍暫逗留陣邊、上卿引被參畢、予（〇藤原宗忠）則參入、（善子內親王、〔白河皇女〕三條烏丸加賀守宗通朝臣宅也、）先於中門相逢家司、（權少將宗信）被相逢、啓事之後還來、可參御前之由有其命、卽入自中門、昇自廊腋、渡殿之前、敷高麗疊上茵爲座、予進居座前、

使天令申太利、皇大神乃厚助賜比依天、天日嗣乎平久受賜禮利、自今以後毛、皇大神乃矜護賜幣牟依天奈毛食國乃天下波倉登留平久可有岐、又今侍恬子內親王波、太上天皇乃清和○大神乃御杖代止之天奉入賜流信奈利、今舊例乃隨爾、相替天可令奉仕岐物止奈利爲天毛、奈識子內親王乎卜定天進入流此狀乎、王散位從四位下實世王、中臣神祇少副正六位上大中臣朝臣常道等乎差使天、忌部從八位上齋部宿禰良岑加弱肩爾太手繦取掛天、禮代乃大幣帛乎持齋利令捧持天進止利久恐美恐美毛申賜波久申、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月九日己亥、以皇女伊勢齋繁子、爲內親王、○中略十日庚子、遣從四位上行神祇伯棟貞王、從五位下行少副大中臣朝臣常道等、奉幣於伊勢大神宮、告以定齋內親王也、天皇御朝堂院小安殿發使、

〔日本紀略一醍醐〕寛平九年八月十三日丙辰、奉遣幣帛使於伊勢大神宮、令告即位幷定齋宮柔子內親王之由、太上天皇(宇多)第二之皇女也、與帝同胞、○又見一代要記、簾中抄、按齋宮記、二所大神宮例文、貴女抄、皆爲昌泰元年卜定、恐誤、

〔日本紀略三村上〕天曆元年二月廿六日壬午、以悅子女王重明親王女○定伊勢齋王、年六從殿上差右近少將藤原有年、仰遣父中務卿重明親王家、又神祇官向彼家差賢木、○又見一代要記、簾中抄、按二所大神宮例文、齋宮記、皆爲三年、恐誤、

〔小右記〕永觀二年十一月四日庚戌、今日有伊勢齋王卜定之事、出御南方、頗無便宜歟、仍不出御、明日可出御者、曉景罷出、五日辛亥、民部大輔惟成云、昨日有齋王卜定之事、式部卿親王、○爲平彈正尹親王○章明許差所衆、先取遣女王名簿、其後召於左大臣○源雅信於御前、被仰女王名、此事不備、仍下給名簿等、大臣懷名簿、著仗座、卜定奏聞云々、卜定彈正尹親王女濟子云云、以左衛門權佐爲頼朝臣、被仰遣其由、依有事緣也者、先以近衛官人被仰遣者也、○又見日本紀略、一代要記、簾中抄、

〔日本紀略十三一條〕長和元年十二月四日丁卯、齋宮卜定、第一當子內親王卜食、坐于大和守藤原輔尹六角町尻宅、○又見齋宮記、按簾中抄、一代要記爲寛弘八年、二所大神宮例文爲長和五年、

〔小右記〕長和五年二月十九日甲午、今日卜定齋王云々、右大臣○藤原顯光行之云々、○中略入夜資平來云、

御井竈神祭本官史生祭之、請奏弁進之、
質木事本官沙汰
卜定由伊勢奉幣
〔續日本紀八元正〕養老五年九月乙卯、天皇御内安殿、遣使供幣帛於伊勢大神宮、并以皇太子○聖武女井
上王、爲齋内親王、
〔類聚國史四神祇〕大同四年八月甲申、定仁子内親王○嵯峨皇女爲伊勢齋、 五年○弘仁元年四月戊子、遣使於
伊勢大神宮、告定齋内親王之狀也、
天長五年二月壬子、御小安殿、使散位從五位下三繼王奉幣大神宮、其詞曰、天皇我大命爾坐、五十鈴
乃河上爾稱辭定奉大神乃大前爾申給久、氏子親王乎、○淳和皇女大神御杖代止氏之奉入多留親王仁在、而今
身安爾依天退出留替爾中務卿四品仲野親王乃女、宜子女王乎、王散位從五位下三繼王、中臣神祇
大祐正六位上大中臣朝臣天品、忌部少史正八位上齋部友主等差使氏申給久止申、
〔文德實錄二〕嘉祥三年七月甲申、皇女晏子内親王爲伊勢齋、 八月癸丑、遣散位正五位下楠野王、神
祇少副正六位上中臣朝臣秤守等、向伊勢大神宮、告以晏子内親王爲齋、
〔三代實錄三清和〕貞觀元年十月五日丁亥、卜定恬子内親王○文德皇女爲伊勢齋、 十二日甲午、大祓於朱
雀門前、以定伊勢加茂齋内親王也、 廿八日庚戌、遣散位從五位上並山王於伊勢大神宮、告以定齋
内親王也、
〔三代實錄三十陽成〕元慶元年二月十七日己未、卜定伊勢賀茂齋内親王、伊勢齋識子内親王、賀茂齋敦子
内親王○並清和皇女並卜食、 廿三日乙丑、遣使伊勢大神宮、告以天皇卽位、幷卜定齋内親王、告文曰、天皇
我詔旨止掛畏岐伊勢度會乃宮乃宇治乃五十鈴乃河上乃下津石根爾大宮柱廣知立天、高天原爾
千木高知天、天皇御命乃稱辭竟奉流、天照之坐皇大神乃廣前爾申賜倍止申久、先日爾可卽位狀乎、差

左右衛門、幷仰衛門可宿直之由、次立炬火屋、(修理職)
次掃除初齋院四面、幷近邊汙穢、(仰左京)
次上卿以勅別當令申事由了、(召別當於御前被仰子細)
次自殿上瀧口一人、藏人所衆二人、可參宿彼院由被仰之、若有妊者不可差之、(○中略)
凡行事以下潔齋日
　毎月一日十一日廿一日
　六九十一十二月十八日以前(近代四月加之)
　　以上幷一日廿六日
　　並臨時伊勢奉幣各三箇日
内七詞　外七詞
十一月中卯日以前、不食新年穀米事、
○按ズルニ、十一月中ノ卯日ハ、大嘗祭ヲ行ヒ給フ故ニ、其以前新穀ヲ食フコトヲバ禁ゼラレシナリ、

〔神祇官年中行事(臨時)〕齋宮卜定
中宮女、(謂之節折)主神司、(中臣忌部卜部長者爭甲乙)差文長官加署、付本官廳、見參官人十人許、史生皆參、同差文、齋宮卜定、當日御禊上座、卜部勤之
中臣女、(謂之節折)中臣氏長者沙汰進、
主神司(中臣一人、忌部一人、宮主一人、)
見參官人十餘人、史生皆參、
大殿祭(中臣忌部祭之)

敷勅使座於對南唐庇、(當母屋四間、通長押敷之、本家家司役之、敷繧繝一枚、或用高麗、)其上敷茵、(北面)

次勅使著座、(以四位家司示可被著座由、)次居肴物、(衝重二合)

次勸盃、(或無勸盃、只給祿、)一獻、(殿上四位、)二三獻、(公卿勸之、)

次給祿、(公卿取之、女裝束一具、)勅使下座再拜、

次御禊(此間上臈以下下地、)

當晝御座間前庭、敷菅圓座、爲宮主座、其南立八脚机、(東西妻、其傍立大床、)

次齋王先洗手、著御禊座、(南面)

中臣官人取御贖物二高坏、進寄子敷下、乍立地傳之中臣女、

次中臣捧大麻、乍立地傳於女房、返給使下卜部、卜部取之、著座修御禊、了捧麻退出、

次中臣參入、撤御贖物、次撤座、

次大殿祭(家司一人捧燭前行、神祇官二人、)

懸玉御所四角柱御湯殿進物所等也、或於御湯殿後祭御厠、然而件事無之、其御湯殿幷進物所等、

皆四角懸之、

次神祇官人奉仕御井祭、

次神祇官插賢木、(以木綿垂其木、)

先插御在所屋巽角、次艮角、次乾角、次坤角、次神殿戶、(當中央、)次內膳屋、次井、次中門、次門、插件賢木後、

人不登御在所板敷上、又插賢木間、公卿以下下地、件插賢木之神司、不渡御前云云、

次神祇官人等、著中門南廊座、(對座、)預饗饌、(地下諸大夫役送、)

次給祿、(五位白大掛、六位以下疋絹、)次官人等列立、再拜退出、(列於庭中、)

次立內膳屋、(木工寮、)次渡大炊寮御飯、次立陣屋、

卽被仰可差遣神祇官人、幷可令成承知符由、

上卿復左仗座、令外記召中臣官人、

中臣參入（入自敷政宜仁等門、五位者經砌、六位可候小庭後進、）

上卿仰以某親王爲伊勢齋王由、中臣退出、

率僚下參彼家、

上卿召辨仰可令成官符由、辨退出仰史、（作符後日、行外記政、可請印之、給中務、式部、兵部、大藏、宮內等、）

此間自殿上差近衛次將、差彼內親王家、（多用上臈次將、）

次被仰下行事（上卿辨史等）

次被仰下初齋院勅別當、四位上卿被仰辨、

次被仰可令勘申奉幣幷大祓日時由、

次上卿仰辨、令陰陽寮勘申、入外記筥奏聞、（作居陣座令奏）

藏人奏聞後返給（上卿下外記）

次上卿至奉幣者、他上卿可奉行由被申、

次公卿等相引參初齋院、

本宮次第

先御浴殿、了著新御衣給、其後御裝束、幷御調度一物以上皆被改、

次御所御裝束、（御座敷舊新、但疊與反、御帳後屛之、）晝御座二間、

當母屋際簾、立屛風一帖、其傍立二階一脚、其前敷兩面端帖二枚、

同間孫庇敷小筵二枚、其上敷緣端半帖一枚、

公卿座、（設中門北、）殿上人座、（設侍郞上、）神司座饗十前、（設中門南廊、）勅使參入立中門、

簡女王、

上卿仰辨、令敷座於軒廊、東第三間以四、掃部寮鋪座、主殿寮設火、主水司設水、大膳職奉坏、

次仰外記、令召神祇官、

官率僚下、參自日華門、著軒廊座、卜部直氏卜之、中臣氏相具、六位依姓次著座、

上卿仰外記、令進硯紙等、

外記入紙於覽筥進之、與硯筥相並進之、

次上卿自書某子內親王五字、

更加懸紙一枚、

上卿召外記、外記持小刀副笏參、

上卿給文令封之

外記進於上卿、上卿取之、其上書封字、

外記退出

上卿召中臣給之可給祭主也、若不候者、他中臣、

次卜之了封上書乙卜合、若丙卜合等字、若不合者、只可注其由、

中臣入於柳筥蓋進之本入筥給時、入件覽筥、

上卿取文返筥蓋本入筥時無返給儀、

次神祇官退出、所司撤座次上卿召外記、入卜文、不開即令持外記、就御所奏聞、

藏人取之先內覽、執柄被開封次奏聞、卜方(ウラカタ)留御所、其筥後日、外記就藏人所請之、

藏人仰上卿曰、御覽ヰツ、

儀、〈事見儀式、又見齋宮式、〉○

〔延喜式 五齋宮〕凡天皇卽位者、定伊勢大神宮齋王、仍簡内親王未嫁者卜之、〈若無内親王者、依世次簡定女王卜之、〉訖卽遣勅使於彼家告示事由、神祇祐已上一人率僚下隨勅使共向、卜部解除、神部以木綿著賢木、立殿四面及内外門、〈其料木綿、所司請之、解除料散米酒肴等、本家儲之、〉其後擇日時、百官爲大祓、〈同尋常二季儀、〉

祓料

木綿麻各大四斤、鹿皮四枚、鹿角四枝、大刀四口、弓四枝、箭四具、鍬四口、葉一斤、庸布二段、酒米各四斗、稻四束、鰒堅魚各八斤、腊卅斤、海藻廿六斤、滑海藻十斤、雜海菜八斤、鹽四斗、水戸四口、匏四柄、賦料庸布五段、短帖一枚、薦二枚、馬二匹、〈已上所司各送大祓所、〉又遣使奉幣大神宮、爲告卜定齋王之狀也、〈其儀同神嘗祭使、〉

〔北山抄 六〕卜定齋王事

上卿奉勅、令召候神祇官、如常、座定仰外記、令進硯紙等、自書内親王名、〈用未嫁者、若无其人、依世次簡女王、〉令外記封、〈宮例以續飯封、近代用刀云々、〉召祭主給之令卜、〈或云、中臣官人、〉卜畢、封上書卜食合否進之、若有二人以上、又封令卜如先、畢神祇官退出、所司撤座、卽入御卜於筥、令持外記參上奏之、奉仰復座、召祭主仰以其人定由、仰辨官令給承知官符於所司、卽遣侍臣五位以上一人、告本家、〈自殿上遣之、〉神祇官向彼家解除、立賢木、上卿召陰陽寮、令勘申奉幣大神宮日、又百官爲大祓、

〔江家次第 十二神事〕齋王卜定事〈伊勢〉

上卿參議著陣

藏人奉仰、問諸司具不於上卿、

藏人仰可令勘申卜定伊勢齋王日時由、

上卿仰辨令勘申、入外記筥令藏人奏、〈上卿作居障令奏、〉返給之後上卿下辨、

次藏人奉仰、仰上卿曰、以某内親王〈若某女王〉可爲伊勢齋王哉由令卜申〈與〉、用未嫁人、若無内親王、依世次、

子、曦子等ノ內親王ハ、天皇ノ讓位ニ由リ、濟子內親王ハ過失ニ由リ、功子內親王ハ母ノ喪ニ由リテ退下セリ、之ニ反シテ在任久キヲ經シアリ、倭姬命ノ、垂仁天皇ノ二十五年ヨリ景行天皇ノ二十年マデ奉祀セラレシガ如キ、酢香手姬皇女ノ、用明天皇ノ朝ヨリ推古天皇ノ朝マデ三朝三十七年間在任セラレシガ如キ是ナリ、抑齋王ハ崇神天皇ノ六年ニ、皇女豐鋤入姬命ヲシテ天照大神ヲ倭ノ笠縫邑ニ祭ラシメ、次テ垂仁天皇ノ二十五年ニ、倭姬命ヲシテ豐鋤入姬命ニ代リテ、伊勢ノ齋宮ニ奉齋セシメ給ヒシニ創マレリ、成務天皇ノ朝ヨリ安康天皇ノ朝マデ九代中絕シ、淸寧、顯宗、仁賢、武烈ノ四朝、又此事ナク、後又舒明天皇ヨリ天智天皇ニ至ル、五代ノ間亦中絕セリ、天武天皇ヨリ以後ハ、大カタ間斷ナカリシガ、後醍醐天皇ノ皇女祥子內親王以後ハ、遂ニ全ク廢絕セリ、

名稱

〔伊呂波字類抄伊人部〕齋宮（イツキノミヤ）

〔八雲御抄三下異名〕齋宮　の、みや（群行以前御在所）　たけの宮（伊勢御在所）　いつきみや　いは宮

〔類聚國史四神祇〕天長五年二月壬子、御小安殿、使散位從五位下三繼王、奉幣大神宮、其詞曰、○中略氏子親王乎、○淳和皇女　大神御杖代、○此之氏、奉入（多留）親王（爾）在、

○按ズルニ、御杖代ノ稱ハ、古ク倭姬命世記、大神宮儀式帳等ニモ見ユ、

卜定及奉幣

〔延喜式十一太政官〕凡天皇初卽位者、定伊勢大神宮齋內親王、簡未嫁者令所司卜、（若無內親王者、依世次簡女王卜之）訖卜宮城內便處、爲初齋院、祓禊而入、更卜城外淨野、造齋宮、畢明年八月上旬卜吉日、祓禊而移入之、太政官定從行五位以上名數、前十日任前後次第司、各長官一人、（五位）判官主典各一人、（六位以下）依時剋出自初齋院、臨川上祓、祓卽入野宮、（事見齋宮式）潔齋三年、五月以前、任齋宮寮官人及主神司、其諸司七月以前任之、卽依例准擬鹿事、九月上旬卜定吉日、向伊勢大神宮、預任裝束司五位二人、（一人神祇副以上、一人左右少辨以上）六位以下四人、（神祇、辨官史、繼丞、諸司主典）前行日點定監送使四人、（參議若中納言一人、辨一人、史各一人、以下官一人）齋王臨川祓之、如入野宮祓

大祓使ヲ京畿七道ニ遣シテ祓除ヲ行ハシメ、且ツ九月一日ヨリ三十日マデヲバ齋月ト稱シテ、沿道諸國、北辰ヲ祭リ、及ビ擧哀改葬スルコトヲ禁ジ、又近江伊勢ノ國司ニ命ジテ、近江ハ國府甲賀垂水、伊勢ハ鈴鹿壹志ノ五所ニ頓宮ヲ造ラシメ、兼テ雜物ヲ辨備シテ、群行ノ用ニ供セシム、其途ニ上ルヤ、百官之ヲ京城外ニ奉送ス、群行路次、禊ヲ修シ樂ヲ奏ス、行裝甚ダ壯嚴ナリ、歸京ノ儀亦之ニ同ジク、使ヲ遣シテ其由ヲ大神宮ニ申告シ、奉迎使ヲシテ之ヲ迎ヘシム、祓禊頓宮等ノ事、總テ群行ノ時ニ異ナラズ、但シ凶事ニ遭テ歸京スル時ハ、路ヲ伊賀大和ニ取リ、難波ニ到リテ禊ヲ修シ、其後京師ニ入ルノ例ナリ、其衣服輿輦ノ類ハ、中臣忌部等ニ賜ヒ、調度雜具ノ類ハ寮官百姓等ニ頒チ賜フコト、亦野宮退下ノ時ニ同ジ、

初齋院及ビ野宮ノ所在ハ、一定セラレザリシガ如シ、史ヲ按ズルニ、元正天皇ノ朝ニハ、北池邊ノ新造宮ヲ以テ、初齋院ニ充テ、光孝天皇ノ時ニハ雅樂寮ヲ用キ、其後宮内省、又ハ主殿寮、主水司、左近衞府、右兵衞府、侍從厨家等ヲ以テ之ニ充テラレシコトアリ、又野宮ハ、天武天皇ノ時ニハ泊瀨ニ、光仁天皇ノ時ニハ春日ニ、桓武天皇ノ朝ニハ平城ニ置カレシガ、文德天皇以後ハ、多クハ皇城ノ北野ニ設クルコトヽナレリ、祓禊ノ地亦一定セザレドモ、延暦遷都以後ハ、多クハ葛野川鴨河等ニ於テスルヲ例トス、此他伊勢齋宮ノ所在地、及ビ其制度職員等ノ如キハ、專ラ附齋宮寮篇ニ詳ナリ、

齋王ノ年齡モ亦一樣ナラズ、識子、恭子、媞子、潔子、昱子等ノ内親王ハ、何レモ十歲以下ニテ拜任シ、規子、幷子、利子等ノ内親王ハ、皆二十歲以上ニシテ拜任セリ、其職ヲ解クニモ、天皇ノ讓位、又ハ崩御ニ由ルハ定例ナレドモ、亦悉ク然ルニアラス、縣、雅子、徽子、淳子等ノ内親王ハ、父母ノ喪ニ由リ、氏子内親王、妍子内親王ノ如キハ疾病ニ由リ、磐隈皇女、菟道皇女ノ如キハ過失ニ由リテ、共ニ解職セラル、又群行ヲ遂ゲズシテ野宮ヨリ退下セシアリ、揭子、輔子、亮子、休

古事類苑

神祇部五十九

大神宮九

齋宮 齋宮寮 離宮院附

齋宮ハイツキノミヤト稱シ、又字音ニテ、サイグウトモ云フ、天皇即位ノ初、皇女若クハ女王ヲト定シテ、大神宮ニ侍セシメ給フヲ云フ、故ニ又齋内親王ト稱シ、略シテ齋王トモ稱ス、蓋シ齋宮ハ所居ノ稱ニシテ、其伊勢國多氣郡ニ在ルヲ以テ、或ハタケノミヤトモ云フ、而シテ齋王ヲ稱シテ齋宮ト爲スハ、卽チ所居ヲ擧グルナリ、抑齋王ヲ擇ブニハ、先ヅ皇女ノ未ダ嫁セザル者ヲトシテ之ニ充ツ、若トセザルカ、或ハ時ニ皇女無キ時ハ、世次ニ依リテ女王ヲ備定シテ之ヲトス、(但シ中世以來、未ダ内親王タラザル皇女及ビ女王ハ、先ヅ之ヲ内親王トシ、而シテ後發遣セラルヽヲ例トス、又其在任中准后宣下ノ例アレドモ、多クハ當代若クハ上皇ノ皇女ニ限レルモノヽ如シ、)ト定畢レバ、幣帛ヲ奉リテ其由ヲ大神宮ニ申告シ、齋王ヲシテ宮城内ノ便所ニ移リ居ラシム、是ヲ初齋院ト云フ、其後更ニ地ヲ城外ニトシテ新宮ヲ造ル、之ヲ野宮ト云フ、明年八月初齋院ヲ出デヽ、野宮ニ入ル、其初齋院及ビ野宮ニ入ラントスルヤ、齋王先ヅ河水ニ臨ミテ祓禊ヲ行フ、既ニ野宮ニ入リテハ、朔日毎ニ木綿鬘ヲ著ケ、齋殿ニ入リテ大神宮ヲ遙拜シ、潔齋三年ニシテ、其九月始メテ伊勢ニ發向ス、是ヲ群行ト云フ、(野宮ノ屋舍及ビ其調度雜物ハ、中臣主神司忌部等ニ頒チ賜フ、)當日天皇大極殿ニ出御、中臣ヲ召シテ宣命ヲ賜ヒ、新タニ齋王ヲ侍セシメ、及ビ例幣ヲ奉ルコトヲ大神宮ニ告サシム、其後齋王ヲ召シテ、親ラ櫛ヲ其額ニ加ヘ給フ、之ヲ別(ワカレ)ノ櫛ト云フ、是ヨリ先キ裝束司監送使等ヲ點定シテ、其旅裝ヲ整ヘシメ、先ヅ

〔吾妻鏡七〕文治三年正月廿日壬戌、合鹿大夫先生爲御使、爲奉幣于大神宮進發、伊勢國神馬八疋、(内外宮分各二疋、風、荒祭、伊雜、瀧原、各一疋、)砂金廿兩、御劒二腰、所被奉送也、是依伊豫守義經反逆御祈禱也云云、

〔玉海〕文治五年正月三日甲午、此日奉獻琵琶(内宮)笙(外宮)於大神宮、去年遣祭主許、今日可進納之由仰之、仍自昨日潔齋、今旦修祓、雖三箇日内不可有憚之由所存也、陰陽師在宣朝臣也、余著衣冠祓之後遙拜、信心發起、尤憑深者歟、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十二月五日癸卯、以白河左衛門尉義典爲奉幣于大神宮令進發、其外諸社被立使節之由、今日披露于御所中云云、

〔正應六年七月十三日公卿勅使御參宮次第〕勅使私被奉進神馬一疋、八重疊東、公家神馬奉引立在所仁立之、是爲新儀歟、

〔氏經卿神事記〕寬正七年三月廿日、十七日御進發、(○足利義政)十九日午剋御著、今朝辰剋御參宮、(○中略)御幣金大刀二腰、各三尺八寸、御馬二疋、件御大刀、外宮分者、度會延口神主奉持、内宮分者荒木田定口神主勤之、

體遠皇大神乃御殿乃砌利、五十鈴乃河上乃畔仁、假奉遷云云、亦同月仁、彼凶賊等、二所大神宮乃御殿近邊乃人宅仁亂入志、資財遠捜取利、舍宅遠燒失須留刻、祠官等成恐怖天、參宮中天令騷動奉、此兩條全頼朝不謬、神明乃仰照鑒久、方今無事仁遂參洛天、防朝敵天、世務遠如元一院仁〇後白河奉任天、爲王乃慈愍遠令訪、神事遠如在仁奉崇天、正法乃遺風遠令繼奉、縱雖平家毛、雖源氏毛、不義遠波罰志、忠臣遠波賞志賜倍、兼又古今乃例遠訪天、二宮仁新加乃御領於申立天、伊雜宮遠造替志、神寶遠調進止勢牟所祈請奈利、抑東州御領、如元久不可有相違留由、任二宮注文、染丹筆天奉免畢、此凡不訛謬須、皇大神此狀遠令照納天、上美始自政王免、下迄于百司民庶天、安穩泰平仁令施惠護天、頼朝加伴類仁臻萬天、夜乃守利日乃守利仁、護幸倍給倍止、恐美恐美毛申天申久、

治承六年二月八日　　前右兵衞佐從五位下源朝臣頼朝

三月廿日庚寅、大神宮奉幣御使歸參、二宮一禰宜各領納幣物、可抽懇祈之由内々申之、但不奉狀、是若憚平家之後聞歟之旨有御疑云云、　五月十九日戊子、十郎藏人行家在參河國、爲追討平家、可令上洛之由内儀、先爲祈請、相語當國目代中藏人以通、密勸告文、相副幣物等、奉二所大神宮、

奉送御幣物

美紙拾帖　　八丈絹貳匹

右奉送如件

治承五年五月十九日　　參河御目代大中臣以通

依藏人殿仰所令申候也、大神宮御事、自本内心御祈念候之上、旁御夢想候歟、仍所思食御意趣之告文、御幣物送文等獻上之、以此趣可御祈念候也、仰之旨如此、謹言、

五月十九日　　大中臣以通奉

内外宮政所大夫殿

被奉金鎧於神宮奉納以前祭主親隆卿嫡男神祇少副定隆於伊勢國一志驛家頓死、又件甲可被奉納事同月十六日於京師有御沙汰當于其日本宮正殿棟木蜂作巢雀小蛇生子、是等之恠勘先蹤、輕朝憲危國土之凶臣當此時可敗北之條置面無疑者、

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年正月廿八日己亥可被奉大神宮之神馬砂金等事日者有其沙汰今日潔齋之輩獻此等於營中覽之直所令採用給也、　二月八日己酉被奉御願書於伊勢大神宮大夫屬入道善信〇三善獻草案是爲四海泰平萬民豐樂也云云生倫〇度會著衣冠參營中賜之則進發中四郎維重被相副之長江太郎義景爲神寶奉行同首途〇中略

御願書云

維當歲次治承六年壬寅〇壽永元年二月八日己酉吉日良辰遠撰定天、前右兵衛佐從五位下源朝臣賴朝、謹代御幣砂金神馬等令捧齋持天、天照皇大神廟前仁、恐美毛申天申久、賴朝訪遠祖波、神武天皇初天日本國豐葦原水穗留令濫觴天、五十六代仁相當禮留、清和天皇乃第三乃孫與利、携武藝天護國家利、居衛宮天、耀朝威須、自爾以來、插野心凶徒征罰須留依勳功天、惠澤身仁餘利、武勇世仁聞倍、和國無爲仁志、有穢克闢天、星霜三百餘歲仁亘布處、保元年中與利、洛陽仁兵亂起留時、人不訪湯王乃化、不存鎮護乃誓須、犯否於押混天賞罰於申行布間、平治年中仁、賴朝無咎過天亘罪科布、含愁憤天送春秋留處仁、前平大相國〇清盛、驍勇乃合徒黨天、去々年乃秋、賴朝於擬誅志日、依有天運天、蹤布加鎬遂令遁留、本自利不誤加故仁、神乃冥助奈利、而彼平大相國、還天賴朝加謀叛乃由叡聞於驚須、即奏事不實奈利、披陳仁無便志天、只仰蒼天久間多仁、華夷不靜須、逆濫重疊勢利、厥中仁聖武天皇草創鎮地乃後、歷四百餘歲多留遼宮遠令焚燒條、蒼生誰不悲歎哉、凡朝務遠押行比、都鄙滅亡須留、是豈仁非謀叛乎、又平大相國、俄早世勢留、神慮不快乃由露顯奈利、但賴朝殊所恐波、如風聞波、熊野乃衆徒號志天、肝濫遠巧牟類等、去年正月仁、皇大神宮仁濫入志天、御殿於破損志、神寶遠犯用須、因茲御

此條雖爲枝葉、就問狀、粗所述心緒也、念日非當宮祠官成阿、雖不預幣物、依自然之運、有福祐之名、前業之所感、不足喜憂乎、○中略

以前條々、抽簡取要、披陳言上如件、

正慶元年五月日

〔幣物論〕豐受大神宮神主、

注進內宮祠官等掠申幣物間事

副進

陳狀

右件事子細載于狀也、抑檢舊貫、二所大神宮者、異于天下諸社、因玆如延喜式文者、王臣以下、不得輙供大神幣帛、其三后皇太子、若有應供者、臨時奏聞云々、其上如永承三年宣旨者、應永停止進於二所大神宮人民百姓幣帛者、始自王臣、至于庶民、勅制惟重、誰閣其法乎、加之延曆式文、誰注進哉、奉幣之科準流罪、長德下知、誰成敗矣、祭主之職今何改焉、而近代不經上奏、推進寶前、任自由令奉幣之條、當宮禰宜、日比成恐怖之處、剩內宮神主等致此愁、豈非神宮之耻辱、祠官之瑕瑾哉、凡於參詣之輩者、更無公家禁制之法、至止宿之所者、宜任自他旅人之意歟、然則自今以後、固守宣旨並式文等、永被停禁私奉幣者、嗜慾之謀訴、自然兮令斷絕、違勅之假望、不誡而可靜謐者歟、早可被磨嚴制之古跡、省奸訴誹謗者哉、仍注進如件、

正慶元年五月日　　大內人度會賴彥

禰宜度會神主判十人列

〔吾妻鏡二〕治承五年○養和元年十月廿日癸亥、昨日大神宮權禰宜度會光倫、號相鹿二郎大夫、自本宮參著、是爲致御祈禱也、今日武衞○源賴朝對面給、光倫申云、去月十九日、依平家申行、爲東國歸往祈請、任天慶之例、

御下知者、瑞籬風前彌儀禮莫、齋屋露底全均慈惠、
凡處々權扉社官等、各憑諸權之力、令繼累葉之業、何限于當宮、不申達理遂哉、
然早停止二宮相兼非儀分、詔刀師於內外宮、爲豪平均神慮、言上如件、

元弘二年三月日

外宮陳狀

外宮祠官謹辨申

諸國參輩幣物間事

右內宮祠官等、去三月日訴狀偁、今月七日總官御文偁、內宮祠官等申、外宮祠官等、以諸國參詣輩等所捧御幣物、抑留當宮分條、神慮有恐由事、申狀如此、可爲何樣哉、有所存者可示給也者、神宮施行子細同前也、〇中略
居一宮奉仕職之由乍令自稱、荒木田氏人中、當宮幣物詔刀條、事與情相違、
然而察廣大之神慮、外宮祠官敢不成憤之處、及訴訟、比興至極歟、
又偁、以諸國參詣貴賤幣物、外宮祠官職掌人等一向抑留、而令拜領云々、

牒文如前

此條衆跡形之不實也、祠官事、廣殆數十人、其中何族、押留內宮分哉、早付彼宮祠官等權那並詔刀師、云押留幣物之色目、一々被召注文、可有誠御沙汰歟、
或徘徊瑞籬之緣邊、或令編參詣之緇素、好指南、望幣物、剩待請路次、奪所幣物之輩、在內宮之由聞、令風聞、至當宮者、未承及者也、
又偁、因茲彼宮氏人等者、錢帛充藏、酒菓堆案、貧富雲泥、可謂勿論者歟云々、

牒文

〔台記〕久安四年六月十八日甲辰、今日獻寶物於諸社、是密々事也、使今日參著大神宮、余〇藤原頼長及女御代、昨日勤齋、女犯無憚、夜前沐浴、今朝余浴被著衣冠、於西庭□室向大神宮方祈請、不拜

〔詔刀師沙汰文〕奉行致定神主

內宮祠官等申、外宮祠官等、以諸國參詣輩等所捧御幣物、抑留當宮分條、神慮有恐由事、申狀如此、可爲何樣矣、有所存者可示給也、仍執達如件、

五月七日　神祇權大副判

外一三位殿

表書云

外一三位殿　神祇權大副親忠

內宮祠官等謹言上

欲早停止二宮相衆非儀、被相分詔刀師於二宮、蒙平均神恩、爲外宮祠官等以諸國參詣輩等所捧御幣物、抑留當宮分條、神慮有恐子細事、

右稱三姓氏人者、大中臣荒木田度會是也、仍中氏者掌天神地祇祠職、爲三氏之上臈、兼二宮之拜趨者也、

爰正權禰宜、內宮者荒木田、外宮者度會氏、各居一宮奉仕之職、全無兩宮兼行之法、

然間王侯卿相被奉獻幣帛之時、二宮御祈禱師令奉幣者例也、關東將軍家、相州刺史以下、大名又以同前也、

而以諸國參詣貴賤幣物、外宮祠官職掌人等一向抑留、而令拜領之條、神慮有恐、且雖當氏之人、難啓白之故也、

因玆彼宮氏人等者、錢帛充滿、酒菓堆案、貧富雲泥、自今以後者、分幣帛於內外宮、可遂神拜之由、被下

世の如く、上一人より下庶民にいたるまで、貴賤となく奉幣參拜するぞかへりて大御神の御心には叶ふべくおぼゆ、然ども一たび朝廷の制あるうへは、其制を守るべきは勿論にて、それに背くは非禮なれども、旣に數百年來、その制やぶれ來れども、更に上よりこれをとゞめ給ふ事なく、天下一同のならひとなりぬれば、今更これを私に制べきにもあらず、かくの如きならひになりぬるも、もと大御神の御心より出たるも知がたし、今時は天下こと〴〵く、大將軍の制令にしたがふ、其大將軍よりも、毎年幣物を奉らるゝなり、大將軍の制令は、卽天皇の御政なれば、これに背て、私の奉幣を非とせんは、中々に皇朝の政に背く理也といへり、神學類聚抄豐原本記を引て、兩宮の奉幣は、皇帝一人に限り、其外は誡給へり云云、民庶の所捧は、奉幣の理にあらず、相似て大異也、是は神國神地の調貢也、是を初穗と稱す、是男女弭手末貢歟とあるよしいふは、強たりといふべし、古來大神宮へ、萬民調貢すべき由、制令ある事をきかず、さればたとひ調貢にても、同じき私事をまぬかれじと思へり、

〔玉手繦六〕伊勢神宮へ、凡人の參詣して、物など獻る事は、古は嚴重に禁じ給へる事なり、〇中略古は右に云ごとく、庶人などは、大御神へ物奉ることは更なり、拜み奉ることも叶はぬ御制なりしを、始めに云る如く、佛道が根ざしと成りて世は亂れ、それに乘じて佛者らが姦術を行ひつゝ、遂には伊勢の兩宮までも、其謂ゆる法樂を行ふ事となり、其よりして、此御祓宮をくばる事も始まり、往古の御定めは、何時となく綏みて、拜禮の出來る事と成り、その御璽代とすべき物をも賜はりて、家々に齋ひ奉る事となり、〇下略

〔中右記〕永久二年正月十六日、未時許、民部卿〇源俊明來給、爲一家長之上、此人爲檢非違使別當時、二ヶ度被勤仕伊勢勅使也、仍爲思吉例、尋申不審事等、〇中略又可奉私幣歟、命云、全不可然、只能奉祈公家之後、心中所思、一旦祈申許也、

私幣

スル處ヲ外ヨリ參詣シテ祭ルヲ忌ミ嫌フ事ハ、簒奪ノ機ヲ忌ガ故也、神代ノマヽニシテ、皇統萬世ト云トモ、異國ノ爲ニ襲ハレズ、其大恩偏ニ大祖天照大神ノ御德ニ有レバ、萬民ドモヽ、是ヘ拜謝ノ參詣ヲナス、何ゾ妨アランヤ、○中略吾國ノ風儀、自然ト參宮スルヲ道ト心得ヌレバコソ、東西ヲ辨ヘザル程ノ兒女、踰山鯢波ヲ越テ、誰敎ルトモナク、乞食體ニテ成トモ參詣スルヲ以聖トス、是日本人ノ君ノ祖ヲ吾祖ノ如ク、天性忠烈ノ自存スル所ニシテ、彼神學者ノ理屈ニ拘リ、國風ヲ破ントスルノ類ヒニハ非ズ、以思ヒ以愼ミ、吾國風ノ敎ズシテ自忠ナルハ、參宮ヲ以シルシトスルノ操ヲ損ズベカラズ、天子ノ祖廟ハ、則吾忠ヲ盡スベキノ祖廟也ト心得テ參詣スベシ、延喜式ノ文ハ去事ナレドモ、君父ヲ弑シテモ、民ヲ化スルヲ道トストアラバ其ニ隨ンヤ、書ヲ見ルコト先文ヲ以シ、理イカヾト見、次ニ道イカヾト定テ、而後ニ安ズベシ、是此一個ノ僻見ヲ成ス神學者ハ誰ヤ、有名無實ナル人歟、

○

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉幣帛本紀事

禁斷幣帛王臣家幷諸民之不令進幣帛、重禁斷、若以欺事幣帛進人遠波、准流罪勘給之、

〔延喜式伊勢大神宮四〕凡王臣以下、不得輙供大神幣帛、其三后皇太子、若有應供者、臨時奏聞、

〔長寬勘文〕天照大神者、諸神之最貴、伊勢兩宮更无抗禮、天無二日、地無二王之義也、加之神宮者、禁斷私幣、忌憚佛事、熊野者不嫌民庶、容受緇徒、其風乖違、其禮懸隔者、

〔大神宮儀式解二十一〕王臣以下幣帛たてまつるを嚴く制る也、大神宮式、凡王臣以下、不得輙供大神幣、其三后皇太子、若有應供者、臨時奏聞、といふにひとし、後には此制も衰て、賴長公、賴朝卿、奉幣の事、台記、東鑑に見え、其餘の記ども、臣家の奉幣あげてかぞへがたし、或說に、此制は上代よりの事にはあらじ、漢意を專ら用らるゝ御世となりての後の制ならん皇國の意を以ていはゞ、今の

も今に至りては、萬民の祖神とす、吾國道なく、日向の國橿が原に都して、人道の祖なり、故に卑賤どもも拜すべからざらんや、

〔庶人可參宮哉否之論〕或神學者說ヲナシテ、伊勢兩宮ハ、天子ノ宗廟ナレバ、タトヘ高官貴職タリトモ參詣ヲナシ、及常ニ是遙拜スルコト、禮ヲ僭スルノ甚シキモノ也、況ヤ無位無官ノ士庶人ニ於テヲヤ、必參詣拜禮スベカラズ、季氏泰山ニ旅スルヲ非禮トス、其鬼ニ非ズシテ、是ヲ祭ルヲ諂トストコソ聞タルニ、學問ヲ勤ザルノ失、ツヒニ士庶人、天子ノ宗廟ヲ塵(ケガス)ニ至ルト云也、靜安元ヨリ儒ヲ業トス、季氏僭上、及非鬼ノ祭ヲ戒メラレシ聖語、豈信ゼザランヤ、然ト云ドモ、吾邦ハ開闢以後一王一統、天子姓ヲ易ルコトヲ聞ズ、自ラ山川ヲ祭リ、自ラ皇祖ヲ祀ルト、是ヲ信ジコレヲ敬シテ、天子ヨリ立オカセラルヽ神宮ヘ、拜參ノ誠ヲ盡ストハ、其儀別ナルベシ、孔子ハ代々天子ノ祖神ニハ非ズト云ドモ、二仲ノ釋菜、只其能化ノ今日ニ及ヲ拜謝シテ、兼テ衆人學問ヲ勸ルノ道ナルベシ、信ジテ是ヲ祭ルハ、其シカル所以有故ニシテ、其鬼ニ非ズシテ祭ルト同意ニアラズ、然ドモ彼說ヲナス神學モ、又吾尾府ニテハ、一家ヲモ立ル人ト聞シ故ニ、イカナル舊記ニカヽル相傳有テ、其理明ナル事モヤト、猶豫ノ意有ケルニ、多田先生ノ逗留ヲ幸トシテ、就テ正スニ、先生曰、公モ又孔孟ノ意ニ入ル人歟、孔孟ヲシテ日本ニ生レシメバ、伊勢參宮ノ事ハ人ニモ勸メ、自ラモ拜參有ベキカ、今世ニアル意必固我ヲ宗トシテ、國風ヲ辨ヘザルヲ儒者ト心得ル類ニハ有ベカラズ、其神學者イカナル人カハ知ネドモ、定テ知ル延喜式ヲ證トスルノ說ナルベシ、延喜式第四伊勢大神宮式曰、凡王臣已下、不得輙供大神幣帛、其三后皇太子、若有應供者、臨時奏聞セヨト云々、此文ヲ以テノ故ナルベシ、皇太子ト云ドモ、私ニ幣物ヲ奉ラザル時ハ、諸王諸臣ハ猶以獻ズベカラザルノ儀明ケシ、然ドモ延喜式ハ、六十代醍醐天皇ノ朝ニ、藤原忠平公等奉勅撰スルノ式ニシテ、吾邦ノ故實、次第ニ儒者佛者其家々ノ意地ヲ加ヘテ、上古ノ質、稍文ノ爲ニ因(オホハル)〇中略天子ノ祖ト

雜載

〔神境紀談二〕僧尼拜所

此拜所ハ、僧尼法體ノ輩、遙拜スルノ所ナリ、古ヨリ僧尼法體ノ輩ハ、內院ニ參ル事ヲ許サズ、然ルユヱニ三鳥居ノ外ヨリ拜シ奉リシヲ、何ノ比ヨリカ、今ノ如キノ拜所ヲ構ヘテ、僧尼ノ拜所ト稱セルナリ、釋虎關、勢州神祠ニ詣ル時、一禰宜曰、此神沙門ヲ愛セズ、近クコトナカレトテ、一大樹下ニ遮止ト、元亨釋書ニ云フヲ見レバ、此時マデハ三鳥居ノ外ニテ拜スト見エタリ、尙又古ハ別宮ニモ參入セザル事、應安遷宮記ニ見エタリ、

〔憲法類編十四 教法〕壬申五年〇明治六月十二日、第百七十五號御布告、

伊勢神宮ヲ始メ、諸神社、自今祭典之節タリトモ、僧尼參詣不苦候事、

〔塵添壒囊抄十二〕可參詣大神宮事

其所鎭守ナンドヲ閣テ、大神宮ヘハ可參詣事歟、總テハ神事心向ケハ如何ガ侍ベキ、 此事以管見難申披也、雖然大底法アル歟、先和國ニ受生人、大神宮ヘ可參詣事ハ勿論ト云々、已ニ此國本主神明ノ王ニテ御坐セバ、各鎭守ヲ仰グ所モ、幷自餘ノ社人モ、君ニ事ツルヲ以テ、法施ヲモ可奉見タリ、其故ハ俗書ニ王字ヲ釋スルニ、王者往也トテ、ユクト云意アリ、一切ノ物皆彼德ニ歸スルヲ王トス、縱ヒ清涼紫宸ノ皇居、蘭殿華帳、料理イミジク共、千官百寮往テ不敬、兆庶萬民舉不仰、有何詮、四海ヲ家トシ、兆民ヲ子トシテ、一切ヲ兼愛シ給ヘバコソ、王トハ申シ侍レ、其朱閣ニ星ヲ戴テ、丹墀ニ霜ヲ蹈テ、臣下ノ參內ヲ本トスル如ク、神道モ亦爾也ト、サレバ參宮ヲ納受シ給ヘバコソ、度々運歩人々、運々蒙惠類ヒ多ク侍ルラメ、但大神宮ハ、元來ヨリ法性ノ神トシテ、其理ヲ諸神ニ令蒙、仍所々ノ鎭守靈神、賞罰併ラ神宮冥慮也、仍近クハ鎭守、遠クハ神宮、冥慮ニ奉背樣々振舞給ベキ也、

〔春波樓筆記〕伊勢皇大神宮は、吾國の始祖にして、上天子の拜すべき神靈なる事明なり、然りと雖

り過ぬ、

〔宮中物語〕宮中之掟、祭主殿九箇條之寫、○中略

一僧尼俗人ニ不寄、法體之者如古法、神前近々不有參入事、○中略

寛永十八年四月十七日　祭主神祇權大副○大中臣朝臣友忠判

〔南勢事略六諸寺〕寛文以來堂上門跡方參詣

延寶三年閏四月十六日　聖護院御門主

同年同月十七日　竹內御門跡

寶永四年六月十二日　勝宮一身田伏見殿息

延享元年八月十三日　一身田宣宮

寶曆七年九月八日　一身田季宮

〔五元集亨〕御齋にまうで奉りて

御穗を取て髮あるまねのかざしかな

內宮法體の遙拜なるに

身の秋や赤子もまいる神路山

外宮

日は晴て古殿は霧のかゞみ哉

いづれも〳〵わが身はゞかりあるゆゑに申侍なり、

〔寛文以下日記〕寛文十二年壬子歲十月上旬より、內宮僧尼之拜所、奧へ道を作り、拜所之普請あり、此普請入札と申輩も有之候へ共、宮中之事入札と有事不相應なる義と禰宜申、吟味之上日々之日傭になる、

を清めて、山田の原の宿につきける、道無人々にかたりけるは、道中の物がたり申けるやうに、こほどの人らも、みな金の神道になりて、あさましく侍るといへば、中將聞給ひて、口をしき事なかたりぞ、爰は我國の本にして、すこしも餘說のなき所なりとの給ひければ、道無が申けるは、參宮の貴賤の中に、僧尼のかたちの人は、神前ちかくはよらぬ御事と稟てうけたまはり侍れども、是もむかしはさもこそあらめ、神供領わづか十餘目ほどつかはしぬれば、神前はさておきぬ、はらひ所の内陣まで入申事なりといへば、中將聞給ひ、あらもつたいなや、わが神明は僧尼のすがたをふかくいみ給ひて、神託の子細あり、佛法のいきをしりぞけ、神祇を再拜せよとなり、道無が金にてよろづなりけりといふ事も、神明の前にはかなはずとありければ、道無がいはく、いかにも金にて、僧尼の神前へ參り候事、いとやすき事なりとて、懷より一つゝみとりいだし、一如上人と性子と此道無と、三人の御供領にておはしける、神前へ備へてたべとて、御師の荒木大夫にわたしければ、信心の御僧衆にて御入候とて、中將殿をば玉がきのほとりにおき、此三人の入道を狩衣きたる男ともなひて、神前ちかく行てはらひし、祝詞などたてまつりて、やがていでぬ、中將殿はあんに相違して、興さめておはしける所に、道無うちむかひ、いかに殿、黃金のちから見給へといひければ、中將赤面し給ひて、老たる御師のかりぎぬきて、貴げにうち見えけるをまねきよせの給ひけるは、汝しらずや、我は萩原の中將といふものなり、しのびて參宮し侍る也、此所僧尼の神前ちかくはまゐらぬ所なるに、神供領次第にて、自由に內へ入侍る事は、何とし侍るあやまりぞととひ給へば、此師のいふやうは、出家はむかしより更に神前ちかくは成申さず候、見給へ、外に僧尼のをがみ所ありとこたへ申、中將殿はらをすゑかね、外までもなく、今我同道し侍る出家三人、たちまちすこしの金銀ゆゑに、神前ちかく其方同道申さぬかとの給ひしかば、其時御師のいひけるは、それは金が神前ちかく參りたるにて候へ、出家はまゐり申さずとうち笑ひはし

野津之旅舍

〔人鏡論〕爰に人皇百有四代の帝、後土御門院の御宇、武將は東山殿〇足利義政御治世のとき、長享元年秋の比、都の東山のほとりに、荻原中將と申ける人おはしけるが、我敷島の道にいとかしこく、且神道の達人にてありけるが、或日のつれ〴〵に、其比みやこにもろ人のうやまひける出家に、一如上人とて、八宗兼學の沙門有、又その比、世に賢人なりとてもてはやせる異儒の人に、性子といへる人ありけるが、二人うちつれ、かのひがし山なる荻原中將のもとへ尋行て、よもすがらうつり行浮世のありさまなど物語し侍るところに、爰に又下京に道無齋とて、萬浮世の中ものとも思はで、月日をおくるくせものあり、かれも此人々の末席につらなり、くだ〳〵しき事のみ物語し侍りけるが、〇中略夜も明、東山のはに日輪のぼり給ひければ、一如上人の云、いざや性子、中將殿をば先達にして、宗廟にまゐらんといへば、性子も尤なりとて、其日の午刻ばかりに、都をうち立けるが、中將の給ひしは、道無をも召具して、伊勢へくだらんとて、道無を起し給へば、巳の刻ばかりまで、ふかくいねけるが、夜もすがらむづかしき耳にもいらぬ物がたり、聞くたびれ侍る所に、よくこそ思ひたち給へりとて、同道四人、みな歩行にてみやこを出られけるが、〇中略人々あゆみゆく程に、伊勢國松坂といふ所につきて宿もとめいりぬ、性子がいはく、國々より參宮の貴賤しげく侍るをみて、さて〳〵きどくの我國の人々かな、もろ人の父と母との此神なれば、朝なゆふなにおもひ出侍るもことわりにぞ、みな參宮の人々、心々のねがひ成就してぞ歸るらんといへば、中將の給ひけるは、わが神明は、かゞみのごとくにておはしましければ、あかきをむかへば、あかきをうつし、白きをむかへば、しろきをうつし、まことをもてむかへば、まことをうつし、いつはりをもてむかへば、いつはりをむかへ給ふなり、その人々の心しだいにて侍るとの給ひければ、道無ありがたくおはしけるとて、かたりゆくほどに、宮川の清きながれに、おの〳〵旅のけがれ

思寄進スベキ、誠ニカリナル浮世ノ中程、定無事ハ無リケリ、○下略

〔花營三代記〕應永卅年十一月十八日乙未、大御所○足利義持大神宮御神事、有風呂、富樫介滿春事御風呂也十九日、御參宮、自此御所御立、御供事皆十德右局、

畠山彈正少弼持國　同右馬助同廿五日御下之時、自皆口遁遣云々、

御サキウチ持弓畠山播磨入道祐順　山名刑部少輔持熙

赤松越後守持貞　赤松伊豆守滿則

赤松大河內刑部少輔滿政　三上三郎持實

伊勢守貞經　同兵庫助貞長

古衞門尉貞彌　以上十一騎、此外遁世七人參也、

大名御供人數事、御トマリヘ皆被參、御點心茶アリ、

管領道端　斯波兵衞佐義淳

細川右京大夫入道道觀　畠山修理大夫入道道祐

山名右衞門督入道常熙　一色左京大夫義範

以上六人、路次ハ御アトニ馬輿也、

○按ズルニ、此時義持、既ニ出家ノ後ナリ、

〔碧山日錄〕長祿三年三月八日庚寅、春公明日與中書令勝秀公詣伊勢神宮、余之與余徒有此行、往古途中相從也、　九日辛卯、寅而飯、與鷲幸俊龍偕發足、三里而抵松本津、棹湖舟而到山漱村、一里而歷草津、與春公飯於旅亭、勝公過勢多橋而至、家臣之相從者十五騎、而稱其屬者五千餘人、蓋大人貴公詣神祠、則關譏而不征、庶首借其餘勢透關也、自草津東折七里、而投舂宿於皆口驛、　十二日甲午、與春公及數子詣于內宮、其道歷宇治、潄口於御裳河、而謁大廟、殊致肅敬之意、又歸于山田、赴歸途、晩投

門、莫近也、進止一大樹下、〇下略

〔大神宮參詣記 坂士佛〕康永元年十月十日あまりのころ、大神宮參詣のこゝろざしありて、伊勢のくに安濃津と申ところに著て侍りし程に、故鄕にて聊見侍りし人のとゞめ申しかば、旅の心をもたすけむとて、兩三日逗留し侍りぬ、〇中略山田より內宮へまゐるみちすがら、いやしき筆のはしにてのべがたし、〇中略二の鳥居のうちまで參りて拜するに、山下松くらくして、百枝の梢はいづれともわきまへがたく、宮中の杉いよやかにして、千木のかたそぎもさだかには拜まれたまはず、倩この身の有さまを案ずるに、十惡心にあり、故にながく佛意にそむく耻をいだき、一衣かたにかゝれり、故にいま神道にとほき恨をのこす、就中當宮參詣のふかきならひは、念珠をもとらず、幣帛をもさゝげずして、こゝろにいのるところなきを、內淸淨といふ、潮をかき水をあびて、身にけがれたるところなきを、外淸淨といへり、內外淸淨になりぬれば、神のこゝろと吾こゝろと隔なし、旣に神明におなじ、玄からば何を望てか、祈請の心あるべきや、これ眞實の參宮なりと、うけ給はりし程に、渇仰の淚とゞめがたし、

〔應安外宮遷宮記〕永和二年九月十九日、高宮御上棟、〇中略今日髮長迄、內院幷高宮推參、末代之式、無ㇾ力之次第也、

〔明德記 下〕去程ニ〇明德四年大夫入道〇山名義理大神宮ヘ參詣シテ、社中ヲ拜見シ給ニ、餘社ノ神殿ニ事替テ、心モ詞モ及バレズ、〇中略折節霞ノ小雨シメヤカニ降テ、五百枝ノ杉、百枝ノ松ノ綠ハ、春ノ色ヲ副ヘ、神路ノ山花ホコロビテ、吹來ル風モユウ〳〵タリ、ミモスソ川ニ、月澄テ浪間ノ影モ朧々タリ、神殿アラタニ神サビテ、誠ニ貴トク覺エケレバ、暫ク內證信心ノ法施ヲ奉ル、日モ暮方ニ成リシカバ、御師ノ宿所ヲ尋テ立寄給ケリ、御師大夫入道ヲ見奉テ、淚ヲ流シテ請ジ入レ、兎角痛ハリモテナシテ、夜スガラ物語共申テ慰メ奉ル、サテモ加樣ノ御姿ニテ、御參宮有ベシトハ、爭デカ

〔玉海〕壽永二年八月廿八日庚申、申刻院別當式部權少輔範季爲御使來、自院被發遣公卿勅使之間、依々御不審事可計奏云々、〇中略範季云、已被始神寶了、忽默止如何、余〇藤原兼實云、被渡公家行事所、尤可爲善政、若又猶有進物之御志者、非幣物之外物付祭主、若御使之僧徒等密々奉納、何難有哉者、後聞依爭申狀被行御占、猶申被立吉之由、仍被立了云々、

〇按ズルニ、此ノ文、當時僧徒參宮ノ證ニ供スベシ、

〔東大寺造立供養記〕爰高野山之重源上人、〇中略文治元年八月廿八日、被行開眼供養、〇中略其後上人參詣伊勢大神宮、祈請造寺事、故作是念、若我願滿足、當應示旨、爾時非夢非現、而寶殿之前有東帶之俗人、又幼童出來在上人懷中、語上人言、欲遂其願、可令我肥云云、夢覺之後、作是念以般若之法味增神明之法樂、仍書寫大般若經二部、備内宮外宮之法樂、引率六十口之僧、轉讀十六會之妙典、令尊勝院律師辨曉爲導師、其後二度書寫供養、次第同前、但導師醍醐僧正勝憲、笠置上人貞慶、〇又見東大寺衆徒參詣記、通海參詣記、

〔異本東寺長者補任〕僧正道寶　建治三年正月十二日、爲異國降伏御祈、參籠大神宮、三十箇日云々、

僧正奝助法務　弘安二年正月日、爲異國降伏御祈、進發大神宮、

僧正定濟法務　弘安四年正月十九日、爲異國降伏御祈、參向大神宮、

〔三國傳記八〕尾州篠木能化慈妙上人事

和云、尾州春日郡篠木庄密藏院能化慈妙上人、常陸國神田庄住人、鹿島氏子、辛卯〇正應四年二月八日誕生、〇中略廿九才爲顯密弘通、先伊勢大神宮參、内外兩宮千日籠、眞讀大般若十部轉、冥感方便ヲ祈給ケル、

〔元亨釋書十八神仙〕論曰、予〇虎關師錬詣勢州神祠、高山環峙、淸河繞流、杉林森矗、大數十圍、高百餘尺、一鳥不鳴、幽邃閒衡、殿製朴古、蓋茅茨、無彫刻、行人屛息、踏足、入中、心已肅如也、漸進殿前、一覡呵曰、此神不愛沙

參リ給ケルホドニ、外宮ノ南ノ山ヲスグニ越テ參給、山ノ頂ニ池有、大小ノ蓮華池ニミチタリ、或ハ開タル花、ツボメル花、色香マコトニ妙ナリ、カタハラニ人アリテイフヤウ、此蓮華ハ當社ノ神官ノ、既ニ往生シタルハ開タリ、往生スベキハツボメリ、和光ノ方便ニテ多クハ往生スルナリ、アノツボメル蓮華ノ大キナルハ、匡基ノ禰宜ト申ガ、往生スベキ花ナリトカタル、サテ御社へ參テ、法施タテマツルトゾ見給ケル、夢サメテ、ヤガテ負打カケテ、只一人ユメニマカセテ參リ給フニ、スコシモミチスガラ夢ニタガハズ、タヾシ外宮ノ南ノ山ノ麓ヲメグリテ、大道有テ山ノ路ハナシ、コレノミゾタガヒタリケル、社壇ノ體ハユメニタガハズ、サテワカキ俗人ノ有リケルヲマチキヨセテ、マヅユメニミシ禰宜ノ事ヲ問給、コレニ經基ト申子ギヤオハスルトノ給ニ、某甲コソサハ名ノリ候へ、禰宜ニハ成べキ者ニテ候ヘドモ、當時ハ子ギニテハ侍ラズトイフ、サテ金ヲ三兩負ノ中ヨリトリイデヽタテマツラル、ヤガテ彼俗ノ家ニ宿シテ、社頭ノ樣ナンドコマカニ問給ヒケリ、我今度生死出離セズシテ、人間ニ生レバ、當社ノ神官ト生レテ、和光ノ方便ヲ仰グベシトチカヒ給ケルトカタリ侍キ、カノ經基ニシタシキ神官ガ語シカバ、慥ノ事ニコソ、年久シクナレリト云ヘドモ、此事耳底ニ留テ不忘、仍記之、

〔西行物語上〕いづくをすみかとさだめねば、いのちをかぎりに、すぎやうせんとおもひて、まづ伊勢大神宮へまゐらんと、おもひて出たつ、〇中略大神宮にまゐりつきて、みもすそがはのほとり、すぎのむらだちのなかにゐて、一のとりゐをみいれまゐらせて、かたじけなくも、恭敬禮拜して、〇中略神道山のあらし、みもすそがはのなみをたて、ときはに月のひかりをうつし、いがきのもとに立寄れば、いとゞさやけきにも、

神道山月さやかなるちかひありてあめのしたをばてらすなりけり

さかきばや心をかけぬゆふしでのおもへば神もほとけなりけり

僧尼參拜

閏三月五日

〔伊勢參宮名所圖會附錄〕荒魂和魂幷拔參の事

かしこくも、天照大神豐受大神宮は、天子の始祖にして其餘猥に參詣すべき道理なし、○中略後世にはいつとなく、伊勢へも參るやうに成てより、是を伊勢熊野と稱して參りしなり、されば兩宮のおそれ、公家とても憚奉りし事を、まして平人の近く拜し奉る事、是俗に云下馬狼忽なり、しかれども、神國の風俗にて、自然と神の御德を慕ひ奉り、ひそかにしのびて參し事なれば、偖こそ是を拔參(ぬけまゐり)とはいひけれ、さるに當世の人は、人にしのびて參るを拔參と心得誤て、主親の許も待すして、不直のしわざをなして參るとも、神明なんぞその非禮をうけ給はんや、却て終に其罪を蒙る事とはしらざるぞ愚なる、

〔沙石集〕大神宮之御事

去弘長年中ニ、大神宮ヘ詣デヽ侍シニ、或神官ノ語シハ、○中略僧ナンド御殿近クマキラズ、社壇ニシテハ經ヲモアラハニハモタズ、三寶ノ名ヲモタヾシクイハズ、佛ヲバ立ズクミ、經ヲバ染紙、僧ヲバ髮長、堂ヲバコリタキナンドイヒテ、外ニハ佛法ヲウトキ事ニシ、内ニハ三寶ヲ守給事ニテ御坐ユヘニ、我國ノ佛法、ヒトヘニ大神宮ノ御守護ニヨレリ、

〔元亨釋書十八神仙〕伊勢皇大神宮者、天照大神之廟也、初聖武皇帝欲創東大寺、即思念我國家歷代奉神、今營佛宇、不知戾神意、不欲試機宜、天平十三年、勅行基法師、授佛舍利一粒、詣勢州獻皇大神宮、基於内宮南門大杉下、結廬而居、○下略

〔砂石集〕笠置解脫房上人大神宮參詣事

同宮○中略神官ノ語シハ、故笠置上人、菩提心祈請ノタメニ八幡ニ參籠ス、示現ニ、我力ニハカナヒガタシ、大神宮ヘ參テ申給ヘト夢ノ中ニ御告アリテ、道ノ樣委クヲシヘザセ給ケリ、サテ夢ノ中ニ

り候義に付、伊勢より御迎參り候と申、右樣騷立候事に候、右に付同心共へ承合候處、山師の致す事にて、伊勢大神宮御祓降り候義と存じ候段申聞候、堺市中も、七分通りは參宮に出掛け、明屋に仕り、表戶へ、お蔭參り仕候と立紙に認め、賣居同樣の有樣に御座候、此節は途中より伊勢までは、平船へ車を仕掛け、老兒共疲れ候者を載せ、大勢にて引船いたし候、此節は誠に人のお蔭にて、參宮仕候義に御座候、參宮人の隨分身元しかと仕候者罷出、著類うへは大機、下に縞縮緬小袖など著し、笠にお蔭參と認め、右樣の著類仕候者、是非々々柄杓を持參仕候義に御座候、此間大坂へ罷出候節、道にて見受候道者、男女打交り、十六七八歲位の女子五十人ばかり、揃の浴衣を著し、同音にて伊勢おんどをうたひながら、參宮もいせいよろしく、別義に御座候、おんど數多く御座候、まづ一ツ申上候、

おいせさんまへ、おかげでまゐる、ヨイ〳〵、みちはてんきの、やンれほどのョようさ、ヤアトコナ、ヨンヤナア、アリヤリヤ、コリヤリヤ、サアヨンヤナア引、

この通りの歌はやしにて、殊の外賑々敷、いせいよくいさましく御座候、堺へ入候所に、大利川と申、千住の大橋位の橋有之、此橋の上にて、人五六人罷在、參宮道者日暮前七ッ時時分、道者參り次第、最早日暮に相成に付、此所止宿いたし候樣申聞け、此方より留め候事に御座候、其外鍵施し候處は、往來へ二間に三間程の臺を仕、其上疊を敷、毛氈の上へ錢を積置、參り候人々一人も不殘、遣し候方より、御面倒ながら御持下され候へと申、不殘遣し候事、誠にあきれ果候義に御座候、大坂表などは、市中不殘、只うか〳〵と仕罷在候義にて、大坂へは殊の外救駕籠澤山出候由に御座候、河內より出候救駕籠五十挺程差出、駕籠かきの者何れも揃の著類、緋縮緬の下帶など著し罷出候事、先申上候所より夥敷御座候、荒增申上候、愚文之段、御笑留の上、只實事の所を申上候までに候、何も取込早々如斯御座候、以上、

は食物の類、錢或は施し湯なども有之、施し宿等いたし候者は、最前明店借受爲泊候よし、大さう
の騒に御座候、當地市中家持を始め、下女下男に至るまで追々驅出し、當地には鍛冶商人多く御
座候、何れも職人を遣ひ罷在候處、右職人共驅出し、參詣に罷越候に付、內は亭主一人に罷成、職分
も出來兼、詮方なく、是も跡より參詣致候由申聞候者も御座候、當地茶立奉公人、垢すり女と唱へ
候賣女は申に不及、ちもり幷六間町と唱申候、けいせいまでも參宮相願候樣子、旱天に雨を望む
が如く、やゝもすれば驅出べく樣子に付、不得止事、亭主家內幷に賣女召連、參宮に罷出候者も有
之候、右は無理に留置ては、拾兩廿兩の代物、お蔭にて損金致候儀に付、それよりは廿金も遣捨候
はゞ、家內不殘、幷に奉公人までも參宮相成候儀に付、明屋にいたし罷出候ものも御座候、猶又當
地大坂へ、松平阿波守殿より、宿駕籠差出有之、何百挺とか申事に候、是は老少共に疲候はゞ、御救
駕籠のよしに候、此間盜まれ物斷御座候處、右は盜賊遁入り候儀には無之、女房が盜み出し質入
いたし、それを路用に參宮に出掛け候存意のよし、かやうの心得違の者も御座候、又は食良遣ま
で漸く罷越候處、行先施人も無之、旅籠は高く、路用は元より用意無之、仕方なく空しく故郷へ立
歸り候、不本意の者も有之、又は參宮と唱へ、參宮には無之、施物を貪り候族も有之、大坂にては御
存の辰巳屋などにては、施金一萬兩差出し、鴻の池はいまだ承り不申候へども、其外も施し金錢、
其外格別に御座候、堺にても、一軒にて七拾兩餘施し候もの有之、其外鐚(ビタ)拾貫拾五貫、日々施し候
者共は、只施し者の數に入候上に御座候よし、只お蔭〳〵さんなどゝばかり申居候、諸商人且く
人出入薄く、訴訟公事少しなどゝ申候へば、是もお蔭ゆゑと申居、大神宮へ參り候ものを、お蔭參
りと唱へ申候、御役所四方、柄杓持候道者、夥敷通り候事、櫛の齒を引が如く、當所の蚊よりも多く
御座候、四國邊へ劍先向ひ、御祓降り候など申觸、此間も風烈の節、捲廻し飛散り、虛空に飛行し、そ
れより吹下し候へば、ソレ伊勢大神宮の御祓ふり候など、大勢騷立候事有之、尤何方へ歟御祓降

百人の日々に食料の魚鱗、海中より上る事夥しく、數ヶ月の間なるに、少しも乏しき事なし、此兩條を思ひても、是皆神明の御恵感應ましゝます事明なり、いかで凡慮の測り知るところならんや、

〔御影參上〕抑大日本伊勢の國度會郡五十鈴の川上に鎭座ましゝます皇大神は、○中略皇國第一の御神なれば、日毎に參詣の絶る時なし、然るに亦御影まゐりとなへて、諸國一統に群參なす事あり、古も其例ありつるよし、老たる人にきゝおよべども、眼前には見も及ばざるが、今年文政十三年、花に浮たつ彌生の半より、此おかげ參り流行いだし、六十餘州の國々より、都鄙貴賤の分ちなく、老若男女打群て、心安げに參詣なす事、引もきらず、○中略時に今般の參宮は、南海阿波の國より始り、紀伊和泉より五畿内に廣ごり、夫より中國九州にうつる、此國々の人々は、何れも大坂に來り、是より南都に趣き、長谷より伊賀路を過て、伊勢にいたるを本道となす故、參宮道の通りすぢは、町はゞ挾しと押合へし合、群々うたふ伊勢音頭、菅の小笠のいろ〳〵に、三度、熊谷、一文字、杉形、お徒歩、さしおろし、思ひ〳〵の合印、國と在所と同行の、人數をしるす油紙、あるひは手拭、紙のぼり、手水の爲か、水飲か、報謝をうける入物か、其緣故はいさ知ねど、おの〳〵柄杓をたづさへて、心はいそ〳〵嬉しげに、行人毎に深切な、浪花氣性の施行もの、米錢團子握り飯餅や煎豆あめ煎餅、茶の攝待に、味噌昆布、笠よ手拭ひ杖わらぢ、同行がきの油がみ、水のかはりの藥から、心をつけて毒消の、丸藥散藥、とり〳〵が、止てあたへる報謝宿、其餘いろ〳〵種々に軒をならぶる形勢は、いとも見事に殊勝なり、

〔曲亭雜記五〕泉州堺の人の書狀寫

來卯の年伊勢大神宮、六十一ヶ年目、御蔭の年に相當る由にて、當年、前年參と唱へ、去月廿日過より此節追々四國邊の者、夥敷當地を相通り候、人數凡一日に六七百人と申事にて、俗に蟻の百度參りとか申如く、殊の外群集の由に御座候、堺南北鄕中之內にも、參宮の者へ、笠手拭草鞋の類、又

あとは見えず、右魚屋儀助と申ものゝ、むかしの長者の末なり、阿波國の銀札裏書に、今もなほ魚屋寺澤と書き通用いたし候よし、寺澤善兵衛と申者も、先祖は長者なり、儀助方親類のやうすにはなしいたし候なり、

〔御蔭參宮文政神異記下〕尾張國名古屋の某、岩戸坂下の茶屋に休み居たるに、松木町の茂助といふ者、其人に逢ひて語るを聞に、御蔭參始まりしより、我は六度參宮せり、いはふて七度御參詣を遂げばやと思ふなりといへり、信心奇特の人といふべし、

大坂加島屋作十郎といふ豪家、こゝろざしの事ありて闇り峠にて盛に施行す、阿波國の人には、一人前金一朱づゝ、餘國の人には、見はからひてこれを施す、凡金一万兩の手當なりといふ、大坂第一の施行なりと沙汰ありしよし、鈴木勘大夫、大坂より歸りての話なり、

丹波國福智山御城下町中、兩側に手桶出しあり、是は御蔭參の馳走に、御領主より出さしめ給へるなりと聞けり、

播磨〇播磨當作二攝津一國湊川、兩側に小屋を建て、お杉お玉の趣をなし、京攝より來れる藝妓を集め、三絃にてさわぎたて、こゝばかじや、もてかんせと、十二錢づゝ、通行の參宮人へ施行せり、見物と旅人と打混じて、其賑ひいふべからず、お杉お玉とは、中河原の勸進尼さ、混雜したるもおかし、

紀伊國福島、一シャウシ村、庄屋又市といふ人、南鐐六十片を施行し、家内の衣類よりして、有合ふ品をも取出し、人々へ與へ、伊勢參りの者と見れば、のがさず施行せしが、其家の屋の棟に、御祓降らせ給へりと、福島の老婆二人、予が家に一宿してかたれり、

御蔭參始まらざる前は、米價貴く、諸人心痛せしところ、御蔭參始まりて、幾千万人の食料、とても行足りがたからんと思ひしに、大湊又は河崎へ向て、追々と入來る米船の數、九十餘艘、一万俵餘の米を積入れたり、是まで近くも遠くも聞ぬ事なりと、河崎米問屋の人々のはなしなり、且又數

和歌山にて、師の大人の御もとにたちよりて、何くれと物がたらふほど、此ほど見きゝたるこそどもをもかたりきこえけるに、さかし、かの明和八年といひし年にも、此おかげまうでといふことはありて、しか〳〵なんありしとの玉ひつゝ、やがてみづからかゝれし、其時の日記といふ物とうでゝ、見せられけるをみるに、まうでし人の國々の次手こそことなれ、此たびのにをさ〳〵たがふことなく、いまかゝれたらんやうに、いともつばらにしるされたれば、これなんぬけまゐりのよき家づとなるとて、たゞにこひえてかへりけるに、かばかりめづらかなるものを、おのれひとりひめもたらんよりは、いかでをちこちなる、おなじ心の人々にもみせまほしく思ふあまりに、○中略あながちにこひまうして、かく櫻木にはゑらせつるになん、

文政十三年といふ年の後のやよひ末つかた　阿波國人瀨邊春根

〔御蔭參宮文政神異記上〕河波國德島西新町、柄杓屋の木具屋德次と申者、昨十五日、御蔭參につき尋候處、御蔭參りの發端は、佐古町八丁目、手習屋に手習いたし居申候子供、御參宮仕度趣三月十九日物語いたし、翌廿日手習子供二三十人參宮仕、これ御蔭參のはじめなり、○中略某國の婦人、子を抱き御參宮せしに、宮川船群集して、誤て水に溺れけるを、水主に助けられ、母子ともに水をも飲ず、平安にして參宮せり、これを聞て、外宮四所別宮物忌中より、宮川渡場へ增船三十艘、十日の間これを寄附す、其後參詣人群集すれども、溺水のうれひなし、此後とても御蔭參りの始まらば、早速宮川渡場へ增船を出すべし、種々の施行にもまさりて、其功莫大なるべしと孫福某いへり、○中略

閏三月四日、阿波國德島より三里、脇宮、○宮一本作福田村と申ところ、魚屋儀助男子十二歲同行なし、御蔭參につき、ぬけ參り致し、文正年中ぬけ參りの節、大畑喜兵衞方に宿せしよしにて、此節も鍛冶屋垣外、大畑喜兵衞方へ尋來て宿す、此子供卽ち文正の古柄杓持參、その杓に年號あり、文正元戊、

本月廿八日頃より、四國筋のものども、伊勢參宮に罷出候者、多人數にて御座候、追々押移り、紀州泉州、其外上方筋、國々在町男女子供等、堺大坂市中押合通行いたし、旣に堺奉行において、往來制方として、同心日々差出し置候程のよし、然處和州御領分山邊郡田村、式上郡辻村邊より、三輪通り出雲村までは、奈良より初瀨通り、一筋の伊勢道にて、別て諸國より罷出候もの落合混雜に及び、往來差支候儀にも可相成旨、此度和州村々、取締爲廻村差出候様、手附歸宿に付、右之趣申聞候、依御屆申上候、以上、

寅閏三月　小林金之助

〔御蔭詣日記後書〕ことしやよひのころより、おかげまうですと、世中ゆすりて、老若男女のけぢめなく、われも〳〵と、神風の伊勢の國、さくすゞの五十鈴の宮にまうづることぞ出きにける、○中略さてこたみ、此ことの出きたることは、みけむかふ、この阿波國の人々よりぞはじまりける、さるはやよひ廿日ばかりにや、わがちかきわたりのわらはべども、何事をか見聞出けん、にはかにそぞろき出しをはじめにて、わづかに三日四日がほどに、まづ此德島の里人は大かたのこりなきまでにぞ出たちける、おのが家のわらはべども、これに心もよほされて、同じき廿四日の日、まだあけぬほどにたちまぎれつゝ、ひそかに家をぞいでゆきける、親にもしらせで、おのれ〳〵が心のまゝに、しのび出たつことは、つみあるやうなれど、こたびばかりは、よのつねのさまならねば、これなんやがて、神のしからしめ玉ふにこそと、いともかしこく思ふ物から、また親の手はなれやらぬものどもの、うきことしげき旅路のやうをもわきまへしらで、かく心もそらに出ゆきけることゝ、いとゞいたはしくこゝろぐるしきまゝに、あとたづねがてら、その日のゆふつかたに、おのれもたち出けるに、からうじてまたの日めぐりあひつゝ、ゆくりなう、ともにかの大御宮にまうで奉りけるは、いとなんうれしきわざなりける、○中略さてかへさに、よきぬ道なりければ、

手紙上略上方邊にては、六十一年目、伊勢參宮仕候儀、御蔭參りと唱へ、其砌御祓空中より下り候を驗にて、其所より人氣立をもつて、御蔭參りと唱來候由、此度右御祓阿波の國へ下り候故を以、去月廿日頃より、同國の者追々參宮いたしはじめ、此節六萬人程の參宮、其後右御祓諸國へ下り候故、諸國より參宮夥敷、何十萬とも相知れず候、且諸國在町とも施行宿いたし、一人も多く泊候を歡び申候、いづれの家にても、止宿いたさせ候へども、泊り殘り候故、其者どもは夜中歩行いたし、晝は木の蔭等に寐候よし、堺市中杯は、家内不殘、參宮いたし候處多く有之候聞、一人づゝは殘り居候樣にと相觸候よし、實に驚き入候事共に御座候、

一晝飯は勿論、菓子其外笠草鞋等入用の品々、諸國往來筋に施行いたし候に付、一錢なしに參宮相成候故、御かげ參と唱候よし、

一鹿嶋屋作之助方にては、先例にて、御蔭參一人に付銀一匁宛差いだし候事、

一大坂鴻池善右衛門方にては、伊勢參に札を出し、參宮畢り歸路の時、札と引替一人金一朱づゝ指遣し候とぞ、

一大坂市中の者ども、身分に應じ施行いたし來り候、

一諸國にて、大家は二三百人止宿いたさせ、小家は、夫々止遣し候、且堺市中の者大豆を煎り、一人前茶碗に入分目づゝ、施し候處、一日七石程餘遣し候由、且又耕作いたしかゝり、其まゝ參宮いたし、誠に狐狸にたぶらかされし體にて御座候、

閏三月二日　小林金之助

早川庸右衛門樣

安藤忠助樣

右之書狀、閏三月十日到着、外に御屆一通、

もふりて、そこにもかしこにもひろひ、づといひ、或は道かひにて、よのつねならぬ人の、えさせつなど、たふとみの、しるたぐひ、すべてめづらかなる事どもなりけり、されどさる不思議は、狐木魂など、あしき神のしわざとおぼしきがおほければ、うるさくてこと〳〵にくはしくもまねばずなん、又やう〳〵西國にうつりて、安藝、周防、出雲、石見、筑前、肥前、あるは長崎などいふもや、見えて、やう〳〵になんうすらぎゆきぬる、五月のころおのれも詣しに、まづいとめづらしかりしは宮川の橋なりけり、常はたゞ舟にてなんわたすなるを、此たびはあまり人しげくて、あやうしとにや、岸よりきしまで、すきまもなく、舟をよこさまにつなぎあはせて、そのうへに板をならべ、砂をしきて、水のうへ一町ばかりがほどをしも、たゞ陸路となんなしたれば、いさゝかのわづらひなくて、馬も人も、たやすく行かよふを、神代もきかず、めづらしき事とて、宇治山田の人々まで、これを見物に引つれくるも、又めづらかなり、まして遠き國々の旅人は、目をおどろかして、これも大御神の御德と、泪をおとさぬなくなん、さて此おかげまうで、七月のなかばまで猶たえず、いみじきことゞもなりけり、まことやこのたびのことゞもよ、なにも〳〵今やうがちにて、物のみやびたるかたはなければ、世にめづらしくもをかしうも思ゆる事なれば、むげにしるさゞらむも、うもれいたくてなむ、

〔宮川舍漫筆五〕御蔭參の事

時に文政十三寅年三月頃よりして、御蔭參りとて、諸國より夥しく詣來りし事、筆紙に記しがたし、此御かげ參りの儀は、むかしより度々有し趣、已前安永年にも、大に御蔭參有し折は、予〇源隆能が母方の伯父太田左市といへるもの參詣なし、其賑ひし事共、毎度噺されし也、此度は安永年より夥しき事共は、所々よりの御屆、或は書取等あれども、長々しきまゝ略して、只後世のはなし傳への爲に、御屆け書をしるし置、其書は清水殿勘定方小林金之助より申越候手紙、幷御屆なり、

き輿のやうなる物に、をさなきどもを、四五人ばかりのせこめなどもして、例のおかげでさなど、
うちはやしゆくなど、常ならましかば、いかばかりをこがましからましを、此ごろは目なれて、め
づらしうも思はぬまでなんありける、又友まどはして、いたうわぶめるたぐひおほかるにつき
て、さる人をたづね出て、めぐりあはするわざをする事ありき、そはまづ上は西町、下は湊町とふ
たまちにて、その家をさだめおきて、門にのぼりをたてゝ、はぐれ人詮議所と、大もじにしるしお
けりければ、まどひ人のあるごとに、みなそこにたづねきて、事のよしかたれば、國所などくはし
くとひきゝて、物にかいつけおき、さてこなたかなたと人をわかちつゝ、もとめありかせて、猶久
しくえたづねいでぬは、阿濃津また山田までさへ、さるべきわたりをとひ合せけり、さるは山田
にも津にも、同じさまにはぐれ人せんぎ所とて、その事ものする會所のあれば、そこにとひあは
するなりけり、かしこより又こゝにたづねくるも同じさまなり、夜なども大聲にて、其國其郷の
何がしは、やおりてはあらずやとよばひつゝ、町のかぎりありきなど、よろづに心をつくしてた
づねもとむめり、〇中略十五日のころになりては、いよ〳〵おどろ〳〵しく、あまりなるまでまう
でくめり、世中の人は、かくまで有けるかと今さらにおどろきあつかふめり、十八日、難波人はす
くなくなりぬとみゆるに、又阿波紀國よりむらがり出たり、かくて廿二日比よりぞ、すこしづゝ
うすらぎそめにける、〇中略六月のころは、まち〳〵より、せぎやうとて、かゆを煮てくはすること
いできぬ、十日ごろは、又うすらぎて、例のとしの春の比にずこしまされるにやと思ふばかりに
なりぬ、されど廿日ごろより、また越後、越前、信濃、常陸、武藏など、はるかなる東路よりも、おほくま
うでく、これらぞかのじちのいやしきぬけまゐりてふ物にて、門ごとに食乞などするもあり、又
このほどは、江戸などもまじれり、かくてなほ世中には、あやしき事どもおきりてあらはる、まづ
御祓といふ物の、空よりふるなることこゝかしこにあまたあり、又はしろかねつゝみせになど

れまれる人は、いそぎつくらせてあたへなどもすめり、後にはかゝる事の聞えありて、其所々の司人より、物高くうる事を禁制せられぬるもことわりぞかし、かのはたごや、松坂のほどにもあまたあなるを、ほど／＼にやどさるゝかぎりおほくやどす、中にも廣き家には、百五十人二百人などもやどして、ひと家のうち、おしあひ伏みちぬれば、おくれてもとめ來たるなどをば、今は所なし、ことやどりへ物したまへかしなどいなむめり、それもよき旅人などをば、さもいはで、せめてとかくして、猶やどしもすめるを、さもあらぬは宿りもえとらで、人の門の本、橋の上などに、はしたなく心にもあらで、草枕するいと心ぐるしきさまなり、おほかた異驛ども、かくぞ有べき、さればはたごやならぬ、商人の家などにも、心あるは、さやうにわびしき目みるをばとゞめて、物くはせ湯あむせなどして、五人十人など、錢もとらで、宿かす事も始まりにけり、これを施行宿とぞいひける、又竹輿舁とて、世にいやしきむくつけ男の、旅ゆく人にすゝめて、竹輿をかき來て、その道の程にはかりさだめて、價の錢を取りて、乘せゆく事を世渡りとする者あり、そは常の事なり、此度は足いたみくるしとて、すが／＼しくもえゆきやらぬ、ぬけ參りの足よわ人、わらはべ、おい人などを、施行竹輿とて、あたひの錢とらでのする者もあまたあり、その町々にて、今日は何がしくれがし、明日は何がしくれがしと、家毎にさだめて、その家のあるじにもあれ、げすにもあれ、かはる／＼かごかきて、隣村あるは町の端々まで、のせおくる事もあり、遠き國々より詣來るを、此大御神の國に、まぢかくすむなるうれしさの宮仕へにと思ひて、かゝる事を思ひよれるなりけり、されどまた今めかしきわかをのこどもなどは、これをめづらしく、けうあることに思ひて、髮つやゝかに、うちけさうし、紅のはなやかなる物きなどして、ゑひごゝちに、今やうのはやりかなる、うまかひぶしなどうたひつゝ、さもあやしげなる拔參をのせつゝ、ゆきちがふもかつはをこがまし、又かし馬などをもやとひ、或は家にかへる牛などにものせ、或は板もて作りて、屋形な

されて、思ふどち家人にだにしらせで、ゆくりなく立出るたぐひも數しらずなん、さるは旅のよういとて、すべきまうけもなきさまにてゆくが、いと心ぐるしくみゆれば、山田の里宇治の里をはじめて、所々の富る人ども、またさらぬも、ほど〳〵に物くはせ、さるべき物あたへなどもすめり、雨のふる日は、菅笠あみこもやうの物をさへなんあたへける、この松坂にても、同じさまにぞ有ける、廿日ごろより、やうやくに、京人なんおほく見えまじりける、〇中略六月五日難波人見ゆ、おほき事は、いふもさらなり、七日は同じなにはの中にも、よき所の人々おほく、さまよきになりぬ、京人とは、こよなくらうがはしくて、物いひさわぐも、あらゝかにはげしくなん、すべて、此比は四月のほどよりも、こよなう増りにまさりて、大かた大路は、ひねもすいさゝかのすきまもなきまで行ちがふに、どみの事などありて、むかひなる家に、あからさまに物せんとするにも、今ぞすこしゆきゝのたゆめるほどよとためらひて、そのほどをうかゞひて、よこさまにおしわけつゝ、からうじて向ひの家に行いたるなど、いと〳〵いみじき事になんありける、〇中略さて此ごろみれば、京難波は、さらにもいはず、大津、奈良、堺、姫路、明石などしるしたる菅がさどもゝ、いと多かり、其ほか大和、河内、近江、若狹、播磨、讃岐などかぞへもあへず、天が下ゆすりてまうで來、かゝれば、此伊勢路の道のほど、宿々所々の茶屋旅籠屋などいひて、物うり人やどしなどする家々には、たくはへおきてうる物どもゝ、今はつきなんなどぞいふめる、中にも酒もちひなどはいふもさらなり、其外もすべて旅人にうる物つくる家々には、例よりも人やとひ加へ、ながき日に夜をさへかけて、いかでおほくといそぎつくれど、かぎり有て、さしもえつくりあへずなん、中にもわらうづは、いづこも〳〵のこりなくうりはてゝ、ちかきわたりに今は一つもなきよしなどいひあへれば、まれ〳〵なほたくはへもたるものは、物の價もしらぬ商人心に、いとかしこき事と思ひて、こよなう高くなんうるめる、されば、まづしき旅人はえかはで、すあしにてゆくなどもおほきを、あは

見ゆなどいひたるほどに、四月の七日ごろより、にはかに山城國丹後國などより、にぎはしくここらともなひいでゝ、いくむれともなくまうでくるもあやしくなん、かくていとあやしと思ふに、日毎に見えまさりて、きのふよりはけふといやましにまさりもてゆく、さるは其人毎に、おかげでさ、ぬけたとさといふことをなん、道ゆく足のはうしにいひつゝ、ゆくを、七十八十になれる老人のきゝて、むかしもかくおほくまうできけるを、お。か。げ。ま。ゐ。り。といひて、其をりもかくこそいひつゝ物せしが、此たびのさま、専らそのをりのやうなるなどいふ、かの蟻の熊野まうで見るやうに、ひまもなくゆきつゞけば、たぐへる友を見うしなひなどするたぐひも、日々にあまたあれば、思ひはかりて、紙してしたる幟といふ物を、たかくさゝげもちてなん、一むれ〳〵のしるしとはしける、此のぼりといふものゝ、はじめのほどは、いせまうでいくひとつれなどかき、國所などうるはしく記したりけるを、後にはうちたはぶれゆきてさま〳〵の繪様などをかきたるなんおほくまじり來ぬる、さるはいとあさましく、あらぬものゝかたちなどをゑがきたり、さるはをこがましくて、あらはにはえこそまねばね、たゞ思ひやるべし、又のぼりの繪のみにもあらず、物のかたちを、ことさらにもつくり出て、杖のさきなどにさして、口々に大ぐちとて、いみじきことどもをいひはやしつゝ、或は手うちならしなどもして、うきたちて、わかき男はさらにもいはず、老人老女、また物はぢしつべきわかきをんなまで、よろづをうちわすれて、物くるほしく、かたはらいたく、世にうつし心とも見えず、萬にたはれつゝ行かふさまよ、あさましなどいふもおろかなり、○中略さてまた人數おほくともなひたるなどは、かののぼりをさゝげもたるが先に立て、長き綱を引はへゆけば、それにとりつきつゝ、おのが一むれまよはじと心してゆくもあり、又常にはいといやしきものゝ、人にもしらせず、忍びてまうづるをば、ぬ。け。ま。ゐ。り。となんいひて、かたゐのごと思へるに、こたびは、さしもいやしからぬほどの人ども、いざといへば、せちに心もよほ

日まで、五十日の間、すべて三百六十二萬人なり、

〔明和續後神異記〕四月〈〇明和八年〉八日ヨリ廿三日マデ、十二萬五千人、　廿四日一萬八千人、　廿五日二萬三千人　廿六日一萬九千人　廿七日一萬七千人　廿八日一萬九千人　廿九日一萬三千人　晦日八千五百人　五月朔日一萬千人　二日一萬二千人　三日一萬二千人　四日三萬二千人　五日四萬千人　六日三萬八千人　七日四萬七千人　九日七萬二千人　十日八萬四千人　十一日六萬六千人　十二日六萬四千人　十三日二萬七千人　十四日五萬五千人　十五日四萬六千人　十六日五萬八千人　十七日五萬三千人　十八日四萬九千人　十九日四萬九千人　廿日三萬八千人　廿一日三萬四千人　廿二日三萬三千人　廿三日二萬九千人　廿四日二萬七千人　廿五日二萬三千人　廿六日一萬九千人　廿七日一萬七千人　廿八日一萬千人　廿九日七千八百人　六月朔日ヨリ十日マデ、七萬三千八百人、　十一日ヨリ廿日マデ、十六萬人、　廿日ヨリ卅日マデ、十四萬三千人、　廿一日ヨリ三十日マデノ内、廿六日ト廿七日、水出、舟トマリ、　宮川舟橋、　七月一ヶ月、合シテ廿四萬二千八百人、七月中十日ト廿二日、水出舟トマリ、　八月一日ヨリ九月マデ、五萬九千五百五十人、　四月八日ヨリ八月九日マデ、總人數凡二百七萬七千四百五十人、

〔おかげまうでの日記〈本居大平〉〕たきゝこる山人、しほくむあまなど、下が下までも、この神風の五十鈴の宮にまうでゝ、いとしもかしこき大御前ちかく、ぬかづきたてまつることよ、いつのころほひよりはじまりけん、むかし熊野にこそはかくまうでけらし、今もことわざに、蟻のくまのまゐりといふことのあめるは、そも〳〵二月三月のころは、空もうら〳〵とのどかにて、人の心もあくがるゝを、花ざかりのほどなどは、旅路もことにけう有て、をかしきほどなればにや、いづれのとしも、この伊勢まうでもいとおほかるを、ことし明和八年辛卯春のころは、例よりすくなく

右者先月廿一日より當月廿一日迄、伊勢參宮仕候者、町內吟味仕相違無御座候、已上、

寶永二年酉閏四月廿二日　本誓願寺通今小路町

年寄安清

古久保勘左衞門殿

廿四日丁巳、自省尼去十三日參宮、道中ヌケ參ノ者、或ハ九、或十四五歲ノ輩無數、于今靈夢、又引カヘシ再參宮者等有之、直見聞之、更感神明光明、旨申之、誠神妙之至、殊勝々々、

〔百一錄〕寶永二年閏四月、頃日洛中小兒等或八九歲、十二三、十四五、又廿以上、三五輩、七八輩、勢州大神宮拔參、逐日蜂起、町々家々大半群詣、大人亦乘之參者、差多々也、希有之儀也、且又大坂堺次第參宮、是又許多、此次播州河州近國百姓等相列、伊勢路無卓錐之地不入處、希代之參詣也云々、洛中幷道中、或投鳥目、與菅笠、授杖、惠布袋、且煮粥施之、儲赤飯分與、調煎菓子炒大豆、贈之等之者、甚以數輩有之、故路銭雖無貯之隙、多以得遂參詣、神慮之所致、奇特之至、尤皇大神宮之威光、諸人依仰、如此仁政、人々發起、奇外之奇、仰以可信事也、至五月漸減少云々、

〔玉勝間三〕伊勢のお蔭參

あるものに、寶永二年伊勢の大御神の宮に、おかげ參とて、國々の人どもおびたゞしくまうづる事のありし、その人數をつぎ／＼しるしたるやう、四月上旬より、京幷に五畿內の人、ぬけ參宮といふ事あり、閏四月上旬よりしるす所、はじめは一日に二千三千の間なり、十三日より十六日まで、十萬人にこえたり、十七日より漸々減じて、又廿四日廿五日は、三四萬人なり、それより大坂へうつり、廿六七日には、五六萬人づゝ、廿八九日は、十二三萬人づゝ、五月朔日より、七八萬人づゝ、三日より、十二三萬人づゝ、八日比より、いよ／＼さかんなり、十六日には、廿三萬人に及べり、これ前後の最上なり、その、ち漸々減じて、同月末には、一萬人ばかりなり、凡閏四月九日より、五月廿九

但道中四日より以下下向仕候子共、其外参宮之儀ニ付、不思議有レ之分ハ、案紙之外、各別ニ書付、
御越可レ有レ之候、以上、

閏四月十九日　　町代 古久保勘左衛門

覺

一案紙 拾六歳より以下　男女何拾人
内何歳之男何十人 女何十人

同斷

一男女何拾人　男何十人 女何十人

男女總合何百人内男何十人 女何十人

右者先月廿一日より當月廿一日迄伊勢参宮仕候者、町内吟味仕、無二相違一御座候、已上、

何之通何之町

年號月日　年寄誰之印

古久保勘左衛門殿

如此念入御認、御越可レ有レ之候、若参宮致シ候者無レ之町ハ、其分ヲ書付御返事可レ有レ之、

覺

一拾六歳より以下　男女十一人
十一歳男一人　十三歳同一人　十五歳同三人　十六歳同四人　八歳女一人　十三歳
同一人

一十七歳以上 男女二十四人　男十七人 女七人

男女總合三十五人 同男十六人 女十九人

〔大江俊光記〕寶永二年閏四月十一日、作今曉伊勢へぬけ參、こんも同道の手筈之由也、助太之辨も同道參候由、庄八娘つうも同道之由、昨夜作に、ぬけ參は必仕間敷候、後にて氣遣に候、こん歸候はば成程心次第に參らせ可ㇾ申間、左樣心得候樣にと何も呉々申含候ても不ㇾ聞入、今未明に出候樣子也、

今月朔日頃より、京大坂在々までも、參宮のぬけ參大分の沙汰也、今朝五ッ時分に、三條のかうじや宇右衞門參候而咄候は、今朝よりは五ッ前迄に、子供のぬけ參千六百三人、曉迄には何程可ㇾ有之哉難ㇾ計由、其故人々心ある者は、錢百、二百、五十、三十ヅヽ、つくねめしそへ、又は三條橋邊の笠屋は、すげ笠に、其子の町所家書付、錢五十ヅヽと、三十ヅヽそへ、ぬけ參に遣候家二軒有ㇾ之由、其外往來の衆中、思ひ〳〵錢食物遣候由、牛遣馬子等迄も子供をいたはり、錢五三文ヅヽにても遣候由、處々の代官名主庄屋も出張に付候所も有ㇾ之、夜は夜廻り、一人も外に不ㇾ臥樣、うゑざる樣に、萬事にいたはり候樣にと、所々の郡主代官より申付有ㇾ之候て、そまつなる事無ㇾ之由、錢食物も澤山なる由、五六七歲上の子供五人七人ヅヽ、連達參候由、前代未聞の參宮之由也、○中略三條邊又大津より上京に、向より向へ行事、參下向多不ㇾ成由、大津の奉行よりも念入候て、大津中の舟出し、舟渡し舟賃も不ㇾ取、初は舟十廿艘出し候ても不ㇾ足、五十七十及ㇾ百艘、舟渡しの由風聞也、是程の大群集には、道中給物無ㇾ之筈に候へども、一人不ㇾ給者も無ㇾ之樣子、不審之事と大津の者申、子供三十、五十、七十連のは、先へしるしを立、目印にエリや帶に、一樣のしるしそめてする由也、參度と思心出來候てからは、男女老若に不ㇾ限、いかなる歷々さても、前後首尾にかまはずぞく〳〵と參度成來候由、

〔基熈公記〕寶永二年閏四月廿二日乙卯、今度町々より、先月廿一日より當月廿一日迄、伊勢參宮仕候者、男女共不ㇾ殘、案紙之通書付、來ル廿三日迄、私宅江御越可ㇾ有ㇾ之候、以上、

御蔭參

るを、さかむかひと云、或曰、この言は京人參宮すれば、昔鈴鹿の坂まで迎人を出し、酒すゝめ賀しけるとかや、それにならひて、さらぬ國にても、參宮人を祝ふ事を、さかむかひと云ふ、古流の俳諧者は、他國にさかむかひの事をいへば、非とせしと語る、或曰、鈴鹿の坂のみにかぎらずや、宇治山田の神人も、參宮をはりて、朝熊の岳に參りし人を道に饗するを、酒むかひと稱す、是も俗にならひてやと、予曰、ふるき傳もありて、かく號るか、但し附會せるも知り侍らず、舊事神皇本紀、蝦夷の二字を、さかむかひと讀侍る、是は常の饗にあらず新室など造りて、人々打よりて物食ひ酒のみ侍るなり、又凡祝して食物を設くるを云、されば、さかむかひとは、さかほがひの一字轉語なる由、先年度會延昌語られし、然らばいづれの國にても、いふて難なかるべきにや、猶人に尋ぬべし、古記に愛宕山參詣の時、酒むかひの事見えたり、

賢按、舊事紀、蝦夷ヲサカムカヒト讀侍ル訓、甚據アリ、蝦夷ニテ熊祭ノセツ、打寄テ酒盛ノ體ヲ見、座中大ナル行器ニ酒ヲ入テ呑體ナリ、是度會ノ延昌ノ云、酒ホガヒナルベシ、十月振回ヲサシテ夷講ト云モ、此酒ムカヒノ事ナリ、是據アリテ面白キ說故、コヽニ記置ナリ、

〔東海道名所圖會〕一東三條の森の方、丑みつすぎ寅の刻じぶんより、吾妻下り、江戸登り、伊勢まいりの坂迎ひなど日岡蹴上の茶店に集ひて酒筵を催し、あるは餞別留別の詩歌を送るも多かりき、

旅立やよい日の岡に見送りてまづ盃を捧げ上げまゑよ

〔寬明日記〕慶安三庚寅年三月十四日、○中略今年江戸中ノ賣人共、大神宮ヘヌケ參トイフ事ヲハヤラカシ、去ル正月下旬ヨリ、天下ノ人民悉ク群參、其衣裳悉ク白衣ヲ用、翌年箱根山關所ニ於テ改レ之、一日ノ通ヲ帳ニ付ル、或ハ一日五六百人、或ハ八九百人、三月中旬ヨリ、五月マデノ間ニハ、一日ニ二千百人ノ付ナリ、一組切ニ印ヲ立、皆白衣ナリ云々、

に大泉坊と云者、此掛銭を方々より借りて不返、検断所へ訴るに仍て、裏書出る、

伊勢講之代物借銭、未事済、於御政令難遁之由、太不可然、所詮如先例、不可有改動之上は、自是可加催促之條、得其意、可有之者也、仍如件、

十一月廿九日　貞親（鳥居総左衛門）
長高（沼村市右衛門）

上京今出河
大泉坊大夫慶好所へ

〔七部集春の日〕曙見むと、人々の戸扣あひて、熱田のかたにゆきぬ、渡し舟さわがしくなりゆく比、並松のかたも見えわたりて、いとのどかなり、重五が枝折をける竹籠ほどちかきにたちより、けさのけしきをおもひ出侍る、

二月十八日　荷兮

春めくや人さまざまの伊勢参り

〔嬉遊笑覧七祭祀〕今人多く鹿嶋詣はせで、まづ京大坂大和めぐりをすめり、神佛に参るは傍らにて、遊楽をむねとす、伊勢は順路なればかならず参宮す、望一千句、何方も治る御代のいせ参太々神楽数の小かぐら、

〔伊勢参宮名所図会四〕中川原　諸國の参詣人を、御師より人を出し爰に迎ふ、其御師の名、講の名、組頭の姓名を書して、此所の家毎に招牌を出せし事、竹葦のごとし、

〔伊勢路のしるべ〕立石崎

此所の瀬に浴して濁穢を払除す、またこゝの藻塩草をとりてもてかへり、参宮する人、湯に臨(ひた)し、沐浴して汚をあらふ、是を無垢(むく)塩(しほ)といふ、

〔鹽尻九〕参宮シテ帰ル人ヲ祝シテサカムカヒノ説　伊勢参宮して帰りたる人を祝し、酒肴を贈

宮愁訴何事如之乎、然早蒙御成敗、被停止之者、神慮令然、彌抽御祈禱忠節矣、仍注進如件、以解、

大内人安政

寛正四年四月日

禰宜從四位上荒木田神主氏經 ○以下署名略

〔檜垣兵庫家古文書〕明應八年五月、玉丸山ニ數十ヶ所關ヲ立置候間、六十餘州ノ參宮人悉ク魂ヲ消シ、信心ヲ失ヒ、路次通ゼザル由山田三方神役人言上ノ目安アリ、

〔禰宜度會晨彥引付〕天文廿二年、多氣天祓、穢業以外之所、大神宮御祟嚴重にあらはれり、然者御立願に七月廿六日より諸海道役所關悉あけられ、諸國より旅人參宮數萬人其數を不知也、當所富貴上下無申測也、于時備彥代、

〔奇異雜談二〕因記、ある人のいはく、山崎にある人の下人、いとまをこはず伊勢參宮をいたす、主人のいはく、くはんたいものくせ事なり、げかうしたらば、くびをきるべしといふて、大にいかる、七日にしてげかうす、くれほどにきたりてあるを、主人手うちにしてしやうがいす、中間をよびてこれをとほくすてよといふ、むしろどもにつゝみて、とほくもてゆきてすてたり、翌日さうてうに、かの下人大道を行、中間これを見て、おどろき主人に此よしをつぐ、主人昨夕こそくらきにきりころす、もし別の人か、中間ゆきてそのしがいみよといふ、中間ゆきてみれば、そのまゝからげながらあるを、あけてみれば、しがいもなく、むしろに血もつかずして、御祓箱一ツよこすぢかいに、きれてあるをみて、おどろきむしろながらとりて、かへりて主人にみすれば、主人おどろきて、さては神明の御たすけなり、御祓をきりたる事おそるべきなり、下人はゆるすぞといふて、料物をあたふるなり、

〔翁草百九十二〕一昔より佛家に觀音講等あり、近世伊勢講と稱し、結衆錢を集め貸之、其息を聚して、參宮の費用とする事、近世の俗なり、永祿中に既に此事あり、室町日記に見えたり、上京今出河

積、取極候方可然、人足之外に、才領之者宿方より附遣し、津町に而いたし候はゞ酒手遣べし、買上人足、餘り高直にもなし、

東海道關宿より伊勢參宮宿々

關宿二里楠原二里窪田一里半津三里松坂四里、山田へ五里、二見へ八里半、小俣一里二見　　山田妙見町一里小俣四里松坂四里津二里上野二里白子一里半神戸三里東海道四日市宿

〔大神宮諸雜事記一〕承平四年九月御祭仁齋內親王依例參入二宮給佶利、○中略忽雷電鳴騷天大雨如沃、參宮人十萬、不論貴賤、恐畏迷心神、退出宮中之間、御川水出湛天、人馬不堪渡行、○下略

〔神宮雜例集一〕二所大神宮朝夕御饌事

豐受大神宮神主

注進當月十五日、由貴御料供物內、有爾村土師長造進種種忌物造入塥一口、并長政友近隨身宮河流沒事、

右當日申時、土師御器長忠近來向申云、依例在地陶土師長等造進、今夕由貴御饌料供神物等運進之間、於陶方物者既賫參畢、土師方忌物造納塥一口、長友近隨身賫參之間、宮河洪水、參宮人倫競乘小船渡越程、河中船漂流、即友近并忌物塥沈沒失畢者、○中略仍注進如件、

永久四年九月廿四日

禰宜度會神主

〔勘仲記〕弘安十年九月十八日、外宮禰宜注進狀、凡遠近萬邦之參宮人不知幾千萬、

〔皇大神宮引付〕一皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰、被破却海道新關參宮貴賤穩上下子細事、

右件新關等事、依神慮難測可被破却之由、先度以禰宜等之連署解狀雖令言上、不預御成敗之條、神

庶人參宮

〔鹽尻二編九〕正公〇尾張德川光友大神宮御參詣萬治二年己亥三月九日御出船、十五日御歸府、

前權大納言光貞卿〇紀伊德川參詣、延寶五年、

〔公裁錄五〕伊勢參向手續之事

參詣初而之節、二見浦ニ而垢離を取、夫より參詣いたし候由、世話に申習し候、東海道下りは關宿より椋本通り、夫より津町、是は道法七里計、津町迄は御朱印御證文に而、人馬繼立いたし候、依而先觸は關宿より津町迄、夫より四日市と申觸を認遣し、左候得ば、津町之問屋に而、參宮心得申候、同所に而泊り早く候はゞ、松坂迄相越候共、參詣之段申聞候得ば、雇上人足等無差支取計、荷物は長持迄も封印いたし、同所へ預置候得ば預りの證文差出申候、松坂迄相越候方都合宜、翌日御林町山田奉行所へ屆被出、其夜二見泊、

御林町へは、新茶屋と申所より、在道へ入三里計、

二見に而日の出を拜し、夫より朝熊岳山へ登り、峠之茶屋有、何れも美味なし、內宮へ下り、先へ家來遣し、御師へ初穗爲持遣し、內宮へ參り、別段初穗不遣候共不構、宇治橋之內商人店に而麻上下著替、御師より案內有之候得ば、直に神前へ通し內神へ入、供物神酒を捧候を頂き、夫より間之山之間壹里計、

此山の間にお杉お玉など、錢貫のもの並居、頭立候ものへ遣候得ば、向々へ遣し、禮申候よし、

夫より家來を遣し、妙見町に而旅宿を爲取、直に外宮へ參詣致す、御師へは泊りへ付候而家來を遣し候而も、都合次第に而よろし、

八十末社、天の岩戸など、何れも短日に而、一日之事に不能、

其外、外宮之御師へ、初穗爲持使を遣し候得ば、彼方よりも使者來、用役之者應對、翌日出立、津町迄相越候得ば都合宜、津町に而、最初雇上人足賃、半分渡置候得ば、殘此所に而遣し、津町に而雇切之

十六日夕進發

一管領政長

一十五日朝

一色左京兆義直

一兩佐々木、爲御儲御前下向、

十七日晝御儲草津六角龜壽　御宿湊口京極

十八日晝柏原長野彌次郎　御宿安濃津守護一色京兆

十九日晝平尾國司　御宿山田祭主

廿日巳刻大雨風、御參宮、式裝御馬、御傘役後藤父子、

一公卿

日野大納言勝光卿　廣橋日野中納言綱光卿

三條宰相公躬卿　烏丸日野宰相益光

一殿上人

勸修寺　藤兵衛督永繼

飛鳥井中將雅康

一布衣

長次左　佐々木延福寺五左　伊七右

遠加藤左　熊近　熊上野次

廿三日未刻御下向、直御精進屋、御風呂供御

〔如是院年代記後土御門〕應仁元　三月十七日、相公〇足利義政伊勢參宮、

〔信長公記二〕永祿十二年十月五日、信長公山田に至て御參宮、堤源介所御寄宿、六日に內宮外宮淺間山被成御參詣、翌日御下向、

千阿　吉阿　度阿　多阿　祖阿

一供御方進士隱岐入道息九郎、太田孫左衛門尉、疋田孫左衛門尉、此兩人別路也、

一醫師民部卿法印胤祐(號二上池院一)

一御物(奉行政所寄人)(左蜷川出羽守、右蜷川新左衛門尉親元、幷政所公人等、)

御臺幷上中下﨟御輿等、以上十六町、

次御供

大和佐渡守　佐々木大原判官

長井因幡守　三吉太郎

田村刑部大輔　稻葉左京亮

荒尾治部少輔　松田上野介

長九郎左衛門尉　中條刑部少輔

(御供衆之外)齋藤藤五郎

永阿　菊阿

醫師　安藝左京亮(號二大膳亮一)

一御物(左蜷川式部丞、右蜷川孫三郎、)政所役

一供御方疋田三郎左衛門尉、借宿五郎別路、

供御衆幷遁世等御訪卅貫文宛、納錢方下行也、

一攝津掃部頭之親、(神宮頭人、同井神宮日同)十四日進發、

(御出奉行)

一布施下野守貞基、飯尾肥前守之種、十六日進發、

十七日未明進發

一治部大輔、(義廉)右京大夫、(政元)山名金吾、(宗全)

一御馬三疋被牽之、二疋置御鞍、加治左京亮御供、御厩方奉行也、

一御前打畠山刑部少輔政信、御輿之間一町計依爲無足被仰左衛門佐義統爲立之、

一御小者六人左三人、此内一人持御張替弓、右三人、此内千若帶御弓ウツボ、

一走衆六人、手替六人、乘馬打御供衆後、

後藤左京亮　子息九郎

山縣左近將監　富永兵庫助

藤民部中務少輔　竹藤右京進

市六郎左衛門尉　同名三郎

遠山左京亮　富永助五郎

角田彌平次　廣戸次郎

於計會之輩、被仰付奉公方衆、各被下御訪、

次御輿被著御十德、

次御喝食壽文

次御供衆

細川兵部大輔藤久　匠作[illegible]舍弟畠山宮内大輔政國

畠山播磨守　一色兵部少輔義遠

赤松刑部少輔貞祐　貞親息赤松有馬彌次郎

伊勢守貞親　同兵庫助貞宗

貞親舍弟同備中守貞藤

定御供衆御部屋衆也一色治部少輔　同上野刑部少輔

六禰宜守氏神主御祓ヲ進、件御祓、本儀者於御輿宿前進、而ヲ勝定院殿〇足利義持御法體之後、迄木下御參、其時之御記歟、可為子良館之前之由、廣橋殿依御指南如此、御幣金大刀二腰、各三尺八寸、御馬二疋、件御大刀、外宮分者、度會延口神主奉持、內宮分者、荒木田定口神主勤之、於四御門內、荒木田氏保神主（布衣乘馬）給之內院ニ參、公方樣御沓役、御裾役、甚雨之間、於瑞籬御門下御拜八度、其間御師ハ西方ニ蹲居、其西ニ氏保、御劔ヲ自目上ニ捧持跪、神宮予二三四五六七八九十各衣冠、但三六神主ハ、依御祓進東帶、是先例也、西瑞籬際ニ候、南上東面、雨篠ヲ提ニ、御拜之間笠ヲ不指、仍膚マデ浴畢、宮司東ニ候、物忌父等各布衣、東瑞籬下ニ候、在荒祭御遙拜テ御下向、於鳥居前、公方樣御馬力革ノ鋂切テ、御鐙落テ、自餘被取替云々、御參時、宮司於宇治岡落馬、仍冠ヲ損、於子良館、大物忌父兄部冠ヲ借著云々、御下向則御臺樣御參宮、仍御師裝束ヲ不直、浴ナガラ被參前、御初ハ兩宮万疋也、今度二万疋、又銀ノ盆ニ砂金廿量、御師方ヨリ被持、外宮同前、子良二人、母良各御小袖一重宛給、其外御帶基結等帳子被出、迄御厩在御參而御下向、其後公方樣、御臺樣御宿ニ御成御一獻、今日二見江御出ノ在沙汰、〇中略御宿者任例、西河原ノ御宿ニ可有御著之由被仰出之間、彼主檜垣貞悲神主、當時四禰宜ニ被借召、大路作直、其外數宇令新造、御厩ハ依為大儀、予之厩ヲ被借召、被著申御臺樣御宿者、宮後朝厚神主、當時六禰宜宿所ヲ借、可被著申由之處、故御北向御著極樂寺エ任例可有御著之由被仰出、極樂寺檀那龍大夫武衞ヲ著申間、不可叶之由被申處、武衞ニ御使ヲ被立之間、被斟酌、仍俄在造作而被著申間、時儀快然也、宮中事者、任先例御記、廣橋殿御奉行、御宿御儲等ノ事ハ、伊勢殿頭人（津殿）閻門（飯尾左衞門大夫）指南被任其旨、廿一日、御臺樣ハ曉御立、公方樣夜明ニ御粥計ニテ御立、御師ハ廿四日御立、

〔齋藤親基日記〕文正元年三月十七日、御參宮、〇足利義政

一御臺樣同前、天晴風靜、辰刻御立、

〔伊勢紀行〕永享五の年彌生中の七日、大神宮御參詣の事侍り、明らけき日のおほむ神、御たびのよそほひに光をそへ、のどかなる風のみや、御道すがらのちりひぢをはらはせおはしますにや、御進發の日より淸くうらゝか也、○中略廿日、御參宮の日也、夜もすがら雨ふり風さわがしかりしが、辰の刻許、空こゝちよく晴て、御出の儀ことにありがたくぞみえさせおはしましける、公卿殿上人馬くらをかざり、衞府御隨身あざやかなる袖をつらねて供奉し侍る、よそほひきら〳〵しくぞ侍りし、

〔氏經卿神事記〕永享十三年三月廿六日、公方樣○足利義教御參宮、被ㇾ開二瑞籬御門一、二五六七予十各衣冠、自二北御門一參二西瑞籬之際一、南上東面ニ蹲踞、一守房神主束帶、御祈禱ニ傳料所窪田、仍於二御輿宿前一御祓ヲ被ㇾ進之後御內ニ被ㇾ參、三永淸神主束帶、御祈禱料家ニ傳料所足利梁田、仍於二二鳥居一御祓ヲ進、老體窮屈、仍被二退出一、公方樣自二南鳥居一御參、前陣宮司氏長束帶、侍一人布衣、東方ニ蹲踞、次御師宗直束帶、御共經家神主布衣、西方ニ蹲踞、御幣物金釼ヲ被二捧持一、次公方樣束帶引裾、於二御階下一御拜八度、公卿殿上人各束帶、大明小明近習外樣人々者、皆御門外ニ被ㇾ候、

同日今出川殿御參宮、北御門ヲ被ㇾ開、

寬正七年三月廿日、十七日御進發、○足利義政十九日午剋御著、今朝辰剋御參宮、束帶供奉、公家北畠殿、御方三條殿、御方飛鳥井殿、御方日野殿、御方烏丸殿、御方廣橋殿、御贊搔、各束帶、武家管領、畠山尾張殿武衞、澁川殿細河殿、山名殿、一色殿、各御前、參於一鳥居前、被二警固一、近習奉行御共、前陣宮司氏長、束帶次御師從三位大中臣秀忠朝臣束帶、被ㇾ著二鉄鞋一、次殿上人、次公方樣、次公卿、於二一鳥居前一、荒木田氏倍神主、布衣御手水ヲ桶ニ入、杓ヲ相副、紙ヲ串ニ挾取副、捧持テ蹲踞、于ㇾ時日野殿汲二水懸進、紙ヲ被ㇾ進、外宮御手水ハ度會家彥勤、同前也、次御師御祓大麻ヲ被ㇾ進、其後御參、前陣宮司、次御師、次公方樣、於二二鳥居一口口神主、于ㇾ時三禰宜、永量神主御祓ヲ進、恒例也、於二酒殿前一置石、御祈禱料所窪田、若王子、御師園田、于ㇾ時

八百五十六文宛給也、大刀者御館ニテ八幡宜シテ、兩宮進上、錢ハ路錢分也、私ニ進上之奉行照心、私ニ照心面々有同道、有參宮、御代官人數事、畠山右馬頭次郎持純、大館五郎持員、荒川次郎已下卅五人也、小笠原民部少輔持長モ人數也、卅年三月廿四日、有御參宮、〈足利義量〉御供騎馬衆山名刑部少輔以下也、御臺樣御供、一色阿波守滿直、朝日因幡守滿時以下也、卅一年三月十八日、大神宮御出京也、〈足利義量〉御所ヨリ御馬〈置鞍〉御輿前引之、御供事、

山名小次郎熙貴　赤松越後守持貞
赤松伊豆守滿則　赤松出羽孫二郎
畠山播磨入道〈御前ナリ〉　三上三郎持實
貞彌　七騎

廿一日丁酉、御參宮也、御臺御參宮、〈出京也〉御供事、

畠山右馬頭次郎持純　〈御供始〉朝日近江守
土岐肥田左馬助持重　同修理亮
岩山美乃四郎持秀　〈御供始〉結城十郎持藤
〈御臺奉公也〉熊谷近江守滿實　兵庫助貞慶
與一左衞門尉貞宣　九騎也

〔看聞日記〕永享三年二月九日、室町殿〈足利義教〉參宮、御共勸修寺中納言、廣橋中納言、別當飛鳥井宰相、中山宰相中將、殿上人實雅朝臣、永豐朝臣、貲任等也、道之間公私異體、參宮當日束帶騎馬云々、三條大納言、伯二位入道同參、非御共、女中大方殿、三位殿以下、西雲庵等參宮被伴申云々、十二日、被參宮、今日也、昨日風雨以外也、而今日屬晴、神慮納受掲焉、珍重也、

〔薩戒記〕永享五年三月廿日甲戌、今日左相府殿〈足利義教〉參宮之日也、

角四郎兵衛也、十一月十三日、去年十一月八日依御風氣參宮間、人數三十五人也、御願成就之間、重其人數有參宮、各大刀二振給テ、外宮ニテ進上之、料足百貫給、二貫八百五十七文三十五人分、十九日、皆京著、御所樣〇足利義持各御大刀進上、懸御目、御祓箱總中ヨリ十進上、廿九年八月廿三日丁未、御所樣北野公文所へ成、爲御臺樣大神宮御參宮也、九月十八日壬申、有伊勢大神宮御參宮御供事、路次十德也、

畠山彈正少弼持國　畠山播磨入道祐順御サキウチ
細川兵部少輔滿久　細川中務少輔持之
細川民部少輔持春　赤松大河內刑部少輔滿政
赤松越後守持貞　赤松中務少輔持祐
伊勢守貞經　藥師三位允能
佳阿彌　圭阿彌
久阿彌　知阿彌

御臺草津、六角四郎兵衛尉持綱沙汰仕、御留皆口、京極三郎沙汰也、以上

管領畠山左衛門督入道道端　兵衛佐義淳
細川右京大夫入道道觀　畠山修理大夫入道道祐
山名右衛門督入道常熙　一色左京大夫義範
赤松左京大夫滿祐　御供被參

十九日、御臺新所北方一揆闕、左馬助持盛、雲林院、加太平三郎、長野右京亮滿高沙汰、長野雲林院番也
廿四日、卅五人參宮、御代官出京、此御代官ハ去應永十六年、北山ニ勝定院殿〇足利義持御坐之時、違例之時卅五人有參宮、則御本復之間、其願ノタメ也、凡卅三人也、二人自然爲也、各大刀二振、料足二貫

文保二年二月十七日

〔大神宮諸雜事記 一〕弘仁四年九月十六日、豐受宮大内人神主眞房妻、參詣於彼宮御祭、天、祇候玉垣下之間、件女乍坐產生畢、卽赤子插入袖、天退出也、仍宮司註具之由上奏早畢、因之以同月廿九日、被祈申件非常產穢之由、勅使王散位從五位下節職王、中臣正五位下行主稅頭大中臣朝臣淵魚、忌部等也、件眞房夫妻共科大祓、解見任已畢、自今以後、妊胎女不參入於鳥居內也、卽起請被下宣旨又了、

皇子參宮

〔日本書紀 七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、戊午、枉道拜伊勢神宮、仍辭于倭姬命曰、今被天皇之命而東征、將誅諸叛者、故辭之、於是倭姬命取草薙劍、授日本武尊曰、愼之莫怠也、〇又見古事記、

〔續日本紀 三十五光仁〕寶龜九年十月丁酉、皇太子〇桓武向伊勢、先是皇太子寢疾久不平復、至是親拜神宮、所以賽宿禱也、

〔續日本紀 四十桓武〕延曆十年十月甲寅、先是皇太子〇平城枕席不安、久不平復、是日向於伊勢大神宮、緣宿禱也、

〔玉勝間 十四〕皇太子伊勢大神宮に詣給ふ御事

これは一度の御事なりしを、史のまぎれにて、寶龜と延曆と、二度記されたるなり、いづれか正しかりけん、今知がたし、

皇女參宮

〔日本書紀 二十九天武〕四年二月丁亥、十市皇女、阿閉皇女、參赴於伊勢神宮、

〔萬葉集 一雜歌〕十市皇女、參赴於伊勢神宮時、見波多橫山巖、吹黃刀自作歌、

河上乃、湯都磐村二、草武左受、常丹毛冀名、常處女煑手、

武臣參宮

〔松木氏年代記〕明德四年癸酉九月廿一日、將軍參于伊勢大神宮、卽義滿公、鹿苑院殿也、〇又見南方紀傳、櫻雲記、

〔花營三代記〕應永廿八年二月十八日、爲御參宮〇足利義持御出京有、昭心御供也、御晝休草津、御雜掌六

也
神宣（御託宣）炳焉也、其上式文分明也、致斎散斎事、能能可存知者也、

女犯男嫁夫女〇付妊者事中略

妊者不參宮事、弘仁四年九月十六日豊受大神宮御祭夜、大內人眞房妻候于玉垣下産之後、不可參于二所大神宮鳥居之內之由、被下起請宣旨畢、次妊者著帶後、參宿館否事、其說區也、雖然參宿館、多分之儀也、但經數日宿、與假染參者、聊可有違目哉、至十ヶ月者、必可令思慮也、

衣裳事

垢衣（嫁娶假服之時著衣）洗濯著用之、月水女姓、著腐之衣裳、雖令洗濯不著參宮、觸穢之衣裳、穢限以後雖不洗濯、著用無憚、（但同座卅日、穢物之著衣、洗濯用之、）假時著用小袖之綿者、古者濯之、或蒸之、近年者不及此沙汰歟、不信之至也、祠官輩服時、候外院著用衣裳、令洗濯可參宮內院也、服之時著用之衣裳、豈可謂清淨物哉、所謂服者服也、

一路次解除

入神境用解除、所謂下樋小河東際也、此外無別儀、（但宮河沐浴者、宜任參宮人心、不及于委細注、）

宮中禁制物事

弓箭、兵杖、大刀、男女念珠、本尊、持經、不持入二鳥居之內、（但僧尼念珠、威儀之上、不入第三鳥居中之間、非制限矣、）蔺草履、（男禁局笠、禁參內院、）是又不能于委注、

凡穢否沙汰、并諸禁忌等事、法家勘答不一揆、神宮先例又不同也、雖然以多分之說定之者、古今之儀也、一盲有引衆盲之謂、有注謬事者、後見可改之、

同文保目六右狀

右大較如斯、但難盡細碎、有不審者、可訪本所、私不可判禁法、各守此法、不可違犯之狀如件、

可早相觸美濃尾張等國、普令存知大神宮參詣精進法事

副下法目錄

右

二所大神宮者、異于天下之諸社、所謂元元本本、以清淨爲先、屏佛法息、以正直爲宗、而再拜神祇、故禁經敎、忌僧尼、戒妖言、退巫覡、皆是神明之遺勅、二宮之規範也、爰頃年以降、巫等號大神宮先達、於參宮之路次、行新儀之軌式、剰背朝家憲章、不辨神宮古典、不糺甲乙丙之移展、令決斷觸穢不淨云々、所行之至、甚以無謂、爲神有恐、爲世不信也、於向後者、參詣大神宮之諸人、堅守式目、更不可違犯之狀、所宜如件、以宣、

文保二年二月十七日

禰宜度會神主十人皆判(〇中略)

大神宮參詣精進條々

一六色禁忌

不得吊喪問疾(謂有重親喪病者)食宍、亦不判刑殺、不決罰罪人、不作音樂、(謂不作絲竹歌舞之類也)不預穢惡事、

吊喪問疾事、所載格令分明也、又弘仁式云、吊喪問病三日者、今延喜式、改立當日不可參入內裏之文、問病事、寶龜二年三月十一日、明法博士大江勘答云、所病煩不忌限矣、祖父長官(當會)服假令云、神氣所勞禁忌仁者、七十五日過明云々、弘安七年六月十五日由貴御祭記云、母良所勞禁忌七十五日、吃來廿五日云々、

一內外七言

佛稱中子、經稱染紙、塔稱阿良々伎、寺稱瓦葺、僧稱髮長、尼稱女髮長、齋稱片膳、(以上內七言)又死稱奈保留、病稱夜須美、哭稱鹽垂、血稱阿世、打稱撫、宍稱菌、墓稱壤、(以上外七言)又堂稱香燃、優婆塞稱角筈、(此七言能可存其旨)

參宮　私幣〔併入〕

參宮トハ、伊勢兩大神宮ニ參拜スルヲ云フ、延暦二十三年ノ皇大神宮儀式帳、及ビ延喜式ニハ、私幣禁斷ノ文アリ、參宮ヲモ禁斷セシコト知ルベシ、然レドモ三后皇太子ハ、奏聞ヲ經レバ奉幣スルコトヲ得ルナリ、日本武尊ノ參宮ハ、往古ノ事ナレバ、當時ノ制如何ニアリシニカ知ルヲ得ズ、平城天皇ノ皇太子ノ時ニ參宮シ給ヒシハ、延暦十年ノ事ニテ、其時既ニ參宮ノ爲ニ、斯ル制ヲ設ケ給ヒシカ、未ダ設ケ給ハザリシカ知ラザレドモ、必ズ奏聞ヲ經給ヒシナランシ、鎌倉幕府ノ時ニハ、搢紳武家ノ參宮ノ事ハ聞エザレドモ、僧徒ニスラ參宮スルモノ往々アレバ、士庶ノ別ナク、參拜セシモノモ有リシナルベシ、足利ノ將軍ハ屢〻參宮セリ、德川氏ニ至リテハ、將軍ハ參拜セザレドモ、御蔭參ト稱シテ、臣庶多ク參拜スルニ至レリ、僧尼ハ、神宮ニ於テハ、殊ニ禁遏スル所ニシテ、後世マデモ、第三鳥居ノ内ニ入ルコトヲ許サヾリシナリ、

私幣ハ、上ニ陳ベタル如ク、之ヲ奉獻スルコトヲ得ザリシガ、中葉ヨリ其禁大ニ弛ミ、鎌倉幕府ニテハ、屢〻神馬幣帛ヲ獻ジ、終ニハ庶人モ之ヲ進獻スルニ至レリ、要スルニ庶人ノ參宮ト云ヒ、私幣ト云ヒ、倶ニ王法ノ禁ズル所ナレド、後世販夫販婦モ四方ヨリ參拜シテ、初穗ヲ獻ジ、神德ニ霑フコトヲ得ルモノハ、往時ノ憲綱ヲ破ルガ如クナレド、寧ゾ神意ニアラザルヲ知ランヤ、古人之ヲ論ゼシコト悉セリ、

名稱

〔宗五大草紙〕いにしへの人のをしへ申事

一伊勢へ御參候を參宮と申候

禁制

〔文保記〕廳宣

處、實正之由陳申了、因之卜部神祇少副伊岐宿禰則政ヲ以テ、度度祓清メテ下向之間、公家令進於神宮給御馬、從山中餓病惱シテ、水草モチ不食、僅飯高驛家押付テ、供給ノ郡司ニ預テ、祭主離宮院ニ到著シテ、經三箇日天御馬バチ押付タルナリ、若依如此穢天、所雷電大雨歟ト云々、

〔中右記〕保延元年九月三日、下人來申云、先日奉幣使王歸參之間、於途中被射殺了、年十八云々、此事甚不便也、神事違禮歟、凡大神宮恠異頻之由所傳聞也、

〔百練抄後宋書四〕長久元年八月十五日、同記（房記 資）云、有召參御前、外宮顚倒事、令發遣奉幣使之間、昨日從齋宮示送云、去十二日託宣云、只今神居不穩、尤似輕々、外人參入奉拜、尤可無便、神居復舊之後、可有此事者、今依此事、奉幣使停止了、恐懼還深、此後書神筆宣命、毎夜有御拜、令讀給、

來月三日、可被發遣奉幣使之由、御敎書如此、仍案文下之、於神祇官、來三日可爲神事、同四日可參向候、下著可爲六日候、此旨可被告知二宮之狀如件、

十月廿一日　　神祇大副判

大司宿館

就可被發遣奉幣使、御敎書幷祭主下知如此到來候、卽令告知者也、式日有之、仍可令存知給候、恐々謹言、

十一月三日　　大宮司判

謹上內宮長殿

〔寬保元年一社奉幣記〕六月六日、外宮家司大夫ヨリ書狀到來如左、

一筆令啓達候、然者辛酉爲御祈、當月中旬下旬之內、可被發遣一社奉幣之旨、祭主御下知到來之旨、大宮司より告狀候、依之今日右之御往還、御役所江申上候、其元可爲御同前存候、口於下宿名代之方、可被申合候、恐々謹言、

六月六日　　外家司大夫

內家司大夫殿

〔大神宮諸雜事記二〕長久五年〇寬德元年、群書類從本作長元六年誤、十一月六日、臨時勅使參宮、王正親長信淸、中臣祭主永輔朝臣也、抑件使參宮天シ詔刀之間、官幣奉納之程、俄雷電鳴響天、大雨如沃、卽介驚恠之程、彼此云、祭主請預官幣參下之程、以今月二日、字伊栗野天、ニシ戒者法師乃上道之間、彼等隨身乃物、衞士奪取天走前トヨ已了、時法師路邊留居、待付祭主天訴云、前陣罷侍執幣爲被奪取物中、裹物一丸、同被押取已了、彼不淨ノ物也、早被札返者、問云、何者トツ、法師乃云、安西郡之住人字賀介藤原惟盛加妻加骸骨也、依存生之遺言天、比叡乃法華堂爲安持上也ト申畢、乍驚鈴賀川山中ニ追付天、召問衞士男之

占可被奉遣公卿勅使於伊勢大神宮、而假殿間、先規旣稀、神慮難量、正遷宮後、可被奉遣歟如何、
今日乙丑時加午、奉宣旨日時、功曹臨酉爲用將大陰、中小吉將靑龍、終神后將天一、封過類三光、
推之假殿間被奉遣公卿勅使頗宜歟、何以言之、用傳出得吉、神宮將卦過類三光、是主宜之故也、
仁安四年正月八日
天文博士安倍朝臣業俊
掃部頭兼權陰陽博士安倍朝臣季弘
陰陽博士兼但馬權介賀茂朝臣濟憲
圖書頭兼權曆博士土佐介賀茂朝臣周平
縫殿頭兼權助賀茂朝臣宣憲
主計頭兼頭賀茂朝臣在憲

〔皇大神宮引付〕永享十二年
一來月一日可被發遣伊勢一社奉幣使之事、任例可令下知給者、依天氣執啓如件、
十一月十八日　右中將持季
謹上　伯三位殿
一來月一日可被發遣伊勢一社奉幣使由事、御敎書如此、且存知、且可令告知二宮給之狀如件、
十一月廿一日　神祇大副判
大司宿館

〔永正十五年一社奉幣使參向記〕先有兼日告知、
來月三日、可被發遣奉幣使於伊勢大神宮、任例可被下知給、仍上啓如件、
十月十八日　右大辨內光
謹上祭主三位殿

〔仁安四年公卿勅使記〕正月八日乙丑、今日左大臣〇藤原經宗参内、奉仰被行軒廊御卜、藏人少輔仰云、可發遣公卿勅使伊勢大神宮、仰神祇官陰陽寮令卜申吉凶云々、

件條自去年有勅願之上、依火事早速可進發、而御體假殿之間、如長久元年託宣者、神慮難測由公卿議申、仍被行御卜也、

左大臣召左少辨爲親、仰官寮座可敷由、次被仰官寮可令着座由、陰陽頭賀茂在憲、權助同宣憲、曆博士同周平、主稅助安倍時晴、博士賀茂濟憲、權博士安倍季弘朝臣等、天文博士同業俊、漏刻博士經明、神祇權大副卜部兼康朝臣、紀伊權守同兼貞、宮主同兼衡等、依次參着軒廊座、入自日花門、次被仰御卜趣、各令卜申云々、

公卿勅使進發吉由、官寮共卜申、左府付藏人少輔被奏聞、次上卿幷官寮退出、次藏人奉仰奉始公卿勅使神寶、藏人給料基光、出納久盛、小舍人則弘、奉行畢、其所點定、大炊寮正廳云々、

神祇官

卜吉凶事

問伊勢大神宮被發遣公卿勅使、假殿之間與正遷宮以後何吉哉、

推之假殿之間被發遣可宜歟

仁安四年正月八日

宮主龜長正六位上卜部宿禰兼衡

從五位下行權少祐大中臣朝臣爲定

從五位上行紀伊權守卜部宿禰兼貞

從四位下卜部宿禰兼康

陰陽寮

供養せらる、大神宮へ御願に、我御代にしも、かゝるみだれ出きて、まことに此日本のそこなはるべくは、御命をめすべきよし、御てづからかゝせ給ひけるを、大宮院（〇後嵯峨后、亀山母后、）いとあさましき御事なりと、なほいさめ聞えさせ給ぞ、ことわりにあはれなる、

三后幷皇太子奉幣

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉幣帛本紀事

春宮坊幷皇后宮幣帛、（〇中略）納外幣帛殿、隨年禰宜給之、

〔延喜式（四伊勢大神宮）〕凡王臣以下、不得輙供大神幣帛、其三后皇太子、若有応供者、臨時奏聞、

雑載

〔台記〕天養二年（〇久安元年）二月六日壬午、依勅使立、巳刻参内、依雨著深沓参入、於陣後著浅沓、著南座、奏宣命草及清書、（依外記申、加奉使王申御馬由、承聞食、御云、外記令傳馬寮、）了参太后（〇鳥羽后得子）御所、次参御前、次神宝御覧、摂政（〇藤原忠通）近候、予（〇藤原頼長）居鬼間障戸外見其儀、其後良久使不参、頻召之、此間予参入省、於待賢門著深沓、入北廊改之著座、召左少辨師能、問幣物具否、申具由、召外記重憲、問使参否、申参由、頃之使左大将雅定参入著座、相率著東廊（使座南面）幣物出東福門後、給宣命於使、使出待賢門（使召使見）後、起座退出、皇后神宝被相具云々、宮司具神宝、向勅使宿所云々、不持参入省、先日外記重憲来云、行粂王之外、可奉仕使之王不侍、或服或城外、因之不可卜者、余諾、

〔康富記〕應永廿六年二月廿七日壬寅、明日奉幣、上卿御参陣次第等令懐中、委細申入、（〇中略）奉幣料足自武家御沙汰云々、明日奉幣御訪貳百疋到来、自召使行秀方總注進之間、別不及注進申、雖然已下行了、奉幣職事蔵人頭右中辨藤光朝臣云々、

請取案

請取伊勢一社奉幣参役外記御訪事

合貳百疋者

右所請取之状如件

應永廿六年二月廿七日　判

一神寶御覽之間、神馬誰人可爲籠哉事

申云、可召府之者中、候院之輩、

一宣命御署所可載阿閣梨家給事、

申云、可被載、

余和說申云、脫屣之後、雖有發遣勅使之例、皆是非御出家、大神宮事、其齋殊密、以法體下宸筆書宣命、奉幣帛有御拜之條、曾無例、又乖理、今已踐祚之後、猶自公家可被立歟、若有別御願者、如付祭主、可被祈申、又可被示可然之僧徒歟、此事雖有恐、偏思冥鑒所申也、範季云、已被始神寶了、忽默止如何、余云、被渡公家行事所、尤可爲善政、若又猶有進物之御志者、非幣物之外物、付祭主若御使之僧徒等、密密奉納、何難有哉者、後聞依予申狀、被行御占、猶申被立吉之由、仍被立了云々、卅日壬戌、自今夜法皇、令入公卿勅使御精進屋給、明後日發遣、明日爲前齋之故也、　九月四日丙寅、明日公卿勅使參著之日也、而被始供花、世之所傾也、

〔源平盛衰記三十三〕大神宮勅使事附緒方三郎責平家事

壽永二年九月二日、平家追討ノ御祈ノ爲ニ、院(○後白河)ヨリ公卿ノ勅使ヲ伊勢大神宮ヘ立ラル、參議修範卿ト聞エキ、太上天皇ノ大神宮ヘ公卿ノ勅使ヲ被立事者、朱雀、白河、鳥羽三代ノ蹤跡アリトイヘ共、是皆出家以前ノ事也キ、太上法皇ノ勅使ノ例、今度始トゾ承ル、(○又見百錬抄、保暦間記、伊勢公卿勅使雜例、)

○按ズルニ、朱雀天皇讓位ノ後、公卿勅使ヲ發遣セラレシコトハ、本文ノ外、未ダ的證ヲ見ズ、

〔增鏡十老の波〕そのころ(○弘安四年)蒙古おこるとかやいひて、世の中さわぎたちぬ、色々さまざまにおそろしうきこゆれば、本院(○後深草)新院(○龜山)はあづまへ御下あるべし、内(○後宇多)春宮(○伏見)は、京にわたらせ給ひて、東の武士どものぼりさふらふべしなどさたありて、山々寺々御祈かずしらず、伊勢の勅使に經任大納言まゐる、新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老をめされて、眞讀の大般若

行幸途次奉幣

〔日本紀略一條十〕長保五年三月七日丁酉、奉幣伊勢大神宮、依舊御願也、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十月壬午、行幸伊勢國、十一月乙酉、到伊勢國壹志郡河口頓宮、謂之關宮也、丙戌、遣少納言從五位下大井王幷中臣忌部等、奉幣帛於大神宮、車駕停御關宮十箇日、

上皇奉幣

〔十三代要略二堀河〕寛治六年十月九日、太上皇〇白河被命幣帛御馬於大神宮、別當參議大江匡房卿、中臣忌部等爲使、〇又見二所大神宮例文

〔中右記〕天承二年〇長承元年四月十日辛未、今朝院〇鳥羽被奉公卿勅使於伊勢也、使新中納言雅兼卿、是寛治之比院〇白河被奉所、中納言匡房卿之例也、早旦召雅兼卿、給宸筆告文云々、神寶被奉也、此間大殿〇藤原忠實令參給也、關白殿〇藤原忠通依御風氣不令參給也、今日爲著甲賀驛家被急者、來十四日參進、及件日院中神事者、中納言一家人々、君達七八人、著衣冠相送者、〇中略今日祭主三位公長卿、被聽院昇殿、是相具伊勢勅使之故也云々、忌部中臣卜部皆相具也、但无宣命也、只宸筆告文給公卿勅使許也、仍大神宮中臣讀宣命、勅使中納言宰相中將來云々、十七日、未時許、伊勢勅使新中納言入洛、院中及今日神事、有御拜云々、先々及參宮日有御拜、今度有議及勅使歸參日御拜由、或人所談也、

〔玉海〕壽永二年八月廿八日庚申、申刻院〇後白河別當式部權少輔範季、爲御使來自院、被發遣公卿勅使之間、條々御不審事、可計奏云々、

一奏公家食馬事、可被宣旨歟、將廳御下文歟事、

申云、可被尋寛治〇六年天承〇二年例、無所見者、只廳御下文宜歟、

一神寶之外、五色幣可被獻哉否事、

申云、可被獻、此事或人内々申云、忌部事參入、猶有恐云々、余云、中臣可參、何憚、忌部可有食餘幣、何憚、五色哉、雜季服齊、

一自進發之日至歸京、御行法不可退、而御拜如何、

申云、行法以前可御拜云々、

告神職事

草、〈大内記令明所勞、内記爲業文章生也、仍夜下宣命趣也、〉草持來、披見之處、去七月十三日夜、權禰宜能基宿館從者俄頓死也、而持出之間、從者依主命隱之、依有風聞被問之處承伏了、宿館之申、先々雖有犬死、犬產、牛馬落胎穢、未有死穢也、仍乍驚於京都爲沙汰遣召了、且爲恐申有此奉幣也、〇下略

〔大神宮諸雜事記一〕延長五年四月廿三日、大神宮北御門偷開、竊盜參入正殿、北方御板敷放上天、盜給御璧代絹一間〈准絹五丈四尺八寸〉御調絹九疋御絲等已了、仍宮司上奏此由、隨被差下使神祇大副從五位下大中臣奥生、且令實檢盜失御調物等、且令祈謝其由給、卽以同年六月三日、大司良扶、幷宿直大内人物忌等九人、令科大祓解却見任、至于權大司幷少司禰宜從五位下神主最世等者、科中祓又了、於盜失物者、依同六月九日宣旨被替進早了、

〔後二條關白記〕寬治七年三月廿六日癸卯、送消息於民部卿許、伊勢大神宮奉幣被立之由、今日俄承、可被行之日參内之由示了、　廿九日丙午、伊勢奉幣立之、上卿民部卿〇源經信也、左大辨來云、祭主親定朝臣被口未得之由所云也、前宮司國房可被勘罪名之由仰法家了、被啓其由奉幣也、

謝賊誅

〔本朝世紀〕康和五年八月十三日庚申、左大臣内大臣以下諸卿參入、被申伊勢大神前禰宜荒木田宣綱、神祇權大副大中臣輔弘罪科事、　九月六日壬午、權大納言家忠卿參入、被立伊勢公卿勅使、〈參議左大辨源基綱爲使〉爲被申宣綱輔弘等配流事也、有神筆宣命、〈正家草進之〉幷神寶等、

〔日本紀略二十朱雀〕天慶五年四月十四日丁卯、奉幣於伊勢大神宮等、依賽東國南海賊等伏誅之由也、内外宮禰宜敍爵、

〔日本紀略四村上〕應和二年二月廿七日乙卯、天皇幸八省院、奉幣伊勢大神宮、奉寄伊勢國三重郡、敍禰宜一階、〇中略是依去天德四年十一月御祈賽也、

〔日本紀略七圓融〕天元五年六月十一日辛未、今日付月次祭使、被奉神寶御裝束金銀御幣帛等於大神宮、依石淸水行幸時御願也、

旨被成神宮上卿右衛門督持季、辨右中多房朝臣、官務長興宿禰也、

〔大神宮諸雜事記 二〕延久元年十一月十二日甲辰、公卿勅使參宮、參議正三位行春宮權大夫藤原朝臣良基、王從五位下兼則王、中臣祭主正五位下行神祇少副大中臣朝臣元範等也、卽被下宣旨(同十一月八日)偁、權大納言(○言下恐脫源字)朝臣經長宣、奉勅、早祭主宮司禰宜等相共構開、如舊修補件豐受宮正殿鏁云云、具不記、宣命狀、件御鏁乃事等所令祈申給也、仍勅使宮司共豐受大神宮參入天、玉串供奉、宣命詔刀如例、了天祭主御內參入天、御前乃御階之許候天、六禰宜外從五位下賴元神主以令隨身鉗天、參登天、御鏁構開天、令實檢之處、已四舌乃御鏁乃舌、一方被押、總天令溢給、其外破損、卽實檢之後、忌鍛冶內人安光、幷鍛冶大中臣吉友召天、卽日內令修補天、如元所奉納也、但其間外宮權司信通令候天、大司公義少司如範等勅使仁奉倶天、大神宮參入供奉了天、從內宮歸參天、件御鏁所被奉納也、卽其由解文官奏已了、

〔伊勢公卿勅使雜例〕堀河院十二度(○中略)

永長二年十一月廿五日(○二所大神宮例文爲五日)權大納言源師忠、宣命(神寶幣物奉納、神殿令不開事、)作者少內記定賓、宸筆(正家朝臣)

〔山槐記〕永曆二年四月十八日庚申、今日被發遣伊勢幣云々、傳聞是去年大神寶欲奉納開御戶、更不令開給、于今猶不令開給御之故云々、件御祈也、被神寶納東寶殿云々、

〔仲資王記〕文治五年三月廿五日乙卯、裏書云、以權大納言藤實家卿、爲伊勢大神宮勅使、是去年以後、御戶鏁不開之故云々、

〔大神宮諸雜事記 二〕治曆二年十一月廿一日、參宮勅使參議從三位行右大辨齋宮大別當藤原泰憲、王信淸王、中臣少祐元範等也、宣命狀云、去八月廿五日、假殿御遷宮乃違例之由令祈申給也、

〔中右記〕長承二年八月廿五日丁未、今日有臨時伊勢奉幣、仍巳時許參內、(○中略)著陣召內記、令進宣命

燒亡之由同前也、

〔十三代要略 堀河〕寛治六年八月十三日、祭主親定言上、去四日大風、大神宮西寶殿、豐受宮東西寶殿顚倒、廿一日、立公卿勅使、依寶殿顚倒也、

〔十三代要略 鳥羽〕天永元年十一月十八日、被立伊勢奉幣使、依大神宮正殿心柱顚倒幷豐受宮正殿可被改立日時有障頻延引事也、自今日廢朝五日、

〔伊勢公卿勅使雜例〕鳥羽院十一度〇中略

天永元年十二月七日辛丑、大納言民部卿太皇太后宮大夫源俊明、宣命本宮怪異心柱少內記周衡、宸筆、

勅使敦宗朝臣

〔中右記〕天承二年〇長承元年十月十七日甲辰、今日有伊勢奉幣、是千木折事被申云、上卿新大納言實行卿、行事左少辨公行者、

長承二年六月八日辛卯、臨時伊勢奉幣也、予依爲上卿、巳時許參內、著仗座、召大內記令明、仰宣命草可進之由、其趣依日來仰下了、召外記、卜串可持參之由仰之處、申云、使王唯一人也、仍不卜也、予揖了、次外記出來申云、使王御馬申、予暫可令候之由仰了、次大內記持來宣命草、是豐受宮幷齋宮寮木顚倒、宮寮卜申云、公家御藥者、又辭別瀧原御裝束濕損、調改今日被進由申、帛御被蚊屋帳三物也、又鎭西宗像社燒亡事等也、依御物忌書宿紙、予進弓場殿、付頭中將實衡朝臣奏聞、

〔玉海〕文治六年〇建久元年五月七日庚申、此日臨時伊勢幣也、依內宮心柱顚倒被發遣之、卽自今日廢朝五箇日也、天仁外宮心柱顚倒、廢朝三箇日、天永內宮之度五箇日也、今依內宮例、

〔帝王編年記 二十六 後宇多〕弘安十年正月八日、仗儀、大神宮別宮月讀宮顚倒事 廿四日、伊勢一社奉幣、依月讀宮事也、

〔康富記〕寶德元年八月廿八日丙子、伊勢豐受大神宮正殿、去六月廿八日鳴動、西寶殿千木鰹木覆、左右板額落事、廿二日有軒廊御卜、廿三日祈年穀奉幣宣命辭別載之、是日禰宜等可祈謝申之由宣

〔爲房卿記〕承曆三年二月廿一日庚申、去十八日伊勢大神宮內宮之外院七十餘宇、幷累代文書印鎰爲灰燼由、大神司言上、　三月八日丁丑、今日行幸八省、被發遣奉幣伊世使、蓋被謝中外院火事者、（使參議左大辨伊房卿、神祇伯康資王、中臣卜部忌部等如例、）延曆例云々、

〔伊勢公卿勅使雜例〕高倉院八度（○中略）

仁安三年十二月廿九日、參議左大辨源雅賴、宣命（內宮火事）辭別（地震）作者左中辨俊經、无宸筆宣命幷神寶等、

〔康富記〕應永廿六年二月廿七日壬寅、明日奉幣、上卿御參陣次第等令懷中、委細申入、予有御對面、數刻有御雜談、奉幣近年之分、大概申上了、本官可有御參之由被仰候間、只於陣可被發遣之由令申候間、任近例於陣可被發遣云々、次廢朝宣下事、同被仰合了、奉幣幷廢朝事、依伊勢月讀宮去正月回祿也云々、　廿八日癸卯、伊勢一社奉幣、幷廢朝宣下被行之、依去正月四日未刻月讀宮炎上被謝申之也、

〔基量卿記〕天和二年正月廿二日、傳聞明日陣儀、是依神宮公卿勅使發遣日時定、幷召仰上卿權大納言奉行重條朝臣、傳奏柳原大納言、辨、使左大辨宰相、日時定了之間、主上（○靈元）出御清涼殿、關白（○鷹司房輔）候御座傍、（薄疊殿下束帶、上御引直衣御簾、）主垂母屋簾、奉行候簾外廂、主上御自奉行入當間、參進膝行、勅語同伊勢大神宮へ可奉幣帛使、參木左大臣宗顯ニ仰セヨ、奉行取之膝退出、上戶、於殿上仰云、依內宮炎上可取奉大神宮へ幣帛、　廿七日、從今宵宮中御神事、明後日勅使奉遣也、

〔扶桑略記〕二十八（後朱雀）長曆四年（○長久元年）九月廿七日、依豐受宮寶殿倒事、令參議藤原良賴卿參向伊勢大神宮焉、

〔大神宮諸雜事記〕二長曆四年（○長久元年）九月廿九日（○九月廿七日誤）、參宮勅使參議從三位行右近衞權中將藤原良賴、王致通、中臣神祇權大副輔宣朝臣等也、宣命狀仁、豐受神宮、非常顚倒之由被祈申也、又內裏

上齋部宿禰高善弱肩爾太襁取掛天、禮代大幣帛爾、大唐綵帛錦綾乃妙麗乎添加天、持齋利令捧持天奉出賜布此狀乎神奈加良聞食天、今毛如此等乃灾波、未然之外爾消滅賜天、天皇朝廷乎與日月共爾、常磐堅磐夜守日守護幸奉給止申賜波久申、辭別申久、今年旱灾有天、百姓農稼皆悉枯損奴、此又皇大神乃厚助爾依天、甘雨令降賜天、五穀豐登之女給比、國家安平仁矜幸賜止申給波久申、

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年五月三日己卯、勅遣從四位上行神祇伯棟貞王、向伊勢大神宮、告以大極殿灾、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年五月十一日丁丑、子剋内裏有火、廿日丙戌、令神祇官陰陽寮占申内裏燒亡、若有咎祟所致歟者、六月一日丙申、雨降、天皇行幸八省院、奉遣伊勢幣帛使、○中略今日行幸依警固、諸衞官人著褐衣胡籙、

〔顯廣王記〕安元三年○治承元年六月十五日癸未、十社奉幣、被告大極殿炎上事、上卿行事右少辨、自神祇官發遣、伊勢使王兼綱、中臣範隆、忌部宗眞、卜部致貞、

〔伊勢公卿勅使雜例〕高倉院八度○中略

仁安四年正月廿六日、別當權中納言兼右衞門督平時忠、宣命大宮火事、井造宮子細、辭別御愼、地震、大内記光範草也、宸筆、永範朝臣

告盜

〔帝王編年記二十三順德〕建保四年二月五日夜、群盜入東寺寶藏、佛舍利已下代々寶物等併盜取之、廿三日、爲佛舍利御祈、被立公卿勅使光親卿於伊勢大神宮、

告神宮事

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年八月壬寅、詔遣參議左大辨正四位上兼春宮大夫中衞大將大和守紀朝臣古佐美、參議神祇伯從四位下兼式部大輔左兵衞督近江守大中臣朝臣諸魚、神祇少副外從五位下忌部宿禰人上於伊勢大神宮、奉幣帛以謝神宮被焚焉、○又見大神宮諸雜事記、二所大神宮例文、伊勢公卿勅使雜例、

〔扶桑略記二十四裏書〕延喜廿二年十月十四日、依齋宮寮失火事、奉遣伊勢臨時幣帛使、

歸參、被奏事由也云々、昨日申酉時許雖入洛、依欠日今朝被參内也、

〔伏見院御記〕正應六年七月十六日、戊刻勅使歸參、著殿上、以俊光朝臣奏御願平安之由、○中略內々召勅使、問路次之間事、無爲神鑒非一云々、一者宣命讀申之間、烏其數來、副使稱宜等、各前々爲佳瑞之由申之、一ハ宣命燒之時、件煙靡神殿方、是神納受無雙之兆之由各告之云々、又去十二日參宮前日、勅使忽病惱、口痢過法云々、而非寢非覺有人聲告云、郁テ勤ヌ形モテ□□□□當レト云々、就告心神口甚、卽立驛家參宮、其間聊無子細云々、神感之甚、仰而可信者歟、凡神者受德與信云々、雖末代何不與善哉、可憑可仰、

告征討

〔續日本紀 桓武 四十〕延曆八年三月壬子、遣使奉幣帛於伊勢神宮、告征蝦夷之由也、

〔日本紀略 桓武〕延曆十三年三月辛卯、遣參議大中臣諸魚、奉幣於伊勢大神宮、爲征蝦夷也、

告內裏造營

〔日本書紀 持統 三十〕六年五月庚寅、遣使者奉幣于四所伊勢大倭住吉紀伊大神、告以新宮、

〔續日本紀 元明 四〕和銅元年十月庚寅、遣宮內卿正四位下犬上王、奉幣帛于伊勢大神宮、以告營平城宮之狀也、

〔三代實錄 陽成 三十七〕元慶四年二月四日戊子、是日遣武藏權守從五位上弘道王、向伊勢大神宮奉幣、告以大極殿成也、

告火災

〔三代實錄 清和 十三〕貞觀八年七月六日戊申、遣使於伊勢大神宮、告以應天門火、告文曰、天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立、高天乃原千木高知天稱辭定奉留、天照坐大神乃廣前爾申賜倍止申久、去閏三月十日爾、應天門幷東西樓爾火災在天燒盡奴、其後頻有物佐爾依、卜求爾、御體爾御疾事、又火災兵等乃事可有止卜申世利、因茲掛畏岐皇大神乎仰恃奉天、大幣帛奉出賜牟止所念行須間爾、穢事須有天、至于今未奉出賜、恐懼祇畏利坐須、因改月擇日天、大舍人頭從五位上礒江王、神祇大副從五位下大中臣朝臣豐雄等乎差使天、忌部神祇權大副正六位

〔經信卿記〕承保元年七月四日庚子、祭主輔經差使送饗饌等、召其使令給祿、褂領一件使令申送牛之由、仰不可然由了、大宮司獻絹卅疋、牛二頭解文、令向中臣人人、件物何故乎、各令申云、絹者且例祿也、於牛者雖非例祿、若返給者、有恐思給歟、依無其謂不入返給之、巳刻許召宮司等、公義信通行則束帶出來、喚昇東面給祿、大宮司女裝束一襲、件祿先例大褂一、仰云、然而離宮事、雖存先例多有所勤、仍會釋所給之、權大宮司大褂一領、小宮司同前、此外召主典新家能行、於西面令給打衣一領、先例或疋絹、或不給之、次巡見離宮院、次就路、賴宣親長宣衡義任、□近從自離宮西野、仰早可留由了之中、義任至阿濃邊所相具也、依爲路次下馬巡檢齋宮、公盛朝臣、招前允重長、令開北門也、殿屋破壞、蓬蒿交生、歷覽之間莫不驚情者也、大神宮檢非違使二人、自櫛田川歸去了、例也、申刻着壹志驛、用濱路、今日以後他使使、雖來逢驛所不相具也、郡司等出來勤迎送事、多且表前司舊志也、　五日辛丑、貞季又送饗饌、召使給祿、大褂一領、公輔送肴物幷牛二頭、於牛者返給了、辰刻就路、○中略　申刻著鈴香、　六日壬寅、彼國在廳官人、稱例令奉出牛三頭、返給已了、依有伊勢前司相示、渡馬、黑毛二疋、是官人廷任云々、　辰刻出鈴香驛、午刻著白河、日中難堪之上、避暑清涼之地、仍卜居河邊、暫以休息、午終就路、申刻重經大岡宅、省史生安重、依申假令入京了、　七日癸卯、遲明出大岡、國儲每事用意、仰旅籠所聊構酒饌、且早所進發也、巳刻著勢多、國人濟濟、夏屋渠渠、又儲湯沐用意深也、次牽出牛五頭、仰不可然由返給了、次召目代前伊豆守業亮、給女裝束一襲、未刻出館、秉燭入洛、返遣人人借馬了、卽參關白殿、○藤原敎通、令申御幣無事奉納只今罷歸之由、又申今日雖內御衰日、令申此由、何事候哉、御報云、明日凶會日也、今日被申宜歟者、乃參內、使藏人時範令申御幣平安奉納之由、時範歸出云、被聞食、稱唯退出、雖非指事、爲令語申途中之事等、雖尋上﨟職事、只今不候云々、又件奉幣使尤爲大事、上已歷數日、往返猶可被問此間子細者歟、

〔中右記〕嘉承二年二月廿一日戊寅、今夜內大臣○源雅實從伊勢被歸之後被參內、官幣奉納之間、全無違例云々、夜前歸洛、雖然依當欠日、今日被參內也、但今日歸忌也、不被忌之事歟、

永久六年○元永元年四月十五日、今日勅使參宮云々、　廿日壬申、今朝伊勢公卿勅使右衛門督顯通卿

奉幣使復命

〔散木弃謌集雑〕伊勢に侍りけるころ、別當實行公卿勅使にて大神宮へまゐられたりけるに、齋宮のくだらせ給ひしをり行事辨にて侍りけるが、事はてゝ京へかへるとて、宮に參りて日來なれてまかりかへるこそ心ぼそくさぶらへ、かやうにまゐらん事も有がたく、もし命さぶらはゞ、公卿になりて勅使にて下らん時ぞかやうにも參るべきと申てのぼりけるに、十年ばかり有て勅使にてくだられたりけるが、むかしのあらましごと忘れずは、かならずまゐらんずらんと仰られけるに、まゐらで過られければ、おひてつかはさむとて、その比の歌めしければ、ふたつをよみてまゐらせたりけるを、これをつかはしたりける、

むかしせしあらましごとのかはらぬをうれしとみえばいはまし物を

御返し

いせの海のしほひの方へいそぐ身をうらみなはてそ末もはるけし〇又見古今著聞集

〔西宮記臨時七〕伊勢使〇中略

十三日、〇中略次進發、他使使不具 檢非違使二人、自綺田川歸、〇中略宿鈴鹿、

十四日、供給、進發、宿甲賀、

十五日、供給進發、入洛、可申返事、〇又見江家次第

〔左經記〕長元四年八月卅日乙巳、巳刻宮司永政出牛二頭絹廿疋、於牛返之、絹依爲例祿留之、則以八疋配供六人、官掌辨侍等各疋遣、十二疋令納了、或可臨時勅使四位祿絹十二疋從八疋云々、仍所分給也、同刻立離宮、留壹志驛、　九月一日丙午、巳刻立壹志、及昏黒著鈴鹿之間降雨、　二日丁未、辰刻立鈴鹿、未刻著甲可驛、今朝常陸前守維衡朝臣送牛二頭、依無故返却了、　三日戊申、未明立甲可驛、及午刻著勢多驛、暫休食、替夫馬等、及申刻入洛、及晩束帶參內、令頭中將奏事由、有召參晝御座方奏參宮間事、并禰宜等所愁申之事等、次關白參御宿所、聞申此由等、及亥刻歸、

奉幣使參齋宮

八重榊乃邊留捧置久、次玉串內人宮司乃榊乎請取、一禰宜留渡事等乃、玉串乃行事如恒、次神拜手八端天各退出、司四姓如例元乃道乎下向、神宮乃下向亦如例自西退出、次神宮荒祭遙拜所乃邊留、四姓司乃下向乎相待、各一禮志天過天遙拜所留著、次留神宮相著天、各北向神拜有、畢先禰宜退出、次四姓退出、次一殿留著久、祭主波北座南面、宮司波南座北面、禰宜波四氏秀、五守直、八守雄、十氏邦等也、各有鋪設、但祭主宮司乃座、清岐疊乃面乎敷久、往古波高麗緣、雲繝緣、位級留應天敷久、今度波如斯、著座乃時、祭主宮司、禰宜相待天乍立一禮天、座天又一禮乎爲也、次配膳祇承役人勤之、但今度者祇承乃闕留依天、一禰宜與利物忌乃副方、其外乃役人乎相語比勤之、次勸盃、禰宜勸盃乃鋪設留著天、金奈掛乃土器乎取天、扇仁氏塵乎拂比、酒乎受天進、祭主宮司手乎拍天請取被飮、○中略次御遊所留參留、祭主宮司波如例四乃御門與利參留、禰宜者例乃如久三鳥居與利參留、次御遊所乃鋪設留著久、祭主北向東頭、其次留少間天宮司座、西北乃方留禰宜座、但各鋪設波御門乃下留敷久、禰宜等、祭主宮司乎相待天、一禮天著座也、其後又一禮天位階乎申、次倭舞、先宮司、次祭主、次禰宜、次第如例、舞乃石壺有利、乍立天留向天、笏乎額留付氏天乃拜、屈伏氏地乃拜、乍跪又天地乃拜、○中略各舞畢天立歸乃砌、一葉仁氏酒有利、此乎酒立止云、其後本座留歸、次退出如例、

右大概如斯

〔西宮記臨時七〕伊勢使○中略

十三日、○中略次進發、○中略若參齋宮、於近邊東帶、入自南門參西中門、於坤角戶口乘折敷可進御書、給御返事、給諸女裝束一具、女房推出、下地再拜退出、長曆良賴拜、治曆泰憲不拜、或進東廊改衣、有諸○又見江家次第、

〔中右記〕永久二年正月十六日、未時許民部卿○源俊明來給、爲一家長之上、此人爲檢非違使別當時、三箇度被勤仕伊勢勅使也、仍爲思吉例、尋申不審事等、○中略可參齋宮歟、命云、爲當時皇女之人爲齋宮時、從內被奉御書之時可參也、此齋宮ニハ不可被參也、

又今度宮長拜領馬、一神馬一疋、白葦毛勅使私被進神馬一疋、河原毛
又勅使御下向之後、自離宮院一疋、糟毛自家子一疋、栗毛二神馬ハ、四禰宜氏棟神主得分、黒毛
又十三日勅使御下向夜、以子息八禰宜氏尙神主、孫子尙政神主、爲長官代官、被差進離宮院之處、二重衣一領、又一重、自勅使賜之、則被進長官云々、但十三日夜、離宮院江自宮長石大小三被進之、
權禰宜宮守物忌父荒木田神主尙國記之

〔永正十五年一社奉幣使參向記〕同參向次第
四姓宮司各參著于二鳥居列立、使者入天在南乃方、北向東頭、使王、次中臣、次齋部、次卜部等也、司波入天左、北方南向也、如例祇承宮掌參向天、御鹽湯大麻乎振掛奉留、次玉串所爾列立、使使者東頭南面、宮司波使乃東爾南面、神宮波司乃東爾西頭南面、各北乃方也、手水役人玉串內人物忌權官等波南乃方爾、使司神官爾對天北面也、先手水使王、次祭主、次忌部卜部、次宮司等也、役人勤之、一人波水乎獻、一人波紙乎獻、使王以下各本座爾歸著、但乍立也、次鬘木綿、先祭主著用之後、宣命乎取天一座爾進、次使王二座爾下著、次忌部進天鬘木綿、同多須岐乎掛官幣仁副奉留、次大司進天鬘木綿、次御榊乎玉串乃大內人乃手與利請取、進天四御門爾至留、次送文乎進、大物忌一薦奉請取天獻、禰宜各拜見、同錦綾八端、衞士方與利請取、彼御神寳請取在所、荒垣乃未申乃角乃邊歟、往古者荒祭月讀伊佐奈岐瀧原並宮伊雜風宮乃役人各請取、錦綾波出納內人八重疊末氏奉捧持、今度波錦綾許也、次銀御等役者請取、御神馬波御馬飼內人請取、次一禰宜與利十座末氏、玉串乃行事如例、畢天參入、次中院爾參、先禰宜、次司、次祭主、次使王、齋部卜部也、官幣以下者役人等捧持之、次中院爾參天、神宮宮司各乍立四姓乎相待天、一禮有天各一同著座、又一禮有利、其後忌部前乃石壺爾參平伏、其後祭主前乃石壺仁參天、宣命讀進天、歸著之時、二座爾下天、使王一座爾進、于時忌部本座爾歸著、宮司無詔刀、但石壺乃次第如例、使使者入天右西頭、司波入天右使乃西也、禰宜者入天左東頭也、官幣以下波、

一祿物次第、朱塗辛櫃二合、一殿東妻舁居、一禰宜ニハ、勅使家子、又自二禰宜前駈引之、但祿ヲ被懸事、代代自後面面禰宜乃右乃肩ニ被懸之處、今度自前被懸之、違先規者歟、取祿事、自一禰宜守次第、祇承宮掌忠頼神主取之、面面雜色給之、其中七八禰宜者、乍懸被立之間不及取、祇承其雜色取之、則勅使被立座之後、櫻宮御前テマ被參之剋、祇承宮掌依申子細、任先例一殿後ヨリ所被退出也、其上下祿物一一計渡之、此中於子良母良三色物忌父等祿物者、任總員數、代代於一殿請取之處、今度祿入(多留)辛櫃二合、行事官奉行者返取之、爲先例之由申之、本宮公文之仁者、被奉送於大神宮、色々祭物入物、并御辛櫃無返送例之由答之、互相論之間、依及入夜、歟不請取之、以翌朝自公文所所請取也、是新儀違例也、(但於二合辛櫃者、所留置本宮也、)

一參勤物忌父等交名事、大物忌父一﨟與衆神主、宮守物忌父一﨟尙國神主、地祭物忌父一﨟有久神主三人者、御玉串奉拜供奉、衆邦神主、(大物忌父二﨟)忠村神主、(宮守二﨟)在言神主、(地祭三﨟)祭庭供奉、大物忌副包延、瑞垣御門幌役、宮守物忌副量重、玉串御門幌役、地祭物忌副千與光、第四御門幌役人、不參、皆交名事、弘元大物忌父三﨟、(服氣)家氏宮守物忌父三﨟、(服氣)弘氏地祭物忌父二﨟、(輕服)彼分祿物、雖爲服氣輕服中、各所分宛也、○中略

正應六年七月十三日公卿勅使御參宮間事(記別紙)

今度勅使一殿ニ著座、饗膳之時爲獻盃、一禰宜尙良被致其勤仕、先例請大宮土器被進勅使之處、先被勸長官之剋、依勅使氣色被飮用之後、取其土器勅使所令飮用給也、但有舊例云々、抑勅使御出京者、七月八日云々、同十三日離宮院可令著給之處、路次之間乃被除驛歟、同十一日ニ、被著離宮院之間、於離宮院一箇日有逗留、又宮長拜領分一神馬、隔六箇日之後、勅使御參宮之時、神馬ハ、總官進爲先例之由、有御沙汰之上、外宮方以翌日引進之旨、總官一分奉行人延雄神主之狀(内宮祠官)到來之間、一神馬ヲ擬被引進之處、件馬以前他用之間、勅使私ニ被進神馬(河原毛)ヲ被引進之間、總官中所被留置也、

宜進參天賜彼勅命、八重疊西坤角江被步寄之時、大物忌父一﨟與象神主進參、請取彼宣命、三分仁破之面奉燒之、一禰宜向北、大物忌父向東、于時其翠烟神殿仁靡、御納受爲炳焉者歟、其後一禰宜歸著本座、抑御火火箸、御火內人象致用意、臨其時所令持參也、其後勅使私被奉進神馬一疋、八重疊東公家神馬奉引立在所仁立之、是爲新儀歟、於同幣紙者、八重疊之上仁居之、一禰宜進參志天奉幣、其後勅使四姓副使宮司者、自南御門退出、禰宜者自西御門退出如常、御輿宿北對拜如例、

一荒祭宮神拜所御拜次第、勅使初者東仁被蹲踞之處、違先規之間立直天、先勅使、次四姓氏人、西上北面蹲踞、宮司禰宜東上北面列、御拜四箇度、拍手兩端、其間者、荒祭宮御神寶者、本宮忌屋殿東仁奉昇居、御拜畢之後、玉串大內人貞常、土公相共參彼宮致行事、大內人物忌等昇殿奉納之、

一一殿鋪設著座次第、勅使御座、大文高麗端疊三帖、差絹端席半帖、在獻盃疊一帖并取瓶子座疊一帖、小文高麗也、四姓副使座、一殿後戶西間、小文高麗端疊二帖、宮半帖敷之、在獻盃疊一帖、小文高麗、東上南面、宮司座西壁副小文高麗端二帖、宮半帖、在獻盃疊同盃南上東面、禰宜座一殿自東第二柱本敷之、東上北面、小文高麗端疊五帖、宮半帖敷之、勅使獻杯一禰宜尙良、取瓶子三禰宜章延、陪膳役人延行神主、尙政神主、一禰宜孫子正親正獻盃二禰宜泰氏、宮司獻盃四禰宜氏棟、四姓副使并宮司陪膳、地祭物忌父在言、大物忌父副包延、宮守物忌父副盛重、地祭物忌父千與元等勤之、本職官符權禰宜大內人等可令參勤之處、不參之間、物忌父等勤之、尤可有其沙汰者也、御酒三獻之後、拍手一端、其後於一禰宜獻盃座、神宮條條要須注進解狀於天被進於勅使、其後勅使御前饗膳、陪膳役人、一殿後戶江直取出天賜雜色、不及手長役、四姓副使并宮司者、直會之後退出、家子一人、其座、主神司殿東乃北間、小文高麗端疊一帖、在獻盃疊、小文高麗、獻盃五禰宜經有、陪膳權一行象神主代守直神主、延良神主一禰宜孫子、兩人共束帶、勤之、前驅二人、其座同殿西間南、東上北面、紫端端疊二帖敷之、獻盃陪膳荒祭宮大內人宗千與、同宮大物忌父清光勤之、但一殿饗膳同時沙汰也、但主神司殿東南北ニハ坊領ヲ引廻、

後、列立石壺ヲ立去天、東松本仁令休息給之間、正親中臣忌部卜部等同不列立、大司少司計列仁立、仍大物忌父與彙神主、取錦綾送文進宮長、則宮守物忌父忠村、計見員數、其後大物忌父與彙、自宮長錦綾送文於取之後、地祭物忌父在言、自幣神部之手請取、藏人所送文渡大物忌父與彙、同又進宮長、件送文於渡二禰宜、迄八禰宜、加一見取渡之後、又迄二禰宜、取上之後與彙取之、物忌父忠村取之獻之、讀合ノ役人氏繼神主、仍進參天一御辛櫃前仁向比讀合、又別紙御劒送文、幷荒祭宮被進御神寶送文等同所令讀合也、畢之後、本宮目代常政、請取彼送文、物忌父等相共一々奉計見知、其後御玉串奉獻如常、御馬飼內人二人著褐冠、請取御馬、御辛櫃者、自御輿宿前、清酒酒作內人等奉持之、一參列次第、前陣禰宜、次宮司、次一二神馬、次錦綾案、次御神寶、次御辛櫃、次三色物忌父等參、次勅使四姓官人被參列、勅使著座於石壺、但其石壺八重疊東端南方江三尺七寸計去之新造之、四姓氏人宮司禰宜同列著石壺、錦綾案者、八重疊奉立中心、一二神馬、御辛櫃者、八重疊東玉串御門妻仁奉引立舁居、忌部者不著座石壺、直蹲踞幣案前、中臣進參、於詔刀石壺讀上宣命之後、歸著本座、忌部同著版位、其後御玉串行事之儀式如常、其後鎰取內人案求取御鎰櫃封、開御鎰櫃御封之由申之、仍一禰宜捧持正殿御鎰參列於內院、禰宜東上北面仁蹲踞、宮司西上北面仁蹲踞、御辛櫃者、舁居御橋東妻、錦綾案者、御橋西妻仁立之、于時鎰取內人進參天取正殿御鎰封、於大司前、開正殿御鎰御封之由申之、其後一禰宜參昇、大物忌子御橋昇殿如件、仍開御戶、先拜見殿內、其後一禰宜可參禰宜之由、付其祠並參御橋左右、六禰宜氏成神主者、自地下奉開御戶之由、爲被申事由勅使江參、歸參之後、先錦綾八段奉納之、其後宮守物忌父倚國神主、請取藏人所送文奉始自金銀御幣等送文次第執進之、奉納畢之後、奉差堅御鏁、禰宜列居於本座、鎰取內人正殿御封畢之由申之、其後退出於八重疊西、宮司禰宜對拜如例、面面著座石壺、鎰取內人御鎰櫃御封畢之由申之、其後拍手兩端、其後勅使宸筆宣命笏仁取副天、御拜四箇度、拍手兩端、又御拜四箇度、拍手兩端、但後兩端手被略之、其後守勅使之命、一禰

已上各大褂一領

六位權任禰宜一人　季元〈褂一領〉　玉串大内人三人　季晴　彥雅　助時〈各單衣一領〉　宮掌大内人三人　明遠　高重　季成〈各單衣一領〉　大内人一人　親任〈單衣一領〉　内物忌父九人〈各絹一匹〉　物忌子等三人〈本注一人、仍給單衣一領而已、申今三人、仰可給匹絹了、〉　館母一人〈單衣一領〉　雜役三人〈各絹一匹〉

已上大褂六領、袴一腰、褂十二領、單衣九領、絹九匹、宮掌并共侍等取給之、

次禰宜等起座列立、僕以下出北戶揖、禰宜退出了、次參内宮、至御裳濯河行祓、自餘次第大略如前、但玉串取左右手、又置之作法、頗違外宮、宸筆宣命讀了復座、奉拜之後、一禰宜之信基進來、給件宣命可燒者、信基取之破却、燒火於神前燒了、次倚荒祭御社遙拜石壺奉拜、〈同前〉僕問云、可參彼御社否、禰宜云、前前使未被必參、但前左兵衞督〈經成〉所被參也者、依多例不參之、次著直會殿饗膳如前、〈件饗居飯〉二獻了、〈四位禰宜等勤役送事、僕雖仰不可然由、所稱先例也、〉次給祿禰宜如初、〇中略　次退出、途中已及秉燭、宿離宮院、外宮宮司一人來向、令授可敍同階申文、

〔正應六年七月十三日公卿勅使御參宮次第〕勅使從二位行權中納言藤原朝臣爲兼、王從五位上行正親正兼重王、中臣從四位下行神祇權少副大中臣朝臣師世、忌部從五位下行神祇權少副尙孝、卜部、大司長藤、少司國世、當日未中剋許、參著於二鳥居、在御麻御鹽湯如例、祇承宮掌大内人、俊職神主、忠賴神主、親政神主、〈代〉憲安神主也、但上座二人束帶、

勅使以下列參於玉串行事所、對拜如常例、幣錦綾、一二神馬御唐櫃等、玉串行事所石橋下壇南北奉昇居、禰宜一尙良、二泰氏、三章延、四氏棟、五經有、六氏成、七成言、八氏尙、勅使御手水役延行神主、尙政神主、〈一禰宜孫子、兩人共束帶、〉上座北、〈取紙、〉次座南、〈取杓、〉但南爲上之處、今度令參差、次正親以下手水役、御鹽湯内人則宗、山向内人淸光勤之、勅使御鬘木綿進、冠巾子被結之、但於先例者、御神寶送文讀合以後、獻鬘木綿之例也、又勅使列立石壺者、四姓官人石壺南一拘置作之、爰勅使獻鬘木綿之

東帶、先於宿所、招卜部讀祓詞、凡每度進發之時所行祓也、雖非例爲愼所爲也、次相具宮司三人大宮司公俊、權大宮司信通、少宮司行則、并使使參行、此間雨霽、小選天晴、古老者謂之清雨云々、先著宮河、乘舟渡了祓之、次參豐受大神宮、至第一鳥居下、帶劍之人脫之也、下馬、先御馬神寶等、使使次第行列、至第二鳥居下、衣冠者二人雙立路頭、一人把大麻、入內之豐執大麻懸口氣、一人灑鹽湯、次至御輿宿所、神主五人件神主等著木綿鬘、袍上著白絹襷閇、列立、北上東面、使使相向列立砌下、西面北上、次僕進手水石壺跪置笏、他人措笏、洗手、神人儲之、左廻立本所、次使使同前、次僕進傍著木綿鬘、敷半疊爲膝突、進跪置笏、拍手結冠纓、又神人授之、次中臣同前、次齋部給木綿鬘太絲等、倚神寶所、次第計渡、但以送文授一神主令勘合之、次宮司禰宜次第倚玉串所、各把榊一枝、執膝突插笏、拍手給之、右手取之、神人授之、南行列立道左、北面東上、次爲先御神馬、例幣取吉表覆爲、宮司禰宜中臣次僕、次王忌部卜部等行列、入第三鳥居、次入第一門、各居石壺座、件座左右相分、左宮司禰宜、右中臣以下、僕座少進在中央、次中臣起座、傍前石壺、在路右、讀宣命、跪居插笏、了復座、次一禰宜召人、姓名、稱唯出來、把宮司玉串、次一人出來、把禰宜等玉串、置第三門腋、次神人進出、申開御鎰封之由、御鎰櫃居案上、立第二門外、次取封破之、次取御鎰參入門內、隨宮司禰宜參入、奉納御幣神寶已了、少女一人在御戶外、所謂子等是歟、此間僕進自本座、徒跣、讀宸筆宣命、了復座、宮司禰宜復座、神人封御鎰之封了、僕尋問神人云、此拜如何、各陳云、四度奉拜拍手、又四度奉拜拍手者、重問之、如式者、共再拜兩段、短拍手兩段、膝退再拜兩段、短拍手兩段、一拜訖退出者、而件拜頗違式如何、答云、年來只如今申者、隨神人申奉拜了、次宮司禰宜使使共退、至多賀宮遙拜石壺、列立奉拜、件拜如前、又違式條、件石壺前立榊、仍解所著木綿鬘懸之、他同之、次著直會殿、入自北戶著西腋座南面、他使入自同戶著東腋座、禰宜以下入自南面座、禰宜等脫白袍著座、結黑木爲机、結同小宮盛菓子物、共人前初月居、他食云々、第一禰宜重來、盛酒授僕、他盃授之、盃酌了、給祿禰宜以下、尋同祭主井宮司可預祿人數所給也

正員神主六人

一禰宜從四位下常季大褂一領、袴一展、　二禰宜賴元　三禰宜賴房　四禰宜康政　五禰宜廣雅　六禰宜雅行　已上五人五位、各大褂一領、今日不參禰宜料加給也

權任神主十一人　康任　貞雅　興氏　常男　常任　安晴　孫常　良雅　行康　忠高　兼房

（南面、相去四五尺、）使使列立其西、（南面、相去四五尺、）自餘儀大略同上、但玉串取左右手、（各取二枝、）奉幣奉拜拍手儀等、皆同上、宜祢宜命讀了復座、奉拜舉目、一禰宜、禰宜進來、給件宜命云、可燒之、禰宜破之、於神前燒之、次退出、

次參荒祭宮、奉納餝子形等、奉拜拍手如神宮、事了著直會殿、

一獻（一禰宜勸之、二禰宜執瓶子、並如上、）三獻（每度勸盃下著、有飯之故也、）

此間賜祿、

四位禰宜五人（正四人、權一人、）各掛袴　五位禰宜卅四人（正二人、權廿二人、）各掛　宮掌大內人二人（五位）各掛

官符權禰宜一人　宮掌大內人三人　玉串大內人一人　內物忌父十一人　館母一人　山向內人一人　御鹽湯內人一人　鎰取內人一人　荒祭宮物忌父一人　以上廿一人單衣各一領　物忌子等三人（大物忌子、御炊物忌子、御鹽燒物忌子、）　荒祭宮物忌子一人　以上四人各疋絹

禰宜等拜大神宮同上

若入夜者、內人四人著衣冠秉燭、大宮司獻松、次歸離宮、

過豐受宮前之間可下馬、

十三日

供給大宮司進例祿、

絹廿疋（留之、但此中八疋給從者、）　牛二頭（返之、但經信卿有所望留之、）

給大神司祿、

大神司（女裝束一具）　權大宮司　小宮司（以上襖各一領）　主典（單衣〇又見江家次第）

〔大神宮諸雜事記　二〕永承七年十二月五日、勅使參宮、參議從三位行右衛門督源朝臣經成、（但除辨進使列宣）王致輔王、中臣散位從五位下大中臣朝臣親宣、令奉給神寶御馬等、具不記、

〔經信卿記〕承保元年六月廿八日甲午、今日有伊勢臨時奉幣事、　七月三日己亥、巳刻沐浴（宮司供例儲之云々）

机、（置御幣）忌部相副、（立案後扶案歟行）次中臣、次王、次卜部、次使、

延久六年使參議在中臣次、

治暦二年使等次第行列

長元三年中臣卜部公卿王云々

入於第三鳥居、立幣案於第二御門外、忌部屈身跪地、如捧案脚祇候、又引立御馬、禰宜等候第三御門內西腋庭中石壺座、（東上北面）公卿座在王座前、（中跪）云々、次中臣進著前石壺座左路右、讀申宣命、跪居插笏、了復座、次一禰宜召人、令立宮司禰宜等所持之玉串於御門腋、（二人出來、次第取之）次內物忌進出、申可開御鎰封由、（御鎰案立於第二門外、）次開辛櫃取封破之、次取出御鎰、參入第一門內、宮司等率禰宜持鎰、先御殿、子等物忌以鎰指入鎖者、次一禰宜開之、次宮主禰宜一一參入、奉納御幣神寶了、此間使公卿進自本座、（徒跣）讀宣命、了復座、神人申封御鎰由、封了拍手、次四拜又拍手、此次申私祈、次宮司令納鎰、次使以下次第退出、參高宮、（經信記遙拜）再拜拍手、（經信記不拍手、泰憲記拍手、）次著直會殿、（入自北戶、著四拔座、南面、）衆居使以下酒肴、結黑木為机、（以檜木葉付机等脚、撒葉數而）作小宮盛菓子肴物、東擬殿王以下座、更南折設宮司座、（西面）南砌下設禰宜座、（西上北面、經櫃記不居饌、脫白袍著口口）共人在地、勸盃、（一禰宜勸之、二禰宜執瓶子、）二禰宜以他坏飲之、更以他坏盛之授之、二三獻亦如此、

次給祿

四位禰宜二人（各白褂一領、袴一腰）　五位禰宜卅三人（正四人、權廿九人、）各褂一領　官符權禰宜三人　玉串大內人三人　宮掌大內人三人　大內人一人　番檢大內人一人　內物忌父九人（大物忌父三人、御炊物忌父三人、御鹽燒物忌父三人、）　館母三人　以上二十三人單衣各一領　物忌子三人（大物忌子一人、御炊物忌子一人、御鹽燒物忌子一人、）　高宮物忌子一人　以上四人各疋絹　以上隨一禰宜申、令頒給之、

次禰宜起座列立、使出自北戶、揖禰宜退出、此間禰宜等標頭奉拜神口、次參大神宮、至御裳濯河行祓、於第一鳥居外脫履、於第二鳥居下用鹽湯大麻、參宮儀如上、但參進次第、御幣禰宜等列立、御輿宿南方、

奉幣式

申也、而余一切不可有其憚由所仰也、只十二月可被行之由仰了、　十二月廿日癸巳、公卿勅使進發、余參神祇官、上卿内大臣、勅使實房卿、　廿四日丁酉、此日公卿勅使參宮日也、仍余殊潔齋沐浴解除、又著衣冠降庭遙拜、此事雖非先例、依有所思所爲也、　廿七日庚子、公卿勅使歸參、

〔閑窓自語〕公卿勅使例幣等再興事

靈元院、天和二年正月に、去年の冬、内宮火事により、公卿勅使左大辨宰相宗顯朝臣を立らる、此時も正保のあとゝて、（〇正保四年九月例幣再興）宣命御草ともおほんみづから遊ばしけるとかや、曾祖一位殿、（〇資廉卿柳原）權大納言にて傳奏せしめ給ひける、其後又櫻町院元文五年三月、代始の公卿勅使、新宰相中將重熙朝臣をたてられて、これは代々の式にとおぼしおきてたりしに、絶にけるぞほいなくおぼゆる、

〔西宮記臨時七〕伊勢使（〇中略）

十二日

供給沐浴祓、就路、伊勢祇承於下見橋退出、（渡櫛田川、大神宮檢非違使可祇承、）多氣川祓、（大神宮司給祓物、）下樋小川、式云、停鈴鉾、（神領與國之界也）件川在齋宮東、著離宮、（以殿爲宿所、）供給湯殿東帶進發、宮司三人先行渡宮川、（乘船、經信記曰、自此不進前、）祓、（御幣御馬次第整立、宮司獻祓物、卜部獻麻、宮司獻大麻、）參豐受大神宮、至第一鳥居下、（帶劍人者脱之、此内弓箭不入、大刀不著、）忌部等分取外宮御幣神寶御馬、令持神部忌部相副、至第二鳥居下、内人二人、（一人持大麻、一人持鹽湯、著衣冠、）灑鹽湯獻大麻、意氣舉進入、禰宜等五人東帶、（禰宜上著白生絹闕腋、著木綿鬘、）列立於御輿宿前、（北上東面）使々相向列立砌下、（西面北上）内人舁高机二脚立前、忌部置御幣等於机上、禰宜謹請幣物神寶、（忌部沙汰也）次使進跪石壺置笏、（或插之、内人執手木、）中臣以下次第洗手、左廻復本列、次中臣給木綿鬘、（先是其所鋪半帖爲膝突、）跪拍手、取之結付巾子、（神人給之）次齋部進拍手、給木綿鬘太麻等、倚神寶所、次第計渡、（以送文授神主）次宮司禰宜等次第就膝突、把榊一枝、（是所謂玉串也、神人授之、禰宜等次第把寶木、轉上不把、替左右手、）南行列立道、（北面東上）次神馬（一足）神寶次第如例、（例幣者去爲）次進列、先禰宜、（上臈爲先）次宮司、次神人二人（内人）舁

之時、（參覲）次御圓座、（御束帶、依可有御拜也、）次予參進候第二間簀子、仰御馬可引之由於行事藏人、次自東中門引入御馬三匹、（左三、右一也、近衞舍人、御隨身長等相交、頗別樣、）引之、三匹之後、如本引出了、次入御、次予退歸、次召勅使於御前、仍更卷庇御簾、撤御圓座、即出御御座、（御束帶、）予兼候簀子、有御目、仍出殿上戶、召勅使、（跪居座上、只無色也、无別詞、）出小板敷方、次勅使出上戶參進、當御眼路跪、准第一間簀子也、此殿无孫庇之故也、可候年中行事障子下、然而此內裏其程相謀之故如此、主上御目勅使、深揖微音稱唯、參進跪御座邊、膝行昇長押、指笏給宸筆宣命、（今封給也、）拔笏取副宣命、逆行候長押下、被仰御願趣歟、次勅使左廻歸出殿上、被候端座、勅使招予、進跪座上、被奏云、宸筆宣命可燒歟、可持歸參歟、分明不承、仰、重可取御氣色者、予付內侍奏聞、仰云、參宮之後可燒也者、予歸出殿上、仰其旨了、勅使退下、於弓場殿懸宸筆宣命於頸、（生絹袋歟、懸之、表衣下、下重上云々、）著陣座、先是御馬御覽中間、右府於陣令行隆被奏宣命草、（无辭別云々、尤可有其沙汰歟、職事可申行也、近日天變地妖頻云々、件事等相尋可被載事歟、）良久右府就弓場、被奏宣命清書、行隆奏之、返給右府、又被奏使王申御馬之由、行隆又奏聞、仰聞食了之由、次右府被向神祇官、勅使相次被向了、於南殿可有御拜也、仍差遣騎馬小舍人於神祇官、幣發遣之即馳歸、可申其旨之由仰含遣之、辰終小舍人馳歸申云、幣早以發遣者、予申事由、頃之出御此殿、无南殿、御殿爲兼用之、仍二間東一間上御簾、立廻大宋御屏風、巽方頗開之、其中敷小莚二枚、（即坤妥）其上敷御半帖、（高麗、）入御御拜座、（不候御草鞋、爲同殿无其程之故也、又不候御劍、）予候御裾、獻御笏、（藏人兼持候、乍置蓋自御後右方獻也、令取御笏御、予持笏蓋退候、須返藏人也、然而依便、爲早速也、）引塞御屏風御後、次御拜、（兩段再拜、先二度、後二度也、）了令鳴御笏御、予開御屏風後差寄、御笏筥給之、返給藏人、次入御、予今日堅固物忌也、然而猶居不穩便、仍參內、還可爲攘災之謀歟、但今明夜殊可愼、仍不可參內、示行隆了、又內々申女房了、遂電退出、于時巳始刻也、於二條町逢勅使自神祇官退歸精進屋、（四條□也、）於西洞院又逢上卿、但各有相違也、參宮來廿五日云々、仍今日可著甲賀驛家之故、殊被急也、歸京廿八日云々、今夜於前庭可有御拜、予不參上、使進發儀可尋記、

〔玉海〕文治二年十一月十三日丙辰、親經申云、公卿勅使月事可相計之由有院宣、（十二月無代始例之由、人々傾旨、親經所）

座是例也、左衛門督欲出嘉喜門、余示令出東福門、勅使出待賢門之後、余出自嘉喜門、(兩長從)歸土御門、

〔山槐記〕永曆二年(○應保元年)四月廿二日甲子、今日可被發遣公卿勅使、(當今(二條)御初度)仍去廿日夜可幸大內、今日可幸入省之議也、而大內有五体不具穢、(子細見廿日記)仍无自里內當日臨幸之例之故、行幸停止歟、日出之程參內、先是右大臣(○右大將上臈也、藤原公能)被候仗座、又勅使右衛門督清盛卿、(參木檢非違使別當也)予(○藤原忠親)參上、卽參內候殿上、(依座)神寶夜半許自行事所(左近府)寄渡了云々、弓場殿代(中門廊內方也)敷葉薦昇之、唐櫃等行事藏人治部大輔行隆、左兵衛少尉平信季、(本奉行二臈判官平時盛也、而行向行事所、其次休息大內藏人町之間觸穢、仍改定云々、)出納右衛門志中原清重、(一臈)小舍人守時也、行隆奏神寶持參之由、次庭一二間(大炊御門北、高倉東、御所殿南面、西禮之儀也、)掃部寮敷筵、(奥端相並、東西行敷之、西立許歟不敷薦、爲往反之路也、)第三間中央供新厚圓座一枚、(可當內宮座歟)其御座依觸大內穢、以夜御殿御疊二枚敷之、(无御茵御硯御劒等、皆遷渡大內了、仍被申大殿、未獻之間、只敷御座許也、神寶御覽了之後被獻之、御茵古物、御劒蒔獅子(ヒメフカメ)紫革袋東、御硯筥秋野蒔繪錦、御硯紫瓦、筆斑竹、御帳御帳等也、此物以行隆去夜被申大殿云々、)母屋御簾、(尋常儀不然事也、大床子御帳帷以下御物、不殘一物皆渡大內、見苦之故、以行隆被申大殿、可被下御簾之由令申給云々、)反內燈爐綱又外同之、(大內之儀、孫庇不反、事不可反外綱歟、)次行隆及藏人等、昇神寶相置之、其次第奧筵內宮、

第一御幣劒(○中略)

已上居了、行隆申事由、先是供御湯、(獻御膳)令書宸筆宣命、大學頭範兼朝臣草進、(不付職事、直奏覽歟、如何、去十九日詳召仰、子細見件日記、)內侍(少納言云々)一人、早以遣神祇官了、是爲令褁幣也、(八省有穢之故、於神祇官褁云々、)於瀧口一人爲公役相副云云、卯始出御、(御直衣、御圓座也、)予候簀子、(此殿无孫庇之故也)伺天氣、有御目、予進昇一間、自筵二枚之間東行跪、御鏡筥下蓋經叡覽、(蓋ヲ西方ニ立之樣ニシテ入、帷ヲ引ノケテ、御鏡筥ノ片ヲ引上テ、向御前、僅ニ天覽、乍本所如此覽也、如元覆蓋了、)次覽幣筥、(如御鏡)次自本路歸出、跪長押下又覽外宮御鏡幣筥、一同內宮儀、次被仰云、此バカリ歟、予奏云、獅子形覽事モ候、有御目、仍進寄取件筥蓋、乍本所御覽之後、覆蓋退候簀子、次入御、次撤神寶、五位(左衛門權佐爲親、藏人治部大輔行隆、侍從有房等也、)六位役之、相副於小舍人送神祇官、(於八省可被發遣也、而應天門外有死人頭、被問外記之處、或時被用穢、或時不被用之由、以師光昨日奏之故云々、)相副目錄四通、(一通內宮、一通外宮、一通荒祭、一通總目錄云々、)次可有御馬御覽、仍垂庇御簾、供圓座於第三間、(可用大床子圓座也、然而渡大內了、仍用神寶)

かはして求められけれど、日次などはたがひてや侍りけん、父の大相國、○源雅實其時右大臣にておはしけるが、この事を聞れて、家つぐまじきものなりとぞ宣ひける、保安三年正月廿三日に、大納言にはなられけれども、四月にむねを煩ひて、父のおとゞにさきだちて、八日にうせられにけり、おとゞの案にたがはざりけり、中院右大臣宰相中將にて侍けるぞ、家をばつがれける、

〔台記〕康治二年十二月九日辛卯、依重仰、昨日承之、巳始參內、依公卿勅使立也、每事存例、於陣座與勅使侍從中納言成通言談、未刻師能來召勅使、勅使參著殿上、參進、頭中將承仰重召之、使入上戶、跪□□、依御氣色、近跪、長押下、搢笏昇御座南間、給宸筆、退下、拔笏退出、予○藤原賴長相共參八省、先例卒參、余耻无從、自開路參、每事如常、但東廊上座北、設勅使座、西面、依其間近使乍坐給宣命、云々、先例經柱外出東福門、余還北廊、使出門、神寶持渡神祇官之後、余退出、　十四日丙申、今日勅使參著伊勢云々、

久安四年四月廿八日乙卯、依公卿勅使事、午刻參內、開卜串奏宣命草、此間詣大后御方、清書、其清書遲引之間、勅使左衛門督公教卿參入、賜宸筆宣命、先參八省、未刻奏清書參八省、事了參近衛、

仁平元年三月九日庚辰、今日右大臣、○源雅定爲勅使下向伊勢、大相國○藤原實行今曉免宣命內覽、　十四日乙酉、今日勅使右大臣參大神宮云々、自九日至今日、天子○近衛遙拜云々、

久壽元年十一月七日丙辰、巳刻參內、依公卿勅使也、先是勅使左衛門督重通卿參候、余仰大內記遠明、進宣命草、卽使遠明內覽、歸來進射場、奏聞返給、復座、外記申使王申御馬之由、清書遲引、頻加催促、及未刻忠親來召勅使、勅使參上給宸筆、依御物忌垂御簾、勅使於簾外賜之、□□清書卽進射場奏聞、依被免不內覽、此次奏使王申御馬之由、返給之次、忠親仰聞食由、卽伴左衛門督右大將參八省、左宰相中將師長、參會待賢門、余及三卿著北廊座、依地濕□辨等不出立、先召辨之處、申裹幣之由不參、仍召外記問使參否、申參由、仰給御馬於使王之由、頭之權右中辨光房朝臣參來、問幣物具否、申裹了由、卽率勅使移著東廊座、余西面、勅使南面、初勅使座西面敷之、余令改敷、兩長、○藤原兼長、及師長、並賴長子、留北廊、大內記置宮於座前、中臣等進取幣物了、余賜宣命於左衛門督、依座近上臈勅使俱不動

所召在良開之令讀、此間上卿參入、右大將參宣命草、余清書宸筆宣命、此間宣命清書持來、見之返給、清書余封之參御前、主上此間令著束帶給、余候御前、御裝束了出御書御座、此間頭中將通季宣命清書奏了、余宸筆宣命讀申、讀了仰頭中將通季令召使源中納言能俊參入、御殿末申角ニ候、主上目給能俊、進參給宣命、主上仰詞不次、給宣命退之後、余於殿上內內仰詞委細有次第、使上卿參八省、暫後有御拜儀、尋常儀、於南殿有此事、而此亭六條殿南殿清涼殿相兼、仍上廂御簾、日上東垂母屋御簾、南殿之御裝束樣、立御屏風、御拜儀如常、程遠時、近衞次將取書御座御劍前行、而今度无程、母屋御簾ヲ隔タリ、仍不取御劍、御拜了還御、余退出、　五年三月十五日癸卯、公卿勅使進發、卯刻許、著衣冠參御前、而間頭顯隆持來宸筆宣命草、作者在良朝臣開見返給了、卽持參御前、今度御筆ニ書給、其間數刻、但其運神寶於書御座、五位六位舁送、宣命御清書、御覽神寶了、御覽御馬、官人引之、三疋也、內宮二疋、外宮一疋、中間垂御簾、御覽了、御馬御覽以前取神寶御覽了間、頭中將候簀子、余下宿所、爲攝政時、著束帶近候、成人御時、御覽神寶了後退出、召使於御前、儀不見、仍不記、如先々云々、南殿御拜之間、不候御共、攝政時皆候、今度不候也、神寶御覽之間、左大臣著陣、奏宣命清書、左府○源俊房清書ヲ奏間、使王御馬申事ヲ不被奏如何、參八省儀不見、仍不記、於南殿有御拜之間、有思所不參、及晚頭退出了、令封宣命給、體元懸紙、如天文奏、封之、其上引墨、爲攝政時又如此、賜宣命於使、使者仰詞、其詞云、能久申天奉禮、於殿上攝政仰之、成人時、主上仰給、使右府、○源雅實

〔中右記〕元永元年四月九日辛酉、今日伊勢公卿勅使被立、使右衞門督顯通卿、奉幣上卿內大臣、○藤原忠通行事右中辨雅兼朝臣云々、今日殿下不令參內給、御所勞也、待賢門有穢氣也、上卿以下出入從陽明門也、今朝神寶神馬御覽、申時許、八省事了、使退出、少將爲內府御共參內也、　十日、公卿勅使今日返留勢多驛、依參宮日延也、

〔古今著聞集一神祇〕元永元年四月九日、顯通大納言、中納言ゑもんの督にて、公卿勅使承りて下られけるに、いづれの宿とかやにて、宸筆の宣命をとりおとしたゝれにけり、いそぎ人を返しつ

永實令清書、此間覽神寶、依御物忌、上東妻戸御簾、次御馬御覽、（内宮二匹、外宮一匹、）勅使大納言宗通、依召起北陣座、昇殿上、參御前、賜宣命退下、（依御物忌、入自東向妻戸、垂御簾也、）左大臣北陣座相具、於中御門東洞院乘車、於待賢門下自車、參八省、奉幣日引率上官時不乘車云々、仰云、著北廊座間、於車者可立蒼龍樓北廊也、仍召御前、仰云、左府著座、大納言不著、召辨外記、問申具否、次著東廊座、（大臣勅使共西面座）次使等取幣物退出、次召勅使給宣命、勅使經壇上柱外、出自東福門、内記給者、此後大臣召召使、令見幣物勅使出門否、良久申出由、經本路被退出、（壇上柱外）辨以下平伏、大臣乘車、經春日小路、自待賢門退出、上官退出後、下官退出、勅使雖外宿參御前、閏月例今度始之、宣命辭別、大臣承仰下知内記云云、（○又見知足院關白記、大神宮例文、十三代要略、）

〔知足院關白記〕永久二年正月廿七日、今日公卿勅使立日也、早旦於宿所沐浴、午刻許余著衣冠、在良朝臣宣命持來、余書之、清書了、余著束帶參御前、此間主上（○鳥羽）御湯殿也、令上給、主上著直衣、御覽神寶神馬等、了暫後内大臣（○源雅實）宣命草内覽、可直事奏院、（雅兼爲使）直了二箇條也、奏清書了、主上著束帶出御晝御座、余候額間、使參進給宣命、其儀如例、次第給了退出、余於殿上仰詞幷參著日、仰使、余下宿所、此間御拜云々、職事等不告來、奇怪也、然間已及秉燭、依有東庭拜、余候御共、御拜了下宿所、待宿、使別當宗忠卿、先々檢非違使別當勤此役云々、（○又見中右記）

〔中右記〕永久二年十月廿一日、今日稱按察大納言之女子之人、今朝卒去云々、件人近日可被奉伊勢公卿勅使之由有風聞、不便歟、件勅使已留了、源中納言云々、予七日服、仍籠居、　廿九日、民部卿參仗座、被勘伊勢公卿使日時、（來月五日立使、九日參宮云々、使源中納言能俊、）　十一月五日、今日伊勢公卿勅使被立、使源中納言能俊卿也、奉幣上卿右大將、（○藤原家忠）行事左中辨顯隆、宸筆宣命式部大輔在良朝臣草之、殿下（○藤原忠實）令清書給云々、

〔知足院關白記〕永久二年十一月五日丙子、今日公卿勅使進發日也、仍密々著束帶、乘網代車參内、先參御前、神寶御覽、（主上（鳥羽）御直衣、）次御馬御覽、三廻之後引出了、此間在良朝臣（式部大輔）宸筆宣命持參、余在宿

之故、必可被尋事也、又路間布衣如何、命云、偏衣冠也、但於宿所行向問所之時者、著烏帽子也、又參宮日可用有文帶螺鈿劒歟、命云、昔ハ蒔繪劒也、院〇白河御時、故六條右府、被勤仕此使之時、被用有文帶螺鈿劒也、其故ハ賀茂祭使、臨時祭使、平野使、皆所用來也、何況公卿爲勅使、參大神宮時、尤可用有文帶也、此事理可然、彼人其後被昇大臣也、依爲吉例、其後所用來有文帶也、又少將宗能、侍從宗成、檢非違使明兼可召具也、而可奏事由歟、命云、尤可取御氣色事也、又可奉私幣歟、命云、全不可然、只能奉祈公家之後、心中所思一旦祈申許也、〇中略又被命云、神祇官人、幷持神寶衞士等時々可送物也、但强又不可然、只人々用意也、又出門之時可有反閇歟、命云、殊無件事也、只以陰陽師解除精進之間、毎日湯口幷祓、可有事也、昨日按察使被敎云、參宮之時進退之間必可左廻者、此事如何、命云、此事不知、我敎度參宮之時、只隨便宜所歸也、又被命云、奉使之日、使必參內侍所、勅使無障可參宮之由可祈申者、此次萬事有被示事等、又敎命云、入宸筆宣命袋、以生白絹、以清淨女令縫、路間入宣命懸我頸、全不可忘却、毎宿所儲懸枕上方、常不可忘心事也、又被命云、本府隨身尉志府生番長、令著褐伊知比歷巾布帶、乘移馬可具也、但從河原可留歟、路間相具可在人心也、又命云、奉此勅使之人、非公事外强不出行也、又命云、路間送儲物之人々、隨品便可給祿也、或馬、或被物單衣、如此類可隨體也、又命云、伊勢國中、國司力不及、仍事不叶也、早私可語人々也、近代之說也、又命云、別當爲使之時、可具檢非違使二人也、即申云、今度一人所具也、來月五日依可有行幸院、强不及二人也、就中近日檢非違使等、或所勞、或重服、仍人數不足之比也、又敎命云、持神寶衞士等被下之間、或奪取往反人物、或推入路次人家、依如此事、濫行無極、常可加制止也、又被命云、被下向之間、可無事之由祈請神社、密密可祈諸寺也、就中參宮日儀式、全無雨儀、仍可無風雨難由、殊可祈請佛寺者、又此間塵事强不沙汰、有急事時者、檢非違使立門前、申子細許也、隨此說、從一日令仰檢非違使了、仍强無所來觸也、

〔長秋記〕永久元年閏三月十六日、伊勢公卿勅使、巳剋左大臣〇源俊房參陣、付頭辨被奏宣命草、召大內記

殿上、次々事如去年、中納言云、今度同爲使、仍如去年可被行由仰了、余出東三條立神馬、須御拜後退出也、而及秉燭、仍急出也、則歸參侍宿、今夜御拜戌時也、今日勅使按察中納言〈○藤原宗通〉也、

天永元年十二月七日辛丑、今日公卿勅使立日也、辰刻沐浴、著束帶、參御前、御覽神寶、御馬同御覽、〈儀如常〉今朝召敎宗仰宣命趣、於宿所草之、神寶御覽之後、下宿所、宣命淸書云々、了以宣命參御前、其儀如常、民部卿〈○源俊明〉給宣命退了、上卿內府同奏宣命參八省、今日依御物忌、於石灰壇有御拜、及秉燭、於南庭御拜、余同候御共、

〔中右記〕永久二年正月十五日、晩頭行向按察大納言〈○藤原宗通〉許、被問伊勢公卿勅使事、三箇度被參之人也、被談云、只以信心可爲先也、路次國々儲、近代全不叶、就中伊勢國內儲、國力凡不叶、仍只語私所領人々令供給也、又共人不可及數多、凡以人數少、是賢說也、但武者必所相具也者、又度々日記被及也、秉燭以前歸了、　十六日、未時許、民部卿〈○源俊明〉來給、爲一家長之上、此人爲檢非違使別當時、二箇度被勤仕伊勢勅使也、仍爲思吉例、尋申不審事等、先衞府督、道間可著野劒哉、命云、可然、但依屈強不可然、可有意事也云、加之柏夾可在歟、命云、上達部遠行之時殊不見、不可然、路間只垂纓也、云可忌深沓哉、如何、命云、不可忌、道間所著用來也、但近代用藁深沓、能說也、又可用竹加宇架歟、命云、不忌事也、但近代人用竹加宇架云々、又隨身四人、路間著布衣乘移馬也、而件布衣之色如何、命云、用青丹可宜也、又參宮之日、火長隨身如何、命云、火長可用伊知比歷巾布帶也、隨身ハ褐布、伊知比歷巾、狩胡籙也、又被敎云、於離宮留檢非違使幷火長等可參宮也、又給祿於禰宜時、前駈可著束帶歟如何、命云、強不可然、只布衣常事也、但近代前駈一兩人令著束帶、相加布衣人令取祿云々、又祿法中女裝束三具、或一具者如何、命云、一具ハ必可給大神宮司也、又近江伊勢國司各一具可給也、近代於國司料不給、國司不來之故也、但雖不來、給近江國司目代云々、若國司來時ハ、必可加給馬者、又禰宜祿法如何、命云、每度人數倍增云々、仍奉使人必尋遣內外宮一禰宜、隨注上可給也、昔人數甚少、近代權禰宜員數頗增

又入夜於御殿東庭有御拜、(勅使參宮來十六日云々、此間每夜御拜也、)使內大臣也、仍上卿ハ上﨟之大臣、可被勤仕也、而左大臣有障、不被出仕、關白殿(忠實○藤原)依御忌月、不令奉行給也、先被相尋舊例之處、中納言奉行諸社奉幣之時、則爲其使、被准據彼例、今日內大臣使幷上卿被勤仕云々、(○又見久我相國記)

〔知足院關白記〕天仁二年三月八日壬子、早旦沐浴、召敦宗仰宣命趣、於宿所草之、余(忠實○藤原)見之、此間余著束帶參御前、神寶御馬等ヲ御覽、主上(鳥羽○)御直衣、次自下宿所自令淸書、(寬治四年例也、)淸書了封上、如天文奏、但無懸紙幷裏紙、封了引墨、草相具參御前、此間例宣命草、內記持來、見了返給了、例宣命淸書遲々數刻、內府(雅實○源)進弓場殿奏宣命、余見之返給、次主上出御晝御座、召使、(宗通○藤原)余此間候簾間、(此間奏草讀申、大略體也、淸書ヲ進、退候簾間也、依御物忌、參御簾中、使不讀、)使先參入、年中行事障子許ニ候、余仰可入簾中之由、使參入賜宣命、可有仰詞、而幼主(○御年七)不被仰、仍仰之、其詞云、能久申天奉禮、又來十二日可參著者、(カク仰ラルヽホド告也、)使退了、余出殿上、余教云、宣命ハ於社頭可被燒也、次內府參入省、(今日余不參入、寬治例也、)使立後、主上於南殿有御拜、其儀額間上御簾、頭中將取晝御座御劍前行、(有警蹕、)余候御後、(取御尻、)著御拜座、頭中將寬御劍ヲ授藏人、取御笏獻之、御拜了還御、余下宿所、今日儀如此、凡寬治四年十一月四日例也、童帝儀今度始也、戌剋許、於南庭有御拜、其儀頭中將取御劍、晝御座也、大宋御屛風二帖ヲ立廻、其內小筵二枚、其上半疊一枚、(向辰巳、)御屛風關同角、是如常儀、殿上人兩三人候御共、兩段再拜、(御笏頭中將獻之、)還御後、余下宿所、

三年二月二日辛未、早旦沐浴著衣冠、召敦宗仰宣命趣、(被草、)件趣、三合年上、公家愼、心柱顚倒之由上皇御愼、(此事有別錄、)草持來後、余令淸書而可直有所、仍先仰敦宗、參御前覽神寶、次御覽御馬二疋、(自院給車、一疋家御馬也、)神寶御覽間、主上直衣、余衣冠、余下宿所、此間敦宗草持來、余令淸書、無懸紙裏紙、加封、(墨引也、)著束帶、持宣命參御前、先著殿上、例宣命淸書頭爲房持來、余見了返給、(內府上卿、)余參御前、(今日御物忌、參御簾中、主上著東帶、御晝御座、)余候御傍、余仰頭爲房令召使參進、候年中行事障子許、余仰云、可參進、使參進、入自東一間、參御前、主上給宣命、使賜宣命退間、余仰云、能申天奉禮、(主上可被仰也、而幼主不被仰、仍余仰之、憚無極、雖然先例也、)使退了候殿上、余同著

處、藏人右少辨爲隆申云、予判所可書朝臣歟、將曹長名之間、暫以猶豫者、於例宣命者、不書朝臣之由示申、至于宸筆宣命者、依不披見、已以不審、參宮之後、悉可驗密勅、頃之右府奏清書之後、被渡八省了、次頭中將來召、予進年中行事北頭、應召、庇第一間褰御簾、進候南頭、指笏給宸筆宣命、仰云吉申（天獻讀）、微音稱唯、於宣命者、讀申之後、於寶前可燒也、同以稱唯退出、申斜渡八省、修明門外、召使四人來前行、次著東廊（右大辨候庇、又著東廊座、）先是於八省、宣命遲怠之由尋申右府（○藤原忠實）之處、宣命文依落失、忽書加間、自然致懈怠之由所被示也、次中臣（祭主親定朝臣）忌部□□卜部（神祇少副兼政）等給御幣、次上卿給宣命於予、予取之經上卿座前、出從東福門、給宣命於中臣、出昭訓門、經待賢門歸里第（二條京極）、辨以下御前相從（右少辨爲隆、少納言實明、大外記師遠、大夫史盛仲、官掌二人、召使四人也、）中門廊敷座席、辨以下給祿、（從領）一前驅諸大夫盆（○盃借字）役之、官掌以下給祿、（布）侍所司盆之、御前等次第退出了、脫東帶著衣冠、就道（車檳榔毛）左衞門督源宰相中將（顯雅）等相送（車檳榔毛）自餘殿上人諸大夫送人多々、抑本所存衣冠雖前行、布衣人後騎也、然而思失、不示其由之上、臨夜陰不整其行列、布衣衣冠皆以前行、意趣相違、忘却之所致也、於白河解除如例、（諸司設幄、神祇官役祭物、）送人々從是歸去、捨車乘馬進行、出會坂關之間、近江仕承來、亥終著勢多驛家、（國司設饌）事畢沐浴之後、子時許、以神祇少副兼政、於東庭解除、（○又見中右記、知足院關白記、）

〔中右記〕嘉承二年二月十一日、今日公卿勅使被奉伊勢、後聞早旦先於晝御座方、御覽神寶（色目如常、藏人仲光爲行事、）殿下著衣冠候給、於御殿東庭、御覽神馬三疋（頭中將實隆候簀子、不置移、不乘人、只引廻許也、）勅使內大臣（○源雅實）申刻許被參內、於仗座被奏宣命、（藏人頭道時朝臣奏之、先草奏、）雖當御物忌、勅使依召參御前、賜宸筆宣命之後、被參八省、奉幣行事藏人權右中辨爲隆、次第如例、移著東廊座、大內記敦光奉宣命、內大臣同爲上卿、仍取宣命出、於東福門給宣命於中臣使、（是新儀也、）出從昭訓門、此門外御前上官等、相儲前行、（少納言時俊、藏人左少辨雅兼、大外記師遠、大夫史盛仲、）但於二條京極精進所被止也、於件所改裝束被進發、已及夜陰、使立之間、依御物忌、於石灰間有御拜云々、

攝政殿仰如此

十一月三日　左中辨在判奉

謹上　左大辨殿

自筆
聞食了、然者早可被申其左右也、可令相待候之故也

十一月四日辰刻　左中辨在判

〔知足院關白記〕康和五年九月六日壬午、今日公卿勅使ヲ被立、左大辨基綱、卯刻許、以兵衞尉懷季、送馬於勅使許、則還來云、悅思了、巳刻許、持來宣命草、見了、召淸書內覽了、上卿權大納言家忠、今日物忌也、院〇白河御行鳥羽殿云々、不參間不委記、先例一人爲不合、仍昨日退出、有行幸入省時、必參候是先例也、爲攝政時參著、行奉幣事、是主上御代也、若候合時、雖非攝政、御覽神寶時候御前、有何事乎、宇佐使立時著束帶、御拜時候御前、常事也、次第皆所見也、故宇治入道殿依召令參給、是御筆宣命ヲ令見給故也、雖然召使公卿、賜宣命時、退宮御方、不候御前、則退出、但蒙召參間、令著衣冠給也、

〔雅實公記〕長治二年八月三日丁卯、昨日伊勢使事有議云々、今日所奉、仍爲致潔齋忽退出、豫立札於家門、〇中略以藏人辨爲隆宅二條京極爲精進所、移住、其後沐浴解除、立犬禦并札於家門、先是召檢非違使盛重、近遣及河原路、汚穢不淨物、令掃除、　四日戊辰、沐浴之後、出河原修祓、相模勤之、　五日己巳、午時許、民部卿被來、於門相謁、數刻言談、歸去之後沐浴、臨東河修祓、　六日庚午、兵部大輔來、經奏聞事等種々、解除同前、　七日辛未、午時許沐浴、臨河原修祓、　八日壬申、沐浴解除同前、　九日癸酉、朝夕沐浴、解除如前、　十一日乙亥、朝夕沐浴、解除同前、　十二日丙子、未時許、從院以將曹近季給御馬二疋、近季給祿、生衣一重御厩舍人等給布申長給預由歸參畢、次左衞門督并爲家朝臣送馬各一疋、　十三日丁丑、今日伊勢勅使進發也、〇中略午刻臨東河解除、諸司數輩、二條末也、前驅十人、五位六人、六位四人、府隨身馬寮等相從、事畢參內、候射場殿、中將顯實朝臣來、仰可候殿上之由、須之蒙召參御前、御祈之趣委以承之、其後於殿上、尋問宣命淸書遲々由之

此外別事不可候

催上卿事

奏下日時事

定行事事

始行事所事

召使公卿仰其由事

私申、院〇白河御時、度度案記文候者、只暫可申請候也、又代々文書等候者、同可下給也、

伊勢幣公卿勅使進發事

件日時、於藏人所可令勘申歟、可給一上卿歟、或被給次上卿歟、上卿於里亭可被給歟如何、

被勘件日時之日、可被仰使事歟、奉使之人參內可奉歟、頭藏人以書狀被下知哉如何、

被點定使之人有障之時、被勘日時後日追被仰使事哉如何、依仰大略尋申、

從昨日所惱、先後不覺候也、

九月八日　　左中辨季仲自筆

自筆
宸筆宣命ハ、貴殿可被草案也、當日可被下知、仍爲令用心給所告申也、意趣ハ、明年相當御重厄、可蒙神明加護之情也者、

十一月廿一日　　左中辨在判

謹上　左大辨殿

私申、給宸宣命於使之時、主上御裝束、代々束帶也、而院御時例如何、御覽神寶之儀、例ニ相違事

自筆
哉候覽、只尋常儀歟、
明日未明、可令參內給者、

座給之、先有御出、御裝束、殿下令候御傍給、（是御覽、依御物忌也、）使大納言先候殿上、依召參御前、主上（○堀河）給之、使向八省、給例宣命幣帛等、來十日參宮者、例宣命、左府（○源俊房）假以所勞、內大臣（○藤原師通）參之、神寶行事藏人勘解由次官平時範、八省使立之後、於南殿有御拜、次又於清凉殿東庭有御拜、其後及參宮日、每夜於清凉殿東庭有御拜、每日御湯殿、今日雖御物忌、殿下幷使大納言參御前、依爲大事歟、

〔江記〕寛治四年十一月十三日

伊勢公卿勅使事

一上卿使事

伊勢奉幣、多大臣可被奉行也、但先例不必然、近則

延久元年十二月八日奉幣事、大納言能長被奉行、十月廿二日令勘日時、

承暦五年（○永保元年）二月一日奉幣、右大將（今右府、〔藤原顯房〕彼時大納言、）被奏日時、元內大臣雖被奉行、當日右大將行、

永保元年七月廿一日奉幣、左大將奉行、（今內府、〔藤原師通〕彼時大納言、）但可依使也、若以納言爲使者、大臣可被奉歟、又雖大納言、爲下臈者、上臈大納言被奉哉如何、給宣命時、如上臈爲上卿可宜歟、（○中略）

一被點定役人事

前例或被勘日時之日告之、（延久元年例、頭伊房、使參議耳、）其或未勘日時之前、令內豎召之、於殿上仰其由、（治暦二年、頭經信、使參議奉幣、）然則早仰其旨、久令潔齋可爲吉、但使有障者、非此限、（可障後、若如此者、使人可宜、）

一行事人事

五位六位等藏人無差別、但代初也、五位奉行可宜歟、（延久元年例、五位藏人匡房、代初歟、長暦三年例、五位藏人定親、代初、）

祇官先行向河流東、昇居神寶、牽立御馬、令中先例於此修祓之由、仍下馬、卜部俊時讀祓詞了、從是以後御馬、神祇官人、次僕、次共人、次第發行、近江祇承官人二人出來粟津、件官人須來逢坂也、仍雖致其責、殊无所陳、亥刻著勢多驛、是國司館也、須遣借屋也、而年來例只如此者不咎也、今日途中、雖經國分寺前勢多橋等、不下是先例也、國司遣目代前伊豆守業亮郎等等有事儲、今夜終夜雨下、　廿九日乙未、朝間雨灑、使神祇官人祈晴、而巳刻天晴、是有感應也、自京持來取落舊袍、美作守匡房朝臣馬、二匹之中一匹、放京返送了、　肥後前司章家馬、共依泥是副書狀返遣了、國司使兵衞尉則季勞問、抑依日來爲甚雨、途中河水汎溢、可有難渡處々云々、然而行程有限、巳刻進發、午刻就夜須川渡口、無舟、先令下人厲揭、水深可及鞍爪者、仍召神祇官人、尋問神寶韓櫃不令泥奉渡否由、答云、捧持奉渡、何必霑給乎者、便數之處、或云、坂東受領如此水深之時、取櫃臺貫物等、乘居被捧所渡也者、事體雖不穩、依不可默止、就此說所構渡也、申刻著粟太驛、件宿所者、郡司重綱大國宅也、不遣借屋、是國郡懈怠也、但先先使使多宿此宅云云、國司目代幷郡司等勤行遞送之事云云、　卅日丙申、巳刻出驛、近江祇承官人、自鈴香山境邊返遣了、依申有例之由也、伊勢祇承一人奉迎山中、申刻著鈴香驛、件驛於關戶四五町許所造借屋卅宇許也、○中略　抑今夕六月祓日也、仍令問神祇官人、如此之時行他祓乎、答云、神事幷行是例、況於定事何有憚乎者、令儲萱貫、便招卜部所修祓也、　七月一日丁酉、辰終出鈴香驛、未刻著雲津川、雖水深、依有船所渡也、酉刻著壹志驛、郡司等出來、隨分有其勤、　二日戊戌、巳刻出壹志驛、或今日路有二方、濱野二路也、至于野路定多頃、濱津歟、令尋先例、神祇官人唯經野路例也、大神宮司造其路歟者、仍所用件野路也、伊勢祇承官人稱例、自下見橋退去、午刻至櫛田川、大神宮檢非違使三人來向、令中一人者爲言上後船來副云云、所令上渡船三艘也、須至多氣川行祓、官人依例儲祓物等、御馬神寶如例勤之、次歷齋宮南、齋宮御出時北路云云、過稻城里之間、前宮司宣衡來迎、未刻著離宮院、以祓殿爲宿所、前出雲守賴宣、幷前宮司義任來向、此處之事宮司所勤也、又宣衡送獲餼等、賴定朝臣送垸飯云云、

〔中右記〕寬治四年十一月四日甲子、權大納言雅實卿、爲勅使初被參伊勢大神宮、仍早旦先御覽神寶幷神馬、如例宸筆宣命左大辨匡房○大江早旦參入、兼以草之、藏人季仲朝臣傳宣攝政殿下○藤原師實清書之、於晝御

返給内記奏、内記退、宜陽殿西壇上、(南儀)上卿起座、就御所邊、(内記追從)奏覽之後、□歸著座、内記獻宣命宮、即返給云、早可清書者、頃之内記獻清書、上卿被目僕云、又欲參御所、(依等舍)身力已屈、作候座(文庭)令傳仰、申云、上臈被奏之由所承也、上卿目内記令退立、次使官人喚少納言通俊著藤実、上卿宮□度御所邊難令奏、只今亂心地之相違、難令進奏、仍可被奏覽者、此間依聞有可候殿下御氣色之由、參候殿上、已及未斜、御出畫御座、(南御簾東)召右衛門督、右衛門督參進、歸出殿上云、有召者、僕起座、先跪殿上南落板敷、次依御氣色昇候長押上、即下給宸筆宣命、(被封件宣命、多不被封歟、)插笏給之、拔笏取副祇候、仰云、能申進禮者、微音稱唯、次被仰云、於神前可燒者又稱唯、退出殿上、倚案、仰旨儘以不承、仍相示頭右兵衛督云、宸筆宣命讀申之後、於神前可燒由難承仰旨、猶以不慥、内々可取御氣色也者、右兵衛督參御前、歸出云、讀申之後、可燒之者、次差插懷中、著陣、今日被參公卿、皇后宮大夫、(顯房)中宮大夫、(實綱)治部卿、(隆俊)藤中納言、(奏宣、能實)陰陽師不言、已及申刻、右兵衛督出陣、仰上卿云、雨猶不止、行幸停止、早可立使者、上卿召外記、被仰行幸留由、又召辨被仰同趣、次召外記被仰、内記隨身宣命、經階下可渡西、又上官等同可渡者、次上卿起座、僕又起座、歷陣北南殿北庇月華門、内記上官等經階下相從、共出陽修明門等、著昭慶門東廊内座、(先是左中辨隆方朝臣、依行事并裝束使、祗候八省、)次上卿召外記、被問使々參否、申云、皆候、次召辨被問幣物具否、同申具由、次上卿被示辨、辨思忘不令奏使王賜御馬事、便給幣被參内、付藏人可令奏此由者、(辨密々談、僕云、殿上辨被奏者、尊下可被示、可付藏人之由上歟、)次上卿被催中臣等可給御幣之由、中臣(神祇大祐大中臣惟經、今度祭主輔氏五位等皆申障、仍遣六位云々、是又先例也、)忌部(神祇大史齋部頼季)卜部(神祇大史兼時)入自東福門、給幣如例、(此間雨止、申時晴、件給幣之儀、除行事之外、上卿被渡東廊之後、可進倚歟、)次上卿以下著東座、(上卿西面、使參議座西面、上卿間遂上敷疊、辨以下座南面、)次内記以宣命宮置上卿前、次上卿以宣命給僕、僕置笏給之、取副笏起座、經上卿前、(柱外)出東福門南、給件宣命於中臣云、何處可來逢乎、答云、相具使々、只今可參會河原者、次歷昭訓門、自待賢門退出、來日來宿所、脫束帶著衣冠進發、(宸筆宣命、入結袋懸頸、是先例也、民部權大夫政長、式部丞師光來訪、共人前伊勢守公盛朝臣下共三人、伊勢冠者、此外侍相井十二人、)自東洞院北行、自四條坊門東行、自萬里小路北行、自三條末出於河原、神

祓物、修祓、次向外記實忠宅宿、（令鬼規縄井立札）此後每日出河原祓、（衣冠或者不必然者）　十九日乙酉、申剋許向三條末、著衣冠具、相尋藤中納言之處示送了、先不必著衣冠、被取爲可宜歟者、隨此儀也、實行爲祝師、　廿三日己丑、東流修禊如例、遣書於藏人少納言通俊、可參著大神宮日一定如何、爲之知遣送國司之故也、返報云、來月五日也、隨重命可奏達者、臨昏參關白殿（師通）〇藤原使皇太后宮大進定成申奉幣勅使之由、又令申云、自通俊許申送云、來月五日可參著大神宮者、仍二箇日可罷留途中、而勅使恣難仰遣近江伊勢等國司許、若自殿可遣仰歟、爲當令奏事由、依宣旨可仰遣歟、如此之事、先々自殿遣仰由承之、件行程凡五箇日也、近江二日、伊勢三日、（此中伊勢一日者、依爲神郡、宮司勤遣送事云々）若可著罷留者、近江伊勢各一日可罷留候歟、於神郡可難叶候者、（但令申伊勢難叶之由云々）御報自此示遣、更不承引歟、早被奏達、依宣旨仰遣、何事有乎者、抑此間雖承不可出仕之由、先爲觸申殿下、所參入也、　廿六日壬辰、河邊解除、宛如日來、但今日少將少納言權辨相共祓除東流、藏人少納言示送云、來月三日猶有可參著御氣色、又至于仰遣惟盛等之事、令申殿下之處、無左右仰、內々取御氣色、依殿下仰可仰遣者、今日又々申請可示送者、　廿七日癸巳、東流解除同前、付路掃使部、遣書於祭主許云、可預祿內外宮神主以下交名可被注送、依日來不尋得雖適日可示達也、又離宮之餞、任例殊加用意可被催行者、關白召經國朝臣云々、給御馬一匹、（栗毛）仍送消息於皇后宮權大夫許、令申恐由、人々被送馬云々、　廿八日甲午、今日有伊勢臨時奉幣事、夜前藏人少納言通俊送書傳仰綸旨云、明日巳二點可被發遣使、計其程可參內者、辰剋著束帶、（例鎗）先於庭中修祓、（今日不出河原、使陰陽師實行讀中臣祓之後、給祿絹五匹、）次參內、相示件少納言陣邊、若有召者可被告之由、參陣先是民部卿〇藤原（俊家）被參著陣座、被示云、依昨日口雖早且參行事少納言并上官一人不見、爲之如何、然間外記參入、上卿召外記於陣腋、被仰可有行幸之由了、良久左中辨（實政）參入、就膝突奏宣命草、（依大內記中障、別被召仰云々、）上卿披覽之後、實政朝臣退去、次召外記、被仰筥可持參由、內記持參、上卿入宣命草下給之、早可內覽、但其次可被案內清書可持參否由、是爲行幸剋限已至之故也者、小還內記（賴經）歸參、奏宣命筥了、早可陰清書不可及給者、上卿

公信、勞願物不能勤使節之由、昨日參入令奏聞、所勞非重歟、猶似申故障、初使知丈朝臣、有乳母死穢、者、余答云、伊勢外諸社皆被奉納之、伊勢使被奉宰相如何、若有延引、可被奉納之歟、資平諾矣、計之有洩奏歟、通任有被召問之事、今日參陣外者、藏人親業可傳仰勅語之由云云、　廿九日丁未、資平云、一日以藏人親業、被問修理大夫通任穢、辨無所避被勸事、左大臣開再三被陳、至愚由、又說云、依可被遣伊勢使之疑、稱無實穢云云、彌以無實穢、令停無止之御新使、不足言之、又不足言云云、是左相府及卿相達、昨日所被命也者、主上內々御氣色、可被奉右衞門督懷平〇藤原云云、從金吾許今朝示送云、昨日參內、被仰可奉遣伊勢之由者、右何事乎、女裝束三具尋彼五六十疋許可入也、權隨身外共人六人許可令有也、永輔朝臣仰事由可出立者、藤宰相公信頻申障、不忠者也者、主上被仰云云、

〔左經記〕長元四年八月十七日壬辰、頭辨於壁外目余、〇源經賴余起座進逢、仰云、可奉仕來廿五日伊勢奉幣使者、奉仰著座、事了上卿退出、藏人少將告有召之由、參御前、數刻奏雜事、及晩退出、向東河解除了、卽渡南宅、阿波守所領齋、又本家闕可齋之由、衆皆誠仰了、須於本所齋也、而然立堂安佛僧尼經論、有煩移還、仍僕一身向他所也、　十八日癸巳、臨東河、令信公解除之、昨日神祇大祐是守令申云、今月晦日爲大神宮例差忌、至于來月御祭有忌、往還而不差被忌之以前參入、可出神堺也云々、以此旨遣問祭主許、返報云、爲勅使之人、更不可忌、唯逐驛館可往還也者、依此說不可忌、但今月大也、量行程可然者又可出神堺歟、於今者唯可隨便宜也、　十九日甲午、臨東河、令信公解除、奉皇命致愼籠居、始自去十七日至于進發期、每日可被淸也、　廿日乙未、臨東河解除、爲致愼、迄予進發日所被淸也、

〔經信卿記〕承保元年六月十八日甲申、一日藏人少納言示送、今日可參內之由、仍申剋許參內、使件少納言申候由、仰云、今月廿八日可奉仕伊勢奉幣使者、其次相示少納言、參著之日、若日次不宜之時、更被申定云々、取御氣色可被告、又奉此仰之間、有御氣色不出仕云々、如何、少納言參御前歸出云、參著日事相尋、日次追可被仰、又仰曰、此間不可出仕者、卽退出之次、向中御門家、先達使於陰陽師實行許、試仰可由河原之由、又具

同	同十二年〇建治元年	四月十五日	内大臣正二位藤原朝臣師繼
後宇多	弘安四年	閏七月二日	正二位行權大納言藤原朝臣經任
伏見	正應六年〇永仁元年	七月八日	從二位行權大納言藤原朝臣爲兼

〔續日本紀　十三聖武〕天平十年五月辛卯、使右大臣正三位橘宿禰諸兄、神祇伯從四位下中臣朝臣名代、右少辨從五位下紀朝臣宇美、陰陽頭外從五位下高麥〇類聚國史作表太、奉神寶于伊勢大神宮、

〔法成寺攝政記〕寛弘二年十一月卅日甲戌、著陣、伊勢令申勸奉幣日時、使宰相中將、　十二月八日壬午、咳病重發動、宰相中將明日伊勢使、而依有犬產穢申障、今日被仰左大辨、　十日甲申、先日所承、依奉幣事可參内、而咳病尙重、仍申障由、内府〇藤原公季行之、右大辨〇藤原行成伊勢使一人也、

〔小右記〕長和四年六月廿八日丙子、衛黑資平來云、〇中略今日内有犬死穢、來月四日伊勢使事、可仰權大納言賴通卿之由、左相國〇藤原道長被命也者、　閏六月一日己卯、資平云、左相府被奏云、四日伊勢使事、前例爲別御禱被奉宰相、就中至明日宮中有穢、三箇日潔齋可被奉也、儲日勘申七日、被日可宜、無障之宰相通任、公信也、主上〇三條被仰云、通任太無便歟、不可讀宣命、又可致路次煩、必有事謗歟、此事本自相府所妨也、知光朝臣初左大臣定申、彼時吾思無便使、然而任定申不仰左右、而今又稱奏無便由、所傾奇云云、粗忽難出立歟、奉遣汝如何者、奏左右可隨仰之由、案内申相府、命云、專不可被奉、非參議者、　二日庚辰、晚頭資平來、依洛渴聞、不相逢退去了、從宅申送云、〇遣問返報由伊勢使藤宰相公信、申可勤仕之由、明後日可被仰之、　廿三日辛丑、明日伊勢使參議公信被奉、左右馬寮御馬各一疋、御幣如例、今日宣命趣、可被仰權大納言賴通、若玉體復例者、可奉神寶之由等也、　廿四日壬寅、早旦資平云、伊勢使宰相、申至今日有觸穢由、仍改定廿八日、又々使官人一人可隨身由令申之、而俊致申故障、仍可仰他官人者、明日伊勢使延引、　廿七日乙巳、資平云、明日諸社使依穢延引、其穢者參議通任家有死穢、而通任著座、式部卿宮、〇敦明親王右大臣、〇藤原顯光同家參議兼隆、不知案内參右府、次參左府内、誠雖無指穢、猶不清淨之上、左大臣行件事已爲觸穢、非無事恐、延日被行可宜由被奏聞之内、伊勢使宰相

高倉　嘉應二年十二月十日　中納言藤原邦綱
同　承安二年六月七日　內大臣正二位行兼右大將源雅通、久我殿也、雅定之男、
同　同四年十一月十一日　大納言藤原實國
同　治承元年九月十日　大納言藤原實房
同　同二年八月廿四日　大納言藤原邦綱
同　同三年九月廿二日　大納言藤原實國、爲太上法皇御祈、主上被立勅使云云、
安德　壽永二年四月廿六日　參議源通親、後土御門內大臣、號久我內大臣、雅通之男、
後鳥羽　文治二年十二月廿日　正二位權大納言兼右大將藤原實房
同　同五年三月廿三日　正二位行權大納言藤原實家
同　建久元年八月十四日　權大納言藤原親實
同　同二年三月廿五日　權大納言藤原實宗
同　同三年正月十二日　權大納言右衞門督源通親
同　同六年二月廿九日　正二位行權大納言兼左近衞大將中宮大夫藤原朝臣良經、幷副參之人藤原定家等也、
土御門　正治元年八月十日　權大納言從二位源朝臣通資、爲後白河御墓御所、主上勅使在之、
同　建仁元年十二月六日　權中納言從二位藤原公繼
同　元久元年八月廿三日　權大納言藤原公房
同　承元二年九月十九日　權中納言藤原隆衡
順德　建暦二年七月廿五日　權大納言藤原師經
同　建保四年二月廿三日　權中納言藤原光親、中臣祭主隆宗、
同　同七年〇承久元年三月廿六日　內大臣正二位行兼右近衞大將源朝臣通光、
後堀川　嘉祿三年〇安貞元年十一月廿九日　權大納言藤原實宣
同　寛喜三年十一月九日　中納言藤原隆親〇隆親隆道誤
四條　嘉禎二年三月十六日　正二位行權大納言藤原實基
同　延應二年〇仁治元年三月廿五日（百練抄作十五日）從二位行權大納言藤原公相
同　仁治元年十二月廿四日　參議從三位行左大辨勸解由長官藤原忠高
後嵯峨　寛元二年三月十一日（十一日據伊勢勅使部類記補）權中納言源顯親
後深草　建長二年三月四日　從二位權大納言兼右衞門督源通成
龜山　弘長元年十二月九日　中納言藤原隆行
同　文永五年四月十三日　正二位行權大納言兼右近衞大將藤原朝臣通雅
同　同八年十二月十六日　正三位權中納言兼皇后宮權大夫藤原公守

同　長治元年十二月十六日〈中納言源國信〉
同　嘉承二年二月十一日〈內大臣正二位行兼左近衛大將源雅實〉
同　同三年〈○天永元年〉二月二日〈同宗通輔〉
同　同四年〈○永久元年〉閏三月十六日〈大納言藤原宗通〉
同　同年十一月五日〈中納言源能俊〉
同　元永元年四月九日〈中納言源顯俊、(顯俊顯通誤)中臣祭主神祇伯親定、〉
同　同二年八月廿九日〈中納言源能俊〉
崇德　天承元年二月廿一日〈中納言藤原實能〉
同　保延二年八月廿一日〈中納言源雅定、中院殿、後從一位太政大臣任、雅實男、〉
同　同五年二月廿一日〈大納言藤原實能〉
同　同七年〈○永治元年〉三月八日〈參議藤原公能、大炊御門殿也、後左大臣任、實能男、〉
近衛　康治二年十二月九日〈中納言藤原成通〉
同　天養二年〈○久安元年〉二月六日〈正二位行權大納言兼左近衛大將源雅定〉
同　久安四年四月廿八日〈中納言藤原公教〉
同　仁平元年三月九日〈左大臣正二位行兼左近衛大將源雅定〉
同　久壽元年十一月七日〈大納言藤原重通〉
二條　永曆二年〈○應保元年〉四月廿二日〈參議平清盛、後大相國任、忠盛之男〉
同　長寛元年六月八日〈從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫平清盛〉
同　同三年〈○永萬元年〉五月廿九日〈參議正三位兼行右兵衞督平重盛、清盛之男、〉
六條　仁安三年十二月廿九日〈參議藤原成賴〉

同　同二年八月十三日〈內大臣正三位兼左近衞大將源雅實〉
鳥羽　天仁二年三月八日〈中納言藤原宗通〉
同　天永元年十二月七日〈大納言源俊明〉
同　永久二年正月廿七日〈中納言藤原宗忠〉
同　同五年三月十五日〈從一位右大臣兼左近衞大將源雅實〉
同　保安元年四月廿一日〈大納言藤原家忠〉
同　同三年十二月六日〈參議藤原實行〉
同　同二年〈○長承元年〉四月十日〈權中納言源雅兼、中臣祭主從三位公具、〉
同　同六年五月十日〈中納言藤原公教〉
同　同二年正月廿二日〈中納言藤原清隆〉
後白河　保元三年三月十九日〈權大納言藤原經宗〉
同　應保元年十二月五日〈大納言藤原光賴〉
同　同年十一月十日〈中納言平清盛〉
同　同四年〈○嘉應元年〉正月廿六日〈同當權中納言平時忠〉

桓武 延暦十年八月 參議古佐美、中臣祭主諸魚、

光孝 仁和三年四月 參議源是忠

一條 長保三年七月 參議源俊賢

三條 長和四年九月十四日 権中納言藤原懐平

同 同四年八月廿五日 參議源經頼

後朱雀 長暦元年九月十三日 參議藤原資頼

同 同四年元○長久九月廿七日 參議藤原資經

同 康平元年十一月廿八日 參議藤原經季

同 治暦二年十一月廿日 參議藤原泰憲

白河 同六年元○承保六月廿八日 參議源經信

同 承暦元年四月廿一日 権中納言源資綱

同 同三年三月八日 參議右大辨勘解由長官從二位藤原伊房

同 同四年正月廿四日 大納言源顯房、六條殿、後一品太政大臣、

同 永保元年七月廿一日 參議源俊明

同 應徳元年四月十日 中納言源雅實、久我殿、後一品太政大臣任、顯房男、

堀川 寛治四年十一月四日 大納言源雅實

同 同年十月九日 參議左大辨大江匡房。院°使、

同 嘉保二年十月十八日 正二位行權大納言兼右近衞大將源雅實

同 承徳三年元○康和正月廿四日 大納言源俊明

同 同五年四月十六日 大納言源俊明

仁明 承和六年十二月 參議秋津

朱雀 天慶三年二月 參議大伴宿禰保平、中臣祭主頼基、

同 寛弘二年十二月十日（十日據二法成寺攝政記一補） 參議右大辨藤原行成

後一條 長元三年九月廿三日 被立二勅使一

同 同七年八月廿八日 被立二勅使一

同 同三年五月十九日 參議藤原經任

後冷泉 永承七年十一月廿九日 參議源經成

同 同八年元○治暦四月十四日 參議源隆俊

後三條 延久元年十一月八日 參議藤原資基、二宮各別宣命也、

同 承保二年三月八日 中納言藤原實季

同 同二年三月八日 中納言藤原實季、後贈太政大臣閑院殿云々、

同 同年五月廿九日 中納言藤原實季

同 同五年元○永保二月一日 中納言源師忠

同 同二年十一月十日 中納言源俊明

同 同三年十一月七日 中納言源雅實

同 同六年八月廿一日 大納言源雅實

同 同七年十月廿九日 中宮大夫源師忠

同 永長二年元○承徳十一月五日 大納言源師忠

同 康和四年七月十八日 大納言源俊明

同 同年九月六日 參議左大辨源基綱

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年八月癸亥、天皇御大極殿、遣使奉幣帛於伊勢大神宮、

〔續日本後紀 十四 仁明〕承和十一年十一月乙酉、天皇御八省院、發遣奉幣使於伊勢大神宮、

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年八月廿四日丁亥、遣神祇伯從四位下棟貞王、從五位下行木工助大中臣朝臣伊度人等、奉幣伊勢大神宮、

〔三代實錄 三十八 陽成〕元慶四年八月十六日丁酉、遣武藏權守從五位上弘道王、向大神宮奉幣、

〔日本紀略 二 朱雀〕天慶五年十一月五日乙酉、天皇幸八省院、奉幣伊勢大神宮等、

〔西宮記 九月〕十一日奉幣

康保二年七月二十三日御記云、午刻、行幸八省院、于時小雨、到大極殿後房下輿云云、畢還宮、此間又降雨、仰延光朝臣、令公卿戴笠、未刻雷鳴、大雨、仰令立陣云云、

〔台記〕久安二年二月五日甲辰、自昨夕雨降、終日不晴、巳刻參內、先例、令勘申日時、未二點奏之、奏宣命草、開卜串、奏清書、攝政 ○藤原忠通 出右衛門陣、參八省、予連車入待賢門、攝政車自美福大路南行、自春日小路西行、自八省東大路北行、於昭訓門南邊降車、予自中御門大路直西行、相伴攝政、入昭慶門、向小安殿、予入嘉喜門、著北廊、問幣物具否、使參否、如常、此大使王可給御馬之由、仰外記令奏聞、於內裏奏之、著東廊、依雨中臣等進大極殿壇上、取幣物還立了、使祭主卿 ○大中臣清親 應召參入、承攝政命、相引退出、後召使王給宣命、內記取宣命了起座、使出門後、攝政及余自本道退出、攝政乘車時余參、攝政雖被出、 余參院 白川 退出、今日天子 ○近衛 年八歳 无御拜、今日余參內及八省之時、依雨著深沓、入內裏時、於陣後着沓、入宮門北着沓、

〔二所大神宮例文〕伊勢公卿勅使

聖武 天平十年五月辛卯 勅使右大臣正三位橘宿禰諸兄、中臣神祇伯名代、

淡路廢帝 ○淳仁 天平寶字三年十月 民部卿闕麻呂

稱德 神護景雲元年 中納言從三位藤原

孝謙 天平勝寶三年四月 勅使參議儉足

同 同六年四月 正三位文屋眞人淨三

光仁 寶龜元年八月 參議繼繩

神龜五年三月廿八日〇又見續日本紀

〔續日本紀十一聖武〕天平二年閏六月甲午、制奉幣伊勢大神宮者、卜食五位已上充使、不須六位已下、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月乙未、始制伊勢大神宮幣帛使、自今以後、差中臣朝臣、不得用他姓人、

〔古語拾遺〕勝寶九歲左辨官口宣、自今以後、伊勢大神宮幣帛使專用中臣、勿差他姓者、其事雖不行、猶所載官例、未刊除、所遣十一也、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡臨時幣帛使者給祿、四位絹十二匹、從者八匹五位十匹、從者六匹六位以下中臣忌部各六匹、從者各二匹六位已下卜部准神嘗祭、祗承國司同上、

〔類聚符宣抄一〕右大臣宣、奉勅、今月十二日可奉臨時幣帛於伊勢大神宮、宜王五位已上者依例令卜中臣使用月次使、忌部者別令差奉者、

延喜十六年六月九日　大外記伴宿禰久永奉

〔西宮記九月〕吏部記、天慶五年十一月五日、行幸八省、有臨時奉幣事云云、大納言師輔語次陳云云、貞觀年中、无中臣、時忌部須幣而退、太政大臣忠仁公聞之、自中途召還幣使、以諸司官人中臣氏者差使、因忌部只掌持幣、非可執中臣職、又給使王宣命了、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年六月庚寅、遣左衞士督從四位下佐伯宿禰淨麻呂、奉幣帛于伊勢大神宮、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶七歲十一月丁巳、遣少納言從五位下厚見王、奉幣帛于伊勢大神宮、　八歲四月乙巳、遣使奉幣帛于伊勢大神宮、　五月乙卯、遣左大辨正四位下大伴宿禰古麻呂、并中臣忌部等、奉幣帛於伊勢大神宮、

〔類聚國史三神祇〕弘仁十四年八月己丑、天皇御大極殿、奉幣帛於伊勢大神宮、〇又見日本紀略

〔續日本後紀五仁明〕承和三年十二月庚子、天皇御建禮門南、而奉遣伊勢大神宮幣帛、

但五尺八寸　九尺三寸合也

一九尺　毛江紋絹　一八尺　赤地絹　一五尺八寸　白綾

一九尺一寸　白地絹　一六尺　黒地絹　一六尺六寸　薄黒色地赤薄

右小切取合〔氏〕如此

一庭　一木綿

一布　四尺五寸宛也、副件乃綾絹等包了、

合拾九品

〔寛保元年一社奉幣記〕大藏省

奉送伊勢一社奉幣料之事

五色絁　拾疋　白絁　拾疋　唐錦　壹端

木綿　拾兩　麻　拾兩　太布　壹端

右皇大神宮幣帛料、依例所奉送如件、

寛保元年六月廿一日　年預大石弘充

〔令義解〔神祇二〕〕凡常祀之外、須向諸社供幣帛者、皆取五位以上卜食〔謂凡卜者、必先墨畫龜、然後灼之、兆順食墨、是爲卜食、〕者充、唯伊勢神宮常祀亦同、

〔類聚三代格〔五〕〕太政官謹奏

内外五位不合同等事〔〇中略〕

外五位

右考限還叙、一依令條、其祿神祇官事、雖有卜食者、不合差充伊勢神宮奉幣帛使、〔中臣忌部不在此限〇中略〕

以前奉勅刪定内外五位貴賤差別、臣等商量具件如前、謹以申聞謹奏、奉勅宜依前件永爲恒式、

炎上、被謝申之也、〇中略

内藏寮請

五色綾陸疋　兩面貳段　調布參段　葉薦參枚　柳筥貳合　木綿壹斤

以上大神宮御料

五色絁絹陸疋　調布壹段　木綿壹斤　葉薦參枚　柳筥壹合

以上豐受宮御料

右今日伊勢一社奉幣料、諸國所進年料奉分內、依例所請如件、

應永廿六年二月廿八日　正六位上行少屬藤井宿禰行國

正六位上行少允藤井宿禰行吉

〔永正十五年一社奉幣使參向記〕一今度送文云

行伊勢皇大神宮一社奉幣幣帛之事

奉送

五色綾　六疋　五色絹　六疋　兩面　壹反

木綿　壹斤　麻　壹斤　調布　壹反

右所送奉如件

永正拾五年十一月三日　左官掌紀　末貞

左史生宗岡行賢

一同官幣請取事

一一丈一尺　青地錦　一五尺八寸　赤地綾　一五尺八寸　黃地錦

一一丈二尺七寸青地絹

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜元年八月庚寅朔、遣參議從四位下外衞大將兼越前守藤原朝臣繼繩、左京少進正六位上大中臣朝臣宿奈麻呂、奉幣帛及赤毛馬二匹於伊勢大神宮、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年三月七日癸卯、遣使奉伊勢大神宮幣幷神寶弓杵劒等物、

〔皇代記後朱雀〕長暦三年己卯五月十九日、有伊勢奉幣、有宸筆宣命、被奉金銀師子狛犬、

〔中右記〕永久六年〇元永元年九月廿二日辛丑、有臨時伊勢奉幣云云、上卿右大將、行事右少辨師俊、金銀御幣被進云云、先於晝御座御覽、於南殿有御拜、

〔山槐記〕永暦二年四月廿二日甲子、今日可被發遣公卿勅使、宮今(三條)度〇中略勅行隆及藏人等舁神寶相置之、其次第奧筵內宮、

第一御餝劒以柄方爲御座方、東西行置之、筵奧方、　紫淚平緒不付御劒、只二階引展置御緒方、　已上劒筥蓋上敷劒袋案之、

第二御弓一、赤漆御筋八筋、御蔣一、御幣串四筋、已上上方、爲御座方、相並御劒蓋、置同筵端方、　已上置辛櫃蓋、

第三錦蓋、御鏡筥、御幣筥、玉佩筥、作花筥、火取玉加入此筥、麻桶線柱、　鳳筥、白唐綾一段、裏紫薄様、赤地錦、同以薄様裹之、先々以紙裹之、予(藤原忠親)爲五位藏人之時、以美麗薄様裹之、其後爲流例歟如何、　已上又置辛櫃蓋、置御劒弓蓋西方、

第四御裝束一襲裹打裹、納御衣筥、御束帶具也、御帶紫帖御帶也、　置朱漆辛櫃蓋、

第五彫馬蒔毛例也、不入辛櫃蓋也、藏人作置昇立、予示不可然之由、行隆承諾令撤蓋、只置踏板於筵上也、

凡所存、第一御裝束、第二錦蓋以下、第三御劒御弓相並、第四彫馬歟、一旦示此旨、強不執、

端筵外宮內宮置了之後又置之

第一御劒　第二御弓以下　第三錦蓋以下　第四彫馬月毛之例也　已上色目同內宮、但外宮无御裝束也、　第五師子形筥居同辛櫃蓋、是流祭御出、仍先式內外宮神寶末中央立之、

已上居了、行隆申事由、

〔康富記〕應永廿六年二月廿八日癸卯、伊勢一社奉幣、幷廢朝宣下被行之、依去正月四日未剋、月讀宮

之、

〔延喜式內藏十五〕諸祭幣帛

伊勢大神宮祭

錦一匹、寮物、兩面一匹、深紫綾、淺紫綾、緋綾、中縹綾、黃綾、各一匹、已上五綾、若無者用生綾、白綾一匹、以上大神宮幣料、緋中縹黃皂帛各一匹、已上度會宮幣料、盛裹料柳筥二合、各方一尺四寸、宮別一合、餘祭宮准此、庸布二段、木綿小二斤、葉薦一枚、分用兩宮、已上官物、

右件幣預前依例擬備、○中略臨時幣帛亦同、

〔延喜式三臨時祭〕凡內侍調備大神宮幣帛之所者、官人率神部當日早旦參向相共供事、

〔北山抄六〕奉幣諸社事

天慶四年八月十五日、依內侍遲參、女史裹伊勢幣、

〔治承元年公卿勅使記〕安元三年○治承元年九月十日、內侍遲參云云、度々催遣了、而未參上、兼光參上申云、內侍遲參之時、且裹伊勢幣其例候歟、示給云、可宜也、又內侍不參也、代以女性為代官之例覺悟、若有近邊之輩者可召遣歟、則召遣了云云、數剋之後、內侍適參上、先是幣物裹了、仍只懸手云云、

〔續日本紀二文武〕大寶二年四月丁未、從七位下秦忌寸廣庭獻杠谷樹八尋桙根、遣使者奉于伊勢大神宮、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年十一月庚寅、遣從五位上忌部宿禰子首、供幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢大神宮、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年二月乙卯、奉神服於天下諸社、以大炊頭從五位下掃守王、左中辨從四位下藤原朝臣雄田麻呂、為伊勢大神宮使、每社男神服一具、女神服一具、其大神宮及月次社者、加之以馬形并鞍、

〔日本紀略一十一〕寛弘二年十二月十日甲申、差遣參議右大辨行成卿於伊勢大神宮、被申神鏡燒損事、有宸筆宣命、

〔江家次第十一十二月〕內侍所御神樂事
內侍所者神鏡也、〇中略寛弘燒亡始燒給、〇中略被立伊勢公卿勅使、行成宸筆宣命始於此、〇又見古今著聞集

〔新任辨官抄〕五十鈴川上下津石根
伊勢宣命一通也、而中臣參外宮時、加押紙、五十鈴川上ヲ、山田原ノ下津石根ト讀云々、

〔基量卿記〕天和二年正月廿九日、今日公卿勅使發遣、宸筆宣命豐長卿作進云々、宸筆宣命草、先例高辻亭ニカギル由、後芬陀利花院殿下〇藤原經通記ニ所見之由、一條右府〇藤原冬經被申云々、依之此度如此也、於記錄所、主上直ニ被渡、能ク申テ奉レ、勅使退下、殿下被候御座傍云々、召以前使候殿上、此以前於陣發遣之作法有之、內記宣命奏聞、毎度例幣之義同前也、其後各參向神祇官、上卿召使給宣命、使取宣命於門外渡祭主、其外義如例、
後聞宣命草勅作云々、後光明院御代如此也、高辻依未練不能作進云々、〇中略
一宸筆宣命草、高辻家傳受依無之、正保度後光明院宸作云々、依之此度主上御述製云々、御請書同前、
一內記宣命、宸筆宣命兩通、同事如何之由雖有沙汰、先例毎度兩通也、若上古神寶等被進之時、內記宣命可入事歟、又宸筆者於神前使人燒之也、若依此義歟ト云々、傳奏物語也、

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉幣帛本紀事
供奉皇大神勅幣帛遣、即朝庭使告刀申、正殿進納畢、其正殿院參入、大神宮司禰宜內人物忌、但使不參入、其行事新年使同、
春宮坊并皇后宮幣帛、并東海道驛使之幣帛、及國々所々之調荷前雜物等、納外幣帛殿、蹤年禰宜給

辨仰史、史仰陰陽寮令勘之、

次召外記(五位)仰可遣例文硯由、

外記二人(上臈)進例文筥、

納舊例文一巻(小書出一枚)

小歴名二枚

下臈外記置硯於横切座、

次參議書定文、

書畢以職事奏聞

畢召外記下給、仰云、令催廻(與)、使取加硯退、

藏人下請奏此間外記開卜事

〔公卿補任 光格〕寛政十三年(○享和元年)三月二日、兩大神宮臨時奉幣、公卿勅使發遣日時定、幷小安殿代行幸召仰、上卿内大臣、(○藤原基前)參議右大辨宰相、辨明光、奉行資董朝臣、

〔年中行事秘抄 三月〕中午日、石清水臨時祭前後齋有無事、(○中略)外記頼業申云、

臨事祭前後齋事

右石清水賀茂臨時祭、准小祀可爲一日齋歟、伊勢奉幣之外、無前後齋故也、

〔三代實錄 清和一〕天安二年十月卅日丁巳、大祓於建禮門前、爲明日擬發伊勢大神宮使也、

〔日本紀略 後一條十三〕長和五年二月廿四日己亥、於朱雀門大祓、依明日伊勢幣帛也、

宣命

〔北山抄 六〕奉幣諸社事

天慶七年七月、内記不參、尋例外記作宣命云々、仍仰大外記公忠、件宣命内記先日草畢、伊勢別幣加辭別也、

門座而退出、

〔中右記〕保安元年七月十八日、依召參仗座、伊勢奉幣日時、可令勘申者、於端座令敷軾召辨、右少辨師俊來軾、日時仰可勘申之由、則於腋陣令勘日時持來披見之處、廿七日者、辨參陣之間兼召儲之召外記宮入勘文、令右少辨內覽頭而歸來、早可奏者、右少辨依爲地下人、招藏人爲其奏聞、則返給、予〇藤原宗忠取勘文結申、召外記保貞作入宮下給、勘文云、伊勢使等可催之由、使王可令卜之由、同仰下了、次召辨幣料早可用心由仰了、又先一日、可掃路次穢物之官使、可下遣旨、同下知了、其後退出、從今夕不逢僧尼重輕服人、家中立札、

今夜不被仰下宣命趣也、仍雖召儲內記不仰也、大略期日頗遠、追可被仰下歟、

又藏人不可幣料請奏、後日可下歟、

伊勢奉幣上卿、多ヘ大臣大納言事也、而院〇白河仰云、近日大臣大納言多有障、一夜依齋王不例事、行御占了、爲訴件事有此奉幣、同上卿奉行可宜者、仍予奉行也、

奉幣日內々尋問之處、廿一日廿七日者、早雖可被行、尊勝寺御入講間、頗有其憚、可用廿七日之由有御氣色也、

廿七日乙丑、伊勢一社奉幣、齋宮不例事也、上卿右衞門督、行事右少辨、今日齋宮之衰日也、依康平例不被忌也、待賢門穢出來也、出入陽明門云云

〔康富記〕應永廿六年二月廿七日壬寅、晴、今日奉幣上卿御參陣次第等、令懷中、委細申入、〇中略

臨時奉幣次第

大臣或大中納言著仗座

參議加著

藏人來仰勅語趣

召辨仰日時可勘申由

次返給宣命、幷奉御馬可給由、歸著陣座、

次令官人召外記、仰可給御馬使王由、

次率使納言幷外記史等參入省、入自待賢門、

次於嘉喜門外、與出立辨相揖、

次入自同門、著昭慶門東廊座、次令召使召辨、問幣物具不、次又令召外記、問使參不、次又令召內記見宣命返給、次率使以下內記行事辨外記史等、經北廊幷東廊砌、著東廊座、（西面）次使納言著、（西面）次辨著、（南面）

次外記史等著、（在辨後座南面）次內記進宣命退、（入筥）次使中臣忌部卜部等入自東福門、進小安殿下給幣退出、

次上卿目使納言、納言相進、次給宣命、次使上卿自東福門退出、次上卿令召使召內記令取筥、（或只隨使）次上卿歸著昭慶門腋座、（可尋之）

辨以下出立、上卿揖過、或覽在東廊座、不歸昭慶門座而退出、

次仰召使、令尋使出宮城門哉否由、

次上卿自嘉喜門退出

辨以下出立　上卿揖過

次到待賢門、去霤三許尺、一顧而出、

〔柱史抄（下臨時）〕伊勢公卿勅使事（御里內時無行幸儀）

當日早旦、上卿著陣、召內記仰可進宣命草之由、內記進草、（入筥、兼日尋取辨實目錄幷籤之、）內覽奏聞如恒、淸書覆奏之後、上卿歸著陣座、勅使公卿參殿上賜宸筆宣命、納懷中、其後上卿率勅使幷上官內記等、參向八省、著北廊座、召內記令進宣命、內記持宣命筥、進立庭上幕巽角、（北面）上卿幷勅使以下遷著東廊座、內記持筥相從、上卿已下座定之後、內記持參宣命於上卿前、置筥退歸、上卿給宣命於勅使、勅使卽取副笏出、自東福門發向、次召內記令取空筥、次上卿以下更著北廊座、辨以下揖過、自嘉喜門退出、（或留在東廊座、不歸昭慶）

幣神寶等前行、中臣忌部等、暫留於神祇官、調持御幣等、先向於白川東岸、使歸宿所改裝束、衣冠騎馬到白河修禊、卜部祓詞、中臣傳大麻、參憲卿記、

事了就路、御幣神寶御馬、使公卿使□供人、出會坂關、近江國祇承、到勢多驛、國分寺前、勢多橋不下馬、國司羞供給、次到野洲河祓、

其儀如前次到甲賀驛宿、國司供給、

十日、國司羞供給、早旦沐浴、次祓、次就路、於外白河祓、山中伊勢祇承奉迎、近江祇承退、到鈴鹿驛宿、

十一日、國司供給、早旦沐浴、次祓、次就路、渡鈴鹿川二見、渡安濃川三瀨、渡雲出川、到壹志驛宿、國司供給、

〔江家次第十二神事〕伊勢公卿勅使御里內時、無行幸儀、

當日早旦上卿著陣、奧次移著外座、

次召官人令置膝突、次令官人召內記、

次仰內記可進宣命草由、次內記進宣命草、入筥

次上卿見了仰內記令內覽、

此次令申刻限漸至、清書內覽如何由、

次內記歸參

次上卿進弓場殿、內記持宣命相從、令藏人奏草、或乍居陣座、令奏之、

次奏可令清書仰、歸著陣仰其由於內記、

次令官人召外記、外記參候小庭、

次上卿仰可進卜串由、次外記起取卜串參入、入筥

次上卿令外記開卜串、次仰使王於外記、當日卜合者

次外記進小庭、申使王申御馬由、次內記進清書、

次上卿見了令持內記、進弓場殿付藏人奏之、

此次令申使王申御馬由、

發遣式

テ勅使事訖リテ歸洛スル時ハ、卽日復命シ、若シ凶日ニ當レバ、延ベテ次日ニ至ル、奉幣使ハ朝廷ヨリ發セラルヽヲ以テ例トス、然レドモ白河上皇政ヲ院中ニ執リ給ヒショリ、院中ヨリ發遣セラレシ事モ往々アリ、後白河上皇ガ剃髮ノ後ニ發遣セラレシハ、最モ異例トス、

朝廷ニ於テハ、凡テ吉凶禍福アル每ニ、主トシテ大神宮ニ奉告シ給ヒシカバ、臨時奉幣ノ事タル、佰ニ滋クシテ擧グルニ勝ヘズ、且ツ祈禱篇ニ見エタレバ、此篇ニハ多クハ省略ニ從ヘリ、又卽位、大嘗、神器、遷都、改元、鑄錢、及ビ齋王、遷宮等ノ事ニ就キテ奉幣アリシガ如キハ、並ニ其篇ニ見エタレバ、今ハ皆闕如ス、

〔夕拜備急至要抄下〕一伊勢一社奉幣（臨時）

上卿　日時（於陣可勘之）　辨　請奏（內藏寮藏人下之）　內記（宣命料）　使王申御馬（奏聞之後不及口入）　差遣小舍人實檢

伊勢幣發遣之由　內侍參　御拜（如祈年穀奉幣、別不注之、）　使人（四姓氏人、外記、）　官外記

○按ズルニ、四姓氏人トハ、使王及ビ中臣忌部卜部ヲ云フ、

〔西宮記臨時七〕伊勢使

當日早旦沐浴、次修禊、（長曆記、出河原修之、經信記、於庭中修之、）次給陰陽師祿、（經信記）次參內、（懸生絹袋於頸、在袍下、近例、）依召參御前、（御東廂）進近龍顏、給宸筆宣命、（近代加懸紙一枚、被封、）故源右府御說、不封而給之、仍使於御前一遍讀之云云、使插笏給之、插懷中、勅曰、能久申進（讀、）使唯稱、（又有種々勅語、或被奉御書於齋宮之時、被仰其由、出殿上、頭藏人尋取之者、）次被仰曰、宣命讀了、於神前可燒之、（若不被仰者、出殿上、令藏人申可燒歟、將可返上歟由、）次與上卿向入省、（或有行幸者供奉之、）其儀如恒、忌部等裹幣之間、上卿著東廊座、（若有行幸者、著東福門外座、）使著上卿北座、（南面云云、見經信記、若使等物言者、可西面歟、）上卿給宣命、使進給之、置笏給之、取加笏、揖、（經任記、近例上卿著東廊座、役中臣忌部等參入、）起座出、自東福門、以宣命給中臣、（行幸時、出昭訓門外可給、）出自昭訓門、次御

古事類苑

神祇部五十八

大神宮八

臨時奉幣

毎年九月、神嘗ノ幣ヲ内外二宮ニ獻ズ、是ヲ例幣ト稱ス、祈年月次ノ幣ノ如キモ、毎年ヲ以テスレバ亦例幣ナリ、此餘事アルニ臨ミテ之ヲ獻ズルハ、皆臨時ノ奉幣トス、臨時ノ奉幣ハ、載籍ニ見ユル所ニ據レバ、持統天皇ノ朝ニ、新宮造營ノ事ヲ告ゲ奉リシヲ以テ始トス、文武天皇ノ朝ニハ、其使ヲバ五位以上ノ人ヲトシテ充ツル事ト制定セラレシガ、其後國家ノ大事ニハ、三位以上及ビ參議ヲ以テ使トスル事トナレリ、是ヲ公卿勅使ト云フ、公卿勅使ハ聖武天皇ノ朝ニ、右大臣正三位橘諸兄ヲ遣シヽニ起ル、又奉幣ニハ宣命アリ、天皇ノ御書ニ係レルモノヲ宸筆ノ宣命ト云フ、一條天皇ノ朝ニ、神鏡火災ニ罹リシカバ、宣命ヲ親書シテ告ゲ奉リ給ヘリ、宸筆ノ宣命此ニ始マル、凡ソ勅使發遣ノ日ハ、上卿宣命ヲ捧ゲテ之ニ付シ、天皇親ラ能ク申シテ奉レト勅シ給フ、幼主ノ時ハ、攝政代リテ勅語ヲ傳フ、宸筆ノ宣命モ攝政ノ代書スル事アリ、亦稱シテ宸筆ノ宣命ト云フ、玆ニ宸筆宣命ヲ奉齎スル所ノ、公卿勅使ノ一邊ニ就キテ、臨時奉幣ノ狀ヲ言ハンニ、勅使ハ奉使ノ命ヲ承ケテヨリ、毎日齋戒沐浴シ、其發遣セラルヽヤ、王氏中臣齋部卜部ノ四姓之ニ隨ヒ、既ニ神境ニ至レバ、先ヅ豐受大神宮ニ參リ、次ニ皇大神宮ニ參ル、中臣先ヅ宣命ヲ讀ミ奉リ、宸筆ノ宣命ハ、次ニ勅使讀ミ奉リ、畢リテ禰宜之ヲ執リ裂キテ火ニ投ズ、其宣命ヲ燒クハ、亦豫テ口勅ヲ奉ズルニ依リテナリ、既ニシ

〔大神宮諸雜事記 二〕永承元年春之頃、豐受大神宮御氣殿貂參入テ、二宮朝夕御膳物ヲ悉喰散リ、因之宮人神主內人等相構天雖塞穴ヲ、件御膳猶每日喰損、仍一貂狩出天雖打殺、五六十乃貂倍來更不留、仍宮司兼日御材木造儲天、一時之內天井奉造リ、是則雖有非例事、爲防件貂也、但件夫工宮司以淨衣充下、所令勤仕也、

〔兵範記〕仁安四年(〇嘉應元年)二月十七日甲辰、今日左大將(〇藤原師長)著仗座、(〇中略)次被申行軒廊御卜、去年十二月十七日、大神宮朝夕御饌被引散事、件恠異、先被問先例官外記、次被行御卜也、

〔玉海〕承安五年(〇安元元年)二月十一日癸亥、祈年穀奉幣也、(〇中略)豐受宮朝夕御膳荷前鼠虫喰損事等、可載大神宮幣別、(〇下略)

主以去承和六年九月廿七日、依汚穢之過怠、科上祓、五箇月之間停止釐務、解却職掌、以同七年正月廿八日、被還復本職畢、即其宣旨偁、左辨官下伊勢大神宮、應令依例職掌供奉豐受宮神主土主事、右得今月十六日宮司眞仲解狀云、豪去九月廿七日宣旨偁、可且科上祓、祓清彼家口共其身、且停止五箇月間職掌、豐受神宮禰宜神主汚穢過怠事、須永解却見任也、然而皇大神宮事、異諸社者、科上祓、且祓清家口共其身、且可令停止五箇月間職掌供奉、追任官裁從事、國并大神宮宜承知、依宜行之者、去九月以後、已及于五箇月、不令從事者、有限宮中神事、供奉朝夕御膳勤、何無其恐哉、望請官裁、隨裁報預仕神事、令國家祈禱者、左大臣宣、奉勅依請、令如本供奉於職掌、國并大神宮司承知、依宜行之者、其後限十箇年、又件死穢事出來、科大祓被解任也、

〔大神宮諸雜事記 二〕治曆四年二月、祈年祭使少副元範參下也、而臨于八日曉景天、豐受大神宮一禰宜康雄神主、宮司仁送消息狀、今月八日辛亥、是神宮恒神態也、而荒垣外御氣殿艮方當天、牛產事侍者、宮司宣衡朝臣以件書狀祭使觸聞之處返答云、大垣之內ニ如此穢氣出來侍仁、朝夕御饌之勤供奉哉否、又外宮穢氣出來之時ハ、過外宮天直道大神宮仁參入之例有哉否如何、神主依先例儘可注進也者、神主申先例天云、如此荒垣之外穢氣出來之時、尊不及官奏、只過三ケ日御饌供奉之例往古近代之流例、又臨時奉幣使恒例祭使乃當參宮之時天、未出來穢、仍前例難尋シ、又過外宮天、如此勅使直道被參入於大神宮之例未聞、〇下略

〔玉海〕承安五年〇安元元年十一月十四日辛酉、歲入左少辨兼光來下神宮文書等、〇中略

一祭主卿〇大中臣親隆言上、外宮禰宜等言上、去十月廿日申時、犬產穢依觸及宮中、自同日夕例御膳不供進事、左大史兼解

〔大神宮司神事供奉記 二〕仁治四年〇寛元元年七月四日與利、外宮觸穢沙汰出來云々、仍不供朝夕御饌云云、迄來月二日云々、

御饌行事

二人等出來、且打穢所取御贄、且凌礫神民等也者、随則以同七年二月三日、訴申於神祇官、仍奏聞於公家、随則左大臣宣、奉勅永可停止神宮寺仮高郡可被越宜旨已了、官使左大史小野宿禰也、

〔經信卿記〕承暦四年閏八月二日、大神宮申、前伊勢守廣經朝臣闕怠年魚鮓事、　五日、陣定也、被定伊勢豊受大神宮禰宜訴申、自正月至五月所供神膳年魚代闕怠事、〇下略

〔大神宮諸雜事記〕一神龜六年〇大皇字沙汰文所引同本紀作五年　正月十日、御饌物依例於豊受神宮調備、從彼賚參於大神宮之間、宇浦田山之迫道、死男爲烏犬被食、肉骨分散途中、然而忽依無通去之道、件御饌物乎賚徹天、合期供進已了、爰同年二月十三日、天皇俄御藥、仍令卜食神祇官陰陽寮勘申、巽方大神依死穢不淨之咎所祟給也者、即下賜宣旨於國司、大神宮被搜糺之處、件浦田坂死人之條、依實注申、随則同三月十三日、依右大臣宣、奉勅下勅使、且被謝遣件不淨之由、且彼日御饌賚參豊受宮大物忌父止補、神主川麻呂、御炊內人神主弘美、及物忌子等、進怠狀、科大祓、解却見任了、其後依宣旨卜定、豊受神宮新建立御饌殿、可令供奉大神宮朝夕御饌之由、神祇官陰陽寮共卜申既了、仍宮司千上蒙別宣旨、致不日功、豊受宮外院建立御饌殿一字、瑞垣一重、自爾以降、於件殿供進朝夕御饌物、今號御饌殿是也、永停止賚參之勤、

天長三年七月十三日、宮司菅生道成科大祓解任、事發以去六月十一日、豊受大神宮朝御饌汚穢已畢、依過怠狀、大物忌父子宮司幷三人、各科大祓解任也、但禰宜科上祓、祓清供奉、而間宮司以同日遭父喪畢、

仁壽二年八月十九日宣旨云、左辨官下伊勢國大神宮司、應勘取進上豊受神宮禰宜外從五位下神主土主位記事、右依有彼宮神之祟可勘申之由、被下宣旨於伊勢國幷大神宮司已了、爰去七月十日追勘狀云、禰宜土主、以去仁壽元年八月、觸死人穢、恣調備御膳供奉神事、其過怠違例之由、勘申言上具也、仍科大祓、可解却見任之由畢者、右大臣宣、奉勅仰彼宮付祓使、應勘進土主位記、随科大祓、抑土

山田原村者地下山ニテ苅申候

溝口村者地下山ニテ苅申候

右之通村々仕来ニテ御座候

一御竈御黒目年中五ヶ度

正月　三月　六月　九月　十一月

右五ヶ月神役人順番ニテ御竈御黒目木一ヶ度三拾貳束宛差出、神役人御竈御黒目奉仕、尤買木者不仕候、

右之通相違無相座候、以上、〇以下缺損

〔御塩殿神庫所藏古文書〕廳宣　權禰宜文清盛光神主

可早致問答沙汰〇中略日次朝夕御饌御塩以下式日神役由事

副下　申狀具書

右當御厨〇御厨二見者、爲二宮朝夕御饌御塩料所、嚴重異他之神領也、因玆世上動亂之間、軍勢甲乙人等終以不致亂入狼藉者也、而如狀者今明日冷泉殿爲泊浦御入、大將以下可有御寄宿當御厨之由風聞云々、若軍勢及亂入狼藉、有穢氣不淨之事者、朝夕御饌御塩忽令闕如歟、早觸申事由於大將御方、遂問答止軍勢寄宿之儀、重役人等成安堵可備進日次朝夕御饌御塩以下神役之狀、所宣如件、以宣、

正平七年十月廿三日〇以下署名略

〔大神宮諸雜事記〕一寶龜六年六月五日、神祇〇紙官行民石部楯桙同吉見私安良等、宇逢鹿瀬志天漁鮎之間、逢鹿瀬寺小法師三人自寺出來恣打破楯桙等已了、仍楯桙等訴申於司廳、申文云、二所大神宮朝夕御膳料漁進依有例役、各隨身網鉤等、行臨逢鹿瀬川爲漁之程、件寺法師三人、幷別當安泰之童子

御鹽

之處、本處乃神事違例也、又疾病兵革等也、就中公家尤可レ愼御也者、

〔豐受皇大神宮年中行事今式〕正月例

元日

御饌米（毎日二斗四升、一旬凡二石四斗、一月凡七石二斗、如二小月一則除二二斗四升一、而六石九斗六升也、一年平大小凡八十四石九斗六升也、）

右二品一禰宜遣二于母良一

〔豐受皇大神宮年中行事今式〕正月例

堅鹽（二割）

右二見御鹽燒役人燒備之、餽二于子等館一、（毎月朔日、十一日、二十一日續レ之、一月凡六割、一年凡七十二割也、）

〔二見鄕舊記〕乍レ恐奉二差上一御鹽勤行之覺

一壹ヶ年　西村神役人七拾四人

一壹ヶ年　庄村神役人五拾九人

一壹ヶ年　江村神役人拾五人

半年者　山田原村神役人拾六人

内　溝口村神役人六人

半年者　三津村神役人三拾五人

右御鹽御荒燒柴之儀、凡三百束餘、

西村者地下山ニテ苅申候

庄村者地下山ニテ苅申候

江村者地下山ニテ苅申候

三津村者地下山ニテ苅申候

御饌

日申刻有ニ口氣ー官卜申云、神事依ニ不信穢氣所ー致之上、可ニ有ニ天下口舌病事ー者、寮占云、神事不信不淨之上、可ヽ有ニ御藥事一者、　九月十三日丙辰、亥時許參內、是依ヽ可ヽ行ニ軒廊御卜一也、招ニ藏人國能一奏ニ事由一後行ヽ之、大神宮朝夕御膳御井水減失事、去七月十八日官兼政、基行、兼俊、寮光平、家栄、參仕、官卜申云、神事不信不淨之上公家御愼、天下口舌者、寮占申云、神事不信不淨者、召ニ外記ー宮ニ入御卜形ー付ニ本職事藏人辨眞光ー退出了、兼政密語云、公家御愼重者、

〔吉記〕承安四年九月八日壬辰、光雅申、神宮外宮御井水減事、○中略仰已上任ニ御卜趣ー殊可ニ祈請ー申由可ヽ仰ニ祭主ー且又任ニ官外記例ー例幣之次被ヽ載ニ宣命辭別一可ヽ宜歟、

〔風雅和歌集神祇十九〕豐受大神宮にて立春の日よめる　度會家行

をしほ井をけふ若水に汲みそめて御あへたむくる春は來にけり

神祇を　度會延誠

世々を經てくむともつきじ久方のあめよりうつすをしほ井の水

〔詠大神宮二所神祇百首和歌〕山家

山里ノ朝氣ノ水ヲ結身モ御井ノ神ノ惠トハシレ

彼御井ノ御事、自ニ天上ー結降坐、始ハ筑紫日向國ニ居置、其後丹波國氷沼云處ニ奉ヽ移、其後伊勢國山田原ニ移祝置、倭姬命紀ニ曰、天之眞井ノ水ヲ呑、長田ノ稻ノ種ヲ食、神恩忝トモアマリアリ、

〔大神宮諸雜事記二〕康平三年七月十四日、豐受大神宮朝夕御饌、依ヽ例天御氣殿仁膳進上了、而二宮正體乃御飯十六坏之內、二坏失給了、依ニ任宮司神主注文上奏ー爰被ヽ令ニ卜食ー之處、勘申云、依ニ神事違例ー所ニ祟給ー也、又公家重可ヽ令ニ愼給ー也云々、　十二月十三日、豐受大神宮乃御氣殿備進禮、御饌乃御飯六坏已失給利、仍上奏之處、卜申云、本所弁齋內親王殊可ヽ令ニ愼給ー也、又天下病患飢渴兵革事等可ヽ有歟者云々、　四年五月十二日、同御氣殿天、如前御饌乃御飯廿四坏失給了、仍上奏、隨則又被ヽ令ニ卜食ー

下天獻時仁、皇御孫命詔天、從何道曾參上志止問給、申久、大橋波須賓大神并皇御孫命乃天降坐乎恐天、從小橋參上支止申時、詔久、後仁毛恐仕奉事勇止乎志詔天、天牟羅雲命、天二上命、後小橋命止三名賜也、又云、其後豐受神宮乃坤方乃岡片岸爾、新堀御井氐、天忍井水乎入加氐、當朝之水爾和合氐、末之世乃御膳調備料爾移置給水也、

一水干事

本記云、其水大旱魃年毎不涸、其下二丈許下天、底有水田、其田和旱魃損爪禮止毛、此御井乃水和專不干恒出、異佐之事不過於是、又他用更不可用之、

寬平八年三月之頃、件御井水俄干失之時爾、神宮司神主共上奏之日、且差勅使天令祈申給比、且大物忌父三人科上祓、祓清被令供奉、

〔大神宮諸雜事記二〕永承五年六月十一日、朝乃御饌、令頂持於大物忌父兼用之子傍物忌父氏助吉元等、其持參之間、奉泛穢已了、仍上奏已了、　七月一日、宣旨併應注進神事違例也者云々不記、件違例去月十一日、日御饌奉誤事ヲ被令卜食依勘申也、件神事違例條々中、永承二年春頃ヨリ、御饌料乃御井水旱失已了、仍土ノ宮乃御前乃水汲天、御饌ヲ備進也、抑皇大神宮天降御之時、始天御饌ヲ備進乃水非當朝乃水、天村雲命ノ大神乃詔勅ヲ蒙天、高天原乃天忍石乃長井水ヲ持下天、其上分ヲ八盞盛備進天、殘ノ水以、天忍井水宜天、豐受神宮乃坤方ノ岡ノ片岸御井ヲ新堀天、其御井底、天忍井水ヲ入加天、當朝ノ水ニ和合シテ、末ノ世ノ御饌備進料移置給水也、仍以被水天、自爾以降、所奉調御饌也、但以去寬平八年三月之頃、件御井水俄干失之時、禰宜等上奏之日、且差勅使令祈申給、且大物忌父三人科上祓祓清、被令供奉之由具也　八月十七日、勅使參宮、正親正成清王、中臣權大祐惟經、宣命狀件御饌奉誤之由乃御祈也、

〔中右記〕元永二年五月廿日、今夕有軒廊御卜、治部卿被行云々、是伊勢外宮御膳料御井水、四月十九

靜、〔此云志都賀爾、是止其扈從而令隨意致參宮也、此不限今日、年中朝夕皆如之、〕而後詣于本宮、著座于石壺、〔○中略〕座定皆伏拜、既而〔○中略〕自一禰宜秩、揖還行、次權官、次物忌父等、皆秩禮從行、將到別宮遙拜所、一禰宜顧看其扈從之禰宜權官言曰、向、〔向此云牟嘉比賀、是令止其扈從而得直參別宮也、下遙拜倣之、○中略〕而後遙拜別宮、〔拜別宮之次如今朝、但無拍手、〕而到木柴垣之下、乾餟重跪拜、〔○下略〕

〔祭祀集覽〕二御饌調進次第〔○中略〕

每朝夕寅申二時、奉調進兩宮及相殿御饌、〔○中略〕朝夕御饌調進役人者、禰宜一人、子良一人、大物忌父一人、御炊一人、御鹽燒一人、副物忌一人、都六人也、各宿齋館、而副物忌炊御饌于忌火屋殿、御鹽燒灑御鹽湯、御炊舁御饌机、大物忌父從御机、禰宜立御先而警蹕、子良採御饌物昇殿、〔○御饌殿〕而如式供進之、各所奉神拜也、佳節大祭之時者、番外之禰宜物忌咸供奉、謂之總御膳也、

朝夕供進御饌者、黑米蒸飯、二見浦堅鹽、天忍井御水、是三種也、但佳節大祭之日者、右之外供物種々相加之、

御水

〔神宮雜例集〕一御井社事

一始事

本記〔○大同本紀〕云、皇大神宮、皇孫之命天降坐時爾、天牟羅雲命御前立天、天降仕奉時爾、皇御孫命、天牟羅雲命乎召詔久、食國乃水波未熟荒水爾在介利、故御祖命御許爾參上、此由申天來止詔、即天牟羅雲命參上天、御祖御前爾皇御孫命乃申上給事乎子細申上時、御祖尊詔久、雖爾奉牟致波行奉下天在止母、水取致遺天在介利、何神乎加奉下牟止思間爾、勇乎久志參上來止詔天、天忍石乃長井乃水乎取、八盛天薦給支、此水持下天、皇大神乃御饌爾八盛、又皇御孫命乃御水仁八盛獻天、遺水波天忍水止天、食國乃水於留濃和天獻初、又御伴爾天降奉仕神等八十友乃諸人仁毛、斯水乎令飲詔天下奉支、即受賜天持參

物忌、并度會郡徭丁、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡度會宮禰宜內人等、依例供進大神宮及度會宮朝夕御膳、餘宮不供、其御膳殿年料所須、絹二匹、布八端、東席三枚、食單布二端、食薦三枚、神宮司充之、

〔古老口實傳〕一御饌番禰宜前夜參宿候也、番日記以後交替告知也、番日記以前可有思慮也云々、○中略

一朝夕御饌供進最中不神拜也、可有思慮事也、

故人云、朝夕御饌供進之時、參籠之仁等不食事是恭敬之至也云々、故止諸音聲等云々、能々可有思慮也、○又見永正記

〔豐受皇大神宮年中行事今式〕正月例

元日　夕御饌

申刻、一禰宜衣冠子等布衣物忌父等大物忌父一臈著衣冠、御炊物忌父一座、御鹽燒物忌父一座、副物忌一人各著狩衣、至于十一日朝御饌勤仕之、御鹽之上番、每月上旬皆然、是物忌父之分番也、等勤仕之、物忌父等調饌具而待一禰宜、一禰宜出館進步、禰宜衣冠權官狩衣扈從禰宜權官扈從、並祝部番也、自二月無此事、二禰宜以下番亦皆如此、比過於子等館、荷用往館前、言御著、御著此云於部從也、此不限今日、年中朝夕皆如此、物忌父等稱唯、而出候于御炊殿前、時一禰宜歷木柴垣之北、到御炊殿前之石壺、而卓立北面、所扈從之禰宜權官到木柴垣之外而列居、時副物忌入御炊殿、以膳案舁居殿前、而褰幕巾、檢其內、每日之候其側南面、時一禰宜蹲踞、次御炊物忌父倚膳案下而蹲踞、皆端拜、次御鹽燒物忌父振灌鹽湯、一禰宜前驅、警蹕於御饌供進、則皆如朝御饌勤仕也、所扈從禰宜者入于木柴垣內、○中略權官蹲踞于木柴垣外、而聽一禰宜物忌等御饌勤仕、拍手之音則皆端拜凝念、既而禰宜出木柴垣之南路、○中略外頭而列踞南面西上、權官亦列踞、其下一禰宜歸到著石壺北面、物忌父等列踞于御饌口之南頰、北面東上、膳案入御炊殿而後鳴木版、皆端拜、既而一禰宜歷木柴垣之南赴參道、禰宜權官物忌父等皆相從、一禰宜揖其相從者言曰

儀式

伴神三前御坐下奉流、大佐々命乃定奉拔穗田乎、從春始神主等勞作天、拔穗爾拔天、神主乃女子等未夫婚乎物忌爾定、令春炊戴持、神主御前追天、物忌子乎御饌殿奉入天、土師物忌之造進御器爾令盛奉、奉了天物忌去出、神主物忌乎率、其殿前侍祈禱白久、朝庭天皇常石堅石爾護幸江奉賜比、百官爾仕奉人、及天下四方國人民、平爾慈給止申拜奉、天照坐皇大神八度、止由居大神八度、御伴神八度、毎日朝夕爾供奉、又三時祭波毎宮夕朝供奉、此乎由貴奉夜止號也、

〔止由氣宮儀式帳〕二所大神朝御饌夕御饌供奉行事

御饌殿一宇　用物肆種

調絹貳匹 御帳并二所大神及相殿神御坐料

調布捌端 殿内天井壁代、二所大神及相殿神坐下敷、并敷布御巾内等料、

寙席參枚 二所大神御壁代敷料、并相殿神御料、

麻席參枚 二所大神御饌、相殿御饌料、

右件用物、大神宮司年別九月祭所宛奉、

供膳物

天照坐皇大神御前、御水四毛比、御飯二八具、御鹽四坏、御贄等、

止由氣大神御前、御水四毛比、御飯二八具、御鹽四坏、御贄等、

相殿神三前、御水六毛比、御飯三八具、御鹽六坏、御贄等、

右大物忌父我佃奉拔穗乃御田稻乎、先穗乎波拔穗爾拔氏、九月神嘗祭八荷供奉、一荷八把懸然所遺稻乎以氏、將來至于九月十四日、御炊物忌爾令舂炊氏、御鹽燒物忌乃燒奉御鹽、并志摩國神戸人夫等奉進御贄等乎持氏、御炊物忌爾令頂持、大物忌御机副氏、禰宜大内人等御前追氏、御饌殿乃前爾持參入氏、大物忌御炊物忌乎奉入氏、日別二度奉畢時、三八遍拜奉罷退、此御饌器造奉土師

總載

朝夕御饌

毎日朝夕神饌ヲ調ジテ兩宮ニ供ズ、之ヲ朝夕御饌ト云フ、豐受大神宮ノ東北角ニ御饌殿アリ、乃チ二所大神宮ノ御饌ヲ供ズル所ナリ、

〔止由氣宮儀式帳〕一等由氣大神宮院事

天照坐皇大神始巻向玉城宮御宇天皇〇景行御世、國々處々大宮處求賜時、度會乃宇治乃伊須々乃河上乃大宮供奉、爾時大長谷天皇〇雄略御夢爾誨覺賜天、吾高天原坐氏見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴、然吾一所耳坐波甚苦、加以大御饌毛安不聞食坐故爾、丹波國比治乃眞奈井爾坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支、爾時天皇驚悟賜氏、卽從丹波國令行幸氏、度會乃山田原下石根爾宮柱太知立、高天原爾知疑高知氏、宮定齋仕奉始支、是以御饌殿造奉氏、天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕大御饌乎日別供奉、

〔神宮雜例集〕一二所大神宮朝夕御饌事

一供奉始事

大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四ヶ條內、朝夕御饌條云、〇中略雄略天皇御夢爾皇大神乃敎覺給久、高天原坐、我見志末岐宮處爾鎭理坐天後經年間、吾一所耳坐禮波、御饌安不聞食、吾高天原在時、素戔嗚尊帶十握劒索取、三段打折爲所生三女神乎、葦原中國宇佐島降居道中奉助天孫、而爲天孫所叅止〇叅恐祭誤詔之神、今丹波國與佐乃比治乃眞井坐、道主王子八乎止女乃齋奉、御饌都神止由居乃神乎、吾坐國欲誨覺給支、爾時天皇驚給、度會神主等先祖大佐々命召天、差使布理奉止宣支、仍退往布理奉支、是豐受大神也、卽度會乃山田原爾荒御魂宮和御魂宮造奉天、令鎭理定理坐、其宮之內艮角御饌殿乎造立天、其殿內爾天照坐皇大神御坐奉東方、止由居大神御坐奉西方、又御

造儲雜器事

結机八具　板机十一前　机代折櫃八十合　中折櫃三百合　魚机十一足　高机八足　中取十足　木杓廿柄　箸廿柄　交易土師雜器四千五百口

右三節祭供給儲備、禰宜大內人幷物忌物忌父諸內人等、各戶人率以氐、旁造雜器明松薪、處々山野海河散遣、於志摩國買交易種々味物、儲備仕奉、

〔止由氣宮儀式帳〕一年中三節祭時供給儲備事

合貳仟肆佰參拾玖具

結机八具、上机九具、板机十五前、机代二百十前、中折櫃七百五十合、下折櫃二百五十四合、裹飯千二百餘、六月祭料七百九十八具、〇中略　十二月祭料如六月祭之、

齋內親王御膳二具、結机造仕奉、齋宮寮長官、國介內侍幷三人料、上板机三具、副机幷六位已上国司官一人御母四人幷五人料、板机五前、諸司官人幷一等女孺料、机代七十餘合、二等女孺幷諸司番上二箇郡司子弟及諸刀禰禰宜料、中折櫃二百卅合、官人已上從幷諸司擔夫已上及二箇郡歌女烏子名等料、下折櫃五十七合、裹飯四百裹、

已上六月祭之、〇中略

又十二月祭如六月祭之

造儲雜器

結机八具、板机十一前、机代折櫃六十合、中折櫃二百餘合、切机十足、高机八足、中取十足、木女神廿柄、箸廿柄、交易土師雜器四千餘口、右三節祭供給儲備、禰宜大內人幷物忌父小內人等、各戶人率以氐、旁造雜器明松薪、處々山野海河散遣、於志摩國買、交易種々味物、儲仕奉、

司

進納荷前御調糸佰捌拾伍勾陸兩事〈加二風宮御料四勾一定〉

百四十八勾六兩　見進

二勾　當國例進

三十五勾　在宮

右當祭料依レ例進二納於大神宮一如レ件

年號六月十七日　少司

權大司

大司大中臣朝臣〈在判〉

以上二通、司中人長、御館參寄之時渡レ之、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中三節祭時給儲備幷勞作雜器事

合貳仟肆佰參拾玖具

結机捌具　上板机玖具　中板机拾伍具　机代貳佰拾前　中折櫃七佰五拾合　下折櫃貳佰五拾四合　裹飯仟貳佰十五裹

六月祭料漆佰玖拾八具〈○中略〉十二月祭料如二六月祭一之

齋內親王御膳二具、結机造仕奉、齋宮寮頭內侍國介幷三人料、上板机三具、副机、幷六位以下國判官一人御母四人幷五人料、板机五前、諸司官人幷一等女孺料、机代七十一前、二等女孺幷諸司番上二箇郡司子弟及諸刀禰等料、中折櫃二百卅合、官人以下從幷諸司擔夫已上及二箇郡歌人歌女鳥子名等料、下折櫃五十七合、裹飯四百裹、已上六月祭之、〈○中略〉

十二月祭如二六月祭一之

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

六月例

六月月次祭爲供奉、大神宮司宛奉雜用物、

酒米十斛、神祭料二石、供給料米廿五石、鹽一石、麻十斤、大木綿四斤、大神酒十二缶、鐵一廷、炭六簡、

○按ズルニ、以前ニ書十二月月次祭幣物、並ニ六月月次祭ニ同ジ、故ニ略ス、

〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭十二月准此

大神宮赤引絲卌絇、木綿大七斤、麻大十二斤、酒米十石、米三石三斗、神酒廿缶、別缶三斗、當國十五缶、伊賀國二缶、尾張參河遠江等國各一缶、以二神税一釀造、雜贄廿荷、諸國所供、雜供料米十五石、鹽一石四斗、鐵一廷、

度會宮赤引絲卅絇、木綿大四斤、麻大十斤、酒米十石、米二石、神酒八缶、當國三缶、四國如上、雜贄八荷、雜供料米十五石、鹽一石四斗、鐵一廷、其所須神宮祭者、亦用二同物一、

〔宮司公文抄〕六月十六日同十七日二宮江送文案

司

進納荷前御調糸玖拾伍勾陸兩事加二土宮幷風宮御料各四勾一定

八十五勾六兩　見進

八勾　在宮

二勾　當國例進

右當祭料依例進納於豊受大神宮如件

年號六月十六日

少司

權大司

大司大中臣朝臣判在

之間、十神主ヲ召、相共奉開、送文衆村讀進、一殿六八十參、配膳祇承時延、神宮祇承不參、元親依遂電、無仁體、御遊六八十參、　十二月十七日、宮司氏長、神宮予二三四五六七八十、玉串貞重、祇承時本、神事如常、官幣無沙汰、御遊六十參、御火內人三人參、

○按ズルニ、此後月次官幣廢絕セシニヤ、本書應仁二年ヨリ、文明十八年ニ至ルマデノ記ニハ、宮司以下奉仕ノ事ノミアリテ、朝使參向ノ事見エズ、

〔皇大神宮儀式帳〕御調荷前供奉行事

赤引生糸四十斤（神郡度會郡調先糸）

右以五月卅日、御調專當郡司、幷調書生、及鄕長服長等、爲大解除、忌愼侍、亦郡內諸百姓等、人別私家解除淸氏、御調糸持參向大神宮司仁、卽大神宮司卜定氏、糸遣令編定、御調櫃入氏、鹽湯持氏淸氏、御調倉進納畢、以六月十七日朝時、從御調倉下氏、預度會多氣郡司幷調書生服長等、御前追持參入大神宮、供奉行事次、神服織神麻績御衣供奉行事同、

赤御調荷前絹一百匹

右絹勘備奉行事、赤引糸奉時止同、又荒祭宮月讀宮瀧原宮伊雜宮、供奉荷前絹、具注月記條、

一年中行事幷月記事

六月例

供奉赤引御調糸卅絇（供卜食、例度會郡所進、大神宮司）

祭料、大神宮司宛奉用物、酒作米十石、神祭料米三石三斗、木綿十斤、供給料米廿五石、鹽一石、庸廿一斤六兩、神酒廿缶、神御贄廿五荷、鐵一廷、六月月次祭行事爲供給、大神宮司初宛奉神酒料、並供給料米請氏、神酒幷人給料酒造奉、禰宜幷宇治大內人日祈內人以上三人、己之家養蠶乃糸一絇乎備奉氏、祭之日仁告刀申、天下百姓作食、五穀平助給祈申、

停官幣

中臣勸盃宮司之陪膳之役人參行也、事畢之後手有之、其後用手水、參御遊所、御遊之次第如例、廿一日、豐明神事幷旬參、豐明〈仁治〉、使大司供奉云云、齋王御著云云、

〔氏經卿神事記〕永享十三年〈○嘉吉元年〉十二月十七日、官幣延引、神宮如常、

嘉吉二年六月十七日、官幣延引、神宮如常、　十月五日、月次祭六月延引分、雖無兼日告知、神嘗祭被依不出來延引、先六月分、廿九日被成御敎書、卅日被發遣、今日此趣、自幣使以使者禰宜中被仰、仍二三五十從、予ハ灸治相殘、　三年六月十五日、贄海神事、予十俊尙〈九代〉經俊〈七代〉正秀〈六代〉守博〈一代〉經貞〈五代〉守春〈二代〉永尙〈三代〉氏綱〈四代〉參、小濱海士大鯛四喉進、鹿鹽鯛四喉進、神事如例、　與玉御占神事、三五六予十參、召立行直、　十六日、館祓、次河原御祓、一五予十參、五二鳥居ヨリ下向、自餘神拜御稻奉下等ニ參、同夜內外物忌等予之館ニ來、今夜御膳ノ八ケヲ雖被誂不出來之間、以代物可被下行、可奉成御事之由自長官承之、自餘物ナキ時、御事ヲ奉成事度々ノ例也、八ケノナキ事無例、可奉進御膳歟之申聞、二三神主館ニ參、此由可被申旨予意見、仍二神主館ニ參、此由申間ホンカ六被出之、以是進了、如此事令遲々雞鳴及二度、而告來、五予參、南鳥居邊參候時分六被參、御鹽湯ニ不相之間退出、瀧祭神事ヨリ五モ被從、次第如例、　十七日、月次祭官幣延引、宮司神宮予如常、自神事時分兩、東寶殿予參昇、勸盃御遊予十、雨儀御門下、

〔內宮子良館記〕延德二年庚戌十二月十六日夜、山田タメ田世古ヨリ火出テ、八日市場ニウツリ、宮後ニ移リ、家千間ニ餘リテ燒亡ス、福島ノ許ニテ人燒死スル間、三方村穢ニナル、宇治衆モ皆走ヨル間、可爲穢歟評定、事スマズシテ御クジヲ取奉レバ、クジオリザル間、七ケ日ノ穢ニ定ラル、然間十七日ノ神事、十八日私御饌已下、諸神事悉延引ス、

〔氏經卿神事記〕文正二年〈○應仁元年〉六月十七日、京都忩劇、合戰死人觸穢、依遷宮遲々、自兩宮支申間、月次官幣無下著、宮司氏長、神宮予二四五六七八九十、玉串貞次、物忌以下如常、予東寶殿ニ參、御鑰澁

幣使參、宮司皆參、盛房良國長則也、行列如例、雨降之間用唐笠、於宮河際御祓如例、參著當宮、大麻御鹽湯御火祇承等參勤、幣使波徘徊主神司殿、宮司參玉串所、用手水參、寮御玉串役、御火祇承相分、御玉串役畢之後、列立玉串所、如例、禰宜一行能、二元邦、四清章、五維行、六國忠、七興房、八行茂、供奉對拜之後、使宮司手水次第儀式如例、自當宮參著之刻限、雨止晴天之間、神事晴儀也、參著石壺、先使詔刀、次宮司詔刀、其後撤御榊之後、八度拜拍手神拜、別宮拜同前、其後使寮頭以下著一殿、宮司主神司中臣以下著主神司殿、饗膳如例、刀禰申之後手其後始之、使勸盃一禰宜、陪膳氏言神主、又八禰宜猶子、寮頭勸盃二禰宜、宮司勸盃四禰宜也、主神司中臣勸盃物忌用包也、饗膳畢、用手水參御遊所、御遊之次第如例、

今度御祭延引事、內宮外院燒亡之穢、迄十八日也、其上外宮又自十四日犬產穢也、十七日波雖過穢限、如式日內宮御祭與爲日並、爲今日歟、

廿日、內宮御祭、齋王御供奉、寮官頭以下各供奉、幣使供奉、宮司皆參、行列如例、參著當宮、御祓如例、其後參入之處、齋王二鳥居乎入御之折節也、仍暫徘徊之後、大麻御鹽湯、御火祇承參勤、卽參入、幣使波如例逗留一殿前、宮司相待寮御玉串刻限之間、祇候主神司殿、經暫參寄玉串所、以祇承之宮掌、相尋刻限之處、可參寄之由中臣返答云云、仍參勤、大司御鬘木綿、權大司御榊、少司御鹽湯也、持參之時、御火祇承有之、其後上座之禰宜申御玉串之指南之後、幣使宮司禰宜各列立玉串所、對拜之後手水、次幣取別、次木綿玉串供奉如常、其後參著石壺、先使詔刀、次宮司祝詞、次玉串行事之後、大司二禰宜參內院、是去十一日外院燒亡之時、依恐擬奉開東寶殿之間、爲彼御封云云、東寶殿波御戶幷御鑰封書之云云、西寶殿波御鑰御封許云云、歸著彼兩人之後、八度拜拍手神拜、別宮拜如例、其後脫鬘木綿、使幷寮頭以下著一殿、禰宜同著、二延季、三延成、四氏俊、五成行、七永光也、宮司幷主神司中臣以下著主神司殿、刀禰申之後饗膳始之、使勸盃二禰宜、寮頭勸盃三禰宜歟、爲宮司之勸盃七禰宜來主神司殿、

王中臣少祐輔長也、抑參宮之間、去年十二月御祭、權少副共々仁石壺著天、先十二月御幣乃詔刀申了、　四年十二月御祭、祭主元範朝臣參宮也、抑祭主以去十一月大嘗會之日、任先例加階正五位下、爰今月官幣請天退出之後、同日乃未時許、內裏燒亡了、至于祭主者、依例十五日、到著於離宮院之間、大司公義、權司信通、少司如範、司中雜職人乃安匡檢非違使、總上中下併以天祭主御許見參了、以酉時許、例大祓事擬被奉仕之間、神祇官盤取一人、隨身伯御消息一封天到來、件消息狀云、日上傳宣、奉勅儛、祭主元範之宿所、死人穢事有り、而隱忍天請預官幣天下向也云云者、至于官幣者、途中之便所置天、隨沙汰可左右也者、卽祭主之御坊參入之人々三員、上中下人々、併觸穢之內成了天、件大祓不勤仕、何況乎祭主宮司共參宮事停了、但式日有限、御祭乃事依不可懈怠、前々少司致時尋出天、司乃代官天トシ二宮祭庭乃事令勤仕了天、十八日解祭主、豊明乃神事者、度會川乃西頭、字大牛草天ニシ勤仕了、○中略爰祭主元範朝臣、依件沙汰、隨身官幣天シ、自去年十二月十五日、明二月廿六日天マ、離宮院祇候、其後二月廿一日、勅使參宮、使王俊淸、中臣主殿少允大中臣親長等也、件十二月御幣今度幣ヲ添、令進給之由具也、宣命狀不記、

〔伊勢公卿勅使雜例〕御祭式日延引例

承暦四年六月祭使、內裏有大祓、不被立、於御祭日者、宮司範祐任用宮司幷神主等、依例奉仕了、同月廿五日、被立伊勢使、辭別天申給波久、今月十一日、依例天月次祭神今食乎可行給止シ云止毛、彼間神祇官毛有穢氣天、其事延引セリ、仍天以今日、件等ノ祭乎遂行比氏、幣物乎調進之給布狀乎、神奈加耳毛安聞食天、四海八埏ヲ無爲穩留護惠給倍ト、恐牟毛申給波久止申、

〔大神宮司神事供奉記一〕延應二年○仁治元年十二月十九日辰時齋王御著離宮院、卽大祓神事、月次祭幣使神祇權少副隆世、寮頭親繼以下寮官等供奉云云、又大司盛房、權大司良國供奉云云、少司賴運參之間不供奉、仍用私祓入齋殿也、外宮由貴御饌今曉云云、同夕外宮御祭、齋王御供奉、寮官各供奉、

馱落胎已畢、仍恐件穢氣不參宮、過七ヶ日、以同廿一日參宮、奉納官幣畢、爰傍官幷大中臣氏人等內奏云、皇大神宮御祭、式日有限、官幣進納之例、不過祭日者也、而祭主奧生朝臣、忝稱故障之由、乍著離宮院、更過七箇日參宮、奉納官幣、此神事違例也、若有穢氣者、可從公家裁下歟者、以同廿九日被下宣旨、祭主奧生、宮司時用等參上、於官庭陳申件馬落胎之由、爰祭主奧生辨申旨有譽無怠、卽奉公之忠、可被勸賞之由公卿僉議之由云々、

〔伊勢公卿勅使雜例〕中臣故障例

應和元年六月、月次祭使散位正六位上大中臣中理、有故障不參著、以他人改替、同七月廿六日奉幣使進發、宣命辭別天申給久、去六月乃月次乃祭仁、王從四位上神祇伯忠理、中臣散位正六位大中臣朝臣中理等チ差使天奉出賜比支、而中理途中爾依有故障天不參著奈利カ、以他人改替之間、頗違例乃事有ケリ、此由乎聞食天、同恐ミ恐ミモ御坐候留止無限久、此狀乎平久聞食天、無事故久護惠給止恐ミ恐ミモ申給ハ久申、

〔大神宮諸雜事記 二〕治暦二年十二月、祭使權少副公輔朝臣參下、齋內親王依例參著離宮院、十五日大祓依例了、以十六日朝勅使以檢非違使時武、差使神主許示云、昨日自飯高驛家利立天、御幣令持、神部等前障立天參下、勅使遙曳後天參下之間、前立衞士返對申云、著綴牛皮兵仗等之者、主從四人打合天、專不致禮敬シ天過通候之程、執幣衞士乃咎侍之間、件騎兵等不論是非、衞士射危天罷過也、後後來郎等乃男共、此由チ令仰知之程、權追捕使藤原高行被射落已了、又檢非違使武時加隨身男一人被刃損タリ、如此合戰之間、件騎兵一人被射殺已了、又步兵二人捕得之由云云、此旣後陣來レリ、下人等乃所爲也、仍乍驚御幣隨身シ天、前立天進來也者、卽神主乃返答云久、件事左右禰宜等難沙汰事也、執幣衞士最前被射危ナリ、縱雖不中件箭ドモ、猶被參宮有憚、加之後々人々所爲、合戰之程射殺人セリ、此尤不穩事也、被參宮事、可依公家定也者、仍參宮留畢天、勅使注解狀言上已了、　三年二月十日、勅使

延引

床、奉取立御楯等退下、其後宮司禰宜歸著石壺、八度拜拍手神拜、別宮神拜同、其後殿饗木綿、使著一殿、寮頭以下同著、宮司幷主神司中臣以下著主神司殿、饗膳如例、使勸盃一禰宜、寮頭勸盃二禰宜、宮司勸盃入禰宜來向也、事畢之後、用手水、參御遊所、倭舞之次第如例、先宮司、次中臣、次禰宜宗經、延季、延成、氏俊、成行、重仲、永光、經元皆參也、其後幣使寮頭、其後御節、次鳥名子所舞也、事畢之後各退出、十八日、豐明神事、幣使供奉、宮司大司一人供奉、權大司不參、少司雖參向、聊有所勞、神事以前下向、

〔氏經卿神事記〕永享六年六月十五日、贄海神事、七八予十、五代清秦、三代永保、六代經元、四代氏久、一代守秀、二代秦言、如常、夕與玉神態、一二三四六七八予十、玉串物忌、次御占同前、權任不參、　十六日、御巫竈祓、散供米壹升、尺魚清宮等、次河原祓、在二奉物一　一二三四六七八予十、玉串貞次、物忌等參、次神拜、御稻檢知一二六八予、同夜御饌宵曉瀧祭櫻宮祭禮等如常、二六七八予十參、　十七日、月次祭、幣使賴忠、宮司長盛、一二三四六七八予十、勸盃八予、御遊八予十、

〔內宮子良館記〕當祭明應五年丙辰十二月御饌事、御田依河成、御稻一向不參、然間自長官米三斗御參セ有ヲ以テ、八方へ御饌御巫ニテ奉調者也、一方米五升二三、荒祭四升ツヽ、別宮へ三升ツヽ、御巫方へ一升也、

永正元年甲子六月御祭、當祭御笥料所ノ錯亂ニヨリ御笥不參、然所神慮叵測ニヨリ、傍官六人可有出錢、御請ニヨリ御饌參、仍後日出錢七百文、此內一繭餉重出納人數也、　五年戊辰六月御祭、宮司則長、二月他界、仍未補之間、當祭ニ荷前不參、然間御門不開、御玉串計奉納、同御遊モナシ、

〔伊勢公卿勅使雜例〕御祭式日延引例

延喜十一年六月祭日、有馬斃損穢、朝使齋內親王不被參入二宮、但過穢日供奉事云云、子細見承平五年宣旨也、

〔大神宮諸雜事記　一〕承平五年六月、祭使祭主神祇大副奧生參著離宮院、而十五日夜、彼宿房仁隨身

天、且召件僞行内人等、可沙汰是非、且寮頭上奏於公家云云、

〔大神宮司神事供奉記 一〕延應二年〈○仁治元年〉六月十五日夕、大祓神事、齋王御著河原殿、幣使神祇權少副隆時朝臣、幷寮頭以下著外九丈殿、宮司皆參、盛房良國長則也、幷主神司中臣以下、著外主神司殿、儀式先手水、其後御祓、主神司中臣勤之、次刀禰申、次直會後手之後取出也、其後齋王入御内院、幣使歸著館舍院、宮司各著齋殿、　十六日、外宮御祭、齋王御參宮、寮官等供奉、幣使參、宮司皆參、行列如常、於宮河際御祓如例、占部遲參之間、幣神部勤仕也、參著當宮、自二鳥居祇承四人御火四人參勤、大麻御鹽湯有之、先宮司爲寮御玉串參玉串所、幣使徘徊主神司殿之邊、御火祇承相分、自中臣之許催有之、仍用手水參、大司御蘰木綿、權大司御榊、少司御鹽湯、持參之進如例、其後歸立玉串所、幣使進寄、禰宜一行能、二元邦、五維行、七行茂、供奉對拜之後、使宮司手水、次讀合、次木綿玉串供奉、其後相尋寮御供奉之刻限參著石壺、先使詔刀、次宮司祝詞、次玉串〈乎〉撤、次御封申之後、禰宜捧東寶殿御鑰參内院、其後先荷前、宮司同參、祇候例所、其後二禰宜昇殿、奉納荷前、其後歸著石壺、八度拜拍手神拜、別宮拜同、其後使著一殿、寮頭以下著南座、禰宜如例、宮司主神司中臣以下、著主神司殿、饗膳如例、使勸盃一禰宜、寮頭勸盃二禰宜、宮司勸盃五禰宜也、事畢之後、用手水參御遊所、御遊次第如例、先宮司倭舞、次中臣、次禰宜、其後又幣使、次寮頭也、其後御節、其後鳥名子所舞也、彼畢之後退出也、歸著齋殿、　十七日、内宮御祭、齋王御參、寮官等供奉同前、幣使參、宮司皆參、行列如例、於例所御祓如例、自二鳥居祇承四人御火四人參勤、大麻御鹽湯有之、幣使〈波〉逗留一殿之邊、宮司先爲寮御玉串參玉串所之間、御火祇承相分二人充也、用手水之後、大司御蘰木綿、權司御榊、少司御鹽湯、持參之、任中臣指南、節折取之、其後又歸玉串所、經暫一禰宜寮御玉串以後、幣使進寄〈天〉列立如例、對拜之後、使宮司手水、次官幣取別、〈幣送文取落歟之間、古文被相尋之處、及遲々之間令略畢、〉其後玉串供奉如例、參著石壺使宮司詔刀之後、玉串行事、次御封申之後、禰宜參内院、宮司同參、二禰宜奉開東寶殿、奉納荷前御調如例、其後參正殿御前、六禰宜參昇大

有穢氣之由、從本道參宮了、同七八月間、天皇御所ニ物怪頻也、仍令卜食之處、神祇官陰陽寮勘申云、巽方大神依死穢事御祟歟、仍同年八月五日、下宣旨於大神宮司、被尋捜件死穢不淨之處、以上件六月死人事注申了、〇中略即六日祭使時常宮司良臣等科上祓、但禰宜內人等、違道依供奉貲薄之忠節、不科祓也、　四年六月十一日、大神宮坤方淵ニ、男子一人水溺死已了、禰宜以此由申送祭使幷宮司等、因之忽石田山之西麓新道作テ、齋內親王幷祭使宮司等參宮、但齋宮者一殿之西砌ニ御輿寄テ、九丈殿西砌ニ志テ、寮司共御祓了、祭使又同前也、

〔大神宮諸雜事記二〕永承四年六月御祭、齋內親王依例爲御參宮、被著於離宮院テ大祓之後、齋宮御汗殿下坐之、仍廿三日可被參宮之由一定畢、而間寮頭雅康朝臣被問於祭主永輔朝臣テ云、以去十五日午時許、大神宮神主等進寮牒狀云、至于寮頭女別當、不可被參宮也者、具不記、如件牒狀者、齋王御參宮之間、非常事可出來歟、如何者、祭主云、更不可被信用、早可被參宮也、仍以廿三日齋宮參宮參入ノ間、宮中二鳥居許、內人物忌等數十人、引率祝部等テ云、女別當幷彼家司ノ平三致重等、不可參入於宮中也者、爰寮方云、女別當依月障不被供奉、致重又不參入也者、仍無事被供奉已了、以丑時許、大神宮參宮給テ、齋王、齋王殿參入給テ、女房女官ハ後テ參入之間、荒祭神拜所、數多內人物忌等出來テ、毎手炬火テ、女別當幷平三致重等、號尋求之由、無止女房女官乃中ニ入亂テ尋求、因之內侍朝臣幷諸女房達退歸已了、隨卽齋內親王モ御出給、寮頭次第官人諸司共退返亦了、于時祭主命於二宮神主云、齋王參宮所出、亂行之企何者、神主陳狀云、寮頭女別當ノ被行之旨、奉爲神宮、非常事等條條也、何者大神宮御領、字志貴御薗預麻績近吉ヲ、女別當ノ家司平致重任意テ捕縛テ、且令食犬屎、且禁固其身テ、于今不免、又同御粥見御園司時季ヲ殺害セル犯人、丹生出山住人紀重常、同常晴爲直等也、而令號寮威テ、不被令糺正、又豈受大神宮御領、志摩國伊志賀所々見御厨ヲ、寮頭麻生御浦之內ト號テ、致執論テ、所被妨供祭之勤也、仍寮頭女別當不可被參宮之由所申行也者、仍祭主遣下文、

盥手シ、木綿鬘玉串ヲ執、進テ三鳥居ノ前、南側ニ卓立ス、別宮物忌松明ニ火ヲ燃シ、其主ル所ノ宮ニ携テ行、次ニ禰宜各玉串ヲ執、大司卓立ノ前ニテ禮シテ、三鳥居ノ內、左右ニ一禰宜先西側ニ立列立シテ、宮掌ヲ下自持、宮掌ヲ引進テ石壺ニ著居上次ニ一﨟秘密物ヲ捧、自餘物忌高案ヲ舁、玉串門ノ前ニ居テ、西側ニ著座シテ東面北上ス、次ニ大司石壺ニ著、祝詞ヲ宣、次ニ名召有テ、大司禰宜ノ玉串ヲ撤シ、次ニ一﨟御神拜ト啓シ、次ニ八度拜、次ニ別宮遙拜、次ニ五丈殿ノ饗應ニ至リ、總テ新年祭ノ如シ、事畢テ大司五丈殿ヲ出、殿ノ西ニテ祇承又盥水紙トヲ獻ズ、大司盥手シ、進テ御三御門ノ外ヲ經テ、東ノ鋪設ニ著座ス、禰宜モ亦鳥居ノ外ヨリ西ノ鋪設ニ著座ス、前此番大物忌父、衣冠子良相ヲ率テ、東側ノ鋪設ニ著座シテ西面ス、預切机ニ榊枝結附、酒ヲ小桶ニ實テ、小杓ヲ加ヘテ其座前ニ留、玉串門ノ前ニ鋪設ヲ展、大司起テ鳥居ヲ經、進テ鋪設ニ就、倭舞ヲ奏シテ後、子良ノ前ニ徃、物忌榊一葉ヲ執テ子良ニ授ク、子良兩手ニテ持テ、葉ノ中ヲ窪ム、物忌杓ヲ執テ酒ヲ盛、子良郎大司ニ呈ス、手一段ヲ拍テ、取テ飲ガ如クシテ座ニ復ル、次ニ禰宜進テ倭舞ヲシテ、柏酒ヲ飲コト前ノ如シ、此ヲ酒立ト謂、又直會酒トモ謂、又柏酒トモ謂、徃古ハ柏葉ニ酒ヲ盛リ、中世ヨリ榊葉ヲ用、又此行事ヲ御遊ト云リ、大司ハ此ヨリ歸去シ、禰宜ハ玉垣ノ東徑ヨリ廳舍ニ赴キ、南軒ノ下ノ鋪設ニ就テ南面ス、大物忌父、小土器一箇ヲ檜籠ニ載テ左手ニ持、醴酒ヲ杓ニ實テ右手ニ持、禰宜ノ前ニ蹲踞シテ勸ム、禰宜手一段ヲ拍テ飲、此ヲ後遊ト謂、事畢テ歸館ス、」

鳥子名舞

其職掌人城田郷ヨリ來ル、歌生笛生等ノ役人有、鳥子名ノ小童、古青摺ヲ著、今白丁ノ類ヲ著、玉串門ノ前ニ進ム、笛生笛ヲ吹テ、小童鳥子名舞ヲ奏、

〔大神宮諸雜事記 一〕寛平三年六月十四日、酉刻大神宮之乾方路頭雷電落、男一人、黑斑文牛一頭共、解斬已了、因以明十五日早朝、禰宜注子細、申送於祭使幷宮司之許、又了、禰宜內人等贄海仁供奉、郎達道天、從字石田山之西峰往反也、爰彼度祭使神祇少副大中臣時常幷宮司良臣等、於路頭號、不可

ス、時ニ一﨟來テ秘密物ヲ執、案上ニ置、番副物忌祓具ヲ辨備シ、一﨟案下ニ蹲踞シ、南面シテ祓ヲ修ス、副物忌祓串ヲ執テ、供具ノ諸器ヲ揮清ム、又物忌ヲ祓淸ム、次役人松明ヲ執、人長蝋ノ苞苴ヲ附ルノ青竹ヲ持、一﨟秘密物ヲ取、自餘物忌各供具ヲ捧テ進歩ス、荷用御鹽瓮ヲ揮清メ、各瑞垣ノ東徑ヲ經、玉串門ノ前ニ出、瑞垣門ヲ啓テ内院ニ入、其職掌ニ隨テ、由貴主基ノ御饌ヲ供進ス、事畢テ正殿ノ東側ニ列座シテ西面南上ス、副物忌御門ヲ出、伊弉諾拜所ノ南ニ蹲踞シテ、聲ヲ揚テ御内ノ御接内ト啓ス、禰宜權官座ヲ起テ參宮、神拜例ノ如クシ、木柴垣ノ南ヨリ入、玉垣ノ東徑ヲ經、玉串門ノ前ニ出、禰宜ハ内院ニ入、蹲踞シテ北面東上ス、權官ハ玉串門ノ外ニ留居、物忌又其所役ヲ卒テ一﨟座ヲ起、一禰宜ノ前ニ蹲踞シテ、御神拜ト云ヒ、禰宜八度拜ス、（引聲二回、不拍手、）權官其引聲ヲ聞テ拜ス、禰宜内院ヲ出、玉串門ノ前ノ鋪設ニ著座シテ北面西上ス、一﨟内院ヲ出テ、祝詞文ヲ一禰宜ニ獻ジテ内院ノ列ニ復ス、番副物忌御門ヲ鎖ス、一禰宜座ヲ起、進テ祝詞ヲ宣、皆俯伏ス、次ニ南向蹲踞シテ高宮ヲ拜シ、瑞垣ノ東徑ヨリ歸リ、御饌殿ノ西北ニ列立シテ西面南上ス、物忌供具ヲ撤シ、各明器ヲ持テ内院ヲ出畢ル、禰宜廳舍ノ南軒ノ下ニ到リ、鋪設ニ著座シテ南面西上ス、（權官先達テ北御門社ヲ拜シテ歸館ス、）時ニ御鹽燒物忌父、熨斗前菜蝶前ヲ栽ルノ檜籠切机ヲ各座ニ居、志乃世ヲ進メ、一﨟一禰宜ニ勸盃シ、傍官各傳飲シ、切机ヲ撤シテ歸館ス、

十六日　月次祭

禰宜前夜ヨリ齋館ニ參宿ス、酉時許、役人松明ヲ執來リ、荷用接内ヲ啓ス、禰宜（著東帶明衣、取木綿鬘、）權官（直垂、）進テ例所ニ列ヲ正シ、（著履、）玉串行事所ニ列立シテ東面北上ス、物忌（正副共衣冠、）頂居置所ノ高案ノ南ニ列立シテ北面東上ス、別宮物忌松明ヲ執テ南側ニ列立ス、一﨟司家ヨリ來ル所ノ、秘密物ト送文トヲ取テ案上ニ置、大司一鳥居ヨリ進ム、時ニ御鹽湯大麻、祇承前駈ヨリ行事所ノ座次ニ至リ、總テ祈年祭ノ如シ、禰宜對拜畢テ、一﨟送文ヲ一禰宜ニ獻ズ、一禰宜拜覽シテ政所ニ授ク、次ニ大司

アソバム、

第十一　ハマニイデヽ、アソブチドリナリ、アヤシナキ、コマツガウヘニ、アミナヲカレソ、

第十二　タチバナガモトニ、ミチヲフミチ、カウバシヤ、ワガヽヨエバゾ、ツマモソロフ、

已上十二首、次第如此畢之後、アマノオビ、アマノオビト三度申、

島名子等組手廻々後、各頭一所聚伏、其後起各手合後退出也、件職掌人、忌火屋殿御琴上退出也、次祭使退出、在御火祇承、但迄河原殿邊勤仕也、宮司從近代、南御門外方東脇立留暫在歸、仍神主方火祇承分遣也、次神主自四御門外方、以北爲上、向東列立、又始從頭次第寮官等、同以北爲上、向神主列立、神主寮祿給、（凡絹也）神主懸肩、自件御門參入、拜御寶前之後、寮御方一拜、自西御門退出也、次宮掌大內人、相具下部一兩人、齋王候殿西砌向東立、大少職掌人料寮祿請也、（庸布川紙等也）寮官等向合列立、計度例也、宮掌大內人請取、宮廳目代渡、仍次日分配例也、（邦今夜饗膳、職掌人等請寄云云役也、又酒者酒殿酒也、）

〔外宮神事著略 六月〕十五日　由貴

菅裁物忌、鳥居御門ゴトニ榊枝ヲ供ズ、亥時許役人松明ヲ執來、壹番役人按內ヲ啓ス、禰宜（衣冠）權官（直衣）往テ例所ニ列ヲ正シテ、別宮遙拜所ノ鋪設ニ著座シテ南面西上ス、初メヨリ祓具ヲ各座ニ設ケ、禰宜ノ座ニハ榊ノ小枝ヲ刺立、御巫內人（衣冠）鋪設ニ就テ東面ス、時ニ座ヲ起テ三石ノ前ニ往、南面シテ祓ヲ修ス、此ヲ川原祓ト謂、預祓串錢切散米ヲ設、祓畢テ祓串ヲ持、禰宜權官ヲ揮清ム、又三石ノ座ニ著、祓ヲ修ス、禰宜權官手一段ヲ拍、神歌ヲ唱テ拜ス、役人一人醴酒ヲ持來リ、又一人一禰宜ノ前ニ進テ勸盃ス、次ニ傍官傳飲ス、次ニ醴酒ヲ權官ノ前ニ持來ル、權二座居ナガラ、一座ニ勸盃シテ、次第ニ末座ヲ盡ス、次ニ役人二人、盥水ト紙トヲ禰宜權官ニ進ム、先是壹番役人按內ヲ啓ス、物忌（大物忌父三人、御炊物忌父一座衣冠、自餘物忌狩衣、）設置所ノ供具ヲ携テ高案ノ下ニ置、廳舍ノ檐下ニ蹲踞シテ南面西上ス、有爾土師器物忌（折烏帽子白丁）秘密物（又不見物ト云）ヲ持、傘ヲ啓キテ覆ヒ、卓立シテ南面シ、松火ヲ燃

人等、舞姬候殿東砌、以南爲上著也、又各爲大和舞奉仕、自四御門參入之時、宮掌大內人必御火白燭侍申、(謂之御火申)又各舞奉仕歸時、四御門內東腋、三津乃柏以酒請、口寄後柏笏取副、立御前一拜、自左歸著本座、(謂之酒立)件所敷小筵一枚、女官二人向西著之前、机一前立也、祝一人、(堅上社祝役)件柏以各每歸女官渡、而一人女官請取、今一人女官、机上小堝酒入置請也、其時以榊葉彼柏上灑也、但齋內親王御參宮之時、件酒立役、母良幷地祭物忌子良一人勤也、次司掌召寮掌三度、不申唯稱、又云御節遲、于時自齋王候殿、著裳唐衣女房二人、指扇於面、相並自件殿乾角出、御實前向拜之後、彼殿歸參也、次自舞姬殿、鳥名子所下部等、相具鳥名子等、於齋王候殿與舞姬候殿中間、融歌吹笛、又此職掌人之中二人、自四所職掌人之手、請取御琴持參會、其時播奉仕御歌十二首、

第一　アメナルヤ、ヤカリカナカナルヤ、ワレヒトノコ、サアレドモヤ、ヤカリカナカナルヤ、ワレヒトノコ、

第二　ミチノベノ、コタチバナヲ、フサヲリモツハ、タガコナルラム、

第三　トウトウミ、ミナサノヤマノ、シキガエダヲ、フサヲリモテ、ハキマロモトル、

第四　イヨヽトゾイフ、キミガヨハ、チヨトゾイフ、チヨトゾイフ、ムラサキノ、オビヲタレテ、イザヤアソバム、

第五　オホミヤノ、マヘノアラレス、ダレアラレアラレ、ムカカヨヘバ、ソツマモソロフ、

第六　オホミヤノ、マヘノカワノゴト、カハノナガサ、イノチモナガク、トミモシタマヘ、

第七　ヤマガハニ、スムヤヲシノメトリ、マシヤコノヨニ、ナヽタビ、ツマゴヒヤスル、

第八　ヤマガハニ、タテルクロメ、スコメ、マサフクヤ、ヨキコニ、テヲトリカケテ、イザヤアソバム、

第九　ミナミナキ、トリハカリニゾアル、アラレフリ、シモオクヨモ、ヨトモサダメズ、

第十　オホカハヤナギ、ハビロクテタテル、オホカハヤナギ、ヨキカコニ、テヲトリカケテ、イザヤ

方、祭使手水後、以件水獻也、今度手水役者、陪膳人也

抑無寮御參宮之時、宮司一殿南、以東爲上著也、又祇承檢非違使自西第二間南座、向北居也、司中

下部自後戸西方、向南南居廻也、仍上座主典向南、末座舗取等者向東也、

各手水之後參內院、次第、先祭使祭主宮司、自南御門參入、在御火祇承、次寮頭同自御門參入、次神主

自西御門參、四御門西脇平張內、宮司座西、以東爲上也、其次寮中臣著宮司與神主中也、其外寮官祭

使東著也、四所歌人等、宮司神主後祇候、抑祭使參入之時先吹笛、各著座之後龗歌吹笛、自忌火屋殿

請取御琴、搔之手、時司掌召寮掌三度、無唯稱、又司掌酒立遲云、無寮御參宮之時召宮掌、其次第如此、召尙不答、次敷半疊

一枚、齋王候殿與舞姬候殿中間北方爾敷也、件半疊敷并平張等、澁祭下部役也、件半疊跪在大和舞、先大司、次權司、次

少司也、各在大和舞勤仕、立座之時、司掌召各官位、宮司舞時御歌、當月ニ

　　ミナヅキノ、オヽヨソ衣、ヒザツキテ、ヨロヅヨマデモ、カナデアソバム、

次寮中臣舞、尙同御歌也、宮司并中臣、左右左舞也、先半疊跪一拜後差笏、舞之後、插笏一拜歸也、

次神主舞、其時御歌、六九十二月同歌也、神主右左、右左舞也

　　ミヤビトノ、サセルサカキヲ、我サシテ、ヨロヅヨマデニ、カナデアソバム、

神主大和舞奉仕之後、司掌召宮掌三度、三度云度、唯稱申、又司掌云、御半疊直侍、宮掌大內人答直侍、

卽以澁祭下部直樣仕也、

次祭使舞、御歌云、

　　大宮ノ、戸影ニキヰル、オキノ鳥、ソレヲミテ、ソヲノ荒タカ、トビカケルメリ、

次寮官舞、其時御歌、六九十二月同歌也、

　　大宮ノ、チギニオヒタル、ヤマカサキ、ヨロヅヲチヨニ、ツカヘマツラム、

各舞畢之後、司掌召宮掌、如前云三度、唯稱申、其時司掌云、直會成侍、宮掌大內人答成侍、抑宮掌大內

同于神御衣之時、仍不記、但於東寶殿之前、件赤曳荷前御調之糸之內、六所別宮、幷宮比矢乃波々木御料分進之、殘奉納也、宮廳目代司進納文讀也、其後各歸著本座、又鎰取內人衣冠御封畢、拜八度手兩端、又玉串大內人、爲奉納荒祭宮荷前御調糸立座、次第如御衣之時、祭使宮司等自南御門退出、神主從西御門退出、於荒祭神拜所、祭使幷宮司與神宮答拜八度手兩端、次玉串大內人、幷荒祭宮內人物忌等參彼宮也、次一禰宜相具御火祇承、從西御門歸參寮幣申、其次三所曹司幷寮頭幣申、傍官禰宜、於酒殿後、脫明衣、解鬘木綿、相待一禰宜、祭使著一殿、從後戶東也、向南在件殿前立明火、宮司主神司殿中間、以東爲上著、于時寮官等參彼殿、史生等六人燭火、寮頭一殿南座、向祭主著東方次助、次允等參著、又坤方砌史生等向北祇候、寮中臣、主神司殿宮司座西方座闕疊著、次同忌部、次宮主、次占部、次宮主代著也、皆東面也其次北副向南、寮神祇神部等參著、布衣中臣後向北祇承檢非違使二人著、次司中下部等著、布衣同向北參著也、在件殿北方宮司前立明火、抑一禰宜寮幣申時、自寮人之手、內物忌父請取一禰宜渡、三所曹司幷頭幣同前、件取次役、物忌父巡向勤仕云云、又寮幣者長串用紙挾也、而奉幣之後二殘○殘一本作挾一號舞姬分配、六禰宜等、每祭任巡向預例也、又三所曹司、幷頭進御幣等之中、一前之分、件取次役物忌父給預例、而近代者不取、一禰宜寮幣申之後、解脫鬘木綿明衣、相伴傍官禰宜一殿參、東座北爲上向西也、抑祭使幷宮司等之從坊、九丈殿也于時荒祭宮奉納荷前御調糸之後、彼宮大物忌父宮司前立、立明火副也荒祭宮御封畢申、古封作立破去、其後一殿立明火副、司寮刀禰申勤仕、其詞云、郡司申、御座參、於古、於利給刀禰、正五位下十一、從六位上十三、合七位無刀禰百世アマリ、

又姬刀禰七一參、於古於利給申、但寮無御參宮之時者、姬刀禰七詞者不申也、

其後從主神司殿、寮中臣始開手、又一殿請取叩、次酒坏、祭使勸坏一禰宜、寮頭勸坏二禰宜、大司勸坏三禰宜也、其後神主各歸著本座之後、直會饗膳也、陪膳役人、祭主手水役人、其外六位權禰宜大內人也、畢後自主神司殿中臣始後手、一殿同前也、其後各立座、於祭使者、一殿艮方在手水、宮司於主神司殿東用例也、寮頭一殿巽

持詔刀文奉祭使交替後物忌父抽笏一拜之後著本座、使立座八重榊前東方丸石壺跪、詔刀申、(但詔刀爲申參之時、音不用也)
度會乃宇治乃五十鈴乃河上乃下津石根仁大宮柱太敷立天、高天原仁千木高知天、皇御麻命乃稱辭定奉留天照坐皇大神乃廣前仁恐美恐美毛申給久、常毛奉留六月月次大幣於、使祭主某(其位)令捧持奉給之狀於平久安久聞食天、天皇朝廷乎寶位无動、常磐堅磐仁夜守日守仁護幸奉給比、天下四方國乃人民乃作食留五穀豐饒仁恤幸惠奉給惠恐美恐美毛申給久止申、

荒祭、伊佐奈岐、月讀宮等、如此申天進止詔給不、

可有年號六月十七日　　祭使被申

詔刀畢之後、使一拜テシ歸著本座、次大物忌父又差笏立座、持詔刀文大宮司奉、則宮司御玉串前置請取、物忌父抽笏一拜之後歸著本座、次宮司立座、八重榊前西方丸石壺跪、詔刀申、
天照坐皇大神乃廣前仁恐美恐美毛申給久、天津詔刀乃太詔事於以稱申事由於神主部物忌等諸聞食止詔給不、皇御麻命乃大事仁坐世、御壽於手長乃大御世止濁津石村乃如仁常石堅石仁伊波比與佐志給比、伊加志御世仁恤幸給比、阿禮坐皇子達毛於慈給比、百官仕奉人等毛、天下四方國乃人民作食留五穀豐稔ニ如心幸給止惠八郡國々所々乃依奉留神戸人夫乃常毛仕奉留赤良曳乃荷前御調糸、由貴乃御酒、大贄等毛如海山置所足天、大中臣乃太玉串仁隱侍天、今年六月乃十七日乃朝日豐榮登仁、天津詔刀乃太詔刀事於以テ稱申事由於、神主部物忌等諸聞食止詔給不、

荒祭、伊佐奈岐、月讀宮等毛如此申天進止詔給不、

可有年號六月十七日　　宮司申

詔刀畢之後、宮司一拜歸著本座、石壺所置御榊取捧持、次玉串行事、如祈年祭之時、仍委不記、(抑詔刀畢之後、神馬自北御門引一禰宜宿館立、事舉役任巡回神主給例也、)玉串行事畢之後、宮司神主等立座、赤曳荷前御調糸東寶殿奉納、次第

二鳥居中間テ、腰輿移御、齋王候殿御著、道之間若有火光時、寮官等頻加制止、總不燭火之例也、件腰輿者、從齋宮取放構持參、於宮中所造儲也、

祭使參宮之間事

祭使并宮司等、先於祓所在祓、次參仕之間次第同于新年祭時、但御祭夜在御火、自二鳥居西、御火內人著衣冠參勤例也、抑祭使一殿南砌留、敷筵一枚、官幣等并三人宮司、直御鹽湯所參、御火內人四人之內、於二人者此砌留、今二人宮司相具也、於御鹽湯所、自玉串大內人之手、大司齋內親王御著用料、御簀木綿請取、權大司御玉串二枝請取、少司御鹽湯料白鹽小塥入相具、榊葉土高坏居持、各相伴齋王候殿西砌立、于時次第寮官請取、件殿內進、次宮司歸參御鹽湯所、次齋內親王、玉串御門御著、自齋王候殿迄此御門御步行也、其間作法委不記、一禰宜、象蕃垣御門西方副柱本向南參著、大物忌子良相具母良、瑞垣御門候、一禰宜、子良參侍申、其時大物忌子良母良相具、齋王御座戶前進參候、其時一禰宜御玉串、先左、次右、御拜四度、御後手、又御拜四度、御後手申、于時子良先左手指出御玉串給、次右手指出御玉串給、其後齋內親王、子良單衣一領給、母良取、子良從給也、子良退立、奉件御玉串於瑞垣御門、然後內親王還御齋王候殿、一禰宜自玉串御門西脇、西御門退出、在左右火并祇承、即參御鹽湯所、次自宮廳宿館、齋內親王貢御料禮紙菓子奉送內院、坊仕內人所持參也、又同貢御者、請預料米、祝部并山守相共、於齋王御膳殿所奉調備也、其次第委不記、（抑爲申行寮御玉串、一禰宜參入料、造替御遷宮ノ時、玉串御門西脇御垣自東第一間（母木一枝、貫木讀也、）

次宮掌內人一人參祭使許、寮御玉串畢之由申、其時使參（在火祇承）、於御鹽湯所、向神主答拜、并玉串行事次第、及參內院之間、同于新年祭之時、仍委不記、抑如此內院神事時、御門等懸帳也、而爲三色副物忌父役懸也、瑞垣御門副宮守物忌父、四御門副地祭物忌父役也、各入出之時彼帳卷上也、又無奉納度、瑞垣御門不懸、神事以後件帳外幣殿上也、是御遷宮之時官下物也、各著座石壺之後、大物忌父差笏、

分送也、○中略

十七日御饌膳事、早旦以驛使各宿館送進、一方大物忌父一二三神主進、身取玉貫檜籠相副、二方宮守物忌父四五神主進同前、三方地祭物忌父六七神主進同前、荒祭方彼宮內人八九神主進同前、風宮方彼內人十神主進同前、但無檜籠、服氣等分公文所納、又淸酒作方幷瀧祭方相加、八方權任員分宛以差符進例也、件差符六九十二月祭禮每度、政所神主服氣輩除、書改例也、

今朝御器長正員宿館、行水堝各四口宛進之、(大堝二、小堝二宛也、)服氣分長官被納、

從酉剋許、鳥名子等參候、瑞垣御門外方ニテ、擊志太良叩手也、謳歌、件歌之中、

シタラウチテト、テヽガノタエバ、ウチハンベリ、ナラヒハムベリ、

アコメノソデ、ヤレテハンベリ、オビニヤセン、タスキニヤセン、

イザセン〳〵、タカノヲニセム、

又云　シタラハシリウチ、大津ノ濱ヘ行バ、アフミノオハメ、タチコカムサ

又云　シタラハ、ヨ子ハヤカハヽ、サケタミアゲテモレ、トミノツカヒゾ、

又云　イサホラレヨ、ハチスハワレウエム、ハチスガウヘニ、ナメクラタテラレヨ、

又云　イザタチナム、ヲシノカモドリ、ミツマサラバ、トミゾマサラン、

歌詞多不委記、

歌畢後、參候荒祭御前同勤仕、其後於舞姬候殿預饗膳、抑年中三度御祭夜饗膳、職掌人等請勞寄戶等勤也、

齋內親王御參宮之間次第事

先御祓、(件御祓所ヘ、自御裳須曾河ノ渡瀨上、自瀧祭御前北中間、自河東也、)御祓畢之後令參御之間、始從寮頭、次第寮官等皆御共步行也、於三所曾司者乘車、迄河原殿也、其後者同步行、於寮御火者、於一鳥居止畢、齋內親王河原殿與

院、次正權神主、玉串大內人等同參候、禰宜瑞垣御門祗候也、外方權任神主玉串御門候、物忌父等御殿下、燈火三ヶ所、次供御饌之後、大物忌父兄部瑞垣御門來、向一禰宜御饌調進侍申、一禰宜、揖以音又物忌父、揖以音其後件物忌父詔刀申、

度會乃宇治乃五十鈴乃河上乃下津石根仁大宮柱太敷立天、高天原仁千木高知天、皇御麻命乃稱辭定奉留、掛畏支天照坐皇大神乃廣前仁、恐美恐美毛申久、常毛奉留今年乃六月乃十六日乃由貴乃御饌、并國々所々郷神戶人等忌齋奉留御神酒御贄等於、如海山置所足奉留狀於、平久安久聞食天、朝廷寶位動无久常石堅石仁、夜守日守仁護幸奉給比、阿禮坐皇子達乎慈給比、百官仁仕奉人等毛乎、天下四方國乃人民乃作食留、五穀豐稔仁惠幸給止恐美恐美毛申、

在御神酒三獻、在度別拜手四度、其後一座申云、宿直令候侍者、令候侍大物忌父申、其時一禰宜、以音揖申又物忌父揖申、

然後正權神主各自西御門退出、於荒祭神拜處、拜八度手兩端、次各於廳舍前石橋、先著鬘木綿、在遙祭拜八度手兩端、件木綿、爲彼宮下部役所勤也、其後各著一殿、預直會饗膳、○中略

十七日曉、又可參御饌之由、催正權神主玉串大內人宿館、仍各參候如夜前、物忌父等參酒殿、請取御贄菓子等參也、諸事如夜前、但於炊御饌者、夜前乎ノ取分置供進例也、又淸酒作幷酒造內人等、自瑞垣御門左右脇、供御神酒幷荒蝋御贄等、一人柏持敷、一人大杓御神酒入、件柏懸、一人荒蝋御贄散供也、其次第、先自御門左右脇迄巽角、副瑞垣供進、次自右方脇廻迄巽角供進、高薨由貴奉、由貴奉申也、其後淸酒作內人、御禱左方男柱副、白志、御饌供、酒作內人右方男柱副、黑志、御饌供也、抑件御神酒、諸神戶缶之中、一口以供進也、但於神戶缶者、納物供進之後進由貴殿也、謂之年氣缶、但九月度、根倉缶一口加供進也、其後大物忌父、如夜前詔刀申、但十七日今時以申也、在御神酒三獻、度別拜四度手、然後神主等歸宿館、物忌父等御饌賜下、三色兄部等宿館マテ、正權神主幷玉串大內人及子良母良宿館

向、宮政所件殿西向南著、敷鋪設、出納二人開御稻御倉所納御稻方々奉下、一御物(大物忌父請)二御物(宮守物忌父請、左相殿御料)三御物(地祭物忌父請、右相殿御料)、荒祭御方(彼宮大內人大物忌父請)瀧祭御方(同前)白御饌料(清酒作內人請)黑御饌料(酒作內人請)四至神御料(御巫內人請)

件御稻方々奉下束數、宮政所大札記テ、年號月日書、一禰宜判請、一禰宜見知之後進署畢、於件札者此御倉納、次御戸閉、其後一禰宜并政所歸宿館畢、方々御稻等之中、一御方者於忌屋殿奉舂、大物忌子良(荒木田氏女)先奉仕、母良相具也、至于二三荒祭御方者、於主神司殿奉舂、宮守子良(荒木田氏男)地祭子良、(荒木田氏女)荒祭子良(石部氏女)各屬方々先奉仕、但於子良者奉懸手許ニテ、神拜之後歸宿館、其後三職物忌父等、并荒祭大內人物忌父等、各驅仕共所奉仕也、然後各於忌火屋殿奉炊テ、清酒作、及瀧祭御方御稻者、於九丈殿奉舂、御巫內人同前也、其後白ノ御饌、清酒作內人於忌火屋殿調進、瀧祭御饌、彼宮內人物忌同此殿ニテ調進、四至御神料、御巫內人同前、黑ノ御饌、酒造內人御前南河北方岸、豐受宮奉祝、石疊西方ニテ奉炊例也、○中略

同十六日夜及深更、內外物忌父等、自酒殿菓子御贄并御鹽、及國崎神戸所進蚫等請取、又正員禰宜例進、人別七喉御贄請取、御饌奉調之後、爲瀧祭下部二臈役、御饌可被參之由、催正權神主、并玉串大內人宿館、仍各著衣冠參集忌火屋殿前、石橋列立、其時內外物忌父等(衣冠)自件殿奉舁居御饌、暫奉居于案上、御鹽湯內人(衣冠)勤仕件祓、其後荒祭瀧祭御饌、彼內人物忌等、件宮々持參、(在替屛)次正員禰宜前陣、(在替屛一座役)次御饌奉仕內外物忌父、并清酒作及酒作內人等、次權任神主、并玉串大內人、然卽正權神主南御門外留、於物忌父等者、參入瑞垣御門內、御饌物之中、國崎神戸所進蚫、奉差料串、及机忌刀、白ノ御饌奉取出、豐受宮奉祝石疊副奉舁居、物忌父等暫祗候、但三色物忌父兄部等者、西方東向列立、申云、御搔鹽令成御侍也者、彼御副祗候、內外物忌父等、令成御侍ルト答、其後各於件御座所、彼蚫以忌刀奉切差串、奉削懸堅御鹽、又清酒作人、白志御饌御河ニテ水ヲ入合奉、其後參入內

大内人ニ至マテハ、干魚一喉、散供米少々、雜紙少々許也、但當時權任玉串宿館無此沙汰、正員許也、其沙汰、散供米一升、魚一喉、（鰹鮨）尺清宮等獻之、祓勤仕、禰宜笏持、平手兩端、其後御巫内人清宮預退出、（號鎭獻）但服氣幷館不參禰宜略之、

同日爲清酒作内人役、各宿館參、河原御祓可被參之由催廻、仍正員衣冠著、權任神主幷玉串大内人以下皆布衣著、引率字河合淵東河原、以東爲上向北各著、正權別座也、無鋪設、人別前榊二枝立置、（但御巫内人、件榊ハ著座以前置之、）内外物忌父等、幷荒祭瀧祭内人物忌等者、神主西方以南爲上東向也、件齋前毎同榊二枝置、各件榊一枝置、今一枝取、笏取副、指以葉摘切、次御巫内人（兄部一人衣冠）一禰宜前、御前方向詔刀申、其詞云、

申久、今年乃六月乃御祭乃、十六日今時於以、國々所々仁依奉ル、鄣神戸御厨乃人等、忌齋奉御神酒御贄、幷禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等、不淨事疑於清淨仁祓清テ、六日夕部七日早旦乃由貴御饌神事供奉於、清淨仁令勤奉仕給天、神事仁悦乃弘手於令賜給止詔給不、

次拜八度在手兩端、次御巫内人等、正權神主玉串、幷内外物忌父等持、摘切榊枝等、皆請取兄部給、兄部得立座向河居、正權神主玉串、幷色々内人物忌等所置今一枝榊取各立座同向河、又葉曳切、次御巫内人祓勤仕、神主等各中臣祓祭文讀、其後件榊枝河流、手洗後如元歸居、在神酒坏、（獻坏幷陪膳物忌父等也）正權神主等幷玉串前、先尾贄ヲ敷之、後肴三種、箸ヲ折敷居テ持來テ、此尾贄上ニ取居也、箸ハ以柏卷也、神酒坏畢、次正權神主等、又立座於河洗手、正員禰宜許、物忌父手水紙渡、（權任神主者、各私紙ヲ以用也、）

抑今朝祭物料所神田在、號清祓神田、其上正禰宜各酒一瓶贄一隻所進例也、

次正權神主玉串等、引率件色々職掌人等、自西御門參、内院在神拜、其後二禰宜以下者、思々歸宿館、但於宮掌大内人等者一殿參、差明夕陪膳役人等、又申行掃除雜事等、自酒殿在酒肴菓子等、又御巫内人、不丙合御贄等、於御前南河祓清、一禰宜外幣殿前鋪設敷向南著、但東宮所御座之時、一禰宜西

阿波利矢遊波須度爲宇佐奴安佐久良仁、奈留伊賀津千毛於利萬志萬世、

阿波利矢遊波須度萬宇佐奴安佐久良仁、上津大江下津大江毛摩伊利太萬江、

其後大物忌父(兄部衣冠)向一禰宜候、御巫内人又向西候、于時大物忌父、正權神主不信不淨疑、以人別姓名爲其神主若有不淨事申、御巫内人以同詞又申、御琴搔内嘯、件嘯音鳴以淸知、以不鳴不淨知也、其後御饌調備之輩、內外物忌父幷荒祭瀧祭大內人物忌、及忌刀御笥櫃、桶杓御机、陶土師御器、又可供用所々御贄等不淨疑占定也、丙合輩悦、不合輩成恐、其後又御巫内人、三度御琴搔、誓歸之後奉上神御歌如本、但所奉下神御名申、今度歸御申云々、

次又詔刀申、其詞云、

例仁依氏、禰宜神主、內外乃物忌、色々職掌供奉乃人等、幷國々所々仁依天奉留、郡神戸御厨乃人等、依天例仁當毛奉、神酒御贄等乃不淨乃事疑、於御前乃御占淸靜仁令占定給天、六日乃早旦於以、神館於齋奉御竈戸天淸淨仁祓淸天、六日夕部、七日早旦乃神事供奉於、淸淨仁勤令奉仕給止恐美恐毛申久、神事仁悅乃弘手於令賜給止詔給不、

抑先年之比、其時御巫内人兄部勤吉、於此御歌不傳仕之間、或度御占夜、件勤吉還参、因之御占時已失東西之間、違参致其勤畢、仍爲後代次朝招寄彼勤吉、於荒祭宮御前所承傳也、但勤吉若有若亡者、仍其詞雖有訛謬之恐、爲後代以假字所注置也、

其後拜八度手兩端、自西御門退出、於荒祭宮神拜所、拜八度在手、畢各退出、不丙合輩歸宿館之後、以御巫内人祓淸也、其祭物不幾、酒一瓶、干魚一喉、散供米少々、雜紙也、○中略

十六日曉、內物忌父、子良母良、荒祭瀧祭內人物忌等、子良宿館仁集會勤仕、館祓於竈前勤仕、件祓物忌父兄部役也、次在人別神酒坏、其後各退立、

同日御巫內人、早旦衣冠著、正員禰宜宿館ヲ始、權神主幷玉串大內人宿館至(マヽ)ア祓淸、但政所之宿館ハリ淸、始件祭物於正員禰宜宿館者、酒一瓶、干魚一喉、散供米少々、雜紙少々也、權任神主幷玉串

參例所、以河水各手水用、笏持役人狩衣著、神歌奉仕、其詞、

阿婆羅氣耶、嶋ハ七嶋ト申セドモ、氣奈志賀氐天者、八嶋奈利、惠伊耶惠伊耶、　三度（中刀禰頭役云々）

我君ノ、御濱出ノ、御座船ノ蟬ノ上ニ、千代ト云鳥舞ヒ遊、惠伊耶惠伊耶、　三度

我君ノ、命ヲ乞ヘ、左左禮石ノ、巖ト成テ、苔ノ生萬天、惠伊耶惠伊耶、　三度

我君ノ、御倉ノ山ニ、鹽ノ滿如、富ソコ入坐、惠伊耶惠伊耶、　三度

于時各手兩端、件歌役人在江鄉、自鏡宮前乘馬、御贄、前陣權長警蹕、下隨前無下馬、（御饌奏、由貴殿異角耳奉髀、）件神事、或禁忌、或當病等依不參、禰宜代官自長官被進、

同日戌刻興玉神態、幷御占神事勤行次第、御占神事可被參之由、清酒作内人正權神主、幷玉串大内人宿館催、正禰宜衣冠、權任布衣、中道經一殿參列、東上南向、○中略

次御占神事、自西御門參入、正員禰宜玉串御門外方軒下、御前向東上祗候、權任神主八重榊南參集候、清酒作、幷御筥作、陶土師、忌鍛冶、荒祭宮大内人、同大物忌父、副物忌、瀧祭大内人、大物忌父、副物忌、如此下部等者、玉串御門西方玉垣南集會候、内物忌父等、件御門内東方各祗候、于時御巫内人（衣冠）自外幣殿、鷄尾御琴請、件御門外東方候、御殿向先詔刀申、其詞云、

申久、今年乃六月乃御祭、十五日乃今時於以天、掛畏天照坐皇大神宮乃廣前仁恐美恐美毛申久、國々所々仁依奉レル、郡神戸御厨等乃忌齋奉留御神酒御贄、幷禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等、不淨乃事疑於於御前御占清靜令占定給止、恐恐美毛申、

次以笏御琴掻三度（度每在警蹕）

次奉下神、其御歌、

阿波利矢、遊波須度萬宇佐奴、阿佐久良仁、天津神國津神、於利萬志萬世、

事河原湊經、於船橋辻在月讀宮之下馬、於弘正寺巽在所御社下馬、次於美佐河原東在解縄神事、自道北先於西方手水用、（西上南向）水祝（狩衣）紙權長（狩衣）勤之、水紙當役所用意、次祝祓奉振懸、後著座在鋪設、東上南向、一座自東、自余自西也、于時左縄右縄小器居、同散供米等㔟懸居、于時各祓勤仕、件縄以左手一、以右一、口ニクワヘ解之、散供蒔廣手兩端如常、但可有口傳、其後清宮勸盃、權長配膳祝、今日每度彼等勤之、若不參之時者、自當役所勤之、次酒肴木瓜打蚫清酒各在下器二、一獻後權長御箸申獻、當時尾崎坊沙汰、（大江寺供僧一和尚）料所知行、（在二見在神崎）自鏡宮前船乘二艘屋形構、一座左、二座右、打替打替下簡前也、件船以下江二見沙汰、船漕自江三人、自二見一人、自通一人參、本儀八人也、御贄裹爲鹿海楠部人等沙汰、以薄作之、例木懸置、船漕取之船懸也、自船湯涌祝御饌嶋持參、雜掌船、鹿海刀禰役歟、自江湊内船下歩行、神崎神事丸山乾方也、笏立石坤方也、先手水紙等同前、次著座北上東向在鋪設、船漕持參肴洗米木瓜、解縄役所勤同前、清宮一獻也、清宮每度勸盃也、件清宮等之料米一升、自長官祝請預、次笏立石笏立、自東北立輪也、次屋形參著、西上北向座鋪設、同前屋形堅上勤役、以三百文沙汰之處、近年二百文沙汰之、自長官百文下行、以三百文政所被仰付、尾崎邊者申誂沙汰云々、于時打蚫五本宛、酒一獻、件熨自國崎二百本沙汰、酒政所大夫一筒六升納也、以之度々用、于時鹿海海士所進魚御目懸、大鯛六隻、自長官食百文下行、小濱海士所進魚御目懸、分際同前無食、宮家司是色々令調備進、酒任意、其後鹽浴、芝根襷襌懸鹽干相待、於神崎御饌島、御饌贄奉取、各々海松七絲、螺七、鯷七宛也、北方高岩上例所裹、七權長令用意、（自鹿海裹也、湯涌祝島ニ持參ス、）件裹各一宛入之、權長奉懸調、本宮持參、湯涌祝之役也、件食五文自長官下行、次又假屋著、直會饗膳在之、回（マハリ）八種羹寒汁等、幷鹿海小濱海士所進魚殘種々調進、酒任意、今日經營、長官沙汰、當時七百文下行、宮家司給之營進、饗膳料米三斗五升、飼丁等給調進、又飼丁之食二升下行、件饗料飯迄船人夫、鷹依役也、件饗諸役人船漕海士等至（マデ）皆給之、所從分、一座二前、自餘一前宛也、湯涌祝雄毛湯涌進、幾度任意、件料米自料所勤之也、（○自以下六字據一本補）歸

參阿原木神崎、先於岡村河原在祓、件役當郷刀禰之中、堪能者一人之勤也、仍所被相具也、在酒肴、而從浦田長官之時、飯加也、件飯料米長官沙汰也、酒肴在料田、抑件祓者、彼荒蝟御贄奉仕之間、供奉人不淨事疑所祓淸也、

次自鹿海各乘船二艘、（之中、一艘ハ禰宜等、一艘ハ厨船也、祝等乘之、）海路之間於小朝熊前乍乘船在神拜、到著阿原木神崎、先祭崎神、崎神神詔刀同刀禰申、其詞曰、惡志赤崎加布良古明神、幷浦々崎々神達申クト云々、又說云、伊介神崎阿原木邊島於木止志皇神廣前云々、（委不記、在神酒坏、）

次假屋著、件假屋在兩所、（東方二字、西方二字、）先東屋著、鹽干相待、禰宜等於字神崎種々御饌物取、蝟瀨海松等也、禰宜等奉仕後、祝部等預、神主歸御東假屋著、在饗膳、次西方假屋著、鹽滿相待、又在饗膳、件饗一禰宜勤也、今日件供神物幷酒等、阿原木神田所當、假屋堅上御薗所役也、以青萱葺之、無四方垣、件假屋九月十二月不造、件度祝部許依參勤也、饗畢之後、件御贄船奉入、本宮歸參、於海路在歌三首、一歌云、

阿者良岐矢、島者七島、毛奈志加天天へ、八島奈利氣利、（異本七島之下、止申世度母五字有、其書頭書云、止申世度母五字、舊本無之、以下文補入之、）

此歌、刀禰如詔刀三度申後、船人祝部等所謳歌也、江神社祝堅田神社祝等所役也、次歌二首、

和加矢古久、伊チノ保津々ノ、瀨美ノ宇江ニ、壽ヲ千歲（○壽一本作世）ト云、花ノ佐伊太留、

和加君ノ、於波志萬左牟古止者、左々禮石ノ、伊波保止奈利ヲ、古氣乃牟須萬天、

但於字小島邊謳之、歌別三度、

自鹿海船津神主乘馬本宮歸參、於御贄者、祝等奉持由貴殿、巽方耳、迄十六日夜奉懸例也、仍遷替御遷宮之時、件御倉耳中、彼方一枚切殘也、

但當時贄海神事參向次第、正員或自身、或以權任禰宜代官進、必一人自身可參也、皆自宵宿館參、先未明本宮神拜、禰宜衣冠、權任布衣、今日神事、無爲可値給之由祈念、其後各布衣乘馬、下鵜前、饗土神

內宮朝給荒蠣御饌事

早旦禰宜進向宇賣海神所、祓給彼御饌、臨晩頭歸參本宮、

夕與玉祭事寶殿不在、御巫內人申詔刀、

內院御卜事與玉祭以後行之、

離宮院大祓事齋王御著、祭使下著、宮司列參、於祓殿行之、

十六日外宮御祭事使祭主任用宮司申詔刀、

同宮四勾糸進事

內宮朝川原御祓事

夕供由貴御饌事

十七日內宮御祭事曉供御饌、夕行祭禮、大司申詔刀、

外宮伊向神事一禰宜申詔刀、從北御門內玉垣外參入先行也、次朝御饌供奉、

十八日離宮院豐明神事

十一月晦日離宮院修祓事其儀同五八月兩月、

齋宮竹川御禊事

十二月十日離宮院御卜事

御祭神酒料、司廳下文事、

十五日以後廿五日以前二宮神態事如六月、離宮院行事同之、

〔皇大神宮年中行事五月〕晦日、來六月御祭料爲大祓除番禰宜之外離宮參、抑晦日祓除當番禰宜之事、去仁安自御災上時也、其以前皆參也、

〔皇大神宮年中行事六月〕十五日朝、正員禰宜一同各神拜之後、乘馬祝部等引率、爲奉仕荒蠣御贄等、

掲ゲタレバコヽニ之ヲ略ス、

〔延喜式祝詞八〕伊勢大神宮

六月月次祭十二月准之

度會乃宇治五十鈴乃川上爾大宮柱太敷立天、高天原爾千木高知天、稱辭竟奉留、天照坐皇大神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎、神主部物忌等諸聞食止宣、禰宜内人等共稱唯天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止、湯津如磐村、常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸佐給比、阿禮坐皇子等乎毛惠給比、百官人等天下四方國能百姓爾至眞天長平久、作食留五穀乎毛豐爾令榮給比、護惠比幸給止、三部國國處處爾寄進禮留、神戸人等能常毛進留、御調絲、由貴能御酒御贄乎、如横山置足成天、大中臣太玉串爾隱侍天、今年六月十七日乃朝日乃豐榮登爾稱申事乎、神主部物忌等諸聞食止宣、神主部共稱唯荒祭宮月讀宮爾毛、如是久申進止宣、神主部亦稱唯

○按ズルニ、是ハ大神宮司ノ申ス祝詞ナリ、朝使ノ奏スル祝詞ハ、祈年祭篇ニ掲ゲタルト同文ナルヲ以テ之ヲ略セリ、宜シク參看スベシ、

〔神宮雜例集二〕年中行事

五月晦日離宮院修祓事

宮司二宮禰宜供奉、饗料宮司下行之、

六月十日離宮院行事

齋宮寮竹川御禊事

御卜事御祭神酒料事

十五日外宮由貴御饌事

先有御祓、禰宜以下從北御門、内玉垣内參入、

十一月例
將來十二月月次祭爲供奉禰宜內人等、大神宮司共臨度會河、晦大祓仕奉、然御厨大饗被給、
十二月例
十二月祭供奉行事、同與六月祭行事、
月次幣帛持參入、幣帛進奉行事、同與六月新年使參入時行事、
〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭十二月准此○中略
右月十六日祭度會宮、十七日祭大神宮、其儀十五日黃昏以後、禰宜率諸內人物忌等陣列神御雜物、訖亥時供夕膳、丑時供朝膳、禰宜內人等奏歌舞、十六日平旦、齋內親王參入度會宮、至板垣門東頭下輿、入外玉垣門就座、於東殿門內東西各有一殿、東殿設齋內親王座、左右設命婦等座、西殿設女孺等座、訖卽神宮司執賢木綿入外玉垣門、北向而跪、命婦若女孺出受以奉齋內親王、拍手而執著賢、神宮司又持太玉串、著木綿賢木、是名太玉串、入同門而跪、命婦亦轉奉齋王、拍手而執、捧入內玉垣院門就座席、命婦若女孺二人陪從避席進前再拜兩段、命婦不拜訖玉串授命婦、命婦受轉授物忌、受執立瑞垣門西頭、齋內親王還就本座、然後禰宜乃著明衣、衣冠並用生絹大神宮司著當色、並執太玉串、禰宜立前、大神宮禰宜立左、宇治內人立右、次宮司、次幣雜物幷馬單行陣列、次朝使進入外玉垣門、當內玉垣門並皆跪、先使中臣申詔刀、次宮司宣祝詞、訖物忌內人等舁幣帛案、入奉置瑞垣內財殿、齋內親王幷衆官以下再拜拍八開手、次拍短手再拜、如此兩遍、旣而衆官退出、卽使及宮司以下向多賀宮、齋王不向再拜兩段、拍短手兩段、退就解齋殿給酒食、訖入外玉垣門供倭儛、先神宮司、次禰宜、次大內人、次幣帛使、次齋宮主神、次寮允以上一人、酒立女一人持柏、一人持酒、毎舞了人令飲柏酒、但件酒立女、齋王參祭之日、采女供奉、或用女孺、不參之時、用禰宜內人等妻子、次禰宜大內人妻、訖齋宮女孺四人供五節儛、次鳥子名儛、十七日參大神宮、其儀一同度會宮、拜荒祭宮、同多賀宮
○按ズルニ、延喜齋宮式ニ、齋內親王ノ三時祭ニ參ル時ノコトヲ載セタレドモ、ソハ齋宮篇ニ

門氏、御輿留氏、手輿爾移坐氏參入坐、到中重殿、就御座、卽大神宮司御蘰木綿幷太玉串乎捧持氏、第三御門內爾候、卽命婦罷出氏、其御蘰木綿幷太玉串乎受取氏、內親王乃御在所爾持參入候侍、爾時內親王御蘰木綿奉氏、發內重御門爾參入坐氏、就席座、然卽命婦乃捧持留太玉串乎受取給氏、捧持氏四段拜奉、然卽還去給氏、就本御座、爾時菅裁物忌父造奉留太玉串、禰宜捧氏、大神宮司爾給、司短手一段拍受、次禰宜毛共被給氏、共發氏列立、先禰宜立、次大神宮司、次多氣度會二箇神郡所進明曳調糸乎內人等持立、如是立列氏參入、到中重、大神宮司幷禰宜正道就石壘跪侍、大物忌波諸物忌等乎率、第二御門西方侍、內人物忌父等波、西玉垣御門內方列、東方向跪侍、齋宮諸司等波、第三御門東西分頭跪侍、爾時大神宮司登上版位、祭告刀申、告刀畢、卽大物忌父發、大神宮司幷禰宜二人所捧持留太玉串乎受取氏、第二御門內方進置、(先大神宮司、次禰宜持西方、)卽禰宜發、御鎰所給氏、大物忌乎先率立氏、內院參入、次大神宮司、次大內人三人、明曳御調糸持參入、然大神宮(波、下○大神宮下、恐脫司字、)內院御門內跪侍、禰宜波開東寶殿、御調糸進入、員卅絇(見進入廿八絇、高宮御料分二絇、)奉入畢、卽罷出、先大神宮司、次禰宜、次大物忌、次大內人等、然就本版位、卽諸刀禰等共發、四段拜奉氏、八開手拍、次短手一段拍氏、一段拜奉、又更四段拜奉氏、八開手拍、次短手一段拍氏、一段拜、又更四段拜奉氏、八開手拍、次短手一段拍氏、次一段拜奉、然罷出、先大神宮司、次禰宜、次內人等、向高宮四段拜奉氏、短手二段拍、一段拜奉、但內親王不向高宮、然畢諸司人等幷諸刀禰等皆悉直會殿就座、給大直會、短手二段拍、(先向給拍、大神宮司、次齋宮司官人已上、次諸刀禰等、)被給畢時、後手一段拍、卽二箇郡歌人歌女等發、板垣御門內西方侍氏、先御倭歌供奉、次伊勢歌、次倭歌仕奉、然大神宮司諸官人等更發、第三御門參入就座、卽儛仕奉、先大神宮司、次禰宜、次大內人、次齋宮神司、次諸司官人等共儛、直會酒、采女二人侍、御角柏盛、人別捧給、若齋宮不坐時、禰宜內人等妻子仕奉、然男官儛畢、卽禰宜大內人等妻儛、次齋宮采女五節儛畢、卽禰宜大內人物忌等爾祿給、(禰宜大物忌女儛人、各絹衣一領給、小物忌五人、各給絁一疋、大內人三人、調布一端、)給畢卽內親王離宮還座、然後禰宜內人等酒殿院侍氏、後直會仕奉、

祭時供奉神酒造奉、幷諸內人等勞供給料米、及雜物一事已上、如六月祭行事同供奉、

月次幣帛供進行事、如月次幣帛供奉行事與同、

祭料酒米拾石、神祭料米三石三斗、供給料米廿五石、鹽五斗、木綿十斤、麻廿一斤六兩、鐵一廷、神酒廿缶、御贄廿五荷、卅日灯油七升、

右宛奉大神宮司、卽預禰宜內人等供進、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

五月例

來六月月次祭爲供奉、禰宜內人等皆悉、大神宮司共參集氏、臨度會河、晦大祓仕奉、然卽御厨大垂給布、

六月例

以十五日、先所々戸人夫、幷二箇郡鄕々人夫等所進榊而、木綿作內人之作奉禮留木綿、幷大神宮司乃所進木綿乎持氏宮飾奉畢、然卽志摩國神戸人夫所進雜贄、又度會郡鄕々所進御贄、又禰宜內人等我戸人夫乃、志摩國與伊勢國神堺嶋々而罷行氏、仕奉禮留雜御贄、又御鹽燒物忌乃仕奉禮留御鹽等取進畢時而、禰宜內人等皆悉自宮北河原罷出氏、大贄乃淨米乃大祓仕奉、然湯貴備奉所而持參入、然所々神而分奉氏、大物忌父、御炊物忌父、御巫內人等、御井而參向氏祭仕奉畢氏、更內院乃御門而持參入氏、御炊物忌父我造奉御竈、幷陶土師內人等加造奉禮留器而盛滿氏、始亥時至于丑時、朝乃大御饌、夕乃大御饌、二度間量供奉、此號由貴、次大物忌佃奉禮留拔穗乃御田稻乎、火無淨酒造奉氏供奉、次大神宮司乃所宛奉、二箇神郡人夫乃所進庸米乎、火向神酒造奉氏供奉、畢卽四段拜奉、然罷出氏、外院侍氏、禰宜內人物忌等直會被給、此時禰宜大物忌新年中物食始、

以十六日朝、國々處々神戸人夫等所進神酒幷御贄等乎、自御厨進入、次齋內親王參入坐、到板垣御

出受取奉親王弖、即親王拍手氏自執氏、捧參入內玉垣御門就座席、（命婦二人從之）即避席進前再拜兩段、訖即命婦一人進受太玉串授大物忌子、即大物忌子受、立瑞垣御門西頭進置畢、即親王還本座就、然後禰宜著明衣冠、木綿多須岐左右肩懸氏、宇治大內人毛弖、又如禰宜裝束、即蘰木綿幷太玉串捧持、大神宮司跪、手一段拍給、次禰宜毛同給、宇治大內人毛同給留、已上三人波太玉串給時弖、人別拍手氏給、先禰宜左立、次宇治大內人右立、次大神宮司立、次赤曳御調糸乎、諸內人等持立、如是立列氏參入、到三重氏御調進、版位二丈許就列、如新年祭版位、即大神宮司進版位、跪告刀申、畢即返就本座、宮司之手捧持玉串、宇治大內人立、大神宮司太玉串取本座侍、即禰宜召大物忌父乎、即太玉串給、立御門東頭進置、還本座侍、又宇治大內人立、禰宜太玉串受、本座還侍、即禰宜召宮守物忌父乎、太玉串給、即立御門西頭進置、畢本座返侍、禰宜又召地祭物忌父、即宇治大內人太玉串四枝給、即立御門東頭進置、還本座侍、即宇治大內人捧太玉串乎、自進御門西頭、進置畢、本座返侍、即禰宜御鎰給、大物忌乎、先奉立氏內院參入、次大神宮司、次大內人等明曳御調糸參入、然即大物忌父開東寶殿、御調糸進入、畢即罷出、就本座、訖即四段拜奉、八開手拍氏、短手一段拍拜奉、又更四段拜奉、八開手拍氏、短手一段拍、即一段拜奉氏罷出、向荒祭宮四段拜奉、短手二段拍、一段拜奉、（但內親王不向荒祭宮）然畢時、諸司若官人等、幷諸刀禰等、皆悉直會殿付座、大直會被給、畢時、後手一段拍、即大神宮司官人等更發、第五重參入就座、即倭儛仕奉、先大神宮司、次禰宜、次大內人、次齋宮主神司諸司官人等、（其儛畢、人別直會酒、采女二人侍、御角柏盛給、）然男官儛畢、即禰宜大內人等妻儛、次齋宮女孺等儛畢、即禰宜內人物忌等弖祿給氏、即內親王離宮還座、

十一月例

依十二月祭（〇月次祭）供奉事、禰宜內人等皆悉司參集、與大神宮司共度會川臨之、大祓仕、然御厨大饗被給、

十二月例

之廻介差立林飾奉之、卽此從宮司宛納木綿介掛附奉、以同日夜、此禰宜內人物忌等、從湯貴御倉下
宛奉、朝大御饌夕大御饌二時之料、御田苅稻乎以、是禰宜內人四人仁、大物忌幷物忌父引率、宮司所
給明衣服縫服、又木綿蘰多須岐爲之、作御饌稻乎大物忌子請氏、土師物忌作奉淨御碓、幷杵箕持舂
備奉之、大物忌忌竈仁炊奉、御笥作內人作進上、御饌笥仁奉納備進、又禰宜內人等以祭之月十五日、
退入志摩國神堺海、雜貝物留滿生御雜贄漁、幷從志摩國神戶百姓進上干生贄、及度會郡進上贄乎、
此御笥作內人作進上、御贄机留置之、忌鍛冶內人之作奉、御贄小刀持切備奉、御鹽燒物忌之燒備進
上御鹽乎會備奉、土師物忌陶內人作進上、御坏留奉納滿備進、又酒作物忌、淸酒作物忌、陶內人作進
上御酒缶留酒釀漬奉酒乎、土師陶之御坏留奉納滿備進之、此以月十六日夜、湯貴御饌祭供奉、又宮
守物忌、幷地祭物忌、及酒作物忌、淸酒作物忌等合四人毛、大物忌幷父等如此之同共供奉行事具、同
日夜半仁人別介備滿持氏、朝大御饌夕大御饌、禰宜大內人四人、幷物忌五人、及物忌子五人合十四
人、常參入內院供奉、然卽於大神御前留共列、四度拜奉、手四段拍、又後四度拜奉、手四段拍畢退、以十
七日平旦、朝御饌毛、如上件引率具備供奉、
又荒祭宮幷瀧祭合二所御食波、其當宮物忌內人等、此大神宮之如御食、同日夜具介備持、此禰宜內
人四人引率參入、祭供奉、拜奉行事、大神宮同、然從其瀧祭之地、於大神宮奈保良比所仁參入來、以同
日夜、御食奈保良比、禰宜大內人幷諸物忌內人等、及物忌父母等、戶人男女等、皆悉參集侍、然卽奈保
良比御歌仕奉、其歌波、佐古久志侶、伊須々乃宮仁、御氣立止、宇都奈留比佐婆、宮毛止々侶留、次儛歌
介仕奉、其歌波、毛々志貴乃、意保美也人乃、多乃志美止、宇都奈留比佐婆、美也毛止々侶爾也、供奉御
儛、自禰宜始、內人物忌父等、齋內親王以十七日午時參入坐氏、川原殿與留氏、手輿仁移坐氏參入、到
第三重東殿就御座、卽西殿波女孺侍、卽大神宮司以御蘰木綿參入氏、正道同重跪向大神宮侍、卽命
婦退出受取奉親王留、卽親王拍手氏取木綿著蘰、大神宮司復執太玉串氏參入氏跪同侍、卽命婦亦

祭式

月次祭

凡ソ神宮ニ於ケル、六月十二月ノ月次祭ハ、三節祭(六月十二月月次、及九月神嘗、)ノ一トシテ、尤モ之ヲ重ゼシモノニテ、十六日先ヅ豊受宮ヲ祭リ、十七日大神宮ヲ祭ル、其儀前月晦日、齋王竹川ニ臨ミテ御禊ヲ爲シ給ヒ、神官等ハ度會河ニテ大祓ヲ行ヒ、祭月十五日、阿原木神嶋ニ於テ御贄ヲ採ル、之ヲ贄海神事ト云フ、同夜御占神事アリ、神饌及ビ神官等ノ穢否ヲトシ、十六日河原ノ大祓ヲ行ヒ、神殿ヲ裝飾シ、神饌ヲ調理シテ、亥時ニ夕ノ御饌ヲ供ジ、丑時ニ朝ノ御饌ヲ供ズ、之ヲ齋(ユキ)忌ノ御饌ト云フ、十七日齋王神宮ニ參向シテ、玉串ヲ奉リテ、拜禮ヲ行ヒ給ヒ、朝使宮司等内院ニ參進ス、先ヅ使ノ中臣、次ニ宮司、各祝詞ヲ奉讀シ、幣物ヲ東寶殿ニ納メ、齋王及ビ朝使以下神拜アリ、事訖リテ朝使以下直會殿ニ就テ饗ヲ賜フ、神官及ビ朝使等、各倭舞ヲ奏シ、齋宮ノ女孺等ハ五節舞、島名子所ハ島名子舞ヲ奏ス、畢テ神官ニ祿ヲ賜フ、豊受宮ノ式モ亦之ニ同ジ、按ズルニ此祭ハ、古ヨリ斷エズ朝使參向アリシガ、應仁元年、京都騷亂ノ爲メ、一旦幣使ノ參向ヲ停メラレシヨリ、後遂ニ廢絶シテ、纔ニ神宮ニテ、祭式ヲ行フニ過ギザリキ、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

五月例

來六月月次祭爲供奉、禰宜内人等、皆悉於大神宮司參集氐、度會河瀬大祓供奉、然卽御厨饗給之、

六月例

以十五日夜乃亥時、第二御門仁御巫内人仁御琴給氐、大御事請氐、以十六日、從宮西河原仁退出之、御巫内人氐、(乎志)卽禰宜内人物忌等之後家之雜罪事令申明、解除幷淸大祓畢、然卽以同日、此禰宜内人物忌父等引率、正殿院參入、御内淨仕奉畢、山向物忌之、天八重佐加岐令差立林飾奉、幷宮之御垣

祭主從四位下行神祇權少副大中臣朝臣能隆（中略）同（治承）三年三月十一日、敍正五位下、兩機殿功、

〔類聚大補任 龜山〕文永六年己巳九月、神服機殿鎭守神殿御裝束幌紛失、（中略）神麻續機殿鎭守神殿幌御鏡一面紛失、

〔元祿九年神宮勘文〕神服機殿在流田鄕服村

奉織皇大神和妙御衣之處　創造垂仁天皇御宇

殿高一丈一尺三寸、長八尺、廣五尺五寸、　板葺　搏風四枚　鰹木六本　板垣高四尺八寸五分、五間四方、　同門高七尺一寸五分、廣四尺六寸、　板葺

織殿

殿高一丈二尺七寸餘、長二丈九尺二寸、廣九尺、　茅葺　搏風四枚　鰹木八本

神社七宇

三宇、高各六尺五寸、長二尺六寸二分、廣二尺一寸、　四宇、高各五尺五寸、長二尺、廣一尺六寸、

七宇各板葺　搏風四枚　鰹木四本

鳥居四宇、高各一丈、廣七尺五寸、

參籠屋　屋二間四方　殿地東九十八間、西百十間、南八十五間、北百間、

已上在多氣郡流田鄕

神麻續機殿當時在小社一宇

奉織皇大神荒妙御衣之處　創造同上　殿地方五十餘丈

已上在多氣郡麻績鄕

〔神廷紀年 中御門六〕享保三年、此年藤堂和泉守高敏伊勢津藩主再興服部麻績兩機殿、

機殿

〔神服機殿年中行事記〕四月朔日朝、御洗米壹盛、（土器盛）枇折敷居之、御酒二獻奉供之、毎度再拜拍手、今日於織殿、致御衣之織初也、　八日朝、神拜、自今日至十四日、宿于齋館、

〔神麻續機殿年中行事記〕四月朔日朝、御洗米壹盛、（土器盛）枇折敷居之、御酒二獻奉供之、毎度再拜拍手、今日於機殿、致御衣之織初也、　八日朝神拜、自今日至十四日、宿于齋館、

○

〔神名秘書〕機殿儀式帳云、此機殿者、昔纏向珠城朝廷、（○垂仁）倭姫皇女傳奉大神、齋奉飯野之高宮、于時機殿立長田鄕、是處立社號麻績社、亦名河埼社、是大神御靈也、稱麻績屋姫神、于後機殿遷於岸村、是處立社、號稱岸社、亦是大神御靈也、難波長柄豐前朝廷（○孝徳）有格以留止大神御衣、然後飛鳥淨御原朝廷（○天武）大來內親王齋奉大神、此時始而立、此機殿、更發供奉大神御衣、于時更始立此機殿、天智天皇即位七年八月三日夜、依兩機殿燒亡、便所造假屋、九月御衣勤仕、依宣旨也、其後兩機殿別々立之、相去各卅丈、

〔新任辨官抄〕神宮事
績麻織殿（在績麻郷）　服織殿（在服郷）

〔神宮雜例集〕一神服麻績兩機殿
神服機殿（在多気郡流田郷服村）
麻績機殿（在同郡井手郷）
已上兩殿、去外宮百町許歟、四月九月十四日織口布（如綱）持參、納東寶殿也、
右兩機殿、皇大神宮御鎭座之當初建立、而麻績機殿、承曆三年被下宣旨移造之、

〔百錬抄〕（六崇徳）保延二年三月廿三日、此日大神宮麻績機殿燒亡、

〔類聚大補任〕（後鳥羽）文治元年（乙巳）

〔兩機殿雜事考證〕御衣絲料之事

此御衣を織糸は、三河國赤引の糸也、(神祇令義解に見えたり)或は三河國寶飫郡赤日子神社(神名帳に見えたり)にあり、其神社の邊には、蒔うゑずして麻生ずといふ、赤日子と赤引と通音なり、當然の理ならんか、實德年中神事の留書、天正年中の收納帳を見るに、中古までは雜料多く有て、儀式も全備す、其後料物領地斷絶して、祭事も懈怠す、元祿再興の時より、毎度兩機殿の糸料に、神宮より錢壹貫文を下行して、形計に御衣を調進する也、和妙荒妙の御衣の員數は白地に記しがたし、和妙の御衣は糸を以て絹を織なり、荒妙の御衣は麻を以て布を織也、

〔延喜式四伊勢大神宮〕服部等造二時神衣一機殿祭幷雜用料

絲一百絇、倭文二丈一尺、(是一種請二官庫一)木綿麻各十三斤四兩二分、(已上祭料)絹四匹四丈二尺、綿四屯、調布九端一丈、商布七十九段、鐵六廷、砥四顆、(是二種請二官庫一)油一斗、鹽一石、稻六百五十六束、(九月祭料)防壁四枚、席四枚、神部二人料、日米一升二合、

麻績等機殿祭幷雜用料

麻卅螢(圖二尺爲レ鬘)絹四丈、倭文三丈、木綿十三斤四兩二分、(已上祭料)商布七十九段、砥二顆、油八升、鹽一石、稻三百九十七束、(九月祭料)

右織二造神衣一料、所レ須雜物、皆以二服織戸廿二烟麻績戸廿二烟調庸及租一、各便分充、大神宮司檢校、若所レ輸有レ餘者、附レ帳申上、如有二損戸一者、大神宮司量充、

〔神宮雜例集二〕年中行事

三月廿五日、兩機殿神御衣祭、御占大祓事、

四月一日、兩機殿御卜、神御衣奉レ織始事、

八日、兩機殿鎭祭事、

于正暦年中氏人與經申文、〈在祭主實曲列〉并寛弘年中神部近守申文〈在祭主三位列〉大等也、其後神部等不言上之條、雖有遲緩之恐、今猶補任當職之神部、乍贍令條并度々宣旨、爲神爲朝、壹經言上哉、就中神部等、勵私力奉職之間、爲字藏人大夫光隆朝臣、被檢封御糸奉納人面重次〈入千嫂孫〉々住宅之條、是神令然之事歟、依爲未曾有事、言上次第之間、度々雖被宣下、未遂沙汰節、然則任彼令條并兩度宣旨、以三河赤引神調御糸、齋戒潔淸、被奉織者、神事違例之御祟自消、寶位无傾之御誓叶神慮、仍相副彼宣旨、并親春逃亡證文等案、言上如件、謹解、

嘉應二年九月廿九日

少神部神服連公俊正

大神部神服連公道尙

〔大神宮儀式解二十四〕神御衣の祭は、〇中略三河國神調糸もて織るは、令義解にも見え、彼國人も今に言傳たり、考に仁壽元年紀十月乙巳、三河國赤孫等十一神、並授從五位下、神名帳三河國寶飫郡赤日子神社、和名抄三河國寶飫郡鄕名赤孫〈安加比古〉とあり、社も此邊にあるべし、今右の社同郡上鄕村にあれば、此邊の古名を赤日子といひし歟、さてあかひこは、赤引の轉語歟、此社より西北方に麻畑といふあり、右畑竿歩、下畑四歩、下畑壹畝十八歩、下畑三畝六歩、三竿合て四畝二十八歩あるよし、中世の記文に見ゆ、又寶飫郡麻生田村あり、渥美郡阿志村麻畑あり、又同郡神戸村に大御堂あり、〈麻うみ堂の誤といへり〉かゝる所々は、麻績機殿に奉る麻を蒔植る處と見ゆ、又和名抄三河國八名郡鄕名服部、〈波止利、今その所知がたし、〉寶飫郡佐脇村宮に波登利といふ處の田地高三石あり、神衣祭の織子などの出る所歟、又糸上りし所なるよりかく號しか、〇中略今代も彼國人は四月九月十四日は、祭日と稱ひて、齋敬遙拜す、十年ばかり前まで、三州西郡三好彥馬といふもの、かたの如く糸を調へ、宮廳に進れば、卽これを兩機殿にわたして、御衣料の糸に加へ織りしを、近代はいかなるにや、その事も絕たり、

待勅定云云、宮司權大司良圖許參也、大司所勞也、少司他行、

〔延喜式伊勢大神宮四〕四月九月神衣祭

大神宮和妙衣廿四匹、（八匹廣一尺五寸、八匹廣一尺二寸、八匹廣一尺、並長四丈、）髻絲頸玉手玉足玉緒傜襪緒等絲各十六條、縫絲六十四條、（各長五尺、）長刀子一枚、短刀子錐針鉾鋒各十六枚、著絲玉串二枚、韓櫃二合、（一合盛衣、一合盛金物、）宮一合、（盛絲幷雜緒、）荒妙衣八十匹、（卌匹廣一尺六寸、卌匹廣一尺、並長四丈、）刀子針各廿枚、韓櫃一合、（盛衣幷刀子、）荒祭宮和妙衣十三匹、髻絲頸玉手玉足玉緒傜襪緒等絲各八條、縫絲四十條、刀子錐針鉾鋒各八枚、著絲玉串一枚、韓櫃二合、宮一合、荒妙衣卌匹、刀子針各十二枚、韓櫃一合、

〔日本書紀三十持統〕六年閏五月丁未、伊勢大神奏天皇曰、免伊勢國今年調役、然應輸其二神郡赤引絲參拾伍斤、於來年當折其代、

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月癸亥、勅伊勢大神宮服料、用神戸調、

〔神宮雜例集二〕一神服機殿政印事

神服織機殿神部等解申請廳宣事〇中略

右被今月二十六日廳宣偁、去八月廿七日宣旨偁、今月十七日祭主下文偁、同廿七日司符偁、子細云云具也者、謹所請如件、〇中略抑神御衣御糸事、任令條幷度々宣旨、以三河國赤引神調御糸、可被奉織之由載于一紙、同經言上之處、未被裁下之條、且爲恐、且爲愁、何者縱雖不被載于式條、神事嚴重之間、隨申請被定置料所之例幾哉、況於神御衣勤者、掛畏天照坐皇大神御坐天原之時、以神部等遠祖天御梓命爲司、以八千々姬爲織女、奉織之間、御垂跡之後、于今其勤誠以嚴重無雙也、因之以彼國赤引御糸、齋戒潔清可奉織之由、所被定置神祇令歟、隨致其勤之剋、自然中絕、然而麻續機殿御衣御麻沙汰之次、以三河赤引糸奉織之由、寬治兩度宣旨、又以明白也、其中絕子細、雖無指所見、先度如言上、其時大神部親春、犯用供祭物、隨身彼印幷旁沙汰文書等、逃脫於他國之由所申傳也、於逃亡子細者、見

則依度々洪水之難也、而恒例式日、件御衣爲供進仁、麻績乃結人等催雇天、十四日朝出立之程迄留在天、麻績機殿御衣奉納辛櫃、櫛田川西岸出立畢、神服機殿御衣、未出立給天機殿御坐、以十五日、雨機殿御衣、同時櫛田川奉渡天、同日戌時進納於神宮已了、一年之内二度御衣既式日過事、尤重違例也云云、　五年九月十四日、恒例神御衣、式日闕怠不供奉、事發字鏁方御麻生園預清原秀延加出來天、大神宮乃天平賀奉造料乃板負ルタ駄、横切放已了、仍大司差檢非違使常忠天、尋糺眞僞之間、秀延烈隱天不參會、使者仍檢封彼住宅也、于時大神部重友、少神部象友等申之、可奉御衣織料乃御麻、乍置於秀延住宅被檢封也、仍御衣不可供奉之由陳訴天、過日來之程仁、神服乃御衣式日出立進天、字稻木川原ニシ天、麻績御衣相待之間、時刻式日已過リタ、仍十五日午時許、祭主被下向之程、大神部常枝等訴申於祭主、即被命云、服御衣无愁歟、然則早可供奉也者、仍以十五日夕部奉納已了、但御衣權司所供奉也、　十二月十八日參宮勅使王致資王、中臣元範朝臣等也、宣命云、去九月十四日神御衣、宮司神民ト向背乃氣在天、荒妙御衣服闕怠之由云云、以來廿二日令供奉之由、云云具記、不抑件御衣、以件廿二日、成神部代令備進天、所被令供進也、詔刀畢之後、東寶殿奉納天レ、一宿之後禰宜等給了、荒祭宮御料、御前御棚忍結天其上奉置、同一宿之後、內人物忌等給畢、即件大少神部等預內戶田當年官物、宮司放使勘納早了、　六年〇康平元年八月廿九日、宣旨依天、祭主永輔朝臣、宮司象任朝臣等乃罪名所被令勘申也、事發者、以去九月、神服衣式日不令供進、又荒妙御衣闕怠之咎也、但至祭主者、不可懸件事也、然而神麻績機殿神部等京上テレ、愁於祭主之日、須早裁下令致件勤也、然而與宮司相違之間出來天宮司令處重科ト思、專裁許之間、宮司之許無其隱シ天、件荒妙神衣闕怠之事、祭主之企也ト被定天、祭主乃罪名共被令勘也、何況件大少神部等、同前被令勘罪名也、

〔大神宮司神事供奉記　一〕延應二年〇仁治元年九月十五日、御衣神事、依大風洪水昨日延引、仍今日也、但麻績方御衣許也、是今月二日之大風之時、服之機殿破損之間、御機具足等打損云云、而間經奏聞相

延引

宮司神宮、次ニ長官之侍中等、玉串内人、物忌父諸役人エ粽を居、神酒各二獻、勸盃配膳之勤也、各頂戴之後、末座より撤之、一拜座を立退出、

〔基量卿記〕元祿十二年七月十五日壬午、於省中正親町亞相〇公通被談云、伊勢去春神宮祠官等、神衣祭令再興由也、此義禁中へも及言上候哉、元有來候事候哉、事大義ニ候故、武邊、殿下〇近衛基熙傳奏へ尋申候間、從儀後刻自兩傳奏可申候間、内々密々左樣ニ可存知由也、予返答曰、御入魂之趣、先以忝存候、神宮祭義、去春再興候由、後日藤波二品〇景忠物語候、於彼方町奉行等令相談、下行物等内宮長官爲沙汰、如形行之由也、此義ハ後日藤波噂ニ被談候、勿論次第之奏解狀等不到來候故、不及奏聞故、藤波へ尋可申之由之處、彌自傳奏被尋候はゞ、能相談候て、書付可調由也、

〔璽尻五〕神衣祭ノコト、保良モ、　神衣祭ハ四月五日或九日、内宮大神宮荒祭宮、ばかりに行なはるゝ事式令の如し、神服部連神麻績連は、久しく所をさりて絕しを、正德の比、今の一禰宜薗田長官、絕たるを興し、此二氏安濃津に在りけるを尋て、領を寄せられしより、彼兩氏神衣を調して、やゝ古のすがた近くなれり、されば服部の連は、天御桙命の裔、麻績連ハ天八坂彥命の後なるよし、舊事紀姓氏錄に見え侍る、かゝる廢禮も時有て興行す、治世の餘澤なり、

賢按、服部連が末葉、神衣を織て、大神宮に調進の家を、保良の物忌と云、此もの兵亂以後、神衣の御事も中絕して、世のたづきなきゆゑ、安濃津にて戻子肩衣を織出して賣始たり、是を世に伊勢津戻子と云、夫故昔は保良モジとも云しなり、

〔大神宮諸雜事記一〕天曆七年九月、神服神麻績二機殿例貢、神御衣調備賚參之間、五十鈴川俄洪岸洪水出來、往還不通、因之神部人面等乍奉持神御衣等、三員宮司相共、二箇日夜之間逗留宇治山、以同十六日、乘船奉渡件神御衣奉納了、

〔大神宮諸雜事記二〕天喜四年九月、神御衣奉織之間、日來大雨頻降天、人民乃作田畠物併皆損了、是

中臣也、祇承内人ハ、御辛櫃之北西面ニ列立、于時政所氏方進祇承前、大少神部等問參否之由、祇承答、政所於長官之前、一拜申其由、立本座、次大少之神部御辛櫃開、送文渡副物忌、副物忌渡大物忌父、大物忌父進渡政所大夫、政所件之送文獻一禰宜、一禰宜請取拜覽之後、渡二神主、次第至十神主、卷納之、件之送文ハ先和妙衣之送文、次荒妙衣送文也、拜覽之後、亦次第ニ送上首、至一禰宜渡政所、于時政所進御辛櫃前、大物忌父開御辛櫃之蓋、開送文讀合、後閉蓋歸本座、次宮司、手水鬘木綿、玉串之行事如例、今日宮司玉串取歸立本座、次神主各下裾、玉串を取、進第四御門ニ、次大少神部玉串を取進、于時御辛櫃二合、外物忌捧持、先内物忌父進參、次御辛櫃、次大少神部等也、御辛櫃ハ八重榊之前ニ奉居、外物忌父蹲居、次石壺行事、宮司神宮物忌拜伏之後、大少神部等第四之御門北之軒下、服部ハ東北面ニ著座、麻績ハ西北ニ著座也、第四之鳥居之前ニ有之御辛櫃之前ニ進服部大神部進開蓋、手一端打、御衣筥并御榊二枝を取出、案上ニ奉置、一拜歸本座、次麻績之大神部進、御辛櫃之蓋を開、手一端打、御衣筥を取出、案上ニ奉置、歸本座、于時大物忌父詔刀文獻宮司、宮司一拜請之、一窩一拜歸本座、宮司座を立、詔刀讀進、次宮司神主玉串之次第行事如例、

東寶殿行事、大少神部外物忌父等、御衣案二脚東寶殿ニ持來、御階之進左右、宮司神宮西面著座、玉串内人十神主之末ニ著座、次内物忌父寶殿之御前西北上東面、大少神部ハ宮司之北西面著座、外物忌父ハ神部等之北西面群座之後、一神主守洪、手扶七神主守夏、座ヲ立テ東寶殿ニ昇進、奉開御戸、一拜之後入御内、于時玉串内人、和妙衣之御衣筥を奉捧、七神主請取之入殿内、次大物忌父荒妙御衣筥を奉捧、七神主請取之入殿内、奉納畢之後閉御戸、御鎰之御封大司封之、其後石壺等之行事如例、

一殿行事、荒祭之宮神事畢ルを相待、宮司神宮玉串内物忌外物忌大少神部各著座、宮司神主ハ高麗之薄縁を敷、玉串内人内物忌父已下ハ、無縁之一重之莚也、座定後、大少之神部座を立、棕を居、先

進上御奉行所

一同三日五禰宜經晃、七禰宜守夏、小林役所ヱ參入申上候者、昨日神衣祭再興之儀御願仕候處、首尾好被爲仰出、長官神主中難有奉存候、先爲御禮兩人參上仕候段申上候、御返事ニ、爲昨日之御禮兩人被參、致滿足候との御事也、

同十四日晝辰刻、神服大神部久富、同少神部久定、神麻續大神部久明、同少神部久種供奉、御辛櫃四合、參向道中之行列、先驅警固二人、對袴著用、長官之侍中勤之、次御辛櫃、神部等壹人宛隨附之、各布衣著用、後陣長官之侍中烏帽子青襖、宮川ニ至、別船を以渡之、大宮司房長束帶、爲御衣御迎參向于宮川、卽於川邊下、据拜之、有川祓、祓具司家之造作也、祓竟之後、宮司ハ外宮神拜、御辛櫃者、役人供奉之、奉運送于本宮、

同午刻、宮司參向、於一鳥居居輿下乘、河原之御祓、大少神部四人、御巫内人供奉、本宮之和妙衣櫃、同荒妙衣櫃、次荒祭之宮和妙衣櫃、同荒妙衣櫃、南上東面ニ居並、御巫内人光久、於例處神酒、次御祓讀進之後、大麻を御辛櫃ヱ奉振懸、行事之後各預酒肴、神部等於川邊手水、次ニ御辛櫃四合、二鳥居之内ニ奉運送、中央ニ置、

神主中一守洪、二經冬、三四不參、五經晃、六永親、七守夏、八守風、九不參、十氏基、束帶明衣木綿鬘木綿綴、御祓勤仕之後木下ニ進、

於二鳥居、宮司幷御辛櫃、御鹽湯大麻之行事有之、祗承先駈、

玉串之行事、宮司神主北、南面西上ニ列立如例、玉串内人定泰束帶、山向内人孝親衣冠、南北面著座如例、御辛櫃二合東方ニ居、但荒祭之御衣櫃二合ハ、荒祭遙拜所ニ留置、物忌父弘次、束帶、弘重、弘供、弘常、昌重、弘國、時弘、尙富、忠俊衣冠、尙範、忠盈、二人不參、外物忌父荒祭宮内人不參、瀧祭宮内人重堅、同光高、風日祈宮内人守延尙淸等ハ、御辛櫃之南北ニ群立、大少之神部ハ、玉串内人之東北ニ列立

四月二日、五神主經晃、七神主守夏、小林役所江參入口上、當月十四日九月十四日、神衣祭御座候、此神事從當月執行仕度奉存候、然共此神事久數中絶、殊當年者、大切成御神事再興之上ニ御座候得者、重々再興之儀雖申上存候得共、先御內意申上候與申、則口上書指上候、家老根尾甚五兵衞對面被申候は、周防守被申候は、神事之儀、此方構申儀無之候、神主中被致吟味、首尾好可被相勤候、神事之次第書付可被差出候與被申候、此方申上候は、首尾好被爲仰出、難有奉存候、御意之旨、長官神主中江可申候、

申上口上之覺

一於內宮年中致執行候御神事、當時斷絶仕候內、祈年祭先頃形計再興仕、難有奉存御事御座候、然者當月十四日織神衣祭之儀者、神代之遺風相傳、御鎭座以來執行仕、神宮大切成御神事ニ而御座候得共、是又斷絶仕罷在候、今御聖代之節與申、殊御祈禱之儀御座候間、形計成共再興仕度奉存候、然者祈年祭再興仕候上ニ而御座候得者、思召之程も憚多奉存候得共、先奉窺御意候御事、

一此御神事之次第、年中行事記、儀式帳、延喜式、神祇令義解、公事根源、神宮雜例、神事雜事記等、委細載之申候、斷絶之年代相考候得共、知不申候、但神御衣奉織役人者、多氣郡流田村與井口村與申所ニ、兩機殿御座候、卽其祝等相勤申御事御座候、役人之補任、弘長元年八月七日之補任記文相見候、此御代者龜山院之御宇ニ而御座候、此時分迄當祭執行仕樣奉存候御事、

一神御衣祭之儀、當時斷絶仕有之候得共、御神領內、其外國ニ而茂、四月十四日者御衣與申、上下共御衣調進之御事故、神慮敬恭仕、麻織之事不仕候御事、

一件之御神事、外宮者無御座候故、右ニ記申候記文等にも相見不申候御事、　以上

卯四月二日

神主中

內宮長官印

再興

返韮葉一奉曳折也、以後日可奉修補云云、乃奉納御衣之後、奉閉御戸畢、其後歸著石壺、八度拜拍手神拜、別宮拜同、其後脱鬘木綿著一殿饗膳如例、事畢之後退出也、

〔神御衣祭沙汰文〕元祿十二年正月爲禁裏甫歲之御禮、薗田將監上京之節、對謁祭主景忠卿、演說仕候者、內宮四月九月之神衣祭、共斷絕仕有之候、此御祭禮亦大切成儀御座候得者、退轉歎敷奉存候間、月次祭之通、先形計成共執行仕度存候、殊麻績服部兩機殿之役人之末孫、亦于今相續者有之候得者、彼等取立申度存候、若此祭再興仕申候者、補任之儀可申上候間、其節可奉賴之段、一禰宜守洪願望之趣申上候、祭主殿報言、神衣祭再興仕度之段、神宮之威光、祠官之繁榮、何事如之哉、彌神宮同僚合心、再興仕致執行候者、可然之旨御意被成候、

〔御衣祭再興之記〕元祿十二年二月十二日、祭主殿家臣澤池圖書、瀧主馬江七守夏書狀差遣候如左、

任幸便、一翰啓上仕候、○中略猶々御衣祭之儀も、當年形計成共、再興仕度奉存候間、先日申上候通、役人共申合、補任之儀申上候儀も可有之候間、御序之節御申上置可被下候、以上、

二月十二日　內宮七禰宜守夏判

澤池圖書樣

瀧　主馬樣

同廿三日、從祭主殿兩臣、返書到來如左、

御札令拜見候、○中略四月神衣祭も、自當年形計成共可被執行之由、御最千萬、其段申入候處、殊勝思召候由被仰候、禰宜中位階昇進も勝古代候、朝恩神恩、箇樣之事被報外者有間敷存候、神宮大勢之事ニ候、事繁六ヶ敷、再興嫌申輩も可有之、其輩は其分被指置、志有之衆計に而も、被勤候樣有度事御座候、神領不似古候得者、難及舊式事者無是非、各別之子細候、可調程之事者、神拜計成共、神事形不絕樣有度候、常々二位殿被仰候ニ而も、再興專用存候、○中略

起原

○按ズルニ、此他元文年中行事記等ニ祭式ヲ載セタレドモ、粗上文ト同ジキヲ以テ之ヲ略ス、

〔神名秘書〕舊記云、神衣祭者、皇大神宮御坐高天原之昔、人面等之遠祖天八千々姬、殖桑葉於天香山、以所蠶之御絲、織供進御衣於大神、御垂跡之刻、彼神逢奉戴、兩具御機具天降御坐之以降、人面職掌人等爲其末葉、以女子者號織子、以男子者稱人面、職掌不違天宮之例、以四九兩月十四日、所謂進之御衣也、

〔日本書紀神代一〕素戔嗚尊之爲行也、甚無狀、○中略見天照大神方織神衣居齋服殿、則剝天斑駒、穿殿甍而投納、

〔古語拾遺〕素戔嗚神奉爲日神、行甚无狀、○中略于時天照大神赫怒、入于天石窟、閉磐戶而幽居焉、○中略爰思兼神、深思遠慮議曰、○中略令天羽槌雄神倭文遠祖也織文布、令天棚機姬神織神衣、所謂和衣、古語爾伎多倍、

〔大神宮儀式解二十四〕神御衣の祭は、大御神飯野高宮に御坐す比より起りつと見ゆれど、後のごとく嚴なる事とも見えず、○中略此祭古より絕ずて、寶德年中まで傳はりしを、兵亂に依て近代廢たりけるに、さるを元祿十二年、薗田一禰宜守洪卿、公武に申て、かたの如く再興あり、

祭例

〔大神宮司神事供奉記一〕延應二年○仁治元年四月十四日、御衣神事、宮司皆參、盛房良國長則也、各參離宮院、奉待御衣、奉拜如例、其後行列如例、占部兄部等參於宮河際、祓如例、參外宮、祗承大麻御鹽湯等參勤、其後用手水、參御前、神拜如常、別宮神拜遙拜也之後、禰宜二元邦、四淸章、五維行、參向對拜如例、參著內宮、於例所祓如例、其座酒肴如例、神部等陪膳、服大神部豊時、少神部延助、麻續少神部弘朝參、麻續大神部行貞收補之間、其替以後淸補云云、而故障出來不參云云、酒肴訖之後、參一殿前、祗承宮掌二人、五位大麻御鹽湯等參勤、奉祗御衣之後、經暫參玉串所、禰宜一宗經、三延成、四氏俊、五成行、六重仲、七永光、八經元供奉、對拜之後、次第儀式如例、參著石壺、先祝詞、大司勤之其後玉串行事、神部等榊木綿上之、御封申之後參內院、三禰宜參昇東寶殿、擬奉開御戶之處、御鏁之韮葉一返之間難奉開、仍有評定、參昇大物忌父奉強曳出、然間彼

職之方、同自雨方、酒二升、粽二束、此外今日所役勤仕御麻内人一人、御鹽湯内人一人、山向内人、鎰取内人一人、三重玉垣御榊奉仕公侯氏三人、荒祭宮木綿作内人一人、同御鹽湯内人一人、同山向内人一人、同御火内人一人、同御唐櫃持下人四人、各酒一升、粽壹束、自雨方預例也、抑於内物忌父等者、雖令勤仕所役、爲先例、不預件頓調料、只饗膳計也、至子良者、又依爲外里調備饗物料白米預例也、又鎰取内人一人、號黏料、自雨方不具飯一坏請例也、又鋪設出納自雨方、机各三前、酒各五升、粽各五束、以神部所從、被御倉所持送也、又故浦田長官俊定神主之時、月讀伊佐奈岐瀧原並宮伊雜宮下部等訴申云、色々職掌人等、皆依掃除勤役之功、預頓調料、而別宮下部等、爲勤仕彼役參本宮、同雖致彼勤、不預物之由云々者、仍從彼時、別宮自雨方、各酒五升、粽各五束、件下部等所請預也、又岡田長官成長神主時、以彼例依申請瀧祭下部等、同酒五升、粽五束預、又同時荒祭宮昇殿大内人一人、大物忌父一人、酒五升、粽五束預、是同依申請也、但如以前自雨方不請、各一方請也、於大内人者服方、至大物忌父者麻績方請也、又祿料筵者、正員禰宜各二枚、玉串大内人二枚、并十六枚以長筵所分配也、而於長筵者、依枚數不足、以小筵二枚、一枚之代所分配也、又二季御衣之時、以十四日以前(无定日)所課神部等宮廳獻酒肴也、宮政所同前、但宮廳獻半分之程也、

〔皇大神宮年中行事〕九月 一同日(四日)〇十神御衣祭、次第儀式行事如去四月、但今度詔刀文狀中、和妙荒妙御衣、并國々所々神戸等進ル荷前御調絹等ヲ、平ク安ク聞食ト恐ミ恐ミモ申給ハクト申ト被申、其外皆如去四月、仍不書、抑今度四人神部、人別納力稻四束、(以十把爲束)薄長筵一枚、米一斗、(黒米)干鯛一喉、菓子一籠所進也、仍奉納于由貴殿者、相并稻十六束、米四斗、筵四枚、干鯛四喉、菓子四籠也、而件納力稻内、二束大宮大巫内人預給、一束荒祭宮御巫内人預給也、以是十月一日四至神祭禮之次、乍穗供也、又四束宮廳分、所殘九束并米筵鯛菓子、宮政所酒殿出納等之沙汰也、今度粽之代以餠用也、以十枚爲一束之代也、於酒者乍二季入堝也、委不記、

各一殿著、宮司自後戸參入、自件戸東方南向、以東爲上著、神主南方北向、以東爲上、宮司對座著、司中主典自後戸西方南向、以東爲上著、內物忌父等西座東向、以北爲上著也、其次山向內人著、次御鹽湯內人著、次御麻內人著也、於外物忌等者不著座、饗代白米等所請預也、于時荒祭宮奉納以後、玉串大內人幷彼宮大內人及物忌父等歸參、件物忌父此殿前立、荒祭宮御封單中、又神服神麻續兩機殿大少神部等同列立、服大神部、任職數神部織子人面等參由申、宮司以笏揖、其後玉串大內人幷物忌父等著、次瀧祭大內人物忌等著、南方居廻也、仍上首者北向東座西向也、司中下部等前石橋參候也、御封申後在手、其後各饗膳預、陪膳役神部等也、但內物忌幷司中主典、及別宮下部等司中下部之陪膳、神部等之所役也、又供奉宮掌大內人等、此件殿東砌、酒肴預飾設敷、自兩機殿方敷也、又件酒肴自兩方勤之、今日饗膳者、兩機殿少神部等之勤也、各領知內戸勤云々、九月御衣時、兩大神部勤云々、抑二季神御衣祭時、服麻續兩機殿所課神部等、稱權任神主料、自服方懸盤十前、又職々下部幷掃部勤仕役、諸別宮內人物忌、及諸社祝部等饗料代、白米三斗三升、同料粽卅束、魚五隻、土器少々、神主祿料小筵十八枚、又散行使料懸盤二前、酒一斗、粽十束、酒殿出納二人由貴殿出納一人料、机三前、酒三堝、（各五升納）粽十五束、松三把、自麻續方權任神主料懸盤十前、六位職掌人料机六十前、色々下部料幷掃除役別宮下部等、及諸社祝部饗料、白米一石五斗、酒一馱半、黑米一斗五升、粽卅三束、干小魚三百三十隻、神主祿料薄長筵九枚、散行使料、懸盤二前、酒一斗、粽十束、三人出納料、酒三堝、（各五升納）粽十五束、各相副解文送進酒殿、于時自宮廳以便宜之者散行、使所被差之也、仍所令沙汰也、抑懸盤小机白米等員數、七禰宜加補之時、權任神主廿人、六位之輩六十人云々、仍如此雖被定前數、近代云權任神主云六位職掌人、已及數百餘人也、雖然依無沙汰未增加、只以件物等、纔上座許所散行也、又號頓調料、自兩方一禰宜酒二斗、（入二五升納土器四口）粽廿束、以下禰宜六人、各酒五升、粽五束、玉串大內人、酒二斗、（入二五升納土器四口）粽廿束、又宮掌大內人同自兩方各酒一升、粽一束、宮政所幷大目代一人、酒五升、粽五束、又職掌下部等每

詔刀畢後、宮司本座歸著、所置御玉串令捧持、其後玉串行事、次第如新年祭時、仍委不記、但御衣之時、玉串大内人所帶御榊、玉串御門右方石疊上奉之後、件御門南留南向祗候、其時四御門北方祗候、兩織殿大少神部等、所帶御玉串并各方々織子人面等所帶榊取聚、彼御門持參、玉串大内人前跪候、〇中略 于時玉串大内人、件御玉串請取、同御門左右脇石疊上奉、(服左方、麻績右方、)但兩大神部者、所帶御玉串許持參、兩少神部者、所帶御玉串之上、織子人面等御榊取加持參也、抑又服大神部木綿糸裹所帶榊懸也、又玉串大内人、其後尙件御門祗候、正員禰宜并宮司相待、于時鎰取内人座立、御鎰櫃宮司所付置封解、宮司向御鎰櫃御封開申破之、宮司以笏揖、次彼内人、東寶殿御鎰、自件櫃取出捧持立、其時神主并宮司等立座、爲御衣奉納内院參、一禰宜笏差、彼御鎰請取、鎰取内人持寄奉、其後神主前參、次宮司、次御衣也、各自瑞垣御門參入御寶前候、宮司東神主西中强也、在拜無手、其後各自御殿東方、東寶殿前瑞垣副祗候、神主南、宮司北方、皆西向中强也、于時一禰宜進參、東寶殿奉開、先御戸封解、鎰取内人給、鎰取請取、宮司向、東寶殿御封開申破之、其後御衣御唐櫃奉納、玉串大内人大物忌父兄部相副也、次御戸奉閉、鎰取内人硯并封紙持、宮司前進向、宮司封紙三筋取、封書鎰取給、鎰取請取、一筋一禰宜奉、一筋荒祭宮物忌父給、一筋御鎰櫃料置、一禰宜件封付御戸之後、本列祗候、鎰取内人宮司向、東寶殿御封畢申、宮司以笏揖、其後各退出、前後如參入時、御殿向在拜無手、於八重榊西、御鎰鎰取内人給之後、各石壺著、鎰取内人御鎰櫃入封付、宮司向御鎰櫃御封畢申、宮司以笏揖、次拜八度手兩端、次玉串大内人早立、荒祭宮大内人大物忌父相具、自西御門退出、於忌火屋殿垣外艮方、御衣御唐櫃奉舁居、神主并宮司等彼宮片相具、各御玉串持立、(件唐櫃、荒祭神拜所假置、御唐櫃也、而内院神事之間、當宮下部所請取也、)宮司者從南御門退出、神主自西御門罷出、(各在祗承、)荒祭宮神拜所行合答拜、次荒祭宮拜八度、(在手兩端、)其後玉串大内人并件内人物忌、御唐櫃奉相具參、又兩織殿大少神部織子人面等同列參、玉串大内人詔刀申、(彼宮下部、假石壺造、玉串令居、)狀跡大略同前、仍不記、宮司神主等拜之後退立、神主於酒殿後、鬘木綿解、明衣脫、宮司鬘木綿解後

檢非違使二人、在警蹕、先彼等於河原殿之西祓所祓勤仕、其後於件所在酒肴、次宮司參宮（在祗承宮掌、自例所勤之、人數不定、）御衣御唐櫃、兩織殿神部人面縫子等奉相具列參、（在御麻御鹽湯、於例所勤之、迄御鹽湯所在警蹕、）御唐櫃四合內、於二合者、荒祭宮神拜所奉留、在是彼宮御料也、至二合者、御鹽湯所石疊副奉昇居、宮司與神主左右列立在、答拜、又兩織殿神部人面縫子等、石橋隔左右列立、（左服方、右麻績方、）于時兩機殿案主等相並、各御衣送文持進向、物忌父一人行向請取、大物忌父兄部給、件大物忌父笏差取之、一神主奉、其後笏抽一拜、本列歸立、一神主作文披見後、宮掌大內人召、則一人參、一神主前揖立、一神主命云、服麻績兩機殿大少神部織子等、任職數參哉云云者、宮掌大內人以此旨、尋問祗承檢非違使者、任職數參候之由申、宮掌大內人此旨以、一神主申、其後大物忌父、一神主前進參笏差立、其後一禰宜彼送文返給、于時物忌父笏抜一拜、本列歸立、抑玉串大內人幷大物忌父列立所例所也、其後宮司手水用、次鬘木綿著幷玉串行事等、如新年御祭時、仍委不記、次內院參次第、前陣神主幷玉串、次宮司、次御唐櫃也、外物忌父等衣冠著奉持、於石橋南、在御鹽湯、內人勤又如恒例、各參入著左右石壺、宮司與神主中强也、但近代無中强之儀、宮司以東爲上著、御唐櫃者、八重榊東方奉昇居、三色物忌父兄部等、西方石壺以北爲上東向著、次鎰取內人著、大物忌父一人東帶、其外皆衣冠也、大物忌父笏指、詔刀文大宮司獻、宮司所帶御玉串前置請取、大物忌父笏抜、一拜之後本座歸著、大宮司立座、八重榊前進參、西方石壺跪詔刀申、

度會宇治五十鈴河上下津石根大宮柱廣敷立、高天原千木高知、皇御麻命稱辭定奉、天照坐皇大神廣前ニ恐ミ恐ミモ申給ク、服織麻績人等、常モ仕奉和妙荒妙ノ御衣ヲ、平ク安ク聞食ト、恐ミ恐ミモ申給クト申、

荒祭宮如此申進詔給

（抑二季神御衣、新年御祭、六月御祭、十二月御祭、祭主被申詔刀文、幷六月九月十二月御祭、宮司讀進詔刀文等者、自本宮所書進也、而大物忌父兄部給預所進也、九月例幣幷臨時、官下宣命也、新年幷臨時祭禮時、宮司詔刀無之、）

短拍手兩段退出、

凡四月神衣祭、預前一月晦日祓除、九月准此、

〔延喜式八祝詞〕四月神衣祭九月准此

度會乃宇治五十鈴川上爾大宮柱太敷立天、高天原爾千木高知天、稱辭竟奉留、天照坐皇大神乃大前爾申久、服織麻績乃人等乃常毛奉仕留、和妙荒妙乃織乃御衣乎進事乎申給止申、荒祭宮毛如是申天進止宣、禰宜内人稱唯、

〔神宮雜例集二〕年中行事

三月晦日祓事

於離宮院行也、宮司内宮禰宜參勤也、來月神御衣祭解除也、大司成廳宣、來月神御衣祭祇承事、所々道橋事、饗料司中勤之、

四月十四日神御衣祭事

宮司内宮正權禰宜供奉、大司中臣部刀、奉納之後、於一殿在饗膳、神服麻績少神部勤司廳、神御衣數料、同表張料、治田使補事、大司少神部請之、[illegible]文六、司成下知、神部進例文、兩機殿少神部送酒粽等、

九月十四日神御衣祭其儀如四月、饗膳、兩機殿大神部勤之、

〔皇大神宮年中行事四月〕一同日〇十四日神御衣神事勤行次第

今日内院南面蕃垣并玉串及四御門、合三重玉垣御榊奉差、是公候氏之勤也、又八重榊奉差、其員數百廿七枝也、是山向内人之役也、又荒垣鳥居并一二鳥居、與玉榊等、同今日所奉差也、荒祭神拜所差榊、彼宮下部役也、又玉串料榊、山向内人之勤也、總御榊奉差事、年中四箇度也、四月六月九月十二月御祭度也、但九月神御衣之時奉差榊以、十七日御祭者被行例也、而近代二月祈年御祭同所奉差也、午時許地祭物忌父、自出納手請取北御門鎰、件御門奉開參入、瑞垣御門奉開、又自外幣殿請戸張、瑞垣玉串并四御門等懸、神服神麻績兩織殿神部織子人面等、御衣御唐櫃各二合奉相具參宮、在祇承

祭式

シテ令集解ニ引ケル釋ニ、季秋ノ幣帛使ヲ擧ゲタルハ、蓋シ延曆以前ノ制ナラン、又神嘗祭ノ下ノ義解ニ、謂神衣祭日便卽祭之ハ、神衣祭ノ下ノ釋ノ文ヲ承ケタルモノナレバ、恐クハ亦釋ノ文ノ竄入シタルナラン、此二祭ハ延曆以後ノ制ハ、同日ニアラザレバナリ、

〔公事根源四月〕伊勢神衣祭　十四日

是は神祇令にのせたり、伊勢神宮祭をいふ、神服部潔齋して、三河の赤引の神調の糸をもて、神衣をおる、又麻績の連といふ氏人、麻をうみて、敷妙敷和衣を織て神明に奉るを、神みその祭とは申なり、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

四月例

以十四日、神服織神麻績神部等造奉、大神御服供奉時爾、玉串行事、大神宮司幷宇治内人等加行事波、二月月次驛使告刀與同、但神服織織女八人、神麻績織女八人、已上女人波、明衣著、皆悉玉串給、卽行列參入、卽宮司常例告刀申畢氐、持參入、東寶殿奉上、罷出訖就座氐拜奉、二月行事同、荒祭宮御衣奉行事、二月驛使時乃行事與同、

九月例

以十四日、神服織神麻績神部等造奉、大神御衣服、幷荒祭宮神御衣服供奉時乃太玉串、幷告刀種々行事、四月御衣服供奉同、

〔延喜式四伊勢大神宮〕四月九月神衣祭〇中略

右和妙衣者服部氏、荒妙衣者麻績氏、各自潔齋、始從祭月一日織造、至十四日供祭、其儀大神宮司禰宜内人等率服織女八人、並著明衣、各執玉串陣列御衣之後、入大神宮司宣祝詞、訖共再拜兩段、短拍手兩段、膝退再拜兩段、短拍手兩段一拜訖退出、卽詣荒祭宮供御衣、如大神宮儀、但再拜兩段、

古事類苑

神祇部五十七

大神宮七

神衣祭 機殿併入

神衣祭ハ、神服部等潔齋シテ、三河國ノ赤引ノ糸ヲ以テ、和妙ノ御衣ヲ織リ、麻績ノ連等、麻ヲ績ミテ、荒妙ノ御衣ヲ織リテ、皇大神宮及ビ荒祭宮ニ奉ル祭ニシテ、四月九月ノ十四日ニ之ヲ行フ、而シテ豐受宮ハ預リ給ハズ、其神衣ハ祭月ノ一日ヨリ織リ始メ、當日ニ至リ宮司禰宜等織子人面ヲ率キテ本宮ニ參進シ、宮司祝詞ヲ奏シテ、東寶殿ニ納ム、此祭ハ太古天照大神神服部等ノ祖天御梓命、人面等ノ祖八千千姫ヲシテ、御衣ヲ織リテ供進セシメ給ヒシニ起因ス、大寶ノ令ニハ其制ヲ載セタリ、然ルニ應仁ノ大亂以後、祈年月次等ノ諸祭ト共ニ、此祭式モ亦廢絶セシヲ、元祿十二年ニ至リテ再興セラレタリ、

機殿ニ神服麻績ノ兩殿アリ、和妙荒妙ノ御衣ヲ織ル所ナリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 加 諸社〕神御衣祭カムミソノマツリ

〔令義解 二 神祇〕孟夏神衣祭 謂伊勢神宮祭也、此神服部等、齋戒潔清、以參河赤引神調糸、織作神衣、又麻績連等、績麻以織敷和衣、以供神明、故曰神衣、 季秋神衣祭 謂與孟夏祭同、

〔令集解 七上 神祇〕孟夏神衣祭 釋云、伊勢大神祭也、其國有神服部等、齋戒淨清、以三河赤引神調絲、御衣織作、又麻績連等、麻績而敷和御衣織奉、臨祭之日、神服部在右、麻績在左也、敷和者、宇都波多也、此常祭也、古記無別、 季秋神衣祭 釋云、如孟夏祭、唯遣幣帛使、差五位以上、

○按ズルニ、二季神衣祭ハ延暦ノ儀式帳、及ビ延喜式等ノ諸書、並ニ勅使發遣ノ事ヲ載セズ、而

垣門ノ左右、庇ノ左右、鳥居ノ左右、御竈屋ノ内外、廻神ニ供ス、瑞垣門ノ前ノ鋪板ヲ除去、小鉾幣榊ノ小枝ヲ以テ、竹籬ノ如クニ裝飾ス、

禰宜前夜ヨリ齋館ニ參宿ス、寅時許、荷用松明ヲ執、按内ヲ啓ス、禰宜衣冠權官直垂進テ例所ニ列ヲ整テ、木柴垣ノ内ニ入、列立シテ南面西上ス、權官重行ス、番物忌正衣冠副狩衣、御矢ヲ持テ、南側ニ序立シテ北面東上ス、一禰宜御調成歟ト言、大物忌父稱唯ス、一禰宜先驅警蹕ス、荷用御鹽湯ヲ撣清ム、物忌御矢ヲ捧テ進ミ、傍官權官從行本宮ニ詣ル、禰宜石壺ニ著座居上シテ北面東上ス、物忌御矢ヲ供ズル事卯杖ノ如クシテ、玉串門ノ左腋ニ著座シテ西面南上ス、大物忌父座ヲ起テ、祝詞文ヲ一禰宜ニ獻ズ、一禰宜座ヲ起、進テ祝詞ヲ宣、傍官以下俯伏ス、祝詞畢テ座ニ復ル、各八度拜伏拜シテ座ヲ起、三鳥居ノ外ニ出、風宮物忌來リ迎フ、一禰宜其祝詞文ヲ物忌ニ授ク、卽取持テ風宮ニ先ダツテ往、禰宜權官遙拜所ニ到リ、別宮ヲ遙拜シテ、高宮八度拜直ニ風宮ニ往、鋪設ニ重リ坐シテ北面東上ス、風宮物忌祝詞文ヲ二禰宜ニ獻ズ、二禰宜瑞垣門ノ前ニ進ミ、祝詞ヲ宣、各俯伏ス、祝詞畢テ八度拜伏拜ス、事畢テ座ヲ起、木柴垣ノ内ニ到リ、御饌供進例ノ如クシ、又參宮神拜シテ歸館ス、

〔氏經卿神事記〕永享十三年〇嘉吉元年七月四日、柏流神事、一二三五六予從、件神事役人日祈、依服氣不參、然間權可參之處遲參、仍御鹽湯役人、幸爲衣冠之間、爲長裁相語、彼件役勤、次第畢於一殿瓜饗行之、六神主退出、仍瓜饗送進館、

文明十八年七月四日、柏流神事、二四六八十供奉、

新內人受あづかり禰宜以下參集して、件幣を奉供る行事あり、直會饗膳は絕たり、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

八月例

新八月風幣帛、絹一丈五尺、木綿一斤、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡每年七月日新內人爲新平風雨、所須絹四丈、（大神宮五尺、度會宮五尺、荒祭宮、月讀宮、荒御玉、伊佐奈伎、伊佐奈彌、瀧原、小朝熊、多賀、久具、風神、已上十座各三尺、）木綿麻各十五斤五兩六分、（大神宮三斤、度會宮二斤、十座神四斤、度會郡神卌座六斤五兩六分、各二兩二分、）並神宮司充之、

〔神宮雜例集二〕年中行事

七月三日外宮日新內人請幣事

四日二宮風日新祭事（宮司下行祭物）

內宮進請文於司廳、日新內人請之、

外宮早旦令物忌父捧御幣、一禰宜奉御㦸、參內院、（右別宮御幣）幣後二禰宜以下參列、（一禰宜申詔刀）次供朝御饌、次風宮祭直會事、

〔皇大神宮年中行事七月〕一四日風日新宮神態柏流神事、其次第如去四月十四日御笠神態之勤、但於今度者、蓑御贄幷蓑笠不供進、只御贄許也、仍日新一人參、（自長官紙一帖、麻少請取、○中略）神事畢後、於一殿在直會饗膳、其座幷勸盃配膳如常、件饗膳三河國杉山御厨勤也、號瓜饗以瓜饗作也、凡其沙汰結構也、

〔外宮神事著略七月〕四日風日新神事

前日ニ風宮物忌、御炊殿ニ參集シテ、大鉾小鉾白羽矢ヲ造リ、本宮料ヲ廳舍ニ置、高宮土宮月讀宮料ヲ其宮ノ神前ニ置、（大國玉姬社高神社客神社ニモ亦遣之）又大鉾矢榊ヲ風宮ノ御戸ニ倚掛、矢榊ヲ御殿ノ柱下、瑞

四日年中祈料赤引調糸二絇（神郡度會郡）

右從七月一日始、迄八月卅日、日祈内人朝夕止惡風氏天下百姓五穀助給止祈申、

七月例

以朔日受司幣帛祈日申行事

右禰宜率日祈内人、月一日起盡卅日、朝夕風雨旱災爲止停祈申、

八月例

祈八月風雨幣帛、絹二丈五尺、麻八斤、（大）木綿八斤、（大）已上禰宜率日祈内人、爲風雨災鎭祈申、

〔大神宮儀式解二十七〕延暦の比は、如此七八月中祈りしを、いつの代より歟七月四日のみ祈奉る也、今月（○七月）日祈のわざあるは古き例にて、天武紀六年七月辛酉朔癸亥、祭龍田風神廣瀬大忌神、神祇令孟秋大忌祭風神祭、四時祭式大忌風神祭四月七月四日とある、皆日祈の祭也、朝廷にもかゝれば、それに准へ本宮にも四月七月に行ふなるべし、（四月は十四日、七月は四日、）延暦の比は、七八兩月此行事あり、上（五月例四日）に七八兩月仕奉趣見ゆ、延喜の比は、七月中に約しにや、大神宮式、凡每年七月日祈内人爲祈平風雨、所須絹四丈、木綿麻各十五斤五兩六分、並神宮司充之とあり、此幣物は、此儀式の八月の幣にあたりて、（此儀式七月に上る幣物の數なきさず、若傳寫の時脱せし歟いぶかし、）今月の幣とは見えず、又七月一日より卅日まで、朝夕祈申といふは、日祈の爲に、本宮所管四院、及所攝社それ〴〵幣を奉なれば、月中此祭事にあづかるべし、それをかく注したる歟、大神宮式にえるすを見れば、度會郡中宮社皆奉供なれば、忽には遂行難かるべし、後となりては事々略義多く、朝廷風神祭の式日に准じ、七月四日に幣を頒たらん、そのさまは年中行事（七月四日）風日祈宮神態柏流神事、其次第如去四月十四日御笠神事之勤（○中略）と見え、本宮別宮天津神國津神に御幣奉り、一殿にて饗膳あるよし見ゆ、今世は大神宮司幣を充る事なし宮廳より形のみに紙麻をわたすを、日

乃皇大神乃廣前仁、恐美恐美毛申給波久、依例大神宮司乃奉幣帛絹、并御笠縫乃內人作奉留御蓑笠奉留狀乎、平久安久聞食天、朝廷寶位無動、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸奉給比、阿禮坐皇子達毛乎慈給比、百官仁仕奉留人等、天下四方國乃人民仁至萬天留長久安久、作食留五穀、雨甘久風和天、仁志年穀豐饒仁恤幸給止閉恐美恐美毛申給止波久申、

年號何年四月十四日

高宮、土宮、月讀宮、風宮、如是申天進止申、

〔氏經卿神事記〕永享六年四月十四日、御笠神事、衣冠一六七予十從、自宵參館卯刻、十三年〇嘉吉元年四月十四日、御笠神事、一七九參衣冠、予自宵雖參館、依違亂不參、一殿ニ參列役人等參、櫻宮北御榊ヲ立、并御笠付、于時彼宮前置石列立、東上西面、在御鹽湯、先御笠、次當方、于時日祈御榊三本奉持先陣、次笠縫御笠ヲ榊ニ付奉持、次禰宜自南御門參テ石壺ニ著座、役人八重疊東蹲踞、神主於前石壺詔刀讀進、于時役人御榊御笠ヲ御門下ニ奉納、一方一本、一方二本宛歟、一神主本座歸著、時一同手口自西鳥居退出、與玉拜、次荒祭拜、手兩端、次櫻宮前置石著座、東上北面無鋪設、自置石北在鋪設、一神主詔刀讀進、諸神ニ御笠ヲ獻狀也、歸著之時、一同兩端、次酒殿拜、同諸別宮拜、次下向、今日御笠萓、自內瀨兼日進文處、無沙汰之間、自長官在奔走、役人下行、然十五日內瀨ヨリ持參間、折檻之處、此御萓、雨一滴ニモ不宛爲先規之處、依此間之霖雨、不得參之由申、事闕上例判無下行、或十五文或十文文明十八年四月十四日、御笠神事、二三四五六八九十被參之處、役人紙ヲバ給テ不參之間、諸役人モ數時相待といへども不參之間、日祈內人紙をとりかへ、榊の枯葉の樣なる物にて、神事をとぐと云々、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事并月記事

五月例

蓑等給預、彼宮々幷社頭持參也、正權神主酒殿朝拜、諸神拜後一殿著、先宣裁神田勸酒肴預、其後風日新直會饗膳預、件饗料所三河國泉御薗也、抑宮司所進幣、參日日新內人請預、但以本宮請文所請預也、委不記、又御笠蓑等自宣裁內人之手宣請取、御笠縫內人於宿館奉縫、在宣裁幷御笠縫神田等、抑件御笠御蓑宣、自內瀨參日備進、兩不濟例也、當時不勤闕、自長官奔走、抑遠江神戸所進種蓋、今日供進用殘、禰宜中分配、而禰宜各以其內、子良宿館南垣內所奉殖也、爲物忌父等役奉殖、然後九月御祭之時、御饌供進也、

〔外宮神事著略四月〕十四日御笠縫

前此高宮物忌、白羽矢若干ヲ造リテ廳舍ニ餽ル、土宮月讀宮風宮物忌、幷役人廳舍ニ參集シテ、御笠御蓑ヲ造リテ榊ノ枝ニ著、

禰宜前夜ヨリ齋館ニ參宿ス、寅時許下荷用松明ヲ持來リ、上荷用按內ヲ啓ス、禰宜（衣冠）權官（直垂）進テ例所ニ列ヲ整テ、木柴垣ノ內ニ入、列立シテ南面西上ス、權官其後ニ重行ス、本宮物忌、（正衣冠、副狩衣、）別宮物忌、（布衣）御矢御笠御蓑ヲ捧持テ、序立スル事元日ノ如シ、一禰宜御調成歟ト言、一臈稱唯ス、一禰宜列ヲ離テ前駈警蹕ス、荷用御鹽湯ヲ揮清ム、物忌御矢等ヲ捧テ進ミ、傍官權官從行本宮ニ詣ル、（別宮物忌ハ列ヲ別テ其宮ニ往）禰宜石壺ニ著座（居上）シテ北面東上ス、權官其後ニ列ス、物忌御矢笠蓑ヲ供スル事卯杖ノ如クシテ、玉串門ノ左腋ニ著座シテ西面南上ス、一臈座ヲ起テ、祝詞文ヲ一禰宜ニ獻ズ、一禰宜座ヲ起、進テ祝詞ヲ宣、傍官以下俯伏ス、祝詞畢テ座ニ復ル、各入度拜伏拜ス、次ニ別宮ヲ遙拜ス、（高宮入度拜）次ニ禰宜各御饌ヲ供進シ、又參宮神拜シテ歸館ス

〔外宮政所年中行事記〕四月例

十四日、御笠縫祝詞書法如左、卷伏如上、

度會乃山田原乃下津磐根仁宮柱太敷立天、高天原仁千木高知天、皇御孫乃命乃稱辭定奉留、豐受

〔皇大神宮年中行事四月〕十四日風日祈宮祭禮（號御笠神事）
自宵館參、卯刻各衣冠著、中道經一殿參列、于時日祈内人御榊三本捧持、笠縫内人、御蓑笠御榊付三本捧持、各衣冠、櫻宮南候、于時列參櫻宮南置石、以東爲上、北向列立、御鹽奉、先御榊御笠、次櫻宮前立置諸別宮御榊御笠、次長官傍官權任玉串大内人（衣冠）物忌父等（布衣）也、其後自南御門進參、前陣御榊、次御笠、次正權禰宜、次玉串大内人、次物忌父等、石壺著座如常、日祈笠縫内人御榊御笠捧持、八重疊東蹲踞西向、于時一座御前石壺進參、詔刀讀進、

度會ノ宇治ノ五十鈴河上下津磐根大宮柱太敷立、高天原千木高知、皇御麻命稱辭定奉、掛畏天照坐皇大神廣前恐恐ミモ申、今年四月十四日今時以、宮司常奉風日祈御幣、幷御笠蓑日祈内人（姓名）令捧持奉狀、平安聞食、朝廷寶位無動、常磐堅磐、夜守日守護幸奉給、阿禮坐皇子達慈給、百官仕奉人等、天下四方國人民作食五穀、雨甘風和、年穀豐饒、恤幸給恐恐申、

年號四月十四日

次遠江神戸種薑詔刀（件種薑從日酒殿進納、今日件出納從四御門持參、風日祈詔刀畢後、八重榊ノ上進也、）
申今年四月十四日今時以テ、掛畏キ天照坐皇大神ノ廣前ニ恐ミ恐モ申ク、宮司ノ常モ催シ奉ル、遠江ノ神戸ノ種薑ノ御贄ヲ奉狀ヲ、平ク安ク聞食テ、朝廷ノ寶御位無動、常石堅石ニ、夜ノ守日ノ守ニ護幸奉給、阿禮坐皇子達ヲモ慈給ヒ、百官ニ仕奉ル人等ヲモ、天下四方ノ國ノ人民ノ作食ル、五穀豐饒ニ、恤幸給ト恐ミ恐モ申、

詔刀畢後、内人等御榊御笠玉串御門奉納、本座歸著、于時一同八平手兩端、朝廷奉祈、後自西御門退出、與玉遙拜、荒祭宮遙拜兩端、次櫻宮南置石著座、東上北向、於鋪設詔刀讀進、在鋪設、櫻宮南石疊北際北向也、諸神蓑笠奉狀也、（諸別宮幷諸末社等也〇中略）
本座歸著、于時一同兩端、兩儀時於主神司殿可勤行、其後諸別宮内人、幷諸社祝部等、件御幣幷御笠

祈なり、さて惡風雨なからん事をいのるは、いづこも皆四月七月にて、天武紀四年四月甲戌朔癸未、遣小紫美濃王小錦下佐伯連廣足、祠風神於龍田立野、神祇令孟夏大忌祭、風神祭、孟秋も同く見えたり、此儀式今月如此笠蓑奉りて、惡風雨なき事を祈り、又七月一日より風雨の災なきを祈る、下(七月例)の條併考べし、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

四月例

以十四日、御笠縫内人作奉(禰宜)御笠御蓑進奉、如大神宮、高宮次諸所管神社廿四處奉進、

〔延喜式(四伊勢大神宮)〕四月九月神衣祭(〇中略)

是日(〇十四日)笠縫内人等供進蓑笠、大神宮三具、荒祭宮一具、伊佐奈伎宮二具、月夜見宮二具、瀧原宮二具、瀧原並宮一具、伊雜宮一具、朝熊社二具、園相社、鴨社、田乃家社、蚊野社、伊佐奈彌社各一具、度會宮八具、及所攝宮幷社各一具、

〔神宮雜例集(二)〕年中行事

四月四日風日祈祭事

大司下行祭物、成符七枚、在内宮請文、日祈内人請之、

十四日二宮供御笠事

外宮鷄鳴供御笠、(一禰宜奉御饌、申詔刀、別宮遙拜、)次供朝御饌、次宮司禰宜、於玉串行事所參拜、次宮司參、内宮禰宜著直會座、

内宮早旦供御蓑笠(御笠縫内人役之、一禰宜奉仕宜權任、參御前、申詔刀、神拜拍手、)

内宮供種薑於櫻御前事(申詔刀、)

内宮於一殿菅裁内人酒肴幣料事

神祭、然氐櫟木本祭奉、（祀物如山口祭）然其木本乎菅裁物忌忌鉏以氐切始氐、然即禰宜內人等我戶人夫等爾令切、湯鍬爾造持氐、諸禰宜內人等波眞佐支乃蘰爲氐、自山下來氐、二所大神乃御饌所乃御田爾到立氐、先菅裁物忌湯鍬以氐耕始氐、湯種下始、然即其御田乎令爲耕作殖狀、畢即諸內人等田儛仕奉氐直會被給留、然後禰宜內人等、各私種下始、諸百姓等種下始、大神宮司奉進春菜漬料鹽二斛、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡採營神田鉏鍬柄者、每年二月、先祭山口及木本、然後採之、所須鐵人像鏡鉾各八十枚、

〔神宮雜例集二〕年中行事

二月一日內宮鍬山神事

御田種蒔耕作也、宮司參時、禰宜相共行、（宮內參列、往古不然、）在直會饗膳、（三色物忌勤仕也）

上亥日同宮（○外宮）鍬山伊賀利神事

於歲德神方行之、在直會、（前後拍手）先參內院神拜、次別宮遙拜、

上子日同神事供奉事

先參內院、別宮遙拜、於一殿行之、在和舞直會、（前後拍手）

○

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事并月記事

四月例

同日（○十四日）以御笠縫內人造奉御蓑廿二領、御笠廿二蓋、即散用、大神宮三具、荒祭宮一具、大奈保見神社一具、伊加津知神社一具、風神社一具、瀧祭社一具、月讀宮五具、小朝熊社二具、伊雜宮一具、瀧原宮二具、園相社一具、鴨社一具、田邊社一具、蚊屋社一具、

〔大神宮儀式解二十四〕さて蓑笠は、（○中略）風雨を防具なれば、それを奉りて、惡風雨なからん事を

寛喜二年七月廿五日

〔大神宮司神事供奉記〕延應二年〇仁治元年三月十二日、祈年穀奉幣使參宮、七日發遣王散位兼時王、中臣神祇權少副仲宣、忌部神祇權少祐爲孝、代子息占部口口代永賴也云云、宮司權大司一人參也、八月廿二日、祈年穀奉幣使、去十七日發遣王散位懷遠王、中臣神祇權少副永親、參宮代行輔忌部神祇少祐爲孝、占部神祇權少副兼有、宮司大司權大司供奉也、

〇

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

二月例

大神宮御田佃始時忌鍬料鐵一廷、又神田祭料稻廿束、以神税宛大神宮司、

先始來子日、大神宮朝御饌夕御饌供奉御田種蒔下始禰宜内人等、率山向物忌子、湯鍬山爾參登時波、忌鍛冶内人乃造奉留、金人形幷鏡鉾種々物持氐、山口神祭、然到櫟木本、即木本祭、祀物見如、然其木本乎山向物忌仁令以忌鉾氐切始氐、然卽禰宜内人等加戶人夫等仁令切氐、湯鍬仁造持氐、諸禰宜内人等波、眞佐岐蘰爲氐下來、大神乃御饌所乃御田仁到立、酒作乃物忌乃父仁忌鍬令採氐、大神乃御刀代田耕始、卽田耕歌氐、田儛舉、然卽諸神田耕始、幷諸乃百姓乃田耕始、又秋收時爾、小内人祝部等乎率氐、大神乃御田乃稻乎拔穗仁拔氐、長楉乃末仁就氐、御田乃頭仁立氐、卽臨九月祭日氐、酒作物忌父爾令捧氐、大神宮乃御倉仁奉上、三節祭朝御饌夕御饌供奉、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

二月例

以先子日、二所大神乃朝御饌夕御饌供奉御田種下始行事

禰宜内人等率菅裁物忌、湯鍬山爾參登、爾時忌鍛冶内人加造奉留、金人形鏡鉾幷種々物持氐、山口

〔皇大神宮年中行事〕春秋二季、祈年穀奉幣使參宮之次第、大略如九月例幣之時、但今度者無馬鞍、無宮司詔刀、無荷前御調絹、無正殿之昇殿幷御遊、一神主東寶殿御鎰給參昇次第、如六月御祭之勤、但宮司送文無之、錦綾八端奉納之後退出、次第拜一殿之儀式、如九月神嘗祭之時、

〔類聚大補任後堀河〕寛喜二年

今年七月廿五日新年穀奉幣使、八月二日參宮、依御祈賞賜二宮禰宜等一階之由被載宣命、天皇我詔旨止掛畏支伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立氐、高天原爾千木高知氐、稱辭定奉天照坐須皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜者久申久、三農者改化之基奈利、百姓者國家之寶奈利、因玆氐去春任例氐令祈申給支、然毛驗久感應借通氐之、田畝登衍奈利止聞食志悅給布事無限志、今毛今毛風霜旱澇之難不聞須、收穫貢賦之勤如思氐爾、世者歌就日之仁、民波謌如雲之稼耳奉止者、古皇大神乃厚岐御惠廣岐御助爾可在奈利止所念行氐奈、故是以吉日良辰乎擇定氐、王散位從五位下經氏王、中臣從四位下行神祇權少副大中臣朝臣爲茂等乎差使氐、忌部從五位下行神祇大史齋部宿禰倚友加弱肩爾太襁取懸氐、禮代乎大幣乎持齋利令捧持氐奉出給布、掛畏支皇大神此狀乎平久聞食氐、天皇朝廷乎寶位無動倶、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸奉給氐、海內靜謐爾、天下康寧爾、護幸給土倍止恐美恐美毛申賜者久申、

辭別氐申賜者久、去春祭主宮司等言上久勢、其二所神宮爾雜穢重疊志天、或者朝夕乃御膳乎不供進須、或者式日乃神事延引勢利、驚恐之思比冲襟彌切奈利、仰官寮氐令占卜留爾、其愼旁多、此狀乎今年四月爾被謝申古止先爾畢奴、然而毛叙念之中爾畏懼猶深志、爰爾二宮乃禰宜等、殊爾抽懇篤氐令致祈請牟、冥睠早彰氐、朝廷靜謐奈利中略〇又日來之間、雨脚頻降留、若渉數旬者、西成之勤爾有妨牟耳、仍氐今日奉幣乃次爾令祈申牟、早請祈爾答氐、必玄應乎垂給倍、然者則陰雲忽散之、秋霖速晴氐、餘糧栖畝豊、九穗呈瑞氐、國家泰平爾、黎庶富饒爾、護幸倍奉給止倍、恐美恐美毛申賜者久申、

ノ官符等ニ明文アリ、然ルニ古來神宮ニ新年月次ノ祭ニ使ヲ遣シヽコト、歷々徵スベケレドモ、新嘗ニ至リテハ、延暦ノ儀式帳ヲ始メ、國史諸書、絶エテ其跡ナキノミナラズ、類聚三代格ノ貞觀四年十二月五日ノ官符、元慶六年九月二十七日ノ官符ニハ、神宮ノ祭使ヲ擧ゲテ、神嘗新年月次アリテ、新嘗ナシ、延喜ノ大神宮式供祭ノ下モ亦然リトス、然レドモ延喜ノ神名式ニ、二所大神宮及別宮ノ下ニ新嘗アリ、四時祭式ノ新嘗祭ニハ、幣ヲ案上ニ奠ズル神三百四座ニシテ、頒幣等ハ月次祭ニ準ズトアリ、三百四座ハ同書月次祭奠幣案上ノ神ノ數ト合フ、更ニ同書ノ新年祭ノ條ニ據レバ、其神ハ伊勢國ニ在リテハ、七社十四座ニシテ、卽チ二所大神宮及ビ別宮ナリ、大神宮ノ新嘗ニ預リ給フコト論ヲ俟タザルガ如シ、而シテ其例ノ諸書ニ槪見セザルハ、最モ考究ヲ要スベキ事ナリ、

祭使祿物

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡新年月次祭使參入者、大神宮司卜部、祓候多氣河、解除、若有闕怠、奪其衣服、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡神嘗幣帛使者給祿、四位王絹十二匹、〇中略其新年月次使六位以下六匹、從者二匹祇承國司、守四位六匹、五位五匹、掾四匹、目三匹、史生二匹、

〔宮司公文抄〕二月廿日、〇一本作九日、新年祭幣使入日下著、宮司所役、幣使御方江拍手米宜旨一斗六升渡之、衛士方江同一斗六升下行之、當祭者司中詔刀ナシ、

〇

新年穀奉幣

〔神宮雜例集二〕年中行事

二月新年穀奉幣使事

王、中臣、忌部、卜部、神部、執幣等、

宮司勤使供給、成土毛符、進宜旨請文、

七月新年穀奉幣使事如春季、

士渡、衞士今日先來、巡番禰宜催料足渡也、御馬神事以後、於三鳥居自御馬飼內人手本人請取也、九月例幣鞍被置、於鞍者西寶殿納、至御馬者一禰宜拜領例也、祈年月次等祭、禰宜等不謂禁忌、任巡番拜領之、但忌中除之、

〔大神宮諸雜事記〕二康平六年二月、祈年祭使少副元範參下、抑件祭勅使參入豐受大神宮、宣命詔刀畢天、直會三獻始之間、高宮內人申云、高宮御幣請取天、只今奉拜見之處、生絹乃御幣一色、片端令燒損給也者、乍驚召問神部執幣衞士等之處、申云、近江國栗太郡乃貫首之宅ニ、勅使乃御供給房裝束等儲タリ、治田鄕專當之許ニハ、神部衞士等加料儲也、仍進向彼所天、御幣乃門內乃桑上捧置天、假屋之內可奉宿、御幣ヲバ御棚可造之由、令仰知下人等之間、不意火事出來天燒亡了、乍驚官幣ヲバ荷持天退去已了、仍任實正、在郡司等進其由申文也、更件官幣何可大厄侍哉者、大神宮官幣奉納之間無事也、注此由勅使上奏之處、被下宣旨偁、件燒亡事、使已逗留途中天、言上事由可隨裁定也、不問事參宮尤有怠也、仍進怠狀了、但以同月五日差使少祐大中臣輔長等、件御幣被替進已了、

〔延喜式〕四伊勢大神宮凡神嘗祭幣帛使、取王五位已上卜食者充之、其年中四度使、祭主供之、若有故者、取官幷諸司官人、及散位中臣氏五位已上充之、五位以上有故障者、六位亦得、王初參之時、必用五位已上、

〔康富記〕嘉吉二年九月廿五日壬午、去六月十一日月次祭神今食等延引、于今不被行、又今月十一日例幣延引、不被行之間、中略所詮月次祭、例幣、同日被付行例、被尋下之處、清外史、局務外史等、無所見之由注進了、官務晨照宿禰、天承元年四度幣一度被付行之例候之由注進申云云、中略亦四ヶ度幣トハ、祈年、月次、例幣、新嘗、此四ヶ度ナル由官務口傳之由被申之云云、清史等不審事也云云、祈年、例幣、六月十二月、月次兩度、加テ四ヶ度幣トハ可申歟、新嘗ハ御幣發遣之儀無之者哉、返々不得其意之由、密々被話候、下略

○按ズルニ、四度使トハ、祈年、新嘗、及ビ兩度ノ月次祭ヲ云フ、類聚三代格ノ寬平五年三月二日

幣物

云、如此不意穢氣出來之時、當宮之例、退去彼穢氣之所天、違道神事供奉乃先例多々也、但過外宮直道被參入於當宮之例、未聞事也、於被官奏者、勅使御在也者、因之過三箇日參宮了、

〔氏經卿神事記〕寶德三年二月九日、新年祭延引事、五日祭主狀今日宮司狀廻覽、去年月次祭、新年ニ可被付行之由在同之、　三月五日、新年祭、幣使正四位下秀忠、御手水役守成、御供（内宮定久、外宮□□）、宮司氏長、神宮三予六、幣馬七神主巡番、遲々一時余相待、神事如恒、但一殿儀式略之、舊冬月次祭ヲ被行同衆也、一殿酒肴勸盃、幣使予、宮司六、神事如恒、幣馬八神主給、件神事任次第、先可被行月次歟之由於外宮被相尋之處、月次被付行之間、先爲新年祭之由聞、先新年、次月次、仍當宮（○大神宮）モ如此、

〔延喜式一四時祭〕新年祭神三千一百卅二座

奠幣案上神三百四座

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、倭文纏刀形（倭文三寸）、絁纏刀形（絁三寸）、布纏刀形（布三寸）各一口、四座置八座置各一束、楯一枚、槍鋒一竿、弓一張、靫一口、鹿角一隻、鍬一口、酒四升、鰒堅魚各五兩、腊二升、海藻滑海藻雜海菜各六兩、鹽一升、酒坩一口、裹葉薦五尺、

右神祇官所祭幣帛、一依前件、具數申官、（○中略）大神宮度會宮各加馬一匹、（飼穎料庸布一段、○中略）致齋之日、（○中略）忌部頒幣帛畢、（大神宮幣帛者、置別案上、差使進之、）

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡二月新年幣帛者、（幣色目在四時祭式）朝使到日、大神宮司引使者先參度會宮、次大神宮、奉獻幣帛並如常儀、（高荒祭宮、使自進奉、餘宮令禰宜等奉、）其二宮所攝諸社幣者、座別絹三尺、木綿麻各二兩二分、大神宮司分充、禰宜檢領就社奉班、

〔皇大神宮年中行事二月〕一九日新年御祭次第行事（○中略）

幣馬右馬寮左馬寮沙汰、毎度三貫宛衞士給之、直安馬奔走於路次、是不伺牽下之間、拜領禰宜無其詮、然應永年中經博代衞士等令懇訴、其代以五百文沙汰之、仍巡番之禰宜、御神馬用意、於一鳥居衞

延引

大神宮

祈年幣使再興事

神領再興事

僧事

祭主從三位景忠〇中略

抑目六三ヶ條之事、端一ヶ條ハ近年造替事ト書之、然ニ新年幣使再興事ト書之條、今年改テ書之歟、尤可有其謂事也、凡近年誤來テ造替事ト書之歟、尤復舊儀之條可謂珍重、

〔皇大神宮年中行事〕二月一九日新年御祭次第行事

當。祭。官。幣。延。引。時。神。宮。無。神。事。

〔伊勢公卿勅使雜例〕官幣途中逗留例

康平六年二月、祈年祭使神祇少副元範也、而四日於粟田驛家有失火穢、仍過七日、同十一日參宮、五月廿日被立祈謝使、

〔大神宮諸雜事記〕二治曆四年二月、祈年祭使少副元範參下也、而臨于八日曉景天、豐受大神宮一禰宜康雄神主、宮司送消息狀、今月八日辛亥、是神宮恒神態也、而荒垣外御氣殿艮方當天、牛產事侍者、宮司宜衡朝臣以件書狀、祭使觸聞之處、返答云、大垣之內如此穢氣出來ニハ、朝夕御饌之勤供奉哉否、又外宮穢氣出來之時ハ、過外宮天、直道大神宮仁參入之例有哉否如何、神主依先例儀可注進也者、神主曳勘先例天云、如此荒垣之外、穢氣出來之時、尋不及官奏、只過三ヶ日御饌供奉之例、往古近代之流例、又臨時奉幣使恒例祭使乃當參宮之時天、未出來穢、仍前例難尋、又過外宮天、如此勅使直道被參入於大神宮之例未聞、但以件事至于被奏聞者、左右勅使御心也、於神主者不能是非也、就中當月乃先子日鍬山乃御神態也、是則年一度定日也、然而依此穢氣不可奉仕也者、又大神宮神主之申

再興

之、今日無其儀、予在一拜テ引裾本座ニ著、九四前、予時一同ニ一拜、予時一同ニ起座、沓ニテ一拜退出、祇承等迄二鳥居參、神宮ヘ以前退出、御火祇承迄館參了、

〔守洪卿記〕元祿十二年二月九日、祈年祭再興、宮司より任先例、於一殿饗膳勸盃有度旨申來、一二三五六七八勤仕之內、七勤之、外宮亦再興、宮司勸盃八勤之、三四五七八勤仕、

〔御衣祭再興之記〕元祿十二年二月十二日、祭主殿家臣澤池圖書藏主馬江、七守夏書狀差遣候如左、

任幸便一翰啓上仕候、略○中先月薗田將監參上仕候節、窺御內意候祈年祭之儀、當九月ニ、十二月次祭之通執行仕候、宮司神宮大慶仕御事御座候、此度再興仕候儀、神宮宮司ニ而相調候分者、大方再興仕候、何とぞ窺時節、奉幣使之儀も御再興有之候樣奉願御事御座候、此儀可然御披露被成可被下候、略○中

同廿七日、祭禮中絕之年代、以書付祭主家臣江遣如左、

覺

一祈年祭之儀、中絕之時分不知申候、氏經日次記、文明時分迄御座候樣相見申候、其以後之舊記無之故、難知御座候、

〔大神宮儀式解二十三〕二月の祈年祭、氏經卿神事記寶德三年二月九日祈年祭延引事云々と見えし後、此祭見えず、年中行事九日二月祈年祭云々、官幣延引時、神宮無神事と見ゆれば、寬正の比、度度延引せしと見ゆ、內宮子良館記明應永正年間祈年奉幣不見、されば此比より絕て、沙汰もやみけるにや、元祿年中一禰宜守洪卿これを公武に申て、祈年祭を再興ありけれど、官幣をも上られず、又幣使下向もなし、たゞ宮司禰宜以下、古の行事の形のみ行ふ也、

〔季連宿禰記〕天和四年元年○貞享正月十日丁丑、從祭主景忠卿奏事目錄到來、

申

向、次幣使鬘木綿在鋪設、玉串（一拜在ニ植）進之在一端、次大物忌父興里（冠衣）送文ヲ一座進、（草履不脱）二神主取之披見、（在ニ御火）其間一藺下立東待、披見後給之、別宮幣任付札、各役人等渡、（繈襃等也）于時衞士幣馬ヲ御馬飼請取、八重疊東ニ引立、次宮司執榊（在ニ鋪設）榊山向進玉串執之、進各一端、自是直ニ南鳥居ノ前、屛垣ノ際ニ參、神宮ヲ相待、北面ニ立、于時二神主六神主ニ在一拜、引裾鋪設ニ先左ヲ跪、次右ヲ跪、玉串ニ一拜シ、笏ヲ腰ニ指在一端、左ノ榊ヲ左取、次右ヲ右ニ取、又在一拜、而右足ヨリ立テ、直南鳥居ニ參、東上南面、次々毎度如此、石壺ヲモ毎度在一拜宛、尙進皆參畢、在一拜宛而御前ニ參引裾、於宮司前一拜宛在之、第四御門下御鹽湯在之、次宮司、次幣使、皆參寄一同石壺ニ著座東上、于時大物忌詔刀ヲ使ニ進、使取之起座、引裾沓ヲ不穿、御前ノ於石壺讀進、（在ニ御火）歸著ノ時、玉串宮司ノ榊ヲ取、一座ニ進、二神主手榊ヲ石壺ニ置、彼榊ヲ取ツト（一擂）玉串歸著ノ時、大物忌興里ト召、興里ヲウト申テ參、于時件榊ヲ被渡、給之奉納、二神主以石壺ニ置、榊ヲ取テ興里歸著之時、宮守物忌父荒木田弘憲ト召、弘憲ヲト申參、于時自一座末座マテ給奉納、歸著ノ時、又玉串一座榊ヲ進、歸著ノ時、常祭物忌父荒木田時氏ト召、時氏ヲト申參、彼榊ヲ給奉納、歸著之時、玉串所殘之榊ヲ奉納、此役皆草履ヲ不脱、玉串歸著ノ時、蹲踞有手兩端テ奉拜起座、幣使次宮司、南ノ御門內ヨリ退出、神宮物忌等之蹲踞之前在一拜宛、而西御門ヨリ退出、荒祭宮遙拜所前北上西面ニ立、幷彼前通時一同一拜、宮司同前、次彼遙拜所ノ石壺ニ脫沓、中石壺ニ蹲踞、東上北面、在兩端而朝廷奉新拜下向、幣使宮司背ヲ通、神宮ハ北ノ石壺ヲ經テ、物忌等之蹲踞ニ一拜、幣使一殿ニ北ヨリ入テ、東二間著座、北方南面、（在ニ鋪設）机衆居置、（在著）宮司南ヨリ入、同間南北面同前、予九於櫻宮前木綿ヲ取淸衣ヲ脫テ、東ノ間ヨリ入、北上西面ニ著座テ、一同ニ一拜、（在ニ鋪設）予引裾テ幣使前ニ著座テ一拜、（在ニ鋪設）予宮司前同前、于時御手水役人參後陪膳、予盃ヲ取、以扇ヲ扇キ、酒ヲ受テ進、在一端テ請取之聞食、宮司如此、三獻同祇後二獻ハ無手、本儀後二獻ハ非勸盃歟、先宮司ノ前ヲ上陪膳彼祇承也、幣使陪膳ハ御手水二人也、仍御前兩人雖昇

〔大神宮諸雜事記二〕永承七年二月、新年祭使權少祐元範朝臣參下也、

天喜五年二月、新年祭使祭主參向、(○中略)

治暦五年二月、新年祭使前出雲守賴宣朝臣參下也、

〔大神宮司神事供奉記一〕延應二年(○仁治元年)二月九日、新年御祭、幣使總官大司參云々、

〔大神宮司神事供奉記二〕仁治四年(○寬元元年)二月九日、(風雨頻甚、雖然有限之神事、同、路次略儀也、)新年御祭、幣使神祇權少副隆世朝臣(進官代官)御少司長則參向離宮、奉獻官幣之後、對拜之後行列如例、於宮河際御祓如例、其後大司盛房參會、權大司不參、其後參著、祇承四人(三人五位、一人六位、)參勤、大麻御鹽湯有之、玉串所列立如例、禰宜皆參、行能、元邦、貞朝、維行、與房、行茂、氏彥、朝行也、對拜之後次第儀式如例、其後著一殿、酒肴有之、使勤盃一禰宜、陪膳重代權官、手水時役人也、(是使進官御子息也)宮司勤盃二禰宜、事畢之後退出、參內宮、御祓如例、祇承四人皆五位、大麻御鹽湯有之、玉串所列立如例、禰宜二延成、四成行、五重仲、六長光、七經元供奉、對拜之後次第儀式如例、神事畢之後著一殿、饗膳如例、使勤盃二禰宜、陪膳重代權官、宮司勤盃四禰宜也、事畢之後退出、

〔氏經卿神事記〕永享十三年(○嘉吉元年)二月九日、新年祭、幣馬二神主預、巡番、本儀現馬也、然近年五百文宛、衛士沙汰、仍巡番之禰宜馬用意、於鳥居渡之、衛士等幣馬引、官幣奉持、二鳥居參、幣使二鳥居南、宮司北、于時御鹽湯大麻在、先官幣、次幣使(秀聞)祇承、(弘重)今日依為晝神事無御火、然近代以別儀、長官一讀宛狀被進之、今夜無此儀、次宮司(氏長)祇承弘富、神宮御火祇承、一神主之館參之處不參、仍二神主館參、二七予九束帶著清衣、木綿襷、彼麻自長官請之、經中道玉串行事所皆參寄、西石壺東幣使、西宮司、東石壺神宮、西上皆南面、于時一拜、官幣東方東居寄道南、山向御手水用意、于時幣使引裾、手水彼役人奉仕、(衣冠)此役人自長官以廻文重代神主被差廻、番二人宛參勤、解怠之時、自長官以家子神主被勤之、今夜一人無沙汰也、但祭主家督外無此儀、次宮司手水、役人山

相具、各榊捧祭使拝相待、神主自西御門退出、荒祭宮遙拝所南北上西面列立相待、祭使宮司自南御門退出、於一座前對拝据引、宮司同前、件遙拝所於石壺拝手両端、使東、次宮司、次神主也、則蠶木綿解、于時玉串大内人并彼宮大内人同大物忌父宮幣奉相具參、祭使宮司件石壺自後（南也）退出、神主自前（北也）退出、於櫻宮北蠶木綿明衣脱、祭使一殿自北入戸、東脇南向著座、宮司南座北向、神宮東座北上西面、各在鋪設、同時揖拝、後一座据引使前机東著、在鋪設、互揖拝、直會饗膳（但當時酒肴）兼居置、一座盃取上、以扇塵拂酒受獻、使笏取直禮一端、是取被飲、後後盃取上獻、直受被飲、三獻後配膳二人、机舁北戸出、雜色給之後、又揖拝本座著、宮司勸盃、二座同時同前也、又各揖拝座起、沓穿對拝、使自北、宮司自南退出、御火祇承二鳥居マデ也、神宮御火館マデ也、抑勸盃事、若禰宜一人參時、立渡勸盃勤例也、又當神事宮司未補、仍雖不參被遂行例也、又宮司御敎書申給、自然禁忌時、以代從神事在之、然而不勸盃、仍不著座、總而司代事、或依其仁體、又未爵輩礼明之不用例也、○中略

祈年祭晝神事也、仍御火無之、然而近代夜入間、御火一人宛進之、臨時祭禮同前、諸神事御火、由貴殿出納役、（御火内人六九十二月參、其外無）

又祇承宮掌權任在員三方分參例也

又上古手水役、祭主被敍三品之後、五位二人衣冠著、上首紙進、下座水懸也、未敍間六位權禰宜役也、而近雖爲五位四位祭主、參宮之時、五品雖被役所勤仕也、其又配膳勤仕、抑祭主三品時、座士敷上高麗端疊一帖敷、其上縹繝端半疊敷也、未被敍以前、紙端半疊敷也、

又祭使不參之時、宮司北座也、御遊之座同前也、又臨時祭禮、白晝神事也、仍無御火、然而當時夜陰之間（○以下闕損）

○按ズルニ、此他元文年中行事記、外宮神事著略、外宮政所年中行事記等ノ諸書ニ、祭式ヲ載セタレドモ、粗ボ上文ト同ジケレバ之ヲ略ス、

歸、于時使座起御引八重榊前東南於石壺拜、作法如常、詔刀被讀進、

度會ノ宇治ノ五十鈴ノ河上ノ下津磐根ニ大宮柱太敷立テ、高天原ニ千木高知テ、皇御麻命ノ稱辭定奉ル、天照坐皇大神ノ廣前ニ恐ミ恐ミモ申給ク、常モ奉ル二月新年御幣帛ヲ、使祭主位神祇權大副大中臣朝臣名乘令捧持テ奉給狀ヲ、平ク安ク知食テ、天皇朝廷ヲ寶位無動、常石堅石ニ夜守日守ニ護幸奉給ヒ、天下四方國ノ人民ノ作食ル五穀豐饒ニ、恤幸ヘ奉給ヘト恐ミ恐ミモ申給ハクト申、

荒祭伊佐奈岐月讀宮等ニモ、如此申テ進ト詔給フ、

可有年號、

詔刀畢笏抽拜本座著、今日宮司無詔刀、玉串大内人所持玉串前置、座起進參一拜、笏差宮司榊請取、宮司笏拔互拜、後件榊一座奉、一座所帶榊前置、一端請取之、榊取時手打、左左右右取事毎度儀也、玉串大内人立退、笏拔一拜後本座著、于時大物忌父兄部蹲踞、一座大物忌父荒木田名乘召、唯稱御前參蹲踞、拜後笏差玉串給、一座以前手玉串取持、禮後左歸玉串御門東左脇石疊上奉納、本座歸著時、宮守物忌父兄部蹲踞、于時一座宮守物忌父荒木田名乘召、唯申進參御榊給、次第同前、二以下御玉串給畢、奉納同前也、但右脇石疊上也、于時玉串大内人八枝所帶御玉串四枝、左右各二枝捧持、一座奉本座歸著、于時地祭物忌父蹲踞、一座地祭物忌父荒木田名乘召、唯申進參、給之奉納、左石疊歸著後、玉串大内人所帶御玉串四枝、件御門右脇石疊上奉、本座歸著、抑三色物忌父等、并玉串大内人、御榊玉串御門左右脇石疊上奉時、先於御戶中間、御榊乍持御前一拜之後、笏抽御榊置所一拜立、又御前於御戶中間、乍立一拜後歸也、又奉置時先左手御玉串置、次右方手持榊置也、又人交替之時、我左手持、人左手渡、我右手持、人右手渡、更無違、又人手榊請取時同、手必在御榊事畢、拜八度開手兩端、朝廷奉祈、其後各座起、但玉串大内人早立、自西御門荒祭宮大内人、同大物忌父相具退出、忌火屋殿艮方、彼宮御料官幣奉、

一人、御火一人、次宮司祇承一人、御火一人、玉串行事所御鹽湯所參、禰宜各束帶淸衣木綿著、件麻自長官請預、御火內人長官館參向、不參之時長代上首館參、中道經參向、自廳舍前祇承一人各參集時、御鹽湯所石壺列立、幣使西、其西宮司神主東西上各南向、于時答拜同時、雨儀御輿宿內也、官幣禰宜東方砌奉居案、（案物忌）御馬其際牽立、玉串大內人幷大物忌父兄部束帶明衣著、但當時玉串大內人物忌父等皆衣冠著、官幣南方列立、以北爲上、但西御（衣）時者、西方北上列立、使神宮西向也、于時使椐引進寄手水、件杓堝紙木綿麻等、自長官山向內人（衣冠）申給用意、件手水配膳等、祇承宮掌內人役也、但祭主家督參勤時、重代祠官二人任巡番、衣冠著參勤例也、自長官兼日被催之、次宮司椐引手水、山向勤之、其後大物忌父兄部笏差、官幣送文捧持、乍立一座奉、則立退笏拔持一禮立、一座送文拜見後返渡給之、退禮本座歸、三色物忌父等案際進寄、官幣拜見、諸別宮分任書付分進、彼宮々下部等請預之、御馬飼內人神馬請取、八重疊東牽立、大物忌父一座前進參、乍立笏指彼送文給、笏拔一拜後本所歸、于時山向內人、鋪設調半疊（紙端）祭使椐引進寄、件半疊跪候、于時玉串大內人進寄、自山向內人之手鬘木綿請取使奉、使笏差手一端請取、著用後笏拔持互拜、後本所被著後、宮司椐引進寄、鬘木綿同前、同自山向內人手、御玉串二枝請取奉、宮司、又一端請取、左右手各一枝捧持互禮、座起進參南屛垣前北向立、次一座椐引、件半疊左跪、玉串大內人自山向內人之手、御玉串四枝請取奉之、于時一拜笏差一端、先左二枝左取、次右二枝右取、一拜右立、進參南鳥居西柱下南向立、二神主以下同前西列立、次玉串大內人自山向內人之手、御玉串八枝請取、禰宜次立、（玉串行事是也、榊玉串云、榊枝每木綿結付也、抑神主玉串、大內人物忌父等之著用木綿鬘木綿手繦、各自宿館著用例也、）于時次第參入、椐引各宮司立向對拜、於四御門、在御鹽湯、前陣神主御火祇承進、次玉串大內人、次宮司御火祇承進、次官幣、次御神馬、次使御火祇承進、各參列時石壺著座、宮司東、使宮司東、神主西東上、其次玉串大內人三色物忌父等、西方以北爲上東向候、（三方鳥計）一雨儀時御子殿內也、同時揖拜後、政所神主令用意詔刀文、大物忌父兄部（沓不脫）笏差使獻、使取之一拜、大物忌笏拔持同前本座

雙分頭跪侍、使中臣東方石疊跪侍、物忌者第二御門西方向北侍、大內人小內人物忌父等、四御門內方進、向東列跪侍、卽大神宮司上版位告刀申、申畢時大物忌發、大神宮司、禰宜乃捧持留氏太玉串平受取、第二御門奉置、（先向大神宮司東方、禰宜西方、）然卽四段拜奉氏短手二段拍、一段拜奉、又更四段拜奉、短手二段拍氏一段拜奉、畢卽罷出向高宮、四段拜奉、短手二段拍、畢卽使幷大神宮司外直會殿就座、卽給直會、短手二段拍畢時、後手一段拍罷出、內宮參入時ニ勅使幣帛使參入氏幣帛奉進行事平月次幣帛進時行事同、但幣帛物等波、正殿開奉氏進入、月內取吉日、所管諸社十六處、幷宮廻神二百餘前、御井二所神、御田神、所々小社九所神平春年祈祭供奉、至于二月上旬、禰宜內人等勘校供奉用物四種、（絹五丈一尺、木綿四斤、麻十斤、鐵一廷、）

〔延喜式八祝詞〕伊勢大神宮

二月祈年六月十二月月次祭

天皇我御命以氏、度會乃宇治乃五十鈴川上乃下津石根爾稱辭竟奉流、皇大神能大前爾申久、常毛進流二月祈年（月次祭唯以六月月次之辭相換）大幣帛平、某官位姓名乎爲使天、令捧持氏進給布御命乎申給止久申、

豐受宮

天皇我御命以氏、度會乃山田原乃下津石根爾稱辭竟奉流、豐受皇神爾申久、常毛進流二月祈年（月次祭唯以六月月次之辭相換）大幣帛平、某官位姓名乎爲使天、令捧持氏進給布御命乎申給止久申、

〔皇大神宮年中行事二月〕一九日祈年御祭次第行事

祭使外宮參著之由有告知時、供奉職掌人等致其用意、件告知役人者、當宮小內人也、而不輸萬雜事、所勤此役也、爲告知參宮之時、自一禰宜宿館小粮料給、

祭主宮司各束帶、先祓所砌在祓、但祭使二鳥居左南柱西北向、宮司右北柱西南向被立祓勤之、（五尺計榊枝木綿付）大麻御鹽湯（小土器入白鹽、以榊枝獻之、）奉件內人等各衣冠、其後次第參、先官幣神馬、（神部等相副）次祭使祗承（衣冠）

禰宜生絹乃明衣幷冠著、左右肩仁木綿多須岐懸氏、太玉串四枝手拍氏捧持氏左方立、宇治大内人太玉串八枝捧持、右方立共發、禰宜先前左方立、宇治大内人右立、次大神宮司、次幣帛捧持内人等立、次御馬飼内人御馬曳立、次驛使、次内人等立、如此立列參入第三重、告刀之版位就、公進之東端御馬進二丈許立、次驛使、次大神宮司、次禰宜、次宇治内人、次二大内人、以上六人、正殿向跪列就版位侍、内物忌子等御門腋東西頭侍、内物忌父四人、諸内人物忌父等、以西玉垣門二丈許内方進、向東跪列侍、即大神宮司從版位進、告刀申、畢時波仁返就本座、即宮司之手捧持太玉串二枝波、宇治大内人小綏、自版位發受取氏、同就本座而捧持、即禰宜召大物忌父令進、第三御門之左置進、次召宮守物忌父、其禰宜捧持太玉串四枝進、同御門右方爾進置、次召地祭物忌父、此宇治大内人加捧持太玉串分四枝令進、同御門左方爾進置、即玉串進畢、四段拜奉氏、短手二段拍、一段拜、又更四段拜奉、短手二段拍氏、一段拜奉、畢即罷出氏、荒祭宮版位就座、四段拜奉、短手二段拍、畢即使幷大神宮司、外直會殿就座、即禰宜内人荒祭宮參入供奉行事、宇治大内人太玉串四枝捧持氏、先其宮物忌父御鎰持前立、次其宮内人立、次宇治大内人立、次禰宜立、次二人大内人、幷諸内人等立、即正殿幣帛奉入畢、即罷出氏、使幷宮司直會給、手二段拍物給畢氏、後手一段拍氏、罷出御厨仁、以十三日、大神宮廻神百廿四前祭始、所管所々宮、幷社神奉行事、具所宛神税大神宮司

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

二月例

年祈幣帛使參入氏幣帛進時行事

幣帛使與大神宮司共神宮外院參入來、爾時即禰宜内人等、玉串所候侍氏、菅裁物忌父造奉留太玉串乎禰宜捧氏、大神宮司爾給、短手一段拍受取、禰宜毛共同被給氏即發、先前禰宜立、次大神宮司、次幣帛捧持大内人、御馬飼内人率御馬、次驛使諸内人等、如此立列參入致中重、大神宮司禰宜正道並

祈年祭 新年穀奉幣、神田下種祭、風日祈祭、附入

大神宮ノ祈年祭ハ、上古ハ二月十二日ニ行ヒシガ、後九日ト爲ル、當日朝使大神宮司ト共ニ、先ヅ豐受宮ヲ祭リ、次ニ大神宮ヲ祭ル、其儀内院ノ版位ニ著キ、幣物ヲ獻ジ、祝詞ヲ奏シ、後直會殿ニ於テ饗ヲ賜フ、コノ祭ハ明應永正ノ頃、一旦廢絶セシヲ、元祿十二年ニ至リテ再興セラル、然レドモ僅ニ其式ヲ擧ゲシノミニテ、朝使參向ノ事ハナカリキ、

祈年穀奉幣ハ、二月及ビ七月ヲ以テ、伊勢以下ノ二十二社ニ幣帛ヲ奉リテ、年穀ノ豐熟ヲ祈ル祭ニシテ、事ハ祈年穀奉幣篇ニ詳ナリ、故ニコノ篇ニハ專ラ神宮社頭ニ於テスル所ノ儀式典禮ノミヲ擧グ、

神田下種祭ハ、二月上子日、（後二月一日ニ改ム）禰宜内人等山向物忌子ヲ率キテ、湯鍬山ニ往キ、櫟ヲ伐リテ忌鍬ヲ作リ、之ヲ以テ神田ヲ耕シ、種子ヲ下ス祭ニシテ、此祭畢テ後禰宜内人及ビ神戸ノ百姓等、始テ種子ヲ下スコトヲ得ルナリ、後世之ヲ鍬山神事ト稱ス、

風日祈祭ハ、四月及ビ七月之ヲ行ヒ、後世四月ノ祭ヲ御笠ノ神事ト稱シ、七月ノ祭ヲ柏流神事ト稱ス、幣帛及ビ御笠縫内人ノ作レル蓑笠ヲ奉リテ、風雨ノ災ナカランコトヲ祈ルナリ、

七月ノ祭ハ、上古ハ同月一日ヨリ八月晦日ニ至ルマデ、日祈内人ヲシテ毎日祈請セシメシガ、後世之ヲ略シテ、專ラ七月四日ヲ以テ定日トス、

祭式

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

二月例

以十二日年祈幣帛使參入坐氏、幣帛進奉時行事、幣帛使與大神宮司共、神宮外院參入侍氏、即禰宜内人等候侍氏、山向物忌父我造奉留太玉串、宇治大内人二枝捧氏、大神宮司仁給、即宮司手拍給氏、

困られしが、稍に火がへせざる家ありて、是にて食事を調へ、其火がへの子細を問に、當十四日に火がへとて、平日の火を新たに更め、家内に鹽をうちて清淨にし、飯を焚て甘酒を釀り、十六日に大神に供し奉る、尤宮川より向へ越ば、別して火を正しくすること嚴重にして、通用の清酒を神に供する事をせずとぞ、京師は古風のこりし所なれども、甘酒を神供とすることなし、

雜載

〔神宮日記摘要〕安永八年七月廿日、往昔齋内親王在職ノ節、神嘗祭ノ儀式、並ニ中絶以後行事ノ次第、京都ヨリ下問、仍應仁以前ノ古例勘文ヲ呈ス、　八月十三日、故一禰宜等舊記ノ例ヲ以テ、再應京都ヘ注進、是去月廿日神嘗祭ノ舊例下問ニ據ル、

〔橘窻自語下〕世俗の言葉に、ならぶよりなれろといふことあり、近き比のことなりしが、時の有職といはるゝ、何がしの亞相、九月例幣の陣の上卿を勤られしに、むかし四姓の使、うらをもてあてられしが故實なりければ、史をめして、うら串參らせよと仰られしに、山名右大史亮信、近代はその義にさふらはすとこたへたり、近代なきことを、故實しり貌にの給ひし上卿、その時はしたなくぞおはしける、山名はさせる才學の有人にもあらねども、年わかゝりしより、たび〳〵に著陣して古老になりし故、かゝるふるまひもいできしなりけり、

〔年中行事歌合〕二十七番　右　例幣九月十一日　守長

長月やおくるにぎてに伊勢の海の波のしらゆふ懸やそふらん〇中略

右九月十一日例幣とて、伊勢大神宮へ御幣を奉らせ給ふ事の有也、毎年の事なれば、殊なる儀侍らぬにこそ、

〔詠大神宮二所神祇百首和歌〕捧衣

長月ノ神祭夜ハ此里ニ砧モ不擣人モ不寢

內外ノ御祭、四季ニ坐事也、其夜ハ音セヌト云義也、

〔雲錦隨筆一〕伊勢の御祭禮は、例年九月にして、外宮は十六日、內宮は十七日なり、禁裏より奉幣の御勅使御參向あり、是を例幣使と稱す、是は當年の早稻を、禁庭より兩宮へ奉らせ玉ふ新嘗の御祭なり、故に早稻米の御祭ともいへり、一年友人伊藤某、此御祭禮に參詣し、勢州一身田にて、晝飯の支度せんとて茶店に入る、火がへにて、食用の物なしとて斷る事四五軒にも及びぬるに、殆ど

禰宜、大物忌二人、各絹三匹、綿三屯、大内人四人、各絹二匹、綿二屯、宮守、地祭、鹽燒物忌等三人、各絹一匹三丈、綿一屯、大物忌、宮守、地祭、鹽燒物忌等父四人、幷淸酒、酒造、山向、瀧祭、土師器作物忌等五人、幷父、及御笥作、木綿作、忌鍛冶、陶器作、御笠縫、日祈、御巫、御馬飼内人〈二人〉等九人、各絹一匹、綿一屯、荒祭宮内人二人、絹三匹、〈各一匹三丈〉綿三屯、〈各一屯半〉物忌一人、絹一匹三丈、綿一屯、父一人、絹一匹、綿一屯、月夜見宮内人以下同荒祭宮、但御巫内人一人、絹一匹、綿一屯、伊雜宮内人二人、物忌幷父合四人、各絹一匹、綿一屯、

度會宮〈中略〉〇 禰宜内人等明衣

禰宜絹三匹、綿三屯、大内人四人、大物忌一人、各絹二匹、綿二屯、御炊、鹽燒物忌等二人、各絹一匹三丈、綿一屯、根倉、菅裁、土師器作物忌等三人、幷大物忌、御炊、鹽燒、根倉、菅裁、土師器作物忌等父六人、及木綿作、御巫、忌鍛冶、御笠縫、陶器作、御笥作、御馬飼内人〈二人〉等八人、各絹一匹、綿一屯、高宮内人二人、各絹一匹三丈、綿一屯半、物忌一人、絹一匹三丈、綿一屯、父絹一匹、綿一屯、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡神嘗幣帛使者給祿、四位王絹十二匹、〈從者八匹〉五位王十匹、〈從者六匹〉中臣忌部並准此、六位以下中臣忌部各八匹、〈從者各四匹〉六位以下卜部四匹、〈從者二匹、若卜部帶二職事一者、加二一匹一〉初位以下三匹、〈從者一匹〉

凡三節祭直會日、禰宜内人等祿法、五位禰宜、被一條、〈料絹一匹一丈三尺、綿五屯〉六位禰宜、襖子一領、〈料絹一匹、綿一屯〉大内人、諸神宮内人物忌、汗衫各一領、五節儛人二人、絹各一匹、酒立女四人、絹各三丈、

右齋内親王參祭之日、以寮庫物給之、不參之時、以神封物給之、

凡三節祭幷解齋直會之日、鳥子名儛童男童女十八人裝束、靑摺衣裳在前摺備、臨祭給之、料布十二端、〈男二丈八尺、女二丈五尺〉彈琴二人、笛生二人、歌長三人、料布三端二丈、〈人別二丈〉年終各給其身、

〔延喜式五齋宮〕凡向九月祭陪從命婦以下賜裝束、五位絹四匹、綿十屯、外位絹二匹三丈、綿五屯、乳母各絹二匹三丈、綿二屯、上等女孺一人、同乳母、中等以下廿三人、各絹一匹三丈、綿二屯、自餘不給、

一人、御鹽燒物忌一人、并三人賜絹四匹三丈、人別一匹三丈綿三屯、人別一屯大物忌一人、父一人、淸酒作物忌一人、父一人、酒作物忌一人、父一人、宮守物忌父一人、地祭物忌父一人、山向物忌一人、父一人、瀧原物忌一人、父一人、御鹽燒物忌父一人、御笥作内人一人、忌鍛冶内人一人、陶器作内人一人、御笠縫内人一人、日新内人一人、土師器作物忌一人、父一人、御馬飼内人二人、御巫内人一人、并二十二人賜絹廿二匹、人別一匹綿廿二屯、人別一屯荒祭宮内人一人、物忌一人、父一人、并三人賜絹四匹三丈、内人一人二匹、物忌一人一匹三丈、父一人一匹、綿四屯、内人二屯、物忌并父各一屯、月讀宮内人一人、物忌一人、父一人、御巫内人一人、并四人賜絹五匹三丈、内人一人二匹、物忌一人一匹三丈、物忌父一人、御巫一人各一匹、綿五屯、内人二屯、物忌一人、父一人、御巫内人一人各一屯、伊雜宮内人一人、物忌一人、父一人、并三人賜絹三匹、人別一匹綿三屯、人別一屯瀧原宮内人一人、物忌一人、父一人、并三人賜絹三匹、内人一人三丈、物忌并父各一匹、綿三屯、人別一屯禰宜并大内人四人妻賜祭日齋裝束料絹五匹、禰宜妻二匹、大内人三人妻三匹、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等并年中行事月記事

九月例

神嘗祭爲供奉、大神宮司宛奉雜用物、〇中略

賜禰宜内人物忌、衣服絹廿九匹三丈、綿廿七屯

禰宜給絹三匹、綿三屯、大内〇内下恐脱二人字三人、物忌一人、并四人給絹八匹、人別二匹綿八屯、人別二屯御炊物忌一人、御鹽燒物忌一人、高宮物忌一人、根倉物忌一人、菅裁物忌一人、并五人、絹七匹三丈、人別一匹三丈綿五屯、人別一屯大物忌父、御炊物忌父、御鹽燒物忌父、菅裁物忌父、根倉物忌父、高宮物忌父、木綿作内人、御巫内人、忌鍛冶内人、御笠縫内人、御馬甘内人、并十一人、絹十一匹、人別一匹

〔延喜式四伊勢大神宮〕九月神嘗祭

大神宮〇中略禰宜内人等明衣

慶應元年七月、來ル九月神嘗祭、荷前御調絹十分一之御再興、御横折ヲ以被仰出、

內宮分

荷前　二十疋　別宮分七所七疋

宮司所進

御衣　三疋　五色料　一疋　御門幌　三疋二丈

禰宜所進

御衣　二十疋　禰宜一員二疋　總五十四疋二丈

外宮分

荷前　十疋　別宮分四所四疋

宮司所進

御衣　二疋　五色料　一疋　御門幌　二疋三丈

禰宜所進

御衣　二十疋　禰宜一員二疋　總三十九疋三丈

同年八月、神嘗祭幣馬、御再興之御折紙、

神馬四疋之中、二疋被置、被牽進、神宮(今年許有障者、因注進更被引之、)二匹(不被置、此分於神宮如例設之)御厩新造、若於不合期用假建、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

九月例

賜禰宜內人物忌衣服絹六十匹　綿五十二屯

禰宜幷大物忌二人賜絹六匹、(人別三匹)大內人三人絹六匹、(人別二匹)綿六屯、(人別二屯)宮守物忌一人、地祭物忌

之間、於陶方物者、既貢參畢、土師方忌物造納埸一口、長友近隨身貢參之間、宮河洪水、參宮人倫、競乘小船渡越程、河中船漂流、郎友近并忌物埸沈沒失畢者、爰禰宜等欲蒙裁定、時刻既來至、仍各成議、尋取清淨波爾土、令當職長敢忠近、和爾部枝恒等造調、無懈怠供祭已畢、然而如此之事、不可不申、仍注進如件、

永久四年九月廿四日

調荷前再興

〔一禰宜常庸公文所日記〕元治元年十月十三日

一司家政所より來書如左

神嘗祭之中、廢典候荷前御調絹御再興之儀、今般別紙之通被仰出候、此段兩宮江茂可被告知、猶又右ニ付而神宮打合之上、委細取調、早々可申上旨、祭主家政所中より被申越候、於神宮可令其沙汰給候以上、

十月十三日　司家政所

外宮政所大夫殿

猶々御調絹、今古沿革之次第、當方取調書出來之上、御左右可申候、御方之取調出來候はゞ、三ヶ處立合之上、別宮分相除、本宮分者、令清書可申上候間、可令存知給候以上、

一相添來ル四ツ折如左

神嘗祭之中、廢典候荷前調絹之儀、舊儀御再興之事、

別宮料追而御沙汰之事

〔薗田家記〕元治元年九月被仰出

神嘗祭之中、廢典候荷前調絹、舊儀御再興之事、

別宮料追而御沙汰之事

十四合、裹飯仟貳百十五裹、○中略

九月祭料八百四十二具、○中略

齋內親王御膳二具、結机造仕奉、勅幣帛使料結机二具、齋宮寮頭內侍圖介并三人料、上板机三具副机、并六位已下判官一人、御母四人、并五人料板机五前、諸司官人、并一等女孺、及驛使從料机代七十合、二等女孺并諸司番上、二箇郡司子弟、及諸刀禰等料、中折櫃二百五十合、官人已上從、并諸司擔夫已上、及二箇郡歌人歌女鳥子名等料、下折櫃八十二合、裹飯四百裹、已上九月祭之、

〔止由氣宮儀式帳〕一年中三節祭時供給儲備事

合貳仟肆佰參拾玖具

結机八具、上机九具、板机十五前、机代二百十前、中折櫃七百五十合、下折櫃二百五十四合、裹飯千二百餘、○中略九月祭料八百卌餘具、○中略

齋內親王御膳二具、結机造仕奉、勅幣帛使料結机二具、齋宮寮長官圖介內侍并三人料、上板机三具副机、并六位已上判官一人、御母四人、并五人料、板机五前、二等女孺、并諸司番上貳箇郡司次第、及諸刀禰等料、中折櫃二百五十合、官人已下從、并諸司擔夫已上、及二箇郡歌人女歌女鳥子名等料、下折櫃八十三合、裹飯四百裹、

已上九月祭之

〔神宮雜例集〕二所大神宮朝夕御饌事

豐受大神宮神主

注進、當月十五日由貴御料供物內、有爾村土師長造進種々忌物造入堝一口、并長敢友近隨身宮河流沒事、

右當日申時、土師御器長忠近來向申云、依例在地陶土師長等造進、今夕由貴御饌料供神物等運進

右大神宮瑞垣御門御幌絹當祭料、任先例所請如件、

年號九月十六日　同文書二通薄紙一重書

權禰宜大物忌父荒木田神主名乘判

注請玉串御門御幌絹一疋三丈事

安東郡

右大神宮玉串御門幌之絹、任先例所請如件、

年號九月十六日

權禰宜宮守物忌父荒木田神主名乘判

注請第四御門御幌絹一疋五丈事

安西郡

右大神宮第四御門御幌之絹、任先例所請如件、

年號九月十六日　二通同前

權禰宜地祭物忌父荒木田神主名乘判

御座之注文、并三色物忌等重々御門御幌事、注進獻覽之、任先例可令致沙汰給候、恐々謹言、

九月十六日　内宮一禰宜判

内宮一禰宜名乘

謹上大宮司殿

〔皇大神宮儀式帳〕一年中三節祭時給儲備并營作雜器事

合貳千肆百參拾玖具

結机捌具　上板机玖具　中机拾伍前　机代貳佰拾前　中折櫃七百五十合　下折櫃貳百五

御調布各一段、正禰宜勤仕之、長六丈、織尺定、經數八十、弘如麻布也、料麻一束、

件御調者、一二三分者、由貴幷御氣殿幌、二宮御座奉用之間、不俺惡勤仕之、勤仕之間、服氣人不同座也、

傍官禰宜假服氣之時者、一禰宜勤仕之、一禰宜服氣之時、政所母良勤仕之、

織御衣各一匹、六丈料絲二口依爲戸所當勤仕之間服氣故障之時無憚也、

〔皇大神宮年中行事九月〕十一日、同日自朝迄十七日夕、於御稻御倉、母良幷織女一人所奉織也、於料糸者正員禰宜所進也、但至一禰宜者、以佐八御收糸上分勤進也、又七人禰宜每日一人、勤仕件食物、日別三ヶ度飯酒也、但當時件食物、傍官禰宜三百文宛、一禰宜五百文被下行、御糸正員禰宜十人、各五十文進也、而去嘉吉四年二禰宜守親神主、五百文料所被寄進、仍禰宜之沙汰略之、在料所禰宜令得分也、又服氣幷館不參禰宜不獻、又自長官筵一重、手水桶杓被下行、以之當番飼丁、每朝水汲機殿進也、又機之具造替、遷宮每度一頭工之爲沙汰入具悉進也、件御糸料、守親神主寄進在所、〇此下恐有脫文、

十六日

大神宮神主

　請御座事

疊三帖　上筵四枚　白布二段　木綿三斤　麻三斤　麻簀三枚

　年號九月十六日

禰宜荒木田神主〇以下神主署名略之

杉原一枚書、此等宮政所書、子良館遣、宮司送、總而年中祭禮、幷諸節諸神事、別宮等之詔刀文荷文等、皆宮政所神主書進之也、田宮寺頭文閏月番帳同、

注請瑞垣御門御幌絹一疋五丈事

　安東郡

食薦廿三枚、防壁三枚、甕一口、瓼二口、陶堝三口、酒盞三口、（各加酒盞一）高盤、枚盤、酒壺各三口、鐵一廷、砥一顆、案十脚、著足折櫃八十合、折櫃二百合、切案十脚、高案八脚、大案十脚、杓廿柄、匏廿柄、雜土器四千五百口、○中略

度會宮

御衣二匹、（禰宜收封戸絲寄綾、如上）調荷前絹五十五匹四丈八尺、（神宮五十四匹、高宮一匹、十六社料四丈八尺、）五色幣絹一匹、門幌料絹二匹三丈、御膳殿料絹二匹、絲二絇、綿五十二屯、布一端、木綿六斤、麻十五斤、膳廿斤、蒸海鼠八斤、堅魚十斤、鰒八斤、鹽四石、海藻根十五斤、祭料米二石、酒米十石、雜供米廿五石、鹽五斗、神酒廿缶、（當國十二缶、餘國貢三）（大神宮、）小税一百廿束、（神服織卌束、神麻續八十束、）大税八十束、（神服織卌束、神麻續卌束、）斤税八百束、（神宮七百九十束、高宮十束、）帖廿枚、短帖廿枚、席廿枚、食薦廿三枚、防壁三枚、陶堝盤酒盞酒臺高盤酒坩各三口、鐵一廷、砥一顆、

〔神宮雜例集二〕年中行事

八月朔日、外宮御祭料請文上司廳事、（一禰宜一人加署）

九月三日以前、司廳遣伊賀神戸御調布使事、（去月一日成廳宣、今日以前遣使、十三日可到來、彼日以前奉送二宮、）

〔古老口實傳〕一年中行事

九月十五日、由貴御饌料、禰宜勤役供進如六月也、

懸税稻、一禰宜七束、之中大宮三束、高宮土宮月讀宮各一束、風神社四把、北御門社同、皇神客神各三把也、但風神宮號之後、八把加增也、已上七束八把也云々、

傍官禰宜分五束、之中大宮二束、三所別宮各八把、風神社北御門社四把、皇神客神各二把也、但風神宮號以後、四把加增也、已上五束四把也、

權任等無定數、任敬神志者也、

以清淨作田稻供進之、（如古神田稻用之、）

卌五斛、木綿四斤、大麻十斤、大鐵一廷、忌砥二面、炭二斛、鹽一斛、神酒十二缶、敷布料調布一端、長茵廿枚、短茵廿枚、繩薦廿枚、麻簀三枚、前簀廿枚、蒲立薦三枚、端裹茵二枚、陶水眞利三具、陶酒坏三具、菓子佐良三具、葦簀四枚、麻筵三枚、酒壺三口、甕二口、神酒缶十口、

懸税稲六百七十束、伊勢國神戸六百十束、伊賀尾張三川遠江四國神戸六十束、

以十三日、多氣郡度會郡二神郡國々所々神戸人夫常所進御調荷前進奉員五十匹、奉上東寶殿、其行事、二月月次幣帛進時行事同、○中略

大神宮司奉進、伊賀尾張三河遠江志摩國等神戸人夫所進御調荷前物、

絹二匹、糸二絇、綿五十二屯、荒太倍一端、木綿二斤、麻五斤、雜腊廿斤、鹽四斛、熬海鼠十斤、耽羅鮑十斤、堅魚十五斤、海藻根卌五斤、

又神服織神部等奉進物六種

神酒一缶、御贄一荷、懸税大半稲卌束、租税稲卌把、茵一枚、下敷簀一枚、

神麻績神部等奉進物六種

神酒一缶、御贄一荷、懸税大半稲卌束、租税稲八十把、茵一枚、下敷簀一枚、

〔延喜式〕四伊勢大神宮九月神嘗祭但朝廷幣數在内藏式

大神宮御衣三匹、禰宜預五月收封戸調絲、潔齋所織備、調荷前絹一百十三匹一丈二尺、大神宮一百六匹、所攝六宮各一匹、廿四社料一匹一丈二尺、

五色幣料絹一匹、門幌料絹三匹二丈、絲三絇、綿五十三屯、布一端、木綿十斤、麻十八斤、腊廿斤、熬海鼠十二斤、堅魚十四斤、鰒十二斤、鹽六石、油六升、海藻根廿斤、已上諸國封戸調荷前、米三石三斗、酒米十石、雜供料米廿五石、鹽一石、神酒廿三缶、當國十五缶、度會宮根倉物忌一缶、服織麻績各一缶、伊賀國二缶、尾張三河遠江等國各一缶、並以神税醸造、小税二百卌束、以一把爲束、神麻績一百束、神服織八十束、飯野郡封戸十束、伊賀國封戸卌束、大税一百八十束、以五把爲束、神麻績一百束、神服織八十束、斤税一千二百廿二束、大神宮一千八十二束、荒祭宮五十束、月夜見宮卅束、瀧原宮廿束、瀧原並宮廿束、瀧祭十束、朝熊社十束、並用神税、下條准此、布一端、帖廿枚、短帖廿枚、席廿四枚、

河曲神戶六束　桑名神戶六束　伊賀神戶卅束(細稅)　尾張神戶廿束　三河神戶十束　遠江神戶廿束

散用

大神宮千三百十七束　荒祭宮五十束　月讀宮卅束　瀧原宮廿束　瀧祭社十束　小朝熊社十束

右當祭之日懸御垣畫畢

鋪設　長莚廿張　短莚廿張　麻蓆四張　織蓆廿張　麻簀三張　前簀廿張　蒲立薦三張

以上宛大神宮司、以祭日敷用、

甕一口　瓼二口　陶水眞利三具　陶酒坏三具　菓子佐良三具　酒壺三口　食單料調布一端

鐵一廷　忌砥一面　鹽五斗

已上宛大神宮司、以祭祀用之、

莒二枚　敷簀二枚

已上神服織麻績二氏神部仕奉

〔皇大神宮儀式帳〕一神田行事

九月神嘗供奉拔穗稻卌束

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

九月例

神嘗祭爲供奉大神宮司宛奉雜用物、

絹二匹、調布八端、麻蓆三枚、麻簀三枚、(已上御饌殿餝奉料用物)御衣料絹二匹、御門御帳料絹二匹三丈、高宮御衣料絹一匹、五色料絹一匹、所管諸神社幣帛料絹五丈一尺、御酒米十斛、神祭料米貳斛、供給料米

被召聞先例於郡司幷衞士等之處、申云、如此幣馬病惱之時、被預郡司等天、損平之時被令送進之例也、近則去寬仁治安之比、十二月祭使天シ故三位祭主之御時、件幣馬立煩不行、仍預留郡司之許、令勞飼之後、追被進例也者、卽就件申狀天、取郡司請文、被預置已了、仍爲後代所記置也、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜三年八月甲寅、是日異常風雨、拔樹發屋、卜之伊勢月讀神爲祟、於是每年九月、准荒祭神奉馬、

調荷前及用途

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

九月例

供奉織御衣料糸壹拾貳絇、供奉大神宮絹一百七匹二丈、調絹荷前料一百匹、御衣料三匹、五色料一匹、御帳料三匹二丈、御門四閫別五丈、管

四處神宮調荷前絹四匹、荒祭宮一匹、月讀宮一匹、瀧原宮一匹、伊雜宮一匹、

供奉大神宮處々神戶荷前物

絹二匹、白一、赤一、糸三絇、綿五十三屯、神衣料白布一端、麻六斤、木綿三斤、

已上伊賀尾張三河遠江四箇國神戶供進

腊魚卅斤、蒸海鼠十五斤、鹽二石、堅魚廿斤、油六升、海藻根卅斤、鮑八十斤、

伊勢國司供進荷前絹一匹、中男作物雜魚腊九十斤、大祭日料物酒米十石、神祭料三石三斗、供給料米三十五石、木綿十斤、麻廿六斤、神酒貳拾參缶、伊勢國神戶十五缶、神服織神麻續二缶、度會宮棧倉物忌供奉一缶、伊賀國神戶二缶、尾張三河遠江三國神戶各一缶、御贄廿七擔、

懸稅稻一千四百卅七束

半斤絹稅二百廿束、以二把一束、大半斤百八十束、以二五把一束、大斤千卅七束、

度會郡九百廿束　多氣郡廿束　神麻續百束、大半斤細稅百束、　神服織八十束、大半斤細稅八十束、

飯野神戶十一束大半斤十束、細稅十把、　飯高神戶六束　壹志神戶六束　安乃神戶六束　鈴鹿神戶六束

已上官物、

右件幣、預前依例擬備、九月十一日平旦、寮官一人、率史生一人、藏部二人、執件幣物、於大極後殿下候之、內侍已下四人、從內退出、依例褰修、訖寮取置案上、立葉薦上、臨時幣帛亦同、

〔延喜式四時祭二〕九月祭

伊勢大神宮神嘗祭

幣帛二宮(內藏寮供設)絁三匹、絲八絇、倭文一端一丈、席二枚、鞍二具、馬四匹、籠頭料布一端一丈四尺、

〔延喜式木工三十四〕鞍二具料、鑣二具、鞅著八隻、鐙著四具、鉸四具、腹帶著四隻、和此良金二百隻、(長各一寸)同金著釘二百隻、

右伊勢大神宮料、九月十日以前造備、充神祇官、

〔延喜式兵庫四十九〕凡伊勢大神宮祭所須女鞍二具、每年造備、九月五日送神祇官、其料牛革一條、(長五尺、廣二尺、)申官請受、(但打立受木工寮、自餘料物見內藏寮式、)造功十五人、(梁材五人、作十人、)

〔皇大神宮年中行事九月〕十七日、同夕部齋內親王御參宮之間次第、又以同前也、但今度宣命被造下例也、○中略今度又神馬三疋也、之中一疋鞍置、又官幣錦綾也、○中略抑今度御祭神馬三疋之內、二疋者引立內院、一疋御鹽所留置、如傳言者、一疋大神宮御料、一疋荒祭宮御料、一疋月讀宮御料歟云々、○中略神馬當時一疋也、鞍被置、○中略官幣錦綾八端、二神主東寶殿參昇奉納之、三神主西寶殿參昇、奉納御鞍、同時也、

〔大神宮儀式解二十九〕今世御馬は京より曳下されず、神馬料銀を中臣使より宮廳に渡され、祭日に臨み馬二疋を出し牽立也、

〔大神宮諸雜事記二〕天喜六年九月祭使王成清王、中臣少副元範朝臣等也、祭主依神御衣沙汰、停止祭主宮司之董務、所被令勘罪名也、仍所不被下也、而今度幣馬之中一疋、於鈴河驛家俄病煩、仍勅使

幣物

次公卿勅使授宣命於禰宜、示可焼之由、（略）

次内人持来火焼之、其儀大物忌相従、御火従内人手請取焼之、先是以宣命向神前破之、

次公卿勅使以下、経荒垣西頭之間退出、

次公卿勅使向禰宜相揖退、禰宜列立初所、

次参荒祭宮奉拝如高宮、（四拝両段也）拝畢解木綿蘰懸榊枝如外宮、

次著直会殿、其儀如外宮、（居飯、近代酒肴如外宮、）

次撤之

次公卿勅使出北戸、向禰宜相揖如外宮、

次退去、至外宮鳥井前下馬過之、次帰寄宿、（○下略）

〔神宮日記摘要〕安永七年九月十七日、神嘗祭、中臣使祭主季忠、王使秉宗王、（實川越兵庫権佐）忌部量弘、（眞継佐渡守）参向例ノ如シ、　八年八月廿八日、祭主下知ス、例幣使勧盃ノ次第、宮司上階ト雖ドモ、使ヲ以テ先タルノ旨、　九月十六日、祭主一禰宜守浮ニ告グ、幣使参向ノ節、祭主宣命読進ノ後ハ、王使ノ次座ニ著スベク、祭主上階ニ於テハ其儀ナシト云云、　十七日、神嘗祭、例幣使祭主寛忠朝臣、使王宗通王、（但作名、實川越兵庫権助、）忌部眞継佐渡守量弘参向、例ノ如シ、

〔釈日本紀（十二述義）〕大神宮大同本紀曰、神嘗祭以十七日直会云云、斎宮之采女二人、御綱柏（両）酒盛（氏）毎人給、

〔延喜式（十五内蔵）〕諸祭幣帛

伊勢大神宮祭

錦一匹、（条物、）両面一匹、深紫綾、浅紫綾、緋綾、中縹綾、黄綾、各一匹、（已上五綾、若無者用生綾、）白綾一匹、（以上大神宮幣料、）緋、中縹、黄、皂帛各一匹、（已上度会宮幣料、）盛裹料柳筥二合、（各方一尺四寸、別宮一合、餘祭皆准此、）庸布二段、木綿小二斤、葉薦一枚、（分用両宮、）

次從本路退出
次參內宮、一鳥井外下馬解劍同外宮、
次於二鳥井下、灑鹽湯獻麻儀如外宮、幣物使々等參進又如外宮、
次至御輿宿列立
次公卿勅使以下之使々列立、西上南面先之禰宜列立其南、西上北面
次公卿勅使向禰宜相揖、立直西面、
次洗手如外宮
次內人取送文授一禰宜、次第見下事如外宮、
次召權禰宜授之、權禰宜取之立禰宜列末、假向乾
次披送文讀、讀畢更讀上之、任色目合點、
次公卿勅使以下給木綿蘰、儀如外宮、
次宮司禰宜等取玉串二枝、內人左右手取之授之、請取人不改左右手、
次宮司進行立道右
次禰宜立道左
次禰宜前行、其行列如外宮、
次各入荒垣門內著石壺座、此間之儀悉同外宮、
次內人取置玉串
次奉開御戶
次公卿勅使讀宣命儀、幷奉拜拍手等、以上皆外宮同、
次目一禰宜、一禰宜來勅使左邊、

此間公卿勅使取出懷中宣命、取副笏起座、(衣跋)進北五尺計、跪居揖、指笏讀宣命、讀畢卷之、
次取副笏復座、如元納宣命、
次宮司禰宜等復座
次神人封御鎰
次公卿勅使以下奉拜四度
次拍手、又四拜、又拍手、
次私祈請、畢各起座退出、
次參高宮、列立石壺、(西上南面)
次再拜拍手、又再拜、
次至初結木綿所、解木綿蘰懸榊葉、
此間進行之時、或與禰宜相揖、
次著直會殿、(經北東入自北戶、著西腋南面、先之居肴物、)
次著座、畢禰宜一人進公卿勅使座下、
次一人進居同所
次權禰宜持來盃、又一人持瓶子相從、
次勸盃、先授盃公卿勅使、公卿勅使拍手受之、二獻不拍手、三獻又同、
次撤肴物
次公卿勅使以下起座、禰宜等列立同舍坤角、
次公卿勅使出北戶、經同殿東巽外南行、三許丈留立、向禰宜一揖、
次答揖

次取木綿蘰結冠巾子、(神人役之)
次取笏復本列、
次中臣又結之復列、取宣命立使王上、
次忌部結畢、給木綿繦立幣案東頭、
次宮司給蘰木綿、取玉串前行、
次禰宜次第取玉串前行列立道、
次禰宜先進、上臈爲先行、
次宮司
次内人二人舁置御幣机、忌部相副扶持之、
次中臣、次使王、次卜部、次公卿勅使、入自第三鳥井、立幣案於第二御門外、忌部屈身跪地、如摔案脚祗候、
次禰宜等候第三御門内西腋庭中石壺座、(東上北面)
次公卿勅使使王等、著石壺座相對著、(半帖)
次中臣著前石壺座、(徒跣)
次指笏讀宣命、讀畢復座、
次一禰宜召人、倚立宮司禰宜等所持之玉串於玉串御門腋、(二人次第出來取之)
次内物忌進出、申可開御鎰由、(御鎰案立於第二門外)
次開辛櫃、取封破之、
次取出御鎰參入第一門内、宮司等率禰宜等參御内、一禰宜以下役者開之、
次奉納御幣物、

次出門

行列之次第

次御幣一荷(内外宮各一裹)　次宣命持(付榊枝持之)

次神馬(今度代鍬、有無未定、)　次宮司

次卜部　次忌部

次中臣　次使王

次公卿勅使　次神馬幣帛等整立前行

次公卿勅使、於外宮一鳥居之外下馬、(於此所解劒)

従此所公卿勅使先進前行

次使王中臣忌部卜部次第引列参進

次至第二鳥井之下、大内人二人、一人奉大麻立、一人灑鹽湯、

次禰宜等五人前行、至御輿宿西砌列立、使々相對列立、

先之當玉串之所、(疊石、四方角立榊、又置石上於榊、)立白木高机、置幣物、其南引立御馬、

先之當公卿勅使列前程、中央置洗水、其儀入土器加柄杓、其傍挾紙於木立之、

次内人二人進寄洗水所

次公卿勅使揖離列、跪置笏洗手復列、

次中臣以下次第同此儀

次計渡幣物(其儀、束帶之男一人取目錄、授第一禰宜、次第取下見之、)

次進寄机下、合目錄検知之歸列、

次公卿勅使揖進跪半帖(白緣端半帖、相對敷之、)上置笏拍手、

次中臣進出、著前石壺座、讀宣命、畢復座、
次禰宜召物忌、令取玉串事如外宮、
次申可開御鎰封之由事如外宮、
次一禰宜取御鎰昇殿
次禰宜一人奉開御戸之由、來綏光前申之、
次綏光取出宣命、取副笏、著前石壺(雨後深泥之故、無徒跣、中臣猶著沓、故綏光同此儀、仍於石壺著沓揖、)蹲居、(座揖)開宣命讀之、讀畢取副笏、(座沓揖)復座、(揖同蹲)此間奉納御幣、此後禰宜宮司等復座、次封御鎰、
次綏光以下奉拜拍手如外宮(但禰宜等拍手數多)
次一禰宜來綏光左邊、(不持目者也)綏光授宣命於禰宜、可燒之由示之、於荒垣門之腋燒之、
次綏光起座(座沓揖)
次參荒祭宮遙拜、(著石壺)使々宮司禰宜等同列、兩段再拜如外宮、拜畢解木綿蘰懸榊枝、
次著一殿、(沓座揖)著東方、(西面)中臣以下北方、(南面)宮司西方、(東面)禰宜南方、(北面)各著座畢居饗、(綏光以下宮司懸膳)至一獻勸盃、銚子入酒、綏光前(一禰宜)其作法如外宮、(但中臣宮司二人有勸盃、齋部使王無之如何、)自二獻無勸盃、(中臣以下以之坏飲下之)一獻之度々居肴物、取盃度々、(下箸)三獻畢撤饗、次綏光起座、(座沓揖)遶一殿、時禰宜列立、對一禰宜相揖、(自此所取松明)於一鳥居外乘輿、到外宮鳥居之逋下輿、歸山田宿、(戌刻許歟)　十六日、立山田宿于津、　十七日、宿水口、　十八日、入洛參內、著束帶、(亥刻許歟)著殿上、以頭辨(資行朝臣)被逐御願平安之由奏之、歸出被聞食之由示之、後退出、
〔正保四年奉幣使記〕正保四年九月十五日、公卿勅使御參宮之時、攝政(○一條昭良)ヨリ被下御次第、
參宮之儀
早天於寄宿沐浴之後著束帶、修祓之後遙拜、

次綏光以下奉拜、乍居四拜、置笏拍手、
次又取笏四拜、此次申私祈、各起座、先綏光、（座沓揖）
次參高宮、（今度遙拜、西上南面、）使々同列、宮司禰宜等東方同列、再拜拍手、又再拜、畢離列於側、解木綿蘰、懸榊枝、
次著直會殿、（當時無此殿、仍用一殿、）經一殿前西、自北戶著座、（著西腋、沓座揖、南面、）
次中臣（東腋、北上西面、）
次使王、次齋部、（南折）宮司、（東上北面）
次十人禰宜著座、（北上東面、禰宜者自西戶參入、）此座列不叶舊圖者歟、使々宮司前彙居肴物、（今度檜盤居肴物、此居物之事、舊記無見、相違之物也、）各著座畢、一禰宜一人來、綏光座前、先是一人居盃、一人取瓶子（土瓶也、口付注連、）來、一禰宜取其盃、持副笏、以扇掃坏盛酒授之、置笏拍手飲之、禰宜各退、中臣以下至宮司者、禰宜相替勸盃之、二獻、綏光前（二禰宜歟）勸盃之、（自是不拍手、）三獻又同前、（自二獻赤漆瓶子也、）三獻畢撤肴物、次先綏光起座、（座沓揖）出北戶經本路、退出、禰宜各一殿前列立、對一禰宜相揖、過於一鳥居之外、乘輿參內宮、先御辛櫃（齋士相副、）次宮司、次齋部、次使王、次綏光、於一鳥居之外各下輿、祗承二人綏光前進行、使々相從、於二鳥居之下、灑鹽湯獻麻之儀如外宮、（但榊枝付四手持之、）禰宜等出逢、對揖前行、御輿宿前列立、（此御輿宿當時無之、此所古之跡歟、）次綏光以下使々列立、（東上南面歟、）禰宜等各列立、後綏光向一禰宜相揖、
次手水如外宮、（但座前持來、故不進出、）中臣以下同前、先是置御幣案二脚、置御幣、（忌部沙汰之）
次取送文授一禰宜、次第見下事如外宮、
次任色目檢知之事、又如外宮、
次綏光已下給木綿蘰事
次宮司禰宜等取玉串前行、次第是又如外宮、御幣案內人舁之、（忌部相副）荒垣御門腋置之、忌部案下伺候之儀如外宮、各著石壺座、

次綏光揖進跪、半帖（白絲端中帖相對縫之、但玉串之座自始敷之、篤敍、著座、仍使之帖許掃部寮上畳敷之、此帖之事、今度自宮木調進之、有無依不知、掃部寮從京都持參敷之、）
笏拍手、取木綿蘰結冠巾子、（竹串二本插座、持左右手授之、）
次取笏復本列
次中臣以下同此儀、忌部者結木綿蘰畢、
次給緌、立幣案東頭、
次宮司給蘰木綿、取玉串前行、
次禰宜次第取玉串進行列立道
次内人二人置御幣舁机、忌部相副扶持之、
次中臣、次使王、次綏光、著玉串門之軒下、（西上北面、此儀依兩儀也、巨細見右、）中臣使王忌部同列、綏光座在王座前、（半帖掃部寮調進歟）此前有御幣案一脚、又一脚居曲物、此口以生絹切結之、（此曲物之事相尋處、称書之物云々、猶重可尋、）案東頭忌部屈身跪伺候、次宮司禰宜等著座、（庭中東上南面）
次中臣進出讀宣命、讀畢復座、
次一禰宜召人、倚立宮司禰宜等所持之玉串於玉串御門内案脚、（二人次第出來取之）
次内物忌進出申可開御鎰封之由、御鎰案立第一門外、
次開辛櫃取封破之、取出御鎰参入御殿、一禰宜持鎰、宮司禰宜等各參開之、
次奉納御幣物、先是幣案舁入御門内之後、忌部著座、此間禰宜一人來綏光前、告奉開御戸之由、此時綏光取出懷中宣命、取副笏起座、（座揖、徒跣、）依雨儀板上也、四五尺進出跪居揖、插笏讀宣命、卷付封於懸紙、開之讀畢、如元卷之、取副笏揖復座、（座揖、安座、）
次宮司禰宜等復座
次神人封御鎰

〔綏光卿記〕正保四年八月十六日、從殿下(○昭良)一條、以頭辨(貴行朝臣)自當年伊勢例幣有御再興、爲勅使可令參向之旨仰也、　九月十一日早旦、上卿(德大寺大納言公信卿)著陣、(○中略)陣儀終後、綏光著殿上、(○中略)上卿目綏光、置笏相互進寄、(但依座近及手取之)給宣命、取副笏揖起座、於便宜所授宣命於中臣退出、綏光歸宿所、改束帶著狩衣、(往古路程衣冠時馬、當時不能其儀、)乘輿發足、所々祓等亦不及沙汰、使々相率宿草津、　十二日、宿鈴鹿、　十三日、宿松坂、　十四日、到宮河乘船、(未刻許)參著山田宿、(往古勅使之宿、離宮被殿也、當時斷絶、故宿山田町屋、)　十五日、寅一點沐浴著束帶、修祓出門、(卯下刻許歟)　先是從一禰宜送使者、風雨之時齋王候殿也、雖然當時無其殿、二鳥居內之行事者、於一殿可有之哉、又神前之座、於玉串門軒下可有著座哉之由申送之、齋王候殿斷絶之上者、了簡可爲其分之由返答畢、使々行列之事、當時別宿故無其儀、於外宮一鳥居下各出逢、於此所下輿、(帶劍之者解劍、但綏光無帶劍、)先御唐櫃進行、(衞士令持之)綏光先進前行、

次使王中臣忌部卜部、(卜部今度有子細不參)引列參進、到二鳥居下、大內人二人、一人者奉大麻立、一人者灑鹽湯、(土器入湯、以榊葉立向灑之、)

次禰宜十人出逢、對一禰宜相揖、(是爲申悅也云々)禰宜各前行、一殿前列立、

次綏光自一殿之西戸進入、(南上西面)使々同列、宮司列此末、

次禰宜相對列立、(南上東面)

次使々相對于禰宜揖、(但今度綏光無其覺悟、中臣一人相揖、猶宜可決、)

先是立白木高机置幣物、(一殿內南方、有神馬者可引立其側、今度神馬被用料物歟、)　先是置手水具、(其儀土器入水置之、一人持柄杓、又一人插紙於木候其側、是一殿內南方、)

次綏光揖離列跪、置笏洗手復列、

次中臣以下次第同此儀、

次幣物許渡、(其儀束帶之男一人、取目錄授第一禰宜、次第取下見之、)次進寄机下、合目錄檢知之歸列、(此者大物忌歟)

百文獻子良館、三祭同前、御衣織女食三百文、母良ニ下行、同夜宵御饌、次瀧祭宮祭禮、次櫻宮祭禮、櫻御薗酒肴懈怠、次曉御饌、六七八予十從、　十七日、御饌荒祭方腊預予、然而今日忌火潔齋之間、昇殿以後戴之、正殿御戶板一方低下之間、以忌父潔齋、次八守繁予氏經、各（著衣冠）參昇大床、奉直之、神嘗祭例幣使賴忠、正親忌部占部、宮司長盛、神宮一二三四六七八予十昇殿、以下神事如常、勸盃御遊入予十、　十八日、宮比矢乃籠神事、荒祭宮神事、一二三四六八予十參、　十九日、瀧祭宮祭禮、六八予十參、同日、月讀伊佐奈岐宮祭禮八十、　廿日、朝熊宮祭禮、一二三四六七八予十、牛喰饗膳延館、　廿二日、瀧原並宮祭禮、六經久巡番、代息男經元參向、　廿五日、伊雜宮祭禮、五正棟巡番、代清恭參、同日、風日新宮祭、一二四六七予十從、有今在家酒肴、　八年九月十七日、神嘗祭幣使賴忠、正親忌部占部宮司長盛、神宮二四五六九十從、二四依老耄不合期、仍御鎰ヲ與奪之間、東西寶殿ニ六九參昇、東寶殿朽損、御戶不開之間、錦綾ヲ外幣殿納、勸盃御遊六九十參、神事次第如常、予織御衣不獻之間、織女食御糸等略之、

嘉吉二年九月十七日、神嘗祭例幣雖令延引、宮司氏長、神宮一二三五六九十昇殿、以下如常、　十八日、十九日、神事等如常云云、　廿日、小朝熊神事發延引、　廿二日、瀧原並宮神事、依武家神郡發向不參、　廿五日、伊雜宮祭禮、六代男正秀參、同日、風日新宮祭禮、依神郡亂、今在家地子無沙汰、仍酒肴延引、此旨過日ニ、雜掌所七郎物忌申上云々、　十月廿一日、同夜例幣使從四位上秀忠、（手水）四姓、宮司氏長、神宮予九十從、予名召始也、予東寶殿ニ參、九神主參時、依暗令顚倒、自手血流、仍西寶殿ニ十參、雨降間不儲引、勸盃皆參、御遊式日畢、

〔內宮臨時假殿遷宮記〕明應六年九月十七日
神嘗祭者、天下無雙御祈禱政而、荷前御調絹織御衣等雖致奉納、御殿就朽損、昇殿依難叶、去年當年者如形儀式許執行、不遂參昇退出、

日、內宮御祭、齋王御參、寮官等供奉、幣使四人皆參、權大司少司供奉、行列如例、於當宮鳥居御祓如例、齋王暫河原殿御坐、御祓歟、自二鳥居祇承四人、御火四人參、大麻御鹽湯有之、使使徘徊一殿前、宮司徘徊主神司殿邊、奉融齋王、經暫宮司參寄玉串所、爲寮御玉串也、祇承二人、一人五位、友永神主、一人六位、御火二人參勤、相尋御內刻限、用手水、持參、權大司御鬘木綿、少司御榊玉串御鹽湯也、其後歸著玉串所、相待一禰宜之寮御玉串畢之後、使使宮司列立、禰宜皆參、宗經、延季、延成、氏俊、成行、重仲、永光、經元也、對拜之後、總官御手水役人、家權官二人也、次相使宮司手水、其後幣取別、次玉串供奉之後著石壺、先宣命、次祝詞、權大司勤之、其後御封申、其後禰宜參內院、一禰宜正殿御鑰、二三禰宜東西寶殿御鑰、各奉捧持、次宮司同參列居御前、御鑰御封開之由申之、其後一二禰宜所奉持之御鑰相替天、二禰宜子良昇殿、子良奉懸御鑰之後退下、二禰宜奉開御戶、其後傍官禰宜參昇、奉納官幣幷織御衣之後各退下、二禰宜奉閉御戶、各著本座、御鑰御封、權大司勤也、其後一二禰宜宮司參東寶殿砌、三禰宜參西寶殿、各奉納荷前御調御鞍等、御封役兩殿乃共仁於東寶殿之砌書之、是先例、兩殿御封畢之後、又列居御前、一拜之後歸著石壺、八度拜拍手神拜、別宮神拜同前、其後脫鬘木綿、使使著一殿、寮頭以下同著、宮司主神司著主神司殿、饗膳有之、刀禰申之後始之、總官勸盃一禰宜、寮頭勸盃二禰宜也、八禰宜爲宮司勸盃、主神司殿仁來、主神司中臣乃勸盃物忌也、事畢之後、手有之、其後退出、其後用手水、參御遊所、御遊儀式如例、但御遊乃中間仁雨降之間、於四御門下被遂畢、是先例、爲名子所乃舞畢之後各退出、祇承等參勤、　十八日、豐明神事、齋王御著內河原殿、總官寮官等著內九丈殿、但頭不著、宮司少司一人供奉也、著主神司殿、主神司同著、神事儀式如例、神事畢之後、少司持供御解文參御所、河原殿砌、主典捧比目籠、同參、頭代大助請取解文、御廚子所仁給、其後祿物允持來之間、不可預之由依少司憤之、助來天被之、其後退出、

〔氏經卿神事記〕永享六年九月十五日、與玉宮神態、次御占神態、一二三四六七八予十、次第如常、　十六日、御巫竈祓、後河原祓、神拜一二三四六七八予十、御稻奉下、一二六八予、御贄干鯛代、二以下各七

次御遊、中臣王使忌部著石壺、祭使之西方宮司北面、其西方禰宜上北向東、次宮司進入重榊之前、大和舞、次歸座之時、於石壺之東頂酒立、（以三角柏爲盃）次禰宜、次中臣忌部、各大和舞、酒立同上、次退出、次於二鳥居中臣與宮司對揖、次退散、

荒祭宮內人等、捧於御內所請取之荷前而參彼宮、一禰奉開御戶、奉納之於殿內、

中臣四位之時者、王使立上、於玉串行事所、中臣取宣命之後、王使下次座、於石壺宣命讀進之後、王使復就上、

中臣上階之時者、一殿之座、敷高麗緣之上縹繝端、又四位之時者、敷高麗緣之上紅緣之例也、

古代者、有齋內親王御參向之儀、

〔大神宮司神事供奉記〕一延應二年（〇仁治元年）九月十六日、外宮御祭、齋王御參、幣使王正親正衆俊王、（代子）（息重綠）中臣祭主從三位行神祇權大副隆通、忌部神祇權少祐茂友、占部大膳亮衆弼、（代永頼也）宮司權大司良國、少司長則、供奉行列如例、於宮河際御祓如例、參著當宮二鳥居下、祇承四人、御火四人、大麻御鹽湯等參向如前々、相別祇承御火等、用手水參寮御玉串、權大司御蠶木綿、少司御榊、六禰宜與房御鹽湯也、其後歸立玉串所、幣使列立如例、禰宜一行能、二元邦、五維行、六與房供奉也、對拜之後、使宮司手水、總官御手水役人（氏言神主、口口神主）也、自餘六位宮掌也、次讀合、次蠶木綿玉串如例、其後參著石壺、先總官令讀宣命給、次宮司祝詞、（少司勤之）其後御封申之後參內院、先禰宜各奉捧正殿東西寶殿御鎰等、次宮司參、瑞籬御門內（仁）列居如例、御鎰（乃）御封之後、一禰宜子良昇殿、奉開御戶之後、子良退下、傍官禰宜參昇、奉納五色幣幷織御衣之後各退下、一禰宜奉閉御戶、其後二五禰宜參東西寶殿、奉納御調御鞍、其後御封權大司判也、其後歸著石壺、八度拜拍手神拜、別宮拜同前、其後幣使寮頭以下著一殿、宮司主神司著主神司殿、刀禰申之後、饗膳始之、總官勸盃一禰宜、（陪膳御手水役人）寮頭勸盃二禰宜、（陪膳宮掌）宮司勸盃五禰宜也、後手之後退出、其後用手水參御遊所、御遊之次第如例、鳥名子所之舞畢之後退出、　十七

内玉垣御門
八重賢木鳥居
幣馬
御馬飼内人
宮幣
副物忌父
忌部
出納内人
御鑰辛櫃
三色物忌父
玉串大内人

〔皇大神宮神嘗祭中臣宣命奏進之圖〕

齋王候殿

祇承

中臣

王代

宮司

政所

祢宜

權祢宜

男柱本、次一禰宜手扶禰宜相共參昇正殿、此時子良候御階之右三段、一禰宜差入御鎰於御戶之御鏁、手扶禰宜降御階、相具子良、子良參昇大床、奉掛初御鏁手之後復元所、次一禰宜與手扶禰宜共、放御鏁開御戶、入御幌之內、手扶禰宜者退下而復座、次二禰宜昇殿、次三禰宜以下各同前、次出納內人請取宮司進納之荷前、次十禰宜降御階之第三段、于時大物忌父一藺、納母良所奉織之御衣於柳筥而捧立之、十禰宜執之參入殿內、次九禰宜持楊筥之蓋降御階之三等、大物忌父一藺取宮司之荷前入件蓋、九禰宜捧之參入殿內、次荒祭宮內人配取彼宮之荷前、自餘別宮之御料等分配、而出納內人受領之、又送文者渡政所、次殿內勤行之事終、而十禰宜及始之柳筥退下於御階之三段、授大物忌父一藺復本座、次自九禰宜至二禰宜退下、次一禰宜出御幌、于時手扶禰宜參昇、次閉御戶鏁御鏁而退下著本座、次給正殿之御鎰於出納內人、出納內人染筆取副御鎰而、進寄宮司之前、則宮司封之、次起座、次昇居錦綾案於東寶殿之前、宮司禰宜物忌父、（座之次第、各同六月、）次二禰宜捧御鎰、相具手扶禰宜、參昇東寶殿、而開御戶、入御幌之內、于時副物忌父捧錦綾立御床之下、手扶禰宜取之、入殿內奉納畢、閉御戶固御鏁復本座、次政所讀上荷前送文之後、各起座參拜、西寶殿出御歸著、石壺之次第、同六月十七日之御祭、次出納內人申御鎰櫃（乃）御封畢之由、次奉拜開手、禰宜及物忌父等出自西鳥居、拜與玉之後、列立荒祭宮遙拜所之前、上西向南、中臣王使忌部宮司者、退出自南御門、中臣宮司與禰宜對揖、次荒祭宮之遙拜、各開手兩端、次禰宜櫻宮由貴殿酒殿之拜、次退散、次荒祭宮之遙拜畢之後、禰宜二人（於忌火屋殿之軒、解木綿、脫淸衣、）具政所參一殿、於一殿中臣王使忌部北座東上、宮司南座、禰宜東座北上、各著座、次饗膳、次上首禰宜勸盃於中臣、權官配膳之、次王使忌部酌盃、次末座禰宜勸盃於宮司、王使忌部宮司之配膳、其祗承勤之、次各起座、禰宜者自西鳥居參本宮、中臣王使忌部宮司者、於殿之西手水之後、如初經南御門而參入、

次鳥名子勤仕、如六月十七日、

(帶、權衣冠、)子良、(袍)母良、(袍白練衣)三色物忌父、(一﨟束帶、自餘衣冠、)祇承、(衣冠)荒祭宮内人物忌、(各衣冠)山向内人、御鹽湯内人、大麻内人、(各衣冠)出納内人、(一﨟衣冠、自餘布衣、)人長鋪設、(青襖)御火内人、(白張)禰宜(政所相從)經中道參列、(如新年祭)次宮司、次御馬二匹、次官幣御韓櫃、(衛士相副)次中臣、次使王代、次忌部代、各參列二鳥居、中臣王代忌部者、南柱之本東上北面、宮司者、北柱之本向南、御馬御韓櫃者、鳥居之内、次奉仕御鹽大麻、(先御馬、次韓櫃、次中臣、次王使、次忌部、次宮司、)次各進參、先禰宜、御火二人前駈、次中臣、(祇承相從)御火二人、次王使忌部、次宮司、(有祇承)御火二人、於玉串行事所、禰宜西上南面、中臣、王使忌部宮司東上南面、三色物忌父禰宜之末上西、玉串大内人山向内人者、祭使之向方東上北面、荒祭宮内人上西向北、御馬者、八重榊奉立之、御韓櫃者、置道之中間舁居之、次忌部進寄御韓櫃之前、取出錦綾幣、相副送文而奉居之於高案、次中臣進而手水、(權官上首進紙、次座執水、)次王使、次宮司手水、(山向内人進之)次神宮政所進寄官幣之前、執送文(放[illegible]紙)而進一禰宜、一禰宜披見之、二座以下同前、次轉上送文於一座、一座給之於政所、政所持之而進高案之前、于時大物忌父一﨟同進寄點檢御幣、次玉串大内人、從山向内人之手執蘰木綿、中臣進受之、著額復本列、次忌部著木綿蘰木綿襁、隨即進參、副物忌父等捧錦綾案、奉舁居八重榊、忌部候其下、(案之四、八重榊)(鳥居西柱之本)次宮司著蘰木綿執太玉串、立第四御門、次禰宜等執太玉串、參列同御門、次玉串大内人參立、(各如新年祭)次三色物忌父等參列同御門之外、東方西向、次各參進石壺、禰宜并玉串大内人、及物忌父各於御門之北軒有御鹽、次相待祭使之參入、各著石壺、祭使者西上、宮司禰宜玉串大内人物忌父等、(各如新年祭)次中臣進八重榊前之版、讀進宣命、畢復座之時、忌部亦起座就石壺、次大物忌父一﨟、給政所所持之詔刀文而進宮司、宮司讀進之、並宮司禰宜玉串大内人物忌父、太玉串請渡奉納之次第、各同新年祭、次出納内人取出正殿并東寶殿之御鎰、申御鎰櫃(乃)御封開之由、次物忌父等捧錦綾案、(副物忌父捧之)參入御内、次一禰宜執正殿之御鎰、二禰宜執東寶殿之御鎰、正員相共參入、次宮司參入、次奉備錦綾於正殿御階之前、而各著座、宮司禰宜以東爲上、物忌父御階之西、上北向東、荒祭宮内人候御階之西

勢州河曲郡仁雖在之當時改減志天、饗膳以下之事、雖及往古之作法矣

公卿勅使御參宮之次第

依當日之御教書幷次第施行、注進可預祿禰宜祠官以下之交名矣、

次禰宜等成廳宣、令致催沙汰、机酒御贄掃除供奉人以下之例役矣、

次御參宮以前被成下御教書、被召兩宮正權禰宜之交名、被授於一階矣、

次勅使自一志驛家、著御于離宮院、件驛家供給、大宮司之沙汰矣、

次著御于離宮驛家之由、依小內人之告知、致一殿饗膳以下之用意、神宮之沙汰矣、

御參宮之次第、大略如九月例幣之軌範、仍不遑于毛擧矣、但件時者、被調下宸筆宣命、被奉遣金銀御幣幷御神財之例也、神馬者二疋、號之左右御馬、次賜銀劒一柄、次勅使私仁被奉進神馬一疋、如此儀式少々相替耳也、又一殿饗儀鋪設等、往日者盡美之由、舊典等炳焉也、雖然神宮致衰弊、特供奉之君達諸大夫以下被著座、廳舍殿九丈殿、主神司殿、由貴殿、酒殿、幷齋王候殿、御輿宿、車宿等之殿舍、當時悉令退轉之間、併難覃上古之風儀矣、

正保四年八月日　皇大神宮禰宜等謹誌

〔元文年中行事記 九月〕十五日御贄、山向內人參神埼之御饌嶋、而奉採御贄、懸由貴殿之軒、如六月十五日、（今度者禰宜參勤條之）

同日輿玉並御占神事、同六月十五日、

十六日河原祓並御稻奉下、如六月十六日、（今度者奉下二十四日拔穗之新稻、而奉舂之如例、）

同日宵御饌供進、次瀧祭神態、次櫻宮神態、次曉御饌供進、各同六月十六日、（當月曉御饌者用新穀）

十七日鳥名子等參勤、如六月十七日、

同日神嘗祭、中臣使王代忌部代、（各束帶）衞士、（大紋）宮司、（束帶）正員禰宜、（束帶淨衣木綿）權官、（衣冠）政所、（衣冠）玉串大內人、（正束）

次宮司禰宜相共仁東寶殿乃前仁候志、二禰宜御戸於開奉利、錦綾於奉納、

三禰宜西寶殿乃御戸於開奉利、御鞍於奉納、東寶殿同時之行事也、

次各退出

各石壺仁歸著志、朝廷奉祈、

次四姓官人宮司、南御門與利退出、

次禰宜西御門與利退出

御輿宿乃北仁天、四姓宮司與禰宜各對拜、

荒祭宮神拜所之次第

四姓氏人　東西上、各北面、

宮司禰宜　西東上、各北面、

各列立之後、拜四箇度、拍手兩端、

一殿著座之次第

祭使北座、東上、各南向、

宮司南座、北向、

神宮東座、北上、各西向、

各同時仁揖拜志天鋪設仁坐須、

次直會饗饌

次各座於起、御遊仁參、

其後各退出祭使宮司乃御火誑承者、二島居迄供奉、

右當宮例幣者、二月六月九月十二月、毎年四箇度被發遣奉幣使、稱四度例幣是也、件幣使供給料、

神馬　玉串御門乃東妻仁北向仁赤立

各著座之後、祭主座於起、八重榊乃巽乃丸石壺仁進參志、宣命於讀進天志本座仁歸著、（正親進ニ上座、祭主下ニ次座、）

次忌部版位仁被著

次大物忌父詔刀文於捧持、宮司仁獻須、

次宮司進參志、詔刀於讀進天志本座仁歸著、

次玉串乃行事、如常、

次鎰取内人御封於申

其後禰宜各座於起、一禰宜者正殿乃御鎰、二禰宜者東寶殿乃御鎰、三禰宜者西寶殿乃御鎰於捧持、

入重壘乃西於經天、瑞籬御門乃内仁參入、

次物忌父官幣乃案於持參

次宮司參入

四姓官人者、不被參入于瑞籬御門之内、官幣奉納之間、不被退本座、

右之行事、雨儀之時者、齋王候殿乃内仁天勤行之例也、

御内行事之次第

宮司東北向

禰宜西東上、各御寶前仁向著座、

官幣案、御階乃西乃妻仁舁居奉留、

次御鎰乃御封於破

次御戸於奉開、其儀式不具注、

次御戸於奉閉、各座於起、

次三色物忌父等官幣於計見配分
次御馬飼内人神馬於請取申
次山向内人鋪設於用意
次祭主裾於曳進寄天、件鋪設仁跪候、于時玉串大内人鬘木綿於獻須、祭主笏於差、手一端天志受執、著用之後、笏於拔持、互拜天志本座仁被著、
次祭主之侍、後方利與宣命於奉留、祭主被請取之、後乃方利與正親乃上仁被著、于時正親被立下也、
次忌部鬘木綿并木綿襁於著用
次宮司鬘木綿、祭主與同、次又拍手一端天志御玉串於請取、左右仁捧持、互仁禮志、南乃屏垣乃前仁進參、北向仁立、
次禰宜等御玉串乃次第、宮司仁同、但南鳥居西柱下仁南向仁立、
次官幣　三色物忌父等持參
次神馬　御馬飼内人牽之
次祭使　列於引天進參
右前陣宮司禰宜、後陣祭使、件玉串行事所之次第、風雨之時者、御輿宿之内仁天勤仕之例也、
石壺著座之次第
祭主正親忌部卜部　東方、西上北面、
宮司禰宜　西方、東上北面、次玉串大内人、
三色物忌父　西方、以北爲上東向仁候須、
官幣錦綾　八重疊乃前仁奉昇居、忌部幣案仁手於懸天、東向仁被跪候、
鎰取内人　官幣之西仁祗候

又今日例幣雖令延引、神主祭禮如恒、宮司參、
又正權神主新衣平御厨勤、當時以米沙汰、正員分各三斗、權任分各三合、
一十八日内御神態、并荒祭御祭等次第、同于六月、(但名申一方副)
一今朝御巫内人、天津神國津神四十四所、四至八百萬皇神達、祭同前也、
〔勅幣中興記 上〕九月〇正保四年十七日例幣次第行事
二鳥居之西仁天、祭使宮司大麻御鹽湯有之、
禰宜各廳舍殿仁參集
禰宜御火内人二人、祇承宮掌大内人二人於先立、玉串行事所仁參列、
次官幣錦綾之辛櫃(神部奉昇之)
次神馬三疋(内宮壹疋被置鞍、本宮之御料、壹疋荒祭宮之御料、壹疋月讀宮之御料云々、)
次祭使(祇承二人御火二人相從)
次宮司(祇承御火有前駈)
玉串行事所之次第
正親祭主忌部卜部西方、東上南面、(但卜部氏人者、有子細不從神事、)
宮司禰宜東方、西上各南向、
官幣禰宜之東砌仁奉昇居
神馬官幣之際仁牽立
玉串大内人并物忌父等、官幣之南方仁列立、(西上北向)次祭使据於曳進寄天手水、(祇承宮掌内人勤之、但重代禰宜之例相交歟、)
次宮司手水(山向内人勤之)
其後大物忌父兄部、官幣送文於請取、一禰宜仁渡、一禰宜拜見之後又返渡、

所奉置之東西寶殿御鎰取捧持、但於殿內供奉子細等、可有口傳也、其後一神主退出、於大床拜、于時手扶禰宜等參上、一神主笏差御戶閉懸波、差御鏁差堅、御戶脇立置楯鉾御弓取直、大床懸拜見之後、御戶唐匙拔捧持、拜後退下、於御階下拜著座、于時鎰取內人進寄、宮司封付御鏁鎰、一神主捧持御戶匙懸忩退、于時座立、東寶殿前著座、如六月御祭之時、但今度宮司荷前御調絹正殿奉納也、官幣錦綾入端、二神主東寶殿參昇奉納之、三神主西寶殿參昇奉納御鞍、同時也、

司進納、荷前御調絹佰捌拾貳疋三丈事、（如風宮御料四疋）

見荷前　百卌八疋　先進　三疋

御衣　四疋　五色　一疋

卌五疋四丈五尺（在宮）

雜用七疋四丈五尺（之中、二疋司家政所上、五疋四丈五尺神主上、）

右嘗祭料、依例進納於大神宮、如件、

年號九月十七日　少司

權大司

大司大中臣朝臣判

退出次第、如六月御祭之時、但今度者、正親一殿著、幣使東座也、勸盃一座勤之、配膳祗承役、次御遊如六月御祭之時、幣馬當時一疋也、一神主拜領、

今日四姓參、殊難參正親一座、無御火祗承、只幣使宮司神宮許也、

長和二年九月神嘗祭時、正親忌部占部等宿宅有馬死穢、仍不參、祭主輔親卿一人從、

又寬治六年九月神嘗祭、王內膳正衆則王、依妹之服假、十五日途中止畢、然而任長和二年例、祭主親定、二宮御祭參仕、

拜平伏、其後祭使進參、宣命被讀上之後、二座歸著、正親一﨟進後、忌部又本座歸著、其後宮司讀告刀、幷玉串奉仕、鎰取內人之御封申次第、如六月御祭之勤、一座指笏、正殿之御鎰給、二神主東寶殿御鎰賜、三神主西寶殿御鎰賜參入、次宮司、各其座如恒、于時鎰取內人、一神主御前進寄、鏁鎰賜封取、令見宮司之後、則又進寄唐匙懸、于時手扶禰宜、或一人、或二人、笏指裾懸、一禰宜左右寄、于時大物忌子良、御階右進寄扇翳、于時一神主御階左東進寄、御鎰捧蹲踞、一拜之後參昇、先左足進、子良同時於大床中程、一神主蹲踞拜後、御戶匙穴差入、子良御鏁手懸退下、一神主御鏁開、件御鎰東方高欄平桁置、鎰取內人取之、宮司封付、御鏁拔、御戶左右柱本置、御戶差入置、以御匙懸渡弛、御戶左右脇シカト可開付、其後手扶禰宜退下本列著、一神主笏拔持、於中程蹲踞拜如地下、不可有立拜、還爲狼藉也、其後裾左手取持、自左脇參、不開御幌、身細潛參入、御座前東端揖候、次二座裾引、御階於西下、東寶殿御鎰御階高欄平桁置、拜後參上、大床拜後、裾取西右脇參入、一禰宜次揖居、三座自東西寶殿御鎰置、參上等同前、次々左右打替々々參上、皆自右脇參入、御床西居廻揖候、其後九神主、右相殿御床下楊筥、裾取副不踏程可引合也捧持參、上方自左下、自下三段階西渡、男柱本自高欄上、楊筥差出、大物忌父兄部進寄、神宮織御衣作櫃楊筥上置、其時左廻、件段階東渡參上、自西參入、各著座、背潛通、蹲踞一神主獻、取之東方置、九神主楊筥如元奉返置、本座揖候之後、一神主御衣櫃蓋開、御衣一取戴二座渡、二神主戴三神主渡、如此次第十人取渡畢、御床下奉納、其後十神主如以前罷出、但是右下東渡、宮司荷前御調絹楊筥上置者歸上、件役自左參上之禰宜自左下、役物有其方者、於其方請取也、一神主獻次第同前、楊筥右相殿御床下奉返置、本座揖候、件出入御幌不令開給之樣可徘徊者也、總而昇殿時者、强張裝束可斟酌也、荷前御調絹、一神主奉納後、殿內異事御献、故實禰宜等儀令拜見、本座歸各揖拜之後、十禰宜御衣櫃給、於三段階西、大物忌父渡後、裾引於御階之下、左廻、裾取直拜本座著、其後九神主裾引退出、於大床裾取直拜後、又裾取直自左退下、如此各參上方退下之次第同前、但二三神主於御階下、以前

幣殿也、又二三禰宜各自鎰取内人之手封請取、付寶殿御戸之後退下、副宮司前跡跪、其時鎰取内人進向、東寶殿御戸御封畢、西寶殿御戸御封畢申退歸、其後宮司幷神主各退出也、一二三神主、各所帶御鎰等於八重榊西脇、鎰取内人即請預、入御鎰櫃之後付封、向宮司申御鎰櫃御封畢申、其後拜八度手兩端、

次各退出次第、幷答拜及荒祭拜如前々、仍不記、次著一殿、座跡上座正親、次中臣、次忌部、次占部也、但中臣祭主叙三品之後上座著、正親次也、於神酒坏者、人別居也、次坏者自上座請下例也、直會饗膳畢之後、正親忌部占部等者退立、其外用手水之後、歸參内院、大和舞奉仕、其次第行事等、如六月御祭之時、直會之時次第又同前、仍不記、但今度宮司舞之時御歌云、

ナガヅキノシグレノアメニヌレテコソ山ノコノハヽウラガヘルラメ

其外皆同于六月御祭之時、仍不記、

抑今度御祭、神馬三疋之内、二疋者引立内院、一疋御鹽所留置、如傳言者、一疋大神宮御料、一疋荒祭宮御料、一疋月讀宮御料歟云云、

件日祭禮、當時勤行之儀式、幷昇殿忌火潔齋之次第、能能可思慮也、御饌直會昇殿以後可觸之、先以清火髮洗行水用新桶可用、件火消、又以清火食物調備、件器皆新用、酢酒茶忌之、但於木酢者可用、餅以忌火不舂者不可用、額付以忌火之飯作之、以澁柹等可付也、又今日借尼服氣之輩女人不入宿館内、諸公事幷書狀書讀忌之、又五辛魚鳥不喰、但鳥風呂七日參籠中忌之、食用畢之後、件火消以清火行水涌、用之後古衣裳不著用、清筵座東帶參向之次第、如六月之御祭勤、但今度四姓參勤也、於玉串行事所手水、先正親、次第用畢後、祭使豐木綿被著、于時正親二座下、祭使一座被立、次忌部豐木綿著、次送官符、錦綾八端(二反、六反、内唐綾一反、)御之由一薦申、神馬當時一疋也、鞍被置、官幣分配之後、宮司豐木綿玉串神宮玉串次第如恒、石壺次第、四姓東西上、祭使一座、先忌部立座引裾、祭使之石壺前石壺進參

荒祭伊佐奈岐月讀宮等ニモ、如此申テ進ト詔給フ、

年號九月十七日

宮司還著本座之後、玉串奉仕如前々、畢後鎰取内人、立座解御鎰櫃封御封申之後、取出御鎰等、正殿御鎰一禰宜渡、東寶殿御鎰二禰宜渡、西寶殿御鎰三禰宜渡也、各請取奉相具官幣等、宮司共參入瑞垣御門内、物忌父等官幣奉持次第、如六月御祭之時、於御寶前奉拜座跡又同前、奉拜之後鎰取内人進參、一禰宜令捧持御鏁鎰嶋押付宮司封古放、向宮司御鎰御封開申破之、其後一禰宜、召大物忌子良、相具母良參、一禰宜相並昇殿、而一禰宜唐鎰御戸鎰目差入、其時子良件鎰懸手歸下也、母良御橋本祗候、相具歸也、其後一禰宜奉開御戸、御鏁鎰幷御鏁抽、高欄東脇平桁上置、鎰取内人參寄、件御鏁鎰取、御階男柱東本北寄、封紙方寸許切、件御鎰嶋押付、又封紙一筋搔、相具墨筆、進寄宮司前、其時宮司封書、先御鎰嶋押付紙、次一筋搔具志氐也、件封御鎰櫃付料也、抑御戸被開之後、傍官禰宜等各昇殿、自殿内取出楊筥、官幣錦綾入奉納、又於御稻御倉、爲神主沙汰、奉織御衣絹同奉納之後、奉閉御戸罷下也、次於御寶前拜、(無手)但拜以前、鎰取内人進參一禰宜之前、彼御鏁鎰一禰宜奉捧持、唐鎰懸忩歸、其後有拜也、拜畢之後、宮司神主各罷下、於一四五六七神主、御寶殿東方瑞垣副向西、以北爲上祗候、至于宮司幷二三禰宜等者、不著座通過、宮司者東寶殿巽方瑞垣副、以北爲上西向著、二禰宜者、奉開東寶殿、三禰宜奉開西寶殿、于時鎰取内人、參兩寶殿前、御戸被付古封、自二三禰宜等之手請取、宮司之前蹲踞、東寶殿御戸御封開、西寶殿御戸御封開申破之、又宮廳目代一人進參東寶殿之前、荷前御調絹宮司進納文讀上、物忌父等拜見員數之後、諸別宮幷宮比矢乃波々木御料分置、其殘奉納、玉串大内人、幷大物忌父、(兄部)各件絹持昇殿奉納、又三禰宜、西寶殿奉納神馬鞍、又宮司自鎰取内人之手請取封紙三筋、書封、(之中)一筋荒祭、一筋東寶殿、一筋西寶殿御戸奉付料也、而於荒祭御料調絹幷封者、彼宮物忌父自北御門參入請取、歸參彼宮、至于其外別宮、幷宮比矢乃波々木御料者、彼祭間奉納外

分進之間行事、如六月御祭之時、其後中臣參寄御鹽湯所石疊副半疊上跪、手一端之後、玉串大內人之手、請取鬘木綿著用之後立本座、于時中臣侍、宣命持參、自後之方中臣奉、中臣請取之後、自後之方正親上立、正親其時立下也、次忌部同進參、手一端之後、從玉串大內人之手、鬘木綿請取著用、次木綿太須岐得懸之後、不歸本列、件石疊副向祭使、隔石橋立也、次三人宮司幷神主等、玉串行事如先々、仍不記、

但參內院之時、忌部官幣錦綾奉置案付、參入八重榊前、御鎰櫃東方並案奉立、其案懸手跪、宣命被讀上之間候也、又神馬、玉串御門東腋向北曳立、其外石壺座次、祭主等以西爲上、正親、次中臣、次忌部座料置、次占部著也、宮司以東爲上著、神主同前也、三色物忌父等西方石壺向東、以北爲上著、次鎰取內人祇候也、中臣立座進參、讀上宣命之後、歸著本座、又忌部退立、中臣次著也、神馬自北御門退出、次大物忌父差笏、以詔刀文宮司渡之後、拍笏一拜、本座歸著、次宮司進參詔刀申、今度狀中、九月神嘗御幣帛被申、又荷前御調絹、由貴御神酒御贄、懸力千稅餘八百稅、如海山被申、其外狀跡如六月御祭、仍不記、但以他本注、

度會ノ宇治ノ五十鈴ノ河上ノ下津石根ニ大宮柱太敷立テ、高天原ニ千木高知テ、皇御麻命ノ稱辭定奉ル、天照坐皇大神ノ廣前ニ、恐ミ恐モ申給ク、天津詔刀ノ太詔刀事ヲ以テ稱申事由ハ、神主部物忌等諸聞食ト詔給フ、皇御麻命ノ大事ニ坐ヒ、大壽ヲ手長ノ大御世ト、湯津石村ノ如ニ、常石ニ堅石ニ伊波比與佐志給ヒ、伊加志御世ニ愼幸給ヒ、阿禮坐皇子達モヲ慈給ヒ、百官ニ仕奉人等モ、天下四方ノ國ノ人民作食ル五穀豐稔ニ慈幸給ヘト、八部國々所々依奉ルレ神戶人夫ヲ常モ仕奉ル荷前御調絹、由貴大酒大贄、懸力千稅餘八百稅ヲ如海山ニ置所足天、大中臣ノ太玉串ニ隱持天、今年ノ九月十七日朝日ノ豐逆登ニ、天津詔刀ノ太詔刀事ヲ以テ、稱申事由ヲ神主部物忌等諸聞食ト詔給フ、

又齋内親王御大盤所御書同前也、但今度饗衣平御厨勤也、

今日神事等、當時勤行之儀式、御巫内人之祓、河原御禊、御稲奉下、如六月十六日勤、但今度在拔穂御稲、又田邊御田沙汰、

一同日、正領御贄事、如六月納、但今度在正領本段別高、納七升宛、升搔渡一斗二升也、而近年以代百文沙汰、減少之儀也、然而當時勤損亡申之條無謂、不可有之事也、今日御贄供進事、各如六月勤、七百文也、

一同夜、由貴御饌、瀧祭神態、櫻宮神態、曉御饌等、其勤如六月御祭時、但曉御饌新米也、仍新嘗祭也、又櫻宮神態在酒肴、櫻御薗勤也、件酒肴魚物等、爲來夜昇殿可斟酌者歟、

一十七日、懸力稲事、正員禰宜各二束内院進、而内物忌父請取、玉串御門左右玉垣懸也、上首御門際也、件稲各自役田三束持參、二束奉懸、一束禰宜爲得分、但二束持參下地在之、又无料田禰宜、以私力令奔走獻之、又服氣禰宜不獻、得分也、忌又同前、

一同朝、御饌直會、又行水竈、國崎篠島御贄等、如六月御祭、

一同夕部、齋内親王御參宮之間次第、又以同前也、但今度宣命被造下例也、官下文也、又四姓使參下也、所謂正親中臣忌部占部等也、今度又神馬三疋也、中之一疋鞍置、又官幣錦綾也、祭使等奉相具官幣幷神馬及荷前御調絹參宮之間、先於祓所祓之後、於官幣等者、奉相具神部等、直參御鹽湯所、祭使々幷宮司等參宮之間次第、如六月御祭時、但今度寮御玉串之間、四姓使々皆一殿南砌留、其外件御玉串次第行事、如六月御祭之時、仍不記、

寮御玉串幷御神拜之後、祭使等各進參御鹽湯所列立次第、正親中臣忌部占部大司權大司少司也、神主答拜、次用手水、先正親、次中臣、次忌部、次占部、次大司、次權大司、次少司也、但於中臣祭主手水役者、權任神主二人勤仕也、至于其外使々幷宮司手水者、山向御鹽湯内人等勤之、次官幣拜見、幷別宮

十八日、外宮御氣殿御裝束事、
內宮大宇符成事同職殿神部勤
瀧宮院豐明神事
廿一日、外宮齋王御幣幷御氣殿御裝束分配事、
〔皇大神宮年中行事 九月〕一十四日、拔穗神事、早旦一禰宜衣冠著、當鄉大少刀禰等相具、御常供田參向、御稻穗奉拔、是來十六日御饌料也、在酒肴、是御神田作丁勤云云、奉仕之後、榊差祝部令捧持、在管門、大宮歸參、
件拔穗神事、當時作法、一禰宜不參者、家子禰宜參、衣冠出納伺丁等從、政所布衣乘馬前陣、於船橋辻西、在直會饗膳、廻飯盛等、菓子五種、必枠實進、勤盃權長、三獻如常、役人等之酒肴、政所之沙汰、肴枝大豆也、其後御常供田參、自所御社前下馬步行、拔穗瀨町坪著座、在鋪設、爲政所沙汰、役人等酒呑、次權長詔刀申、後禰宜穗拔、初三穗也、其後宇治鄉大少刀禰祝部等奉拔之、一擎三伏宛、十八束也、御田等檢見後、祝等御稻榊差捧持、權長警蹕前陣、政所後陣、鳥居經本宮參、於石壺拜、與玉拜荒祭宮遙拜、在手、櫻宮拜酒殿前諸神拜如恒、御稻者御倉奉納、是來十六日御饌料也、○中略
一十五日、荒蝶御贄奉仕事、當日祝部等神崎之御饌所參向、各所漁進荒蝶御饌也、是贄海神事也、而自六月之度之外、无假屋幷饗膳、又於六月度者、正員禰宜參勤、至于九月十二月者、祝部等許參勤仕也、
一同日戌刻、與玉神態、幷御占神事如六月勤、仍不記、但御巫內人之申詔刀申、今年九月ノ御祭、十五日ノ今時ヲ以、與玉ノ廣前ニト可申、又御占詔刀、同九月ト可申、○中略
一十六日曉、玉串大內人參大土社、供御饌於彼神、是新米也、即玉串大內人歸參本宮也、
一同朝、館祓、幷河原祓、及由貴御饌供進次第、同料御稻奉下之間事、直會饗膳等、同于六月度、仍不記、

宣、（禰宜內人等稱唯、）荒祭宮月讀宮（毛同）如此久申進止宣、（神主部共稱唯、）

○按ズルニ、上ノ二ノ祝詞ハ使ノ中臣之ヲ讀ミ、下ノ祝詞ハ宮司ノ讀ム祝詞ナリ、

〔柱史抄 上 九月〕十一日伊勢神嘗祭

宣命（用宣命、无內覽草奏等、）

天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃會度乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱太敷立天、高天原爾千木高知氐稱辭定奉留、天照坐皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申給止申久、常毛奉賜布九月神嘗乃大幣乎、王官位名王、中臣官位大中臣朝臣名等乎差使氐、忌部官位齋部宿禰名加弱肩爾太繦取懸天、禮代乃大幣乎持齋利令捧持氐奉出賜布、掛畏支皇大神、此狀乎平久聞食氐、天皇朝廷乎寶位无動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸倍奉給止恐美恐美毛申給波久申、（本願書曰、或說、禮代御幣乎令捧持天奉出賜布皇大、又說、禮代乃大幣乎持齋利奉出給、持齋二字、餘社無此二字、）

年九月十一日

口傳云、件宣命不草奏、若有辭別者、只奏其草、

〔神宮雜例集 二〕年中行事

九月十五日以後至廿五日、二宮神態如六月、（內宮今月无贄海神事、外宮增于六月事注之、）

外宮織御衣（布一疋、御調布二端、）調進事（各六尺）

御氣殿御裝束請文上司廳事

離宮院御氣殿御裝束奉下事（伊賀神戶所濟、到來之日奉納御倉、當日奉下之、物忌請之、）

大祓事（如六月）

十六日、凌晨外宮拔穗供奉事、（一禰宜奉御饌供奉後、供朝御饌、）

朝夕御饌箕造奉竹原、幷箕藤黑葛生所三百六十町、在伊賀國名張郡、亦朝夕御饌供奉年魚取淵梁作瀬一處、亦御栗栖二町、在伊賀郡、右五處此伊賀國造等之遠祖奉地、注顯如件、

〔延喜式四伊勢大神宮〕九月神嘗祭〇中略

右月十六日祭度會宮、十七日祭大神宮、禰宜大內人各著明衣、分頭左右、宮司立中、次使忌部捧幣、次馬、次使中臣、次使王、入就內院版位、使中臣申祝詞、訖亦神宮司宣祝詞、餘儀同月次祭、

〔延喜式八祝詞〕九月神嘗祭

皇御孫命御命以、伊勢能度會五十鈴河上爾稱辭竟奉流、天照坐皇大神能大前爾申給久、常毛進流九月之神嘗乃大幣帛乎、某官某位某王、中臣某官某位某姓名乎爲使氐、忌部弱肩爾太繦取懸、持齋波理令捧持氐進給布、御命乎申給久止申、

豐受宮同祭

天皇我御命以氐、度會能山田原爾稱辭竟奉流、皇神前爾申給久、常毛進留九月之神嘗能大幣帛乎、某官某位某王、中臣某官某位某姓名乎爲使氐、忌部弱肩爾太繦取懸、持齋波理令捧持氐進給布御命乎申給久止申、

同神嘗祭

度會乃宇治能五十鈴乃川上爾大宮柱太敷立氐、高天原爾千木高知天稱辭竟奉留、天照坐皇大神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎、神主部物忌等諸聞食止宣、禰宜內人等共稱唯

天皇我御命爾坐、御壽乎手長乃御壽止、湯津如磐村、常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比、阿禮坐皇子等乎毛惠給比、百官人等、天下四方國乃百姓爾至萬天、長平久護惠美幸比給止、三郡國國處處寄奉禮留神戶人等能常毛進留、由紀能御酒御贄懸稅千稅餘五百稅乎如橫山久置足成天、大中臣太玉串爾隱侍天、今年九月十七日朝日豐榮登爾、天津祝詞乃太祝詞辭乎稱申事乎、神主部物忌等諸聞食止

一供奉始事

大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四ヶ條內、朝夕御饌條云、皇大神宮倭姬命戴奉天、五十鈴宮爾令入坐々鎮理給時爾、大若子命乎大神主止定給天、其女子兄比女乎物忌定給天、宮內爾御饌殿乎造立天、其殿爾爲天、拔穗田稻乎令拔穗拔天、大物忌大宇禰奈止共爲天、令舂炊奉始支、又御酒殿乎造立、處々神戸人夫進、神田以稻神酒作天、先大神供奉、次倭姬命奉、殘者仕奉物部人等給支、其時御船乘給、御膳御贄處定幸行、島國々埼島鵜倉憶柄等島爾、朝御饌夕御饌止詔而、由貴潛女等定給氐還坐時、神堺定給支、戸島志波埼佐加太伎島定給而、伊波戸居而、朝御饌夕御饌處定奉、然倭姬命御船留而、鰭廣魚、鰭狹魚、貝滿物、息津毛、邊津毛依來、爾海鹽相和而淡在支、故淡海浦止號支、伊波戸居島名、戸島號支、波刺處名、柴前號、從其以西乃海中爾在七箇島、從其以南海鹽淡甘支、其島乎淡良伎之島止號、其鹽淡滿浦名乎伊氣浦號久、其處參相天、御饗仕奉神乎淡海子神止號久、社定給支、其處乎朝御饌夕御饌島定支、還行幸其御船泊留在志處乎津長原止號支、其處爾津長社定給支、自爾以來、大神主爾仕奉氏人等、以女子乃未夫婚、物忌止爲天令供奉、

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉朝大御饌夕大御饌行事事

御贄清供奉御橋一處、長十丈、弘二尺、高八尺、石疊一處、方四尺、大神宮正南御門在伊鈴御河、當此御門流二俣也、此中島爾造奉石疊、常造宮使勞作奉、此止由氣大神乃入坐御坐也、御橋者度會郡司以黑木造奉、三節祭別禁封其橋、人度不往還、則齋敬供奉、十六日夕大御饌、十七日朝大御饌爾、並御笥作內人造奉御贄机爾、忌鍛冶內人造奉御贄小刀乎立氐、志摩國神戸百姓供進鮮蚫螺等御贄乎、御机上爾備置氐、禰宜內人物忌等、御贄御前追氐持立氐、開封御橋氐參度氐、止由氣大神乃御前跪侍氐、則御河爾清奉氐御膳料理畢、則如是持氐御贄前追氐、天照皇大神乃大御饌供奉、細子用物行事月記具顯、

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉朝大御饌夕大御饌料地祭物本記事

罷出氏受氏、轉親王奉、卽親王手拍受氏、卽內親王自發、內玉垣御門就座席、（命婦又從之）卽避席進前、再拜兩段、訖卽命婦一人進受太玉串、轉授大物忌子、卽大物忌子受立瑞垣御門西頭進置、卽親王還本席坐、畢卽山向物忌作奉太玉串乎大神宮司給、次禰宜給、次宇治大內人給、畢先禰宜前左立、次宇治大內人右立、次大神宮司、次忌部幣帛捧持立、次御馬、次驛使中臣、次王、次內人等、次齋宮諸司等、（但齋宮諸司者、板垣御門內分頭侍、）如是立列參入、然到第三重就、訖、從版位一丈許進、忌部大幣帛捧跪侍、卽驛使中臣進版位、跪告刀申、畢就本座、次大神宮司進版位、跪常例祭告刀申、畢卽禰宜召大物忌父、宇治大內人立氏、宮司乃太玉串乎給、返本座侍、大物忌父給、卽受御門東頭進置、本座還侍、卽宇治大內人立、禰宜捧持玉串受、本座還侍、禰宜卽召宮守物忌父、玉串受、御門西頭進置、卽本座還侍、禰宜卽召地祭物忌父、宇治內人玉串四枝受、御門東頭進置、還本座侍、卽宇治大內人捧太玉串、自立御門西頭進置、還本座侍、禰宜先立、御鎰大物忌子持氏前率立氏內院參入、次宇治內人、次大神宮司、次大大內人參、持物波、忌部乃進置留朝廷幣帛、幷御馬鞍具、然禰宜開正殿氏、幣帛物奉入畢、次織御衣服、此禰宜仕奉織御衣絹二匹、又宇治內人織御衣絹一匹、次大物忌父、開東幣帛殿、御馬鞍具進上畢時、罷出氏到付本座、訖卽諸刀禰等共四段拜奉氏、八開手拍、卽短手一段拍氏一段拜奉、又更四段拜奉氏、八開手拍、次短手一段拍、一段拜奉、畢卽罷出氏、向荒祭宮氏、四段拜奉、短手一段拍、拜奉畢、（但親王不向荒祭宮給）卽驛使幷齋宮諸司等、皆悉就食座、但禰宜內人等波、荒祭宮正殿開氏、朝廷幣帛、幷神衣絹一匹進上、畢卽還氏大直會被給、畢後手一段拍、更發第五重御門參入就座、卽進第四重、倭儛仕奉、先勅使中臣、次使忌部、次王、次大神宮司、次禰宜、次大內人、次齋宮主神司、次諸司等、其直會酒波、采女二人、第四御門東方侍氏、御角柏盛氏、人別捧給、然男官儛畢、卽禰宜大內人等加妻儛、次齋宮女孺等儛、畢卽禰宜內人物忌等仰祿賜氏、卽內親王御輿離宮還坐、

〔神宮雜例集一〕二所大神宮朝夕御饌事

神嘗祭供奉行事

以十五日、先二神郡所々神戸人夫等加所進榊爾、木綿作內人乃作奉禮留木綿、幷大神宮司乃所進留木綿乎以氐宮飾奉畢、志摩國神戸人夫等所進湯貴御贄、又度會郡諸鄕百姓等所進雜御贄、禰宜內人物忌父等、志摩國與伊勢國神堺島村々罷行氐漁雜御贄物等、御鹽燒物忌乃燒進留御鹽等乎、禰宜內人等悉進集、自宮西川原爾大贄乃淸乃大祓仕奉、幣帛殿爾進納畢、卽供奉御饌、以同日夜亥時、御巫內人乎第二門爾令侍氐、御琴給氐請天照坐大神乃神敎氐、卽所敎雜罪事乎、自禰宜館始、內人物忌四人館別解除淸畢、卽禰宜內人物忌等、皆悉自宮西川原集侍氐、先向神宮、人別罪事乎明申、畢卽向川御巫內人解除告刀申、畢皆悉率正殿院參入掃淸奉、畢卽罷出之、宇治御田苅拔穗稻乎、大物忌宮守物忌地祭物忌荒祭宮物忌幷四人爾、自御倉下宛奉、御笥器忌鍛冶內人作忌小刀、陶內人作奉陶器、土師內人作奉器、御鹽燒物忌燒備奉御鹽等乎、已上種々物忌等爾下宛奉、又志摩湯貴本御贄、種々下宛奉、上件器盛滿氐、內院御門爾持參入氐、亥時始至于丑時、朝御饌夕御饌二度供奉畢、亦酒作物忌乃白酒作奉、淸酒作物忌作奉黑酒、幷二色御酒毛、大御饌相副供奉畢、次根倉物忌乃仕奉禮留神酒供奉、畢卽四段拜奉氐、內院御門閉奉氐、外院罷出、禰宜內人物忌等、大直會被給、畢倭儛仕奉畢歌詠、六月祭大御饌歌同、

以同夜（○夜字下恐脱荒祭二字）瀧祭行事

右祭、大神宮御饌祭同、直會人給畢、但禰宜宇治內人新稻酒飯食始、但不爲儛、

十七日辰時、國々所々神戸人夫等所進神酒、幷御贄等乎自御厨奉入、次二箇神郡幷國々所々神戸所進懸稅、幷神服織神部等所進懸稅乎、內外重玉垣懸奉畢、

以同日午時、齋內親王參入坐、川原御殿爾御輿留氐、手輿坐氐、到第四重、東殿就御座、卽大神宮司御蘰木綿捧、向北跪侍、內侍罷出氐受氐、轉親王奉、卽親王手拍受、宮司又太玉串捧持、向北跪侍、又內侍

正道石疊並雙分頭跪侍、東一使王、次中臣、次大神宮司、次禰宜等、大物忌波率諸物忌等、夾氏〇波夾忍第二御門西方列侍、大内人幷物忌父小内人等波、西玉垣御門内東向列跪侍、齋宮諸司等波、第三御門東西分頭跪侍、爾時使中臣登上版位、幣帛告刀申、告刀畢、即大物忌父發、大神宮司幷禰宜乃所捧持留太玉串乎受取氏、第二御門内方進置、先大神宮司東方、次禰宜西方、然即禰宜發、御鎰被給氏、大物忌乎前率立氏内院參入、次大神宮司、次大内人等參入、此大内人等持參入物、朝庭奉進幣帛一宮絹一匹、糸一屯、又大神宮司進御衣料絹二匹、五色料絹一匹、禰宜織奉織乃大神御衣絹二匹、又御馬鞍一具受、大神宮司波内院御門内跪侍、禰宜波正殿乎開奉氏、件幣帛進入、大内人波西寶殿開氏、御馬鞍調度進上、畢即閉殿戸罷出、先大神宮司、次禰宜、次大物忌、次大内人等、皆悉罷出氏就本版位、即諸刀禰等共發、四段拜奉氏、八開手拍、次短手一段拍氏、一段拜奉、又更如上拜拍畢、即罷出、先使王、次中臣、次忌部、次大神宮司、次禰宜、次大内人等、如是罷出氏、向高宮、四段拜奉氏、短手二段拍、一段拜奉、但内親王不向齋宮、畢即始使幷齋宮諸司等、及至于諸番上、皆悉就直會殿給。大。直。會。先短手二段、先大神宮司幷齋宮主神司、次驛使已下、齋宮諸司已下、次諸司番上已上幷諸刀禰等被給畢時、後手一段拍、附二箇郡歌人歌女等、板垣内西方參入氏、先御饌歌仕奉、次伊勢歌、次儛歌仕奉、然更大神宮司、驛使幷齋宮諸司官人等發、第三御門參入就座、即倭儛仕奉、先幣帛使中臣儛、次忌部、次使王、次大神宮司、次禰宜、次大内人、次齋宮主神司、次諸司官人等、其直會酒波、釆女二人東方侍氏、御角柏留盛氏、儛畢人別捧給、但齋宮不坐時、禰宜内人等妻子仕奉、然男官儛畢時、禰宜内人等妻儛、次齋宮釆女等五節儛畢、即禰宜内人物忌等留祿給、禰宜大物忌儛人幷三人、各御衣一領、大内人三人、各調布一端、小物忌五人、各綿一屯給畢、則内親王御輿從宮還坐、然後夕時更禰宜内人等御酒殿院侍氏、後直會仕奉、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

九月例

神嘗祭供奉時行事

以十五日、先所々神戸人夫、并二箇神郡郷々人夫等所進榊爾、木綿作内人乃作仕奉留禮木綿、并大神宮司乃所宛奉留木綿乎以宮飾奉、然志摩國神戸人夫等所進雜贄、又度會郡郷々人夫乃所進雜御贄、又禰宜内人等戸人夫乃、志摩國與伊勢國神堺島々爾罷行氐仕奉留禮雜御贄、又御鹽燒物忌乃仕奉留禮御鹽等所進畢時、即禰宜内人等、皆悉自宮北河原罷出氐、大贄乃淨米乃大祓仕奉、然湯貴備奉所爾持參入氐、所々乃枝神爾分奉氐、大物忌父御炊物忌父御巫内人等、御井爾參向氐、祭仕奉畢氐、更内院御門爾持參入氐、御炊物忌父加造奉留禮御竈、并陶土師内人等我造奉留禮器爾盛滿氐、始亥時至于丑時、朝乃大御饌夕乃大御饌、二度間置供奉、次大物忌父我佃奉留禮拔穗乃御田稻乎、火無淨酒造奉氐仕奉、次大神宮司乃所宛奉二箇神郡人夫乃所進庸米乎、火向神酒造奉氐供奉、次根倉物忌乃作仕奉留禮御酒供奉、畢即四段拜奉氐、内院御門立奉氐、外院罷出氐、禰宜内人物忌等大直會被給、此時禰宜大物忌二人、新年飯酒食始、

以十六日朝、國々處々神戸人夫等所仕奉御酒并御贄等乎、自御厨奉入、次二箇神郡國々處々神戸所進懸稅稻乎、千稅餘八百稅爾懸奉、其奉時、禰宜太玉串捧持氐、懸稅先立參入、大内人大物忌父等、并戸人夫等、懸稅稻乎百八十荷持參入氐、拔穗稻波乎内院持參入氐、正殿乃下奉置、懸稅稻波乎玉垣爾懸奉、爾時齋内親王參入坐、到板垣御門氐、御輿留氐、手輿爾移坐氐、參入坐、到中重殿就御座、即大神宮司御蘰木綿、并太玉串乎捧持氐、第三御門内爾候、即命婦罷出氐、其御蘰木綿、并太玉串乎受取氐、内親王乃御在所爾持參入候侍、爾時内親王御蘰木綿奉氐、發内重御門爾參入坐氐就席坐、即命婦乃捧持留太玉串乎受取給氐、捧持氐四段拜、然即還罷出給氐、就本座御座、爾時菅裁物忌父造仕奉太玉串乎、禰宜捧氐大神宮司爾給、司短手一段拍受、次禰宜母被給氐、共發氐列立、先禰宜、次大神宮司、次忌部捧幣帛立、次御馬、次使中臣、次使王、次大内人等、次齋宮諸司等、如是立列參入、然到中重就

祓參宮了、

〔大神宮司神事供奉記〕一延應二年〇仁治元年九月十五日、〇中略同夕大祓神事、齋王御著離宮院、寮官供奉、幣使總官御供奉云云、權大司一人參也、

〔祭式錄上〕一小畑著　五ッ時

次ニ旅具取置、潔齋後、御幣櫃與兵衞ト兩人シテ蓋取リ、御幣ヲ薦ノ上ニ置、中成白丁等取出し、ゑふは眞雑へ返す、〇中略

次ニ小畑出立、四ッ半、

次ニ藤波家より案内來ル事、次ニ宮川へ進ム、

與兵衞　官幣(山田役人侍　右同斷侍)　官幣　衞士乘物(侍)　忌部(侍)(履持　笠持)　王使(侍)(履持　笠持)

一宮川

次ニ船ノ乘場前にて下乘、履ニテ舟へ行事、

辛櫃ニ付添、船へ忌部衞士守護致ス事、

則與兵衞履物持同船ニ置事

次ニ此方ハ川下へ進ム

次ニ官幣ハ藤波家被進候迄ハ、片ニ置ながら相待事、

王使ハ別ノ舟ニ乘也、尤籠也、

次ニ右之圖〇圖今略之通リ、衞士之座辛櫃ニ向ふ、左手脇也、次ニト部御幣物を祓、次ニ藤浪王使忌部宮司衞士祓被申候而、又本ノ座へ被歸候迄追付退出、直ニ白丁呼、御幣を進マス、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

九月例

〔延喜式伊勢大神宮四〕凡三時祭者、謂六月、九月、十二月、〇預前一月晦日爲祓所須各馬一匹、鍬十三口、麻十三斤、祝史料商布一段、

〔延喜式左右馬寮四十八、〕凡年中諸祭祓馬者、〇中略九月伊勢大神宮神嘗祭二匹、〇中略並覆奏以放近都牧繫飼馬充、自餘所用、臨時聽處分、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

八月例

依九月祭供奉事、禰宜內人等皆悉參集、與大神宮司共、度會川臨晦大祓仕奉、然御厨大饗給、

〔止由氣宮儀式帳〕二三節祭等幷年中行事月記事

八月例

將來九月祭爲供奉、禰宜內人等皆悉大神宮司共參集、臨度會河晦大祓仕奉、然御厨大饗給、

〔皇大神宮年中行事八月〕晦日、除當番禰宜之外、爲大祓供奉參離宮院也、

〔大神宮司神事供奉記一〕延應二年仁治元年〇八月廿九日、晦祓神事、權大司良國、少司長則、內七禰宜永光、外五禰宜維行參、神事如例、饗膳於外九丈殿用笠事成了、

〔延喜式齋宮五〕凡齋內親王參祭之祓、國司目已上名簿、在前移齋宮令卜、其最合者一人祗承、其三時祭、月十五日、大祓處申刀禰數、祗承官五位已上令史生申、六位已下自申、

〔大神宮諸雜事記一〕長和二年九月、祭使王從四位下行神祇伯秀頼、中臣祭主從五位上行神祇大副大中臣朝臣輔親、忌部正六位上齋部宿禰春光、卜部兼光等也、卽依例以十五日到著於離宮院、大祓直會了、

〔大神宮諸雜事記二〕康平三年九月、祭使王延清王、中臣權少副公輔朝臣等也、齋內親王以今月九日、下坐於御汗殿給、任例過七日後、十六日直道參宮、但以申時天離宮乃大祓所御輿寄供奉、諸司共御

九月朔日神事入用之事

同日朝五ッ時、小堀家ヘ雑用之寫切紙差出シ申置事、

覺

一貳貫四百七拾貳匁七分貳厘　藤波家　一七百拾貳匁九分八厘貳毛　使王代

一七百拾貳匁九分八厘貳毛　忌部　一五百四拾八匁三分九厘貳毛　衞士

一三百貳匁壹分壹厘壹毛　(御幣持)(同)

以上

・如此杉原巻紙ニ認持參ス

〔伯家部類〕例幣之事

神祇官

差進例幣之使之事

中臣正三位大副大中臣朝臣景忠

忌部從五位下齋部宿禰親尙

ト部從五位下ト部朝臣永淸

神部肆人

右依宣所差進如件

元祿八年九月十一日　從五位下行權大祐忌部宿禰光久

〔延喜式五齋宮〕九月神嘗祭使

右尋常之例、十一日參入、而當齋王參入之時、卽陪從參入、其幣幷明衣料與尋常同、更差使中臣一人、遣近江伊勢二國、在前祓淸、

之號、可被處流刑云々、本宮又闕神事、雖歎申、不蒙御裁許、剩享德三年新年祭之時、以兼種可被遂行神事之旨、爲左大辨奉行被仰下之由、二月十九日、祭主清忠雖被下知、神宮不致承知者歟、其後例幣使每祭雖被下向、於兼種之一流者不被致參向、此時吉田神主卜部兼名居本宜、支申兼種昆弟之所行之隨一歟、前覆未遠、可存後誡之處、後土御門院御宇延德元年、兼名之息男兼俱卿、大神宮御神體降臨于吉田山之由掠申天聽、貪貴賤參拜之幣物歟、仍二所大神宮之禰宜等一同闕支申之、自延德三年七月十二日一社奉幣之時、於卜部之一姓者、不被從當宮神事、然後自永祿至寬永、吉田神主之參向雖及數遍、祭主神宮一同闕依拒之、每度自二鳥居被退去云云、仍去寬永廿年十月廿三日、當君〇後光明踐祚由奉幣之時者、卜部依不被下向、無神事之違亂被遂行次第行事者也、然而今度〇正保四年吉田神主、可從本宮神事之由、於京都被致愁訴云云、仍去八月廿八日祭主消息云、自先年不付申神事子細、神宮傳奏被尋下云云、件一通今月五日到來、禰宜各被披見云、當時於京都、祭主吉田訴論之由覃風聞矣、然處從神宮陳鉅細之段、可有後勘歟、又吉田神主雖被從神事、何子細可有之哉之旨、各被申之、於神慮納受之有無者、最雖叵測、於累祖數代之素意者、各被廢忘者歟、抑上代者依大神宮勸請之咎、蒙尊神之許得、違勅之罪豈在之者哉、上件子細今度雖無注進、如寬永廿年由奉幣之時、吉田神主不被參向也、嗚呼世雖革澆季、日月未落于地、爲神宮之器、誰不仰神明之道勅哉、爲本宮之職、誰不守朝家之憲章哉、莫言莫言、

〔正德年中行事九月〕十一日例幣　使王、むかしは王氏より此使をつとめられしなり、近世は王氏といふひとなし、依之當時は川越兵庫頭從五位下源兼網此代りを務む、よつて是をば王氏代といふ、忌部、此氏今たえてなし、よつて當時は眞繼宮内大丞從五位下紀□弘つとむ、是を忌部代と云、卜部、今は神祇官代まで參向、昔は勢州へも參向せしかども、卜部氏にかぎりて、參向する事なりがたきよしなり、中臣、祭主なり〇中略　伊勢へ參向する人々、祭主、藤波家　使王、忌部、以上前に見えたり衞士一人、藤井氏のもの

〔祭式錄上〕勢州例幣使參向之事

也、此尤宮司忍人不忠之所致也者、宮司為方通陳、且進怠狀、且辨返替馬、已畢、自爾以後、勅使參宮之間、時宮司以騎用馬、以四疋奉貸也、即立為恒例也、

〔類聚符宣抄 一〕神祇官

請以散位正六位上齋部宿禰友則令供奉伊勢大神宮當月神嘗祭奉幣使忌部事

右件神嘗祭奉幣使齋部官人所供奉也、而今無有彼氏官人、望請以件友則將令供奉件奉幣使忌部、謹請處分、

安和元年九月三日　少史兼春宮宮主卜部兼延

少祐兼宮主直氏茂

中納言橘朝臣好古宣、以件友則宜令供奉者、　權少外記鴨連量奉

〔大神宮諸雜事記 二〕永承七年九月、御祭使王成清王、中臣少祐公軋等也、抑祭使依去五月六日大赦赦免、祭主永輔朝臣不被免下之由云云、而大神宮神主等之愁云、皇大神宮異於天下諸社也者、以會赦人未令供奉祭庭也者、依件奏狀所不被下也、

〔勅幣中興記 中〕當宮幣使、稱四姓官人者、所謂王使中臣忌部卜部等也、恒規臨時之御幣帛奉送之時、各隨順番到于本宮、被勤仕其役者承前之例也、爰卜部之氏族被從本宮神事之儀、延曆儀式帳幷延喜神宮式等(略)不被載之、每度官下宣命之詞(略)、雖被錄王氏中臣忌部等之官位姓名、於卜氏者不被載下之、於本宮又無所役者也、愚案上代者、三所役人被參勤歟、然而寛弘長和以降之記文(略)、卜部從本宮神事之由錄之歟、近代又本宮本官等令擯出彼一姓、不令許容祭庭供奉之儀也、予以管見案之、後花園院御宇享德元年、外法之輩、或稱降臨、或號託宣、恣令勸請大神宮於都鄙、致造立社壇於閭巷、號今神明、而誑貴賤緇素之心歟、此時卜部宿禰兼種為副官之器、不愁本宮之衰弊、以舍弟兼孝補聚田口神明神主職、是以本宮各捧連署解狀、以舍兄兼種被停止神祇之召名、於舍弟兼孝者、被放卜氏

久爾、公民安穩爾、護幸給倍止恐美恐美毛申給者止久申、

元治元年九月

右以藤丸伺、伺之通被仰出、柳原殿御申渡候、

十一日、頭辨被附、

例幣發遣、幷兩大神宮奉幣使發遣、上卿右大臣、參議左大辨宰相、辨俊政、

總而具之旨奉行言上、散狀獻上可被始陣、直出御之旨、以藤丸被申出、奉行申渡候、

奉幣兼賽宿禱

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年九月十一日甲申、遣使者於伊勢大神宮、奉例幣、兼賽宿禱、告文曰、天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立、高天乃原爾千木高知天、皇孫乃尊乃稱辭竟奉留、天照坐大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜止申久、常毛奉留九月乃神嘗乃大幣帛乎、王大監物從五位上興我王、中臣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道乎差使天、忌部神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善加弱肩爾太襁取懸持齋波利令持捧天奉出賜布、此狀乎聞食天、天皇朝廷乎寶位無動久、夜守日守爾護助賜陪止申賜波止久申云云、

上卿奉幣

〔西宮記九月〕天曆四年九月十一日、天皇不御八省院、依例發使、太上皇〇朱雀依在位時御願、神寶幣物等付召使令奉彼宮、但今日差院司、就八省廊令付使乎、小一條記

祭使

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡神嘗祭幣帛使、取王五位已上卜食者充之、

〔延喜式十一太政官〕凡九月十一日、行幸八省院、奉幣於伊勢大神宮、其使者、太政官預點五位以上王四人、卜定、用卜食者一人、大臣奏聞、宣命授使王、共神祇官中臣忌部發遣、事見儀式、

〔大神宮諸雜事記一〕天平寶字二年九月御祭使祭主清麻呂卿參宮之間、度會川之浮橋船亂解天、忌部隨身之上馬一疋、自船放流斃亡已畢、爰上下向之間者、路次國司差祇承迎送、調備供給、進夫々馬、令修造道橋等之例也、於神郡者、偏宮司之勤也、而件浮橋之勤、依不有如在、勅使隨身之馬者所斃損

事久、兆民安堵爾、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸給倍止恐美恐美毛申給者久止申、

文久三年九月

右以藤九伺、伺之通被仰出申渡候、

元治元年九月七日、三社奉幣、甲子例幣等辭別宣命草之草四通、頭弁被伺、

天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立天、高天原爾千木高知天、稱辭定奉留、天照坐皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申給者久止申久、去七月不意毛禁門近久干戈乎動乃災起天、民屋多燒亡比、武士者東西爾亂走利、公民者遠近爾奔逃禮、殊爾蹂躙奴留乎深久御意乎令惱比加之、不日毛靜謐爾成奴止、叡慮猶毛不安給須、彼周防長門乃凶徒等乎掃鎭給牟止所念、然爾又戎虜乃來寇須止聞食須、彼止云比、此止云比、皇國乃患難此爾至者、朕不德乃所招加止甚夜無間久憂念恥歎給布、如此禍乎攘除古止者、人力乃所不及奈利、掛畏岐皇大神、早久神威乎播天、拂退銷滅給比、天下乎安國止平給比治給牟事乎仰祈伏禱給布、故是以吉日良辰乎擇定天、王位姓名、中臣官位姓名等乎差使氏、忌部位姓名加弱肩爾太襁取懸天、金銀乃御幣乎令捧持天奉出給布此狀乎平久安久聞食天、縱時世乃禍亂奈利止毛、速爾武久嚴岐靈驗乎垂給比、戎夷凶徒乎攘退鎭壓給天、自今已後、國乃災害民乃憂患乎、皆悉久未萌乃外爾攘除給天、四海平久、公民安久、寶祚延長爾、武運悠久爾、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸愷給倍止恐美恐美毛申給者久止申、

元治元年九月

辭別氏申久、今年者甲子乃紀爾當氏、深久愼御須倍岐年奈留者、皇大神乃御助爾依氏、禍乎攘除給牟事乎、去年者恒例乃幣乎捧留爾附氏此由乎申奉利、今年波常爾毛志無岐使乎差遣氏、殊爾祈奉給比岐、掛畏岐皇大神、此狀乎平久安久聞食氏、廣岐厚岐冥助乎垂給比、夷賊等乎千里乃外爾攘退計、天下太平爾、四海無事久、風雨順時比、萬穀豐登爾、國憂民患乎攘除岐、更爾神澤乎垂給比、寶祚悠

天照坐皇大神能廣前爾恐美恐美毛申給者止久申久、常毛奉賜布九月神嘗能大幣乎、王從五位下彛夏王、中臣正四位下行神祇權大副大中臣朝臣秀忠等乎差使氏、忌部從五位下行神祇權少副齋部宿禰親雄加弱肩爾太繦取懸氏、持齋者利令持捧氏奉出賜布此狀乎、平久安久聞食氏、天皇朝廷乎寶位無動、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸奉給倍止恐美恐美毛申給者止久申、辭別氏申賜者止久申久、可曆推遷行氏、今年當甲子邊利、況又天告變氣、地頻震動利、谷徹匪一須、恐懼旁多志、禍者福能階志、妖者德能本奈利、時變喩比可競來登毛、神明爭加無應護乎、掛畏支皇大神此狀乎重而聞食氏、玉體安全爾、寶算延長爾志氏、天下有截爾、海內無事爾、護恤給倍止恐美恐美毛申賜者止久申、

文安元年九月十一日

今日例幣、右頭中將公綱朝臣令奉行給、兼日申沙汰也、依未拜賀、當日之事左中辨被申沙汰云云、外記御訪、自大藏省可口判官員弘許、今日且百匹到來、後日八百六十五文到來、於百卅文〇卅下恐脫五字者、爲武家奉行方酒直料、各引取之間不足者也、

〔議奏言渡〕文久三年九月七日、頭左中辨被寬宣命辭別草之草、

辭別氏申久、明年者甲子爾當利氏、深久可愼御岐紀奈利、既爾過志辛酉乃年多毛爾厄運乃禍乃有牟止加重久懼利給比志加、皇大神乃著明支擁護爾依氏、五畿七道乃外萬毛氏天乃災奈久、地乃妖奈久、未然爾攘給比岐、庶幾者今興利後毛、風雨者時爾順比、五穀者豐穰爾、國富民給志免給倍止奈牟所念行、抑亦近年夷狄乃漫爾猖獗奈留乎如何爾也世牟止、夜止無久晝止無久忘禮不給、故是以守禦乃備乎設計、拒絕乃期乎毛定給比志、猶毛人心難一致志、如此形勢乎考留爾、水舟乃親乃不足加、亦者將吏義兵乎發須期乃未到加、皆此朕乃不德乃所招止、愈宸襟乎令惱給布、仰願者皇大神、此狀乎平久安久聞食氏、國人同志志、速爾攘夷乃成功乎八紘乃外爾顯志揚計、覬覦乃念乎萬世乃末爾令絕給氏、上者皇祖爾耻給布止古無久、下者萬民乃憂毛無久、厚助深恤乎垂給氏、猶末遠久寶祚長久爾、宇內泰平爾、神州無

當間、(居龜)次光朝例幣可被奉行給之由申之、(微音)次主人令氣色給、次光朝退入、例幣宣命辭別、神宮御錄度々造替事可載之由被仰下、卽今夜書進御宜、

文永四年九月九日宣旨

大神宮御錄度々造替事、雖爲自然違失、猶口神慮難測、宜令載宣命辭別、

藏人皇后宮權大進藤原光朝(奉)

如此書御宜進入、奏進之、辭別當日於陣下上卿常事歟、然而今度如此、且上卿可爲此儀之由被仰下云々、口宣先内覽、次以親長進内府、

〔康富記〕文安元年(甲子)〇九月十一日丁亥、例幣也、甲子幷地震世上浮說等事、被載辭別、仍有陣、上卿德大寺中納言公有卿參著仗座、職事左中辨俊秀進軾、下辭別折紙、仰宣命事、次上卿召少内記代權少外記康顯下辭別、仰可草進宣命之由、内記退、次外記康顯參小庭中、使王御馬事、上卿目許退、次内記代入宣命草於筥蓋持參、上卿披見、起座就弓場代、以職事被奏之、被返下時於弓場前、取替淸書之宣命、又奏聞卽被返下、上卿直被參神祇官、外記史同參本官、史盛時雖參陣、無殊所役事、本官儀如例、先外記令置式筥上卿座前、(北門下也)上卿召辨、被問幣物具否、權右中辨敎忠(藏人)參承之、次召外記康顯被問諸司、次被仰使王御馬事、外記退、次仰可持參宣命之由、少内記代康顯持參宣命、(納筥)上卿辨外記史著東舍代座、(上卿辨東上南面、外記史北上東面、)發遣如例、王氏中臣卜部齋部内侍等皆參、官掌可尋之、召使行寬參之、史盛時也、今日分配予也、雖然召進康顯者也、及曉天發遣、御拜在之、藏人左中辨申沙汰也、兼日奉行新頭中將公綱朝臣也、未拜賀也、

甲子之厄、其愼不輕之處、地動之異、其兆是重之由、司天奏言、滿衢浮說、雖致小心於翼翼、企仰大神之明明、兵革長治、邪僻之族歸政化、玉體彌穩、衆庶之民歌仁風、宜令載宣命辭別矣、天皇(我)詔旨(度)掛畏(支)伊勢(能)度會(能)五十鈴(乃)河上(能)下津磐根(爾)大宮柱廣敷立(天)高天原(爾)千木高知(天)稱辭定奉(留)、

事也、又被副左右馬寮御馬各二匹、

〔日本紀略 後一條〕長元四年九月十一日丙辰、例幣、(辭別年穀御祈)

〔中右記〕大治四年九月十一日、例幣、上卿藤大納言、(○藤原實隆)行事右少辨師俊、宣命有辭別、天變由云々、抑使王乙下合者、行兼參入、俄依上卿仰丙合者、正親正致清王勤仕之間、依時服不叶遲遲、日漸暮、申時使立、使祭主三位公長卿、忌部明友、卜部兼時云々、主上(○崇德)於南殿有御拜、中將宗能取御劔前行、殿下(○藤原忠通)令候給、

長承元年九月十一日、例幣、上卿右大臣(○源有仁)行事左少辨公行、去月彗星事、地震事、被載宣命辭別云云、使祭主三位、

〔山槐記〕應保元年九月十一日庚辰、申刻向藤大納言宗能亭、次參內、爲奏例幣宣命、大納言殿(○藤原忠雅)令候仗座給、藏人頼保曰、依召參陣座、大納言殿令奏宣命辭別給、頭辨被申送云云、有三箇條、

一去年大神寶欲奉納之處、御戸不令被開給事、

一去八日依御薬奉幣諸社、依爲例幣以前、不被奉幣事、

一大神宮怪異事

職事進仗頭、須宣下事也、而頭辨有病者不出仕、藏人少納言所勞、藏人大輔怪異辭別可仰下也、而件人少兒夭亡、雖七歲以前、嚴重神事有猶豫之心云云、去夜其旨觸予、(○藤原忠親)理之所推、全不可及憚、背法條何有其憚哉、然而予少兒去比同以夭亡、以同事雖請取他人奉行事、仍返送了、其後以消息內々獻上卿云云、此事如何如何、宣命以六位藏人令奏聞給、

〔吉續記〕文永四年九月九日、例幣、藏人皇后宮權大進奉行、內大臣殿(○藤原家經)令奉行給、家司高朝參、儲光朝雲、奉行給之由申之、高朝歸出仰開食之由、次之內府(直衣)出御、以長顯朝臣被召光朝、(御奉行家司高朝可被召職事之處、高朝早出之間、以長顯朝臣召之、高朝今日事爲奉行身、逐電之條不可然、不辨出御之儀也、)光朝入中門、當御眼路蹲居、主人目給、光朝參進候、

紀傳兩文章博士、明經博士、明法兩博士、別勘文人等候歟、此勘文、於算道者不可被召候歟、可被伺申給、恐々謹言、

十二月三日　　忠光

丹後守殿

神宮路次、依凶徒蜂起、有限祭禮無幣使通達、星序頗積、神慮有畏、然者雖爲古來道、被遂發遣之儀、可爲何樣候哉、宜令紀傳明經明法等博士勘申、

常幣以外有所獻

〔文德實錄二〕嘉祥三年九月乙酉、〇十一日遣少納言從五位上鎌藏王、內藏頭從五位下中臣朝臣豐志等、向伊勢大神宮、依例奉幣、別獻細馬五疋、以充神御、

〔文德實錄三〕仁壽元年九月庚辰、〇十一日遣使者向伊勢大神宮、奉細馬八疋、以充神御、寶幣具至、

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年九月十一日、奉例幣於伊勢大神宮、以飯野郡寄申神宮、被申兵亂可平之由、

〔西宮記九月〕延長三年九月十一日、奉大神宮幣如常、又加奉幣帛及金銀鏡劒雜神寶等云云、了把笏著座、奉幣如常、（別幣同置例幣案、神寶等內藏寮執之、奉幣使於外付使者云云、）

〔日本紀略三村上〕天曆二年九月十一日丙辰、天皇幸八省院、被副獻例幣幷臨時御幣、

〔日本紀略六圓融〕天延元年九月十一日、伊勢例幣、天皇行幸入省院、以伊勢國安濃郡奉寄之、

〔中右記〕元永元年九月十一日庚寅、例幣、上卿右大將、行事右少辨、有待賢門穢、仍用陽明門、別宮御裝束被副進、是依濕損、日者被調也、

奉幣減新儀

〔玉海〕治承五年〇養和元年九月十六日己丑、大外記賴業來語云、去十一月例幣次、欲奉鐵冑於大神宮、而依不調出（於神祇官細工等所作也）彼日不能進、同十四日被奉進了、但不被載例幣宣命、又在別宣命、又殊儀不聞、只付神祇官被送遣了云々、是天慶之例、被進件冑之由神宮注進、官文書中無所見云々、

〔日本紀略四村上〕天德二年九月十一日戊午、伊勢例幣也、天皇幸八省院、宣命有辭別、天變地震物怪等

日延引、

寶永八年〈○正徳元年〉九月十一日、例幣御延引、依藤波二品〈○景忠〉末子病氣危殆、御使御斷云々、十一月十四日、例幣發遣也、陣儀はて、上卿辨柳原參向、藤波二品參向、九月御延引及今日、藤波家依故障也、

〔續史愚抄七十一中御門〕享保十七年九月十一日乙未、例幣、依天下穢延引、十一月廿五日己酉、此日被發遣例幣、上卿權大納言、〈隆典〉奉行藏人頭右中將實全朝臣、有御拜、〈御心喪中也〉

〔續日本後紀五仁明〕承和三年九月丁丑〈○十一日〉遣左兵庫頭從五位上岡野王等於伊勢大神宮、申今月九日宮中有穢、神嘗幣帛不得奉獻之狀、

〔三代實録十一清和〕貞觀七年九月十一日己丑、是日可奉幣帛伊勢大神宮、御在所有穢、仍以停止、遣散位從五位下岑行王、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志、告以事由、

〔三代實録二十二清和〕貞觀十四年九月十一日戊寅、不奉伊勢大神宮幣、以太政大臣〈○藤原良房〉薨也、大祓於建禮門前、

〔三代實録二十六清和〕貞觀十六年九月十日乙未、先是八月二十三日、藥師寺僧榮仁在紫宸殿、轉經六十僧之內、二十五日奄忽命終、弟子等秘而不言、或人聞有此事諮啓、明日將發奉幣伊勢大神宮使、以此穢故、仍停廢焉、

〔本朝世紀〕天慶元年九月十一日乙卯、今日伊勢大神宮依例可被奉向御幣使、而自去月十二日死穢相觸內裏、加之昨日內裏有犬死穢、仍停止幣帛使、即於建禮門前有大祓事、〈具在別記〉

〔園太暦〕觀應二年九月十一日、今日例幣、依勢州通路不達停止、神慮尤難測事也、

文和四年十二月三日、藏人右少辨忠光送狀有所談事、問答續左、〈○中略〉

抑神宮路次不通、例幣以下不及發遣、可被用新道否事、可召諸道之勘文之由候哉、被仰定候宜下之樣如何體可候哉、可被計下、

記事、康顯可參之由奉行雖被相觸之、通音可勤代之由約諾、仍不參、康顯裝束皆具、借遣市正之間、如此相語了、

神祇官儀如恒歟、上卿辨外記史同前、宣命事大內記有輕服故障、文章博士爲賢朝臣草進歟、內侍參向、出車裏辻少將公隆朝臣被進之云云、御幣未剋進發了、

享德三年九月五日癸丑、今度一色內穢及室町殿、仍室町殿爲乙穢、依之十一日例幣、同祈年穀奉幣、可延引之由被仰下云云、　十一日己未、例幣延引也、局務依輕服、奉行事被仰下於予、職事權辨、經直御敎書到來、案文見左、

例幣延引了、可被存知之狀如件、

九月十一日　權右中辨判

權大外記殿

請文案

例幣延引之由謹承候畢、可令存知候、仍言上如件、

九月十一日　權大外記中原康富請文

十月廿七日乙巳、參頭中將殿、入見參申承、晩例幣御敎書送給之、〇中略未進請文、　廿八日丙午、例幣可爲今日之由、頭中將被相催候處、假延引、

例幣可爲來廿八日、任例可被致沙汰之狀如件、

十月廿八日　右中將判

權大外記殿

十二月九日丙戌、詣藏人權辨亭、先日令尋給吉田祭祇園祭例幣等、十二月例注進之、　廿一日戊戌、抑九月例幣未被行、雖然依有先例、月次神今食被行之、例幣追可有發遣云云、

〔百一錄〕延寶八年十一月十日、今日例幣也、上卿柳原黃門、資廉〇辨裏松、依爲後水尾院百ヶ日之內、式

一外記御訪事、先々爲貳百疋之處、貫別八十文充打之、爲一獻分出武家奉行方云云、仍一貫八百餘到來了、減少是初也、去月月次祭御訪、又是程減云云、町口判官支配、彼狀續左了、

明年當三合之災、司曆奏五行之法、朝議雖匪懈、夕惕不忘危、早攘禍胎於未兆、可致宇內之太平之由、宣命載例幣宣命辭別、

宣命草

天皇我詔旨度、掛畏支伊勢能度會能五十鈴能河上能下津磐根爾大宮柱廣敷立氏、高天原爾千木高知氏稱辭定奉留天照坐皇大神能廣前爾恐美恐美毛申賜者久止申須、常毛奉賜布九月神嘗能大幣乎、王官位姓名中臣官位姓名等乎差使氏、忌部官位姓名加弱肩爾太繦取懸氏、持齋者利奉出賜布此狀乎平久安久聞食氏、天皇加朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸奉給倍止恐美恐美毛申賜者久止申、

辭別氏申賜者久止申久、明年三合之災爾當禮利止司曆五行之法乎奏勢利、朝議雖匪懈、夕惕不忘□□□□□□攘氏、宇內能太平乎可致古止者、忝毛冥助留可在奈利、殊玉體聯爾御藥能事在利、縱神事能違留依氏所致奈利止毛、又邪氣能隙乎窺氏成祟勢留止毛、忽應護乎垂禮給比氏、日乎不廻須時乎不移須、除愈能効驗乎令得給比氏、靈威能揭焉奈留古止乎奉仰給比氏、自今以後毛少能恙毛不大坐志氏、河色一清能色乎呈志、山聲萬歲能聲乎聞給者牟古止者、廣御恤留可有奈利、掛畏支皇大神、此狀乎重氏聞食氏、聖壽無疆爾、寶祚延長留、護幸奉給倍止恐美恐美毛申賜者久止申、

嘉吉二年十月日

寶德二年九月十一日壬子、例幣延引、武家總用且六七千匹令到來、相殘分未到之間、可延引之由、昨日奉行職事藏人佐綱光被相觸云云、　十四日乙卯、是日例幣被行之、依式日延引、先有日時定、上卿西園寺中納言實遠卿、職事藏人權右中辨綱光、官方右中辨敎秀朝臣、外記忠種、史通晉等參陣之、少內

十月十六日癸卯、去九月十一日例幣延引、是日被發遣之云々、於陣被勘日時、上卿權中納言隆盛卿、職事頭右中辨資任朝臣、權右中辨俊秀、權少外記康顯、(本分配康富也、代參之、)左少史盛時等參陣也、內記代事傍局參之上者、就下薦史可勤之條勿論也、而爲御幣裹早々可參向本官之間、別可存知歟之由盛久申之、予此子細堅雖可申、兩局相互勤仕又有例之上、爲早速可如此之由職事被申之間、今夜康顯從內記代了、

上卿參著仗座、(奧)頭右中辨進奧座、仰日時事幷辭別等事歟、次上卿移端座敷軾、召權辨仰日時事、辨於床子前乍立仰左少史盛時、盛時即進日時勘文、(陰陽寮不參)辨進勘文於上卿、上卿召史筥納之、以職事被奏之、即被返下之、上卿召辨下勘文、辨下史、史進撤空筥了、次上卿召內記、內記代康顯進軾、上卿仰曰、例幣宣命作進(奧)、次明年當三合御愼、又御不豫事、可載宣命辭別也、即被下折紙、康顯給之退出、先之日時勘文奏聞之間、外記康顯參進小庭、申使王御馬事、申詞、使王御馬申候、上卿目給、外記稱唯退出了、次內記代持參宣命草、(納筥、大內記在豐朝臣、自宿所作進之、草清書二通也、草入宿紙也、清書入縹色也、)上卿披見之後、參進弓場、以藏人右中辨奏聞也、康顯從之、即被返下於弓場、取替清書又奏聞、即被返下了、上卿不歸著陣、直被參神祇官、本官儀如常、先上卿著北門、(外記遲參、不置代、)召辨問幣物具否、召外記問使々參否、仰使王御馬事、次召內記代康顯進宣命、次上卿引著東幄座、上卿辨(東上南面)外記史、(北上東面)御幣發遣之後、上卿召使王給宣命、次內記進撤空筥退、次史、次辨、次上卿起座、內侍參入也、出車少將公綱朝臣云々、王氏兼夏、中臣秀忠、卜部兼香、忌部親惟、官掌□□、召使行寬等參之云々、

一日時勘文可尋寫之

一神祇官差文自官渡給之

一辭別折紙寫之見左、正文續加內記方文書中畢、

一宣命案見之、草之正文同上、

下之處、清外史局務外史等無所見之由注進了、官務晨照宿禰、天承元年四度幣一度被付行之例候之由注進申云云、傳奏招清史、被糺決之處、天承元暦記已下所載者、四度幣各式月被行之上者、被付行之例不可在也云云、此分重招官務被尋之處、天承例任所見注進了、相違條不存知云云、注進楚忽之至極之由人々傾之云云、又四箇度幣トハ、祈年月次例幣新嘗、此四箇度事ナルヨシ官務口傳之由被申之云云、清史等不審事也云云、祈年例幣六月十二月月次兩度、加テ四箇度幣トハ可申歟、新嘗ハ御幣發遣之儀無之者哉、返々不得其意之由密々被語候、又吉田社遷宮日時定、例幣同日可被行之段如何、於例幣者廢務日也、可注申例之由藏人右少辨被尋之處、師世大外記返事狀ニ云、廢務日伊勢幣被發遣之上者、餘社之事可被行之條不苦候歟云云、伊勢幣發遣アルユヱニテ、廢務日トハサダメラレテ候ヘ、サテハ何事ノ廢務ト意得テ、其日又別ニ伊勢幣アルトハ可被存知哉、言語道斷、局務之返事、比興之由人々被彈指云云、凡如此事等、時々記而無益歟、一字不說了、　卅日丁亥、是夜被行月次祭幷神今食者也、去六月十一日、依無用脚、令延引、畢、例幣以後月次祭被行哉、先例被尋候處、無所見候間、於例幣者、來月可被行也、仍先被發遣月次御幣使者也、延引之間、先於陣被勘日時也、上卿權中納言隆盛卿、職事權右中辨俊秀、外記親種、史員職等參陣、陰陽寮□□日時定被行之後、上卿外記史被參神祇官者也、上卿權中納言隆盛卿、參議長政卿、少納言繼長、右少辨敦忠、少外記親種、(分配)右大史盛久、官掌□□、召使行寬、內侍、(出車少將季隆)□□中臣秀忠、卜部兼秀、忌部親惟、王氏兼夏等也云云、

例幣可爲來廿六日、同日可被行日時定之由候、陣之儀可有御存知候哉、吉田社假殿遷宮日時定、同日可被付行由內々其沙汰候、可得御意候也、恐々謹言、

九月廿二日　師世

(表書)隼人正殿　進上

給、是已常例也、然者攝政准此例、終日可著御吉服、日内不可令脱御者、〈○又見中右記〉

〔顯廣王記〕長寛三年〈○永萬元年〉十一月廿六日辛未、頭亮消息云、明日例幣延引、來月一日也、件事無事故可被遂行、令參籠官人於本官可令祈申者、召祈親賴之處、來九日迄服暇云々、仍差俊宣令參籠了、三箇日也、　十二月一日丙子、例幣也、去九月依諒闇延引、是先例也、上卿左大臣、行事右少辨平信範也、中臣祭主親臣、忌部明友、卜部兼友也、王致重也、御卜串注付合否之間、件卜串取宮主忘注付被濟之間違例云云、

〔業資王記〕建仁三年九月八日癸酉、關東左衞門督〈賴家〉薨逝云云、　同十一日丙子、例幣延引、是關東穢引來之故云云、　十月十三日戊申、例幣也、

〔仲資王記〕建仁四年〈○元久元年〉十二月十一日己亥、例幣、祭主能隆卿參勤云々、　廿一日己酉、今日俄被發遣伊勢幣、中臣忌部卜部等對捍、被付言上之間、各領狀了之由、入夜茂平所申也、但官人等各祈申候云々、

〔薩戒記〕應永卅二年九月七日癸卯、右頭中將基世朝臣來曰、例幣可申沙汰之由被仰下、式日依天下穢延引、仍相尋日次之所、可爲來十七日云云、内侍出車分配左頭中將也、若於貫首者、不可然歟由内内奏聞之所、相尋先例可申沙汰之由所被仰下也、此事可爲如何者、答云、予〈○藤原定親〉貫首時、獻吉田祭出車了、其時若於當穢者可被免歟由申入候處、不可然之由有仰、仍獻之了、强不可依貫首歟、　十一日丁未、例幣、依天下觸穢延引云云、　十七日癸丑、後聞、今日被發遣例幣、日時定當日也、主上〈○稱光〉不出御云云、右頭中將奉行也、

〔康富記〕嘉吉二年九月廿五日壬午、去六月十一日月次祭神今食等延引、于今不被行、又今月十一日例幣延引不被行之間、大藏省年預判官員弘等令申於管領、月次祭用途同被付定充云云、例幣者自元今月中可被行之由、爲叡慮被仰遣武家、致用脚之沙汰云云、所詮月次祭例幣同日被付行例被尋

十一日癸亥、僧幷重輕服人不參入、如例、但女院御禁中也、　廿一日癸酉、今日有奉幣使、是去十一日例幣、依內裏燒亡穢事延引、今更所被奉遣也、又先須有燒亡告使、而彼宮遷宮之後、雖神道事、猶有其憚、仍先以件幣早所被發遣也、是先日定也云々、右衛門督所被承行也、其宣命依內裏燒亡觸穢延引之由、又御惱事、陰陽寮所卜申祟在方、其由其體申之旨、可被辭別之由、以書狀令申金吾已了、是依親親也、巳時許、有可參入之由御返事、良賴卿遣召已了、爲仰奉幣使事也、

〔永左記〕承保四年(〇承曆元年)十月十八日乙未、此日被奉幣伊勢、去九月十一日例幣、依天下穢延引、依今日其由奉幣也、少內記通國草宣命云云、

〔中右記〕寬治八年(〇嘉保元年)九月十一日、例幣延引之由有大祓、宰相中將保實行之、(右少辨還俗、不被行者、)　十一月二十日戊午、例幣幷臨時二十二社奉幣也、依爲行事辨早旦參入、賓白雪紛々、行事官掌光經私宅之燒亡、去夜燒亡、但至幣物者、皆渡所司了不穢、彼光經一身穢之由所申上也、仍仰二官掌吉行之處、不辨清國々沙汰之間、頗以懈怠、(阿波下總寄事於左右、不辨濟也、)掌侍(平仲子、周防、)參向、且於小安殿中令裹伊勢幣物、(掌侍女官二人、內藏寮官人、忌部一人、行事辨共檢察、)幣物二箇度料、(例幣幷臨時幣、)時刻推遷、上卿幷使々參議被參、此間社々幣未具了、上卿召予(〇藤原宗忠)被問幣物具否、申云、行事官掌光經私宅燒亡、俄以觸穢、如此之間、自致懈怠、早可催具者、則立座重相催、巳及申刻具了、上卿遷渡東廊座、內記辨外記史等行事相具、使祭主親定申云、兩度幣一度可給歟如何、上卿命云、宣命一紙同使也、然者一度可給也、仍祭主等引使々賜物了、次召使王賜宣命、(〇中略)今日奉幣之間、玉體(〇堀河)不豫、依无御浴殿、无御拜、又伊勢宣命一紙之中有辭別、先例幣有故延引之由、皇居燒亡之由、玉體不豫之由者、(〇下略)

〔殿曆〕嘉承二年十一月十三日、今日去九月例幣延引、(是日次依不快也、)其由今日被奉幣、今日余終日著吉服侍宿、遣問帥匡房卿之許云云、諒闇間奉幣時、先例主上令著吉服給歟、延久間例如何、爲令著給者、終日可令著給歟、將御覽宣命間許歟者、帥令申云、延久諒闇間奉幣時、至于當日者、主上終日令著吉服

〔北山抄二九月〕十一日奉幣伊勢大神宮事

應和元年九月十日、左近府穢入交內裏云々、右大臣〇藤原顯忠令奏云、明日供奉所司、雖不觸穢、納言以上或服或穢、无可行事之人、延日行之、已有其例、令仰云、先々依內裏所司共穢、延日行也、所司不穢時、猶付所司行之、又延喜七年、雖無納言以上、幸八省被奉幣、定知彼日參議行事歟、大臣令申云、依內裏穢延日時、慥不記所司共穢由、又延喜七年九月日記紛失、不能勘申參議行事例者、依定申延日、令行十四日、令仰左大臣、穢間令勘申奉幣日例、宜令勘申、令申云、去天慶七年九月一日、左近府有失火穢、侍臣向彼府、還參內裏、仍以六日、令勘其日、改定奉幣、此其例也、仰依件例令勘申奉幣日、大臣令奏、陰陽寮擇申日時文、定仰廿三日、〇又見日本紀略

〔日本紀略六圓融〕安和二年九月十一日乙卯、伊勢例幣、依前齋院婉子〇醍醐皇女薨延引、仍有大祓、　廿日甲子、今日發遣伊勢奉幣使、告申卽位之由、幷神嘗祭也、

〔日本紀略十一條〕長德四年九月十二日丁卯、伊勢例幣延引、依上卿不參也、

〔左經記〕萬壽二年九月十一日庚寅、參關白殿〇藤原賴通內等、依伊勢奉幣延引、〇自侍御穢、近來大內也、左大辨率左少辨史外記已下諸司等、於建禮門前、行大祓云々、　廿二日辛丑、參陣、被勘伊勢奉幣使可被定日時云々、是去十一日依爲觸穢內延引也、　廿五日甲辰、今日被立伊勢奉幣使云々、〇去十一日依穢延引上權大納言、辨左少家經行事云々、〇又見日本紀略、小右記、

〔春記〕長久元年九月九日辛酉、關白〇藤原賴通命云、十一日例幣依穢延引、是例事也、仰外記守輔可令勘例也、大祓穢間如何、其由可問守輔者、予〇藤原資房問之守輔、卽進勘文、十一日例幣依例延引、卽有大祓者、卽覽關白、上達部皆悉觸穢、以誰人可令行哉、此由可問右大臣、〇大臣行勢事、不參入給、卽以書狀奉問、返云、年年例必有大祓、但觸穢之人無著行之例歟、然者過穢間可被行歟者、卽申關白、又命云、例幣依穢延引、大祓過穢程可行由、可仰右大臣〇藤原實資者、〇明日可仰也　十日壬戌、明日例幣延引事、仰右大臣了、〇承書狀也

明日可發、故更齋修禊焉、

〔西宮記 九月〕十一日奉幣

貞觀九年九月十一日、例幣、依大內穢二箇度延引、每度有大祓、十月八日使發云云、

〔三代實錄 十八清和〕貞觀十二年九月十一日庚申、去八日內裏有犬產穢、仍停奉伊勢大神宮幣使、遣大舍人頭從五位上磯江王、神祇大副從五位下大中臣朝臣國雄、申事由、大祓於建禮門前而發之、十一月八日丙辰、先是九月十一日、內裏有犬產穢、停奉幣伊勢大神宮使、是日遣大舍人頭從五位上磯江王、奉常幣幷鑄錢司、及山城國葛野郡鑄錢所等新鑄錢、○又見西宮記

〔三代實錄 四十二陽成〕元慶六年九月十三日壬午、遣武藏權守從五位上弘道王、向伊勢大神宮奉幣、去十一日可發此使、內裏犬產、故從停廢、於是神祇大副從五位上大中臣朝臣有本言、元慶元年、內裏犬產、十一日停奉幣使、十三日發遣、大外記正六位上巨勢朝臣文宗言犬產之穢、當忌三日、元慶元年九月九日犬產、十一日忌限既滿、十二日前散齋、十三日致齋、十四日後散齋、然則今月十日犬產、忌限滿日在前散齋、相議外記、所執有理、然而所司行事、幣物既備、仍從有本之言、

〔三代實錄 四十九光孝〕仁和二年九月十一日丙戌、奉伊勢大神宮例幣之使、是日可發、去七日有犬死穢、因而停止、亦不廢務、　十二日丁亥、爲發遣奉伊勢大神宮幣使、天皇欲御大極殿、乘輿未出、有人奏聞、晝所犬死、於是太政大臣及諸公卿議曰、晝所者在宮門左右衞門陣之內、若當行神事諸司有穢、立札於衞門陣、告知事由、不聽出入、爲潔禁中也、依此論之、可謂禁中穢也、仍不臨御、即便遣中納言從三位藤原朝臣山蔭於建春門前左衞門陣外、召散位從五位下幸世王、授告文、令發行、其告文取太政大臣里第紙、召在外之內記令書之、在局紙幷內記居禁中染穢故也、

〔日本紀略 四村上〕天德三年九月十一日癸丑、依內裏犬產穢、例幣延引、　廿五日丁卯、發遣神嘗幣使、依雨無行幸、○又見九暦

奉幣延引

勅使宣命ヲ御讀

金棱ヲ殿內ニ奉納（御鎰ヲ差奉テ退下、石壇ニ立歸、御鎰ヲ奉納、後八度之拜、下向遙拜也、禰宜遙拜所ノ膝ニテ清衣ヲヌグ、）

勅使四姓宮司禰宜一殿ニ著立（有酒立）

酒立之獻立

膳ハ、クギヤウ著座以前ヨリスエオク也、スモリ有、但イツモノ饗膳ノ飾ナキモノ也、勅使ヘスウル、クギヤウ、餘ヨリ大也、同勅使盃ノ臺ハ、キリブクエノ如ニシテ、足ハクリ足也、初獻ハ土瓶也、餘ノ盃ノダイハ小ヘギ也、

禰宜權官六位宮掌於一殿之役

獻盃一禰宜常晨、二禰宜貞晨、三禰宜全彥、給仕六禰宜集彥、七禰宜貞和、

禰宜給仕ヘノ取次、權官三座檜垣治部常英、四座松木修理盛彥、

權官ヘノ取次、六位宮掌也、六位ハ有次第、（何モ衣冠）

御手水役人

權官一座檜垣內膳常幸、二座佐久目次郎左衛門長隆（何モ束帶）

此時長官ヨリ勅使ヘ御馳走ニ、一鳥井ヨリ檜垣宮內常康、同兵庫常富、同左兵衛貞淸三人、衣冠ニテ御供也、但兵庫左兵衛二人ハ、內宮迄御供也、

此時宇治山田奉行石川大隅守源正次（諸大夫裝束ニテ）宮中ノ下知、神事ノ內、宮中ニテ奉行立所、大場ニテハ、一殿ノ外、北ニ南面、玉串ノ御門ニテハ、東ノ壁添ニ南面、

〔公卿補任孝明〕慶應元年九月例幣（神嘗祭國典之中、再興宣命被載詳別、）發遣、上卿日野大納言（資宗○）辨資生申沙汰、源宰相奉行、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十月七日壬申、大祓建禮門前、去月內裏有犬產穢、不發奉伊勢大神宮幣使、

謹上大宮司殿

右當宮例幣之事、自後土御門院御宇令斷絕、星霜旣覃二百歲之處、今度可ㇾ有御再興之由及風聞之間、神宮之歡喜不ㇾ堪手足者哉、爰件行事之儀式、粗雖ㇾ載神宮之記文等、往古之風儀、輙難議量多之、仍臨于祭庭而有違失者、可ㇾ爲珍事、且爲ㇾ引合叡慮之御記文與神宮之舊記、令ㇾ得其意、且又爲ㇾ久退轉之神事御興行之賀參、以故實之祠官、被ㇾ差進于京都者、可然之旨傍官神主各被ㇾ凝評議、以氏敬神主爲神宮使、今日廿九日被發遣訖、

〔正保四年奉幣使記〕正保四年九月十五日、依雨儀、大場之作法於一殿有之、此時山田總中鄉々ヨリ、一鳥居橋ノツメヨリ二行ニ注連ヲ引、烏帽子素襖ニテ大宮迄ノ道左右ヲ警護ス、二鳥井ノ內南道ノハタニテ、御鹽湯大麻有之、二鳥井迄禰宜十人御向ニ出ル、禰宜東頭南面、北ノ道ノハタニ蹲居シテ後立列、

金綾ノ唐櫃ハ、禰宜立列ノ前ヲ持通、禰宜ヨリ先大場ニ行著、(此時大場迄、京役人衛士持參ル、)

其後禰宜勅使ヘ一禮シテ、勅使ヨリ先ニ大場ニ立歸立列也、(晉チハク、雨故カ、)

勅使一殿ニ御著、(四姓宮司禰宜一殿ニツク、勅使四姓有ニ手水、)玉串ノ行事如祭禮、(勅使中臣使王、鬘木綿計也、忌部ハタスキ有、宮司禰宜カツラ木綿玉串ヲ取、)

宮司祭禮ノ如ク禰宜ヨリ先ニ立テ、伊弉諾ノ宮ノ後ニ立ツ、

禰宜大場ヨリ三鳥居內ニ著ク、五人ヅヽ東西二行ニ立並如祭禮、其後石壺ニ著、(鎰取役人、如祭禮、)

案ノ板直ニ玉串御門ノ內昇居ル

勅使四姓、玉串御門ノ內ニ御著、(中臣宣命ヲ讀、)

山田地下ノ五位人モ、衣冠ニテ、禰宜石壺ノ後ニ祗候、六位モ同前、

子良一臈金綾ノ尺ヲ取、東帶、殘ル物忌ハ衣冠也、(玉串ヲ取、)

禰宜內院ニ參入シテ、昇殿御戶ヲ開ク、

仕方有之者、委書付被指上候様ニ與、從神宮傳奏被仰出候間、右之通兩宮禰宜中江、急度被申渡、早早返事待入候、油斷有間敷者也、

八月廿二日　友忠

宮司宿館

就來九月可被發遣奉幣使祭主一通到來之間、則令告知候、神宮中右之通油斷有間敷候、恐々謹言、

追書猶々右之一通剋付ニ而到來候、其旨可令存知給候、

八月廿三日　大宮司定長判

謹上內宮長殿○中略

一皇大神宮神主

依被仰下注進來九月可被發遣奉幣使由事

副進

九月例幣行事之注文　一卷

右今月廿三日宮司告狀偁、同月廿二日祭主下知偁、來九月可被發遣奉幣使、就其兩宮社方之指圖、幷例幣等之舊記、可注上之旨從神宮傳奏被仰出由事、謹所請如件者、則九月例幣之注文一卷所勘進也、抑件行事久令退轉之處、温古知新之政化、令潛通神慮者哉、依被仰下注進如件、以解、

正保四年八月日　大內人正六位上荒木田神主氏在上

禰宜從五位上荒木田神主經寄人○以下名略

來九月可被發遣奉幣使由事、禰宜等御請文幷例幣之注文二通獻覽之、早速成司解言上、可目出候哉、恐々謹言、

八月廿九日　內宮一禰宜經寄判

次内記置宣命於上卿前、（入宮）退著座、

次上卿仰外記、令催使、使外記候座、令召使催之、

次中臣率忌部卜部参列

次上卿以召使仰云、忌部参来（禮）、忌部取外宮幣退、授卜部、更忌部来取内宮幣、復本列、

次上卿以召使仰云、中臣参来（禮）、中臣参弑、仰云、能（久）申（天）奉（禮）、中臣稱唯退、奉出御幣之時、上卿以下平伏、

次上卿目紋光、置笏相互進寄、（但依座近及手取之）給宣命、取副笏揖起座、於便宜所授宣命於中臣退出、

次上卿召内記、令撤空宮、聞御幣進發之由、上卿以下退出、御幣進發之後、於南殿有御拜、（御幣發遣之時分、自神祇官走参、藏人告之、）

〔紳書　五〕奉幣使の事　正保二年、（〇二年恐四年誤）大猷公（〇徳川家光）伊勢の奉幣を始らる、是日光の奉幣を孕み給ひしより起れり、

〔閑窻自語〕公卿勅使例幣等再興事

公卿勅使は、後光明院、正保四年九月に、例幣の絶たるを再興あるべしとて、ことしまづ廣橋宰相綏光卿を伊勢にたてらる、宸筆の宣命、御草も御製なり、かねて菅氏のともがらに草を仰られしに、此草の口傳つたはらざるよし辭申ゆゑとぞ、例幣の宣命ばかり草進す、奉行は曾祖父一位殿、（貫行卿〇柳原）頭辨して御存知あり、

〔橘窻自語　下〕正保四年、伊勢公卿勅使御再興のとき、宸筆の宣命の樣を内記えらずして、神宮へ尋問せ給ひしといへり、此時奉行柳原貫行卿にて、記に見えたりと、入道前大納言紀光卿かたりきかせ給ふ、

〔勅幣中興記　上〕來九月（〇正保四年）可被發遣奉幣使之由候、就其兩宮社方之指圖、幷例幣等之舊記所持

次付職事奏聞之、（此間召外記、仰可進卜串之由、外記持參卜串、入筥、覽上卿、此次申使王之御馬事、）

次職事奏聞、畢返給、（御云、令清書、幼主之時覽攝政、）

次上卿召內記、仰可令清書之由、

次內記持參清書、

次上卿（執弓場）奏聞之、（內記以宣命筥相從、）此次申使王御馬之由、御覽畢返給、

次上卿還著使座、內記置宣命、上卿下宣命於內記、

次上卿召官人令撤軾起座、上卿退出、（歸宿所休息、）陣儀終後、綏光著殿上、（已剋許歟、）宸儀御束帶、出御晝御座、（頭缺）

（候贊子數、）先是攝政御祭、

次職事告出御之由於攝政、攝政參御前、令著座給、

次攝政以職事召綏光、綏光參御前、候贊子、攝政依御目、更參進御前、重依御目、插笏膝行、宸儀給宣命、

（攝政令書之給、）取副笏、逆退敬屈、攝政仰云、能（久）申（天）奉（禮）、又仰云、宣命讀畢、於神前可燒之、經本路退出、上卿

綏光等向神祇官、（於吉田在此儀、）

上卿入南門、著座、（兼置軾、）

次辨外記史各入同門、著座、

次上卿召辨、辨著軾、上卿問幣物具否、辨申具之由、上卿召召使、召外記、外記參軾、上卿又問使之參否、

外記申候之由、此次上卿仰云、使王御馬給、

次召召使、仰持參宣命之由於內記、

次上卿起座、移著北座、先是置幣物於案上、（內藏寮讓之、）

次綏光著座

次辨外記史著座

次忌部取外宮幣退授卜部、更忌部來、取內宮幣復本列、

次上卿仰云、中臣參來、中臣進候、（依其程遠、以召使召之、中臣路道同忌部、）仰云、能（久）申（天）進（禮）、中臣稱唯退、奉出御幣之時、

上卿以下平伏、

次上卿目公卿勅使相互進寄給宣命、取副笏揖起座、於便宜所授宣命於中臣退出、

此間引神馬、

次召內記令撤空筥、（依上卿氣色、內記參進、取筥退出、）

次上卿以下退出（自下臈起座）

御幣進發之後、於南殿有御拜、

〔綏光卿記〕正保四年八月十六日、從殿下（〇一條昭良）以頭辨（資行朝臣）自當年伊勢例幣有御再興、爲勅使可令參向之旨仰也、久斷絕之儀、不堪者難申領狀之由雖申之、猶重而可存之旨依被仰下、不及固辭者也、其後參殿下、舊記雖相勘、作法等慥無所見之由申入之處、猶御記有御吟味、彌可爲參向哉否之事可被相定之由被仰下退出、　廿七日、從殿下參向治定也、其旨可存之由也、　廿九日、於殿下御次第御作、大外記（師定）書之、陣儀等之奉行頭辨（資慶朝臣）綏光等伺候、先召仰、當日神祇官等之御次第（三折）出來、次參宮之次第、以恐昧記（資房例幣之時、爲公卿勅使、被相副之記云々、）令書之給、入夜祭主（中臣友忠）依召伺候、卽參宮之御次第被見下、當時難被相用處可申上之由依仰、御次第之面、少々有言上之事、仍其處被改之畢、此御次第勢州可差下之旨依仰、祭主差遣之、　九月二日、有召仰、（巳刻許）參內著殿上、奉行職事（仰仰詞）承之退出、從今日神事、　十一日、早旦上卿（德大寺大納言公信卿）著陣、（奥）職事出仰、仰詞、（其詞）

次上卿移著端座（召官人令敷軾）

次上卿以官人召內記、大內記參軾、上卿仰可作宣命之由於內記、

次內記持參宣命草（入筥）

（使王御馬給ハン、）

次奏聞畢返給、（其詞、使王御馬之事聞召、）上卿返下内記、仰可持參本宣之由退出、

次向神祇官（勅使辨外記史内記等相從）

神祇官之儀

上卿至神祇官、於南門外下輿手水、（於此所於手水、主水司奉仕之、）

辨外記史出南門、列立壇下、（北上東面）上卿向上首揖、辨以下答揖、

次入南門、著幄座、（東面揖著座、揖直座引寄褥置軾、）

次有裹幣之作法、

其儀辨史史生官掌忌部、各著北廳代之座、辨史北上西面、内藏寮置幣於案上、（内藏寮官人讀之、）次辨以下

著南幄座、（辨東面、外記史北上西面、）

次辨依上卿氣色來軾、上卿問幣物具否、（其詞、幣物具タリヤ、辨申具申之由、）

次外記依上卿之氣色進軾、仰云、（其詞、使々候哉、外記申候之由、仰云、候ハヽ召、）此次仰云、使王御馬給、（其詞、使王御馬給フ、）外記稱唯、退

著本座、

次上卿召召使、仰可持參宣命之由於内記、

次上卿起座、移著北座、（上卿勅使辨西上北面）

次公卿勅使辨外記史著座、（南上西面）内記宣命（入筥）置於上卿前退著座、召使候使所、

次仰外記令催使々、依上卿氣色、外記參進軾、（其詞、令催使々、）

次外記歸著座、令召使催之、

次中臣率忌部卜部參列東之鳥井内、北上西面、（向乾）中臣少進立、次忌部、次卜部、依北廳幄東狹也、

次上卿仰云、忌部參來、（以召使召忌部、依其程遠也、忌部經北之樓門、上卿之前來軾、仰云、來、令發遣例幣、）

卿、民部卿召大夫外記文義、仰行幸停止之由、次令官人召內記、內記持宣命參入、開見了、持內記參御所、(經南殿北廊、內記階下、)奏畢經月華門向八省、上官等自中都追從云云、暫退出、

〔公卿補任 後光明〕正保四年九月、例幣再興、上卿德大寺大納言、(公信)○勅使廣橋宰相、(綏光)○辨保房、奉行賚行朝臣、

〔正保四年再興例幣發遣次第〕例幣次第(上卿要刻限卯、束帶以下如常、)

刻限上卿參著仗座、

次職事來仰々詞、(其詞、伊勢大神宮可被發遣例幣、令作宣命、上卿稱唯、或神嘗祭可有之、令作宣命、上卿稱唯、)

次上卿移著端座、

次召官人令敷軾、

次以官人召內記、仰可作宣命之由、(其詞如職事、)

次內記持參宣命草、(入莒、)上卿披見、內記退、

次召官人召職事、奏宣命之草、(其詞、擬政二、)

此間以官人召外記、外記進軾、仰云、卜串持參、

次外記持參卜串、(入莒、)覽上卿、上卿仰云、令開、外記開之、又覽上卿、上卿見畢返下、仰云、以象字王令奉仕、

外記稱唯退、

次職事返給宣命草、上卿披見結申、職事仰可令淸書之由於上卿退入、

次上卿以官人召內記、給宣命草、仰云、令淸書、

此間六位外記來小庭、申使王御馬之事、上卿目許、外記退、

次內記持參淸書、上卿披見、畢令持宣命於內記、撤軾著弓場代(內記相從)奏聞、此次奏使王御馬申之由、(其詞、

有本等、奉幣於伊勢大神宮、發自神祇官、諒闇也、

〔西宮記九月〕十一日奉幣

元慶五年九月十一日、伊勢幣使、依諒闇、天皇不御八省、亦無宣命、但先例若有別詞、卽有宣命、

〔北山抄二九月〕十一日奉幣伊勢大神宮事

延喜五年九月十一日、不御八省、以錫紵限在昨日也、於南殿奉拜、

〔西宮記九月〕十一日奉幣

天曆七年八月三十日、權中納言源朝臣(〇庶明)令朝綱奏、延長四年外記日記、以不觸內裏穢所司、令行奉幣事者、令仰云、令問供奉所司觸穢之由、隨狀可行之、

同九月十一日、大神宮奉幣如常、依內裏穢、不出八省、左大臣(〇藤原實頼)行事、

天曆七年九月十一日、左大臣著神祇官行事、奉幣事、他納言皆觸內裏穢、仍有殿上仰、大臣行事、內侍命婦等皆申障、令神部裹幣物、承和九十年等例也、(九記)

天德四年九月十一日御記云、依物忌不御八省、藏人雅材申云、東宮廳有犬死穢、而彼所人入交內裏云云、有仰召左大臣家紙充宣命紙、并不奏草清書等、(大臣令申云、昨日令奏大麿仰文、而不奏、他處色紙令奏也云云、)民部卿藤原朝臣於八省發遣奉幣使云々、

〔日本紀略四村上〕康保元年九月十一日癸未、伊勢例幣也、內裏自昨日有犬死穢、仍不奏宣命、上卿者參(〇者參二字恐參著誤)八省行事、(〇又見北山抄)

〔日本紀略十二三條〕長和二年九月十一日庚子、伊勢例幣、依雨無行幸、

〔左經記〕長元四年九月十一日丙辰、天陰降雨、午刻參內、今日可有八省行幸之由有仰、而陰氣不霽、仍令頭辨遣賀陽院被仰云、雨脚若止、可有行幸也、而幸臨之後、若及甚雨爲如何乎、可停止歟云云、被奏云、今日雖有雨儀、是行幸以後事也、見降雨何有令幸臨乎、早可令留給之由可奏者、頭辨奉勅仰民部

行事辨出立於嘉喜門北庭、（大臣參時深磬折）上官在後、當門西腋東第三柱、

次辨以下著座（辨著嘉喜門內腋、上官同門東腋、）

次上卿召外記、問使等參否、召辨問幣物具否、使王可給馬、（以外記付藏人被奏歟）

次上卿被渡東廊座、（辨暫出於嘉喜門外、上卿過之後相從、）內記持宣命、在上卿之後、辨相並內記行、上卿著東廊座、辨同著、（脫履）次開門、（東福門）

使中臣　忌部　占部

入自同門、進列立於大極殿艮角、忌部進取外宮料授占部、次取內宮料退出、

次召使王、著軾給宣命、

上卿還北廊座、

辨以下出列立於史座乃次間一行、（北上、東南上、）

次上卿退出（辨以下出立如常）

〔雲圖抄〕九月十一日例幣

無行幸之時有御拜（見祈年穀奉幣部）

〔續日本紀〕（四十桓武）延曆九年九月甲戌、○十一日奉伊勢大神宮相嘗幣帛、常年天皇御大極殿遙拜而奉、而緣在諒闇、不行常儀、故以幣帛直付使者矣、

〔西宮記〕（九月）十一日奉幣

承和七年九月十一日、伊勢幣、依太上天皇○淳和崩、不御八省自神祇官齋院進發、今日中重犬死、因之內侍不臨其所、令卜部奉幣帛云云、

〔續日本後紀〕（九仁明）承和七年九月癸未○十一日遣使奉幣帛於伊勢大神宮例也、

〔三代實錄〕（四十陽成）元慶五年九月十一日丙辰、遣散位從五位上輿我王、神祇大副從五位上大中臣朝臣

無臨幸而奉幣使發遣

隨所濟被奉獻之、色代猶不滿本數、朝家之陵遲、只在此事歟、今度予進申事由、爲省家使補保之勤可注以見色任式文沙汰進畢、右少辨顯雅奉行、忌部於神宮可褁之由申了、然而路次猶依有恐、於北廟褁了、且可進禰宜請所之由下知之、與行條頻有叡感、敬神之志、報國之忠也、

〔大神宮司神事供奉記 三〕寬元四年九月

抑例官幣種々御神寶等雖有名字、有名無實之體也、而自今度可被與立云云、仍被仰國司之處、難叶之由進請文之間、當御祭〈○神嘗〉二八、五色幣外、號例幣、前前被副紙歟、今度現物絹糸等云云、別宮御料等有之歟、

〔百練抄 十六後深草〕寶治元年九月十一日辛酉、例幣也、上卿內大臣〈○藤原實基〉直參本宮、內侍發遣之後、主上出御南殿、攝政〈○藤原兼經〉令奉拋給、於年中行事障子邊、萬里小路大納言相代奉拋之、職事扈從、御拜如常、

〔江家次第 九九月〕例幣次第〈無行幸儀〉

早旦、先褁內宮料、〈內侍、辨、〉忌部　內藏官二人

錦一匹〈藏人所進之〉　兩面一匹

綾五匹〈五色青赤黃白黑〉

以調布結其上、入柳筥、〈以木綿結〉以葉薦裹之、〈附短冊〉

又褁外宮料

五色絹

次居小安殿、〈東第一間簀上、外宮料在外、〉內藏寮護之、同寮書送文、

次神馬事〈四匹、左右各二匹、二匹置鞍、二匹不置之、〉

刻限上卿參八省

經殷門退出自待賢門南間、于時酉四點也、今日始終發前聲、又使王申御馬事、昨日於里第仰外記了、仍今日外記不申上、又余不奏事由也、此旨密々語示頭辨了、雖不可必然、不知子細之人、定存失禮歟、仍所觸示也、 十二日癸未、入夜例幣奉行外記廣元來云、使王兼不申所勞、參八省之後、雖申風病更發之由、仰可相役由令立了、而於粟田口俄絕入了、午時許告送此旨、則觸頭辨、頭辨云、須申上卿又經院奏也、然而事已火急、只指替他使可發遣也者、因之催出經隆王令立了、不申此旨之條、依有恐所執申也、余仰云、外記先可觸上卿事歟、然而事火急、直令申職事、又非強過怠、凡事已非常、有如此之哉、問賴業眞人可令申、諸社祭使、於途中病惱恒事也、然而至于此條、尚有不審者、外記退出了、以職事光能令申也、

〔三長記〕建永元年九月十一日己丑、今日例幣也、上卿內府（〇藤原忠經）、辨右少盛經奉行也、晚頭參內、殿下（〇藤原家實）有御參、遣神祇官之使者歸、幣發遣之由申之、頭親國朝臣奏事由、頃之出御南殿、少將雅淸朝臣取書御座御劒前行、平頭（〇親國）幷予（〇藤原長兼）候御供、御拜如例、隆宗朝臣有輕服事、奉仕御裝束、可有憚歟之由女房問之、平頭答云、內內可被申殿下、隆宗朝臣退出之由聞之、殿下仰歟、平頭語云、上卿不被參陣、於里亭開卜串、直被問神祇官、如此之時請奏如何、予答云、不知先例、但案其理、向里亭可下之歟、只今不可參陣之由被告之、仍不能參向、今日不下請奏歟、不下請奏之條、有先例之由盛經稱旨、平頭語之、右中辨淸長朝臣、去頃參水成瀨殿、歸洛乘醉、馳馬落馬、其面破云云、當時奉行役夫公事殊可愼、而馳馬尤不穩便、

〔葉黃記〕寬元四年九月十一日丙寅、例幣也、內府（〇藤原忠家）參行給、攝政殿（〇藤原實經）可參神祇官給之由有仰、而依御物忌不然、殊一上之攝政關白兼大臣之時、被開卜串先例也、但御物忌之上、近例強不然云云、仍無此儀、但昨日依御物忌不被開之、次上可開之由被仰外記了、內府開之云々、抑伊勢內外二宮御幣、建久被定季宛國之間、至于當時存式數、別宮十一箇所幣大藏省功諸國近代麻布雜紙等少々、

略仰含了者、則退了、次以官人召內記、則大內記光範參膝突、余仰云、宣命草持參（禮、先問云、辭別事定存知哉、申云、所存候）者、光範退則持參之、（入筥、件草載辭別許、此事有兩說、或宣命詞皆書載之、或依例狀只載辭別許、今如此、余問內記、申云、依爲例狀所載辭別也者、或觀載辭別許之條雖云々、仍一且）（雖相尋、是又非失錯、仍不改直也、隨又先例甚多、）余披見了返給、仰云、內覽、（清書內覽可申之由仰之、攝政之時參、雖可覽之、爲近例之上、事依可懈怠、仰此由、）光範參向攝政之亭了、暫而持歸云、清書不可內覽者、余返給筥、內記取之退、立小庭、余進弓場、（其路見去年新年[illegible]來[illegible]記、仍）（不註之、）付頭辨奏聞之、小時歸來、余取筥給內記、復陣、內記置筥則返給云、可清書、則持參清書、（依者之、之歟）令持內記進弓場、付頭辨奏聞、返給之、內記不還著陣參八省、（光範以前監令申云、有所勞不能參八省、余云、參可參事也、乍參內申所勞、不打任事也、）者、上官相從入自待賢門、（用南門）經慢門、先是行事右中辨爲親朝臣、六位上官一人、立嘉喜門西腋、（東面南上）余自慢門下、垂裾、對辨相揖、（辨跪地、上官平伏也、）入嘉喜門、自砌上西行、著北廊座、（隨身以弓襲幔、著第二間兩面、半帖也、砌上置小筵爲軾、）兩揖了、以扇直沓（沓在簾也）之後以召使召辨、即爲親入自嘉喜門、經砌參軾、予問幣物具否、申具了由、余目之、爲親不著座、出嘉喜門了、次召外記顆業、經砌參軾、余問使參否、申參候由、余目之、顆業稱唯、出嘉喜門了、次以召使傳仰內記可持參宣命之由、則外記廣元參上、（不著軾、候砌也、）申云、大內記光範申云、雖參上依有相勞事、不能著東廊座、可隨重仰者、仰云、乍出仕申此旨、頗不當事也、尚早可罷寄者、大內記光範持宣命筥參上、立嘉喜門南壇下、次余起座、經砌自東廊西砌南折、（上官等相從、內記在予後、辨已下列其次也、）入自座北間、自座北頭著之、兩揖如恒、辨以下著南面座、內記置宣命筥於予座前同著座、次余仰辨令取幣物、則中臣祭主從三位大中臣親隆朝臣率忌部卜部等、入自東福門、經慢門列立小安殿南庭、（東上北面）次忌部進登自小安殿南面東階、取外宮幣、於階上授卜部、（卜部登階級受取之）一次取內宮幣、降階不復列直進行、次卜部、次中臣、次第出自東福門了、次余以召使召使王、即致重王入東福門、經砌著軾、余置笏取出宣命給之、（使王服前申所勞之由、依不足言給宣命了、）使王取之退下、次傳仰辨以召使令見幣出宮門御哉否、暫余目內記令取筥、此間爲親申云、可有廻廊列哉否、余云、先例不同、然而不還著北廊座之時、先退出有便宜歟者、爲親以下起座、出自嘉喜門了、次余經本路出同門、辨五位外記史以下列立門西腋、（辨跪地、上官等平伏、五位蹲平伏、）余對辨相揖、

之、上卿奏事由召仰者也、而明日不可參陣、於八省令申者、有煩于奏聞、(但攝政被參八省者非此限、)今日於里第可申歟、且又先例如何、令申云、如此之時、外記不進申者也、開卜串之儀了、使王申御馬者、直付職事奏聞可給之由、自御所被仰下、是先例也、更於八省不可申上、又不可被仰下者、則下官著衣冠出居上達部、(外居出也、東面、)以家司肥後守光經(衣冠候)召外記、則大外記賴業具人持卜串筥、先候東廣庇、(南有障子內也、)下官目之、賴業稱唯、進來登長押、(入自予居當間也、)膝行指寄筥、拔笏候、下官取之置前見了、(或取出透見之、然而今度不取出、又一說云々、)押出筥仰云、開々、賴業插笏取筥置前、取不合卜串筥中下方橫置之、(或取出自筥置之、兩說云々、)開了並置筥內、(乙下合、丙合、)進之下官、引寄筥見了、(是又不取出也、)返給、賴業取筥、予仰云、遣乙下合致重王、賴業稱唯揖退下、次下官以光經仰使王御馬事、(先是同賴業依被申所仰也、)了後光經語云、可仰六位外記之由賴業令申、仍仰之廣元、稱唯云々、外記申云、大內記可參之由領狀也云々、先是奉行右中辨爲親參入申云、于今不參、昨日進豪仰、返々恐申云々、余以光經仰云、明日午刻直可參八省也、每事可催具、又神祇官請奏事、先例多之、然而可依近代例者、爲親退出了、例幣之宣命無辭別、大臣爲上卿之時有二說、一說當日先參陣開卜串、幷奏宣命、次參八省、一說依爲例狀宣命、更不可奏聞、仍當日不參陣、前一兩日於家中開卜串、當日直參八省云々、此所說之中、申合攝政(藤原基房)之處、命云、兼日於里第開卜串、當日不奏宣命、直參八省、爲善云云、加之舊記多如此、就中九條殿(藤原師輔)之子孫、用此儀之由有所見、仍旁就此說了、今日家中裝束更無相改事、只如例也、　十一日壬午、此日例幣也、辰刻沐浴、爲致潔齋也、巳刻、頭辨長方朝臣送書狀云、今日奉幣宣命可被載天變事之由、只今所被仰下候也者、答云、奉了、只今可參陣、此旨仰遣大內記許了、然而若有懈怠歟、且直可被召仰歟者、則大外記之許仰遣云、可有宣命辭別之由俄仰下、仍先只今可參陣、內記召觸可候陣者、又大內記光範之許仰遣宣命辭別事了、雖須召仰、依事可遲引、所不遣也、未刻著束帶參內、(先有祓事、陰陽師有親、陪膳頭方朝臣、束帶、)著陣端座、令置膝突之後、招頭辨示云、宣命辭別事、以今朝仰申遣大內記之許了、其上有子細者、定直被召仰歟如何、頭辨云、其外殊子細不候、但大內記只今參候、大

省之間、可候御供者、此間内大臣(雅實○源)參仗座、内記被内覽宣命草、(近日頗以有天覽、被辭別也、先例内覽草、无辭別時无草也、)依御覽之後返給殿下、有御湯殿也、未刻内大臣進弓場殿、令奏聞宣命、(今日内御物忌也)頭爲房取宣命持參御直廬、御覽了返給、(於殿上雖可御覽、御裝束遲退之間、於御直廬、具以御覽、)此次使王御馬申由被奏聞、已勅許、内大臣引率上官等、出從月花陰明門等、被向八省了、其後殿下從殿上并弓場殿方出御、(下官、治部卿基、左宰相中將家、藤宰相顯、殿上人中將殿、貫首爲房以下七八人許扈從、)候御共人々於弓場殿相從、出從日華陰明修明門、逕西行入從昭慶門中戸、御于小安殿、(御裝束如常、中戸東間供殿下御座、立屛風、敷兩面端疊、其東間供御拜御座、兩面端、其東置御幣二裹、如常、入御之間、上下等平伏、西幔外、行事權右中辨爲隆候嘉喜門北、)扈從公卿等候同小安殿中戸間也、(敷座也)先供御手洗、新中將宗輔陪膳、五位二人、藏人辨、兵部大輔登送、殿下先解御劍、御拜座有御拜、兩段再拜、次使有召之由、頭爲房告之中臣、(祭主親定朝臣)忌部(兼則)卜部(兼貞)列立庭中、此間内大臣移著東廊座、忌部參小安殿中戸給幣了、殿下仰云、中臣末宇古、(御幣强不開程也)祭主稱唯進御所、仰云、能申天進禮、稱唯、相具幣退出、(入時中臣爲先、出時以幣爲先、中臣在後也、)次内大臣召使王給宣命之後、被還著本座也、(无儲社幣時不被歸著也、是被相待殿下御出也、)爰殿下以頭示給大臣云、此次可廻見八省廻廊修理也、然者早先可被歸也、上官等同可罷出也、但至大夫史盛仲一人可候也、是依爲八省修理行事可扈從之故也、爰内大臣引率上官等、從待賢門被出了、

〔玉海〕嘉應三年(○承安元年)九月十日辛巳、早旦奉行職事之許送書狀云々、明日奉幣可有辭別歟如何、返事云、今度不可有辭別云々、仍明日直可參八省、今日爲開卜串、大外記可來之由遣仰已了、返事云、相具卜串只今可參者、則奉行外記廣元來、相尋云、大内記參否如何、先日相催可申左右之由令申、而于今無音、如何、令申云、加催之處、申云、有所勞、直參院御所可申左右云々者、申狀不慥、如聞者不可參歟、何于今不申此散狀哉、重相尋參否、早旦可期奉行職事、更不可懈怠之由仰了、頃之大外記賴業參來、予以家司光經仰云、今度奉幣宣命、不可有辭別之由今朝被仰下、仍明日直可參八省、今日可開卜串也、於里第開卜串之儀恒例也、然而近年開之不聞歟、兼又使王申御馬事、先參陣之時、外記出陣申上

但五位外記史以下津津居、年來無修明門出立、依人數少歟、

若大臣爲上卿者留入省、大辨一人又留、其後可被退出、縱雖有出立、至于大臣者不可前行、

今日小安殿馬道以西南砌、殿上人座、西砌御樂陪從座、御輿宿所等不可儲、異行幸儀、

執柄番長、走居陰明門外庭北方、如左衛門陣儀、宸筆宣命之時、有東庭御拜、雖幼少主自拜給、是公卿使時例也、

至于宸筆宣命者、攝政被書檀紙、所所屏幔大幔等如行幸時、仍不委記、奏者往反路、出自昭慶門入自嘉喜門、而故通俊伊家等、褰艮屏幔出入、人不爲可、使王申御馬事、於入省申殿下、

〔柱史抄上九月〕十一日伊勢神嘗幣

天皇未視萬機之間、攝政參大極殿行之、著小安殿、召舍人中臣。。。。。。如主上、但上卿起座、著東福門座、於廊座召王賜宣命、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年九月九日丙申、齋內親王入齋宮、是日早朝、臨葛野河以修禊事、即使參入豐樂院、天皇御豐樂院、令發內親王、天皇喚中臣、神祇大副大中臣朝臣有本、稱唯昇殿跪侍、右大臣〈○藤原基經〉代天皇勅曰、常〈毛〉奉進〈留〉九月神嘗幣帛〈乎〉、汝中臣如常〈久〉申〈天〉奉進〈禮止〉宣、有本稱唯、〈○中略〉降殿退出、是時天子幼少、右大臣攝政、故行此事、齋內親王駕輿、出自朱雀門掖門、東向就路、乘輿還宮、

〔本朝世紀〕正曆元年九月十一日癸未、諸卿不參、但今日依例被立伊勢奉幣使日也、以酉一剋大納言藤原朝光卿參著左仗座、召外記、于時少外記小槻善言參著膝突座、上卿仰云、諸司皆具候哉何者、善言申云、諸司悉具了由申能出、于時上卿召內記、令進宣命草、內內覽之了、以內記被進攝政〈○藤原道隆〉里第、即覽了返進上卿之、于時上卿率辨以下、著入省院東廊、被進件奉幣幷御馬四匹、其儀式如恒、了以亥四剋退出、

〔中右記〕天仁元年九月十一日戊午、伊勢例幣也、午時許、依攝政殿〈○藤原忠實〉召、參內裏御直廬、是可御入

〔續百一錄〕元文五年八月廿九日、例幣ニ付、從來卅日曉御神事、(來九日晚到三十日朝御潔齋候、)三　九月十日、來十一日例幣出御ニ候、

寛保二年九月九日、今晚ヨリ神事別火也、(今年は一日ヨリシメ引別火なり、)明年ヨリ九日晚ヨリシメ別火也、札立ル、九日晚カヽリ湯ス、

幼帝時奉幣使發遣

〔江家次第九九月〕十一日小安殿行幸次第

攝政參小安殿被奉遣伊勢幣儀

小安殿裝束、同入省行幸、但馬道東衝立障子立南北二枚、不立中一枚、倚子邊衝立障子立三枚、東衝立障子內、敷滿葉薦、其上敷滿長筵、不及南障子五尺許、其北方敷繧繝端三枚、(一枚東妻、西中敷、)件帖南妻、與北衝立障子南妻平頭、

其東第一門西邊立大宋御屏風三帖、(立南北妻、脇之立切屏風、)件屏風不及南障子五尺許、其東敷繧繝端半帖一枚、爲拜座、(須用高麗端、然而前例如此、)馬道西邊副衝立障子敷葉薦、其上敷緣端帖、爲御共上達部殿上人座、自餘同行幸、上卿座敷東福門南面西披、若有公卿使人之時、並敷其座、(並南面)若參議爲使者、其座可西面歟、同門內東披敷行事辨座、(東西妻、西面)其後敷外記史內記等座、

件上卿以下座可敷子午廊、可如常奉幣之由、故經信卿所執也、仍彼卿爲上卿之時改敷之、當今度敷東福門外、

上卿參仗座、奏聞宣命、畢攝政參入省給、近習公卿殿上人相從、上卿又著昭慶門內座、召外記問諸司具不、召辨問幣物具不、此間攝政洗手給、諸司供之、(五位藏人陪從、近代或殿上四位、)

打敷一枚(近代無)　手洗一口　楾二口(或一口)　手巾筥一(用柳筥歟、打敷一枚、土器二枚、)

殿下著奉幣座、(經屏風南、)先兩段再拜、次中臣忌部參入、無少納言、召藏人以御出成由可告歟、先是豫立幄外、賜幣如常、上卿著登廊座、使給宣命又如常、事訖執柄還給、辨少納言外記史出立西方、

記役事、奉行職事宣命送官務被示云、六位史可令勤內記代云々、官務返答云、內記代事、召仰左一盛時之處、員職康顯兩局輩、申子細令辭退之處、爲傍輩無左右難領狀由不可存知之由申切之間非無其謂、口入不及力之由申之、返進宣命云々、依之大內記爲職事被催出者也、去月祈年穀奉幣又如此、○中略 伊勢衞士申子細遲參、仍以尋常之衞士先令請取御幣云々、 三年九月十一日丙午、例幣也、上卿鷲尾大納言、○隆遠卿 左少辨資世朝臣、少外記中原康顯、少內記分配 右大史小槻通音、官掌口口、召使宗岡秀國、神祇官中臣卜部忌部等可尋註之、內侍有參行云云、春日神木今月二日有御動座于移殿、雖然今日之幣無殊儀者也、奉行頭辨親長朝臣也、藤氏參入、幷可爲何樣哉之由上卿依被申、被尋例於局務、又有勅問於殿下、不可有殊儀之由被申之間、被遂行畢、宣命無辭別之沙汰者也、

〔基量卿記〕寬文十三年○延寶元年 九月十一日、例幣、上卿小倉大納言、○實起 奉行資茂朝臣、辨國豐、无出御、申暇向神祇官、作法每事無異事、

〔百一錄〕延寶三年九月十一日、大神宮例幣陣儀、辰刻、上卿中御門亞相、○資熙 辨裏松左少辨、奉行頭中將姉小路 云々、祭主今日赴勢州、尤出御、

元祿三年九月十一日、例幣、參向吉田神祇官、上卿久我大納言、○通誠 辨勸修寺、從御再興以來到今日無雨儀云々、今日亦快晴也、幸甚、 十二年九月、例幣、上卿東園大納言、○基量 辨尙長、奉行日野云々、藤波依輕服不參向勢州、大宮司房長代官勤仕、 十五年九月十一日、雨下、例幣、上卿今出川 右大將、○伊季 辨裏松益光、奉行頭右大辨、河水高而假橋悉引去、上卿以下從三條大橋可令參向議定、可爲雨儀也、御再興以降、雨儀之例無之哉云々、參向藤波二位、使王代河越兵庫頭、忌部代異繼宮內大丞、

寶永二年九月十一日、例幣、上卿中院亞相、○通躬 辨烏丸光榮、參向藤波二品、去八日紀州松平內藏頭逝去、大坂邊自十日十二日迄鳴物制止、於京都者無沙汰、依御神事也、○中略 一條前殿下、○兼輝 頃日中風薨去云々、不及薨奏、依御神事也、

頗難治、且公事零落、何事若之、猶嚴密可仰候、康隆雖重天命問答、不可叶之由申切云云、此上更無術計、仍無力著座之、經北廳東、自南方進東、自座後著座、其路相計有便之時之儀通之、荊棘滿地之間、隨身居様不任意、只群居後方也、 次行彙朝臣著座、東面 次外記史等著座、辨後、又東面南上、 次内記置宣命筥退去、少内記者加著上官座歟、不然如何、幣物早可令取由示辨、史康隆下知之、而幣物不具之間、難立之由忌部申之云云、忌部與衛士頗口論、然而無程立御幣東門之邊、暗之間不奉見之、聞警蹕聲平伏、辨以下平伏、次使王參進直著軾、取出宣命給使、退出之後、内記進取宣命筥退下、次辨以下退、次起座、存可出立歟之由相待候處不然、以召使偸相尋之、辨示云、依夜陰不可有壇下之出立歟如何、但可隨上宣云云、雖夜陰猶可有出立歟之由答之、即辨以下出立北廳東壇下、南上東面 辨深磬折、六位外記史蹲居相揖辨、大臣非大辨者不揖、或猶揖、今度就家記所見等聊加了見、隨揖儀了、不具記、 經本路到門脇座南邊暫立留、以召使示辨云、於門外又出立候儀歟、若被存其旨乎、但近例大路門内許歟、宜在御所爲、辨答云、此事不存知、但可隨上宣、又示云、門外又出立事存例、然而云夜陰云近例、被略之條モ有何事、不聞重返答即出門、外記史等出立如初、於郁芳門乘車、○下略

〔康富記〕應永廿二年九月十一日癸亥、例幣也、上卿中院權大納言源通守卿、右少辨藤原經興、少外記清原親種、左少史高橋量職、官掌紀氏村、召使宗岡行繼、神祇口等參行之、無陣儀、直皆參神祇官云云、使王御馬不申云云、御幣發遣之時、上卿著南廳、辨著北廳座、外記著東屋座、上卿西面、辨外記史東上南面著之云云、外記御訪貳百疋云云、

寶德元年九月二日己卯、例幣之三薦分配也、御訪自大藏省年預町口判官員弘許請取之了、八十疋也、其口二十疋號酒直抑留之、近年如此請取、如恒書遣了、 十一日戊子、例幣也、上卿鷲尾中納言、隆遠卿 右少辨勝光、少外記康顯、本分配三薦康繼也、 左少史盛時、大内記菅原在治朝臣、召使秀國、内侍以下參官之、依雨儀、發遣之時、北廳東簷下、上卿南一間、辨二間、外記史三間、一列南上東面也、大内記不及著座、上卿座定之後、進置宣命筥於上卿前退、上卿召使王賜宣命、次召大内記令撤筥、北門儀如恒云々、仰内

到郁芳門下車、（召使可來向此處、仍相尋候所不見、隨上官參否、及事之具否、乍乘車可相待之旨存之、仍騎令相尋召使云云、無程走來、内々相尋事之具否之處、悉具了、但辨未參云云、奇怪奇怪、北門前上官可出立、仍可相待辨參歟、然而先下車了、）直西行（官人懸於弓持之、召使一人前行、右方不發前聲、如何、隨身同前行、左方發前聲、）到北門前、（不引幔、前駈留此所、）大外記中原師利、左大史小槻清澄、六位外記史兩三出立、（五位隷居歟）先之下裾、此後官人相從、左方下臈隨身暫留此所、入門之後、追可入同門之由、兼令仰知了、（自他門可參會也、就無便宜、仍如此仰了、）著門東腋座、（辨先出門内、下可請益入歟、）殿云云、而忘却了、進兼有軾、於軾東方揖、脱沓著座、（南面端半帖西面敷之、仍卽向西正座揖、官人以弓逢寄、此所、召使可召歟、隨身列居門腋座東南方、東腋之時可許之、）召使在眼路、辨猶可催促之旨可仰官之旨、倫仰召使了、于時申剋也、到酉半辨猶不參、官催促及十餘箇度云云、然而散狀不分明歟、依脚氣所勞長座無術、仍不堪不審、以別儀遣下臈隨身、今間仰可參之由、非上卿直可催促事歟、但兼日仰可早參之由、先例也、然者重催促有何事哉、如此之時、使隨身常事也、有准據之例等、須臾馳歸云、已參云云、此間召召使仰云、外記召、（以此召使直沓、聊令氣色候故也、）召使出北門召之、大外記師利就軾、問云、内記參也、外記申候之由、又問云、可有卜串如何、（近來大略无此事歟、然而爲次第之事之間問之許也、）外記申候之由、若闕違歟之間、重相尋之處、其時申云、在京王一人之間、近代不能用意云云、可任近例之旨仰了、次又問云、使王候哉、外記申候之由、次目之、外記稱唯退去、次六位外記自北廊東方進壇下跪申云、使王申御馬、仰云、參内申々、外記稱唯退去、秉燭之間、行兼朝臣參入、（自東門入云云）著北戸裏幣歟、欲裏終之間、可告來候旨仰召使了、無程召使來云、幣大路裏了云云、次召召使令召辨、（辨北方）辨自北廊東方就軾、問云幣物具乎、答具之由、此次下内藏寮請奏、（自里第懷中）辨結申、仰云、依請、次辨退下、次召召使仰云、内記宣命持進メ、次少内記安口豐宣（右大夫也）入宣命於莒持參、就軾指寄莒於前、仍披見之返賜也、（抑内記置）（宣命於上卿前披見事、舊記所見未詳、只内記持宣命進立壇下之由有所見等、但近來時分如此云云、今度直參神祇官之間、未見之宣命也、仍披見尤有便宜、）史取莒立北廊北邊、（東面）次起座（開揖如常）向東幄、（隨身取松明相從、召使又相從、前聲進發已前、共不發前聲例也、凡出門内者、不可發前聲歟之由仰候了、）抑東幄不見、只敷其座、許希代事也、以召使相尋官之處、六位史康隆走來云、大藏省依無其定、難構之由、付奉行職事雖歎申、不及御成敗、仍如此、今且御參行之間、敢別雖加問答、更不事行、如何可仕乎、又仰云、雖爲如形、無其儲者著座

御草鞋、頭卿給御笏傳藏人、次還御本殿、於額間長押下予給御草鞋、直給内豎了、人々分散、今日供御膳之時不警蹕、當日不供魚味、當日幷前後齋僧尼不參入云々、

辭別趣口宣偁

造大神宮正殿心柱、豫擇良辰宜下之、誤以他日立置之、緈已出自不圖、雖守過改格言、決之筮卜、知其休咎、任探索之趣、無改立之儀、尤爲違失、旁多畏懼之由、宜令載例幣宣命辭別、

不書年號月日幷位署、以詞可仰之間、聊所注載也、

〔園太曆〕貞和二年九月十一日、今日例幣也、上卿内府（〇德大寺公清）參仕云云、權左中辨行兼朝臣爲行事、例幣之儀可注給之旨申内府、後日被書送也、

貞和二年九月

十一日、例幣也、去六日藏人治部少輔兼綱來、仰可參行之由、仍申領狀了、殊可早參、内侍參以下事、不遲候樣可申沙汰之旨、其時卽仰職事了、又幣物早々可催具旨、昨夕以消息相觸奉行辨（權左中辨行兼朝臣）畢、又每事早速可催具之旨、以家司奉書、仰大外記中原師利了、未旦漸欲參、可被早參旨、重相觸行兼朝臣之處、幣物未具、忩催具自神祇官可進使者云々、返答之體、以外可遲之趣也、仍只參神祇官、可相觸之旨成意案了、且又爲催促也、朝間藏人式部大丞藤原親尹、持來内藏寮請奏、（此請奏事、六位人奉行來事也、而今近來六位不知之、奉行職事執頭沙汰云々、仍兼令仰知親尹了、爲家僕之故也、）留之、沐浴解除之儀如常、（齋事、或三箇日或當日兩儀也、於家例又兩樣也、今度就三箇日儀了、）未刻著束帶（蒔繪劍、無紋帶、紺地平緒、）乘車出門、（車副四人、警蹕如常、）

前駈二人

隨身上﨟二人（官人秦久有、番長同弘躬、但依所勞云云、雖片時可來會路次之旨重仰了、仍令引移馬於車後了、）

近衞二人（二座秦利茂、三座下毛野元治、）

已上各壺垂袴如常

事也、

〔勘仲記〕弘安七年九月十一日丙戌、早旦參內、今日例幣、依分配所申沙汰也、上卿以下官外記遲々事、仰出納職成所令催促也、內侍事所相觸勾當也、自身可參向云云、出車藏人遠繁獻之、今日奉行六位也、近年公役澁口無之由出納申、雖不可然、誠難治歟、面々雖相催、或所勞、或故障云々、午斜花山院大納言辨右少雅藤奉行、上卿以下參入、內記遲參之間、暫可祗候御所方之由被示、內記參之由外記申之、仍所告申上卿也、次著陣、予〇勘解由小路兼仲於宜仁門代邊伺之、召官人置軾、次被召外記、持參卜串、被披覽、外記退、次予出陣就軾、仰辭別趣、宿紙書之、不書年號月日位署等、以綱可仰之間、聊所付注也、是故實云々、退、次上卿召內記、大內記帶所勞不參、少內記祗候、被仰辭別趣、次內記進宣命草、辭別草入筥、上卿以官人召予、參進就軾、被押出筥、其詞云、可奏聞之由被命、無辭別之時、上卿不奏、宣命直參本官者例也、予自持筥昇小板敷參御所、於臺盤所付內侍奏聞、內覽被免之間不及此儀者也、小時被返下、出陣返下上卿、取直筥奉之、仰云、令清書ヨ、次召內記被仰清書事、予此間下內藏寮請奏、仰出納所令書請也、引裹紙加懸紙、上卿云、於本官可下辨之由被命、辨史等祗候本官故云々、上卿被結申、仰云、申ノマヽニ、次退參御所方、次內記持參清書、入筥、次上卿進弓場被奏、予出無名門代取筥、其次上卿被申云、使王御馬事申、參御所方、如初付內侍奏聞、小時被返下、奉上卿、取直筥所奉也、仰云、御覽覽ツ、又仰云、使王申御馬事聞食ツ、次上卿被參本宮、差遣小舍人於神祇官、伊勢幣發遣後、歸參可申之由仰之、先之供御拜御座南殿母屋東第一間、立廻大宋屛風、其中敷小筵半帖、當向開屛風戶、仰掃部寮敷之、南殿御帳懸帷、兼所下知裝束使也、御格子額間御帳之間御拜間上之、自餘垂之、自御殿額間至南殿御後供筵道、掃部寮役之如例、小時小舍人歸參申伊勢幣發遣之由、內侍又歸參、了內々奏事由、及晚出御、予進御草鞋、非職六位持之、予令取之處、隔可傳貫主之由、頻有藏人執之氣、予答云、貫首闕他役上、貫首祗候之時、雖六位持之、可傳五位藏人之由被仰定了、其上不可有子細、大略事取了、頭大藏卿候御裾、頭中將公敎朝臣取晝御座御劍前行、予幷藏人大進定光候御後、藏人遠繁持御笏筥候御共、於御屛風戶外令脫御草鞋御、予參進給之、自令持候御帳邊、次入御御拜座、頭卿進御笏、便帖置御裾、引褰御屛風後枚、御拜兩段再拜如常、御拜了出御、予進

（獻辨曰、顯職不肯、仍今朝問中納言長方卿所令如何歟）予起座直出北門、歸著門腋座、聞幣進發可出也、而依訴訟猶使々在東院、
仍予直退、于時未及秉燭、雨止入夜月明、
於東屋辨曰、幣物相構沙汰、出絹二匹有餘分返國了、御馬四匹、左右各二匹可引獻也、而左二匹引了、右沙汰者逐電、重遣催了、雖遲々今夜中令沙汰出者、不可事闕、先予問曰、幣物見在所入物何々哉、辨曰、錦一段自藏人所渡也、是甚細也、先々見之、帖タル上件其文所見也、於帛者、只如形渡糸者也、而今度纐絹相尋子細之處、藏人所申云、近年如此者、兩面一段自率分切諸國尋常物也、六丈綾六匹、諸國濟之、賜女工所令染六色、往年者希有綾也、而綾斷了、近代還美麗綾也、雖非六丈、纐之又例也、是內。宮。幣。也。六丈絹六匹、是又諸國所濟也、同賜女工所令染六色、國絹也、不用纐絹及闕如之時、聞雖纐之、猶非打任事、是。外。宮。幣。也、別宮幣、行事辨不知之、行事藏人下請奏云云、而今度官請奏沙汰之由承之、仍相尋頭辨之處、行事藏人懈怠、不獻之由稱之、可下知云云、然而件宜了、于今不到來、著他人奉行歟、件請奏多下一上云云、

〔明月記〕承元二年九月十一日、巳時參內大臣殿、（〇藤原良輔）依例幣事也、午終許御祓了、令參神祇官給、郁芳門今夜穢籙門、自待賢門令入給、藏人宗親馳參申云、彼門外今夜忽有穢物、自晚間謠家外記等申事由、依爲門外不可有穢、於例幣不可延引、御幣可出門、未定、仍只今參殿可申此事、大臣殿卽令入給、祇匝小路南行令參神祇官給、右少辨宜房、大外記良業、大夫史國宗、家禮大臣、殿曳裾、顧辨揖令入給、此間敍列無音、寂而及晚、御幣可出中御門之由云云、事了御幣神馬等出、次祭主卿出、次大臣殿御退出、召使追前如常、御共自七條邊秉燭歸宅、

〔玉蘂〕建曆元年九月十一日、例幣、上卿二位大納言良平卿、早旦送書云、依無辭別不可奏草清書、辨可參神祇官、但依開卜串、先可參陣也、納言於里第不開例也云云、九記例幣事可催示云云、予（〇藤原道家）答云、此等旨尤可然、下官奉行之時、王使一人在京、仍不開卜串、辨參神祇官とゝき九記無所見、但散不審、

町在家、不殘一物搜取之、依之馬部等成訴、依無神馬不遂發遣、幣物等奉置東院云云、以浮說注之、後聞遂以發遣云云、

〔山槐記〕元曆元年九月十一日丁亥、從去夜終日甚雨、今日例幣也、去八日可奉行之由、頭左中辨光雅朝臣示送、昨行事權右中辨光長朝臣示送曰、幣料諸國難濟、及遲々歟、催出之後、可申案內也者、申刻許、權辨示送曰、幣物少々催出了、漸可令參給者、仍令權漏刻博士季長解除、今朝所沐浴也、參內、閑院前殿政季、邦長、直著端座、令敷軾、召外記、少外記淸原信安參上、問卜串、外記稱唯、退歸持參著軾、返給之令開之、以貲遠王可令勤使之由仰之、令官人仰之、此後外記參上、申使王御馬之由、仰云、令候ヨ、外記稱唯退、少內記持參宣命、依例狀在進淸書也、予〇藤原忠親披見之返給、令退立、召官人令撤軾、予就御所、先々於殿上南立蔀戶下奏之、而其所水湛、仍立中門廊南東間、付藏人左兵衛尉仲國奏宣命、同又使王御馬申之由令奏之、頭五位藏人不候、仍付六位也、退欲出東門之處、前驅云、車廻二條堀川了者、大內儀兩日出敷政門歟、准其儀雖車已有西里內、又隨便仍經南庭參神祇官、召使二人來、向郁芳門內、前行追前入幔門裏之時、以前驅之所差召使、著門內東腋座、依雨无出立、以召使招辨、歸來曰、只今令奏幣、了可參者、內侍伊豫令入云々、頃之辨從正廳西北來著軾、予問云、幣ハ被裹了ヤ、辨云、具了、予目辨退、次召外記、外記直著軾、予問曰、使王候哉、外記申云、候、予又仰云、使王爾御馬給ヘ、外記稱唯退、次召使仰云、內記宣命持參ト仰ヨ、即內記持宣命立門內屏下、予起座著屋座、依雨儀經簷內、辨外記相次著座、內記置宣命予前、著外記北方、史不著如何、予仰外記令催促之、外記候座、令召使催之、神祇權大祐大中臣宣康、權少祐齋部明茂、卜部兼助、无官者也、入東門參入正廳、奉出幣、此間雨猶不止、風相加甚恐怖、予以下平伏、出御東門之後起揚、仰外記令召使王、正親正貲遠王入東門參上、蹲居軾傍、出訴訟之詞、近江國保田卅丁、依爲司正貲遠可知行之處、伯仲資王知行之、付頭辨雖訴申、于今不蒙裁許、无此裁斷者、難進發者、訴詞甚多經時刻、予仰外記可申頭辨由仰貲遠、慭賜宣命、予目內記令撤筥、辨以下立隱簷內、依雨无出立也、問幣事之時、於

高知氏、稱辭定奉留、天照坐皇大神乃廣前仁恐見恐毛申賜へ申久、常毛奉賜仁、九月神嘗乃大幣乎、王官位名中臣官位等乎、差使氏、忌部官位姓名加弱肩爾太襁取懸氏、持齋利者令捧持氏奉出賜布、此狀乎平久聞食氏、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸奉給へ恐見恐毛申給は久申、辭別氏申賜はく、大神宮幷豐受宮等乃御正殿、及高宮乃御鏁等乃舌、頗弱勾氏、雖無別損早難奉開由、祭主神祇大副從五位下大中臣賴宣、度々進解狀留、因之神嘗祭仁奉開□良次仁祭主宮司禰宜等慥加撿氏、若可修補は、更凝精氏可奉修補旨乎所令宣下奈利、且加神德給比、且無事故志氏、掛畏支皇大神此狀乎平久安久聞食氏、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐仁、與日月長久護幸へ奉賜比氏、天下泰平仁、海內靖謐仁、護幸賜へ恐見恐毛申賜はく申。

寬治元年九月十一日　作者大內記菅在良

康治元年九月十一日庚子、伊勢例幣也、八省院有役夫死穢、仍於神祇官被發遣、權大納言藤原伊通卿、奏宣命、少內記藤原守光、左中辨藤賁信朝臣、少外記中原安俊、右少史宗遠等參仕、以祭主正四位上大中臣清親、忌部從五位下明友、卜部正六位上貞政、散位宗重王爲使、宗重王賜右馬寮御馬、

〔顯廣王記〕仁安二年九月十一日、例幣立了、上卿一條大納言云云、辨右中辨長方朝臣、王致重、中臣祭主、忌部明友、卜部兼貞、無神部也、立了、件致重依外記提撕歟、候可作御卜串之由、召仰助正了、

〔兵範記〕仁安三年九月十一日己巳、入夜內記經長來云、午剋、權大納言公保卿參內、先被開例幣使王卜串、次覽宣命、依初度倉高例幣無辭別云云、又不被內覽奏聞了、率外記史等參向八省院、右少辨爲親奉行、次進發了云云、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、卽位後初度ノ例幣ニハ、其宣命文ニ辭別ヲ加ヘラレザル制ト見ユ、

〔吉記〕壽永元年九月十一日己卯、今日例幣也、上卿中御門大納言實宗右少辨兼忠奉行之、馬部取神馬之間、重衡卿郎從字武者所許持向、荷駄ヲ押取之間、馬部被刃傷、其上追捕大炊御門西大客方四

（並東面）于時天皇喚舍人二度、大舍人更四人西向、同音稱唯、少納言代之、趨入屏幔内、跪膝行就後版位、天皇宣久、中臣忌部召世、少納言稱唯、趨出經東福門、於昭訓門東壇上喚之、中臣神祇少祐大中臣正直、忌部少副齋部宿禰春行、同音稱唯、率後取等入自昭訓門、經東福門趨入、就屏幔内版位、（中臣就前版位、著蘊木綿、忌部就後版位、懸木綿襷、）此間大納言實賴卿、起自昭慶門東腋座、經東廊内著東福門外西腋平敷座、少外記安倍有春、大内記藤原朝臣國均等相從候此座、（上卿座者、在東福門外西腋、南面、外記内記座者、在東福門内東腋、西面、但内記持宣命文、）于時天皇宣久、忌部參來、春行稱唯、昇自東階、先持外宮幣帛授後取人、（幣帛預先裹、置殿上東三間、設敷薦上、外宮幣在南、大神宮幣在北、但例幣帛者、外宮大神宮置二裹也、而此度臨時被副加各一裹、總四裹也、後取人自例外記二人率參也、）一々取授、持大神宮幣、退立本版位、（每持幣拍手）次宣久、中臣參來、中臣稱唯、趨進脱履昇自同階跪、膝行進候御前、勅語云、如常（爾）好申奉之、（但件勅語、舊記云、好申奉之者、而内裏儀式云、如常好申奉之者、事有兩説、而今日被相定、用内裏儀式文、可爲後例、）中臣稱唯、退出本版位、以次退出如入儀、左右馬寮御馬四疋牽立昭訓門外、（各二疋）于時大内記國均朝臣奉置入宣命宮於上卿前、上卿取宣命文給使神祇伯忠望、忠望給之退出、大納言還就本座、但幣物机立東福門東腋、午二刻天皇還御本宮、其儀式如初、

〔西宮記 九月〕正暦四年九月十一日、御入省、依無少納言、左少將明理爲代、左少將又無、以右少將渡御綱、未奉仕云云、左大臣將給宣命之間不解調度、又可著軒廊南面座、而著北面辨座給宣命、是大失也云云、

〔左經記〕長元元年九月十日辛丑、大外記賴隆眞人云、源中納言、明日御卜串可申開之由、依關白殿仰申案内、被示云、今朝著政退出、重參入甚難堪也、密々開見了、誡使者、但明日參入可開、幷可奏宣命也、是頗雖不快、近代間有此例云云、　十一日壬寅、伊勢例幣如常云云、上源中納言資通、辨行事云云、

〔本朝世紀〕寛治元年九月十一日庚申、例幣也、民部卿（經信）於仗座先奏宣命草、是豐受宮幷高宮等神殿錄可被修補之由、有辭別之故也、午後攝政（藤原師實）○以下諸卿參八省院、被立使如常、

天皇我詔旨止、掛畏支伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃下都磐根仁大宮柱廣敷立氏、高天原仁千木

〔西宮記九月〕延喜七年九月十一日御記云、無納言以上、行幸及行事例有、而左大臣〇藤原時平令奏云、有穢不參無納言、兼令御物忌雜忌、雖不御八省有何事、又宣命式云、參議已上得行者、行之無妨、只禰宜位記無給印者、載宣命後日可追給云云、仰宣命事令參議等行、只出八省事、行程無幾、諸衞供奉如例、至于無納言有何闕乎、午一刻、御八省拜幣如常、參議有實給宣命、訖還宮、

延喜十九年九月十日御記云云、令仰大臣忠平、幣物依今日在穢內不可下、明朝以在外之幣物可行之、同十一日八省院奉幣如常、訖還宮、

延長七年九月十一日、貞公御記云、行幸八省如例、今日不持候大刀、只有啓、〇按啓蓋契假借 故實所傳、神事不候大刀、

〔政事要略二十四〕吏部記、〇中略 延長八年九月十一日朝、左大臣令奏伊勢御幣宣命文、得書紙 上、盥洗覽了御拜、大臣返賜、捧持罷出後、大納言仲平卿重令奏、誤也 上甚恠不覽、

〔西宮記九月〕天慶三年九月十一日、有八省行幸云云、了大外記公忠申右大將云、少納言就版、跪否、大將云、可跪云云、了少納言入跪、膝行就版、稱唯起退、須退膝行而起 案式無跪文、又中臣忌部奉詔、庭中不跪、依日記少納言跪版下、似不一同云云、吏部記

〔本朝世紀〕天慶四年九月十一日戊辰、此日依奉遣伊勢大神宮神嘗祭幣帛使廢務、早旦大納言藤原實頼卿參入、就宜陽殿西廂座行事、于時主殿寮御輿候日華門外、巳三刻御輿寄紫宸殿南階上、天皇乘御輿、出自承明建禮門、御大極殿小安殿、所司裝束如常、三品元良親王、四品重明親王、有明親王、長明親王、大納言藤原實頼卿、權中納言源清蔭卿、中納言藤原師輔卿、參議源清平朝臣、藤原忠文朝臣、伴保平宿禰、藤原顯忠朝臣、同敦忠朝臣等、奉仕御前、諸衞不稱警蹕、天皇下輿、御小安殿平敷御座、中央東向 親王公卿侍昭慶門內東腋廊座、少納言辨外記史候嘉喜門內西腋座、史生左右史生官掌召使等、候自門內東腋座、少納言源朝臣泉□一大舍人四人、侍小安殿東屏幔外、少納言就床子北面、大舍人等列立、自少納言床子之西

附昔麻呂度會神宮幣附無位中臣朝臣古麻呂訖、〇下略

〔二十二社註式〕例幣九月十一日神嘗祭

人皇四十四代元正天皇、治七年、養老五年九月十一日、始奉遣官幣、

第六十一代朱雀院、治九年、天慶二年己亥、始被行之、天暦勘文云、於濫觴者、垂仁天皇御宇也、

〔大神宮儀式解二十九〕九月十七日は、王中臣忌部參る也、卜部をも具せり、件の使々今日參向は、いつの世はじまりけん、神祇令季秋神嘗祭と見ゆれば、大寶の比既に恒例となりたるべし、令に使々參向は見えねど、此比も參向せしなるべし、養老五年紀、九月乙卯、天皇御内安殿、遣使供幣帛於伊勢大神宮とあるは、神嘗幣帛使なるべし、〇中略公事根源、例幣は養老五年九月十一日にはじめて官幣を奉らるといへり、これによれば、神嘗祭は昔よりありしを、使を立らるゝは、此時はじめにやとおもへど、これは考索のたらはぬなるべし、たゞ紀に見えたるのみによりて、神祇令に見ゆる事は思ひわすれけん、

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年九月乙未、十一日〇遣治部卿從四位上三原王等、奉幣帛于伊勢大神宮、

〔類聚國史神祇三〕天長三年九月乙亥、十一日〇天皇淳和御八省院、奉幣帛於伊勢大神宮、

〔日本紀略淳和〕天長八年九月丙午、十一日〇御大極殿、奉幣于伊勢大神宮、

〔續日本後紀仁明三〕承和元年九月戊午、十一日〇天皇御大極殿、奉幣帛於伊勢大神宮、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年九月十一日戊午、遣大舍人頭從五位上島江王、神祇大祐正六位上大中臣朝臣豐雄等、向伊勢大神宮、奉幣例也、

〔三代實錄光孝四十六〕元慶八年九月十一日戊辰、天皇御朝堂院小安殿、遣從四位上行神祇伯棟貞王、大副從五位上大中臣朝臣有本等、奉伊勢大神宮幣、

〔日本紀略醍醐一〕延喜三年九月十一日戊申、例幣、行幸大極殿、

應令掃清路次穢幷目以上祇承事

右得神祇官解偁、檢案內、奉伊勢大神宮九月十一日神嘗祭、幷二月四日祈年、六月十二月月次祭、及臨時幣帛使等出宮城之日、左右京職主典以上、率坊令兵士、相迎外門、送於京極、近江伊賀伊勢等國、每至彼堺、目以上一人、率郡司健兒等相迎祇承、而今件等國、頃年之間、不勞祇承、不掃汙穢、路頭多有人馬骸骨、旣見穢惡、豈云淸愼、望請每遣件等祭使、依例令國司一人祇承幷掃淸穢惡、若有致怠、准闕祭事、科上祓者、右大臣宣、依請、

貞觀四年十二月五日　〇又見政事要略

〔類聚三代格一〕太政官符

應令山城國司祇承奉伊勢大神宮幣帛使事

右得神祇官解偁、謹案格條云、奉伊勢大神宮九月十一日神嘗祭、幷二月四日祈年、六月十二月月次祭、及臨時幣帛使等、出宮城之日、左右京職主典以上、率坊令兵士、相迎外門、送於京極、近江伊賀伊勢等國、每至彼堺、目以上一人、率郡司健兒等、相迎祇承者、而今出自京極、至近江堺、無人祇承、不掃汙穢、望請令件國司、祇承境內、謹請官裁者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、若致闕怠、罪如貞觀四年十二月五日格、

元慶六年九月〇九月、三代實錄作十月、廿七日　〇又見政事要略

〔延喜式四十二左右京〕凡每年九月幣帛使向伊勢者、史生一人、將坊令二人兵士四人前驅、臨時幣帛使亦同、

〔續日本紀八元正〕養老五年九月乙卯、〇十一日天皇御內安殿、遣使供幣帛於伊勢大神宮、幷以皇太子女井上王、爲齋內親王、

〔政事要略二十四〕官曹事類云、右符案云、養老五年九月十一日、天皇御內安殿、以少納言正五位上紀朝臣男人、爲舍人、引中臣從五位上中臣朝臣東人、忌部大初位口忌部宿禰呰麻呂等、伊勢大神宮幣

兼日須奉行内々被見

○按ズルニ、例幣使發遣ノ事、此後全ク廢絶セシナラン、氏經卿神事記ニモ、文明十年以後ノ記ニハ幣使ノ事ノ遂ニ見エザルガ如キ、或ハ一證トスルニ足ランカ、伯家部類ニハ、例幣之事後花園院文安五年迄有之、而其後斷絶歟トアレドモ、文明九年マデ行ハレタル事、上文例幣次第ニテ明ナレバ、伯家部類ハ誤ナラン、

〔延喜式　三臨時祭〕凡新年、賀茂、月次、神嘗、新嘗等祭、前後散齋之日、僧尼及重服奪情從公之輩、不得參入内裏、雖輕服人、致齋幷散齋之日不得參入、

〔師元年中行事　九月〕十一日以前僧尼重輕服人不可參內事

十一日奉伊勢大神宮幣事　殿務、十六日度會宮神嘗會、或有行幸、奏下幣料宣旨之以前、其由於上卿云云、此幣一上必被奉行、

十二日、有後齋、如六月、○月次祭云云、近代例也、

〔師光年中行事　九月〕十一日以前僧尼重輕服人不可參內事　或例幣以前、僧尼重輕服人不可參內事、近代注之、

十一日伊勢奉幣事　殿務

十六日　度會宮神嘗祭、　十七日　大神宮

十二日有後齋、如六月、近代例云云、○中略

有齋宮群行年至十八日齋事、近代群行及中下旬時、一月內忌佛事、

〔禁秘御抄　中〕神事次第

九月十一日例幣、前後宮○中略已上伊勢事也、僧尼重輕服幷佛經憚之、神今食例幣新嘗會以上四箇度神事、必一兩度有行幸、可被調其儀、夜陰臨幸、更非民愁、

〔寶永年中行事　九月〕自今日○一日到十一日御神事、依例幣也、僧尼不淨輕重服輩禁參入、

〔類聚三代格　一〕太政官符

次上卿令官人召外記、外記參膝突、上卿仰可賜使王御馬由、

次上卿起座、向神祇官代、

　神祇官代儀

上卿參神祇官代、

辨外記史出立南門外、上卿對辨相揖、先是有幣裹事、

　上卿入南門著座、（床座前置膝突）

次上卿令召使召辨、辨參膝突、

上卿問幣物具否、辨申具由、

次上卿令召使召外記、外記參膝突、

上卿問使々參否、外記申參由、

次上卿令召使仰可持參宣命由於內記、內記持宣命筥進立便宜所、

次上卿著北廳代座、（床座前置膝突）辨以下相從著座、上卿（北面）辨外記史（南上西面）召使蹲居便宜所、內記置宣命筥
　於上卿前、退著座、

次上卿仰辨、令催發遣、

御幣發遣

次上卿令召使召使王、使王參膝突、

上卿賜宣命、使王取之退出、

次上卿目內記、令取空筥、

次自下臈起座、

上卿退出、辨外記史出立南門外、上卿對辨相揖、

ゐりて版につく、中臣忌部めせと仰らる、少納言ひざまづきて仰を奉りて、たかく稱唯して揖していづ、中臣いむべ參てへんにつく、先忌部をめす、いんべまゐりて、外宮の御幣をとりて卜部につたふ、其後內宮の御幣を、いむべ拍手してとりて、たかくさゝげ持て版にかへりつく、次中臣をめす、中とみ(祭主)參て、御幣おきたりつる案の下にひざまづく、よく申てたてまつれと仰らる、中臣稱唯していづ、使の王御馬申ことなど、常のほうへいのごとし、神祇官の東門を出て、二條の大路にいたるほどに、御座をたゝせ給、けいひちのこゑきこゆるなり、はてゝ還御つねのごとし、

〔文明九年例幣次第〕例幣次第

上卿著仗座、(直端)

次上卿令官人敷膝突、

職事下內藏寮請奏、上卿披見結申、職事仰仰詞、

次上卿令官人召辨、辨參膝突、

上卿下請奏、辨結申、上卿仰仰詞、

次上卿令官人召外記、外記參膝突、上卿問卜串候否、若使王一人之時、外記申其由、

次上卿令官人召大內記、大內記參膝突、上卿仰宣命事、

次外記參小庭、申使王申御馬事、上卿目之、

次內記持參宣命、(入筥)上卿披見畢賜內記、

次上卿參弓場代、(內記相從)令職事奏之、此序奏使王申御馬事、

次職事奏聞畢返賜、仰使王御馬事聞召由、

次上卿復仗座、

次內記置宣命筥於上卿前、上卿返賜之仰仰詞、

王申御馬之由、或行幸以前、於内裏令申之、
次還宮、今度寄御輿於壇上、左右大將列立幔內、公卿列立幔外、如初、
於內裏閤門內、近衞府相替、
於本殿、無鈴奏名謁、

〔柱史抄上九月〕十一日伊勢神嘗幣用標紙
上卿著陣、內記獻宣命、無內覽幷奏、但有辭別之時、必有草奏幷內覽、延引若後日被行之時、載其由於宣命也、上卿經軒廊月華門、參八省東廊座、內記持宣命在上卿座定、內記進宣命、著座、上卿召使王給宣命之後、內記賜空宮退歸、行幸大極殿之時、政官幷內記可皆參、著丸柄帶、不著靴、淺沓也、但自離宮有行幸者、六位二人、騎馬著靴供奉、御輿著南階、經日華修明門、入自昭慶門、御小安殿、上卿著北廊、少納言辨外記史等著嘉喜門內西腋座、天皇召舍人、二音少納言參進、仰云、中臣召セ、中臣賜御幣、授忌部卜部等、仰中臣云、能祈申セ、中臣稱唯、出自東福門、上卿起座、相率內記辨外記史等出東福門、著同門西腋座、西面內記進宣命於上卿、復座、辨內記政官等、著東福門裏東腋座、上卿召王賜宣命之後、被目內記、內記參進之間、外記史等起座、寄廊中橿子下、敬屈而立、上卿自本路還著北廊、幣帛出郁芳門之後、車駕還宮、

〔建武年中行事〕九月十一日例幣、行幸あり、出御の義つねのごとし、內侍劒璽を持て前後にさぶらふ、近衞のすけ、もしは藏人ふちす、御輿は葱花をもちゐらる、國司すゞの奏なし、神祇官に行幸なりて、北のひさしに御輿をよす、さばりの內にないし二人候、近衞のすけ劒璽をとりて常のごとく下御なりて、平敷の御座にわたらせ給、大床子もよそへり、所々に布のついたて障子をたて、へだてとす、東はし御づしの間に御幣を裹て案におく、巽に向たり、次間に御禊の御座をまうく、常のごとし、まづ御ゆぞのゝこゝあり、上卿廊の座に著て宣命を奏す、帛の御服をくられうまうけ奉りて、御禊の御ざにつかせ給ふ、御ゑやくめして先御拜あり、つぎにさねりをめす二こゑ、少納言ま

三方立幔、去幄七許尺、其北開幔門、公卿幄東西立、左右近衛幄、左近在門東垣外、大炊寮南築垣南立、

四府幄（左兵衛右兵衛）（左衛門右衛門）（在東在西）

早旦、內侍參神祇官、用行事藏人車、入自東院北門、於官東門下車、差几帳、到正廳西第二門、行事辨忌部內藏寮官人相共裹幣、立高案其上置計、於其內裹之、裹畢女官授內侍、內侍懸手、其後置幣案上、行幸以前、內藏官人守護之、

時刻行幸　　帛御裝束

若御里內裏路遠者、往反路間、御位服御葱華、於神祇官、改帛御裝束、

入御之後閉北門、御座定後開之、女房六人先參在內侍座、（加內侍定）以藏人被問事具否於大臣、

次供御手水、（主水司自北面前第二間獻之、頭藏人役之、）

打敷、御手洗椺、手拭臺、貫簀等如恒、

次出御屛風東御座、藏人頭獻御笏、（於御屛風前獻之）

次御拜、兩段再拜、

次召舍人、（二音）大舍人四人於東幔外稱唯、少納言替跪版、膝行二度、揖

天皇宣、中臣忌部召（世）、少納言膝行退三度、揖稱唯、又揖起、左廻退出、

次中臣　忌部　占部　立版

天皇宣、忌部參來、忌部著木綿鬘、進取外宮幣、退立壇上、占部來受幣復列、忌部又進取內宮幣復列、

天皇宣、中臣參來、中臣進候、

天皇宣、常（毛）奉（留）長月（乃）神嘗（乃）御幣（肖）、汝中臣能申（天）奉禮、中臣微音稱唯、退、卽忌部中臣依次退出、

自東門、中臣等進之間、大臣著東屋、內記捧宣命在後、（件宣命、九條殿說不奏、有辭別之時奏草、）

召使王於膝突給宣命、王取之出自東門、次大臣還幄屋、辨以下出立幔西、（南上一行）大臣還幄、令藏人申使

是與左府相議所被爲也、故土御門右府、六條右府、皆被反自廊中、又左府自廊中被往反、今年議如此、不知何故、

無還御間、當門外神司上麻事

內侍二人　命婦二人　藏人二人　典侍等

先是小安殿又內侍供奉御出

〔江家次第九九月〕行幸神祇官被立伊勢幣儀

正廳內東第一間敷滿薦（東西行）、其上乾巽行敷長薦一枚、其上置御幣案二所（內、外、內宮料、外宮料、）

件案幷艮坤行置之

其上置御幣（艮坤行置之）其西立大宋御屛風、其東敷小筵二枚、其上敷高麗端半帖一枚、爲御拜座、（及第二間）其

西三間內敷滿廣筵、北西幷立亘大宋御屛風、但西方中央屛風、去東三尺許立之、其內中央間設御座、

敷二色綾毯代、立大床子御座、其上鋪高麗褥、其上鋪菅圓座一枚、西南障子下敷兩面端帖一枚、爲執

柄座、西北角立廻大宋御屛風、西方屛風二枚間、爲御往反路、其內敷小筵一枚、其上立朱漆御倚子、爲

御裝物所、自馬道北砌敷兩面筵道、經御裝物所前、到于御所西一間內、立廻御屛風、爲內侍以下女房

候所、其內艮角別立廻御屛風、爲內侍裹幣所、

正廳東第二三四六間南柱立布障子、第五間副東西柱、又立布障子各二枚、各開中、又以衝立障子、立

中關所、去本障子三許尺、

廳四面立幔、南者去廳三丈許、餘三方去廳二許丈、東幔南方有道、西子午行幔、與東子午行幔、相去五

許尺、當廳第五間北開幔門、（謂之障代）東幔門中置版位二枚、（乾巽行）東屋東第二間敷上卿座、（大臣之時南面、納言之時西面）

嶋、並彭膝突、第四間敷黃端帖、爲辨座、（南面）第五間敷同帖、爲外記史內記座、（南上西面）其西相去五許尺、南北

行立幔、當正廳乾立五丈幄、爲御輿宿幷主水司候所、北築垣北當御所後、立五間幄、爲公卿座、東西北

九條大臣子孫、依爲例宣命不奏、但有辭別時、奏草并清書、故院仰曰、必可奏之、

出御南殿、（帳前鼎御裝束、無文純方御帶、）內侍執劔璽候左右、無御反閉、左右大將立南階左右、（平胡簶、淺履、）公卿列立櫻樹南庭、（西面北上、別宮平胡簶、）近衞引陣開門、（開左腋門、）少納言率大舍人出鈴印、（無奏、）寄御輿、（參議大將離列著之、）掃部供筵道、主殿撤帊、參議中將進開御輿戶、傳內侍劔置輿中御前、次乘御、（東面、東豎子執御挿鞋、無警蹕、）次置御璽於輦中、（左）次左右將豎西階昇契下、次開承明建禮等門、（無下御綱之仰、）公卿前行、諸衞侍衞、御大極殿後房、（謂小安殿、）

入御後早閉昭慶門

公卿跪地、寄御輿於北壇下下御、（有兩面筵道、供於馬道東、內侍來執劔璽如前、）上卿問使并幣具不於外記、并辨供御手水、（傳供、）（自女房中、或有頭藏人從事、問御樣、）打敷、（南北妻敷之、置式筥、）宸儀出御於御屛風東御座、藏人進御笏、（又御座依召置式筥、）次御拜兩段、（各再拜、）次天皇召舍人、（二音、高長、）少納言跪版、（先之率舍人四人候幔外、）勅中臣忌部召、（世、）此間上卿（同少納言唯聲二音、）起座向東福門、（先召、）（內記見宣命、返給內記、內記立石階南、）次率內記、并外記史經廊內向之、衞府解弓箭、（四條記、衞府以下、故遞政殿於嘉喜門解之、未知何是、）上卿著門外西腋、（南向、在式、）辨著門內東腋、（南向、）外記史著其東、中臣忌部立版、（中臣木綿鬘、忌部等木綿襷、又中臣前殿版、忌部占部後殿版、）勅忌部參來、忌部稱唯、昇自小安殿南階、拍手取外宮幣下授占部、（不替左右手、）占部復本所、次又取內宮幣、下復本所、勅中臣參來、中臣稱唯、進昇階候巽角壇上、勅如常、能申進、（向西北面而候、）中臣退下、（忌部占部後取次第出、）上卿召使王於座前賜給宣命、（自昭訓門往反、）宸儀入御、內記取筥、辨以下出立於光範門內、（西向南上、）上卿下尻揖過、（辨以下圍之、）復昭慶門東座、外記進壇上、申使王申御馬由、上卿令藏人奏之、（往反自嘉喜昭慶門、）勅許之後、即仰外記、次還宮、（以幣物不見爲限、）到承明門內、（左右近、次將相替立本方、）次下御如恒、（無給兵警蹕名謁、）無神祇官奉御麻事、此日大將追前、（不可然歟、）大將大臣、（平胡簶、不著靴、）自餘壺廷尉、（平、或著尻鞘、）御拜御座例可置式御筥事、

長治元年例

有辭別被奏草、而用非紙屋紙之紙、（一違例、）

草書辭別許、（二違例、皆可書之、）上卿赴東福門之時用庭中、（三違例、）

幣、（下授之後、取歸、又執外宮幣下立、次召中臣、中臣參上、勅云、如常好申天事、稱唯退下、近代勅取外宮幣授、取內宮幣、不知、〇不知一作不加、一作下加、）中臣忌部退出、（外記奏式云、左大辨秋篠安仁、宣、退時、忌部後取中臣、一々可出、）上卿令召王大夫給宣命、（召使召之、或宿德人示次人令給宣命、衞府給宣命者、解弓箭、）王大夫退出、內記取宮、

上卿著本座、使等退出、天皇歸御、（今日左右馬寮牽馬二疋、內藏寮進祿、）

內裏儀式云、出閤外、可一許丈、（以執幣者不見爲限、）皇輿還宮云云、其臨時奉幣大神儀亦同此、

寬平六年九月、天皇御大極殿乾角、奉幣諸社事、十一日、給宣命之間、脫弓箭事、

〔北山抄 二 九月〕十一日奉幣伊勢大神宮事（臨時）

前四日、外記錄王氏五位已上四人、令神祇官卜之、（五位者不預、）覽一上、（〇一上一本作上卿、）仰之、

當日早旦、遣內侍、女藏人各一人於八省院、令裹御幣、供御湯畢、著神態御服、（著御帛衣、云々、）方御南殿、（清涼抄云、上卿以宣命文付內侍若藏人奏之、大臣奏由、又見延喜太政官式、而日記云、有別辭者奏之、至例宣命不奏、天慶四年私記云、無別辭者、內記付內侍令奏、如賀茂祭宣命、又見九條天慶三四年記、延喜御記、不見無別辭時奏、例也、或云、有別辭者奏、奉井清書、無者只奏清書也云々、見天德四年御記、近代如之、）少納言不奏鈴持候之、無契不候大刀、（清涼抄云、候大刀契、如常、而故實神事行幸不候大刀、今案非恒例神事、不候之、依宮中白地事、不候也、具見延喜八年渤海客賜宴日御記、）諸衞不稱警蹕、乘輿出承明門、（大臣不召大舍人、）建禮門、幸大極殿後房、此間早令閉昭慶門、入御之後、王卿就同門東腋座、辨外記史內記等候其東、（與公卿座以事、）

（隨之、）少納言率大舍人、侍小安殿東屏幔外、左右馬寮牽御馬各二匹於昭訓門外、少納言就版、奉勅稱唯之間、（或中臣等就版之間、起座云々、）上卿進就東福門南、中臣等取幣退出後、召使王給宣命、（大臣、或讓納言令給之、衞府人脫弓箭、于細在、）

（儀忘卷、）頭之乘輿還宮、不警蹕、（儀式、蹕而不警云々、而依內裏儀式文、不警蹕、相迎大嘗會儀也、或依內裏儀式如此乎、近例忌部後取等退出、次第雖見奏式、依弘仁宣旨改從儀式、可依此也、）行幸後依降雨者、於大極殿發遣、如齋王發向日儀、見舊記云々、

依降雨幷御物忌無行幸者、上卿向八省院行事、（就東廊座給宣命、忌部等進自大極殿北廂給幣物、依觸穢付所司者、於神祇官發遣、所司共穢者廷引、）

〔江家次第 九 九月〕十一日小安殿行幸次第

入月藏人奏下內藏寮請奏、下第一大臣、（此次示行幸有無、大臣開之、第一大臣有障時、以次上卿行事之開之、）前一日、御裝束如記文、（裝束司）

當日遣內侍以下、（藏人女侍等令裹幣也、）主殿寮供御湯、（內藏進御帷、）公卿參陣、（無文玉帶、蒔繪劍、）上卿奏宣命清書、（清涼抄）

〔延喜式四時祭二〕九月祭

伊勢大神宮神嘗祭中略

右當月十一日平旦天皇臨大極後殿奉幣、事見儀式其使諸王五位已上及神祇官中臣忌部官各一人給當色、執幣五人、使從者三人、各給潔衣布一端、但齋王初參入之時、設御座於大極殿、事見儀式

〔延喜式中務十二〕凡奉幣伊勢大神者、九月十一日平旦、未行幸前、鑰率省掌入大極殿院、置版位於後殿東南庭、事見儀式

〔延喜式大舍人十三〕凡奉伊勢大神幣日、舍人四人、候大極殿東廊門內、勅喚舍人、共稱唯、少納言替入、

〔延喜式大藏三十〕九月十一日、奉伊勢大神宮幣、八省昭慶門東腋廊內懸幔、又同門及東西腋門懸屏幔、

〔延喜式掃部三十八〕九月十一日、奉伊勢大神宮幣帛、行幸八省院、設小安殿東局御座、親王以下參議已上座設昭慶門東廊內、對座南北、以西爲上、隔其東門設辨少納言外記史內記等座、東福門內西腋設大臣賜宣命之座、東福門外東腋設外記內記座、

〔西宮記九月〕十一日奉幣

無行幸者上卿著行、延長四、九、十一、於神祇官發例幣、上官在北門、幣置廳間、上卿著所不注、保忠卿行事、在北門、

內藏寮進幣料請奏、行事藏人奏聞下上卿、上卿下辨、辨仰史備幣物、外記申一上卿開使卜串、有障人申次史催八省御裝束、左右馬寮掃除、內匠立布幔、掃部立御屏風大床子、敷布毯、主殿立幔、當日供御湯、內侍女藏人向八省奏幣、承和九年、嘉祥二、無內侍、上卿奏宣命、天皇幸八省後房、帛御衣、無鈴奏、警蹕、大刀不候、王卿著北廊、對座、上官候嘉喜門內東腋、內記西腋、主水供御手水、天皇出御、御屏風東面繝東一間、並置內外御幣、大神宮幣北、外宮南、各立小案置之、或文云、天皇先拜御幣、次召舍人、外記奏式云、御座在中央、幣在東三間、今不見此儀、天皇召大舍人、二音、大舍人稱唯、少納言參入、跪候版位、勅云、召中臣忌部七、稱唯出立昭訓門外召之、此間大臣起著座、經廊內就東福門南西腋座、儀置式、衛府可解弓箭、內記取宣命笏相從、置笏、外記內記候同門內東腋、無行幸時、上卿著東廊西面、中臣忌部後取等參入、中臣前、著木綿、忌部後取懸木綿襷、□元行幸、上庭著時雨下、中臣等自大極殿北壇上往還云云、勅召忌部中臣、先召忌部、參上自南階拍手取

いふぞ本語なる、然るに嘗の字奈牟流とよむにより、於保奈米、加牟奈米といふと思ふは非也、

こゝに神嘗祭といふは、今月十六日御饌より、廿七日所管神社奉仕までをすべいふ也、（もとは十六日夕、十七日朝、御饌祭の稱也、）嘗は古事記上、其於聞看大嘗之殿、同雄略段歌、伊知能都加佐、爾比那閇夜爾とあり、神代卷天照大神新嘗と見ゆ、是は御自新穀を聞食をいふ、それを祭る方よりは神嘗祭といふ也、

〔續日本紀 四十桓武〕延暦九年九月甲戌、（十一日）奉伊勢大神宮相嘗幣帛。

〔續日本紀考證 十二〕案、江家次第九月十一日例幣、卽謂此、與神祇令所載仲冬上卯相嘗祭及四時祭式相嘗祭神七十一座云々者自別、不可混也、

奉幣使發遣

〔儀式 五〕九月十一日奉伊勢大神宮幣儀

前四日、外記錄王氏五位已上四人歷名、封之、令神祇官卜、（不須五世者）神祇官卜畢、注合否進、外記執之、於大臣前開封令覽、訖喚卜食者仰之、亦告神祇官、其日昧爽、掃部寮於入省院小安殿東第三間中央鋪御座、（東面、其後施屛風、）東壁下鋪置幣葉薦、（豐受宮幣在南、大神宮幣在北、）西第一間北壁外置簀一枚、第二間鋪裹幣葉薦、其左右鋪長席、（爲置幣者座、）第三間北壁下鋪內侍座、其南少東鋪長疊、（爲閤司等座、）東廊鋪參議已上座、（西面北上、）北廊鋪少納言辨座、（南面東上、）其西少後鋪外記史座、其後鋪史生官掌座、（位南面同上、）平旦、內藏寮官人一人、率藏部二人將幣物候、內侍以下四人、從大內出裹備、官人執置葉薦上、中務錄率省掌入置版於小安殿東南庭、（自小安殿東南座斜去二丈二尺、向乾置版、是爲自版也、又斜去一尺、更東北去四尺、向乾置版、是爲後版也、）乘輿御殿座、勅喚舍人二聲、舍人四人共稱唯、少納言代入後、勅喚中臣忌部、少納言稱唯退出云、喚中臣忌部、共稱唯入各就版、（中臣就前版、忌部就後版、）後執者一人、（以下卜人、先之〇卜人、政事要略引儀式作官人、）隨忌部入立、勅忌部參來、忌部稱唯升殿、跪拍手四段、先執豐受宮幣授後執、（每執幣拍手如元、）自持大神宮幣復版、（拍手一段、）訖勅、中臣參來、中臣稱唯升殿跪侍、勅、好申天奉禮、中臣稱唯復版、訖相引還出、（先忌部、次後執者、次中臣、）少間乘輿還宮、蹕而不警、卽日使等從神祇官發向、廿日、使等就內侍復命、

志郡齋片樋宮、發從彼宮乘三隻船向佐志津御暫留、爰夜鳴鳥聞於葦原、倭姬皇女遣人覓、有一隻鶴守八根稻、穗長八握可謂瑞□(〇恐稻歟)倭姬皇女使人苅採、欲供大神之御食、卽折木枝刺合出火、炊彼稻米供奉大神給、從此時神嘗祭發、(〇下略)

〔簾中抄 年中行事〕九月十一日伊勢のれいへい

〔公事根源 九月〕例幣　十一日

一日よりけふにいたるまで、僧尼重輕服の人參內せず、是は大神事なる故なり、例幣とは、伊勢大神宮へ御幣を奉らせ給ふ、每年の御事なるによりて、例幣とは申也、昔は神祇官へ行幸なりて此事行はる、祭主中臣忌部卜部など參て、御幣を請とりていづ、使の王御馬申事など常の奉幣のごとし、此事朱雀院の御時よりはじめらる、いま神風の伊勢國に御鎮座ありし事を思ふに、垂仁天皇廿五年三月に、倭姬命のをしへによりて、五十鈴川上に神宮をつくらる、さて外宮は、內宮鎮座の後、四百八十四年をへて、雄略天皇の御宇に跡をたれさせたまふ、養老五年九月十一日に、はじめて官幣を奉らる、

〔祭主輔親卿集〕しりたる人の、承香殿のみこの、齋宮にてくだり給ふ御ともにある、神宮の九月まつりにまうで、、(〇下略)

〔大神宮儀式解 二十八〕神嘗祭、本の語は加牟爾倍、加牟阿倍なるべし、後に轉じて加牟奈倍とよめり、神は字の如し、爾倍は新饗(爾比阿倍)を約めたる也、新稻をあへ奉るをいふ、萬葉十四歌、可豆思加和世乎、爾倍須登毛、袖中抄、可豆思加は葛飾也、其所の早稻をいふ、田舍に始て早稻をかりて物して、里隣のもの集りて食をば、爾倍須といふとあり、もとは朝廷のみならず、田舍にもせし事也、神にも上り、人もわれも食へば阿倍といふ、さて嘗は、秋の祭をいふ訓爾倍とよむは阿倍の轉也、古事記下、朝倉宮段、爾比那閉夜と見えて、爾比奈倍、於保爾倍、加牟奈倍など見ゆ、奈倍と

名稱

ヲ祭ル、其儀前日朝夕ノ御饌、及ビ黑白二酒ヲ供シ、祭日更ニ拔穗ノ稻ヲ供シ、懸税ノ稻ヲ內外ノ玉垣ニ懸ク、拔穗ノ稻トハ、神職ノ自ラ種エテ自ラ穗ヲ拔キタルモノニシテ、懸税ノ稻トハ、神郡神戸ヨリ獻レルモノナリ、此日齋王木綿鬘ヲ著ケ太玉串ヲ執リテ拜禮アリ、其後忌部幣帛ヲ捧ゲ、中臣宣命ヲ讀ミ、宮司恒例ノ祝詞ヲ讀ミ、次ニ幣帛ヲ寶殿ニ納メ、使以下退出、直會殿ニテ大直會ヲ賜ハリ、朝使及ビ神官等倭舞ヲ奏シ、祿ヲ賜フ、十七日、皇大神宮ヲ祭ル、其儀豐受宮ニ同ジ、

鳥羽天皇ノ頃ニ至リテハ、例幣發遣ノ日、親臨ノ禮旣ニ絕エタリシヲ以テ、崇德天皇ノ朝、藤原敦光上奏シテ、親臨ノ舊制ニ從ハンコトヲ請ヒタリシカド、遂ニ用キラレズ、壽永ノ大亂ヲ經テ、諸國ノ幣料制ノ如クナラズ、此後朝綱ノ廢弛ト共ニ、祭祀ノ禮典モ亦舊制ノ如クナラズ、時ニ或ハ用度ナキガ爲メニ、例日ニ幣帛ヲ發遣スルヲ得ザリシコトサヘ有リテ、後土御門天皇末年ノ頃ニ至リテハ、全ク廢絕ニ歸セシガ、後光明天皇正保四年、勅シテ之ヲ再興セラレ、孝明天皇元治元年、荷前ノ調絹、及ビ幣馬ヲ奉獻スルコトヲ再興セラレタリ、凡ソ例幣使ハ中世ヨリ王氏及ビ中臣忌部ニト部ヲ加ヘテ、之ヲ四姓ノ使ト稱セシガ、後世ハ王氏忌部、並ニ其人ナキヲ以テ、他姓ノ人ヲ以テ其代ト爲シタリ、

〔類聚名義抄 十雜〕神嘗 カムニヘ

〔伊呂波字類抄 加諸社〕神嘗祭 カミニヘノマツリ

〔令義解 二神祇〕季秋 神嘗祭 謂神衣祭日、便即祭之、

○按ズルニ、本書義解ノ文ニツキ、神衣祭篇ニ辨アリ、就キテ見ルベシ、

〔年中行事秘抄 六月〕內膳司供忌火御飯事 未明供之

舊記云、垂仁天皇之代、倭姬皇女爲伊勢大神御杖代、于時依隨大神託宣、從大和國向伊勢國、到壹

古事類苑

神祇部五十六

大神宮六

神嘗祭

神嘗祭ハ、天皇新穀ヲ伊勢大神宮ニ奉ラセ給フ祭ニシテ、大神宮三時祭（六月十二月ノ月次祭、及ビ神嘗祭、）ノ一ナリ、稱シテカムニヘト云ヒ、或ハカミニヘトモ云フ、後世之ヲカムナメ、若クハカムナヘト稱スルハ、カムニヘノ轉訛ナリ、文武天皇大寶ノ制、季秋ニ神嘗祭アリ、元正天皇養老五年九月十一日ニ至リ、特ニ使ヲ遣シテ幣帛ヲ奉ラシメ給フ、是後常ニ九月十一日ヲ以テ幣帛ヲ發遣セラル、故ニ稱シテ例幣ト云フ、凡ソ例幣ヲ發遣セラルヽ時ハ、天皇大極殿ノ後房、即チ小安殿ニテ御拜アリ、若シ事故アレバ、神祇官或ハ紫宸殿ニ於テセラレシガ、大極殿廢絶ノ後ハ、專ラ神祇官ヲ用ヰ給フコトヽナレリ、

凡ソ例幣使ニハ諸王ヲ以テ之ニ充テ、中臣忌部之ニ從フ、其發遣ノ日ニハ、天皇祭服ヲ著シ、御幣ヲ拜シ給フ、少納言勅ヲ奉ジテ、忌部ヲ御前ニ召ス、忌部先ヅ豐受大神宮ノ幣ヲ執リ、之ヲ後執ニ授ケ、更ニ進ミテ皇大神宮ノ幣ヲ執ル、次ニ少納言使王ニ傳勅シテ宣命ヲ授ク、使等此日神祇官ヨリ發向シ二十日ニ至リテ復命ス、若シ例幣發遣ノ日、事故アリテ出御ナキ時ハ、南殿ノ南庇ニ於テ御拜アリ、又幼帝ノ時ハ多クハ攝政代リテ之ヲ行フヲ例ナリ、

神嘗祭日ハ九月十七日ナリ、前月晦日、齋王ハ尾野湊ニ臨ミテ御禊アリ、神官等ハ度會河ニ臨ミテ大祓ヲ修ス、九月十日離宮院ニテ祭ニ從事スル神官等ヲト定シ、十六日先ヅ豐受宮

一爰延暦十一年壬申内宮御遷宮、自延暦四年至于八年、是依炎上非常之造營、號之曰儲殿、非正殿之准據、自此至于弘仁元年、庚寅正遷宮在之、此間合而至于廿六年、嘉應元年、同内宮依炎上、儲殿被造營之、

一永祿六年癸亥外宮遷宮之事、雖號正遷宮、爲儲殿之准據、子細有之云云、上古者不擧于本式之遷宮之數、

右目安如件

天正十三七月吉日　外宮使上

○按ズルニ、永享寛正以降式年ノ遷宮退轉シ、神殿ノ朽損年ニ甚シト雖モ、復宮營ヲ加ヘラルルコト無シ、於是其顛倒等ノ萬一ヲ虞リ、明應六年、皇大神宮禰宜等、有志ノ寄附ヲ以テ豫備ノ神殿ヲ經營ス、儲殿是ナリ、然ルニ此書ニ皇大神宮延暦十一年、及ビ嘉應元年ノ臨時遷宮ヲ以テ、儲殿ト云ヒ、又豐受大神宮永祿六年ノ正遷宮ヲ、儲殿ノ准據ト云フハ共ニ非ナリ、

永正九年六月三日

〔永正內宮引付 上〕祭主三位伊忠謹支言上

右大宮司廣長申狀之旨致披見候訖、抑假殿之儀、申付大宮司之段勿論也、然儲御殿事、准假殿可存知之處、伊忠不申付之由訴申之歟、既明應六年內宮、并文龜元年外宮儲御殿造進、乍兩度不申付大宮司者也、爰被號儲御殿事、非伊忠所意、禰宜等令評定者也、於儲殿者無指儀式、至正遷宮者、數十年御延引之間、神宮後生之輩、神殿之役、神秘已下之規式、可退轉之條、神拜等爲習禮、稱儲殿、奉正遷宮之作法訖、明應文龜同前、此時大宮司則長（廣長父）令同心、不支申之處、乍令存知其旨訴申歟、不慮至也、次今度以御要脚、兩宮之儀、如形可致造畢之旨、申付一禰宜最中、大宮司雖申沉伊忠、造意太無謂、猶於御不審者、可被尋下禰宜等、但此上之事者、任上意申付之、爲遂無爲節、謹言上如件、　六月日

內宮就顚倒、號儲殿造進事、無其例之段、大宮司廣長支申之條、被尋聞食之處、去明應文龜度、神宮一同令評定、致執行之旨雖被注申之、於兩度例者、難被信用者歟、所詮任舊規、爲假殿被仰付大宮司畢、早以一宮要脚、可造進兩宮之旨、可被下知之由所被仰下也、仍執達如件、

永正九年七月二日　　上野介

　　　　　　　　　　美濃守

　　　　　　　　　　攝津守

造宮使殿

〔永正十八年內宮假殿遷宮記〕分配行事

今度之假殿、明應六年儲假殿之如例、公文所分配、儲殿例不可爲例、其故者儲殿私ノ遷宮、今度ハ假殿儀式、○下略

〔天正十三年正遷宮前後申分〕外宮遷宮事

大内人正六位上荒木田神主行久上

明應六年九月廿九日

禰宜從四位上荒木田神主守朝○以下人名略

〔兩宮遷宮假殿次第〕文龜元年辛酉、外宮儲殿、後柏原院御宇、長享元年ヨリ中及二十三年

〔外宮子良館舊記〕文龜元辛酉年九月十六日に、假殿遷宮御成候、是は京都よりはなく候て、山田三方のかた〳〵、こゝろおちに料足を出し候て、宮後御長官朝敦の御取立にて候、同十六日に御内を洗申候て、同日に御飾めされ候、その時長官より布二端、桶二ツ、ひしやく二本給候、洗布は子良館にとまり申候、桶ひしやくは御長官へ今度の事に、我がたしなみにてある間とおほせられ候間、かへし申候、

一神事しだひ申やう

一繭大夫殿康勝は、御しやうでん、○中略一らう大夫御はらいを申候てきよめ申候、同御ふなしろは御つくりなく候て、もとのをうつし御申候、同めしたてをあそばし候て、まづ御たから物を御わたし候て、後にきんかいのさきに、御榊八本まいり候、○中略宮掌のまゐり候事、宮司殿へ一人、御長官五人にて候を、長官へ二人候、○下略

〔司中記〕大宮司廣長謹言上

抑於大神宮儲殿御沙汰未承及、正遷宮之外者、可爲御假殿候、御假殿者、宮司執行之儀定例候、御造進以來、御代々度々御假殿、宮司執行之事、凡注申上候、尚以雖有其例、依事多令略之候、先於外宮御下知之、御假殿已後、乍卒爾至極、自國司造進候、其後一禰宜朝敦致造進候、何以前司則長存知仕候、內宮今神居御殿之事、祭主代藤波氏保、可有正遷宮執行之由候而、造營役所立置候、不應神慮候哉、不足耳候而、難遂造營候而、御殿之絹敷疋、幷布筵已下大司則長致調法、奉成遷宮候條、是此方存知仕候、今可有御造營御殿、非正遷宮者、祭主執行非例候、神慮難叶之旨、粗言上如件、

露給、如此及大破殿内諸人拜見事、前代未聞、難治子細也、殊又盜人及鳥獸等令推參歟、云彼云是、神慮太巨測之間、倩加思案之處、如今者顛倒同前タル者哉、次第神事之祭物不足アリ、雖爲新儀、儲殿奉鎭御體者、神慮可令然歟之由廳裁如此申、是又無豫議之由各被申、而面々意見、區ニシテ難議定、所詮只任神慮、御鬮可然歟之由上首禰宜被申處、最可然之由被申、各同心、于時師秀經信兩使、以件子細宮廳申處、傍官以下面々申事、無豫儀之間、則同心アテ被取御鬮、任神慮可有遷御之由御返答之間、一列宮廳宿館參向、申入子細、則御同心、皆以施面目之由申處、今日爲吉日條、御鬮可被取之由依廳裁、則奉作御鬮、于時一禰宜參宮、其間自餘傍官宮廳館祗候、但禰宜一人、(于時當番十座)宮政所等、一鳥居ヨリ御前石壺參著、致祈念給、于時十守富座ヲ立、政所手ヨリ御鬮請取、捧持一座前參、于時一座猶凝懇祈御鬮召、于時十座殘御鬮傍置、本座退著之後各拜、次彼御鬮一座直捧持、御前退出、傍官以下列座於中披給處、可有遷御御鬮也、一同歡喜不斜、其後各一座悅禮被申退出、件子細京都(江)雖可致注進、天下今可被成造替遷宮不及御沙汰折節、神宮トシテ奉成遷御、御體奉鎭者、一先御心安被思食、正遷宮御沙汰可有延引歟、又私トシテ奉成遷御之由之可及御訴歟、致後勘令言上狀、

皇大神宮神主

注進、可早被經次第上奏當宮正殿御板敷之板落地上、御壁板以外傾給事、神慮巨測之條、被急造替遷宮間事、

右當宮左坐相殿御床之下板敷板落給、是依朽損之間、彌御板敷御壁板等可令壞落事一定也、然者忝御神體御坐地上、諸人可致拜見事、天下重事、神宮珍事、前代未聞、難堪之次第也、爰今及造替御沙汰云々、天下彌泰平之基、神宮大慶此事也、以夜繼日、被急御沙汰者、神慮令然、可爲御祈禱專一者也、而猶御板敷御壁板等令損落者、爲神宮致了簡、暫時事者、奉藏御神體於諸人而奉待造替遷宮、彌爲抽御祈禱丹誠、注進如件、以解、

以奉採、

一儲殿木作始事　明應五年六月廿一日〇中略

一立柱上棟　同七月七日〇中略

下行物貳百五拾貫文之內、拾貫文許、依役所停廢不足之間、儲殿作事令延引、明應五年者盡、六年秋漸終、正殿彌令朽損之條、神宮ヨリ御修理事、司中又以內儀、頭工中被申處、一頭、一禰宜宿館參申曰、及度々雖加御修理、大損之間不遂其功、至今者殊無了簡、所詮儲殿皆作、御體可被奉鎮歟、雖然彼下行物不足之間難事行、以私力可致營作事、是亦多恐、然者宮司長官造營作所ヨリ、如形預御下行被仰付者、神慮存、加私力可致皆作之由申、仍宮廳者百匹下行、以宮政所師秀神主、宮司造宮作所方、件子細被申遣、司中則有同心、百匹下行、作所返答、正遷宮造營外、假殿又御修理等事、更以無役由申、又宮廳ヨリ、造宮所下行物未下之間如此、今度御事者、宮司ニモ神宮ニモ可有下行事者、無謂子細、然者不可事行之間、只作所ニモ可有同心之由被申處、今度御事者、如形假殿遷宮爲儀式歟、又神宮トシテ有御沙汰上者、宮司長官同心申事不可有之由返答、然者難事行之間、予守晨、先百匹、頭工中令下行、件三貫文頭工等加私力、儲殿致皆作由申、仍彼御殿遷御可奉成之由、一禰宜被議定、既日時可被定云々、

九月廿六日　二守誠、四經任、予守晨、七守武、十守富、宮政所師秀、大物忌父尙重、前家司大夫經信等、予之里宿有集會、可有御遷宮事、可然歟否之子細、令凝評議給事、

件御遷宮事、爲廳裁雖有議定、天下ヲモ不被經、私トシテ可有御沙汰事、且神慮之恐、且天下ヨリ御訴、又御裝束絹布、其外地鎮後鎮以下祭物等、定可爲不足、旁以可爲如何之由各申處、宮政所進出、一禰宜御存分申曰、正殿大床御階、悉令頽落、御壁板或低下、或墜懸、御板敷所々地上落給、次出座御裝束悉朽損、其外御神寳等大略濕損シテ、其次第不分、殊左相殿御床損落、御船代大略朽、御體被侵雨

犯不可遁、依神之召令參之由雖申之、非神宜炳然其驗著、趣不足信用、然者准承安狂人之例、先被行假殿遷宮、所點之簀子被造替、狂人任罪狀可被禁遏歟、但件男有病、披陳無詞之趣、見神宮使申文、仍所穢之分、齊顯難分明、上奏之後經數月訖、於今者、今後例歟、且尋注申狀、不日可言上之由、可被仰神宮、其旨重可有議者、隨形可被進止歟、四月之奏狀、八月之沙汰、自然遲引、神慮難測、下知上奏、不可懈緩之由可被仰下者歟、

仁治三年八月廿三日　　　執筆新宰相

〔弘安二年内宮假殿遷宮記下〕當宮正殿御裝束鼠喰損事、次第解奏聞之間、官返狀如此、子細見狀候歟、抑以舊假殿、重可奉遷御由事、歷三箇月之後、壞退御假殿先例候歟、然者三月中、御裝束被調獻之候者、遷御彼假殿之條、先例准據可爲何樣候哉、〇中略被是且詢先例、且凝時宜注給、早可申左右候也、謹言、

四月三日〇弘安二年

謹上内官長殿　　　神祇權少副公行

〔兩宮遷宮假殿次第〕明應六年丁巳。内宮。儲殿。同。〇後土御門御宇、寛正三年ヨリ中絶四年

〔神皇雜用先規錄〕明應六年丁巳十月十二日内宮御遷宮

〔明應六年假殿遷宮記〕造宮所御下知事

度々雖以解狀有注進、御沙汰令停滯之條、神慮叵測者也、縱近々可被成造替之旨雖被仰下、御材木著岸、依山川大儀、日時可有逗留之處、剩御沙汰延引之間、可及御顚倒事勿論歟、所詮先臨其期、而可奉鎭御體儲殿可有造進歟否之由、以權禰宜氏保神主被仰下之間、則一禰宜守朝可然之由被申、仍氏保神主頭工等召集令談合、御假殿任度例、東寶殿之舊跡、儲殿可有造進之由被申付、自役所貳百五拾貫文可有下行之由被申合訖、　頭工等致懇訴、宮廳ヨリ御山杉一本申請、御材木大略件木

子細、重被尋究之後可有左右歟者、匪啻仍狂亂之身昇御殿簀子、其所爲等絕常篇、早行被罪科、兼可被祈謝、彙亦如神宮奏狀者、大破無比類、四面猶不全云々、今此狂人入墻都、是則修造擁滯之咎、啻直懈怠之故也、且爲向後、云給云恰、尤可有其沙汰歟、

大納言源朝臣定申云、如官外記勘申、任承安例行假殿遷宮、可被造替彼簀子、但件狂男申狀、猶以難取信歟、早召上其身於京都、委尋究可有其沙汰、謂彼汚穢、起自破壞、大宮司盧房雖蒙兩度之綸旨、未修四面之瑞垣、尤爲向後可有炳誡歟、

權大納言藤原朝臣定申云、任官外記就勘申承安例、可造替所踏昇之簀子、被行罪科於狂人歟、

太宰權帥藤原朝臣定申云、任承安例、行假殿遷宮、可被造替神殿簀子階等歟、件男病猶相侵、言語不詳云々、參入旨趣、非無疑殆、猶尋搜子細、重委可言上歟、且隨申狀可被定其科、凡虎兕出柙、猶爲典守之過、況狂男入垣、偏是番直之疎也、爲向後尤可有尋沙汰歟、

權中納言藤原朝臣定申云、狂人入自瑞垣、昇神殿并社西瑞垣、汚穢所顯以不分明云々、准承安例、御階簀子西瑞垣等、悉可被造替歟、且又狂男之所私、非无畏途、尤可被解謝、抑謂狂人之闌入、起自瑞垣之破壞、謂瑞垣之破壞、在宮司盧房懈怠、爲傍輩向後、可有尋沙汰歟、

民部卿平朝臣定申云、大概同定嗣議、但汚穢之子細者、同式部大輔菅原朝臣議、

式部大輔菅原朝臣定申云、如官外記勘申云、承安之鳳曆、已有此例、詢訪于龜兆、造替其所、今度之事、宜被率由、但狂男攀躋之證據、猿皮雖炳焉、其身侵臨之分限、狐疑尙相遺、重被尋究之後、可定汚穢之所歟、狂人罪狀不可乖後時之沙汰、祠官怠慢可被加不日之催促矣、

侍從藤原朝臣定申云、任承安前蹤、行假殿遷宮、造替簀子、禁固彼男之條可宜歟、於汚穢所者、奏狀之趣不詳、委被尋究、可有其沙汰歟、

左大辨藤原朝臣定申云、如神宮申狀者、件男之所爲、旁雖有疑殆、所詮狂人盜人之類歟、闌入汚穢之

替之由、被仰本宮之處、注申曰、件狂男所昇居無定所、正殿南西北走廻、降自東面階了、然者始推參、雖奏昇居乾角之由、彼之所踏穢已以三方也、事已莫大、遷宮司恒例之所役、仍重注子細言上、有神宮請文、又宮司公俊被下重任宣旨、可修造之由申請之、此條非有異代之大事者、可停止重任之由被下宣旨了、仍輙不可其沙汰、不然者又被仰遷宮造宮使、可被修造歟、其條難叶歟、又其功程暗難知、爲之如何、抑神宮申狀、前後相違、尤有其咎、此等之間子細可計申者、余申云、先遣注其可修造之多少、宮司所課可過分哉否、一定之後可有左右歟、若彼之所役難叶者、如此之時、何樣被行哉之由被尋先例、可被計行歟、但假令宮司所課、何强可過分哉、親宗云、人々申狀一同如此云云、　閏九月十日戊午、申刻藏人右少辨親宗送書於光經云、外宮假殿遷宮事可奉行者、報奏承了由了、　十二日庚申、外宮假殿遷宮行事所始、明日(十三日)及來十六日之由內々勸申、隨仰可致沙汰、若可及十六日者、明日參入可承、

十月十七日甲午、今日假殿遷宮也、修祓、雖不可必然、爲敬神也、

〔平戶記〕仁治三年八月廿三日癸酉、今夜仗議、可被忩行之由雖有沙汰、光兼朝臣師朝明法道等勘文、依有禁忌、今朝返給、被直之由傳聞之、仍不能忩參、日沒之後、著束帶參內、先是人々多參、上卿御遲參、時刻推移及亥刻、右府(○藤原實經)令參給、其後諸卿著仗座、堀河大納言(具實)、花山院大納言(定雅)、大宮大納言、(實雄)帥中納言、(資相)吉田中納言、(爲經、服假、著端座、依上卿御命也、)二條中納言、(忠高)予、(○平經高)大藏卿、(爲長)侍從宰相、(資季)左大辨、(經光)新宰相(定嗣)等也、先有攝津國條事定、(○中略)次又使官人召文書、(闕條)先被下神宮文書、次第見之、次新宰相讀上之、讀了定申、次書定文、後日可書上之由被仰、然而端條者如形書了、讀申之次、以文書使官人給從者、(○中略)鷄鳴之間事了各分散、定文等、(定嗣不委書文、不能注也、後日尋取續之、○中略)

官外記勸申、祭主神祇權大副大中臣隆通卿言上、於豐受大神宮內院瑞垣御門內、見付梳髮男、何樣可有沙汰哉事、

右大臣、權大納言藤原朝臣、權中納言藤原朝臣、定嗣、等定申云、任承安例可被量行、但注進之趣、猶貽

〔永昌記〕大治元年二月十六日、被勘豐受宮假殿遷宮日時、
木作今月廿六日 豎心柱三月二日 奉渡御體於假殿四月十一日 加修理同日 奉移御體於正殿同日
後日、大納言〇藤原經實 被語云、開見祭主公長注文、山口祭木本祭日時可被勘者、案之廿年一度正遷宮被勘之、如此依修理假殿之時不然歟、家榮頗似相傾、仍不分勸之、象政云、山口木本雖修理時被宮祭之日時者、如仰廿年之外不被勘下、隨不申請事者、此事有興、多年奉公之功也者、

〔神宮雜例集二〕心御柱事
奉覆榊畜類喰損事
大治元年十二月、大神宮假殿御遷宮也、而心柱奉立了後、榊爲鹿喰損而遷御日時依有限、且不經奏聞、尋先例於二宮、奉替榊葉、勤行遷宮了、

〔中右記〕大治二年正月十六日丙午、常陸前司大中臣親仲朝臣入來云、去月廿一日、內宮假殿遷宮萬事違例、極以不便也、就中甚雨之間、違例已多、凡假殿遷宮、從昔無雨儀、今度初甚雨也、禰宜等成恐云云、予〇藤原宗忠 答云、件事下官奉行也、所驚聞無其〇恐誤 旨未申上、極以不審也、付言上可沙汰歟、 廿四日甲寅、申時許、相具右少辨參內、行軒廊御卜、是祭主公長言上、大神宮去年十一月日、假殿遷宮之間、柱卷布被喰損事、神祇官少副兼俊、及陰陽寮頭家榮朝臣、助宗憲參來、官卜申云、神事不信不淨者、寮占申云、神事不信不淨、公家御藥、怪日以後卅日內、四月十一月甲乙日者、本解御卜形等欲付頭辨之處、只今不被參、仍乍入宮、以外記送頭辨許了、本奉行職事不被參、頗以奇怪也、近代度々如此、行御卜之由雖告示、不被參、何爲哉、入夜退出、

〔玉海〕承安五年〇安元元年 二月十八日庚午、藏人右少辨親宗來、余〇藤原兼實 相逢之、親宗仰曰、去年依大神宮正殿狂男昇事、被行御卜、而可改作其所昇居之乾角簀子之由占申之、因之任先例、宮司公俊可造

但金壹兩ニ三貫四百丁三拾九文

右是ハ内宮假殿御遷宮御下行之内、慥ニ請取、役人銘々ニ相渡シ申候、爲後日仍如件、

萬治貳年亥三月十三日　宮司

石川大隅守殿

岡田將監殿

表書之通、金六百七兩貳分銭三百丁三拾九文、將監御代官所ヨリ相渡候也、

月日　岡田將監判

石川大隅守判

○按ズルニ、右萬治二年皇大神宮假殿遷宮ハ、德川氏ニ於テ假殿遷宮ヲ經營スルノ始ナリ、假殿遷宮ニ屬スル諸祭典ハ、假殿心柱奉立ノ日時ノ外ハ、京都ヨリ勘下カキニ由リ、心柱奉立ノ祭物及ビ其他ノ諸祭ハ、古例ノ如ク行フニ至ラズ、

〔司家引付拔萃〕一依御尋申上條々〇大宮司ヨリ山田奉行ヘ出シタル勘例ノ内

凡両大神宮破損朽損御座候時者、禰宜其損色を勘し、注進仕候へ者、正殿を修理仕、假殿遷宮可遂行之由宮司へ宣旨被下候而、遷宮御座候、其遷宮之仕様は、古宮地之跡へ假殿を立奉り、心御柱を安鎮し、假殿御造營成功之後、御體を假殿に遷御し奉り、扨正殿の破損を修理し、御修理事終候後、正殿へ遷御成奉り候、是を假殿遷宮ト申候、〇中略

寛文四年辰七月　伊勢大神宮司

〔神宮雜例集〕二心御柱事

天永元年十二月廿四日戊午、豐受宮假殿御遷宮也、〇中略但准正遷宮之時例、山口祭、木本祭、地鎮祭、後鎮祭、船代祭等、依宣旨一々勤行了、

一壹貫文　山向役人
一五貫文　御鎰穴奉明役人
錢合三百四七〇(四恐誤)拾貳貫五百文
此代金九拾八兩壹分ト錢四百丁六拾四文
但壹兩ニ三貫四百丁七拾八文代
右是ハ內宮假殿御遷宮御下行之內、慥ニ請取、役人銘々相渡シ申候、爲後日仍如件、
萬治貳年亥二月廿日　神主中
內宮長官氏富判
石川大隅守殿
岡田將監殿
一三月十八日雨天
請取申錢之事
一千貫文　工等方
一貳百九拾八貫五百五拾文　司庫方
一貳百五拾貳貫文　祭物方
一百六拾八貫貳百文　作所方
一百貳拾九貫六百五拾文　鍛冶方
一貳百六拾六貫八百文　(禰宜權任)等明衣代
錢合貳千百拾五貫貳百文
此小判六百七兩貳分ト錢三百丁三拾九文

大宮司殿

○按ズルニ、慶長三年假殿遷宮ハ豐臣氏ヨリ令シ、山田神民ノ力ヲ合セテ之ヲ遂ゲタルナリ、子良館日記ニ記ス所ノ上部氏ハ豐臣氏ノ師職ナリ、

〔神宮編年記〕萬治貳己亥年

一二月廿日、使者三經長、田中賀兵衛供奉ス、船江將監殿、〇假殿遷宮奉行岡田將監にて請取之、

請取申錢之事

一貳拾五貫文　奉ﾚ成御遷座ﾆ奉仕料

一三拾貫文　松明料

一貳貫文　御鹽料

一壹貫文　大麻料

一壹貫文　鋪設料

一五貫文　仁長料

一八貫文　御火役人料

一五拾貫文　正權禰宜參宿料

一貳百貫文　正禰宜裝束料

一四貫五百文　玉串役人

一拾貫文　子良一﨟

一拾八貫文　子良館役人裝束料

一拾貫文　雲形役人

一貳貫文　御巫役人

法いたすといへども、事行がたく延引申候、御殿一段御朽損の間、夜に日をつぎ、およばざるまで調法申べく候哉、又は神慮いかん、上意として仰付られば神慮と存、其心得成たてまつるべく候、然て世上あつかひ何かくるしからん哉、急度申上候、返事奉レ口旨可レ得二御意一候、恐々謹言、

十二月十三日 ○天文十年　　内宮一禰宜守武判

祭主殿

(禰宜晨彦引付)内宮遷宮、天文十一年十二月一日ニ有之、假殿也、江州永原方ヨリ造替料進納也、七百貫文歟、

(天正遷宮記)天正九年十月、正殿御修理次第、

日時、宮司ヨリ十月廿七日、神宮へ告知也、

此御修理ハ當國司○北畠信雄ヨリ被レ爲レ參、安井將監、松庵兩人、永テ楔木ノ○山田町名河村孫大夫ニ被二仰付一奉行之分也、○下略

(皇繼年序記)慶長三年戊戌、大閤秀吉ヨリ外宮御修理、六月六日假殿遷宮、五月晦日ヨリ參籠、

(外宮子良館日記)慶長三戊戌年五月十一日、外宮正殿依二破損一、以二山田中之力一遂二行御修理一、

新始之時、赤飯三種肴、自二上部氏一給二于子良館一、

子良館自二高木二郎大夫方一出 自二上部氏一 請取物

明衣拭布十端　雲形布七端　桶二口　柄杓二本　歩板四枚　以上

(天正文祿慶長元和宮司引付)就二當宮御萱葺御朽損一、從二大閤樣一被二仰付一、爲二山田三方一奉二成御修理一、諸事如二先例一相調申、目出存知候、恐々謹言、

慶長三戊戌五月一日　　外宮一禰宜匡彦判

同　禰宜中

宮。司。候、於彼代物者、自三日市大夫次郞方、可渡宮司之旨申定候、於其方御催促可然存候、若宮司以下無沙汰ノ儀候ハヽ、可有御注進候、恐々謹言、

十一月九日（○永正十五年）　基雄判

內宮一禰宜殿（御宿所）

〔遷御近例〕天文十年假殿遷宮事

今上皇帝（○後奈良）御宇天文十年辛丑九月廿六日、御遷宮之事、去年自內宮神主一禰宜守兼、命。近。江。國。永。原。某。宜。有。內。宮。可。遂。御。造。替。之。沙。汰。、因玆外宮神主中大驚、相共可被御造進之由、一兩度雖望內宮神宮中、內宮神宮中曰、經二三箇年工、漸可遂造替之處、如此有御障之條、神宮不悅之由有返語、於是外宮神主一同束手、于時一禰宜備彥、與家子之禰宜權任密談、而內宮既以私之儀、命永原之上者、外宮亦不可苦之由有議定、欲使諸國武家人造替、其時常光神主曰、當時京都之儀不可叶、雖然不可以不告、卽以神宮連署注進、同以度會俱尙神主、使尾州織田彈正忠信秀、俱尙至之夜、信秀夢、於伊勢宮川沐浴、參大神宮、覺而后語人、其日神宮使至、信秀不及二言、卽同心遂造替、至俱尙神主歸期、信秀謂其所從平手中務丞曰、今度自外宮一禰宜殿之貴札、永年不可失、當家面目是也、汝中務亦能可相持、俱尙神主歸後、造替有沙汰、（○又見雲居紀談）

〔永正天文外宮假殿遷宮記〕天文十年（辛酉）九月廿六日御遷宮之樣體

抑今度御假殿造營之事、尾州織田彈正忠（○織田信秀）外一禰宜備彥方ヨリ依懇望、要脚七百貫文、其代以金一禰宜方ヘ被相渡云云、

〔禰宜晨彥引付〕今度遷御被成之候爲御禮、從京都口宣被下、彈正忠（○織田信秀）ヲ三川守ニナサル、

〔天文十一年內宮假殿日記〕一口口御假殿に付て、前一禰宜守兼、かたのごとくせんぎを口口口今（江州永原越前守、此儀申合二萬疋渡候、）のをりふし其儀成がたく、聊爾ながらわたくしとして、はうべんをし、大かた調申候、其以筋目調

四拾三貫貳百五十文　鍛冶方

都合千貳百六貫四百六文　文安五年六月日

宮司代宗吉以前所分百六十八貫貳百文にて候へ共、今度者東寶殿之假殿にて候之間、過分注進不可然候歟、此分たるべく候、又鍛冶方以前注進は、百九貫六百五十文にて候へ共、是者彼假殿にて候間、如此減少にて注進可申哉可得御意候、此注文返可給候、

〔司家舊記〕外宮正殿御假殿御炎上、同〇文明十八年十二月廿二日、村山掃部、御殿仁奉懸火生涯了、前代未聞也、國方〇北畠氏ヨリ萬疋之分以下行、如形御假殿奉新造、長享元年丁未九月三日、御遷宮在之、宮司則長造料請取奉行畢、〇又見外宮子良館舊記

〔大宮司家古文書〕御假殿御要脚從御倉大宮司度々奉請取先例事〇中略

一外宮御假殿　應永四年　二千三百六拾八貫二百文

一內宮御假殿　應永七年〇七年恐六年誤　千九百六貫六百五十文

一內宮御假殿　應永廿五年　千九百五十四貫四百五十文

一內宮御假殿　應永廿七年　二千六十六貫五十文

一外宮御假殿　永享元年　千八百六貫四百六十文

一內宮御假殿　文安二年　二千六百卅五貫五十文

一外宮御假殿　享德元年　二千二百六貫六百五十文

從先規之例文、雖可注申候、依事多、應永已來之儀如此候、總テ御假殿御要脚、本式五千貫文候歟、依營作員數不同之由候、正遷宮之時者、御貴萱料被渡下候、其員數只今不及注申哉、

永正九年十月日

大宮司廣長判

〔永正十八年內宮假殿遷宮記〕假殿遷宮事、右京兆以進上要脚、二宮之儀、可有造進之旨、先度被仰付

（三種御裝束）絹袷帳一條　長一丈　廣四幅　料絹一疋四丈
行障二條　長各五尺　廣二幅　料絹二丈
絹垣一條　料絹三疋
敷御道布十八端　官下
一鐵御鎌一具　打立二　御鎌鎰幷御戶匙一枚　官下
苫八枚　長筵十枚　小筵五枚　薦廿枚　油二升
明衣十具　正員禰宜十人料　料絹十疋二丈　三百八十具　權禰宜幷物忌等　料絹百八十疋
布六十端　權禰宜大少內人料　官下
右依例注進如件
應永廿八年十一月日（中略）
奉送注文
鏝三、鎚三、錐三、糸二十口（小數二百）縫針廿、上紙廿枚足桶一口、持桶二口、杓二、巾布五端（六端下行）鈎金四勾、肱金十二、小釘百五十、御鎰一口、小刀二、搔板二枚、
假殿御料注文一通調獻候、任先例可被奉送、此外注漏事者可申候、恐恐謹言、
六月三日　外宮一禰宜（判）
謹上大宮司御館
〔司中記〕內宮御假殿要脚注文　文安五年六月日（中略）
六百貳貫漆文　頭工等注進分　貳百九十八貫五百五十文　司庫方
貳百五拾貳貫文　祭物方　六拾八貫貳百文　作所方

一金鎚六　鋋六　錐六　鉋六　鉇六　手鋸六　代九百文

一装笠代　貳貫文

以上總都合伍佰拾伍貫文

應永廿八年十一月四日　三頭近家

二頭益長

一頭近次上

豊受大神宮神主

注進假殿御装束物并禰宜明衣事

合

一御装束絹拾捌疋陸丈、細布貳端貳丈中之

壁代張一條　長六尺　廣六幅、料絹六疋　天井一條　長二丈一尺　廣九幅　料絹三疋一丈八尺

蚊屋帳二條

一條　高八尺　廣十六幅

一條　高八尺　廣五幅　料絹二疋四丈八尺

幌四條

一條御戸料　高八尺　廣五幅

三條三重御門料　高各六尺　廣各三幅　料絹一疋二丈六尺

戸上壁代帳一條　長八尺　廣二幅　料絹一丈六尺　御戸帳加御裏定　料絹一疋五尺〇一本作一丈五尺

土代敷細布給帳一條　長一丈　廣五幅　料布二端二丈

被レ下、除目之時、可レ擧二申功人一之由有レ仰、各國司事著二申其國一不レ可レ然、可レ爲二四千疋一者、可レ被レ任之由有レ仰、而條則仰レ官了、

〔應永廿九年外宮假殿遷宮記〕注進　外宮御假殿新造料足事此注文之外、雲形甜布捌端代貳貫文可レ被二下行一也、

合

一黑木大小五百支　御杣作山引河下迄奉レ付二于宮地一六十貫文

一御座板八枚御戸板　一御板敷貳拾五枚　一水引板拾貳枚

一御佐良乃板貳拾五枚　一御橋板拾壹枚　一組入天井曲物料材

一御蓋御壁料一丈三尺之檜榑貳佰支　一覆貳枚　左右板肆枚

一案足代之料材

已上此材木工參拾參人御杣作一番十ヶ日分食米陸拾貫文

一鹽楽料　壹貫文　一墨壺緒代　九百文　一露拂代　參貫伍百文

一斧代　參貫伍百文　一路用逹　參拾貫文　一御事始料　貳拾貫

一木本祭　陸貫文、此内參貫文者、幣、膝付、散供米、紙、苧、綿、　一明衣拾捌端代　參貫六百文

一荒垣四面分　陸拾貫文　一小柴垣四面分　五貫文　一縄楉代　陸貫文

一釘　貳拾貫文　一人夫　拾貫文

上件、御材木山引河下渡海已下迄奉レ付二于宮地一料要脚都合佰拾貫文、

一庭作　佰貫文

一御戸祭　御船代　陸貫文

一奉張雲形食　桶杓巾布等代　參貫文

一御戸祭鍬參度仁拾捌足代　參貫六百文

禰宜荒木田神主在二連判正印一

〔仁治三年内宮假殿遷宮記 一〕大神宮司解

申進申文事

言上禰宜等注進、可早經次第上奏、勤行假殿御遷宮、調進濕損御裝束、造替御船代、被修補御殿、當宮正殿殿内漏霑、御裝束濕損狀、

副進　禰宜等注文一通

右得彼禰宜等今月十七日注文偁、子細載于其狀也、抑宮司勤役窮蹙之時、神稅難濟之日、神宮御修理、召付功人、被終早速之功者例也、爰正殿假殿御遷宮者、用途莫大之勤役、神郡無双之經營也、而去年勤行當宮假殿御遷宮、令修補御殿破壞之後、齋内親王御參宮、年中三度御祭、離宮供給一千三百餘斛之用途、尙以難合期之處、今此注文到來、凡筋力已盡、計略難覃、縱於假殿者、雖可爲宮司之課役、至本殿修造者、任先例召付功人、可致其沙汰之由、可被仰下哉、隨去年炎旱越上古、所力不熟、無比類之間、神稅之所濟、更不及十分也、一日之恒例所役、偏抱闕乏之恐、然則任先例召付功人、爲被致御修理合期之勤、狀相副、言上如件、以解、

仁治二年正月廿日

權主典從五位下淸原眞人茂昌

主典從五位下淸原眞人秀昌

大司從五位下大中臣朝臣略〇下

〔吉續記〕文永八年二月十六日

官申外宮假殿遷宮用途事

仰任弘長文永之例、可被下七千疋、除目之時、可擧申功人之由可仰、　三月七日、參院、外宮假殿遷宮用途事、可被下見用之由、奉行官掌國鄕申狀、官同功人、各國司龥望事等付源相公奏聞、於見用者難

大神宮神主
注進假殿御裝束幷用途物禰宜内人等明衣事
一假殿御裝束
壁代料絹五匹　蚊屋料絹三匹　天井料絹五丈四尺　御幌料絹二丈一尺　正體御床敷料絹一匹二丈一尺　御衾二條料絹二匹　袷帳一條料絹一匹三丈　單帳一條料絹四丈　絹垣料絹三匹　行障料絹二丈四尺　四字御門幌絹一匹四丈八尺
已上料絹十九匹五丈八尺
上敷幷御床上敷相殿座上下敷料手作布五端　庸布廿三端三丈(並敷料)　同布一端(假殿御板敷洗巾料)　同布半端(假殿天井結料)　新長筵十枚　上筵三枚　薦十枚　苫十枚　油三升　水桶二口　杓二柄(假殿洗料)
一假殿御裝束裁縫奉調料
長筵五枚　上筵三枚　薦五枚
一可預絹明衣
正員七人内六人、禰宜代一人、各一匹、　權任神主百卌六人内百十人、人別ニ三丈、　昇殿玉串大内人一人、大物忌父一人、幷二人料一匹、
已上六十二匹
六位權禰宜大内人以下内人明衣料庸布六十端　御修理工明衣料調布卅二端半(但不レ俟ニ人數一)
右件御裝束料絹布筵薦、幷神主及大少内人物忌等明衣、任先例所注進也、此外若有遺漏事者、追可注申之狀如件、
建久九年四月八日　大内人荒木田

禰宜正四位上荒木田神主（有二裏名正印一○以下署名略）

大神宮神主

注進鎭祭宮地奉ㇾ立二心御柱一供物事

　鐵人像鏡各卌枚　　長刀子廿枚

　鉾四柄　　　　　　鎌二張

　小刀子一枚　　　　鍬二口

　五色薄絁各一丈　　木綿麻各二斤

　米酒各二斗五升　　雜腊二斗五升

　堅魚鰒各三斤　　　雜海藻二斗五升

　鹽一升　　　　　　鷄二翼

　卵十枚　　　　　　陶器土器各卅口

　內人物忌等三人明衣料絹三匹

　式外物

　桶二口　　　　　　杓一柄

　折敷二枚　　　　　折櫃

　埸二口　　　　　　用紙三帖

　薦一枚

右來廿一日奉ㇾ立二假殿心御柱一祭供物、任二式文幷先例一注進如ㇾ件、

　建久九年四月八日　　　　　大內人荒木田

禰宜荒木田神主（在二連例正印一○以下署名略）

〔禰宜晨彥引付〕御裝束御神寶之儀注進處、近衛殿御取次ニテ、大裏樣ヨリ公武之仰出ル、

〔天文十一年內宮假殿日記〕九月廿九日、氏定京へ立、同道小二郎、御神寶調がたく、四十貫調法申せと被仰事也、江州へ申、其調申也、

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕抑於假殿造營者、任先例宮司所課也、至正殿已下御修理者、任先例、修理造宮使之勤也、〇中略

二月廿一日

大宮司在判

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕注進　假殿御遷宮次第行事

工三十三人之中頭三人　番匠三十人

杣作一番十三箇日之中御材木一番二箇日　黑木一日

庭作一番番中御樋代頭三人番匠六人　杣作二箇日庭作一日

右件次第行事任先例注進如件

建久九年二月二日

三頭工荒祭宮宮掌內人磯部武遠

二頭工權宮掌內人磯部時次

一頭工大內人荒木田光季〇中略

大神宮神主

注進可早任先例被申下假殿御遷宮勤行間用途物事

雲形料紺布捌端

明衣料布捌拾端

右〇中略件雲形幷明衣料兩色布等、彼廿一日〇四月、御事、遷御體於假殿日以前任先例早可被申下之狀注進如件、

建久九年四月八日

大內人正六位上荒木田神主在眞名

一可₂同被₁調₂進御金物裝束事₁○中略

一樋代料

小文紫綾御被壹條長五尺、廣二幅、納綿八屯、

小文紺綾御被壹條長五尺、廣二幅、納綿八屯、

件御被貳條、壹夜御一宿料、任₂度々例₁所₂注進₁也、

應永六年五月廿五日　大内人正六位上荒木田神主長繼

禰宜從四位下荒木田神主氏茂人○以下名略

〔永正十八年内宮假殿遷宮記〕皇大神宮御假殿御遷宮神寶御裝束料、以₂最折中₁、且調₂進色目₁之事、

一御大刀　一腰○此餘御劔三種雖具アリ

以上

右注進如₂件

行事官行賢判

〔永正天文外宮假殿遷宮記〕豐受大神宮御假殿御遷宮、神寶御裝束料、以₂最折中₁、且調₂進色目₁事、

一御大刀一腰　一御弓一張　一御平胡籙一腰○中略　已上

永正十八年五月日　行事官行賢判

〔禰宜晨彦引付〕從₂京都₁下御神寶御裝束注文目録

豐受大神宮御假殿御遷宮神寶御裝束、以₂折中₁且調₂進色目₁事、

一御大刀二腰　一御弓二張　一御胡籙二腰

一御鉾　二管　一御楯二枚○中略

右所₂奉送₁如件

天文拾年九月廿一日　行事官時久

土敷幷御床上敷、相殿座上下敷料、手作布五端、

庸布廿三端三丈（道敷料○中略）

右件御装束料絹布、（○中略）任先例所注進也、此外若有遺漏事者、追可注申之狀如件、

建久九年四月八日　　大内人荒木田

禰宜荒木田神主（在連判正印）

〔外宮假殿要須記〕假殿御裝束等神宮注文云（○云恐誤字）宮司沙汰分

豐受大神宮神主

注進假殿御裝束物幷禰宜等明衣之事

合

一御装束絹拾捌匹陸丈、細布貳端貳丈、（之中）

壁代帷一條、（長六尺、廣六幅、）料絹六匹　天井一條、（長二丈一尺、廣九幅、）料絹三匹一丈八尺、　蚊屋帳二條、（一條高八尺、廣十六幅、一條、高八尺、廣五幅、）料絹二匹四丈八尺、　幌四條、（一條御戸料、高八尺、廣五幅、三條三重御門料、高各六尺、廣各三幅、）料絹一匹二丈六尺、　戸上壁代帳一條、（長八尺、廣二幅、）料絹一丈六尺、　土代敷細布袷帳一條、（長一丈、廣五幅、）料布二端二丈、　絹袷帳一條、（長一丈、廣四幅、）料絹一匹四丈、　行障二條、（長各五尺、廣二幅、）料絹二丈、　絹垣一條、料絹三匹、　敷御道布十八端（官下○中略）

右依例注進如件

年月日　　大内人度會

禰宜度會神主（有連署判也、此狀不行正印、）

〔應永六年內宮假殿遷宮記〕皇大神宮神主

注進可早被裁下、奉遷東寶殿次第行事日時幷御裝束用途物等事

奉移御體於正殿日時　同日庚子　時亥二點〇下略

〔元亨元年内宮假殿遷宮記〕可被改立伊勢大神宮心柱雜事日

奉渡御體於假殿日　今月廿三日乙未　八月六日丁未

奉渡御體於正殿　同日等〇七月廿四日八月七日　陰陽頭安倍泰光〇中略

七月九日

〔御正殿千木顚倒御修理萬事覺書〕寛文四甲辰年十月廿五日、小林〇山田奉行所へ禰宜中ノ内〇中略祝ニ被參候、五〇五禰宜因達口上之覺、

今度御修理假殿御造營被仰出候趣、目出存候、何角相濟候へ者、作所之義正遷宮ノ御吉禮ト思召被仰付候者、祝著令存候、

十一月七日、朝ノ卯刻ニ鉾始、　十二日、地引、辰ノ刻、〇中略古殿ノ前、今度ノ新屋敷御巫平左衞門清申候、　十六日卯ノ刻柱立　同日午刻棟上　廿七日ノ五ツ時分ニ日時ノ飛脚到來、遷御ノ日來月三日、替日七日、還御十三日、替日十五日也、

〇按ズルニ、本書同年九月廿一日ノ條ニ、近年內宮之モ遷御ト還御ト計ノ日時計京都へ申上、其外之日時ハ宮司長官ヨリ出申候テ可然云云ト見エタリ、

假殿裝束

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕大神宮神主

注進假殿御裝束并用途物禰宜內人等明衣事

一假殿御裝束

壁代料絹五匹　蚊屋料絹三匹　天井料絹五丈四尺　御幌料絹二丈一尺　正體御床敷料絹一匹二丈一尺　御被二條料絹二匹　袷帳一條料絹一匹三丈　單帳一條料絹四丈　絹垣料絹三匹　行障料絹二丈四尺　四宇御門幌絹一匹四丈八尺　已上料絹十九匹五丈八尺

進弓場奏見參、左少辨源師能、少納言藤能忠等從其事、

擇申可被造伊勢大神宮假殿雜事日時、

陰陽寮

始木作日時　今月七日癸卯　時巳二點　若午

立柱上棟日時　十九日乙卯　時辰二點　若午

奉渡御體於假殿日時　十一月十六日壬午　時寅二點

修造正殿幷東西寶殿日時　同日壬午　時辰二點

日時〇日時上恐脫後鎭祭三字　同日壬午　時未二點

奉渡御體於正殿日時　同日壬午　時亥二點

久安二年十月一日　權天文博士安倍朝臣晴道

權助兼權曆博士加賀介加茂朝臣憲榮

〔兵範記〕嘉應元年十月廿二日甲辰、晩頭右大將〇源雅通參陣、被定申豐受大神宮假殿遷宮事、右少辨重方奉行、〇中略

陰陽寮

擇申可被修造伊勢豐受大神宮雜事日時、

入杣採材日時　十一月二日甲寅　時卯二點

始假殿木作日時　廿六日戊寅　時午二點

立柱上棟日時　十二月八日己丑　時巳二點

奉渡御體於假殿日時　十二月十九日庚子　時寅二點

修理正殿日時　同日庚子　時寅二點

假殿遷宮日時定

注進當宮假殿遷宮○中略子細事

右當宮假殿御事、舊冬月迫言上之間、存儉約公平之儀、可ㇾ爲當日遷御之由、雖ㇾ令注進、數月延引之上者、爲御一宿者、御祈禱之專一者哉、然者被ㇾ調ㇾ進三種御裝束、可ㇾ被ㇾ下ㇾ行御船代料足五十貫文者也、仍存御祈禱神忠精進誠、注進言上如ㇾ件、

應永廿八年五月日　大内人權禰宜度會淸實

禰宜從三位度會神主

○按ズルニ、正殿修理ノ事ニ因リテ、卽日還御シ給ハザルヲ、御一宿假殿ト稱ス、御一宿假殿ニハ、御船代ヲ具シ、且ツ御裝束ヲ特ニ官下セラルヽナリ、

〔類聚大補任後深草〕正嘉二年戊午八月廿八日、外宮御一宿假殿遷宮、

〔類聚大補任龜山〕文永十一年甲戌十月一日、外宮御一宿假殿遷宮、　九月十六日、外宮御祭、御戸不ㇾ被ㇾ開之間、禰宜無ㇾ昇殿之儀、

〔二所大神宮例文〕正應五年壬辰十月、内宮一宿、假殿遷宮、

〔大宮司家古文書〕叡感□□裁案

内宮一宿假殿遷宮事、無爲遂行之條神妙之由、可ㇾ被ㇾ示大宮司長□之旨、被ㇾ仰下之狀如ㇾ件、

明德二十一月十三日　修理權大夫判

四位史殿

〔二所大神宮例文〕應永七年庚辰六月廿七日、内宮一宿假殿遷宮東寶殿、盜人推參、依ㇾ奉ㇾ汚御裝束等也、

應永廿五年戊戌八月廿一日、内宮一宿假殿遷宮、東寶殿木顚倒、正殿千木鰹木依ㇾ折損也、

〔本朝世紀〕久安二年十月一日丁酉、伊勢大神宮假殿日時定也、權大納言伊通卿參ㇾ仗座、權右中辨藤朝隆覽ㇾ勘文、亦權中納言宗能卿、參議同經定朝臣、參ㇾ仗座、承ㇾ無ㇾ御出ㇾ之由、移ㇾ著宜陽殿座、盃酌如ㇾ常、次

一宿假殿遷宮

古殿を假殿に被用候事は、文明十八年十二月廿四日、外宮假殿遷宮にて御座候、是は去享徳元年に、假殿遷宮之儀、正殿修理難成候故、還御無御座候而、其儘假殿に被成御座候處に、文明十八年十二月廿二日、假殿の正殿炎上仕候故、無是非破損之正殿へ遷し奉り候、是を古記には假殿に對して、古殿と書候へ共、實は新殿に而候、

寛文四年辰七月　伊勢大神宮司

〔外宮子良館舊記〕九月二〇延徳年十四日の丑の時、正殿天火やらん、又つけ火にて候やらん御燒候、同船代の蓋御明候而御座候間、不審にて候、于時長官、宮後の朝敦と申長官にて御入候、殘の禰宜さまも皆々御祭禮の御參籠にて、館に御座候間、いそぎ御參候而、御拜見候也、やがて御神體は、一の禰宜殿、まづつきの御倉へ御移し御申候、同御船代同樋代は、酒殿御藏へ御移し候、さて十人の禰宜宮司殿、廳舍にて御談合候處、三十年ばかり先に御立候新殿御座候、御いたじきとざし無御座候を、三人の頭工同小工どもに仰られて、やがて九月十五日たゞ一日に御造作仕候て、同御船代も先取あへずのことにて候間、本の出きあうまじきとて、あひ殿御用に木どりをつくりたて移し申候、やがて十五日の夜、ゆきの御さい御なり候、十六日に御遷宮成申候、御かざりのきぬ共は、ことごとく地下の方々御神物にまいらせられ候、十疋出來申候、十六日のひる御飾をめされ候、〇中略何も御寶物御座なく候間、めしたてもなく候、〇中略御瑞垣などはいできあはずして、後々にせられ候頭工方もたくみがたもいつかうにまきをらす候て、神忠にせられ候、

〔天正九年外宮假殿遷宮記〕行事記

今度儲殿可有新造之處、依折中、奉遷御于古殿也、

〇按ズルニ、此ニ儲殿ト稱スルハ假殿ノ事ナリ、又此古殿トハ、永祿ノ假殿ヲ指スナリ、

〔應永廿九年外宮假殿遷宮記〕豐受大神宮神主

斯候也、謹言、

建久元年七月二日　　左衞門權佐宗實奉

大夫史殿

〔玉海〕建久元年八月廿五日丁未、此日大神宮御體奉移東寶殿、奉改立心御柱、明日可遷御本殿也、

〔應永廿五年内宮假殿遷宮記〕辨官下　伊勢大神宮

應任日時令勤行當宮正殿修造事

奉渡御體於東寶殿日時

廿三日辛丑　時寅二點

右權大納言藤原朝臣宗氏宣、奉勅宜任日時令勤行者、宮宜承知依宣行之、

應永廿五年八月五日　　大史小槻宿禰判

少辨藤原朝臣奉

〔外宮子良館舊記〕文明十八年丙午十二月廿日、國司〇北畠具略と宇治一味して山田を責る、〇中略山田悉く燒亡、又山田勢彼城を二三度責るといへども、其日は不落候間、宮山にたまらず候て落候、楨倉掃部上下八人は、御殿の下に踏留、敵を待候所に、宇治衆此由を聞候て、甲兵五百計にてよせ、又軍勢ものぼせ被籠候を、宇治衆一圓に切通までおつこし候て、やがて未刻御殿に火をかけ、其身は御殿のうしとらの角に腹を切畢、郎從七人は則かみの城へ又切てかゝり、敵を討取、終に其身もやがてみなうたれ候、是は十二月廿二日也、〇中略御神體をば、十二月廿四日、一禰宜宮後の朝敦、子良の館の二﨟大夫を召れ候て、古殿の假殿へうつし申され候、假殿出來候て、長享元年九月三日に御遷宮候、

〔司家引付拔萃〕一、依御尋申上條々、〇大司ヨリ山田奉行へ出タル諸例ノ内

文治六年〇建久元年庚戌四月十一日甲午、未時內宮正殿心御柱朽損顚倒之由見付之旨、禰宜等注進之間、頭工等申云、去六日拜見御板敷本樣之時見付云々、仍祭主能隆朝臣、同十三日言上、同廿日癸卯、被行御卜、同廿七日大夫史廣房仰云、一任天仁天永例、可被行假殿御遷宮之處、已立新殿、卜他所可立假殿歟、一可奉渡便宜殿歟、一相待九月遷宮、不可有沙汰歟、能々議定、祭主宮司可參洛也者、五月九日、二宮禰宜請文云、卜他所立假殿事、御垂跡以來、宮地被定二所之後、無他所之例、又便宜殿事、長曆四年、依外宮正殿顚倒、遷宮御氣殿、仁安三年依內宮炎上、遷宮忌火屋殿、彼兩度例事、依卒爾不經奏聞、祭主宮司禰宜所計行也、今度例不能准據、其中內宮云、東寶殿可宜歟、又相待九月事、宮殿舍破損之時、尙不日加修造、況心御柱事、爭可無沙汰哉、就中九月遷宮以後、又輙難奉改立云々者、同五月十日、祭主能隆朝臣、大司盛家、依召參洛、同月廿二日乙亥、有陣定、左大臣、實定 權大納言、隆忠 右衞門督、通親 權中納言、經房 權中納言、親宗 左兵衞督、隆房 權中納言、兼光 左近中將、公時 參議源兼忠朝臣、定申云、應和年中雖有舊蹤相違之事、空過廿年、天仁有顚倒、天永奉改立、是又送一同、然者來九月御遷宮、今兩三月也、被相待何事之有哉、但殊致祈請、可被行御卜也云々者、同年八月廿五日丁未、奉遷御體於東寶殿、改立心御柱、但件寶殿大床、幷高欄御橋等、宮司准假殿造進之、先是今月十四日丙申、公卿勅使權大納言藤原賴實發遣、被祈申東寶殿遷宮之由、同年九月造替、御遷宮勤行、

東寶殿可立心柱否事

右奉遷御體於件殿、可修造正殿心御柱之由宜下既了、而件東寶殿可立心柱哉、禰宜先日依注言上、被問諸卿之處、申狀如此、件條須決御卜也、然而於此事、先尋不可然歟、云正殿云假殿、依新造必立之、蓚殿舍縱雖奉渡御體、何及心柱哉、就中三所神殿一時立之實未曾有歟、而無先例、又乖道理、何依狐疑可決龜兆哉、重以此趣下知本宮、祭主宮司禰宜等加衆議定、不背物宜者早存此旨、經沙汰、此上有殊子細者、宜可令注進、隨其狀跡、重可群議也、〇中略 宜以此旨令遣仰者、攝政殿下〇藤原兼實 御氣色如

修理大夫藤原朝臣定申云、假殿事、同讃岐權守平朝臣定申、但其闕子細、召神官等可被尋問歟、抑長久元年之假殿、頗被添花麗、彼年相當正遷宮、被待其期之間、御逗留可經程之故歟、若然者今度正殿造了、定有其程歟、且任長久之例、可全假殿之由、可被下知歟、正殿事、委尋延曆之例可被計行也、

讃岐權守平朝臣定申云、假殿者、已造營之由有風聞、重不可及日時之沙汰、暫被奉鎭御體於彼假殿、任延曆之例、早仰國々、營造正殿、可被奉遷御體、遷宮之期猶遠、爭送年月、被奉鎭于假殿哉、若可被奉造正殿者、又東西寶殿必可被造歟、是爲奉納神寶也、

右大辨藤原朝臣定申云、假殿之條、任先例造營之由也、已載神宮奏狀、此上何有異議、於正殿者、委訪延曆長曆之例、可被定行歟、〇中略

大神宮神主

注進以來廿八日可奉渡御正體於假殿事

右去寶龜延曆兩度雖有燒亡、即造進假殿、奉鎭御正體之由具也、乃准先例、隨假殿造畢、可奉渡之旨、先日度々言上畢、而今可有燒亡穢哉否、沙汰出來之間、依非人間事、禰宜等雖存案之上、殘日不幾、然則以來廿八日、可奉渡假殿之狀、注進如件、

仁安三年十二月廿五日　　大内人正六位上荒木田神主安元

禰宜正四位上荒木田神主俊定人名〇以下略

今日戌刻、此解狀到來、即申上畢、已奉移假殿由不及沙汰、神宮存例所行歟、　四年〇嘉應元年正月六日

癸亥、早旦參院、神宮火事、就公卿僉議、攝政〇藤原基房令申給旨、注折紙奏覽、

仰云、公卿勅使事、重被尋問左府以下各申趣之上、被行御卜、可被進止歟、假殿事神宮存例、不日造營

已奉渡了、於今者、不能左右、〇下略

〔神宮雜例集〕二心御柱事

一假殿幷正殿造營事

左大臣定申云、造營事、不日可終功之由、諸道一同勘申、其議可然、但假殿地可在議定處、遂經始之由有其聞、祠官定有存旨歟、沙汰之趣、且被問本宮、且召上祭主以下、委可被尋問、正遷宮期年紀已近、其處若乖誤者、次第又相違者歟、

右大臣定申云、假殿幷正遷宮事、如師元朝臣勘申、古宮所新作正殿、可被奉遷御體歟、於正遷宮事者、追可有沙汰、但至假殿者、神宮存先例、仍營造云云、何基跡哉、早被尋本宮、隨彼狀跡、定正殿修造之地、可被終不日功歟、

內大臣定申云、假殿事同群議、於正殿造營者、朝家之大營、神宮之重事也、遷宮年限其期漸近、召上祭主宮司等、委問子細、可有沙汰歟、又可被行御卜歟、且是有承曆例之上、神慮難測之故也、

按察使藤原朝臣定申云、諸道勘申之旨、漢家日域其趣區分、其例非一、假殿事、爲本宮沙汰、已以造營云云、於正殿者、可被終不日之功歟、但公卿勅使、被待正殿造畢以後者、遲怠之恐、神慮難測、當時假殿之間、可被發遣歟、兩箇之條、須有御卜者也、

左大將藤原朝臣定申云、先奉造假殿古宮所、奉造正殿、奉遷御體之後、可始正遷宮作事之由、師元朝臣勘申、尤可被據用歟、於假殿者、造營已了、奉遷之旨有其聞、於今者、彼本殿跡、早可被奉造件正殿歟、此條神慮猶難測、人智豈可決乎、如權中納言藤原朝臣長○實勘申、宜被行卜筮歟、

皇后宮大夫藤原朝臣定申云、假殿事同群議、正殿事、諸道勘申之間、猶以不詳、暫難定申、早召上神宮、委問子細、可被計行歟、至于公卿勅使者、假殿之間難發遣、神殿復舊之後可有沙汰、長曆顚倒之度、有其沙汰歟、

中納言藤原朝臣定申云、假殿事、造營之由、自本宮言上云云、然而非無疑殆、被召問祭主禰宜等、可被一定歟、正殿東西寶殿可被忩作之趣、同讃岐權守平朝臣範○親議矣、

可令奉遷渡者、

〔二所大神宮例文〕永久三年、內宮假殿遷宮東寶殿、

〔兵範記〕仁安三年十二月廿八日乙卯、

大神宮神主

注進當宮御正體假殿不合期間暫奉鎭忌火屋殿子細事

右去廿一日、炎上之由、卽注進之刻、任先例造進假殿、可奉鎭之旨言上畢、隨卽增加工員數、雖勵不日之功、不合期之間、數日不奉鎭御體之條有其恐、仍且訪准據之例、且成評定、今日子時所奉鎭忌火屋殿也、件殿僅燒殘、依有便宜、雖須卽時奉遷、餘炎移付近邊大木等之間、依有事危、或伐倒木、或打滅火之後奉遷畢、但隨造畢可奉渡假殿也、抑御所一宿於假殿之時、猶被下日時宣旨、且造進御樋代御船代等、且被調進裝束御被各一條、况於今度者、被造進御殿之間、定送旬月歟、然則雖遷御假殿、以後奉粧御裝束、被奉採御樋代等之條、依可宜早爲被裁下所言上也、兼又荒祭宮御體、如本奉鎭畢、自餘之事、追可注進之狀如件、

仁安三年十二月廿二日　　大內人正六位上荒木田神主安光

禰宜正四位上荒木田神主俊定〈○以下人名略〉

入夜此解狀到來、六位史所持參也、卽內覽、又申院〈○後白河〉了、廿九日丙辰、入夜左大臣〈○藤原經宗〉歸參、內大臣〈○藤原雅通〉又自八省歸參、右大臣〈○藤原兼實〉左大將師長、皇后宮大夫實定、按察使公通、中納言宗家、修理大夫成頼、參議親範、右大辨實綱卿等參入、次下官〈○平信範〉奉殿下〈○藤原基房〉仰、下給諸道勘文於左大臣、〈○中略〉仰云、伊勢大神宮燒亡事、任諸道勘文令定申次第等、〈○中略〉次被申上定詞、各詮議畢、被書定文、右大辨執筆、

諸道勘申伊勢大神宮火災以後可被行事

也、卽被付奏件日時、而勘申晝時、予申云、祭主永輔云、以亥刻所奉渡也、先例不用晝刻者、內府更可勘申夜剋之由、以義忠朝臣被仰下了、陰陽師在里、○中略內府又被奏日時勘文、陰陽寮擇申可奉遷伊勢豐受宮於假殿日時、今月廿五日丁未時戌二點、時親所勘申也、予卽給之、參關白殿、而殿下坐三條第云々、是爲八幡奉幣也云々、仍參被第、先令覽日時勘文之次、申勅命之旨等、命云、勘文早奏了、可下內府也、成此宣旨、早可下遣大神宮司所、又以此之由可仰祭主永輔之事等、可仰內大臣也、　十六日戊戌、予參關白殿、殿下坐中納言御方、○中略卽拜謁申云、左衞門督觸穢事、尋先例指無見、但依少穢更不可被改定歟之由、右大臣所令申也、又千人御讀經事如何、是仰事也、被復命云、遷宮行事、依少穢不可改定也、先例定無所見歟、御讀經事、御拜間被用神儀、仍其間被行佛事、猶可無便歟、　廿五日丁未、仰云、今日戌二點、外宮可奉遷假殿也、仍彼刻限出庭中、可有御拜也者、戌三刻出御御庭、子二點許、事了入御、予、賚成、章行等供奉之如例、今夜宿侍、　廿七日己酉、亥二刻出御御拜所、依雨儀、供南廊內地上也、予取御劍供奉、賚成、章行等同祗候之、子三點事了入御、仰云、御拜今日許也、

○按ズルニ、長曆四年七月廿七日大風アリ、神殿顚倒ノ際、一時御饌殿ニ神座ヲ遷シ、更ニ假殿ヲ造リテ之ニ奉遷セリ、此ニ擧グル所ハ、他事ニ涉ルモノ多シ、然レドモ之ヲ割去スルトキハ、其本末明ナラザルモノアリ、故ニ已ムコトヲ得ズ之ヲ全錄ス、

〔勘仲記〕弘安十年二月三日甲子、自上卿被奏文到來、○中略

文殿

勘祭主神祇權大副大中臣定世朝臣言上大神宮禰宜注進去月廿四日夜大風間別宮月讀宮御殿顚倒例事○中略

嘉保元年八月十六日、伊勢大神宮司言上曰、依今月十日大風、二宮幷諸別宮殿舍等破損顚倒者、

同二年八月十四日宣旨曰、下知宮司、任長曆四年例、先奉渡御體於御膳殿、一日之內修造本殿、早

御座、(用床子)物忌子陪膳供之、御膳於忌火屋殿(外院中)調備之、了持參供居御膳殿也、件殿三間屋也、非無威重、但其高頗減於御殿也、相去御殿六七丈許也、近在內院中、尤無止之所也、仍奉安置也、神寶等又奉納外院縣力御倉、又了、御所四面結木柴爲垣、以同柴爲戶扉也、如此之間、以神主禰宜內人等結番令祗候也、昨夜宿直神主連信、權禰宜經季、幷內人等申云、洪水汎溢宮中、其深沒人腰、而御殿頗覆、殆近地上、而其水不近寄御所邊、沿其岸流去、一渧之水不近流、是希有之事也、神力爰新歟、去正曆五年、洪水入宮中、避御殿又如此云々、抑御殿三間屋也、皆用大材奉作之、就中棟持柱二本、其徑二尺餘、又御殿柱徑一尺餘、又緣柱徑云々、合十餘本、柱六七尺許所堀立也、東西寶殿又如之、縱雖及百年、更不可朽損、何況於廿年乎、先例無此類、而件柱皆悉朽損、是希代之事也、縱雖有猛風、豈可動神居、尤有由緒歟、御體一分不傾動御、只頗有雨濕之氣、古老神人等申云、往昔猶無此事、但有內宮事(亡失)然而御體懸給松木、是神威曷焉也、此度事、有洪水相避之異、尤所奉相憑也、若是天下之運盡了歟、誠可悲泣之時也、悉以悲歎、非常之又非常也、永輔云、此恠異、專非一人帝王御事、尤過差也、只是爲世間大徵也、天運之盡了歟、言語道斷、可悲可悲、奉作假殿奉遷之事、尤可吉事也、其宣旨今月九日到來、即儲可奉作之由、仰宮司了、今月內可作了也、先例以黑木奉作之、其上葺板、其廻用切懸也、而此度以萱爲上葺、以佐久利波女可爲其廻之由同仰了、至于今可奉遷之日時早可承也、以此旨等密々令達天聽給了、

十二日甲午、左衞門督消息云、從去夜有犬死穢、遷宮行事如何、可候氣色者、予參關白殿令申此旨之次、申祭主參上之由、又申可奉遷假殿日時早可承之由令申旨、命云、左衞門督穢事、是非長穢、又其期日猶遠、不可改替他人、次但奏事由、隨仰可令勘申前例也、永輔參上、奏聞之事等早可奏聞也者、卽又歸參奏此旨、仰云、左衞門督藤原朝臣小穢事、可令勘先例、永輔申事、可仰內大臣也者、又參關白殿令傳申此由等、依御物忌也、仰云、早隨仰可仰下也、先例事、可仰右大臣也者、　十五日丁酉、權左中辨義忠云、內府自去夜被宿候、只今可被奏奉遷假殿日時、早束帶者、予卽束帶了、參上殿上、內府先是被候

力殊非猛烈、小民宅、殊不破損、但洪水汎溢、入彼御殿下、有古傳云、昔有大水、而一滴不入殿邊云々、今般如之、神人等彌以愁悶云々、造假殿事、最可吉、件御膳殿最少之殿也、朝夕御膳調進之所也、宛如厨所也、尤輕々也、但是玉垣内也、避御殿七八段許也者、一々奏此旨、深有恐思食之色、先日宮主則政申之旨、異補宜之詞、則政不知子細云々、午剋許、内大臣著陣座、予奏此旨、仰云、去月廿六日夜子剋許、豐受大神宮正殿、幷東西寶殿等、爲大風顚倒、依何咎有此事哉、可令卜申者、(祭主永輔解文不下給也)予即出仗下、仰内大臣、(權中納言信家、左大辨經輔在座、)此間主上著御御直衣、若是敬神、尤謹之故歟、仰云、宣命之趣如何、又奉幣之次、祭主若中臣官人參彼宮、限日欲令祈申此由、如何、此由等可示關白者、此間及申點、内大臣以予被付奏御卜、(入覽宮也)予先參關白殿、令傳覽、依御物忌也、同以仰旨令傳申也、即返給御卜、仰云、早可奏聞、宣命事以仰旨可仰下、又御祈事尤可然事也、彼日可召使也、如此御卜者、奉爲公家無咎歟、又宣命事、別別所可載此之由也者、予即參内奏覽御卜之次、奏聞關白復命、仰云、御卜可返給、但寫取案文可進也、抑宣命之趣、事已出檢(○檢恐衍)非常、迷而不知其由、依何徵咎哉、若是天下之運盡了歟、將以微眇之身敬神不謹之故歟、縱一人有不肖之咎、爲百王万代、猶安神居、必垂無爲之冥助、又營造彼御殿之間、暫奉造假殿可奉遷、是依古昔之例也、又卜筮所告可有疾疫兵革之殃云云、垂神德可有冥加之由等、可載宣命之狀、可仰内大臣者、予於殿上寫下御卜、　十一日癸巳、祭主永輔(神祇少輔六位)來談云、今日申剋許入洛、參關白殿、令申事由了、抑去月廿六日、大風終夜不休、但太非猛烈、同廿七日午剋許、豐受宮神人奔來告云、此宮正殿幷東西寶殿等、去夜子剋許顚倒者、即乍驚馳參之間、河水汎溢、往還不通、其流如射、舟船不能渡、仍更經海路適參著、于時及頽景、(尋常之路、不可經一時、而狂道之間、及數剋也、)加實檢之處、正殿幷東西寶殿玉垣瑞垣宮門等皆悉顚倒、先欲奉戴出御體之處、大物虹梁等打塞、不能取開、神主禰宜内人等、皆以衰老也、無力開發也、仍内人之中、撰工巧等、忽令著衣冠、奉切開奉拜出之處、玉體御船代、件御船代不能取出、仍直奉戴出體(御衾數重、仍不能拜見、云々、○體上恐脫御字、)了、即奉遷御膳殿、件殿朝夕供居御膳之所也、即有兩宮(内外)

一可廢務否事

同前諸卿定申云、延暦之比、內宮御殿已有火事、尋彼時例、可被定行歟、

一可令諸道勘申准據例否事

同前諸卿定申云、件大神宮尊敬異他、今御殿顚倒覆、尤在可懼、然宜仰諸道、尋勘唐家本朝、准據彼例、可被定行歟、

長曆四年八月四日

於朝干飯方奏之、不入覽筥、仍插文杖奏之、主上先是著御直衣、自定初及事終不解御也、仰云、諸卿定似宜、可作假殿事、聞有先例歟、早令勘申日時、木作日立柱日事也、月日可作畢由也、可下遣也、宮司營作歟、若仰何處可奉作哉、可定申、奉幣使可發日時可令勘申、十餘日間可勘申也、御卜事、中臣官人皆悉城外、早可遣召、參上之日可令卜申、諸道勘文、早各可進勘文之由可仰也者、廢務不被仰左右、內々御氣色、奉幣使發遣日□□可有此事歟云々、定文勘文留御所、先例定文被返下事也、此由預白被奏、而此度不被下、若依無止事歟、予仰之了、諸卿申云、作假殿事、仰宮司可令作也、是又先例云々、奏此由了、少時內府被奏日時勘文等、入覽筥、於奥座以覽筥被奏之旨、往古不用、開云々、諸卿傾奇云々、予先經內覽、於鬼間令覽之、十五日奉幣使、十日初作假殿木作、十六日立柱上棟、陰陽頭孝秀、助爲俊所勘申也、了即奏聞、仰云、隨勘申可令仰下、不可廻時剋、早可遣仰也、但可奉遷御之日時、追可勘下、又此間祭主宮司禰宜神主等、徒可候彼宮之由等可下知者、日時勘文下給之、予仰此由了、內府被奏云、文章博士可進勘文也、而今一人未補、其所可加仰誰人哉、予奏之、仰云、可仰權左中辨義忠者、以此旨仰了、　十日壬辰、仰云、神祇大副輔宣參入之由云々、彼宮顚倒□間御體危否、又古昔有此例哉、又往昔有大水、入彼宮中、而其水不入御殿邊云云、又奉造假殿事如何、是等由內々可問輔宣者、予於掖陣下問之、申云、顚倒間不參問、仍所不奏見也、是罷上之間事也、仰件事希代也、往昔未有此例云云、御殿宮柱二本、徑三尺許、六七尺許所堀立也、雖經百年、不可朽損、何況於廿年、而顚覆之理、太以爲奇、中臣氏人、並觸此宮事之輩、悉悲深云々、又此度風

御坐御膳殿歟、奉幣使可發遣歟、可有御卜歟、仰諸道各可令進勘文歟、可有廢務歟、此等間且尋先例可定申之由可仰內大臣、即下給永輔解狀并外記勘文等、予出仗下、進自奥座、仰此由於內府、同下件文等了、又召予被仰云、中臣官人不候洛中、可召遣宮主則政、爲被問仰彼宮案內也者、予仰出納遣召了、少時參入、奏此之由、被仰云、御膳殿者、在內院中歟、於此所調備御膳進供御所歟、將於他所調備供居御膳殿歟、此之由可問則政、即於掖陣下問此之由、申云、御膳者於他所調備之、供居件膳殿也、此殿避御在所四五丈許也、在內院中尤無止之處也、暫御坐件殿、可無其難歟、但頗破壞由云々者、予即奏此旨、仰云、此由內々可令仰知內大臣者、仰了、內府以予被奏云、奉幣使今日可定申其日時歟、承案內遣召陰陽師也者、奏此旨、仰云、今日宜日也、早可定申也、仍可召儲陰陽師者、即仰了、少時內府被奏宇佐宮燒亡勘文、外記守輔申云、治安二年月日、宇佐宮燒亡、即被奉奉幣使、其使立日以後、五ケ日廢朝云々、(不具見、仍省略記也、)予先內覽、(付女房令申關白也、)了奏之、(留御前、)良久之內大臣被奏定文、(予先經內覽、次奏聞之、)其定云、(修理大夫經任書之、)

祭主神祇權少副大中臣永輔言上、七月廿七日夜大風間、豐受大神宮正殿并東西寶殿顚倒事、

一作假殿可奉遷否事

內大臣敎通、春宮大夫(賴宗)藤原朝臣、春宮權大夫(師房)源朝臣、民部卿(道方)源朝臣、左衞門督(經通)藤原朝臣、右衞門督(資)藤原朝臣、右兵衞督源朝臣、修理大夫藤原朝臣、(經任)左近權中將(兼頼)藤原朝臣等、定申云、如永輔解狀者、新宮造進之間若作假殿、彼此相並、可致事煩、然而所奉安置之殿宇不嚴、似無威重、先營作假殿、可奉遷御體歟、

一可被奉遣奉幣使否事

同前諸卿定申云、早任先例可被奉遣歟、

一可行御卜否事

同前諸卿定申云、神殿顚倒不可不卜、早以卜筮可致祈禱歟、

寛文四年辰七月日　伊勢大神宮司

〔春記〕長暦四年八月〇此間缺損處已如掃地須先言上事由、隨報裁也、而御體□露顯御坐、尤有事畏、卽計便宜、今日奉遷御膳殿畢、至于神寶物及幣帛等者、移納于外院懸□御倉同畢、抑奉修造本宮、已可皆作、又此間奉造假殿、與新宮造作指合、尤有事煩也、遷宮之期已近、彼間御坐御膳殿、何事之有哉、是已尋常之時所儲、朝夕御膳御坐也、敢不可准他所、但件御膳殿者、最少殿也、其替奉造假殿、可致恒例勤也者、被報云、如解狀者、事最非常也、早可奏聞者、又參內奏覽之、御覽〇後朱雀之後、大以驚御、仰云、非常之甚、古今無此事、以徵眇身莅尊位之徵也、不德之故也、悲歎之至、迷而不知、爲之如何、以是旨可示關白〇藤原賴通者、又參彼殿、令傳申、如前、卽有召參候、被破御物忌也被仰云、事尤可驚御、未聞此之由、可謂非常、可謂非常、先令諸卿定申、可吉也、或云、古昔內宮有燒亡事云々、又先年宇佐宮燒亡、先尋勘彼等例、相准可定申歟、以此由可被仰右大臣〇藤原實資彼人有障者、可被仰內大臣〇藤原敎通明日內可定申之由、可被仰也、先內々被問右大臣、隨申可仰內大臣也、予〇藤原資房申云、永輔〇神宮祭主申文可下給歟、被命云、件申文暫不可下給、可候御所也、又被命云、件事尤不便也、但爲世恠異、不知其眞僞、宇佐宮燒亡事、是又非常、而其後無異事、若依自然可歟、左右難計事也、尤爲畏尤爲畏、明日可參候之由可奏者、又歸參奏此旨、仰云、先可仰右大臣者、予以書狀取案內、返報云、有所勞不可參入、奏此由、仰云、早可仰內大臣者、卽參內府、仰此由、被返奏云、今日催諸卿難參集、明日相催可參入者、予又參關白殿、令申此由、同奏聞了、

四日丙戌、巳時許、內府被參候、招予被示云、諸卿多有故障不參入、重遣催了、甚雨之間、若依有事煩歟、給外記勘文可奏覽者、外記賴資勘申云、延暦十年月日、伊勢大神宮有燒亡事、仍遣參議左大辨紀古佐美、爲奉幣使云々、他事無所見、又件勘文在御所、仍遣覽也、內府云、古傳云、件宮爲盜被燒亡、玉體懸木、禰宜稱瑞興奉下云々、卽退去、此間關白參入給、直衣裝束予令覽件勘文、仰云、早可奏者、予卽奏之、暫留御前、申剋許、群卿參集、在陣頭由云々、關白召予、於御前被仰云、豊受宮顚倒事、猶先作假殿可奉遷歟、將依永輔解狀、暫可

以便宜之殿先假殿

瑞垣御門等、拂地顚倒給既畢、○中略仍御氣殿忽ニ洗淨天、以同廿七日戌時天、正殿幷三所相殿乃御體乎奉遷鎭畢、而遠所外宿乃禰宜等不參會シ天、昇殿供奉乃處仁、禰宜乃所用不足、仍御炊物忌父吉元、祭主俄授登、號權禰宜職天、昇殿之役令供奉、左右前後乃取物、御寶殿等不如法、只桐垣許歟、已以略、以同廿八日、御稻御倉乎洗淨、奉遷神寶物利、鋪設御倉乎洗天、御糸絹等乎奉納了、外幣殿乎洗淨天、朝夕御膳乎奉備利天、祭主注事由、且上奏公家、且奉造假殿已畢、隨卽以八月七日被下宣旨天、奉遷假殿已了、

〔文安二年內宮假殿遷宮記〕皇大神宮神主

注進早被經次第御沙汰、忽被遂行假殿遷御間事

右當宮御假殿事、以前度々巨細注進之處、于今停滯之條、神慮難測、建久以來、新造九箇度、東寶殿六箇度也、勘文右備依心御柱相違被遂行假殿之時、於東寶殿遷御之事無先例、爭及新儀御沙汰哉、東寶殿遷御之事者、古宮所新殿造立之間、依無在所也、其上今度東寶殿御修理、與新造功程相違、不幾者歟、然早被經御沙汰、任先例被新造假殿、被遂行遷御、彌被專天下泰平國家安全御祈禱矣、注進言上如件、以解、

永享十一年九月日

〔司家引付拔萃一〕依御尋申上條々

東寶殿古殿之外、長曆四年七月廿七日、外宮假殿遷宮、御氣殿ニ遷御成シ奉リ候、是ハ廿六日之夜大風洪水にて、正殿東西寶殿瑞垣御門等、地ヲ掃テ顚倒故、無是非御氣殿へ奉鎭候、○中略又仁安三年十二月廿一日、依炎上內宮假殿遷宮、忌火屋殿へ奉成遷御候、是ハ火急ノ儀ニ御座候、○中略總而二宮假殿遷宮九十餘座、其內右勘申候、東寶殿御氣殿忌火屋殿ノ外ハ、皆新造ノ假殿へ奉遷座候儀ニ御座候、○中略

者無所見、依可被尋之由、下官所令申也、長暦四年、豐受大神宮顚倒、寛治六年正殿傾寄者、件兩年例、不叶、今度故也、今基行申旨、祭主申云、慥不覺其年例、尋勘可令申也、但追定敎宮司時、遷宮例候樣思給候了、仍被問官外記之處、無所見、師遠進勝實申此趣、○中略頭辨著勝實、且尋定文趣、大略一同、事吉凶并可遷宮否事、依御卜被定行之由、所定申也、卅日、大神宮破損定、○中略又大臣仰頭辨問伯卿云、可遷宮者、前○前用誤恐何所哉、又准豐受宮御他殿之例有、可奉度便殿之否、又東西心柱外新所立柱、遷御後何樣可存乎、凡件間事、可令量申也者、親定卿申云、凡件間事、自本如令申候、全無前例者、但依時議可左右候也、但東西宮舊跡外、若可被立心柱者、本宮東其地有便、○中略又准御他殿可遷御候者、外幣殿屋有其便、但中心所思給者、瑞垣御門内引雲形、拔件中門、其跡打平張、置宿直人、夜晝令候矣、被待明年御遷宮吉候歟と思給候ども、其又神慮難量、又無前例者、難申出候者、又今心柱遷御之後、可被撤歟、東西宮跡立柱者、但是定所柱也、さ、何三柱双立乎、頭辨以此趣上卿可被奏、○下略

〔天文十一年内宮假殿日記〕御假殿在所、瑞ガキノ内、自御殿東可然子細候、得御意候、

卯月一日　　　　　　　　　　　　　　　　内宮一禰宜

　　謹上　大宮司殿

〔萬治元年内宮炎上記〕二日○閏十二月未明、大司參宮、禰宜各參、于時一座申云、今度大事偏憑司力、其節岩代氏○山田奉行家來亦參向、申云、假殿造營事、任舊依可被司奉行、於造料隅州贍之、依宮司禰宜奉行代岩代氏等相共相計、奉經營於雨覆假殿了、○中略抑今日假殿造營之事、先以西御宮地瑞垣之内正殿之乾、擇定御宮地、令神人拂淨之、黑木板葺假殿奉立了、

〔大神宮諸雜事記一〕延暦十年八月五日、夜子時大神宮御正殿東西寶殿、并重々御垣御門、及外院殿舍等、併掃地燒亡、○中略仍宮司且急造假殿、奉鎭御體、且注其由、言上於神祇官、隨則上奏、

〔大神宮諸雜事記二〕長暦四年○長久元年七月廿六日、夜子時西風俄ニ吹テ豐受大神宮正殿東西寶殿

新設假殿

各三丈六尺、南北長九丈八尺、蕃垣御門東西脇各四丈四尺、南北長、瑞垣舊跡定也、
南面今重玉串御門東西脇、如蕃垣御門、在左右少垣、各一丈三尺、付北方開間各五尺、又南面荒垣、鳥居前木柴垣一所、如屏垣、南面三重、幷內陣木柴垣、皆打其葉、外陣東西北方波不打之、

〔弘安二年內宮假殿遷宮記下〕本宮御假殿御材木目錄

合

桂十二本如御持定　　千木四支　　御堅魚木十支

〔外宮假殿要須記〕奉立假殿次第

三間板葺御殿一字、高一丈一尺、自長押上八尺、下三尺、廣二丈二尺、中間八尺、左右東西二間各七尺、縱一丈四尺、七尺二間也字立黑木、千木黑木、堅魚木黑木長六尺、鞭懸黑木、四面簀子黑木、高欄黑木、御階高欄黑木、踏板檜員拾一枚、

一御垣二重木柴、一重造之瑞垣跡、一重造立其間、南北一丈二尺、東西一丈也、自中墨也、

一鳥居六基、南面四基、第一、第二、各御垣處、第三在第四御門跡、第四荒垣跡、在屏柴垣、

〔長秋記〕永久元年九月六日、伊勢大神宮瑞垣御門顚倒事、去五日頭辨參仕、奉下調度文書等者、〇中略左府〇源俊房奏云、內大臣〇源雅實度々爲勅使參大神宮、定知彼地形歟者、〇中略大藏卿〇藤原爲房讀調度文書、始自本解及外記之勘文、未發語之先、內大臣進申云、此事不可別沙汰、只勅定與御卜之間、可切事也、凡內院之中、有少破時、無宜〇宜上恐脫便字遷宮者、無修造之例、又可遷宮之所、新宮上棟竪柱者、宮所二所外、全無遷御例、心柱三立例、無其聞者、神慮難量上、不能定申者、愚案如此、此間右大辨〇藤原長忠參仕、數刻無免不著座、適召著座書定文、此間神祇官大副大中臣基行參脇陣、以大外記師遠令申祭主親定卿之申旨、〇中略親定卿申云、如此御所邊修造時必遷宮御、於瑞垣門外者、引雲形紺布、被修造常例也、而重大臣〇重下恐脫左字被尋仰云、然者正殿無損、瑞垣御門修造時、有遷宮之例、慥覺申者、件事如勘文等

假殿造設地

〔天正九年外宮假殿遷宮記〕豐受大神宮神主
注進早經次第上奏可被達叡聞當御修理遷幸還幸之事
右就正殿御萱俄朽損落致注進之處、爲神宮調法可仕之旨被仰下、任叡慮此度者先以遂其沙汰、六月七日奉遷假殿、其後加修理、同十六日神事之刻、可奉爲還奉之旨、注進言上如件、以奏、
永祿八年五月日　正六位上度會神主吉久上
禰宜從三位度會神主常眞〇人名以下略

〔天正遷宮記〕天正九年十月、正殿〇豐受大神宮御修理次第、
日時、宮司ヨリ十月廿七日、神宮ヘ告知也、

〔天正九年外宮假殿遷宮記〕行事記
今度儲殿可有新造之處、依折中奉遷御于古殿也、〇又見天正遷宮記、司家舊記、遷御近例、

〔皇繼年序記〕慶長三年戊戌、大閤秀吉ヨリ、外宮御修理、六月六日假殿遷宮、五月晦日ヨリ參籠、〇又見外宮子良館舊記、天正文祿慶長元和宮司引付、

〔遷御近例〕太上天皇〇後西院寬文四年甲辰十二月三日、假殿遷宮、〇豐受大神宮正殿乾方千木折レ、即懸留于萱葺之上、同十三日、還御遷宮、〇又見司家引付拔萃、

假殿搆造

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕同日〇七月九日假殿奉造畢、三間板葺御殿一宇、高一丈二尺五寸、長二丈六尺、自御板敷上九尺、下三尺五寸也、中間一丈、左右間各八尺、樓(フマ)廣一丈六尺、東西𣏐羽各三尺、宇立高四尺、垂木間別二支、在四面欄、南面御橋板十枚、長一丈二尺、厚一寸五分、廣八寸、一棟持柱、高一丈六尺五寸、土ヨリ上定、棟覆泥障板、廣八寸、厚一寸五分、御戸高六尺八寸、廣七尺、御板敷檜板也、材木皆黑木也、又泥障板四面廻也、廣六寸、厚一寸、假殿御戸左右脇、幷東西北面皆立衾垣也、緣二支、在上下樋四面木柴垣、但結二緣也、南面三重瑞垣御門東西脇

文明七年十二月　　大内人正六位上度會神主弘富上

禰宜從四位上度會神主朝敦○以下人名略

〔司家引付拔萃〕依御尋申上條々

古殿を假殿に被用候事は、文明十八年十二月廿四日、外宮假殿遷宮にて御座候、○中略

寛文四年辰七月　　伊勢大神宮司

〔外宮子良館舊記〕文明十八年丙午十二月廿日、國司○北畠晴具と宇治一味して山田を責る、○中略山田悉燒亡、○中略榎倉掃部上下八人は、御殿の下に踏留敵を待候所に、宇治衆此由聞候て、甲五百計にてよせ、又軍勢ものぼせ被籠候を、宇治衆一圓に切通までおつこし候て、やがて未刻御殿に火をかけ、其身は御殿のうしとらの角に、腹を切畢、○中略是は十二月廿二日也、○中略御神體をば十二月廿四日、一禰宜、宮後の朝敦、子良の館の二﨟大夫を召れ候て、古殿の假殿へうつし申され、假殿出來候て、長享元年九月三日に御遷宮候、○又見兩宮遷宮假殿次第

〔神皇雜用先規錄〕延德二年庚戌九月十六日、外宮假殿遷宮、

○去年八月十一日天火降、古殿炎上、松虫燃亡ト云是也、今年九月十四日、午刻亦天火降、假殿燒失、愛朝敦長官、不日構立假殿、同十六日御遷宮畢、○又見外宮子良館舊記、

文龜元年辛酉九月十六日、外殿御假殿、○又見司家舊記、外宮子良館舊記、

永正十八年辛巳○大永元年六月十三日、二宮御假殿、同日同夜外宮先云々、○又見永正天文外宮假殿遷宮記、

〔天正九年引付〕永正十八年六月十三日、細川殿ヨリ之假殿遷宮、内宮戌刻、外宮子之刻、然レドモ祭主宮司外宮ニ押留ル也、内宮祭主宮司ナシニ調、末代ノ規模也、○又見内宮永正引付、皇繼年序記、

〔永正天文外宮假殿遷宮記〕天文十年辛酉九月廿六日、御遷宮之様體、

抑今度御假殿造營之事、尾州織田彈正忠江、外一禰宜備彦方ヨリ依懇望、要脚七百貫文、其代以金、一禰宜方へ被相渡云々、○又見遷御近例、禰宜晨彦引付、

中將宗繼朝臣、奉行宮藏人權右少辨俊國、外記不參、右大史範職史行事等參陣云々、

〔應永廿九年外宮假殿遷宮記〕風記

外宮假殿遷宮雜事日○中略

假殿遷宮日

十二月廿四日丁丑　廿九日壬午○中略

十二月廿二日　陰陽頭安倍有重

〔二所大神宮例文〕永享元年己酉十二月廿五日、外宮假殿遷宮、去七月十三日、神人與神役人合戰、神人打負、瑞垣内觸穢、白石流血、神役人殊射雜者共、御殿ニ射立矢依之也、件射雜者共、蒙神罰畢、○又見大宮司家古文書享德元年壬申十二月十九日、外宮假殿遷宮、○造替遷宮可有御座也、○又見大宮司家古文書

〔司家舊記〕豐受大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰被達上聞、○中略前代未聞不思儀子細狀、

右件御竈○忌火屋殿御竈鳴動之事、希代不思儀之次第也、若天下爲重事哉、抑當宮御假殿之事、如今度々注進、其例不過旬、去永享中御假殿六箇年御遷座之事、不享神非例之哉、於于都則言語道斷之次第有之云々、殊今度之御假殿者、東西之心御柱之外、既三十四年御遷座之事、神宮之非例不斜之條、神鑒太叵測之者也、然間自二十ヶ年以前、依御殿朽損、一定及于御顛倒之間、企注進之處、其時御京都忽劇之間、不能言上、去程雖有御顛倒、雖及于御沙汰之間、雖爲古今之非例、伺於神慮、御葺以下依奉加御修理、于今雖無御相違、如形之御葺、毎度自地上奉覆之間、依不謂雨露之儀、殿内御朽損之間自御板敷御神寶以下、于地上御頽落之條、其恐不少者也、所詮爰先年造進之正殿有之、彼御殿被調、未作被位于御假殿御遷宮、心御柱之上被奉鎭御神體者、天下泰平國家安全之御祈禱、不可過之者也、然早被經次第御沙汰、可被達上聞者也、仍注進言上如件、

請殊經上奏、任先例被勘下大神宮正殿東西寶殿瑞垣御門修閇、假木作始並立柱上棟及遷宮等
日時狀○中略
右當宮正殿假御遷宮之事、可進請奏之由、依被去年仰下、任勅定爲調進、相觸本宮、任例召工等注文、擬令言上之處、外宮一宿假殿御遷宮事、被勘下日時之間、隨宣旨之到來、先給外宮假殿造進以下之大功、守勘下之旨、去年十二月九日、奉遷御、致修造無爲之沙汰、仍今所令此請奏也、望請祭主裁、經上奏、任先例、爲被勘下件等日時、言上如件、以解、

永仁五年正月日　　權主典
　　　　　　　　　主典

大司從四位下行神祇權大祐大中臣朝臣長藤署名○以下略

〔正中外宮御飾記加筆〕生絹御衣二領、中仁永仁五年丁酉三月十九日壬午假殿之時、有沙汰天奉飾之、

〔司中記〕外宮假殿遷宮、嘉元三年、　同○大宮司長藤

〔伊勢勅使部類記上〕天仁天永建久建長等被行例、可注進由之事、
延慶三年八月廿八日洪水之時、外宮心御柱卷絹卷布等流失等、同九月七日禰宜等注進之處、經四箇年、正和二年被行假殿、被飾替心御柱畢、

康安元年八月九日　　大神宮司長基請文

〔正中外宮御飾記加筆〕正中度鐶許也、肱金ハ略之、而嘉曆二年八月十三日假殿之時有沙汰、御壁代乃肱金二隻拔之奉打畢、

〔二所大神宮例文〕嘉慶二年戊辰外宮假殿遷宮、後小松院御宇
應永四年丁丑外宮假殿遷宮、○又見大宮司家古文書

〔康富記〕應永廿九年十二月十一日甲子、今夜伊勢外宮假殿遷宮日時定也、上卿藤中納言隆光卿、頭

〔外宮假殿要須記〕假殿御裝束奉レ放事

弘安七年三月廿二日假殿時之日記云

同廿三日、假殿御裝束等奉レ放之、八禰宜常尙、（一禰宜立子、衣冠、）攝政所雅見、（衣冠、）出納所光顯、（衣冠、）正物忌康村、（衣冠、）弘俊、（同）庭貞、（同）秀貞、（同）秋重、（同）友則、（同）永用、（同）各昇二于假殿一奉レ放之、計二員數一、從仁裹之、以二下部一奉レ送二廳舍一訖、

〔宮司遷宮記〕□（○闕、恐遷字）宮御假殿代々

外宮假殿遷宮　弘安八年　大司長藤（○又見二公文筆海抄一）

〔康富記〕寶德元年八月廿二日庚午、勘申、（○中略）

弘安七年九月廿日、權中納言藤原冬輔卿參入、被レ行二同（○軒廊）御卜一、是去六月廿三日四日大風間、豐受宮西寶殿北方千木依レ令二折懸一、同泥障板破損上、正殿御橋東方大床際、束柱朽損顚倒間、御橋令二傾倚一、重々御垣等顚倒事也、（○中略）

右文籍所レ注如レ件仍勘申

寶德元年八月十三日　大炊頭兼大外記淸原眞人等勘申

〔外宮假殿要須記〕古物分配次第

正應元年九月二日、御一宿假殿御裝束分配文曰、正應元年九月二日、假殿御遷宮御裝束配事、（○下略）

〔伊勢勅使部類記　上〕天仁天永建久建長被レ行例可二注進一由之事

正應三年、外宮正殿漏濕□心御柱所レ損事、送二七箇年一永仁四年被レ行二假殿修覆表葺一、奉レ立二替心御柱一畢、

（○節略）

〔二所大神宮例文〕大宮司次第

康雄（光定孫、正應二年十月十九日任、在任五年、外宮假殿木作始日時僻忘問、被二停止一、）

〔永仁五年內宮假殿遷宮記〕大神宮司解申請祭主裁事

〔類聚大補任 後深草〕建長七年乙卯四月廿二日、外宮假殿遷宮、〇又見附宮遷宮假殿次第

正嘉二年戊午八月廿八日、外宮御一宿假殿遷宮、〇又見外宮假殿要須記

〔類聚大補任 龜山〕弘長元年辛酉十二月十八日、外宮假殿遷宮、〇又見附宮遷宮假殿次第

文永元年甲子六月十八日、外宮假殿遷宮、〇又見附宮遷宮假殿次第

文永四年丁卯三月廿五日、外宮假殿遷宮、〇又見附宮遷宮假殿次第

文永八年辛未七月六日、外宮假殿遷宮、〇又見吉續記、附宮遷宮假殿次第

文永十一年甲戌十月一日、外宮御一宿假殿遷宮、

〔弘安二年內宮假殿遷宮記 下〕宮司競望沙汰事

散位從五位下大中臣朝臣忠光重誠惶誠恐謹言

請殊蒙鴻恩、且任以前條々雜怠實正、且依內宮正殿假殿遷御時刻相違重事、停止公行大宮司〇中

略

狀、

自去々年訴申公行條々重科事

一建治二年六月日、外宮正殿假殿御一宿遷御之時、御修理之間、步板並假殿助木、以堂舍材木、一向

通用之、神慮難測、無先例者也、依之大風雨之間、無還御之隙、一日一夜御坐于假殿、是併依材木不

淨之御祟也、仰頭工等被尋實否、可被處罪科事、〇下略、

〔外宮假殿要須記〕日時宣旨請文書次第

正殿假殿遷宮日時宣旨遲々時、且風記御敎書被下之例狀曰、弘安三年九月、外宮假殿遷宮次第日

記、〇時記誤爲先以風記注進之、陣定遲々間、且爲存知所注遣也、恐可下知給候、仍執達如件、

九月四日　右衞門佐俊定

大夫史殿

〔二所大神宮例文〕寛元四年丙午十二月廿七日、外宮假殿遷宮、〇又見二類聚大補任一

〔大神宮司神事供奉記三〕寛元四年十二月廿七日壬子、外宮假殿遷宮、奉遷使神祇權大副隆頼朝臣、是總官朝雖灸事未及平愈之間、爲御代官勤任也、宮司大司盛房、權大司長則供奉、〇中略廿八日勤行文到來任宣下相構明衣筵道布等、修補正殿東西寶殿瑞垣御門差檜皮葺萱等奉造替西寶殿千木二支泥障板一枚鞭懸木四支、無爲勤行之由也、

抑今度御遷宮十一月十六日可奉行之由日時勘下之處、役所用途依不合期延引、又今月十五日可奉行之由宣下之處、雲形明衣筵道布等不被奉下之間延引、十五日朝到來院宣曰、爲宮司沙汰、相構明衣筵道等可行之由所被仰下也、雖然院宣遲到之間、仍卽奏聞、重被下宣旨、今日勤行畢、

〔二所大神宮例文〕寶治二年戊申七月十日、外宮假殿遷宮、〇又見二類聚大補任、永仁五年内宮假殿遷宮記一

〔百錬抄後深草十六〕寶治元年八月七日丁亥、被行伊勢大神宮外宮御遷宮假殿日時定、源大納言雅親卿已下參入之、二年三月十九日丁卯、伊勢外宮假殿遷宮日時定也、

〔二所大神宮例文〕大宮司次第

盛房大宮司公房末孫也、嘉禎三年正月十二日任、在任十一年、寶治元年依二御修理怠慢一停任也、

〇按ズルニ、百錬抄ニ寶治元年八月假殿日時定アリ、而シテ同二年三月再ビ同日時定アリ、蓋シ宮司ノ怠慢ニヨリテ延引セルガ故ナラン、

〔類聚大補任後深草〕建長四年壬子四月廿一日、外宮假殿遷宮、〇又見二兩宮遷宮假殿次第一

建長五年癸丑三月四日、外宮假殿遷宮、〇又見二兩宮遷宮假殿次第一

〔百錬抄後深草十六〕建長四年五月十八日辛丑、權中納言公光卿、被行軒廊御卜、伊勢外宮御裝束已下爲鼠喫損事十二月四日甲寅、外宮假殿遷宮日時定也、權大納言冬忠卿參云云、

敬神也、

〔神皇雜用先規錄〕元暦二年（乙巳○文治元年）四月廿一日、外宮假殿遷宮、（出外宮補任○又見類聚大補任）

〔類聚大補任（土御門）〕正治二年（庚申）三月廿五日、外宮假殿遷宮、

〔類聚大補任（土御門）〕正治元年（己未）

宮司大司從五位下康定（十一月廿五日、預重任官符、今年九月廿四日依大風、外宮殿舍御垣等顚倒破損、可修造之由也、件官符等十二月三日到來、仍帶彼官符、十九日參拜二宮之後、著離宮院、）

〔類聚大補任（土御門）〕承元元年（丁卯）四月廿二日、外宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）

承元三年（己巳）四月十日、外宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）

〔類聚大補任（順德）〕建保三年（乙亥）四月二日、外宮假殿、

〔二所大神宮例文〕建保五年（丁丑）四月十八日、外宮假殿遷宮、（○又見類聚大補任）

承久二年（庚辰）七月十六日、外宮假殿遷宮、（○類聚大補任、永仁假殿遷宮記、並作七月六日、）

〔類聚大補任（後堀河）〕嘉祿元年（乙酉）四月十四日甲辰、外宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）

嘉祿二年（丙戌）四月十九日癸卯、外宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）

寬喜元年（己丑）四月六日癸卯、外宮假殿遷宮、（○又見康富記、兩宮遷宮假殿次第、）

〔類聚大補任（四條）〕嘉禎元年（乙未）十月十八日、外宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）

〔二所大神宮例文〕仁治二年（辛丑）十月十九日、外宮假殿遷宮、（○又見類聚大補任、兩宮遷宮假殿次第、二年大宮司家古文書作三年、誤、）

寬元元年（癸卯）四月廿八日、外宮假殿遷宮、（○又見類聚大補任、大神宮司神事供奉記、）

〔百練抄（十五後嵯峨）〕寬元元年三月廿日壬申、豐受宮臨時遷宮、御裝束金物等進發、果權辨定朝朝臣奉行、

○按ズルニ、臨時遷宮トハ、卽チ假殿遷宮ノ謂ナラン、

十二月十九日庚子、時寅二點〈○又見遷宮記、神皇雑用先規録所引外宮補任、〉

〔二所皇大神宮遷宮次第記〕承安二年〈壬辰〉二月廿三日、外宮假殿遷宮、

〔伊勢勅使部類記　上〕承安二年宣旨案

左辨官下　伊勢大神宮

應且遣官使木工寮工等、豐受大神宮正殿奉差扶木副短柱等、且令宮司同宮禰宜等辨申仔細、正殿以下修造間致怠慢事、

右得祭主神祇權大副大中臣親隆卿去月十三日解狀偁、大神宮司同月八日解偁、豐受大神宮禰宜等同月五日注文偁、當宮正殿東方御棟持柱低下之由奉見付之旨、物忌父等依令申、加拜見有其實、仍任先例、委令頭工等拜見之所、所進注文偁、蒙廳仰曰、正殿東方御棟持柱、低下之由奉見付之旨、物忌父等所申也、任例加拜見、可申上仔細也者、奉拜見之處、東方御棟持柱、幷同方壁柱三本根朽損、二寸許所低下也、抑西方棟持柱、壁柱四本根朽損之間、去二月假殿御遷宮之時、以扶木十二支被奉差西方畢、而今東方御棟持柱等、又根朽損所低下也、非無事危、早被扶木之上、猶可被奉差副扶木哉者、如其狀者、御柱根朽損倍增間、誠非无事危、然則任工等申狀、早可被奉差副扶木也者、仍相副言上如件者、〈○中略〉右大臣宣、奉勅下知本宮、〈○中略〉差遣官使幷木工寮工等、加覆勘使申上、殊撰其材宜奉差彼扶木者、宮宜承知、依宣行之、

承安二年十月廿六日　大史小槻宿禰

少辨藤原朝臣

〔玉海〕承安五年〈○安元元年〉閏九月十日戊午、申刻藏人右少辨親宗送書於光經云、外宮假殿遷宮事可奉行者、報奏承了由、十二日庚申、外宮假殿遷宮行事所始、明日〈十三日〉及來十六日之由内々勘申、隨仰可致沙汰、若可及十六日者、明日參入可承、十月十七日甲午、今日假殿遷宮也、修祓、雖不可必然爲

力頽倒破損間例事、

寛治六年八月四日大風、伊勢大神宮西寶殿頽倒、並殿舍門垣等破損、並豐受宮殿舍門垣等同破損、十五日被行軒廊御卜、是大神宮寶殿、爲大風被吹損事也、廿七日左大臣以下參入、重被定申伊勢豐受大神宮假殿遷宮事、去廿一日可行、而件日不遂行、次日行遷宮之事、十一月十五日伊勢外宮遷宮也、（○中略）

〔神宮雜例集〕二心御柱事

天永元年十二月廿四日戊午、豐受宮假殿御遷宮也、寅二點奉渡御體於假殿、修補御殿、奉立正殿心柱、廿五日己未、奉移御體於正殿了、是依心御柱朽損頽倒所被行也、（○又見二所大神宮例文）

〔永昌記〕大治元年二月十六日壬子、被勘豐受宮假殿遷宮日時、（○中略）奉渡御體於假殿、（四月二十一日○又見外宮假殿要須記、二所大神宮例文作三月、蓋誤、）

〔本朝世紀〕久安元年十一月十五日、上卿被定伊勢豐受宮假殿遷宮日時、（木作始今月十九日、立柱上棟來月十九日、遷御正殿同二十七日、）

仁平元年閏四月廿八日戊戌、申剋大納言宗輔卿著右仗、被定申豐受大神宮假殿土殿蚊屋御帳修理日時、以左少辨資長内覽關白（○藤原忠通）之間、内裏有犬死穢之由披露、仍件事後日可被改勘由被仰下了、　五月九日戊申、未剋權中納言忠基卿著仗座、被定申伊世豐受宮假殿蚊屋修理日時、

〔顯廣王記〕長寛三年（○永萬元年）十二月七日壬午、豐受大神宮假殿御遷宮也、寅時歸遷本殿、戌時也、依被修理破損也、宮司有隆（○隆長誤）所勤也、（○十二月二所大神宮例文作九月、蓋誤、）

〔兵範記〕嘉應元年十月廿二日甲辰、晩頭右大將（○源雅通）參陣、被定申豐受大神宮假殿遷宮事、

陰陽寮

擇申可被修造伊勢豐受大神宮雜事日時（○中略）

奉渡御體於假殿日時

豐受大神宮假殿遷宮遷載

〔神宮編年記〕延寶九年（改元天和元年）十二月十三日之夜、（子上刻）正殿并東西寶殿炎上、（○中略）扨御正體之儀、予氏富奉戴之、御政印之水ノ上之山陰にして、古殿之御船代を敷、獲神奉遷之、并相殿之御靈、御神寶等同所ニ安之、正權禰宜物忌等奉護衞之、以幔幕圍四方、（○中略）火鎭而後、於古殿奉遷御正體扨御階之下一禰宜並正權禰宜奉守護、以幕圍御階、

〔通海參詣記〕假殿遷宮（○豐受大神宮）ト申事ハ、延長二年（甲申）十二月廿二日ノ官符ニ見ヘタリ、

〔春記〕長曆四年八月八日庚寅、入夜參內、及深更執柄退出給之次、予（○藤原資房）令覽文書一紙、內府被付奏也、是伊勢內外宮有破損、加修理之時、造假殿奉遷之例文也、（年々官符案、延長天曆例等也、）

○按ズルニ、此書ニ稱ユル延長天曆ノ例トハ兩宮何レナリシカ明ナラズト雖モ、前項延長ト合フヲ以テ、姑ク此ニ附載ス、

〔中右記〕永久二年九月六日、（上略）予（○藤原宗忠）定申云、外宮正殿寶殿柱損之由、見先日禰宜解狀、（○中略）抑廿年正遷宮心御柱採立之後、有假殿遷宮之由、見應和三年御記也、次年康保元年有正遷宮也、備尋被例可有假殿遷宮歟、

〔大神宮諸雜事記〕二長曆四年（○長久元年）七月廿六日、夜子時、西風俄吹、豐受大神宮正殿、東西寶殿、瑞垣御門等、拂地顚倒給既畢、（○中略）仍御氣殿忽洗淨天、以同廿七日戌時天、正殿并三所相殿乃御體乎奉遷鎭畢、（○中略）祭主注事由、且上奏公家、且奉造假殿已畢、隨卽以八月七日被下宣旨天、奉遷於假殿已了、（○又見春記）

天喜元年四月廿八日丁酉、豐受大神宮假殿遷宮也、依件遷宮行事、祭主永輔朝臣綫所被免下也、

〔兩宮遷宮假殿次第〕寬治四年十二月廿四日、外宮假殿遷宮、（○又見二所大神宮例文）

〔勘仲記〕弘安十年二月三日、自上卿復奏文到來、

勘申祭主神祇權大副大中臣定世朝臣言上、伊勢大神宮禰宜注進、去月廿四日、月讀宮御殿、爲風

殿にて候間、如此減少にて注進可申哉、可得御意候、此注文返可給候、

〔明應六年假殿遷宮記〕勤行文

宮司禰宜等　言上皇大神宮遷御勤行狀

右依當宮正殿御朽損、御造替御事及御沙汰刻、御壁板幷御板敷等令墮落、正殿內於諸人致拜見事依有恐、爲神宮致了簡、暫時御事者、奉遷御神體於參詣貴賤畢、以夜繼日可被急造替遷宮者也、仍暫時之間、遷御勤行狀如件、謹解、

明應六年十月十二日　禰宜從五位下荒木田神主守富〇署名以下略

〔神皇雜用先規錄〕永正十八年辛巳〇大永元年六月十三日、二宮御假殿、同日同夜、外宮先云々、〇又見永正十八年內宮假殿遷宮記

〔天文十一年內宮假殿日記〕伊勢大神宮內宮假殿遷宮、十二月一日丁丑、時戌、〇又見神皇雜用先規錄、禰宜歷名引付、

〔神皇雜用先規錄〕天正三年乙亥三月十六日、內宮御遷宮假殿、

〔慶長三年內宮假殿遷宮記〕遷御吉日　慶長三年六月廿七日、

〔萬治元年內宮炎上記〕萬治元年閏十二月二日、未明大司參宮、禰宜各參、〇中略抑今日假殿造營之事、先以西御宮地瑞垣之內正殿之乾、擇定御宮地、令神人拂淨之、黑木板葺假殿奉立了、〇又見萬治假殿遷宮日次記

〔神宮編年記〕萬治二年、

左辨官下　皇大神宮

應任日時令勤行當宮假殿遷宮日時之事

四月十八日戊申　時戌

右權大納言源朝臣廣道宣、奉勅宜任日時令勤行者、禰宜〇禰恐宮誤　宜依宣行之、

萬治二年四月四日　大史

中辨藤原朝臣判〇又見司家日記

〔二所大神宮例文〕明徳二年辛未六月廿二日、内宮假殿遷宮、(古宮所者、依新殿立東寶殿、○又見神皇雜用先規録、大宮司家古文書、)

〔皇代記〕(後小松)明徳四年(○二年六月廿日内宮假殿遷宮、又見兩宮遷宮假殿次第記、)

〔應永六年内宮假殿遷宮記〕皇大神宮神主

注進可早被裁下、奉遷東寶殿次第行事日時幷御裝束用途物等事

一可同被調進御金物裝束事

桶代料

小文紫綾御被壹條(長五尺、廣二幅、納絲八屯、)

小文緋綾御被壹條(長五尺、廣二幅、納絲八屯、)

件御被貳條、壹夜御一宿料、任度々例所注進也、

應永六年五月廿五日　大内人正六位上荒木田神主長繼

禰宜從四位下荒木田神主氏茂(○以下人名略)

〔二所大神宮例文〕應永七年庚辰六月廿七日、内宮一宿假殿遷宮(東寶殿、盗人推參、依奉汚御裝束等也、○又見大宮司家古文書、)

應永廿五年戊戌八月廿一日(○應永廿五年内宮假殿遷宮記、作廿三日、可從、)内宮一宿假殿遷宮、(東寶殿木頽倒、正殿千木鰹木依打折也、○又見大宮司家古文書、神皇雜用先規録、)

應永廿七年庚子内宮假殿遷宮(東寶殿○又見大宮司家古文書、)

文安二年乙丑九月十八日、内宮一宿假殿遷宮、(立心御柱、直御壁板、修補御表葺、○又見文安内宮假殿遷宮記、大宮司家古文書、)

〔司中記〕内宮御假殿要脚注文　文安五年六月日(○中略)

都合千貳百六貫四百六文　文安五年六月日

宮司代宗吉、以前所分百六十八貫貳百文にて候へ共、今度者東寶殿之假殿にて候之間、過分注進不可然候歟、此分たるべく候、又假治方以前注進は、百九貫六百五十文にて候へ共、是者彼假

右祢宜等今月十八日注文、今日到來偁、子細載于其狀也、抑去々年三年正安當宮假殿御遷宮勤行之時、正殿以下四字殿、任例自司中下行、有限食料之間、工等令修補畢、而今漏露云々、以外之次第也、又至正殿者、無御體奉遷之儀、無御修理之例歟、此等之次第、不見神宮解狀之條、可爲何樣哉、雖然依爲到來之狀、相副言上如件、以解、

嘉元元年九月廿二日　權主典

主典

大司從五位下大中臣朝臣長光以下略名

〔二所大神宮例文〕嘉元二年甲辰十月廿四日、內宮假殿遷宮、後二條院御宇、依御裝束濕損也、古宮所書、依新殿立東寶殿、

應長元年辛亥十二月廿八日、內宮假殿遷宮、萩原院（花園）御宇、依修補表葺並檜皮、

元亨元年辛酉七月廿三日、內宮一宿假殿遷宮、後醍醐院御宇、心御柱綱布依鼠喰也、○又見元亨元年內宮假殿遷宮記、

元德二年庚午十二月十三日、內宮假殿遷宮、立替心御柱、奉直御壁板、

〔司中記〕內宮假殿遷宮、後光嚴院貞治元年六月廿六日、宮司奉行、此記兩本七月十七日、

〔二所大神宮例文〕貞治二年癸卯六月廿六日、○一本有傍書七月十七日字內宮假殿遷宮、後光嚴院御宇、東寶殿依被立古宮所、

〔神皇雜用先規錄〕貞治二年癸卯六月十七日、內宮假殿遷宮、後光嚴院御宇、

〔皇代記後光嚴〕貞治六年、二年七月十七日、傍書六月廿六日○內宮假殿遷宮、

〔二所大神宮遷宮次第記〕或記云、元年六月廿六日、又古記云、二年七月十七日、或同年則月不同、或同月則日不同、舊記不一、而有不可考者也、但兩年兩度假殿遷宮歟、將又轉寫誤歟、今姑從例文記之、待知者而已、

○按ズルニ、貞治二年假殿遷宮ノ月日、諸書同ジカラザルコト右ノ如シ、今併セ揭ゲテ疑ヲ存ス、

文應元年庚申七月十六日、內宮假殿遷宮、龜山御宇

弘安二年己卯二月十一日、內宮假殿遷宮、〇後宇多天皇御宇、修補差修皮非實、又見弘安二年內宮假殿遷宮記、

〔宮司遷宮記〕內宮假殿遷宮　弘安六年　大司長藤

〔永仁五年內宮假殿遷宮記〕地鎭祭物間事、相副物忌有久等之申狀、示給之旨承候、〇中略庸布五端、無沙汰云々、件布地鎭祭之時令奉送之條、何時之例候哉不存知候、近則去弘安二年、同六年假殿之時、令奉送之由不見沙汰文候、〇中略恐々謹言、

四月十二日　大宮司判

〔二所大神宮例文〕正應三年庚寅九月十一日、內宮假殿遷宮、持明院御宇〇伏見

正應五年壬辰十月、內宮一宿假殿遷宮、

〔永仁五年內宮假殿遷宮記〕使〇造宮使并宮司禰宜等　言上大神宮假殿御遷宮勤行狀

右當正殿御裝束等鼠喰損事、正應五年十月、一宿假殿御遷宮勤行之時拜見之間、注進言上之處、去二月七日日時、宣旨到來之上、被調進御裝束之間、大宮司神祇權少祐長藤朝臣、遣進假殿、調進種々御裝束、今日勤行御遷宮、〇中略依勤在狀言上如件、謹解、

永仁五年五月九日〇又見二所大神宮例文

〔皇代記後伏見〕正安三年、內宮假殿遷宮、

〔嘉元二年內宮假殿遷宮記〕大神宮司解

申進申文事

言上禰宜等注進、可早經次第上奏、仰宮司長光、急被致御修理、當宮正殿漏露、御裝束濕損、其恐不少由狀、

副進　禰宜等注進文一通

御遷宮所奉飾替也、就之案之、元久以往、無通用之條、於是爲分明哉、○中略早任是等之例、被調進唯損
御裝束、可申行假殿御遷宮之由可被言上候哉、謹言、
四月八日　　内宮一禰宜判（○又見兩宮遷宮假殿次第）
〔弘安二年内宮假殿遷宮記下〕注進　本宮勤行假殿奉粧替御裝束例
一元久三年（○建永元年）四月三日
件假殿御遷宮、依御裝束廿五種御濕損事、爲奉粧替彼御裝束、同（○宮司）重長勤行之、
右且注進如件
弘安三年五月日
〔二所大神宮例文〕建保六年（戊寅）四月十九日、内宮假殿遷宮、（○又見類聚大補任）
承久二年十一月十八日、内宮假殿遷宮、（○又見永仁五年内宮假殿遷宮記、類聚大補任、）
〔類聚大補任順德〕承久三年（辛巳）（内宮假殿再通用例）四月二日丙辰、内宮假殿遷宮、去年十一月假殿被行御卜、依宣旨通用之、
〔類聚大補任後堀河〕嘉祿元年（乙酉）十一月廿三日庚辰、内宮假殿遷宮、（○又見兩宮遷宮假殿次第）
〔二所大神宮例文〕延應元年（己亥）二月十六日、内宮假殿遷宮、（以四條院御宇、依古宮所心御柱御飾之錯亂、被修理所々、自嘉禎三年事起、○又見類聚大補任、元亨元年假殿遷宮記、）
〔二所大神宮例文〕仁治三年（壬寅）十月十九日、内宮假殿遷宮、（○又見仁治三年内宮假殿遷宮記）
〔百練抄十五四條〕仁治三年九月廿日己亥、今夜有仗議、大神宮御船代于透鼠出入有其恐、可被造替哉事也、廿七日神宮假殿遷宮延引、官下御衾文箱一（○箱字本无）相違之間、本宮申子細云々、
〔二所大神宮例文〕寶治二年（戊申）四月十七日、内宮假殿遷宮、（○又見類聚大補任、弘安二年内宮假殿遷宮記、）
建長六年（甲寅）七月廿六日（○公文筆海抄作廿七日）内宮假殿遷宮、（奉立替心御柱、修補葺萋檜皮、○又見伊勢勅使部類記）

〔玉海〕治承三年六月二日己丑、權中納言雅賴卿著仗座、被定申伊勢大神宮修造日時、始假殿木作、今月廿八日乙卯、時午、立柱上棟、七月廿八日甲申、時巳、奉渡御體於假殿、八月十七日壬寅、時寅、修理正殿、同日、時辰、奉渡御體於正殿、同日、時戌、

〔二所大神宮例文〕大宮司次第

公俊　公宗男、承安元年十二月十三日任、父在任時依神宮修造功也、治承二年御修理忘慢沙汰上、父妻加之、以服身納御封之間、不復任、同四年二月卒、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

文治六年建久元年庚戌四月十一日甲午、未時內宮正殿心御柱、朽損顚倒之由見付之旨、禰宜等注進之間、頭工等申云、去六日拜見御板敷本樣之時見付云々、○中略同年八月廿五日丁未、奉遷御體於東寶殿、改立心御柱、○又見玉海、兩宮遷宮假殿次第、

〔二所大神宮例文〕建久七年丙辰四月廿二日、內宮假殿遷宮、○又見皇代記

九年戊午七月十六日、內宮假殿遷宮、依表葺萱檜皮修補也、去年七月始沙汰、

〔弘安二年內宮假殿遷宮記下〕當宮正殿御裝束鼠喰損事、相副去月廿七日官返狀示給之旨、今月三日到來見給候畢、抑如彼狀者、以舊假殿可奉爲遷御之由被申歟、○中略違則依天井蚊屋御裝束御濕損事、去元久元年十二月廿七日、大司重長勤行當宮假殿遷御之後、禰宜等翌日爲奉飾替天井蚊屋、昇殿拜見之處、御裝束廿五種同令濕損給之間、同廿八日、令成上本宮注文之刻、翌年正月日、宮司錄自解及奏聞歟、如其狀者、造進假殿、修補正殿之後、不經幾日數、又造營假殿之條、有神税之費、無神宮之益歟、先造之假殿未破退、以彼殿被用之條、何事之有哉、若不然者、去文治六年、依心御柱事、任奉遷東寶殿之例、可有遷御歟、以假殿造營用途、可宛御倉御垣修補之由、載兩箇子細令言上之處、同年二月五日官返狀偁、內宮御裝束用途、數百疋罷入之間、忽難被沙汰出、然而已依宜下、殊所被忽也、假殿事、尋先例、若隨准據例、早々可令申給者、而同年三月一日、大司旬參之次、禰宜對面之時、彼假殿早可被奉被退云々、仍同七日一禰宜、令本宮頭工小工等奉壞畢、其後任式數、調進濕損御裝束、勤行假殿

〔本朝世紀〕康治元年三月四日丁酉、權大納言藤實能卿參左仗、定申〇中略伊勢大神宮御殿修造日時、〇中略伊勢御殿修理日時、去月十二日雖勘下、次第事等可相違之由、宮司言上、仍被改勘也、

〔大神宮諸雜事記二〕久安二年十一月十六日、天晴、內宮假殿御遷宮、曉無事遷御、巳剋爲計返、奉開御殿之處、不被開御鎖、仍各評定、拔打立奉開畢、卽以造物所鍛冶令修補也、申剋以後細雨降、秉燭以後大雨大風雷電、洪水殊甚、夜半以後、天晴遷御、祭主淸親卿、宮司公宗、造宮使公宗男也、〇又見本朝世紀

〔本朝世紀〕仁平元年九月十九日丙辰、權大納言宗能卿著仗座、被定申伊勢大神宮御體可奉渡假殿日時、幷同神殿修理日時等、

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕御修理行事

去長寬元年假殿御遷宮之時、西寶殿針返役人孝忠神主、依老氣不堪其役、可被差替他人之由、雖辭申無左右、然間可令差副堪事者之旨、自總官有其仰、仍被差副惟忠神主畢、

〔兵範記〕仁安三年十二月廿九日丙辰、

大神宮神主

注進以來廿八日可奉渡御正體於假殿事

右去寶龜延曆兩度雖有燒亡、卽造進假殿奉鎭御正體之由具也、仍准先例、隨假殿造畢可奉渡之旨、先日度々言上畢、而今可有燒亡穢哉否、沙汰出來之間、依非人間事、禰宜等雖存案之上、殘日不幾、然則以來廿八日可奉渡假殿之狀、注進如件、

仁安三年十二月廿五日　　大內人正六位上荒木田神主安元

禰宜正四位上荒木田神主俊定〇以下人名略

今日戌刻、此解狀到來、卽申上畢、已奉移假殿由、不及沙汰、神宮存例所行歟、

〔二所大神宮例文〕承安三年癸巳八月廿五日、內宮假殿遷宮、東寶殿、

〔永仁五年内宮假殿遷宮記〕内宮外宮同年被遂行假殿例

寛治六年十月廿一日　内宮　十一月廿五日　外宮

〔本朝世紀〕康和五年三月十四日癸巳、内大臣源雅實参入、被定申伊勢大神宮假殿遷宮日、時等事、○又見伊勢勅使部類記、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

天永元年十一月廿七日辛卯、大神宮假殿御遷宮也、寅二點奉渡御體於假殿、且奉修補御殿、且同日入夜、奉替立正殿心柱、勤後鎮祭、廿八日壬辰、亥二點、奉移御體於正殿了、是去年依心柱朽損顛倒、被行假殿遷宮也、○又見二所大神宮例文、伊勢勅使部類記、

〔百練抄五鳥羽〕永久元年九月六日、諸卿定申二所大神宮殿舍門垣、朽損顛倒、并依新宮上棟事、可被造假殿地事、○又見長秋記、

〔伊勢勅使部類記下〕伊勢公卿勅使雜例

永久二年十一月五日、權中納言源能俊、　宣命神宮佐異、天變御祈、假殿間事、永實、○大内記

〔二所大神宮例文〕永久三年、内宮假殿遷宮、東寶殿、

〔二所皇大神宮遷宮次第記〕按以東寶殿爲假殿者、正遷宮之前、新宮既造立、以無可造假殿之地也、永久三年者、式年遷宮之明年、則於立假殿、有其地、何以遷御于東寶殿乎、例文三年、二年之誤也乎、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

大治元年十二月、大神宮假殿御遷宮也、而心柱奉立了後、榊爲鹿喰損、而遷御日時依有限、不經奏聞、尋先例於二宮、奉替榊葉、勤行遷宮了、

〔中右記〕大治二年正月十六日丙午、常陸前司大中臣親仲朝臣入來云、去月廿一日内宮假殿遷宮、萬事違例、極以不便也、

古事類苑

神祇部五十五

大神宮五

遷宮下

大神宮假殿遷宮通載

〔大神宮諸雜事記　一〕延暦十年八月五日辛卯〇續日本紀作三日也、夜子時、大神宮御正殿東西寶殿、并重々御垣御門、及外院殿舍等、併掃地燒亡、〇中略仍宮司且急造假殿、奉鎭御體、且注其由言上於神祇官、隨則上奏、

〔大神宮諸雜事記　二〕長久四年四月三日、大神宮假殿遷宮了、抑檢先例、二所大神宮、及七所別宮御濕損之時、以次第解狀上奏天、申請修理使、隨宣旨奉仕假殿遷宮之例也、而祭主永輔朝臣、不上奏於公家天、以私物奉仕御修理、兼又新古兩宮色々用途物等モ不申請天、祭主宮司共所宛用私物等也、諸事如恒之、

治暦二年八月廿五日丁未、大神宮假殿御遷宮也、爰祭主〇大中臣永輔依故宮時之沙汰、至八箇年之間、所不被免下也、而依大神宮解狀、爲令勤仕件御遷宮之雜事、所被免下也、

〔兩宮遷宮假殿次第〕寛治四年庚午十一月〇二所大神宮例文作十月廿二日、内宮假殿遷宮、堀河院御宇、自康保三年中及十三年、假殿遷宮ノ始ナリ、

〔百練抄　五堀河〕寛治六年八月四日、大風、大神宮西寶殿、豐受宮東西寶殿等顚倒、　七年二月二日、祭主親定、大宮司公房、前宮司國房等、自所訴神宮重事六箇條、於大膳職對問、去年假殿遷宮延引事、〇又見勘仲記、小朝熊神鏡沙汰文、

外ニ御扉木　壹本
此才數八拾三萬五千四百四拾一才八厘五毛
文政度
一四千百九拾七本
外ニ御扉板子　二枚
此才數七拾八萬二千六百七拾才六分四厘
天保度
一大材　二百七本
一中材（大材替）　二百廿五本
一御扉（御正殿）　二挺
一板子　二十挺
一中材　千五百四拾九本
一小材　二千二百五拾七本
木數合四千三百四拾七本
此才數七拾七萬八千二百九拾八才四厘八毛
一外ニ御祝木　四本
才銘才數ナシ
文政度天保度見込勘辨帳指引減ジ高、
四千三百七十二才五分九厘二毛

此仕出シ金千四百廿三両壹步餘

一木數千七百九拾三本　關山

此仕出シ金千百九拾三両壹步餘

木數合三千九百五拾六本

此仕出シ代金二千六百拾六両貳步餘

前々御造宮木數幷才數高

一貳千六百四拾本　古來目錄木數

此才數百三拾萬八千七百七拾六才五分六厘八毛　但シ長一丈　壹寸角　壹才定

一外ニ御祝木　四本

但才銘才數ナシ

一寛永六巳年　一慶安二丑年

一寛文九酉年　一元祿二巳年

一寶永六丑年　一享保十四酉年

一寛延二巳年　一明和六丑年

右八ヶ度者、御吉例之通リ、木數才數ニテ、御成就之御事、

寛政度

一四千五百六拾六本

此才數九拾六萬三千拾六才三分餘

文化度

一六千四拾六本

用材員數

兩宮御遷宮御材木伐出シ候山之儀、彌湯船澤山(○木曾山小名)へ被仰付候、其上役人願之通、淺野隼人正殿被申上候得者、達御上聞、尤ニ被為思召、役人願之通去ル九日、御老中御連座ニテ、御月番秋元但馬守殿を以、尾張殿御家來江被仰付、山之造作物入、尾張殿ニ被成、錦織ニテ、御遷木伊勢役人へ、尾張殿ヨリ被相渡候樣ニとの、御上意之御申渡、其上淺野隼人正江(萬)被仰渡候、猶又兩作所名代、江戸表江罷越、隼人正御指圖次第、御老中寺社御奉行衆迄(萬)、御禮申上可然との御事、

〔寛政正遷宮記〕五月四日(○天明二年)依奉行所(○山田奉行)召、一禰宜代重稻、奉行所對面、被相渡書記如左、

兩宮式年御遷木之儀、紀州大杉山ニ而伐出被仰付候、尤本伐川下之儀、萬治寛文之度、紀伊殿ニ而御構無之間、諸事萬治寛文之度、大杉山ヨリ伐出節之通可相心得旨、御造宮役人江可申渡段、被仰下候間、懸之者共江可被相達候

五月四日

〔御造宮日記〕三月五日、(○寛政十年)作所殿ヨリ、一頭方へ差紙ニ付、一頭代小工三四郎罷出候所、左之通被仰渡候、

兩宮式年御造營御材木、如先例木曾山ヨリ伐出シ候樣、今日於御役所被仰渡候、

六日、昨日被仰渡候節、御書面左ノ通、内宮方ヨリ寫也、

兩宮式年御造營材木之儀、此度者、明和以前先格之通、木曾山より伐出被仰付候、右之趣尾張殿江も御達有之候段被仰候、

右之趣得其意、懸り合之者共へ、可被相達候、

三月五日

〔兩宮御造營先例拔書〕文政度御木數、幷山出御入用左之通、

湯船澤山

一木數貳千百六拾三本

弘治卯月一日　齋藤山城入道

河上諸役所中

〔內宮永正引付上〕桑名之儀、雖、難御機嫌候、爲神慮重申入候、如今者兩大神宮難堪、尤不可不歎存、其故年中繁多之祭物、連綿之調進、神用廻船、其外御遷宮時ハ、御材木等、悉皆自彼所著岸事、爰當宮神殿以外朽損、顚倒之怖畏、不期明日候、有御顧落者、不遷時日可有杣入之處、今爲體ハ臨其期神事令停滯歟、○中略 遷住事、有御免者、神明之快然、御家門彌繁昌、武門長久之擁護、可爲御祈禱一、御神忠專一候、恐々謹言、

五月三日○永正八年　守則

長野殿御宿所

〔外宮引付〕一御材木ノ山入、四月十○天正三年ニゑんま大杉へ入候、

〔寬永御遷宮記錄〕口上ニ申上覺

大杉山御材木、先內見ニ可罷越候間、山中谷々之衆、萬六ケ敷不申候樣ニ、其在所々々之御代官へ、被入御念候樣ニ、長野九左衞門殿○紀藩士へ被仰渡可給候、○中略

寅卯月七日○寬永三年　外宮作所集彥判

內宮作所氏久判

岡田將監殿○山田奉行

〔木曾山被仰出候節之日次拔書〕元祿六癸酉年九月十八日、大杉山、壺山相成ニ付、重テ御遷宮御用木ノ義ニ付、御役所へ願書差出ス、○中略

同年十○元祿三年十月廿三日、兩長官、兩作所、兩宮御造宮役人共、不殘御召ニテ、御奉行所長谷川周防守殿被仰渡候趣、如左、

進如此、仍進上之、子細載彼狀候、凡今度內宮遷宮、每事爲新儀者也、正殿一宇造進之外、御門御垣一向無其形之條、宮立以後、無其例、遷宮以後二年三年之間、造進之所々、東西寶殿、幷御門御垣等也、而猶荒垣之內、未作繁多也、表萬龜惡事、迄至遷宮當日、作事無沙汰之間、依物忩不及慇懃之沙汰者歟、仍早速及破損哉、就中差山外、於他山御材木採用之事、先々固及御糺明者也、而今度之儀、造營料材無用意之間、於進所不嫌淨不淨、於在々所々、以寺社之修理用意之樹採用之、其中殊於常勝寺山者、穢物不淨不絕在所也、以彼寺木、御垂木大床御階等、於小物者悉奉成御事之間、寸法不足依繁多、御金物不相應、如是次第及御不審者、被下御使可被實見者哉、有道善政之今、可申不言上者可爲神不信、爲君可爲不忠之間、任實正令注進候、以此旨可令申上給、恐々謹言、

七月十四日〇永享十一年　　　　神祇大副判

進上　四位史殿

〔皇大神宮引付〕依今度國方〇北畠氏御出陣、〇中略彼軍勢被打莅宮河旨、如此軍勢被向神宮於馬鼻、被放御鎭座砌於矢事、前代未聞之子細、神鑑難測候、殊今公方樣〇足利義政御參宮前、御宿用意、被急造作折節、大造替御遷宮前、取散材木、被急營作刻、自然之放火、宮中幷御宿場畏、又死人手負之不淨、汚御材木等者、自美濃山可被取下、逗留可經年月候、其上公方樣御費可爲若干候、旁以不可然、先被引御陣、有御糺明子細者、遂而被經御沙汰、御成敗候樣申御沙汰候者、可爲天下泰平御祈禱候哉、氏經誠恐謹言、

十二月廿三日〇寛正六年　　　　內宮一禰宜荒木田判

進上　祭主二位殿政所

〔永祿遷宮作所記〕□□□志滿王大夫、從美濃歸國也、御材木到□□神宮御遷□材木之事、無煩□□□□勘過之狀如件、

宮之料材、改神道山、採用他山例、起自嘉元之濫觴也、賛後昆之准的、移彼御杣山於他山、與改此幣使道於新道、比擬之處、旨歸不乖歟、就中如史局勘載之曆應造宮親忠卿解狀者、江馬山爲凶徒群集之幽谷、可被移御杣於料木合期之國云云、就之、或決群議、或任官占、遂被移他山了、今又祭主忠直朝臣奏狀之趣、杣山與驛家、雖似粹異、軍卒壅塞、彼是相同歟、爲可爲、於可爲時則從、是古典之所載也、就之思之、縱爲新儀新道、猶以式月式日、必被奉獻之條、可協物宜歟、但神慮猶叵測、叡心若有疑者、被決占卜、可有左右哉、凡克竭肅敬之信、被儀如在之禮者、逆徒之悖情、忽歸朝憲、幣使之新道、盍復舊蹤、祈請應神不禁之故也、此上宜在聖裁乎、

文和五年三月廿八日

〔康曆二年外宮遷宮記〕今日〇應安六年十一月十四日御材木著岸于大湊、前造宮使時、御材木多朽損之間、先日工等入美濃山奉採之、但御堅魚木三支者未到、是近日美濃川水勢少之故也、　同廿五日本泥障板於白グテ、奉懸替千木、二支者美濃山木、二支者宮山木、可採用之由見勅裁土宮谷奧高宮以西木也、

〔寬正造內宮記〕去永享三年辛亥十二月廿日御遷宮者、造宮使宗直、頭人攝津、掃部頭常承彙達々神役引越、依被自專、造替令延引、仍自公方、〇普廣院殿御代足利義教急可奉成遷御之由、頻雖被仰出、御材木之用意緣也、仍頭人成奉書、近所之社頭之山森林不謂、汚穢不淨之在所伐採、俄致營作之間、依材木不足、御金物等寸法不符合、抑僅正殿一字、荒祭宮正殿一字被造進、其外者無柴垣之一重、東西寶殿、御門鳥居、殿舍御倉以下之事、一向不及沙汰、非常之遷宮被奉成畢、如斯聊爾之遷宮トハ、公方樣曾不被知食、其故者、造宮所幷頭人依私曲、如此沙汰之間、此趣無申人、尤支申神宮者、一禰宜經博卿爲作所、如此被致沙汰、祭主清忠卿可被申歟之處、此子細達上聞者、定造宮使頭人、堅可有御罪科、然者還而依神慮難測、不申可申被閣所存云云、

〔文安二年內宮假殿遷宮記〕就內宮御假殿造進正殿御修理事、被尋下之趣下知之處、兩宮禰宜等注

正安四〇乾元元年八月三日〇中略

五年〇延文元年三月廿四日

伊勢幣使自新道發遣事〇中略

一准據例

寬仁三年大神宮正殿造替用木、伊勢國神道山之御杣、依有子細、以志摩國答志郡材木被用之、

嘉元二年造替之時、神道山之料材木盡之由、就造宮使久世注進、被行軒廊御卜、被用伊勢國江馬山御杣、

曆應二年、伊勢國不通達之間、先被採用料木、被行同御卜、用參河國設樂山畢、

依此等之先規、可被遂行事、

神祇大副卜部兼豐〇中略

廿八日、今日神宮伊勢幣發遣、可用新道否、并年號事、可有仗議云云、右府〇藤原道嗣可被奉行、其間事被示合、恐存注申候了、〇中略

仗議定文

抑伊勢幣使道路仗議定文、右府被注送、仍寫之續左、

官外記勘申、伊勢大神宮幣使發遣、本路依不通、可被用新道否事、

右大臣定申云、就兩局勘奏之例、案官幣發遣之儀、或納神寶於他殿、或移御杣於他國事、有故之時、不能止之儀也、而依古來本路之難儀、被致靜謐新道之奉遣之條、已非無準的、不可乖物宜歟、但神慮叵測、愚意易迷、被決官占、可有聖斷乎、〇中略

左大辨藤原朝臣〇兼綱定申云、宗廟祭祀者、奕世不易之恒規、每年有限之禮奠也、而頃年之間、往古驛家、徒依凶賊之覬覦、被閣有司之發遣之條、冥慮之至、不可不恐、倩披兩局之勘錄、若稽數箇之舊貫、造

右兵衛督藤原朝臣〇實夏定申云、就兩局之勘例、温宗社之舊儀、造替之年紀定置一ヶ條之式以降、遷轉之凉燠已疊、數百廻之聖曆載安而不渝、曾雖及豫義、爰神道繪馬之御杣、凶徒猶成其妨、蜺棟虹梁之材、工匠不能剪伐之由申之歟、有限之式年雖被延其期、雖爲他山之杣、盍採造宮之材、所謂大厦之材非一丘之木、縱非國中之杣、若無廟壼隔者採用有何難乎、但冥慮叵測、宜被決口占歟、抑如傳聞者、凶徒不退散、神境不靜謐者、今年山口祭雖被遂行云云、然者徒雖被定御杣、更無益于造宮歟、旁退籌策、可有沙汰乎、古典云苟有信宗廟靈神何不歆享、叡口致凝敬神之誠、政道被施撫民之化者、皇家之無爲再歸淳風之德、靈臺之定終不日之功者哉、

曆應二年九月廿七日

〔園太曆〕文和四年十二月三日、藏人右少辨忠光送狀、有所談事、問答續左、〇中略

抑神宮路次不通、例幣以下、不及發遣、可被用新道否事、可召諸道之勘文之由被仰定候、宜下之樣、如何體可候哉、可被計下、

紀傳兩文章博士、明經博士、明法兩博士、別勘文人等候歟、此勘文、於算道者、不可被召候歟、可令伺申給、恐々謹言、

十二月三日　忠光

丹後守殿

神宮路次依凶徒蜂起、有限祭禮無幣使通達、星序頗積、神慮有畏、然者改易古來道、被遂發遣之禮、可爲何樣候哉、宜令紀傳明經明法等博士勘申、

先々諸道勘文、宜下仰詞、引勘注之、

大外記中原朝臣師顯仰偁、内大臣〇藤原冬平宣、奉勅大神宮遷宮、神道山御杣料木採盡由、造宮使久世言上、何樣可有沙汰哉、宜令紀傳明經明法道等博士勘申者、

歲之居諸以降、申來神道山之料木之條、雖爲恒式、必限此御杣之一所、不採用他山之衆木之義未見、已往之永格强無分明之式文歟、只以經始爲本緣乎、加之考古典、大厦之材非一丘之木、廟廊之材非一木之枝、其義如何、況又嘉元造替之時、根本之御材依伐竭要木、雖終匠石殊功、先捧神宮之奏狀之間、或任群議或決御卜、終被移江馬山訖、先事之所營者後昆之鏡也、就中彼山未靜謐、徒待干戈之愷悌者、造營有年紀、爭闕斧斤之締構哉、以之思之、被用他杣之條、云理致云近例、更不抵牾者也、雖然於他國之料材者、神慮難測民力有費、猶早以當國無爲之境內、尋搜衆谷之所宜、檢知良木之所攢、急速可裁定之由、可被仰造宮使歟、爰同國之中誠其山雖得其木雖度者、默而又不可止、縱雖爲他之口口被宥用之條何事之有哉、且者寬仁三年之造替已貽一代之蹤跡、就今度之儀可資准的哉否、宜爲聖斷歟、次山口祭事、本宮之禮莫如當時者、雖被遵行、然者延否之准據就官外記之例、可有其沙汰乎、此上若叡心有猶豫者、裕恰先決卜筮可被用捨口矣、

右衛門督藤原朝臣〇實明定申云、就兩局勘奏廼一致愚案、寬仁三年答志郡之良材、嘉元三年江馬山之御杣期等先規雖似准的、被時者依良材伐盡、今度者依口國壅塞、加之伊勢志摩兩國上古是爲一州、神道江馬靈地、近邊皆爲神戶、參州設樂郡者、自勢州已爲遙邈之地、思其土不辨淸淨之儀、土非所宜、地非有便、被用彼杣之條難決、恐慮者也、利不百不變法、力不十不易器、且弘安爲成朝臣雖望申美濃國杣、不及勅許、被改補其職於爲繼朝臣、被遂無爲之遷宮云云、先事已在眼、今儀須伏膺、抑神三郡凶徒未令退散、幣使以下無發遣歟、若是公家肅信、未通宗廟靈鑒之故歟、偏凝叡誠、宜被祈謝哉、神之所享明德也、黍稷之供非馥、神之所依者誠信也、蘋蘩之菜可羞也、專被施仁惠、於被致崇敬於眞實者、逆賊之敗已不可廻踵、尊神之祭祀盡復舊蹤、天道與善神道憑信、然者臨國中之靜謐、速被遂山口之祭事、以嘉元以來之例、可被採江馬山之材歟、且以十八年年記被宜下者、存先例、明年被行彼祭之條有何事、但衆口之料材依無中意、式年之遷宮可爲難治者、早課龜兆、宜決狐疑乎、

んためなり、十七日てんはる、きよ夜かみなり、あめくだる、御裳濯の水、中嶋をこす、今日外宮一神主子息九禰宜、人夫を相具して、杣曳の爲に山へ入、一神主かたびらにせたをりて大刀をはく、十六有餘年老也本宮一神主、東寶殿の御材を曳さぶらはるべきよし、總官より今月十日、使ひのりあきらの神主なかふさをもておほせらる、なんぢのよし申さるといへども、さいさんにおよぶ間領承、各給旨嚴密の上に、國々を奉行の間、かくのごとくさたあるか、外宮一神主西寶殿の材木を曳かせて、十八日に山より出、總官廿日山より出させ給ふ、

抑内宮一神主、前造宮使永經の朝臣の時、元亨二年八月口日、宇治五鄕、さはち、ひろたの人夫をもて、宮川の橋本より御棟持の柱一本、宮地へつけまいらす、又同十二日御棟持のはしら一本、宇治五鄕の人夫をもて、宮川の橋本より、〇以下缺

〔中院一品記〕曆應二年九月廿七日、今夜被行仗儀云云、〇中略官外記勘申皇大神宮造替御杣山爲凶徒在所何樣可有沙汰哉事、

内大臣師平定申云、大神宮造替者、皇家之大營、宗廟之重事也、嘉元營作、神道山良材採盡之間、始被申江馬山御材、是雖爲末代之新儀、重可追往時之遵行處、凶徒架城郭、軍士絕道路、誠難採料木於彼山者、可被遷御杣於他所乎、如祭主卿解狀者、可被移料材合期國云云、然而忽難鎭座之州郡、遙入他國之山林之條、神鑒多惶愚慮叵決、被仰合造宮使、如被用阿曾山歟、將又被尋近國歟、須課僉議被決狐疑乎、

權中納言藤原朝臣〇實治定申云、就兩局之勘奏、案一決之可否、宗廟之剏興者王家之重事也、暗愚之至商量雖覃、但造宮使本解之趣子細雖多、以料木採申之御杣爲凶徒群集之在所、可被移他國云云、是以粗訪先蹤、專於正殿之營作者、雖用他杣之土木之趣、長曆之嚴制先史之所記載而炳焉也、然而於今之擾亂者、粹已爲新儀、更難據舊貫、抑案事情、天武天皇御字、定置廿年一度之造替、漸迻六百餘

〔嘉元二年內宮假殿遷宮記〕謹請依內宮御假殿事工等可參洛由事

右相副今月十七日院宣幷次第御施行等、同月廿三日本宮廳宣偁、當宮假殿大工等、有可被召問子細、來廿五日以前悉急可參洛由事、相副院宣官狀總官下知、今日到來、子細見狀也、早可存其旨也者、謹所請如件、隨卽任被仰下之旨、雖可令參洛、今年相當廿年一度御遷宮、大小工等勵大厦殊功、敢無他事之上、今度御造營御材木大物、神道御杣山不合期之間、粹達叡聞、被定御杣山於江馬山畢、而依爲遙遠之境、云彼山中御材木、云神道山御材木、多以不奉出間、大小工等或入山中、或勵庭作、裕恰無寸暇者也、而今聞御作事、令致參洛者、行程先六箇日、在京日數亦不知、其定數於送日結者、御作事定及遲怠歟、是偏察後勘之恐、先所令言上子細也、但雖奉聞御造營、尙可參洛者、可仰重勅定者也、仍進請文如件、

嘉元二年三月廿四日

四頭磯部守重
三頭工磯部弘久
二頭工磯部淸行
一頭工度會神主助定

〔勢陽五鈴遺響多氣郡一〕江馬　天ケ瀨ヨリ三丁東ニアリ、正稅二百二十八石、紀州田丸領ナリ、舊本綸馬ト錄セリ、今江馬ト公私トモニ載タリ、

御棟木　小瀧ノ東ニアリ、正稅二十六石、紀州田丸領ナリ、御棟木ノ名稱ハ、往昔大神宮遷宮造替リ、棟木ヲ伐出タル地故名ク、

○按ズルニ、江馬ハ宮川ノ上流ニアリ、往昔ハ大杉谷モ其內ニアリシナリ、

〔元亨三年內宮遷宮記〕同日十一日〇四月ゑまの山へ、そまびきのために、だうごのまんどころさだちか、總官奉行ありとしの神主等、ゑまの山へむかふ、正殿東西寶殿の御材木相のこるあいだ、曳かせ

ゴロ當宮權禰宜ナニガシト申シ侍シモノ、名主職ヲ傳ヘタリトテ、權門ニ寄奉リシ後、京都ノ人ノ領トナリテ、神宮ノ管領ハナレタリ、大神宮ノ臨時ノ祭ノ假屋、コノ所ノ役ニテ有シガ、權門ノ雜掌神宮ノ使ヲ入ザルニヨリテ、功人ヲ寄ラレナドシ侍ニヤ、カヽル程ニ近年盗人此山ニ籠タルヲ、領家シヅメ給事ナキ故ニ、守護代彼ヲ誅シテ守護領トナリヌ、

〔大神宮諸雜事記 二〕康平二年三月十九日、豐受大神宮乃東寶殿棟持柱二本、高宮棟持柱二本、及本宮ノ外院ノ御材木百餘物ヲ、自僙柄小川、以數百人夫等奉流之間、瀧本天、仁志男一人流天死去已了、于時五六町許持去天棄置又了、仍造宮使神祇少副元範朝臣、乍驚尋先例之處、上代之比、大神宮御造作之時、忌屋殿乃御材木宇川合淵ニ置天、經日來見件材木之時、材木下ニ死人有、不知姓名、而間造宮使俄死去了、其替以大中臣氏彝被改補造宮使了、仍氏彝上奏此由、依宣旨作替材木天奉造了、年記不明、○中略因之造宮使元範朝臣、注子細上奏早了、仍以同年三月十九日被下宣旨、召上大司雜任被沙汰之處、度會郡權大領新家惟長、内人阿古丸等、依實彼日事辨申了、隨則宮司雜任所申、荒凉无實也、早造宮使元範無懈怠可奉造、但至于棟持柱堅魚木者、内院料也、造替他木、可勤仕之由宣旨已了、同年二三〇二恐誤月卅日、臨時勅使參宮、然而件大司雜任、彼僙柄小川乃死人、依荒凉沙汰、所不被免下也、

〔勢陽五鈴遺響 度會郡 一〕阿曾　大方竈ノ西ニアリ、海畔ニ民居ス、正税三十石、紀州田丸領ナリ、阿曾浦阿曾里ノ二邑アリ、○中略

阿曾　野尻ノ南二里ニアリ、正税六百十四石、紀州田丸領ナリ、

○按ズルニ、阿曾ノ稱ハ後ニ一村ノ名ニ止ルト雖モ、往昔ハ同郡野尻地方ニ及ビタルハ勿論ニテ所謂南嶋ニモ及ビタルナリ、諸雜事記ノ事蹟ハ其御杣ノ名ヲ記サヾレドモ、既ニ僙柄川ノ名アリ、蓋シ阿曾御杣ノ事ニ係レリ、因テ之ヲ附記セリ、

右之條々永々堅可相守者也

天和二壬戌年九月廿五日　　下野印

山田三方中

〔遷宮舊記拔萃〕外宮正遷宮御造料請取帳元祿二年遷宮

一同米〇參千參百參拾參石九斗(中略)此內、百八拾石九斗八升四合三夕七才五撮、辰(元祿元年)ノ十二月廿三日ニ、鶴松濱御納所米ヲ請取申候、

〔三方會合諸舊例書上〕鶴松濱御新田之事

右新田米收納之節ハ、〇中略年々金子會合〇山田三方役所へ奉預リ、兩宮御用之節、御差圖を以差上申候處、去戌年〇寬政二年十二月鶴松濱御新田之義、三方共一切指構申間敷旨被仰、年々溜リ有之候金子御取立被成、當時會合ニ拘リ不申候事、

〔類例略要集〕御名代近年高家衆之分〇中略

伊勢兩宮遷宮　同年〇文化七年八月十日、上杉中務大輔、

例明和六丑八十、寬政元酉八十、後文政十二丑八十、

〔文永三年內宮遷宮記〕八月十日〇文永四年總官爲奉出外宮御棟持御壁柱、相具國々人夫等、令入部阿曾御薗〇度會郡給、自十一日夕部陰雲、十二日雨降、用水出來、御柱十五日令到著槻瀨給、御柱少々當日被付進宮地、十六日御棟持二本奉付宮地、先二頭方、次三頭方也、於二鳥居內、長官榜官被奉引之、音頭、頭工三聲也、御柱今日皆以被付進之訖、廿三日正殿御上棟可被遂行云云、

〔通海參詣記〕瀧原並宮、兩所軒ヲナラベテ阿曾御杣ト申、豐受大神宮ノ御ソマ山ニ御坐アリ、大神宮ノ西ヲ去レル事九十里也、天照大神、昔大和國笠縫村ヨリ、伊賀ノ國ヘ移セ給テ、伊勢國ヘ入セ給シ始、此宮ニ遙御坐有シカバ、摩奈胡ノ神、處ヲ去リテ奉リキ、今ノ並ノ宮ニヲハシマス也、又倭姬命トモ申セリ、靈驗殊ニ新ニヲワシマセバ、精進潔齋モ本宮ニコエタリ、然レドモ宮地ハ、チカ

外宮領鶴松濱新田、一色村中ヘ永代申付候、田畠五十町六反貳畝拾五歩、此物成六ッ半定免米三百貳拾九石六升貳合五勺、年々相納候、三方〇伊勢山田大年寄中兩人宛致年行事、年貢納、相拂候金子者、奉行所家來ト三方相封付、三方ヘ預リ置、向後兩宮御造替之御入用金ニ相加ヘ可申之旨、御老中被仰渡候條、目遣シ置候、右之通可相心得、此旨永々可被相守候、爲後日如此ニ候、以上、

天和二壬戌年十月十一日　下野印

長官

神主中

此時三方中ヘ被成下候御條目、神宮ヘモ被下候、如左、

條

一勢州神領鶴松濱新田、都合田畠五十町六反貳畝拾五歩之所、彼地隣、一色村中之者請負、永代物成定免六ッ半ニ相定メ、戌亥草切ニ差免シ、今度總堤築立、繪圖之通可仕之旨申付之、右村中ヘ申付候事、

一年貢堤損、諸事普請等出來候共、從公儀一圓無御構ひ、村中として諸事仕置等定之通相守可申事、

一請負之者、若新田ヲ捨立退候ハヾ、其年之納十貫松之鹽濱、三百四拾溝、此金三百五拾兩之地質物ニ出候間、取上之、其上村中曲事ニ可申付事、

如斯一色村年寄共、連判之證文差上候條、永代彼村中ヘ申付候事、

一新田、最初ヨリ山田三方貳拾四人ニ、萬事致吟味、取立候間、向後モ右之通ニ申付候、彌念ヲ入、三方兩人宛致年行事、每年年貢納米拂金子、奉行人家來、三方中改相封付、三方中ヘ預置候、兩宮式年御造營入用ニ相加ヘ可申候、其外之義ニ、堅遣申間敷事、

一米百石〈両宮御遷宮祭主参向料来年御渡被ㇾ成候先格ニ御座候、祭主三位殿家来被ㇾ請取ㇾ候、〉

一米千七百三拾九石〈行、事官皆済来年御願申上候先格御座候、行事官名代請取候、〉

此内五拾石、外宮御樋代御細工料也、

右六口、享保十四年九月御遷宮之節者、同年十月廿三日、於大坂請取申候、

両宮御造料米總合

貳萬九千五百四拾石也

外ニ判金六拾貳枚

一京都神宮傳奏被ㇾ請取候日時陣議料米、且又祭主三位殿被ㇾ請受候参向料米、此二品之儀者、京都ヨリ直ニ御役所ヘ被ㇾ出、両作所不ㇾ相預儀ニ御座候間、委細之儀者、不ㇾ奉ㇾ存候得共、承候通申上候、

右之通御座候以上

辰正月

内宮作所

藤波大進印

外宮作所

松木越後印

〔御造宮杉の落葉〕作所殿ヨリ、鶴松濱御新田御上納金御造料之内ヘ、御差加ヘ之書附如ㇾ左、〈○中略〉

伊勢外宮御神領之内東濱郷鶴松新田之事

一抑此鶴松新田者、元來鹽取濱ニ而有ㇾ之由之處、天和年中頃歟、隣郷一色村ト通村ト、爭論之譯有ㇾ之由ニテ、御裁許落著之上、御公儀ヘ御上地ニ相成候トノ趣ニ承及候事、此巨細濫觴不ㇾ存候事、

一天和二壬戌年十月十一日、從小林御役所〈○山田奉行役所〉両宮長官神主中御召出ニテ、内宮長官〈氏富〉外宮長官〈常和〉三神主十神主罷出候處、御奉行桑山下野守〈貞政〉御書御渡被ㇾ成、被ㇾ爲ㇾ仰渡ㇾ候趣如ㇾ左、

代金三百七拾兩三歩ト銀貳匁壹分

一〔米三百拾貳石　風宮木造始日時陣議料寬保三年三月廿三日、於大坂神宮傳奏家來ニ請取候、

代金三百五拾兩貳歩ト銀三匁七分

一米百石　風宮木作始祭主參向料寬保三年三月廿三日、於大坂祭主三位殿家來被請取候

代金百拾貳兩壹歩ト銀六匁五分

一米千石　行事官前借寬保三年三月十六日、於大坂行事官名代請取候、

代金千百貳拾三兩貳歩ト銀五匁七分

右八口者、加藤飛驒守殿以御證文、寬保三年木造始之節、於大坂請取申候、但米壹石ニ付、銀六拾七匁四分壹厘五毛七替、金壹兩ニ付、銀六拾匁替、

一米千七百拾五石　內宮地曳祭料御壹料當年御願申上先格ニ御座候、內宮作所請取候、

一米千六百四拾壹石　外宮地曳祭料御壹料當年御願申上ル先格ニ御座候、外宮作所請取候、

一米三千石　行事官中借當年御願申上ル先格御座候、行事官名代請取候、

右三口、享保十四年九月御遷宮之節者、同十三年八月廿三日、於大坂請取申候、

一判金三拾枚　內宮御儲代料來年遷宮之前御願申上先格御座候、內宮作所請取申候、

一判金三拾枚　外宮御儲代料來年遷宮之前御願申上先格ニ御座候、外宮作所請取申候、

右二口、享保十四年九月御遷宮之節者、同年七月十二日、於大坂請取申候、

一米三千六百五拾六石壹斗　內宮御造料皆濟來年御願申上先格御座候、內宮作所請取候、

一米三千三百三拾三石九斗　外宮御造料皆濟來年御願申上先格御座候、外宮作所請取候、

一米千五百拾石　兩宮地曳祭以下遷御迄之日時陣議料來年御渡成候先格ニ御座候、神宮傳奏家來被請取候、

一判金貳枚　宣命[illegible]物來年御渡被成候先格御座候、神宮傳奏家來被請取候、

兩宮御造料奉請取覺

一米貳千六百五拾石内宮山口祭料寛保二年二月廿八日、於大坂内宮作所請取候、
　代金貳千八百九兩ト銀拾壹匁九分
一米貳千五百九拾石外宮山口祭料寛保二年二月廿八日、於大坂外宮作所請取候、
　代金貳千七百四拾五兩貳分ト銀五匁六分
一米三百三拾石兩宮山口祭日時陣議料寛保二年三月五日、於大坂神宮傳奏家來致請取候、
　代金三百四拾九兩三歩ト銀四匁四分
一米百石兩宮山口祭祭主參向料寛保二年三月五日、於大坂祭主三位殿家來致請取候、
　代金百六兩ト銀四分
右四口者、加藤飛驒守殿〇山田奉行以御證文寛保二年山口祭之節、於大坂請取申候、但米壹石ニ付
銀六拾三匁六分四毛五撮替、金壹兩ニ付、銀六拾匁替、
一米千石内宮頭、頭代、小工、山飯料、寛保三年三月十六日、於大坂内宮作所請取候、
　代金千百貳拾三兩貳分ト銀五匁七分
一米千石外宮頭、頭代、小工、山飯料、寛保三年三月十六日、於大坂外宮作所請取候、
　代金千百貳拾三兩貳歩ト銀五匁七分
一米千七百七拾五石内宮木造始料寛保三年三月十六日、於大坂内宮作所請取候、
　代金千九百九拾四兩壹歩ト銀七匁九分
一米千六百五拾八石外宮木造始料寛保三年三月十六日、於大坂外宮作所請取候、
　代金千八百六拾貳兩三歩ト銀拾匁貳分
一米三百三拾石外宮綱麻料、作事小屋鋤鍬料、寛保三年三月十六日、於大坂春木舍人請取候、

光院之手、慶光院者、開基清順上人、以造宮有勤勞、其餘烈不墜、拜謁代々大樹、〇徳川氏而賜造宮之朱印、者也、然造宮之儀、僧尼承旨、依爲非禮、有直自神宮宜言上之公命、以故兩神宮使〇内宮使井面内膳、外宮使松木主計、詣東武、蒙得嚴旨、因襲舊貫、而經營之使、自神宮言上東武者、始于今般也、且自後比及式年、有早可令聞達于公庭之命、是國家泰平之瑞徵、神事與復之先兆乎、事可不慶幸哉、

〔每事問下〕問、遷宮ノ造料現米三萬石トハ、何レノ時ニ定リタルヤ、答、是ハ享保三年十一月ニ御奉行〇山田奉行渡邊氏〇下總守在江戸ニテ、江戸ヨリ神宮ヘ尋アリテ、遷宮ノ下行三萬石ヲ以テ、兩宮ノ料トスル事、何レノ時ヨリ定リタルヤ、亦三萬石ヲ配分ハ、何方ヘ何程ト云事申シ越ス可シ、尤一分ノ尋ナリトノ事ナリ、其時外宮ヨリノ返事ニ、三萬石ニ定リタルハ、御當家〇徳川氏ノ初、慶長八年ニ、遷宮ノ事ヲ仰セ出サル時ヨリ也、信長ノ時代迄ハ、錢ニテ三千貫ナド出タリ、兎角米何石ト云事ハ、慶長八年ヨリ也、亦配分ノ事、當地ノ者ノ取分ハ分明ナリ、京都ノ祭主參向料、又ハ行事官ノ分等ハ、〇中略神宮ニハ知ラザル事ナリト云フ、其時内宮ヨリモ外宮ヘ相談アリテ、一樣ノ返答ナリ、

〔寛延正遷宮作所引留〕延享五戊辰年〇寛延元年正月十六日晴、御役所〇山田奉行所ヘ伊庭將曹差出ス、

口上

内宮作所
藤波大進
外宮作所名代
伊庭將曹

三萬石之御造料請取候、石高且又當年ヨリ來年迄被成下候、石高御尋ニ付、別帳ニ相認差上之候、右之旨可然被仰上可被下候、以上、

正月十六日

御取次岩井和助殿

差上御造料一帳左のごとし

口祭等執行ノ後、本能寺ノ變ニ因テ豐臣氏其遺業ヲ繼ギテ、之ヲ造進セシナリ、

又按ズルニ、慶光院ニ綸旨ヲ賜ヒシハ、全ク永祿ノ先例ニ由遵スルニ過ギズ、

〔孝亮宿禰記〕慶長十三年七月十六日辛丑、昨日自大炊御門大納言〇藤原經頼依有使者參之、今度神宮傳奏被仰出、就夫神宮御造營之事、如上代可有之由武命之間、以書付可進駿府〇德川家康之由、自板倉伊賀守申兩傳奏云云、依之召寄諸司書立之、

〔子良館日記〕慶長十四年己酉九月に、ざうりう三万石にて、京も宮も山も、いづれも兩宮共に、御大將樣家安〇家康歟より、兩宮御造宮なされ候て、內宮は九月廿一日に御神入有、外宮は九月廿九日に御神入あり、色々御あらそひ被成候へ共、外宮神主御ぬかり候て、內宮禰宜衆京へ二人、するがへ二人、御上候て、內宮さいかくにて如此候、

〔寬正以後假殿遷宮古記拔書〕從叡慮被仰出候者、役夫工米に而、六萬六千貫文に而御座候、其外は願人次第に而御座候條、不相定候、先規拙者手前請取分、五百貫文にて御座候、同天正十三年之遷宮料五千貫文、同米五百石に候、此內其手前請取分、貳百石宛に而御座候、如上代之遷宮可被成候旨、天下泰平國家長久、日出度奉存者也、

慶長十三年八月八日　神祇權少副祭主

長野內藏丞殿

〔慶光院由緒書〕權現樣〇德川家康御朱印

伊勢りやうくう、ぎやうせんぐうの事、先例にまかせ、とりおこなふべき者也、

慶長八年九月九日　御朱印

けいくわう院上人

〔寬文九年外宮正遷宮記〕抑正遷宮儀式、古代之例、置而不論、天正以降、奉台命以成造宮事者、出於慶

拙者相談可然之樣ニ可仕之由ニ候、○中略

三月十七日　　上部越中守
貞永判

內宮長官樣

同　神主中　人々御中

就今出馬、祈禱御祓大麻被越候、祝著ニ候、仍此表並諸口任存分候、隨而正遷宮事申付間、各滿足由尤ニ候、尙委細上部大夫申付候、恐々謹言、

三月廿九日　　筑前守
秀吉御朱印

內宮十神主中

〔外宮天正遷宮記〕天正十二年甲申三月廿三日壬午、羽柴筑前守殿ヨリ、正遷宮之金子、兩宮へ五百枚與、入木千石與、上部越中殿、周養上人江渡シ御置候、

但先入十五枚ワタリタルヲ、兩宮へ半分ヅヽ、外長官ニテワケラレ候、

筑前殿ヨリ被仰出候ハ、江州土山ニテ、三月十七日ニ被仰出候テ、先入十五枚御ワタシ候也、

〔慶光院由緒書〕御綸旨

今度兩宮正遷宮之事、嚴重之段、彌以天下安全之至、珍重思食候、併當于時申沙汰之條、美目不可過之候、猶可抽懇祈之由天氣所候也、仍執達如件、

天正十三年十二月六日　　左中將書判

慶光院周養上人御房

○按ズルニ、織田氏造進ノ正遷宮ハ、天正九年豐受大神宮禰宜ノ織田氏ニ申請セシニ起リ、山

一貳百參拾貫文　山口祭神事料
一七拾貫文　祭主殿參向料
一參拾貫文　いちのでん御造料
一五拾九貫文　子良舘　雲形料　御巫祝　頭衆祝　頭代衆祝　小工祝　鍛冶祝
一百貫文　山口祭の日、於岩社神事料、金銀調有之、
一參拾貳貫文　山口祭の夜、於當山志んの御柱とり奉る祭代、をづな、ぬのづな、まさかり、〈繩なども島中〉かれこれの調料、
一拾貳貫文　山口祭の日、御神馬へそなへれう、御馬かひに下行、
一七百貫文　木曾へ御山入之時大工
一百參拾壹貫百文の内　内裏樣　上樣　丞介殿樣　三介殿樣　三七殿樣　此外方々へ、御遷宮御とゞけの遣料、
以上千參百六十九貫百文歟
殘而百參拾貫九百文歟
天正十三乙酉年正月吉日　内宮長官
守豊判
稻葉勘右衞門尉殿
牧村長兵衞尉殿
〔内宮引付拔書〕天正十二年記
兩宮正遷宮義、筑前殿樣〇豊臣秀吉被仰出候、一萬貫にて候、請錢に御座候間、金子五百枚にて候、則今日金子貳百五拾枚、御あしつけにて請取申候、又京にて八木千石可有御渡之由に候、周養上人と

貫被入置候、定而縄も腐候はん之間、三位中將信忠より、御奉行を被仰付、繫直し正遷宮入次第、被成御渡候へと御諚也、

〔外宮天正遷宮記〕天正九年八月正遷宮之事、注進于信長公、同十年又令注進之處、有御許容、而則御朱印之御書到來、兩宮一紙被書之、取次者平井久右衛門尉殿、上部越中殿兩人也、則兩宮御遷宮奉行亦右兩人也、

〔外宮引付〕當宮兩宮造營事、可執行之、各存其趣、別而可入精、無故引物等令停止、急速出來候樣可馳走、依之上部大夫仁、平井久右衛門相副、越置候也、

天正十　正月廿五日　信長御朱印

伊勢大宮司どのへ

同兩宮長官どのへ

同　神主中

〔慶光院由緒書〕御綸旨

大神宮正遷宮事、役夫工米不事行之條、令勸進諸國之奉加、抽無貳之丹心、早遂其沙汰者、可被思召神妙之由天氣所候也、悉之以狀、

天正十一年六月二日　左少辨判

周養上人〇慶光院第四世御房

〔天正十三年御遷宮記〕先年、上樣信長、三千貫文兩宮正遷宮料、ぴたせん被進之候、其口注文進上可然之由、從兩御使とて、上部より其屆あり、頓則ニ認之、

天正拾年仁、於安土上樣御渡しなされ候、參千貫文之代、內宮へ千五百貫文請取、つかひみち撿、

一五貫文、右之代聽屆申候時、各饗食料、

織田豐臣二氏造進

如之乎、仍言上如件、以解、

永祿二年三月日　　正六位上度會久賀上

禰宜正四位上度會神主備彥人〇以下名略

〔檜垣貞次話記〕外宮永祿ノ遷宮ハ、淸順上人ノ建立ナリ、上人ハ舊熊野ノ入庵ト云フ所ノ、勸進比丘尼ニテアリケリ、一旦此所ニ來リ、遷宮中絕ノ久クテ、正殿破損ヲ歎キテ、勸進力ヲ以テ造立セントテ、久志本丹波守常辰ヲ賴テ、長官常眞ヘ勸進ノ廳宣ヲ請レケルニ、常眞、遷宮ハ比丘尼ノ勸進ヲ假テ成スベキ事ニ非ズトテ、廳宣ヲ不出給、足代七郞右衛門常興ハ、上人ノ詔刀師タルニ依テ、是ヲ賴マレケレバ、常興卽常眞ヘ申サル、常眞常興ト友トシ善人ニテ、賴スク領掌アリ、ヤガテ廳宣ヲ出給ハリヌ、上人廳宣ヲ賜ハリテ、諸國勸進セラレケレバ、思ノ外ニ金銀多クアツマリテ、常興方ニ立歸テ、正遷宮造營ノコトアリケリ、

〔常基古今雜事記〕眞興預叙爵子細

永享六年ヨリ、永祿六年迄百卅年、正遷宮中絕之比、慶光院淸順上人ト、足代七郞右衛門弘興〇後改常興トカヲ合セ、方々才覺ヲ以テ、造料ヲトヽノヘ、永祿六年ニ、外宮正遷宮之事被遂上聞ニ、叙爵不斜、〇中略從五位下之口宣ヲ被下、權禰宜正六位上補任トモニ頂戴仕候、

〔信長公記十五〕天正十年正月廿五日、於伊勢大神宮正遷宮、三百年以降退轉御執行無之、今ノ御代ニ、以上意〇織田信長再興仕度之趣、上部大夫、堀久太郞を以て被申上候、何程之造作ニ而可調と御尋之處ニ、千貫御座候はゞ、其外は勸進を以而可仕と言上候、其時御諚には、去々年八幡御造營被仰付候ニ、三百貫可入と候つれ共、千貫ニ餘りて入申之間、中々千貫にて不可成候、民百姓等ニ惱を懸させられ候ては、不入之旨被成御諚、先三千貫被仰付、其外入次第可被遣旨ニ而、平井久右衛門爲御奉行、上部大夫ニ被相加候べき、廿六日森亂御使ニ而、濃州岐阜御土藏ニ、先年鳥目一萬六千

天文廿二年五月日

清順上人江連署

豐受大神宮造替正遷宮之儀、令ㇾ啓上候、然者被ㇾ成御綸旨、並御内書御下知等候、神慮云、綸命云、上意之旨、〇足利義輝勞以御用脚之事、於御合口者、御武運長久之御祈、不ㇾ可ㇾ過之由、可ㇾ得尊意候、恐惶謹言、

五月日〇天文二十二年　　備彥〇豐受大神宮一禰宜

六角殿
進上御奉行所

進上武田殿奉者板垣彌二郎殿、御宿所御奉行所、

謹上尼子修理大夫殿人々御中

進上北條殿御奉行所　恐々朝倉太郎左衛門殿朝倉殿人々御中　恐々朝倉九郎左衛門殿齋藤左近大夫殿御宿所　朝倉左兵衛丞殿　遠山殿御宿所　恐々山崎新左衛門殿

朝比奈殿御宿所

進上今川殿恐惶御奉行所

〔年山紀聞 一〕伊勢の上人

永祿元年日記、記者不ㇾ詳後六月三日、中山亞相神宮傳奏被ㇾ談云、去月廿三日、神宮外宮上棟無事令ㇾ沙汰之由注進有ㇾ之、或比丘尼號上人、先皇御代被ㇾ下上人號、女房詞例歟、名ハヽヽ號慶光院、以諸國勸進之力、此上棟取立者也、内々又内宮上棟存立云云、雖ㇾ不相應之事、末世如ㇾ此之儀、神慮有子細歟、不ㇾ測知事也、

〔外宮引付〕豐受大神宮神主

注進早經ㇾ次第上奏、可ㇾ被ㇾ達于上聞、外宮正遷宮御造替之事

右御造替之事就ㇾ被ㇾ仰出、既本宮御立柱上棟、如ㇾ形奉ㇾ造立之處、依御造料未ㇾ足、東西寶殿其外、于ㇾ今事不ㇾ相調之條、重而以御下知、御造料之儀、洛中隣國被ㇾ仰付之様、被ㇾ達于上聞者、天下泰平之御祈、何事

而今度造替之事、應一社之請、同可遂其沙汰旨、神妙之由天氣所□也、悉之以狀、

天文廿年八月廿日　　右中辨 書判

慶光院

〔遷御近例〕宇治橋供養成就之後、清順上人遷宮沙汰之事、尾州之僧、岡本寶慶庵ニ居住ス、其僧ヲ使トシテ、上人、常辰神主宿所ヘ使者アリ、内宮遷宮之事、申入度候ヘ共、御長官ノ御サバキ、上人意ニ不相叶子細有之、外宮ヘ申、外宮正遷宮ヲ取立申度トノ事、常辰少斟酌ノ事アレバ、御取次難申處ニ、強而頼被申故、長官ヘ一應申入ル者也、于時三禰宜忠彦神主以下、長官備彦ノ前ニテ評定有之、自往古如此之事ハ、天下之御沙汰也、僧尼之取立ラルベキ事、神不受、非例之間、不可然之由ニテ止ヌ、上人ハ爲御禮小袖ヲ用意セラレシモ、中ヨリ返シテ御受是ナシ、此由ヲ申處、正遷宮ハ今之天下可被取行事、不實〇實定誤爲ナル物ヲ、常辰申分ザル歟之由ニテ立腹也、前日沙汰アリシ外宮遷宮之事、常辰取次ニテ不調ユエ、清順上人、以別人長官ヘ重テ被申、外宮ニ御同心ナクバ、内宮ヲ正遷宮可申之由有之、此時長官以下、内宮ヨリ御申ニ就テハ、外宮ヲ頼入ベキノ由ニテ御受也、長官ヨリ常辰ガ許ヘモ御屆ケアリ、常辰申事ニハ、我等ノ申ニハ、皆々御同心ナクシテ、今更如此御屆ケ驚入之由申候處ニ、上人ヨリ又内所ヘ使者ヲタマハリ、神慮ノ事ナレバ、長官ヘ參リ、相共ニ馳走可然之由ニテマカリ出、叡慮上意ニ、神宮連署ニテ申上處也、仍爲後日記之云云、

〔禰宜晨彦引付〕豐受大神宮神主

早任叡慮上意、清順上人可被催諸國大神宮造替正遷宮子細之事

右造替正遷宮、依役夫工米事難行、既于久廢、然外宮巡番相當之間、所詮速可相調諸國之由、綸旨内書御下知被成下者也、遂被遂其功、至造宮成就、則皇都泰平群國治安之基、神慮何事乎如之、仍所宜如件、以解、

私物供用

募諸國納財

柳原殿

〔寛正造內宮記〕寛正二辛巳

今度造宮料、一萬六千貫下行之儀、亦臨時三千貫被下行、其後亦連々雖有若干御下行、猶無沙汰間、重又貳千貫文可被下、急營作可遂遷御節之由、自公方樣〇足利義政被仰出之處、今六千貫不被下者、不可叶之旨被申、此儀不可然、定上意可惡之由、五十日計支、頭人開闔雖被教訓、更無承引之間、九月三日〇寛正三年伺申之處、御氣色以外也、此旨趣則被奏聞之處、此事晝夜被歎思食、被惱叡慮之處、奏聞之條歎思食、遠以秀忠可被補之由被仰出、仍秀忠朝臣ヲ公方ニ被召、內宮造營可奉行之旨被仰付、外宮計之奉行サヘ大營也、兩宮奉行雖辨之由、兩三ヶ度雖被辭申、猶堅被仰出之間、無領掌者、時議可惡之由、頭人開闔被申之、仍被領掌申、就其公方樣御師職之事、同被仰付、彼以土貢今度計營作令造畢、可遂行遷御之由被仰出、〇中略御新餚料所、並有直私領マデ、悉被付秀忠畢、　件御領等土貢ハ、今度造營、自今以後、營作料三分一不可有之云云、

〔寛正三年內宮遷宮雜錄〕――――造宮使雜掌――――謹言上

一寛正三年內宮御遷宮、せん〳〵に遇上し、臨時御下行どもありといへども、造宮使有直其節をとげざる間、彼職をめしはなされ、秀忠に被仰付、〇中略就其今度の造ゑい、口口御新餚料所の土貢三分か、五分か、一にもたらず、仍皆悉ゑちもつに入、そのほか猶そこばくか、數千貫か、のりせんを借、遷御の節をとげ奉畢、

〔寛正三年內宮御造營記〕內宮正せんぐう、くわんしやう三年十二月廿七日、公ばうひがし山殿〇足利義政御ざうりう、　御ざうせん、二萬八千ぐわん拂之事、〇下略

〔慶光院由緒書〕御綸旨

清順〇慶光院第三世居室、號慶光院之由被聞食訖、殊至大神宮御裳濯橋造畢、供養成其功之由叡感無極、

右大神宮御倉は、依預置造營御用脚、常住ゑやうゑんけつさいを仕、其外盗人のけいごを仕、條々大儀之旨によつて、往古より諸御公事を有御免者也、然間造替御用脚、頭工等請取申、彼御倉にあづけ置、美濃山より割符を付、其外用脚不足之時は、先割符をかりちがへ、御材木を下申、大用御倉也、雖然近年被懸諸御公事間、御倉を上表可仕由申之、然者就造營可御事闕者哉、殊外宮御山入、神慮難測者也、此子細不日、兩宮被成上御解狀、如前々於大神宮御倉者、被免諸御公事者、神慮可令然者也、仍謹言上如件、

寛正四年三月日

〔總官家舊記〕伊勢大神宮御倉所司、任中林次郎衛門口息源六貞弘讓狀、小原松壽在所五條東洞院南西頰事、任先例被免除諸役訖、宜承知之旨、可被下知之由、所被仰下候也、仍執達如件、

文明十年七月四日　和泉前司

下野守

造宮使殿

〔晴富宿禰記〕文明十一年三月六日癸亥、就大神宮造營用脚預置御倉課役事、小原松壽丸酒屋公事免除之次第等有申旨之間、遣書狀於藤浪而相尋、一兩日中可參申之旨返報到來、　七日甲子、藤浪來、神宮御倉諸役免除之奉書、長祿以來武家奉書兩度也、去年八月又被下綸旨、然酒屋課役半分廣橋知行、半分造酒知行也、元來御倉不致所役之處、今被懸之奉書者、非公家之支證、於綸旨者、去年掠賜上者不可爲支證之由、傳奏廣橋中納言綱光卿頻陸梁之間、力不及迷惑之由、藤浪來申之、

〔總官家舊記〕兩宮禰宜等申、大神宮御倉諸役免除事、副款狀、　祭主二位、並雅久宿禰等狀如此、可有御奏聞候哉、誠恐謹言、

四月四日文明十一年　宣親上

御倉

僧正返答、言語道斷事也、所詮此上者、兩庄事不可沙汰、段勿論歟、以外事也、

〔蔭凉軒日錄〕長祿四年〇寛正元年七月九日、役夫工米之事、於諸五山督之間、詮所、幷飯尾加賀守依有折紙也、諸五山可勤之返事有之、

〔大宮司家古文書〕御假殿御要脚從御倉大宮司度々奉請取先例事

一外宮遷宮應永七年葺萱料御要脚員數在之

一內宮遷宮應永十八年葺萱料御要脚員數在之

一外宮遷宮應永廿六年葺萱料御要脚員數在之

一內宮遷宮永享三年葺萱料御要脚員數在之

一外宮遷宮永享六年葺萱料御要脚員數在之

一內宮遷宮寛正三年葺萱料御要脚員數在之

從先規之例文、雖可注申候、依事多、應永以來之儀如此候、

永正九年十月日　　大宮司廣長判

〔造宮使公文所筆海抄〕國々萱米作所用途宛目錄

合

伊勢國五貫文　志摩國五貫文　參河國五貫文　美濃國三貫文　武藏國三貫文　下野國五貫文　上總國五貫文　上野國五貫文　常陸國十貫文　相模國五貫文

此員數已上十ヶ國

延文四年正月二日　　公文所

權禰宜判

〔皇大神宮引付〕二所大神宮頭〇遣神宮頭工等謹言上

用途課寺院

廿四日、於造營關所、公方〇足利義政大方殿之御後見、左衞門口殿中間出事、若王子御共ノ山臥三位被打、其外公方御意能遁世者、一色殿御內者、近習進子一家、彼是十餘頭內、人々皆手ヲ負、仍關所代官藤波、若黨森切腹、造宮使可有御罪科之所、各屬致訴訟、造營料不出關錢事之條、無謂之由被仰出之間、各閉口、伊勢殿小笠原殿一家合十三頭也、　六年七月四日、小田神役造營所々、岩淵鄉民及廿人、號番衆推入、任雅意關錢ヲ押取之間、未明ニ發向、彼等逃失之間、悉住宅ヲ燒捨、下地ヲ沒收、

〔總官家舊記〕造大神宮料、伊勢國山田關壹所事、任先例去長享二年御成敗之處、依神役人等違亂延引之條、順神敵之至歟、所詮早立置役所、可被警固、若尙令緩怠者、爲被處罪科、可注申張本人交名候旨、被成奉書之上者、令力造宮使代、嚴密沙汰有之、可被專造替功由等、被仰下候也、仍執達如件、

明應三年二月廿八日　　前筑後守判

　　沙彌判

北畠中將雜掌

〔大乘院寺社雜事記〕寬正元年正月廿九日、內宮遷宮唐錦事之奉書同到來、柚留木進之、造內宮遷宮料唐錦參端事、任先規爲公家被下知處、難澁云云、太不可然、嚴密可被進納之、同御門家中此段可被相觸之由、被仰出候也、仍執達如件、

十二月十五日〇長祿三年　　之淸判

　　淳康判

南都
大乘院雜掌

〔大乘院寺社雜事記〕寬正元年二月廿八日、就內宮造營事、坪江河口兩庄段錢事、以柚留木重而御催促迷惑者也、仍同國木田庄事、如何樣ニ被申付哉之由、相尋東北院僧正候處、于今無被仰出旨由、彼

就御造替之延引、當御關事、上意嚴密之處、役所前幷廻路庭立、悉京都之者候之間、宇治面々依不見知候、旅人恥之由相尋之處、或閉口不能返事、或致惡口之條、誠無念至極候、于今堪忍候、且上意、且神慮難測候歟、御許容候者、無勿體候、若不然者、堅可被仰付候哉、縦役錢雖可致沙汰之由候、上意候者、不可有異儀候之處、如此緩怠無是非候、如今者定喧嘩可出來候之間、依御返事致注進、可經上裁候、恐々謹言、

七月廿五日　右衛門尉淸長判

左衛門尉康長判

謹上　內宮禰宜殿十人　橋爪

御館御中　石井

〔長祿四年記〕九月二日、治部河內守、飯尾新左衛門尉兩人、爲東海道關破却、去月廿四日下向、仍昨日上洛、兩人御大刀進上、大神宮御造營關依被立置、其外被破却者也、

〔皇大神宮引付〕長祿四年庚辰

今朝以藤波三郎、委細被申候、定而申候歟、〇中略　次山田關役、定年月任申請候旨、被成奉書之處、地下人及異議候由注進、頗緩怠至極候、經公儀如此候上者、縦雖不相當不及力候哉、併年中三千餘貫納所、不可有相違關役候歟、然者何可違變候哉、誠無正體申狀候、兩條嚴密被相觸、早速注進可然候、重而被成奉書候、不日可被下知候、恐々謹言、

十一月四日　源康判

外造宮使殿　御中

〔氏經卿神事記〕寛正三年五月廿六日、造營料小田關被停廢事、關預等被召上事、頭人開闔奉書二通、祭主下知被附外宮云云、於關屋者、自祭主被壞取、　四年三月三日、外宮造營料關被立小田、　四月

關錢充用

者、遲々之基也、雖爲新儀、及郡縣之奉加候、依之付叙負尉兩人此旨可被□知者、依天氣言上如件、

五月十日〇蓋永祿六年下同　左中辨輔房

進上　中山大納言殿

就大神宮正遷宮之儀、禁裏御奉加之事、勅裁如此、准叙負尉功、貳萬匹被付之由被仰下之旨、中山大納言殿御奉行所候也、仍執達如件、

五月十日　左衛門尉判

慶光院

是は慶光院上人、〇周養不思議なる事執行之條、禁裏より貳萬匹御奉加有、近々□□之由沙汰有、

同日上人へ禰宜中御禮有、

〔皇大神宮引付〕長祿三年己卯

兩宮造營事、諸國役夫工米、被致諸守護無沙汰、仍京中不謂權門勢家、被懸召屋地、雖爲若干用脚、奉行人致已用歟、終不成造營料、仍兩宮荒廢、逐日令倍增之間、爲公方樣〇足利義政被廻計略、被破諸國之關、被立置大津邊、人別十文充八月廿八日、祭主殿外遣宮使御使經繁神主、內造宮使殿御使江名帶奉書下著於小田、人別三十文充取之關屋者、兩宮工等作之、於入目者、關足於引、同卅日、關奉行、公方御倉之預、正實房定、光房、善隆房、兩三人之代官下著、仍兩殿御使渡彼等、九月六日上洛畢、鈴鹿海道於當國中被殘置在所者、宮河、安濃津、佐倸、可土河、坂內河、相河、當師、部田等、是皆橋賃耳也、

〔碧山日錄〕長祿三年九月七日丙戌、近歲諸州路、國俗之强豪者、置關以征之、往來悉難焉、相公〇足利義政命諸吏而破之、因爲改造伊勢之大廟、於安城之七路自諸州入京之路、其數七也、前月廿一日各置一關征之而已、往來咸喜此也、俗子貞信來語之、

〔皇大神宮引付〕長祿四年庚辰

不遑毛擧、亦諸司之助、有年勞之輩、雖無別功、遷任顯要、卽是延喜天曆之勝躅、復當時之聖化也、宜茂去正曆五年任當職、計其勞効、十年于今、遷尙之里、已當其仁、抑去八月廿八日、大風俄起、件大神宮內外院、皆悉顚倒破損、祭主神祇權大副大中臣朝臣輔親、依宣旨注損色言上、又申請造宮使者、望請天恩、來十二月祭以前、任損色勤修、依其成功、拜任民部丞最前闕、將竭奉公之節者、左大臣〇藤原道長宜、奉勅、相加月讀伊佐奈岐兩別宮、令修造、民部丞在前闕依請者、

長保五年十月十四日　大史惟宗朝臣元政

右中辨藤原朝臣朝經

〔本朝文粹六奏狀〕請特蒙天恩、依尾張國所濟功幷侍讀勞、被拜美濃守闕狀　大江匡衡

右匡衡爲尾張守之時、〇中略別進造伊勢豐受宮之料米五百斛、〇中略寬弘六年正月十五日、正四位下行式部權大輔兼文章博士大江匡衡誠惶誠恐謹言、

〔中右記〕嘉保三年〇永長元年正月五日丙申、先參殿下〇藤原師通御直廬、付說長令申事、造宮使親仲加階事、〇中略內宮造宮使大中臣親仲申加階、去年五月俄被補造宮使、以私物募受領功、造畢、成功依莫大、又申加受領功、今一人宜下了、而重申爵如何、但去承保度、造宮使親定、申受領功幷加階、皆被免了、親定不遑之替、被補公輔云云、又申受領功幷大神宮司功、先例二人中有四功、然者被免何事在哉、就中今度前造宮使親長、及當年五月所立之纔三字也、其後親仲補造宮使以來數十字殿舍、以私物終不日功、是可謂大功者也、仍敍正五位下、

〔類聚大補任後鳥羽〕建久八年丁巳

宮司大司從五位下大中臣康定正月四日任、在任七年、功一任、年爲九、前々大宮司公隆五男、師隆一男也、傳得前々大宮司定結修造功、建保二年可爲補定(恐康定誤)功之由、賜宣旨之上、建久五年(五年恐元年或三年誤)遣大神宮之時、進納成功三千匹也、

〔神宮舊記神境紛例所引〕大神宮正遷宮之事、任舊例、以役夫工米、可有其沙汰之處、當時諸國之儀、若不調備、

成功

忌火屋殿百貫　美濃　　齋王御膳殿五十貫　尾張　定基
一殿百二十貫　美濃　　酒殿百貫　美濃
由貴殿七十貫　播磨　定勝　　主神司殿七十貫　同　同
九丈殿百二十貫　同　同　　廳舍四十貫　同　同
御輿宿六十貫　同　同　　子良館百廿貫　伊勢　作所
內御厩三十五貫　　河原殿四十五貫　尾張　定基
車宿六十五貫　尾張　定基　　月讀宮正殿、小殿、瑞垣御門、瑞垣鳥居、一殿、
伊佐奈岐宮正殿、小殿、　　瀧原並宮
伊雜宮正殿、御門、瑞垣一重、一殿、忌屋殿、鳥居、　伊豆　定正　　小朝熊社　田邊社
湯田社　園相社　鴨社　蚊野社

○按ズルニ、此屋充ノ文書ハ、文明三年役夫工米ノ記錄ニ綴合セタレドモ、年紀詳ナラズ、但シ鋪設御倉ノ條ニ、土御門大副トアルハ、祭主蔭直ノ事ナランカ、卽チ大神宮例文ニ、蔭直、土御門殿元號岩出南殿トアル是ナリ、此人ハ祭主補任ニ依ルニ、正和五年祭主ト爲リ、其後解職還補アリテ、建武四年ニ薨ゼリ、此土御門大輔ハ果シテ蔭直ナランニハ、此文書ハ文明中ノモノニ非ズシテ、正和五年ヨリ建武四年迄ノ遷宮、卽チ元亨三年正遷宮ノ屋充ナルベシ、姑ク記シテ疑ヲ存ス、

〔類聚符宣抄 一〕左辨官下伊勢國幷大神宮司
應任祭主神祇權大副大中臣朝臣輔親檢錄損色令繕殿助大中臣宣茂修造大神宮內外兩殿幷月讀伊佐奈岐等別宮雜舍御垣等事
右得宣茂今月五日奏狀偁、謹檢案內、以私物勤仕造作之者、或蒙不次之賞、或任所望之官、先蹤多存、

屋充

ナリ、而シテ文明三年ハ、寛正三年皇大神宮正遷宮ヨリ、第十年ニ當レ

〔晴富宿禰記〕延德四年六月三日壬寅、外宮官調進用脚、以若狹國役夫工米且參拾貫、守護武田進濟之、國奉行諏訪信濃守請取之由、申遣攝津掃部頭之旨申合開闔淸□□人下書行事官行賢請□□持參之、此時分下行、□□□進物等祝著々々、

〔遷宮例文〕屋充事

件屋充事、且任先規、且依時儀、所被充行也、作所相計之分充、其沙汰爲大儀、輙執合充之者也、件充屋請料之內、各十分一、作所之得分也、是每度之例也、

近代諸殿舍御門御垣等、作事不法之上、柱根不足之間、卽時ニ或傾倚顚倒、或ハ破損シ散失、爲神爲公、第一不忠也、不信也、任本儀守寸法、復如勘文、敬神忠勤ヲ存テ可造進事、

神勅曰、瑞宮製造柱則高太、板則廣厚云云、

〔文明三年造內宮料役夫工米記〕造大神宮屋充

正殿付荒祭宮
東寶殿二百貫　尾張　定基
西寶殿百八十貫　相模　隆季
瑞垣御門百三十貫　上總　內六禰宜
北御門二十貫　作所
蕃垣御門三十五貫　作所
玉串御門百三十貫　上總　內六禰宜
第四御門百三十貫　上總　內六禰宜
四面玉垣二百貫　下總
齋王候殿四十五貫　安房　淨心
舞姬候殿四十五貫　安房　淨心
荒垣百二十貫　下總
鳥居一二三東西北六基　作所
外幣殿百五十貫　相模　隆季
御稻御倉五十貫　相模　隆季
庸御倉五十貫　相模　隆季
鋪設御倉五十貫　若狹　土御門大副殿
調御倉五十貫　伊勢　作所

應仁二年三月日　　　大内人正六位上荒木田神主安行上

禰宜從四位上荒木田神主氏經

〔文明三年造内宮役夫工米〕公方様御内書造内宮料關東國々役夫工米事

事書訖、嚴密可究濟之旨、可被下知之狀如件、

六月十二日　　　義政御判

左兵衛督殿〇足利政知

造内宮料關東御分國役夫工米事文明三、三、廿七、

一於三社領幷北野社領者、可停止催事、

一被勘落三代御起請勅免官符地事

一諸公事御免之地、可〇可上恐脱不字有催促事、

一權門勢家知行分、可被停止京濟事、

一五山領並極樂寺領等、任本田數可沙汰事、

一寺社領等、可被停止京濟事、

一號八田流者、被免除在所、近年多之云云、神用闕如之基歟、甚不可然、堅可有糺明事、

條々被定置規式於事書之上者、守此旨可被施行、若有難澁之族者、就注進可被罪科矣、

于時管領細河殿〇中略

前々御事書、御料所可被沙汰事、

役夫工米催促之間、可被停止他役事、

此二ヶ條、今度被除之、

〇按ズルニ、役夫工米ハ、第十七年十月造宮使ヲ補シ、然ル後太政官符ヲ以テ之ヲ課スルノ例

禰宜荒木田神主 判 十人 判

〔皇大神宮引付〕文正二年〇應仁元年

皇大神宮神主

注進、可早被經次第御沙汰、任先例被成御教書於關東、逐役夫工米徵納、造進當宮諸殿舍幷諸別宮攝社、奉成遷御、致御祈禱間事

右大神宮造替遷宮者、天下大營、神宮大事也、爰自去永享三年遷宮經卅二ヶ年、去寛正三年雖被奉成遷御、及當年六ヶ年、諸殿舍諸別宮攝社末社等之事、曾不及御沙汰、〇中略抑造替遷宮者、專以關東役夫工米、被逐其節先例也、然則被成下御教書、就役夫工米徵納、逐諸殿舍別宮攝社末社等之造替、奉成遷御、專天下泰平國家安全御祈禱矣、仍注進如件、以解、

應仁元年三月日　大内人――安行上

禰宜從四位上荒木田神主氏經

〔皇大神宮引付〕應仁二年

皇大神宮神主

注進、可早被經次第御沙汰、〇中略奉直條々違失、遂行神事、致御祈禱者、天下靜謐間事、

一抑兩宮造替遷宮者、被定置廿ヶ年、以六十餘州之役夫工米、奉造營事、是偏爲天下万民利益方便也、仍造宮使、入諸國於大使、不謂大裏御料所、神領、寺領、權門勢家御領、平均納之、奉造進事、每度例也、然近來被置御倉、雖有下行、相違先規、子細繁多也、因玆造營每度難事行、殊又以關東國々役夫工米、專奉成造營之處、近年依東國忩劇、不及其沙汰之條珍事也、

右條々者、是皆神訴也、可有御成敗之旨有御祈誓、而猶別而隨御立願之旨、被籠御願書、禰宜等抽御祈禱精誠者、天下靜謐不可有疑者也、仍彌爲專御祈禱忠勤、注進如件、以解、

請取　先分目錢用途事

合―――貫文者

右爲當年某月月宛運上―――貫文、先分目錢所請取如件、

年號月日

奉行 權禰宜 判

主典 判

奉行 權禰宜 判

〔寛正三年正遷宮雜錄〕――――造宮使雜掌――――謹言上〇中略

一せん〳〵兩宮造替遷宮は、自往古明德〇二年の御せんぐう〇大神宮までは、造宮使諸國に大使を入、役夫工米を悉徵口をとげて、造進し奉者也、しかるを應永十四年に、內宮造宮使はじめて申うけて、國々の役夫工米を、守護に被仰付、

〔寛正三年內宮遷宮雜錄〕內宮御造營作所方御下行事〇中略

應永十八年辛未十二月內宮遷宮　役夫工米從國々到來

永享三年辛亥十二月十八日遷宮、此時マデハ如前々、

寛正三年壬午十二月廿七日遷宮、此時ハ從御藏御造錢之出候、

〔皇大神宮引付〕應宣

可早任先例被停止役夫工米催促專神役勤參河國飽海神戶事

右件神戶者、爲嚴重御神領、每年口入上分米、幷四ヶ神役之外者、自往古不致沙汰之處、今被懸役夫工米之條、神慮難測者也、若猶不被止催促者、神役闕如、天下御祈禱可退轉者哉、然早任先例被除當神戶催促、全神稅徵納、爲專神供備、所宣如件、以宣、

寛正五年六月廿一日

使神祇權大副大中臣朝臣

〔總官家舊記〕請申　造外宮料上野國役夫工米請料神役事

合仟佰貫文者此外先分目錢、神役還上、每度可副進之、

右當國大使職事、定請料仟佰貫文、以長松丸名字所請申也、此內明年壬辰歲六月中貳佰貫文、同年十一月中參佰貫文、明後年癸巳歲六月中參佰貫文、同年十一月中參百貫文、以上仟佰貫文、不謂國濟否、守月宛次第、慥可進濟于造宮所者也、次見參料佰拾貫文、並宣旨料伍貫文、奉行料伍貫文、大營料三百三十貫文之內、且半分佰陸拾伍貫文者、山口祭、并御事始二ヶ度、爲大營分者也、仍此等之所役者、可令當進也、於殘半分佰陸拾伍貫文者、明年壬辰歲八月中佰貫文可進之、殘分陸拾伍貫文者、明後年癸巳歲八月中可進上之也、縱孫子細出來、雖有難濟事、爲嚴重神物之上者、以私力可沙汰滿者也、若日限令違期、雖爲少分有難澁之事者、被訴申公方、被申行口口犯用之重科、云大使、云請人等、可被沒收所帶資財田畠等、其上被處先進用途於無、可被改易大使職於他人、其時雖爲一言、不可申對論者也、此等條々、雖爲一事令違犯、若僞申者、忝奉始二所大神宮、可蒙日本國中大小神祇冥道御罰於大使請人等身者也、仍爲口口進請文如件、

應永十八年辛卯十月十六日　　大使日光政所代長松丸判

請人　　宇塚道慶判

〔造宮使公文所筆海抄〕納造外宮料某國役夫工米代錢事

合━━━貫文者單定

無先分目錢沙汰時者、單定ト書之、有先分目錢沙汰時者、者ノ字下仁、先分目錢在之ト書之、

右某國神役用途之內、爲當月月宛、且所請取如件、但月宛員數、皆不致沙汰時ハ、當月月宛內且ト可書之歟、

年號月日　　主典判

廿石　二鳥居（三末恒請之）　甲斐

一別宮○中略

一攝社○中略

右且任先規、且依時宜支配之、此外四度大饗幷祿物、及禰宜裝束以下所役等、臨期可充課之狀如件、

暦應三年十二月八日

使神祇大副（○造宮使大中臣親忠）　本項江

〔造宮使公文所筆海抄〕造伊勢大神宮所下　幸期丸可早任官符宣旨、令催濟勤仕神役安房國役夫工米事

副下官符宣旨

右件役夫工米、早守彼宣旨、任先例、令催濟、無懈怠、可勤仕神役之狀如件、以下、

延文三年十二月十八日

使神祇權大副大中臣朝臣（○造宮使親世）

造伊勢大神宮所牒安房國衙

欲早任官符宣旨、被進濟工役夫作料米事

解狀

大使　小使　神部二人　鈴負一人

牒、當宮廿年一度造替用途料、任官符宣旨、無懈怠可被進濟之狀、牒送如件、乞也衙察狀、牒到准狀、以牒、

延文參年十二月十八日

主典正五位下荒木田定勝

判官正六位上大中臣有氏

西御門　下野　　同北御門　阿波
九十石瑞垣　讚岐　　四十五石蕃垣御門三　上總
百三十石玉串御門一　上總　　百三十石第四御門一　上總
六十五石齋王候殿二　越中　　六十五石、大使造二建之一、舞姫候殿一　丹波
二百石外幣殿三　美濃　　八十石御稻御倉一　阿波
七十三石庫御倉三　能登　　七十三石、六十五石、一頭方小工先祖請也、調御倉三　備前
七十三石、大使可レ令レ造二建之一、鋪設御倉二　伊勢

御垣
一重四面玉垣、五十四丈二尺六寸、　大河戶　　一重同垣、十四丈八尺、　大河戶
一重四面荒垣、百四十二丈八尺、　紀伊　　一重同垣四面、九十一丈二尺、　河內
屏四間
南北一鳥居三基頭安種、四末額、各廿石然、　攝津

一外院
百五十石、二百三十五石、四頭代請レ之、忌火屋殿四　下野　　七十石、六十石、三頭代[illegible]後請レ之、齋王御膳殿三　長門
八十石、大使可レ造二建之一、御輿宿一　丹波　　百八十石酒殿三末恒請レ之　安房
八十石由貴殿三末恒請レ之　甲斐　　二百七十石一殿一　備前
二百三十石九丈殿二　美濃　　八十石、大使可レ造二建之一、主神司殿二　丹波
百三十石河原殿二　美作　　百五十石子良宿館三　伊勢
七十石內御厩二　淡路　　七十五石廳舍一　丹後
百六十石車宿三　伊賀買右神主　　一鳥居一安種請レ之　攝津

釘九六反小（〇以下缺）

〔御裳濯川和歌集背面古文書〕被ㇾ尋ㇾ下造宮所ㇾ條々

持明院殿被ㇾ申、但馬國菀東庄事、（郎下ニ大貳法橋ㇾ了）

聖護院宮被ㇾ申、伊勢國鹿取庄事、（十七日下ニ大使ㇾ了）

相國被ㇾ申、美作國粟井庄事、

同被ㇾ申、丹後國鳥取庄事、（廿七日下ニ大使ㇾ了）

青蓮院禪師被ㇾ申、雲林院事、

師蔭申、掃部寮領河内國若江事、

口宣申、口口寮領美作國綾部庄事、

有業申、長講堂領市村高田庄事、

以上八ヶ條

二月廿五日

〇按ズルニ、以上二通ノ古文書ハ、豐受大神宮五禰宜度會延明ノ、御裳濯川和歌集ノ書寫ニ用キタル故紙ナリ、延明ハ、康永三年ニ卒去セシ人ナレバ、此古文書ハ年號ヲ記セザレドモ、康永以前ノ物タルコトハ明ナリ、

〔內宮曆應三年造替記〕大神宮內外院別宮攝社所課國目錄事

一內院

正殿（加ニ荒祭宮ㇾ定、）　參河　遠江　武藏　上野　伊豆　播磨　近江　尾張　備中　因幡

二百十六石　東寶殿　甲斐　百九十八石　西寶殿　下總

請預官符〈翌朔進〉官請奏副也
　　判官主典請奏之　諸國之工役夫工料米官符請奏之　判官主典日食米請奏之
　　　已上三通
〔御裳濯川和歌集背面古文書〕注進
　　伊豫國內宮役夫工米一向未濟所々注文
　　合
菊萬庄百三十町
宇萬本庄百五十町
吉岡庄百六十四町五反二百九十步
同餘田九町九反小
□院□□三十二町
玉生庄三十六町五反百十步
矢野保□八町一反六十步
石野庄百七十八町二反六十步
宇和庄三百一町六反三百步
三嶋御領嶋々八十九町二反小
佐方鄉廿四町小
栗井保九十一町七反斗
藤三位十八町二反大
神前出作七十六町九反

〔御裳濯川和歌集背面古文書〕沼間庄役夫工米事、増朝重申狀如此、可被免除由、去年被申候畢、殊可令申沙汰給候旨、御氣色所候也、仍執達如件、

乾元二　二月三日　　大藏卿判

右中辨殿

和泉國沼間鄕役夫工米事、大藏卿奉書副増朝律師狀具書如此、先可止當時之濫責候由、可令下知給旨被仰下候也、仍執達如件、

同　二月廿日　　右中辨判

造宮使殿

〔造宮使公文所筆海抄〕吉書行事

造伊勢豐受大神宮所

請任先例被下官符諸國工役夫作料米狀

右件工役夫作料米――仍所請如件

乾元二年〇嘉元元年　六月廿日

進上

奏狀三通

判官主典幷工役夫作料米日食米等官符事

右任先例所注進也、以此旨可令申上給候、恐々謹言、

六月廿日〇嘉元元年　　神祇權大副大中臣〇判狀隆實

進上　大夫史殿

〔遷宮例文〕造宮使補任事

〔百練抄 後深草十三〕寛喜元年七月十六日、造外宮役夫工神部等、向祇園執行勝圓法眼房、譴責越中國堀江庄課役之間、令刃傷神部等、進切損祇園神寶之由訴申、仰使廳被實檢云云、

〔御裳濯川和歌集背面古文書〕越中國石黒庄内直海郷、外宮役夫工米事、下知狀召進之候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

弘安九十一月五日　　神祇權大副爲繼

下知狀案

當國石黒庄内直海郷、外宮役夫工米之事、任内宮例、可止其責之由、自太政大臣家基忠〇藤原所被仰下也、早止入部催促之儀、可被注進先例者、依造宮所仰、執達如件、

弘安九年十一月五日　　主典在判

越中國大使殿

〔御裳濯川和歌集背面古文書〕注進

一役夫工米御使雜事用途事

合

一御供用ミ六百文二ヶ日分　　一ヘイレウノ紙二帖
一御ツナヘニ白二升二ヶ日分
一酒直貳佰伍十文　　一秣料ニ白米壹斗二升
一御菜用ミ貳百文　　一御馬四匹ニマタサニ米八升
一米貳□□□ニ引□□　　一□□□□□□□□□
右注進如件

正安四年十一月九日　　武久

土佐國　吾河　遣消息於若宮別當法橋、
參河國　成下文副注文、
備中國　狹尾返　件未濟、早可致究濟之由、含地頭守定、仍又使者申、領家由所申也、
備後國　歌嶋　家濟乍爲地頭、自大炊寮妨之云云、付寮可有其催也、
周防國　津和地　沙汰人行能、相向使辨濟畢、
長門國　親能知行所、令下知畢、
但馬國　平大納言信國、以消息直下知山城守實道、
出雲國　飯生庄　在下文
若狹國　江取　下知旦後局畢
越前國　鳥羽、得光、丹生、北春近　成勝寺執行相逢使、究濟畢由申之、
　藤嶋保　以牒狀觸平泉寺、
越中國　弘田御厨、同加納、　給主惟幸、相向使、可究濟由申之、件所々、任造宮使注文、所々令成敗也、抑此內別紙注分所、廿箇所事、家人知行地內、未請取配符、庄々同分之由分明也、就之尋子細、造宮始之後、至于今不付配符云云、然者非地頭對捍之儀歟、成于今被始催之條、若是爲吹毛歟、就中國々國司、庄々領家者、大略在京也、先被催國司領家者、又可下知國衙庄家、其時號地頭之對捍、直及奏達、又令觸遣事、其理可然乎、以于今不催之所、無分別、家人地頭未濟之由、被注申之條、未知其理矣、
　文治六年四月十九日
六月己丑、大神宮役夫工料米事、信濃國未濟所々相交之由、造宮使言上之間、被差副雜色時澤於使、可催勸之旨被仰下云云、

伊勢國　新屋庄　備前國　西院寺　已上九箇所、以消息別觸申右兵衛督(○藤原能保)畢、
近江國　頓定(○定恐宮誤)　下知親能畢
野間　其所不覺悟之上、不知行之由定綱申之、然者能可被尋也、仍不能下知、
報恩寺　同餘田　究濟由、成勝寺執行法橋昌寛申之、
美濃　蜂屋庄　成勝寺執行昌寛陳狀相副之、此外所々書抄注文、所相副下文也、
上野國　常陸國　下野國　三箇國相副別使者於使入遣畢、抑上野國白井河內分、去年冬使請取之畢、早可被尋請使也、
伊賀國　鞆田出作　非家人知行之所、付本所可有沙汰歟、此外所々、載注文相副下文、
伊勢國　小倭庄　下知廣元畢
岡本　安富　威神院　阿射賀御厨　志禮石御厨　洞田御厨　非知行所、阿射賀、志禮石、雖爲沒取領、自院分給本領主云云、但於阿射賀者、補地頭所也、然者可加下地也、此外所々、注文之上相副下文、
志摩國答志嶋(淳和院)　菅嶋(本宮御領)　佐古嶋　不知行所也、其中菅嶋、佐古嶋地頭不分明、若依爲所々小名、獨不得其名所歟、此外所々下文上、相副請文、
美作國　平大納言信國知行分、地頭前隼人佐康清、古岡北保、(地頭相逢使、辨濟了)
西高田鄉(在下文)　布施鄉(下知親能畢)　西美和(下知畢)　尾張國　侍徒押領　不知行所也、此外所々成下文、副注文、
紀伊國　湯橋　以消息下知熊野尼上
淡路國　國分寺　下知横山權守時廣、　廣田鄉　下知大和前司重弘、其狀相副之、
阿波國　高越寺　下知親能畢

除候畢、家人雜地頭所々事、造營所注文給預候畢、早可令下知候也、且被宣下候ければ、爭令對捍候哉、此中地頭輩、不分明之所々も相交候、早可尋沙汰仕候也、宇都宮、熱田宮、八幡宮御領所役事、尤可然候、可令進濟之由被仰下候上、重可令下知候也、凡背被仰下之旨、致對捍候はん輩は、重て注文にて可令下知候也、朝家御大事に候之上、廿箇年一度之役に候、旁不可致懈怠候也、此事のみに候はず、背宣下旨候はむ輩は、いかにも任法て可有御沙汰、且又隨御定抑て可禁沙汰候也、背君御定候はむ者をば、家人にて候とても、いかでか不被行其罪候哉、賴朝身上にて候とても、不當候はむ時は、御勘當も可蒙事にてこそ候へ、まして家人輩事、不及左右候事也、遠々之間、承及候事は遲延之事候、又不承候事は多候、其間進退恐思給候者也、以此旨可然之様可令披露給候也、賴朝恐々謹言、

二月廿二日

進上　帥中納言殿

四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州〇大江廣元并盛時俊兼等奉行之、其狀云、

内宮役夫大工作料未濟成敗所々事

信濃國　越後國　件兩國未濟、付前國務沙汰人、可令究濟之由、與書狀於神宮使畢、

伊豆國　駿河國　件未濟可致沙汰之由、令下知沙汰人畢、但庄々所課雖支配、不能國使之催促、早定使可令相催庄家也、重計事令下知畢、

河内國　新關、富嶋、三野和長田、　攝津國　平野、安垣、　下知景時處、返事如此相副之、

同國　安富　相尋早河太郎遠平處、件所一切不知行之由申之、然者可被尋之、

同國　武庫庄　美濃國　小泉御厨、椎加納、大井戸加納、　尾張國　松枝保御器所、長包庄、

副進庄園注文壹通

右得彼國司去年十一月廿三日解狀偁、謹檢案內、二所大神宮役夫作料者、二十年一度之重事、諸國合應之課役也、是以不論權門勢家之庄、不謂神社佛寺之領、國內一同所徵下也、須任配符令進濟之處、各募其威、合期難濟、因之經奏聞、申請官使例也、近則近江國、申請官使所令濟也、裁定之處、非无其例、望請官裁、任傍例官使本宮使、共就庄々領家、於京都欲被令催濟者、權大納言藤原實行宣、奉勅除神社佛寺領官省符庄之外依請者、國宜承知依宜行之、

長承三年正月廿日　　少史中原朝臣在判

右少辨源朝臣在判

〔醍醐雜事記九〕廳宣　留守所

可早免除醍醐寺領造伊勢大神宮作料米事

右件寺領所當作米、任天承元年宣旨狀、早可令免除之狀所宣如件、留守所宜承知、不可違失、以宣、

久安六年八月四日

守高階朝臣在判資泰

〔吾妻鏡八〕文治四年十二月廿四日乙酉、權右中辨親經奉書、幷帥中納言〇藤原經房之書狀等參著、是造大神宮役夫工米事、關東御分國々所濟、早可被致沙汰之由也、但其內勅免所處相交云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年二月廿二日丁酉、造伊勢大神宮、役夫工米事、諸國地頭等有未濟之旨、去年十二月帥中納言奉書到著之間、日者被經沙汰、今日被奉御請文云云、盛時染筆云云、

去年極月十二日御教書、同廿四日到來、役夫工米間事、權右中辨親經奉書、謹拜見候畢、知行國々者、先日任被仰下候旨、已令致沙汰候也、其中下總國、以被仰下旨、早可加下知候也、抑御免庄々就先度仰、令除候之處、信濃、越後、上總等國々、可令加免之由、親能下向之度、被仰下て候へば、追文令

四年致授日之構、終成風之功、因玆太政官配符ヲ被下諸國、運上役夫工功粮於萬民、緋之威儀、遠而彌盛而已

〔後二條關白記〕寬治七年二月十四日辛酉、時範來云、伊賀國司令申之旨、伊勢大神宮廿一年遷宮事、役夫工料、東大寺庄園加納田充課之條、美濃國司皇太后宮權大夫所領、已以爲大神御封戸所課、如何、令申之旨理也、件事大事可被行陣定也、　十六日癸亥、外記來云、傳左府(○源俊房)命云、令申陣定候之由承了、件大神宮事也、

〔朝野群載七〕勸學院解狀

勸學院

請被殊蒙天裁、停止爲國司背先例院家所領庄園充課造伊勢大神宮役夫工作分幷臨時雜役、改令勘責狀(○中略)

右謹檢案內、勸學院者、閑院贈太政大臣(○藤原冬嗣)建立之後、三百餘載于玆矣、貧而樂道之士、徵而志學之人、攀文華於廟門之春露、拾義實於詞林之秋風、累代之高材、猶出此處、當時之苦學、亦在個中矣、爰爲支其衣食、爲貢其燈燭、更割諸國所領之庄園、以充多士研精之依怙、是則聖廟之故事、專非院家之新儀、謂其在々之田地、各帶代々之省符、所謂弘仁、康保、長德、治安等是也、而近代國司、乍存此旨、或以收公、或以滅亡、濫吹之甚、職而斯由、抑不論權勢庄園、可勤如此所課之由、依國司申請被下宣旨者、承前之例也、然而至于院領者、更無充課、其趣見先宣旨狀、就中近來修造之、復舊基也、郢越成風、學徒之繼古跡也、洙泗分浪、望請天裁、任先例被停止件等所役者、當時向後、保貢廟家、仍勒事狀、謹請處分、

天永三年三月日　　別當正六位上行大舍人少允藤原朝臣致時

從四位下行左中辨兼中宮大進藤原朝臣

〔中右記〕永久二年二月廿九日、巳時許參院、內大臣(○源雅實)民部卿(○源俊明)源中納言(○源顯通)大藏卿(○藤原爲房)參

太政大臣(○藤原忠雅)被申云、外記勘例、有一紙官符、無次第文籍云、不審尤多、宮司注進、雖非施行文、任時議可爲彼五ヶ國勤歟、就中延暦以後、正殿以下廣大華麗云云、今度雖五ヶ國、其勤莫大歟、(誤○設恐)可被加有勢國歟、但非法支配可停止由、可被戒行事官并國司也、宮司造宮使等勤不可叶歟、

左大臣(○藤原經宗)被申云、就外記勘例急難計申、被比國史日本紀等外、無如此之文簿、次神宮記文、又非無不審、兩方無指證者、猶任御願、可爲國々勤歟、所詮在勅定、只可爲先早造了歟、

内大臣(○源雅通)外記勘例旁不分明、猶可被尋宜方、隆職宿禰不帶文書者、早可被召廣房也、國々勤二代記文急難指南、但雖被付何方、早被造了、最叶神慮歟、可在勅定者、

左大將師長卿、外記追注申例、不見國史、何有八月炎上文、又無十二月宣下狀、疑殆尤多上、近來宮司其勤難叶歟、就彼趣被仰下宮司間、若有辭退遲造營者、空經旬月、此沙汰遲怠、神慮難測、猶被仰五ヶ國、可有早造營歟、

十三日庚午、早旦參御精進屋、奏大臣以下申狀、仰云、諸卿一同定申五ヶ國之上、今度有思食趣、早任延暦例可有沙汰、不日可被造營、其間沙汰、本上卿内府右少辨重方可奉行歟、早申攝政、可下知者、内府被參皇太后宮(○高倉忻子)委申子細、仰上卿之條左大辨雅賴卿母尼、所惱急危云云、有若無者極無便、尋問彼在機、可申左右之由、且遣仰重方許了、　十四日辛未、早旦内府以使被示云、左大辨母堂去夜死亡了、神宮上卿事不及沙汰、日來奉行文書、早奏事由、申定他人可送遣也、馳參殿下、申此旨、先仰左府可隨彼命云云、即諧申御旨、無左右被請申了、歸參殿下申此旨、又參啓皇太后宮了、

伊勢大神宮炎上、中内院正殿以下殿舍御垣門等、早仰伊賀、伊勢、美濃、尾張、參河等國司、宜令造營、先下本解、殿舍以下燒失注文也、今度限内院被仰下也、神宮遣出納盛俊於内府、令請取之直送左府了、在目錄云云、

〔遷宮例文〕夫伊勢二所大神宮、廿年ニ一度之造替遷宮ハ、皇家第一重事、神宮無雙大營也、(○中略)昔尾

記、外記勘文、就何可被行哉、尋問人々、且可令計申給之由可申攝政者、卽參入申院御旨、又依殿仰參廻太政大臣〈〇藤原忠雅〉左〈〇左大臣藤原經宗〉右〈〇右大臣藤原兼實〉內〈〇內大臣源雅通〉三相府、左大將〈〇藤原師長〉亭、

伊勢大神宮燒亡時付神宮被營造事

延暦十年十二月廿六日官符云、太政官符、伊勢國幷大神宮司、五人〈〇五人上恐脫造神宮使五字〉應造物四種、正殿一宇、財殿二宇、御門三間、瑞垣一重、右得神祇官解偁、以去八月三日夜子時、件神宮燒損者、右大臣宣偁、奉勅、宜遣件等人、早速令造者、國宜承知、差發神戶、早令營造、其功食用途、並用神稅、緣被造神宮事、聽使處分、

右注進如件

仁安四年正月十二日　　大外記淸原眞人賴業

寳龜十年八月五日夜丑時、大神宮正殿東西寳殿、及外院殿舍等皆悉燒亡畢、〈〇中略〉因之以同月十五日、被差下勅使神祇大副右大史及官掌等ヲ、先御燒亡之由來、幷所燒亡種々神寳御裝束物等之色目、一々勘記天上奏早畢、隨亦被下官符於伊賀、伊勢、美濃、尾張、參河五ヶ國天、件正殿東西寳殿、及重々御垣御門、外院殿舍等、早速可奉造之由具也、其官符狀偁、以當年正稅官物、應造進之者、仍件五ヶ國司等、各進參於神宮、勵不日之功奉造、卽修理職大工物部建麻呂、少工長上幷五百餘人、各急速ニ奉造旣畢、

延暦十年八月三日夜子時、大神宮御正殿東西寳殿幷重々御垣御門、及外院殿舍等、併掃庭燒亡、〈〇中略〉仍以同十三日被下官符於伊賀、伊勢、美濃、尾張、參河國等、以當年正稅官物、如元奉始正殿天、內外殿舍等、被令造進天、〈〇中略〉

仰云、神宮炎上、正殿以下不日可被造營間、任宮司禰宜等所帶文簿、可被充課五ヶ國歟、將如外記勘申、可被下知伊勢國司等〈〇等恐幷誤〉宮司造宮司等歟、可被計申者、

〔皇字沙汰文上〕大神宮神主

依綸旨注進風宮造營間事

右（○中略）大神宮御造替、可限二十年之條、天武天皇御時被定置之後、聖武天皇御宇天平十九年、諸別宮廿年一度御遷宮可爲長例之由、所被下宣旨歟、加之如延喜神祇式者、大神宮廿年一度、造替正殿寶殿及外幣殿（度會宮、及諸別宮、餘社造神殿之年限准之、）云云、伏考故實、神宮造營料者、以正稅調庸致大厦之構、今。者。爲。諸。國。課。役。終成風之功、雖似有人民之煩費、爲令及慈惠於衆庶歟、廣大神慮、商量爭覃、（○中略）然則早守傍例遂營作、被令致天下泰平御祈禱、（○中略）注進如件、

永仁四年二月廿三日　　大内人（○人名略）

禰宜正四位上荒木田神主泰氏（○以下署名略）

〔本朝世紀〕天慶八年十二月九日辛未、今日召大外記三統宿禰公忠仰云、伊勢豐受宮、去延長四年、廿年一度宮移後、今年至廿年、可有宮移事、仍自先年以大中臣瀧良定其使、給。諸。國。不。勤。正。稅。令。作。新。宮。

〔兵範記〕仁安四年（○嘉應元年）正月六日癸亥、早旦參院、（○後白河）神宮火事（○仁安三年十二月二十一日）就公卿僉議、攝政（○藤原基房）令申給旨、注折紙奏覽、仰云、（○中略）正殿事早被忩造、燒跡可奉渡歟、其勤諸國歟、成功歟、且尋先例、且隨宜、不日可有沙汰、　十二日乙巳、早旦祭主神祇權大副親隆朝臣、造宮司（○司恐使誤）大中臣有長、禰宜荒木田神主忠良、元滿成長等（一二三禰宜等不言上）率來相會、尋問炎上間次第并造宮事等、次引率參殿下、（○攝政基房）但親隆朝臣、自去九日至于此十五日、有輕服日數云云、仍不相具、申入參上并子細、次依仰率參院、於御精進屋内外、以光能朝臣奏事由、禰宜等申云、内院正殿、并東西寶殿瑞垣御門等、可被忩造、但寶龜延曆火災之時、寄。五。ヶ。國。被。造。營。由。注。留、神宮已存其由、且可在勅定、件記文正本、承曆雖燒失、各持參案文、神宮雜事、皆存舊記所行也、大外記淸原賴業眞人、勘申延曆例、件正文在結政長案云云、但雖被尋問官務大夫史隆職、申不分明之由、不注進、有外記無官方之條、殊致不審、仰院宣云、本宮舊

司解偁、伊勢國司移偁、太政官去延暦廿年七月一日下諸國符偁、今案神祇令云、神戸調庸及田租並充造神宮及供神調度、其神税者一准義倉、皆國司檢校者、准據令條、既稱檢校、至于支用、理難專輙、宜國司郡司神主等支度祭料、幷注其殘、申上聽裁者、國司等勘知用帳、封収神物、既違舊例、凡此大神者天下貴社、如是之類元來所禁也、而今准諸神、國司檢收、於事不穩者、右大臣宣、宜依舊例勿預國司者、自厥而後宮司檢納、充用祭料、但物被充造神宮及雜宮之用、所殘數少、祭用有欠、仍更請欠料、卽太政官去弘仁六年六月九日下神宮幷國司符偁、得神祇官解偁、大神宮司解偁、年中神事、雜一可闕、當國神税所殘數少、望請他國神税充用所欠料者、右大臣宣、他國所有、徒積希用、當國所納隨用已盡、縱有要須卒爾何支、宜以他國神税一充年中雜用料、其當國神税毎年儲置、若不得已必可用者、先申後用者、從此國司始亦預納、〇中略望請停煩預國司、令神宮司依舊檢納、豫以支用、濟其祭事、但借請正税充欠料者、永從停止、謹請官裁者、右大臣宣奉勅依請、

弘仁十二年八月廿二日

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

常限廿箇年、一度新宮遷奉、〇中略卽發役夫、伊勢、美濃、尾張、參河、遠江等五國、國別國司一人、郡司一人率役夫參向造奉、

〔三代實錄 四十五 光孝〕元慶八年三月二日癸亥、先是遣使修造伊勢大神宮、是日下知伊賀、伊勢、尾張、參河、遠江等國司曰、適者有太上天皇〇陽成遜位之事、齋内親王出於野宮、暫停屢送神宮之工夫、

〔大神宮諸雜事記 一〕延暦十年八月五日、夜子時、大神御正殿東西寶殿、幷重々御垣御門、及外院殿舍等併掃地燒亡、〇中略仍以同月十三日、被差下勅使神祇少副一人左少史等也、勘記燒亡根元幷神寶物等色目上奏、正税官物如本奉始正殿、内外殿舍等被令造進天、以八月十四日天、其由令祈申給布、

右中辨藤原朝臣判

〔類聚大補任龜山〕文永三年丙寅 大神宮御遷宮奉遷使神祇權大副大中臣朝臣定世、祭主痛眼氣故也、

〔貞治三年內宮遷宮記〕勤行文

奉遷使幷宮司禰宜等

言上大神宮御遷宮勤行狀

右造替御遷宮事、任宣下日時、無爲所令勤行也、仍言上如件、

貞治三年二月十六日

禰宜

大神宮司

少司未補

權大司

大司

奉遷使

祭主〇節略

遷宮用途及役夫

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年九月五日、戌時遷御、奉遷使敎忠朝臣、祭主、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡大神宮年限滿應修造者、〇中略其使供給、充用神稅、丁匠役封戶人夫、粮食便用神稅、若神稅不足用正稅、

〔令義解二神祇〕凡神戶調庸及田租者、並充造神宮、及供神調度、

〔類聚三代格一〕太政官符

應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事

右得神祇官解偁、〇中略檢案內、太政官去延曆廿四年四月七日下伊勢國符偁、得神祇官解偁、神宮

幸行坐、

〔延喜式伊勢大神宮四〕大神宮裝束

九月十四日、粧飾度會宮、十五日奉徙御像、同日粧飾大神宮、十六日奉徙御像、先令祭主申粧飾之状、若祭主有障、令宮司申、然後粧飾、

○按ズルニ、新宮遷御ノ詔刀ヲ奉讀スルハ、延喜式ニ於テハ祭主ノ職務トシ、後代ニ於テハ奉遷使ノ職務ト爲レリ、延喜式及ビ延暦ノ儀式帳ニハ、奉遷使ノ稱ナシト雖モ、王中臣等ノ齋使及ビ祭主ハ、蓋シ後ノ所謂奉遷使ナラン、又按ズルニ、遷宮ノ際、王使中臣使等參向ノ事、延暦ノ後、天長遷宮ハ其有無如何ヲ知ルニ由無シ、嘉祥遷宮ハ續日本後紀ニ辨官派遣ノ事ノミヲ記シ、王使等派遣ノ事ヲ載セズ、蓋シ當時王使ヲ發遣スルコト無クシテ、中臣使ハ專ラ祭主ノ職務ニ歸セシナラン、

〔大神宮司神事供奉記三〕寛元四年十二月廿七日壬子、外宮假殿遷宮、奉遷使神祇權大副隆顯朝臣、是歳官幣雖失事、未及平愈之間、爲御代官勤仕也、宮司大司盛房、權大司長則供奉、

〔類聚大補任後深草〕寶治元年丁未　大神宮遷宮奉遷使前加賀守忠長、祭主隆通故障之故也、

建長元年己酉　豐受宮遷宮依未作、式日延引、同月(九月)廿六日遷宮、祭主遷宮之間不供奉、大宮司先定、依宣旨任式文奉遷之、

〔内宮文永三年遷宮記〕奉遷使參宮事

左辨官下　伊勢大神宮

應令神祇權大副大中臣定世朝臣供奉來九月當宮遷宮事

右權中納言藤原朝臣伊頼宣、奉勅祭主神祇大副大中臣隆蔭卿故障替、宜令定世朝臣供奉彼遷宮者、宮宜承知依宣行之、

文永三年八月廿七日

大史小槻宿禰判

奉遷使

觀應元年十月四日　　神祇權大副卜部兼豐

〔康富記〕文安五年九月十五日、戊戌、詣局務文第、給夕飡閑談、主殿頭參會、外宮遷宮行事所始、明日可被行之處、神宮職事未定時分也、行事辨幸將、職事可被兼帶之由雖申候、行事辨不可兼帶職事之由被辭退云云、　廿一日甲辰、是日內宮遷宮行事所始日時定可被行之由、頭左大辨爲奉行被仰下候處、御修法中、神事例被尋之處、先例不詳之由、局務被注進、仍延引云々、　廿三日丙午、造宮內宮行事所日時定事、造伊勢內宮行事所始日時定也、上卿權中納言藤原持季卿(右衞門督)右少辨藤原敎季、(神宮行事辨也、藏人、)職事頭左大辨藤原俊季朝臣左大史晨照宿禰、右大史高橋員職、(行事)陰陽頭安倍有季朝臣參陣之、外記康繼、雖爲日時定分配所役無之上、內々相語高大史不參、職事仰詞、造伊勢內宮行事所始、幷可奉造始神寶日時令勘申(與)、仍行事所始日時、奉造始神寶日時、書連勘文一通、違先規之間、於當座令書改、爲二通者也、陣儀終之後、行事辨敎季、史員職等、參向神祇官、於北廳有行事所幷神寶始儀云云、

〔寬正造內宮記〕寬正三年十二月廿四日、議合行事、○(中略)造宮使秀忠朝臣、(東御)爲辨代被參、

○按ズルニ、秀忠ハ祭主ニシテ辨代ト爲リシナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事
以十六日、○(九月)御裝束物等祓清(氏)、驛使王一人、神祇官副已上一人、忌部一人、大神宮司共令參入外院太玉串所、○(中略)以亥時始(氏)然卽御裝束物等、皆悉持參入(氏)內院中御門、使中臣、告刀申新宮仕奉(氏)遷奉狀、幷御裝束儲備奉進狀、加久申畢(氏)、使中臣一人、幷大神宮司、御裝束物(乎)令持(氏)、新宮(爾)參入(氏)、正殿御橋下侍、(使中臣、東、大神宮司、西、)爾時大物忌先參上、手付初、次禰宜參上(天)、正殿戸開奉(天)、正殿內四角灯油燃(天)、御裝束具進畢、皆悉罷出、但使(波)外直會殿坐、○(中略)使中臣侍(氏)參入進、玉串御門(爾)侍、令

建久元年九月七日戊午、此日伊勢遷宮、神寶發遣日也、

〔類聚大補任 後鳥羽〕建久元年庚戌

大神宮遷宮〇中略

九月□日、神寶使發遣　辨代神祇伯仲資王

建久三年壬子

豐受大神宮遷宮〇中略

九月□日神寶使發遣　辨代神祇權少副爲定

〔百練抄 十一土御門〕承元三年九月八日、被發遣大神宮御遷宮神寶已下金物等、

〔仲資王記〕承元五年〇建暦元年九月六日乙卯、權左中辨定高母逝去云云、仍左中辨定房朝臣觸母有憚歟、伊勢神寶使可用意之由內々被示云云、然而期日迫三ヶ日了、件事不可叶之由返答了、被催官人、權大副隆宗歟、　九日戊午、被發遣外宮遷宮神寶金物等使、權大副大中臣隆宗、祭主能隆嫡男、副使卜部氏人永友式部大夫家遠代官少史忌部明尚等云云、

〔百練抄 十二順德〕建暦元年九月九日、被發遣伊勢豐受大神宮御遷宮神寶已下金物等使、

〔園太暦〕觀應元年十月五日、官外記匡遠宿禰、師員、淸澄、神祇官兼貞宿禰、兼豐宿禰、明法明淸、明成、章有等、勘文被下之、大祀之事、可申所存之由、被仰下候也、〇中略

一大嘗會條々、被中其沙汰可爲何樣、可注進先傍例事、〇中略

康和二、九、七、伊勢廿年一度遷宮神寶使發遣、辨官皆觸穢、仍神祇伯顯古王以下所司、自神祇官進發、行事左中辨文範朝臣、乍立行事、〇中略

天元四、九、七、伊勢廿年一度遷宮神寶使發遣定、內裏觸穢、依去應和二年穢內遣發例、被行之、因九月、顯古王、於陣外奏遣發之由、依穢不給祿、

文永三、九、一、造伊勢大神宮神寶發遣日時定、內裏自昨日大死、延喜二、應和二、天喜五、所例也、〇中略

右管窺攸覃如斯、〇中略仍注進如件、

少納言敎定、外記以隆等參向、

〔台記〕久壽元年七月一日壬子、酉刻許參內、欲下車之間、頭辨來逢、內覽伊勢遷宮日時、　九月五日乙卯、伊勢神寶(遷宮)發遣、巳刻許頭右中辨光頼朝臣、持來神寶目錄、余(○藤原賴長)取留不返給、有結政請印、(左大辨)內印、(左金吾)被立此神寶之日、諸司廢務例也、而光頼曰、依近代例不廢務者、去々年、被立內宮神寶之日廢務云云、申依近例之由、未得心、先日光頼曰、大納言公敎卿、日來行遷宮事、而有繼母之喪、可改否、仰可改之由、仍左衞門督重通卿奉之、件人忌月也、有憚否、光頼問余、答無憚之由、

〔兵範記〕仁安四年(○嘉應元年)二月十七日甲辰、今日左大將(○藤原師長)參著仗座、令定申造大神宮遷宮雜事等日時、藏人少輔(○藤原親經)宣下、右少辨重方奉行、卽參行事所、始神寶、(○神祇官、中略)

陰陽寮

擇申可被始伊勢大神寶行事所日時

今月十七日甲辰　時戌二點

仁安四年二月十七日　漏刻博士安部朝臣經明(○以下署名略)

六月九日甲午、伊勢大神宮臨時造宮、(去年十二月火災、造宮也、)遷御御裝束幷金物神寶等今日進發、上卿左大將、右少辨重方等、先參著行事所、檢知神寶等、卽調立列、置郁芳門中、(部行事所前也、)次上卿參內、行官符內印事、又有結政請印、次各分給云々、次神祇伯顯廣王、爲辨代參向伊勢、由參內於殿上口奏聞、藏人少輔兼光奏聞之、次賜祿、(絹一領、召內藏司云々、)退去歸向行事所、引率神寶等參向神宮了、次上卿以下分散、今夕可宿勢多驛家云々、行事官右大史三善尙光、史生盛久以下兩三、官掌賴兼等相從云々、此外諸司造物所預、道々細工、其數云々、今日禁中廢務云々、

〔玉海〕承安三年八月廿八日戊子、今日伊勢豐受宮神寶發遣云云、爲來月遷宮也、上卿中御門中納言宗家、辨左少辨兼光、來月依無日次、今日被發遣也、

行事所、滅金塗已了、銅鍛冶二人、依上卿仰所將來也、儻可被拷問者、早可問由仰了、　廿五日、有貞來、上昨日勘問記、(銅細工間事)　八月廿四日、入夜明衆來云、皇居火事之後、廳政始明日欲申行、而依伊勢遷宮神寶進發、先可被行大祓也、而同日政始如何、尋例於大外記之處、分明不見如何、予(○藤原宗忠)答云、使廳政ハ、是爲斷罪也、伊勢事被行日、猶可有憚歟、如此事先例不見者、爲避傍難、後日申行、何事之有哉、大祓是雖非廢務、依廿年遷宮事、爲神寶發遣被行大祓之日、使廳政始頗不穩便事歟、　廿五日丁卯、依有障定催、巳時許參內、先民部卿被參仗座、被行內文、是依伊勢神寶發遣事、今日被立大祓使、官符請印也、(三枚云云、一枚五畿內、一枚京都、一枚宮中者、)　九月七日、己亥、今日午時許、伊勢遷宮神寶使發遣、(辨代神祇權大副資清)　民部卿行內文、(使々官符內印、)有結政請印、(神寶目錄官符請印、)今日諸司廢務、寬仁以往今日有廢務、近代絕了、然而民部卿被申行廢務、上卿民部卿、行事左中辨顯隆、又有大祓、　遷宮之事、委見嘉保二年私記、

長承二年六月十三日、按察大納言參陣、被勘申伊勢遷宮行事所始日時、今日云云、行事右中辨公行等、神祇官始之、史敦隆、右中辨公行來、被尋問行事所始事等、　九月七日戊午、今日伊勢遷宮神寶金物等進發、上卿按察大納言實行卿、行事右少辨俊雅、本右中辨公行、此十餘日之先有障之替也、先有結政請印、宰相中將宗能、少納言知信奉仕、上卿行事辨、行向行事所、神祇官被出立云云、人夫不叶、依從院(○鳥羽)被仰受領檢非違使等、催人夫遣云云、

〔本朝世紀〕仁平二年六月十四日丁丑、未刻權大納言宗能卿參入、被定申伊勢大神宮遷宮日時、以神祇官爲行事所、右少辨資長、左大史三善良康等參入、　八月十日壬申、申刻權大納言宗能卿參入、被定申伊勢大神宮遷宮神寶奉遣使、幷大祓、御竈神渡御土御門新內膳屋之日時等、　九月八日己亥、今日伊勢大神宮遷宮神寶使、自神祇官發遣也、仍廢務、神祇權大副大中臣親章朝臣、及辨代參內、辰刻、右中辨光賴朝臣、左少史中原知盛、著八省東廊行之、參議遲參、外記同之、權大納言宗能卿參陣、行內印事、少納言敦宗、權少外記大江以隆、右近衞將監中原重象從事、又有結政請印事、參議資信朝臣、

云、十五日、伊勢遷宮神寶使、伯幷史等入京云云、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁三年九月五日戊午、被奉遣伊勢大神宮廿年一度遷宮御裝束神寶等、使神祇伯秀賴王、依辨代也、

〔小右記〕治安元年九月八日庚辰、今日豐受宮神寶發遣、自神祇官云云、行事道方卿、右中辨章信、(章信初行事、依輕服、被替他辨、而被又服、其他辨皆服、仍除服後、知元以章信爲行事云云、〇又見日本紀略)

〔春記〕長久元年九月七日己未、未時許、遷宮神寶使神祇官權大副(代辨)參被陣下、藏人資成奏事由、即給大褂一領、如例、今日彼宮遷宮神寶等被發遣也、無他事、又如例、　十七日己巳、今日諸卿多參入云云、權左中辨義忠朝臣云、伊勢豐受宮遷宮神寶皆奉遣也、吏口季賴、今日歸參申云、神寶中有瑠璃匣、件物等渡神人了之後、神人等披見間、件匣中五六尺許神蛇蟠入、不知其入之時、尤神靈也、希有事也者、

〔大神宮諸雜事記二〕天喜五年九月十三日、宮莊覆勘使參下、勅使辨代神祇少副元範、左大史中原師範、史生官掌作物一門(〇一門二字恐所字誤、)長上等、依例一々勘了、覆勘又了、

康平二年九月十二日、宮莊使參宮、辨代從五位下行神祇少副大中臣朝臣公輔、右少史惟宗朝臣員國、史生官掌木工長上等任宣旨奉莊、兼又覆勘畢、但正殿(乃)金物、幷四面高欄、御階男柱等、今度初所被奉莊也、元範朝臣爲造宮使所被申加也、

〔中右記〕永久二年六月朔日、今日民部卿參仗座、勘申伊勢遷宮行事所始日時也、　十二日、今日有伊勢遷宮行事所等始云云、以神祇官爲行事所、是先例也、上卿民部卿、(俊明)行事左中辨顯隆著行云云、

裏書

伊勢遷宮行事所、近代上卿不參、今度民部卿被著行也、按此事自本儲上卿座、何事之有哉、就中往年上卿著行云云、

廿七日、今日民部卿著伊勢遷宮行事所、神御衣事被沙汰始之、　七月廿四日、有貞來申云、伊勢遷宮

不可延日、　九月六日辛酉、於建禮門大祓、以明日可發遣伊勢大神宮御裝束神寶使也、　七日壬戌、依伊勢大神宮遷宮奉神寶等、（廿年一度、諸司廢務、）依內裏丙穢、自神祇官進發之、

〔日本紀略（七圓融）〕永觀元年九月十日壬戌、奉遣伊勢大神宮廿年一度御遷宮神寶、仍於八省院大祓、

〔日本紀略（十一後一條）〕長保二年九月五日己卯、大神宮神寶使官符、今日有大祓、依被獻神寶也、　七日辛巳、依發遣伊勢大神宮廿一年一度御遷宮神寶使、諸司廢務、件神寶差辨代神祇伯秀頼王獻之、宣命神祇式之文也、內記不獻之、

〔本朝世紀〕長保四年八月廿八日辛卯、有政、中納言藤原時光卿、同公任卿、權中納言同齊信卿、參議同有國卿、源俊賢卿、著左衛門陣座、召權少外記小野五倫、仰云、今日可請印伊勢豐受宮遷宮祓官符、而著座參議兩人、依爲故東三條院（○圓融后藤原詮子）院司、給素服、仍有憚、參議藤忠輔卿可參由、昨日以召使定催畢、而有其障歟者、五倫申云、昨日未剋許、自左大辨（○藤原忠輔）里第差使被申云、釜下犬產子、其中一犬死畢、只今見此事、仍明日可難參者、申此由畢、爰著廳之後、以召使被仰可曳祓官符之由、番口主史生佐伯爲正、曳件官符、被行遣官符請印畢、其後著右仗座、次右大臣（○藤原顯光）參議藤懷平卿、菅原輔正卿、著同座、令懷平卿、少納言藤兼親、少外記慶滋爲政等、於結政行祓官符請印畢、是來九月七日爲下神寶所被營行也、　九月六日戊戌、休也、但伊勢豐受大神宮、廿年一度御宮移神寶使明日可立、仍於建禮門前有大祓、　七日己亥、伊勢神寶使立、仍廢務、

〔左經記〕寬仁三年九月四日丁巳、參結政所、无政、事畢參陣、（左右大辨權辨同被參、）四條大納言（○藤原公任）被參左仗、被行內印事、（伊勢遷宮使以下差文一枚、）事了左大辨（○源道方）於結政所被行請印云云、（同遷宮文、）又先是右大辨被著建禮門大祓所、是明日依被立遷宮神寶使也、及攝政殿（○藤原賴通）御宿所言談數刻之間、公業朝臣申云、木工頭周頼（○賴通從兄弟）昨日死去云云、依爲明日神事、今夜忽令退去給、依可有御服也、　五日戊午、今日依遷宮使立、諸司廢務、使神祇伯令史卜部一人史生官掌等云云、又內匠寮作物所等雜工衛士等下向云

然之旨面々被申之、仍荒祭宮絹垣行障料絹、道敷布、役人等之明衣布、取替下行、

〔文政正遷宮記〕文政十二年九月朔日、同日未刻、讀合行事、神主中（東帶）權一禰經寛、二禰經得、（衣冠）物忌父、政所、作所代、（東帶）清酒作、酒作内人（淨衣）等、木下道より參進禰神之前列立、辨官代、（祭主（大中臣光惠）束帶）宮司長祥、史、（著朱朽葉色衣冠）史生、（行事官衣冠）左右官掌、（六位狩衣）一鳥居より參進、二鳥居にて御鹽大麻有之、

禰宜已下石壺著座、拜如常、禰宜宮司齋王候殿西戸より入、辨官已下、本宮石壺再拜兩段、（宮司も同拜）次北戸より入著座、

次上使、（畠山）警固使、（鳥羽）造宮奉行、（牧野長門守）各（下﨟上）參進、二鳥居にて御鹽大麻有之、次齋王候殿の南方を經て、同殿東方假屋に著座、（北上西面）

清酒、酒作内人等、辛櫃を殿外北方に立並ぶ、（職人相添）清薦を殿の中央に敷、官掌二人（代官二人）士西方、（南北對座）宮政所大物忌父東方、（南北對座、木尺を持つ、）職人辛櫃を舁き來り、蓋を清薦の上に仰向置、其上に裝束を出し置く、作所代定統、送り官符を懷中より出し讀上す、其式目に隨ひ、次第に御裝束を出す、宮政所裝束の中を開く、大物忌父木尺をもて量る狀をなす、一々積置終而、如始辛櫃の中に納め、殿外に出す、（職人舁出）次神寶同上、（讀上に隨ひ次第に出し、檢知政所の役なり、）畢て禰宜如始本宮石壺に著し拜伏、次祭主宮司再拜兩端、各起座、次荒祭の南、外幣殿西方對揖小朝熊等拜如例、禰宜一鳥居南（南上西面）列立、于時七ッ時に及ぶ、

〔大神宮諸雜事記〕一朱雀三年九月廿日、依左大臣宣奉勅、伊勢二所大神宮御神寶物等於差勅使被奉送畢、（色目不記）

〔日本紀略〕四村上 應和二年八月廿二日丁未、宮中觸穢、仍立札於陣、伊勢大神宮遷宮事、依穢延日之例、大外記傳説、勘申天慶六年大神宮遷宮、同八年豐受宮遷宮例、令仰云、件穢不可及神祇官、然則改使

歟、亦先遂行遷御、任先例追而令注進、假殿遷御被行、可被奉餝替歟否、擬評議之處、官史等申云、今度遷宮事、雖有違先規事、無爲可遂行之由被成御書畢、先規奉成遷御、追而可被注進之由申間、其分治定、〇中略 但肝心屋形文御被相違珍事也、亦玉纒須我利御大刀、餝形輕微、口輪以下非金、依不足不請取之、〇中略 廿五日相殘讀合、如作日之行事、但今日者、辨代權大副大中臣朝臣敏忠被供奉、如昨日、以兩人讀合、御金物內、打物無等閑也、鑄物麁惡以外也、大略滅金不捺歟、亦御鏁不足、御餝無之、殘鐵鏁等以外間、細工等可直進之由令懇訴、亦御矢根大略竹指、以外沙汰共也、申下剋計讀合畢、各退出如昨日、〇中略 同夜行事官氏益、由城備後守親治、令同道、予之宿館來云、今度諸役人等之明衣絹布、並荒祭宮後鎭祭祭物等事無用意、先爲神宮被引替在御沙汰、被遂遷宮節者、於京都可申沙汰之由申也、請文出、彼請文云、

就御遷宮、今度注被申候明衣之外、重而明衣之事承候、有子細事候者、被下行之由事、可致申沙汰候、然者以此旨、諸役人御中可被仰渡候、

一荒祭宮後鎭祭物事、以御引違可被遂其節候、追而自京都可致申沙汰候也、仍請文狀如件、

寬正三年十二月廿五日　由城備後守親治判

行事官氏益判

內宮官長殿

亦色々麁惡子細等、悉可直進、次又玉纒須我利御大刀奉拵直畢、旅宿用心怖畏不少、以別段之芳志、只今可請取之由懇訴、又備後守同被相憑之間請取畢、件大刀餝形飾以下古以金分作、今度餝計、如形輕微沙汰依憤履刀歷巾放、少々拵直之由在其沙汰、御裝束御神寶御金物等悉渡畢、神宮承知請取ヲ取テ爲上洛事每度之例也、然條々依難辨沙汰歟、今夜夜半計忍透上畢、仍相延遷御、可注進歟否、衆儀伺之處、今度之不足等雖測神慮、雖有違先規、子細無爲、可遂行遷御之由、被成奉書上者、延引不可

一十五日御金物行事
行事官三人淨衣、巳刻參宮之間、憲雅實俊通時神主等、如昨日參候新宮瑞垣御門西腋、自齋王候殿
奉舁入、去夜安置御金物御辛櫃之處、所付之封令相違之上、鼻栗之結、又以同前、所納之御金物、非無
不審之由申之、如憲雅等申者、行事官宗清、于時黃昏書封、以從僕等付之、皆悉荷之、運送齋王候殿、今
被不審本宮職掌宿直輩等歟、早開御辛櫃、可被見知納物入目錄、万一令紛失者、召彼此可有其沙汰
之由、本宮奉行憲雅神主等令申之處、納物員數不違云云、荒涼申狀、甚無其謂歟、兼又行事官等、任本
樣文計預御金物等本宮奉行人等、可退出之由雖申之、於令遂失者無人于問答、金物奉仕之間、相共
可有其沙汰、隨實治御造營之時、爲一同之奉行不可請預之旨依令申、兩方相共致結解、散用錄在所
員數、而御形御金物事、代々送官符雖不載之、以鏡形金六十八枚、小鋪四十四枚、兩方奉打之、其外御
戶冠木內外二枚、端折立之金、寸法不足之間、冠木之厚績二枚打之、至冠木行折立金者、依無便宜之
金、不令續延之上、御階長押左右端金寸法、同不足之間、尋出別之金、所令奉打也、其後御戶御金物之
間、宮廳舁殿、加見知被致奉行、至御鏁御鎰者、入御鎰櫃納外幣殿、又宮廳退出之後、任色々座次置居
玉、兼又造宮所沙汰、內院掃除、沙石運上、可爲終夜之由雖被申之、御金物奉仕之後、數萬雜人、自由參
入、依有事恐、可爲未明沙汰之由加評定、瑞垣御門固之、北御門差鏁畢、因玆造宮所奉行人等、持置沙
石瑞垣御門之外、早朝可進入之由所令申也、又寶殿御倉御鏁幷行事官封納辛櫃等、奉納御稻御倉、
爲翌日沙汰也、

〔寬正造內宮記〕寬正三年十二月廿四日、讀合行事、○中略一御韓櫃自南御門、自餘自西入重疊南、以東
爲上、南北並立、件御裝束以下、於祓所石壺有大祓御鹽湯例也、然今度無其沙汰、卜部不下向故歟、於
神宮、不及沙汰之條誤也、○中略尙重神主、以古送官符文御金物請取、新十氏綱神主、同帶古送官符相
副、爰屋形文錦御被、先規織並六文之處、五文半織進、云員數云闕文、旁以神慮難測、遷御相延可注進

物忌父久清、弘國、尙國、有久、彙元、光弘等、奉出御裝束加拜見、以鐵尺指寸法、自餘御辛櫃一々拜、後々不指寸法、又御神寶御辛櫃、召道々細工、任式目加見知、其後御金物御辛櫃等、瑞垣御門內西脇奉舁入之、行事官等參入、憲雅神主者、帶寶治記文、實俊神主者、帶安貞送官符、任次第先奉出千木金物、可被奉打之由致沙汰之處、件御金物、非當宮之本樣、爲外宮之本樣、仍寸法違失、依不相叶、俄召鍛細工等、以二頭代松永、取千木前之寸法、或切、或除、或續延、奉粧付訖、是新奉造直之條、依可日數相迫時刻推移也、其間七禰宜尙良、八禰宜經雄、自御子殿參入、相共見知、其後甍覆泥障板、左右喬金、同令打之處、二尺餘一尺餘不足之間、續目之所、重爲過分歟旨、行事官等依加疑難、尋問工等之處、不然之由申之、此上不審之間、彼甍覆泥障板之寸法、本樣文與、當時奉作、召工等、令交量之處、本樣者短、御材木者長、就本樣造之、金物不足、爲道理歟、其上同甍覆泥障板、左右端打立金、又以不足、云彼云此、引越蟬榖下金幷自餘御金物、所奉打也、凡者如此重事、尤可有用意沙汰之處、依無其儀、及此煩歟、隨寶治御造營之處、被增分歟之間、敢無不足沙汰之上、謬被送餘殘御金物於本宮之由令申之處、行事官等信伏、如被申狀者、本樣使下向之時、尋御材木寸法於故實良匠、皆悉於令注進者、雖聊非可違、爲後代宜有其沙汰歟云云、又如松永申者、東西寶殿瑞垣御門千木金物等、同于正殿不可被打、明日令糺直者、定令滯渟歟、今夜可被支度、然者帶御金物於里宿、松永相共可加見知、評定之由計申之間、爲神爲朝、有忠有功之旨、行事官等、殊所令褒美感歎也、又辨代參宮之時、祗承御麻御鹽湯、先規在之歟、依無催促不及沙汰、抑所殘御金物、任寶治近例、自行事官之方、可奉守護之由令告知之處、卒爾下向、從僕窮屈、可然之樣可申之趣、一同懇望之間、卽披露子細於宮廳之處、件御金物御辛櫃等、運置齋王候殿、差下部等、可有宿衞沙汰之由被申之間、行事官等咸悅以所從等、荷御辛櫃、付封安置彼殿、戌刻許令退出了、彙又行事官等早參以前、猶以稱可被相怨、御垂木端金八寸八枚、螢目釘三百五十二隻、預置工等畢、○中略

（母寡）自一無參宮、亥時許讀合畢、神財等或奉納御倉、或安置御子殿、御辛櫃等皆以奉納御倉、其間宿直人等殊所祇候也、錦幷色々玉銀水銀色革等、稱用殘送之、（自行事所送宮廳也）各坐皆殿內敷滿筵、其上敷半帖、也、抑伊雜宮御裝束中（其物色可尋注）不被下之、仍憖可被調進之由、令申行事史畢、又御衣宮入帷同被調落、仍忽調進之、

〔內宮文永三年遷宮記〕文永三年九月十三日、御神寶御裝束御金物御辛櫃等、酉中刻參著宮中、占部勤仕御祓、奉舁置河原殿一殿、而今夕爲讀合、辨代神祇伯（輔雄王）被參宮之處、行事官幷道々細工等、令寄宿岡田納米綠邊之在家云云、仍立使者可參之由被相催之處、供給雜事等于今無沙汰、食事以後可參之由依申之、齋王候殿之內、任例敷儲鋪設、宮廳以下讀合役人、常親神主各々參著之處、經時刻及深更之剋、重觸申辨代、催促史生之處、史生縱雖令參、道々細工等於爲不參者、神寶式目、金物員數、無人于指南、可爲朝就之旨依申之、辨代被退出外、禰宜延房神主里宿、衆至御神寶參著之時、行事官等、可賜宿直之旨雖申之、讀合以前、本宮宿直不相應之由、被返答之間、自行事官之方所奉守護也、

一十四日御裝束讀合行事

辨代史生遲參之間、（午剋許）宮廳讀合役人常親神主等、進參于新宮齋王候殿、加催促之處、小時二三五六七八禰宜史生宮掌等參會、其座辨代北座、東上南面、（自東方二柱）其次史、其次史生官掌神祇官南座東上北面、宮司（公行）南座、西上北面、禰宜東座、北上西面、讀合役人西座、東面、長筵宮半帖、但史生等長筵許也、各束帶著座、揖拜之後、史生入送官符於覽宮蓋、持參宮廳、宮廳召讀合役人、役人進參跪賜之、歸著本座、其後御裝束御神寶御辛櫃、八重疊之南、以東爲上、奉舁居之、然而辨代猶以遲留、雖不被相待、忽爲奉打御金物、且可有其沙汰歟之由、宮廳被計申之處、如勅定者、不待遲參之輩、可致沙汰之由被仰下之旨、史生令申之間始讀合、張賦金百卅二口、依爲送文之最前、計之請取之、其後一御辛櫃、辨代與宮廳之中間（東第一之間）奉舁入、以覆筵四枚敷之、一枚南北、二枚東西、一枚縱目上也、其上置御辛櫃蓋、

廳舍、（盛俊神主所記置也、）而盛言終以不退、辨代被宿四神主館、（元雅神主、）是爲長官沙汰所被借儲也、不被宿一殿之條、非招異儀哉、只勞風病云云、自餘使之宿所、任承安仁平之例、所被致沙汰也、件宿所幷舊居供給宮司沙汰也、

十二日癸亥、今日有神寶讀合、先可參集之由有其催、於新宮御子殿行之、（先例於忌屋殿南方行之、而近來於此殿有之、）先禰宜（東寶）參、（參本宮神拜之後、參向新宮、）次辨代被參、長官奉幣、（私）參會、被進御幣紙幷神馬等也、神拜畢、被參新宮、長官自西御門被參、辨代自南門被參、其間傍官禰宜、徘徊御子殿東砌、辨代被著御子殿、其座北方、當于自東第二柱、筵上敷半疊、（紙緣）忌部占部南座、（第三間副壁、筵上半疊、）占部東方、忌部西方、（北面）次禰宜參入、（先入自末座、自東間副壁入也、依爲辨代座上、六頭筵爲便宜之體、是先例也、）其座東壁之副也、（北上西面、但六七副南西折居、筵上半疊、）次宮司參、（入自西間、）南座、（第二間西上北面、筵上半疊、）各參集之後、神寶可奉渡之由被催行事宜、只今奉渡之由云云、其後良久自行事所申送云、任先例可被行列也者、辨代被答云、雖不然同事也、先例不一樣、隨又有雨氣、可奉急渡者、重又申云、於辨代者有限、其外何不行列哉、不被相向可爲違例、不可奉渡者、仍忌部占部悉以相向、即神寶等奉渡御辛櫃等、入重榊石疊之前幷立、（東上、）史盛言參入、北座、當于第四柱、著、（南面半疊、）史生等著其次座、（不敷半疊、筵計也、）讀合役人範朝神主、（東面、）晉候西壁之副、雜役人等（物忌代是也、）同候之、先一御辛櫃舁入立三間、（東西行立之、）于時史召史生、可進送文之由仰之、即自御辛櫃取出、置覽筥蓋、獻一神主、（史生持參、）一神主召範朝神主、經御辛櫃北方進參、膝行給之、左廻還向、著座讀之、（其座第三間、自御辛櫃四方、當于中間、敷半疊、筵上也、）先帳張肱金百卅三口計分奉納外幣殿、依爲送文最前之物也、史生良直、相具金物參內院、五七神主相具參、忠宗行親範實神主等同相副也、忠宗神主殊依爲故實之者也、先自千木奉飾之例也、御裝束等一々拜見、其儀先御辛櫃覆筵四枚敷之、（一枚東間南北行敷也、二枚其西方東西敷、一枚二枚縫目上敷也、）其上置御辛櫃蓋、其上奉出御裝束等也、其役者有範神主、（布衣）玉串貞成（衣冠）等也、（是物忌代、）御裝束隨讀合一々拜見、任見在合點、忠兼神主以承安送文見合之、（爲勘新古相違也、）讀合畢之後、辨代被退出宿館、其後又忌部占部退出、一三同退出、二大夫與予始終候之、四大夫（元雅）依故障、

〔神祇官年中行事臨時〕一本官差進使事差文公文史生書上之長官加署

大神宮御遷宮

辨代伯、或中臣官人、史代忌部卜部同本官、史代卜部忌部官人氏人同勤之、

同三ヶ國祓使同三ヶ國治祓、近江伊勢神宮、

五畿内一人、

三ヶ國一人使五木一人、三ヶ國一人、

〔新儀式臨時四〕伊勢大神遷宮事

大神遷宮之事、依式歷廿年行之、○中略至于其年七月、令造神寶幷御裝束、九月上旬造畢、撰定進發吉日、先一日行大祓、諸司齋幷三日廢務、或不齋、代々例不同也、行事辨官參入、令奏發向之由、辨官若有障、神祇伯參向、天慶五年豐受宮例、幷康和二年內宮例是也、即給祿下遣、若內裏有觸穢、不參而直參下、歸參奏聞事由、

〔建久元年內宮遷宮記〕建久元年九月十一日壬戌、宮飾使參宮、祇承檢非違使眞經、成高、辨代神祇伯口口、忌部口口、占部口口、行事官右大史中原盛言、神服行事右史生三善友成、神寶行事官乃永國、同笠國光、金物行事右史生紀良直、本樣時下同史生鑄金行事大江信弘、本道行事中原國元等也、先於祓所在御祓、占部勤之、其祭物宮司所課也、而依欠如自本宮送之、但被助成也、不可爲例、祓畢之後、各爲神拜參向、祇承宮掌二人、衣冠御麻御盥湯等供奉、各神拜畢、辨代被著一殿、戶東方引坊願也史宿所同殿西方儲之、辨代被著之後、禰宜衣冠對面、辨代與坐、禰宜端坐、占部成衡云、禰宜衣冠之條如何、上東帶之時不可然之哉、頗不相應事歟者、禰宜等答云、神宮事皆存先例、仍著衣冠、若束帶之條其例候哉、然者承其例、自今以後可存其旨者、占部答舌不答、其不知子細之所致歟、頗可謂尾籠、又辨代云、與史同宿之條如何、壬子伯爲辨代之時、史宿所爲隔舍之由先例分明、今度次第違例也云云、爰史盛言進出云、同宿之條先例也、全無別宿例者、然而如舊記者、實壬子伯爲辨代之時、於行事史者、爲別宿之由分明者也、近例承安之度、伯爲辨代、史宿

寶德三年十一月八日癸卯、晩向官務亭、面謁被談云、造外宮本樣使事、今日可有沙汰也、行事充未致沙汰、年內可有行事充、行事史者、故高員職也、壬生被沙汰之後未補云云、又造內宮方事、未無其沙汰、其も年內要脚到來者、行事充事、可致沙汰候、於外宮者、員職替可申付通音(右大史使ハ己)分也、於內宮行事史者、可申左端史殿之由被語之、內宮ハ(本樣)下向事畢、造替方者、大略下行也、未下不多、自今以後者、內宮神寶事可有其沙汰云云、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

新宮飾奉使官少辨已上一人、史生一人、鍛冶長上一人參入、賷塗銀釘九十六隻、(御床三具料)幷雜金物等、正殿飾奉、

新宮御裝束用物事

太政官大史一人、史生一人、神祇官大史一人、史生一人、賷持御裝束物一百三十六物、漆韓櫃八具、太輿籠三具、禰宜內人物忌等明衣一百五十二具、

〔延喜式〕(四伊勢大神宮)造神寶幷裝束使

辨官五位以上一人、史一人、史生二人、官掌一人、神祇若諸司主典已上可堪事者四人、史生四人、女孺廿一人、仕女二人、雜使六人、雜工六十三人、自外應供作雜色人等、隨事喚攝多少堪濟、其女孺以上各給明衣、男各絹四丈五尺、女一疋一丈、雜工以上男各布二丈六尺、女二丈、五位以下大膳大炊依例供給、七月一日神祇官西院始行事、○(中略)

右裝束雜物造備、訖即差使辨大夫一人、史一人、史生二人、官掌一人、使部二人、神祇官史一人、史生一人、神部一人、卜部一人、部領送大神宮、其擔夫皆給桃染衫、

凡大神裝束應送伊勢者、預先宮中祓潔、亦差中臣氏、遣京畿內及近江伊勢幷大神宮司、(左右京一人、五畿內一人、近江伊勢一人、神宮司一人、)預同祓潔、(豐受宮准此)

たび、五千貫になさる、今度又三千貫になさる、間、御裝束已下麁惡たるべし、諸道之をなげき申
云云、

左辨官下二伊勢國幷大神宮司一
應下早速勘二錄言一上神寶幷神殿金物等上事
使左史生紀氏彙　從參人
造物預紀行光　從參人
銅細工大中臣助村　從參人
藤井宗弘　從三人
木道橘助次　從三人
鑄物師藤井淸光　從三人
藤井貞末　從三人
使部二人　從各壹人
右、內大臣宣、件神寶幷神殿金物等、舊記所レ載自有二相違一、仍爲レ令レ勘二錄本樣一、差二件等人一宛レ使發遣如レ件、早任二先例一令レ開二見本樣一者、國宮宜承知依レ宣行レ之、使者經二彼之間一、依レ例勤二供給一、路次之國、亦宜レ准レ此、官符追下、
元亨三年五月日　右大史安倍朝臣判
右中辨平朝臣判

〔康富記〕文安四年十二月廿九日丁亥、高大史員職語云、今年伊勢大神宮造替、行事方本樣使諸道輩可二下向一候處、依二公方要脚不足一令二延引一了、式年延引不レ可、然之由、武家奉行開闔等申沙汰之間、以二山門禮拜講御料足一先被二引違一被レ下二行一之由にて、本樣使年內發向之分被二治定一云云、神道聊爾之至如何、

已上

米二石五斗　従料代錢百六十八文　秣代麥四斗　芻代錢五十文

一祿物

史生方八丈絹三疋代三貫文

造物所方六人、各凡絹二疋充、（代錢三百文）

使部方二人、各一疋、（代錢百文）

右奉送如件

在年號月日　作所名字

件供給、宮司二ヶ度、作所二度、致其沙汰也、

宿料用途作所沙汰也

別記云、道々細工、各凡絹六疋充云云、

〔建久元年內宮遷宮記〕五月一日甲寅、（○文治六年）於內院有本樣沙汰、予今日參拜、史生等候西寶殿坤角柱許、宮司禰宜候御殿北方、是先例也、然而炎旱之間、退之候西方、忠衡神主幷物忌末貞等（衣冠）參昇西寶殿、奉出神財等、奉移本樣、（御鏡宮、同可被移本樣、今度不注之、于御存知云云）午刻許、大司參詣、（○中略）番文沙汰之後、大司參拜本樣沙汰之所、當時奉移金物本樣、宮司禰宜候瑞垣御門下、（北面東上）忠衡神主候其西方、（副瑞垣也）史生等候其西方、本宮工等候御殿西方、（對史生）不審事等、隨被尋問、一々稱之、　二日乙卯、本樣檢注文加署畢、抑史生良直、殊稱有御氣色、造宮勤否注之、

〔寬正造內宮記〕正月十三日、（○文安五年）本樣使夜前下著、（○中略）今度供給雜事依無沙汰、宮司之乘馬、本樣使方於大庭質取、仍可致沙汰之由懸望、然者可為拾貫之由申、馬返畢、

〔元亨三年內宮遷宮記〕今度ほんやうし物語申、御神寶ようどう、せん〳〵七千貫たる所に、嘉元の

〔兵範記〕久安五年十月十六日甲子、依召早旦參御所、女房仰云、可爲移姫宮御骨造立仁和寺之御堂事、月來左中辨朝隆朝臣被沙汰給、而依大神宮役夫工事奉行、信範可令沙汰者、

仁平三年十月十日乙丑、右中辨光頼朝臣役夫工行事、權右中辨光房朝臣年來病惱、右少辨資長雖行長奉送使、去朔比歸京、去年去々年下向之上、依勤伊勢使役有恩免云云、

〔一位殿御記目錄〕康永十、五月廿六日、有召御參持明院殿、外宮役夫工上卿可存知之由、以三位局口口被仰下事、　十三日、造外宮行事所始日時定御參事、　廿一日、造宮上卿事、　廿六日、造宮上卿宣旨、持參事、

〔政要錄 二〕山田奉行職掌

一内宮、外宮兩大神宮警衛として、二十一年目ごとに、御遷宮之節、御造營奉行、例年九月十六日、御神事之節、御神事奉行たり、是御役之第一也、〇下略

〔常憲院殿御實紀 十八〕元祿元年十月十五日、山田奉行大島出羽守義近、伊勢兩宮の修理奉行命せられ、いとまたまふ、

〔遷宮例文〕廿年一〇謂式年、第二十年暮秋九月御遷宮

本樣使供給事

應早速勘錄言上神寶幷神殿金物等本樣事

在宣旨、大宮司禰宜史生道々細工等、任先例參内院、奉寫本樣之後、本樣注文加署畢、

奉送供給代米事

已上

米二石五斗　從料代錢百六十八文　秣代麥四斗　蒭代錢五十文　料紙代錢百廿三文

又、供給代

大夫史殿

件事、藏人大進仰之云云、下官書此狀下大夫史、大夫史各別注三枚宣旨、給作人々了、

仁安四年〇嘉應元年四月廿六日庚子、上卿左大將〇藤原師長昨日被申云、奉行伊勢遷宮事宣下、借官賞私悼思給、可隨御定者、仍被尋先例之處、大外記賴業勘申云、

伊勢遷宮上卿辨仰諸社行幸借官賞例

嘉保二年三月廿九日石清水行幸、上卿權中納言藤原卿、知足院入道殿於社頭召右中辨宗忠朝臣、件辨大神宮遷宮行事、被仰勸賞事、辨居借座上宣下、

大治五年十一月四日日吉行幸、右少辨宗成、仰借官勸賞、件辨、大神宮遷宮行事、

長承三年五月十日石清水行幸、上卿權大納言實行、仰借官勸賞事、

件卿、豐受大神宮遷宮奉行、

依是等例、無左右被奉行了、

件人、大神宮臨時造遷宮行事也、元又爲神宮上卿、

〔康富記〕寶德二年五月廿一日甲子、右大史高橋員職今朝卒去、五十二歲也、自去八日疫疾也、一兩日爲赤痢云々、不便々々、息男俊職童名同法師子十一歲右少史也、就之六位史彌爲無人、於今者右大史通音、左少史俊職、右少史康純、只三人也、神宮兩宮御遷宮近々也、行事史爲闕如、隼人正令兼任大史給者、可然之由種々被誘之、局務可然之由有口入、　三年十一月廿七日壬戌、來月月次祭已下、來廿九日大原野祭等事、同令下知了、不及遣折紙、略儀也、

常ノ杉原ヲ二枚續テ、立紙ニ書之、又一枚折紙ニシテ、實名書之、案見左、〇中略

德大寺大納言公有卿造內宮行事上卿、書籍申除之、

正親町大納言持季卿造外宮行事上卿也、書中除之、

長承元年九月廿四日辛巳、今日院〇鳥羽有御幸宇治平等院、〇中略新大納言實行卿雖參仕、於途中依爲伊勢遷宮上卿留、依不可入寺中云云、　十月七日甲午、今日白川九體丈六新阿彌陀供養也、〇中略留守源大納言師頼卿、左少辨公行、依伊勢遷宮行事歟今夕詔書、上卿源大納言云々、新大納言實行、依伊勢遷宮行事不入寺中、行幸之間又遲參云云、　二年八月廿一日、今日可被行仁王會之由雖被仰下、依無行事辨俄延引、本行事右少辨俊雅也、而伊勢遷宮行事右中辨公行、依輕服出來、以俊雅被渡遷宮行事之故也、

〔本朝世紀〕久安五年十月六日甲寅、權大納言藤原伊通卿參仗座、口左中辨藤原朝隆朝臣、令勘伊勢大神宮造宮山口祭日時、件事造。宮。上。卿。大納言宗輔卿可奉行也、而依所勞今日不參、

〔兵範記〕仁安三年九月廿八日丙戌、權大納言公保卿參著仗座、藏人大進光雅、仰造大神宮役夫工可令勘申山口祭日時由、上卿仰左少辨爲親、令陰陽寮勘進、十月廿七日次內覽奏聞、次給辨、被下造宮司親俊云云、　廿九日丁亥、大納言定房卿賜宣旨狀、

以權大納言藤原朝臣、左少辨藤原爲親、右少史大江章重、令行伊勢大神宮遷宮事者、下官〇平信範給之、下大夫史、

宣旨中宮權大夫

權大納言藤原朝臣

左少辨藤原朝臣爲親

左少史大江章重

件人々、宜令行伊勢大神宮遷宮事、

右宣旨早可被下知之狀如件

仁安三年九月廿九日　權右中辨平在判

造宮管理

造宮使事甚無謂、此等以紙面長橋局迄可申上之由被談合、〇中略祭主造宮使度々例、祭主申造宮使之時、奉行一通等、令覽傳奏則被留置之、

〔日本紀略〕四上後一條應和二年五月廿六日壬午、給宣旨於伊勢守保衡可令催行造伊勢大神宮事、

〔中右記〕寬治七年十二月廿五日、內大臣〇藤原師通候官奏、左少辨重資奏申、今夜中宮御佛名也、大夫新大納言、二位宰相中將、權大夫祇候、但大夫幷右中辨師頼朝臣、不立行香、是依爲伊勢遷宮行事也、

八年〇嘉保元年六月廿三日、朝在家之間、藏人右少辨時範送書狀云、伊勢大神宮遷宮行事可奉行狀、中宮大夫宣下者、則奉了由申返狀了、

裏書

伊勢遷宮行事　上卿大納言殿今奉行、給有障、〇藤原宗俊、記者宗忠兄　中宮大夫　辨右中辨師頼三ヶ年奉行、有障、　權

左中辨基綱去五月奉行、六月昇進、　宗忠奉行　造宮使惟經　公義　親長

廿六日、伊勢遷宮行事、史惟宗盛忠文書等持來、〇中略則參院、〇白河參中宮大夫許、遷宮上卿

嘉保三年〇永長元年二月廿二日癸未、予〇藤原宗忠今日勤仕女院前駈、依爲伊勢遷宮行事與江中納言〇大江匡房相具、從西門退出、不見餘儀、

天仁二年十月六日、晚頭參內候右仗座間、源大納言雅俊卿被參、伊勢內宮廿年遷宮山口祭日時被勘、先著端座召行事右中辨爲隆、被下造宮使解狀、是山口祭日申請解狀歟云々次進日時勘文、來十八日云云召外記宮入勘文、以右中辨內覽、次以頭辨奏覽、依爲右中辨地下也、則被下右中辨、其次祭物解狀勘例被下歟、大納言退出、是遷宮上卿也、　三年〇天永元年三月廿五日甲午、頭辨送書札云、伊勢遷宮上卿藤大納言、被辭退之替可奉行者、申承之由、從今日止念誦、立札不逢僧尼、但宣旨未到來、頭辨內々被告送也、

大治五年十月一日庚午、予未刻先出河原大炊御門末禊、是去月廿八日奉伊勢遷宮上卿也、依爲最前旬日聊解除也、

右正二位行大納言藤原朝臣良宗宣、奉レ勅件隆實宜レ補二任造伊勢豊受大神宮使一者、省宜二承知依レ宣行一レ之、符到奉行、

左少辨平朝臣　　　左大史小槻宿禰判

乾元二年〇嘉元元年五月十五日

廿一日、此宣旨稱レ可二請取一、自二四官掌一許送レ之、仍祿物五百匹之由申レ之、返答云、是ハ被レ下二式部省宣旨一也、文永又今度內宮之度、不二請取一之上者、不レ爲二請取一、況於二祿物一者、一切不レ可二下行一云云、入レ夜重觸送云、此宣旨被レ載二御名字一之上、且吉事也、以二別儀一小酒肴一具可レ給之由懇望候間、依レ爲二少事一、用途百匹給候了、又鎰取等列參賀申間、二連給レ之、

〔元亨三年內宮遷宮記〕造宮使〇大中臣永經改補事、依レ遲二作神宮度々解狀一之故歟、元亨元年十月日解狀、同月廿一日、右工等申狀、同二年正月廿日、同年三月八日、右頭工等請文、請工等申文、濃原造宮遣營雜掌申文、同八月八日、就二祭主（大中臣隆實）下知注一進之、同三年二月十八日、右工等本解、廿二日〇月缺あめくだる、さいしゆたかざねのきやう、たう宮ざうぐうしにふせられてのち、いまだはいがをとげられず、今日たるべきよしけん日にがうち、神宮又そのよういあり、

〔大中臣系圖〕永經造內宮使、依二作事遲一改二替之一、被レ解二官職一、

〔後深心院關白記〕永和五年〇康曆元年九月三日丙申、外造宮使宣下事、今日注二申詞一、遣二氏房一、外造宮使宣下事、兼治、應安以來、就二官務一令二宣下一之由申レ之、光夏、就二役夫工奉行一可レ令二宣下一之旨存レ之、兩樣共以不レ可レ有二巨難一乎、須レ在二時宜一矣、

〔寬正造內宮記〕內宮造宮職事、依レ有二直無沙汰一被二改替一、被レ補二從三位秀忠一畢、

〔孝亮宿禰記〕慶長十四年六月十五日乙丑、依レ使參二神宮傳奏一、〇藤原經高去十三日地曳祭礎日時之一通至來之次、自二祭主一許進二書狀傳奏一之處、件狀造宮使祭主ト書レ之也、造宮使者有二宣旨一被レ成云云、自身稱二

可為来月五日之由撰送候、仍可申行請印政之旨、相触官外記之處、非副勅者、彼日以前急速被行之條、不可叶歟之趣令返答候、所詮急申行請印政、可整下官符之由、可被仰下官外記候哉、仍言上如件、

五月廿九日〇嘉元元年　　神祇権大副隆　状

謹上　蔵人大輔殿

追言上

請印政上卿少納言、直可被催申候近例候、可得御意候、

太政官符伊勢國幷大神宮司

正四位下行神祇権大副大中臣朝臣隆實

右今月廿日補任造豊受宮使畢、國宮宜承知、事〇事上恐脱一字　已上依例令執行、符到奉行、

左中辨藤原朝臣　　左大史小槻宿禰

乾元二年〇嘉元元年　六月廿日子刻晴泰請取之、

今日廿日丙午、甚雨過法之上風拂地、仍上卿少納言等、参不定之由返答之間、晴泰重相觸蔵人大輔經世、以御教書責伏之間、秉燭之程、上卿花山院権中納言師信　少納言忠朝等参行、先於結政外文請印、次於内裏内文請文〇文恐印誤　行之、入夜雨風止、神慮之至也、来廿六日以前、無日次之由在秀朝臣注送之間、今夜晴泰布衣請取官符了、饗祿代二十貫文、納長櫃一合用意之、此外三貫文沙汰遣之、文永正安例也、於二官掌秀兼之宿所冷泉ヨリ北、猪熊西、請取之、子刻許請取之、持参造宮使殿御宿所了、室町ヨリ西、鷹司ノ北ノ口御借屋路西ノ北ノ口解由小也、造宮使殿令著布衣給御拜見、御遥拜神宮、畢酉下刻許用意彼用途、向秀兼宿所之處、彼政遅遅候間、及深更於彼宿所相待畢、夜中帶彼用途數刻相待之間、依非無怖畏、則殿原兩三輩為宿直申給畢、

太政官符式部省

應以正四位下行神祇権大副大中臣朝臣隆實補任造伊勢豊受大神宮使事

〔大中臣系圖〕知經建長元年、內〔內恐外誤〕宮遷宮延引之間、同五年十二月被止官位也、同七年七月還任、

〔造宮使公文所筆海抄〕造外宮使事、且可令存知給者、依院宣執達如件、

正安三　八月十六日　大藏卿判

岩出權大副殿隆實御事也

追申

於爲貧者、父祖二代不遂造畢逝去、神慮難測之間、先御代被仰下之旨雖風聞、不及沙汰候也、

造外宮使事、且可存知之由、爲頭大藏卿奉行、被仰下之旨如此、且被存知、且可令相觸神宮給候也、仍執達如件、

正安三　八月十六日　神祇權大副判○大中臣隆實

大宮司殿

〔造宮使公文所筆海抄〕造外宮使口宣事、任例忽可有申御沙汰候、仍言上如件、

五月廿五日○嘉元元年　神祇權大副隆　狀

謹上　藏人大輔殿經世事也、

此兩條日次事、晴泰向陰陽頭許問答、如此注書也、

被請取官符日

六月五日辛卯　八日甲午

本宮神拜日

廿日丙午　廿六日壬子　廿九日乙卯

已上可被計用之

五月廿六日　陰陽頭賀茂在秀

〔造宮使公文所筆海抄〕造外宮使事、依被宣下候、可請預官符之日次、任例相尋陰陽頭在秀朝臣之處、

壬午、今日豐受宮造宮使判官主典等官符内印、權大納言成通卿著仗座行之、少納言實重、右近將監源資賴從事、

〔台記〕仁平四年(○久壽元年)正月五日戊午、大中臣親章師親清宣公宣申加階、此中三人以造宮寮功可申也、(親章師親者、本加階功、公宣者本受領功、改申加階、)清宣父祭主清親曰讓造宮使賞也、(去年清親申曰、先例造宮使遷宮之後、預加階恩、重任受領、而清宣不待遷宮叙一階、其後有遷宮、以清親爲造宮使、遷宮了後、清親須預賞、其賞讓清宣也、余(○藤原頼長)問曰、一度造宮兩度加階、有先例哉、清親曰、先例造宮使預加階受領兩賞、加階賞、清宣不待遷宮預了、清親過遷宮之時、須預其賞、今以其賞讓清宣、止受領申加階也、)

〔玉海〕文治三年十月三日庚午、親經申云、伊勢遷宮日時、上卿可仰誰人哉、延久左大臣(○藤原師實)宣下、(○中略)又申云、造宮使(神祇大副大中臣公宣也)今夜欲宣下如何、先例多大臣上卿、不必限一上之由、官所申也云云、

〔類聚大補任(順德)〕建曆元年(辛未)

豐受大神宮遷宮

造宮使從五位上行神祇權少副大中臣隆繼(承元二年閏四月廿一日補之、右人祭主親章卿男、從四位下行神祇權少副親宗二男也、今度競望之輩、權大副知雅、權少副隆繼、權大祐廣定等也、被行御卜之處、隆繼丙合也、)

〔類聚大補任(後堀河)〕安貞二年(戊子)

大神宮遷宮

造宮使從五位上行神祇權大副大中臣宣經(嘉祿元年八月廿五日補之、右人建久造宮使也、今度數輩雖成競望、優故實之上、依位次被補之、嘉祿二年正月五日叙正四位下、建久造宮使賞也、)

〔百練抄(十六後深草)〕建長三年五月二日辛酉、於院(○後嵯峨)殿上被議定、伊勢豐受大神宮造宮使致不法之間、可被斷罪歟之由神宮訴申事、攝政(○藤原兼經)已下參之、　九月九日丙寅、仗議也、伊勢造宮使知經、造宮不法間事也、右大臣(○藤原道良)已下參入云々、　五年九月廿六日辛丑、仗議也、(造豐受大神宮使神祇權大副大中臣知經朝臣、并顯工等生作、遷宮式日延引罪名事、)土御門大納言顯忠卿已下參仕、

判官主典官符、

長承元年九月卅日丁亥、補外宮造宮使神祇權大副親仲、又内宮造宮使清親、七ヶ日服出來、替以子淸宣中補、是依有先例也、又依有便宜也、　十月五日、今朝有政、依伊勢内外宮造宮使官符、幷新制官符請印也、上卿源中納言顯雅卿、宰相右兵衞督顯賴、少納言忠成、依無辨無口申文、今夕有内文、依造宮使官符也、上卿新大納言云々、

〔本朝世紀〕久安五年十月二日庚戌、權中納言藤原忠基卿一人著官廳聽政、少納言藤能忠、權少外記中原在俊、勤廳事、次忠基卿歸參仗座、行内印事、大造宮使符○中略

太政官符伊勢國幷大神宮司

　正五位下行神祇少副大中臣朝臣親章

右今月二日、補任造宮使畢、國宜承知、聽使處分、符到奉行、

造東大寺長官兼左中辨藤原朝臣　　正五位下行左大史兼算博士播磨權介小槻宿禰

　久安五年十月二日

久安六年十月十六日戊午、大納言藤宗輔卿、參議左大辨資信朝臣著廳聽政、少納言藤實經、少外記大江佐平等勤廳事、以大中臣永信爲伊勢造宮使之符也、宗輔卿參仗座、被行内印事、同造宮使符也、　十一月十四日丙戌、權大納言藤原宗能卿著廳聽政、伊勢造宮使符、十一枚請印也、八少納言藤實經、權少外記中原俊兼等勤廳事、仁平二年六月廿三日丙戌、辰刻權大納言宗能卿著仗座、行内官事、是豐受宮造宮使親成符也、諸國任用官符同請印、少納言敎宗從事、　七月八日辛丑、未刻權大納言宗能卿著廳聽政、是造大神宮判官主典、幷諸國召物符等也、少納言實經、從請印事、參議幷辨官不參、　十二月八日戊辰、大納言伊通卿著仗座、行御卜事、伊勢豐受宮造宮使等、競望輩事也、大中臣家親合卜云々、　廿日庚辰、權大納言成通著廳聽政、少納言實經請印事、豐受大神宮造宮使大中臣家親、幷賀茂神主保久等官符請印也、　廿二日

正四位下權大輔兼文章博士木工頭伊與介大江朝臣　正六位上行少丞藤原朝臣未到
少輔從五位下藤原朝臣　正六位上行少丞橘朝臣未到
正六位上行少錄伴朝臣
正六位上行少錄中原朝臣
正六位上行少錄小野朝臣

太政官符伊勢國幷大神宮司内印
散位從五位下大中臣爲信
右今日補任造彼宮使畢、國宮承知、聽使處分、符到奉行、
造大安寺長官正四位下行左中辨兼左京大夫藤原朝臣　右大史正六位上中原朝臣
長元八年十月四日　傳符壹枚拾剋

〔大神宮諸雜事記二〕天喜四年十一月日、以神祇少祐公輔朝臣、被改補造大神宮使已了、仍以同廿一日、三頭乃工等給饗祿又了、其故祭主與宮司成口論天、互以不善所爲企之由天上奏之間、停宮司兼任造宮使天、以公輔朝臣所被改補也、各訴之趣具不記、而間同五年正月、公輔加外戚伯父卒去、仍造宮使停止了、同二月三日、散位從五位下大中臣永清被改補了、祭主之一男也、

〔百練抄五白河〕承保三年七月二日、諸卿定申、伊勢内宮造誤造宮使、可科何祓哉事、

〔中右記〕大治五年十月四日癸酉、頭辨○源雅兼被下造宮使申請解狀三通、仰任續文依請、則下行事左中辨了、　一通山口木本祭日時可被下事　一通同祭物依例可被給事　一通例官大中臣經衡、主典藤原成國依例可被任事、　五日甲戌、內宮山口祭日時宣旨、幷申請祭物、早々可遣造宮使許之由仰了、於判官主典者、成官符可請印之故、追可申行政之由仰含了、　十一日、今朝有政、上卿二人著行、顯雅、雅定、依無參議也、少納言忠成右少辨宗成參仕、是伊勢造宮使、申請判官主典官符、幷山口祭料九ヶ國官符請印也、○中略今夕予○藤原宗忠行內文、是造宮使

右爲改造彼宮、差件等人、宛使發遣如件、國宮承知聽使處分、符到奉行、

右少辨位　　位左大史

天慶三年八月日　　驛鈴參口各三剋

〔日本紀略村上三〕天暦二年三月十五日甲子、召式部、給伊勢造宮使召名、

〔類聚符宣抄一〕太政官符式部省外印

散位從五位下大中臣朝臣爲信

右從二位行權中納言兼治部卿右衛門督藤原朝臣經通宣、奉勅件人宜補任造伊勢大神宮使者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

從四位上行右中辨源朝臣　　正六位上行左少史小槻宿禰孝信

長元八年九月九日

式云、毎年孟冬祭山口云々同之、使爲信申云、早賜任符可申請山口祭等事者、侍從中納言奉仰、十月四日著廳、令請印件官符賜式部省、省成補任即進官、件補任須請印進之、而書申云、依有早可進仰、乍白紙奉之、先例如此之時、後日返給補任、請印重進官者云々、官作任符、任符所辨史加署渡外記、外記申上卿、上卿同日被行陣覽内文、如常云云、

式部省解　申補任事省印不捺之由見裏、件裏書々端了、

補任造伊勢大神宮使散位從五位下大中臣朝臣爲信事

右被太政官去九月九日符偁、從二位行權中納言兼治部卿右衛門督藤原朝臣經通宣、奉勅件人宜補任造伊勢大神宮使者、省宜承知依宣行之者、今日補任申送如件、謹解、

長元八年十月四日　　正六位上行少錄惟宗朝臣

二品行卿親王　　正六位上行大丞藤原朝臣未到

正四位下行大輔藤原朝臣　　正六位上行少丞兼中宮少進橘朝臣

散位從六位上忌部宿禰比良麻呂
木工長上正六位上尾張連淡海
應造物肆種
正殿一宇　財殿二宇
御門三間　瑞垣一宇
右○中略奉勅宜遣件人等早速分造者○中略符到奉行、
延暦十年十二月廿六日　驛鈴五口二口各剋五 二口各剋三 一口剋六

大外記頼業眞人勘申延暦十年例之後、禰宜等進覽寶龜延暦記文、就之被問大臣以下之後、陸職宿禰、又進延暦官符案文、官外記文簿共無許容、無左右被仰五ヶ國勤了、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十一月廿一日辛丑、是日勅遣散位從六位上大中臣朝臣孚雄、判官一人、主典一人、造伊勢大神宮、

〔古語拾遺〕凡奉造神殿者、皆須依神代之職、齋部官率御木麁香二鄕齋部、伐以齋斧、堀以齋鉏、然後工夫下手、造畢之後、齋部殿祭及門祭訖、乃可御坐、而造伊勢宮、及大嘗由紀主基宮、皆不預齋部、所遺四也、

○按ズルニ、皇大神宮儀式帳ニ、造宮驛使忌部宿禰ガ、山口祭木本祭、及ビ宮地鎭謝等ニ預ルコトヲ載セタリ、

〔類聚符宣抄一〕太政官符伊勢國并大神宮司內印
使大舍人番長從七位上大中臣朝臣茂生
判官從八位上齋部宿禰茂貫
主典從八位上坂合部連□□

いくわんをちやくし、さんしよろといへども、ねぎらめん〳〵一けんのうへはとて、そのぎなし、

〔元亨三年内宮遷宮記〕ざうくう所より、一神主に心ざゝるゝくに、するがゐちご二ヶ國なり、たきのはらならうの宮を、此國にて造營沙汰あるべきなり

〔寛正造内宮記〕十一月廿七日、〇文安二年造宮使宗直朝臣拜賀、〇中略造宮目代經康神主、宣旨韓草蓋入、自北戸入、造宮所之前蹲踞、于時神宮目代、宮政所代行定神主著衣冠、進寄韓草蓋、不取宣旨許給自西間出、於巽方軒下、先拜宮中、奉讀進造宮所御名乘、微音、〇中略件宣旨、政所給一神主、進披見、次被渡者、次第傳見、又傳上自一座政所給、造宮所目代返渡事常例也、

〇按ズルニ、文政及ビ嘉永二宮遷宮造宮使拜賀ノ式モ、大宮司ノ立會スルノ外、大體異ナルコトナケレバ之ヲ略ス、

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年八月辛卯、〇十三日夜有盜、燒伊勢大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門三間、瑞籬一重、

壬寅、〇四日十詔、〇中略遣使修造之、〇又見大神宮諸雜事記

〔兵範記〕仁安四年〇嘉應元年正月十二日乙巳、早旦、祭主神祇權大副親隆朝臣、造宮司大中臣有長、禰宜荒木田神主忠良、元陽、成長等一二三禰宜等不可參上率來相會、尋問炎上間次第幷遷宮事等、〇中略大外記淸原賴業眞人勘申延暦例、〇中略

太政官符伊勢國幷大神宮司

造大神宮司五人

長官從五位下行鍛冶正廣上王

次官散位從五位上桑原公定床

判官散位從六位上中原朝臣弟枚

主典散位正六位上秦忌寸東成

右件日食米、任二式條一被レ下二宣旨一者、承前之例也、仍所レ請如レ件、

乾元二年六月廿日

進上

奏狀三通

判官主典幷工役夫作料米日食等官符事

右任二先例一所二注進一也、以二此旨一可下令二申上一給上候、恐々謹言、

六月廿日　神祇權大副大中臣判狀

進上大夫史殿〇中略

此三通請奏事、文永正安兩度共請二取官符一翌日整上、然而依レ爲二吉日一同日狀ニ整レ之、

同廿四日造宮使御下向、廿三日諸方被レ申二其子細一了、

此上文當日付二職事一職事七月五日奏聞之處、早可レ宜下一之勅答云云、

〔建久元年内宮遷宮記〕文治三年十月十八日、造大神宮使神祇少副大中臣朝臣公宣、補二造宮使一之後初參宮、〇中略造宮官符忠兼神主衣布讀レ之、於二一殿前一讀レ之

〔元亨三年内宮遷宮記〕廿二日、〇月缺あめくだる、さいしゆたかさねのきやう、たうぐうざうくうし。。。。。にふせられてのち、いまだはいがをさゝげられず、今日たるべきよし、げん日にがうち、〇中略次だい神はいの後、一殿にちやくざ、〇中略ねぎちやくざのゝち、まづ北のとよりこれうちの神主、せんじをもていりて、一神主にわたしてたいしゆつ、一神主一けんのゝち、しだいにその〳〵とりわたして、一けんす、そのゝちしだいにとりつぎ、一神主にわたす、一神主もくだい、あきかぬの神主に、ふあんをさむべきよしおほす、すなはちあんのゝちうしろとにして、これうちの神主にわたす、いまのしだい、せんきにいするか、一殿のゝきのしたにして、よみあぐべきやういにて、あきかぬ

請取錢貳拾參貫文事（延明神主請取官符、此外三貫文沙汰遣之云云、守文永例歟、）

右內造宮使官符大使小使等饗祿代、所請取如件、

正安三年八月廿三日

小使使部宮忠判

文殿藤井判宗職也

大使左官掌紀判秀兼也

請取錢貳拾參貫文事（此外任正安文永例、參貫文沙汰遣之、）

右造外宮使官符祿物幷饗代、大使小使分所請取如件、

乾元二年（〇嘉元元年）六月廿日

小使藤井判忠國

文殿和氣判助連

大使左官掌紀判秀兼

〔造宮使公文所雜海抄〕造伊勢豐受大神宮所申

請因准先例被補任判官主典狀

右判官正六位上大中臣長清、主典正六位荒木田國實可被補任也、仍所請如件、

乾元二年六月廿日

使大中臣朝臣隆—

造伊勢豐受ヽヽヽ

請任先例被下官符諸國工役夫作料米狀

右件工役夫作料米、ヽヽヽ仍所請如件、

乾元二年六月廿日

造伊勢豐受ヽヽヽヽ

請任式條被宜下使幷判官主典日食米狀

丹波國三貫文　丹後國二貫文　但馬國三貫文　因幡國二貫文　伯耆國二貫文
出雲國二貫文　播磨國三貫文　伊賀國二貫文　伊勢國二貫文　美作國二貫文
備前國二貫文　備中國二貫文　備後國二貫文　安藝國二貫文　周防國一貫五百文
長門國二貫文　紀伊國一貫文　淡路國一貫文　阿波國二貫文　讃岐國二貫文
伊與國二貫文　土佐國二貫文　下總國五貫文　志摩國五貫文　駿河國五貫文
相模國五貫文　攝津國二貫文

此員數不可爲後例、依時宜隨大使可有增減也、

已上四十七ヶ國

造豐受大神宮使事、來六月上旬可被請取官符、彼祿料用途當國分貫文、來月十五日以前、無懈怠可令沙汰進給之由、依造宮使殿仰執達如件、

乾元二年(○嘉元元年)閏四月廿一日　晴泰　權禰宜判奉
　行尚　權禰宜判奉

國大使殿

〔造宮使公文所筆海抄〕文永二年送文案

造外宮使官符饗祿料代、錢貳拾參貫文沙汰進候、只今令參向候了、可請預官符候也、恐々謹言、(本物貳拾參貫文之外、錢二貫文、酒二瓶子、肴二種、沙汰遣候由、載作所部房記、)

文永二年六月七日　登房

勘解由判官殿

造外宮使官符饗祿等代、錢貳拾參貫文給候了、恐々謹言、

六月七日　貞職

テ懷中、祝言ノ後一拜立座、於一殿巽角、使ト禰宜ト一殿坤角對拜之後內宮ニ參、一儀ニ云、酒肴以前先官符披見云々、

又云官符神拜之時、自第四御門䈎ニ取副テ拜賀、別宮神拜之後、使被懷中云々、

手水配膳役人事、祭主嫡男爲造宮使被參之時者、重代權任勤之、衣冠自餘者祗承之宮掌勤之、對面之禰宜衣冠、但外宮造宮使拜賀之時、禰宜束帶衣冠、古記不同於內宮二鳥居在大麻御鹽湯、祗承宮掌二人、衣冠、至玉串行事所、手水物忌勤之、先例不同、神拜之後、一殿ニ被著、其座戸之東南面土敷長筵也、禰宜座南、東上北面、土敷之上ニ長筵、宮半疊也、造宮使饗膳高坏二本、家子各一本、高坏物在八種、追居折敷、衆所居也、禰宜束帶、如古者衣冠也、古記不同、著座後官符ヲ、自使手神宮目代衣冠直ニ請取、同殿於坤軒下、向宮中讀進之後、使ニ是ヲ返上、一儀云、以造宮使之侍、神宮之目代ニ渡、即是ヲ讀之後、使之侍ニ返渡云云、古今例不同、然後一禰宜勸盃、三獻如常、又侍座九丈殿東ニ引坊領、其座土敷上ニ長筵ヲ敷、八種折敷養同衆居儲之、配膳以出納勤之、雜色等之中江酒一瓶子、肴二種、弘擬敷散行也、

外造宮使拜賀時酒肴也、無饗膳者也、

吉書事、諸國役夫工料米之下文、以吉日被成始也、吉書ノ國三ヶ國、加賀、武藏、相模、神領飯野、飯高、福永、次國々ノ下文、幷充狀等、以吉日二宮之上首ヨリ正權禰宜次第ニ分テ給也、

正月以吉日吉書被行也、其狀云、諸國役夫作料米勸納之由也、

〔造宮使公文所筆海抄〕國々官符用途宛目錄

加賀國二貫文　近江國三貫文　參河國五貫文　尾張國三貫文　遠江國五貫文
伊豆國五貫文　甲斐國五貫文　武藏國五貫文　安房國五貫文　下野國五貫文
上總國五貫文　美乃國五貫文　信乃國五貫文　上野國五貫文　常陸國十貫文
若狹國一貫五百文　越前國二貫文　能登國二貫文　越中國五貫文　越後國五貫文

以吉日請官符、（造宮使日代向官所請取之、重代故實神主著布衣、）造宮使請預官符、下向二宮拜賀以前、司符官符奥書之、

請預官符、翌朝進官請奏副也、

判官主典請奏之

諸國之工役夫工料米、官符請奏之、

判官主典日食米請奏之

已上三通（造宮使位所姓名如例、一紙別在之云云、）

一通山口木本兩祭請奏日時

一通同祭物請奏

一通柚作用鐵五百廷請奏

已上三通請奏文進官之、（造宮使別紙狀在之）

造宮使請官符以後、家內潔齋事、

僧尼重輕服、奪情從公、不出入也、亦不食他人火物、（所謂忌火）專守六色禁忌、致謹愼之誠者也、

古老傳云、新米飯祠官同之、

亦門前軒檻、如式建之、（在札高三尺五寸、造大神宮所、僧尼重輕服不出入、）

拜賀事、以各別之狀造宮所ヨリ二宮一禰宜ニ被告知也、參宮之儀式、且依重代、且守例也、先外宮ニ參、祇承之宮掌二人衣冠、大麻御鹽湯內人向二鳥居外也、到例所（手）在手水、大宮神拜、別宮遙拜之後、一殿ニ著座、北壁副テ南面ニ座ス、使禰宜各小文高麗端疊、在宮半疊、使一疊、禰宜四疊、各長筵上ニ宮半疊ヲ重、酒肴高杯一本、肴二種、造宮使之前ニ置之、配膳宮掌、一禰宜勸盃、三獻終後撤之、其後造宮使ノ侍、五位目代ナリ、官符ヲ韮宮蓋ニ入テ、使前ニ置之、于時官符ヲ一禰宜ニ是ヲ渡、一禰宜一見之後、次第ニ是ヲ傳進、造宮使一禰宜手ヨリ官符ヲ請取

古事類苑

神祇部五十四

大神宮四

遷宮中

遷宮使

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

常限廿箇年一度新宮遷奉、造宮使長官一人、次官一人、判官一人、主典二人、木工長上一人、番上工卌人參入來、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡大神宮年限滿應修造者、遣使（判官主典各一人、但使判官任中臣忌部兩氏）孟冬始作之、神宮七院、社十二處、（朝熊社、園相社、鴨社、田乃家社、蚊野社、湯田社、月夜見社、草名伎社、大間社、須麻漏賣社、佐那社、櫛田社）其使供給充用神稅、丁匠役封戶人夫、糧食便用神稅、若神稅不足用正稅、自餘諸社、宮司修理、

〔新儀式四臨時〕伊勢大神遷宮事

大神遷宮之事、依式歷廿年行之、前二三年、神祇官中任造宮使、除舊新造、

〔遷宮例文〕造宮使補任事

十七年（〇前式年ヨリ第十七年）孟冬、中臣氏人、重代器量ヲ撰被補、

官符未到以前、且被下院宣、有造宮使請文、次相副院宣、神宮一禰宜ニ有告知、仍有一禰宜請文、

官符日次可請事、陰陽勘文ヲ相副、自造宮使被送官長者也、

行事官狀到來、卽時餐膳祿料被奉送造宮所、目代之狀也、

皆料之定錢貳百貫文、件用途、卽諸國之雜掌等之所役也、

玉新宮敷滿也新宮火燈役人、俊康、俊成神主等也、入御之時、昇上御帳、無爲遷御、祭主宮司如前御階左右立、
召立役人同前、○中略神財等無爲奉納、其後禰宜退下、其座如古宮、一禰宜御鏁奉固畢、御鎰御封畢、宮司封
拜四度、無拍手、其後退著外版位、祭主乍立被待傍輩、禰宜宮司退出之時、於八重榊西方、互揖各著
版位、御鎰奉納、納宮也鎰取內人御封畢之由申、次拜八度、手兩端、次朝廷奉幣、然後祭主宮司自南門退
出、禰宜自西門退出、於古宮所玉串行事所互揖、如常次荒祭宮拜、如常其後於例所排持脫明衣、祭主已下集
會一殿、祭主北座、高麗端帖敷之一禰宜東壁副、宮司南座、舗設如常任式日遷宮畢之由進注文、是先例也兼日書儲、於
常○常恐當字誤座進署、祭主請取退出、

等乎令持氏、人垣仕奉男女等仁、太玉串令持捧氏、左右分立氏、大神宮司率參入氏、正殿乃御橋許候侍、爾時行幸道布敷、卽大物忌御鎰被賜氏、正殿戸開奉、(先大物忌戸手付、次禰宜參上戸開、)卽正殿內燈油燃、御船代開奉氏、正體乎波禰宜頂奉、相殿神、東方坐宇治內人頂奉、西方坐大物忌父頂奉、遷奉行幸時、立先禰宜、次宇治內人、次大物忌父、次諸內人物忌等及妻子等、人垣立氏衣垣曳氏蓋刺羽等捧氏幸行、道長九十五丈、敷調布廿七端一丈二尺、令幸行時爾、新宮玉串御門仁立留氏、三遍音爲氏發、令幸行至瑞垣御門爾留氏、又三遍音爲氏、(稱其音如鷄鳴、)卽御河橋本留氏、使中臣侍氏、參入進玉串御門爾侍、令幸行坐、爾時禰宜正殿乃內仁令入坐畢、卽內御門爾油火炬氏、御裝束物如注文讀申氏、令進納御床代畢時爾退出氏、常告刀地氏、八度拜奉氏罷出奴、卽歸使毋直會院坐、○(止由氣宮儀式帳略同、故略、)

〔建久元年內宮遷宮記〕建久元年九月十六日、亥時許、外宮御祭畢之後、祭主神祇大副大中臣朝臣能隆參給也、先著一殿、每事相調哉否之由被尋之後、可被發向例所、(御鹽湯所、是先例也、)而今度直被立例所、是爲遂於事歟、供奉之雜悉以群參、各皆著明衣、(官下)先祭主進寄手水、權任神主(二人)役之、次御祓、(祭物作所儲之)御巫內人恒方勤之、(其同祭主已下列居也、)次玉串行事、(此間召立役人祝神主、相具先陣供奉輩參向御倉、)其儀如常、先禰宜參、次玉串大內人、次宮司、次御樋代絹垣等、次祭主、各入玉垣門、(四御門)著版位、然後供玉串、(如常)次御鎰櫃御封開之由申之、次禰宜宮司參入、(自西方參)祭主自東方參入、各入瑞垣御門、向御殿列居、(東上)鎰取內人申御鎰御封開之由、次子良參、一禰宜持御鎰相具參上、御戸奉開、(子良奉懸手)次火燈役人成重、(二禰宜子)家長、(長官息)自御橋左右參昇、(御燈捧持)次傍官禰宜參上、于時祭主東方立、宮司西立、召立役人東立、(自祭主南方)先前陣取物召立畢、先陣取物自御倉奉出、仍只讀立計也、○(中略)次後陣取物隨召立、自御殿奉出之、次奏鷄鳴、于時出御、一二禰宜奉戴御體、三五六(成長)奉相副、玉串貞成奉戴左相殿、七神主奉相副、(御後方奉戴也)物忌末貞奉戴右相殿、禰宜代(四元雅、故障替)成仲奉相副、(御後方奉戴也)出御次第、先御體、次左相殿、次右相殿、(供奉行事有口傳)左右火燈役人、御戸帳昇上、絹垣役人等、進參御橋左右、(地下)祭主先參警蹕、(微音)宮司後陣自南門出御、筵道役人追前、(筵道布迄)

内玉垣御門

八重賢木鳥居

皇大神宮嘉永二年御遷宮之圖

第四御門

冠木鳥居

〔延喜式伊勢大神宮四〕營造神寶幷裝束使○中略

右裝束神寶造備訖、○中略九月十四日、粧飾度會宮、十五日奉徙御像、同日粧飾大神宮、十六日奉徙御像、先令祭主申粧飾之狀、若祭主有障令宮司申、然後粧飾、

〔延喜式祝詞八〕遷奉大神宮祝詞豐受宮准此

皇御孫命能御命乎以氏、皇大御神能大前爾申給久、常乃例爾依氏、廿年爾一遍比大宮新仕奉氏、雜御裝束物五十四種、神寶廿一種乎儲備天、祓清賣持忌波理氏、預供奉辨官某位某姓名乎差使氏進給狀乎申給久止申、

〔日本紀略十一條〕長保二年九月七日辛巳、依發遣伊勢大神宮廿一年一度御遷宮神寶使諸司廢務、件神寶差辨代神祇伯秀頼王獻之、宣命神祇式之文也、內記不獻之、

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事

常以九月十四日、正殿內壁代帷、寶殿御帳、幷禰宜內人等明衣乎波、自御裝束使所令請、以十五日巳時、齋內親王參入坐於大神宮、暫侍坐外川原殿院、卽自手輿參入坐舊宮御門外、自手輿下氏參入侍坐輿玉垣瑞垣間東方、女孺二人從侍、卽大神宮司太玉串幷蘰木綿乎捧、第三御門爾候、卽女孺一人罷出氏、受取其太玉串幷蘰木綿乎持參入、爾時親王受取著蘰木綿、太玉串捧持拜奉給畢、卽親王還出度會郡離宮之、以十六日、御裝束物等祓淸氏、擇使王一人、神祇官副已上一人、忌部一人、大神宮司共、令參入外院太玉串所、然先禰宜內人、幷人垣可仕奉男女等、以戌時悉皆大宮以西川原大祓淸、卽給明衣畢、以亥時始氏、然卽御裝束物等、皆悉持參入氏內院中御門、使中臣告刀申、新宮仕奉氏遷奉狀、幷御裝束儲備奉進狀如之申畢氏、使中臣一人幷大神宮司御裝束物乎、令持氏、新宮爾參入氏、正殿御橋下侍、東使中臣、西大神宮司、爾時大物忌先參上手付初、次禰宜參上天正殿戸開奉天、正殿內四角燈油燃天、御裝束具進畢、皆悉罷出、但使波外直會殿坐、然大神宮司人垣仕奉人等召集氏、卽衣垣衣笠刺羽

陰陽寮
擇申可被行船代祭并後鎭祭等日時〔○中略〕
後鎭祭
廿七日〔○五月〕壬午　時午二點
仁安四年二月十七日

〔玉海〕建久元年九月七日戊午、此日伊勢遷宮神寶發遣日也、〔中略〕九日庚申、此日被勘後鎭祭日時、〔十六日、遷宮當日有例、○下略〕

〔百練抄〔十六後深草〕〕寶治元年九月十一日辛酉、被改勘伊勢大神宮遷宮後鎭祭日時、

〔寶治元年內宮遷宮記〕今夜〔○九月十三日〕後鎭祭也、〔○中略〕今夜如鎭地祭之時、可退出宮中之由雖有其沙汰、總官上﨟宿館〔仁〕令候給之間、不及退出也、

〔文永三年內宮遷宮記〕今月〔○九月〕十六日後鎭祭之間、宮長憲繼神主之館御寄宿也、當日小河權少副盛繼、爲祈禱雖被告知、後鎭祭之間依遲參、以通時神主被觸子細之刻、自尾上阪被歸云云、

〔康曆二年遷宮記〕同七日〔○二月〕子刻心御柱奉飾立之間、地鎭〔乃〕祭、於祭物等者、大司長重朝臣方〔興利〕下行之、同日〔丑刻〕後鎭〔乃〕祭在之、

〔寛正造內宮記〕伊勢大神宮遷宮并雜事日〔○中略〕
後鎭祭日
廿七日丁亥
事移遷御體於正殿日
廿七日丁亥
十二月〔○寛正三年〕八日
陰陽頭安倍有家

准此とあり、委彼式を見るべし、

〔外宮寛文九年正遷宮記下〕同日夜（〇九月廿八日）後鎮祭、（此〇殷〇再〇興〇）御巫内人清平、（衣冠）於正殿床下行之、其儀甚省略而密儀也、（不被下日時宣下）按古記、正殿造畢之後、御體遷幸之前、調備忌物雜々祭物、有後鎮祭、如今者悉不遑考舊儀、遷幸之後、僅被與其名者乎、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年

同日（〇九月五日遷御夜）後鎮祭

御巫内人清直、詣于正殿床下勤行之、

〔遷宮例文〕廿年（〇前式年ヨリ第二十年）暮秋九月御遷宮

後鎮祭事

祭物鐵人形卌枚　同鏡卌枚　同鉾卌枚　長刀子廿枚　鉾四柄　鎌二張　小刀一柄　五色絹各一丈　木綿麻各二斤　庸布一反（明衣料）　已上官下

散供米二斗五升、（飯野郡司勤）　酒二斗、（多氣郡司勤）　雜腊二斗五升、堅魚三斤、鰒三斤、海藻二斗五升、鹽二升、陶土器二十、鷄二翼、同卵廿枚、（度會郡司勤）　已上司庫勤

御供米四斗八升、（官斗）鍬二口、鋤二口、上紙二帖、小紙五帖、桶二口、杓二口、折敷廿枚、薦一枚、酒二瓶、續松、玉串物忌宮守地祭饗膳料各一斗、玉串大物忌從料各二升、御巫内人一斗、散供米二升、山向一斗、

已上作所沙汰也、

〔寛正造内宮記〕同日（〇寛正三年十二月二十七日）後鎮祭、忌物官下、祭物代貳貫文、造宮所沙汰、

〔遷宮例文〕廿年（〇前式年ヨリ第二十年）暮秋九月御遷宮

後鎮祭事（闕）　日時勘下宣旨（船代祭宣旨同之）

〔兵範記〕仁安四年（〇嘉應元年）二月十七日甲辰、今日左大將參著仗座、令定申造大神宮遷宮雜事等日時、

後鎭祭

(勸盃)次反飯、皆執著祭食立箸飯上、又執以戴之、又立之後置故處、反飯、次進肴、(鮑)次又斟酒、(頓提子、至三座、)畢撤膳、(下上膳、神宰以後、一禰宜家人送之、)此間家司代尹達、立于一本榊北、取明衣、(生絹)授之、參列權禰宜各執以懸肩、(懸左肩、結右脇、)禰宜對座物忌養膳畢起座、出五丈殿正克、(橋村宰記、衣冠、)進盥水禰宜、人長又進盥水於對座物忌父、次家司獻明衣于禰宜、又授對座物忌父、各執以懸之左肩、進歩、荷用立于一本榊西邊、酒鹽湯、禰宜詣本宮著石壺、北面東上、權官著于禰宜後、物忌著西、東面南上、一禰宜起座、跪誦祝詞文、(此祝詞古昔略闕、寬政以來奮之筍、)各伏誦畢復座、各八度拜、○中略到新殿列立于階前、北面東上、○中略役人(白襖、一禰宜家人、)取清土、(卜定新宮卯方取之)實臺舁置之新宮巽隅、(床下柱內)階下柱外張雲形、一頭展親執舁、鋪清土於柱下、先始自巽旋南西北東、畢時禰宜對座起座入殿下、自柱內向外、以白杖築柱基、(築之神祕アリ)先自巽旋南西北東、權禰宜入大床下向內、取白杖築柱外、如此三匝畢各出瑞垣門、(白杖授從者、)禰宜列玉串門頭、又詣本宮著中庭座、(玉串門前、有饌殿、)權官居其後、物忌列踞、東面南上、禰宜各起座、進入玉串門、(下著)北面東上、爲應列倭舞、還著石壺、八度拜、啓祝辭歸館、

〔外宮假殿要須記〕後鎭祭事

件祭者、奉移御體於假殿、奉立替正宮心御柱、御修理事終之後、翌日所令勤行也、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

取吉日、山口神祭用物幷行事、○中略

宮造畢時、返祭料物如始、

〔大神宮儀式解 七〕返祭は加皿之乃萬都里乃とよむべし、返祭は後鎭祭也、大神宮式には山口神祭の下には包擧すて、地鎭謝の祭の所に彙注す、鎭祭宮地(後鎭准此、但除明衣及幣、)といへり、今の世、宮殿造畢遷御の前、地祭物忌父等此祭を行ふ、但し祭物等倣々にて形のみ也、後鎭は當宮のみにあらず、古の風にて、いづこにも宮殿造畢る時、かゝる祭あり、大嘗祭式、凡造大嘗宮者云云、後鎭料亦

如し、次第に權任の名を呼て相渡す、畢て追々禰宜の次に參集、
於玉串行事所禰宜列立、(東上南面)權任は其東方群居、于時御巫内人告刀申、各奉拜開手、(○中略)
第四御門を經て、軒下ニ有御鹽各灑清む、次著石壺、權任は禰宜の後、内人等東方(南上西面)于時一禰宜、
八重榊の許告刀申、(心中祝悟、無告刀文)歸座各奉拜開手、次西鳥居(新)を經て、新宮石壺著座有拜、次内院(新)御
階の許著座、禰宜(東上北面)權任西方群居、内人東方各著座、
次禰宜五人宛參進、新宮の西方通行而、乾方御柱築始、次北方、次東方、次南方、次西方、御棟持柱にて
築收め、如元著座、次權任禰宜の跡に從ひ、五人宛築廻り、三度之後歸座、内人は殿外小柱(大床の柱なり)築
廻る、各同上、此時杵築の神謌有之、歌ひながら築くなり、次禰宜、玉串御門軒下列立、(東上北面)權任は西
方、内人は東方群居、于時禰宜一同に、瑞垣御門軒下進み、乍列立(著沓)有和舞、(立舞也)歸座蹲踞、(拜)次退出
於新宮石壺奉拜開手、(權任西方、内人東方如始)兩端之後起座、次本宮石壺拜、以下如恒、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年八月廿三日、巳時杵築祭、(日時一禰宜撰之)
荷用(白張)啓夜内、禰宜一朝喬卿、四常善卿、五常庸、六貞董、七常伴、八茂彥、十偉彥、(各束帶)對座貞嗣、武彥、常
平、(各衣冠)權官常賢、(衣冠)政所代弘道、家司代尹達、(各衣冠)先駈禰宜權官進到于例所整列、祇承延孝、(出口美濃、衣冠)
前駈到于五丈殿、禰宜入自北口著北鋪設、(鋪小紋高麗薄緣)南面西上、對座入自南著南鋪設、(鋪小紋高麗薄緣)北面
西上、大物忌父正位、正陽、正道(共衣冠)入自南著南鋪設、(對座東、鋪黑薄緣)北面西上、各座豫設居饗膳、(禰宜對座、丸懸盤盛六、四汁、物忌方一尺木具足附、土器六組、四汁、)于時與文、(福田內史)正矩、(辻左京、共狩衣長官家出)持酒坏土瓶到于一禰宜前、正位勸盃一禰
宜、又自受酒授四禰宜、拍手執酒坏拜飮、一禰宜把笏與正位相揖、正位復座、四禰宜又自受酒授五禰
宜、拍手執之拜飮、如此至十禰宜、次正陽起座、到對座前勸盃(如配膳上)貞嗣、拍手執酒坏拜飮、又自受酒授
二座、與正陽相揖、二座拜飮、又受酒授三座、次配膳(一禰宜家人、素袍)持酒坏土瓶、到大物忌父一﨟前、二﨟居
座勸盃于一﨟、拍手執酒坏拜飮、又自受酒授二﨟、如此至三﨟、次自禰宜至物忌、用銚子提子斟酒、(懸無)

くおほせらる、おの〳〵申、せん〳〵一二員の時も、七疋さたをや、近例假殿の時宮司さた、つぎに御上とうの時、ざうくう所さたの、かぶりうへのきぬ已下、悉く十人にさたあり、今明衣に限、かくの如く御さた、難治のよしこれを申、此趣神宮よりざゞ問答申によりて用途十貫八百五十文、一神主の宿館へおくり遣はさる、一神主のぶん一ひき、ゑろ一貫四百文、二神主已下きぬ六丈ヅヽ、ゑろ一貫五十文ヅヽ也、いかこれをぶんはい、公文所よりのつけふだかくのごとし、○（又見二寛正遷内宮記一）

○按ズルニ、寛正以後假殿遷宮古記抜書ニ、假殿遷宮供奉次第、（柿表紙、禰宜氏興書判有、）一明衣著様、延季記云、閉明衣とて、七尺計ニ切テ、ワナニ引返テ、後ヲ押入テ、可レ用レ之（末略）トアリ、又元亨三年内宮遷宮記ニ、衣冠の上に、どぢみやうえをちやくす、しりまへをきこむ、トアリ、閉明衣ハ明衣ノ輕便ナルモノナリト云フ、

〔元亨三年内宮遷宮記〕今日（〇六月十八日）二のあした、公文所より二首の謌を書て、傍官幷ニ權官の館にわたす、かのうたは、當日覺て公文所よりかきおくる本をば、やがてうしなはすして返つかはす也、かしこしや、いすゞの宮のきづきしてけり、きづきしてけり、國ぞ榮ゆる、郡ぞさかゆる、さとぞさかゆる、萬世までに、萬世までに、

天照す大宮所、大宮所、かくしつゝ、仕へ奉らん、かくしつゝ、仕奉らん、萬世までに、萬世までに、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑八月卅日、巳刻杵築祭、禰宜、（衣冠、重指貫、雜色白張各二人、）供奉人權禰宜、（衣冠、）（供奉青袍一人、此中に昇殿權任物忌父等在レ之、）副物忌、（同上衣冠）清酒作、酒作内人、（淨衣指貫）人長、（布衣）御巫、（衣冠）出納、（白張）

一鳥居より參進、一殿參集、（納二幣串一）禰宜北方、（東上南面）權任西方殿外、（群居）次出納告知之後起立、

一殿巽角より如レ例出て、櫻宮東參道の南方列立、（東上北面）于レ時作所所從（青侍）白杖明衣を授く、禰宜請取、次遙拜所列立、（南面）供奉人ニ命じ、自二左肩一懸て右の脇下にて結ぶ、白杖者所從持參、神主中同前、次人長、權任一﨟の名を呼ぶ、（坂常陸御參と呼ぶ）尙品進出白杖明衣を請取、左肩にかけ、白杖を持こと神主中の

度會乃宇治乃五十鈴川上乃下都磐根仁大宮柱太敷立天、朝廷寶位比無動久、常磐堅石仁茂世度、平久安久守幸給度、以吉日良辰天、千五百秋豐葦原乃瑞大宮柱乎、百千位神人等爾奉杵築詔度（○詔恐給誠）申、掛畏幾五十鈴乃宮乃杵築志氏介里、杵築志氏介里、國曾築留、郡曾築留、萬世二、天天照須大宮地呂、如此志留々仕奉爾、萬世二、天萬世二、天知波夜不留五十鈴乃宮仁杵築志天、國曾築留、郡曾築留、萬津世爾、萬天萬世爾、已上寛治秘記

〔延喜式四伊勢大神宮〕鎭祭宮地（○中略）築平正殿地、禰宜内人等八十人、明衣料庸布八十段、（度會宮減半）

〔遷宮例文〕廿年（○前式年ヨリ第二十年第二十年）暮秋九月御遷宮

杵築神事（杖百支、長五尺四人頭工等代遂之、）

明衣料上絹七疋、自造宮所被奉送之間、任例分配、一禰宜一疋、傍官各六丈充也、一殿祿物事、（前後不同也）

權任明衣官下准絹六疋用之、（五尺切之、三筋破之、）

六位明衣官下麻一把用之

〔元亨三年内宮遷宮記〕きづきの神事、（○中略）つゐにおきては、四人のとうら百本づゝあぐ、かの杖は榎の御前の前にゆいてたつ、傍官へは出納一ヅヽとりて、一殿のみぎりにして、めん〳〵の殿人にわたす、くふうの權官におきては、さんずる時、めん〳〵に一本ヅヽとりてさんず、明衣におきては、公文所よりさしてをもてうく、せん〴〵さしてなきよしさたあり、禰宜の明衣の事、せん〴〵ふるきをもちゐる事ありといへども、ざうぐう所より、れう物をさたのうへはさて、めん〳〵にきぬをとぢ、みやうえにしてきる、ふたのゝとぢみやうえなり、かのみやうえの事、今月（○六月）八日、造宮所より、御目代成明神主をして、ちかく文永弘安嘉元にも、七ひきをもて、八人にわかちあてらる例分明の上に、七疋をもて、今度十人にわかちさたあるべ

候しを、今度はあかうねより、すぐに宮中へ入申候、
永享六ねん九月十九日御せん宮三頭近家

杵築祭

〔延喜式四伊勢大神宮〕鎮祭宮地〇中略
其築平殿地之日、以紺布帳奉覆神殿、勿令工夫臨見、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事
取吉日、正殿地築平料用物、幷行事注左、〇中略
爾時役夫卜合地土正殿地持運置、即禰宜内人等築平詠儛、然後日奉椿正殿隱奉、

〔遷宮例文〕廿年〇前式年ニ第二十年喜秋九月御遷宮
杵築神事〇中略
一殿饗膳朱懸盤以下白懸盤小机、頭工鍛冶等机、國々雜掌神領給人等經營之、如上棟作法也、
一殿儀式、使禰宜四本高坏、對座玉串五位物忌幷上座朱懸盤、以下白懸盤也、座坊領長筵宮半帖、疊不同例使禰宜各束帶、陪膳如前々也、饗膳畢之後、各歸宿館、著明衣帶杖木綿正權禰宜大内人等參玉串所、禰宜北上西面、各持杖天蹲踞、于時御巫内人衣冠勤仕御祓、在手一度、散供三升、作所沙汰也、禰宜先陣也、於南御門屛垣砌在御鹽湯、參著本宮石壺天、一禰宜進參申詔刀、執詔刀文在裏書奥書之、但無詔刀文、以家傳口申之也、歸著本座、拜八度手兩端也、其後南御門與利出天、新宮南御門與利參入天、中間與利西北東南三反奉築固、在詔二首奉唱之、其後自南門退出、參荒祭遙拜所、八度手兩端、畢退出也、於荒祭宮者、無杵築之儀、是先例也、
今夜職掌人退出宮中之間、禰宜下館候也、　造宮使退出也、〇中略
裏書云
詔刀言

〔遷宮例文〕廿年〇自式年第二十年暮秋九月御遷宮

御船代祭事正宮荒祭

一通日時宣旨、在後鎮祭日時、下遣伊勢大神宮使、一通祭物宣旨、下伊勢大神宮司〇中略

玉串山向子良御巫頭工入御杣、但御巫者於河合勤仕御祓之後、令歸來也、

杣作二ヶ日工卅六人、加頭四人、定頭各一斗、小工各八升、工斗定役夫、兩機殿神部勤也、雜長夫不用之、内院參故也

庭作三ヶ日食米、頭工一日別一斗、小工一日別八升充、

庭作時明衣、頭工一反、小工二丈、官下庸布

手斧一、鉇一、釣鉇一、鋸一、錐一、佐志一、刀一、件寸法、工可書之、

正殿荒祭兩宮料奉仕之、亦假御樋代、在此番數之内也、

〔遷宮例文〕十八年〇自式年第十八年仲秋木造始事

御棟持柱、御戸板、御船代料材、造營第一採用杣山無雙用材也、因茲頭工等入御杣兼以尋求之、

〔兵範記〕仁安四年〇嘉應元年二月十七日甲辰

陰陽寮

擇申可被行船代祭幷後鎮祭等日時

船代祭日時

五月十六日辛未　時午二點　若申〇中略

仁安四年二月十七日

〔頭工引付〕永享六ねん九月六日、御船代祭あかうねにて仕、その内ロロロロロきうちうへ入申候、ロロロか御内にて祭仕り、やがて御造申候、九月十五日御遷宮に御あい候なり、あかうねにての祭は、頭頭代ゆかうにて神事あり、幣の絹ひざつき明衣あり、せんぐ〱はみやロロかわてにて

御船代、又居之于大床、（正宮料中、東相殿料東、西相殿料西、）各降階時、御巫内人清直、（衣冠）持祓具、（大麻鐘切散米賢之竹管）拜降登階、（自上二級）向御船代修祓、揮清之降階、一禰宜起座登階、（五禰宜相副）拜入殿内、四禰宜以下次第登、（二人上登）入殿内、次武彦常平登階入殿内、各出先昇正宮御船代、居之其座、又昇相殿之御船代、置之東西座、各出殿降階、（先末座、）一禰宜閉御戸御鑰、降階復列、武彦常平閉東西寶殿御戸御鑰、（開瑞垣門）各歸館、（於木柴北御門社拜）

〔延喜式伊勢大神宮四〕造船代祭

鐵人像鏡鉾各卌枚、鑿二柄、鋸二張、鉇二枚、長刀子十枚、鎌二張、（度會宮減一張）鉾手鉾各二柄、錐二枚、（度會宮除之）小刀子二枚、鉾二柄、五色薄絁各五尺、木綿麻各二斤、酒米各一斗、堅魚鰒各二斤、腊魚一斗、雜海菜二斗、鹽二升、雞四翼、卵廿枚、陶器土器各廿口、（度會宮雞以下並減半）内人等明衣料庸布六段、（度會宮減一段）庭作工明衣料二段、

〔遷宮例文〕廿年（〇前式年ヨリ第二十年）暮秋九月御遷宮

御船代祭事（〇中略）

祭物鐵人像肆拾枚　同鏡肆拾枚　同鉾肆拾枚　鑿貳柄　鋸二柄　鉇貳張　長刀子拾枚　鎌三柄　鉾貳柄　手鉾貳柄　釘（〇釘字誤）貳柄　小刀子貳柄　五色絹各五尺　木綿肆斤　麻肆斤

庸布肆端　明布料　已上官下

散供米壹嚢、（二斗、飯野郡司勤、）酒貳斗、（但一堝米入麹、多氣郡司勤、各司中支配、）腊魚貳斗、（但魚一隻）堅魚三斤、（但五節）鰒參斤、（但四連）海藻貳斗、（但少分）鹽四升、雞貳翼、同卵廿枚、　已上司庸勤

御供米壹斗、（官斗）散供米五升、（御巫請之）折敷一枚、（同）堝二口、桶二口、杓二柄、折敷五枚、紙一帖、筵一枚、薦一枚、

玉串懸盤料壹斗、（官斗）同從料五升、御巫一斗、山向一斗、子良一斗、　已上作所勤

〔寛正造内宮記〕寛正三年十二月十九日、船代祭之祭物代貳貫五百文、依事繁自造宮所直被下行、玉串大内人物忌父等請之、

れ奉れと申、類々代小工等、東寶殿より御床代取出し奉り、新殿迄運送す、大床之上ニて、禰宜請取、御殿内へ入、(京國の方書く事ぬべし)次御船代御樋代、次東大床御船代、次西大床御船代、(已上物數七品)殿内ニ奉入、畢て末座(小作所)より次第退下著座、次一禰宜大床ニ出、手扶禰宜參昇、御扉を閉退下著座、一拜退出如例、

〔宇治土公家引付〕遷宮供奉

一ふなしろ祭　一みふねきよめにとり物は、きぬ三びきとりて、壹びきは一ろうへやり申なり、一ろう此一疋にて、さいほうでん之みふねをきよめ申候、又殘りは玉くしきよめるなり、さてきよめて後、御せんを三せんしたて申、是は玉くし所にてしたて申、これも一ろう所へ三が一やり申候、

〔宇治土公家引付〕萬治二己亥年十一月臨時御遷宮幷諸祭日時

一廿一日船代祭(禰宜役、皆玉串役アリ、)

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年八月十七日、辰時船代祭、(日時一禰宜撰之)荷用(白頭)啓案内、禰宜一朝喬卿、四常善卿、五常庸、六貞董、七常伴、八茂彥、(各衣冠)權貞嗣、(檜垣、大紋、)武彥(松木、大紋)常平、(檜垣年人、各參籠、衣冠、)一政所代田弘、(黑瀨主馬、狩衣、)家司代尹達、(今井田直記、大紋、)先駈整列例所、政所代持新殿之御鑰、尹達持東西寶殿之御鑰與御船代生絹、禰宜權官參拜本宮、遙拜別宮、到于新宮入于內院、(從者留瑞垣門外、開門戶、)蹲踞於階前東、北上西面、政所代家司代居于列末、(置少間、)權官一禰宜之後、政所獻御鑰、一禰宜取之、起座登階、五七禰宜副左右、到大床拜、發御鑰開御戶、(殿口未有帳、因張雲形、)降階復列、家司授東寶殿之御鑰與正宮御船代之生絹、於常平、又授西寶殿御鑰與相殿御船代之生絹、到東寶殿開御鎖御戶、覆生絹於御船代、(正宮料一具、遣之置于此、)武彥又到西寶殿覆生絹於御船代、(相殿料二具置于此、)復于列、次頭(衣冠)頭代(布衣)工老、(素襖、各覆面手袋、)先是居東傍、此時起參昇東寶殿、舁正宮御船代、出以居之于新殿大床、又到西寶殿舁相殿

拜見、彼殿仁板敷天、於其上奉作之、一頭仁六百、二頭三頭各三百、充宮司賜祿物、

〔文永三年内宮遷宮記〕九月二日

一御船代御樋代、一頭方肅御倉、二頭方鋪設御倉、三頭方御稻御倉、四頭方荒祭宮新造御倉、堪事良匠、各昇殿奉作之、○中略

六日　御船代御樋代御鎰櫃、工等所奉安置正殿之内也、

〔大神宮儀式解〕八件記○寬正内宮遷宮記を案に、御舟代祭は、十二月十九日、遷御は同月廿七日也、十日に足ざる間、御船代木の木本を祭り、夫より伐採て、御船代新造すべきにあらねば、寬正の頃も、はや略義もて形ばかりに其事を行ひ、實にその料木の木本を祭るにはあらじ、其後遷宮毎に御舟代祭あれど、木本祭にはあらで、禰宜作所小作所頭工同代小工等出て、御船代を禰宜受取、殿内に安じ、神坐の平安を祈る也、明和六年遷宮には、七月七日に此行事あり、是古御船代木本祭の轉じたるか、又其祭は絕えて別事か、按に今の世頭工頭工代小工等、造宮の御料木伐らんとて、其御木とる山に向ひ、初て御樋代の料木を伐る時各參集し、御樋代木の木本に、くさ〴〵の物供進し祭る行事あり、これ古代御樋代木本祭の轉なるべし、古記御樋代木木本祭は見えず、舟代も樋代も共に最重の具なれば、近世轉じて造樋代木木本祭となりし歟、世によりてかゝる事、かにかくに轉る事多かり、猶考見るべし、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑八月八日、同夜酉刻、戌刻之處、時刻引上、御船代祭參進、禰宜衣冠、奉供青袍、作所小作所衣冠、持衣、頭頭代衣冠、淨衣、小工、青袍十二人、不二皆勤一之例也、

一鳥居より一殿參進、本宮第四御門より石壺拜如例、次新三鳥居より入、玉串瑞垣御門を經て、物忌父、御鎰にて御門を開く、新殿之前ニ著座、次官長作所之手より御鍵を取、手扶九守約を相具し、昇殿御扉を開き、御帳之內へ入、手扶退下、次傍官作所迄次第昇殿如例、各御帳內へ入、小作所在二大床一、次作所大床ニ出、御船代入

〔建久元年内宮遷宮記〕文治五年七月十一日、卅日穢氣及二宮、來廿七日可滿卅日也、御作事被止畢、來廿二日庚辰鎭地祭、同廿七日乙酉可立心御柱、八月三日庚寅上土棟、同十六日癸卯正殿御棟上等、可被勤仕之處、依件穢氣、鎭地祭幷心御柱日時□□延引、卽注此旨上奏畢、　八月二日、庚寅〇二日恐三日誤任先日勘下文上土棟、　九日又十日丁酉鎭地祭、十一日戊戌可立心御柱之由、雖被宣下、又延引、卽以此旨注進畢、　廿二日、今日鎭地祭、入夜奉仕之、當番禰宜子良等之外退出宮中、依永久例也、　廿八日乙卯奉立心御柱、〇中略今夜造宮使退出宮中、正權禰宜等、或退出里宿、或退下村館、竊以祇候、明日可有御棟上也、而御柱穴前々兼日奉堀之例也、今度依無其中間日數、難叶兼日役、是未奉立心御柱之以前、自餘御柱穴、不可奉堀之故也、又臨當日奉堀自餘御柱穴者、若難合期歟之間、造宮使禰宜各成評議之處、猶明日始自未明奉堀、何不合期哉之由各以議定、仍被定明日之儀畢、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

取吉日、爲造御船代木、率宇治大内人一人諸内人等戸人夫〇夫一本作等杣山木本祭用物、幷行事注左、〇中略

右如之祭告刀申御巫内人、畢時山向物忌、先以忌鋤氐木本切始、然後神服織、神麻績内人、戸人、幷諸役夫等切造奉、御船代料材、自杣出時、前追運進正殿地之、

〔外宮假殿要須記〕御船代祭事

件祭者、三方頭工等、幷御巫内人等進參御杣山奉見定料木、於彼木本、御巫内人讀祭文、棚於上下二重仁搔之、五穀於鷄卵許仁肇里、又鷄乃卵以下之祭物於令供進、奉山口木本之後、三人頭頭代伐始之後、小工等伐之者也、件御船代、麻績服神部之沙汰、出山幷門河於、自門河迄宮中之持夫、又以同前也、件御船代奉入于宮中之時、二鳥居之内、玉串所之東程仁天、禰宜著衣冠奉拜之、〇中略　正嘉二年御一宿假殿日記云、八月十三日、御船代直會殿奉入、爲頭工等之沙汰、雇人夫奉持入、禰宜各於玉串所有

一前年之秋御立柱有之、冬に至り御萱を葺覆ひ候へば、大方御造營之事濟候而、來年御遷宮之秋迄、徒らに數月を經申樣に相聞へ申候へ共、御階高欄廻りより、御殿內重々秘傳之營作は、遷御之前月迄に仕立申候而、小工共清鉋をかけ、物忌父等洗ひ淸めと申勤めを仕、御殿を淸め申候故、御殿之古び申義無御座候御事、

一作所頭工中へ僉議仕候處に、來年御立柱有之事に候へば、補任頂戴不仕候、增大工共を雇ひ入不申候ては、難致御成就候旨申候間、則其通之書付取置申候、願は小工職に補し申候者共として御造畢致候樣仕度奉存候御事、

右神宮之衆議如斯御座候間、當九月中に御立柱御上棟日時之宣旨を奉請度奉存候、但御公儀之御旨難測御座候間、兩奉行所へ被仰上、御指圖次第に可致其沙汰候以上、

正月廿二日　　神主中

外宮長官常和判

皆川勘介殿

廿五日、從皆川氏來狀、同返狀如左、

昨日者御使者被遣候、○中略追啓、御柱立之義、拙者內證ニテ有增申上候、內宮作所服ニモ在之候、來春ニ成可然樣ニ思召被成候由被仰下候、是ハ御內意ニ申進じ候、其御心得御尤御座候、必申上候段、御沙汰被下間敷候以上、

正月廿五日　　皆川勘助

外宮長官樣　御近習衆中

二月十九日、內宮九禰宜、來于外一禰宜里宅、立柱上棟日時比、及來年○遷宮年二三月可執行之、兩宮衆議一決、

一來年八九月より御萱をかり置候而、再來年二三月に立柱上棟御座候はゞ、四五月に御萱を覆立可申候はんと奉存候哉事、

右神宮中之衆議如此御座候故、作所頭工中へ申渡候處、何れも同心にて、如此以書付を申候間、定而相違御座有間敷候、爾者來巳年二三月之中、日時之宜旨を被成下候樣に、來年之奏聞可仕候、但御公儀之所趣、如何御座候半も難測御座候間、兩御奉行〇山田奉行岡部駿河守、大島出羽守、所江被仰上、御一左右により、其沙汰可致候以上、

貞享四年十二月日　神主中

内宮長官經盛判

皆川勘助殿

貞享五年〇元祿元年戊辰正月十七日、兩神宮集會于常明寺、〇中略兩宮之所存不一決、各退出、廿二日、立柱上棟等願望狀、以檜垣左近、追呈于小林奉行所、其案如左

外宮神宮申上條々

一御遷宮御立柱上棟之義、御遷宮之前年に遂行候事、御造宮之御爲よろしく御座候、慶安寛文之御遷宮にも、前年之秋御立柱有之、同冬御萱を葺懸り申候、翌年御遷宮之節迄、風雨之犯し、霧露之濕を見立申、若危惡之義有之候はゞ、是を改め申爲に御座候御事、

一御神殿之義、人家とは違ひ申、一度奉成遷御候以後は、危惡を改め、破損を修補仕義罷成不申候、止事を不得候時は、假殿遷宮を執行ひ申事に御座候而、安からぬ次第に御座候御事、

一御營作之内、別而念を入申義は、御萱葺之義に御座候、風雨犯し安く、雨漏有やすく御座候故、前年より來春迄に葺覆ひ申候而、風雨毎に見立申、若雨漏之傳ひ御座候へば、是を葺改め申候而、數月以後に一方之御萱之色相變じ申候故、其所を葺改め申候御事、

儀有之、上卿葉室中納言、宣相奉行中御門右中辨宣衡參仕、辨清閑寺左少辨共房、大外記師生、官務孝亮、〇下略

〔元祿外宮正遷宮記附錄 一〕貞享四年丁卯十二月廿五日、從内宮長官來狀并書付二紙到來、同返狀案如左、

久敷以書中不申承候へ共、以事次一翰致啓達候、先以御勇健ニ御勤之由、珍重不淺存候、仍者再來年〇元祿二年御遷宮ニ付、立柱上棟之義、小林〇山田奉行ヨリ度々御尋被成候へ共、御返答不決ニテ、御立腹之段、致難儀候故、内神宮中致衆議候而、如此申上候、外宮神宮中へ御相談被成、作所頭工中へモ被仰渡、早々請狀御取候テ、衆儀之趣、小林へ被仰入可然存候、〇中略恐々謹言、

十月廿五日　内宮一禰宜

外宮一禰宜殿

内宮神宮中申上條々

一來巳年〇元祿二年御遷宮御立柱上棟之事、遷宮同年ニ可仕事、

一寛文年中御遷宮之剋者、遷宮之前年、立柱上棟等御座候へ共、當神宮中致衆儀候處に、立柱之砌、御材木をさらげ候而、數月經申、雨露におかされ、塵埃吹かけ申候はゞ、さらげ申詮も御座有間敷候はんと奉存候哉の事、

一來年上棟御座候はゞ、追付御萱をも葺申候而宜御座候半を、于今御萱之支度も無御座候、來年之かやをかり候て、乾枯候をも期せず、生萱を以葺申候はゞ、御屋根之よはりにも罷成、年月經不申、朽損可仕樣に奉存候御事、

一御枝葺之宮々を立置候而、數月雨露にあて申候はゞ、水をもふくみ、炎天には御板もひらき可申と奉存候事、

立柱次第、先東次西次北次南、

右權中納言藤原朝臣公廣宣、奉勅宣任日時令勤行者、社宜承知依宣行之、

慶長十四年七月二日　　右大史

左中辨藤原朝臣判（孝房加判）

十三日壬辰、立柱上棟日時宣旨、遣祭主之處、宣旨不入之由返之、　廿三日壬申、伊勢日時有宣旨之條分明也、仍相調書狀遣祭主、

豐受大神宮柱立日時上棟日時之事、宣旨二枚獻之、可被下知之狀如件、

七月十二日　　右大史（上書實名也）

祭主殿（宣旨二通壹儀遣之）

八月十六日乙丑、內宮外宮遷座、前後相論之事有之、內宮禰宜者、天正之度內宮爲先之間、今度申可爲前之由、外宮禰宜者、駿府將軍相語、永正度例、外宮爲前之由訴申云云、各兩宮御敎書一通宛有之、兩宮一同遷宮、永正天正之例、是兩度計也、自兩宮出例如此、從禁裏內々以傳奏被仰出旨者、內宮可爲前之由也、然而駿府將軍之所存、被計思召之間、從年寄衆武門所存急度返札次第、可被儀定之由也、依之日時勘文心御柱正遷宮斗書載之、日時陣儀有之、重而自駿府返札次第、宣旨可書試者也、戌刻、外宮心御柱正遷宮日時定、上卿花山院大納言（定熙）、奉行中御門右中辨宣衡參仕、辨左少辨共房、大外記師生、官務孝亮、六位外記中原生職、同史三善英房、陣官人楠田宗昌、　廿七日丙子、今日正遷宮日時定計可有之處、自祭主依心御柱日時之事申之、是自正遷宮日時爲以後之事者、可被付行之事歟、然而心御柱者、自正遷宮以前有之事也、依之傳奏祭主等有密語、心御柱正遷宮被仰詞有之者也、心御柱之事、則日時定等可有之事歟、然去年進駿府將軍家帳面目錄、上棟心御柱付行雖書立之、祭主不領承、故延引、正遷宮日時定、心御柱日等定、同時被行之者也、內宮心御柱正遷宮日時定、午刻陣

造外宮立柱日次

卯月十三日辛卯　時辰未

上棟日

同日　辛卯　時未申

六月廿三日己亥、時辰未

立柱次第北南西東　如此方之事ニハ候へ共、當宮へたつみヨリ立也、

三月六日　正二位賀茂在富

六月十九日、御立柱有、作所より檜長鮑百本御つかはし、是も例になるまじき事也、

同廿三日御上棟○中略　同日神事如先規也

〔慶長御遷宮日次〕御立柱祭之次第

七月廿四日○慶長十四年申ノ刻也○中略

御上棟祭之次第

八月十一日神事未ノ刻也

〔孝亮宿禰記〕慶長十四年七月十二日辛卯、今日兩。宮。立。柱。上。棟。日。時。定。陣儀也、同宮上卿西園寺大納言、宣孟奉行萬里小路左中辨孝房參仕、辨清閑寺左少辨共房、立柱、○立柱恐誤字外記小槻定昭、六位史中原生職、陣官人、戸略重元、○中略

左、辨官下豐受大神宮

應任日時、令勤行當宮立柱之事

今月廿四日　癸卯　時申

廿七日　丙午　時未

〔玉海〕建久二年六月十三日庚寅、勘豐受宮上棟日時云、（八月十二日、○諸日廿七日云、但雖別紙不載勘文也、）

〔勘仲記〕弘安七年八月十四日己未、大神宮心御柱者、月（○月上恐脱今字）廿日閣被勘下日時、鎭地祭日同日奉立之由、造宮使爲成朝臣申上、行事辨雅藤問先例奏聞、執柄辨三公等可有勅問云云、（○此間恐有脱文）改者道理也、若又如元可被量歟、神宮事異他、可被決御占之由、人々御所存一同云云、　十五日庚申、參內、心御柱以宣下日被行御占、頭大藏卿（○平忠世）俄承之、陰陽師等所相催也、七人雖有御點、四人參仕云云、頭卿著下戸横敷座、陰陽師等在藏人所、（○下侍不及數座）御占之趣、不被奉立直之條叶吉云云、頭卿內覽奏聞之後、其趣仰行事辨云云、建久九、心御柱沙汰之時者、被行軒廊御占治定之趣、又職事長兼令宣下之由有所見、今度爲藏人所御占、又不被宣下、若聊爾之御沙汰歟、神鑑難測、違先例者也、

造伊勢大神宮心柱、今月廿日、可被立處、誤鎭地日奉立之、以勘下日可被立改歟、將又不可被改歟、

占、今日庚申、時加申、（奉宣日時）旨、神后臨辰爲用、將騰蛇、中傳送青龍、終天口玄武口口行年未上、大衝大陰、卦遇聯茹洞下、

推之被改立不宜歟

占、三籌、徵明臨戌爲用、將大陰中口終從魁大裳、御年上傳白郞、卦遇推薄不循三光、

推之不被改吉乎

弘安七年八月十五日　　曆博士賀茂朝臣在秀（○以下署名略）

〔寬正造內宮記〕長祿三年己卯十二月十七日、上棟次第神事等、日時勘文宣旨、以出納內人廻覽、

鎭地祭十四日時巳　立心柱十六日時卯

立正殿柱上棟廿三日時寅　立御戸同日時申口口口　廿六日時巳

〔永祿之記〕弘治四、三月廿日、從祭主殿作所へ、御立柱上棟勘文副狀アリ、

〔本朝世紀〕仁平三年六月廿七日乙酉、成通卿改裝束、著左仗、定申造豐受宮雜事日時、右中辨光頼朝臣行之、鎭地、七月十六日癸卯、時巳二點、若申、立心柱、七月廿八日乙卯、時午二點、若申、立正殿柱上棟、八月十日丁卯、時巳二點、若申、上棟時午二點、若未、立柱次第先東次西次北次南、立御門、同日丁卯、時午二點、若申、

〔兵範記〕仁安四年〇嘉應元年二月十七日甲辰、今日左大將〇藤原師長參著仗座、令定申造大神宮遷宮雜事等日時、藏人少輔宣下、右少辨重方奉行、〇中略

陰陽寮

擇申可被始伊勢大神宮造作雜事日時

鎭地日時

三月二日戊午　時午二點　若申

立心柱日時

十五日辛未　時巳二點　若申

立正殿柱上棟日時

四月三日己丑

立柱時午

立柱次第

先北次南次西次東

上棟時午二點　若申

立御門日時

同日　己丑時午二點　若未

仁安四年二月十七日

略

雲形張之、(大宮官下、紺布八反、(中略)未到之時、以奥布勤之、造宮所勤也、)奉結麻柱、役夫五ヶ日勤也、(人夫供給作所沙汰也、在頭工注文、)楉一萬支、(繩一萬方、)御上棟祭物、清酒三瓶子、(小土瓶也、三河尾張土瓶也、)餅三外居、(料米各五升、員各五十枚、)布七反、(加麻実一反定也、)一麻代布一段、凡絹六疋、折敷六枚、鍬三口、供米三斗、紙三帖、(上品、)鮑三連、(中細也、)堅魚三連、土器大小百五十、綿卅枚、五色絹合五尺、苧三把、

已上作所沙汰也、(但加官下祭物定、又外居土瓶等、作入下行、頭工給之、)

布綱三筋、(奥布六反、)二筋、(同布三反、)麻綱三方、茅綱三方、引繩并五寸釘十隻、弓粒奥布一段、墨一廷、口二口、鎚二口、(忌物、兼日奉作之、)

已上自作所下行之、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑二月朔日辰刻御立柱神事、

中央柱御前にて供物(枚子二ツ、はたき餅、四所に一重宛供之、)長持之上置御酒各献之、(四頭々工小工各一人進出献之、)

廿三日卯刻上棟行事、

工老等御屋根より餅錢等を蒔下す、凡餅數三百三十三、錢數三百三十三文なり、

御殿の前長持の上(此長持四荷有之、)御酒奉獻、(頭代掛酒、頭奉獻、四ヶ所とも同斷、)

〔豊受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年二月十二日立柱時午

晝番内人(白張、)實粢於盆蓋一口、(加賓、粢盆蓋政所豫調之、)取以置于柱東南隅、晝番又取實志乃世之土瓶置之柱基、(東南隅、)

二月廿七日午時上棟、

三方頭工下部舁長櫃三合、小工及從者開櫃蓋、取供具列備于櫃、(餅三圍、長鮑一把、干堅魚一連、乾魚一連供之、又備瓶子銚子提子、居酒坏於木具置之、)又倚立大麻長櫃、(大麻者、謂檜串可長五尺、結附絹紙白絹志端絹二物、綱裁三方共同製之、)櫃前鋪蘭筵、(筵上重鋪、)晝番内人(白丁、)實粢於盆蓋一合、(加賓、政所出之、)立東南柱下、晝番又取瓶子(實清酒瓶子、)立初所、

之三方、高五尺、長弘各三尺、廣面也、）供御饌五前、（各置案上、案各居土器五口、）鐵忌物、（人像、小刀子各二十枚、鏡二口、納唐櫃一合、以黒木作二案、）

（日令鍛冶内人造作之、）鏡二貫、（以絲貫之、付榊木端、）鷄卵二十九、（以土器盛之、）挿五色薄絁各一丈木綿（以麻代之、）麻等于榊五支、樹於

五方、（東青、南赤、西白、北黒、中央黄、）又設造殿具、（鏡作具、大麻等也、）

〔遷宮例文〕十九年（一○第十九年、第式年、）仲秋御上棟事

奉立心御柱祭物次第行事

官下祭物司庫勤、作所勤役如鎭地祭式、但玉串以下饗料各一斗、從料各二升、散供米三升下行也、奉

奉切心御柱之本口料鏡一枚、忌鍛冶内人奉作之、（長五寸也、）本奉著心御柱垣料楉一荷、蓋二方、食米陸

升、山向内人、爰日請預之、（此鏡等之、云々、六升内人司庫勤之、）

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑八月十一日巳剋、爲心御柱檢知禰宜各參昇、御

柱奉伐、五色糸卷之、（宮守長、奉仕、）禰宜各手傳之、於西中假ニ歸、

今日作所ヨリ下行、五色糸小刀（宮神）鏡（忌大物父）一家（内人由）也、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年三月廿日御巫内人猪直呈上願書云、心御柱纏糸長貳丈一尺、

五色纏糸、一色量目貳拾目、合百目、右如格例、心御柱祭以前調備以授之、今日呼御巫於一禰宜家、

如所乞相授、

八月四日御巫内人伐心御柱、祭所用之木、先是御巫來于齋館啓、心御柱祭四五日前、爲御垣料伐榊

木七十本、（三十本、徑一寸二分、四十本、徑二寸五分、）榊十把、（長六尺）是以今日伐之、

〔遷宮例文〕十九年（一○第十九年、第式年、）仲秋御上棟事

正殿荒祭御門等行事

祭物茅三把、麻三把、米一斗、餅三外居、（方一尺、足高、作之、已上料米一斗五升、官下定、）酒三瓶子、（各三升）布三

反、（官下布也）簾三連、堅魚三連、紙一帖、筵一枚、薦一枚、土器大小百、折敷六枚、准布三反、凡絹二疋、（加定○五帖）

〔遷宮例文〕十九年(〇前式年ヨリ第十九年)仲秋御上棟事

地鎮祭

鐵人像卅枚、鏡卅枚、鉾卅枚、長刀子廿枚、鉾四柄、鎌二張、小刀子一柄、鍫二口、(尋常也)鋤二口、(同)五色絁各一丈、木綿二斤、麻二斤、　已上官下、

米二斗五升、(飯野郡司勤也)酒四斗、(多氣郡勤也)雜海藻二斗五升、鹽二斗、雜腊四斗五升、堅魚七斤、鰒七斤、雞十翼、同卵六十枚、(度會郡司勤也)陶器土器二十口、(司庫勤也)　已上司中勤也、

御供米四斗八升、(官斗)上紙二帖、小紙五帖、桶二口、杓二柄、堝四口、折敷廿枚、薦一枚、明衣唐布二反、(官下)酒二瓶子、續松、(十把)玉串幷三色物忌父三人、各饗膳料一斗、從料各二升、御巫内人山向内人各一斗、散供米五升、鐵錢切卅枚、(以忌鍛冶内人、於河原殿奉作之、如山口祭之時也、)

〔永祿之記〕弘治四、六月十五日、御巫地沈祭之事申候、頭衆頭代小工へ届有之、(中略)廿二日御巫前六貫にて相調也、代先二貫渡也、鍛冶前壹貫文にて相調也、一臈鍛冶御地鎮祭日役之物、卅三ッ、の物を、十ッ、に御隱密申、神前にて御巫御鬮をとり申候へば、十ッ、折候故也、過分に此料、鍛冶一臈請取可申之由申候へ共、作所申事は御祝計有事候、先規如此、但鍛冶記錄候者、もちい可申にて候、又鍛冶は此役仕候故、上分米定候て有之由申候、扱々御祝壹貫にて相調也、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑正月廿一日(〇地鎮祭)玉串定行、(束帶)所從雜色、(二人)白張、(二人)五色幣持、(五人)供物持、(四人)長持一荷夫、(二人白張)附添、(二人青襖)手傳、(二人麻上下)

、但し作所より玉串内人に下行者、米三俵、鳥目四拾匁、金一兩、幣串五本之由也、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年正月十五日地曳祭、(古謂之地鎮祭、近來習俗號地曳祭、)

前日御巫内人石部清直、書記年久所廢絶之祭物、欲復古獻備、條々呈宮廳、而請許容、(其値御巫悉辨之)先期入宮山、伐黑木八十支、榊枝六束、豫架構棚一基於新宮地古心御柱之正南八尺許、(棚以黑木作三階、以榊枝飾東西北、)

宮、檜垣内記大夫政所武彦、松木大隅狩衣到木柴垣、大物忌父正位、正道、延命、貞文、常榮、用和、奎光、末達、範孝、各衣冠列、候于御竈屋前、〇中略到新宮、禰宜南、北面東上、權官著禰宜之後、物忌父西、東面南上著座、一頭工展親、東田讃岐二頭工正矩、辻左京三頭工常孝、中西叙眞各衣冠手襁掛頭代末韶福島伊豆滿直白米左近芳久高矢衛冶郎以上、布衣掛手襁小工廿七人素襖手襁掛忌鍛冶內人凤秦中川四郎牛友範尾崎平馬德光守川平衛門、各衣冠、相共侍禰宜之到著座中庭、一頭方西座、東面北上、其南二頭方、東面北上、三頭方東座、西面北上、其南忌鍛冶、西面北上、〇中略壹番內人白張實榮於盃盞一口、加賀、政所由之、立東南柱下、副物忌常榮起座、取壹番所持之盃盞、實榮新殿柱下、旋自東南隅、至南西北東壹柱、復座、壹番又取瓶酒、實清酒瓶子立初處、副物忌用和、起座取瓶子、灌供之柱某、次第一同上、次一頭工展親起座、徒跣北面對櫃前一拜、次頭代末韶、次一頭之工老起座、拜如上、次執銚子提子、沃移瓶酒、一頭左手持足付臺、右手把土器、東面頭代執銚子、工老執提子盛酒、爲加、一頭供長櫃上、一拜復座、次二頭正矩、頭代滿直、工老起座、一拜供酒、其儀如一頭、次三頭常孝、頭代芳久、工老起座、一拜供酒同上、但三頭者、西面受酒、次一頭起座、進寄于櫃前、伏拜執幣、幣者附麻木綿等、鏤置于長櫃前、持左手、以右手散鏤切散米、起向于新宮振幣、左右左、次南向振之、次東向振之、次西向振之、次振掛于禰宜及物忌父、一頭來、人別前振掛之、但不振掛權禰宜、次振掛造宮奉行、〇山田奉行河野對馬守一禮置幣於櫃前復座、次二頭、次三頭振幣、一同一頭、次小工等用梯昇新殿屋上、小工二人分對東西執槌打棟木三度、次小工等退下、次大物忌父正位起座來、蹲踞于一禰宜前、啓御神拜復座、各八度拜、啓祝辭、起座到遙拜所、拜別宮、高宮有八度拜木柴垣北御門社、歸齋館、小工等造弓箭形、飾棟木東西、

〔延喜式〕四伊勢大神宮鎭°祭°宮°地°後鎭准此、但除明衣及鐵

鐵人像以下小刀子以上、同心柱祭、鍬二口、五色薄絁各一丈、木綿、麻各二斤、酒二斗、米二斗五升、雜腊二斗五升、堅魚、鰒各三斤、雜海菜二斗五升、鹽二升、雞二翼、雞卵廿枚、陶器土器各廿口、禰宜內人物忌等五人明衣料絹二匹、度會宮減一匹、築平正殿地、禰宜、內人等八十人明衣料庸布八十段、度會宮減中

棟にて槌を打、次萬歳棟と呼ぶ、次永々億棟と呼ぶ、次第同前也、右畢て禰宜以下各退著座、
次工老等御屋根より餅錢等を蒔下す、凡餅數三百三十三、錢數三百三十三文なり、○中略
右修て工老等御屋根より下り著座、次頭々代御殿の前、長持の上御酒奉獻、次頭々代進出、乍持幣四方拜有之、工老相添、毎度舗設を直す、舗設白布を用、次第同前、次小工四人宛進出拜、亦同上、
次四頭代杉藤大夫光榮作所の前に進み、神事畢之由申、次小作所起座、一禰宜の前に進み、同狀を申歸座、
次退出於本宮石壺拜如例、○下略

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年二月十二日立柱、時午、
前後所堀柱穴、築固穴底、居盤木、西柱裁梁、縫合壁板、横斜實之穴中、次柱、又次柱上裁梁、東柱如西倶横斜于西方、而實柱根于穴中、正殿方位張雲形、凡小工役夫、登高則必張雲形、令遮掩其方位、隔中正殿上、
午時荷用白張啓案內、禰宜一朝喬卿、四常善卿、五常庸、七常伴、八茂彥、各一夜參宿、衣冠、二常逢卿、三常代卿、六貞董、依所勞不參、權官常賢、大夫、政所武彥、狩衣、進以整列於例所、又入木柴垣內、物忌正位、正道、延命、貞文、常榮、奎光、末達、範孝、各衣冠、出以列踞於御竈屋前、○中略到新宮地著座于舖設、北面東上、權官著禰宜後、物忌著座西舖設、東面南上、晝番內人白張實案於盆蓋一口、○中略取以置于柱東南隅、副物忌常榮起座持盆蓋供案於柱穴、始自東南隅至南西隅、西北隅、東北隅、置盆蓋於初所復座、晝番又取實志乃世之土瓶、○中略置之柱基、東南隅、副物忌奎光起座執之、灌供志乃世柱穴、一同供案之儀訖復座時、小工等登於所構之臺、旋轉轆轤、操綱以興立東柱、今立東柱止、事畢而大物忌父正位起座、徒跣、蹲踞于一禰宜前、啓御神拜、相揖復座、各八度拜、啓祝辭起座、物忌父等歸館、禰宜到于遙拜所拜別宮、高宮八度拜、次拜木柴垣北御門社、歸館、作所代多氣司喜多讃岐、一頭、二頭辻左京、三頭中西叔頁、一頭代福島伊豆、二頭代白米左近、三頭代高矢部菊次郎、各麻上下著、物忌北舖設、工老六人著素袍懸淸襪、著座于北方、瓶子五個實酒、進置于棚上、禰宜歸館之後其酒、
廿七日、午時上棟、○
荷用白張按內、禰宜一朝喬卿、四常善卿、五常庸、六貞董、七常伴、八茂彥、各一夜參宿、衣冠、二常逢卿、三常代卿、依所勞不參、權官常

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑二月朔日、辰刻御立柱神事、禰宜衣冠指貫、供奉雜色、權任大紋、作所衣冠、小作所大紋、物忌布衣、頭頭代麻上下、小工素袍十二人、著座等、如地曳祭、略之、自一鳥居參進石壺、拜如例、次東宮地著座、瑞垣の跡處著座有、設作所沙汰、如地曳祭、奉行所○山田奉行入來小屋之後、工老四人罷出、一拜之後、各槌を持て、先中央の柱を打三度、次二人宛出て四方柱を同時に三度打、如御鍬時、右畢て中央柱御前にて供物、凡九獻、畢各三拜、次工老一人作所の前へ蹲踞、申神事畢之由、次小作所起座、一禰宜の前へ進み、同狀申上了著座、禰宜以下退出、但し奉行所は、工老進出るを見て退出なり、如地曳祭例、

廿三日卯刻上棟行事、禰宜束帶、權任一二臈上座二人也、衣冠著用、自餘權任大紋、政所狩衣、玉串作所衣冠、小作所狩衣、物忌布衣、頭衣冠、頭代布衣、小工素袍、忌鍛冶麻上下、等也、此外奉行所麻上下、附添神宮年寄、各大紋、自一鳥居參進一殿、參集之後、宮地石壺著座如例、假石壺也、常例石壺の處、人長設之、次一頭代菊屋兵部末男、小作所富田上總守倅前に來、時刻相成候趣申、次小作所起座、一禰宜經陰前に進出て右の趣を申、次禰宜以下各起座鋪設、瑞垣御門之跡頭々代小工等彙面著座、供物等備設有之、禰宜以下著座畢、小工二人起座、御殿の前進出兩方に分れ、青竹を以て間尺を打、杭を打候處まで志るしを致し置、すぐに間尺持ながら、兩人作所の前に進み、間尺畢之由を申退く、小作所座を起て、一座の前に進來、同狀を申歸之時、杭を打處まで進出、御殿の方に向ひ、御上棟致し候へと申歸り著座、次小工二人杭を持、二人槌を持進出、志るしの處へ杭を打、槌三度打の後、禰宜の方に向、一拜して退く、○中略

次工老四人、青袍御殿の上に昇る、假橋より進昇る、手傳日雇餅錢等持參○中略

次工老等御屋根より白布二筋を垂下す、小工兩人立出、布を杭へ結付置、手時一頭代菊屋兵部末男二頭代、大國左內盛業榊枝を捧持、正殿の前南向立並び、榊を振りあげ發聲す、於字と呼ぶ、次禰宜以下頭々代小工等各起座、右の白布に手掛申、打替々々、左右二筋白布を引中強也、左は上座、右は下座、次工老一人、三頭工老白布二筋の中央に出て、御屋根を見あげ、北面なり千歳棟と大聲に呼ぶ、聲に應じ御

おび　あふぎ　くつ

一中おいこ　小おいこ　大つく　中つく　あらまつこがぶん

しろき裳　ひさへのあこめ　かけおび　あふぎうらなし

一おもらがぶん

うすぎぬ　きなる裳　かけおび　うらなし

一そいのうばがぶん

しろきぬの丶大かたびら一

一こらおもらがけしやうのぐそく

あかてばこ　た丶うがみ　まゆつくり　かねつけふで　ときぐし　べに　しろき物

巳上是等子良仁沙汰〇中略

一頭工しやうぞく　造宮所より下行之

工等裝束事

一とう、五ゐたるあいだ五貫文、　二三四とう、六ゐたるによて四貫文づ丶、〇中略

一今度たくみに下ぎやう用途事

工以下祿料事

とう四人、三十貫文ヅ丶、

とうだい四人、十四貫文ヅ丶、

せうく、かちらに、十三貫文ヅ丶、

むましろにてさたのぶん二貫文、かざりのしろ二百文、しろをうけとる、たくみがぶんのむまは、おの／＼自馬をよういしてひく也、

男大宮子白將衣　上下在紳　生相　假裝具　扇裏無

男中宮子　小宮子各同前也

女大地子相白裳　懸紳　假裝具　扇裏無

女中地子　小地子各同前

女荒祭子同前也

母良　生衣一領　裳一領　懸紳　櫛一枚　扇裏無

副媼帷布一段

頭工四人袍一領、（五位六位、有紋無紋、）帷一枚、袴一腰、（布）冠沓、

祿被物、（近代、代物也、上棟以後下行歟云云、）馬四十六匹、（頭工四人料、在鞍皆具、飾白差縄、左右兼毛付在之、如大机散行之、）大小職掌人等饗膳、懸盤小机散行之、

東西寶殿、御門鳥居等、國々雜掌請工等經營、祭物等同使等勤也、外幣殿上棟是同也、○（又見元久元年、及元亨三年内宮遷宮記、寛正遷内宮記、）

〔元亨三年内宮遷宮記〕元亨二年八月御上棟次第

子良裝束事

こら十人、おもら、そいのうばがしやうぞく、今日こさく所與正神主、ちやうぐはんのたちへもたせて參す、せい所兼宗神主、これをうけとる、

一大ゐこがぶん

あこめ　からぎぬ（おの〳〵すゞし、のひさへなり、）　くれなゐのついたてばかま　あふぎ（うらなし）

一大宮子　中宮子　小宮子がぶん

ゑろきぬの、じやうゑ　ぬのばかま　大かたびら　すゞしのひとへ　きなるきぬの大口

慶賀、又入以閉門、禰宜權官、從此遙拜別宮歸館、

〔遷宮例文〕十九年〇(前式年ヨリ第十九年)仲秋御上棟事

正。殿。荒。祭。御。門。等。行。事。

正殿荒祭宮御棟木盤板、從日來付宮地也、(但作河下香食內也、木工作所夫、件板未到之時、奉用步板幷瑞垣板等例也、)柱穴堀事(新鍬儀用之、夫)請人、作所勤、官下歟當用、後以用途一口別百文、送神宮也、是闕如之時例也、)地破役夫作所沙汰也、(吉日酒肴在之、)水量幷桶杓作所沙汰也、(各一柄)正殿上棟於忌火屋殿前所奉上也、(吉日中略)〇

御。上。棟。儀。式。

先就案內、(作所雜色、)禰宜(文治以前衣冠也、文治以後束帶也、)自南御門參本宮、神拜、(祗承衣冠、)元自同御門出天、自新宮南御門參天、東上北面列座也、其後造宮使參也、(神拜、)東方著座也、禰宜西舊跡石壺也、于時奉立御柱、(次第任貼文立之、)次渡桁、次立御棟持、次上棟木、然後祭棟也、(三人頭工同時、中部刀、各衣冠、)(或記云、先御棟持柱奉立之云云、文治記云、是非無事危、非儀云云、先御壁柱奉立之、居水量奉切調木口、其後奉上桁梁棟木棟持也云云、)次使、次禰宜對座權任等、著一殿座席饗膳、次第如山口祭木作始、亦工等座同前也、各饗膳事畢、召頭工等、一頭賜馬一疋、(在黑鞍大盤泥障鞦轡皆具、)侍二人引之、(一殿前自西方引之、工居石積、)二三四頭同前也、次一頭方自頭代迄小工給之、舍人引之、二三四頭方同前也、(但馬各一疋、充工數鞍也、在飾具、)鍛冶同、次頭工等四人、於當座預被物、(侍取之、)其後工等參拜寶前、禰宜以下退出也、(中略)禰宜祿物裝束袍一領、帷布一反、(細美、)差貫一具、(料絹疋半、)下袴一、(料絹一疋、)冠一、(兼以顯形被下冠師也、)沓一足、扇、已上不裁縫之、(在送文、幷請文、)權任四位各帖絹六丈、五位各四丈、(在送文、)子良裝束、(在送文、)單重唐衣袙、各綾染色等無定色、尋常也、

女大子單重唐衣　紅袴　假裝具　扇裏無

女中大子袙　白裳懸紳紅　假裝具　扇裏無

女小大子袙　白裳懸紳　假裝具　扇裏無

〔外宮假殿要須記〕御上棟次第(付奉心御柱事、有地鎭祭、)件祭物者、事始之時、自神宮書送祭物、送文一紙之內載之、仍色節內人、并大物忌、及忌部內人、相共待剋限、例御饌之後、供奉人之外、諸人退出之後奉立之〇(心御柱)也、今日夕地鎭祭有之、而如近代沙汰者、御上棟前夜、地鎭祭有之、遂勘文歟、不審、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑八月十一日、同夜酉剋、心御柱祭參進、一禰宜(東帶)二守訓、三經竿、四守民、五守雅、(手扶也)六氏養、七守良、八經美、九守約、十氏朝、(各衣冠、手襁麻襁中也、)政所德輝、(淨衣)家司、(狩衣)大物忌父弘恭、(衣冠)山向內人、(衣冠)御笥作內人重識、(上野大二)出納二人、(白張)

一鳥居より一殿第四御門本宮石壺拜、次新玉串御門より瑞垣門塀を通り、北御門より入、(供奉人は此處に留め置)新宮前拜伏、次一禰宜手扶禰宜、雲形幕內に入、自餘禰宜は幕外著座、次一禰宜傍官、參候さ被申之後幕內に入、階下著座、(東上北面)大物忌(東方西面)坐、山向內人鍬を取り地を平ぐ、(榊葉を取去)次御笥作內人出納機殿より忌柱を取出し來、一禰宜の前へ置退去、次古御柱添柱を取除、淸筵に包む、次禰宜三人、西寶殿參昇、添柱を取出し來、於階下山向內人御柱の穴を堀、大物忌父御柱を切始め、一禰宜手扶禰宜奉建鎭畢、辛櫃より天平瓮八十枚取出し奉安置、(有口傳)榊葉を以て不見樣に掩ひ、繩にて結ひ、地上は淸砂を以て高低を平げ、(古御柱の石は階下側に置く)次著座、(如初)次作所十氏朝、詔刀文を一禰宜に授く、大物忌父御饌を備へ、御酒を案下の薦に居、(杓は大物忌三禰、弘脩手扶淨衣也)一禰宜進出告刀讀進、(開手兩端)退、次二獻、(一禰宜開手兩段)次三獻、(同上)畢て退出、北御門より歸、(如初道)本宮石壺拜伏、荒祭宮以下如例、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年八月十九日、戊時心御柱祭、御巫內人淸直(衣冠)啓案內、一朝喬卿、(三夜參宿東帶)四常善卿、五常廣、六貞董、七常伴、(各一夜參宿衣冠)權貞嗣、武彥、常平、(各衣冠)出齋館、往整列于例所、著本宮石壺神拜、詣新宮蹲踞于瑞垣門東、西面北上、權官列于玉串門東、御巫內人開御門、出啓案內、一禰宜揖入內院、(二禰宜以下留居)既心御柱祭畢、(行事神秘)出內院、御巫又出來啓、

右行事終而、作所より御鍬持二人宛、御鍬を捧げ進參、各五間ばかり隔て進參なり、(先御柱の前、御宮地巽方、艮方、坤方、各乾方、標有之、)先御柱の前にて、二人一拜の後、立て鍬を持て、三度(右左右)地を平ぐ狀をなし、一拜後退く、如初著座、次御階前(江)二人進出拜之、後地上を平げ、三度の後拜退同前、次四方一同二人宛、艮巽乾坤の方に進み、平げ終て退く、(其狀如前、)次奉行所拜見終て退出也、此時御鍬持十二人、各青襖の上に明衣を掛く、

右行事終て、禰宜權任以下退出、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕嘉永二年三月十五日地曳祭、○中略辰下剋荷用啓案內、禰宜一朝齋卿、五常庸神主、六貞董神主、七常伴神主、八茂彥神主、(各衣冠)權禰宜貞俊、(直垂)物忌父正位、正道、延命、貞文、末遂、用和、範孝、(各衣冠)進到本宮、各蹲踞八度拜、(實不八度拜、稱唯再拜也、)畢正權禰宜、歷本道而到于新宮地、著座于南方鋪設、北面東上、物忌父不過南門、西行直到新宮地、著西方鋪設、東面南上、御巫內人清直、(衣冠)坐于東方鋪設、西面、(禰宜以下鋪設者、預鋪設役人設之、)于時御巫執祓辭及祝文貳箇、一揖起座、(徒跣)進上于棚前鋪設、蹲踞北面、撤散供、揮大麻、以修祓辭、畢又立大麻于籠中、退拜而跪居、讀地鎭祭文、畢拜八度、手兩段、○中略終而復座、其時仕丁一人、(小烏帽子素袍、作所出之、)持忌鍬、進出于棚前、跪居北面、而穿地三鍬、訖而退、於是正權禰宜物忌父八度拜、○中略起座以退出、

〔弘安二年內宮假殿遷宮記 上〕當日十八日、○正月自未剋許、甚雨無隙、雖然戌剋許、相伴御巫、進參御祓所、被清祭物、御巫者退出于里宿、式衆者參入于內院、先忌部奉迎心御柱、其後山向內人、以忌物御鎌、奉續始御柱木口、地上三尺三寸許、地中二尺餘、奉立之、役人著座列居、次第玉串物忌東上北面、于時雲雨忽晴、星宿出現、絆之嚴重、欣仰不過之由、役人翌日面々所令賀申也、○中略奉立心御柱之夜、宮廳宿館依爲以南、被止宿于政所親政之館、但留守之仁許者、儉令祗候、又至于良館者、依爲岸之外、子良母良等不退出之由物忌申之、自餘權任職掌人等者、屬晚陰、皆以不候于宮中之例也、

引ク所ノ遷宮例文御棟上儀式ノ條ニ、奉立御柱、次渡桁、次立御棟持、次上棟木、然後祭棟也トアリ、蓋シ上棟ノ工事ヲ終ヘ、而シテ後上棟ノ祭事ヲ行フヲ云フナリ、建久元年内宮遷宮記ニハ、上棟ノ工事ト上棟ノ祭事トヲ以テ別日ニ行ヒシ事ヲ記サレド、其後ハ別日ニ行ヒシナリ、永祿正遷宮再興ノ際日時ノ勘下ニハ、先ヅ立柱上棟ヲ同日トシ、更ニ又上棟ノミヲ別日ニ勘下シ、立柱ハ永祿元年六月十九日、上棟ハ同年六月二十三日ニ行ヘリ、又德川氏初回ノ遷宮、即チ慶長ノ正遷宮ハ、立柱ハ慶長十四年七月二十四日、上棟ハ同八月十一日ニ行ヒ、今尙ホ立柱上棟ノ日時ヲ別個ニ勘下アルナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

取吉日、宮地鎭謝之用物、幷行事注左、〇中略

右祭告刀申、地祭物忌父仕奉所侍、造宮使中臣忌部然祭奉仕畢時、地祭物忌以忌鎌氏宮地草苅始、次以忌鍬氏宮地穿始奉、禰宜大物忌波、忌柱立始、然後諸役夫等柱堅奉、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政十二年己丑正月廿一日、卯刻〇地鎭祭玉串内人御宮地御饌物飾り奉り、御酒獻進之後、出納告知之後各參進、一經陰、二守訓、四守民、五守雅、六氏養、七守良、八經美、九守約、權任守祀、守後、其外群參、作所氏朝、物忌高重、横知大史長和、榛谷隼人久弘、米山多門頭工三人、小工五人、忌鍛冶二人、參進、但し頭工等は跡より參進也、

本宮石壺拜、如例畢宮地參著瑞垣御門之跡、有鋪設、一禰宜玉串内人に目す、于時玉串起座、西方より南に到り、敷布の所より右御柱の許へ南方なり參り、散米の祓有て、詔詞讀進、此時各平伏無之例なり詔詞畢て、先御柱の五色幣串一本執之、御柱之上三度振清之、次東方、次南西北〻、四方三度宛振清之、各乍捧幣有拜、右終而如前路退出、次四方幣帛持、次第退出、其次第巽、次艮、次坤、次乾方なり、次御祓具、次四方供物、次御前敷布、次四方敷布撤畢、宵禊一人宛出撤之〇中略

御幣參、一番一頭々代請取申、禰宜中御いたゞき、二番二頭々代同前、三番三頭々代同前、
御祝之餅三、干魚鰹熨斗鮑瓶子自二一頭一來、同二頭三頭同前、
〔建久元年內宮遷宮記〕文治四年八月廿九日、手斧始、
〔康曆二年外宮遷宮記〕造外宮木作始、新材事奏聞之處、任二康永例一可レ被レ採二用宮山木一之旨、被二仰下一候也、仍執達如レ件、
後十月十一日〇應安六年　右少辨判
祭主神祇權大副殿
〔外宮嘉祿三年山口祭記〕寬喜元年三月廿三日、可レ令レ行二木作始一之由、被レ勘二下日時一云云、指非二宣下一爲二造宮所沙汰一被二取下一歟、
〔寬正造內宮記〕文安三丙寅、造內宮木作始日時、可レ爲二來廿九日一、可レ令二存知一給候也、謹言、
十二月廿三日　神祇大副判
內一三位殿
廿九日木作始神事
〔延喜式四伊勢大神宮〕鎭祭宮地〇中略後鎭准レ此
右鎭祭畢、地祭物忌淸二掃其地一、堀二心柱穴一、禰宜竪レ柱、
〔遷宮例文〕十九年〇前式年ヨリ第十九年仲秋御上棟事
任二先例一被レ下二日時宣旨一、狀日造宮所被レ進二請奏一也、
鎭地祭日時　立二心柱一日時　立二正殿柱一上棟日時在二立柱次第一　上棟日時　立二御門一日時
件五ケ條日時、被レ載二下一紙宣旨一也、祭物逹文別紙也、
〇按ズルニ、立正殿柱上棟日時ヲ擧ゲテ、更ニ上棟日時ヲ載セタルハ重複ノ如シト雖モ、下文

地曳祭
心御柱祭
上棟祭

北戸著座南頰鋪設、北面西上、大物忌(著袙袴淨冠、著座一﨟上、)物忌父等(自一﨟至副守見物忌父、衣冠、自餘物忌父狩衣、)入自南戸著座南頰鋪設、北面西上、(對座之亞)別宮物忌等著座五丈殿外、東九丈殿後鋪設、西面北上、(鋪設自作所出之)豫自作所設居饗膳於各座、座定使政所(使之居側)入、當祭日時之宣旨覽箱少進座、司政所起座執之、置司前復座、司執宣旨拜覽、(禮紙作重)如元入覽筥、司政所起座執覽箱返、使政所(著座十禰宜末)起座、執覽箱置二禰宜前而復座、二禰宜執宣旨拜覽、(禮紙作重)授亞禰宜、執之拜覽、如此至十禰宜、時宮政所起座、到二禰宜前執覽箱、置十禰宜前、十禰宜宣旨入覽筥、宮政所執之、返使政所復座、又宮政所起座、到使政所前、依使之命又授覽箱、宮政所執之、置造宮奉行前、(落合能登守藤原道臣○山田奉行)造宮奉行執之、拜覽而入覽筥、宮政所執之、返使政所復座、次陪膳二人(權官勤之)執瓶子酒盃(居土器入寸片木)到使之前、二禰宜進座勸盃、使拍手執之以飮之、(三獻共同)次陪膳(祇承勤之)二人、執瓶子盃到司前、四禰宜起座、進司前勸盃、司拍手執之以飮之、(三獻共同)次陪膳(自作所出之、權任狩衣)二人、持酒盃進二禰宜前、大物忌父一﨟勸盃之、(初獻而已)拍手執之以飮之、二禰宜又斟酒授亞禰宜、拍手執之以飮之、如是到十禰宜、次陪膳二人、(自作所出之、權任狩衣)持酒進對座上首大物忌父、二﨟勸盃之、(三獻共同)拍手執之以飮之、又斟酒授亞對座、拍手執之以飮之、如此到末座、又陪膳(作所從者素襖、別宮物忌又同之)二人持酒進物忌等、大物忌并一﨟二﨟三﨟作座勸盃、別宮物忌悉飮之、次陪膳等進酒、使以下如上、(獻返無之)次陪膳等行肴、使以下又進酒如上、(三獻共順)畢自下座撤膳、(使司膳者、神事學、自作所贈之、自餘令從者於九丈殿受之)而已各有座揖、自御戸出、(起座先下座)列立于五丈殿南頰、禰宜西面北上、對使司進佳儀、使司自一鳥居退出、祇承自二鳥居退、禰宜權官物忌等歸館、別宮物忌等參其宮而下向、

〔永祿之記〕弘治三年六月八日、未之刻木作始有、禰宜連參、頭衆三人衣冠也、石ツボニ禰宜中暫逗留有、今度之儀、西御屋敷ニ治定、寬正遷宮西ニ有、是はつひに御宮うつしなき故也、御木作始御幣西にて有、○中略

御木作始、一頭方東、二頭方西、三頭方中、

豐受大神宮餝始下

正六位上大中臣朝臣種忠

右任先例、今月今日、如此可被下知之處、如件、

慶長拾三年十二月廿二日

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕天保十四年癸卯三月五日、木作始午刻、（又謂之餝始）造宮使斅忠朝臣（祭主從四位上行神祇權大副兼右兵衛權佐）東帶乘輿、政所（川合兵部、束帶）三好敬負（狩衣）宮司都盛朝臣（從四位下行神祇少副、束帶乘輿）政所秀栗（三日市兵部、束帶）各到一鳥居之外下乘、○中略次禰宜順次執玉串進、各揖于司、入于三鳥居內、於第四御門之外、分于東西列立對座、權官自餘共相隨列定、禰宜各秩行到于本宮石壺著座、北面東上、（權官著座于禰宜後）次司、次使、各進著座于東石壺、北面西上、物忌父等進、著于廣前西頰、東面北上、次四所別宮物忌等進到于權官後著座、御巫內人淸直（御巫志津摩、衣冠）物忌父等、次少下而著座、先是頭工等餝始、宮材一株、置玉串御門前、（本西末東、且宮材者、自玉串御門之柱隔二間餘）其前設鋪設、（疊三枚）其前居置三方之、頭工辛櫃三合、（每頭一合巾、合三合）作上備置餅酒等、其前設鋪設、（疊六枚）頭三人（各衣冠）頭代三人（各素布衣）小工等（各素襖）忌鍛冶內人三人（各衣冠）第四御門與小鳥居之中間座于東西、（有鋪設）座定御巫內人起座進宮材前、北面而蹲踞修祓、（執龍散米及錢切、榊以幣串、豫匠于木前）且祓淸宮材而復座、次忌鍛冶三人、各携餝置宮材前之鋪設、伏拜而復座、次頭三人、進宮材前、執餝鑿宮材各三刀、且伏拜而復座、次頭代三人、次小工等三人宛、各順次如上、畢忌鍛冶內人三人、進宮材前屈拜而復座、次大物忌父一﨟起座、來一禰宜前蹲踞、名召一﨟到司前、執玉串納玉串御門之東柱下復座、自餘物忌父等二人宛、順次起座、執禰宜之玉串各納西柱下、（宣命祝詞無之）畢大物忌父一﨟起座、蹲踞二禰宜前、云御神拜復座、使司禰宜權官本宮物忌別宮物忌等御巫內人、各兩段再拜、次禰宜權官起座、到別宮遙拜所、次使、次司、又到遙拜所、列于中强、而各兩段再拜、畢脫木綿鬘、使司進廻五丈殿西、入自北戶著座西頰鋪設、東面北上、禰宜又自北戶著座北頰鋪設、南面西上、對座入自

對座權任各衣冠著座、次第作法如山口祭儀式也、
饗膳使禰宜、始終四本高坏、在折敷、對座玉串五位物忌朱懸盤、已下白懸盤也、陪膳如山口祭儀式、禰宜、
勸盃不同例也、頭工勸盃、司中兄部勤之、但先規不同也、或侍氏神主小作所勤之、
各饗膳以後、先並木床、其上置垂木三枝、東西行置之、但東爲上、于時造宮使禰宜等、進出一殿前拜之、
次一頭工方堪事重代小工、進寄切木口打墨、其間以下小工等別居石橋、次一頭工、進參櫻御前、向御殿方東方拜三度、自餘工不拜、左廻取手鎚、進寄一御垂木奉仕之、三度打之、二頭三頭等同奉仕之、三手鎚充也、各復本座、次第小工等參寄造之、大概許之件御垂木、櫻御前東方仁並木床、其上安置之、南北行置之、東爲上、一儀云、先小工奉伐木口、三人頭工帶墨金天、自東行拜御前、三手鎚奉作始之、頭代小工等、任座次奉作之云云、文治記云、手鎚始之時、頭工等皆候南方、向北勤仕之例、而一頭三頭候北方、向南勤仕之、甚非例也、二頭時次候南勤仕之、存故實哉神妙也云云、荒祭御垂木一支、於彼宮小忌屋殿前、四頭工奉仕之後、便宜之木仁寄懸天奉立之、次第行事終退出也、○又見建久元年內宮遷宮記、元亨三年內宮遷宮記、及康曆二年外宮遷宮記、寬正造內宮記、

〔豐受大神宮慶長御遷宮日次〕御鎚始、同月○慶長十三年十二月廿二日ひつじの刻也、乍去神宮へ如先規ニ祭主殿より勘文不參、又は宣命などの書樣ちがひ申候故、色々神主中より理被申、又は作所などゝも御異見申候へ共、無御聞別、宮中まで御出被成、一ノ鳥居ニ、ひつじの刻より申刻まで御立候へども、事みち不參候處、御奉行長野內藏丞殿御出候て、樣子御聞被成、神主中の被仰樣、一々御尤之由ニテ、祭主殿へ勘文の事御尋被成、我々までに御見せ候へと御申候、其時長野內藏丞殿まで御出し候故、神主中へ樣子被仰、御奉行あつかひニて、神事調申候、拐殿へ御著候處、神主中より祭主殿へ、宣命御出し被成候へと御申候へば、御そちねん被成候由ニて、御宿まで藤波左馬被遣候、祭主殿御手前、其時散々也、內宮も同日辰ノ刻兩度ニ神事、內宮はやし、

宣命

木作始

へども、宇治へ御通被成候、扨十九日申ノ刻ニ、山口祭ノ樣子までニて御參宮有り、神主中御立候樣、彼是山口祭のごとく也、宇治も同日卯刻也、外宮よりはやし、

〔元祿外宮正遷宮記〕延寶八年庚申十一月十五日、兩宮一禰宜（内宮一禰宜荒木田氏富神主、外宮一禰宜度會滿彥神主、）相議、引率兩宮作所（内宮作所代藤波氏守、外宮作所松木末彥神主、黑瀨一禰宜弘、亦相從外宮一禰宜、）到小林奉行所、謁于桑山丹州牧、（○山田奉行桑山丹後守）向望口陳如左、

兩宮御造宮之事、年限漸邇、近古以來、採用大杉山之良材、以爲吉例、然間近年山荒木乏、甚難索之、因茲頃日工匠等、致內見之山入點檢之、其難事超所聞、唯非木乏難得、而若山阻谷曠、可轉輸亦甚不容易也、且又自初冬至季春、依雪埋山路、其間不堪役人夫、是故難從以往之例、如寬文之時、則式年之前三箇年、雖被行山口祭、而今般希早有山口祭之旨、兩宮頭工等頻申于作所、兩作所亦轉致之兩長官、故今傾注及于此、庶幾今度所逐江府參向之日、特被達上聞、幸賜尊諾、神忠之至、何事有如之、

丹牧應言如左

件件記存訖、今冬來春之際、承奉書、致參府、以言上於其旨云云、

〔遷宮例文〕十八年（○前式年ヨリ第十八年）仲秋木造始事

○按ズルニ、木作始ハ、延喜式、及ビ延曆儀式帳共ニ之ヲ記サズ、然レドモ造替遷宮四個大饗ノ一ニシテ、中世以降嚴重ナル祭式ナリ、

〔遷宮例文〕木作始儀式（○○○○第二度饗膳）

一殿幷頭工鍛冶等饗膳祿料、國々使守色目注文勤之、今夕手斧始料材、正殿荒祭宮垂木四支、（正殿之三支、荒祭之一支、）同木枕料材、以兼日奉付宮地也、

以吉日擇定、及戌剋造宮使（束帶）被著一殿、（神拜以後）被申案內於官長之間、傍官一同被著座、各束帶、（古記云、先神拜、）

外宮障碍候、任年紀被行候事、先例之旨、以禰宜等之連署解狀言上候畢、預御下行、任例可致用意之由、諸役人等致訴訟候、嚴密申御沙汰候者、公私之御祈禱、何事可過之候哉、氏經誠恐謹言、

十一月十二日〔〇寛正五年〕　　内宮一禰宜荒木田〔判〕

進上　祭主二位殿〔政所〕

追申、如此神事、依自然忽劇延引候事者、勿論候歟、天下泰平之今可延引候、神慮叵測候、

〔寛正五年内宮山口祭記〕寛正五年甲申十二月廿六日、山口祭神事可爲廿九日之由、廿二日傳奏狀、〔造宮所〕廿四日造宮所狀到來、則遂覽、

〔皇代記〕文安五年十二月廿五日、外宮山口祭、

〔孝亮宿禰記〕慶長十三年十二月十二日乙丑、慶長九年度山口祭雖有之、無陣儀之間、今度被行陣儀、以嚴儀、兩宮別陣儀有之云云、自祭主〔〇大中臣種忠〕山口祭一通來、　十六日己巳、伊勢山口祭、明日有陣儀之故、令神事、今日伊勢内宮山口祭、未剋被行日時定陣儀、上卿正親町中納言〔季秀〕奉行廣橋頭左中辨總光朝臣參仕、辨中御門右中辨宣衡、大外記師生、官務孝亮、少外記盛勝、史英芳、召使生行、官人椙田至成、剋、外宮豐受大神宮山口祭日時定陣儀有之、〔依無吉日、今日分行之〕上卿中御門中納言〔資胤〕奉行萬里小路左少辨孝房參仕、辨清閑寺權右中辨共房、六位外記英芳、史定昭、兩局師生孝亮、日時勘文下史、予調宣旨二通、相副書狀付祭主、

〔慶長御遷宮日次〕山口祭樣子迄ニテ御參宮ノ覺

一御祭始之覺

祭主殿御參向、慶長拾三年拾二月十八日ニ、山田へ御著被成候處、御宿前々は上部越中守殿被成候へども、此度は斟酌也、其時作所幸產鼎瀨館などへも御宿候てたまはり候へと、色々才覺いたし候へども無御宿候故、作所ニ御宿可仕と申、振廻まで用意申、扨路次まで御迎ニ罷出候

勅問趣、誠難儀歟、猶被政始沙汰可然、猶雖被行者、山口祭、縱雖令延引、以不吉例可被行之旨者難議奏、但神事猶無止、而可有沙汰哉否、可在臨時勅斷歟、猶廣可被經沙汰之旨申了、

〔康曆二年外宮遷宮記〕永和三年（丁巳）

造外宮遷宮以前、被遂行內宮山口祭之條、無先規由外宮一同申所存歟、於內宮山口祭者、當年雖爲式年、外宮遷宮延引之間、無左右不可有物忩之御沙汰、此上者不可及參洛之企之由、嚴密可被下知禰宜等之旨被仰下之狀、如件、

十二月十八日　權右中辨俊任

祭主神祇權大副殿

〔皇代記〕應永十四年內宮山口祭　十七年外宮山口祭

〔薩戒記〕應永卅三年五月廿三日丙辰、左頭中將來曰、可被行政始、相尋日次可令申沙汰之由、吉田大納言（家雅、後大神宮傳奏也、）奉院宣所仰遣也、（○中略）此政始內宮造宮山口祭官符請印之料也、　十月十七日丁丑、右頭中將基世朝臣參入、付予（○藤原定親）奏曰、山口幷木本祭日時定、幷請印政內文等、辨可仰誰人哉、可被下御點者、

〔皇代記〕永享元年十一月廿八日、外宮山口祭、

〔寬正造內宮記〕造內宮山口祭神事、可爲來廿八日（○文安二年十一月）之由、御教書造宮所狀等廻覽、追書、拜賀參宮、可爲廿七日之由也、是十一月廿五日也、以世木新三郎永能神主、被告送一禰宜之許、　十一月廿八日山口祭神事、（○中略）作山口祭日、任例事採心御柱、安置御政印御倉、在造宮所之下行、玉串大內人請之、役人等下行、

〔皇大神宮引付〕內宮山口祭神事、當年式年十月式月候之處、不被遂其節候之條、神慮叵測候、御遷宮之事者、山河大儀、又者依要脚未下、延引度々例候、外宮遷宮以前、無例之由及御沙汰候歟、更不可成

〔本朝世紀〕久安五年十月六日甲寅、權大納言藤原伊通卿參仗座、左中辨藤原朝隆朝臣、令勘伊勢大神宮造宮山口祭日時、〇中略今日右府〇藤原實行先被參仗座、先是大宮大納言在座、奏山口祭日時事之後、觸氣色於右府、遷著端座、召官人令置藤奚、爰左中辨朝隆朝臣進獻覽勘文、但不內覽、依殿下〇藤原忠通重服也、　七日乙卯、忠基卿一人著官廳聽政、少納言藤能忠、權少外記中原在俊勤廳事、大神宮山口祭符請印也、　十二日庚申、今日有內印事、大神宮山口祭符也、上卿權中納言藤忠基卿、少納言同能忠、權少外記中原在俊等從其事、不內覽、　十二月十三日辛酉、少納言藤原成隆勤請印事、伊勢大神宮遷宮山口祭符、長門國計歷符也、

〔勘仲記〕弘安七年九月廿八日癸卯、外宮山口祭日時定、今日可被遂行之由、予〇藤原兼仲兼日相催、當日事、昨日相觸頭大藏卿〇平忠世之處、禁裏依御修法中、俄被延引云云、上卿三條中納言、辨右少辨雅藤、
十月五日己酉、今日外宮造宮山口祭日時定、仲兼奉行、上卿三條中納言、實重辨雅藤、祭物請奏被宣下、依請去月廿八日被催整之處、依禁裏御修法中俄延引、

〔大神宮參詣記〕坂士佛外宮御垂跡は雄略天皇の御代也、〇中略九月中〇康永元年に、山口祭有べしなどきこえしかども、大儀なればとうのべられぬ、

〔寛正五年內宮山口祭記〕抑山口祭事、以前御遷宮之年紀、不依延引、自山口祭之年廿年目ニ被行定例也、然康永年中ニ、勢州南方亂之時、兩宮共ニ有延引事、是依不吉之例、延文ニ經御沙汰、不依遷宮延引、可守山口祭式年之由被定置畢、

〔園太曆〕延文三年九月十八日、忠光朝臣爲勅使來、有勅問事、勅問云、外宮造替式年例、至造宮使事、被仰親世朝臣〇祭主了、就其節給官符可被執行山口祭、而件官符請印、欲有沙汰候處、今年之始政未被行、政始已前請印政事、被問例於兩局之處、師茂朝臣者、先規不勘得之旨申之、匡遠宿禰注進、延長八年例、雖一度已有例、可被行歟、將又延長例頗不快、可被輕歟、可計申者、申云、如此事、曾無先規事、始被行之條者、准據非一勿論也又善惡相交之時、被宥用不能左右、不吉一度例不被之事可爲何樣哉、今

一參千貫文　山口祭諸祭事

合壹萬千八百貫文書上分此通、但此外十八貫文あまる

右之外京江渡分有之

〔天正十三年御遷宮記〕天正拾年午、於安土上様○織田信長御渡しなされ候、參千貫文之代、内宮へ千五百貫文請取、つかひみち拂、

一貳百參拾貫文　山口祭神事料

天正十三乙酉年正月吉日　内宮長官

守豐

稻葉勘右衛門尉殿

牧村長兵衛尉殿○中略

〔永昌記〕天永二年十月六日乙未、源大納言雅俊、於仗座被勘申伊勢遷宮山口祭木本祭日時、今月十八日丁未、時午二點、予○藤原爲隆奏下之、○中略廿年遷宮、今年孟冬被祭是例也、

〔中右記〕大治五年十月五日甲戌、申時許參仗座、以左中辨實光、令勘申内宮山口祭木本祭日時、幷外宮假殿遷宮日時、陰陽寮兼催儲日時勘文二通持來、内宮山口祭木本祭、來廿二日、外宮假殿、來月廿二日、召史宮入勘文二通、左中辨實光内覽、次招藏人雅兼奏聞了、又下左中辨、召史返給宮、外宮八金物多損也、作行事所可始日時、辨持來今日戌時、見了返給辨、依上宣也、以神祇官爲行事所、早可始之由仰了、但金物木樣於早尋問祭主許、可令作之由仰辨了、又作請奏辨持來、見了返給、是近代依上宣也、左中辨向神祇官始行事所、又内宮山口祭日時宣旨、辨申請祭物、早々可遣造宮使許之由仰了、

十一日、今朝有政、上卿二人著行、顯雅爲定雅、依無餘儀也、少納言忠成、右少辨宗成參仕、是伊勢造宮使、申請判官主典官符、幷山口祭料九ヶ國官符請印也、

〔寛正三年內宮遷宮雜錄〕木本祭料、祭物官下如二先規一忌鍛冶カ沙汰物ハ不レ及二催促一、色々祭物雜具口皆五貫文、玉串大内人貞次ニ下行、指廿

〔寛正五年內宮山口祭記〕山口祭、同日〇十二月十九日心御柱奉口例也、御政印御倉ニ安置、玉串大内人ニ官下、忌物并料足五貫文下行、指廿是奉レ採二心御柱一木本祭等祭物、役人等道具食以下悉皆料也、今度於二建國寺山一取、忌部奉レ持レ之、

〔晴富宿禰記〕文明十六、十二、廿四、於二灯下一書始畢、

一神宮遷宮廿年一度也、十七年孟夏祭二山口一、其祭物等官調進也、四年之間造替、造宮使被レ補時者、官符請印ノタメ被レ行二政始一也、用脚造宮使沙汰之、政始年始被レ行事也、近代一向無二其儀一、造宮使被レ補時計、爲二年始通用之儀一被レ行也、政治文書中ノ棚西傾ノ西面ノ南ノ端ノ黑皮籠在レ之、

山口祭等、遷宮式年古來例等者、東方棚西傾東面ノ南ノ端ノ櫃ニアリ、

山口祭、自二神宮一進二奏狀一、又祭物等進二請奏一、以二其有一レ沙汰、行事上卿同行事辨等被レ補レ之、宣下東ユイタル文書ノ中ニ、行事上卿辨造宮使等事アルベシ、舊例ハ櫃ニアリ、銘ニ具者也、〇中略

一神宮ノ事勘例ニハ、諸社ノ例ヲバ不レ引也、〇中略

一中ノトホリ北ノ頰、棚ノ前机ニ雜文書共アリ、

此内神宮遷宮請奏在レ之、請奏トハ、御金物神寶御裝束等禰宜等注申之文也、

〔慶長遷宮記〕外宮御遷宮、淸順上人〇第三世慶光院時之造料、〇永祿六年豐受大神宮遷宮如レ左、

慶長十三戊申年八月廿二日書レ之獻上之、如レ左、

神宮使　松木修理進

檜垣三河守

理左衛門

一通行事所送文（件祭物鹽御倉奉納之、近代作所宿館受納之、）

一通鐵伍百廷送文（是同前也）

持參官使宿所、並粮米造宮所沙汰也、（已下同之、作所勤之、）

祭物

鐵人像捌拾枚、同鏡捌拾枚、同鉾捌拾枚、長刀子四拾枚、手鉾伍柄、鎌參口、小刀子貳枚、五色薄絁各一丈、絁壹枚、木綿麻各肆斤、庸布拾段（明衣祭物絲料已上二反下行、殘八反后料、）

已上官下

米貳斗、酒貳斗、雞肆羽（雄二、雌二、）同卵貳拾枚、

已上郡司勤也（但司中支配也）

鰒堅魚各肆斤、雜腊貳斤、鹽肆斤、雜海藻肆斤、陶器漆拾口（山口祭料五拾）

已上司中勤也（件祭物等相副宣旨、式日以前、無遲怠可令沙汰進給之由、以小作所名字、副送司中兄部也、并金敷等事、忌部役人參勤事、任先例可被致其用意沙汰之由、同小作所敷載之、）

散供米壹斗（御巫內人請之、官斗定、）　御供米貳斗（山向內人請之、郡司勤是也、）　鐵鋌切肆拾枚　小刀子一枚　盞壹口（納在代百文）　鋤壹口（納在）　大魚一隻（代雜腊）　桶二口　杓二口　堝四口　折敷五枚　清筵二枚　清薦二枚　御幣紙二帖（中紙各五十枚）　麻四束（官下）　青花少々　支子少々　赤花少々　墨一廷　饗膳代米（玉串一斗、從料五升、御巫一斗、山向一斗、子良一斗、忌部一斗、忌部參勤事、兼日相觸司中兄部也、）

已上作所勤也　在役人酒肴（肴三獻）

忌物鐵鋌切卌枚、小刀子一枚、於河原殿忌鍛冶內人等奉作之、金敷司中支配沙汰也、（但依司符、篠嶋所役也、未到之時、用清淨石也、）在酒肴、明衣料布各一丈、相作各五尺、（但官下用庸布、）食米鍛冶各八升、（工斗定、）相作各四升、所用鐵七十廷、（官下未到之時、用和市鐵例也、近年以十廷所用ゝヲル、）炭作所沙汰也、抑官下祭物等未到之時、作所勤之、

天保十三年寅二月五日　御巫志津摩印

外宮　政所大夫殿

二月十六日、御巫内人江舊復願容許申入、

一鎮忌物始諸色再興之事

一五色絹幣再興之事

一木綿麻再興之事

一御棚之前神拜再興之事

右四箇條、伺之通承屆遣ス、

〔延喜式四伊勢大神宮〕山口神祭

鐵人像鏡鉾各卅枚、（已上三物度會宮減半、以下祭准此、）長刀子廿枚、手鉾一柄、鎌一張、五色薄絁各五尺、木綿麻各二斤、米酒各一斗、堅魚鰒各二斤、雜腊一斗、雜海菜二斗、鹽二升、鷄二翼、（雄一雌一、）雞卵十枚、陶器土器各五十口、内人等明衣料庸布五段、（度會宮減一段、）

採正殿心柱祭（皇大神宮儀式帳作木本祭）

鐵人像鏡鉾各卅枚、長刀子廿枚、鉾四柄、（度會宮減三柄、加手鉾一柄、）鎌二張、小刀子一枚、鑿一枚、五色薄絁各五尺、木綿麻各二斤、米酒各一斗、堅魚鰒各二斤、雜腊一斗、雜海菜二斗、鹽二升、雞二翼、雞卵十枚、陶器土器各廿口、内人等明衣料庸布四段、使忌部明衣料一段、

右自山口祭以下、○（山口神祭、採正殿心柱祭、鎮祭宮地、造船代祭、）所須五色薄絁各九丈、木綿麻各卅二斤、鐵十六廷、鍬十六口、絹三匹、庸布二百二段、紺布八端、並造宮使請受京庫、自餘大神宮司充之、

〔遷宮例文〕山口木本兩祭官下祭物

一通山口祭日時（自造宮所告知司中）

中絶候、故ニ祭儀モ執行不仕事ニ御座候、然ルニ慶安遷宮之節、長官常晨神主、木本祭廢絶を被歎、寛永廿一年七月十七日ニ再興ト稱し、於御齋館、修祓酒饗之行事を被相始候、併右者山口祭同日ニテモ無之、又心御柱之木本祭ニテモ無之、只名計同樣ニテ、往古之例トハ、甚相違之祭儀ニ御座候、其後寛文七年九月十八日、慶安之例ニ依テ、又木本祭執行被致候を、河崎延貞神主寛文遷宮記ニ、今有此事者、近例之流弊誤之甚者也ト注シ被申候、然者其後モ猶不相停、元祿、寶永、享保、寛延、明和、寛政、文化、文政八ケ度之御遷宮ニモ、御執行之由承及候ヘ共、御神宮計之御事ニテ、御巫等ヘ者御告知モ無御座候故、其日御杣之木本祭仕候事モ無御座候、如此ニ御座候ヘ者、慶安以後之新儀ニ依候モ如何敷奉存候間、何卒往古正しき儀式ニ因准仕、山口祭之日、形計之木本祭ニテモ勤仕候者、神慮相應可仕歟ト乍恐愚案仕候而、先日御窺申上候事ニ御座候事、

木本祭、形計ニテモ再興仕度旨申上候處、形計トハ、如何體ニ執行可仕哉之由御尋被下候、右往古之例、山口祭ト少しも相替候義無之候ヘ共、當時木本祭之御下行無御座事故、古例之通ニハ執行難出來候、内宮之近例を考候ニ、山口祭之日、入夜候テ、玉串大内人、大物忌父、山向内人、忌部等、御杣木之本ニ至リ、修祓告刀申候テ、奉伐取候作法を行ひ、實者其年六月中ニ奉伐出候旨、宇治土公引付、内宮儀式解等ニ相載候、近代當宮之御杣木奉伐取候節者、修祓者仕候ヘ共、今度往古之例ニ復し、山口祭之後剋、奉伐始候儀式再興ニ相成候者、聊木本祭之御饌等、私力を以相調供進仕度、其餘之供物等者、品數を書付ニ仕、獻備仕度候、尤右供物等御下行無之節者、日錄或者繪圖ニテ相備候事、内宮永仁假殿記、同明應假殿記、當宮應安遷宮記等ニ相見エ、是又中古之一例ニ御座候ヘ者、此例ニより、形計之祭儀ニテモ再興仕度旨申上候事、

右之條々、依御尋委細申上候、以上、

御巫内人

機殿江御詰可被成候、尤出納御召連可被成候、内々三四神主殿モ被參可被申候、此段申上度如此御座候、以上、

同夜神主中衣冠ニ而、出納召連、機殿江參リ、秘傳木奉納申候、尤二鳥居ニテ御鹽湯有之、

〔豐受大神宮嘉永正遷宮記〕天保十三壬寅年二月五日、御巫内人御巫志津摩差出ス願書、

依御尋申上口上〇中略

木本祭之儀、往古者山口祭同日ニ執行仕候條、二宮之舊記ニ數多ニ所見御座候ヘ共、先者嘉祿山口祭記ニ相載候宣下之全文、左ニ申上候、

左辨官下造伊勢豐受大神宮使

應令勤仕山口祭、幷木本祭等日時事

山口祭日時

十月十五日辛酉　時申二點

木本祭日時

同日辛酉　時戌二點

右得造宮使神祇權大副大中臣隆通朝臣、去月八日奏狀偁、件日時任先例爲被勘下、謹請處分者、權中納言藤原朝臣盛兼宣、奉勅宜任件日時令勤仕者、使宜承知依宣行之、

嘉祿三年七月廿日　右少史中原朝臣在判

中辨平朝臣在判

右之通、往古者造宮使兩祭日時宣下ヲ請奏被爲成、山口祭同日ニ而、二時違ニ時刻勘下御座候旨、此外之舊記ニモ數多相見エ申候、然ル處永享遷宮以來、百三十年正遷宮再興之節、從御神宮、山口祭日時而已を御請奏御座候而ヨリ以後、木本祭者脱漏仕、于今日時宣下を御請被成候儀

頭、頭代、小工は、參宮後禰宜一殿參進の時岩社へ參、木本祭有之、玉串は一殿撤膳の後、直に岩社に參り詔刀有之退出、

右山口木本祭場は、山通り道東の入口、岩社神體大岩の北方道の北に設く、延享遷宮記を案るに、玉串内人一殿行事以前、岩社森地にて告刀申進、其後一殿著座と記せり、

〔慶長御遷宮日次〕外宮山口祭之神事、○中略御酒ヨリ前ニ、宣命祭主殿へ直ニ渡リ、祭主殿御請取候て、宮司殿へ渡リ、扨長官へ渡リ、則拜見有リ、扨神主中拜見有テ、下ヨリ上へ渡リ、扨長官の人宮司殿人ニ渡し、扨祭主殿人ニ渡し納候也、

〔寛文九年正遷宮記上〕寛文六年丙午八月廿一日、大宮司精長來于一禰宜家○度會全彥相語曰、總官○祭主藏山口祭日時宣下之御敎書、只爲其施行而不記刻限、且不聞有補造宮使之宣旨、故雖以男政長詰問之、言近例如此、敢無所言、但言如其刻限、爲來三十日申刻而已、古昔以日時宣下之御敎書加之施行、而傳司中以下神宮、近世只下施行、而至山口祭日於饗應之席、始出彼宣旨、未有非禮之如此者、

〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政五年六月十三日、深更ニ相成、檜尾山ニテ御柱行事、大物忌父尙德、玉串代義芳、河井因幡忌部代忠意、土屋上總山向内人江見數右衞門奉伐、秘木川流下レ、忌部左肩に擔ひ、御機殿江奉納申候由也、

今日町々掃除致し候得共、雨天故、道路難儀之由也、此御柱者、先達而内見致し置候、一宇田氏神森ヨリ取寄置、日用頭ニ申付置候檜尾山ニテ、右祭リ大物忌父御酒等ヲ備へ、玉串告刀申、山向奉伐、忌部持參申行事の由也、

六月十三日、公文所ヨリ、

以手紙得御意候、然者今夜亥剋、心御柱奉採、其後御機殿江納置申候間、其節衣冠御著用ニ而、御

山口祭明旦、以二飛脚一無爲遂行之由、經二奏聞一也、造宮所
次子良母良副嫗、彼是十餘人、公文所著座外權任職掌諸司等散行、懸盤小机等任二員數一之旨、渡二子神
宮沙汰人一也、歷名外相作二人、由貴殿出納、賜二懸盤一例也、○又見二建久元年內宮遷宮記、嘉祿山口祭記、及元亨三年內宮遷宮記、寬正造內宮記一、
○按ズルニ、山口祭ノ饗膳ハ、遷宮四個大饗山口祭、木作始、上棟祭、杵築祭、ノ一ニシテ、下文收ムル所ノ中右記
ニ山口祭料、九ケ國官符請印トアル即チ是ナリ、
〔皇大神宮文政正遷宮記〕文政二年壬午三月七日、巳刻山口祭、依二遷々一及二未剋一○中略
一鳥居下乘、造宮使宮司參進、二鳥居御鹽大麻如レ例、○中略
神宮木下道より參進、禰神前列立、侍中幣串を納む御鹽大麻相濟而、先禰宜、次造宮使、次宮司參進、
此時頭工、衣冠頭代、布衣忌鍛冶、衣冠小工素袍等、廳舍殿の南西上南面列立、神主中の跡に付添、參宮の後岩社に參る、
於二玉串所一造宮使手水、權二﨟紙を進め、權一﨟水を掛る、次宮司手水、山向內人水紙を進む次第如二神嘗祭一、次禰宜玉串を取る、
次宮司、次禰宜參進、次造宮使以下石壺に著、造宮使は祭主石壺、宮司は王使石壺也、別に宮司分不レ設、玉串奉納の後、八拜兩端、
如二神嘗祭之時一、次禰宜西鳥居より退出、荒祭宮遙拜對揖、次荒祭八拜兩段、次造宮使宮司一殿著座、禰宜は
小朝熊拜、朝廷拜終て、物忌玉串相共一殿ニ入、各著座、次玉串、次物忌、次權一二﨟著座、○中略
次山口祭宣旨、先宮司、次禰宜、拜見次第如二昨日宣旨一、○昨日造宮使拜賀ノ際任符拜見ノ次第ヲ云フ、
次饗膳、造宮使陪膳權三﨟定統、酌權四﨟經邦、各衣冠宮司禰宜陪膳弘舍、宮司祗承也、作所より請に依て、禰宜の陪膳を兼ぬ、
酌氏光、各衣冠造宮使政所權一二﨟、神宮政所玉串物忌、陪膳作所侍中陪膳酌勤レ之、各素袍
造宮使宮司禰宜は公卿、大角三方造宮使政所權一二﨟宮政所五人料丸三方、但し三ツ足玉串物忌は足打
膳、角膳
造宮使獻盃一禰宜、宮司獻盃二禰宜、各三獻也、禰宜以下亦三獻
撤膳の後禰宜退出、一鳥居にて造宮使を相待、賀儀申、歸館、

頭工等机、沓形、餅ソ形、各一枚、被副下之、作所加判也、是作所沙汰也、

同祿料、絹布幷初番ノ袖食置米等、付机沙汰也、

件祿料、幷机料、工等酒、國々雜掌等、相副解文、送作所宿館例也、近例國々雜掌、禰宜沙汰、各相副机置之、

長官子良館机、任先例沙汰也、國々勤也、祿幷置米之外者無相違、○中略

祭禮儀式

造宮使東帶神拜之後著一殿、次第饗膳、居調之從著座也、其後就案內、作所小雜色禰宜權任等神拜之後著座也、使東、西面禰宜北、東上南面對座、權任南、東上北面玉串北、南面內物忌父座西、北上東面石橋荒祭瀧祭日新御厩御鹽湯山向鎰取御巫內人等座如例、雨儀時、一殿南端西間東上北面座、晴天時候石橋也、使座高麗端一帖、禰宜座同疊四帖敷之、對座玉串物忌上座、五位各紫端也、已下座長筵如例、宮鋪設用之件鋪設作所沙汰也、但近例、自造宮所借用、長官之間被致其沙汰也云云、饗膳使前六本、或四本、或六本、古記不同也、長官六本、自餘禰宜各四本、高坏也、在六種折敷追物、汁二種、湯漬一坏、菜二種對座玉串物忌上座、朱懸盤、在八種追物、交菓子已下白懸盤也、使禰宜陪膳用五位、各造宮使侍也、但禰宜陪膳五位六位不同、對座權任陪膳六位侍也、物忌陪膳如木雜色勤之、玉串同前、今日使禰宜之勸盃、古今不同也、或度有勸盃、或度無勸盃云云、頭工等座次第、任神宮座次注文、今朝立札也、國々雜掌等、守札居置之、小作所奉行也、主神司殿中口座也、頭工等先神拜、其後著座也、四人頭工衣冠、小工鍛冶等布衣給之、一頭工南、西上北面、二頭工南、東上北面、三頭工北、西上南面、四頭工北、東上南面、小工四十人、頭々方ニ末座也、鍛冶二人、九丈殿西、東面、相作二人、山口祭翌朝、各預懸盤也、頭工座土敷薦一枚、上紫端疊一帖、小工等各筵一枚敷之、件鋪設國々雜掌等付机沙汰例也、

頭工勸盃、或氏神神主、或司中兄部、或度造宮所五位六位侍勤之、不定饗膳事終之後、使禰宜退出也、

今夜任日時宣旨、山口木本祭、奉採心御柱也、

玉串山向、同子良御巫忌部等入御杣之、祭物官下、幷司庫及作所勤右具也、

自杣忌部運來、置正殿地也、在御前追也如式條也、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

常限廿箇年、一度新宮遷奉、〇中略

取吉日、山口神祭用物幷行事、〇中略

右祭、造宮使忌部宿禰告刀申畢、即山向物忌以忌鎌（氏）草木苅初、然以後役夫等草苅木切、所々山野散遣、然宮造畢時、返祭料物如始、

又取吉日、爲正殿心柱造奉、率宇治大内人一人諸内人等戸人等、入杣木本祭、用物注左、（其柱名號忌柱、〇中略）

右祭、告刀申造宮使忌部宿禰、其忌柱造奉畢、自杣出前追運來、置正殿地奉也、

〇按ズルニ、山口木本兩祭ハ、初メ各個別日ナリシガ、其後十月ヲ期月トシ、祭日ハ官下ニテ之ヲ定メ同日ニ之ヲ祭レリ、而シテ南北朝以後ニ在テハ年限ノ變遷セシノミナラズ、月日共ニ官下ノ事トナレリ、

〔遷宮例文〕第一山口木本ノ

一殿内餐膳懸盤小机等事

山口祭時、可預懸盤小机大少職掌人之員數、可注給之由、自造宮所神宮江被告知、在神宮注文、其任注文、諸國ノ神領支配之使、一禰宜之餐各六本、高坏、（如常法式也）禰宜餐各四本、高坏、（如常法儀也、居物高六寸、追物高四寸、）對座權官玉串朱懸盤、（居物四坏、窪坏二坏、追物八種、交菓一坏、各居懸盤、於追物者、居折敷、重居懸盤上也、）内物忌父（五位六位上座、朱懸盤也、）石橋職掌白懸盤也、居物四坏（高四寸）追物四坏（高三寸）窪坏一坏也、散工懸盤小机、（居物追物合八種、無法、如例饗膳也、）

頭工鍛冶等机寸法色目事

件机、任先規守所出之色目、無一事之增減、可有其沙汰、若相違出來者、可有用捨之煩、一同可令經營之由被定下也、

山口祭
木本祭

宮神主ノアラソヒアリ、於都沙汰アルト雖、終ニハ内宮ノ神主被仰、上分ニ相定ル、長官守通、

〔慶安遷宮記〕兩宮遷御之次第、如往古者、式日相定、而雖爲外宮先内宮後、慶長寛永兩度遷御、内宮先外宮後可執行之旨、依公方之命奉遂遷御畢、抑今度自兩宮神宮中、捧於遷御日時宣下之奏聞狀之處、神宮傳奏姉小路中納言公景卿、奉行油小路左中將隆貞朝臣共相議、而被達于關白殿下(于時一條左大臣昭良公)之處、或考國史舊典、或尋古老口實、共以古來之式日、外宮爲先炳焉也、然則於此度者、任往代之規範、守延喜之式文、可遂行於外宮先内宮後遷御之旨、僉議一決、而既被達叡聞之處、守延喜式文之上者、不可及子細之旨依勅定、九月三日被行於陣儀、而日時案文下著、〇中略右三日、陣議相定、而爲外宮先内宮後之日時宣下之處、自内宮神宮、家康公秀忠公兩度遷宮、皆以内宮爲先、今度之御下知、拘御當家、甚以爲違例、所詮如慶長寛永、可先於内宮日時於被宣下、神宮一同可爲欣然之旨令愁訴、且又自石川大隅守殿、〇山田奉行亦以兩使(岩代半之丞、猪瀬伊左衛門、)令訟于禁裏御役者中、故重又日時被宣下、今月十三日到來于神宮、〇中略

來ル廿五日　内宮正遷宮

同廿七日　外宮正遷宮

右之日限、於禁中相定、伊勢傳奏姉小路中納言殿、同奉行油小路中將殿ヨリ、於京都我等者共ニ御兩所直段御申渡候間、其心得可有之候、以上、

丑九月十一日(〇慶安二年)　石川大隅守

大宮司

〇按ズルニ、二宮同年ノ正遷宮ハ、此天正遷宮ヲ始トス、現今ノ例ハ實ニ此ニ本ヅク、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

或云、大神宮廿年可被造替者、十。七。年。孟。冬。祭。山。口。幷。木。本。神。等。初採正殿心柱、

九月八日　　右大辨判〈俊任〉

祭主神祇權大副殿　同日祭主施行于一禰宜

同廿日禰宜以下立石山廻海道、廿五日夕著于山田、委細在上洛沙汰文、

○按ズルニ、豐受大神宮ハ、曩ニ貞和元年正遷宮アリシヨリ、康暦二年ニ至ル迄、三十六年トナル、

〔寛正造内宮記〕寛正三年十二月廿七日、内宮御遷宮、〈作築神事、同廿一日〉權任供奉廻文事、

氏宗神主ヨリ永因神主マデ二百六十六人、右今月廿七日可爲遷宮定日之由所被仰下也、面々供奉人得其意可被申承知之奉矣、仍廻文之狀如件、

寛正三年十二月十五日

伊勢大神宮遷宮幷雜事日

奉移遷御體於正殿日

廿七日丁亥

十二月八日　　陰陽頭安倍有家

件日時等勘下文、八日十一日祭主下知、十九日宮司告狀等廻覽之、

○按ズルニ、正遷宮式日ハ、式文ニ詳ナリ、事故アルニアラズシテ其日時ノ勘下文アリシハ、此寛正遷宮ヲ以テ始トス、尋テ下文豐受大神宮ノ永祿遷宮モ、亦日時ノ勘下アリ、而シテ遷宮日時ノ勘下ハ、竟ニ沿襲シテ定例トナレリ、

〔公卿補任〕〈正親町〉永祿六年癸亥、五月十六日、大神宮正遷宮日時定、陣議有之、上卿中山大納言、〈○藤原孝親〉奉行職事輔房朝臣、九月廿三日伊勢外宮正遷宮、

〔神宮年代記抄〕天正十三年乙酉十月十三日、内宮御遷宮、同十五日、外宮御遷宮、御神入ニツイテ雨

山云云、訴訟猶未落居歟、廿一日甲寅、神宮禰宜等昨日已下向云云、十二月十五日戊寅、外宮遷宮神寶之料鷲羽事、先日六位史來申之間、今日遣之、予(〇藤原道嗣)幷右府(〇藤原兼嗣)分二褁遣之、十七日庚辰、今夜外宮遷宮日時定云云、

〔康曆二年外宮遷宮記〕康曆元年己未八月廿三日、正權禰宜以下上洛、是御遷宮延引事、爲申達也、參洛禰宜三(朝照)五(貞昌)六(良彥)九(常勝)幷權官延名(二代)以下也、七(久彥)九月二日上洛、但不及入洛、皆宿石山也、委細注于上洛記、

內宮來度造替山口祭木本祭事、任御卜之趣、外宮遷御以前、可有沙汰之由被仰下之處、禰宜等無是非可企參訴云云事、已爲重事、此上者於彼兩祭者、遷宮以後可被遂行、早可止參洛之儀之由、可被下知外宮之旨被仰下之狀如件、

八月廿六日　右大辨判

祭主神祇權大副殿

外宮禰宜等參訴事、遷宮以前被行內宮山口木本祭之條、更無先例之由愁申歟、於其段者、可被遂行外宮遷御之旨、先度被仰下之上者、不可有所存歟、至神寶料足事、別被仰武家之間、不日可申沙汰之旨申領狀畢、此上者止參洛之儀、早令下國、若猶及遲引者、重可申所存之旨、可被下知禰宜等之旨被仰下之狀如件、

八月廿八日　右大辨判

祭主神祇權大副殿　同日施行于一禰宜

外宮禰宜等參洛企事、條々嘆訴、一々裁許、定開眉哉、於遷宮事者、爲無雙之大儀、不日難被遂行歟、來十一月中、必被奉獻神寶、可被遂行遷御、此上者早令下國、可專祈謝之由、可被下知禰宜等之旨被仰下之狀如件、

康永四年九月日〇又見二康永日記一、

〔大神宮參詣記 坂士佛〕參詣の次第により、先外宮御垂跡の事を記す、〇中略千木鰹木の歳霜を經たる、猶一千餘囘の月を殘すといへども、宮居鳥居の雲霧にかたぶける、いまだ二十年の秋にあはず、當國の靜謐もちかき程なれば、造營の延引もことはり也、九月中に山口祭有べしなどきこえしかども、大儀なればさりのべられぬ、

〔後深心院關白記〕永和五年〇康暦元年八月廿八日壬辰、或云、伊勢大神宮神寶事、振二棄粟田口邊一、是遷宮遲々令二訴訟一、　廿九日癸巳、傳聞外宮禰宜到二著四宮河原一之時、祭主馳向相宥云云、神寶事、不日可二沙汰一之間、武家又誘仰云云、

裏書云、

大神宮禰宜參洛例

長暦三年二月十五日、禰宜等參洛、是去年御遷宮、祭主佐國可レ參二宮一之處、依レ有二内裏穢氣一不レ被レ進二官幣一、而佐國爲レ申二行遷宮事一私下向、爰大司兼任陳二非例一之由、祭主不二承引一之間、御遷宮勤、既以違例、依二其訴一所二參洛一也、

保延三年十一月廿五日、依二數箇條訴訟一、二宮正權禰宜以下職掌人等數千人參洛、

康永二年十二月、外宮一禰宜家行參洛、條々爲二訴訟一云云、

可レ被レ許二禁河一之由、度々雖レ申二請御沙汰一、未二落居一之時分也、〇中略

九月六日己亥、兼治來、神宮禰宜上洛事、〇中略祭主馳向相宥候之間、經二廻勢多邊一之由承候、或又逗留石山邊之由其說候、神寶事、武家忩可レ致二其沙汰一之由、申云云、神寶料足三千貫之内、千二百下行、今千八百未下云云、　十日癸卯、傳聞大神宮神寶、十一月中必可二調獻一之由、武家承諾之間、此趣被レ下二綸旨一之間、禰宜下向云云、　十九日壬子、神宮禰宜等、已令二下向一之由先日聞之處、于レ今無二其儀一、神寶奉二安石

〔類聚大補任 後深草〕建長二年庚戌二月廿六日、外宮禰宜四與房七朝行八貞尚等參洛、去年當宮御遷宮延引事、爲被相尋子細被下院宣、應召所令上洛也、三月五日下著、

建長三年辛亥七月四日、外宮禰宜三人、去年參洛輩、猶應召上洛、同御遷宮延引事、重爲被召問、

〔諸家系圖纂 大中臣〕知經 權大副、建長造外宮使依遂失、建長五年十一月十八日被止官位、贖銅十斤、是則建長元年外宮遷御式日延引科也、

〔園太暦〕康永三年閏二月廿一日、抑中御門前宰相宣明卿來、爲勅使被尋仰、外宮遷宮可爲今年歟、可爲來年歟問事也、所詮被仰談造宮使、可被左右之由申入了、　四年〇貞和元年九月六日、抑又右中辨經隆朝臣爲勅使入來謁之、傳勅定云、外宮遷宮、今月式月也、而去月依武家穢、徒無沙汰、難被出、仍延引可爲來月也、而度々例延引之時、被發遣一社奉幣使、無其足之間、例幣宣命辭別載之、被謝申之條可爲何樣哉之由被尋匡遠之處、天慶八年有其例云云、此上可被因准歟可計申云云者、予〇藤原公賢申詞、并匡遠請文續左、

外宮遷宮、式月違期事、任度々例、被發遣一社奉幣使、有祈謝之條不能左右歟、而近日諸國亡弊、神寶經營之上、件幣料其力難治歟、然者擬天慶例、載例幣宣命辭別被謝申、尤可有便歟、但此事天慶八年例云云、非當年強難无巨難、爲代末蹤跡、聊可有議歟、廣被經沙汰可被左右乎、

天慶八年九月、外宮遷宮依作遲怠、式日延引、同月十一日例幣之次、載宣命辭別、被謝申遷宮延引事、同十二月十三日、被發遣遷宮神寶等了、所見如斯、匡遠謹解、

八月廿五日　匡遠請文

十一日、例幣、別當〇藤原隆蔭參行云云、辨仲房也、外宮遷宮延引祈謝事、可被載今日宣命辭別歟之由、先日有勅問、治定之樣可尋記、

辭別氏申賜者止久申久、依觸穢事氏、造外宮遷宮式月既留延引勢利氏仍來十月廿二日乃吉曜乎所擇定奈利、大神此狀乎平久安久聞食氏、天下無爲留海内泰平留護恤給倍度恐美恐美毛申賜者止々申、

大夫、新大納言、平宰相〇親經已上被申兩度可有遷宮殿〇殿恐衍及御卜之由、右兵衛督被申兩度不可有遷宮之由、修理大夫被申遷宮雖點止、但止他過差、若可被行御卜之由云云、　六月三日戊子、左近衛大將師長卿參著仗座、被行申伊勢大神宮新造遷宮日時幷奉幣事、先仰右少辨重方、召日時勘文三通、內覽奏聞如例、〇中略

一通、奉遣御幣使於伊勢大神宮日時、

今月三日戊子　時申二點

年月日下、陰陽師六人連署、

一通、伊勢大神宮御遷宮日時、

今月十六日辛丑　時亥二點

年月日下同前

一通、被立伊勢大神宮內院荒垣鳥居日時、

今月九日甲午　時巳二點　若未

年月日下同前

奉幣幷遷宮之間、雜事併准正遷宮例被行云云、

〇按ズルニ、臨時遷宮ノ仗議ハ正遷宮ニ准ズルノ旨ニ決シタリ、因テ其式年ノ遷宮ハ前年ヨリ起算シ、二十年ニシテ行ハレタリ、萬治天和ノ臨時遷宮ノ如キモ此例ト相異ナルコトナシ、

〔百練抄十六後深草〕建長元年九月十七日乙酉、伊勢豐受大神宮御遷宮延引、　廿日戊子、被勘改伊勢外宮御遷宮日時、軒廊御卜也、同宮遷宮延引事、　於院〇後嵯峨被議定同遷宮延引事、　廿六日甲午、伊勢豐受大神宮遷宮也、　五年九月廿六日辛丑、仗議也、造豐受大神宮使神祇權大副大中臣知經朝臣、幷頭工等、木作遷宮式日延引罪名事、土御門大納言顯忠卿已下參仕、

以昨日勘文、持參太政大臣家、令定申、卽被定申者、伊勢大神宮幷豐受宮、廿年一度宮移時副神寶、猶辨史參向者也、而此度辨皆有障不可參者、然則取代官可令發向、神事之時、辨有障時、取代官是例也者、仍自殿上有仰事、令清蔭卿行作事、以神祇伯忠望王、爲辨代之由宣旨被定仰又了、以十二日可行大祓事之由又被仰了、

〔中右記〕永久二年三月六日、文書、參院之次、民部卿俊明○源被談云、伊世遷宮有延引例者、所被申如此、天慶八年九月延引、十二月十三日被奉神寶幷御裝束等、九月十一日例幣宣命、辭別云、十月中可奉移之、而依造作未了、奉使被謝申延引之由、然而無事、至于十二月奉移之例、無近代國史、文武天皇二年十二月有宮移事、依例無宣命云云、見續日本紀第一卷、十二月乙卯、遷多氣大神宮于度會郡、如此記文者、非廿年遷宮歟如何、文武天皇例能可尋也、

〔兵範記〕仁安四年○嘉應元年二月一日戊子、依大神宮火事、可造營正殿事、去月被仰下五箇國了、猶有議、重召諸道勘文、可及仗議由、依攝政○藤原基房仰、藏人少輔○藤原兼光宣下左府○藤原經宗云云、

仁安四年二月一日　宣旨

以大神宮今年造營新殿、可爲正遷宮哉、若然者當時遷座之假殿、可奉改否、兼又外宮造營□□□□年限歟、宜仰神祇官、紀傳明經明法博士、陰陽道、幷權中納言○藤原實長式部大輔藤原朝臣、○永範祭主親隆朝臣、大外記淸原賴業、中原師尙等令勘申、

藏人治部少輔藤原兼光奉

左府召大外記賴業眞人仰之、又下知可有仗議由云云、　七日甲午、今夜依大神宮造營事有仗議、按察使、公通左大將、師長上﨟皇后宮大夫、實定新大納言、隆季權大納言、實房右兵衛督、兼雅修理大夫、成賴參議、親範家通右大辨實綱等參內、藏人少輔下諸道勘文於左大將、次群議、右大辨讀勘文等、卽爲發語人、件勘文、作今日以外記、被見廻諸卿云云、按察權大納言、藤宰相、○家通右大辨已上被定申可被行御卜之由、左大將、皇后宮

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年九月八日丁巳、遣正五位下守左中辨源朝臣直、右大史正六位上廣階宿禰八釣於伊勢大神宮、奉神寶、是日太政官停尋常政、但非廢務之例也、

○按ズルニ、本書ニイハユル神寶ハ、何ノ爲ニ奉ラレタルカヲ詳ニセザレドモ、此年ハ豐受大神宮正遷宮ノ式年ニ相當スレバ、或ハ二十年一度ノ神寶トシテ同宮ニ奉ラレタルナランカ、錄シテ後考ニ供ス、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年、九月五日庚辰、奉大神宮神寶使左大史正六位上善世宿禰有興、史生二人、官掌一人進發、凡伊勢大神宮神寶、二十年一度改作、前修之後十九年于茲、雖未滿限、改造既畢、仍奉之、是日諸司廢務、而神祇官不進解文、責過狀、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年三月二日癸亥、先是遣使修造伊勢大神宮、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十一月廿一日辛丑、是日勅遣散位從六位上大中臣朝臣岑雄、判官一人、主典一人、造伊勢大神宮、據式二十年一度改作、去貞觀十一年修造、其後十八年于茲矣、

○按ズルニ、貞觀十一年ハ上ニ引ケル類聚國史ニ據ルニ十年ノ誤ナルベシ、サテ此元慶八年及ビ仁和元年ノ事蹟ハ、倶ニ前記仁和二年皇大神宮ノ造替ニ屬セリ、而シテ同宮ノ造替ニシテ、其式年未滿ノ例ハ、天平遷宮ト此仁和遷宮トノ二回アルノミ、並ニ前式年ヨリ十九年後ナリ、

〔本朝世紀〕天慶八年十二月九日辛未、今日召大外記三統宿禰公忠、仰云、伊勢豐受宮、去延長四年、廿年一度宮移後、今年至廿年、可有宮移事、仍自先年、以大中臣瀧良、定其使、給諸國不動正稅、令作新宮、須九月上○上恐中誤旬、依例可有作宮移事、而依件新宮未修畢、九月無其事、但十一日例幣宣命、被謝申其事、今月月次祭次、欲行作宮移事、○中略上卿以件勘文、附藏人令經奏聞、仰云、今日日已暮、明朝以件勘文、奉太政大臣家、○藤原忠平可令定申者、仍上卿退出已了、　十日壬申、今朝藏人木工權助藤原佐忠、

一遷宮年內裏神事、中古以往、只如例幣之時、至于神寶發遣之時、有致齋、於遷宮者、公家不可知食故、
十六七日全無神事、而近古以來、至于遷宮之日有神事、但無後齋、（謂十八日也）
建久元年九月十三日甲子、今日以後、公家爲神事哉否、人々不審、檢舊記之處、具見嘉保匡房記、上古
不齋、天喜以後爲散齋、遷宮當日許致齋、又無後齋云云、　十六日丁卯、此日伊勢大神宮遷御新造宮
之日也、仍公家幷予（○藤原兼實）爲致齋、雖有遙拜之志、依灸治不拜、但修祓、又臨刻限正衣冠祈念之、

〔大神宮諸雜事記　一〕卽位四年庚寅（○持統天皇四年）大神宮御遷宮、同六年壬辰豐受大神宮御遷宮、（○又見二所大神宮例文、遷宮參詣記、）

〔續日本紀　四十桓武〕延曆十年八月壬寅、詔遣參議左大辨正四位上兼春宮大夫中衞中將大和守紀朝臣
古佐美、參議神祇伯從四位下兼式部大輔左兵衞督近江守大中臣朝臣諸魚、神祇少副外從五位下
忌部宿禰人上於伊勢大神宮、奉幣帛、以謝神宮被焚焉、又遣使修造之、

○按ズルニ、此ハ皇大神宮ニ臨時遷宮アリシ始ナリ、而シテ此臨時遷宮ハ、前式年ヨリ八年ニ
當レドモ、此次ノ弘仁元年ノ遷宮ハ、此臨時遷宮ノ年ヨリ起算シ、十九年ニシテ行ハレタリ、尚
ホ正遷宮通載ノ條ヲ參看スベシ、

〔續日本後紀　十九仁明〕嘉祥二年九月丁巳、遣左中辨從五位上文室朝臣助雄等、奉神寶於伊勢大神宮、是
廿年一度所奉例也、

〔類聚國史　三神祇〕貞觀十年九月七日丁酉、遣從五位下守右少辨藤原朝臣千乘、左大史正六位上刑部
造眞鯨等、伊勢大神宮、奉大神財寶、是隔廿年所造也、大祓於建禮門前而發使、

○按ズルニ、右ノ二書ハ、倶ニ神寶使ノ事ニシテ、遷宮ニ臨ミ、之ヲ發遣セラレシナリ、而シテ嘉
祥ノ文ハ、廿年一度所奉例也トアレドモ、前式年ヨリ計フレバ、二十一年ニ當レリ、貞觀ノ文ハ
隔廿年所造也トアレドモ、前式年ヨリ計フレバ二十年ナリ、

人々被同此旨、但治部卿〇藤原基綱被申云、堀川院皇居燒亡之時、有僉議之日、伊勢內外宮遷宮之間被仰作內裏有憚由、所被沙汰也、仰云、追可有沙汰、十一日、又於多節者、自此六條御所常王相也、今年不可遷御也、里亭於被新造者、可被參明後年歟、內外宮遷宮之間、雖有造宮先例、强非吉例、仍心閑可被作也、

〔建久元年內宮遷宮記〕今月〇文治四年八月院〇後白河御所六條大裏棟上延引云云、是依相當當宮〇大神宮御手錢始之時、無便宜之由自殿下〇藤原兼實令申御之故云云、

〔長秋記〕保延元年八月廿二日癸亥、入夜參院、令貢憲奏云、御堂供養事、十月全不可諧、非一方皆以懈怠歟、九月伊勢遷宮〇豐受大神宮間、畿內國々可勤事巨多也、其程暫不加催實宜歟、仰云、伊勢正遷宮年、如此堂舍供養可有憚之由、前大相國〇藤原忠實所示也、仍如只今可延引定也、其由未被仰、尤思食懈怠者、暫不可加催、重申云、遷宮年有憚由雖令存候、於遷宮以後尙可有憚之由未念得候、但雖明年、無懈怠可被忩、不然尙難叶候歟、仰云、尤可然、但遷宮以後事、重有沙汰、被問人々、可爲一定事也、

〔中右記〕保延元年九月十三日、關白殿〇藤原忠通給御消息云、自內被尋仰云、伊勢正遷宮年、九月十七日以前爲神事、是康平以來所出來也、〇中略其間被行佛事若僧事例、雖被尋不分明也、但神今食齋中、被行僧事例候之由、或人所申也、相准如何者、仰旨如此、相量可參給之狀如件、予進返事云、康平以後、九月十七日以前、被用神事候ハ、不可被行佛事候也、其故ハ伊勢事、一度も被行事事不被留也、是有增無減之習也、强可被忩行僧事、不可候ハ此間猶可被過候歟、

〔禁秘御抄中〕臨時神事

於東庭有御拜、是同公卿勅使之時、伊勢遷宮等時、又隨叡慮臨時御拜、或三日五日ナド皆有例、御物忌時敬神無憚、於東庭有御拜也、且寬治六年伊勢假殿遷宮夜、雖爲御物忌、於東庭有御拜也、

〔玉海〕承安三年九月十六日丙午、入夜向關白〇藤原基房御許、〇中略被示事等、

○按ズルニ、持統天皇四年庚寅、初テ正遷宮ヲ行ヒシ後、天平及ビ嘉祥ニ二十一年ニシテ遷宮アリ、又天平神護及ビ仁和ニ十九年ニシテ遷宮アリシ外、元亨ニ至ルマデ、皆二十年ニシテ、遷宮アリ、然ルニ康永ニ二十一年ニシテ之ヲ行ヒシヨリ以後、通ジテ二十一年ヲ以テ定例ト爲セリ、

〔遷宮例文〕造大神宮所次第行事　祭禮條

夫伊勢二所大神宮、廿年ニ一度之造替遷宮ハ、皇家第一重事、神宮無雙大營也、十七年孟冬、祭山口神始奉造事、十八年中秋、木作始、十九年同中秋御上棟、廿年暮秋九月新宮ニ御遷坐、首尾四年致揆日之構、終成風之功、

〔延喜式四伊勢大神宮〕大神宮裝束中略○

右裝束雜物造備訖、中略○九月十四日、裝飾度會宮、十五日奉徙御像、同日裝飾大神宮、十六日奉徙御像、先令祭主申裝飾之狀、若祭主有障、令宮司申、然後裝飾、

〔延喜大神宮式首書〕按、天正十三年以前、無二宮同年正遷宮之例、內宮正遷宮之後、間一年有外宮正遷宮以爲常、今此式自山口祭至此、雖並載二宮之事、非謂二宮同年遷宮、莫以文害意、

〔古老口實傳〕凡廿年一度、二宮造替遷宮年、停止天下斧音云云、故則不造私宅者也、康平遷宮年、二禰宜雅通雅通恐雅通誤○託宣炳焉、又見遷宮例文○

〔百練抄五堀河〕嘉保元年十月卅日、諸卿於御前定申、中略○造伊勢大神宮之間、可有造內裏哉否事、

〔中右記〕永久二年八月五日丁未、可被作新皇居事如何、予藤原宗忠○申云、今年內宮遷宮歟、明後年外宮正遷宮年也、明年被急作可宜歟、　六日戊申、又仰云、新造里亭尙可被作也、而本御所大炊殿之地、與諸司町之間如何、予申云、兩所之間被尋勝地可被作歟、但今年伊勢內宮正遷宮也、又明後年外宮正遷宮也、然者明年其際可被作歟、往年伊勢遷宮之間、內裏雖有造營例、猶於正遷宮年者、尤可有憚也、

〔大神宮諸雜事記〕天平十九年九月、大神宮御遷宮、○中略同十二月諸別宮同奉遷、廿年一度御遷宮長例宣旨了、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡大神宮廿年一度、造替正殿寶殿及外幣殿、度會宮、及別宮餘社、造神殿之年限准此、皆採新材構造、自外諸院新舊通用、○宮地定置二處、至限更遷、又見皇大神宮儀式帳、

〔新儀式四臨時〕伊勢大神遷宮事

大神遷宮之事、依式歷廿年行之、前二三年、神祇官申任造宮使、除舊新造、正殿心柱須令當中央立之、而近代依有憚忌、多遷本穴立之、應和二年、同遷中央立之者、不改其柱、只科祓而行之、

〔禰宜守朝記〕皇大神宮神主

注進可早被經次第御沙汰當宮造替御遷宮事

右、當宮御遷宮者、蒙被定廿一箇年、被成造替、今度去寬正三年之御遷宮以來、及卅六年不被遂此節之條、御殿朽損、以外次第也、○中略仍注進如件、以解、

明應六年日付　　大內人――行久上

禰宜――守朝十人加署

〔神宮文證〕豐受大神宮神主

依御敎書注進彗星出現別而抽丹誠間事

右、○中略爰當宮御造替之事、往古以來、必以廿一箇年被定例者也、而永享六年甲寅歲之正遷宮以後、經七十三年星霜之間、正御殿無跡形、言語道斷、无勿體次第也、然間連々妖孽不祥出來者歟、○中略注進言上如件、

永正三年八月日　　正六位上度會神主行延上

禰宜正五位上度會神主○以下署名略

式年式日

同日戌刻御遷御(但申刻ヨリ進〇寛政八年ヨリ二十一年)

〔松木長官公文所日次〕文化六年九月四日

一遷御(〇豐受大神宮)之事

〔文政内宮正遷宮記〕文政十二年己丑、九月同日(〇朔日)遷御行事、酉刻參進、(〇文化六年ヨリ二十一年)

〔範彦卿日次〕文政十二己丑年九月同日(〇五日)

一遷御(〇豐受大神宮)之事(〇下略)

〔長官守雅家牒〕嘉永二年己酉九月、同日(〇朔日)正遷宮、(〇皇大神宮、文政十二年ヨリ二十一年、)

〔宮後長官公文所引留〕嘉永二己酉年九月

五日御遷幸(〇豐受大神宮、下略、)

〔異本大神宮諸雜事記 一〕白鳳十四年(乙酉〇天武天皇十四年)九月(〇通海參詣記作八月)十日、始二所大神宮江被奉神寶廿一種、亦中外院殿舍四面重々御門鳥居等始被作加、官符二所大神宮殿舍御門垣等破損時、宮司令修補、承前例也、自今以後、廿年一度新宮造替可奉遷御、宜長例者也、(〇又見園太曆、通海參詣記、)

〔大神宮諸雜事記 一〕朱雀三年九月廿日、依左大臣宣、奉勅伊勢二所大神宮御神寶物等、於差勅使被奉送畢、(色目不記)宣旨狀偁、二所大神宮之御遷宮事、廿年一度應奉令遷御、立爲長例也云云、

〇按ズルニ、朱雀三年ハ卽チ朱鳥三年ニテ、持統天皇ノ二年カ、然レドモ之ヲ天武天皇ノ下ニ係ケタレバ、然ラザルニ似タリ、寶基本紀ニハ、朱雀三年ノ下ニ癸酉ノ二字アリ、天武天皇ノ元年ナリ、同書ノ一本ニハ白鳳二年乙酉ニ作ル、天武天皇ノ十四年ナリ、然レドモ其書ハ信ズベキモノニアラズ、左大臣ハ同書ニ右大臣ニ作ル、日本書紀、及公卿補任ニ、當時大臣タル人ナシ、亦疑フベシ、要スルニ白鳳朱雀ハ並ニ日本書紀ニ見エズ、其年代ニ至リテハ、古書ニ引ク所一ナラズ、今ハ各其支干ニ從ヒテ之ヲ注ス、

後光明天皇慶安二年己丑式月廿五日内宮正遷宮、自寛永六年至今年二十一年、
同年式月廿七日外宮正遷宮
後西院天皇同年〇萬治二年十一月廿五日内宮臨時遷宮〇依炎上也
太上天皇〇靈元寛文九年己酉式月廿六日内宮正遷宮、自慶安二年至今年二十一年、
同年式月廿八日外宮正遷宮
天和三年癸亥三月十日内宮臨時遷宮〇依炎上也
今上皇帝〇東山元祿二年己巳式月十日内宮正遷宮、自寛文九年至今年二十一年、
同年式月十三日外宮正遷宮
〔二所皇大神宮遷宮次第記續編〕東山天皇寶永六年己丑式月〇九月、以下同、二日内宮正遷宮、自元祿二年至今年廿一年、
同年式月五日外宮正遷宮
中御門天皇享保十四年己酉式月三日内宮正遷宮、自寶永六年至今年二十一年、
同年式月六日外宮正遷宮
桃園天皇寛延二年己巳式月一日内宮正遷宮、自享保十四年至今年廿一年、
同年式月四日外宮正遷宮
太上天皇〇後櫻町明和六年己丑式月三日内宮正遷宮、自寛延二年至今年廿一年、
同年式月六日外宮正遷宮
〔神宮編年記〕寛政元己酉年九月朔日御遷宮〇皇大神宮、明和六年ヨリ二十一年、
〔寛政外宮遷宮記〕天明九己酉年〇寛政元年九月同日〇四日戌時遷御〇下略
〔文化六年内宮遷宮記〕文化六年九月朔日御遷宮覺

貞和元年乙酉十二月廿七日外宮遷宮、崇光院御宇、内宮隔中一年、
貞治三年甲辰二月十六日内宮遷宮、自康永二年及廿二年、
康暦二年庚申外宮遷宮、後圓融院御宇、自内宮遷宮隔中十五年、非常延引此時也、雖遣禁事終、宮司忠繕長基等依葺萱無沙汰、令遷々之、
頼、當國及神宮等、爲南方管領間、年序押移、自貞和元年之御遷宮及三十六箇年、神慮叵測者也、
同年〇明德二年十二月廿日内宮遷宮、自貞治三年及廿八年、
同年〇應永七年外宮遷宮、稱光院御宇、内宮隔中九年、自康暦二年及廿一年、
應永十八年辛卯十二月内宮遷宮、自明德二年及廿一年、
應永廿六年己亥十二月廿一日外宮遷宮、内宮隔中七年、自應永七年及廿年、
永享三年辛亥十二月十八日内宮遷宮、自應永十八年及廿一年、
永享六年甲寅九月十五日外宮遷宮、内宮隔中二年、自應永廿六年及十六年、
寛正三年壬午十二月廿七日内宮遷宮、自永享三年及三十二年、〇中略
〔兩宮遷宮假殿次第〕兩宮正遷宮幷假殿遷宮之次第
永祿六年癸亥外宮遷宮正親町院御宇、内宮正遷宮ヨリ中及百年〇前外宮正遷宮ヨリ百三十年、
天正十三年乙酉十月十三日内宮遷宮、同〇正親町御宇、寛正三年ノ正遷宮ヨリ中及百廿二年、
同年十月十五日外宮遷宮、同御宇、内宮遷宮ヨリ中一日後ナリ、
慶長拾四年九月廿一日内宮遷宮、後陽成院御宇、天正十三年ヨリ中及二十三年、
同年九月廿七日外宮遷宮、同御宇、内宮遷宮ヨリ中五箇日後也、
〔二所皇大神宮遷宮次第記 五〕後水尾天皇寛永六年己巳弐月〇九月、以下同、廿一日内宮正遷宮、自慶長十四年至今年二十一年、
同年弐月廿三日外宮正遷宮〇歴年數ハ皆大神宮ニ同ジキヲ以テ書ク、以下同、

依炎上也、

承安元年辛卯内宮遷宮、自仁平二年及廿年、自臨時及三年、

承安三年癸巳外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

建久元年庚戌九月十六日内宮遷宮、後鳥羽院御字、自承安元年及廿年、

建久三年壬子外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

承元三年己巳八月廿日内宮遷宮、土御門院御字、自建久元年及廿年、

建暦元年辛未外宮遷宮、順徳院御字内宮隔中一年、

安貞二年戊子内宮遷宮、後堀河院御字、自承元三年及廿年、

寛喜二年庚寅外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

寶治元年丁未九月十六日内宮遷宮、後深草院御字、自安貞二年及廿年、

建長元年己酉外宮遷宮、内宮隔中一年、

文永三年丙寅内宮(宮下恐脱二遷宮二字)同(龜山)御字、自寶治元年及廿年、

文永五年戊辰外宮遷宮、内宮隔中一年、

弘安八年乙酉内宮遷宮、自文永三年及廿年、

弘安十年丁亥外宮遷宮、内宮隔中一年、

嘉元二年十二月廿二日内宮遷宮、自弘安八年及廿年、

嘉元四年丙午外宮遷宮、内宮隔中一年、

同○元亨三年癸亥九月十六日、内宮遷宮、自嘉元二年及廿年、

正中二年乙丑九月十六日、外宮遷宮、内宮隔中一年、

康永二年癸未十二月廿八日内宮遷宮、光明院御字、自元亨三年及廿一年、

永觀元年癸未外宮遷宮、同御字自内宮遷宮隔中一年、

長保二年庚子内宮遷宮、一條院御字自天元四年及廿年、

長保四年壬寅外宮遷宮、同御字自内宮遷宮隔中一年、

寛仁三年己未内宮遷宮、後一條院御字自長保二年及廿年、

治安元年辛酉外宮遷宮、同御字自内宮遷宮隔中一年、

長暦二年戊寅九月内宮遷宮、後朱雀院御字自寛仁三年及廿年、

長久元年庚辰九月九日○大神宮諸雜事記十五日トス外宮遷宮、自内宮遷宮隔中一年、

天喜五年丁酉内宮遷宮、後冷泉院御字自長暦二年及廿年、

康平二年己亥外宮遷宮、同御字自内宮遷宮隔中一年、

承保三年丙辰内宮遷宮、白河院御字自天喜五年及廿年、

承暦二年戊午外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

嘉保二年乙亥九月内宮遷宮、同(堀河)御字自承保三年及廿年、

承德元年丁丑外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

永久二年甲午九月内宮遷宮、同(鳥羽)御字自嘉保二年及廿年、

永久四年丙申外宮遷宮、内宮隔中一年、

長承二年癸丑内宮遷宮、同(崇德)御字自永久二年及廿年、

保延元年乙卯外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

仁平二年壬申内宮遷宮、近衛院御字自長承二年及廿年、

久壽元年甲戌外宮遷宮、同御字内宮隔中一年、

嘉應元年己丑十二月内宮臨。時。遷。宮、高倉院御字自仁平二年遷宮及十八年、去年仁安三年十二月廿一日

延暦十一年(壬申)內宮臨時御遷宮、依炎上也、自延暦四年至八箇年、

弘仁元年(庚寅)內宮遷宮、(嵯峨天皇御宇)自延暦四年及廿六年、同十一年自臨時御遷宮者至十九年、

弘仁三年(壬辰)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

天長六年(己酉)內宮遷宮、(淳和天皇御宇)自弘仁元年及廿年、

天長八年(辛亥)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

嘉祥二年(己巳)內宮遷宮、(仁明天皇御宇)自天長六年及廿一年、

仁壽元年(辛未)外宮遷宮、(文德天皇御宇)自內宮遷宮隔中一年、

貞觀十年(戊子)內宮遷宮、(清和天皇御宇)自嘉祥二年及廿年、

貞觀十二年(庚寅)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

仁和二年(丙午)內宮遷宮、(光孝天皇御宇)自貞觀十年及十九年、

寬平元年(己酉)外宮遷宮、(宇多天皇御宇)自內宮遷宮隔中二箇年、

延喜五年(乙丑)內宮遷宮、(醍醐天皇御宇)自仁和二年及廿年、

延喜七年(丁卯)外宮遷宮、(同御宇)自內宮遷宮隔中一年、

延長二年(甲申)內宮遷宮、(同御宇)自延喜五年及廿年、

延長四年(丙戌)外宮遷宮、(同御宇)自內宮遷宮隔中一年、

天慶六年(癸卯)內宮遷宮、(朱雀院御宇)自延長二年及廿年、

天慶八年(乙巳)外宮遷宮、(同御宇)自內宮遷宮隔中一年、

應和二年(壬戌)內宮遷宮、(村上天皇御宇)自天慶六年及廿年、

康保元年(甲子)外宮遷宮、(同御宇)自內宮遷宮隔中一年、

天元四年(辛巳)內宮遷宮、(圓融院御宇)自應和二年及廿年、

ルニ永祿中、慶光院ノ尼清順、勅許ヲ得テ、諸國ヲ勸化シ、錢財ヲ收ムルアリ、是ニ於テ豐受大神宮正遷宮ノ再興アリ、時ニ前ノ正遷宮ヲ距ルコト百二十九年ナリ、繼デ天正中ニ織田信長、豐臣秀吉等ノ資財ヲ獻ズルアリ、是ニ於テ皇大神宮正遷宮ノ再興アリ、時ニ前ノ正遷宮ヲ距ルコト百二十三年ナリ、慶長以降ハ、家康以下德川氏ニテ常ニ造營料ヲ支辨シ、復タ往時ノ失體ナキノミナラズ祭祀等ノ廢典ヲ興シヽコトモ亦少カラズ、文久年中ニ至リ、既ニ山口祭木作始ノ式ヲ行ヒ、工事未ダ終ラズシテ、明治ノ革新ニ會シ、遂ニ朝廷ニテ之ヲ完成セラレタリ、

正遷宮遷殿

〔二所大神宮例文〕二所大神宮正遷宮臨時幷假殿遷宮次第

白鳳十三年(庚寅)九月大神宮御遷宮(持統天皇四年也、自此御宇造替遷宮、被定置廿年、但大伴皇子(弘文)謀反時、依天武天皇之御宿願也、)

朱鳥二年(壬辰)外宮御遷宮、(同御宇六年)

和銅二年(己酉)內宮御遷宮、(元明天皇御宇)自白鳳十三年及廿二年、

和銅四年(辛亥)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

天平元年(己巳)內宮遷宮、(聖武御宇)自和銅二年及廿一年、

天平四年(壬申)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中二年、

天平十九年(丁亥)九月內宮遷宮、自元年及十九年、

天平勝寶元年(庚寅)外宮遷宮、(孝謙天皇御宇)自內宮遷宮隔中二年、

天平神護二年(丙午)內宮遷宮、(稱德天皇御宇)自天平十九年及廿年、

神護景雲二年(戊申)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

延曆四年(乙丑)內宮遷宮、(桓武天皇御宇)自天平神護二年及廿年、

延曆六年(丁卯)外宮遷宮、自內宮遷宮隔中一年、

祭、心御柱祭ハ、宮地ヲ鎮祭シ、心御柱ヲ樹立シ、杵築祭ハ、宮地ヲ築キ堅ムル祭ナリ、當年ニハ御船代、後鎮等ノ祭アリ、御船代祭ハ御船代ノ料材ヲ採リ、後鎮祭ハ造宮竣功ノ祭ナリ、此餘尙ホ諸祭アリ、

凡工事ヲ起サントスルニハ、先ヅ造宮使ヲ命ジテ、造宮ノ庶事ヲ管セシメ、又神寶使ヲ命ジテ、神寶裝束ヲ備設セシメ、奉遷使ヲ命ジテ、御體遷御ノ事ヲ掌ラシム、而シテ神寶使發遣ノ日ハ、古來朝廷ニテ多ク廢務セリ、以上ノ諸祭ト諸使トハ後世變革多シ、

造宮ノ用途ハ、神戶ノ調庸田租ヲ用キ、其人夫ヲ役スル事ナリシガ、後ニハ成功ト稱シテ、賞ルニ官位ヲ以テシテ之ヲ成サシメ、役夫工米ト稱シテ、役夫工匠ノ糧ヲ海內ニ徵シ、關錢ト稱シテ、關ヲ置キ錢ヲ收メ、又造宮使ニ命ジテ、臨時私物ヲ出シテ之ヲ辨ゼシムル等ノ事アリシカド、上ニ述ベタルガ如ク、寛正ノ正遷宮以後ハ、正遷宮ノ式ヲ擧グルコト能ハズシテ、假殿遷宮ノミヲ行フニ至ル、

假殿ハ新ニ之ヲ建ツルアリ、便宜ノ殿舍ヲ用キルアリ、其殿ニハ古來東寶殿、御饌殿、忌火屋殿ノ三殿ヲ用キル、此外ニ或ハ初ニ便宜ノ殿舍ヲ用キテ、後ニ假殿ヲ新造スルアリ、古殿ヲ以テ假殿ト爲スアリ、古殿トハ遷宮前ノ殿ヲ云フ、蓋シ新殿ノ既ニ成ルヤ、舊殿ハ壞廢スベキナレド、未ダ壞タザリシモノ是ナリ、而シテ假殿遷宮ハ、火災ニ由レルアリ、屋上ノ檜皮若クハ茅ヲ修補スルアリ、心御柱御裝束ノ事ニ由レル等ニシテ、或ハ一宿遷宮ノ事モアリキ、一宿トハ即日還御ナラザルモノニテ、一宿以上ヲ經ルモノヲ云フ、要スルニ假殿ハ造宮ノ間ニ於テ、假ニ用キル所ナレド、常ニ此ヲ以テ御座ト爲セル時ニ當リテハ、之ヲ建ツルコトモ亦容易ナラズ、故ニ北畠織田等ニ囑シテ費用ヲ獻ゼシメ、或ハ神官ノ自ラ儲殿ヲ建テヽ假殿ニ代フルガ如キ事アリキ、儲殿トハ假殿ノ假ナルモノニテ、假殿ノ名ヲ避クルナリ、而

古事類苑

神祇部五十三

大神宮三

遷宮上

大神宮遷宮ノ式ハ、一定ノ期限アリテ之ヲ式年ト云ヒ、神殿ヲ造替シ神座ヲ奉遷ス、而シテ假殿遷宮ニ對シテハ之ヲ正遷宮ト云フ、式年ハ二十年一度ヲ以テ制ト爲シ、別宮亦之ニ準ズ、而シテ豐受大神宮ノ遷宮ハ、皇大神宮ヨリ後ルヽコト毎ニ二年ニシテ、亦二十年ヲ以テ式年トス、而ルニ光明天皇ノ康永四年ニ、二十一年ニシテ皇大神宮ノ遷宮アリシヨリ、此例ニ據リシ事多シ、而シテ豐受大神宮ハ永享六年ニ至リ、皇大神宮ハ寛正三年ニ至リ正遷宮アリシ後、終ニ式年ノ制中絶セリ、其後永祿天正中再興アリシ以來、二宮常ニ同年ニ式ヲ擧ゲ、式年ノ制舊ニ復セリ、

遷宮ニハ、式年アルノミナラズ、月日ニモ亦定期アリ、之ヲ式日ト云フ、卽チ宮殿ヲ裝飾スルニハ、皇大神宮ハ九月十五日ヲ用ヰ、豐受大神宮ハ十四日ヲ用ヰ、御靈代ヲ徙シ奉ルニハ、各其翌日ヲ用ヰルナリ、寛正以降ハ此法ニ依ラズ、豫メ日時ヲトスルコトヽナレリ、

臨時遷宮ハ、火災等ノ變ニ由リ、已ムコトヲ得ズ式年ノ制ニ從フコト能ハザルモノナレド、其次ノ遷宮ハ、或ハ前式年ヨリ算ヘ、或ハ其年ヨリ算ヘテ、古來ノ例二樣アリ、

遷宮以前諸種ノ祭式アリ、遷宮前三年、山口木本祭アリ、山口祭ハ、御杣ノ山口ノ神ヲ祭リ、木本祭ハ、心御柱ヲ造ルタメニ木本ノ神ヲ祭ルナリ、前一年、地曳、心御柱、杵築等ノ祭アリ、地曳

へ被致言上、兩宮之末社御立被成候、外宮四十末社ノ建日ハ、寛永二十一甲申年〇正保元年初七月二日、終ハ同年極月廿三日也、四十末社ノ請料、大工手前千五百兩ニテ請取也、

〔每事問〕中問、外宮四十末社、內宮八十末社ハ、何ノ書ニ出タルヤ、答、何ノ書ニモ出ザル事ナリ、凡テ宮中〇宮城ニ廻神ノ祭ト云コトアリテ、外宮儀式帳廻二百餘前ト云、內宮儀式帳ニ百二十餘前ト云コト出テ紀談ニ談ズルガ如シ、〇中略所謂廻神ノ二百餘前、百二十餘前ト云ルモ、社號神名モ分明ナラズ、何ノ比ヨリカ其心ニテ設ケタルヤ、表具ヲ掛ケ、其前ニ方三尺許板ヲ置テ人ニ拜セシムル事アリテ、初末社ノ遙拜所ナリト云ケル、其初知ザレドモ、御竈木帳ニ載スル所ノ四十七社ノ數ニ由ル歟、四十字ハ小屋形ノ如クナル物アリタルニ、石川氏御奉行ノ時遷宮ノ餘金アルヲ以テ官營ト爲給ヒ、〇中略其後ハ破損ニ從テ今ノ如クニ官營ナル事例ト成レリ、然ルニ此拜所無名ナルニ由テ、祇候ノ下部等、或ハ佛號ヲ呼テ參詣人ニ指南スルモノ有タルヲ見テ、寛文九年五月ニ御奉行桑山氏ノ命トシテ、皆社號ヲ書テ額ヲ掲グベシト長官全彥へ告ラル、同年八月中ニ皆額ヲ打タリ、河崎延貞ヲシテ書シムルナリ、其社號ノ中、國見社、大國玉社、北御門社、上御井社、下御井社、高神社、客神社、伊賀利社、山末社、已上ノ九社ハ御竈木帳ノ中ナレドモ、社ノ宮域ニ在ルヲ以テ除キ、大河內社、志等美社ハ、御竈木帳四十七社中ナレドモ、其比〇寛文三年ノ攝社再興ニ社地詳ナラズトテ、岩戶坂ノ中へ宮司ヨリ建タル故ニ、是モ宮域ニ在トテ除キタリ、〇中略又此拜所ノ中ニ在ル井中社、毛利社、大津社、志賣屋社ハ、御竈木帳ノ外ナレドモ、上ノ十一社ヲ除クニ由テ、四十ノ數ニ不足ナルヲ以テ、神祇本源ニ載タル此四社ヲ加ヘテ數ニ滿タルナリ、〇下略

月夜見社　草名伎社
大間國生社　度會國御神社
度會大國玉比賣社　田上大水社
志等美社　大河內社
清野井庭社　高河原社
河原大社　河原淵社
山末社　宇須乃野社
小俣社　御食社

右諸社並預祈年神嘗祭

〔神名秘書〕度會宮

式內攝社十六座

月夜見社在沼木郷大河原村○大河原、類聚神祇本源作山田、　草奈岐社在沼木郷山田村
大間國生社在沼木郷山田村　度會國御社在沼木郷山田村
度會大國玉比賣社在蘿橋郷宇宮山　田上大水社在蘿橋郷宇宮崎
志等美社在沼木郷山幡村　大河內社在沼木郷山幡村
清野井庭社在沼木郷山田村　高河原社在沼木郷山田村
河原大社在箕曲郷勾村　河原淵社在箕曲郷勾村川原社向、字號坪向也、
山末社在蘿橋郷宇宮山小梨谷　宇須乃野社在高向郷高向村
小俣社在湯田郷小俣村　御饗社在箕曲郷大口村三社內也○節略

〔常基古今雜事記〕一外宮四十末社、內宮八十末社ヲ御建可有之、依神忠、石川大隅守殿奉行○山田公方

正殿二區、長各六尺、廣各四尺、高各三尺、玉垣一重、長八丈、高八尺、御門壹間、高八尺、長六尺、

右三所神社、造宮使造奉、此祝死闕替、申送大神宮司、即卜食定、其後家祓淸預供奉事、

度會之國都御神社　度會之大國玉姫神社

田上神社　蔀野井庭神社

大河内社　淸野井庭神社

高河原社　川原社

川原淵社　山末社

宇須乃野社　水戸御食都神社

小俣社

正殿拾參區、長各五尺、廣各三尺五寸、高各三尺、玉垣十三重、長各六丈、高各八尺、御門拾參間、高各八尺、廣各六尺、

右十六社、官幣帛宛奉、但十三社者國宛料、令造奉、於祝、又春秋幷三度祭者、飾別禰宜内人等率、祝等供奉、此祝死闕替禰宜等、申送大神宮司、即卜食定、其後家祓淸預供奉事、

伊我理神社　縣神社

井中社　打懸社

志等美社　毛理社

大津社　土賣屋社

右八社、未載官帳名、但社无料祝造奉、但年中三度祭者、禰宜内人等、率祝等供奉、此祝同如上卜食定、

〔延喜式四伊勢大神宮〕諸社卌座〇中略

度會宮所攝十六座

豐受大神宮攝社

式內所攝神社廿四座

朝熊社在宇治鄉

麁相社在沼木鄉積良村

鴨社在城田鄉山上村

田邊社在城田鄉矢野村

蚊野社在田邊鄉蚊野村

湯田社在湯田鄉

大土御祖社在宇治鄉

國津御祖社在宇治鄉

朽羅社在田邊鄉原村

伊佐奈彌社

津長大水社在宇治鄉

大水社在宇治鄉

大國玉比賣社在度會郡沼木鄉

江神社在二見鄉

神前社在宇治鄉下松下

粟皇子社在伊介嶋

久具都比賣社在城田鄉久具村

奈良波良社在同鄉宮子村

棒原社在田邊鄉

御船社在有爾鄉土羽村

坂手國生社在田邊鄉氏社北岡

狹田國生社在湯田鄉佐田村

多伎原社在三瀨村

川原社在沼木鄉佐八村○鶴鳴

〔止由氣宮儀式帳〕一所管度會郡神社事

合貳拾肆處載官帳名社十六處、未載官帳名社八處

月讀神社

正殿貳區長各六尺、廣各四尺、高各三尺、玉垣壹重長八丈、高八尺、御門一間高八尺、廣六尺、

草奈伎神社

正殿一區長六尺、廣四尺、高三尺、玉垣一重長七丈、高八尺、御門壹間高八尺、廣六尺、

大間國生神社

乍彌乃神社
大水上兒、寒川比古命、寒川比女命、形無、
以上十五前神社
右神社倭比賣乃御時仁祝、幷御刀代田宛奉也、末祝乃任不レ免、仍號二田社一氏、爲レ供二奉官一〇官本作レ定一祝同

〔延喜式四伊勢大神宮〕諸社卌座
大神宮所攝廿四座
朝熊社　園相社
鴨社　田乃家社
蚊野社　湯田社
大土御祖社　國津御祖社
朽羅社　伊佐奈彌社
津長社　大水社
大國玉比賣社　江神社
神前社　粟皇子社
久具都比賣社　奈良波良社
棒原社　御船社
坂手國生社　狹田國生社
多岐原社　河原社〇中略
右諸社並預二祈年神嘗祭一

〔神名秘書〕皇大神宮

許母利神社
粟島神、御玉形無、
新川神社
大水上神兒、新川比賣命、形石坐、
石井神社
大水上兒、高水上命、形石坐、
宇治乃奴鬼神社
大水上御兒、高水上、形石坐、
加努彌神社
大歳神兒、稲依比女命、形石坐、
川相神社
大水上御子兒、細川水神、形石坐、
熊淵神社
大水上御子、多支大刀自神、形無、
荒前神社
國生神兒、荒前比賣命、形石坐、
那自賣神社
大水上御祖命、形石坐、又同御玉御裳乃須蘇比女命、形石坐、
葦立弖神社
宇治都比女命兒、玉移良比女命、形石坐、

正殿一字、(長五尺、弘三尺三寸、高四尺二寸、)玉垣一重、(四方各二丈八尺、)坐地五町、四至、(東林、南道、西林、北公田、)

狹田神社一處

　耕須麻留女神兒、速川比古、速川比女、山末御玉三柱、形無、同內親王定祝、

正殿一字、(長六尺、弘四尺、高七尺、)玉垣一重、(四方各二丈、)坐地一町五段、四至、(東南百姓地、西北公田、)

瀧原神社一處

　耕麻奈胡乃神、形石坐、同內親王代定祝、

正殿一字、(長六尺、弘四尺、高七尺、)玉垣一重、(四方各二丈、)坐地三町、四至、(東道、南山、西北大川、)

　以上十七箇處神國津社

右社隨破壞之時、國郡司以正稅稻修造如件、

以前祝部等、大神宮司卜食定任之狀、移送伊勢國司之、

一未官帳入田社事

鴨下神社一處

　大水上兒、石己呂君(〇君一本作居)鴨比古賣命、形無、

　右神社、大神宮造奉使(〇使下一本有遣奉二字)而祝、形無、

津布良神社

　大水神兒津布良比古、津布良比賣命、形無、

葭原神社

　大歲神兒佐佐津比古命、形石坐、又宇加乃御玉御祖命、形無、又伊加利比女、形無、

小社神社

　大水上兒高水上命、形石坐、

粟御子神社一處
稱須佐乃乎命御玉、道主命、形石坐、同內親王定祝、
正殿一字、長四尺、弘四尺五寸、高六尺、玉垣一重、四方各四丈坐地八段、四至、東西大溝、南北山、
川原神社一處
稱月讀神御玉、形無、同內親王定祝、
正殿一字、長四尺、弘三尺、高六尺、玉垣一重、四方各二丈坐地九段、四至、東西北大川、南畠、
久具社一處
稱大水上神御子、久久都比女命、又久久都比古、形石坐、同內親王定祝、
正殿三字、長四尺、弘三尺、高六尺、玉垣一重、四方各二丈坐地九段、四至、東西北大川、南畠、
檜原神社一處
稱大水上兒、那良原比女命、形石坐、同內親王定祝、
正殿一字、長六尺、弘四尺、高七尺、玉垣一重、四方各二丈坐地五町、四至、並大山
捧原神社一處
稱天須波留女命、御玉形無、奈良朝廷御代定祝、
正殿二字、長各六尺、弘各四尺、高七尺、玉垣一重、四方各三丈坐地三町、四至、東南松原、西澤岡、北道公田、
御船神社一處
稱大神乃御蔭川神、形無、倭姫內親王代定祝、
正殿二字、長七尺、弘五尺、高八尺、玉垣一重、四方各二丈坐地二町、四至、東南公田、西百姓家、北御刀代田、
坂手神社一處
稱大水上兒、高水上、形石坐、同內親王定祝、

正殿一宇、（長七尺、弘四尺、高五尺、）以板葺奉、玉垣一重、（長三丈六尺、）坐地二段、四至、（東南公田、西北溝、）

宇治山田神社一處

稱大水神兒、山田姫命、形無、同内親王御世定祝、

正殿一宇、（長七尺、弘四尺、高五尺、）以板葺奉、御垣二重、（一重玉垣、長四丈八尺、高八尺、一重柴垣、長二十五丈、高一丈、）坐地二段三百歩、四至、（東道、南宇治大川、西澤井畠、北大道、）

津長大水神社一處

稱大水上兒、栖長比女命、形石坐、倭姫内親王代定祝、

正殿一宇、（長六尺、弘四尺、高六尺、）玉垣一重、（四方各二丈、）坐地三町、四至、（東道、南西北山、）

堅田神社一處

稱東方堅田神社、形石坐、同内親王定祝、

正殿一宇、（長四丈二尺、高六尺五寸、弘五尺、）玉垣一重、（長四丈二尺、高八尺、）坐地一町三百歩、四至、（東山、南公田、西溝井百姓家、北大溝、）

大水神社一處

稱大山罪乃御祖命、形無、同内親王祝定、

正殿一宇、（長六尺、弘四尺、高六尺、）玉垣一重、（四方各二丈、）坐地二町五段、四至、（東道、西南北山、）

江神社一處

稱天須婆留女命兒、長口女命、形在水、又大歳御祖命、形無、又宇加乃御玉、同内親王定祝、

正殿一宇、（長四尺、弘五尺、高六尺、）玉垣一重、（長四丈、高一丈、）坐地一町、四至、（東溝井堀、南西山、北耕田、）

神前神社一處

稱國生神兒、荒前比賣命、形石坐、同内親王定祝、

正殿一宇、（長四尺、弘五尺、高六尺、）玉垣一重、（長四丈、高八尺、）坐地一町二百歩、四至、（東北大溝、南西山、）

田邊神社一處

稱大神御滄川神、形鏡坐、大長谷天皇〈○雄略〉御宇定祝、

正殿一區、〈長一丈、弘九尺、高五尺、〉御床一具、〈長四尺、高五尺、弘二尺五寸、〉前一宇、〈長四尺、高三尺、弘三尺六寸、〉御門一間、〈長四尺、弘七尺、〉玉垣二重、〈長八尺、〉坐地一町九段三百卌歩、四至、〈東限五百木部浄人家井小道、南限道、西北限公田、〉

蚊野社一處

稱大神御蔭川神、形鏡坐、大長谷天皇御宇定祝、

正殿一宇、〈長一丈、弘九尺、高五尺、〉御床一具、〈長四尺五寸、弘二尺、高一尺、〉瑞垣一重、〈長三丈、高七尺、〉御門一間、〈長八尺、弘四尺五寸、高七尺、〉玉垣一重、〈長三丈、高七尺、〉前殿一宇、〈長三尺五寸、弘二尺四寸、高七尺、〉坐地二町、四至、〈東溝井島、南西道、北島、〉

湯田社一處

稱鳴震雷、又大歲御祖命、形無、同御宇定祝、

正殿二區、〈長各四尺五寸、弘四尺、高三尺、〉玉垣一重、〈長三丈五尺、高七尺、〉御門一間、〈九尺、八尺、〉坐地二町五段、四至、〈東南川、西北公田、〉

已上六箇處社、造神宮使造作奉也、

大土神社一處

稱國生神兒、大國玉命、次水佐佐良比古命、次佐佐良比賣命、形石坐、倭姫內親王定祝、

正殿一宇、〈長六尺七寸、弘六尺六寸、高六尺、〉玉垣一重、〈長一丈二尺、高六尺六寸、〉坐地八段、四至、〈東公田、南即神御刀代井溝、西家田堰井大川、北百姓島、〉

國津御祖社一處

稱國生神兒、宇治比賣命、形石坐、又田村比賣命、形無、同內親王御世定祝、

正殿一宇、〈長七尺、弘四尺、高五尺、〉以草葺奉、玉垣一重、〈長四丈四尺、高六尺七寸、〉坐地大土神社之四至內、

久麻良比神社一處

稱大歲神兒、千依比賣命、形石坐、同內親王御世定祝、

〔皇繼年序記〕正保元年七月晦日、丑寅ノ時、大風吹テ、宮中大木數多顚倒ス、○中略風宮艮ヨリ大杉二本、殿上ニ顚倒、御殿不殘破損、○中略御正體八月三日戊刻、幣帛殿ヘ末ノ禰宜二人シテ奉遷、十二月十八日夜、幣帛殿ヨリ、風宮ノ御正體、風宮ヘ奉遷、末ノ役故、又貞和貞惟奉仕也、

〔常基古今雜事記〕正保二年霜月廿一日、風宮新殿之古材ニテハアレドモ、前方ノ大風ニテ顚倒イタシ、山田大內藏人寄進ニテ、新殿ヲ被立候也、

○

〔皇大神宮儀式帳〕一管度會郡神社行事

合四十處官帳社廿五處、未官帳入社十五處、

瀧祭神社在大神宮西川邊、無御殿、

小朝熊神社一處

稱神櫛玉命兒、大歳兒櫻大刀自、形石坐、又苔虫神、形石坐、又大山罪命子、朝熊水神、形石坐、倭姬內親王御世定祝、

正殿一區、長一丈四尺、弘一丈一尺、高八尺、御床一具、玉垣二重、長七丈、各高一丈、御門二間、高各一丈、弘各八尺、御倉一字、長一丈四尺、弘一丈、高八尺、前一處、長一丈二尺、弘五尺、坐地八町、四至、東大山、南公田、西宇治大川、北御竈島、

蘭相神社一處

稱大水上兒、曾奈比比古命、形石坐、同內親王定祝、

正殿一區、長九尺、弘七尺五寸、高四尺六寸、玉垣一重、長八丈、坐地十町、四至、東川、南西大山、北公田、

鴨社一處

稱大水上兒、石己呂和居命、形石坐、同內親王定祝、

正殿二區、長各一丈、弘九尺、高五尺、玉垣二重、長九丈二尺、坐地五町、四至、東南西山、北公田、

（皇大神宮引付）一左辨官下伊勢大神宮司

應且注進神事違例穢氣不淨且祈謝御藥天下疾病洪水兵革鬪諍口舌等事

右得祭主神祇大副大中臣清臣卿去月日奏狀偁、同月日大神宮司解偁、豐受大神宮禰宜等同月日注文偁、去月廿二日辰刻、當宮別宮風宮御殿西御棟持柱令顚倒、御壁幷御板敷等頽落、御體奉遷調御倉、○中略

享德三年八月廿九日　大史小槻宿禰判

右中辨藤原朝臣判

皇大神宮神主

依宣旨注進就外宮風宮顚倒可致祈禱丹誠間事

右得去月廿九日宣旨偁、今月十日官狀、同十五日祭主下知偁云云、就之被行御卜之處、勘申條々不一、仍可致祈禱精誠之由、被仰下之旨、謹所請如件者、任宣旨之旨禰宜等一同可奉抽祈禱之丹誠者也、仍注進如件、以解、

享德三年十月日　大内人―――末久上

禰宜從四位上荒木田神主滿久○以下署名略

（常基古今雜事記）寛永廿一年八月、京都ヨリ注進狀之返答之寫、

去七月廿九日夜、依大風正殿乾方葺萱、同方高欄等小破、幷風宮就破損暫奉遷御正體於御倉之由、被驚思食畢、右破損所々、仰宮司令修造、宜奉遷風宮御正體於本宮之由、天氣所候也、者、早可令下知豐受宮給之狀如件、

八月廿三日　實豐

四位史殿

に遷宮有、御正印の御藏に御座候間、御藏より移し被申候、朝敦(○中略)宜一の御代也、

〔頭工引付〕此通書留置可申事(○中略)

千、かつ、鳥居、さるがしらの御門、いがき迄、

一風宮

〔豐受大神宮遷御近例〕天正三年(乙亥)三月廿八日、風宮御遷宮、(濃州稻庭某被遣進者也、又見久志本在近年代記)○

〔延寶六年宮中圖〕風宮

一正殿一區

千木四枝　堅魚木五枚

瑞垣一重　御門一間　鳥居一基　御炊殿一間

〔嘉元遷宮御飾記〕風宮

幌一條(長五尺五寸、弘三幅、)天井生絹帳一條(長捌尺、弘三幅、)蚊屋一條(長陸尺、弘十二幅、)同蚊屋生絹帳一條(長陸尺、弘三幅、)細布土代帷一條(長五尺五寸、弘二幅、)帛御被一條(裏同、)生絹御被一條(裏同、已上長各四尺、弘各二幅、納綿各十六兩宛、)帛御衣一領(裏帛同)生絹御衣一領(裏同、)緋御衣一領(裏同、已上長各二尺、納綿各四兩、)帛御裳一腰、紫紗御裳一腰(已上、單御裳、裳長各四尺、腰長各四尺、長二尺、)錦御衣一領(裏緋綾、長二尺、納綿二兩、)緑帶二條(長各六尺、)御櫛筥一合(奉居御床上也、)紫髮結二條(奉納御櫛筥也、長各四尺、)韓櫃一合、

〔類聚神祇本源(十一外宮別宮)〕風宮(○中略)

社記曰、正應六年三月廿日官符、改社號奉授宮號、預官幣、依異國降伏之御祈也、

〔神名秘書〕風神社

舊記云、山谷水變成甘水、浸潤苗稼、得其全穩、故有風神祭、名曰柏(カシハナガシ)流也、豐年則浮流過、凶年則沈覆損云々、四月七月祭之、

〔神宮編年記〕文久三年五月十八日、風日祈宮御祈御教書、(○詳大神宮別宮風宮條故略)

風宮

モ略見渡リ、隣町ノ童僕不斷遊ビ戯レ、殿内トイヘドモ無恐土石ヲ打上ル故、此節神宮中愁ヒ申、無勿體存間、遷宮ノ象テ古殿内見ノ爲ニ、正員不殘昇殿シ、於殿内御内ノ樣子見ルノ處ニ、土石ハ山ノ如ニ積リテ、御神體オハシマシ不給ニ依テ、禰宜中ノ愁イハンカタナクシテ、驚キサワギ給フ、七禰宜常晨、殿内申酉ノ方ノ土石ノ中ヲサガシ見給ヘバ、御神體オハシマセリ、常晨隨喜ノ顔セヲ靜メ、忍ヤカニ自ラ裝束ノ袂ニ移シ奉リ、則御假櫃ニ奉鎭ヌ、殿内ヨリ出退テ、殘ル禰宜中ヘ申給フハ、嚴然タル御神體ヲ直ニ奉拜、不測如此奉頂事無勿體候ヘ共、神忠ト存ジ、身命ヲ不顧、加樣ニ致シ候ト被申タリ、

〔月讀宮臨時遷宮記〕寛文十年十一月廿四日、上中之鄕領、ナタヤノ世古ヨリ火事出來而、及月讀宮時、則禰宜等馳參彼宮、五禰宜常生、七禰宜繼彥、奉戴於御體、奉遷外幣殿、既而月讀宮一宇令回祿畢、〇中略

九月十五日、〇寛文十一年未刻御淸鉇、〇中略

一東ノ御屋敷ニ諸暫之假殿以黑木造之、御殿之御壁等以榊葉葺之圍之、〇下略

〔神名秘書〕風神社

件神者、内宮風神與同體也、〇下略

〔類聚神祇本源〕十一外宮別宮風宮在神宮南土宮東、但南向坐、御靈如本八咫鏡坐、〇中略

社記曰、〇中略嘉元正遷宮之時、被作增寶殿畢、

〔外宮殿舍寸法頭工等引付〕造外宮諸殿舍　應永九壬午年二月廿一日〇中略

一貳百貫文　風宮御門瑞垣鳥居也〇中略

一卅五貫文　風宮いいやでん〇下略

〔外宮子良館舊記〕延德四年五月十三日、風宮を高向屋二頭大夫殿、假殿たて候、やがて五月廿七日

應永卅年八月一日　政所權禰宜文興判

〔類聚神祇本源十一外宮別宮〕月讀宮
准土宮嘉例、依申子細、承元四年五月廿二日被下依請宣旨、被授宮號了、

〔延喜式四伊勢大神宮〕度會宮所攝十六座
月夜見社〇中略
右諸社預祈年神嘗祭

〔康富記〕應永廿六年二月十二日丁亥、今夜釋奠也、〇中略依去月四日、伊勢月讀宮回祿事、宴穩座被略畢、　廿八日癸卯、伊勢一社奉幣、并廢朝宣下被行之、依去正月四日未刻、月讀宮炎上被謝申之也、

〔外宮殿舍寸法頭工等引付〕應永廿六年正月四日のゑんせうの事
一月夜見宮、同おどの、かわらやしろ、いやでん、御やけ候、同五日、御ゑんたいは、くさなぎやゑろへうつしまいらせ候、同御かりどの、四月廿日に立申、これはおどのゝまへにたて申て候、
一ゆきのまは六尺、うつのり五尺、つまのまは五尺、御いたゑき三尺五寸、おなじき廿九日に御せんぐうにて御入候、〇又見應永廿九年外宮假殿遷宮記、及外宮應永記、司家日記、

〔神宮文輯〕永祿九年十二月外宮禰宜等解狀
豐受大神宮神主
注進早經次第上奏、可被達于叡聞外宮月讀宮假殿御炎上之事
右月讀宮假殿、去七日夜寅刻俄御炎上、怪異叵測之刻、七禰宜完彥急昇殿內、戴出御體於炎下、奉遷本宮〇外宮御倉、神威不汚、爲皇都御護者乎、然則以勅命、遷御之儀被仰出者、天長地久、國家安全之御祈、何事如之哉、仍注進言上如件、

〔常基古今雜事記〕一慶長十四年、家康公、正遷宮被進候時、月讀宮就遷宮、右殿以ノ外破損シテ、殿內

代帷一條（長五尺五寸、弘二幅、）帛御被一條（裏同、）生絹御被一條（裏同、已上、長各四尺、弘各二幅、納綿各十六兩宛、）帛御衣一領（裏同、）生絹御衣一領（裏同、）絓御衣一領（裏同、已上、長各二尺、納綿各四兩、）帛御裳一腰、紫紗御裳一腰（已上、單御裳、襴長各四尺、腰長各四尺、長二尺、）錦御衣一領（裏絓綾、長二尺、納綿四兩、）緑帶二條（長各六尺、）御櫛筥一合、紫髮結二條（奉納御櫛筥也、長各四尺、）韓櫃一合、（○中略）

〔應永廿六年送官符〕太政官符　伊勢大神宮司（○中略）

月讀宮御裝束

生絹蚊屋貳條（壹條長陸尺、弘參幅、壹條長陸尺、弘拾貳幅、）　天井生絹帳壹條（長捌尺、弘參幅、）　細布土代帷壹條（長伍尺伍寸、弘貳幅、）

帛被壹條（裏同）　生絹被壹條（裏同）

已上長各肆尺、弘貳幅、納綿各拾陸兩、

絓衣壹領（裏同）　生絹衣壹領（裏同）　錦衣壹領（裏絓綾）　帛衣壹領（裏同帛）

已上長各貳尺、納綿各肆兩、

帛御裳壹腰　單紫紗裳壹腰

已上單御裳、襴長各肆尺、高貳尺、腰長各肆尺、

御櫛筥壹合（尺寸同土宮、黑漆平文、白鑞蓋口、小文錦折立、納御櫛漆枚、）　紫御髮結貳條（長各肆尺）　生絹幌貳條（壹條、長伍尺伍寸、弘參幅、壹條長漆尺、弘參幅、）　緑帶貳條（長各陸尺）　奉遷內人物忌、白布明衣貳領（男女各壹領、長各肆丈五尺、）

已上納朱漆辛櫃壹合（○下略）

〔應永遷宮記〕請預外宮月讀宮神寶等事

合

御弓　十張　胡籙　十腰　御楯　六枚　御鉾　六竿

御大刀　三腰　御鏡　二面（付八花崎、同筥二合、）御櫛筥　二合（付同櫛七枚）

右任送文旨所請預如件

〔通海參詣記〕月讀宮、承元四年五月廿二日宣下、土宮ノ任例、別宮トシテ、寸法ヲ增シ奉ルベキ由、造宮使ニ被仰、〇下略

〔玉葉〕建暦元年五月十九日、未刻左中辨宣房朝臣來、予〇藤原道家仰云、月讀宮造營間事、可准別宮之由宣下已畢、又可增寸法一定既了、〇下略

〔外宮殿舍寸法頭工等引付〕造外宮諸殿舍　應永九壬午年二月廿一日〇中略

一貳百貫文　月讀宮御門、みづ垣、鳥居造、〇中略

一三拾五貫文　月夜見宮いいやでん〇中略

一百三拾貫文　月讀宮おごの〇中略

一[illegible]　月讀宮一のでん〇中略

應永九年八月八日造外宮諸殿〇中略

一八拾貫文　月讀宮のちうしや

一廿貫文　月讀宮かわらやしろ

〔延寶六年月讀宮圖〕月讀宮

一正殿一區

千木四枝　堅魚木五枚

瑞垣一重　御門一間　鳥居一基

〔延寶六年宮中圖〕月讀宮

一遙拜所一間　御炊殿一間

〔嘉元遷宮御飾記〕月讀宮

幌一條、長五尺五寸、弘三幅、天井生絹帳一條、長陸尺、弘三幅、蚊屋一條、長陸尺、弘十二幅、同蚊屋生絹帳一條、長陸尺、弘三幅、細布土

月讀宮境内、近代違犯有之、今度滿彦長官相改之、築土手堀溝道等、間尺相極、記繪圖畢、向後此旨堅可相守、仍後證加奥書者也、

延寶六年戊午五月吉日　丹後印〇山田奉行桑山貞政

〔神民須知〕宮後

勢州古今名所集曰、社記曰、月夜見社坐沼木郷山田村トアリ、今此所ヲ宮後ト云也、本宮〇外宮ノ後ニ當ル所ナレバカク云ヘル也、其間一二町今考ルニ四町計リアリノ大路、古ヘハ並木アリテ、其通ノ中央ヲバ不淨ノ者サケテ通ザル也、其家次ニ囲ノ戸ヲモ道ノ方ヘアケザル也、中比家居ナラベ立テ、並木モナク成ケレバ、石ヲ疊ミテ、其石ノ外ヲ汚穢ノ人ハ通ヒシト也、此故實有ニ付テ、古老ノ傳ニ、

宮柱たてそめしより月讀の神のゆきかふ中の古道

月讀の宮づかへとてつとに起き通ふ神路を淸めざらめや

此二首口碑ニ殘レリ

〔神名秘書〕月讀宮一座在神宮北方、靈御形鏡坐、宮號之時、奉渡之也、〇中略 神名内宮與同體神也、

〔止由氣宮儀式帳〕一所管度會郡神社事

月讀神社

正殿貳區、長各六尺、廣各四尺、高各三尺、玉垣壹重、長八丈、高八尺、御門壹間、高八尺、廣六尺、〇中略

右三所神社造宮使造奉、〇下略

〔神名秘書〕月讀宮一座

右神准土宮之嘉例、依神事之増加、定別宮、可被増作寶殿寸法之由、承元四年三月廿五日、次第上奏之處、同年五月廿二日、依請被下宣旨、建暦元年正遷宮之時、造宮使神祇權少祐親繼以私物造進之、准内宮造建小殿也、〇又見類聚大補任、類聚神祇本源、

のいろひを禁じ、一禰宜に支配せしめ、廻に堀を穿、堤を築せ給へり、凡二三百年も四至荒廢せしに、此度檢地の時、古しへの堺目木を堀出したる事まことに不思議也、此事檜垣常基雜事記には、寛文元年十一月中旬とし、繼彥日次には寛文二年八月とゑるせり、按するに元年十一月は普請の發端、二年八月は普請の成就をゑるせるなるべし、寛文二年より延寶六年まで年數十七年を經たる內に、堤頹れ堀埋れて、又人民宮地を犯すものあり、十禰宜滿彥是をなげきて、御奉行桑山貞政朝臣に訴へ、堤を改て堀の內際に築き、大道を廣め、延寶六年六月十八日、四隅に際目の本を入れ、末代まで違犯の事なからしむ、○中略其折定りたる四至の間尺、幷貞政朝臣の御奧書左の如し、

一月讀宮牓示間尺幷奧書之覺

東頰　自北之際目至南之際目八十七間、水道廣五尺、以六尺二寸爲一間、餘同之、

南頰　自東之際目至西之際目七十五間五尺、水道廣三尺、大道三間、

西頰　自北之際目至南之際目八十三間四尺六寸、水道廣五尺、此頰自北之際目、○以下欠

北頰　自東之際目至西之際目七十七間一尺八寸、此頰自東之際目至西有二十二間五尺之大道廣二間、

土手內間　東頰四十五間五尺　　土手內間　南頰四十二間三尺

土手內間　西頰四十一間五尺　　土手內間　北頰四十四間三尺

右月讀宮之牓示者、雖古代有所定之丈尺、人家犯奪宮地久矣、往年一禰宜度會常晨訴之公儀、即賜檢使、遂至割其所犯之地、堀水道爲宮地限、廻大道築土手、漸復舊、頃又土手頹廢、乃達事於公儀、移彼土手築之堀內、且廣大道、四隅鎭木爲際目、辨令後人無凌犯、更作繪圖永爲後證如件、

延寶六年戊午五月吉日　　外宮一禰宜滿彥判

仁平元年五月十一日庚戌、權中納言忠基卿著右仗、召神祇官陰陽寮、被行御卜事、

陰陽寮

占伊勢大神宮司言上怪異吉凶、

豐受宮別宮土宮生絹蚊屋御帳、鼠喰損、同蚊屋、幷天井覆、生絹帳、濕損、御床敷細布土代帷、鼠喰

濕損、

〔百練抄 後深草 十六〕建長二年二月廿八日甲子、於院〇後嵯峨殿上、被議定去年伊勢外宮遷宮時、所取落之安〇安恐土誤宮瑠璃壺事、幷西寶殿血氣事、 三月一日丁卯、軒廊御卜、外宮瑠璃壺事、幷血氣事、

〔神名秘書〕土宮三座〇中略

建長文永遷宮之時、有違例事、即瑠璃壺落顚、就中文永遷宮之時、瑠璃壺幷本鏡二面、奉遷落之間、御體奉仕物忌父康村爲久等被解任已了、

〔止由氣宮儀式帳〕一所管度會郡神社事

月讀神社

〔延喜式 神名 九〕伊勢國度會郡月夜見神社

〔類聚神祇本源 十一 外宮別宮〕月讀宮 在神宮北四面廻百二十二丈、四至、去瑞垣東西南北二十二丈、

御靈形鏡坐

〔代々乃惠〕入木宗直宿禰、外宮月讀宮の宮地を古に復し給ふ事、付桑山貞政朝臣四至を定給ふ事、

外宮月讀宮の宮地は、〇中略亂世の頃より四至の界も知られずなり、人民宮地を掠めて家をたて、南の方にある妙鏡寺などは堀をうめて地を築き、堂をたてたる故に、築地寺ともいへり、一禰宜常長これを嘆きて、御奉行〇山田入木宗直宿禰に訴たるに、宗直宿禰江府に上達し給ひ、本意のごとく四方の人家を引移し、妙鏡寺も後園の藪を切、客殿も破却し給ひ、宮地四方四町に定め、他人

〔通海參詣記〕土宮、大治三年六月五日防河ノ功ニ依テ宮號ノ宣旨ヲ被下、長承三年八月三日、諸別宮ノ任例ニテ、幣ヲ送リ可奉也、

〔長秋記〕長承三年六月廿一日己亥、按察使談云、明日可有仗議事、朝家大事、必可參、豐受大神宮土宮、彼外宮地主也、然而年來無預官幣、而今度准七所別宮、〈内宮別宮〉可預官幣之由、自本宮依申請、已蒙裁許、仍重申請云、御殿元高五許尺也、而准七所別宮者、毎年荷前幣物可納御殿内也、件幣物、廿年遷宮外無取出事者、不大造於御殿、件物無可置之處者、准内宮荒祭、外宮高宮等、可被造、此御殿一丈許有何難哉云々、同宮自本東向也、而大神宮并七所神宮皆南向也、今度准他社、可造南面歟、又件社本自有鳥居、而内垣内無有鳥居之例者、今度可立鳥居之否事也、件三事可依仗儀云々、　廿四日壬寅、源大納言、新中納言、新宰相中將三事共不可改舊儀、其中源大納言云、別宮等中有無神殿之所云々者、必以幣物不納神殿中歟、以陰陽不量爲神者、付新儀趣不可改歟、按察使右宰相中將公教、神殿毎造宮增其高云々、左宰相中將、隨自本宮注、新造寸法言上畢、隨申請被造大何事在、不准七所可預給官幣者、以其幣物納神殿事、不造大不可在事歟、南向事、任舊如元東向何事在矣、鳥居事、内鳥居同無有他鳥居、又失本鳥居事、某難量申者、可被行御卜歟、下官〈○源師時〉中宮權大夫申云、於神殿從本宮申可造大之由、於向方并鳥居、只可任舊、下官副詞云、土宮地主神也、無知造社本緣之人、自昔東向奉居、何可改定哉、就中八幡御殿西諸神皆東向坐、賀茂、片岳、又東向坐、以是等例准據、可依所便宜歟、於鳥居祭大社鳥居中、有他鳥居之例、諸社多存、於高宮荒祭者、各立中門云々、令准中門被立鳥居有何事矣、

〔本朝世紀〕康治二年七月一日丙辰、權大納言藤宗輔卿參左仗、被行軒廊御卜、官寮參仕如常、是伊勢豐受大神宮正殿御戸鎰匙穴小蛇出入事、同別宮土宮御床上、土代布、鼠食損怪異等也、

天養元年十二月十日、御卜奏也、次位記請印、次御卜、依伊勢豐受宮別宮土宮御床上土鋪細布、惟鼠喰損事也、

保延元年遷宮之時、造宮使親章造。進。之。

〔外宮殿舍寸法頭工等引付〕應永九年壬午二月廿一日〇中略

一貳百貫文　土宮御門瑞垣鳥居也、〇中略

一三拾五貫文　土宮いいやでん〇下略

〔天文正外宮假殿遷宮記〕天文廿辛亥年二月十六日、土。宮。遷。宮。日記、〇中略

一此度造榮〇榮恐營字之儀、當所上部殿ノ旦方、備中ノホイ田セウ殿ヨリノ立願ニテノ造榮也、百貫文ノ下行之由、其沙汰アリ、

一古殿ノ御神寶ハ、鉾一、楯一帖、御矢廿許、御弓一テウ計也、然ニ新殿ヘノ運物、餘ニ徒然ナル間、榊ノ枝ヲ一枝ヅヽ新殿ヘ權任一圓召立讀アゲテ後、枝ヲハコブ、〇中略

一此度土宮殿之御カザリ料十貫文也、是モ上部方ヨリ、現錢五貫五百文ト、絹九匹半端ト、宮司ヘ被渡テ、殿内御カザリマイル、〇下略

〔頭工引付〕此通書留置可申事〇中略

千。か。つ。鳥。居。さ。る。が。し。ら。の。御。門。い。が。き。迄、

〔嘉元遷宮御飾記〕土宮

一土宮

帳、長五尺五寸、弘三幅、天井生絹帳一條、長捌尺、弘三幅、生絹蚊屋一條、長陸尺、弘十一幅、同蚊屋二條、長陸尺、弘三幅、細布土代帷一條、長五尺五寸、弘二幅、帛御被一條、裏同帛、生絹御被一條、裏同帛、已上、長各四尺、弘二幅、納綿各十六兩、帛御衣一領、裏同帛、生絹御衣一條、裏同、緋御衣一領、裏同、已上、長各二尺、納綿各四兩、帛御裳一腰、紫紗御裳一腰、已上單御裳、裏長各四尺、腰長各四尺、長二尺、錦御衣一領、裏緋綾、長二尺、納綿四兩、御櫛筥一合、在ニ御居床上也、紫御髮結二條、在納ニ御櫛筥也、長各四尺、韓櫃一合、緋帶二條、在納ニ韓櫃也、長各四尺、

〔神名秘書〕大治三年六月官符、改。社號。爲。宮。預。祈。年。月。次。神。嘗。祭。幣。也、是。宮。河。堤。爲。守。護。神。也、

土宮

有無之條、非无後難、今一度可奉拜見之旨、令相談之、重奉拜見御船代內之處、今度者如行文家行見知者、以前乃萱毛座毛、曾以不見在之由、遂拜見畢、朝棟者、以前拜見檜皮、猶御見在土奉見云云、不審之餘、御船代內座各奉取退歟之旨、行文申之、一切無其儀之由答之、就之擬中神體御紛失之由者、雖非正御體顯靈於異類、既示希特之瑞、擬中神體御坐之由者、不拜見正體御鏡也、仍進退云谷、迷惑失度、是併依凡眼之拙、不奉拜尊神御體歟、靈威之嚴重、希代之瑞相也、一者恐神靈、一者恥身拙、各退下畢、抑八十一面神鏡、御坐于高宮殿中也、其內八十面者御現在、今一面靈鏡、豈有御紛失哉、謂彼八十一面者、應大陽之歷數、九九八十一面也、所配有種種口傳、其中一面者所化之由緒、奇瑞之靈威、異他者也、且被凝叡信、且被專祈謝者、何無御出現哉、仍注進如件、

元亨元年三月廿五日

禰宜正四位下度會神主貞香
禰宜正四位上度會神主貞蔭
禰宜正四位上度會神主家行
禰宜正四位上度會神主常良〇又見園[illegible]間談

〔神名秘書〕土宮三座山田原地主、在神宮與高宮中間、東向坐、
大年神一座靈御形鏡坐
宇迦魂神一座靈御形寶瓶坐
土御祖神一座靈御形鏡坐大治以後、加一面也、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等并年中行事月記事

九月例

以十七日、〇中略大宮地神［illegible］、湯貴神酒一缶仕奉、〇下略

〔神名秘書〕土宮三座〇中略

臨幷五禰宜參昇奉昇之、爰一禰宜被命云、盜人依參昇、如此被改者也、而平金事、不載以前注文之間、不被官下、眼前蹈穢所於波可放退、御床下又角々御神寶下於波令放置、可用云云、仍如此令放了、所蹈穢平金十三、尙可奉用平金十六也、御床平金十二放置之御船代西壁外無、案上奉置之、下略○

〔元亨元年高宮假殿遷宮記〕還御事

子下刻○十二月二十一日中略、中案內、今度御體奉戴一人、八十一面御鏡四合四人也、而去五月御出現之時、天鏡已下八十一面皆四合取入之間、今度悉被改御座之間、於殿內經數刻云云、下略○

〔高宮盜人闖入恠異記〕依勅定注進高宮恠異次第

元應二年庚申十二月八日申時、猿猴二匹破損彼宮西北葺萱之間、晝番內人圓秀追退云云、同十日本宮番直禰宜良行、彼所損倍增之由就聞及觸穢之間、不審之餘、同十一日以番文神事之次、禰宜等凝群議、任准例先可有拜見沙汰歟之由治定畢、爰大宮司輔生、爲從神事同參宮之間、相共參寄彼宮奉開御戶、自大床奉拜見殿內之處、御幌、蚊屋、御帳、御船代、上御衾二帖紛失之上、乾方葺萱有穴、盜人參入之條、無子細哉、加之御船代蓋二三寸相違、彌所貽疑殆也、卽欲成上奏聞解狀之處、宮中觸穢出來之間、不慮延引、中略○當日十七日高宮御祭之次、以二禰宜行文、三禰宜朝棟、六禰宜家行等奉拜見殿內之處、神寶之中、於御鏡筥一合、御幣筥一合者、所納之物不現在、而朝棟家行聊開御船代長四尺、廣二尺五寸、蓋、行文用意手袋奉搜御船代內之處、御裝束等不殘一物紛失之旨令申之間、各令仰天、恐々奉拜見御船代內之處、寶云御體云御裝束不御坐、爰如行文家行等見知者、朽損多留葺萱乃岩牟志多留樣奈留假令紙一枚之程御坐土、奉見之外不見他物、如朝棟見知者、檜皮乃切乃方三寸許有留土、奉見之云云、同拜見輩非示神靈之變者、何可及異相差別之見知哉、中略○各再三雖奉求之、不現在坐、於其外部類神鏡八十面者、自東神寶之中奉求出之、是則去嘉元正遷宮之時、當宮正殿供奉之役人、依爲無案內及此儀歟、仍任舊於八十面神鏡者、奉安置御床上畢、然後各猶評議云、如此重事、遂一度之拜見、奉定御

幣衛士之處、申云、近江國栗太郡之貫首之宅仁波、勅使供給房裝束等儲多利、治田郷專當之許仁波、神部衛士等料儲也、仍進向彼所天、御幣乎波門內乃桑乃上仁捧置天、假屋內仁、御幣可宿之御棚可造之由、令仰知下人等之間、不慮火事出來天燒亡了、乍舊官幣乎波荷持天退去已了、仍任實正在郡司等進其由申文、件官幣何可大危侍哉者、勅使上奏下宣旨、偁、使已逗留途中天、言上事由、可隨裁定也、而不問事參宮尤有怠也、仍進怠狀、迄五ヶ日被返給已了、五月廿日差使少納大中臣輔永等被幣被取替進了、

○按ズルニ、大神宮諸雜事記ニハ、本文ノ事蹟ヲ以テ康平六年ノ下ニ収メタリ、

〔本朝世紀〕康治元年三月九日壬寅、權中納言藤原公敎卿參左仗、行軒廊御卜事、是伊勢豐受宮司等言上、別宮高宮御饌料御贄荷前鮑、不慮之外、以去年十二月十九日爲鼠被喫損事也、

久安二年十一月廿五日辛卯、權大納言藤宗輔卿參仗座、被行軒廊御卜、

陰陽寮

占伊勢大神宮司言上佐異等吉凶(中略)

豐受宮別宮、高宮天井生絹帷、生絹蚊屋湿損、并御座上土代網(本作綱)一布帳鼠造巢喰損、去九月十七日酉時見付、

〔百錬抄八高倉〕嘉應二年十二月廿七日、四箇條仗議、(中略)豐受宮別宮、高宮御裝束供奉禰宜等違失事、

承安元年七月廿二日、於大膳職大神宮宮司有長、禰宜彥章、宗房、權禰宜等對問外宮瑞垣御門傾事奏狀前後相違事、　廿三日、同問注高宮御裝束違例事、

〔山槐記〕治承四年十月十七日丙申、伊勢高宮御裝束鼠喰損、調改被獻之、來廿八日奉幣次被副獻也、

〔元亨元年高宮假殿遷宮記〕一御出次第(中略)

仍翌朝廿二日(十一月)朝、參高宮新宮御前、(中略)爰本宮御板敷并御床可改替之間、先御板敷平金、予(貞○)

高宮坐神御裝束

帛御被一具、生絁御被一具、〈已上各長四尺五寸、廣三尺、緒各五斤、〉御衣御裳不繼進料、緋一尺、錦二丈、絁一匹、蚊屋帳二張、〈高八尺、廣十六幅、〉天井帳一張、〈長八尺、三幅、〉御幌一張、〈長八尺、三幅、〉

〔司中記〕外宮高宮御造宮、國司御內安井將監と云人造替也、一木河村孫大夫と云者、將監殿內者也、是も黃金肆枚程の造料也、〈○中略〉從京都御神寶下日時下、天正六年〈つちのへとら〉二月廿四日丙午、同三月二日癸丑、三月二日神移也、

一高宮御神寶　一御ふすま、〈おもてひもんのにしき、うらむらさき、〉一御ふすま、〈おもてむらさきのあや、うらむらさきのへいけん、〉一御ふすま、〈おもてはくのあや、うらへいけん、〉一御大刀一腰三貫文、一御弓口〈二〉口三貫文、一御たて壹貫文、錦十五貫、あや三貫、へいけん貳貫文、御神寶入物黃金以上七兩ニテ調也、河村孫大夫京ヘノボル、〈○又見天正六年高宮假殿御遷宮次第行事記〉

〔延喜式 九 神名〕伊勢國度會郡高宮〈大、月次、新嘗、〉

〔延喜式 四 伊勢大神宮〕多賀宮一座〈○中略〉

右二宮〈○度會宮多賀宮〉祈年月次神嘗等祭供之

〔神宮雜例集 二〕年中行事

六月十七日高宮御祭事〈堪事之禰宜申詔刀、各衣冠、〉

〔大神宮諸雜事記 一〕貞觀十三年正月廿八日夜、強盜帶兵杖亂來高宮、正殿御板敷放〈天、〉調絹糸等搜取已了、仍宮司上奏、隨彼宮內人直丁幷十人、及豐受神宮番檢內人等科中祓了、又彼盜人搜取給之御絹糸等、頓〈仁〉令愼替進已了、但大神宮禰宜眞水不科祓也、

〔伊勢勅使部類記 三〕天喜六年二月、祈年使少副元範也、勅使參入豐受宮、詔刀了〈天、〉直會三獻之間、高宮內人申云、高宮御幣請預〈之天、〉奉披見之處、生絹御幣一色、片端令燒損給也者、仍乍驚召問神部執

千、かつ、鳥居、さるがしらの御門、いがき迄、

一高宮

○按ズルニ、千かつハ千木鰹木ノ略稱ナリ、此書東寶殿已下皆此略稱ヲ用キタリ、

〔天正九年外宮正殿御修理記〕高宮御殿、淺野彈正殿ヨリ御造營也、周養上人(○宇治慶光院)請取也、天正十九辛卯六月十九日遷御也、(○下略)

〔松木滿彥年代記〕同(○慶長)十年六月廿一日、高宮遷宮、願主毛利昭廣、

〔孝亮宿禰記〕慶長十五年十月四日丙子、今日(○中略)外宮別宮四所高宮、土宮、月讀宮、風宮等、造替日時定、陣議有之、巳剋也、

〔朝野群載(六太政官)〕文殿

勘(○中略)被修造(○中略)高倉御鏁舌弱難奉開事

右宜勘申先例者、引勘文簿之處、去延久元年、(○中略)又同二年八月、大神宮言上云、去六月御祭例幣之間、伊雜宮御鏁澁給、不被開者、仍先被尋問先例於本所之後、同年九月十二日、任例次祭構開、可奉納御幣之由被下宣旨、(○中略)

應德四年三月六日

〔本朝世紀〕寛治元年九月十一日庚申、例幣也、民部卿(信經)於仗座先奏宣命草、是豐受宮幷高宮等神殿鏁、可被修補之由有辭別之故也、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事幷用物事

造奉物(○中略)

高宮御船代壹具(長四尺、廣一尺五寸、○中略)

一新造宮御裝束用物事

御。門。壹間 長二丈、廣一丈四尺、高一丈、

〔外宮殿舍寸法頭工等引付〕造外宮諸殿舍　應永九壬午年二月廿一日〇中略

一三拾五貫文　高。宮。い。い。や。殿。〇中略

造外宮諸殿舍、　應永十二年二月十一日〇中略

一三拾五貫文　た。か。の。宮。い。い。や。で。ん。

〔外宮子良館舊記〕土宮十年ばかりさきに、坂東のまるやつ殿と申人御立候て、延德二年に御遷宮可有にて候處、高。宮。御。た。い。ら。く。に。及。候。所、高向や源右衛門と申人、御圖を取申候て、閏八月廿二日に、假殿を立申候、同九月十七日に御遷宮可有にて御入候所、同九月十四日の丑時、正殿〇豐受大神宮天火やらん、又つけ火やらん、御燒候、〇中略同十七日に高宮も遷宮、〇下略

〔禰宜晨彥引付〕一。高。宮。御。造。營。料。五。拾。貫。文、于時一禰宜備彥〇松木氏進納、幷三。拾。貫。文。中世古出雲進納、幷三。拾。貫文高向二頭大夫光盛進納、合百拾貫文也、其内拾貫文、御裝束御殿内餝料御用物等ニ宮司へ渡ル、以折中宮司ヨリ調被進注文之事、

一生絹十疋　一御假樋一　一敷道布、彼是五端、　一長筵三重
一薦二枚　一樋二口　一杓二口　一鎚二　一錐二
一糸百筋　一縫針卅本　一麻少　一紙一帖　一小刀二枚

御柱立天文十六年冬十二月廿四日
御遷宮同十七年春二月十六日
于時一禰宜備彥以調法、御宮作遷御有之、
注進申候月日、天文十八十月十五日、

〔頭工引付〕此通書留置可申事

高宮

注進可早蒙御成敗沙門乘賢奉造進當宮別宮風宮由事

右當宮造替遷宮事、去永享三年、雖有御沙汰、至殿舍別宮等事者、不及御沙汰、其後寛正三年、雖被遂行造替遷宮、諸殿舍別宮之御事者、曾不及御沙汰、仍年中遂行諸神事、致御祈禱、要須殿等悉退轉、爲神爲公、不可然、諸別宮悉令顚倒、神體埋土泥、奉侵雨露之條、神宮愁訴無極、爰風宮御顚倒、體拜見依有恐、稻苅十穀乘賢、可奉造進之由望申、抑彼乘賢事、御裳濯河御橋自流失、去寛正六年以來、洪水時者、禰宜祠官大小内人諸役人等之神事參勤不叶、御祈禱令懈怠、亦自遠國近郷參詣之輩不拜宮中、令愁傷空令下向、因玆勸進聖度々雖及數輩、且大營、且無悉實歟、終一人不成其功處、件乘賢嚴密奉掛渡之條、令然神慮、令悅諸人者也、然間風宮御事定嚴密可致其沙汰者歟、雖然自公方樣被成造替遷宮先例也、爲私沙汰不可叶之間、所經言上也、就其檢近例、去嘉吉三年、大宮司氏長造進當宮別宮月讀宮假殿奉成遷御、迄至于今、坐彼假殿者也、任例無相違被仰下、奉成風宮造替遷宮者、所爲神慮快然者哉、仍爲仰御成敗注進如件、以解、

文明九年六月日　　大内人

禰宜從三位荒木田神主氏經略〇下

〔延喜式四伊勢大神宮〕多賀宮一座豐受大神荒魂去神宮南六十丈

〔康永大神宮參詣記〕大宮のたつみに御池を隔て、高き山にましますは高宮と申、古語には多賀の御せんと申也、

〔止由氣宮儀式帳〕管高宮壹院等由氣大神宮之荒御玉神也

正殿壹區長二丈四尺、廣一丈二尺、高一丈、

瑞垣壹重周長十二丈、高一丈、

玉垣壹重周長十八丈、高一丈、

山中所被採置御材木、是又令朽損之條、爲勿論歟、此等御材木、於被採直者、若干日數、且又御費、旁以不可然者歟、所詮以夜於繼日、被忩立柱上棟以下次第營作、被遂行遷御者、天下泰平之御祈禱、何事如之、神宮之大慶不可過之、然早被經次第上奏、令達禰宜等懇訴抽每祭每月、殊者朝祈暮賽懇誠矣、仍注進如件、以解、

享德三年六月日　大內人――末久

禰宜從四位上荒木田神主滿久〇下略

〔康富記〕享德三年九月五日癸丑、自官務可來之由、有音信了、官務被語云、大神宮風宮去月顚倒也、可被行軒廊御卜、〇下略

〔皇大神宮引付〕當宮風宮、御顚倒、地上ニ御座之體、神慮之恐候之處、きゑん法師、可造營之由、館石大夫伺來候、尤可然候得共、自公方樣有御沙汰例候、雖然本宮御事始、可爲去年候得共、無御沙汰候、又諸殿舍別宮等造營、去永享度、又今度一向御沙汰なく候、殊忌火屋殿退轉候之間、爲犬馬伏所、年中御饌備進、其恐不少候、左候間風宮御事、さうなく御沙汰あるまじく候、神慮恐、神宮愁訴、此事候之處、如此申候、尤目出候、さりながら勸進等を仕候ては不可然候、神宮承知候者、以私力則材木を奔走仕、可奉作之由申候、此子細被伺申候、此法師左京之仁と申候間、御さうを可被仰候、但きゑんとやらんは、更不存知候、石大夫申候間、此儀若神慮に令然候かと申上候、〇中略外宮月夜見宮も、此きゑん造進候けると沙汰候、但其實者不存知候、餘に神慮在恐體御座候之間、只造營事行候は、目出存斗申上候、此由可有御披露候、恐々謹言、

三月二十日〇文正二年　氏經判

川崎中務丞殿

〔皇大神宮引付〕皇大神宮神主

號之今、始難被通用杉歟、○中略而風神被奉授宮號之上者、敢難違諸別宮之例歟、殊被致崇重之禮者、彌有擁護之憑、縱雖沿革從時、於神祇儀式者、難違古典哉、然則早守傍例、遂營作、被令致天下泰平御祈禱矣、○中略仍注進如件、

永仁四年二月廿三日　大內人

禰宜正四位上荒木田神主泰氏○下略

〔皇大神宮年中行事七月〕一四日、風日祈宮神態柏流神事、其次第如去四月十四日御笠神事之勤、○中略

私註　婆羅門僧正、自天柏取、七月四日是水浮、豐年時靜流、浮流惡云云、此儀爲相似仍注之、○婆羅門僧正事、又見拾玉集六

〔齊居通下〕三角柏

七月四日、兩宮共ニ風宮ノ神事アリ、風雨靜ニシテ、秋穀ノ豐ナランコトヲ祈ルノ神事ニテ、又柏流ノ神事トモ云、○中略按ニ、古昔ハ柏ヲ水ニ流シ、年ノ豐凶ヲ占シ事有シナルベシ、今ハ無シ、○下略

〔吾妻鏡十五〕建久六年三月十二日丁酉、今日東大寺供養也、○中略當伽藍者、○中略法皇白河勅重源上人曰、訪本願往蹤、唱高卑智識、課梓匠、而令勤成風業、○中略其後上人尋往昔之例、詣大神宮、致造寺祈念之處、依風社瞻覲得二顆寶珠、爲當寺重寶在勅封藏、○又見東大寺衆徒參詣記

〔皇大神宮引付〕皇大神宮神主

注進可早被經次第上奏當宮造替遷宮、雖過式年、依經數年、殿舍悉荒廢、追日令倍增、結句去比風日祈宮令顚倒給、旁以神宮重事、且御祈禱際、早難盡言上子細事、

右正殿、幷東西寶殿、外幣殿、其外數箇殿舍御倉以下、悉令忌損、殊亦別宮風宮者、宮中隨一神居之殿、旣令顚倒給畢、拜見之體、其恐不少、爰適著岸御材木等者、依無木屋沈雨露、且濕損眼前御事也、加之

〔太平記 三十九〕自大元攻日本事

弘安四年七月七日、皇大神宮禰宜荒木田尙良、豐受大神宮禰宜度會貞尙等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ上奏シケルハ、二宮ノ末社風社ノ寶殿ノ鳴動スル事良久シ、六日ノ曉天ニ及テ、神殿ヨリ赤雲一群立出テ、天地ヲ耀シ、山川ヲ照ス、其光ノ中ヨリ、夜叉羅刹ノ如ナル、青色ノ鬼神顯レ出テ、土嚢ノ結目ヲトク、大風其口ヨリ出テ、沙漠ヲ揚ゲ、大木ヲ吹拔ク、測知ヌ九州ノ異狄等、此日即可滅ト云事ヲ、事若誠有テ、奇瑞變ニ應ゼバ、年來申請ル處ノ宮號、以叡感儀可被宣下トゾ奏シ申ケル、

〔通海參詣記〕當社ハ、中略毎年七月ニ、風日祈ノ祭ニアヅカリテ年ノ風雨ヲ祈ル趣キ、式條ニ載ル所粲然トシテ眼ニアリ、依之祠官頻リニ崇重ノ禮奠ヲ儀ニストヘドモ、公家未ダ官社ノ幣帛ヲ奉ラズ、爰ニ去ル弘安四年夏ノ比、蒙古ノ先鋒亡宋ノ群兵、艨艟海ニミチ、旌旗日ヲカヾヤカス、然シテ御祈ヲ承テ、神宮ニ參シテ、鎭ニ懇祈ヲ抽ンデ、敵國ヲ降伏ノ所ニ、飛簾風ヲオコシテ、賊船忽ニ漂泊シ、陽侯浪ヲアゲテ、群兵速ニ退散ス、其時波瀾ニ光輝アリテ、海陸靈瑞ヲ朗ニス、中略官社ニツラナリテ、早ク宮號ニアヅカリ、官幣ヲ領シテ、神威ヲマサレバ、異國草ノ如クニ靡然トシテ風ニ順ン者歟ト申ケレバ、宮號有ベキカトテ、神宮ニ下サレテ、禰宜ノ請文ヲ被召侍リキ、其後未ダ宣下セラレ侍ラズ、

〔皇字沙汰文 上〕永仁四年風宮造營注進文

大神宮神主依綸旨注進風宮造營間事

右宮司今月十一日告狀偁、同十七日祭主下知偁、去年十二月綸旨偁、風宮造營事、通海法印狀如此、子細見狀歟、可爲何樣候哉之由被仰下候也、仍執達如件者、謹案事情、二所大神宮、內院外院殿舍御垣、幷諸別宮式內式外攝社、自昔于今、用檜不交杉、就中風神爲社號之時、尙以檜木遂造營、況被授宮

一風日祈宮貳所

御裝束

生絹天井一條長七尺六寸、弘十二幅、一條、長七尺、弘二幅、各單、　土代絹帷貳條長各一丈、弘三幅、二重、　生絹蚊屋貳條一條、長七尺六寸、弘十二幅、一條、長七尺、弘二幅、各單、
幌貳條長各六尺、弘二幅、單、　鏡肆面徑各五寸、各納黑漆平文宮一合、赤地唐錦折立、　櫛御筥貳合黑漆平文、納櫛八枚、各四枚、赤地唐錦折立、

生絹幌一條長五尺五寸、弘三幅、　帛御被貳條長各七尺、弘三幅、　生絹御被貳條長各七尺、弘三幅、　青纐纈御衣貳領長各二尺、袖一尺、弘一幅、裏帛、納綾各六兩、　紫紗御裳貳腰長各一尺六寸、裏帛、　緋御裳貳腰長各二尺、裏帛、　纐纈錦御裳貳腰長各二尺、弘四尺、　紫綾御帶貳條長各四尺、弘二寸、　御髮結糸肆條長四尺　帛綿袴貳腰長各二尺六寸、納綿各五兩、　頓練絹帊一張長九尺、弘四幅、　細布帷一條長六尺、弘二幅、　生絁單御衣貳領長各二尺、袖一尺、一(上恐脫弘字)幅、　縁綾御帶肆條長各四尺、弘二寸、　帛御裳肆腰長各二尺六寸、弘四尺、　白布參段貳丈捌尺伊佐奈岐宮、先例調布、

內人參人、物忌一人、各三丈六尺、物忌女一人一段、

已上納朱漆辛櫃一合〇中略

風日祈宮貳所

神財

金銅椯貳基高四寸　金銅麻笥貳口高各一寸、徑一寸半、　金銅桛貳枚長各六寸、手長三寸、　金銅高機一具高六寸、以五色糸織初

銅黑作大刀參柄在緋唐綾袋、裏青絹、

已上納朱漆大刀櫃一合同前

弓參張納朱漆辛櫃一合、同前、　靫參腰革二腰、羅一腰、　刺矢各四十隻鳥羽　鞆一口在金物、以胡粉畫之、著紫革緒、〇中略

嘉元二年十二月十六日

〔類聚神祇本源十內宮別宮〕風宮〇中略

社記　正應六年〇永仁元年三月廿日官符改社號、奉授宮號、預官幣、二宮同前也、依異國降伏之御祈也、

〔類聚神祇本源十內宮別宮〕風宮○中略

社記　嘉元正遷宮之時、被增作寶殿畢、

〔頭工引付〕ざうないくう、べつぐう、せんしや、まつしや、御くらの注文の事、○中略

一かせの宮　百八拾貫文御門木かき鳥居まで○中略

應永十五年十一月十六日　四頭工貞興○以下署名略

〔內宮物忌年代記〕文明十一年己亥、風宮遷宮也、應永遷宮以來、自公方依無造營、御殿退轉、仍伺上裏、乘賢房以私力致造營、事成遷御、○又見氏經神事記、文明風日新宮遷宮記、爲文明十一年己亥九月廿三日、

〔元祿九年神宮勘文〕風日新宮○中略

正殿高二丈三尺九寸、長一丈八尺四寸、廣一丈二尺二寸、

御茅葺　搏風四枚　鰹木六本

瑞垣一重長廻東西三丈六尺四寸、南北三丈二寸、高六尺、柱板六尺二寸、

同御門高九尺七寸、廣六尺七寸、

板葺

鳥居高一丈七尺、廣九尺、

橋渡南北朽損次第御遷替、長二拾四間四尺、廣三間一尺、

同高欄高三尺四寸、儀寶子高六尺、

同鳥居二字高各一丈四尺、廣一丈三尺三寸、

同橫橋渡東西長二間四尺、廣二間一尺五寸、

同鳥居高一丈四寸、廣九尺一寸、

〔嘉元二年送官符〕太政官符　伊勢大神宮司○中略

國百傳度會縣、爲善宮所、大立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天原、鎭定坐、爾來、聖代寶皇、胥繼胥承、廉、不欽崇、綠玆八百萬之神祇、無未曾遐光耀於神宮、三千餘之神社亦亦未有競尊榮於兩宮、然矧于吾神宮之別哉、粤頃年、內宮七所別宮中之志摩國伊雜村神民等、淹趨都鄙、漸操詞懇、恣尊伊雜宮、以號內宮之本宮、叨卑外宮、以稱內宮之別宮、噫是書之所不有焉、言之所不傳焉、夫伊雜宮者、素內宮之別宮也、外宮者舊因內宮神託、所祝祭之神也、爰有別宮之稱有乎、至其支證、則載在官文神記、是故浸潤作謀書、卒爾侵公聞、宜哉爲其督此彼之眞僞、內宮禰宜等應勅喚、以參洛矣、古書有叡覽、而後天裁必明白也、且惟彼神民等、欲以外宮爲內宮之別宮、妄取延喜大神宮式之文、以私列其中間、更謂以外宮充七所別宮之員也、是亦所何通乎、凡撰其延喜式之日、則有六所別宮、未有七所別宮、只是似不攄之所爲、實在謀計之所致而已、胡爲其宏欺神明、紊式文、而併爲以掠天聽、天聽之聽、神明之昭、式文之正、爭容囂訟之訴、且暗邪仰願、擯斥伊雜村神民等濫訴、令散二宮禰宜等欝陶、然則天地之災害、應時消除、宇內之祥瑞、逐日顯現者乎、仍注進如件、以解、

寬文二年十月廿一日　大內人正六位上度會神主

禰宜正五位下度會神主全彥〇下略

風宮

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事並月記事

四月例

十四日〇中略以御笠縫內人造奉御蓑廿二領、御笠廿二蓋、卽散奉、大神宮三具、〇中略風神社一具、〇下略

〔大神宮儀式解〕二十四當宮〇皇大神宮大なる風神社、後に宮號宣下ありて風の宮といふ、宮中五十鈴の川の南岸にあり、

〔神名秘書〕風神社讀志那都比古神

〔元祿九年神宮勘文〕風日祈宮別宮、南向、在本宮坤五十鈴河南、式年御造替、　級長津彥命　級長戶邊命

〔吾妻鏡 二〕治承五年(○養和元年)三月六日壬午、大中臣能親自伊勢國通書狀於中八維平之許、是去正月十九日、號熊野山湛增之從類、濫入伊雜宮、鑽破御殿、犯用神寶之間、爲一禰宜成長神主沙汰、奉遷御體於內宮之處、同廿六日、件輩亦襲來山田宇治兩鄉、燒失人屋、奪取資財訖、天照大神鎮座以降、千百餘歲、皇御孫尊垂跡之後、六百餘年、未有如此例、當時源家再興之世也、尤可有謹愼之儀者、維平覽此狀、湛增候御方、有此企、殊驚聞食、爲敬神可有御立願之旨被報仰云云、

養和二年(○壽永元年)二月八日己酉、被奉御願書於伊勢大神宮、(○中略)御願書云、維當歲次治承六年壬寅二月八日己酉吉日良辰遠撰定天、前右兵衛佐從五位下源朝臣賴朝、禮代御幣砂金神馬等令捧齋持天、天照百(○百恐坐誤)皇大神廟前仁恐天毛申天申久、(○中略)如風聞波、熊野乃衆徒號志天姦濫遠巧牟類等、去年正月仁皇大神宮仁濫入志天、御殿(○伊雜宮)於破損志、神寶遠犯用須、因茲御體遠皇大神乃御殿乃砌利五十鈴乃河上乃畔仁假奉遷云云、(○中略)古今乃例遠訪天、二宮(○內外宮)仁新加乃御領於申立天、伊雜宮遠造替志、神寶遠調進勢牟土所祈請奈利、(○下略)

〔氏經卿神事記〕嘉吉三年六月廿五日、伊雜宮祭禮、九代俊尚參、依洪水延引、　廿七日、九代俊尚神主今日伊雜宮ニ參、諸役人ヲ催之處、式日迄夜半過、雖待申無御參之間、奉備御饌、遂行神事之旨申、不參之間神拜計也、宵直會等催促之處、其時分用意畢由申不進、件饗ハ參著以後米以下當方膳夫請取、役人ニ令下行調備之處、如此申無謂、是依無故實幣使不被究問答、朝饗里直會酒直等如前云云、

〔伊雜宮沙汰文〕豐受皇大神宮神主

注進可早經次第上奏被禁止、志摩國伊雜村神民等、企新儀欲其離七所別宮之稱、却以當宮稱內宮之別宮、造僞書、援往代之記文、濫訴事、

別進勘文一通

右二所皇大神宮者、天神地祇之大宗、君臣上下之元祖也、恭以自垂仁雄略之昔隨神誨、以神風伊勢

正、伊雜神戸檢田程、爲狩志天伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、爰宮人等雖加制止、專不承諾、仍內人等訴申於本宮、随則大神宮申上宮司、依宮司解、神祇官奏聞於公家、即被下官使、召對伴良進等雜宮院、各科大祓、又國司科中祓清已了、

延長五年九月、伊雜宮御祭料、志摩國例進之幣帛、并御調、種々御贄等、依例爲令調備、大神宮禰宜大小內人物忌、及當宮內人物忌、相共引率神戸神民、進向志摩國府、爰國司氏胤申云、件御贄等須任例備進也、而以昨日夜氏胤妻產畢、仍不堪備進也者、禰宜等勘云、國守所陳不當也、御祭之勤、既式日有限、又國司之勤恒例事也、何召仰廳官人等、無其用意哉、無止供祭物闕怠之咎、尤有國司者、即注子細進於司、仍宮司定臣等上奏公家、即以同年十月十三日被下宣旨、狀云、應令志摩守氏胤祓清調備也者、使中臣神祇權大祐大中臣賴基、卜部節行等到著於雜宮院、召取守氏胤、任宣旨科上祓、祓清令調進件御贄注云、幣絹一疋、干鯛五斤、齋前身取鮑五斤、鰹魚五斤、干鯵五斤、鹽五斤、滑海藻五斤、海松五斤、和布五斤、雜鮨五斤、雜海藻五斤、腊付鹿布五反、腊部信乃布二反等也、等、即氏胤停止釐務之由被下宣旨了、

〔長秋記〕永久元年九月六日、去八月四日大風雨、內宮瑞垣御門蕃垣止垣四御門、凡別宮月讀宮、伊雜宮悉有破損云々、

〔本朝世紀〕康治二年八月十九日癸卯、權大納言藤宗輔卿參左仗、被定大神宮御裝束調進日時、今月廿八日壬子、時巳二點若午、件御裝束御被、別宮伊雜宮帛御被、絣帷、並宮御幌御帶也、

久安四年三月十日戊辰、權大納言藤宗輔卿參左仗、被行軒廊御卜、〇中略是則伊勢大神宮司言上、別宮伊雜宮士代帷、并御床敷絣帷濕損、去年九月廿五日亥時見付事也、

仁平元年十一月十四日庚戌、權中納言忠雅卿參入、召神祇官陰陽寮、有御占事、

陰陽寮占、伊勢大神宮司言上、怪異吉凶、別宮伊雜宮帛御被、并生絁御被等、爲鼠被嚙損、去九月廿五日亥時許見付、

其後於御楯代絹垣者、直奉昇居瑞垣御門内、（二字恐衍シテ○シテ）宮司禰宜著座御前、（玉垣御門外也）宮司左、（西上北面）禰宜右、（東上北面也）

〔皇大神宮儀式帳〕一伊雑宮遷奉時裝束　合十四種

御床敷屋一條、（長七尺六寸、弘十二幅、）又一條、（長七尺、弘二幅、）生絁御被一條、（長七尺、弘三幅、）帛御被一領、（長七尺、弘三幅、）細布土代帳一條、（長八尺、弘二幅、）緋單御衣一領、（長三尺）帛單御衣一領、（長二尺）錦御裳一腰、（長二尺）帛御裳一腰、（長二尺）紺御裳一腰、（長二尺）緋御床敷一褥、（長六尺）戸帳一張、（長六尺、弘三幅、）御楯四枚、（納一宮合）紫御本結糸二條、（長各四尺）

神財九種

金絡梁二足、（高四尺）金桶二口、（高一寸、径一寸半、）金拌一枚、（長六尺）金高機一具、（高三寸、五色糸綾初在、）鏡四面、（径各五寸）黒作大刀三柄、弓三張、胡籙三具、（矢各増備）柄一口、

一年中行事幷月記事

六月例

以廿五日伊雑宮祭供奉行事

右宮祭波、朝御饌夕御饌、幷朝庭幣帛供奉、告刀申、申畢直會儛等、瀧原宮行事與同、

〔延喜式四伊勢大神宮〕伊雑宮一座（中略）

右諸別宮、祈年月次神嘗等祭供之、就中瀧原竝宮伊雑宮不預月次、

〔新抄格勅符抄十神封〕大同元年牒、

伊雑神二戸（志摩）

〔神宮編年記〕嘉永六年十二月十七日、曉進發、依辰剋御祈始、參伊雑宮、

右異國船渡來ニ付御祈也、今日ヨリ一七ケ日、

〔大神宮諸雑事記一〕寶龜四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、與彼國書生總判官代酒見文

板葺

王垣一重長廻東西八間三尺、南北八間、高七尺、

同門高一丈、廣七尺、無扉、

板葺

鳥居高九尺五寸、廣八尺、

幣帛殿當時中絶

御倉高一丈四尺五寸、長一丈三尺、廣一丈一尺、

板葺

御饌屋高一丈五尺七寸、長二丈四尺、廣一丈二尺、

板葺

宿館高一丈八尺六寸、長二丈四尺、廣一丈六尺、

右幣帛殿以下各御修覆

御馬木馬、高八尺四寸五分、長八尺二寸、廣五尺六寸、

板葺

鳥居初入鳥居御修覆、高一丈五尺、廣一丈三尺六寸、左右在胸寄、長各十二間二尺、

宮地東西三町、南北二町、

〔伊雑宮遷宮記〕嘉元三年正月廿三日伊雑宮御遷宮事

今日○中略天平賀十六日、自西寶殿○皇大神宮御下、取出之、同令請取、○中略

一今夜亥剋許、禰宜四經有、五氏成、六泰仲、七泰利、八仲満、十泰定、神主各束帶參、自一鳥居有御火二人、被著一殿、○中略

〔延喜式神名九〕志摩國答志郡粟嶋坐伊射波神社二座（並大）

〔大神宮本記歸正抄五〕抑伊雜宮ノ來由ヲ謹テ熟考スルニ、〇中略最初ハ皇大神ノ遙宮タル御靈一座ノミナリシカバ、神宮ヨリ管攝スルハ一座ノミナルニ、後ニハ何レノ神靈ヲカ今一座相殿ニ奉祭シタリケム、神名帳既ニ二座ト注シ、元亨三年十二月伊雜宮御遷宮記ニ、正體奉載物忌父石部清忠、相殿奉載大内人石部仲政トアリ、正宮ノ外ニ一座相殿ニ坐スコト見ツベシ、

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

伊雜宮一院（在志摩國答志郡伊雜村、大神宮以南相去八十三里、）

稱天照大神遙宮、御形鏡坐、

正殿一區、（長一丈五尺、弘一丈一尺、高八尺、）御床一具、（長八尺、弘四尺、厚一寸半、）瑞垣一重、（長廻十二丈、高八尺、）御門一間、（長七尺、高九尺、）玉垣一重、（長廿丈、高九尺、）御門一間、（高九尺、弘八尺、）幣帛殿一間、（長二丈四尺、弘一丈六尺、高八尺、）御倉一宇、（長一丈三尺、弘一丈一尺、高八尺、）

〔頭工引付〕ざうないくう、べつぐう、せんしや、まつしや、御くらの注文の事、〇中略

一いざうの宮　百八拾貫文（御門、水がき、とりゐまで、）

一おなじきちやうしや　八拾貫文

一おなじきいんやでん　五拾貫文

應永十五年十一月十六日　四頭工貞興〇以下署名略

〔元祿九年神宮勘文〕伊雜宮〇中略

正殿（高二丈四尺、長一丈七尺、廣一丈一尺、在高欄御階等、）

御茅葺　搏風四枚　鰹木四本

瑞垣一重（長東西三丈六尺、南北三丈六尺、高六尺、）

同御門（高九尺八寸、廣七尺五寸、）

鳥居（高一丈二尺五寸、廣一丈一尺六寸、）

〔皇大神宮儀式帳〕一瀧原並宮神遷奉御裝束　合十二種

正殿生絹蚊屋一條、（長五尺、弘十二幅、）天井蚊屋一條、（長十五尺、弘十幅、）荒衣御被一條、（長六尺、弘三幅、）袜御衣二條、（長各二尺、）紫紗裳一條、（長二尺、）二練裳一條、（長二尺、）二練御被一條、（方各三尺二寸、）門張帳一條、（長六尺、弘三幅、）御櫛四枚、（納一筥、）合紫御本結糸二條、（長四尺、）緋御帶二條、（長四尺、納一筥、）合、

〔夫木和歌抄神祇三十四〕文永六年毎日一首中神祇歌

　神寶（伊勢）ならびのみや　　民部卿爲家

たきのはらならびの宮の神たから猶すゑつゞくおきつ白浪

〔延喜式伊勢大神宮四〕瀧原並宮一座（○中略）

右諸別宮新年月次神嘗等祭供之、就中瀧原並宮伊雜宮不預月次、

〔醍醐家古文書〕並宮不預月次祭、不載神名帳、尊崇之儀輕重雖異、延喜撰式以後、追令奉行官幣、

　文永六年十一月十日　　正四位上行神祇權大副卜部宿禰兼文勘申（○節略）

〔本朝世紀〕康治二年九月十一日甲子、例幣也、內大臣著左仗被奏宣命、去六月瀧原並宮御門御垣破壞、正宮御幌御帶或濕損、或鼠喫損事、被載辭別、外記忠業草進宣命、內記不參故也、以神祇少副大中臣親宣、散位資長王爲使賜左馬寮御馬、

天養元年十二月九日、上卿被定可被調始大神宮別宮瀧原並宮大宮御帳日時、今日乙酉、時酉二點、

〔類聚大補任（龜山）〕文永六年己巳十月、瀧原並宮、御裝束御神寶紛失、並宮御形不坐否事、

〔氏經卿神事記〕寬正七年六月廿二日、瀧原並宮祭禮（○十七日十八日）宜參、見瀨河依高水不越船、仍任例鳥ガ嶽ニ登奉祭、物忌以下役人等ハ、水鼻以前、河ヲ越畢、仍彼等者、彼宮參勤、幣使者、見瀨里ニ令一宿下向、

〔延喜式伊勢大神宮四〕伊雜宮一座（大神遙宮、在志摩國答志郡、去大神宮南八十三里、）

〔夫木和歌抄 三十四神祇〕神樂歌

まらいとのたえずおちくるたきの原あとたれそめていくよへぬらん　荒木田延季

〔延喜式 四伊勢大神宮〕瀧原並宮一座（大神遠宮、在瀧原宮地內、）

〔大日本史 神祇六〕按本宮並立瀧原宮西、故有並宮之稱也、

〔神名秘書〕瀧原宮一座〇中略

並宮一座（瀧原宮地內坐、靈御形鏡坐、如延曆儀式帳者、雖不載御形、檢神宮本紀御鏡坐也、）

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

並宮一院

正殿一區、（長一丈五尺、弘一丈一尺、高八尺、）御床一具、（長八尺、弘四尺、厚一寸半、）瑞垣一重、（長廻十二丈、高一丈、）御門一間、（長八尺、高一丈、）玉垣一重、（長廻廿丈、高九尺、）

〔兩宮別宮遷宮記大略〕寬喜三年、並宮一殿燒亡、

〔元祿九年神宮勘文〕並宮〇中略

正殿（高二丈二尺三寸六分、長一丈五尺、廣一丈一尺、）

御茅葺　搏風四枚　鰹木六本

瑞垣一重（長廻東西五間、南北五間、高七尺、）

同御門（高一丈二寸六分、廣八尺五寸八分、）

板葺

玉垣一重（長廻東西十間、南北十一間、高六尺七寸、）

同御門（高一丈二寸）

板葺

寶龜元年十二月廿一日、瀧原宮御裝束色目、如本數替進既了、事發以去年九月廿六日、宮司進神祇官解狀偁、皇大神宮禰宜解狀偁、別宮瀧原宮當月御祭使、當宮大內人神主世增解狀偁、彼宮物忌父石部千妙申文云、昇殿次奉拜見御所御體幷御裝束等濕損御也者、檢故實、正宮別宮如是非常濕損之時、公家被奉替例、多者任本數、被新替進件御裝束矣者、而神祇官勘申云、物忌父千妙陳狀云、當宮祭使隨身大神宮禰宜之封、奉納幣物之後、付封御鎰櫃之例也、仍內人物忌等御祭昇殿之日、從供奉拜見御殿內之外、敢無奉開也者、所陳申尤不當也、何者大風霖雨之時致其恐、觸案內於大神宮神主、申請神宮使相共可開封也、而不致其用意、忝奉濕損御裝束物等、既千妙之怠也者、千妙無方陳申進怠狀、即科大祓解任了、　二年九月廿二日、大風洪水、仍瀧原宮祭使幷內人物忌等不堪參宮天、於逢鹿瀬西小野、彼御幣祭乃悠基御膳次第御神態直會勤奉仕了、〇中略方今檢舊例、去白雉二年九月、依洪水之難、瀧原伊雜兩宮御祭事、便所仁志天遙拜勤仕、至于官幣者追以進納由、具于記文也、

貞觀十三年三月八日、瀧原宮燒亡了、仍彼宮內人神主是次、以同年五月十六日、依宣旨科大祓、解任又了、　十八年三月六日、瀧原宮帛御被二條、生絹被二條、天井絹一條、蚊屋絹一條、幣絹七匹等、盜取已畢、仍宮司注子細言上本官、隨則上奏、爰宿直內人物忌父石部全雄等科中祓、且任先例、以內人等令頓納上件盜失物等已了、

仁和三年正月十日、瀧原宮神寶尺御鏡一面、梓弓一張、金桶一口、幣絹二匹、糸三絇等於、盜人參入於正殿內盜取了、仍宿直內人石部千永、同忠良、仕丁金主、兵杖坂田正月丸等依司勘事、且進怠狀、且言上於公家、仍千永忠良等科大祓解任了、〇中略同年十一月廿七日、依宣旨、瀧原內人石部千永等同忠良等、復任本職畢、

〔百練抄五堀河〕寬治七年二月二日、祭主親定、大宮司公房、前宮司國房等自所訴、神宮重事六ケ條、於大膳職對問、〇中略折疊受宮棟持柱幷瀧原宮靈木事、〇下略

橋（御造替、長二丈七尺、廣七尺五寸、在高欄擬寶珠等、）
鳥居（初入鳥居、高一丈四尺、廣一丈四寸、）
宮地（長十五町、横七町餘、）

〔元文二年神宮勘文〕野後村に御座候、内宮七所別宮之内、瀧原宮並宮之兩所も、御造替之時は、神宮より仕様帳差上、從御公儀入札に被爲仰付候、

〔皇大神宮儀式帳〕一瀧原宮遷奉時装束　合十七種
蚊屋一條、（長七尺、弘二幅、）御床張一條、（長五尺五寸、弘三幅、）土代白細布帳一條、（長七尺七寸、弘二幅、）緋御衣一條、（長二尺、）紫單御衣一條、（長二尺、）帛御衣一條、（長二尺、）比毛立御裳一條、（長二尺、）帛御裳一條、（長二尺、）紫御裳一條、（長二尺、下須蘇弘二尺、腰弘四尺、）生絁御被一條、（長七尺、弘五幅、）荒衣帳一條、（長七尺七寸、弘三幅、）荒衣天井蚊屋一條、（長七尺六寸、弘十二幅、）御櫛八枚、（納宮一合、）紫本結糸一條、（長四尺、）緑帶二條、（長四尺、弘二寸、）

神財十一種
御宮一合、銀鐵一柄、（高四寸、）銀桶一口、（徑一寸半、弘一寸、）銀拌一枚、（長六尺、）銀櫛筥一合、（納櫛四枚、）鈴二口、（徑一寸、）弓三枝、大刀二柄、胡籙三具、（各矢卌隻、）桙二柄、（長一丈六尺、）靑毛土馬一匹、（高一尺、鞍、立髪金飾、）

〔延喜式神名九〕伊勢國度會郡瀧原宮（大、月次、新嘗、）

〔延喜式四伊勢大神宮〕瀧原宮一座（中略）
右諸別宮、祈年、月次、神嘗等祭、供之、

〔大神宮諸雜事記一〕天平寶字六年九月廿二日、依大風洪水之難、瀧原宮祭使大神宮大内人神主世安、幷彼宮内人等不堪參宮、於宇倶留萬川之頭、（志天、）悠記御膳御祭直會等之勤奉仕、以同廿七日、祭使隨身御調絹等（天、）引率内人等參宮、開正殿奉納了也、但前例禰宜之封奉付於正殿也、而今度（和）祭使大内人世安奉付封已畢、

一おなじきいんやでん　五拾貫文〇中略

應永十五年十一月十六日　四頭工貞興〇以下署名略

〔元祿九年神宮勘文〕瀧原宮〇中略

正殿高二丈二尺三寸六分、長一丈五尺、廣一丈一尺、

御茅葺　搏風四枚　鰹木六本

瑞垣一重長廻東西五間、南北五間、高七尺、

同御門高一丈二寸六分、廣八尺五寸八分、

板葺

玉垣一重長廻東西十間、南北十一間、高六尺七寸、

同御門高一丈二寸、廣八尺五寸、無扉、

板葺

鳥居高一丈二尺五寸、廣一丈一尺二寸、

御船殿御修覆、高九尺五寸、長一丈五尺、廣四尺一寸、

板葺

御倉御修覆、高一丈二尺五寸、長一丈一尺、廣九尺、

板葺

御饌屋御修覆、高一丈四尺、長二丈四尺、廣一丈二尺、

板葺

宿館御修覆、高一丈五尺、長三丈、廣一丈二尺、

板葺

後、京都ノ人ノ領ト成テ、神宮ノ管領ヲ放レタリ、大神宮臨時祭ノ假屋コソ所ノ役ニテ有シカ、權門ノ雜掌神宮ノ使ヲ入ザルニ依テ、功人ヲ寄ラレナドシ侍ルニヤ、カヽル程ニ、近年盜人此山ニ籠タルヲ、領家シヅメ給フ事ナキ故ニ、守護代彼ヲ誅シテ守護領トナレリ、

〔倭姫命世記〕活目入彥五十狹茅天皇(○垂仁)即位二十五年、倭姫命、(○中略)美地到給哉、眞奈胡神而、國名何問給支、大河之瀧原之國(止)白支、其處(乎)宇太之大宇禰奈(乎)爲天、荒草令苅掃天宮造令坐支、

〔大神宮本記歸正抄〕(三)抑是神宮(○瀧原並宮)ハ皇女(○倭姫命)ノ御慮ニハ、瀧原國ヲ勝地ト見定給ヒ、皇大神ヲ此處ニシテ萬世マデモ鎭祭シ奉ラントテ宮殿ヲ造建セシメ給ヘルナリ、サレバ下段(○五十給宮御鎭座ノ段)ニ天照大神荒魂宮和魂宮(止)奉鎭坐ト云ヒ、大同本紀ニモ山田原(而)荒御魂宮、和魂宮造奉(天)令鎭(理)定(理)坐ト云ヘルナドヲ以テ併勘スルニ、瀧原宮ハ皇大神ノ和魂宮、並宮ハ皇大神ノ荒御魂宮ト創立シ給テ齋キ奉リ給ケム、延喜式ニ兩宮共ニ大神ノ遙宮トアルニ據テ察スベシ、

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事
瀧原宮一院(伊勢志摩兩國堺大山中在、大神宮以西相去九十二里、)
稱天照大神遙宮之御形鏡坐、
正殿一區(長一丈五尺、弘一丈一尺、高八尺、)御船殿一宇(長一丈五尺、弘四尺、高六尺、)御床一具(長八尺、弘四尺、厚一寸半、)瑞垣一重(長廻十二丈、高一丈、)
御門一間(長八尺、高一丈、)玉垣一重(長廻廿丈、高九尺、)御倉一宇(長一丈一尺、弘九尺、高八尺、)

〔頭工引付〕ざうないくう、べつぐう、せんしや、まつしや、御くらの注文の事、(○中略)
一たきのはらの宮　三百貫文
一ならうのみや　三百貫文
一おなじきちやうしや　八拾貫文

瀧原宮

條、○中略別宮伊佐奈岐宮、蚊屋御帳濕損、同御遷宮時見付之、

〔兩宮別宮遷宮記大略〕建長二年十一月十日
月讀御裝束御濕損、伊佐奈岐御船代、令子透給之間、鼠參入御裝束喰損、可注文成上之由、內人物忌
等令申云云、

〔類聚大補任龜山〕弘長三年癸亥五月五日、月讀宮忌屋殿燒亡畢、同六月御祭以前造畢、大司造之、

〔康富記〕應永廿六年二月十二日丁亥、今夜釋奠也、○中略依去月五日○下文作四日伊勢月讀宮回祿事、實種
座被略畢、廿八日癸卯、伊勢一社奉幣、并廢朝宣下被行之、依去正月四日未刻、月讀宮炎上被謝申
之也、

〔千載和歌集二十神祇〕治承四年遷都の時、伊勢大神宮にかへり參りて、君の御祈念し申侍て讀侍ける、
大中臣爲定朝臣
月よみの神してらさばあだ雲のかゝる浮世もはれざらめやは

〔新古今和歌集十九神祇〕伊勢の月よみの社にまいりて、月を見てよめる、　西行法師
さやかなるわしの高ねの雲ゐより影やはらぐる月よみの杜

〔延喜式四伊勢大神宮〕瀧原宮一座、大神遙宮、在伊勢與志摩境山中、去大神宮西九十里、

〔大神宮儀式解十二〕瀧原は、今の野後村の舊名なり、此地所々瀧あり、俗に四十八瀧ありといふ、仍地名とせしならん、その所なる宮なれば、地名を宮稱とするなるべし、○中略遙宮は、もと外津宮と同じ例にて、遠所なる大御神の宮所といふ意なり、

〔通海參詣記〕瀧原並宮兩所軒ヲナラベテ、阿會ノ御杣ト申豐受大神宮ノ御杣山ニ御座アリ、大神宮ノ西ヲ去レル事九十里也、○中略靈驗殊ニ新ニオハシマセバ、精進潔齋モ本宮ニコエタリ、然レドモ宮地ハ、中比當宮權禰宜ナニガシト申シ侍シモノ、名主職ヲ傳ヘタリトテ、權門ニ寄奉リ、ジ

〔神名秘書〕月讀宮二座

貞觀九年、改社號稱宮、

〔延喜式神名九〕伊勢國度會郡

伊佐奈岐宮二座伊佐奈彌命一座、並大、月次新嘗、　月讀宮二座荒御魂命一座、並大、月次新嘗、

〔延喜式伊勢大神宮四〕伊佐奈岐宮二座○中略　月讀宮二座○中略

右諸別宮祈年月次神嘗等祭供之、

〔大神宮諸雜事記一〕仁壽三年八月廿八日、大風洪水間、月夜見伊佐奈岐宮等神寶物、御裝束、玉垣瑞垣門等已流失、幷正殿二宇同以流亡御畢、于時內人神主正見奉戴兩宮之御躰奉鎮已了、但本自私○私一本作和氏神主氏相並昇殿供奉之例也、而內人私氏不參會也、仍正見一人奉頂兩宮、隨則私氏內人蒙不忠之咎、永被停止職掌既了、以同年九月二日、依大風洪水難、月夜見伊佐奈岐兩宮非常顚倒之由、司解進於神祇官之日、爲遁後代之厄、可被改建正殿於他所之由上奏、因之尋便所且注進、且可卜定吉凶之由、以同九月八日被下宣旨於神祇官早了、仍下符於大神宮司、宇治鄕十一條廿三布施里、同條廿四川原里等之間、依有穩便、以同九月廿七日、注司解言上於本官、上奏了、爰同年十一月一日宣旨、宮司伊度人於件兩里間、奉改造彼二宮正殿、連里但其賞可延任之由宣旨具也、至于神寶御裝束物等者、任先例注進色目畢、

齊衡二年九月廿日、奉遷月夜見伊佐奈岐宮也、種々神寶御裝束物、依員被奉送也、御遷宮夜、大內人神主正見奉戴二所御正體畢、

〔本朝世紀〕康治元年七月十七日戊申、權中納言藤原重通卿參仗座、行軒廊御卜、官寮供奉如常、是伊勢大神宮月讀伊佐奈岐兩宮御體鼠食損、幷同宮古宮鹽湯所松一本折倒、○中略事等也、

久安三年五月廿四日丙戌、權大納言藤宗輔卿參仗座、被行軒廊御卜、是則伊勢大神宮司言上二ヶ

板葺

玉。垣。四重中宮絶時

同。御。門。中宮絶時

鳥。居。高一丈七寸、廣八尺九寸、

御。倉。一宇中宮絶時

宮地廻二百五間半

〔皇大神宮儀式帳〕一月。讀。宮。遷。奉。裝。束。　合十四種

正殿四宇、御床四具、蚊屋四條、土代生絁帷四張、三張長各一丈、一張長八尺、弘各三幅、生絁御被四領、長各六尺、弘三幅、帛御被四領、長弘如上、戸張四張、三張長各六尺、弘三幅、一張長五尺、弘二幅、青甲纈錦○錦一本作綿、御衣四領、長各二尺、生絹單御衣四領、長各二尺、練綿御袴三腰、長各一尺六寸、御裳二腰、裳一腰、帛一腰、長各一尺六寸、須蘇長四尺、緣帶八條、長各四尺、紫本結糸八條、長各四尺、御櫛十六枚、納筥四合、兩面覆樻一備、

神財十六種

金作大刀二柄、在東殿、黑作大刀六柄、正殿三字、各二口、小刀二柄、在四一二殿、各一柄、弓六枝、西二殿二枝、東二殿二枝、東一殿二枝、胡籙六具、各矢五十、東一殿二具、西二殿二具、二殿二具、楯四枚、西二殿二枚、東一殿二枚、梓四枚、東一殿二枚、西一殿二枚、鏡九面、徑各二寸、西一殿二面、西二殿四面、東一殿三面、鈴一口、徑一寸、在東一殿、木絡紩二具、在西一殿、研四面、高二寸、徑六寸、別殿一面、青毛土馬一匹、高一尺、鞍立髮金飾、在東一殿、桶二合、在西一殿、御鞍二具、西二殿一具、東一殿一具、五色玉一連、長二尺、在西一殿、大筒七合、各納小筒二合、三殿各二合、一殿一合、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年八月甲寅、是日異常風雨、拔樹發屋、卜之伊勢月讀神爲祟、於是每年九月准荒祭神奉馬、又荒御玉命、伊佐奈岐命、伊佐奈彌命、入。於。官。社。

〔三代實錄十四淸和〕貞觀九年八月二日戊辰、勅、伊勢國伊。佐。奈。岐。伊。佐。奈。彌。神。改。社。稱。宮。預。月。次。祭。幷置内人一員、

〔頭工引付〕ざうないくう、べつとう、せんしや、まつしや、御くらの注文の事、〇中略

一月よみの宮　貳百廿貫文
一いざなぎの宮　貳百廿貫文
一おなじきいちもとごぜん　廿貫文
一おなじきおざの　百廿貫文
一おなじきちやうしや　八拾貫文
一おなじきいんやでん　五拾貫文

應永十五年十一月十六日　四頭工貞興〇此他人名略

〔元祿九年神宮勘文〕伊佐奈岐宮〇中略
正殿高一丈八尺九寸、長一丈四尺、廣一丈、
御茅葺　搏風四枚　鰹木六本
瑞垣一重長廻東西五間三尺、南北六間八寸、
同御門高八尺四寸、廣六尺、
板葺
鳥居高一丈、廣八尺一寸、

〔元祿九年神宮勘文〕月讀宮〇中略
正殿高二丈二尺五寸、長二丈二尺、廣一丈四尺、
御茅葺　搏風四枚　鰹木六本
瑞垣四重當時一重、長廻東西五間三尺、南北六間八寸、高六尺四寸、
同御門高八尺七寸、廣七尺八寸、

月讀宮二座

月夜見命一座、左方、靈御形、馬乘男形、著紫御衣、金作帶、大刀佩也、

荒魂命一座、右方、靈御形、月夜見命與同形坐、

〔神名秘書〕月讀宮二座中略○

貞觀十年、增作寶殿、中略○荒魂命社無增作也、如本今號小殿是也、

〔類聚符宣抄一〕左辨官下　伊勢國幷大神宮司

應任祭主神祇權大副大中臣朝臣輔親檢錄損色令雜殿助大中臣宣茂修造大神宮內外兩殿幷

月讀伊佐奈岐等別宮雜舍御垣等事、

左大臣宣、奉勅、相加月讀伊佐奈岐兩別宮、令修造、民部丞在前聞依請者、

長保五年十月十四日　大史惟宗朝臣元政

〔大神宮雜事記二〕長曆元年月日、依宣旨、中略○月讀與見伊佐奈岐宮等、乃造棟幷御垣御門扉等被令改造了、已依神主解狀、祭主乃改而所被申加也、

〔建久元年內宮遷宮記〕同年建久元年○十二月廿四日、天平賀、中略○月讀宮兩宮各十口、

○按ズルニ、月讀宮兩宮トハ月讀伊佐奈岐兩宮ノ謂ナリ、

〔文永三年內宮遷宮記〕一古殿御倉分配事

四禰宜分　伊佐奈岐宮小殿

八禰宜分　月讀宮小殿

宮政所分　月讀宮忌火屋殿下略○

〔文永三年內宮遷宮記〕十一月文永四年○廿日、月讀宮一殿上棟也、同宮瑞垣北面所殘、去十月二日奉立滿了、

月讀宮
伊佐奈岐宮

事半時ばかりなり、同日荒祭宮より、鏑矢乾の方へ出、又外宮よりも神鏑西をさして出よし注進す、ふしぎなりける事どもなり、

〔康富記〕寶德元年八月廿二日庚午、是日軒廊御卜被行之、勘申祭主宗直卿言上豐受大神宮禰宜等申當宮正殿震動幷西寶殿千木鰹木覆左右板悉令顚落事、〇中略

文安四年九月八日、被行軒廊御卜、是去六月廿一日、〇中略 正殿〇大神宮 幷荒祭宮鳴動、樫御馬走出事也、

〔八雲御抄〕五社 月よみの宮伊勢

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

月讀宮一院在大神宮以北、相去三里、

正殿四區之中、三間、長各一丈七尺、弘一丈、高八尺、一間長各一丈七尺、弘六尺、高六尺、此一稱伊弉諾尊、次稱伊弉冉尊、已上奈良朝庭御世定祝、次稱月讀命、御形馬乘男形、著紫御衣、金作帶大刀佩之、次稱荒魂、已上內人物忌定供奉、御床四具、御倉一宇、長一丈四尺、弘一丈六尺、高八尺、瑞垣四重、長廻各十四丈、玉垣四重、長廻廿二丈、御門二間、弘各七尺、高各八尺、

〔延喜式四伊勢大神宮〕伊佐奈岐宮二座去大神宮北三里、

伊弉諾尊一座　伊弉冉尊一座

月讀宮二座去大神宮北三里、

月夜見命一座　荒魂命一座

〔神名秘書〕伊佐奈岐宮二座去大神宮北三里、東月讀宮、四伊佐奈岐宮、各南向坐、

伊弉諾尊一座　靈御形鏡坐左方　伊弉冉尊一座　靈御形鏡坐右方

件二柱神者、天神地祇之大祖、國家萬物之性靈也、

青毛土馬一匹、（高一尺、鞍立髮金飾、）鏡一面、（徑三寸、納二緋嚢一、）

〇按ズルニ、別宮ノ神寶裝束ヲ記載スルモノ、延喜式、長暦送官符、嘉元送官符等ノ類、甚ダ多カレドモ、槪ネ大差ナキヲ以テ之ヲ略ス、以下諸別宮亦同ジ、

〔延喜式九神名〕伊勢國度會郡荒祭宮（大、月次、新嘗、）

〔延喜式四伊勢大神宮〕荒祭宮（〇中略）

右二宮（〇大神宮及荒祭宮）祈年月次神嘗神衣等祭供之

〔大神宮諸雜事記一〕大同二年九月十七日夜中、荒祭宮御前方（仁）、黑斑文牛一頭、倒亡斃畢、（〇中略）愛件牛斃事、禰宜司代、共申上本官、因之被宿直内人三人科中祓畢、

〔中右記〕永久二年八月十四日丙辰、内大臣被行軒廊御卜、（〇中略）同二日（〇入月）内宮荒祭千木折事、吉凶被卜申事也、官寮多公家御藥、神事不信不淨者云々、

長承三年九月廿四（日、）大神宮荒祭宮御服、和妙御衣血付事、官卜云、推之神事不淨可致之上、公家御藥、又天下大事、寮占云、依神事不淨可致歟、

〔兵範記〕仁安三年十二月廿五日壬子、卯刻、右少史中原國親、持來神宮奏狀、無次第解、并祭主解狀、宮司解狀祭主加名也、其狀云、

注進、今月廿一日申時、從權神主師朝之宿館猛火出來、奉始自正殿、迄至東西寶殿并中外院、殿舍御垣門鳥居、及禰宜内人等宿館、掃地燒失、（〇中略）荒祭宮依爲炎上之中、成恐懼奉出御、贊殿無燒失之間、如本所奉鎭也、（〇中略）

嘉應元年十月廿二日甲辰、曉頭右大將參陣、（〇中略）次權大納言實房卿參著、被申行軒廊御卜、荒祭宮御贖被引散事、同辨（〇右少辨重方）奉行云云、

〔續神皇正統記崇光〕此ころ（〇觀應二年八月）神宮より、外宮寶殿鳴動して、虚空に響のみつゝきの音する

〔皇大神宮儀式帳〕一供奉幣帛本紀事

正殿寶殿三殿、亦荒。祭。宮。鎰、奉置西四御倉、

〔文永三年內宮遷宮記〕伊勢大神宮禰宜等

請預

御鎰壹具（金銅）、

御鎰壹勾（○中略）

右任今月十二日官行事所送文、所請預如件、（○中略）又荒祭宮正。殿、御。門。御。戸。帖。金。物。實。治。遷。御。同。前。也、而今度爲平金無鑄立足之間、御門帖金物五口、內二口拔落所紛失也、任先例爲花形丸頭者、儀飾令相應、拜見可嚴重者也、然則早（○中略）任先例被調進矣、仍言上如件、謹解、

文永四年八月廿三日　禰宜正四位上荒木田神主延季（○下略）

〔文永三年內宮遷宮記〕十九日（○九月）

荒祭御門帖平金、依有大事、當日以餘殘御金物、爲通時神主奉行奉粧直、（○中略）其次天。平。賀。卅。八。口、御。殿。御。板。敷。之。下、任。先。例。奉。居。之、

〔皇大神宮儀式帳〕一荒。祭。宮。正。殿。裝。束。　合廿種

御床一具、蚊屋一條、（長七尺六寸、弘十二幅、）內蚊屋一條、（長七尺、弘二幅、）御床下敷細布帷一條、（長六尺、弘二幅、）生絁御被一領、（長七尺、弘三幅、）納綿八屯、帛御被一領、（長七尺、弘三幅、）納綿八屯、緋綿御衣一領、（長二尺、）錦綿御衣一領、（長二尺、）生絁綿御衣一領、（長二尺、）緋御裳一腰、（長四尺、須蘇）錦御裳一腰、（長二尺、）帛御裳一腰、戶帳一張、（長六尺、）菅蓋一柄、（口徑五尺五寸、金餝、）緋碧一領、（長四尺、弘四幅、）柄、（長八尺、漆塗、）御櫛筥一合、（納櫛四枚、）紫本結二條、（長四尺、）紫帶二條、（長各二尺、）櫃棣絁帊一張、（長九尺、弘四幅、）

神財八種

大刀七柄、（金作一柄、黑作六柄、）楯一枚、（長四尺五寸、）桙一枚、（長一丈六尺、）弓二帳、胡籙三具、（皮作一具、黑葛作二具、）呉床一具、（漆塗、長二尺三寸、）

正殿一區、長三丈一尺、弘一丈四尺五寸、高一丈三尺、御床一具、〇御以下四字、據二大神宮儀式解一補、瑞垣一重、長廻十六丈、高一丈一尺、御門一間、長一丈、弘七尺、高九尺、〇九尺、大神宮儀式解作二一丈三尺一、宿衛屋貳間、長各一丈二尺、弘一丈、高七尺、

〔大神宮儀式解十二〕伊勢の荒祭宮は天照大神の荒魂とあれども、本宮を和魂也と申せることはなし、〇中略神功皇后紀、願欲レ知二其名一、逮二七日七夜一、乃答曰、神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所レ居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津姫命焉とのたまひつる、此姫神こそいひもてゆかば此荒祭の神なるべし、

〔神宮雜例集一〕神封事付御領

一伊勢國神郡八郡事

本記云、皇大神御鎭座之時、大幡主命物乃部八十友諸人等率、荒御魂宮地乃荒草木根苅掃、大石小石取平天大宮奉レ定支、

〔頭工引付〕ざうないくう、べつくう、せんしや、まつしや、御くらの注文の事、〇中略

一あらまつりの宮のいんやてん。　五十貫文〇中略

應永十五年十一月十六日　四頭工貞與〇以下署名略

〔元祿九年神宮勘文〕荒祭宮

正殿、高二丈六尺七寸、長二丈一尺二寸、廣一丈四尺、

御茅葺　搏風四枚　鰹木六本、

瑞垣一重、長廻東西二丈九尺二寸、南北三丈二尺、高六尺五寸、柱板七尺七寸五分、同御門、高九尺八寸、廣七尺二寸餘、

板葺

玉垣一重當時中絶

宿衛屋二間當時中絶

古事類苑

神祇部五十二

大神宮二

別宮攝社

別宮トハ本宮ニ對スル稱號ニシテ、大神宮ニ次デ、最モ尊重崇敬セラルヽ所ナリ、而シテ、皇大神宮ニ屬セル別宮ヲ、荒祭宮、伊佐奈岐宮、月讀宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊雜宮、風日祈宮ノ七所トシ、豐受大神宮ニ屬セルヲ、高宮、土宮、月夜見宮、風宮ノ四所トス、伊雜宮ノ志摩國ニ在ルヲ除ク外ハ皆伊勢國ニ在リ、式年ノ造替遷宮、御裝束神寶ノ調進ヨリ、祈年月次神嘗等ノ諸祭並ニ本宮ニ準ジテ官幣ヲ奉ラレ、其他臨時ノ祭祀奉幣モ亦然ラザルハナシ、此中ニテ荒祭宮、高宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊雜宮ハ、原來宮號ヲ稱セシモノニテ其餘ハ宣下アリテ、上リシモノトス、本篇ハ各別宮ノ沿革、來歷、異變等ノ概略ヲ擧ゲテ之ヲ其宮ノ下ニ載セタリ、而シテ、皇大神宮ノ諸別宮ニ渉レル事項ハ荒祭宮ノ下ニ擧ゲ、豐受大神宮ノ諸別宮ニ渉レル事項ハ高宮ノ下ニ掲ゲテ、各宮ノ下ニ分載セズ、

別宮ノ外ニ攝社多シ、本篇ハ單ニ攝社總體ニ關スル事蹟ノ概略ヲ、別宮ノ末ニ擧ゲタリ、

〔延喜式四伊勢大神宮〕荒祭宮一座大神荒魂、去大神宮北廿四丈、

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

造奉荒祭宮一院在大神宮以北、相去廿四丈、

稱大神宮荒魂宮、御形鏡坐、

朝事大略明日可爲宣下之由語之、廿一日、今日廢朝宣下云々、

〔禰家古文書〕大神宮玉垣、荒垣燒亡、并御殿鳴動事、○中略

文明十九年五月廿一日、被行廢朝、五ヶ日、

是去年十二月外宮宮炎上之故也、上卿今出川大納言公興卿、職事頭左大辨光忠朝臣、少外記安倍

盛俊等參勤之、○中略

天文七年二月八日　左大史小槻伊治上

〔永祿天正外宮引付〕豐受大神宮恠異事

去七月二日○永祿七年夜、正殿自東南角頽落、亦於其間白鴿多掛巢、及損云々、

〔司家日記〕豐受皇大神宮神主

注進早經次第上奏、可被達叡聞御正印御倉、今月一日夜亥之刻炎上之事、

右御倉雖爲炎上、御正印不損御出之條、神宮大慶之旨、注進言上如件、以解、

慶長四つちのと亥年九月日○署名略　正印不行

〔司家引付拔萃〕外宮正殿千木顚倒之事

豐受皇大神宮神主

注進可早被經次第上奏當宮千木顚倒子細之事

右謹考故典、伏依舊貫、凡當宮有異儀、則致注進者、古今之定例、神宮之通規也、粤頃日正殿乾方之千木折、即懸留于萱葺之上、是蓋爲屢風浸雨、漸朽腐而然歟、不知其所以然矣、因任例注進言上如件、

寬文四年六月日○署名略

永久二年八月十四日丙辰、内大臣〇源雅實被ㇾ行二軒廊御卜一、〇中略去一日豐受宮正殿寶殿千木折、幷内瑞垣御門顚倒事、幷同二日内宮荒祭千木折事、吉凶被ㇾ卜申事也、官寮多公家御愼、神事不信不淨者、

〔百練抄後深草十六〕建長二年二月廿八日甲子、於二院〇後嵯峨殿上一、被ㇾ議二定去年伊勢外宮遷宮時所ㇾ取二落之一土宮瑠璃壺事、幷西寶殿皇氣事一、攝政已下參之、　卅日丙寅、召二伊勢外宮禰宜等於仙洞一、有ㇾ被二尋下一事等、

三月一日丁卯、軒廊御卜、外宮瑠璃壺事、幷皇氣事、内大臣已下參云々、

〔神皇雜用先規錄〕二所大神宮正遷宮幷假殿遷宮次第

永享元年己酉十二月廿五日、外宮假殿遷宮、後花園御宇、去七月十三日、神人與二神役人一合戰、神人打負、瑠璃壇内落籠、白石血流、神役人射二立矢於御殿一、依之也、件射雜者共、蒙二神罰一亡畢、

〔康富記〕寶德元年八月廿二日庚午、是日軒廊御卜被ㇾ行之、去六月廿八日、未刻天氣長閑折節、豐受大神宮正殿鳴動、西寶殿千木、鰹木、覆板悉頽落事、禰宜等注進之故也、

〔子良館舊記〕文明十八年ひのへ午十二月廿日、宇治と國司と一所になり候て、國司おんむき候、され共ゆみやは山田よく候て、國司がたの人を七八百人うちとりそろ、かみの城に國司方の人數こもり居申候あひだ、二三度かつき候へ共、其日をちず候間、宮山にたまらず候てをち候、榎倉の人數計御殿〇豐受大神宮の御下に八人籠候て敵を待居候處に、宇治衆此由聞候て、甲五百計にてよせ、又軍勢ものぼせ候て取籠候を、宇治衆を一圓にきりとをしまでおつこし候て、やがて御殿へ火をかけ候て、掃部と申者腹をきり申候、殘七人はやがて敵をおひかけ候て、かみの我城へ打入候、敵をも打我もやがてみなうたれ候、是は十二月廿二日なり、かもんはやがて御てんのうしとらのすみにてはらをきり申候、

〔親長卿記〕文明十九年正月二日、今日聞伊勢外宮正殿燒失云々、子細可ㇾ尋、〇中略後聞、於二神殿内一陣、軍勢籠、切腹、數人云々、其後懸ㇾ火、先代未聞事也、可ㇾ有二謹愼一事也、　五月十八日、頭左大辨光忠朝臣神宮奉行來、慶

〔大神宮諸雜事記〕二長暦四年〇長久元年七月廿六日夜子時、西風俄吹、豐受大神宮正殿、東西寶殿、瑞垣御門等、拂地顚倒給既畢、仍當番大物忌父度會春眞、御炊物忌父同吉元、權禰宜一兩人等也、洪水洗山、西風拂地天、敢人馬往反不通、然而祭主永輔波、自野依村乘海船、字山田川原仁著、宮司兼任波、自小社乘小船、山田乃、古川ヨリ差入、神宮北御門乃社許著、奉拜見、更無爲方術天、仍御氣殿忽洗淨天、以同廿七日戌時天、正殿幷三所相殿乃御體乎奉遷鎭畢、而遠所外宿乃禰宜等不參會シ天、昇殿供奉乃處仁、禰宜乃所用不足、仍御炊物忌父吉元、祭主俄授登、號權禰宜職天、昇殿之役令供奉、左右前後乃取物御寶殿等不如法、只絹垣許歟、已以略、以同廿八日、御稻御倉乎洗淨、奉遷神寶物利、鋪設御倉乎洗天、御糸絹等乎奉納了、外幣殿乎洗淨天、朝夕御膳乎奉備利天、祭主申事由、且上奏公家、且奉造假殿已畢、隨御以八月七日被下宣旨天、奉遷於假殿已了、

〔百練抄〕四後朱雀長久元年七月廿六日、大風、伊勢豐受大神宮正殿、幷東西寶殿瑞垣悉以顚倒、〇中略但御體不動傾、奉渡膳殿、　八月四日、諸卿定申大神宮外宮顚倒事、主上殊歎息、〇又見古事談

〔春記〕長暦四年〇長久元年八月四日丙戌、内大臣〇藤原教通被奏定文、〇中略其定云、〇中略祭主神祇權少副大中臣永輔言上、七月廿七日夜大風間、豐受大神宮正殿幷東西寶殿顚倒事、　九日辛卯、予〇藤原資房、中略又申云、廢務事、自彼使〇奉幣使立之日可被下歟、其旨仰内大臣歟、又廢朝廢務各有分別、廢朝天子一人不見事、諸司行務如例、廢務諸司止務者、命云、然事廢朝五ヶ日之例在勘文、廢務五ヶ日之例不見、奏此由、可令勘申先例之由、可仰内大臣也、抑依伊勢事有廢務、此度事可仰廢務也、予申云、可下玉簾歟、命云、不可然也、伊勢事廢務之間、不下御簾之故也者、予即退出、

〔百練抄〕五堀河寛治六年八月四日、大風、大神宮西寶殿、豐受宮東西寶殿等顚倒、　十七日、諸卿定申大神宮寶殿顚倒事、

〔中右記〕天仁二年四月九日、裏書早旦卯辰刻、俄大風大雨、後聞、依件風伊勢豐受宮蕃垣御門顚倒、

宣旨、又同年十一月、大神宮言上云、御神寶奉納間、正殿鑰暫澁御者、仍同三年八月廿三日、從公家可奉造直之由、被下宣旨、但其後沙汰詳無所見、仍勘申、

應德四年三月六日

右史生伴有貞

左史生紀公國

清原友信

鎭災

〔本朝世紀〕久安三年五月十八日庚辰、今日權大納言藤伊通卿先參殿上、最勝講了後著左仗、被勘伊。勢。豐。受。宮。御。器。御。倉。御。鎰。日時、（遣日時今月廿七日己丑、廿八日庚寅、用之日時六月二日甲午、四日丙申、）

〔台記〕久安三年七月二日甲子、先日範家下大神宮解状（豐。受。大。神。宮。御。器。御。倉。鎰。折。損。）下辨令續文、昨日付範家奏之、

八日庚午、早旦外記持來大神宮倉鎰折勘文、○中略此等先日依勅令勘也、招頭辨仰曰、明日可行御卜、催諸司、　九日辛未、早旦召範家、令奏大神宮佐、府生闘等外記勘文、午刻伴朱雀相公（妙長）參內、○中略余先結府生解、○中略次結大神宮解、仰云、令官寮占申、○中略又其鎰令改作者、下頭辨、辨結申、仰範家、仰詞了、次令勘申改作鎰日時、

〔古老口實傳〕一神宮佐異事

殿舍上鵄鵶居事、飛蟻蜂房无名蟲古木顚倒、幷落枝等事、卽注進之處、被行御占、下祈謝宣旨、仰諸社司等、御祈禱之間、神宮爲吉也、近代依无奏聞、不被祈謝、因茲神宮爲凶之由、雅繼光胤神主等申之、

〔大神宮諸雜事記〕一〕靈龜三年（○養老元年）八月十六日、大風洪水、仍豐受神宮之瑞垣、幷御門一字流散、但件水御正殿之許一丈際、專不流寄（志天）土下涌入也、甚神妙也云々、

天平勝寶元年己丑八月十一日、豐受宮物忌父神主世眞（加）神館一字燒亡、

貞觀十五年八月十三日、大風洪水間、豐受宮重々御垣流水、件水正殿之許一丈不寄（志天）、如井（志天）地底流入、甚奇異也、

爲奉納官幣、正殿奉開之處、御鑰澁固天更不被開給、仍始自一禰宜康雄神主、一々六員神主各立代奉開、更不被開給、然間時刻推移天夜漸臨于後夜、欲、仍神主等勅使宮司申云、正殿巽方東寶殿之中天、以御炊物忌父度會久忠天、及于數度天令祓淸天、又六員禰宜等皆參登天開奉、遂不被開給、因之禰宜等罷下天、一禰宜申云、去長暦年中御遷宮以後、公家乃被進官幣物等、永應奉納東寶殿之由被起請申於二宮早了、而今度正殿已不被開御者、雖有非例、依便宜天、〇中略東寶殿奉納如何者、勅使承諾、仍奉納了、　同年閏十月七日、參宮勅使王彙長王、中臣少祐輔長等令進給、金銀御幣御馬等也、宣命狀云、去九月御祭、豐受大神宮乃正殿御鑰乃不被開給之由令祈申給云々、具不記、但以去十二日天同大神寶物等令奉給、如九月御祭正殿乃御鑰猶澁固天不被開給、同東寶殿奉納、其等御祈也、　同十一月十二日、甲辰公卿勅使參宮、〇中略即被下宣旨同十一月八日、件、權大納言源朝臣經長宣、奉勅、早祭主宮司禰宜等相共搆開、如舊修補件豐受宮正殿鑰云々、〇中略祭主御內參入天、御前乃御階之下候天、六禰宜外從五位下賴元神主以、令隨身鉗天參登天、御鑰搆開天令實檢之處、已四舌乃御鑰乃舌一方被押、縮天令澁給、其外破損即實檢之後、立鍛冶內人安光幷鍛冶大中臣吉友召天、即日內令修補天、如元所奉納也、

〔朝野群載六太政官〕文殿

勘祭主神祇權大副從五位下大中臣朝臣輔宜申任禰宜等申請旨被修造豐受大神宮正殿幷高倉御鑰舌弱難奉開事

右宜勘申先例者、引勘文簿之處、去延久元年、伊勢大神宮言上云、豐受正殿鑰不被開給者、仍爲令祈申其由、同年十一月八日、差使參議藤原良基卿、被奉遣臨時幣帛、但於鑰者、祭主宮司禰宜等相共搆開、如舊可修補之由、同日被下宣旨、又同二年八月、大神宮言上云、去六月御祭例幣之間、伊雜宮御鑰澁給、不被開者、仍先被尋問先例於本所之後、同年九月十二日、任例次祭搆開、可奉納御幣之由被下

御衣壹領、紺御衣壹領、小綾綠御衣壹領、生絁御衣壹領、已上錦御衣長各三尺、各裏綿一斤、呉錦御衣壹領、小綾紫御衣壹領、小綾帛御衣壹領、絣御衣一領、已上錦御衣各長一尺五寸、裏綿一斤、一絣御裳壹腰、帛御裳壹腰、紺御裳壹腰、生絁御裳壹腰、已上單御裳、別須蘇長五丈、腰長一丈三尺、呉錦御裳一腰、小綾紫御裳一腰、紺御裳一腰、帛御裳一腰、倭文御裳一腰、已上單御裳、別須蘇長二丈五尺、廣一尺五寸、腰長一丈七尺、生絁比禮四具、長各二尺五寸、廣隨幅、帛絁忍比四具、長各二尺五寸、廣隨幅、帛絁御巾二條、長各五尺、廣隨幅、細布御巾二條、長各五尺、廣隨幅、御枕二基、帛御韈四具、錦襪二具、錦御沓二兩、紫御帶二條、御櫛笥一合、納御櫛四枚、紫刺御本結四條、紫蓋一口、紫刺羽一柄、菅刺羽一柄、菅御笠一口、

相殿坐神三前御裝束物

帛御被三具、生絁御被三具、已上各長三尺五寸、廣二尺三寸、綿五斤、帛御衣三領、生絁御衣六領、已上各長一尺、綿六兩、生絁御裳九腰、各須蘇長一丈、廣一尺、腰長三尺、腰廣一尺、

〔延喜式四伊勢大神宮〕度會宮裝束

紫蓋一枚、菅笠一枚、紫翳一枚、菅翳一枚、壁代絹帷二條、一條長六丈、廣六幅、一條長一丈八尺、廣如上、天井上覆帷一條、長二丈五尺、廣九幅、蚊屋帷二條、一條高一丈四寸、廣十九幅、一條高如上、廣五幅、幌一條、長七尺三寸、廣四幅、戸上壁代帷一條、長八尺五寸、廣二幅、絹袷帷一條、長一丈、廣四幅、土代敷細布袷帷一條、長二丈、廣五幅、帛被一條、長八尺、廣四幅、刺車錦被二條、長各八尺、廣四幅、船代內敷小綾帛被二條、各長八尺、廣二幅、上覆帛被一條、長八尺、廣四幅、小綾紫被一條、長八尺、廣四幅、絣錦衣一領、紺衣一領、小綾綠衣一領、絹衣一領、已上各長三尺、納綿一斤、呉錦衣一領、小綾紫衣一領、小綾帛衣一領、絣衣一領、已上長各三尺五寸、納綿一斤、絣裳一腰、帛裳二腰、紺裳一腰、絹裳一腰、各高五尺、裏長五丈、腰長一丈三尺、呉錦裳一腰、小綾紫裳一腰、紺裳一腰、倭文裳一腰、各高三尺五寸、裏長二丈五尺、腰長七尺、絹比禮四條、各長二尺五寸、帛絹忍比四條、各長二丈五寸、帛巾二條、各長五尺、細布巾二條、各長五尺、帛韈四條、各長二尺、枕二基、櫛笥一合、納櫛四枚、髻結紫絲四條、各長三尺、紫帶二條、各長七尺、廣二寸、錦襪二具、錦沓二兩、敷御道調布十八端、柳筥三具、各方一尺六寸、幔一條、長六丈、三幅、納裝束韓櫃四合、所攝別宮裝束、同納此韓櫃、

六月例

以十六日、○中略 大神宮司并禰宜正道就石疊跪侍、○中略 爾時大神宮司登上版位、祭告刀申、○中略 即禰宜、○中略 內院參入、次大神宮司、○中略 畢即罷出、先大神宮司、次禰宜、次大物忌、次大內人等然就本版位、

〔江家次第 十二神事〕伊勢公卿勅使

參豐受大神宮第一鳥居下、○中略 禰宜等候第三御門內西版庭中石壺座、(東上北面)公卿座在王座前、(中帖云々)

次中臣進著前石壺座左路右、申宣命、

〔權記〕寬弘二年十二月十五日己丑、參豐受宮、○中略 使以下居石壺、中臣申告文、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、午時參著外宮、○中略 予使々參進著御子宿屋、(敷中帖、爲予座、是使用儀也、)時時著前庭石壺云々、

〔愚昧記〕安元三年九月十五日辛酉、參外宮、○中略 中臣○中 卜部○卜 著前石壺、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事并用物事

造宮使奉物

御琴壹隻、燈提伍具、御調納辛櫃壹合、御鎰納櫃壹合、幣帛机貳具、御床肆具、(大宮料三具、高宮料一具、)天井壹條、平釘壹佰伍拾隻、短御床貳具、御饌殿奉御机貳具、(已上二種物御饌殿用物)

一新造宮御裝束用物事

止由氣大神御裝束物

壁代生絁帷貳帳、(高各一丈一尺、各廿一幅、)上張帳壹張、(長二丈四尺三寸、八幅、)蚊屋帷貳張、(高一丈四寸、天井料、一張十四幅、一張七幅、)御幌帳壹條、(長七尺三寸、四幅、)三殿戶上間張帳壹條、(長八尺二寸、二幅、)五寶殿二間御帳貳條、(長各八尺、各四幅、已上生絁、)御床於敷細布御帳壹條、(長八尺、四幅、)帛御被壹具、(長八尺、四幅、)刺車錦御被壹具、(長八尺、四幅、)御船代內敷小綾帛御被二具、(別長各八尺、二幅、)於覆帛御被一具、(長八尺、四幅、)次小綾紫御被壹具、(長八尺、四幅、)次刺車錦御被壹具、(長八尺、四幅、)緋錦

念行(天平、奈)故是以吉日良辰(平)撰定云々、○中略

左辨官下伊勢大神宮司

仰下豐受大神宮禰宜等注申爲去月廿二日洪水流損正殿下所在天平賀堝幷荒垣等事

天平賀四百八口堝七口

件天平賀流寄瑞垣內正殿東南西方也、其中二十九口破損歟、○中略

右得彼宮司去月廿八日解狀偁、豐受宮神主等今月廿三日注文偁、從今月廿二日午時、暴風吹、大雨降、同日丑刻洪水溢滿、○中略彼殿下之所在天平賀幷堝等所流寄瑞垣內正殿東西方也、○中略抑天平賀者、廿年一度御遷宮之時、造調所供奉也、○中略言上如件者、右大臣宣、奉勅件天平賀任去々年內外宮例、且洗淨見在、且改作破損、早可安置、○中略宮司宜承知依宣行之、

保安四年九月二日　小槻宿禰

中辨源朝臣

〔貞和御飾記〕天平賀外宮八百口(或云、正殿七百口、保安以後八百口云々、)

心御柱四面大八口(四方各二口、圓形居、)

次八十口、(各一方二十口、圓形居之、)次隨員數圓形奉居之、三所宮各十五口、(○或説高宮十六口、一本作二十八口、)

造替六社神各五口、上下御井風宮北御門各五口、酒殿五口

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

二月例

年祈幣帛使參入(氏)幣帛進時行事

幣帛使與大神宮司共、神宮外院參入來、○中略大神宮司禰宜正道並雙分頭跪侍、使中臣東方石疊跪侍、

祭主神祇大副大中臣朝臣言上伊勢豐受大神宮正殿心柱朽損顚倒事

左大辨源朝臣定申云、件心柱者、後々遷宮之時、爲不令違古宮之跡云云、然則重被尋神宮柱根自殘基跡不可有誤者、雖不改立何事之有哉、加之應和遷宮之時、有立誤件柱之事、被時相定不被直立、臺代之間、臣下其人也、被行之趣可有由緒歟、

〔神宮雜例集二〕天平賀事

一天平賀破損例

保安二年八月廿五日夜、洪水、外宮正殿下深二尺湛入心柱邊、所居天平賀內四百五十一口、瑞垣內乾角爾流寄、又令破損者、而件天平賀以舊可安置歟、將可奉造改歟之由、祭主親定卿宮司公隆等上奏之處、卽被行御卜之後、同年十月十六日被謝申、

〔百練抄五鳥羽〕保安二年九月六日、諸卿定申豐受大神宮爲洪水流損事、正殿下天平賀流損事、

〔神宮雜例集二〕天平賀事

一天平賀破損例

保安四年八月廿二日大風洪水、外宮正殿下深二尺八寸也、天平賀四百八口、塌七口、瑞垣內正殿東南西方爾流寄也、其中廿九口破損、○中略于時宮司國宜上奏、同年九月二日宣旨、右大臣宣、奉勅件天平賀、任去々年內外宮例、且洗淨見在、且改造破損、早可安置、○中略

保安二年十月十六日、宣命云、

天皇我詔旨度云々申久、豐受大神宮神主等解狀爾、去八月廿五日、爲洪水爾正殿下乃天平賀瑞垣乃邊爾流出多利、而件天平賀以舊天可安置歟、將新可造改歟止言上利、此旨乎聞食天、恐畏利大坐止古甚於屋薄久、過於臨深多利、爰仰神祇官陰陽寮等天令卜問給爾、官波以舊天安置牟倍可宜志止、寮波造改天供進牟倍可宜志止申利、事在兩端天、晤難一決志、但於神事者龜兆乎爲先、仍如本爾以舊可安置志止所

〔江家次第十二神事〕伊勢公卿勅使

宮司三人先行、渡宮川、參豐受大神宮第一鳥居下、(御馬人者脫之、此内弓箭不入、大刀不著、)下馬行列、(中略)至第二鳥居下、內人二人(一人持大麻、一人持鹽湯、著衣冠、)灑鹽湯、獻大麻、(無意氣)畢進入、(中略)入於第三鳥居、立幣案於第二御門外、

〔文保記〕宮中禁制物事

弓箭兵仗大刀、男女念珠本尊持經、不持入二鳥居之內、(但僧尼念珠威儀之上、不入第三鳥居中之間、非制限矣、)

〔大神宮諸雜事記一〕貞觀十五年九月十六日、朝仁外宮一鳥居之許、新髑髏犬咋持來、(下略)

〔權記〕寬弘二年十二月十五日己丑、參豐受宮、於一鳥居外解劍、二鳥居大麻鹽湯、

〔大神宮諸雜事記二〕長曆二年九月十六日、豐受大神宮御祭仁、三員司依例供奉、但祭主波一鳥居之許仁志神拜畢天、祭庭仁不參志天、直仁參入於大神宮之由云云、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、午時參著外宮、先於一鳥居外下馬解劍、留隨身、(中略)至二鳥居外、內人二人出來、先一人取大麻、(無意氣了)次一人灑鹽湯、次入三鳥居一門、(不解劍、超入也)

〔愚昧記〕安元三年九月十五日辛酉、參外宮、於一鳥居外下馬解劍、留此所、共人之中、有兵衞三四人、可解劍之由同下知了、(中略)至第二鳥居下、大內人二人著衣冠、一人奉大麻、立予取之意氣、一人又持鹽湯、(入小土器、)以榊葉灑之三度了進入、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事幷用物事

限常廿箇年、一度遷奉新宮造之、(中略)取吉日、爲正殿心柱造奉、率大內人一人、諸內人等戶人夫等矣入杣、(中略)其柱名曰忌柱、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

舊跡相違事

天仁三年正月卅日陣定文云

〔古老口實傳〕一宿館事
古人云、上代宿館者、鳥居内大庭也、中古者、外御馬屋邊中塀内也、近古者、中外並樹邊也、
〔外宮儀式解 四〕禰宜齋殿ハ、〇中略中世記錄ドモニ、齋館トモ、神館トモ、宿館トモイヘリ、
〔新任辨官抄〕神宮事
外院　御倉三宇、在二殿後一
〔止由氣宮儀式帳〕齋館壹院
御饌炊殿壹間、長二丈二尺、廣一丈二尺、高八尺、
大内人三人宿館屋參間、長各二丈、廣各一丈二尺、高各八尺、
物忌五人宿館屋伍間、長各二丈、廣各一丈二尺、高各八尺、
齋火炊屋伍間、長各一丈六尺、廣各一丈、高各八尺、
物忌父小内人等宿館屋伍間、長各二丈、廣各一丈、高各八尺、
倉一宇、長一丈六尺、廣一丈四尺、高一丈、納二木一
防往籬壹重、週長十五丈〇十五恐有二誤脫一
總宮廻防往籬貳佰漆拾餘丈、禰宜内人等戸人夫持二造二百丈一、多氣郡井神戸人夫、持二造七十餘丈一、
馬集廐貳間、長各四丈、廣二丈、高八尺、
幣帛御馬𩥭廐壹間、長二丈、廣一丈二尺、高七尺、
〔新任辨官抄〕神宮事
外院　忌屋殿、有二錦東一、調二備御饌一之所也、　子良館、在二忌屋殿北一
〔大神宮諸雜事記 一〕天平勝寶元年己丑八月十一日、豐受宮物忌父神主世異加神館一宇燒亡、

〔豐受皇大神宮殿舍考證〕解齋殿者、總稱此三殿、〇一殿、主神殿、司殿、九丈殿、也、

〔神廷紀年六東山〕元祿四年、此年外宮五丈殿成、桂昌院〇德川綱吉母再興、五丈殿、一名一殿、公卿使中臣以上居、

〔止由氣宮儀式帳〕齋內親王御膳〇膳下恐有脫字一院、

御膳殿壹間長二丈、廣一丈二尺、高八尺、

御炊殿壹間長一丈八尺、廣一丈二尺、高八尺、

廻板垣壹重長八丈、高八尺、

御酒殿壹院

御酒殿壹間長二丈五尺、廣一丈六尺、高九尺、

務所廳壹間長三丈五尺、廣一丈六尺、高一丈、

盛殿壹間長三丈、廣一丈六尺、高九尺、

禰宜齋院〇院一本作殿壹間長三丈、廣一丈六尺、高九尺、

齋火炊屋壹間長一丈六尺、廣一丈二尺、高八尺、

祭大炊屋壹間長三丈五尺、廣一丈六尺、高九尺、

倉二宇長各一丈六尺、廣各一丈四尺、高各一丈、

一宇納神酒幷御贄等類

一宇納雜器幷米鹽等類

厨屋壹間長三丈、廣一丈六尺、高八尺、

防往離壹重籬長卅五丈

〔古老口實傳〕一酒殿者、神居殿也、故預出納外、雜人輙无出入者也、又人用雜物等不納置之、祭器置方角在之、

〔永正記　下〕御饌供進最中、不神拜也、禰宜并子良等退出程、一殿邊皆候也、於外宮者、內御馬屋鳥居邊皆候也、

〔新任辨官抄〕神宮事
外院　御輿宿齋王御輿宿也

〔中右記〕長承二年五月廿一日、入夜祭主三位來、中略依御氣色問事、內宮禰宜等申請、御輿宿屋可被加今一間事、元三間也、就中外宮四間也、下略

〔類聚大補任觀德〕建曆元年、豐受大神宮遷宮、中略車宿舍壹宇、五間一面檜皮葺嘉應以後新立、元四間也、今度加一間、增高、任例募別功造進之、

〔止由氣宮儀式帳〕直會所壹院
五丈殿貳間一長四丈、廣一丈六尺、高一丈、一長六丈、廣二丈、高一丈、
九丈殿壹間廣二丈、高一丈、
直會御門長一丈三尺、廣一丈、高一丈、

〔新任辨官抄〕神宮事
外院　一殿一宇五ヶ間、四度幣、井公卿使中臣以上居之、有酒肴□□□□□□□□□
神祇官殿忌部卜部着之　九丈殿神部以下着也
已上檜皮葺無板敷

〔豐受皇大神宮殿舍考證〕主神司殿一宇、中略按倭名抄云、神祇官、加美豆加佐主神司、以豆岐乃美夜乃加美豆加佐以訓同、主神司殿、作神祇官殿、

〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭十二月准此、中略使及宮司以下、中略退就解齋殿、給酒食、

リシナラン、而シテ嘉應中始造立ト云フハ、蓋シ久シク中絶ノ時ニ於テ、其再興ヲ創立ノ如ク誤リシニ過ギザルベシ、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

玉垣貳重一重廻垣長六十二丈、一重廻長九十六丈、高各一丈、

板垣壹重廻長百十六丈、高一丈、

蕃垣參重長各二丈、

〔中右記〕天永二年四月九日、裏書早旦卯辰刻、俄大風大雨、後聞、依件風、伊勢豐受宮蕃垣御門顚倒、

〔止由氣宮儀式帳〕御倉壹院

倉參宇長各一丈六尺、廣各一丈四尺、高各一丈、

一宇納正殿寶殿御鑰

一宇納懸稅幷御田苅稻

一宇納鋪設

廻玉垣壹重廻長卅丈、高一丈、

〔新任辨官抄〕神宮事

外院　御稻御倉一宇在巽角

〔大神宮諸雜事記〕一天平勝寶六年六月廿六日夜、豐受宮御稻御倉之放棟天、盜取御稻十八束畢、○下略

〔古老口實傳〕一調御倉白蛇出現事、一禰宜恠異也、

〔止由氣宮儀式帳〕御輿停殿壹間長三丈四尺、廣一丈五尺、高一丈、

御厩壹間長三丈五尺、廣一丈六尺、高一丈、

齋內親王殿壹宇長四丈、廣二丈、高一丈、
女孺侍殿壹間長四丈、廣二丈、高一丈、

〔新任辨官抄〕神宮事

外玉垣內

御子殿二宇南面在東西、六月九月十二月御祭、齋王參御此東殿、

〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭十二月准此、〇中略十六日平旦、齋內親王參入度會宮、至板垣門東頭下輿、入外玉垣門、就座於東殿、門內東西各有一殿、東殿設齋內親王座、左右設命婦等座、西殿設女孺等座、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、午時參着外宮、〇中略予〇藤原宗忠使々參進、着御子宿屋、

〔神境紀談〕二齋王候殿女孺侍殿

此二字トモニ絕テ久シクナリヌ、然ルニ大樹君〇德川綱吉ノ母堂桂昌院殿〇本庄氏御寄進トシテ、齋王候殿一宇ヲ再興ナサレ、元祿五年造營ノ功成就シケリ、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

御門肆門長各二丈、廣各一丈五尺、高各一丈、
瑞垣壹重周長五十丈、高一丈、
宿直屋參間長各一丈四尺、廣各八尺、高各六尺、

〔類聚大補任順德〕建曆元年、豐受大神宮遷宮、〇中略今度造加宿直舍壹宇、四間萱葺嘉應始造立、建久不造之、今度可造之由依被仰、募別功造進之、

〇按ズルニ、宿直屋ハ儀式帳ノ後ハ新任辨官抄ニモ見エズ、又兵範記ニ載スル仁安炎上ノ內外院殿舍中ニモ其名ヲ記セザルナリ、蓋シ當時各自ノ齋館ニテ宿衞シ、復タ宿直屋ヲ要セザ

〔古老口實傳〕一宮中掃治之間、正殿寶殿瑞垣等仁生付懸玉葛不掃退者也、神明御饌在之云々、故近則建長正殿、文永同正殿東寶殿棟持柱南面瑞垣仁生懸玉葛、守舊記不被拂退之也、玉葛者、皇帝御代、天地无窮長久瑞吉葛也、因以神籬爲飾緣也云云、神歌詠分明也、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

御饌殿壹宇長一丈、廣一丈、高一丈、

〔新任辨官抄〕神宮事

荒垣之内

御食殿一宇也、如寶殿有千木堅魚木、毎日二度御膳供之屋也、朝未明夕乘燭程供之、内宮御膳同供于外宮、此殿也、

〔神宮雜例集 一〕二所大神宮朝夕御饌事

一供奉始事○中略

雄略天皇御夢爾皇大神乃敎覺給久、○中略即度會乃山田原爾、荒御魂宮和御魂宮造奉天、令鎭理定理坐、其宮之内艮角御饌殿乎造立天、其殿内爾、天照坐皇大神御坐奉東方、止由居大神御坐奉西方、

〔大神宮諸雜事記 二〕長暦四年七月廿六日夜子時、西風俄ニ吹テ、豐受大神宮正殿東西寶殿瑞垣御門等拂地顚倒給、○中略仍御氣殿ヲ忽ニ洗淨天、以同廿七日戌時天、正殿幷三所相殿乃御體乎奉遷鎭畢、○中略外幣殿乎洗淨天朝夕御膳乎奉備、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

幣帛殿壹宇長一丈、廣一丈二尺、高一丈、

〔新任辨官抄〕神宮事

外幣殿一宇也、在于正殿後、瑞籬玉垣等外也、舊損神寶幣帛納此殿、作樣如東西寶殿、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

御床肆脚料　貳脚料　花形釘肆拾陸隻（径漆分、長壹寸、）壺樋尻捌口（弘肆寸、厚参寸、高参寸、）肱金捌口（長各壹尺漆分、片方陸寸、片方肆寸漆分、弘壹寸玖分、壺花形打堺、穴各拾肆口、）蟹目釘佰拾参隻（長各壹寸、頭径壹分、中、）貳脚料　平金参拾貳隻（枚別各壹寸、足壹、）足金捌枚、（長各捌寸、弘貳寸、○中略）

東寶殿　千木端金肆枚（長壹尺伍分、弘伍寸、貳分、花前参寸伍分、）蟹目釘参拾貳隻、千木肆枚、鋪貳拾肆口（径参寸、）搏風鋪拾捌隻、（径参寸、）戸牒釘覆金肆枚（径各参寸、肆口、花崎、）雉楯金壹枚（長肆寸、弘参寸、在二裏金一、）肱金貳枚、（在二位金貳枚一、背長壹寸、根壹寸、）久留留木鎰貳隻、（背長貳寸参分、壺長貳寸貳分、根長貳寸伍分、）同鎰根覆平金肆枚（径各壹寸陸分、）蟹目釘拾貳隻、

西寶殿　千木端金肆枚（長壹尺伍寸、弘伍寸、貳分、花前参寸伍分、）蟹目釘参拾貳隻、同鋪貳拾肆口（径参寸、）搏風鋪拾捌口（径参寸、）戸牒木釘覆金肆枚（径参寸、）雉楯壹枚（長肆寸、弘参寸、在二裏金一、）肱金貳隻（在二位金貳枚一、）久留留木鎰貳隻（背長貳寸参分、壺長貳寸貳分、）

同鎰根覆金肆枚（径壹寸陸分、）蟹目釘拾貳隻、

瑞垣南御門　搏風鋪拾捌隻、（径貳寸伍分、）千木端金肆枚、（寸法同二東西寶殿一、釘参拾貳隻、）戸牒釘覆金伍枚（径参寸、）千木鋪貳拾肆口、（径参寸、）内外長押鋪肆隻、（径貳寸伍分、）内外冠木鋪肆隻、（径貳寸伍分、）肱金貳隻（在二位金貳枚一、）貫木鎰貳隻、（肩伍寸、高参寸、厚伍分、肩厚肆分、位金壹寸六分、）

同北御門　鋪捌隻、（径参寸、足壹鑄立、）牒釘覆金伍枚（径貳寸、）肱金参隻、位金参枚、

蕃垣御門　鋪貳拾貳口、（径参寸、）牒釘覆金伍枚、（径参寸、）肱金貳枚、

四御門　鋪参拾壹口、（径参寸、）牒釘覆金伍枚、（径参寸、）肱金貳隻、位金貳枚、

荒垣鳥居壹基、鋪拾捌隻、（径参寸、○下略）

○按ズルニ大神宮諸雜事記、康平二年六月廿四日ノ條ニ、造物所長上等下向、是則准二大神宮例一、豊受大神宮正殿御金物可レ被レ奉レ莊也、ト見エタレドモ、今其細目ヲ知ルニ由ナシ、其後正中御飾記アリト雖モ、之ガ全數ヲ見ルベキモノハ、獨リ此應永送官符アルノミ、故ニ茲ニ之ヲ掲載セリ、

蟹目釘參拾貳隻、同肆枝、鋪貳拾肆口、徑各參寸、足壹鑄立、堅魚木玖枝、左右端金拾捌枝、弘各壹尺玖寸、加波高參寸、蟹目釘貳佰拾陸隻、高欄肆、面玉貳拾肆顆、赤伍、白伍、青伍、黄伍、黑肆、高肆寸、徑參寸漆分、玉固釘貳拾肆隻、長各陸寸、以鐵作之、同玉上下位金肆拾捌枚、內貳拾肆枚、徑各陸寸伍分、陸花形貳拾肆枚、裏尾長漆寸伍分、弘肆寸伍分、蟹目釘佰隻、高欄鳥居丸桁端金拾管、長各伍寸伍分、徑參寸陸分、花形埒、蟹目釘肆拾隻、長各壹寸、頭壹分半、高欄中桁端金拾枚、長各陸寸貳分、弘捌寸、厚參寸漆分、花形打埒、枚別穴陸口、蟹目釘陸拾隻、長各壹寸、頭徑壹分半、同土居桁端金拾枚、長各陸寸伍分、弘漆寸肆分、厚肆寸壹分、花形打埒、蟹目釘陸拾隻、長各壹寸、頭徑壹分半、同長押肱金肆勾、長各壹尺陸寸肆分、片方捌寸貳分、弘漆寸壹分、勾別穴拾肆口、花形打埒、蟹目釘伍拾陸隻、長各壹寸、頭徑壹分半、同長押肱金肆枚、長各壹尺肆寸肆分、弘肆寸貳分、花形打埒、蟹目釘參拾貳隻、同泥障板鋪貳拾玖口、徑參寸、枚別足壹鑄立、同簀子敷釘覆平金佰陸拾隻、徑參寸壹分、枚別足壹鑄立、蟹目釘肆佰捌拾隻、長壹寸、頭徑壹分半、同泥障板肱金肆勾、長各壹尺伍寸、厚漆寸捌分、勾別穴拾肆口、花形打埒、蟹目釘伍拾陸隻、同鋪佰肆拾玖隻、玖拾貳口、徑各參寸、伍拾漆口、徑各貳寸壹分、同上瓜實釘貳拾肆隻、長各漆寸、弘各肆寸漆分、御橋鋪肆拾隻、徑參寸、隻別足壹鑄立、同橋踏板、左右端覆金貳拾貳隻、弘壹尺壹寸、厚伍寸、加波肆寸貳分、在參方打埒、蟹目釘貳佰貳拾隻、御橋開柱貳本、葱花貳枚、徑各壹尺壹寸、長各壹尺伍寸、御帳天井肆面打錢○錢恐鏤誤形釘伍拾貳隻、徑各伍分、枚別足壹打埒、中目固花形釘百肆拾隻、天井鈎金肆隻、長壹尺、鐶貳寸、同鈎金料耳金位輪金肆口、輪徑肆寸同組入中目固花形釘佰陸拾玖隻、同柱肆本、上下木尻金捌口、弘伍寸、厚肆寸、蟹目釘參拾貳隻、下木尻位金肆枚、蟹目釘貳拾肆隻、天井土居木尻金拾陸口、蟹目釘陸拾肆隻、同壁持小長押釘覆鋪陸口、徑各貳寸壹分壁持間中釘覆平金拾枚、蟹目釘參拾隻、外壁持小長押間中釘覆平金拾隻、徑壹寸壹分蟹目釘參拾隻、壁角柱長押肱金肆枚、長各壹尺伍寸貳分、弘玖寸、花形打埒、蟹目釘伍拾陸隻、同角柱長押釘覆鋪拾肆口、徑參寸、口別足壹鑄立、同角柱上小長押肱金肆枚、長壹尺貳寸陸分、弘貳寸肆分、花形打埒、蟹目釘伍拾陸隻、長各壹寸、頭徑壹分半、同小長押釘覆鋪拾肆口、徑貳寸壹分、足壹鑄立、板敷釘覆金佰貳拾陸隻、徑貳寸壹分、足各壹鑄立、蟹目釘參佰貳拾捌隻、蟬形木覆平金貳拾肆枚、徑貳寸貳分、穴各參、蟹目釘漆拾貳隻、簀子下桁釘覆金捌隻、徑貳寸伍分、穴各參、蟹目釘貳拾肆隻、甍覆板左右喬金貳筋、長各伍丈陸尺、弘肆寸、貳尺金伍拾陸枚、蟹目釘肆佰隻、泥障板貳枚、左右喬金貳筋、長各伍丈肆尺、弘參寸捌分、貳尺金伍拾四枚、蟹目釘肆佰隻、

〔應永廿六年神寶送官符〕太政官符　伊勢大神宮司

正殿金物　內御帳肱金佰伍拾勾、背長各壹寸、弘參分、茎長壹寸、厚各貳分半、足長壹寸、位金佰伍拾枚、徑各壹寸貳分、戸引手金貳枚、鐶徑各參寸陸分、引手位金貳枚、花形徑各參寸、引手內塞覆花形金貳枚、徑各壹寸玖分、足二鋲立、枚別穴參口、蟹目釘陸隻、長各壹寸、頭徑壹分半、菊形貳、戸鎰肆勾、背長各貳寸肆分、頭伍分、茎長參寸、厚肆分、足長壹寸漆分、弘伍分、位金捌枚、頭花形徑各壹寸伍分、蟹目釘貳拾肆隻、長各壹寸、頭徑壹分半、鎰外覆花形平金捌枚、徑各壹寸玖分、足二鋲立、蟹目釘貳拾肆隻、長各壹寸、頭徑壹分半、雉楯金一枚、長六寸貳分、弘三寸六分、穴長二寸貳分、弘七分、蟹目釘拾貳隻、長各壹寸陸分、頭徑壹分半、同裏金壹枚、寸法同、面金鍱釘覆金伍枚、徑各貳寸伍分、足長各參寸、鋲立、丸頭、但花形、同裏金伍枚、徑貳寸、殿戸上下閾鋪捌口、徑各參寸、足長各貳寸鋲立、戸冠木端肱金肆枚、長壹尺玖寸、弘捌寸、蟹目釘肆拾捌隻、戸圓座金貳枚、口徑各肆寸伍分、各穴伍口、蟹目釘拾隻、戸下卷金貳口、徑各貳寸、高伍分、厚參分、同上卷金貳枚、長各陸寸伍分、弘貳寸、戸津布利貳口、徑貳寸參分、アツサ二寸タラズ、戸間景貳枚、方伍寸、蟹目釘貳拾捌隻、戸左右脇柱小鋪貳拾隻、徑各貳寸壹分、幌懸鐶參枚、長各壹寸伍分、穴徑參分、頭徑陸分、位金參枚、徑各壹寸貳分、鏁壹具、管長肆寸捌分、管徑壹寸漆分、自舌茎本至勾壹寸肆分、柱雄徑伍分、根雄長壹尺二寸、鏁打立貳枚、頭徑壹寸參分、足本弘壹寸、穴弘陸分、茎長肆寸伍分、足長參寸伍分、弘陸分、厚貳分半、位金貳枚、徑各貳寸伍分、花形、覆平金貳枚、徑壹寸伍分、蟹目釘陸隻、匙壹枚、長參尺陸寸貳分、柄長伍寸伍分、柄本弘捌分、柄本末徑壹寸貳分、鐶長捌分、自柄至勾長伍寸捌分、勾金弘漆分半、自中至下弘漆分、目貫茎形、鑰壹勾、長壹尺壹寸捌分、弘捌寸、棟端金貳枚、長各漆寸貳分、弘捌寸貳分、穴各捌口、蟹目釘拾捌隻、長各壹寸伍分、頭徑壹分半、桁端金肆枚、長各漆寸貳分、弘捌寸貳分、枚別穴捌口、蟹目釘參拾貳隻、垂木端金漆拾貳枚、長各參寸捌分、弘參寸伍分、枚別穴肆口、蟹目釘貳佰捌拾隻、長各壹寸伍分、頭徑壹分半、搏風端金肆枚、長貳尺、弘伍寸陸分、穴各捌口、蟹目釘口數〇拾肆隻、長貳寸、頭徑壹分半、鞭懸木桶尻拾陸枚、徑各貳寸漆分、高各參寸參分、蟹目釘參拾陸隻、長各壹寸伍分、搏風下鋪拾捌口、片方玖口、徑各肆寸、足壹鋲立、鏡形木覆鋪肆拾四口、徑各貳寸壹分、足壹鋲立、妻塞押木打鋪肆拾口口、徑各貳寸伍分、足壹鋲立、足長各貳寸、千木肆支打鋪貳拾肆口、徑各參寸、足壹鋲立、甍覆板壹枚、左右端金貳枚、長各貳尺壹寸陸分、厚漆寸伍分、蟹目釘貳拾隻、同面裏端金肆枚、長貳尺壹寸陸分、弘肆寸、蟹目釘肆拾隻、同板左右喬金貳筋、長各伍丈陸尺、弘肆寸、蟹目釘佰隻、泥障板貳枚、左右口金肆枚、弘各貳尺壹寸、厚參寸捌分、蟹目釘肆拾隻、同面裏端金捌枚、長貳尺壹寸陸分、弘肆寸、蟹目釘捌拾隻、貫木玖枝、左右端金拾捌枚、弘各肆寸貳分、厚各參寸貳分、蟹目釘漆拾貳隻、千木肆枝、端金肆枚、弘壹尺貳寸、厚伍寸陸分、花菊肆寸伍分、

外幣殿
正殿
西寶殿
瑞垣南御門
蕃垣御門
内玉垣南御門
東披御門
宿直舍
中重鳥居
第四御門
齋王候殿
冠木鳥居

豐受大神宮殿舍之圖 嘉永二年御造替

正殿（一字也、御殿也、南向卯酉屋也、）相殿（神各御坐于正殿中、○中略）

正殿白木也、有木尻金物、餘不然、千木堅魚木皆在、千木如搏風、端如鴈俣、堅魚木以丸木切天、横置棟上也、正殿以下皆以萱葺之、以薄穗薍葺之也、厚二尺餘云々、瑞籬之中、正殿東西寶殿三字有之也、

〔百練抄（四 後朱雀）〕長久元年七月廿六日、大風、伊勢豐受大神宮正殿、并東西寶殿、瑞垣悉以顛倒、

〔大神宮諸雜事記（二）〕同六月（○康平二年）廿四日、造物所長上等下向、是則准大神宮例、豐受大神宮正殿御金物可被奉莊也、仍寸法爲注所被下也、造宮使元範朝臣所申請也、 九月十二日、宮莊使參宮、辨代従五位下行神祇少副大中臣朝臣公輔、右少史惟宗朝臣員國、史生官掌木工長上等、任宣旨奉莊、兼又獲勘畢、但正殿乃金物、并四面高欄御階男柱等、今度初所被奉莊也、元範朝臣爲造宮使所被申加也、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

寶殿貳字（長各一丈六尺、廣一丈二尺、高一丈、）

〔新任辨官抄〕神宮事

東西寶殿（二字也、在正殿之前于午也、二丈許立棟持柱、以板組上、舊神寶取納西寶殿、幣絹奉納東寶殿、幣錦奉納正殿、東西寶殿是倉歟、可尋、在瑞籬内、）

〔延喜式（四 伊勢大神宮）〕六月月次祭（十二月准此、○中略）

右月十六日祭度會宮、（○中略）先使中臣申詔刀、次宮司宣祝詞、訖物忌内人等舁幣帛案、入奉置瑞垣内財殿、

〔中右記〕保延元年八月六日丁未、今日又軒廊御卜云々、上卿中宮權大夫宗能、（○中略）外宮東寶殿千木一支俄折落事、神祇官卜云、依神事違例、可有公家御愼歟、寮占云、依神事不浄所致之上、恠可有病事歟、

正體御船代壹具（長六尺、廣二尺四寸、）
御坐壹基（徑一尺七寸、）
相殿神御船代貳具（長四尺、廣一尺五寸、）

〔寶永外宮正遷宮記附錄〕廳宣　人長內人弘虎等可早令知當宮黃金御樋代御再興由事（中略）永祿六年、偶行正遷宮、改替御樋代、及天正遷宮、始不改御樋代、蓋誤用假殿例乎、從是以來、徒仍永祿古物、百五十年于茲、慶長也、寬永也、慶安也、寬文也、元祿也、自經五度遷宮矣、今般愁訴之于公所、遷宮御奉行明察、神遷專要一存于此、辱蒙台命、以好金改替之、（中略）

寶永六年八月一日

禰宜度會神主（判署名以下略）

起原

〔止由氣宮儀式帳〕一等由氣大神宮院事（今稱度會宮、在度會郡沼木鄉山田原村、）
天照坐皇大神、始卷向玉城宮御宇天皇（垂仁）御世、國國處處大宮處求賜時、度會乃宇治乃伊須須乃河上乃（○乃字恐誤）大宮供奉、爾時大長谷天皇（雄略）御夢爾誨覺賜久、吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志宥眞利坐奴、然吾一所耳坐波甚苦、加以大御饌毛安不聞食坐、故爾、丹波國比治乃眞奈井爾坐我御饌都神等由氣大神乎、我許欲止誨覺奉支、爾時天皇驚悟賜氐、卽從丹波國令行幸氐、度會乃山田原乃下石根爾宮柱太知立、高天原爾知疑高知氐、宮定齋仕奉始支、是以御饌殿造奉氐、天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕大御饌乎、日別供奉、（○又見神宮雜例集）

殿舍

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院
正殿壹區（長三丈、廣一丈六尺、高一丈、）
同殿坐神參前（稱相殿、中

〔新任辨官抄〕神宮事

鏡に係り、今卷向穴師宮云々祭大神也は、子鈴一口に係れる義なり、故當奉大神ト云々解祭大神ト也さ、トてふ辭をよみつけたるなり、然れば一鏡は登由宇氣神の御靈實に坐し、子鈴一口は神名式に大和國城上郡卷向坐若御魂神社とある神の御靈實になむ坐しける、○中略若御魂神とは豐宇氣神の御祖稚產靈神を申せること灼ければ、子鈴一口は此神の御靈體に坐しを、卷向に坐せ奉り給ひ、一鏡を豐宇氣神の御靈實に坐しを、後に外宮の度相に鎭坐さしめ給へるなり、

〔倭姬命世記〕豐受大神一座御靈御形眞經津鏡坐、圓鏡也、神代三面内也、○中略

相殿神三座大一座、天津彥彥火瓊瓊杵尊、御形鏡坐、前二座、天兒屋根命、形笏坐、太玉命、形寶玉坐、大左方坐、前二座右方坐、

〔御鎭座本紀〕泊瀨朝倉宮御宇○中略戊午秋九月望○中略依天照大神御託宣○中略天照大神相殿坐神二前、止由氣宮相殿神皇孫命奉陪從、故號止由氣宮相殿而東西坐給、東天皇孫命一座、西天兒屋根命、靈形笏天津賢木執副坐、太玉命靈形瑞曲玉坐、但東御靈常西相殿並坐給也、自爾以往以天手力男神、萬幡豐秋津姬命、爲天照皇大神乃相殿神坐、元是號御戶開神、

〔神名秘書〕相殿神三座

左方天津彥彥火瓊瓊杵尊爲大靈御形鏡坐

右方天兒屋命爲前靈御形笏坐　太玉命爲前靈御形瑞曲珠坐

件神、延喜十一年正月廿八日官符、預四度案上幣、大神宮相殿神與同日符也、

〔大日本史神祇六〕按儀式帳、竝載配享三神御被御衣外、又載御裳九腰、可以證其爲女神、然神名莫所考、而世記及鎭座本紀、神名秘書竝云、瓊瓊杵尊在左、以鏡爲神體、天兒屋天太玉二神在右、兒屋以笏、太玉以玉、竝爲神體、蓋出于後人附會、故今不取、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事幷用物事

造奉物

祭神神體

燒失す、此火宮山にうつり、御正殿も危く、諸人防ぎかねたり、此後神宮より、〈○中略〉御奉行〈○山田奉行〉石川政長朝臣に、告訴ふ、又入日市場鄕內よりも是と爭ひて訴ふる旨あり、正保四年丁亥十月廿日、政長朝臣江府に下り給ひ、翌慶安元年四月に御歸りあり、同年五月十六日に豐川の繩張あり、川端の家屋拾六軒、みそや垣外の家屋敷五十一軒餘召し上られ、其頃一禰宜常晨の宿館此邊にありて東西卅四五間、南北拾四五間あり、此宿館の壁より南へ五間目に繩を張道になし、南を豐川幅三間にほらせ、川より南に殘りたる地は宮山へかへし給ひ、宿館の屋敷は盡く道になり、宮山になりて一坪も殘らず、〈○中略〉同月〈○七月〉十二日に成就す、是迄は藤社邊まで人家たちならび、其あたりに世儀寺あり、北御門一鳥居も皆宮地と人家とたちならび、境目分明ならざりしを、此時始めて政長朝臣豐川の幅を三間に定め、川端に幅五間の新道を作り給へり、慶安元年より廿二年を經て、寬文十年桑山丹後守貞政朝臣御奉行〈○山田奉行〉の時、山田總中火災の大變ありしかば、〈○中略〉翌寬文十一年八月、北御門より阪の世古まで宮中〈○宮域〉近き人家を大道より十間ばかりづゝ退け給ふ、坪數三千餘坪なり、〈○中略〉此時世儀寺も今の地に退け給へり、翌寬文十二年三月比より始て北御門橋より阪之世古迄土手を築堀を堀らせ給ふ、〈○中略〉今の百間堀なり、

〔延喜式〈四伊勢大神宮〉〕度會宮四座

豐受大神一座

相殿神三座

〔古事記〈上〉〕登由宇氣神、此者坐外宮之度相神者也、

〔釋日本紀〈七述義〉〕大倭本紀一書曰、天皇之始天降來之時、共副護齋鏡三面子鈴一合也、注曰、〈○中略〉一鏡及子鈴者、天皇御食津神、朝夕御食夜護日護齋奉大神、今卷向穴師社宮所坐解祭大神也、

〔古史徵〈四下〉〕一鏡及子鈴者云々は、甚紛はしき書ざまなれど、熟視れば天皇云々齋奉大神は一

豐受大神宮

禰宜從五位下度會神主宗房（○此他人名略）

官使　右史生笠政光

左辨官下伊勢大神宮司

應早令壞退大神宮司言上豐受大神宮近邊人屋等事

右得大神宮司今月十五日解狀偁、豐受大神宮禰宜同月四日注文偁、內人重松之住宅、從神宮大垣之外、戌亥方去二町餘許也、而今月三日巳時許、不慮之外燒亡已畢、而彼時北風頻吹之間、其炎不及神宮哉、抑去年十二月、權神主兼輔住宅燒亡之時、其炎殆依可及神宮、且任祭主先日下知、可壞退神宮御所近邊人宅之由、召仰住人等、且注進其由、先畢、而于今未壞退之間、又有此火事、彌以其恐不少、仍爲恐後日慮外事、重注進如件、仍相副言上如件者、大納言源朝臣雅通宣、奉勅宜令下知神宮壞退者、宮宜承知依宣行之、

長寬三年（○永萬元年）二月十八日　大史三善朝臣

少辨藤原朝臣

〔古老口實傳〕一宮中鳥居內、吐唾等事、用疊紙也、

一宮地幷宮山樹等採用事、一切禁之、違式罪其如何、

一宮道竝樹內、雜人等往返事、從昔禁之、（樵夫市人田夫野人獵師狩人）

一宮中近邊、西北在家門戶大道、高聲念佛金口音等禁之、

一山田大道、不淨人幷惡行犯人等不通之、河北道通之、

（永久長寬仁治制符）

一癩病者、神宮四至內居住、幷往反禁制之、

〔山田雜記〕正保三年丙戌十二月四日の夜檜垣兵庫家より失火、阪之世古、横橋、みそや垣外（○何レモ場名）

三日言上、被判偁、宮四至內、不可有公驗私地、早勘制者、而猶詐作不止、又違四至內、南方限山、無有人宅、東西去宮三四町程、此內居住百姓、或時產穢、或時死穢、舉哀葬送、此則可禁制之狀、司符度々亦々畢、爰去延喜十九年以往、穢事不紀之怠、屢被勘當宮司神主等、望請准大神宮例、將被定置遠近四至、但汚穢之時、郡司行事、出四至外者、司加覆勘、所申有實、仍言上如件、望請官裁、依件定以嚴神事者、官依解狀、下符如件、宮司宜承知、立彼四堺牓示、不可令致汚穢、符到奉行、

伯大中臣朝臣安則　　大祐齋部□□
大副大中臣朝臣奥生　　少祐大中臣正廉
少副大中臣利世　　大史直助鑒
延長四年四月十一日　　少史戶□□□

實檢

言上豐受大神宮四至內穢物有無幷不信不淨等事

右去月十五日宣旨偁者、同月十七日右大辨仰偁、只可被實檢社頭也、四至之內、可及數日歟者、〇中略抑當宮近四至、自神宮大垣外、四方各四十丈也、其旨載延長四年四月十一日神祇官符、其內人宅可禁斷之由見于同符、〇中略而東方者、道路江河、南方者、山岳巖谷、敢無有人宅、西北方、本自有居住民烟、件在家等、若爲彼四十丈內者、可相當穢氣不信不淨歟、今尤可有其沙汰也、仍任禰宜等申狀、被定實之處、西方所在人宅七宇、既彼四至內也、若件輩死穢產穢之時、可爲不信不淨歟、就中月水之憚、連々不絕云々、早可被破却之由、禰宜等所申也、加之件四十丈之外、同西北方近邊居住之輩、自失火之時、尤有事恐、同可被禁制乎、〇中略神事違例、不信不淨御祟、若觸如此事歟、早可被禁遏之由同所申也、仍言上如件、

長寬元年九月一日

御池
池沼
宿館
第一鳥居口
御池
北御門口

豐受大神宮域内略圖（嘉永二年御造替）

〔百練抄 四後一條〕長久元年八月四日、諸卿定申大神宮外宮顚倒事、

〔廿二社本緣〕伊勢事

豐受乃宮仁皇乃字乎可被加之由、外宮連連申之、然而ドモ内宮乃支申ス事也、大方多外宮乃鎭座依天神勅有緣起ヨリ、式條仁在其乃法、末代乃今、皇乃字乎可登被加申請留、神慮難測事也、

○按ズルニ、外宮連々申之トハ、伏見天皇永仁中、外宮禰宜等上書シテ、舊例ニ依ルト稱シ、外宮ノ神號ニ皇字ヲ加ヘント請ヒシコト是ナリ、事ハ載セテ皇字沙汰文ニ詳ナリ、

〔延喜式 四伊勢大神宮〕度會宮四座、在度會郡沼木鄕山田原、去大神宮四七里、

〔止由氣宮儀式帳〕一等由氣大神宮院事、今在度會郡沼木鄕山田原村、

〔神宮雜例集 二〕神宮四至事

一外宮附四至内實檢幷人宅壞退事

神祇官符伊勢大神宮司

可定置豐受大神宮四至事

近四至、去神宮大垣外四方各肆拾丈

遠四至、東限赤峯井隨手淵、南限宮山、西限栗尾岡井山幡淵、北限宮河、

右得宮司去十一月廿七日解狀偁、彼宮神主解狀偁、謹檢按内、大神宮四至、東南西深山、無有人宅、北限宇治河者、其程去宮一里餘、此内不住人宅、禁制尤嚴、此則爲觸穢事也、此宮四至未被定置、但去寬平五年十一月廿七日司符偁、宮近居住百姓之宅有火失事、殆及宮内、自今以後、任格條、自宮四方各卌丈之内、居住人宅一切禁斷、若不擯出、科違格罪、見任解却、曾不寬宥者、自爾以來、爲近四至也、又依古老傳、件遠四至内、神宮神主領來尙矣、又空閑地等、諸人稱公驗地爭作、于時以延喜十九年九月十

〔古事記傳十五〕外宮は、師〔○加茂眞淵〕の祝詞考に、萬葉集なる登都美夜の例を引て、其は常の大宮の外に別に建置れて、行幸ある宮を云なれば、卽天皇の宮にして、別に主あることなし、然れば此伊勢の外宮も、五十鈴宮の外宮にして、たゞ天照大御神の宮なりと云れたるは、昔より比なき考にして、信に然ることなり、然れば元來有し天照大御神の外宮に、豐受大神をば鎭祭れるなり、〔中略〕さて外とは、もとより内に對ふ意の名にはあれども、内宮外宮と對云は、後のことにこそあれ、古に五十鈴宮を内宮と申すことは無かりき、〔凡て古書に、内宮と云ることは見えず、延喜式などにも、二宮と並擧たる處にも、五十鈴宮をば大神宮とのみ云り、天皇の御も、外宮をば外宮といへども、常の大宮を内宮と云ことはなければ、此も然あるべきことなり、(中略)とて又豐受宮を外宮と云ことも古書には此より外には見えず、式などにも度會宮、又豐受宮などのみあり、其は本は大神宮の外宮なれども、豐宇氣大神の御坐てよりは、其神の宮なるが故なるべし、延記には本よりの名を擧て、此神其宮に坐と云るなり、(中略)とて村上天皇の御世より、内宮外宮と申すことは、外宮と云稱の、古より有しに就て、新に内宮と云稱をも始めて、相對て云なり、然れば外宮と云稱も此時よりしては、正しく内に相對へたるにて、古の意とはいさゝか變れり、又内宮と云は、奥に坐よしにて、たゞ外宮に對言のみなり、然るに是を、却て外宮と云稱より古きことの如く心得、地名の字に治て、と一つに云る說などあれど非なり、内ウチと宇治とは、知チの音清濁異にして通はし云ることなし、混ふべきに非、〕

○按ズルニ内外宮ノ稱ハ、村上天皇ノ御世ヨリ始レリト云フハ誤ナリ、尙ホ大神宮稱號條ニ詳ナレバ參看スベシ、

〔新任辨官抄〕神宮解狀事

豐受宮禰宜等言上〔內外。宮。也〕

〔廿二社本緣〕伊勢事

大神宮仁內。外。宮坐。す。也、仍二所大神宮登申す、內乎波皇大神宮、外。乎。波。豐受大神宮登奉。號志、

〔西宮記九月〕十一日奉幣

勅召忌部中臣、〔先召二忌部一、奉三上自二南階一、拍手取レ幣、下授二之後取一歸又執二外。宮。幣一下立、〕

〔日本紀略十一條〕長保四年九月六日戊戌、於建禮門前大祓、依可明日被奉遣伊。勢。外。宮。遷宮神寶使也、

〔延喜式祝詞八〕豐受宮

天皇我御命以氐、度會乃山田原乃下津石根爾稱辭竟奉流、豐受皇神爾申久、下略

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年八月癸巳、改元神護景雲、詔曰、中略伊勢國守從五位下阿倍朝臣東人等我奏久、六月十七日爾、度會郡乃等由氣乃宮乃上仁當天五色瑞雲起覆天在、依此天彼形乎書寫以進止奏利、

〔延喜式伊勢大神宮四〕度會宮四座在度會郡沼木郷山田原、去大神宮四七里、

豐受大神一座

相殿神三座

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年四月辛丑、始賜伊勢大神宮禰宜季祿、其官位准從七位、度會宮禰宜准正八位、

〔日本後紀平城十七〕大同三年九月辛巳、勅伊勢大神幷度會二宮大内人各三員、元是白丁、自今以後、宜預外考幷把笏、

〔止由氣宮儀式帳〕一等由氣大神宮院事今稱度會宮、

〔延喜式伊勢大神宮四〕九月神嘗祭

度會宮

調荷前絹五十五匹四丈八尺、神宮五十四匹、高宮一匹、大社料四丈八尺、〇中略十斤稅八百束、神宮七百九十束、高宮十束、

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

正月例

以朔日卯時、禰宜内人物忌等、皆悉參集神宮、拜奉向南御門外、次高宮拜奉、向南遙拜、

〔古事記上〕登由宇氣神、此者坐外宮之度相神者也、

一同事成守護、本宮火炎者町在驅付ノ人夫、幷年寄共ニ爲相防候事、誠以万治以來之大變也、

〔文政回祿日記拔書〕四一廿九日〇文政十三年閏三月司家〇大宮司ヨリ使者ヲ以ヲ來ル

就荒祭宮燒亡、自廿六日廢朝候由被仰下候旨、横折一紙祭主下知如此、於神宮可令其沙汰給候、

恐々謹言、

後三月廿九日　　大宮司判

謹上内一三位殿

横折

自今日五箇日廢朝、被停音奏警蹕、被垂御簾、〇中略

一廿九日〇四月申刻頃司家ヨリ使者ヲ以到來、〇中略

横折一紙

依内宮回祿之事、爲被謝申、被發遣公卿勅使事、〇下略

〇

豐受大神宮

〔止由氣宮儀式帳〕度會宮禰宜内人等解申、止由氣大神宮儀式、幷禰宜内人物忌等年中行事事、〇中略

以前度會乃等由氣大神宮儀式、幷禰宜内人物忌等年中種々行事、錄顯進上如件、仍注具狀謹解、

延暦廿三年三月十四日

〔文德實錄二〕嘉祥三年九月甲申、豐受大神宮禰宜從八位上神主土主〇主一本作生等、授外從五位下、

〔百練抄四後朱雀〕長久元年七月廿六日、大風、伊勢豐受大神宮正殿、幷東西寶殿、瑞垣悉以顚倒、

〔大神宮諸雜事記一〕雄略天皇卽位廿二年戊午七月七日、豐受神宮於波被奉迎也、

〔伊呂波字類抄諸社志〕伊勢外宮豐受宮

〔三代實錄十一淸和〕貞觀七年十二月九日丙辰、授豐受宮禰宜正六位上神主眞水外從五位下、

〔司家舊記〕內宮殿內盗人參昇之事、八月十一日神事之次以禰宜中披見及也、卽十一日ヨリ參籠、十七日早天寅刻拜見在之、御大刀二腰紛失之由、有禰宜中ヨリ其屆者也、

永祿九年八月十〇恐廿誤日到、折紙也、

〔萬治元年內宮炎上記〕皇大神宮神主　注進可早被經次第上奏、就當宮炎上造進假殿遷宮間事、右先月〇十二月卅日午刻、依當鄕失火御裳濯河橋禰宜內外物忌大少內人等之神館悉以令燒失、同日自未下刻正殿、寶殿、御門、御垣、御倉殿舍、幷荒祭宮、風日祈、攝社末社、拂地而令炎上訖、但於御正體、左右相殿、幷別宮御靈者、正權禰宜等奉戴之移荒祭宮東山陰、宮司禰宜祠官等致奉仕者也、〇中略

萬治元年閏十二月朔日〇署名略

〔神宮編年記〕延寶九年改天和元年十二月十三日之夜、子上刻正殿並東西寶殿炎上、〇中略扨御正體之儀、予氏富奉戴之、御政印之水ノ上之山陰ニして、古殿之御船代を敢、渡神奉遷之、幷相殿之御靈御神寶等、同所ニ安之、正權禰宜物忌等奉護衞之、以幔幕圍四方、〇中略火鎭而後於古殿奉遷御正體、扨御階之下、一禰宜幷正權禰宜奉守護、以幕圍御階、〇下略

〔文政回祿日記拔書〕文政十三年〇天保元年閏三月十九日、夜亥刻頃今在家裏町岩埼左門宅ヨリ出火、清酒作內人荒木田久家折節西北風强表町江飛火、忽大橋邊江燒移リ、橋姬社、大橋兩鳥居、木除柱迄不殘燒落、今在家町九分通燒失、津長社、大水社無別條、但樹木少々燒亡也、橋姬社御體者、祝部大國左內盛業早速馳著奉出、宮中奉戴候事、夫ヨリ館町江移リ、彌火氣盛ニ相成、表町家裏町家山手迄一面ニ相成、次第ニ南ヘ燒上リ、就中荒祭宮江飛火、新殿モ引續キ燒亡、仍馳著之正權禰宜等恐怖之至ニ候ヘドモ、奉開御扉、戴御樋代、風宮新宮奉移、夫ヨリ皆々本宮ヘ參リ衞護之處、八十末社江飛火、此程古殿モ燃立、雙方火炎頻ニ本宮江靡來、兩寶殿及本宮モ甚危相見候ニ付、彌以周章不堪戰栗之至、仍又々正殿奉開御扉、御樋代兩相殿共奉成出御、同風宮新宮江奉成動座、正權禰宜物忌諸內人

又御山ノ繁ミニ身ヲ隱ス、其時御殿ニ立歸リテ見奉ルニ、ホノヲモ殘ラズ、御殿モ御煩ナシ、誠以神慮ノ至有難ク存處、敵數百人御階下迄亂レ入、然間行歩モ叶ヌ手負年寄ナド、手ニ當ルニ任テ切捨ル、御殿下ニテモ小童一人、其外瑞籬御門ノホトリ、又外幣殿ノ内ニ身ヲ隱ス者アルヲ、敵見付テ入處ヲ、殿内ニテ打違テ二人ナガラ生害ス、兎角スル間ニ、山田ヨリ緣々ニ迎ニ越間、禰宜役人皆々宮中ヲ退出、〇中略宮中清メハ七月晦日ニアリ、

〔内宮物忌年代記〕明應九庚申九月二日ノ夜大風、夜之子ノ刻計リニ内宮古御殿御顚倒、御體ハ六年十月十二日ヨリ子今假殿ニ御遷坐之、〇中略

永正二乙丑十二月廿四日申刻計ニソタヤヨリ火ヲ出シ、館百餘宇御倉忌火屋子良館マテ燒失ス、夜燒屋山田ノ者也、御神體ヲバ、二禰宜守晨、四禰宜守武、南河原ニ出奉ル、後□如本殿ニ遷奉、

〔内宮永正引付上〕皇大神宮神主　注進〇中略　神慮叵測子細事

抑今月十九日亥刻、不思議火出來、玉串御門、蕃垣御門、瑞垣南裏令炎上、其口及殿上之間、大少内人等餘中分入々々、打消々々、丑刻許略散、爰神殿御戸之西脇壁餘中分令頽落、是雖騒動之折節、併朽損之破摧也、〇中略

永正九年十一月日〇署名略

〔禰家古文書〕大神宮玉垣荒垣燒亡、幷御殿鳴動事、〇中略

右或炎上、或顚倒、所見如此、今度注進玉垣荒垣燒失、社頭鳴動云云、非正殿炎上之者、可在聖斷者乎、

天文七年二月八日　　左大史小槻伊治上

〔禰家古文書〕皇大神宮神主　注進可早被經次第御沙汰宮中炎上事

右去二月十九日、從御裳濯河御橋邊火出來刻、忌火屋殿、幷一之殿、幷瑞籬之御門、幷蕃垣御門、幷玉串御門悉燒失畢、神慮叵測者哉、〇中略

永祿二年三月六日〇署名略

ニ住シ、宮中之法ヲ犯間、如此災難出來、宮中殿舍類火之危、消肝之折節、俄風自南吹ナ止畢、件火元ハ有爾長館預、祓所籠孫六男、則令逐電畢、

〔康富記〕享德三年十月廿三日辛丑、豐受大神宮佐異勘文、整加請奏付進晉中納言亭訖、〇中略

勘申祭主淸忠卿言上、豐受大神宮禰宜等申、當宮正殿千木二枝、鰹木七、覆左右板顚落事、

文安四年九月八日被行軒廊御卜、是依去六月廿一日皇。大。神。宮。正。殿。千木、鰹木、覆左右板等悉。傾。危。

同正殿幷荒祭宮鳴動、櫪御馬走出事等也、同月十一日例幣、宣命有辭別、被副獻臨時御幣畢、同五年

六月六日被行軒廊御卜、去月十七日皇大神宮正殿覆板、鰹木悉損落事也、同月十八日月次祭神今

食、式日延引被付行伊勢一社奉幣訖、

右文簿所注如件、仍勘申、

享德三年十月廿二日　　　中務權少輔兼權大外記中原朝臣康富勘申

〔氏經卿神事記〕寶德二年八月廿七日、夜大風自亥刻至卯刻、東寶殿千木鰹木覆左右板葺萱等吹落、

東方千木二枚殘、瑞籬荒垣等悉顚倒、荒祭宮御垣同前、宮中生木彼是百本許顚倒、前九禰宜館軒打

破、岩埼館打破、九丈殿打破、荒祭宮忌火屋殿打破、總而禰宜、權任、職掌人等宿館悉吹破、

〔內宮子良館舊記〕長官、傍官、物忌衆ハ今度〇延徳元年六月二十二日大亂能々加思案ニ、先年〇文明十八年外宮御殿

炎上アル間、內宮御事モ心モトナク存間、宮中ニ祗候申、御殿ニ火カヽル事アラバ、御神體ヲモイ

タヾキ出シ可奉覺悟ニテ、弓矢ハジマルヨリ御前ニ、祈念イタス處ニ案ノ內ニ所々火煙目ヲオ

ドロカス、既上館御厩子良館マデ燒上ル間、御殿ニカヽルホノヲハ秋ノ木葉ノ嵐ニ散ガ如也、禰

宜物忌ハ氣ヲ失テアル處ニ、落合口御山タウゲノ手負數十人、其外館ニノコル年寄足弱ナド悉

瑞籬ヲ破テ御殿ヘニゲ入、如今ハ御殿不淨ニ可及由申テ堅禁制スルト云共不用、上ヲ下ニ置キ

ル間不及了簡シテ、計路ヲ廻ラシ、敵近付間禰宜役人モ不可叶トテ、皆々宮中ヲ走出、其外ノ者モ

神宮寶殿顚倒事、

〔百練抄 五鳥羽〕永久元年九月六日、諸卿定申二所大神宮殿舍門垣朽損顚倒、幷依新宮上棟事可被造假殿地事、

〔兵範記〕仁安三年十二月廿五日壬子、卯刻右少史中原國親持來神宮奏狀、〇中略

今月廿一日申時、從權神主師朝之宿館猛火出來、始自正殿迄至東西寶殿、幷中外院殿舍御垣門鳥居及禰宜內人等宿館、掃地燒失間、奉出御正體幷左右相殿、及荒祭宮御體御政印事、右去御所乾方四町餘、從彼神主宿館火出來、件殿舍御垣門鳥居禰宜內人等宿館、掃地依燒失、禰宜等參入正殿、奉出御正體幷左右相殿御體政印畢、而暴風頻之間、御神寶不取出一物併燒失、仍宮司任先例奉造假殿可奉鎭也、但中外院之中、忌屋殿由貴殿酒殿子良宿各一字、所燒殘也、兼又荒祭宮依爲炎上之中、成恐懼奉出御體、殿舍無燒失之間、如本可奉鎭也、燒失殿舍御垣門鳥居靈木、禰宜內人等宿館員數追可注進之狀如件、

仁安三年十二月廿一日 子時〇又見愚昧記

〔皇年代略記 後白河〕首書 寬喜二、九、九、〇九九皇帝紀抄作九月八日 大風大雨、神宮內外院殿舍顚倒、

〔百練抄 十四四條〕仁治元年十二月十四日癸酉、神宮飛脚到來云、內院外院御輿宿荒垣二間、去十一日子刻燒亡、奉出御體於河原、火消之後遷御、神寶等散々云々、 廿二日辛巳、神宮外院火事之間奉勵御體、御元服之間、音樂如何之由被問諸道云々、 廿四日癸未、左大辨忠高卿爲勅使參向神宮、依火事御訪也、今度宸筆宣命、自今日廢朝五ヶ日也、 卅日己丑、仗議、依神宮火事、御元服音樂有無事也、〇又見平戸記

〔氏經卿神事記〕嘉吉三年五月八日、自酉下剋及子剋館炎上、大庭並木杉北端通限世古而、北方之館卅餘宇令燒失畢、此內ニ一禰宜館在之、當時參籠輩令群集之間、汚穢不淨相交歟、其上地下人等館

體、以同七日言上本宮、隨則上奏、因之以同月十日、被差下勅使神祇大副右大史、及官掌等、先御燒亡之由來、幷所燒亡種々神寶殿裝束物等色目、一々勘記天上奏早了、〈○又見兵範記〉

〔神延紀年〈一光仁〉〕度會延佳曰、此條不見國史、與延曆火同年月日、事狀亦相似焉、疑錯傳歟、

〔續日本紀〈四十桓武〉〕延曆十年八月辛卯、〈○三日〉夜有盜燒伊勢大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門三間、瑞籬一重、　壬寅、詔遣參議左大辨正四位上兼春宮大夫中衞中將大和守紀朝臣古佐美、參議神祇伯從四位下兼式部大輔左兵衞督近江守大中臣朝臣諸魚、神祇少副外從五位下忌部宿禰人上於伊勢大神宮、奉幣帛、以謝神宮被焚焉、〈○又見古事談〉

〔大神宮諸雜事記〈一〉〕延曆十年八月五日夜子時、大神宮御正殿東西寶殿、幷重々御垣御門、及外院殿舍等併掃地燒亡、爰御正體、幷左右相殿御體、同以從猛火之中飛出御天、御前乃黑山頂放光明懸御豆利、錦綾色々御裝束、幣物乃辛櫃入合、調絹千四百匹、同糸四百六十絇、大刀六百九十腰、弓箭楯桙御鏡種々神寶物等、千萬併燒亡畢、〈○又見兵範記、古事談〉

〔神名祕書〕皇大神宮
延曆十年八月、回祿之時、相殿神形、弓大刀等折損給也、不及造替沙汰哉、如本奉納袋也、

〔大神宮諸雜事記〈一〉〕延曆廿年正月十三日、大神宮大物忌父礒部嶋丸、幷内人同田丸等神館燒亡、仍當番直大内人三人、小内人六人、科上祓畢、件嶋丸等二人、又同前也、

〔扶桑略記〈三十白河〉〕承曆三年二月廿一日庚申、伊勢祭主輔經言上、去十八日未時、大神宮内宮外院六十餘宇拂地燒亡、印鎰竝累代文簿同爲灰燼、　廿五日甲子、令右中辨藤原通俊發遣伊勢大神宮、爲實錄也、自今日廢朝五箇日、〈○又見爲房卿記〉

〔百練抄〈五白河〉〕承曆三年五月〈○五月、扶桑略記作六月〉廿七日、洪水、大神宮外院屋五字流漂、

〔百練抄〈五堀河〉〕寛治六年八月四日、大風大神宮西寶殿、豐受宮東西寶殿等顚倒、　十七日、諸卿定申大

燒失

〔皇大神宮年中行事九月〕同夕部○十七日、中略、鎰取内人立座、解御鎰櫃封、御封申之後、取出御鎰等、正殿御鎰一禰宜渡、東寶殿御鎰二禰宜渡、西寶殿御鎰三禰宜渡也、○中略奉拜之後、鎰取内人進參、一禰宜令捧持、御鎖鎰崎押付、宮司封古放、向宮司、御鎰御封開申破之、○中略一禰宜唐鎰御戸鎰目差入、其時子良件鎰懸手歸下也、○中略其後一禰宜奉開御戸、御鎖鎰幷御鎖抽、高欄東脇平桁上置、鎰取内人參寄件御鎖鎰取、御階男柱東本北寄、封紙方寸許切、件御鎰崎押付、又封紙一筋搔、相具墨筆、進寄宮司前、其時宮司封書、先御鎰崎押付紙、次一筋搔具志氐也、件封御鎰櫃付料也、○中略二禰宜者奉開東寶殿、三禰宜奉開西寶殿、于時鎰取内人參而寶殿前、御戸被付古封、自二三禰宜等之手請取、宮司之前蹲踞、東寶殿御戸御封開、西寶殿御戸御封開申破之、○中略又宮司自鎰取内人之手、請取封紙三筋書封、之中一筋荒祭、一筋東寶殿、一筋西寶殿御戸奉付料也、○中略二三禰宜各自鎰取内人之手封請取、付寶殿御戸之後退下、暫宮司前蹲踞、其時鎰取内人進向、東寶殿御戸御封畢、西寶殿御戸御封畢中退歸、其後宮司幷神主各退出也、一二三神主、各所帶御鎰等於八重榊西脇、鎰取内人御請預、入御鎰櫃之後付封、向宮司蹲踞、御鎰櫃御封畢申、

〔大神宮儀式解八〕御鎰納櫃は、○中略今の世は、常に一禰宜の忌館に安置せり、

〔中右記〕大治四年十二月十一日、臨時有伊勢奉幣、上卿内大臣、行事右中辨、是東寶殿鎖被作替之由也、

〔大神宮諸雜事記一〕同年○天平神護二年十二月十八日夜子時、宮司神館五間萱葺二字仁火飛來、既以燒亡畢、件燒亡間、日本紀二部、神代本記二卷、當年以往記文、及雜公文燒失畢、

〔大神宮諸雜事記一〕寶龜三年正月四日夜、宮司比登宿館燒亡也、次大神宮司印、幷代々公文燒亡了、

十年八月五日夜丑時、大神宮正殿、東西寶殿、及外院殿舍等皆悉燒亡畢、于時御正體、幷左右相殿御體、併錦御衾中被纒裹御乍、從猛火中飛出御天、御前松樹乃上懸御世利、仍宮司忽造假殿、奉安鎭御

〇按ズルニ、大神宮ノ裝束神寶ヲ記スモノ、前條ノ外ニ、尙ホ長曆送官符、嘉元送官符、內宮御神寶記等ノ諸書アリト雖モ、大差無キヲ以テ之ヲ略ス、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮一院

正殿一區

殿扉金鏁壹具　飾金御鎰壹勾　已上從朝庭官庫奉入

〔延喜式伊勢大神宮四〕修飾神宮調度

正殿內、〇中略鏁一具、管長四寸五分、管口徑一寸七分、自勾至末二寸七分、管廣厚各二寸、自舌至本、至勾一寸四分、根雄徑五分、長八寸、〇中略匙一枚、長一尺五分、廣六分、鎰一勾、長三尺四寸七分、柄長三寸五分、柄本金廣八分、柄本末徑一寸一分、本末口裏長八分、自柄至勾長五寸八分、勾金廣七分、自中至下廣六分、自勾至下二尺八分、鑰厚三分、柄中花形目拔有、又柄編著鏁、

〔皇大神宮儀式帳〕寶殿二字　鏁二具　戸具鎰一勾

〔長曆送官符〕寶殿貳字鏁貳具、以鐵作之、管長四寸二分、室長二寸二分、廣一寸八分、四舌根尾長一尺一寸七分、勾長二寸二分、

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事

以十六日〇中略、九月、大物忌御鎰被賜氏、正殿戸開奉、先大物忌戸手付初、大禰宜參上戸開、

一供奉幣帛本紀事

正殿寶殿東西〇三殿、亦荒祭宮鎰、奉置西四御倉、卽其御倉鎰、封大神宮司御厨置之、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

遷宮使造奉物

御鎰納櫃一合

〔延喜式伊勢大神宮四〕造備雜物

納鎰韓櫃一合

〈廣一寸、〉箭七百六十八隻、〈以鷲羽作之、〉鞆廿四枚、〈以鹿皮縫之、胡粉塗、以墨畫之、納持(持恐楯誤)麻笥二合、徑一尺六寸五分、深一尺四寸五分、〉著緒一處、用紫革、〈長各一尺七寸、廣二分、〉楯廿四枚、〈長各四尺四寸五分、上廣一尺三寸五分、下廣一尺四寸、厚一寸、〉桙廿四竿、〈長各一丈二寸、鋒金八寸五分、廣一寸五分、徑一寸四分、本金長二寸八分、徑一寸四分、本末塗金漆、〉鵄尾琴一面、〈長八尺八寸、頭廣一尺、末廣一尺七寸、頭鵄尾廣一尺八寸、〉

大神宮裝束

蓋二枚、淺紫綾表、緋綾裏、〈表各三丈、裏加之、〉頂及角覆錦、〈枚別所須一丈、〉垂淺紫組總、〈枚別所須八兩、但縫料絲臨時斟酌請受、以下准此、〉緋綱四條、〈二條蓋料、二條菅笠料、長各二丈、〉紫扇二枚、菅笠二枚、菅扇二枚、壁代絹帳二條、〈一條長六丈、廣六幅、一條長九尺、廣二幅、〉天井上覆絹帷一條、〈長三丈六尺三寸、廣九幅、〉內蚊屋絹帳二條、〈高一丈三寸、廣十二幅、〉幌一條、〈長七尺三寸、廣四幅、〉床土代敷細布袷帷一條、〈長二丈八尺、廣六幅、〉絹袷帷一條、〈長一丈三寸、廣四幅、〉生絁絹被二條、〈長九尺、廣四幅、納綿廿屯、一條無綿、〉小窠錦被一條、著緋裏、〈長九尺、廣四幅、納綿廿屯、〉小文紫被一條、〈長五尺、廣二幅、納綿八屯、〉小文緋被一條、〈長廣如上、〉屋形錦被一條、〈長廣同上、〉小文緋絹一匹、〈折薦敷料、〉帛被三條、〈二條長一丈、廣四幅、納綿各廿屯、一條長九尺、廣四幅、無綿、〉五窠錦被一條、〈長一丈、廣五幅、著緋裏、納綿廿屯、〉敷床細布袷帷一條、〈長九尺、廣四幅、〉絹袷帷一條、〈長廣如上、〉小紋紫衣二領、〈長三尺五寸、著白(白恐帛誤)裏、各納綿一屯、〉小文紺衣二領、〈長三尺五寸、裏同上、各納綿一屯、〉帛衣四領、〈長裏同上、各納綿一屯、〉帛裳四腰、〈長五尺、著綠色裏、〉紫羅裳貳腰、〈長廣裏色同上、〉紫帶六條、〈長七尺、廣一寸八分、〉絹比禮八條、〈長五尺、廣二幅、〉帛意須比八條、〈長二丈五尺、廣二幅、〉細布巾四條、〈長五尺、廣一幅、〉帛巾四條、〈長如上、〉帶廿條、〈六紫、十四綠、長各七尺、廣一寸八分、〉錦履二兩、〈長九寸五分、〉錦襪八兩、〈長九寸五分、高七寸五分、〉帛袜八條、〈長二尺、廣一尺五分、〉盛柳筥一合、〈方一尺五寸、〉楉筥一合、〈方一尺、裏用生絹、納櫛八枚、〉鏡二面、〈各徑九寸、〉盛樋代筥、以錦貼表、以緋帛貼裏、髻結紫絲八條、〈長五尺、〉納柳筥一合、〈方一尺、〉加美阿氐帛八條、〈長三尺、〉白玉一兩三分、〈中分裹白絹、〉盛白筥二合、〈方一尺、納生絁袷囊、〉錦枕二枚、〈長各五寸五分、廣三寸八分、厚二寸四分、〉盛柳筥一合、〈方一尺五分、〉敷御道布廿三端三丈、納裝束韓櫃八合、〈所攝諸宮裝束、同納此韓櫃、〉

相殿神二座裝束

左神料絹囊一口、〈長七尺二寸、廣二幅、〉右神料絹囊一口、〈長四尺二寸、廣二幅、〉絹幌二條、〈長六尺三寸、廣四幅、〉四門幌四條、〈瑞垣門長七尺八寸、廣四幅、蕃垣門長八尺八寸、廣五幅、玉串門長廣同蕃垣、玉垣門長七尺四寸、廣三幅、〉

瑞垣御門帳一條、長七尺八寸、弘四幅、蕃垣御門帳一條、長八尺八寸、弘五幅、玉串御門帳一條、長八尺八寸、弘五幅、玉垣御門帳一條、長七尺四寸、弘三幅、

寶殿物十九種

金銅樻二基、右延暦四年遷宮時、依神祇官符、載官上解文、即被供奉、御鏡二面、各徑九寸、麻笥二合、加世比二枚、鎛二枚、銀銅樻一基、麻笥一合、加世比二枚、鎛一枚、弓二十四枚、矢二千二百隻、玉纏横刀一柄、須加流横刀一柄、雜作横刀二十柄、比女叡二十四枚、蒲叡二十枚、革叡二十四枚、鞆二十四枚、楯二十四枚、戈二十四竿、

〔延喜式四伊勢大神宮〕神寶廿一種

金銅多多利二基、高各一尺一寸六分、土居徑三寸六分、金銅麻笥二合、口徑各三寸六分、尻徑二寸八分、深二寸二分、金銅賀世比二枚、長各九寸六分、手長五寸八分、金銅鎛二枚、莖長各九寸三分、輪徑一寸一分、銀銅多多利一基、高一尺一寸六分、土居徑三寸五分、銀銅麻笥一合、口徑三寸六分、尻徑二寸八分、深二寸二分、銀銅賀世比一枚、長九寸六分、手長五寸八分、銀銅鎛一枚、莖長九寸三分、輪徑一寸一分、梓弓廿四枝、長各七尺以上八尺以下、塗赤漆、附纏緑組、征箭一千四百八十隻、長各二尺三寸、鏃長二寸五分、以烏羽作之、鏃塗金漆、箸塗朱沙、又箭七百六十八隻、長二尺四寸、鏃鉾箭以鷲羽作之、以雜丹漆塗之、玉纏横刀一柄、柄長七寸、鞘長三尺六寸、柄頭横著銅塗金、長三寸八分、片端廣一寸五分、片端廣一寸、頭頂著伴鐶一勾、徑一寸五分、玉纏十三町、四面有五色玉、著五色組長一丈、阿志須惠組四尺、柄著勾金長二尺、著鈴八口、琥碧玉二枚、金鉗形一隻、長各六寸、廣二寸五分、著緒紫組長六尺、袋一口、表大暈繝錦、裏緋綾帛、各長七尺、須我流横刀一柄、柄長六寸、鞘長三尺、其鞘以金銀泥畫之、柄以鴇羽纏之、柄勾皮長一尺四寸、裏小暈繝錦、廣一寸、押鐃形金六枚、柄枚押小暈繝錦、長三寸一分、廣一寸五分、四角立乳形、著五色組長一丈、阿志須惠組四尺、金鉗形一隻、長六寸、廣二寸五分、著紫組長六尺、袋一口、表大暈繝錦、裏緋綾帛、各長七尺、雜作横刀廿柄、柄長六寸五分、鞘長二尺七寸、漆塗鞘、裏緋帛幷倭文、柄以烏羽纏之、節別纏小暈繝錦、阿志須惠、長各三尺三寸、廣各一寸二分、著緋紺帛緒長九尺、廣二寸五分、姫叡廿四枚、長各二尺四寸、上廣六寸、下廣四寸五分、矢割口、方二寸九分、以檜作之、以錦貼表、以緋帛著裏、著緒四處、竝用紫革、長各二尺、廣一寸三分、箭四百八十隻、以烏羽作之、蒲叡廿枚、長各二尺、上廣四寸五分、下廣四寸、以檜作之、錦蒲著表、以鹿皮著頂、以丹畫裏、著緒四處、〇着以下四字恐大字竝用紫革、長各二尺、廣一寸、箭一千隻、以烏羽作之、革叡廿四枚、長各一尺八寸、上廣四寸五分、下廣三寸八分、以調布貼之、塗黑漆、著緒四處、〇着以下四字恐大字竝用紫革、長各二尺、

壁代生絁御帳二條、(長各二丈二尺、弘各廿六幅、)天井生絁御帳一條、(長三丈六尺三寸、弘九幅、)内敷屋生絁御帳二條、(高各一丈三寸、弘各十二幅、)御幌帳一條、(長七尺三寸、弘四幅、)

御床裝束四種

御床土代敷細布御帳一條、(長二丈八尺、弘六幅、)生絁帳一條、(長一丈三寸、弘四幅、)生縫絁御被一條、(長九尺、弘四幅、)納綿廿屯、小窠錦被一條、(長九尺、弘四幅、)納綿廿屯、緋裏、

樋代御裝束六種

小紋紫御被一條、(長五尺、弘二幅、)納綿八屯、小紋緋御被一條、(長五尺、弘二幅、)納綿八屯、小紋緋一匹、(折累數料)表覆帛被二條、(長各一丈、弘四幅、)各納綿十屯、五窠錦御被一條、(長一丈、廣五幅、)納綿廿屯、緋裏、

出坐御床裝束物七十二種

御床敷細布帳一條、(長一丈、弘四幅、)生絁御帳一條、(長九尺、弘四幅、)生縫絁御被一條、(長九尺、弘四幅、)帛御被一條、(長九尺、弘四幅、)屋形錦御被一條、(長九尺、弘四幅、)小文紫御衣二具、(長各三尺五寸、納綿一屯、白裏紬(紬恐誤字、下同、)子色衣色同、)小文紺御衣二具、(長各三尺五寸、納綿一屯、白裏紬子色衣色同、)帛御衣四具、(長各三尺五寸、或云納綿一屯、白裏紬子衣色同、)帛單御裳四腰、(腰須蘇高五尺)紫羅御裳二腰、(腰井須蘇五尺裏緋、)紫御裳帶六條、(高七尺、幅四條、)生絹御比禮八端、(須蘇長各五尺、弘二幅、)帛御意須比八端、(長各二丈五尺、弘、)細布御巾四具、(長各五尺、弘一幅、)帛御巾四具、(長各五尺、弘一幅、)御帶貳拾條、(紫六條、絲十四條、或云長各七尺、弘一寸八分、)錦御沓二足、錦御襪八兩、(兩別九寸五分、)(或云高七寸五分、)帛御袜八條、(長各二尺、)御櫛囊一口、(納筥御櫛八枚)御加美結紫糸八條、(長條別三尺)御加美阿豆糸絹八條、(長條別三尺)白玉囊二口、(各生絁方三尺)納白玉一兩三分、(二蘰中分)納　已上納方七寸筥、錦御枕二基、(納白筥一合、)

相殿坐神御裝束囊二口(具八種)

坐東神御形納奉生絁囊一口、(長七尺二寸、廣二幅、)坐西神御形納奉生絁囊一口、(長四尺二寸、廣二幅、)

寶殿二字御幌二帳(長各六尺三寸、弘四幅、)

御門四間生絁御幌四帳

古裝もて四箇を構へたり、○中略同西方に石壺十一箇あり、正員禰宜十人、宇治內人の版なり、次に小き石壺一箇あり、權玉串內人の版なり

〔倭訓栞中編二伊〕いしつぼ　大神宮式に、內院版位と見えたるも、中重の石壺也といへり、又石疊ともいふ、

〔愚昧記〕安元三年九月十五日辛酉、參內宮、○中略至御輿宿北方、予以下列立、西面南上、有石壺、

〔皇大神宮年中行事二月〕一九日祈年御祭次第行事○中略各參列時、石壺著座、宮司東、使宮司東、神主西東上、其次玉串大內人、三色物忌父、小西方以北爲上、東向候、

〔嘉元二年皇大神宮假殿遷宮記〕一還御行事

戊下剋○十月十四日許、如去夜列立玉串行事所、○中略使宮司仁獻木綿、次玉串行事如常、次列座內院版位、石壺也、

〔新後撰和歌集十神祇〕題しらず　　荒木田延成

さかきもてやつの石壺ふみならし君をぞいのるうぢの宮人

〔詠大神宮二所神祇百首和歌〕祝

君ガ代ハ神樂石壺ノ內ニシテ朝夕祈ル數積ルラン

石壺トハ內外宮ノ神官ノ拜所也、○中略石壺當時ハ七モ八モ有ケルヤト申人有之、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮遷奉御裝束用物事

紫衣笠二口、各眞緋錢組八條、赤紫緋綱四條、長各二丈、二條衣笠料、二條菅笠二柄料、紫刺羽二柄、菅刺羽二柄、菅御笠二口、絹

垣帳一條、長六丈、弘三幅、道長九十五丈敷用調布廿三端三丈、

大神正殿裝束六物

之外、當時無所存、按、令相尋之後、追可注申也、○中略 至于天平賀破損條者、康平三年例、本宮所見不詳、須隨勅定者、同宜、奉勅早作改、如元令安置者、宮宜承知、依宣行之、

保安三年九月六日　少史三善

中辨藤原朝臣

〔釋日本紀 九述義〕天平瓫(アメノヒラカ)

彙方案之、平賀者、盛供神物之土器也、今世伊勢大神宮御殿下多以安置之、或說、諸神參候之神座云云、

〔古事記傳 十四〕諸神參候之座と云るは、心得ぬことなり、後の附會なるべし、○中略 今伊勢神宮に用る比良迦、俗に瓫瓦(ボンケ)と云て、形は丸き盃の如く、徑八寸許、深一寸許にて、尋常の土器の如き燒なる物にて、毎節宇爾鄕より貢すとなり、今も心御柱のもとにもおくことゝぞ、

〔文永三年皇大神宮遷宮記〕十四日 九月○

今夜物忌等正殿天平賀八百口任先例奉居置之、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

二月例

以十二日、年新幣帛使參入、○中略 次驛使、次大神宮司、次禰宜、次宇治内人、次二○二下一本有人字大内人、以上六人、正殿向跪列、就版位侍、

〔延喜式 四伊勢大神宮〕九月神嘗祭○中略

使中臣、次使王、入就内院版位、

〔大神宮儀式解 二十三〕版位は、○中略 いつの比よりか、石を並べ疊みて局を作れり、石壺ともいふ、○中略 今の世第四御門の内東方石壺四箇あり、使王、使中臣、使忌部、及卜部の版なり、今の卜部參向られざ、

奉續始御柱木口、地上三尺三寸許、地中二尺餘奉立之、役人著座列居、次第玉串物忌東上北面、于時雲雨忽晴、星宿出現、緯之嚴重、欣仰不遇之由、役人翌日面々所令賀申也、

〔神宮雜例集 二〕天平賀事

一天平賀破損例

保安二年十一月一日、內宮物忌父、見付正殿下天平賀十九口倒伏三口乍居破損、中略天平賀倒事、若島之所爲歟者、祭主親定卿宮司公隆上奏、卽被行御卜之後、同十二月九日宣旨、大納言藤原朝臣家忠宣、奉勅任占申旨、令注進神事不淨、中略至于天平賀破損事者、言上康平三年例者、神宮請文云、中略至于天平賀破損條者、康平三年例、本宮所見不詳、須隨勅定者、同三年九月六日宣旨、早作改如元可安置天平賀三口破損者、

左辨官下伊勢大神宮

　應早作改如元令安置正殿下天平賀內參口破損事

右得彼宮司去五月廿日陳狀偁、得禰宜等去三月十八日陳狀偁、去年十二月十五日司符偁、今月九日宣旨偁、得祭主神祇伯大中臣卿去月五日解狀偁、大神宮司今月四日解狀偁、彼宮禰宜等今月一日注文偁、今日巳時、物忌父同爲交替參入之次、拜見之間、正殿下天平賀少々倒伏之由依申、禰宜等實檢之處、十九口倒伏、三口乍居破損、中略天平賀倒事、若是島之所爲歟、抑件天平賀於破損者、新可被令造替歟、至于倒伏者、以舊如本可直居歟、中略彼此共經言上、來十二月御祭以前、早可被裁下者、同相副本解等言上如件者、同令官寮等卜申之處、官卜云、推之依神事不淨所致之上、可有恠所病事歟者、寮占云、推之依神事不淨不信所致之上、公家可愼御御藥事歟、期恠日以後卅五日內、及明年五月六月十月節中并戊己日也者、大納言藤原朝臣家忠宣、奉勅任占申旨、令注進神事不淨、兼改調机疊、至于天平賀破損事者、言上康平三年例者、謹所請如件、神事不淨事、如前條言上、依宣旨度々注進

常限廿箇年一度新宮遷奉、○中略取吉日、爲正殿心柱造奉、奉宇治大内人一人、諸内人等戸人等入杣、（中略）其柱名號忌柱、

〔大神宮儀式解入〕爲正殿心柱造奉は、志也宇傳武能、志牟乃波之良、都久里万豆良牟多米爾とよむべし、心柱は正殿の正中央に立奉ればかく號るなり、心は奈加古の謂なるべし、又淸淨の義によりて忌柱ともいふ、度會の宮にも、此柱を立奉るなり、此柱立るは重事にして深き旨あり、猥に記べきにあらず、その奉立行事を下にいふべし、此柱を天御量柱とも、又天御柱ともいふよしにて、空理を附會する說はよるべからず、○中略心柱の一名を忌柱といふ、伊美は齋にて湯種、湯鍬、忌瓮、忌機屋などいふに同じ、淸淨の謂なり、

〔新儀式臨時四〕伊勢大神遷宮事

大神遷宮之事、依式歷廿年行之、前二三年神祇官申任造宮使、除舊新造、正殿心柱須令當中央立之、而近代依有憚忌、多違本穴立之、應和二年同違中央立之者、不改其柱、只科祓而行之、

〔神宮雜例集二〕心御柱事

舊跡相違事

應和二年八月廿六日、文範奏、神祇權大祐大中臣理明申、奏檢大神宮正殿心柱奉立處、幷古穴勘文、新宮正殿奉立程、自正中之東西寄北二尺二三寸、自正中南北寄東程二尺一二寸許、一當御座正殿心柱奉立處、自東西正中北方去程七八寸許、自南北正中西方寄程一尺七八寸許、副大神宮司解狀、即給左大臣許、令仰云、元房等申新宮正殿心柱有誤之由、仍遣使實檢所申如此、但當時所御坐正殿心柱又不直、若謝申其由不可改立、將可抜替改立否事歟、宜定申、廿七日、文範令傳左大臣報云、改立彼心柱事甚可恐、若被謝申、象科祓誤立禰宜內人等如何、仰依申令行、○中略

已上太宰權帥大江朝臣匡房勘文內略寫之天仁三年心柱朽損顚倒之時勘文也

〔弘安二年內宮假殿遷宮記上〕當日十八日、○正月自未剋許甚雨無際、雖然戌剋許相伴御巫、進參御祓所、祓淸祭物、御巫者退出于里宿、式衆者參入于內院、先忌部奉迎心御柱、其後山向內人以忌物御鎭、

亡畢、○中略爰神宮印一面、其形不見、火所、因之禰宜內人等愁歎、而三ヶ日之間、且祈申大神宮、且觸宮司之程、禰宜夢中被仰云、件印地底二尺許入天在也、早可搜覓也者、禰宜夢覺之後、驚恐天文殿之所堀求、以宛如御示現、印有、專無破損也、

天曆八年五月十七日、大神宮神主進於宮司注文云、○中略爰以去寶龜年中宮司神館燒亡次、文殿一字同以燒亡、忽叵改之間、以郡司雖非如法所令造進也、而彼文殿破壞濕損之間、公文古記等朽損也、豈以誰人可令改造乎、○中略爰彼司之時、又號不蒙別宜旨之由、每任不改造件文殿酒殿等、彼此尤要樞之所也、○中略則司廳宜云、文殿改造事申請於公家可隨裁定也、○下略

〔江家次第十二神事〕伊勢公卿勅使

參大神宮、至御裳濯河行祓、於第一鳥居外脫劍、於第二鳥居下用鹽湯大麻、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、未刻許參著內宮、於一鳥居外、先解劍留隨身、

〔兵範記〕仁安三年十二月卅日丁巳、今日子刻神宮奏狀到來、○中略

重注進、當宮內中外院殿舍御垣御門靈木、禰宜內人等宿館燒失員數事、○中略

一燒殘殿舍○中略

荒垣南鳥居一基　同西鳥居一基

同北鳥居一基　一鳥居一基

二鳥居一基

去廿一日注進燒亡由之時、火炎尤盛也、而件鳥居五基、依爲彼中存燒損之由、注進其旨畢、今加檢知之處、皆以所殘留也、

〔愚昧記〕安元三年九月十五日辛酉、參內宮、於一鳥居外下馬解劍參入、○中略於二鳥居下、鹽湯大麻、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

〔大神宮諸雜事記 一〕同年〇弘仁元年十二月十九日夜、大神宮大内人外少初位上宇治土公石部小縄神館一宇燒亡、

〔皇大神宮儀式帳〕大内人二人宿館二院

齋侍屋二間、長各四丈、弘各一丈、高各八尺五寸 厨大炊屋二間、長各三丈、弘一丈二尺、高八尺 防往籬一重、長廻四十丈、

右二人大内人、忌火物不食、但齋御供奉、與宇治内人同、

物忌并小内人宿館五院

大物忌齋館一間、長二丈、弘九尺、高八尺 齋火炊屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺 厨屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺 大炊屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺

〔大神宮諸雜事記 一〕延曆廿年正月十三日、大神宮大物忌父磯部﨟丸、并内人同田丸〇田丸一本作由丸等神館燒亡、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、未刻許、參著内宮、〇中略一禰宜忠元申云、〇中略子等宿屋板葺也、早可被葺檜皮也、〇下略

〔皇大神宮儀式帳〕宮守物忌齋館屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺 齋火屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺

地祭物忌齋館屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺 齋火炊屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺

荒祭物忌齋館屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺 齋火炊屋一間、長二丈、弘九尺、高八尺

已上四人、常食忌火物供奉、

諸物忌小内人常宿齋館屋一十二間

五間、長各三丈、弘一丈二尺、高八尺 七間、長二丈、弘二丈、高八尺 防往籬廻一重、長廻七十五丈、

右清酒作物忌以下御巫内人以上、齋館院食、但齋敬供奉、與大内人同、

〔大神宮諸雜事記 一〕同年〇天平神護二年十二月十八日、夜子時、宮司神館五間萱葺二字仁火飛來、既以燒

これなり、又忌屋殿ともいふ、

〔皇大神宮儀式帳〕直會院

防往籬一重北長六十三丈

〔大神宮儀式解 五〕以上の十四字、傳寫の時、誤て寫入たりと見ゆ、衍字なれば削べきなり、或人直會院防往籬一重とのみありては、其義通せず、防往籬の上、殿若干間など一行ありつらんといへど、直會院既に擧たれば、再擧べからず、ことに北長六十三丈とあるも其義通せず、

〔大神宮諸雜事記 一〕和同二年、於大神宮外院之乾方、始立宮司神館、五間二面萱葺屋二宇定置、永例料也、

〔皇大神宮儀式帳〕禰宜齋館一院

齋殿一間、長二丈、高八尺、弘一丈 炊屋二間、齋火炊屋一間、大炊屋一間、並長一丈五尺、高八尺、弘一丈、倉一字、長一丈八尺、弘一丈五尺、高一丈 厨一間、長二丈、高八尺、弘一丈 厩一間、長二丈五尺、高一丈、弘一丈 防往籬一重、長廻五十丈

〔平戶記〕仁治元年十二月十八日丁丑、大府卿來、相扶面謁、談日來之不審、其中大神宮外院燒亡事、只今於一條殿聞之云々、去十二日子時、自禰宜宿館出來、所燒失、

〔皇大神宮年中行事 正月〕元日朝御饌供進並次第神事供奉事中略

政印、上古一禰宜宿館被安置、

〔皇大神宮殿舍考證〕禰宜齋殿 按萬治元年、聯建正員禰宜齋館一鳥居西、同三年、有洪水漂沒、寬文元年、移一鳥居東、是今齋館也、

〔皇大神宮儀式帳〕宇治大內人齋館一院

齋殿一間、長二丈、高八尺、弘九尺 忌火炊屋一間、長二丈、高八尺、弘九尺 厨屋一間、長三丈、高八尺、弘一丈 防往籬一重、長廻卅丈

右禰宜幷宇治大內人二人、常食忌火物、不食他火物、

立屋一字、可被作加也、

〔類聚大補任 土御門〕承元三年己巳四月十日、大神宮遷宮、○中略今度造加五間一面檜皮葺車宿舍一字、件功料一萬二千匹

〔文安二年內宮假殿遷宮記〕皇大神宮神主　注進可早被經次第御沙汰、就當宮假殿事被尋下間事、

右○中略御輿宿車宿河原殿○中略于今未被造進、是等可被相尋造宮所也、○中略

永享十一年七月十一日 名略○署

〔神宮典略 三〕車宿は車寄とも、馬牽立屋ともいへり、○中略上代寮參の時は女官 三所司外女官 の乘れる多くの車を停め、○中略勅使祭使の車馬も此屋に停め置なるべし、

〔皇大神宮儀式帳〕御膳宿一院、

殿二間 長各二丈、弘一丈、高八尺、 廻防往籬一重、長廿五丈

〔神宮典略 三〕忌火屋殿は上代の炊屋なるべし、帳 皇大神宮儀式帳 に御膳宿一院、殿二間とある一間は炊屋、一間は臼殿なるべし、○中略辨官抄に內宮無忌屋殿云云、炊屋殿始御輿宿在外院、此時も忌火屋殿とはいはず、上代のまゝに炊屋殿など存せしならん、

〔大神宮諸雜事記 二〕康平二年三月十九日、○中略上代之比、大神宮御造作之時、忌屋殿乃御材木、字川合淵置天經日來、

〔兵範記〕仁安三年十二月廿四日辛亥、酉刻祭主親隆朝臣使持書札走來狀云、去廿一日申刻、大神宮正殿燒失、○中略於御體者、無事奉出、暫奉鎭忌屋殿了、委細解狀進上了者、

〔皇大神宮年中行事 六月〕一同日、十六日、○中略出納二人、開御稻御倉所、納御稻、方々奉下、○中略方々御稻等之中一御方者、於忌屋殿奉舂、大物忌子良荒木田氏女先奉仕、母良相具也、

〔大神宮儀式解 五〕殿は古代二間なりしを、いつの代よりか一間に作りなせり、現存の忌火屋殿

六月例

以同日〇十五日夜、此禰宜内人物忌等、從湯貴御倉下宛奉、大御饌朝夕大御饌二時之料御田苅稲乎以、〇中略御饌筒仁奉納備進、

〔兵範記〕仁安三年十二月卅日丁巳、今日子剋神宮奏狀到來、〇中略

重注進、當宮内中外院、殿舍御垣御門靈木、禰宜内人等宿館燒失員數事、〇中略

一燒殘殿舍

由貴御饌調備御倉壹宇、

〔大神宮儀式解五〕御倉二字の中、一字現存して一殿の北にあり、由貴殿とも、由貴の御倉ともいふ、

〔皇大神宮儀式帳〕齋内親王川原殿一院

正殿一區、長四丈廣一丈七尺高一丈葺檜皮　御裝束宿殿一間、長二丈高八尺弘一丈　御輿宿殿一間、長二丈高八尺廣一丈　御廁殿一間、長一丈高七尺弘八尺　防往籬一重、長四十丈

一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事

以十五日〇九月巳時、齋内親王參入坐於大神宮、暫侍坐於外川原殿院、

〔皇大神宮年中行事六月〕一齋内親王御參宮之間次第事〇中略

御祓畢之後、令參御之間、始從寮頭、次第寮官等皆御供、步行也、於三所曹司者、乘車迄河原殿也、〇中略

齋内親王、河原殿與二鳥居中間、腰輿移御、齋王候殿御著、

〔大神宮諸雜事記一〕承平四年六月、〇中略十七日、依例大神宮仁參入御〇齋内親王之處、御輿宿院内仁和多利、依有鹿之穢氣天、御輿達九丈殿西砌仁宿置、

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、著直會殿座、〇中略此次一禰宜忠元申云、〇中略鳥居外參宮人々馬牽

大同二年二月十日、大神宮司二宮禰宜等本記十四ヶ條內、朝夕御饌條云、皇大神宮、倭姬命載本天、五十鈴宮爾令入坐々、鎭里給時爾、〇中略宮內爾御饌殿乎造立天、〇中略又御酒殿乎造立、處々神戶人夫進神田、以稻、神酒作天、先大神供奉、次倭姬命奉、殘者仕奉物部人等給支、

〔大神宮諸雜事記一〕天曆八年五月十七日、大神宮神主進於宮司注文云、注進、依舊例以度會郡司合期、令造進酒殿一字狀、右檢古實、宮中色々雜事、役番宿直之勤、偏郡司所役也、其御酒殿、每年九月以前造立恆例也、御前黑木御橋、已鎭之勤也、〇中略近則以去承和四年三月七日、禰宜神主繼麻呂、申上神祇官之日、被下宣旨狀云、宮司承知、任舊例可令改造者、而擬申國司之間、自然一在任終也、爰後司之時、又號不蒙別宣旨之由、每任不改造件文殿酒殿等、彼此尤要樞之所也、仍以郡司令被造之處、申云、宮司料神館燒亡之後、偏郡司每祭造進之例也者、非例之所役繁多、更不及其力者、依一定被裁許者、隨則司廳宣云、文殿改造事、申請於公家可隨裁定也、但至酒殿者、無止貢御所也、早以郡司任先例可令造進也、於司料神館者、不可郡役、早停止畢者、

〔皇大神宮年中行事五月〕五日、〇中略今日御巫內人四至神祭、先酒殿神祭也、

〔皇大神宮儀式帳〕御酒殿一院、〇中略務所廳一間長三丈弘一丈七尺高一丈

〔大神宮儀式解五〕務所廳は、〇中略慶安年中これを再興せられ、其後は朽損に隨ひて或は造替、或は修覆せらる、此舍にて官務を執り行ひ、職掌人を補任し、番直交替等の事を聽く也、此舍にて集議し、その事を奉行する文を廳宣といふ、〇下略

〔皇大神宮年中行事正月〕元日朝御饌供進幷次第神事供奉事〇中略正權神主、幷玉串大內人宇治土公、廳舍著座、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

置案上、史(○神祇官)喚名給、

〔大神宮諸雜事記 一〕同年(○寶龜二年)十二月廿三日四日、總三箇日之間、大雪降天往還不通、因之伊雜宮祭使不參天、大神宮乃一殿(○仁志天)、彼宮悠基御饌次第、神態直會等勤依例勤仕、

〔大神宮儀式解 五〕五丈殿は、(○中略)一之殿(イチノダン)ともいふ、(直會殿院の中、此殿には祭使寮頭着なり、仍院内第一の殿と云義也、)

〔大神宮諸雜事記 一〕同十八日、(○大同年九月)二彼宮(○荒祭宮)御祭直會行事、於大神宮神司殿奉仕、

〔皇大神宮年中行事 六月〕今夜(○十六日)直會畢之後、(○中略)物忌父等、主神司殿北方以西爲上着、

〔大神宮儀式解 五〕四丈殿は、(○中略)又主神司殿ともいふ、(齋宮の主神司の着殿なればなり)

〔皇大神宮儀式帳〕齋宮親王御膳一院

屋四間、(長各二丈、廣一丈、高八尺、)防往籬一重、(長廻廿四丈)

〔大神宮儀式解 五〕膳の下殿字か、宿の字あるべし、傳寫の時脱せしならん、

〔皇大神宮年中行事 六月〕一祭使參宮之間事(○中略)

同(○齋内親王)貢御者、請預料米、祝部并山守相共、於齋王御膳殿、所奉調備也、

〔皇大神宮儀式帳〕御酒殿一院

酒殿一間、(長四丈、弘一丈七尺、高八尺、庇一面、)務所廳一間、(長三丈、弘一丈七尺、高一丈、)倉二宇、(長各一丈八尺、弘一丈五尺、高一丈、)盛殿一間、(長五丈、廣一丈七尺、高八尺、)大炊屋一間、(長二丈、弘一丈、高七尺、)防往籬一重、(長廻四丈)

一年中行事并月記事

正月例

以朔日、禰宜内人物忌等、(○中略)大神拜奉、次荒祭拜奉、次御酒殿奉拜、

〔神宮雜例集 一〕二所大神宮朝夕御饌事

一供奉始事

〔皇大神宮儀式帳〕御輿宿殿一間、長三丈四尺、高九尺、弘一丈、御厩一間、長四丈、高九尺、弘二丈、船一隻、長三丈、弘三尺、

〔中右記〕長承二年五月廿一日、入夜祭主三位來、藏人兵部大輔資信來、依御氣色問事、內宮禰宜等申請、御輿宿屋可被加今一間事、元三間也、就中外宮四間也、祭主申云、尤可被作加也、御厩屋在內院、仍有火事恐、外院禰宜館邊可被立也、仍本之御厩可壞寄者、祭主申云、尤可然、只隨禰宜申可作也者、予申云、隨祭主申、可被行之、且可被奏旨、示藏人大輔了、

〔應永頭工日記〕六拾貫文內御厩、六拾貫文外御厩、

〔大神宮儀式解五〕此厩は、內御厩ともいふ、○中略長承の比迄、御厩とのみいひて、內外の稱なし、禰宜齋館なる厩にて、神馬を飼ふ事始りしより、外にむかへて、內といふと見ゆ、此事猶考べし、

〔皇大神宮儀式帳〕直會殿一院

九丈殿一間、長十丈、弘二丈、高一丈一尺、五丈殿一間、長五丈、弘二丈、高一丈四尺、四丈殿一間、長四丈、弘一丈六尺、高九尺、

已上葺檜皮、御門一間、高九尺、長一丈三尺、防往籬一重、長六十丈、

〔江家次第十二神事〕伊勢公卿勅使

參荒祭宮、奉納師子形等、奉拜拍手如神宮、事了著直會殿、

〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭、十二月准此、

衆官退出、○中略就解齋殿、○度會宮直會殿給酒食、

〔大神宮儀式解五〕五丈殿、四丈殿、九丈殿共に、皆直會殿といふ、大神宮式月次祭には、此三殿を解齋殿といふ、齋を解て、直會の宴樂の殿なればなり、

〔皇大神宮年中行事六月〕一祭使參宮之間事○中略

御祭使、幷宮司之從坊、九丈殿也、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡禰宜內人神郡祝等、恩詔位記者、○中略就直會院第一殿、南面坐、○祭使四度以位記

二月例〇中略
秋收時爾、小内人祝部等乎率氏、大神乃御田万稲乎拔穗仁拔氏、〇中略大神宮乃御倉仁奉上、三節祭朝御饌夕御饌供奉、

〔兵範記〕仁安三年十二月卄日丁巳、今日子剋神宮奏狀到來、〇中略重注進、當宮内中外院、殿舍御垣御門靈木、禰宜内人等宿館燒失員數事、〇中略

御稲御倉壹字

件御倉所、奉納、每年三度御祭、由貴御饌料御稲併燒失、

調御倉壹字

件御倉所、奉安置神宮政印也、而炎上出來之間、於件御印者、僅所出奉也、抑件御印、元奉安置酒殿、去承暦三年、外院燒亡之時、於彼殿依燒損、被改鑄下之後、所奉安置代々執行禰宜宿館也、而猶依有其恐、去仁平年中、任其時祭主下知、奉安置彼御倉、

鹽御倉壹字

鋪設御倉壹字

件御倉所奉納、宮中鋪設裝束料、筵疊帽額簾等併燒失、

〔皇大神宮年中行事九月〕一同日、〇十一日自朝迄十七日夕、於御稲御倉、母良并織女一人所奉織也、於料糸者、正員禰宜所進也、〇中略又自長官筵一重、手水桶杓被下行、以之當番倜丁、每朝水汲、機殿進也、

〔神宮典略二〕此御倉〇御稲御倉を御機殿と云なり、〇中略延暦の比は禰宜の齋館にてや織けむ、かくて建久以前より此御倉は便利よき故に、假用て御機を織しなり、〇下略

〔皇大神宮年中行事十一月〕一同日〇十一日冬季諸社神態神事次第〇中略
御常供田當年作稲、於廳舍懸之後、御稲御倉奉納例也、而近代外幣殿、與御稲御倉、於中間懸來也、

こしまごろみけるに、告させ給ひけるとなん、

〈皇大神宮儀式帳〉幣殿一院　殿一宇、(長一丈五尺、弘一丈二尺、高八尺、)玉垣一重、(長十六丈二尺、)

一供奉幣帛本紀事

春宮坊、幷皇后宮幣帛、幷東海道驛使之幣帛、及國々處々之調、荷前雜物等、納外幣帛殿、(毎)年禰宜給之、

〈大神宮儀式解(四)〉此殿は現存の外幣殿なり、○中略內の東西寶殿にむかへて、外幣殿と云、又朝幣を內の寶殿に納め、皇后宮東宮幣已下、國々處々調物を此殿に納るより、外幣殿といふか、

〈延喜式(四伊勢大神宮)〉凡大神宮、廿年一度、造替正殿寶殿及外幣殿、

〈長秋記〉天永四年(○永久元年)八月六日、大臣仰頭辨、問伯卿云、可遷宮者、宮所何所哉、○中略親定卿申云、○中略進御他殿、可遷御候者、外幣殿屋有其便宜、○下略

〈兵範記〉仁安三年十二月卅日丁巳、今日子刻神宮奏狀到來、○中略重注進、當宮內中外院、殿舍御垣御門靈木、禰宜內人等宿館燒失員數事、○中略參間萱葺外幣殿壹宇

件殿所奉納、往古御神寶等倂燒失、

〈皇大神宮年中行事(十月)〉一同日(○一日)御綿奉納神事

司中政所兄部著衣冠、奉相具荷前御綿、○中略拜手之後、外幣殿奉納也、

〈皇大神宮儀式帳〉御倉一院

倉四宇、(長各一丈八尺、弘各一丈五尺、高一丈○一丈一本作八尺、)

臥堅魚木各四(○四一本作六)枚　玉垣(廻長昔八丈)

一年中行事幷月記事

八勾、長一尺七分、片方長六寸、片方長四寸七分、廣一寸九分、並花形堺打、穴各十四口、蟹目釘一百十二隻、長各一寸、頭徑一分半、二具用金平釘卅二隻、長各一寸總所須熟銅一百三十一斤三兩二分、半熟一百七十一斤、滅金八斤四兩、銀一兩二分一銖、

〔皇大神宮儀式帳〕齋內親王侍殿一間長四丈、弘一丈六尺、高一丈

番垣一重長三丈

〔中右記〕永久二年二月三日己酉、未刻許參著內宮、○中略於御子宿屋座取玉串間、作法頗異初儀、

〔皇大神宮年中行事〕公卿勅使、並臨時奉幣使參宮之間、風雨之難之時、於御子殿御子殿齋王候殿也被申詔刀之例也、

〔皇大神宮儀式帳〕女孺侍殿一間長四丈、弘一丈七尺、高一丈一尺

〔皇大神宮年中行事六月〕一祭使參宮之間事○中略

敷半疊一枚、齋王候殿與舞姬候殿、

〔大神宮儀式解四〕女孺侍殿は、○中略又これを舞姬候殿ともいふ、三節御祭の時、女孺五節舞奉仕するより、かくいふなり、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院

板垣廻長一百卅八丈六尺

〔兵範記〕仁安三年十二月卅日丁巳、今日子刻神宮奏狀到來、○中略

重注進、當宮內中外院殿舍御垣御門靈木、禰宜內人等宿館燒失員數事、○中略

御垣伍重○中略

荒垣壹重西北二方少々燒損

〔大神宮儀式解四〕此荒垣は、即こゝにいふ○上文皇大神宮儀式帳是也板垣なり、

〔玉葉和歌集二十神祇〕あまてらす月のひかりは神垣やひくしめ繩のうちさゝもなし

此歌は西行法師大神宮にまうでゝ、はるかにあらがきの外にて、心の內に法施奉りて○中略す

長一尺五分、廣六分、鎰一勾、長三尺四寸七分、柄長三寸五分、柄木金廣八分、柄木末徑一寸一分、木末口裏長八分、自柄至勾長五寸八分、勾金廣七分、自中至下廣六分、自勾至下二尺八分、緒厚三
分、柄中花形目拔有、又柄端著鐶、棟端金四枚、長各七寸五分、廣六寸五分、穴各八口、蟹目釘十六隻、長各一寸五分、頭徑一分中、桁端金四枚、長各七
寸五分、廣六寸五分、枚別穴八口、蟹目釘卅二隻、長一寸五分、頭徑一分半、垂椽端金八十六枚、方各三寸一分、枚別穴四口、蟹目釘三百卌四隻、長各一寸
五分、頭徑一分半、搏風端金四枚、長各七尺、廣三寸、穴四口、蟹目釘十六隻、長各二寸、頭徑一分半、鏡形木覆金廿四枚、徑各二寸一分、枚別足鋲立、長
一寸五分、榱懸木端金十六枚、徑各一寸六分、枚別足三鋲、立長一寸五分、搏風鋪十四口、徑各四寸、別足三立、妻窓塞押木打鋪十二口、徑各
一寸五分、別足三立、搏風上鋪廿口、徑各三寸、別足三立、高欄皃居丸桁端金十管、各徑三寸三分、長四寸、穴四口、釘卅隻、長各一寸、頭徑一分中、徑一寸中、○
徑以下四字廻桁、高欄中桁端金十枚、長各七寸、廣三寸八分、別穴六口、並花形鏤打、蟹目釘六十隻、長各一寸、頭徑寸(寸廻分說)中、一高欄土居桁端
金十枚、長各七寸、廣二寸八分、別穴六口、並花形鏤打、蟹目釘六十隻、長各一寸、頭徑一分中、高欄長押肱金四勾、長各一尺四寸、片方長七寸、廣三寸六分、勾別
穴十四口、花形鏤打、蟹目釘五十六隻、長各一寸、頭徑一分中、高欄障泥板鋪廿六口、徑各三寸、別足三立、高欄簀子敷釘覆金一百五
十隻、徑二寸一分、別足三立、高欄鋪九十二口、廿一口、徑各二寸一分、七十一口、徑三寸、口別足三立、高欄上座玉十八枚、赤四、白三、青三、黃四、(黃四下恐脫黑
四二字)玉高三寸四分、徑三寸七分、玉固釘十八隻、長各二寸、玉位花形金十八枚、徑各五寸六分、花枚別穴各一口、又玉位花形下金十八枚、
長各七寸、廣四寸七分、穴各五口、蟹目釘一百四隻、長各一寸、頭徑一分中、御橋玉六枚、赤二、白一、青二、黃四、高各三寸四分、徑三寸七分、玉固釘六隻、長各
二寸、御橋玉位花形六枚、徑各五寸六分、御橋玉位花形下金六枚、長各七寸、廣四寸、並花形穴各四口、蟹目釘廿四隻、長各一寸、頭徑一分中、
御橋鋪廿八口、徑各三寸、別足三立、壁角柱長押肱金四枚、長各一尺二寸、廣三寸七分、片方六寸、別穴十四口、蟹目釘五十六隻、長各一寸、頭徑一分
中、壁柱長押釘覆鋪十四口、徑各三寸、別足三立、板敷釘覆金一百隻、徑各二寸一分、別足三立、北御門牒釘覆金五枚、徑各一寸五分、
別足三立、鋪八口、徑各三寸、別足三立、雙桶一枚、長四寸、穴長一寸、廣三寸、穴口五分、穴六口、蟹目釘六隻、長各一寸、頭徑一分中、鎰外覆金六枚、徑各一寸
一分、別穴三口、蟹目釘十八隻、長各一寸、頭徑一分中、鎰三勾、青長各二寸四分、廣六分、足長一寸七分、厚四分、臺長三寸、廣三分、位金六枚、徑一寸五分、峴懸鐶
三枚、長各一寸五分、頭徑六分、位金三枚、徑各一寸二分、南草葺御門三間料鋪六十六口、徑各三寸、別足三立、蕃御門一間料鋪八口、
徑各三寸、別足三立、御門三間牒釘覆金十五枚、徑一寸中、別足三立、御門四間峴懸鐶十二隻、長各一寸五分、頭徑三分、位金十二枚、徑各
一寸中、寳殿二間搏風釘覆鋪廿八口、徑各三寸、足三立、御床四具之中、二具用金花形釘卅六隻、徑七分、長一寸、臺肱金

御門、各中絶南第五門、現存、冠木鳥居といふ、已上の八間なるべし、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮遷奉御装束用物事

御門四間生絁御幌四帳

瑞垣御門帳一條、長七尺八寸、弘四幅蕃垣御門帳一條、長八尺八寸、弘五幅玉串御門帳一條、長八尺八寸、弘五幅玉垣御門帳一條、長七尺四寸、弘三幅

〔延喜式四伊勢大神宮〕修飾神宮調度

南草葺御門三間料鋪六十六口、徑各三寸、別足三立、

〔皇大神宮儀式帳〕玉垣三重

一玉垣、長十四丈二玉垣、廻六十丈三玉垣、廻百二丈

〔大神宮儀式解四〕一玉垣は、○中略南一面にて四方には廻らず、蕃垣御門は此垣に属たり、○中略二玉垣は、○中略四方に廻れり、中世絶たるを、寛文遷宮の時再興せらる、○中略南北に御門あり、南は玉串御門、北は板葺の御門也、○中略三玉垣は、○中略四方に廻り、四面に門あり、南は第四御門、東北西各板葺御門一間づゝあり、

〔延喜式四伊勢大神宮〕修飾神宮調度

正殿内張帳鎰一百卅二勾、背長各一寸、廣二分中、莖長一寸、厚二分中、足厚二分、戸引手二勾、鐶徑各三寸六分位金二枚、花形徑各三寸引手内塞覆金二枚、花形徑各一寸九分、枚別穴三口、蟹目釘六隻、長各一寸、頭徑一分半、鎰三勾、背長各二寸四分、廣六分、莖長三寸、足長一寸七分、厚四分、廣三分、鎰位金八枚、花形徑各一寸五分鎰外覆花形金八枚、徑各一寸九分、枚別穴三口、蟹目釘廿四隻、長各一寸、頭徑一分半、雄楯金一枚、長六寸一分、廣三寸六分、穴長一寸九分、廣六分、蟹目釘八隻、長各一寸、頭徑一分半、鏁釘覆金五枚、徑各一寸六分、足各三、鑄立、鏁戸上下關鋪八口、徑各三寸、足三、鑄立、幌懸鐶三枚、長各一寸五分、穴徑三分、頭徑六分、位金三枚、徑各一寸二分鏁一具、管長四寸五分、管口徑一寸七分、自勾至末二寸七分、管廣厚各二寸、自舌莖本至勾一寸四分、擬雄徑五分、長八寸、鏁打立二枚、頭徑一寸三分、足長一寸五分、足本廣一寸、穴徑六分、足廣七分、厚二分半、莖長三寸、位金二枚、花形徑各一寸五分匙一枚、

〔大神宮儀式解 四〕瑞垣は〇中略正殿寶殿の四面を圍み廻る〇中略宿衛屋は〇中略延曆の頃四字あり、其跡いづこにや明ならず、後花園天皇御代の頃迄はわづかにものこりし歟、寛正造內宮記、番直所造替の事見えたり〇下略

〔寛正造內宮記〕十二月一日、〇寛正三年依正殿之御前狹、諸神事無據、且亦御火之炎、御殿之軒危不少之間、瑞籬被廣者可然由、連々依神宮之訴訟、今度申沙汰、瑞籬、番垣、玉串等御門各一丈宛南寄、御垣各一丈廣、因玆坤角地形窪間五尺餘、石倉壘地築上、去月廿四日今日沙汰之、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院

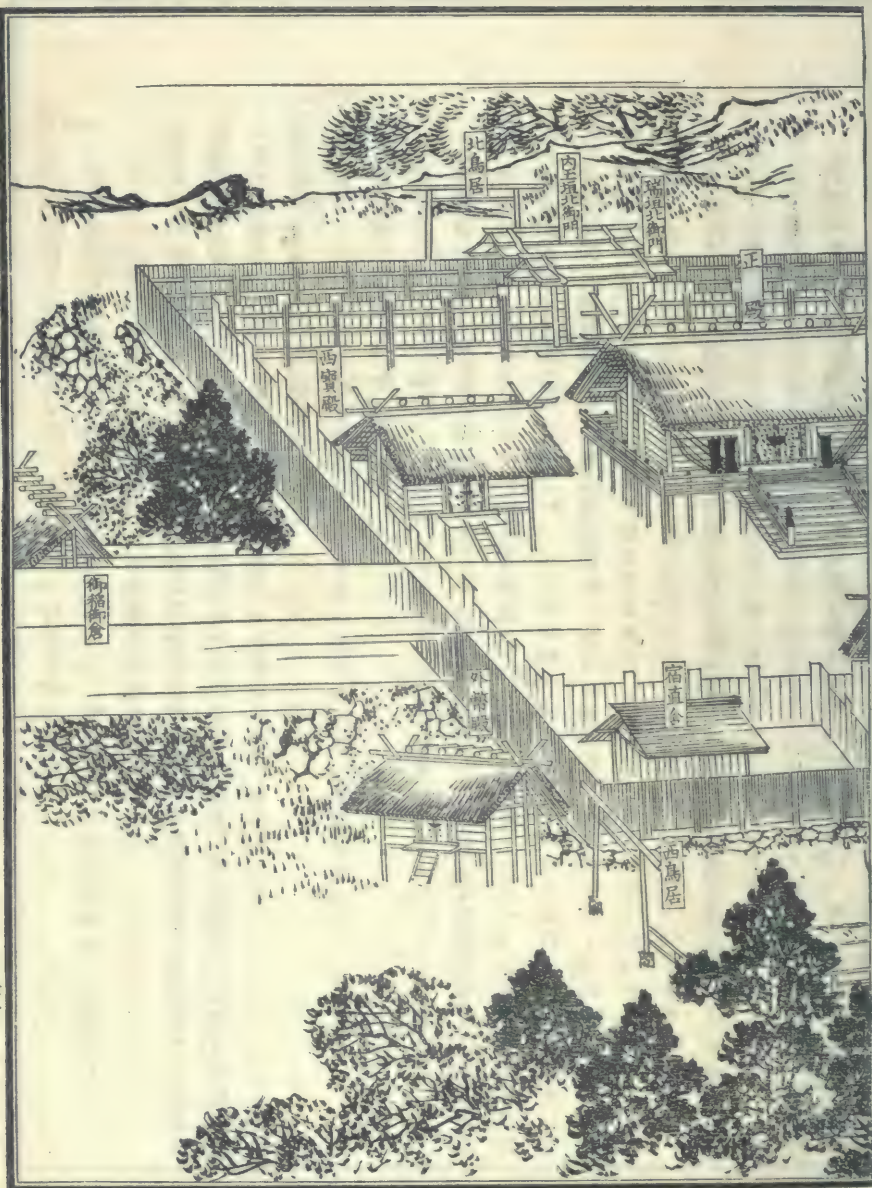
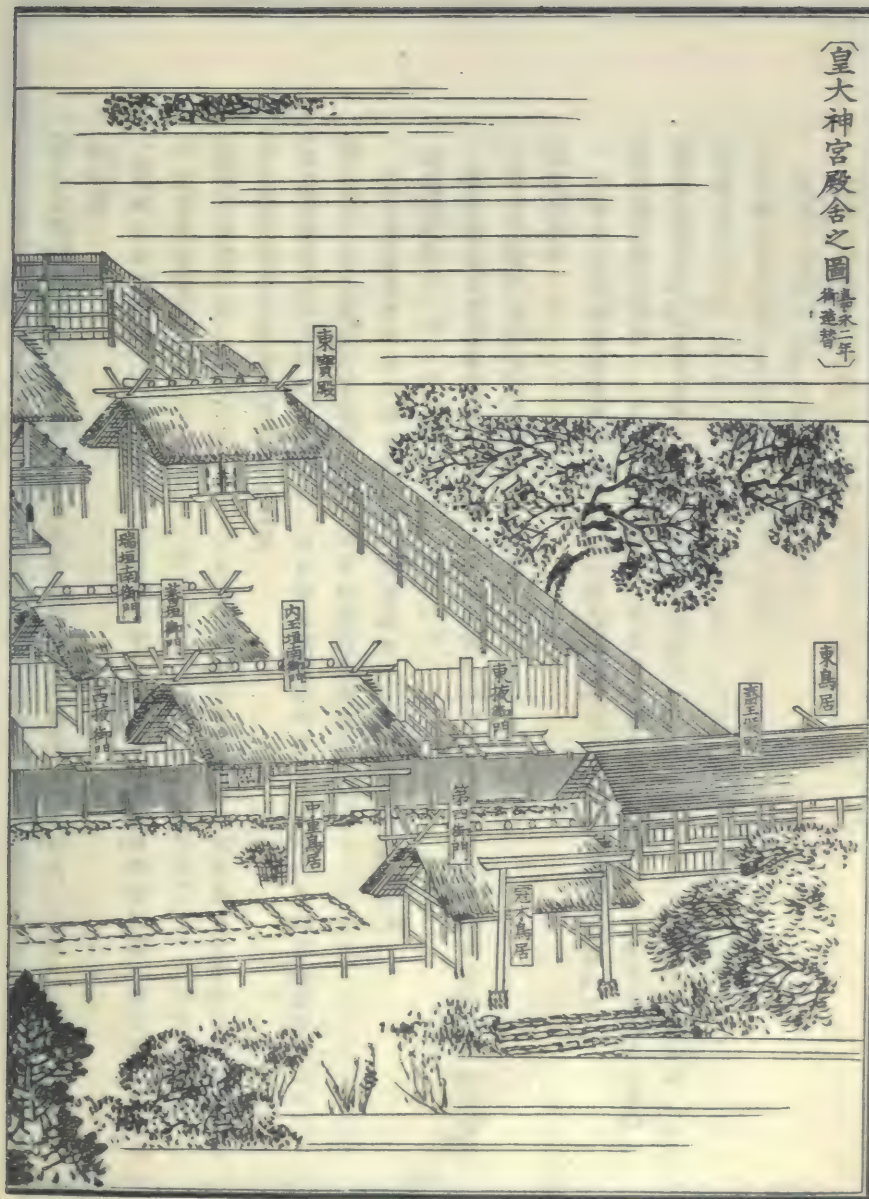
御門十一間

於葺御門三間 各長一丈五尺 弘一丈 高九尺

於不葺御門八間 各長一丈三尺 高九尺

〔大神宮儀式解 四〕於葺は宇倍布玖とよむべし、〇中略於を宇倍とよむは古代常の事にて、大寶元年紀正月、山於億良とあるを和銅七年紀正月には、山上臣憶良とかき、〇中略萬葉十一歌、劒刀諸刃之於荷、同十九歌、寺井之於之〇中略など見ゆ、〇中略御門三間といひて、其門々の名は見えねど、下新宮造御装束に、瑞垣御門帳一條、玉串御門帳一條、玉垣御門帳一條と見えたり、蕃垣御門は板葺にて、於葺御門にならず、次於不葺御門の中に在り、大神宮式、長曆官符等、南草葺御門三間といふもこれなり、〇中略於不葺は宇倍布加奴とよむべし、板葺を云、草もて葺ねば、於不葺とはいふなり、葺はもと草に限ればなり此八間を、今の一鳥居、二鳥居、西鳥居、俗に三鳥居といふ南鳥居、東鳥居、北鳥居、八重榊鳥居、蕃垣御門なりといふは不勘なり、下女孺侍殿の次に、板垣廻長一百卅八丈六尺と見えて、是より上は大宮一院なり、此內に收める御門八間なれば、外院の鳥居には及ばず、仍て考に、こゝに云八間は、瑞垣北御門、現存蕃垣御門現存、これを俗に蕃頭門とよべり、內玉垣北御門、現存南第三御門、現存、後には鳥居とし、八重榊鳥居といふ、外玉垣東御門、西御門、北

北鳥居
内玉垣北御門
瑞垣北御門
正殿
西寶殿
御稲御倉
外幣殿
宿直舎
西鳥居

皇大神宮殿舍之圖（嘉永二年御造替）

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年八月辛卯、夜有盜燒伊勢大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門三間、瑞籬一〈○類聚國史作三〉重、

〔大神宮諸雜事記一〕延曆十年八月五日夜子時、大神宮御正殿、東西寶殿、幷重々御垣御門、及外院殿舍等、併掃地燒亡、

〔大神宮諸雜事記二〕長曆三年五月十二日、宣旨偁、內大臣宣、奉勅二所大神宮官幣、式日臨時幣物、自今以後永應東寶殿奉納、已以爲例矣者、

〔山槐記〕永曆二年〈○應保元年〉四月十八日庚申、今日被發遣伊勢幣云々、〈○中略〉彼神寶納東寶殿云々、

〔兵範記〕仁安三年十二月卅日丁巳、今日子刻神宮奏狀到來、〈○中略〉

重注進、當宮內中外院殿舍御垣御門靈木、禰宜內人等宿館燒失員數事、〈○中略〉

東寶殿壹宇、

件殿所奉納、例時奉幣使參宮時、被進納綾兩面羅絹、神服麻績兩機殿神部等勤進、二季神御衣、每年六九兩月御祭時、宮司勤進、荷前御調絹糸等併燒失、又鎰燒損、

西寶殿壹宇、

件殿所奉納、往古御神寶、幷每年九月御祭時被進納、官下御鞍等併燒失、又鎰燒損、

〔皇大神宮年中行事九月〕一同〈○十七日〉夕部、〈○中略〉祭使等各參進、〈○中略〉三禰宜西寶殿奉納神馬御鞍、〈○下略〉

〔類聚大補任龜山〕文永九年二月八日、勅符御願書、使祭主宮司等參二宮、件勅符御願書奉納內宮東寶殿畢、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院〈○中略〉

瑞垣一重〈長卅(卅、一本作丗)九丈、高一丈、〉

宿衞屋四間〈長各二(二、一本作一)丈

上搏風肆枚、長二丈八尺、弘八寸、厚四寸、號稱比木、釘覆大坩、
堅魚木十枚、長各七尺、徑一尺七寸、材木別端以金飾、
○按ズルニ、比木、古事記ニ氷椽ニ作ル、後世ニイハユル千木是ナリ、
〔大神宮諸雜事記二〕長曆元年月日、依宣旨、大神宮ノ正殿ノ堅魚木ノ木尻ノ貫木、左右端泥障板、左右端榱懸端等乃金物等被奉加餝、
〔風雅和歌集神祇十九〕題しらず　度會朝棟
かたそぎの千木は內外にかはれどもちかひはおなじいせの神風
〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院
寶殿二字、長各二丈一尺、廣各一丈四尺、竝搏風上、○搏風上一本作上搏風、
鏁二具、打立四隻目塞四枚、
戶具鎰一勾鎰六勾徑(徑恐誤字)四枚　緣立二枚戶坏四枚　引手二勾編目釘十二隻
卧堅魚木各八枚、
〔大神宮儀式解四〕寶殿の堅魚木、延曆には各八枚あり、いつの代よりか六枚とし、又木口金物あり、今の世も然り、
〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事
四月例
以十四日、神服織神麻續神部等造奉、大神御服供奉時、中略○宮司常例告刀申畢氏、持參入東寶殿奉上泥出、
九月例
十七日、中略○大物忌父、開東幣帛殿、御馬鞍具進上畢、

殿舍

近山乃大峽小峽留立材乎、齋部之齋斧乎以天、伐採天、本末乎波山祇留奉祭氏、中間乎持出來氏、齋鉏乎以天齋柱立、一名天御柱、一名心御柱、高天原仁千木高知利、下都磐根仁大宮柱廣敷立天、天照大神、竝荒魂宮、和魂宮止、奉鎭坐、于時美船神、朝熊水神等御船仁乘奉利氏、五十鈴之河上仁遷幸、于時河際仁天、志倭姬命御裳裔長計加禮侍介留於、洗給倍利、從其以降號御裳須曾河也、采女忍比賣、造天平賀八十枚、令天富命孫作神寶鏡大刀小刀矛楯弓箭木綿等、備神寶大幣矣、爾時皇大神倭姬命乃御夢喻給久、我高天原仁坐、延戶押張原如見見志眞伎志國宮處波是處也、鎭利定理給止覺給支、于時倭姬命、竝御送驛使安部武渟河別命、和珥彥國葺命、中臣國摩大鹿島命、物部十千根命、大伴武日命、竝度會大幡主命等仁、御夢狀具令敎知給支、于時大幡主命悅白久、神風伊勢國、百船度會縣、佐古久志呂宇治五十鈴河上鎭利定利坐皇大神止國保伎奉支、終夜宴樂舞歌、如日少宮之儀志、爰倭姬命、朝日來向國、夕日來向國、浪音不聞國、風音不聞國、弓矢鞆音不聞國、打摩伎志賣留國、敷浪七保國之吉國、神風伊勢國之、百傳度會縣之、拆久志呂五十鈴宮留鎭理定理給止國保伎給支、于時送驛使、朝廷還詣上、倭姬命御夢狀細返事白支、爾時天皇聞食氏、卽大鹿島命祭官定給支、大幡主命神國造兼大神主定賜支、神館造立物部八十友諸人等率雜神事取總捧天、太玉串供奉、因興齋宮宇治縣五十鈴川上大宮際、令倭姬命居焉、卽建八尋機屋、令天棚機姬神孫八千々姬命織大神御衣、譬猶在天上之儀焉、謂號宇治機殿是也、一名號磯宮也、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院

正殿壹區長三丈六尺、高一丈一尺、廣一丈八尺

御橋一枚長六尺、廣五尺、高欄四方廻高三尺、廣二尺五寸

飾金花形、幷戶具於居坩、殿扉金鏁壹具、

飾金御鎰壹勾　已上從朝廷官庫奉入

一書曰、略○中六十四年丁亥、遷幸伊賀國隱郡市守宮、二年奉齋矣、活目入彥五十狹茅天皇仁○垂即位略○中四年乙未夏六月晦日、遷幸淡海甲可日雲宮、四年奉齋、十年辛丑秋八月一日、遷幸于美濃國伊久良河宮、四年奉齋、次遷于尾張國中島宮、坐天、三箇月奉齋、倭姬命國保伎給、

〔大神宮諸雜事記一〕天皇仁○垂即位廿五年、丙辰天照坐皇大神天降坐於大和國宇陀郡、略○中抑皇大神宮勅託宣偁、我天宮御宇之時、天下四方國攝錄可天下宮所、放光明見定置先畢、仍彼所可行幸御之由宣、倭姬內親王奉戴天、先伊賀國伊賀郡一宿御坐、卽國造奉其神戶、次伊勢國安濃郡藤方宮御坐三年之間、略○中次尾張國中島郡一宿御坐、國造進中島神戶、次三河國渥美郡一宿御坐、國造進渥美神戶、次遠江國濱名郡一宿御坐、國造進濱名神戶、從此等國更還天伊勢國飯高郡御坐、略○下

〔倭姬命世記〕活目入彥五十狹茅天皇仁○垂即位略○中廿五年丙辰春三月、從飯野高宮遷幸于伊蘇宮、略○中從其矢田宮幸行支、次家田田上宮遷幸支、其宮坐時度會大幡主命、皇大神乃朝御氣夕御氣處乃御田定奉支、宇遲田田上爾在、名拔穗田是也、從其幸行奈尾之根宮坐給、于時出雲神子、出雲建子命、一名伊勢都彥神、一名櫛玉命、並其子大歲神、櫻大刀命、山神大山罪命、朝熊水神等五十鈴川後江爾天奉御饗、于時猿田彥神裔宇治土公祖大田命參相支、汝國名何問給爾、佐古久志呂宇遲之國止白氐、御止代神田進支、倭姬命問給久、有吉宮處哉、答白久、佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者、是大日本國之中仁、殊勝靈地侍奈利、其中翁世八萬歲之間仁毛、未視知、爾有靈物、照耀如日月奈利、惟小緣之物不在志、定主出現御坐爾時可獻止念比氐、彼處爾禮祭止申勢利、卽彼處仁往到給天御覽介波、惟昔大神誓願給比天、豐葦原瑞穗國之內仁、伊勢加佐波夜之國波、有美宮處止利見定給比、從上天投降坐志比天之逆大刀逆桙金鈴等是也、甚喜於懷比氐、言上給比支、廿六年丁巳冬十月甲子、奉遷于天照大神於度遇五十鈴河上、留、今歲倭姬命詔、大幡主命、物部八十友諸人等、五十鈴原乃荒草木根刈掃比、大石小石取平氐、遠山

支、彼時竹首吉比古乎、汝國名何問賜只、白久、百張蘇我乃國、五百枝刺竹田乃國止白支、即楠田根椋神御田進支、次玉岐波流礒宮坐只、次百船乎度會國佐古久志呂宇治家田田上宮坐支、爾時宇治大內人仕奉宇治土公等遠祖大田命乎、汝國名何問賜支、是川名佐古久志留伊須々乃川止申、是川上好大宮地在申、即所見好大宮地定賜比支、朝日來向國、夕日來向國、浪音不聞國、風音不聞國止、弓矢鞆音不聞國止、大御意鎭坐國止、悅給氐大宮定奉支、

〔皇字沙汰文上〕伊勢天照坐皇大神宮司并二宮禰宜等解申注進神宮色々雜事、依宜旨注進二宮供奉神事上代本紀拾肆箇條狀、

皇大神朝御饌夕御饌供奉本紀

志貴瑞籬宮御宇崇神天皇以往御世波、天皇乃相殿坐聞食支、○上恐有脫字然後宮內大庭穗椋乎造出奉津、皇子以豐鋤比賣命乎、令供奉、次纏向珠城宮御宇垂仁天皇御世爾、以倭姬命乎令供奉、○中略

右依太政官去延曆廿五年七月三日符之旨、被下神祇官、同十二日符併子細々具也、

大同二年二月十日　豐受神宮大內人神主

大神宮大內人神主○署名以下略

〔釋日本紀述義七〕大同元年大神宮本紀曰、御間城入彥五十瓊殖天皇○崇神于時天照大神乞給國伊豆久曾止、隨大神敎命求坐奉止詔、皇子豐次比賣命奉載而、從倭內國始而覓給云云、從此幸行而木乃國奈久佐濱宮三年齋奉、其時紀國造進地口御田、

〔倭姬命世記〕御間城入彥五十瓊殖天皇○崇神即位○中略三十九年壬戌三月三日、遷幸但波乃吉佐宮、積四年奉齋、從此更倭國求給、此歲豐宇介神天降坐奉御饌、四十三年丙寅九月九日、遷倭國伊豆加志本宮、八年奉齋、五十一年甲戌四月八日、遷木乃國奈久佐濱宮、積三年之間奉齋、五十四年丁丑、遷吉備國名方濱宮、四年奉齋、

如く、此御鏡は先伊勢に降著賜ひしを、日向に著賜へる御孫命の御許に、送奉り置て、猿田彥神は、御暇を賜はりて、又伊勢に歸り賜ひしなり、此間の事、なほ下に委云べし、抑此御鏡は、しばらくも皇御孫命の大御許を離ち奉り給ふまじきわざなるに、日向と伊勢と、分れて降著賜へらむことはいかゞと疑ふ人有べけれど、天上より遙に降賜ふなれば、日向と伊勢と放るといへども、同じく葦原中國の内にしあればなほ一處に降著給へるなり、されば後に又伊勢に遷奉賜へれども、初の大御神の詔旨に違はせ賜はざるも、同皇國の内なるが故なり、

〔皇大神宮儀式帳〕一天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

纏向珠城宮御宇活目天皇仁〇垂御世爾、倭姫内親王遣、爲御杖代齋奉支、美和乃御諸原爾造齋宮出奉天、齋始奉支、爾時倭姫内親王、大神乎頂奉氐、願給國求奉時爾、從美和乃御諸宮發氐、令出坐支、爾時御送驛使、阿倍武渟川別命、和珥彥國葺命、中臣大鹿嶋命、物部十千根命、大伴武日命、合五柱命等、爲使氐令入坐支、彼時宇太乃阿貴宮坐只、次佐々波多宮坐只、其爾卽大倭國造等、神御田幷神戶進只、次伊賀穴穗宮坐只、次阿閉柘殖宮坐只、其爾卽伊賀國造等、神御田幷神戶進支、次淡海坂田宮坐只、次美濃伊久良賀宮坐只、次伊勢桑名野代宮坐只、其宮坐時爾、伊勢國造遠祖建夷方乎、汝國名何問賜、曰久、神風伊勢國止白支、卽神御田幷神戶進支、次河曲、次鈴鹿小山宮坐支、彼時川俣縣造等遠祖大比古乎、汝國名何問賜只、白久、味酒鈴鹿國止白支、其卽神御田幷神戶進支、次安濃縣造眞桑枝乎、汝國名何問賜支、白久、草蔭安濃國止白支、卽神御田幷神戶進支、次壹志藤方片樋宮坐只、其在阿佐鹿惡神平、驛使阿倍大稻彥命、卽御共仕奉支、彼時壹志縣造等遠祖建呰子乎、汝國名何問賜支、白久、宍往呰鹿國止白只、卽神御田幷神戶進支、次飯高縣造乙加豆知乎、汝國名何問賜只、白久、忍飯高國止白支、卽神御田幷神戶進支、而飯野高宮坐支、彼時佐奈乃縣造御代宿禰乎、汝國名何問賜支、白久、許母理國志多備乃國、眞久佐牟氣草向國止白支、卽神御田幷神戶進支、而多氣佐々牟迤宮坐

字を書り、故ミヤともヤシロとも訓ずして、イハヒとは訓るなり、然れば此も、祠るべき處を、伊勢國と定めて、さて五十鈴川上に其宮を興と云るなり、次に是謂磯宮とあるは心得ず、此五十鈴宮を、磯宮と申せること、此外にさらに見えたることなし、故思に、是は儀式帳などに、五十鈴宮に鎭坐むとせし前に、磯宮坐とある、其は神名帳に、度會郡磯神社、和名抄にも、同郡に伊蘇鄕ありて、今も磯村と云、此地にしばらく坐しゝを、磯宮といふ、但し其磯宮は、度會郡なるには非ず、多氣郡の相可鄕のあたりなりとも云り、其はいかにもあれ、此は其伊蘇といふと、伊須受と云と、名の似たる故に、混ひし傳なり、されば此は、決めて磯宮とは云べきにあらず、謂五十鈴宮とこそ有べきことなれ、次に天照大神始自天降之處也と云ことを、いと〳〵心得がたかりしを、近きころ思得たり、さるは古傳の趣にはよらずして、たゞ例の己が心に隨せて云る說どもは、くさ〳〵あれども、そはみなわたくしごとなれば、取にたらぬを、己が思ひ得たりと云は、先初に猿田彥神の答に、吾先啓行云々、天神之子則當到筑紫日向、吾則應到伊勢と申し賜へる、そもそも皇孫命の日向國に降坐むに、その啓行の神の、伊勢にしも降給ふこと深き所以あり、豐受宮儀式帳に、天照坐皇大神、度會乃伊須々乃河上爾大宮仕奉、爾時大長谷天皇御夢爾誨覺賜久、吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴云々とあり、かゝれば此御靈鏡を、後遂に此地に鎭坐しめむとは、大御神御自高天原にして、豫てより所念設けたることなり、されば猿田彥神の、啓行ひながら、此伊勢に到たまふも、古語拾遺に、始在天上預結幽契、衢神先降深有以矣、と見えたる如く、本より此由緣あるゆゑに、此御靈鏡を、終に鎭坐べき處へ、先導送り奉らむためなり、故其御天降の時に、皇御孫命に附副ひて、此御鏡を戴齋奉れる御從神は、彼啓行神の導きのまに〳〵、おのづから先此伊勢國に降著しなり、始自天降とは、此時の事なりけり、若然らずは、日向へ降賜ふ御孫命の啓行神の、伊勢へ降賜はむこと何の由もなく、徒ならずや、さて右の

〔日本書紀垂仁六〕二十五年二月甲子、詔阿倍臣遠祖武渟川別、和珥臣遠祖彦國葺、中臣連遠祖大鹿嶋、物部連遠祖十千根、大伴連遠祖武日、五大夫曰、我先皇御間城入彦五十瓊殖天皇、崇神惟叡作聖、欽明聰達、深執謙損、志懷沖退、綢繆機衡、禮祭神祇、剋己勤躬、日愼一日、是以人民富足、天下太平也、今當朕世、祭祀神祇、豈得有怠乎、三月丙申、離天照大神於豐耜姫命、託于倭姫命、爰倭姫命、求鎭坐大神之處、而詣菟田筱幡、筱此云佐佐、更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神、誨倭姫命曰、是神風伊勢國、則常世之浪、重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神教、立其祠於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、乃天照大神、始自天降之處也、一云、天皇以倭姫命爲御杖、貢奉於天照大神、是以倭姫命、以天照大神、鎭坐於磯城嚴橿之本而祠之、然後隨神誨、取丁巳年冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮、

〔日本書紀通證垂仁十一〕丁巳年廿六年也冬十月甲子冬十月宮作秋九月、澁川氏曰、以長暦推之、此年十月無甲子、九月十七日爲甲子、至今内宮祭日也、

〔古事記傳十五〕此文にまぎらはしき事どもあり、よくせずは誤りぬべし、まづ其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上とある、齋宮即大御神宮なり、しかるを古語拾遺倭姫命世記などに、文を少し換て、此を倭姫命の坐宮の如く記せるは、御世々々の齋王の宮をも、齋宮と申す故に、其と心得たるひがことなり、齋王の宮を云は、其王の坐宮と云意、此は大御神を齋奉る宮といふことにて、同名ながら意異なり、抑此には、大御神の宮をこそ、委曲には記すべきことなるに、其をば只祠立於伊勢國とのみ、大かたに云て、齋王の坐宮をしも、却て具に五十鈴川上といふべきに非ず、萬葉なる人麻呂の長歌に、渡會乃齋宮とよめるも、必大御神の宮とこそ聞えたれ、且倭姫命に宮と云て、大御神に祠とは云べくもあらず、然れば立字は、定を誤れるなるべし、神の夜志呂には、皇國にては、凡て社字を用ひ、又宮といふ、其中に此大御神などには、必宮と申す例なるに、祠とあるは、字義はさることなれども、たゞに其宮を申せるにはあらず、その祭るべき處をいへるなり、雄略卷に、稚足姫皇女侍伊勢大神祠とある祠も、拜祭給ふ意を帶たる故に此

起原

勅云、兒屋太玉宜侍殿內、因之言之、二神不宜相離也固矣、且世記及弘安九年大神宮參詣記、諸社根元記一說、竝以兒屋太玉爲相殿、自雄略朝、以手力男豐秋津姫代之、以兒屋太玉陪侍豐受宮、其說古史所不載、姑附備考、

〔古事記上〕爾天照大御神高木神之命以、〇中略科詔日子番能邇邇藝命、此豐葦原水穗國者、汝將知國言依賜、故隨命以可天降、〇中略於是副賜其遠岐斯此三字以音八尺勾璁、鏡、及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神而詔者、此之鏡者、專爲我御魂而、如拜吾前伊都岐奉、次思金神者、取持前事爲政、此二柱神者、拜祭佐久々斯侶伊須受能宮、自佐至能以音

〔日本書紀神代一〕一書曰、日神擧體不平、故以恚恨、迺居于天石窟、閉其磐戸、于時諸神憂之、乃使鏡作部遠祖天糠戸者造鏡、〇中略於是日神、方開磐戸而出焉、是時以鏡入其石窟者、觸戸小瑕、其瑕於今猶存、此卽伊勢崇秘之大神也、

〔古語拾遺〕天照大神赫怒、入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、〇中略於是從思兼神議、令石凝姥神、鑄日像之鏡、初度所鑄少不合意、是紀伊國日前神也次度所鑄其狀美麗、是伊勢大神也儲備既畢、具如所謀、

〔延喜式四伊勢大神宮〕造備雜物、

大神宮船代三具、一具正宮料、長七尺三寸、內五尺七寸、廣二尺五寸、內二尺、高二尺一寸、內深一尺四寸、二具相殿神料、各長七尺六寸、內七尺六分、廣一尺五寸、內深一尺五分、高一尺七寸、內深一尺、樋代一具、正宮料、高二尺一寸、深一尺四寸、內徑一尺六寸三分、外徑二尺、〇又見皇大神宮儀式帳

〔大神宮儀式解八〕御樋代ハ、〇中略御正體をひめ奉る具也、〇中略新宮を造り奉る時、此樋代を作り替奉るは、代々の遷宮記に見え、今の世もたがはず、此外黃金の御樋代あり、さいへり、重々口傳ありといへり、

〔日本書紀五崇神〕六年、百姓流離、或有背叛、其勢難以德治之、是以晨興夕惕、請罪神祇、先是天照大神、和大國魂二神、竝祭於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑、仍立磯堅城神籬、神籬此云比莽呂岐亦以日本大國魂神託渟名城入姬命祭、〇又見皇大神宮儀式帳、古語拾遺、

祭神
神體

此度內宮近邊火除地出來候樣被仰出候間、御厩近邊ニ住居之町家爲引拂、跡地坪千百九十坪餘、幷往還世古等之坪數四百二十二坪、都合千、六百十二坪餘御買上ニ相成、家造取拂、火除地相成候間、右繪圖之地所、御宮地續之義ニ付、向後於神宮差配可致候、

七月

〔延喜式四伊勢大神宮〕大神宮三座在度會郡宇治鄕五十鈴河上

天照大神一座

相殿神二座

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

天照坐皇大神所稱天照意保比流賣命

同殿坐神二柱坐左方稱天手力男神、靈御形弓坐、坐右方稱萬幡豐秋津姬命也、此皇孫之母、靈御形劔坐、

〔倭姬命世記〕相殿神二座左天兒屋根命、形弓坐、右天太玉命、形劔坐、

一書曰、天手力男神　萬幡豐秋津姬命

〔通海參詣記〕左ノ相殿、右ノ相殿、是ハ御殿ノ內ニ御床ヲ並テ、左右ニ御體ヲ守護シ奉給御神也、天照大神ノ皇孫尊ヲ此國ニ下シ奉リ給シ時、吾御カタチヲウツシテ春日大明神、太玉ノ御尊ヲ御體ニ相添テ、ハナレズ同殿ニ居シテ守リ奉ルベシト御契リ侍リシニ依テ、左右ノ相殿ト申テ、今モ御戸ノ內ニヲハシマス、

〔日本書紀神代二〕一書曰、天照大神手持寶鏡、授天忍穗耳尊而祝之曰、吾兒視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡、復勅天兒屋命太玉命、惟爾二神亦同侍殿內善爲防護、

〔大日本史神祇六〕按配享神、古事記爲思兼神一座、可疑、儀式帳云、天手力男神在左、萬幡豐秋津姬命在右、然手力男祠在左那縣、卽不宜祀于此、豐秋津姬女神、以劍爲神體、可疑、故不取、書紀載神

皇大神宮域内略圖（嘉永二年御造替）

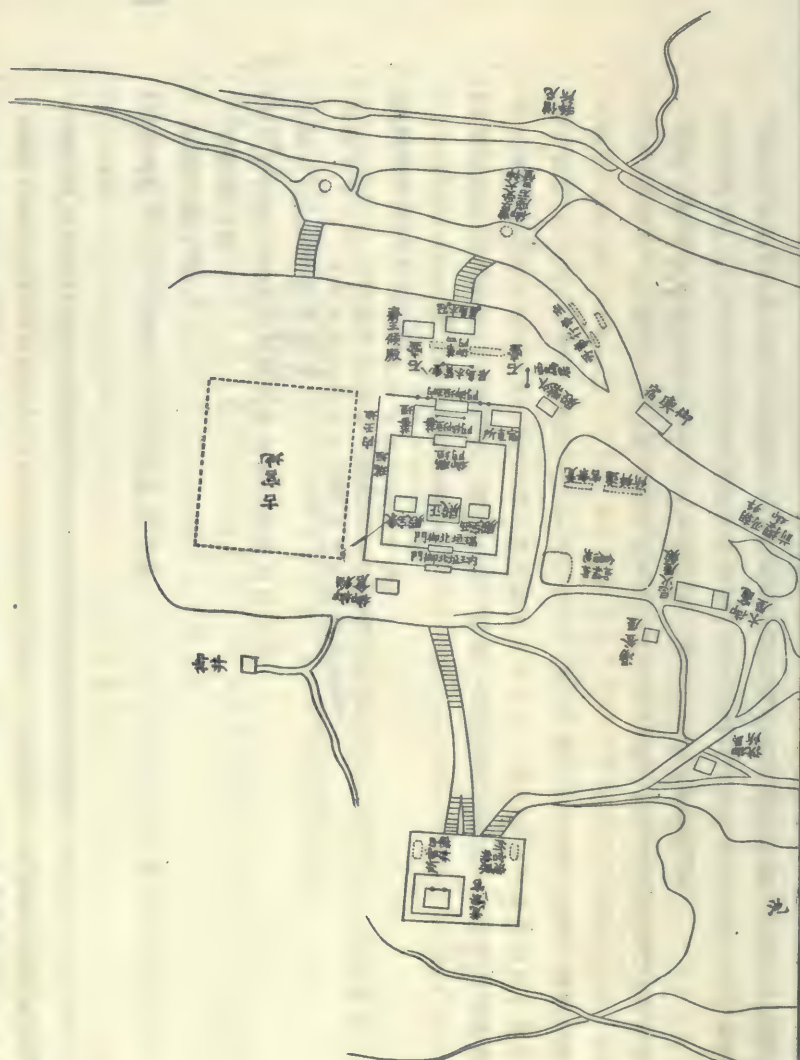
五十鈴川

文殿

神庫

第一鳥居

火除地

御

御狀幷壹卷之事、はや宮中へ罷出候故、あら〳〵一覽事得其意候、古法之儀ハ不存候へ共、一兩日以來拙者存寄、神子御一卷之通候間、可御心易候、彌今日於彼地可及御相談候以上、

後十二月四日　岩代半之亟

大宮司殿

〔新御火除地之記〕文政十三年〈○天保元年〉四月十一日、上卿御方〈轉法輪大納言實萬卿〉より、丹羽出雲守、祭主殿〈光忠卿〉より水口常陸入來ニ付、一三四五禰宜出會候處、出雲守被申聞候ハ、此度〈○閏三月十九日〉荒祭宮幷殿舍燒失之儀ハ、全宮中江人家近ク候事故與被存候間、宇治大橋より東南之町家ハ不殘爲引拂、乍併禰宜權禰宜物忌內人等之神役相勤候モノハ、本宮衞護ニモ可相成候間、大橋近邊江爲建候樣、乍併爲內人賣店ハ如何ニ候由思召候、右ニ付於神宮差支等モ無之哉、御尋申入候樣大納言殿被命候、尙又右引拂ニ付而者、替地等モ入可申候、其儀ハ關東江殿下〈○鷹司政通〉より御懸合可被遊候、差支無之候ハヽ、禰宜中印紙請書御差出し可被成候との事故、被仰下候御儀難有承伏仕候御請書差上可申旨申入候也、

天保三年六月九日深更、司家〈○大宮司〉ヨリ使者ヲ以テ達來如左、〈○中略〉

御敎書

依去文政十三年內人住宅失火、其災延及外院、剩奉動搖神座、叡慮最不安、是全人家近于宮中之所致乎、依是後來設除火地、可奉禦火災之旨、可被下知神宮之狀如件、

六月七日　中辨判

四位史殿

七月十七日、御役所勤內宮長官神主中總代井面兵部薗田三神主罷出、〈○中略〉御渡し被成候御書付如左、

右得宮司去十一月廿七日解狀偁、彼宮神主解狀偁、謹檢案內、大神宮〇皇大神宮四至、東南西深山、無有人宅、北限宇治河者、其程去宮一里餘、此內不住人宅、禁制尤嚴、此則爲穢事也、

延長四年四月十一日〇節略、全文見于豐受大神宮宮域條、

〔萬治元年內宮炎上記〕三日〇閏十二月夜、宮司〇河邊精長來臨于延良亭、弘正、末清、予〇小田成近候、食申以此折節破山伏宅、件宅者、五十鈴川大橋爾祢向、有山伏觀同職者、居此河邊、勤進于往還人、住明應七年修造此橋了、自爾居住于茲、其昔雖爲勤進所之小屋、經年月漸成住宅、雖有功勢、其身俳法流、而神宮尤忌避之者也、司退館在家、神忠何加之乎、仍宮司訴武家、其狀云、

今度不意之御炎上ニ付、能々承申候へ者、一鳥居の邊りの在家へ火うつり、其より殿舍へ火付候而、正殿別宮攝社末社迄御炎上ニ而候、總而正殿より六町餘之內は、禰宜之宿館ならでは無之古法ニ而候、延長の神祇官符ニモ、宮を去る事一里餘、人宅無之事之由相見エ申候、一里と申は六丁ノ事ニテ候、〇中略舊記之趣如斯候處、一鳥居之奧迄在家を□□申候故、一鳥居之末、祓所之前は、以之外遶口せばく候て、御神寶幣物等持參之往還、每度不自由、〇中略此度何とぞ被成候テ、一鳥井より奧の在家を少し退け申度事ニテ候、殊更五十鈴河の端ニ山伏の寺を立、末社と軒を弁べ居住仕候事、無勿體義共ニ候、〇中略作事不仕以前ニ、他所へうつし候樣ニ仕度候、〇中略早速被仰付候へバ、於□□可爲御神忠候以上、

萬治元閏十二月三日　　　　大宮司

四日丙申寅剋、昨夜訴狀以使者遣武家、〇山田奉行其副狀案、

今日も內宮へ御出可被成之由、御大儀存候、隨而御越以前ニ此一卷懸御目度事ニ候故、急々申入候、彼者共作事仕候以後ハ、却テ如何敷候故、只今如此委細於宮中可得御意候巳上、

閏十二月四日　　　　大宮司

岩代牛之亟殿

宮城

〔二所大神宮例文〕二所大神宮神主等始浴朝恩賞次第（代始臨時）
天平廿一年四月、依黄金出來御祈賞、二所大神宮禰宜始浴朝恩叙爵也、
〔神名秘書〕雄略天皇即位廿二年戊午歳、豐受大神度會山田原（替）鎭座之後、名曰二所大神宮、
〔二所大神宮例文〕二所大神宮神主等始浴朝恩賞次第（代始臨時）
天平神護元年正月、依惠美仲麻呂謀反事、二宮禰宜叙一階、臨時賞、
〔太平記　三十九〕自大元攻日本事
弘安四年七月七日皇大神宮ノ禰宜荒木田尙良、豐受大神宮ノ禰宜度會貞尙等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ上奏シケルハ、二宮ノ末社、風ノ社ノ寶殿ノ鳴動スル事良久シ、〇下略
〔新續古今和歌集　二十神祇〕神祇を　　逹智門院
神風やふたつの宮の宮柱ひとつこゝろに世をまもるらし
〇按ズルニ、大神宮ヲ宗廟大廟ト稱スルコトハ、社格篇ニ詳ナリ、
〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事
御坐地、度會郡宇治里伊鈴河上之大山中、四至、（山近、又逹遠田邊、南四北河邊、）
〔新任辨官抄〕神宮事
內宮御前有御衣川（ミモスソ）、卽五十鈴川也、內宮御坐于度會郡宇治鄕、外宮山田原、
〔延喜式　四伊勢大神宮〕凡二所大神宮內不得帶兵仗參入、
〔神宮雜例集　二〕神宮四至事
一外宮附四至內實檢幷人宅壞退事
神祇官符伊勢大神宮司
可定置豐受大神宮四至事

勅忌部參來、忌部稱唯昇、自小安殿南階、拍手取外宮幣、下授占部、不替右手、左 占部復本所、次又取內宮幣、下復本所、

〔日本紀略朱雀〕天慶五年四月十四日丁卯、奉幣於伊勢大神宮等、○中 內外宮禰宜叙爵

〔神名秘書〕村上天皇御宇、祭主公節之時、皇大神者、奧坐之故號內宮、度會宮者、外坐之故申外宮、始出自此時也云々、

〔大日本史神祇六〕神名秘書云、村上帝時、始定內外宮之名、恐誤、

〔新古今和歌集十九神祇〕入道前關白家百首歌よみ侍けるに　俊惠法師

神風や玉ぐしの葉をとりかざしうちとの宮に君をこそいのれ

〔續拾遺和歌集二十神祇〕弘長元年百首歌奉ける時神祇　衣笠內大臣

神風や內外の宮の宮柱千たびや君が御代にたつべき

〔廿二社本緣〕伊勢事

大神宮仁內外宮坐す也、仍二所大神宮登申す、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

常限廿箇年、一度新宮遷奉、○中 卽取吉日、二所大神宮拜奉、○下

〔止由氣宮儀式帳〕一三節祭等幷年中行事月記事

正月例

以朔日、○中 大神宮司率二所大神宮禰宜內人幷二箇郡司及諸刀禰等、二所大神宮拜奉

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡二所大神宮禰宜大小內人物忌、諸別宮內人物忌等、竝任度會郡人、

〔大神宮諸雜事記一〕朱雀○朱雀御三年九月廿日依左大臣宣、奉勅伊勢二所大神宮御神寶物等於差勅使被奉送畢、

〔新古今和歌集神祇十九〕入道前關白家百首歌よみ侍けるに　皇太后宮大夫俊成

神風やいすゞの河の宮柱いくちよすめとたてはじめけん

〔夫木和歌抄神祇三十四〕寶治元年十首歌合社頭祝　大納言雅忠卿

ちはやぶるいすゞの宮のますかゞみくもらぬ御代をてらすとぞきく

〔日本書紀垂仁六〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜姫命、託于倭姫命、○中略隨大神敎、其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、則天照大神始自天降之處也、

〔明文抄帝道一〕天皇之始天降來之時、共副護齋鏡三面、子鈴一合也、

註曰、一鏡者天照大神之御霊天懸大神、今伊勢國礒宮崇敬拜祭大神也、〔中略〕日本記

〔續古今和歌集神祇七〕寶治元年九月十首歌合に社頭祝　皇后宮大夫師継

神風やいすゞの河のいそのみやとこ世の波の音ぞのどけき

〔玉葉和歌集神祇二十〕伊勢遷宮の年よみ侍ける歌　鎌倉右大臣

神風や朝日の宮のみやうつしかげのどかなるよにこそありけれ

〔神宮雜例集二〕政印事

一内宮政印事

天平十一年十二月廿三日被始置也、○中略承暦三年二月十八日、外院燒亡之次燒失、

〔新任辨官抄〕神宮解狀事

大神宮禰宜等言上、謂内宮也

〔廿二社本縁〕伊勢事

大神宮仁内外宮坐寸也、○中略内平波皇大神宮、外平波豐受大神宮登奉號志、

〔江家次第九九月〕十一日小安殿行幸次第○中略

伊勢神宮、所遣二也、

〔古事記中神〕此天皇之御子等并十二柱、(中略)○豐鉏比賣命、(拜祭伊勢大神之宮也)

〔古事記中景行〕爾天皇亦頻詔倭建命、(中略)○故受命罷行之時、參入伊勢大御神宮、拜神朝廷、

〔續日本紀一文武〕三年八月己丑、奉南嶋獻物于伊勢大神宮及諸社、

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月癸亥、勅、伊勢大神宮服料、用神戸調、

〔令義解二神祇〕凡天神地祇者、神祇官皆依常典祭之、(天神者、伊勢、山城鴨、住吉、出雲國造齋神等類是也、)

〔日本書紀三十持統〕六年十二月甲申、遣大夫等、奉新羅調於五社、伊勢、住吉、紀伊、大倭、菟名足、

〔日本書紀六垂仁〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜姬命、託于倭姬命、(中略)○故隨大神教、其祠立於伊勢國、(中略)一云、(中略)取丁巳年(二十六年)冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮、

○按ズルニ、渡遇宮ノ名稱ハ、後チ專ラ豐受大神宮ヲ指スコトヽ爲レリ、延喜式ニ、豐受大神宮ノ名稱ヲ掲ゲテ度會宮ト云フガ如キ是レナリ

〔古事記上〕此二柱神(天照大神、思金神)者、拜祭佐久久斯侶伊須受能宮、(自佐至能以音)

〔延喜式八祝詞〕伊勢大神宮

四月神衣祭(九月准之)

度會乃宇治五十鈴川上爾、大宮柱太敷立天、高天原爾千木高知天、稱辭竟奉留、天照坐皇大神乃大前爾申久、(下略)○

〔類聚國史四神祇〕天長四年四月癸巳、御大極殿、奉幣帛伊勢大神宮、(中略)○制曰、天皇我大命爾坐、度會乃五十鈴之川上爾坐、皇大神乃大前爾申給久、(下略)○

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年六月十七日癸卯、遣使者於伊勢大神宮奉幣、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢度會乃五十鈴乃河上爾坐皇大神乃廣前爾恐美恐美毛申賜倍止申久、(下略)○

雲孫乃令捧賚天參入坐處留、○中略

右依太政官去延暦廿五年七月三日符之旨、被下神祇官、同十二日符偁子細々具也、

大同二年二月十日 ○以下署名略

〔日本書紀二十九天武〕二年四月己巳、欲遣侍大來皇女于天照大神宮、而令居泊瀨齋宮、是先潔身稍近神之所也、

〔類聚國史三神祇〕延暦十一年三月戊寅、造伊勢國天照大神宮、以遭失火也、

〔大神宮諸雜事記一〕天平神護三年十二月、月次祭使差副別勅使、以逢鹿瀨寺永可爲大神宮寺之由、被祈申皇大神宮、畢、宣命狀具也、

〔建久九年內宮假殿遷宮記〕二所大神宮神主

依宣旨注進應且注進神事違例、不信不淨穢氣、且祈謝公家御愼、幷怖所驚恐病事、震巽方口舌、任例造替當宮正殿御戶本損、兼奉納官幣日供奉、祠官辨申破損子細事、○中略

建久九年正月卅日　　大內人正六位上荒木田神主

皇大神宮

禰宜正四位上荒木田神主 ○中略

豐受大神宮

禰宜正四位上度會神主 ○下略

〔令義解二神祇〕孟夏神衣祭 謂、伊勢神宮祭、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、戊午、枉道拜伊勢神宮、

〔古語拾遺〕夫尊祖敬宗、禮敎所先、故聖皇登極、受終文祖、類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神、然則天照大神者、惟祖惟宗、尊無二、因自餘諸神者、乃子乃臣、孰能敢抗、而今神祇官班幣之日、諸神之後敍

大神宮

シク、終ニハ二所大神宮ト云ヒ、內宮外宮ト云ヒテ竝ベ稱シ奉リ、皇大神宮ニ奉幣祭祀アルトキハ、必ズ此宮ニモ於テシ、其他百事皇大神宮ニ比スルニ少異アルノミ、猶ホ本篇ニハ、皇大神宮ト連帶セル件ハ、皇大神宮ノ下ニノミ擧ゲタリ、

〔延喜式 四 伊勢大神宮〕大神宮三座、在度會郡宇治鄕五十鈴河上、

〔延喜式 九 神名〕伊勢國度會郡大神宮三座 相殿坐神二座、竝大、預月次新嘗等祭、

〔伊呂波字類抄 志 諸社〕伊勢 內宮稱大神宮、

〔長寬勘文〕日本紀私記云、今天照大神者、是諸神之最貴者也、延喜御記中、有大神宮與豐受宮如君臣之文、豐受宮猶然、況餘神哉、

〔憲法類編 十四 祭典〕神宮神號大字可用ノ事

壬申 明治五年 九月十五日、第二百七十二號御布告、

神宮神號太字、自今大字可相用事、

〔延喜式 四 伊勢大神宮〕凡元日、諸宮禰宜內人等、各奉拜神宮、

〔皇大神宮儀式帳〕伊勢大神宮禰宜謹解申儀式幷年中祭行事事

天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事壹條 ○中略

以前供奉天照坐皇大神宮儀式幷年中三節祭及年中雜神態顯注如件、仍注具狀謹解、

延曆廿三年八月廿八日

〔皇字沙汰文 上〕伊勢天照坐皇大神宮司幷上宮禰宜等解申注進神宮色々雜事、依宣旨注進二宮供奉神事上代本紀拾肆箇條狀、○中略

豐受神宮新立御氣殿、供奉二宮朝夕御饌本紀

聖武天皇卽位乃時、神龜五年正月十日、依例天豐受神宮與天照坐皇大神宮乃朝御饌調備之天、先村

古事類苑

神祇部五十一

大神宮一

大神宮

皇大神宮ハ伊勢國度會郡宇治郷五十鈴河上ニ在リ、天照大神ヲ奉祀ス、神體ハ八咫鏡ニシテ、大神ノ親ラ天孫瓊瓊杵尊ニ授ケ、同牀共殿ニ奉安セシメ給ヒシ所ナリ、崇神天皇ノ六年ニ至リ、皇女豐鍬入姫命ニ命ジテ始テ之ヲ倭ノ笠縫邑ニ移シ奉リ、更ニ八十餘年ヲ歷テ垂仁天皇ノ二十五年ニ、皇女倭姫命ニ命ジテ鎭座ノ地ヲ求メシム、是ニ於テ神宮ヲ伊勢國ニ建ツ、是ヲ神宮ノ創始トス、

大神ハ實ニ皇室ノ大祖ニシテ、歷朝ノ崇奉諸神ノ比ニアラズ、往時ハ皇女ヲ以テ齋宮ト爲シテ祭祀ニ奉侍セシメ給ヒキ、而シテ古來品位ノ階ナク、一宮ノ稱ナク、名神ノ祭ニ預リ給ハザルハ、其尊クシテ加フベキナク、諸神ト伍シ給ハザルガ故ナリ、又其祈年祭等ノ班幣ニハ幣帛ヲ別案ニ安シ、五位以上ノ人ヲ以テ使ニ差シ、神官ニハ神祇官ノ官ヲ兼ヌル者アルガ如キ、亦諸社ニ絕エテ無キ所ナリ、後世ニ至ルマデ神殿ハ長ク上代ノ風ヲ存シテ、千木堅魚木高ク神德ヲ標シ、且ツ僧尼ノ內院ニ入ルヲ禁ジテ以テ神佛ノ區域ヲ嚴ニセリ、

豐受大神宮ハ伊勢國度會郡沼木郷山田原村ニ在リテ、皇大神宮ヲ距ルコト西北ノ方五十町ナリ、雄略天皇ノ朝皇大神ノ託宣ニ由リ、丹波國ヨリ此ニ遷シ奉ル、時ニ皇大神宮遷座ノ後幾ド五百年ナリ、是ヨリ齋宮ハ亦此宮ノ祀ニモ侍シ給ヒ、朝廷ノ崇奉殆ド皇大神宮ト均

神祇部六十四

賀茂神社四

神祇部五十九

大神宮九

神祇部五十六

大神宮六

古事類苑

神祇部第四册目録

神宮司廳藏版

古事類苑

神祇部四

古事類苑刊行會